
東方四神録

空矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方四神録

【Nコード】

N5233N

【作者名】

空矢

【あらすじ】

どこにでもいる、ごくごく普通の少年。そんな少年がある出会いを切っ掛けに、少年の世界は変わっていく。これはそんなお話。

プロローグ（前書き）

これは東方Projectシリーズの二次創作です。
オリ主ものです。

独自解釈、独自設定が多分に含まれます。

BLEACH的な描写も多いです。

どっかで見たことあるような技も出てきます。

こんなんでも見てやるぜって方はそのまま進みください。

ブローグ

帰り道はいつもと同じ。

帰る時間もだいたい同じ。

その時間帯によく見る顔も同じ。

当たり前の日常、当たり前の毎日。

それが悪いとは思わないが、これでいいとも思わない。

退屈だ。

単純に……刺激がたりない。

刺激と言えば……学校であっただいざいざを思い出した。

声を掛けられるが無視をする。

「おい」

更に声を掛けられるが、それを無視し本を読み続ける。

「おいつつてんだよ!!!」

痺れを切らし、声を張り上げ椅子に座り本を読んでいる少年の胸倉に掴み掛かる。

その様子に周りがザワつき始める。

が、掴まれた少年は

「……………何か用か？」

別段驚いた様子はなく、返事を返す。

「人にぶつかって置いて謝罪もなしか!? ああ!？」

「……………お前は何を言ってるんだ？」

「ああ!？」

「あの時、俺はお前にぶつかりそうだったので右半身を後ろに下げた。

だというのにぶつかったというのであれば、それはお前が俺にぶつかっ

てきたということだろう。お前に謝罪される理由はあれど、お前に

怒鳴ら
れる理由はないな」

「うるせえ!!! いいから謝れよ!!!」

見る人から見れば一触即発という状況だろう。

「で?」

「ああ!? 余裕ぶっこいてんじゃねえぞコラ!!!」

「なら、さっさとかかって来いよ。喧嘩を売ってきたのはお前だ。
先手

は譲ってやるよ。ただしその場合俺はお前を二度と病院のベッドか
ら出

て来れない体にしてやるがな」

そう、感情の籠ってない目で言い放つ。

見下ろしてるのに見下ろされてる。

掴み掛かっている少年はそんな錯覚に陥った。

「どうした? かかって来いよ」

「あ………」

「早く来いよ」

「……ッ!?!」

掴みかかっていた少年は掴んでいた胸倉から手を離し、何の言葉も発さず教室から出て行った。

「……根性無しが」

面白くなさそうにそう呟いた。

そんなやり取りがあったがそれだけだ。

「……と」

そんなことを思い出しながら歩いていたら、いつの間にか家に付いていたようだ。

「ただいま」

鍵を開けて家に入りそう声をだしても何の反応もない。

大方、またパチンコにでも行っているのだろうと思いながら冷蔵庫を開けてみる。

「何もねーや」

冷蔵庫の中は殆ど空。このまま腹を空かしているよりコンビニか何かで飲食物を買うほうが
いいと考え、部屋に鞆を置きに行く。

「財布は……あつたあつた。着替えるのは面倒だし学ランのままでもいいか」

そうして財布をポケットに入れ家を出る。

いくらか歩いていると、ふと何かを思いついたかのように道を変える。

道を変え、歩きついた場所は人気は無く車も滅多に通らない橋の下。

少年は立ち止まり

「せつかく人気の無い場所まで着てやったんだ。いい加減、姿を現せよ」

大きな声で言い放つ。

別に少年は誰かに付けられているといったわけでもない。

何故そんなことを言ったのかと問われればそうしたかったとしか言い様がない。

人目も無いのでこんなことをしても誰の噂になることも無い。

そして、自分の発した言葉に返答する者もいないと思っていた。

そう思っていた。

「驚いた。まさか気づかれていたなんてね」

「ッ!？」

息を飲む。

ありえない。

だが、発せられた声は幻聴の類でない。

それを理解し、声の主を確認するためゆっくりと振り返る。

そこには、空間に穴が空き、そこから顔を出している金色の髪をした女性が居た。

穴の奥には無数の目があるのが見て取れる。

普通ならばその光景に驚愕するだろう。

が、少年の頭の中には

本当に居た……だと……!?

と、という言葉しかなかった。

今まで似たようなことを何度もしてきたが……反応があったことは一度もない。

そうだとこのに反応があった。

驚かすにはいられないだろう。

「どうかしたの？」

女性にその声を掛けられ、ハツとなる。

このまま黙っているわけにはいかず、不自然がないよう会話をする必要がある。

少年はそう考えた。

「いや……付けられているのはわかっていたが、まさかあんたみたいな美人とは思わなくて驚いてただけさ。」

「あら、お上手ね」

「あんた……いったい何者だい？」

「そうね……ただの妖怪ですわ」

妖怪……目の前の女性は少年の問いにそう答える。

何を馬鹿な……と言いたいだろうが、目の前光景を見ればとても人間にできる芸当とは思えない。

目の前の女性が妖怪だということを信じる信じないにしろ、人間以外の何かとこののを理解した。

「そういう貴方は？」

「ただの……人間さ」

「ふふ……面白いわね、貴方」

そう言うと、目の前の女性は空間に空いた穴から全身を出し、優雅に地に足を着けた。

「紫」

「え？」

「八雲紫。私の名前ですわ。貴方は？」

「龍也。四神龍也だ。」

「龍也ね……。ねえ龍也」

「？」

「退屈……してるでしょ」

「ッ!？」

「何でわかったって顔してるわね？ それくらいわかりますわ」

「それを俺に聞いて……どうしようっていうんだ？」

「連れて行って上げましょうか？」

「何？」

「その退屈がなくなる場所に」

考える。

それをして彼女に……八雲紫の何の特があると。

「ただの興味本意ですわ」

「……」

考えを読まれたが、それを顔に出すようなことはしない。

……例え断ったとしても、自分をこのまま放置しておくことはあるまい。

少なくともこんな超常現象を見せた相手を自分なら放置しない。

そうした結論にいたり

「わかった。連れて行ってもらおうか」

龍也は八雲紫の誘いに乗ることにした。

「ふふ」

八雲紫は笑いながらどこからともなく扇子を取り出し、それを龍也に突きつける。

すると、龍也の足元に先ほどの穴が出現した。

「なん……だと……!？」

龍也はなすすべもなく、その穴に落ちて行く。

プロローグ（後書き）

始めまして、空矢と申します。

なんとなく書いてみましたが、読んでいただきありがとうございます。
す。

まだまだ初心者ですが頑張っていきますので、よろしく願います。
す。

幻想入り編 その1

周囲にある無数の目から視線を受ける。

その視線に嫌悪感を感じつつ龍也は落ちていく。

だが、このような状況にあるということにとっても落ち着いている。

こつも落ち着いていられるのは漫画、アニメ、ゲームが影響しているのかと龍也は考える。

が、考えが纏まる前に

「いつ……痛う……」

どこかに落下したようだ。

痛む部分を手で摩りながら辺りを見回す。

「森……の中か？」

周囲には木々が生い茂っている。

龍也はそう思いながら立ち上がり、もう一度辺りを見回すと驚愕することになる。

「紅い……霧だと……!？」

紅い霧。

そう、周囲は紅い霧で満たされていた。

普通の霧なら何度も見てきた。

だが、今まで生きてきた中で紅い霧など見たことはない。

なぜ紅い霧が……と考えてみても答えはでない。

「このままここについても……どうにもならないか」

龍也はそう結論づける。

このままここについても何もわからない。

この場所のこと。

この紅い霧のこと。

誰かに聞かないことには何もわからないだろう。

そうして龍也は目の前の方向へと歩き始めた。

「どこまで続いているんだ？ この森」

かれこれ数時間歩き続きたが未だに森から出ることができない。

「迷ったか？」

よく山や森の中では方向感覚が狂うことがあるという。

自分もそれに陥ったかと思い始める。

そもそもこの森が普通の森ではない。

珍妙な色をした草が多数あったりなど。

「目印でも付けながら歩けばよかったな」

今更後悔したところでもう遅い。

近くある木に少し傷でも付けようと思つと、

「？」

後ろから草が擦れる音が聞こえる。

人かという希望を持ち後ろを振り返る。

「ッ!？」

その希望は打ち砕かれる。

龍也の目に映つたのは人ではなく獣。

大きさは2 m前後で体毛は茶色。

四本足で牙を剥き出しにし涎を垂らしている。

思わず後ろに一步下がる。

だが足に何か当たり躓く。

仰向けに倒れかかると同時に獣が飛び出し龍也の鼻の上を通過する。

その獣は進行上にある木に噛み付き、そのまま噛み砕く。

「な、嘘だろ!?!」

龍也はその光景に驚愕する。

だが驚いて固まっている時間は無かった。

その獣はすぐさま反転し飛び掛り右前足を龍也に向かって振り下ろす。

「くっ!?!」

龍也は側転をし回避行動をとる。

振り下ろした前足は地面を抉り衝撃波を生む。

「なんちゅー力だ……」

こんなものを自身の体に受ければ文字通り一溜まりもないだろう。

立ち上がりながら考える。

力も速さも相手が上。

逃げることもほぼ不可能。

ならば……攻撃を避け続けて相手が諦めるのを待つか、何らかの方法で倒す。

だが、目の前の獣の攻撃を避け続けるのはここでは木々が邪魔である。

倒す方法にしても何も思いつかない。

どっちにしる場所を変える必要がある。

だが目の前の脅威から一時的とはいえ逃げるといっつのは龍也自身はしたくない。

生かプライドか……。

だが、考えてる時間は殆ど無い。

獣は龍也に飛び掛ろうとしている。

なので、

「後ろに前進!!」

両方取る事にした。

龍也の中では後ろに前進は逃げるといふ行為に含まれないようである。

「ハア……ハア……」

あれから数分間走り続けている。

「ッ……！」

また切り裂かれる。

そう、獣は時々龍也に追いつきその爪で切り裂いているのである。

肩や腕、足などからは血が流れている。

だが、その全てが致命傷ではない。

自身に軽々追いつけるといふのに未だ自分は健在。

そこから龍也は、

「俺を徹底的に甚振ってから食い殺す気か。趣味の悪いことだな、おい!!」

という結論を出した。

恐らく徐々に粹のいい獲物に当たったため遊んでいるのだろう。

だがそれをすることとは、その獣はある程度以上の頭があるということ。

そして、相手が油断と慢心をしている証拠。

まだ自分に運が向いていると龍也は感じた。

「ッ!!」

今度は右肩を切り裂かれる。

痛みを気を取られているわけにはいかない。

生きるためには走り続けなければならない。

そうして落ちたスピードを上げ走る。

更に数分後、森の広場らしき場所に出た。

そこから少し走った場所で龍也は足を止め反転した。

何故なら自身を追ってきた獣が追うのを止めたからだ。

その獣は少し離れた所に佇んでいる。

疑問に思いながら注意深く様子を見る。

そして周囲から何かが出てくる音が聞こえる。

それらを見回してみると、

「なん……だと……」

自分を追ってきた獣と同じ獣が二十匹以上いる。

読み間違えた。

ここまで知恵があるとは思わなかった。

そしてここまで誘導されたのだと龍也は思った。

相手は油断も慢心もしていなかった。

確実に自分を殺そうとしたのだと。

そして龍也を追ってきた獣が飛び掛る。

その頭を噛み砕くように。

咄嗟に右腕を目の前に掲げる。

これで助かるとは思わないが、掲げずにはいらなかった。

獣はもう近くにまで来ている。

龍也は理解する。

自分はもう死ぬと。

助かる訳がないと。

だが……

俺は……死にたくない

まだ……死にたくない

何もできずに……

こんな所で……俺は……

俺は……

「ここは？」

龍也は気が付くと真つ暗な闇の中に立っていた。

死んだのかと思ったが……獣に噛み砕かれた感触を覚えていない。

それとも忘れただけなのか。

答えはでない。

「誰か……いないのか？」

龍也の声に応えるものはいない。

暗い場所に一人でいることには慣れているが……それでも寂しいものがある。

もう一度辺りを見回しても闇だけ。

いつまでもここにいる訳にはいかない。

ここから出る方法を探さないとと思うが、この闇の中ではどうしたらいいものか。

「どうすればいいかのかねえ。それに驚きに続く驚きで驚けないし」
頭を掻きながらそう呟くと突如後方から光溢れる。

慌てて後ろを振り向く。

先程の闇だけの景色と大きく変わっていた。

青い空に流れる白い雲。

眼下には古い日本の町並み。

もう一度周りを見回すが変わったのは先程の景色だけで他は闇のままであった。

しかたなくもう一度景色が変わった所を見ると、

「ッ!？」

そこには先程までいなかったものがいた。

大きな紅い鳥。

神々しく、威圧感があり、そして存在感がある炎の様に紅い大きな鳥。

龍也は知らず知らずのうちに一歩踏み出した。

普通、空中に一步踏み出せば眼下に広がる町並みに落ちるであらう。
だが、龍也は落ちはしなかった。

まるで空中を足場に行っているかのようだ。

そして一步、また一步と近づいていく。

右手を眼前に掲げながら。

そしてその右手が紅い鳥に触れると、その鳥は気高く鳴き、龍也は光に包まれた。

獣達は理解できずにいた。

誘い込まれた餌に仲間が止めを刺そうと飛び掛った。

そして餌が右手を掲げた。

ここまではいい。唯の悪あがきだと思っていた。

だが現実はどうだ。

その掲げられた右手から炎をだし、仲間を焼き殺した。

いや、炎によって消滅させられたと言った方が正しいだろう。

そしてその餌は今度は自分達の方を向いた。

特に変わった様子はない。

せいぜい黒かった瞳が紅く輝いているくらいだ。

その瞳で射抜かれた獣の一匹が後ろに引き下がる。

この時点で全員で逃げていればよかつただろう。

だが獣達はそうはしなかった。

仲間を殺された怒り。そして餌如きがという想い。

そうして獣達は龍也に襲い掛かっていった。

一番最初にたどり着いたのは後ろから来た獣。

前足を振り上げ、爪で引き裂こうとする。

それと同時に龍也は振り向き、右腕を振るう。

その獣は真つ二つにされ燃えていく。

何故そんなことをできたのかという獣達の疑問はすぐに解消されることとなる。

それは、龍也の手には炎でできた剣が握られているからである。

だが、獣達は恐れずに突っ込んでいく。

そして龍也の右側から獣が飛び掛る。

それは炎の剣で焼き殺される。

その瞬間背後から獣の一匹が襲いかかってきた。

その瞬間を待っていたのだろう。

だが、龍也はそれがわかつているかのように体を反転すると同時に左手に炎の剣を出現させ振りぬく。

それでその獣は真っ二つにされ、体が地面に落ちると同時に燃え始めた。

今度は正面から五匹まとめて飛びかってくる。

それに対し龍也は剣でいえば柄にあたる部分を合わせて回転させる。すると炎の剣は円状の炎の盾となる。

そこに獣達は突っ込んできて、燃え尽きていく。

それを確認し、回転させるのをやめ炎の盾を炎の剣に戻す。

残った獣達はこの事態に怯えるが、それも一瞬。

全方位から一斉に襲い掛かかる。

それに対し龍也は炎の剣を消失させる。

獣達は諦めたかと思ったがその瞬間、獣達の意識が消えた。

龍也が自分を中心に特大の火柱を生み出したからである。

獣達を消滅させたことを感じた龍也は火柱を消滅させる。

それと同時に龍也は糸が切れたかのように倒れこむ。

意識が遠くなるのを感じながら。

龍也は意識が完全に無くなる直前に、赤いチツクの服を身につけ、緑色の髪をした女性を見た気がした。

幻想入り編 その2

……何かを言っている。

大きな紅い鳥が何かを言っている。

声を発しているというのはわかっている。

だけど……聞こえない。

俺には聞こえない。

聞き取れない。

何故、俺には聞こえない。

お前は何が言いたいんだ。

俺に何を伝えたいんだ。

お前は……

「ッ!？」

龍也は目を見開く。

最初に目に入ったのは天井。

上半身を起こしながら周囲を見渡す。

「ここは……家の中か？」

清潔感のある部屋の中、そこにあるベッドの上で寝かされていたようだ。

自分の体を確認してみると綺麗に包帯が巻かれていた。

誰かが治療をしてくれたのだろう。

体の痛みはもうない。

「俺は……あの後どうなったんだ？」

獣に襲われ、囲まれたところまでは覚えているがそこから先を覚えていなかった。

誰かが自分を助けてくれたのかと考え始める。

「あら、起きたの？」

ふと、声が掛かる。

声がした方を見るとそこには緑色の髪をした女性がいた。

「貴女は？」

「風見幽香。幽香でかまわないわ」

「俺は四神龍也です。」

そう言った後龍也もう一度部屋を見渡す。

「ここは……」

「ええ。察しの通り私の家よ」

「貴女が……俺を助けてくれたんですか？」

「それは違つわ」

「え？」

「私が行った時にはもう終わっていたわ。私は火柱の原因を探しにきただけ」

幽香の言葉に龍也は思索する。

つまり、あの獣達を倒したの自分なのかと。

いまいち実感が湧かない。

なにせその時の記憶がないのだから。

だが、龍也にはそのことより他に聞きたいことがある。

「いくらか、尋ねたいことがあるんですが」

「ええ、かまわないわ」

「ここはどういった場所なんですか？」

「ここは幻想郷にある太陽の畑といった場所よ」

「幻想……郷？」

「その口ぶりだと……やっぱり外来人ね」

「外来人？」

「いいわ。そこから説明してあげる」

「つまり、幻想郷とは結界で覆われた土地。俺が今まで生活してきた場所は外の世界と呼ばれている。外の世界とここは繋がっているため異世界とはいがたい。この地に来るものは外の世界で幻想になったもの……つまり忘れ去られたり、存在が否定されたり、信じられなくなったものがくる所。そして、ここには人間、妖怪、妖精、幽霊、神など様々な存在が暮らしている。俺のように外の世界から来た奴を外来人と呼ぶ。つていう感じですか？」

「ええ、概ねそんな感じよ。もっと詳しく知りたかったら人里に行くべきね」

この地のことについて教えてもらい、自分の現状についてなんとなく理解した。

それと、目の前のいる人物が妖怪というのにも驚いた。

見た目が人間と変わらなかったからだ。

ここでは見た目が人間と変わらない妖怪、妖精などが多数いるらしい。

自分をここに連れて来た八雲紫もそう言ってたなと思いつく。

「まあ、貴方の場合幻想入りしたというより、八雲紫に連れてこられたと言った方が正しいのかしらね」

「やっぱり有名何ですか？その八雲紫って」

「有名ね。”幻想郷の賢者”とも”神隠しの主犯”とも呼ばれているわね。後は”隙間妖怪”とも」

「隙間妖怪？」

「八雲紫の能力が”境界を操る程度の能力”だからね」

「境界を操る……」

「わかりずらかったら、どこにでもワープができるという認識でいいわ」

「はあ……」

何となくは理解したので他のことを聞いてみる事にした。

「能力ってというのは？」

「その存在が持つてる固有能力のことよ。これは持つてる者と持っていない者がいるわね。」

先程言った八雲紫が”境界を操る程度の能力”。私が”花を操る程度の能力”」

「へえ……」

「それと、貴方も能力持ちね」

「俺も……ですか？」

「ええ。いくら下級妖怪だからといっても大群で囲まれたら普通の人間なら死ぬわ。」

恐らく危機的状況下で眠っていた力が目覚めたんだと思うわ。まあ、外来人で能力持ちってというのは珍しいけどね」

「能力……」

そう呟いて自分の掌を見つめる。

先程、幽香が言った火柱……。

ならば、自身の能力は”炎を操る程度の能力”なのだろうか。

そう思い掌に力を籠めてみる。

……炎が出る様子がない。

違うのかと思い落胆する。

ならばなんだと考え始める。

龍也の脳裏に大きな紅い鳥がよぎる。

「わっ!?!」

突如掌から炎が生み出される。

自分が生み出してるせいか、熱さは感じない。

……炎をしばらく眺めているが消える気配がない。

「えっと、これ……」

このまま出しっぱなしはまずいと思い幽香に尋ねてみる。

「消そうと思いなさい。そうすれば消えるはずよ」

そう言われて消える思うと掌の炎は消失する。

「コツは掴んだようだからこれからはもっと楽に使えるようになるわ」

「……」

「どうかした？」

「あ、最初は俺の能力は”炎を操る程度の能力”だと思ったんですけど違うと思って。」

「どうしてそう思ったの？」

「ただ漠然とそうだとしか……。別の能力だと思つと、ストーンと落ちてくるような感じがするんです」

「なるほど……その考えは正しい」

「え？」

「能力の使い方や名前っていうのは誰かに教わったりするものじゃない。なぜなら

自分の能力がどういうものかは自分が知っているから」

「知っている……」

「そう。貴方の場合は知っているけど理解できていないといった状態。そのうち

自由自在に使えるようになるし名前もわかるわ」

「……」

知っているけど理解できていない。

なら、自分の力を理解できるよう頑張ろうと決意する。

「他に聞きたいことはあるかしら」

そう言われて龍也は思考を切り替える。

「あ、はい。紅い霧って幻想郷じゃ普通なんですか？」

「いえ、違うわ。人為的なものよ」

「人為的って……」

「これを起こしている者の名はレミリア・スカーレット。紅魔館の主で吸血鬼ね」

「吸血鬼……」

吸血鬼と言われて龍也は男爵みたいなのを想像する。

「多分、貴方の想像している吸血鬼とは大分違うと言っておくわ。まあ、こつち

としてはいい迷惑よ。この紅い霧は太陽の光を通さない性質を持っているから花の大敵。こちら一帯……取り分け太陽の畑付近の霧は私の力で全部吹っ飛ばしているけどね」

「凄いですね」

「そう？　ほんと、あの吸血鬼は何を考えているんだか。人里に言っただけの種を見てこようと思っていたけど人里は消えているだろうし」

「人里が……消える？」

「ええ。人里には守護者がいてね。名前は上白沢慧音。能力がたしか……えーと……人間の時が……”歴史を食べる程度の能力”で半獣の時が”歴史を創る程度の能力”だったかしら？」

そう口の下に指をあてながら言う。

「えーと……」

いくらかわからない単語あり、龍也は今一わからないといった感じだ。

「彼女は人間の時と半獣の時で能力が違うの。半妖みたいな存在という認識でいいわ。」

で、その能力を使って人里を消して被害が出ないようにしているの。」

「なるほど……」

能力にも色々あるのだなと思う。

「つまり、この紅い霧をなんとかしないと人里には行けないってことか……」

「そういうことね。霊夢は何やってんだか……」

「霊夢？」

知らない人物の名前に首を傾げる。

「博麗霊夢。博麗の巫女でこういった異変を解決するのが仕事……
なんだけど」

「なんだけど？」

「一向に動く気配がないのよねえ。この霧を自然現象か何かと勘違

いしてるのかしら」

ダメダメな印象を受けた。

「紅魔館にレミリア・スカーレットか……」

この紅い霧を何とかしないと情報収集等もできないということがかかった。

自分が解決しようかと思った。

ただ自身にそれだけの力あるかどうか疑問がある。

だがそれ以前に吸血鬼を見てみたいという気持ちも強い。

龍也の中では中々答えがでない。

「行って見たいって顔してるわね」

「え？」

「そんな顔してるわよ」

「そう……ですか？」

「そうよ。紅魔館までの道順は教えてあがるから、やばいと思ったら途中で引き返したらどう？」

そう言われて、それもいいかなと感じ始める。

今までの人生、行き当たりばったりだったしそれもいいだろうと思う。

「じゃあ……お願いできますか？」

「ええ、いいわ。あ、貴方の着ていた服そこに置いてあるから。それと、

破れてた部分はちゃんと縫っておいたから」

「ありがとうございます」

「いいのよ」

そう言って幽香は部屋から出て行った。

それを確認した龍也は置いてあったワイシャツと学ランを着て部屋から出て行った。

「ここから真っ直ぐ行けば湖があるの。そこまで行けば紅魔館はすぐ見えるわ」

そう言われて龍也は幽香が指差した方を見つめる。

「色々ありがとうございます」

「いいのよ。あ、そうそう別に敬語は使わなくていいわ」

「わかり……いや、わかった」

そう言い直し、紅魔館を目指して歩き出した。

龍也の背中が見えなくなると、幽香は笑みを浮かべる。

自分は運がいいと。

そしてこの異変の始まりを思い返してみる。

この紅い霧が出始めた時はあの吸血鬼は何を考えているんだと思いつながら自身の力で

太陽の畑一带に有った霧を吹き飛ばし、花に水をやる。

この異変は霊夢あたりが解決するだろうと思いつ、幽香自身は特に行動を起こすことはなかった。

何日かたった後、香霖堂に行ってみると非常に珍しい花の種が有ったので購入。

帰り道、非常に気分も機嫌もいい時に魔法の森の中で下級妖怪の群れに襲われている人間を発見する。

この霧が出ている時に人里の人間が出歩くことは無いし、その人間の服装も幻想郷内では見たことも無い。

なので外来人かと思う。

普段であれば気にも留めないだろうが、今は気分も機嫌もいいのでギリギリの

状態になったら助けてやろうと思つて様子を見ていた。

そしてその外来人が殺されそうになつたので助けようかと行動を起こそうとした

瞬間、その外来人が襲つてきた下級妖怪を炎で消滅させた。

それを合図にしたかのように次々とその外来人……龍也に襲い掛かるが全て返り討ちになる。

下級妖怪を全滅させ、龍也は糸が切れた人形のように倒れ始めた。

そして、龍也を自身の家に連れ帰り介抱した。

「ふふ」

自然と笑みが浮かぶ。

戦っている時と介抱している時に気付いた龍也の潜在能力の高さ。

威力は大分低くなっていたが、ほぼ無意識の状態で使った能力を扱って見せた順応性の高さ。

会話と仕草で気付いた彼の内心……戦いと強くなることを望む心。

これらは龍也本人が気付いてる可能性は低いが……。

そして風見幽香は一つの確信を得る。

四神龍也は強くなる。誰よりも。

勿論今は弱い。

自分ならば文字通り一瞬で終わらせられる。

だが、鍛え続ければ何れは最強という名を欲しいがままにするだろう。

そして今回のこの異変。

「ふふ」

また笑みがこぼれる。

悪いわね、レミリア・スカーレット。(欠片も悪いとは思っていない)

貴女には、龍也を強くするための踏み台になってもらっわ。

私の予想が正しければ自身の能力を知るかはともかく龍也の能力は覚醒する。

龍也自身の基本能力も飛躍的に上昇するだろう。

そして、龍也。

貴方が強くなりきった時……その時は……

私と戦いましょう。

紅魔郷編 その1

「ふっ!!」

炎を纏わせた腕を振り払い、自分に向かってきた弾幕を掻き消す。

最初の頃は静かだったが、森に入りしばらく経つところも賑やかになる。

「今の……多分妖精だよな」

幽香に教えてもらったことを思い出しながら弾幕を撃ってきた存在を確認する。

小人や子どもに羽を生やした格好。

妖精で間違いないだろう。

その数、十二。

「しかし……やりにくい、なっ!!」

腕に纏わせている炎を強くしながら、もう一度腕を振るい弾幕を掻き消す。

こういった異変時には妖精も活性化やら凶暴化するものだという。

だが、妖精はこちらに害悪を与えるような容姿ではない。

幻想郷に来た時襲ってきた妖怪のような感じならともかく妖精では……。
妖精は死んでもすぐに生き返ると聞いているが、あまりそういう真似はしたくないというのが龍也の心情だ。

だが弾幕を振り払った後、掌に比較的大きな炎を生み出し睨みを利かせてると妖精の殆どは逃げていく。

それでも逃げずに特攻を掛けてくる者もいる。

「チイツー!!」

炎を消し、突っ込んで来た妖精を紙一重で避け、軽めの裏拳を入れる。

裏拳が当たった妖精は近くに有った木に激突し、ズルズルと木に顔を擦りつけながら落ちていく。

龍也が近くまで行き様子を伺ってみると、その妖精は目を回しながら気絶している。

その事に安堵し、妖精が出て来なくなったのを確認すると一息入れる。

そして自分の掌をジッと見つめる。

「やっぱり……強くなった」

妖精達を相手に立ち回りをしてそう感じていた。

体力、力、速さ、反射神経、動体視力などが上がっている。

妖精達が襲ってきても思ってたよりも冷静に対処できた。

少なくとも幻想郷に来た時の自分ではこうはいかなかっただろう。

この紅い霧のせいで正確な日数はわからないが恐らくまだ一日もたっていない。

それなのにこつこつ飛躍的に強くなった。

龍也が思い当たる理由は一つ。

「能力に目覚めたからか……？」

今までの自分との一番の違いは能力の有無。

それだけだと思っただが……幽香に言われた事を思い出す。

人間が扱う力は基本的に霊力だという事を。

能力が目覚めたことで霊力も一緒に目覚めたのかと考える。

よく漫画などではそういった力で肉体などを強化する描写がある。

自分もそれなのだろうかと考える。

だがそうなるの一つ疑問が出てくる。

靈力を扱ったことなど一度もないのにそんなことができるのかと。

それとも……本能的に靈力の扱い方を理解しており、無意識のうちにその力を行使しているのだろうか。

他に考えられることは、能力に目覚めたと同時に人間の限界を超えたということ。

だが龍也自身、人間の限界がどれくらいなのかというのを理解していない。

「……今これ以上考えても答えは出そうにないな。先に進もう」

龍也はそう判断し森の奥に足を進める。

どれだけ歩いただろう。

結構な時間は経った。

ここまで来るのにこれまた結構な数の妖精に襲撃された。

その妖精達は先程と同じように追い払った。

弾幕は炎で打ち消し、威嚇して追い払い、特攻してきたら気絶させる。

これを何度となく繰り返してきた。

肉体的な疲労は殆どないが精神的な疲労は少しずつ蓄積してきた。

それでも休まずに歩いてきた。

そして巨大な草を分けて一歩進んだ先は開けた場所で、そのすぐ先には

「湖」

そう、湖が在った。

それもかなり大きい。

湖の近くまで走って近づく。

「幽香の言った通りなら紅魔館が見えるはずだが……」

目を凝らして見てみるが紅い霧が邪魔でよく見えない。

もっとよく凝らして見てみると建物の影らしきものが見える。

そこが目的地かと思い眼前の湖を見る。

「でかいな……。回り道をしなきゃ行けそうにないな……」

船やボートを作って向こう岸に行こうという案も考えたがそんな技量は自分にはない。

空を飛んで行けば楽だろうが龍也は空を飛べない。

そうになると残された手段は一つ。

またあの森を歩くのかという想いを抱きながら森に入ろうとする。

「チョーッと、待ったーーーーー!!!!!!」

「ん？」

声が出た方に振り向くと青い髪、氷でできた羽、青い服を着た妖精が降りてきた。

ここまでの道中であった妖精とは会話らしい会話をしなかったが目の前の妖精は普通に話しかけてきた。

ちゃんと会話できる妖精もいるのかと思いつつ返答した。

「俺に何か用か？」

「ここはあたいの縄張りよ!! 何勝手に入って来てるのよ!!」

どうやら自分の縄張りに龍也が入ってきたことが気に食わないようだ。

「ここでどつどつ言っても余計な戦闘を生みそつだ。

「なるほど、ならすぐに出て行くよ」

なので、そう言い踵を返す。

「ふっふっふ」

「？」

急に笑い出したので何かと思い振り返る。

「あたいの縄張りに入って唯で帰れるとは思わないことね。お仕置
きをしてあげるわ！！」

そう言い放つと同時に目の前の妖精は弾幕を放つ。

「なっ！？」

それに対し龍也は驚きの声を上げる。

弾幕を放ったことではない。

目の前の妖精が放った弾幕の量、密度、速さにだ。

今まで襲い掛かってきた妖精達の弾幕とは桁違いだ。

驚きは一瞬。

すぐさま右側に飛び回避する。

そして再び妖精に目を向けるが再び驚愕する。

先程と同じ弾幕が目の前に迫ってきていたのだ。

今度は飛び込み前転で回避する。

そして回転している最中に龍也は見た。

あの妖精が再び弾幕を放ってきたことを。

それに対して龍也は前転が終わった瞬間、大地を蹴って避けようとする。

「ぐ!?!」

だがそうはいかなかった。

飛んできた弾幕のうち一発だけ左腕に当たる。

龍也が予想していたより弾幕は速かったのである。

ダメージを受けた左腕の様子を見ようと目を向ける。

「氷っている!?!」

そう、氷っていたのである。

手から肘の部分までが。

ここまでの力があるとは思っていなかった自分の甘さを痛感する。

「ふっふっふ、どーだ!!」

この状態を引き起こした妖精が勝ち誇ったかのように胸を張る。

「これが氷の妖精、チルノの力だ!!」

氷の妖精という言葉と氷りついた左腕を見て龍也は幾つかの考えを立てる。

目の前の妖精……チルノの能力は氷に関するものだということ。

今まで襲ってきた妖精よりもずっと強いということ。

「フフン、あたいたら最強ね」

だが、動きや弾速は反応しきれないほどじゃない。

そして相手の力や能力が氷が主体なら……十分勝機はある。

「おい」

「何？」

「俺の名前は四神龍也だ。」

「？ 何よ急に」

「よっく覚えておけ」

そう言いながら左腕に力を籠める。

「お前を」

そして

「倒す」

左腕から

「男の名だ!!!!!!」

炎を生み出し氷を溶かす。

「火!?!」

チルノが怯えたかのような声を上げる。

今の反応から察するにチルノと火は相性は悪いようだ。

だが、龍也は油断をする気はない。

目の前の相手は見た目と強さが一致しない。

唯の子ども。

唯の妖精。

そう思い挑めば返り討ちに合うだろう。

「フッ!!」

一気に駆ける。

駆けながら右手に炎を纏わせ、チルノが眼前に入ったと同時に殴りかかる。

「わっ!?!」

龍也の拳が当たる前にチルノは後ろに飛び上空に逃げる。

チルノが一息入れるも、龍也は大地を蹴って飛ぶ。

そして肉迫すると同時に蹴りを放つ。

が、更に高度を上げられて当たらなかった。

そして蹴りを放ち終わったのと同時に龍也は落ちていく。

龍也が地面に着地すると同時にチルノが声を張り上げる。

「なーんだ、アンタ飛べないじゃない!!」

龍也が飛べないことに気付いたチルノに調子が戻る。

そしてまた更に高度を上げる。

「喰らええええ!!」

そこから弾幕を放つ。

龍也は舌打ちしながらその場を離れる。

これでは攻撃手段が無い。

何とかしなければと思っていると、チルノの放った弾幕が方向を変えてきた。

「追尾機能があるのか!？」

チルノの放った弾幕の斜線には自分はいないので外れると思っていた。

だが、外れずに自分を追ってきている。

龍也は避けるのは無理と判断し、その場に留まる。

そして、拳を作り纏わせた炎の威力を上げる。

「はあああああああああああ!!!!!」

連続で拳を打ちだし弾幕を迎撃する。

避けられないなら迎撃すればいいと言う単純な発想から出てきた方法である。

そして全て迎撃し終わった後、チルノに向き直る。

どうするべきか。

このままいつてもジリ貧だ。

そして、相手の方が優位に立っている。

それに対しこのまま行けば龍也は消耗する一方である。

何か手はないかと模索するが、相手はその時間も与える気は無いようだ。

すぐさま追撃を放ってきた。

「く……そっ!!」

悪態を付きながら拳を突き出す。

どうやって向こうまで攻撃を届かせるか考えながら。

するとどうだろう。

龍也の拳から拳の形をした炎の塊が撃ち出される。

これには龍也も驚いたがチルノも驚いた。

龍也は拳から炎の塊が撃ち出されたことに。

チルノは自身の放った弾幕を打ち消しながら進んでくる炎の塊に。

その炎の塊はチルノに避けられたが、龍也はそれを見ず炎を消して自分の掌を見つめる。

龍也が自分の掌を見つめている中、チルノは大量の弾幕を撃ちだす。
今度は消されないようにと。

弾幕が迫ってきている事に気付いた龍也はそこに掌を向ける。

試して見るかという気持ちで。

イメージする。

大量の炎の弾幕を。

すると、掌から炎の弾幕が打ち出されチルノの放った弾幕と相殺されていく。

それを見た龍也は一つの確信を得る。

自分の生み出しているこの炎はある程度の方が利くと。

そして掌をチルノへと向け、炎の弾幕を放つ。

「わっ！！」

だが、それはチルノに易々と回避されてしまう。

どうにも距離が離れすぎているようだ。

このままここで撃ち続けても避けられ続けるだろう。

そう考えた龍也は大地を蹴り、跳躍する。

そして跳躍しながら炎の弾幕を放つ。

が、その弾幕は掠りはしたが直撃はしない。

龍也の跳躍が終わり落下し始めるのと同時に今度はチルノが弾幕を放つ。

今度のは比較的大きな弾幕だ。

拳で迎撃するのは分が悪いと判断し、剣をイメージしながら右腕を振るう。

右手から生み出された炎の剣が弾幕の一つを焼き斬る。

次に向かってきた弾幕を左手を真横に振るう。

その手にも炎の剣が握られていた。

そして左右の剣を使いながら弾幕を捌いていく。

弾幕を捌ききつたのと同時に着地した。

自分の力の応用性に驚きつつ、チルノに目を向ける。

そのチルノは用心しているのか攻撃をせずこちらの様子を見ている。

対する龍也もチルノの様子を見つつ考える。

今の自分の跳躍力ではチルノに攻撃を当てることはできない。

せめて空中でもう一度ジャンプできればと……。

動かずにいるとチルノがまた弾幕を放ってきた。

それを見た龍也は賭けにでた。

弾幕に向かって飛ぶ。

そして弾幕が迫って来た時、足を大きく振り上げ弾幕を踏む。

そう、龍也が考えたのは弾幕を足場するということである。

無論チルノの弾幕には命中したものを氷り付かせるといったものもあつたので、

踏み込んだ瞬間足が氷付く可能性もあつたが……賭けには勝ったよ
うだ。

そのまま弾幕を足場にしてもう一度跳躍。

そして肉迫し、切りかかろうとしたが

「なん……だと……」

振りかぶろうとした時には、もうチルノはそこには居なかった。

龍也の居る位置より更に上。

そこにチルノは居た。

飛べない自分と飛べる相手。

その差が今、明確に現れた。

そのことにことに龍也が驚愕している間にチルノは弾幕を放つ。

気付いた時にはもう目の前に弾幕が迫っていた。

迎撃は不可能の判断し炎の剣を消し、両腕で交差させ炎を纏わせて
防御する。

「ぐっ!？」

受けた衝撃は強く、真つ逆さまに落ちていく。

落下中に体を回転させ体勢を立て直し着地に備える。

後、どれくらいで地面かと思えば下を見ると、そこに在ったのは湖で
あった。

まずいと龍也は思った。

湖に落ちた瞬間に湖を氷りつかされたらその瞬間負ける。

先程のように体の一部分が氷らされたなら未だしも体全体が氷らさ
れたらその時点で負ける。

足をバタつかせてみても飛べるわけが無い。

そうこうしているうちにもう湖は近くまで来ている。

何かに掴み取ろうと必死に手を伸ばし足掻く。

だが、その手は空しく空を切る。

それでも足掻き続ける。

その時

「え……」

何かを掴んだ。

掴んだ所を見てみると何も無い。

そう、そこには何も無い。

だけど掴んでいる。

そこで考える。

自分は何をしようとした。

何を成そうとした。

何かを集めて固めようとした。

そう頭に浮かんだ。

それを意識し足で同じ事をする。

集め、固めよう。

するとどうだろう。

自身の足元に見えない足場が出来ていた。

何度が踏んで確かめてみる。

そこに足場は在る。

それを確認した龍也は掴んでいた手を放し、着地すると同時に一気に跳躍する。

そして上昇が終わった瞬間にまた足場を作り跳躍する。

それを繰り返しチルノと同じ高さまでたどり着く。

「ふ、ふん！！ 飛べるようになったからってあたいに勝てるとは思わないことね！！」

「それは……どうかな」

そういつた瞬間に弾幕が飛んできた。

それを右に飛んで避ける。

向き直ると又飛んできたので右に避ける。

又向き直ると又飛んで来たので今度は左に避ける。

そしてすぐにチルノ向かって直進する。

それに驚いたチルノが掌を向け弾幕を放とうとする。

弾幕が放たれるより早く龍也がチルノの掌を掴み持ち上げる。

そして右手に炎を生み出し殴りかかろうとする。

「ひっ!？」

それを見たチルノは怯えて悲鳴を上げる。

それを聞いた龍也は殴りかかるのやめ炎を消し、チルノの襟元を掴む。

そしてそのまま森に向かって一本背負いの要領で投げる。

悲鳴を上げながらチルノは森に消えていく。

「俺も……まだまだ甘いな」

そう呟いた後、湖の先に目を向ける。

予想外の事態は遭ったが得るものはあった。

空を飛べると言うには少し妙だが、それが可能となった。

森を迂回して行くより大分時間は短縮できるだろう。

そして湖の先に向かって空を駆けて行く。

紅魔郷編 その2

龍也は湖の先にある紅魔館を目指し、湖の上を駆けて行く。

その道中は楽なものではなかった。

先程の森の中に比べて妖精の攻撃が激しいのである。

チルノと比べれば大したことはないが数が多い。

その凄まじい数の弾幕をスレスレで避けたり、避けられないものは炎の剣で切り払ったりしながら進んで行く。

半分くらいまで来た辺りだろうか。

一旦襲撃が止んだので一息入れる。

「ここら辺は攻撃が激しいな。それに妖精だけじゃなく変な回転する飛行物体も攻撃してきたしな」

今まで無数に現れ攻撃を仕掛けてきたのは妖精だけだったのでそれには龍也も驚いた。

その時、動きを止めてしまい弾幕に囲まれた時には焦ったが。

先に進めば攻撃が激しくなると思うとゲンナリする。

だからといって引き返すのは自分の主義に反する。

このまま進むしかないだろう。

「よし!!」

気合を入れなおし龍也は先に進む。

「お、終点か」

湖の終わりが見えたので着地する。

紅い霧が濃い紅魔館は先程よりもよく見える。

そこを目指して歩き出す。

歩きながら周りを見回すと龍也は感嘆する。

自然の多さに。

自分の住んでいた所……外の世界ではあまり見たことがない。

学校での修学旅行などでしか自然が多い場所へ行く機会がなかったからなのだが。

周囲に見とれながら歩いてきたせいか、気付いた時には紅魔館がはつきり見える距離まで来ていた。

名の通り紅いなと思いながら見ていると門を発見する。

その近くに門番らしき人を発見したので近づいて話を聞いてみることにした。

「すみません」

「あ、はい。何でしょうか」

声を掛けると、長い紅い髪をしたチャイナ服の女性が応えてくれた。

「ここが紅魔館でしょうか？」

「はい。ここが紅魔館です」

紅魔館であっていたようで、無駄足を踏まずホッとする。

「いくつか質問していいでしょうか？」

「いいですよ」

快く返事をしてくれた。

「貴女は？」

「申し遅れました。紅魔館の門番をしております紅美鈴と申します」

「あ、俺は四神龍也といいます」

まずは自己紹介から始めることにした。

「この紅い霧を出しているのはこの館の主で間違い不是吗？」

「ええ、間違いありません」

「……ここに入ることは？」

「申し訳ありません。現在、紅魔館への立ち入りは許可されておりません」

「つまり……入りたければ力尽くで入れと」

「そうなります」

そう返答を受けて龍也は後ろに跳び、構える。

美鈴も龍也に戦闘の意志有りと判断し少し前に出て構えを取る。

互いに動かずに様子を見る。

両者の間に沈黙が走る。

そしてその沈黙を破ったのは龍也だ。

大地を駆け、美鈴に近づき拳を振るう。

だが、その拳は美鈴に難なく避けられる。

龍也もそのことはわかっていたようで間髪入れずに振るった拳の勢いを利用し回し蹴りを放つ。

放った回し蹴りは美鈴の左腕で受け止められ、

「破!!」

龍也の顎に掌打を叩き込まれる。

後ろに倒れ転がるも、直ぐに体勢を立て直す。

「驚きました。今の一撃で意識を飛ばすつもりでしたが……」

「それなりに頑丈なんでね」

そう強がってはいるが龍也の頭はクラクラしている。

今の一撃を、今同じ場所にもう一度受ければ意識は飛ぶだろう。

「唯の物見遊山でここに来たと言う訳ではなさそうですね」

そう言い、美鈴は気合を入れなおす。

「一応あの森を抜けて来たんだがな」

「これは失礼を」

軽い会話をしながらも龍也は先程の攻防を思い返し、一つの結論を出す。

少なくともただの格闘戦だけでは勝ち目が無いという事を。

まぐれか偶然かで一撃ぐらいは入るかもしれないがその時には龍也は満身創痍になっているだろう。

ならば、他の手札も切っていけばいい。

そう思い龍也は先程と同じように駆けて行く。

そして美鈴に肉薄すると右手に炎を纏わせ振り払う。

美鈴はそれに驚き一瞬動きを止めるもすぐに右に跳びその攻撃を回避する。

「能力持ちだったんですね」

着地しながらそう言う。

「炎に関する能力ですか？」

「さあ？ 俺自身自分の能力が今一わかってなくてさ。炎は俺の能力の一部だと思うぜ」

「そうですか」

美鈴は龍也の返答が嘘か本当かわからず警戒を強める。

警戒を強められているが別に龍也は嘘は言っていない。

これくらいならすぐばれるし、ばれても問題無いという心算であるが。

「さて、また俺から行くぜ!!」

今度は両手に炎を生み出し美鈴に向かって駆ける。

そして炎を纏ったまま拳を振るう。

それに対し美鈴は防御せずに余裕を持って回避する。

時節足払いも掛けてみるが何の意味もない。

龍也は内心舌打ちをする。

ここまで差があるのかと。

美鈴は自分の生み出した炎に警戒し、注意を向けている。

だというのに龍也の攻撃はまるで当たらない。

「チィ!!」

大きく振り払った一撃を放ったが、後ろに跳ばれて避けられまた間合いが離れる。

そしてお互い息を整え仕切り直しとなる。

「やりますね」

「俺の攻撃が一発も当たってないのにそんなこと言われても嫌味にしか聞こえないぜ」

「いえいえ、そんなことはありませんよ」

「そいつは……どうも!!」

そう言い放ち龍也が駆ける。

少なくとも攻撃をしなければ勝ち目は無いと思ったからだ。

そして炎を纏わせた右手で殴りかかる。

だが

「なん……だと……」

その右手は美鈴に受け止められた。

炎を纏っているのにもかかわらず。

「心頭滅却すれば……」

その拳を掴んだまま

「火もまた涼し!!」

龍也の胴体のだ真ん中に蹴りを放つ。

「がつ!!」

蹴りが直撃すると同時に手を放したので龍也は吹っ飛んでいく。

そして地に落ち地面を転がって行く。

ある程度転がったところで体勢を立て直す。

「ゲホ……ゲホッゲホ!!」

思いのほか受けたダメージは大きかったようだ。

それに対し美鈴はアチチと言いながら手を振っている。

まるっきりダメージが無いというわけではないようだ。

「今度はこちらからいきますよ!!」

そう言っつて美鈴が駆けて来る。

そして美鈴が龍也の間合いに入ろうとした瞬間に龍也は右手に炎の剣を生み出し振るう。

「ッ!?!」

美鈴は急ブレーキを駆けて後ろに跳び避ける。

今度は龍也が駆けて左手に生み出した炎の剣で突きを放つ。

美鈴は体を捻ることで回避する。

その瞬間、龍也は右足を軸とした回し蹴りを放つ。

それは美鈴の胴体に当たり吹き飛んでいく。

が、すぐさま体勢を立て直し地面に足を着けたと同時に止まる。

「よつやく一撃」

「お見事。しかしその炎、随分自由度というか応用性が高いですね」

美鈴は龍也の生み出す炎に驚いていた。

手や腕に纏わせるだけかと思っていたがああも形を変えられるとは、と。

「そうだろ」

そう言っつて両手にある炎の剣を消す。

そのことに美鈴は怪訝そうな目で見る。

何をしているのかと。

そんな美鈴を尻目に龍也は右手を向ける。

「だから」

美鈴の向けた右手から

「こんなことも出来るぜ!!!」

火炎放射を生み出した。

かなりの速度で火炎放射は向かっていく。

それに対し美鈴は大きく飛び上がり回避する。

龍也は美鈴の進行方向上に左手を向けて無数の炎の弾幕を放つ。

このままなす術も無く弾幕は直撃すると思われた。

だが、その弾幕が美鈴の間合いに入った瞬間美鈴は蹴りを放つ。

唯の蹴りではない。

蹴りを放った瞬間色取り取りの弾幕を放ったのだ。

色は赤、橙、黄、緑、青、藍、紫。

まるで虹のようだ。

「そういえば、私の能力を言ってませんでしたね」

着地した後、美鈴がそう言う。

「私の能力は”気を扱う程度の能力”です。ですので弾幕を放つくらいのこと出来るんですよ」

そう言った後再び構えを取る。

それに対し龍也は美鈴ではなく横に向かって駆ける。

美鈴もそれを追うように横に駆ける。

龍也は駆けながら美鈴に向かって弾幕を放つ。

勿論、美鈴もそれに応戦するかのように弾幕を放つ。

二つの弾幕がぶつかり合い爆煙が発生する。

お互いの姿が視認できないくらいに。

その時龍也が煙の中へと突っ込む。

煙に紛れて奇襲を掛けるためだ。

美鈴から見れば煙の中から現れたのと同時に放たれる一撃。

常人であるならば避けようのない一撃。

そう、常人であるならば。

その一撃を来るのが判っていたかのように体を捻り避ける。

龍也は避けられた事に驚愕するも、それは一瞬。

すぐさま回し蹴りを放つ。

その回し蹴りを一步下がることで避ける。

だが、そこから龍也の連撃が始まる。

肘打ち、裏拳、正拳、前蹴り、回し蹴り。

流れるような動きで攻撃を打ち込んでいく。

だが、美鈴はその全ての攻撃を、避け、払い、防御していく。

時節、炎を纏わせているが何の意味も成さない。

だが、龍也の狙いは別にあつた。

美鈴が自分の攻撃で大きく後ろに下がるのを待っているのだ。

そしてそのチャンスが来た。

炎を纏わせた腕を大きく振りかぶった時、美鈴は大きく後ろに下がった。

そして、龍也は間合いの外から掌打を放つ。

美鈴は龍也が間合いを読み間違えたと思ひ、攻めに転じる動きをする。

その瞬間、龍也の掌から特大の火炎放射が生み出され美鈴に向かつていく。

今の龍也が出せる最大の威力を持った一撃。

すでに動いている美鈴には避けようはなく、咄嗟に防御の体勢をとるも炎に飲み込まれていく。

そう、龍也の狙いはそこにあつた。

大技を普通に放つても簡単に避けられるだろう。

ならば避けられない状況作ればいい。

移動中、攻撃中など。

そしてそれは成功した。

並大抵の相手ならばこれで終わっていただろう。

並大抵の相手ならば。

「今の一撃……本当に見事でしたよ」

そう言いながら、炎の中から美鈴が現れた。

服が少々焦げているだけ。

「ほぼノーダメージかよ……」

美鈴の風貌を見てそう結論を出す。

今ので倒しきれれるとは思っていなかったが、ここまでダメージが無

いとショックが大きい。

何か仕掛けがあるのではないかと考え始める。

「……気による障壁か何かを張ったのか？」

「正解です。さすがにあれだけの熱量を持った物をそのまま受ける気はありませんから」

美鈴の言葉をそのまま受け取れば直撃さえすればそれなりのダメージが期待できるということ。

だが、直撃させるまでが問題だ。

今ので自分の炎に対する警戒度を更に上げてしまった。

直撃させることはほぼ不可能。

ほぼ零距离で撃ち込まねば直撃はしないだろう。

だからといって美鈴も零距离まで近づかせる気は無いだろう。

近づき、零距离で撃つとすればすぐさま迎撃されるだろう。

だが、作戦を考える時間を美鈴はくれなかった。

美鈴は龍也との距離を詰め、正拳付きを放つ。

それを腕を交差し防御する。

だが、その衝撃で後ろに飛ばされてしまう。

そこから美鈴の連続攻撃が始まる。

龍也に反撃を許さない攻撃。

直撃こそしていないものの、龍也の体力はどんどん削られていく。

防御している腕にも力が入らなくなってくる。

龍也の様子からそれを知った美鈴は、龍也の両腕を弾く。

腕を大きく開かされ、胴体はがら空きとなる。

「しまっ!!」

「遅い!!」

美鈴はすぐさま反転し、背中を龍也にぶつける。

鉄山靠と言われる技だ。

「がっ!!」

肺から空気を吐き出され、大きく吹き飛ばされていく。

地面を何度も転がりなが、ようやく止まる。

「はぁ、はぁ……ぐ……じゅう……」

そして、両手、両足を使い何とか立ち上がろうとする。

「まだ、立ち上がりますか」

美鈴は今の一撃で決めるつもりで攻撃を放った。

それでも気を失わず立ち上がるうとしている龍也に感嘆する。

「……続けますか？」

完全に立ち上がった龍也にその声を掛ける。

「当たり前だろ……俺は、まだ……戦えるぜ……」

息絶え絶えの状態ではあるがそう返す。

「わかりました」

そして美鈴は龍也に向かって駆けていく。

その様子が龍也にはやけに遅く感じられた。

その中で考える。

どうすれば勝てる。

格闘戦は向こうが上。

弾幕を張ったところでそれを掻い潜って来るだろう。

今の状態で攻撃を受けたら簡単に吹き飛ばさるう。

今、何がほしいのか考える。

勝つためには何が必要か。

相手に攻撃を与えるのに何が必要か。

……スピード。

相手が反応しきれないような。

風のようなスピード。

龍也はそれが欲しいと思った。

強く。

美鈴が龍也の目の前にまで来た時。

一瞬、龍也の目の前の光景が変わる。

そこには

大きな白い虎が居て、雄叫びを上げていた。

「ッ!？」

美鈴の腹部に衝撃が走る。

それに気付いた時にはすでに吹き飛ばされていた。

慌てて体勢を立て直し、龍也の方を見る。

「な……」

変わっていた。

そこまで劇的な変化じゃない。

瞳の色が紅から翠に変わり輝いている。

そして腕と脚に風を纏っている。

先程の能力とはまるで違う。

「まさか!？」

新たな能力に目覚めたのか。

いや、違つと美鈴は思い始める。

先程の龍也の話をそのまま受け取るなら、あの炎は龍也の能力の一部。

ならば、あの風も龍也の大元の能力の一部。

何故それを今まで使わなかったのかと思つたが、すぐに別の可能性に思い至る。

今まで使わなかったのではなく、今使えるようになったのではないかと。

戦いの中で成長する者もいる。

追い込まれて動きのよくなる者もいる。

ギリギリの状態になって潜在能力が漏れ出す者もいる。

目の前の相手、龍也はこれらに該当する者でないかと。

そこまで考えると龍也の姿が消えていた。

どこにと思ったが、すぐに右腕を立てる。

そこに龍也の蹴りが命中する。

「威力が上がってる!？」

龍也の蹴りを受け、吹き飛びながら美鈴は驚愕する。

風の力を加味したとしても威力が上がっている。

文字通り一段階上がった。

限界を超えた。

そんな言葉が似合うように。

「ッ!？」

吹き飛ばされ体勢を立て直して最中、目の前に龍也迫ってきて拳を振りかぶっている。

先程もそうであったがスピードも桁違いに上がっている。

咄嗟に腕を交差し、何とか防御に成功する。

「ッ!？」

だが、龍也の腕に纏っていた風が突風となり美鈴に襲い掛かる。

大きく吹き飛ばされ、何とか体勢を立て直す。

「門の近くまで飛ばされるとは……」

美鈴が飛ばされた先は紅魔館の門の近く。

戦闘中色々と移動していたが門の所まで戻って来たようだ。

龍也の方を見ればもう近くにまで来ている。

そして美鈴の胴体目掛けて龍也が蹴りを放つ。

美鈴は飛び上がることでそれを避ける。

そのまま龍也に飛び蹴りを放つ。

それを龍也は腕で防御する。

「弾かれた!？」

蹴りを放った美鈴が龍也の腕に纏った風に弾かれる。

龍也を蹴り飛ばすつもりで放った蹴りでこれだ。

今度は逆に美鈴が龍也に攻撃を当てられなくなった。

弾かれ、距離を開けてしまう。

だが、美鈴の瞳に諦めの色は無い。

今、美鈴が狙うのはカウンター。

相手が攻撃をしてきた一瞬の隙を狙う。

構えを取り、そのチャンスを伺う。

そして龍也が動く。

大地を駆け、美鈴に肉薄し右手を振りかぶる。

それを美鈴は注意深く見る。

そして龍也の右手が放たれた瞬間、美鈴が動いた。

体の位置をずらし、龍也の頬に向かって拳を放つ。

だが

「え？」

そこに龍也の顔は無かった。

美鈴が視線を下げると、そこに龍也が屈んだ体勢でいた。

左手の掌には風の塊が存在しており、それが美鈴の胴体に叩き込まれる。

「ッ!？」

そして、美鈴は背後にあった門を巻き込みなが紅魔館の中庭まで吹

き飛ばされた。

龍也は美鈴の吹き飛ばされた所まで歩いて様子を見に行く。

瓦礫の上で美鈴は倒れていた。

耳を済ませてみれば呼吸音が聞こえる。

どうやら気絶しているだけのようだ。

その事にホッと龍也が息を吐く。

そしてじつと自分の掌を見て意識を集中させる。

すると掌から炎が生み出される。

そして一旦炎を消し、再度意識を集中させる。

すると今度は掌に超小型の竜巻が生み出される。

竜巻を消して体少し動かす。

「……まただ。」

自分の身体能力が上がっている。

更には美鈴との戦いで受けた傷も殆ど回復している。

「それに、あの時……」

美鈴と戦い、追い込まれたときに体中から力が湧き上がってきた。

誰にも負けないんじゃないかというくらいなの。

その時の自分の意識は半分くらいだったが。

そして自分は勝った。

あの時の力を出してみようと集中してみるが

「……そううまくはいかないか」

あの時のような力は湧き上がってこなかった。

少しガツカリした後、紅魔館に目を向ける。

ここまで近づいたからかよく見える。

名前の通り紅い。

これでもかってぐらい紅い。

「よし、行くか!」

気合を入れなおし、龍也は紅魔館の中に入って行く。

紅魔郷編 その3

「紅いな……」

紅魔館の扉を開け、中に入った第一印象がこの一言である。

全部が全部、紅というわけではないが紅の比率が非常に多い。

キヨロキヨロと周りを見てみるが広い。

通路先など終わりが見えないほどだ。

「さて、レミリア・スカーレットとやらはどこに居るのかな？」

これだけ広いと探すのだけでも一苦労だ。

「ま、どこに居るのかわからないし上から探していくかな」

上の部屋から探していくことを決め、階段を探し始める。

無事階段を見つけ、上の階に上がった龍也。

しばらく進むと妖精の襲撃を受けた。

森で襲ってきた妖精と違いメイド服を着ている。

攻撃の頻度も森で襲われた妖精とは桁違いだ。

だが、龍也はこれ幸いと思い先程の風の力のテストを試してみることにした。

美鈴と戦ってた時は意識してやった訳では無かったので自分の力を知る要因になるだろう。

そして、ある程度はわかってきた。

まず、突風や竜巻を生み出せること。

群がる妖精を纏めて吹き飛ばすことなどができる。

これを応用すれば風の刃なども創れるだろう。

次は腕や脚に風を纏わせられること。

これには中々の防御力があり弾幕などを弾くことができる。

手足を動かしてみれば拳撃などの威力が上がっているように感じられる。

拳撃などの瞬間に突風を出すことも出来る。

後は、風の塊を生み出せること。

これを掌に生み出し、相手にぶつければかなりの効果が期待できるだろう。

それとは別に純粋なスピードがかなり上がっている。

龍也自身も驚くぐらいに。

「よし、こんなものかな」

気付くと妖精達は気絶してるか、逃げ出したかしていて龍也を襲って来ることは無かった。

一息入れると自分の力を風から炎に変えて部屋なり階段なりを探して歩き始める。

一時間程歩き続けてようやく階段を見つけたことができた。

途中で部屋をいくらも見つけたがただの空き部屋だった。

だが、龍也の中である疑問が沸く。

この館、広すぎないかと。

外でこの館を見た時はここまで広くは無かったと思いはじめ。

読み間違えたかと思いはじめるが……

「ま、考えてもしょうがないか」

考えてる最中に襲撃があったら大変だと言う結論に達し、先に進むことにした。

階段を上がり足を進めればまた長い廊下。

又か、という思いを抱きながら歩き始める。

妖精が出てくる気配もないので周りを見渡してみる。

この階も廊下の幅が広い。

見た目とは違い大幅に広い館。

しばらく歩いても妖精が出てこないなので考えに没頭しながら歩き始める。

そして、ある程度進んだ時だ。

「あら、侵入者？」

その声を掛けられたのは。

顔を上げた先には銀色の髪をしたメイドが立っていた。

「この、メイドかい？」

「ええ。紅魔館のメイド長をしております十六夜咲夜と申します」

そう言つて、スカートの端を摘みお辞儀をする。

「俺は四神龍也だ」

「四神龍也ね。貴方が紅魔館に侵入した目的は？」

「レミリア・スカーレットに会うことだな」

「お嬢様に？」

「そ。この紅い霧を何とかしてほしくてね」

「なるほど……」

「で、ここをすんなり通してくれるか、レミリア・スカーレットの所まで案内してほしいんだが」

「無理ね」

バツサリと断られてしまう。

「だろうな」

その返答はある程度は予想していたので龍也に落胆の色は無い。

「私の仕事には侵入者の排除も含まれてるの」

「そうかい」

結局力尽くかと思いつながら構えを取る。

龍也に交戦の意志有りで見なし咲夜も構えを取る。

「まったく。また仕事が増えるじゃない」

「？ さっき下の階でメイド服を着た大量の妖精に襲われたんだが、メイド服を

着てるってことはあんたの部下か何かだろ。いくらこの館広いといつてもあれだ

けの数があるんだ。そこまで手間が掛かるとは思えないんだが」

「ああ、メイド妖精ね。役に立たないわ」

「え？」

「妖精は基本的に自分のことだけで精一杯。ついでに頭も悪いし。とてもじゃないけど

他の世話をするなんて……。中には使えるのもいるけど……。ねえ……」

「……雇ってる意味……。あるの？」

「無いわね」

「……………」

「私としては貴方がこの館から出て行ってくれれば仕事が増えずに済むのだけど」

「それは、無理な相談だな」

「でしょうね」

そう言った瞬間、一本のナイフが龍也に向かって飛来する。

それを身を屈めて避け、床を駆ける。

自分の間合いに咲夜が入ると同時に両手に炎の剣を生み出し切り払う。

咲夜は後ろに跳ぶ事で回避し、今度は無数のナイフを投げつける。

それを二本の炎の剣を使い切り落としていく。

それを見た咲夜は普通に投げても効果が無いと思い、ナイフを床に飛ばす。

龍也はその行為に疑問を覚えるがすぐに解消することになる。

そのナイフが跳ねて自分の方に向かって来たからだ。

跳弾ならぬ跳ナイフである。

咄嗟に後ろに跳んで避けるが、真正面にはナイフの群れが迫ってきた。

迎撃するのは難しいと判断し、両手に持っている炎の剣の柄の部分を合わせて回転させ盾を創る。

飛んで来たナイフを防いだのを確認したの同時に盾を二本の剣に戻す。

だが、動きを止めていたのがいけなかった。

先程避けたナイフが今度は天井を跳ねて龍也に向かって来ていたからだ。

その事に気付いた龍也は咄嗟に身を屈めるが、ナイフの一本が龍也の肩に掠る。

「痛ッ！？ ナイフを跳ねさせるとは……凄いい技持ってるじゃねえか」

「お褒めに預かり光栄ですわ」

そして、また無数のナイフを投げつけてきた。

今度は距離があつたので、右手の炎の剣を消し弾幕を張ってナイフを迎撃する。

その時爆煙が生まれるが、それに紛れて咲夜は龍也に近づき接近戦

を仕掛ける。

それに気付いた龍也が左手に持った炎の剣を逆手に持ち盾にするのと、そこに咲夜の切りかかったナイフが激突するのは同時だった。

左手の炎の剣でナイフを抑えてる間に右手に炎の剣を生み出し振り下ろす。

咲夜は後ろに跳んで避け、振り切った直後に再び接近戦を仕掛ける。

龍也も炎の剣を使い切り結ぶ。

そしてそのまま何十回と切り結んでいく。

「最近のメイドさんは強いな、おい!!」

「あら。メイドは今も昔も強いんですよ」

「そっかい!!」

余裕がある咲夜に対して龍也は余裕が無かった。

単純に咲夜の方が速いからだ。

最初は攻撃を織り交せていたが、今は防御一辺倒だ。

でなければ確実に斬られるからだ。

そしてこの斬り合いにも終わりが見える。

咲夜の振るったナイフを龍也が炎の剣で防いだのと同時に、咲夜はもう

片方の手に持っていたナイフを突き出す。

「ッ!？」

咄嗟に体勢を低くしたものの肩口を少し深く斬られる。

それで体勢の崩れた龍也の胴体に向かって咲夜が蹴りを放つ。

龍也はそれをまともに受けて後方に吹っ飛ぶ。

吹き飛びながらも地面に手を付けて減速し、すぐさま体勢を立て直す。

炎の剣を消し、斬られた肩口を押さえ見ても。

血は流れているがそこまで深くは無いようだ。

咲夜の方を見してみるとナイフを投擲する体勢に入っている。

だがこれは龍也にとっても好都合。

ここまで距離があるならかなり余裕がある。

意識を集中させ、自分の力を変える。

炎から風へ。

その瞬間、龍也の瞳の色も変わる。

紅から翠へ。

そして腕と脚に風を纏う。

咲夜の放ったナイフは調度、龍也と咲夜の間点にある。

龍也はナイフに向かって掌を向け、突風を生み出す。

突風に当てられたナイフは失速し墜落するか、あらぬ方向へ飛んで行く。

「風!？」

その事に対し咲夜は驚きの声を上げる。

目の前の相手の能力は炎に関係する能力だと思っていたからだ。

その間に龍也は駆ける。

先程とは比べ物にならないスピードで。

その事に咲夜が驚愕するもその時には龍也はすぐ近くにまで来ていた。

咄嗟に後ろに跳ぶもすぐに龍也は迫ってきた。

すぐさま拳を振りぬいた龍也。

咲夜は咄嗟に後ろに跳びながら、腕を交差し防御する。

「ッ!？」

後ろに吹っ飛ぶもすぐに体勢を立て直し、着地する。

「貴方……能力を二つ持っているの？」

咲夜は疑問の声を上げる。

能力を二つ持っている者など聞いたことが無かったからだ。

「いや、恐らく炎も風も大本の能力の一部だと思っぜ。もっとも、俺もまだ

自分の能力についてよくわかってねえんだけどな」

「そう」

龍也の返答に思考を一瞬張り巡らせる。

「たしかに今の貴方は速い。だけど……」

「だけど？」

「私には止まって見える」

「本当か？」

「ええ、本当よ」

そう言った瞬間

「ッ!？」

龍也の目の前に無数のナイフが迫って来ていた。

そう、目の前にナイフが迫ってきていることに全く気付けなかったのだ。

何本かは掠ったものの、咄嗟に上半身を後ろに反らすことで事なき事を得る。

あのまま棒立ちになっていれば串刺しになっていただろう。

飛んで行ったナイフを目に入れつつ上半身を戻すと、目の前には咲夜が迫って来ていた。

咄嗟に風を纏った腕で防御する。

咲夜はそこに向かってナイフを突き出す。

風に阻まれ直撃はしなかったものの、龍也の腕にジワジワと近づいていく。

そのことに気付いた龍也は後ろに跳ぶ事で難を逃れる。

咲夜の姿を目に捉えながら。

だが

「なっ!？」

消えた。

一瞬たりとも目を放していないというのに。

不意に、後ろの方に気配を感じた。

そちらの方に目を向けると咲夜が斬り掛かろうとしていた。

龍也は慌てて腕を振るう。

調度、風を纏っていた部分とナイフが当り均衡する。

均衡している間に龍也はその部分の風を暴風にする。

するとお互い弾かれたように吹き飛ばす。

壁などに激突したが、ある程度の距離は取れた。

立ち上がると同時に手刀を作り腕を振るって風の刃を飛ばす。

咲夜は龍也の反対方向を指すように跳躍して回避する。

そして龍也の頭上辺りに差し掛かると、ナイフを投げつける。

それを転がるように避けていく。

その間に咲夜は着地し、龍也も風を纏い直し構えを取る。

咲夜は動かずにいるので、龍也は考え始める。

一瞬で現れたナイフ。

一瞬で消えた咲夜。

風の手を使ってる今の自分ならスピードに相当の自信がある。

だというのに全く捕らえ切れなかった。

今の自分を遥かに凌駕するスピードの持ち主だというのが。

そしてナイフの投降速度。

さっきは偶々反応できたが

「？」

龍也は自分の考えに疑問を覚える。

たまたま反応できた。

飛んで行ったナイフは十分追えたのに。

そこで一つの可能性に思い至る。

まさか……と。

「なあ……」

「何？」

「あなたの能力……時間を操れたりとかそう言った類のものかい？」

「！！」
「」名答です

龍也はやっぱりかと内心呟いた。

「参考までにどうして私の能力に気付いたか聞いても？」

「ナイフだよ」

「ナイフ？」

「最初に時間を止めたと思わしき場面でナイフは俺の目の前に来ていた。それには

まったく反応が出来なかった。だと言うのに、避けて飛んで行ったナイフを見ると

十分追えた。減速するにしても早すぎる。だからだよ」

「なるほど」

そのままお互いの睨み合いが続く。

いつまで続くかと思っていたが、先に動いたのは咲夜だ。

龍也に向かって無数のナイフを投げつける。

当然のように龍也は突風を放ち打ち落とす。

ナイフを打ち落とした瞬間、咲夜は消え

「ッ!?!」

咲夜は龍也の背後に密着した状態で現れる。

そのままナイフを突き立てようとする。

それに気付いた龍也はナイフを左手で掴みあげる。

そのことに驚いた咲夜は一瞬動きを止めてしまう。

その隙に龍也は肘打ちを叩き込む。

「くっ!?!」

ダメージが大きかったのかナイフを離し後ろに下がる咲夜。

左手に掴んだナイフを投げ捨てつつ龍也は咲也の方を向く。

今更ながら左手に痛みが走る。

血がポタポタと流れ落ちるがこれぐらいなら無視してもいいだろう。

痛みも同様だ。

「?」

だが、何か違和感がある。

なぜ、あの時自分の攻撃が当たったのか。

なぜ、時間を止めている間に自分に攻撃を加えなかったのか。

「……なあ？」

「何？」

「時間を止めている間は俺を傷つけることができず、時間を止め再び動かし、また時間を

止めるためにはある程度のインターバルが必要なんじゃないのか？」

「ッ！？」

「その反応……凶星と取るぜ」

咲夜の反応から自分の予想は当たっていると推測する龍也。

だとしたらまだ付け入る隙がある。

「まだよ」

「？」

「何も時間を止めるだけが私の全てじゃない」

そう言っつて咲夜は自分の周囲にナイフ投げる。

それは回転しながら咲夜の周囲に留まる。

そしてそれらは龍也に飛来する。

今までとは比べ物にならない速度で。

「なっ!？」

思いよらない速度で飛来してきたので反応が遅れる。

咄嗟に避けるも右腕の二の腕部分を斬られてしまう。

一息入れる時間も無く次々とナイフが襲い掛かる。

後ろに下がりながら避けるが、それとは別に下から跳ねてきたナイフが龍也に迫る。

それを避けるために動きを一瞬止めたが、それがいけなかった。

高速で飛来してきたナイフを避けきれなくなっていたのだ。

咄嗟に左腕で防御する。

だが、いくつかのナイフは纏っていた風で弾けたが、残りのナイフは龍也の腕に直撃した。

それに怯んだことで跳ねてきたナイフも避けられず脚に直撃する。

「が……い、痛うう……」

激痛が走る。

今まで感じたことの無い程の痛みだ。

痛みに耐えながら刺さったナイフを一本一本抜いていく。

龍也は咲夜の力を見誤っていた。

時間を止める方だけに目がいつていた。

ナイフと時間、その両方に気を付けるべきであったと。

ナイフを全て抜き床に捨てると、咲夜は先程と比べ物にならない量のナイフを展開していた。

今の脚の状態ではとてもじゃないが避けられない。

そしてそれらは一斉に発射された。

龍也は咄嗟に身を屈め、急所を護ろうとする。

身を護る亀のように。

咲夜はこれで終わったと思った。

これが当ればこれ以上戦闘はできないだろうと。

そして、ナイフが当るその瞬間。

咲夜は一瞬龍也の姿が巨大な亀になったように見えた。

「…………あれ？」

痛みがこない。

咲夜の投げたナイフは全て自分に当たったはず。

なのにまったく痛みがこないことに龍也は疑問を覚える。

「貴方…………何をしたの…………」

「？」

咲夜の声に反応し、辺りを見渡し自分の状況を確認する。

周囲に散らばっているナイフ、自分の傷がどんどん治っていく。

「ッ!？」

そして内側から湧き上がる力の感覚。

美鈴と戦ったときと同じだ。

美鈴の時とは違い完全に自分の意識がある。

そして、今の自分の力が何なのかがわかる。

本能で理解している。

隙だらけの状態である龍也に向かって咲夜がナイフを投げつける。

龍也は防御の体勢も取らず、ただ立っているだけ。

そのままナイフは龍也に刺さると思われていた。

だが、刺さらずにナイフは落ちていく。

「弾いた!？ ……いや、違う。単純に刺さらなかった……」

圧倒的な防御力。

それがこの状態の最も大きな利点である。

「なら!！」

今度は力を籠めてナイフを投げる。

龍也は向かってくるナイフに向かって手をかざす。

するとどうだろう。

目の前に亀の甲羅のようなものが出現する。

咲夜の放ったナイフはそれに弾かれてしまう。

「そんな……」

そのことに驚愕している咲夜を余所に龍也は亀の甲羅を消し手から大量の土を生み出す。

その土は咲夜の足元までいき、固まる。

「な!?! これは!?!」

「動くことが出来なければ時間を止めても意味無いだろ」

そう言って駆ける。

動けなければ時間を止めての奇襲や逃走を心配しなくていい!

咲夜は龍也が自分の間合いに入ると同時にナイフを突き出す。

龍也はそれを左手で掴み取る。

「もらった!!」

咲夜の鳩尾に掌底を叩き込む。

「あ……」

そのまま意識を失い倒れこむ咲夜を龍也は支える。

固めてた土を戻し、能力を消して一息吐く。

そして咲夜の方を見る。

「……もしかして人間？」

戦ってる最中はそんな余裕は無かったが落ち着いてみれば、感じる
気配みたいなものが幽香と美鈴とは違う。

妖怪は非常に頑丈であるらしいから美鈴はそのままにして来たが、
咲夜をこのままに
しておいたら風邪でも引くんではないだろうか。

「はぁぁー」

溜息を吐きながら咲夜を抱き上げて辺りを見渡してみると扉を発見
する。

そこを開けてみると、綺麗な部屋がありベッドもある。

そこに咲夜を寝かせて布団を掛けた後部屋から出る。

「ほんつと、俺も甘いな」

そう呟いた後、足を進める。

自身の力に疑問を覚えながらも、レミリア・スカーレットの居場所を求めて。

紅魔郷編 その4

龍也が紅魔館に入ってそれなりの時間が流れた。

だが一向に、レミリア・スカーレットを見つけないことができない。

特別急いであると言う訳ではないからいいのだが。

それと先程からメイド妖精が弾幕を放ってきているのだが、まったく気にならない。

それは、咲夜との戦いで目覚めた力を使っているからだ。

司ってる力は地。

この力を使っている時は防御力が極めて高くなる。

ナイフが刺さらなくなるくらいに。

したがつって妖精の放つ弾幕は無視して問題無いレベルにまでなる。

何かを探している時などに邪魔が入っても無視できるのは非常にありがたい。

他に意識を向けてしまえば、どこを探していたかわからなくなる可能性があるのである。

そして次の扉を見つけたのでそこを開けてみる。

「……またハズレか」

さっき見た部屋と同じ内装の部屋。

開けた部屋の数は百を超える。

扉をしめて、さっきから弾幕を放ってくるメイド妖精に尋ねてみる。

「なあ、レミリア・スカーレットがどこにいるのか知らない？」

メイド妖精は話す事は無いと言わんばかりに弾幕を放ってくる。

これには龍也もイラッと来たのか弾幕を避けて、自身の力を地から炎に変える。

また自分に向けて弾幕を放ってきたので炎を腕に纏わせて振り払い弾幕を打ち消す。

そして炎の出力を上げて妖精を威嚇する。

それを見た妖精はピューッと逃げていつてしまった。

「……はぁーっ、何八つ当たりしてるんだろ。俺」

龍也も知らないうちにストレスが溜まって来ていたようだ。

一向にレミリア・スカーレットが見つからないのが一番の原因だろうが。

体を伸ばしたり深呼吸しながら気分を落ち着かせて龍也は再び足を

進める。

「お、階段みつけ」

あれからまたハズレを引き続けた。

おかげでこの階に居ないというのは判ったが。

もしかしたら次の階に居るかもしれないと思い気を入れ直す。

階段を上り上の階に着くと空気が変わる。

単純に重くなった。

これは当たりかと思いはじめ。

落ち着いて辺りを見渡し深呼吸をする。

そうして歩き出す。

空気が重い方へと。

歩き続けていくと一際大きな扉の前に辿り着いた。

この先にレミリア・スカーレットが居るのだろうか。

そう思いながら扉を開ける。

中は今まで見た部屋より広い。

足を進めてみる。

進んでいる途中で光が差し込む。

そちらを見てみると窓の外に月が出ていた。

もうこんな時間になっていたのかと驚く。

しだいに月光は部屋全体を照らしていく。

「いらつしゃい」

そう、声を掛けられた方を見してみる。

変わった帽子をつけ、大きな椅子に座り、こちらを見ている子どもが居た。

背中から蝙蝠の羽のような物が生えてる様に見える。

だが、見た目が子どもだが龍也は油断をしていない。

チルノにしる美鈴にしる咲夜にしる、見た目と強さが一致していない。

なら、目の前の相手もそうに違いない。

「あんたがこの館の主、吸血鬼のレミリア・スカーレットか？」

「ええ、私が吸血鬼のレミリア・スカーレットよ」

どうやら合っていた様だ。

見た目は子どもだが館の主で吸血鬼というぐらいだ。

この館で一番強いのだろう。

「貴方は名前を名乗ってくれないのかしら？」

「四神龍也だ」

「四神龍也ね」

そう名前を呟きながら龍也の方を面白そうに見る。

「それで、私に何の用かしら？」

「一応聞いておこうか。紅い霧を出しているのはあんただな」

「ええ、その通りよ」

「なら単刀直入に言わせてもらおう。紅い霧を消してくれ」

「いやよ」

即答で断られた。

「理由を聞いても？」

「私、日光が苦手なのよ」

「……つまり、あの紅い霧で自分に日光がこないようにしてると」

「正解」

可愛らしく笑みを浮かべてそう答えた。

「つまり、紅い霧を消す気はないと」

「その通り」

交渉決裂。

元々交渉などあって無いようなものであるが。

龍也は自分の力を火に変え、左手に炎の剣を生み出し切っ先をレミアに向けてる。

「なら、力尽くか」

「あらあら恐いわ。こんな女の子にそんな物を向けて」

「そう言うセリフは恐がってから言うものだけ」

レミリアの顔からは恐いといった表情は見られず、面白いといった感じだ。

「それに……」

「それに？」

「俺がそのまま帰ると言うて、大人しく帰す気はあるのかい？」

「無いわね」

そう言うてレミリアは椅子から降り、数歩前が出る。

「いい感じに月も出てきたことだし……」

窓の外に見える月を一瞥した後、龍也に向き直り

「少し本気で遊んであげるわ」

そして翼を開き、龍也目掛けて一直線に向かってくる。

龍也は向かってくるレミリアに右手を向けて炎の塊を放つ。

レミリアはそれが来るのがわかっていたかのように高度を上げて避ける。

そのまま龍也の頭上を通り過ぎて龍也の反対側に降り立ち、爪で龍也を引き裂こうとする。

龍也はそれを左手の炎の剣で受け流し、右手に炎の剣を生み出し斬りかかる。

だが、それはレミリアにあっさりと掴み取られる。

「あらあら、熱くて火傷しちゃいそう」

言葉とは裏腹にレミリアの顔は涼しそうである。

そう、これは唯の挑発。

温過ぎると言っているのである。

「チィー!!」

その事に気付いた龍也は苛立ち共に蹴りを放つ。

レミリアは掴んでいた手を放し後ろに跳ぶことで避ける。

「そんな怒った顔をしたらいい男が台無しよ」

「うるせえ!!」

いいように遊ばれている。

そう感じて腹を立てるが、すぐに冷静になる。

頭を熱くしたままでどうにかなるような相手ではない。

そう思い炎の剣の出力を上げる。

攻撃が効かないのでは意味が無いからだ。

「ふーん……」

レミリアがそれを一瞥する。

「そのまま掴んだりしたら少し熱そうね……」

そう言った後レミリアの手に真紅の槍が現れる。

「私もこれを使わせてもらおうかしら」

レミリアは真紅の槍を回転させ構える。

一瞬で龍也の間合いに入り槍を振るう。

それに何とか反応した龍也は炎の剣で受け止める。

その後、龍也も同じように炎の剣を振るう。

レミリアは跳ぶことで避ける。

そして真紅の槍を両手で持ち龍也の頭上目掛けて振り下ろす。

それを二本の炎の剣を使って受け止める。

このまま均衡するものだと思われた

だが、

「ク……」

「あら、少し強かったかしら？」

龍也がパワー負けしそうになっていた。

レミリアの力が龍也の力を予想を遙かに上回っていたのである。

あの体のどこにそんな力があるのだろうか。

レミリアのセリフからはまだまだまだ余裕が感じられる。

このままでは真っ二つにされてしまうだろう。

「ぐぐぐぐぐううう……」

龍也は堪える。

歯を食いしばり、腕に力を籠めて。

だが、それも限界に近づいてきた。

その時

「う………おおおおおおおおおおお………」

龍也の体から青白い光が爆発的に溢れ出す。

するとどうだろう。

劣勢だった龍也がレミリアを押し返し、上空へと吹き飛ばす。

レミリアはクルンと一回転して着地。

対して龍也は今したこと疑問を疑問を覚えた。

今、自分は何をしたのかと。

その答えは意外なところから聞けた。

「靈力を一気に開放して身体能力を一時的に爆発的に上げ、その開放した靈力の余波

で私を吹き飛ばした……か。中々面白いことをするじゃないか」

靈力の開放。

レミリアはそう言った。

つまり、自分は靈力を扱えている。

そこで一つの仮説が浮かび上がる。

自分の身体能力が上がっていたのは、無意識のうちに靈力をコントロールしていたからではないだろうか。

ならばと思い試してみることにした。

幸い今の感覚は覚えている。

後は炎などを出す感覚などと組み合わせればうまくいくだろう。

すると、龍也は自分の体の中に何かが駆け巡るのを感じる。

今のが霊力だろうか。

そう考えてみると違和感がない。

感覚は完全に覚えた。

つまりこれからは先程の力がいつでも使えるということ。

だが……と龍也は思う。

霊力は扱えるようになった。

だがまだ自身の最大保有霊力がわからない。

仮に先程の力を使い続けて戦って息切れをってしまったら目も当てられない。

そうなれば今の自分など一溜まりも無い。

先程のように緊急時にのみ使おうと決心する。

「考え事は終わったかしら？」

不意にレミリアがその声を掛けてくる。

今にして思えば先程の龍也は隙だらけであった。
いくらでも攻撃のしようがあったのである。

だと言うのにレミリアは攻撃をしてこなかった。

それは絶対の自信と余裕の表れ。

隙なんぞ付かなくても倒せるという。

「時間掛けたみたいで悪かったな」

「別に構わないわ」

そう言いながらレミリアは体勢を低くする。

「じゃ、いくわよ」

先程とは比べ物にならないスピードで突っ込んでくる。

咄嗟に二つの炎の剣をバツの字状にして構える。

丁度真紅の槍の先端がクロスした部分に激突する。

ある程度均衡していたが、龍也が弾き飛ばされる。

床を転がりながらもすぐに立ち上がり体勢を立て直しレミリアの位置を探す。

すぐに見つかった。

大きく旋回するように飛んでいる。

そしてまた突っ込んでくる。

龍也はそれにタイミングを合わせるようにして炎の剣を突き出す。

だが、レミリアには体を傾けることで避けてすれ違う瞬間に真紅の槍で肩を切り裂く。

「ッ!？」

鋭い痛みが走る。

そこまで深く切り裂かれた訳ではないので腕は普通に動く。

「どうしたの？ もう終わり？」

レミリアは龍也から少し離れた位置に立っている。

余裕を感じさせながら。

スピードはあちらが完全に上。

このままでは攻撃を当てることも難しい。

ならば、力を変えるまでだ。

炎の剣を消して龍也は腕と脚に風を纏う。

そのことに両者が驚く。

レミリアは龍也の力が変わった事に。

龍也は力の変換の速度が上がっていることに。

が、龍也はすぐさま行動を起こす。

すぐにレミリアに近づき殴りかかる。

龍也の速さが大きく上がったため、反応が遅れたレミリアは咄嗟に腕で防御しようとする。

そこに龍也の拳が激突する。

予想よりも重い拳にレミリアが若干目を見開く。

そして龍也は真紅の槍を持っている手に向かって蹴りを放つ。

それは見事に当たり、レミリアの手から真紅の槍が離れる。

それを見た龍也は突き出した腕に纏ってる風を突風にして放つ。

レミリアはそのまま吹き飛ばされていく。

すぐに風を纏い直して様子を見る。

こんなんで倒せたら苦勞は無い。

案の定すぐに姿を現した。

ダメージは殆ど無く、被っていた帽子がどこかにいったぐらいだ。

「風か……。能力が二つあるというより大本の能力が二つの力を有していると言ったところか」

レミリアの推察を推察を聞いて龍也は内心少し驚く。

普通ならば能力が二つあると思うはずだが、かなり近いところまで当てられた。

さすがは紅魔館の主といったところだろう。

「纏っている風は拳撃などの威力を上げ、それとは別にスピードも大きく上げる力もある」

龍也の力を確認するかのようにつぶやく。

先程の攻撃でそこまで推察したのはさすがと言ったところであろうか。

「なら、私ももう少しスピードを上げることにはしましょう」

そう言ってまた正面から突っ込んでくる。

スピードは先程より格段に上だ。

だが、それでも龍也には捉え切れなくなったという訳ではない。

レミリアが自分の体に直撃する前に跳び上がる。

そしてレミリアに向かって突風を放つ。

それはヒラリとかわされる。

レミリアはまた大きく旋回して突撃を掛けようとしている。

龍也は自身とレミリアの進路上に竜巻を発生させる。

真正面から来れない様にするためだ。

恐らく竜巻の両サイドを抜けて来るものだと思い、そこに目を光らせる。

だが、それは無かった。

「なっ!?!」

なぜなら、レミリアは真正面から突っ込んで来たのである。

竜巻を切り裂いて。

これには龍也も予想外すぎて動きを止めてしまう。

すぐさま再起動するが、その時にはレミリアはもう目の前に来ていた。

咄嗟に体を捻るも、レミリアの爪が龍也の胸元を切り裂く。

着地した時に胸元に手をやり出血を確認するが、思っていたほど血は出ていなかった。

少し安堵し龍也はレミリアの方に向き直る。

レミリアは指に付いている血を舐め取っていた。

どことなく妖艶さが感じられる。

「中々おいしい血ね」

「……そーいや、あんた吸血鬼だったな」

吸血鬼なら血を飲んで当たり前である。

「あらあら酷いわ。忘れていたの？」

「忘れてたって訳じゃねーけどよ、戦いに吸血鬼だとか人間だとか、あんまり関係ねーだろ？」

「それもそうね」

そう言った後、自身の羽を羽ばたかせて空中に踊り出る。

「それじゃ、続きといきましょう」

そう言ってレミリアは瞬時に肉迫する。

今度は格闘戦を仕掛けるようだ。

レミリアは自身の爪を使って切り裂こうと手を伸ばす。

龍也は一步後ろに下がることで回避し、すぐさま蹴りを放つ。

それを身を屈めて避け、回転しながら頭から突っ込んでくる。

一步下がって回避する。

空中まで行ったレミリアは反転すると同時に紅い蝙蝠状の弾幕を放ってくる。

龍也は腕を振って風の刃を生み出して迎撃する。

するとレミリアは己が爪で引き裂こうと肉迫してくる。

それに対して龍也は腕に纏わせている風の出力を上げて拳を放つ。

お互い相打ちになるかと思われた。

しかし

「ぐう!？」

纏っていた風ごと腕を切り裂かれた。

腕がから血がポタポタと流れ落ちる。

「残念ね。私にとってはその程度の風、あつて無いような物」

レミリアに力を持ってすれば龍也の纏う風など大した物では無いの

だ。

通常の攻撃ではまともなダメージは与えられない。

ならば狙うは必殺の一撃によるカウンター。

龍也は右手の掌をレミリアに見えないようにし、風の塊を生み出す。

後はレミリアが近づいてくるのを待つだけ。

そんな龍也の思惑を知ってか知らずか、一直線に向かってきた。

そしてタイミングを合わせて右手を突き出す。

必ず当ると思われた必殺の一撃は

「へー、掌に風の塊を生み出してる。超小型で高密度の台風とも言えるわね。中々

器用なことができるじゃない」

手首を掴まれて当てることが出来なかった。

そしてそのまま投げ飛ばされる。

地面に激突した瞬間に風の塊は四散してしまう。

体勢を立て直し、レミリアの方を見るとゆっくりと歩いて近づいてくる。

余裕のつもりだろう。

ならば相手が油断している間に勝負を決めねばなるまい。

今、同じ手を使っても避けられる。

そう思い、自身の力を変える。

風から地へ。

その変化を感じ取ったのかレミリアが動きを止める。

龍也はその隙を見逃さず、土を生み出しレミリアの足元に飛ばし固める。

「これは土？ 土を生み出した……」

レミリアが驚いている間に跳び上がり、右手に土を生み出して集めていく。

そしてそれは土で出来た巨大な拳となる。

「へえ……」

レミリアはそれを面白そうな目で見る。

そしてその巨大な拳を振り下ろす。

その拳をレミリアは左手で受け止める。

「ッー!？」

受け止めた瞬間、レミリアが驚く。

予想よりも重かったからだ。

足も変な風に固められていたので踏ん張りも効かないのも原因だろう。

このままでは耐え切れなれないと思い破壊するといった方法を取る。

右手で攻撃し土の拳に穴を空け、左手の爪を立てながらスライドさせる。

土の拳を削りながら、龍也とレミリアは交差する。

その瞬間、土の拳をただの土に戻しレミリアとの間合いを取る。

レミリアは土から足を引っこ抜き土を一瞥する。

「火、風ときて土……地か。色々と使えて便利そうじゃないか」

そう言っつて龍也の方を見る。

「おまけに防御力……耐久力もかなり高まつてる。私の爪が腕に当たったというのに薄皮

一枚しか持つていけないとはね」

そして感心したような目で龍也を見つめる。

対して龍也の方は心中穏やかではない。

今の攻撃を外した事。

今の状態の龍也は防御力がかなり高まっているだけ。

パワーもスピードも炎と風の時程無い。

だから重量を増やしてでの攻撃をしたというのに。

不意打ちでもなければ当りはしないだろう。

先程の手はもう通用しない。

そして防御を抜かれたこと。

先の攻撃もレミリアは本気ではない。

だと言つのに薄皮一枚持つていかれた。

本気で来られたら薄皮一枚では済まないだろう。

だが、どうする。

地の力を使つてももう攻撃は当てられないだろう。

ならば、炎か風かのどちらか。

思考は一瞬。

自身の力を炎に変える。

単純に純粋な攻撃力、破壊力はこちらが上と判断したからだ。

そして掌に、小型の火炎球を生み出す。

ただ、小さいだけではない。

発する熱量は高く、光り輝いているように見える。

「ふーん、力を凝縮して威力を底上げか。悪くない手ね」

バレバレではあるが、それでいい。

元々隠せるようなものではないのだから。

そしてどうやって当てるかを考えていると

「いいわ、撃ってきなさい」

レミリアからそんな声が掛けられる。

「………何？」

龍也は疑問の声を発する。

当然だろう。

「どづいつつもりだ？」

「別に。ただのサービスよ」

つまりは、当てられたところで意味はないといたいのである。

龍也は怒りを覚えるが、相手がそのつもりなら丁度いい。

当ててやるう。

そしてその火炎球を投げつける。

それはそのままレミアに向かい、大爆発を起こす。

爆煙に包まれ、その場所を龍也が見つめる。

どうなったか見ていると

「今のは少し驚いたわ」

そう言っつて爆煙を羽で吹き飛ばしながら、レミアが現れる。

「無傷……だと……!？」

「無傷じゃないわよ」

そして、龍也に自身の羽の裏を見せる。

「ほら、ここ。少し火傷してるじゃない」

ほんの僅かな火傷。

龍也が与えられたのはそれだけ。

「ちて」

羽を元の位置に戻して龍也の方を見つめ直す

「続きといきましょう」

そう言った後、笑みを作り言う。

「夜はまだまだ、これから何だから」

紅魔郷編 その5

「ッ!？」

龍也の肩口が切り裂かれ血が出る

レミリアと戦い続けている龍也だが、かなりの劣勢を強いられていた。

ほぼノーダメージのレミリアに比べ、龍也は傷だらけ。

そして攻め続けているレミリアと違い、龍也は二本の炎の剣を使ってほぼ防戦状態である。

防戦の状態でも龍也の傷は増え続けるばかり。

それだけレミリアが強いということだ。

「チィ!！」

何とか隙を見つけて攻撃を仕掛けるも

「おっと」

いとも簡単に避けられる。

「はあ、はあはあ」

息も上がってきている龍也にくらべて、余裕の表情のレミリア。

レミリアのとってもこの程度は軽い運動程度のようなものだ。

「まだ続けるの？」

「とーぜん……だー！」

そう言って炎の剣を一本消し、レミリアに掌を向けて炎の弾幕を放つ。

それを飛んでかわすレミリア。

飛んでるレミリアに向かって炎の剣を振りかぶりながら突っ込む龍也。

レミリアが自分の間合いに入った瞬間に斬るつもりだ。

だが、レミリアは龍也に向かって一気に加速する。

「がっ！？」

それに反応できず、レミリアの頭からの突撃をまともに喰らってしまっ。

床に叩き付けられ、バウンドし転がっていく。

その衝撃でもう一本の炎の剣が消失する。

それでも何とか立ち上がろうとする。

その様子を見てレミリアは笑みを浮かべる。

滑稽だったからではない。

感心したからだ。

ここまで実力差を見せ付けてもなお立ち上がろうとする気概に。

そしてその瞳の色は諦めの色ではない。

自分に勝ってやろうという目だ。

その目を見てレミリアは昔の事を思い出す。

ハンターだったか教会だったかが自分を殺そうとしてきた時のことを。

ああいった連中はよくもまあ飽きずに異種族の存在そのものを否定できるものだと思う。

やれ『悪魔め!!』だの、やれ『神の裁きを!!』だの言いまくって挑んで来た。

その時は文字通り実力差を見せ付けた。

その後のセリフは決まっただろうだ。

『自分が悪かった』、『もうしない』、『命だけは助けてくれ』、
『どうか慈悲を』

などなど、怯えた目をしながら命乞いをしてくる。

命を奪いに来ておいて自分が殺されそうになると態度を変えて命乞い。

随分と調子のいい連中だと思ったものだ。

助けてやるかどうかはその時の気分しだいだったが。

だが、今日の前にいる相手はどうだ？

自分の命を奪いに来たと言う訳ではないが、自分に挑んできた。

そして実力差を見せ付けた。

だというのに諦めも命乞いもしない。

そして自分に勝とうとしている。

「ふふ」

だから面白いと思った。

「？ 何が可笑しい？」

「ごめんなさい。別に可笑しかった訳じゃないの」

そして、

「ねえ、龍也」

ただ単純に

「私の物にならない？」

四神龍也という存在を気に入った。

「は？」

対して龍也は何がなんだかわからなかった。

どんな意図でそんなことを言ったのか。

「どういう意味だ？」

「そのままの意味よ」

そして笑みを浮かべながら言葉を紡ぐ。

「ただ単純に貴方のことが気に入ったのよ。私のものになれば衣食住の全てを

保障してあげる。それに、これ以上傷つくことはないわ。どう？

悪くない

提案だと思っけど？」

そう提案される。

それに乗ればもう傷つく事も無い。

レミリア・スカーレットという存在の庇護の下での生活を約束される。

普通なら乗らない手はない。

だが、

「悪いが、断らせてもらっせ」

龍也は乗らなかった。

そして右手に再び炎の剣を生み出し、それを突きつけ、

「俺はあんたのものになりに来たんじゃない。あんたに勝ちに来たんだ」

ポロポロの体でそう言い放った。

「あら、残念」

言葉とは裏腹に、レミリアはそこまで残念がってはいなかった。

勿論今ので自分の物になっていてもよかったが、それでこそだという思いが強かった。

ますます龍也を自分の物にしたくなった。

「なら、貴方を屈服させて永遠の忠誠を私に誓わせてあげるわ」

羽を広げ、龍也に肉迫する。

龍也はレミリアが自分の間合いに入った瞬間に炎の剣を振るう。

だが、そこにレミリアは居なかった。

どこにと思った瞬間には、自分の懐に潜り込んでいた。

そして、

「がっ!？」

羽で顎を強打し、蹴り飛ばす。

吹き飛んでいる最中に体勢を立て直すか、その時にはもうレミリアは目の前に来ていた。

咄嗟にもう一本炎の剣を生み出し二本の炎の剣を交差させて防御する。

防御には成功したものの、その衝撃で更に吹っ飛ばされてしまう。

そして壁に激突し、それを突き破り屋外に出てしまう。

それを認識した龍也はクルンと一回転し、空中に足場を作る。

そして足場を滑りながら何とか止まる。

「飛んでる……と言うより空中に見えない足場を作っている。中々面白い技を使うわね」

空中に足場を作る者などレミリアは聞いた事も無い。

それなりに興味があるようだ。

「そいつはどーも」

そう言っレミリアに斬りかかる。

普通に斬りかかってレミリアに迎撃されるだけ。

それは龍也も分かっているので別の手を使った。

二本の炎の剣を合わせて、一本の巨大な炎の大剣にする。

そしていつもの間合いから離れたところで炎の大剣を振るう。

だが、それはレミリアに簡単に避けられる。

そして振り切った直後に瞬時に近づく。

「威力は大きく上がっている様だけど、動きが緩慢よ」

そう言っレミリアに斬りかかる。

龍也は咄嗟に炎の大剣を盾にする。

それを殴られて後方に吹っ飛ぶ。

吹き飛びながらレミリアの方を見ると龍也に向かってきている。

それに対し龍也は炎の大剣を消し、両手を合わせてレミリアの方に向けて特大の炎を放つ。

レミリアはお構いなしに突っ込んでくる。

効果は無いのだろう。

だが、龍也の狙いはダメージを与えることではない。

目を眩ませること。

レミリアが炎の中に入った瞬間に自身の力を変える。

炎から風へ。

腕と脚に風を纏う。

そして無理やりブレーキを掛けて停止し、瞬時に上空に移動する。

炎の中からレミリアが出てきて動きを止める。

龍也が居なかったからだ。

それを見た龍也は急降下しながら踵落としを放つ。

風の力と落下速度をプラスした踵落としだ。

これならば決まると思われた一撃。

だが、それはレミリアの羽で防がれた。

「残念」

そうやって龍也の胴体に膝蹴りを叩き込む。

「がっ!?!」

空気を吐き出しながら吹き飛ばす。

何とか体勢を立て直しながらレミリアの方を見ると。真紅の槍を生み出し投擲しようとしていた。

龍也は自身の力を風から地に変え、前方に甲羅を生み出す。

レミリアの投降した槍がそれに激突し、大きな衝撃音が発生する。

「驚いた。無傷だなんてね」

甲羅には輝一つ無かった。

そのことに龍也が安堵するも束の間、レミリアは龍也の真横に移動していた。

「油断大敵」

龍也がレミリアの方を見る前に殴り飛ばされる。

殴り飛ばされた龍也は紅魔館にある時計盤に叩き付けられ貼り付けにされる。

まるで、聖者が十字架に貼り付けにされるが如く。

「が……く……」

声が上手く出ない。

地の力で防御力が相当高くなっているのに、龍也の受けたダメージはかなりのものである。

それだけ強い力で殴り飛ばされたのだ。

受けたダメージが大きかったせいか、龍也の瞳の色は黒に戻っていた。

痛みが大きすぎて痛覚が麻痺しているのか、龍也は痛みを感じていない。

だが、体も動かない。

鉛のように重い。

音も聞こえない。

目も霞んでいる。

レミリアが何かを言いながら近づいて来ているのを、視界が黒く染まるのを

感じながら見ていた。

何をされるのだろうか？

何とか抗おうと体を動かす。

僅かながら腕が動いたのと同時に龍也の視界が黒く染まった。

「あ？」

気がついた時には龍也は別の場所にいた。

当りを見渡してみる。

「……」

龍也から見て右側は闇で染まっているが、その他は違った。

青い空に流れる雲に太陽。

眼下には古い日本の町並み。

「……思い出した……俺はここに来たことがある……」

幻想郷に来て、下級妖怪に襲われて殺されかけた時にここに来た。

何故か忘れていた。

「見える景色が増えている」

最初に来た時は辺り一面闇で染まり、真後ろに光が差し込んで景色が増えた。

自分の足元を見てみる。

大体が見える様になっていて、自分が大きな塔の上に立っていることに気付いた。

「俺は……どうなったんだ」

レミリアと戦い、やられそうになった。

そこまでは覚えている。

「俺は……」

死んだのかと続けようとすると

「お前はまだ生きている」

左側から声を掛けられる。

そちらを見ると、大きな白い虎が居た。

「お前は……」

「ふむ。その反応から察するに我等の声は届くようだな」
声が届く。

その言葉に引つ掛かりを覚える。

前に同じようなことが合ったのではないかと。

そう思い記憶を辿る。

……そして、思い出す。

大きな紅い鳥が声を発していたこと。

その声が自分には聞こえなかったこと。

「お前は……」

思い出す。

力に目覚めていった時の事を。

大きな紅い鳥。

大きな白い虎。

大きな亀。

力に目覚めたいった時にその姿を見ている事を。

そして本能で理解する。

目の前の存在がどういった者か。

「白虎……か？」

「正解だ、龍也よ」

大きな白い虎……白虎がそう答える。

「ふむ、ワシ等がどういった存在かは理解できたようじゃの」

「玄武……」

正面から大きな亀……玄武が現れる。

「私の声もようやく届くようになったな」

「朱雀……」

後方より大きな紅い鳥……朱雀が現れる。

「なあ、ここはどこなんだ？」

「ここはお前の精神世界だ」

「精神世界？」

「そつだ。お前の内なる世界だ」

「まあピンとこないかもしれないがの。ここはそういう世界だと認識してくれればよい」

そう言われて龍也はここが自分の中だということとは理解した。

「見る。レミアア・スカーレットとの戦いでもこの世界は微動だにしない。それだけこの世界は頑丈なのだ」

そうなのかと呟きながら辺りを見渡す。

「なあ……」

「進めばいい」

言い切る前に白虎にそう言われる。

「その闇の先、今のお前ならば進めるはずだ」

「ああ」

そうして闇に包まれた先を目指して進む。

一歩一歩進むたびに闇は晴れていく。

そしてその先には、大きな青い龍が佇んでいた。

「青龍……だな」

「ええ、そうです。龍也」

青龍はそう答えてくれた。

「なあ、何で最初ここに来た時何も見えなかったんだ」

「それは貴方が自身というものを理解していなかったからです」

自身？ と呟きながら首を傾げる。

「ええ。自分がどういった存在か、どういった力を持っているのか」

青龍の言葉を聞き逃さないよう聞いていく。

「だけど、この地に来た。幻想郷という地に降り立ち、今までの固定概念の一部

が崩れ、新たな概念が生まれ、そして生と力を求めた」

下級妖怪に殺されそうになった時のことを思い出す。

「まあ、あの時は無理やり引っ張り出した言っただ方が正しいでしょうが」

「そうなのか」

「そして貴方は少しずつ自身の事を理解していった。今回は朱雀、白虎、玄武の

ことから私が居るといふことがわかっていたようなので、すんなり私まで辿りつ

けましたが」

そのことを聞いて神妙な顔になるが、顔を上げ青龍の方を見る。

「俺は……」

「勝ちたいのでしょうか」

そう言われて驚いた顔になる。

「わかるのか？」

「ええ、わかりますよ。今の貴方は私の力も使えるようになりました。そう

その後れを取ることは無いでしょう」

「そうだ。それにお前は一人で戦っているのでは無い」

「左様。御主にはワシ等が憑いておる」

「そのことを忘れはしないようにな」

「ああ……」

「ッ！？」

レミリアは咄嗟に左腕を盾にしながら大きく後退する。

龍也が向けていた右手から物凄い勢いで水が放出されたからだ。

流水など吸血鬼にとって天敵中の天敵。

レミリアの左腕は焼け爛れたようになっていた。

ここまでこうなったらすぐには回復しない。

そう判断した後、レミリアは龍也に視線を向ける。

龍也は体中から大量の霊力を放出しながら貼り付けにされた状態から抜け出している。

そして蒼い瞳を輝かせながらレミリアを見つめている。

その姿がレミリアの目には一瞬だけ青い龍の姿に映った。

龍也は右手をレミリアに向けて水流を放つ。

それに気付いたレミリアは高度を上げることで回避する。

そして龍也の方を見るがそこに龍也の姿は無い。

不意に自分に影ができる。

上空を見ると、龍也が何かを振りかぶりながら落下してきている。

レミリアは真紅の槍を生み出し、それで迎え撃つ。

激突音と共に何かが削れる音がする。

音の発生源を見ると自分の真紅の槍に切口が入られ、更には深くなっていているではないか。

その事に驚きつつ、それを起こしている龍也の得物に目を向ける。

それは水の剣だった。

恐らくこれだけではないだろうと思い、レミリアはそれを観察する。

そしてその刃の部分を注意深く見てみると、刃先に水が流れていた。

それもかなりのスピードで。

「刃先の部分に水が超高速で流れてる！！ だからか！！」

ようやく自身の槍が破損されていることに合点がいった。

言うなれば龍也の水の剣はチェーンソーの様な物。

殺傷能力は極めて高い。

「グッ!？」

そちらに気を取られていたら、龍也の蹴りを受けて吹き飛ばす。

羽を飛ばたいブレイキを掛け、体勢を立て直して龍也の方を見る。

「火、風、地ときて水か……。随分手札が豊富ね」

龍也の力を見て率直な感想を漏らす。

それに対して龍也の反応は無い。

「あら、無視？ つれないわね」

反応の無い龍也に不満気な声を出す、龍也を見ているとそれも納得する。

龍也から溢れ出る力の奔流。

その力に吞まれまいとしているのだ。

口数が無いだけで龍也の動きに問題が無いことは先程の戦闘でわかっている。

そして追い詰めていた時よりもずっと強くなっている。

龍也自身が追いつめられられる程、その戦闘中に基本能力が上がる

タイプあることと、存在能力が開放されたせいであろう。

更には自分の天敵でもある流水を操れる。

おまけに今は左腕が使い物にならない。

かなりのハンデがあるが、それでもレミリアは負けるつもりは微塵も無い。

右手に真紅の槍を生み出し構える。

そして、龍也が突っ込んでくる。

だが、レミリアは動かない。

レミリアが龍也の間合いに入ると、水の剣を振り下ろす。

それを紙一重で避け、真紅の槍を水の剣の側面に突き放つ。

するとどうだろう。

水の剣は簡単に崩壊する。

予想通りとレミリアは内心呟く。

龍也の生み出した水の剣は殺傷能力は高いが、剣自体の耐久力は低いと見たのだ。

そしてそれは合たった。

レミリアは水の剣を再構成をさせる間の無く第二撃を放つ。

真紅の槍が龍也に吸い込まれるように見える最中、それは何かに絡

め取られる。

それは龍也の手だ

だがそれは、水で覆われており鋭い爪が付いている。

宛ら龍の手のように見える。

それに見とれていると、龍也が右手をレミリアに向ける。

それに気付いたレミリアは真紅の槍から手を放しその場から全速力で離れる。

それと同時に右手から大量の水が放出される。

間一髪であった。

「不用意に近づかない方が賢明か」

龍也の放つ水が直撃すれば致命傷になる。

下手な行動はできない。

そう思いレミリアは龍也から一定以上の距離を取りつつ弾幕を放つ。

龍也も水の弾幕を放ち迎撃していく。

龍也が近づけばレミリアが離れ弾幕を放つ。

そんな行為を繰り返す。

ただ時間を掛けていているだけだが、それがレミリアの狙いである。

今の龍也は大量の霊力を体中から放出している。

それは大量の霊力を使って自身の基本能力を大幅に上げているという事。

つまり、そうでもしなければレミリアとは戦えないという事である。

あれだけ大量の霊力を使っているのであれば何れは枯渇する。

そこを叩くのがレミリアの狙いである。

それを狙って弾幕を撃ち合い続けていたが、不意に龍也が弾幕を放つのをやめた。

そして自身の両手に水を纏わせる。

その場で引っ掻く様に腕を振るう。

すると、爪先から水で出来た五本の斬撃が飛び出してくる。

それはレミリアの放った弾幕を切り裂きながら進んでいく。

それを見たレミリアは弾幕を放つのをやめ、回避行動に移る。

無事回避できたが、息を付く暇も無く追撃が放たれる。

「チィ!!!」

そしてそれを回避し続ける。

だが、それは突然止んだ。

不審に思ったレミリアが龍也を見る。

龍也は手を手刀の形に変えて腕を振るう。

するとそれは一際大きい一本の水の斬撃となって放たれる。

それを見たレミリアはすぐに回避行動をとり避ける。

何となくそれが飛んでいった方を見る。

それは紅魔館の一部を掠り飛んでいった。

掠った部分は大きく斬れていた。

その威力を目にし冷や汗が流れる。

レミリアは龍也から目を放していたことに気づき、すぐに龍也に目を向ける。

すると龍也は追撃を放つわけでも無く、両手を上げていた。

何をしているのかと思ったが、それは直ぐに解消する。

龍也の上に水球ができ、それがどんどんと巨大化していく。

それを体を反らして回避しようとするが、

「グツ!？」

それは左腕に掠った。

何故と思ったがすぐに合点がいく。

この雨だ。

この雨が自分の体力をどんどん奪っていつてるのだ。

そのせいで動きが鈍くなっているのだ。

そう思いながら右手で龍也を殴り飛ばす。

殴り飛ばされた龍也だったが、すぐに体勢を立て直す。

口元から血を流している程度でそれほど大きなダメージを負っている訳ではなさそうだ。

力も大きく下がっている事を認識したレミリアはそうそうに勝負を決めないとまずいと思い始める。

すぐに龍也に肉迫し己が爪で引き裂こうとする。

それは紙一重で避けられ、龍也も反撃を放つ。

レミリアもそれを避ける。

そんな行為を何十回と続ける。

だがそれも終わりが見えた。

一瞬の隙を付きレミリアが龍也に膝蹴りを叩き込む。

それを受けて動きを止めた龍也に追撃を放ち地面に叩きつける。

地面に叩きつけられ、土煙を上げている場所に向かってレミリアが一直線に向かう。

この一撃で終わりにするために。

あと少し。

そういったところで土煙から水流が放たれたのは。

それを見たレミリアは咄嗟に右腕を盾にするが吹き飛ばされて地面に墜落する。

右腕も焼け爛れたようになる。

何とか体勢を立て直しながら龍也の方を見る。

ボロボロで息も絶え絶えだが健在だ。

右手に水の剣を生み出し近づいてくる。

それ見たレミリアが立ち上がるうとするが、カクンと力が抜けたようになる。

そちらをしてみる。

「右足もか!？」

先程の水が右足にも掛かっていた様だ。

そうしている間にも龍也は近づいてくる。

レミリアまであと少し。

そういったところで、龍也は糸が切れた人形のように崩れ落ちた。

閑話 その1 (前書き)

今回は閑話です。

時系列は美鈴戦と咲夜戦の間くらいです。

閑話 その1

太陽の畑。

一面が向日葵で覆われた場所。

その向日葵に水をやっている者がいる。

風見幽香である。

幽香は一通りやり終えたところで一息入れる。

そして龍也が向かった方向……紅魔館の方向へと目を向ける。

「いるんでしょう」

幽香がそつ声を発する。

すると幽香のすぐ近くの空間が割れ、中から一人の妖怪が出てくる。

八雲紫である。

「あら、気付かれちゃったわ」

「よく言うわ。気配丸出しで。あれじゃあ気付いてくださいと言っている様なもの」

やれやれといった感じで紫に振り向く。

「それで、何か用？」

「唯の暇つぶしですわ」

紫はそんなことを言っているのける。

「嘘ね」

その返答をばつさり斬り捨てる。

「龍也の様子でも見に来たんでしょ」

そう言っ言葉が続ける。

「龍也を幻想郷に連れて来たのは貴女だものね」

「あらあら、バレてしまいましたわ」

扇子で口元を隠しながらそう言う。

「……私なりの推論も入るけど、龍也を幻想郷に連れて来た理由……
…言っあげましようか？」

「……言ってみなさい」

「幻想郷の存在が外の世界にばれる事を防ぐため」

「……」

紫の反応を見ながら言葉を紡ぐ。

「龍也の潜在能力は相当なもの。あれが何かの拍子で開放され、それが原因で幻想入りでもしたら幻想郷の存在がばれてしまう恐れがある。そうになったら情報隠蔽も大変なものね。普通の人間がたまたま幻想入りするのは訳が違うもの」

「少し外れね」

紫がそう言う。

「私が龍也の存在に気付いたのは偶然。力がありそうだなって見ていたらスキマに隠れてたのに見つかっちゃった」

「見つかった？ 気配丸出しで？」

「ううん。気配を隠して」

幽香はそのころからすでに力があつたのかと推察する。

「龍也が望んでいたのもあるけど面白そうだと思って幻想入りさせたの」

「なるほど」

まだ紫が何かを隠していそうだがとりあえずそれで納得した。

普段から胡散臭いので紫に対しては常に疑って掛かるように幽香はなっていた。

「ああ、それと龍也は幻想郷をどうにかしようと考えてるような存在じゃないわ」

何だかんだで目の前の存在、八雲紫は幻想郷を愛している。

紫自身、そこまで四神龍也という存在を理解してはいない。

そこで自分に龍也の人なりを聞きに来たのだろうと幽香は思った。

どうやって幽香のいる所に龍也が居たことを突き止めたかはしらないが。

「それはどうも」

そうやって紫は辺りを見渡す。

「それで、龍也は？」

「紅魔館」

「……へ？」

「だから、紅魔館よ」

紫は一瞬呆ける。

何の目的でそんな所へ送り込んだのか。

そんな紫の考えを知ってか知らずか、幽香は言葉を紡いでいく。

「龍也の本能は強くなることと戦うことを望んでいるからよ。本人はそのことを

知っているかは知らないけどね」

「だからといって紅魔館ねえ……」

「それなら問題ないわ。あそこの門番、紅美鈴は妖怪の中でもかなり温和なほう。

龍也が殺されると言う事はまずない。かなりの加減をしながら戦ってくれるわ」

「なるほどね」

「それに龍也みたいなタイプは、万の訓練より一の実戦。億の訓練より一の死闘。

あの門番と戦うだけでも強くなれる」

幽香は一息入れて、さらに言葉を続ける。

「追い込んだのなら、恐らく龍也の潜在能力の一部も開放される」

これは龍也が下級妖怪に襲われて殺されかけた時に見た事からの推論だ。

恐らく当っているだろうと幽香は思う。

「あの門番を倒せたのなら、レミリアの所までは行けるでしょう」

そのままレミリアの所まで行ければそれでよし。

中であそこのメイド……十六夜咲夜にでも会ったのなら更に強くな
って先に進むだろう。

だから紅魔館に行かせるのは都合がいいのよと続ける。

幽香の返答に対して紫は何かを考えるような仕草を取る。

「大丈夫よ。龍也はまだレミリアには勝てないだろうから」

「……何がかしら」

「霊夢が提唱したスペルカードルール。これを大々的に広めるには
この異変は

絶好の機会なものね。この異変をスペルカードルールで解決すれば
ね」

スペルカードルール。

要は戦いにルールを持たせようというもの。

これで気軽に戦えるということである。

多くの妖怪達にも活気が戻るであろう。

「貴女の懸念は龍也がこの異変を解決してしまわないかということ
でしょ？」

私はスペルカードルールのことを教えてないしね」

「……お気遣いどうも」

「どういたしまして」

そして幽香は愛用の傘を持って、紅魔館へ向けて歩き出す。

「出かけるの？」

「ええ、紅魔館に龍也を回収しに」

「わざわざ？」

「そ。今から行けばいいタイミングで着くでしょうし」

そう言った後、足を止めて振り返る。

「それと、龍也をここに連れて来たのは貴女なのだろうけど、龍也に最初に目を付けたのは私だから」

そう言ってまた歩き出す。

言外に余計な手出しはするなと言っているのである。

紫は龍也が強くなりきった時に戦うつもりなんだなと思い始める。

幽香の姿が見えなくなると、紫は空を見上げる。

ここら一带は紅い霧は無く綺麗な夕焼けが見える。

幽香が紅い霧を吹っ飛ばしたのだろうと紫は思う。

「相変わらず凄い力ね……」

溜息を一つ吐き、もう一度空を見上げる。

「はてさて、博麗の巫女はいつになったら動くのやら」

紅魔郷編 その6

予想以上だ。

幽香が紅魔館の敷地内に入って来た時の感想はこの一言である。

せいぜいレミリアに一矢報いる程度で終わると思っていた。

だが現実はどうだ。

一矢報いるどころかあと少しで勝てるという状態にまで持ち込んでいる。

レミリアに殺されそうになっていたのであれば助けに入るつもりであつたのだが。

龍也の成長速度は幽香の予想を遙かに上回っていた。

その事実には笑みが零れる。

少なくとも四神龍也は自分の想像以上に強くなる。

幽香はその事を確信した。

そう思っていると龍也が倒れた。

どうやら気絶したようだ。

一杯一杯だつたのだろう。

龍也の体はボロボロだ。

それと先程から降っていた雨が止んでいた。

レミリアに回収される前に自分が回収しようと思い、差していた傘を畳み声を掛ける。

「こんばんは。レミリア・スカーレット」

「風見……幽香……」

レミリアは急に現れた人物に驚愕する。

風見幽香……幻想郷で最強の妖怪と言われる存在。

能力は”花を操る程度の能力”と戦闘向きではない。

だが問題なのはその基本能力。

その力は鬼を遙かに上回り、スピードは天狗を遙かに凌駕すると言われている。

そして桁外れの妖力。

本気で妖力を開放すれば天をも焼ききるとも言われる。

その妖力を使った砲撃は空間を歪ませるとも穴を開けるとも言われている。

普段はゆったりとした動きを好み、おっとりしているのでそうは見えないが。

この情報が嘘か真かはレミリアにはわからない。

だが、ここまで言われるくらいだ。

風見幽香が最強クラスの妖怪であることに間違いはない。

少なくとも今の状態の自分では勝ち目が無いとレミリアは悟る。

「それで、何か用かしら？」

仮に戦うことになっても最後まで戦い続けよう。

その心構えで身構える。

「別に戦いに来たと言う訳ではないわ。龍也を回収しに来ただけ」

「龍也を？」

レミリアは嫌な顔をするが、そう言われて一つの可能性に思い至る。

「龍也をここに差し向けたのは貴女？」

「違うわ。ただ紅い霧を出してる犯人を教えてあげただけ。ここに来たのは龍也の意志よ」

「……それ、喉けたつて言うんじゃない？」

「そうかしら？」

笑顔を浮かべながら言葉を続ける。

「それにしても随分ポロポロじゃない」

「貴女には関係ないでしょ」

「そうね。でも最初から本気で戦っていればそうはならなかったでしょうに」

「うっ」

どうやら凶星を付かれたようだ。

「それはそれとして、龍也は回収していくわ。断るって言うんでは

力尽くになるけど……もしかして、龍也の事気に入った？」

先程のやりとりで幽香はそう感じた。

「そうね。気に入ったのは龍也の目ね」

「目？」

「そ。圧倒的なまでの実力差を見せ付けたのに命乞いも諦めもしなかった。

その目は私に勝ってやるという目をしていて。だから面白いと思ったのよ」

そう言っつてその時のことをレミリアは思い出す。

「ま、龍也を自分のものにしたければ自分の魅力で何とかしなさい」
物思いに耽っているレミリアを無視して幽香はそう切り出す。

「もつとも……」

そう言いながら、レミリアのある一部分を見つめる。

そして自分のある一部分を見つめる。

そしてそれらを比べる。

「……ふっ」

「……何かしら、その勝ち誇ったかのような顔は」

「いや、別に」

「言いたいことがあるならばつきり言ったら」

そう言われて、勝ち誇った顔のまま幽香は言葉を紡ぐ。

「龍也を落とすには色香が足りないんじゃないかしら？」

ストレートにそう言い放つ。

龍也の性癖は知らないが、色香で龍也を落とせそうなのは自分を除くと八雲紫か冥界の管理人である西行寺幽々子ぐらいかと幽香は思う。

「うー」

「なに可愛らしく唸ってるのよ。ああ、可愛らしさで攻めるという手もあるか」

レミリアの仕草を見てそうい手もあるかと幽香は思っ。

「何はともあれ、龍也は回収していくわ」

「はあ、好きにきなさい」

「そうさせてもらっわ」

そう言っ龍也を抱き上げる。

「あ、そうそう」

「まだ何かあるの？」

「別に大した事じゃないわよ。近いうちに霊夢……博麗の巫女が異変解決に来ると思う。その時はスペルカードルで相手をして上げて」

言っだけ言っ幽香は帰っていった。

「はあ」

何だか嵐のようだった思っ。

「スペルカードルールか……」

まあ、それも一興かとレミリアは思う。

「咲夜、いる？」

「……」

そう言っつて、咲夜は音も無く現れる。

「申し訳ありません。随分時間を空けていたようで……」

「別に構わないわ」

龍也から受けたダメージもあるだろうが、咲夜に溜まっていた疲労も原因

だろうとレミリアは推察する。

使えそうなメイド妖精を増やすべきかと検討し始める。

「ふぁ……」

眠くなってきた。

それは後回しにしようと考ええる。

レミリアは先にこの疲れと眠気を何とかしたかった。

「寢室の用意をしておいて。疲れたから寝るわ」

「それは構いませんが、治療は必要ないのです？」

「構わないわ。これぐらいなら丸一日寝てれば治るでしょ」

「かしこまりました」

「ああ、それが終わったら美鈴を叩き起こしておいて」

美鈴はまだ倒れていた。

わりと近くで戦っていたのだが。

それだけ龍也から受けたダメージが大きかったのか、それともただ爆睡してるだけなのか。

判断に迷うところだ。

「美鈴……」

咲夜は口元を引きつかせている。

どうやら咲夜の目には爆睡してるように映ったようだ。

それを見ながらレミリアは紅魔館の中に入っていく。

博麗の巫女とやらが来るまではゆっくり休もうと思いつながら。

「猫じゃらし!?!」

そんな言葉を上げながら、龍也は勢いよく起きる。

辺りを見渡してみるとどこかの部屋の中に居ることがわかる。

清潔感のある部屋だ。

自分の体を見ると包帯が巻かれていた。

「……………デジャヴ？」

割と最近同じようなことがあったなと思いつく。

「あら、起きた？」

扉を開けて誰かが中に入って来た。

「幽香」

「正解」

そうやって龍也の傍まで歩いてくる。

「三日も寝てたけど、体の方は大丈夫？」

「三日!？」

そんなに寝てたのかと驚く。

それはもうしょうがないので、体を動かして調子を確認する。

「もう……………何とも無いな」

「そう」

「幽香が俺を？」

「回収したのは私ね」

「そう……か、迷惑掛けたみたいで悪かったな」

「別に構わないわ」

幽香は笑顔でそう返す。

「俺は勝ったのか？ それとも負けたのか？」

突然、龍也はそう切り出す。

レミリアと戦っていた記憶はあるが、最後の方はあやふやだった。

勝敗が気になるのだろう。

「そうね、殆ど引き分けに近かったわね」

「そう……か」

勝てはしなかったが、負けもしなかった。

その事実には若干顔を歪める。

そんな中、龍也のお腹から盛大な音がした。

「あ……」

「ふふ、三日も寝てたからお腹もぺこぺこなのね」

そう言って幽香は居間の方まで歩き出す。

「ご飯できてるから食べていきなさい」

「いいのか？」

「構わないわ。あ、それと貴方の着ていた服の破れた部分はちゃんと縫ってそこに置いてあるから」

そう言って幽香は部屋から出て行った。

「さて、着替えるか」

そう言ってベッドが出て着替え始めた。

「ご馳走様」

「よく食べたわね」

「ま、うまかったしな」

「あら、ありがとう」

実際結構食べたな龍也は思った。

「あ、そうそう聞きたいことがあったんだ」

「何かしら？」

「あの紅い霧……どうなったんだ？」

三日間寝ている間に紅い霧がどうなったのか気になるようだ。

「ああ、それなら霊夢……博麗の巫女が解決したわ」

「へえ……」

その事を聞いて異変が解決してよかったなと龍也は思う。

「それならもう人里に行けたりするの？」

「そうね、もう行けるんじゃないかしら？」

それを聞いてよしと龍也は思う。

人里に行けばこのことが色々と知れると思ったからだ。

「そういえば龍也って何か目的とかあるの？」

「そうだな……幻想郷中を周ってみようと思う」

そう言って、外の世界のこと……自分の両親のことを思い出したが……どうでもよくなった。

父親は趣味の人。

今やってる仕事が楽しくて他の事に何の興味も無し。

それが自分の妻や子どもであっても。

母親は専業主婦と言う名の遊び人。

父親の金を使って遊びまくってる女だ。

家族そろってご飯を食べた記憶など無い。

父親にしる母親にしる、最後に顔を合わせたのはいつだったか覚えていない。

あの二人が結婚したのは父親は世間体のことを考えて、母親は楽しんで暮らした
いからであろうと龍也は推察している。

自分が生まれたのも世間体を考えてのことだろうと思っている。

まあ、それでも養育費などは貰えなし虐待とかも受けなかったので、その辺は
恵まれてるなと思っている。

親に心配掛けたかと思ってみたが……罪悪感の欠片も沸いてこなかった。

自分にとってあの二人はその程度の存在だったのだろう。

自分が居なくなったことに対しても、行方不明扱いか死亡扱いにして、一人息子を亡くした悲劇の親でも演じるつもりであろう。

そういう事に対しては頭が回る奴等ではある。

「なら、教えておいたほうがいいかしらね」

龍也が思考に没頭していたら、幽香にそう声を掛けられる。

「何をだ？」

「スーパーカードルール……弾幕ごっこについて」

「スーパーカードルール？ 弾幕ごっこ？」

聞いたこともない単語に首を傾げる。

「いいわ、説明してあげる」

「つまり、戦いにルールを持たせたって認識でいいのか？」

「ええ、遠距離戦が多いけどね」

幽香の説明でだいたいのルールが分かった。

ある程度加減した弾幕で戦いをしろということだ。

「ごっちゃって話せて、力持った者は多分みなこれで挑んでくるでしょうしね。」

「勿論例外もあるけど」

博麗の巫女がこれで異変を解決したことで大々的に広まったとか。

「で、龍也。霊撃とか撃てる？」

「ああ、撃てると思う」

霊力の扱いはレミリアと戦っている時に覚えた。

後は炎などを撃つ時の応用でできるだろう。

「なら、スペルカードを作っちゃいましょう」

「スペルカードって必殺技みたいな物を封じ込めた物だったか？」

「その認識でいいわ」

そうして、幽香の助言を受けながらスペルカードを龍也は作っていた。

そして、龍也は五枚のスペルカードを作った。

一枚目は、靈撃『靈流波』

これは、靈力を集中し圧縮して撃ち出すといった技だ。範囲が広く火力が高いのが利点だ。幽香の助言を一番受けて作ったスペルカード。

靈力の集中や圧縮のコツは幽香に教えてもらった。

幽香曰く、これと同じ原理の技を使うのが自分を除けばあと一人いるとのこと。

二枚目は、炎鳥『朱雀の羽ばたき』

これは、炎の鳥を生み出し相手に突撃させるといったもの。

外れても旋回して戻ってきて再度突撃してくる。

これを制限時間一杯まで繰り返す。

この炎の鳥が通った所には紅い弾幕が生まれ、それは左右に向けて飛んで行く。

三枚目は、咆哮『白虎の雄叫び』

これは、無数の超小型の竜巻を生み出して放ち、龍也が翠色の弾幕を放つと

いうもの。

この竜巻は風圧で相手の動きを制限する効果がある。

更に、ぶつかった弾幕を跳ね返す力もある。

ちなみに跳ね返った弾幕はどこに飛んで行くか龍也にもわからない。

四枚目は、鉄壁『玄武の甲羅』

これは、玄武の甲羅を生み出して盾にするというもの。

それだけ。

だが、この甲羅は硬い。兎に角硬い。

真正面から来る弾幕やスペルカードには無類の無敵さを誇る。

これを使えば相手のスペルカードを一枚ほぼ確実に無効化できる。

反面、この甲羅を出しているときは弾幕を放てないという欠点はあるが。

一種のカウンタースペルカードとも言える。

五枚目は、龍腕『青龍の鉤爪』

これは、上空に龍の腕を生み出し引っ掻かせるというもの。

これも制限時間一杯繰り返す。

この腕は何気に大きい。

更に引っ掻いた場所には蒼い弾幕が生まれて、全方位に飛び散っていく。

「で、出来たあ……」

「お疲れ様」

かなり集中してやっていたせいか、龍也はクタクタだ。

「もう夜!?!」

窓の外を見れば既に夜だった。

「今から晩御飯作るから、それ食べて泊まって行きなさい」

「え、いいのか?」

「いいわよ別に。それと部屋はさっきの部屋を使ってね」

「ああ、わかった」

そうして、晩御飯を食べて龍也は眠りについた。

「色々世話になったな」

「いいわよ、別に」

天気は晴れ。

絶好の旅たち日和である。

「あ、ちょっと待って」

そう言っつて幽香は家の中に入っていった。

そして一分ぐらいで出てきた。

「これ、返すの忘れてたわ」

そう言っつて幽香は持つてきた物を籠也に差し出す。

「これは……俺の携帯にサイフに腕時計」

「貴方の服を直すの邪魔だから出しておいたのを忘れてたわ」

そのことを聞きながら、携帯電話とサイフをしまい、腕時計を付ける。

「あ、それと人里に行く前に香霖堂に寄っつて行きなさい」

「香霖堂？」

また聞いた事の無い単語に首を傾げる。

「香霖堂つていっつのは変つた店主がやつてる店よ。そこには色んな物が置いて

あるの。で、そこの店主は外の世界の物に非常に興味があるの。外

の世界の物

なら結構な高値で買い取ってくれると思うわ

「なるほど」

携帯電話は圏外で使い物にならないし、お金にしたって外の世界のお金が

使えるとは思えない。買い取ってもらうのが一番だなと龍也は思う。

「そっか、ありがとな」

「いいのよ別に。あ、それと香霖堂はあっちの方向にあるから」

そう言っつて森の方を指差す。

あの森の先に香霖堂があるのだろう。

「わかった。それじゃ、出発するか」

そう言っつて森の方に足を進める。

「またな、幽香」

「ええ。またね、龍也」

放浪編 その1

龍也が森に入ってかれこれ数時間。

今だ森の中を彷徨っていた。

「おっかしーなー。真っ直ぐ来たはずなんだが……」

そう言いながら辺りを見渡す。

どこもかしくも似たような景色。

龍也は自分がどこを歩いているのかわからなくなっていた。

だが、急ぐことでもないしのんびり行こうと楽観的に考えている。

いざとなれば飛んで行くという方法があるからでもあるのだが。

なら、なぜ飛んで行かないのか。

勿論急ぐ旅路でも無いというのも理由の一つ。

景色を楽しみたいというのも一つ。

もう一つは龍也曰く、その無駄がいいとのこと。

「しっかし、相変わらずだな。この森も」

木の根元などを見れば珍妙な色や形をした茸が多数。

枝の方にも変った木の実。

やけに大きい茸などなど。

見ている飽きない。

「妖精も襲って来ないな。あんなに襲われるのは異変の時くらいか」
龍也がこうやって、のんびりしてられるのも妖精が襲って来ないからである。

異変の時はかなりの頻度で襲われた。

先に進めば進む程それは激しくなっていく。

一発でも弾幕を受けて怯めば、立て続けに放たれる弾幕を全弾受けてやられていたかもしれない。

だが、今はその襲撃も弾幕もない。

故に、龍也はのんびりと周りの景色を楽しんでいる余裕がある。

そうしながら歩いていると

「ん？」

急に地面が盛り上がる。

それを感じて龍也は後ろに跳ぶ。

するとそこから軟体生物のようなのが数匹現れる。

先端部分に口らしき物があり、ギザギザの歯が円状に並んでいる。

「これは……ワームってやつか？」

その見た目からワームではないかと推察する。

妖精は襲ってこなくとも妖怪は襲って来るようだ。

そしてそのワーム……妖怪を観察する。

「うわぁ……」

龍也が嫌そうな声を出す。

どうもこの妖怪は体中がヌメヌメしているようだ。

とてもじゃないが素手では触れたくは無い。

そんな想いを抱いてる龍也などお構いなしにその妖怪は襲って来る。

真正面からの突撃。

それを横に跳んで避ける。

口元から涎をたらしながら龍也の方に振り向く。

どうやら龍也を食べたいようだ。

勿論、龍也は食べられるつもりなど毛頭無い。

降りかかる火の粉は払うまでだ。

そして自身の力を変える。

青龍の力へ。

それと同時に龍也の瞳の色も黒から蒼に変る。

そんな龍也の変化などお構いなしに、目の前の妖怪は突っ込んで来る。

それを見ながら、龍也は右手に水の剣を生み出す。

そしてすれ違い様に斬る。

すると自身とすれ違った妖怪は真っ二つになる。

それを見た残り妖怪が驚く。

龍也はその妖怪達の方へ振り向く。

すると残りの妖怪達は口から何かを龍也に向けて吐き出す。

それを跳んで避ける。

その放った何かは地面と木に当る。

するとどうだ。

地面と木が音を立てて溶けているではないか。

「酸か！！」

そう、酸である。

あの妖怪達の口から出した物は強力な酸。

まともに浴びてしまえば龍也だって溶けてしまっだろう。

その事に気を取れている隙に、残りの妖怪達が第二撃を放つ。

それに気付いた龍也が空中に足場を作りもう一度跳躍する。

放たれた酸が調度自分の真下を通っていったことを確認すると、生み出した水の剣を消す。

そして両手に水を纏わせ、妖怪達に向けて引つ掻くように両腕を振り下ろす。

すると水で覆われた手の爪先から、水でできた斬撃が十本放たれる。

それらは地上にいた妖怪達に降り注ぐ。

龍也が地上に着地して、妖怪達を確認する。

水の斬撃は全て命中しており、妖怪達は絶命していた。

龍也は一息入れて能力を解除する。

そして自分掌を握ったり開いたりする。

「やっぱり……最初の頃よりもずっと強くなってる」

紅魔館に向かっていたころの自分と今の自分の差はかなりある。

カモスピードも何もかも。

ここまでの短時間でこうも強くなった自分に驚きつつも、その頃を思い出してみる。

あの時はまだ炎の力……朱雀の力しか使えなかったなと……

「……あ」

そこで重大なことを思い出す。

自分は火を使っていた。

森の中で。

木々が生い茂る森の中で。

火を、炎をこれでもかと言うくらいに使っていた。

今更ながら顔が青くなる。

よく火事にならなかったなど。

一歩間違えれば山火事ならぬ森火事を起こしていた。

自分が大災害を起こした張本人になるところであった。

そのままで考えて背筋がブルツとなる。

これからは木々の生い茂る場所で朱雀の力を使うのは極力控えようと龍也は思った。

「よし」

龍也は気持ちを入れかれて先へ進もうとしたが……

「俺……どつちから来たっけ？」

妖怪達と戦っていたせいかわ自分がどこから来たかわらなくなっていた。

キョロキョロと辺りを見渡しても答えは出ない。

しかたが無いので落ちていた木の枝を拾い倒して、倒れた方へ進むことにした。

そしてあれから数時間後。

若干の空腹感を覚えながらも、龍也はまだ森の中を彷徨っていた。

あれからも何度か妖怪に襲われたが難なく撃退していった。

その度に自分がどの道から来たのか忘れてたが。

そして運任せで道を決めたのも原因であろう。

それでも龍也はマイペースで進んでいく。

それから暫く歩いていくと開けた場所に出た。

辺りを見渡してみると何やら建物らしき物が見える。

龍也はそこまで歩いて行く。

「香霖堂……ここだな」

看板には香霖堂と書いてありここが目的の場所だとわかる。

しかし………と思いながら店の周りを見渡す。

「ゴチャゴチャしてるな」

店の周りはいろんな物で溢れかえっている。

目立つ物では標識とかどこかの薬局とかで見る人形とか。

あれらも幻想入りしたのだろうか。

そんなことを思いながら扉を開けて店の中に入る。

案の定、店の中も散らかっていた。

それでも外のようにではない。

ちゃんと足の踏み場もあるし、商品は棚の中に収まっている。

店主はどこかなと探していると

「いらっしやい」

そう声を掛けられた。

声を掛けられた方……店の奥に振り向く。

そこには銀色の髪して眼鏡を掛けた男性がいた。

優しそうな印象を受ける人なりを感じさせる。

「貴方がこの店主ですか？」

龍也はそう尋ねる。

「うん。僕がこの香霖堂の店主、森近霖之助だよ」

「初めまして。俺は四神龍也と言います」

そう言って、龍也は霖之助の方に近づいていく。

「それで、何かご入用かな？」

「ご入用と言うか、買い取って欲しい物があるんですが……」

そう言いながら、携帯電話とサイフの中身をカウンターに出す。

「ほう、これはこれは……」

そう言いながら霖之助は携帯電話を手に取って観察し始める。

「これは携帯電話で、主に離れた人と話す為に用いられる道具だね」

「知ってたんですか？」

霖之助が携帯電話の名前と用途を言い当てた事に龍也は驚く。

携帯電話の事を知っているとは思わなかったからだ。

「ああ、違うよ。僕の能力は”道具の名前と用途がわかる程度の能力”だからね」

「へえ……」

能力にはホント色々あるなと龍也は思った。

「こつという道具を持っているということは、君は外人かい？」

「あ、はい。そうです」

そう答えると、霖之助の眼鏡が怪しく光ったように龍也には見えた。

「なら龍也君、こついった道具の使い方は知っているのかな？」

そう言って霖之助の指を差した方には昔のテレビや扇風機などがある。

「電化製品ですか……使い方は知ってますけど、電気が無いと動きませんよ」

「電気？」

そう言って霖之助は首を傾げる。

どうやら幻想郷には電気と言う言葉は馴染みが無いようだ。

そう言えば、幽香の家に電化製品が無かったなと思いつく。

明かりなどはランプと蝋燭であった。

「ああ……えっと……雷の様な性質を持ったエネルギーと認識してくれればいいです」

「と言う事は、雷を当てれば電化製品とやらは動くのかい？」

「いえ、そんなことをすれば修復不能なまでに壊れます」

「そうか……」

そう言って霖之助は肩を落とす。

「ああ、落ち込まないでください。えっと……発電機のような物があれば動きますから？」

「発電機？」

「電気を生み出す道具ですよ」

そう言いながら形状を思い出し始める。

「えーと……自転車にケーブル……線がくっ付いていて、それで……」

四角い箱があつて……」

指の動きで形を作りながら説明していく。

かなり昔にテレホンショッピングでこんな商品が売り出されていたのを

思い出しながら。

記憶はおぼろげだが、こんな感じであったと龍也は思う。

「つまり、それがあれば電化製品は動くと？」

「そうですね。ありますか？」

そう言うと霖之助は思い出す仕草を取る。

「残念ながら、ここには無いな」

そう言ってまた肩を落とす。

「あ、でもいつかはそういった物も幻想入りしますって」

そう言って龍也は何とか慰めようとする。

「そう……だね。その時を楽しみにしていよう」

何とか持ち直したようだ。

「それでこっちの方は……」

「あ、そっちは外の世界のお金とカードですよ。こっちは希少価

値が

あると思いますが……」

「ふーむ……あまり見ない金属だね」

そう言っつて小銭を手を取っつて調べて見ている。

「あ、時間掛かりますか？」

「そうだね……少し掛かるかな。あ、その間は店の中を見ているといいよ」

「わかりました」

そして龍也は店の中を見て回ることにした。

ほんとに色々あるなと龍也は思う。

人形、本、どこかの民芸品、服、靴、子どもの玩具などなど。

統一性がまるでない。

そう思いながら奥の方へと足を進める。

奥の方には武器があつた。

その中でも龍也は何本もある刀に目を奪われる。

やはり男の子だからか、そういうのに興味があるのであつた。

「霖之助さん、この刀抜いてみてもいいですか？」

「構わないよ」

そう言われて抜いてみた。

刀身が綺麗だなと思う。

吸い込まれそうな美しさを感じる。

龍也はその刀をマジマジと観察する。

そして一通り眺めた後、刀を納めて壁に立て掛ける。

そして他の刀に手を伸ばそうとする。

その時に店の扉が勢いよく開けられる。

「こーりん、いるかー？」

客かなと思ひ、そちらの方をしてみる。

大荷物を持った、女の子が入って来た。

服装は黒と白でエプロンドレスを着けて、魔法使いが被るような帽子。

魔法使いか魔女みたいだなと龍也は思った。

「こーりん、こいつ引き取ってくれ」

そう言っつて霖之助に荷物を見せる。

「相変わらずよく見つけてくるね。ちなみに今は鑑定中だから後にしてくれ」

「鑑定中？」

そう言っつて荷物を床に置く。

するとその時に龍也の存在に気付く。

「お、見ない顔だな」

「彼はここに来た外来人だよ」

「へえー、外来人か……」

そう言いながら龍也をマジマジと見る。

「ん？ どうかしたか？」

「あ、悪い悪い。外来人なんて初めて見たからさ」

そう言っつて、手を差し出してくる。

「私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだぜ。よろしくな」

「俺は四神龍也だ。こっちこそよろしくな」

そう言って握手をする。

龍也は人懐っこいなという印象を受けた。

「そうだ、外の世界ってどんなところなんだ？」

「そつだな……」

鑑定が終わるまで、龍也は魔理沙と雑談しながら過ごした。

「二人とも、鑑定が終わったよ」

そう言われと二人は霖之助の方を見る。

「まず、龍也君の方だけど……これくらいかな」

そう言ってカウンターにお金を出す。

「お、大金じゃないか」

「そうなのか？」

龍也は幻想郷でのお金の価値が良くわかってないので
今一ピンとこない。

「そうだけ」

魔理沙がそう言うのなら大金なんだと思う。

大体の価値は人里の店に売ってる商品を見て決めようと龍也は思っ
とりあえず、お金を仕舞おうと思ひサイフを取り出す。

「へえー、変ったサイフだな」

魔理沙が物珍しそうに龍也の出したサイフを見る。

「そうか？」

「そうだね、幻想郷では見ないタイプだね」

そうなのかと思ひながらサイフにお金を仕舞う。

「で、魔理沙の方は……」

「いつも通りツケといってくれ」

「そう言つと思つたよ」

霖之助はやれやれといった感じだ。

「それじゃ、私はそろそろ行くぜ」

そう言っつて魔理沙は扉の方へ移動した所で振り返る。

「あ、そつだ龍也。私は魔法の森で何でも屋をやつてるから何かあつたら言つてくれ。安くしとくぜ」

「ああ、その時はよろしく頼むよ」

「おつー!!」

そつ言っつて、魔理沙は香霖堂から出て行つた。

その様子を見て龍也は元気だなと思う。

「龍也君、龍也君」

「はい、何ですか?」

「これからも魔理沙と仲良くしてやつてくれないかな?」

「え? そのつもりですけど」

龍也は魔理沙は好感が持てるタイプだと感じている。

だからつっけんどうな態度を取る気は無い。

「そつか。それはよかつた」

霖之助の顔は弟や妹も見てる感じであった。

「それで、龍也君はこれからどこかに向かう予定はあるのかい？」

「そうですね、まず人里に向かう予定です」

「そうか。人里は魔法の森の抜ければすぐだからね。幸いここは魔法の森の入り口の近くだからね、すぐ付くと思うよ」

「そうですね。わざわざ、ありがとうございます」

そう言っつて龍也は扉の前まで移動する。

「またのご来店を」

ある種の営業文句を受けながら、龍也は外に出た。

放浪編 その2

「なん……だと……」

龍也は驚愕する。

香霖堂を出てはや数時間。

霖之助は森を抜ければ人里まですぐ近くだと言った。

と言うより香霖堂は魔法の森の入り口のすぐ近くにあるとのこと。

普通に進めばすぐに出られるであろう。

だと言うのに龍也の目の前に広がる光景は、緑生い茂る木々の数々。

そう、ここは森の中。

つまり、また龍也は迷ったのである。

「やっぱり、あれが拙かったのか……」

香霖堂を出て暫くすると、珍しい形をしたカブト虫を発見。

ついついそれを追いかけてしまった。

見失ったので来た道に戻ろうしたらこの様である。

「俺ってそんなに方向感覚なかつたっけか？」

そう言って辺りを見渡して見るが、どこからどう来たのかわからない。

長い草を踏んだのだから、その跡を見ればと思い探してみたがそんなのは見つからなかった。

短い時間の中で直ったのであろうか。

何とも生命力溢れる森である。

無論、空を飛んで行けばすぐに森を出られるであろう。

何の障害物も無ければそれほど苦も無く人里に着くであろう。

この空腹感ともおさらばできる。

ならなせしないのか。

龍也曰く、何か負けた感じがして嫌とのこと。

ここまで自分の足で来たのだから最後までそうしたいらしい。

「あ、そうだ。魔理沙に頼もう」

先程、香霖堂で知り合った少女。

何でも屋をやっているそうなのだから道案内もしてくれるだろう。

そう思って魔理沙の所まで行こうとしたが、

「……俺、魔理沙がどこにいるか知らないじゃん」

そう、知らなかった。

魔法の森に住んでいるという事は聞いていたが、魔法の森のどこに住んでいるかまでは聞いていなかった。

仮に聞いていたとしてもたどり着けたかと聞かれば首を傾げてしまうが。

「ま、悩んでもウジウジしてもしようがないか」

そう言っつて龍也は気を入れ直す。

そして目の前に向かって歩き始めた。

そして、かれこれ数十分後。

やっと出口に着いた……と言う事は無かった。

つまり、まだ迷っていたのである。

そろそろ空腹感も我慢できないレベルになってきている。

まだ幻覚などが見えてきた訳ではないが、それも時間の問題かもしれない。

お腹を摩りながら周りを見渡して見る。

すると一際大きな茸を発見する。

異常なのは大きさだけであって、色は茶と白と普通だ。

龍也はこれなら食べられるかもしれないと思いその茸に近づいていく。

そしその茸を箸ろうと思つて手を伸ばす。

すると、その茸に急に口が現れ龍也を食べようとしてきた。

「うおわあ!？」

反射的にその茸を蹴り上げる。

茸は上空に投げ出され、ボロボロと崩れながら落下していった。

その様子を龍也は黙って見ていた。

「……なんだありゃ!？」

つい叫び声を出す。

茸が人を食うなんて聞いた事が無い。

それ以前に茸が肉食だと言う事を聞いた事が無い。

幻想郷が普通では無い事を知っていたがここまでとは。

そんな事を思いつつ、フラフラしながら近くにあった木に手を付けようとする。

だが、手を付いたという感触が無かった。

気になってそちらを見ると、木が口を開けていた。

自分の手はその中。

それに気付いた龍也はすぐさま自身の力を玄武に変える。

それと同時に開いていた口が閉まる。

あわや、龍也の手が食い千切られるかと思われた。

が、それは無かった。

龍也の手は噛まれていたが、食い千切られてはいなかった。

それ以前に齒らしきものは刺さってはいなかった。

その事に驚いて動きを止めている木に向かって渾身の力を籠めた拳を放つ。

そしてその木は押し折れて、砕け散りながら吹き飛んで行く。

「ほんと……油断も隙もあったもんじゃねえ」

そう言って、周囲を見渡す。

とりあえず、何も襲ってはこないようだ。

それを確認した龍也は力を消して息を整える。

「魔理沙ってすげえな……」

よくこんな所で平然と生活できるものだと思つた。

龍也は兎に角ここの一帯は危険すぎると判断し、そうそうにこの場所から離れることにした。

そしてまたまた数十分後、龍也はやっぱり迷っていた。

いい加減空腹感も殆ど限界だ。

どこかで休もうと思いついて周囲を見渡してみる。

すると大きめな切り株を発見する。

龍也そこに座ろうと思って近づいていく。

ある程度近づいた所でふと歩みを止める。

そしてその切り株に掌を向けて軽めの霊撃を放つ。

龍也の放った霊撃はその切り株に命中。

そして爆発音が辺りに響く。

煙が晴れるとそこには先程と変わらない切り株があった。

「ほ、普通の切り株か」

先程の事があったので、これも切り株に擬態した何かかと思ったが杞憂だったようだ。

その切り株に座って一息入れる。

そしてこれからのことを考える。

どうしたものかと。

このまま行けば普通に餓死するであろう。

飛んで行けばそんな心配も無い。

だからと言ってそれをすれば何か負けた気がする。

そんなことで悩んでいると、

「爆発音があつたみたいだけど、大丈夫？」

そう声を掛けられた。

龍也は声を掛けられた方に顔を向ける。

そこには金色の髪を肩口にとどくかとかどかないくらいに揃えて、ヘアバンドをした女の子がいた。

「あ、えーと……」

龍也は先程の事を話そうと思った瞬間、腹の音が鳴る。

龍也の腹の音だ。

「サンドイッチあるけど……食べる？」

「いただきます」

そう言うと、その少女は龍也の隣に座ってバスケットからサンドイッチを取り出す。

そしてそれを龍也に手渡してくれた。

「はい」

「ありがとう」

そしてサンドイッチを食べる。

「うまい」

「ありがとう」

そんなことを言いながら龍也はサンドイッチを食べていく。

「紅茶飲む？」

「飲む」

そう言うと、少女はバスケットからポッドとカップを出し、そこに紅茶を注いでいく。

「はい」

「ども」

差し出されたカップを取り、紅茶を飲む。

「うまい」

この紅茶もおいしかった。

そんな感想を抱きながらバクバクとサンドイッチを食べていく。

そして、ある程度食ると龍也の動きが止まる。

「どうかした？」

目の前の少女が疑問の声を出す。

先程までバクバク食べていたのに急に動きを止めれば疑問を覚える

だろう。

「いやさ、ここまで食べておいて言うのも何だけど、俺がこんなに食べちゃっていいのかなって……」

少なくともこのサンドイッチは自分の為に作られた物でない。

目の前の少女が食べるために作った物だ。

だと言うの自分はこれでもかと言うくらいに食べた。

その事に罪悪感を龍也は覚えた。

「別にいいわ。自分でも作りすぎたかと思っていたから」

そう言われてたしかにと思う。

自分が食べた量は目の前の少女が食べきれぬ量とは思えなかった。

だとしたら、何でこんなに作ったんだろうと龍也は思った。

そんな龍也の視線に気付いたのか、目の前の少女が答えてくれた。

「人里で布地とかを買うついでに食料も買い込んでおこうと思ってね。」

家の食料庫の中を綺麗にしておこうと思って作っていたらこんな量になつていたのよ。正直私一人じゃ腐らせてたと思うし、貴方がいて助かっただわ」

そうなのかと龍也は思った。

なら、遠慮する必要は無いと思い再び食べ始める。

そして、しばらくするとサンドイッチは全て無くなった。

食べた量は龍也が九割、少女が一割といったところか。

後片付けを手伝っていると、少女が何かを思い出した顔をする。

「そういえば自己紹介がまだだったわね。私はアリス。
アリス・マーガトロイドよ」

「俺は龍也。四神龍也だ」

お互い自己紹介終えた後、龍也が頭を下げる。

「えーと、アリスさん、おかげで助かった。ありがとう」

「別に構わないわ。それに畏まった態度を取らなくてもいいわよ。」

私のことはアリスで構わないわ」

「そうか。兎に角アリス、ありがとう」

龍也は顔を上げてもう一度礼を言う。

「それで、龍也はどうしてこんな所にいたの？」

「あー、単純に迷ったと言うか何と言うか……」

正直に答えた。

迷った等々は些か言いづらかったが。

「迷ったねえ……」

アリスは若干呆れ顔だ。

その事に龍也は少し恥ずかしくなった。

「それで、どこに行こうとしたの？」

「人里」

「なら、私が連れて行ってあげるわ」

「ホント!？」

「私もこれから人里に行くつもりだったしね」

そう言ってアリスは立ち上がり、歩き始める。

「私から逸れたらだめよ」

「わかってるよ」

そう言いながら、龍也はアリスの後を追う。

あれから、龍也とアリスは雑談をしながら歩いていった。

アリスも魔法の森に住んでいると言っただけあつてか、比較的
安全なルートに行くことができる。

「そういえば貴方って外来人なのよね？」

「そうだよ」

「なら外の世界には完全な自立人形とかそれに類する物つてある？」

アリスの目標は完全な自立人形を生み出すとのこと。

故に外の世界にそういった物があるかどうか興味があるのだ。

「うーん……そういった物ができたつて話は聞いたことは無いな。
あつても決められた動作を繰り返すとかそういうのばかりだし。
アリスの完全自立タイプは物語とかそういうった中にしか登場して
ないな」

「そう……」

アリスは些か残念そうだ。

その後も二人は談笑を続けながら歩いて行く。

そうしていると魔法の森を抜ける。

「ここまで来れば人里まであと少しね」

「へえー」

そう言いながら龍也は辺りを見渡す。

魔法の森の中とは随分変わった雰囲気だ。

「大丈夫とは思うけど、逸れないようにね」

「わかってるよ」

魔法の森の中で一度逸れそうになったことがあるのもう一度言ったのだろう。

その時は龍也が珍しい形をしたクワガタに目を奪われたからなのだが。

そして大体半分くらい歩いたくらいであろうか。

爬虫類っぽい生き物に囲まれたのは。

「あれも妖怪？」

「そうね」

アリスはめんどくさそうな顔をしながら答える。

「妖怪って結構頻繁に襲って来るのか？」

「そうね……陸路だと結構な頻度で襲われたりするわね。妖怪然り妖精然りね。まあ妖精が襲ってくるのは異変の時を除けば殆どないけど」

そう言いながらアリスは人形を展開する。

雑談している時に聞いたが、アリスは人形使いでそうである。

それを聞いた龍也が見てみたいと言ったので魔法の森の中で実演してもらった。

よくあれだけの数の人形を涼しい顔をして生きているよう操れることに非常に驚いた。

龍也では一体の人形を十本の指を使ったとしてもまともに操れはしないだろう。

「それにああいった頭の無い連中は所構わず襲ってきたりするからね。」

向こうからしたら二つの餌が歩いてやってきたと言う認識なのかも知れないけど」

そう言いながらアリスは一步前に出ようとしたが、先に龍也が前に出た。

「これぐらいで返せるとは思ってないけど、飯食わせてもらったのと、道

案内しれくれた礼だ。こいつらの相手は俺がするよ」

そう言いながら龍也は自身の力を朱雀に変えて、二本の炎の剣を生み出す。

炎の剣を見たアリスが若干驚いた顔をしたがすぐに元の顔に戻る。

「それじゃ、お手並み拝見させてもらおうかしら」

その言葉が合図になったのか、正面にいた妖怪が駆けて来た。

龍也はそれより速いスピードで肉迫し、一気に斬り伏せる。

その瞬間に周りにいた妖怪が龍也に向けてエネルギー状の弾を口から放つ。

龍也は跳び上がった回避する。

アリスの方を見てみると、妖怪達が何匹か向かっている。

動かないアリスを見て好都合と思ったのだろう。

龍也は炎の剣を消して、火炎球を生み出して妖怪達に向けて放つ。

無論アリスに被害がいかないように。

その火炎球は見事命中する。

それを見た妖怪達が龍也が跳び上がった周囲に集まる。

動かないアリスよりも龍也の方が脅威と認識したようだ。

妖怪達の配置を見て自分が着地したのと同時に襲い掛かってくるつもりだなと思い、再び炎の剣を二本生み出して身を屈める。

そして龍也が着地したのと同時に一斉に襲い掛かってきた。

その瞬間に龍也は両腕を伸ばし、炎の剣の出力を上げて体を独楽のように回転させる。

すると襲い掛かってきた妖怪は焼かれ、薙ぎ払われていく。

僅かに生き残った妖怪は、悲鳴を上げて逃げていった。

炎の剣を消し、力を消して一息入れたところで拍手がする。

「お見事」

アリスとアリスの人形達が拍手をしていた。

ホントに器用だなと龍也は思う。

「それにしても、外来人で能力持ちで強いつてホントに珍しいわね」

「やっぱ珍しいのか？ 俺みたいな外来人って」

「そうね……私も外来人を見たのって貴方が初めてだけど、聞いた限りでは貴方みたいのは珍しいわね」

そう言えばと龍也は思い出した。

ホントに何かの拍子で幻想入りしたりすることがある。

そして外来人は殆どがただの一般人だ。

よくニュースなどで言われていた神隠しの何割かは幻想入りした

ものだと龍也は認識している。

まあ、唯の一般人だ。

場所にもよるが普通に妖怪に食べられて終わりだろう。

「まあ、幻想入りしてそのまま人里に永住を決め込んだ外来人も
いるみたいだけど……」

それは自分には誰なのか分からないとの事。

幻想郷の人間も外の世界の人間も着ている服が同じならどっちが
どっちなのかはわからないだろう。

「外来人と言えば人里にあるカフェ、あそこを経営しているのは
外来人の子孫と言う噂があるわね」

「カフェ？」

「そ、カフェ」

カフェと言ったらカフェなのだろうと龍也は思った。

近いうちに行ってみることにしよう。

そう思っているとアリスに声を掛けられた。

「それじゃ、そろそろ行きましょう」

「そうだな」

そうして二人出発した。

「おおおおお……」

人里に着いた龍也は感嘆する。

まるでタイムスリップしたような感覚が龍也を襲う。

「やっぱり珍しい？」

そんな龍也の様子を見てアリスが尋ねる。

「うん、珍しい」

周りをキョロキョロと見ながら龍也は答える。

「そう言えば何の目的があつてここに来たの？」

そういえば、人里に来た目的を聞いてなかったなとアリスは思った。

「そうそう、歴史とかそういうのを調べに来たんだ」

「歴史ねえ……それなら稗田家かしらね」

「稗田家？」

「幻想郷の歴史や出来事を纏めてる所よ」

「へえー」

博物館みたいな所かなと龍也は思った。

「いいわ、ついでだから案内してあげる」

「いいのか？」

「貴方をほっておいたら迷子になってそうだし」

「ははは……」

その事を否定できる言葉は龍也には見つからず、思わず苦笑いになってしまう。

「じゃ、付いてきて」

「ああ」

そう言われてアリスに付いて行く事にした。

稗田家に着くまで龍也は周りを見ながら歩いている。

この光景を見ているとホントに自分がタイムスリップをしたような感覚になる。

時代劇などよりもリアルに感じてしまう。

里民の何人かは龍也を物珍しそうに見ている。

龍也の格好が珍しいのだろう。

そんな視線を感じながら周りの景色を楽しんでいると

「付いたわよ」

「え?」

いつの間にか目的地に付いていたようだ。

「ここが稗田家よ」

「ここが……」

デカイ屋敷だなと龍也は思った。

「それじゃ、私はそろそろ行くわね」

「あ、色々とありがとな」

「どういたしまして」

笑顔でそう答えてくれた。

「それじゃ、またなアリス」

「ええ、またね龍也」

アリスの姿を見送った後、龍也はどうやってこの屋敷に入るか考えていた。

取り敢えずはノックだろうと思い、ノックをすることにした。

放浪編 その3

ノックを試してみたが反応が無い。

もう一度してみるが、同じであった。

これだけ大きい屋敷だ。

音が伝わっていないのかもしれない。

どうしたものかと龍也は考える。

このまま中に入ったら不法侵入だろう。

かと言ってこのままここで待ち惚けを喰うのもあれである。

と言うつに変質者に間違われるかもしれない。

「当家に何か御用ですか？」

悩んでいると、声を掛けられる。

声を掛けられた方を見ると、着物を着た子どもが居た。

どことなく高貴さを感じさせる雰囲気だ。

「初めて見る顔ですね。妖怪……ではなさそうですね。ひょっとして
外来人の方ですか？」

「ああ、そつだよ」

「そつですか。あ、申し遅れました。私は稗田家当主をしております稗田阿求と申します」

そつ言つて阿求は頭を下げた。

「あ、これはご丁寧にどうも。俺は四神龍也と言います」

そつ言つて龍也も頭を下げて名乗る。

そして頭を上げると阿求がジツと龍也の顔を見つめていた。

「えつと、どうかした？」

「いえ、驚かないんだなと思ひまして」

「？」

「私のような子どもが当主だと知つたら外来人の方はみな驚いていましたし」

それを聞いて龍也は、ああと思つた。

普通ならば驚くだろう。

だが、龍也はレミリアに会っていた。

レミリアは見た目は子どもだが、紅魔館の主だ。

おまけにそれ相応の強さも持っている。

レミリアという前例がなければ龍也も驚いていただろう。

そうすると、目の前にいる少女も強いのかなと龍也は思った。

「と、その言い方だとやっぱり人里には外来人もいるのか？」

「ええ、そうですね。幻想入りして人里に来られた外来人の方々の多くはここで生活していますよ」

それを聞いて、やっぱり幻想入りしてるんだなと思った。

それと同時に気になる一言があつたので尋ねてみる事にした。

「多くは？」

「はい。一部の方は博麗神社に行って外の世界に帰られました」

その時は記憶を消されませんがと続けてくれた。

「へえー」

龍也はそうなんだと思いながら聞いてた。

神社は結界の基点だったか境目だったかと幽香が言ってたことを龍也は思い出した。

「それで、当家に何か御用ですか？」

龍也は本題を忘れるところだった。

「ここは幻想郷の歴史や出来事を纏めている場所だって聞いてさ。出来ればその記録とかを見せて欲しいんだけど……」

「ああ、そうでしたか。ではこちらへどうぞ
快く了承が取れたらしい。

阿求が屋敷の門を開けて中に入っていく。

その後に続いて龍也も中に入っていく。

中に入って見ると改めてその広大さがわかる。

広い庭に大きな池。

池を見ると大きな鯉が跳ねていた。

「一匹いくらするんだろうか。」

「どうかしましたか？」

「あ、何でもないよ」

広大さに気を取られていたが、すぐに気を取り直して阿求の後に付いて行く。

屋敷の中に入り、靴を脱いで上がる。

そして阿求の後に付いて廊下を歩いて行く。

ここも高級そうだ。

高い木を使ってるんだろうなと龍也は思っていた。

「そう言えば龍也さんはこの先、人里に永住するつもりですか？」

そんな事を思っていると、阿求から質問された。

「いや、幻想郷中を回ってみるつもり」

そう言うと阿求は驚いた顔をした。

「ん？ どうかした？」

「すみません。外来人の方は皆、永住するか帰るかのどちらかしか選ばなかったものですからつい……」

そう言って阿求は頭を下げた。

やっぱりそう言うものなかと龍也は思った。

普通の人間だったら肉食動物が蔓延る中に入っていくものだから当然といえば当然である。

「すると、龍也さんは能力持ちであったり力があったりするのですか？」

「うん、そつだよ」

すると阿求はまた驚いた顔をした。

「やっぱり珍しいのか、俺みたいなのって」

「そうですね。私が把握している限りでは、能力持ちで強い外来人は龍也さんが初めてですね」

「阿求って人里に居る外来人を全て把握してるんじゃないのか？」

「いえ、そんなことはありません。私の噂を聞いて会いに来る人もいれば」

「そうでない人もいますし。人里を歩いていても寺小屋に通っている子どもか、散歩か遊んでいる子どもの一人ぐらいにしか思われていないでしょうし」

「寺小屋……学校の事が」

「外の世界ではそう言うのですか？」

そんな事を話しながら目的の場所に着くまで雑談しながら歩いて行く。

「ここがそつです」

気付くと一際大きい襖の前にいた。

「ここに資料など、纏めたものを保管しています」

「ここが……」

中に入って見ようと扉に手を掛ける。

「阿求様」

声が発せられた方を見ると女の人が寄ってきていた。

「お帰りになられていたのですか」

「ええ」

お手伝いさんか女中の人かなと龍也は思った。

これだけ大きな屋敷なのだからこういう人がいて当然だろう。

「こちらの方は？」

そう言っつて龍也の方を見る。

「こちらは四神龍也さん。お客様よ」

「左様ですか」

そう言っつて龍也にお辞儀をする。

「それでは、お夕飯の時間になったらお呼びしますね」

「いいのか？ 夕飯をご馳走になって」

「構いませんよ」

そう言つて阿求は去つていった。

女中の人も龍也にもう一度お辞儀をした後、阿求に付いていった。

残された龍也は襖を開けて中に入っている。

そしてその中であつた膨大な資料に啞然とする。

さすがにこれ全部を読む気にはないが、対象の物を探すだけでも一苦労しそうだ。

そう思つていたのだが、割とすぐに見つかった。

背表紙に歴史という文字らしきで書かれた本があつたからだ。

そして一と書かれている本をいざ開いてみる。

「なん……だと……」

予測して然るべきであつた。

人里の町並みを見て想像はできたはずである。

そう、書かれていた文章は古文であつた。

読める訳が無い。

幻想郷の歴史がどの程度かわからないが、この文字からして相当古いものだろうと龍也は思う。

学校の授業でやったものよりもっと古いと思ったからだが。

こんな事ならもっと真面目に授業を受けていればと思ったがもう遅い。

「だ、大丈夫だ。俺、国語の成績4だったし、漢字の読みはパーフェクトだったし……」

そんなことを言いながら、本を読み始めた。

そして数時間後。

「全然読めない」

あれから頑張ってみたが、進んだのは僅か十数ページ。

それも何とか読める漢字を並べて勝手に推測しただけなのだが。

「んー」

大分疲れてきたみたいだ。

体を伸ばしてストレッチをする。

そうしていると襖がノックされる。

「龍也様、いらっしやいますか？」

「あ、はい」

様付けされた事に疑問を覚えるが、とりあえず応える。

「失礼します」

そう言っつて襖が開けられる。

「お夕飯の準備が出来ましたのでお呼びに来ました」

「あ、どうも」

そう言っつて龍也は立ち上がり、本を元の場所に戻して付いていった。

その中で様付けされたのは阿求のお客様だからかなと思う。

そうこうしていると大きな部屋の前に辿り着く。

「こちらになります」

「どうも」

そして、女中さんは去っていく。

龍也は襖を開けて中に入る事にした。

「おお」

やけに豪華な料理に驚く。

こんな料理を見たのは生まれて初めてだ。

「龍也さん、近くに座ってください」

料理に見とれていると阿求から声を掛けられる。

そう言われて料理の前に座る。

そして周りを見渡してみる。

すると、どうも居間とかそういう場所でないことがわかる。

「もしかして、ここって阿求の部屋？」

「正解です」

そう言われてもう一度見渡してみると、女の子らしい小物が見つかる。

「何だっ て俺をここに呼んだんだ？」

「すみません、龍也さんとお話してみたかったです」

「俺と？」

それに疑問を覚えたがすぐに解消することになる。

「外の世界の事を聞きたいなと思ひまして。 外来人の方とこうやって話す

のって龍也さんが初めてですから」

なるほどと龍也は思った。

やっぱり外の世界の事に興味があるのだろうか。

「ああ、別に構わないよ」

「ありがとうございます」

そして、外の世界の事を話しながら食事を続けていった。

「と、もうこんな時間か」

龍也は自分の腕時計を見て少し驚く。

料理を食べ終わってからずっと話し込んでいたからか
そんなに時間が経ってないように龍也は感じていた。

幸い幻想郷と自分の時計の時差は殆ど無いようなので腕時計はそのまま使えている。

外の世界事を話すついでに阿求の事も教えてもらった。

”一度見たものを忘れない程度の能力”があるとのこと。

龍也はテストの時は便利だなあと思っていたが。

その事を言ったら、そんな事を言ったのは貴方が初めてですと笑われた。

他にも幻想郷の出来事などを纏めていたり、ある程度の記憶を持つたまま

転生しており、そのために死後には閻魔様とところでお仕事を手伝っているとの事。

閻魔様と言われて。大きくて、舌を抜く道具を持っていて、鬼の様な形相

したのを想像し、龍也はその事を阿求に話したら、笑いながら全然違いますよと言われた。

会う時を楽しみにしてみると言ったら、説教癖があるので注意するように言われた。

「すみません、こんな遅くまで付き合わせてしまって」

「別にいいよこれくらい」

楽しかったし夜更かしは慣れてるしねと続ける。

「でしたら、お風呂に入ってからご就寝されますか？」

「それでもいいんだけど……」

そう言っつて阿求の方を見る。

客人の立場である自分が一番風呂を貰っていいのかと考えている。

そんな龍也の考えを知っつてか阿求が答えてくれる。

「私のことでしたら気にしないでください。もうすでに入浴は済ませて

ますから」

「そうか」

なら遠慮する必要は無いなと思ひ立ち上がる。

「ならそうさせて貰おうかな」

「わかりました」

そして龍也は部屋から出ると、そこには女中さんがいた。

「浴室までご案内いたします」

「どうも」

そうして女中さんの後を付いていく。

すると程なくして付いた。

「こちらになります」

龍也はでっかい浴室だなと思っていた。

これだけ大きな屋敷ならこれぐらいは当然であろうが。

「それで、龍也様のお召し物はいかがいたしましょうか？」

「あー」

そう言われてどうしようかと思う。

制服は案外洗うのが難しい。

幻想郷に学ランとかはないだろうと龍也は思う。

まあ、制服はそんなしよつちゅう洗う物でも無いし、いいかなと龍也は結論を出す。

「学ラン……上着とズボンはそのままでいいんで、ワイシャツと下着だけお願いできますか？」

「畏まりました」

そう言って女中さんは籠を持ってきた。

「洗う物はこちらに入れてください。着替えは後ほどお持ちいたします」

「どうも」

「いえ、ではごゆっくりどうぞ」

そう言って女中さんは去っていった。

そして、龍也は中に入っていく。

脱衣所の大きさに驚いたものの、着ていた服を籠の中に入れて浴室に入っていく。

「おおー、檜風呂ってやつか」

生まれて初めて入る檜風呂に感動する。

とりあえず先に体を洗ってから、風呂に入る事にする。

若干熱かったので自身の力を青龍に変えて、水を生み出して水増しをする。

そして温くなったら力を朱雀に変えて炎を生み出し熱くする。

能力の有効活用と言うか何と言うか。

こんなことを繰り返していると、ある事を閃く。

一人旅している時に風呂に入りたくなったらどうするかということ
を。

玄武の力を使って五右衛門風呂のような物を作り、青龍の力を使って
水を張り、朱雀の力を使って水を温め、白虎の力を使って体を乾か
す。

龍也は我ながら完璧じゃないかと思った。

そんなこんなのことを考えていると眠くなってきた。

そろそろ上がるのかなと思い、湯船から立ち上がり脱衣所に向かう。

脱衣所に戻り、用意された着替えに着替えようとする。

だが、ここで驚愕する。

「禪……だと……」

禪の存在であった。

幻想郷の文明レベルを考えればなんら不思議は無いのだが……。

トランクス派の龍也にとっては禪など未知の存在。

着け方がわからない。

こんなこと阿求や女中さんに聞く訳にもいかず。

かと言って、このまま脱衣所に留まる訳にもいかず。

悩んだ末、龍也は決断する。

自分の勘を信じて着ける事にした。

ちなみに服は和服であった。

そして、五日後。

龍也は稗田家を出ることにした。

歴史書は全部読んだとはいえ、殆どわからなかったが。

まあ、それでもわかる事があったのでよしとしよう。

「いろいろ世話になったな、阿求」

「いえ、私の方も楽しかったですし」

見送りには阿求が来てくれた。

「でもよろしかったのですか？ 朝食を食べていかれなくて」

「ああ。適当に人里を見て回る序にどこかで食べていこうと思って
るからさ」

「そうですね。あ、おにぎりを作りましたんでよろしかったらお昼に
どうぞ」

「お、ありがとな」

そしておにぎりを包んだ物をベルトの部分に付けてくれた。

靴とかなかったので、こういうのはありがたかった。

「それじゃ、またな阿求」

「ええ、またいらして下さいね龍也さん」

そして、阿求と別れて人里の中を周ってみる。

結構早い時間だと言うのに人が活動し始めていた。

近くを通りかかると挨拶をしてくれたので、龍也も挨拶を返す。

こうやって挨拶されるのは外の世界では滅多に見ない光景なので新鮮に感じる。

色々とウロウロしていたら、いい感じにお腹が減ってきた。

アリスが言っていたカフェに行こうと思いい周りを見ている。

それらしき建物は存在しない。

どうしたもかと思っていたら近くに人を発見したので聞いてみることにした。

「すみません」

「おう、どうしたい兄ちゃん？」

「カフェまで道のりわかりますか？」

「ああ、それならその通りを二つ行った先を左だ。すぐ見えると
思っぜ」

「そうですか、ありがとうございます」

「いってことよ」

気前のいい人だなと思いつながら教えられた道を歩いて行く。
するとすぐにカフェが見つかる。

とてもわかりやすいなと思いつながら、空いてる席に座る。

メニュー表を見てみると、ウェイトレスさん水を持ってやってくる。

「いらつしゃいませ、ご注文はお決まりでしょうか？」

「えーと、オムライスのミルクをお願いします」

「オムライスとミルクでよろしいですね？」

「はい」

「畏まりました。少々お待ちください」

ウェイトレスさんが去って行き、龍也は水を飲みながら
周りの景色を見る。

活気があるなと思う。

みんな生き生きしてる。

その様子を見てみると

「お待たせしました、オムライスとミルクをお持ちしました」

内心早いと思った。

予想していたより大分早かった。

もしかして既に作っていたのだろうか思いながらオムライスを食べる。

美味しかった。

全部食べて会計をすまし、また人里をブラブラする。

八百屋を見てみたり、呉服屋を見てみたり、花屋を見てみたりしながら

大体のお金の価値を推察する。

外の世界の一万円が幻想郷での一円ぐらいだと龍也は思った。

多分合っているだろうと思いつながらまた人里をブラブラする。

そしてある程度は見終わったので出入り口を探す。

本来の目的である幻想郷中を回るために。

まあ急ぐことではないが、天気も良かったので絶好の旅路日和だと思いつける事にした。

一直線に歩いていると人里の出入り口を発見する。

その先は見えないぐらいに広く、龍也は内心ワクワクしていた。

そして一歩、また一歩と龍也は人里から離れた行った。

放浪編 その4

龍也が人里を出て数時間。

何度か妖怪に襲われたが順調に進んでいる。

行き先も方向も決めていない自由気ままなものではあるが。

そして気ままに歩いて行くと木々が増えていく方向に向かっていた。

龍也は魔法の森以外にも木が多い場所があるんだなと思いながら進んでいく。

森林浴を楽しんでいると、何か落ちているものを発見する。

「何だ、あれ？」

近づいて見てみると木の板らしき物であった。

拾って調べてみると文字らしきものが書かれていた。

「えーと、何々……」

せつかくなので読み取ってみることにした。

「……麗………神……社……？」

所々擦れていたりしたので読み取れたのはここまでであった。

だが、ここまでの名前の響きをどこかで聞いた事がある。

どこだったかと龍也は思い出そうとしてみる。

「……………博麗神社か!」

ようやく思い出せた。

ついでに幽香と阿求がその事を言っただという事も。

あの二人の話を統括すると、博麗神社は一種の名所とも言えるのではないかと龍也は思った。

「せっかくだし行ってみるか」

行き先が無かった為これ幸いと龍也は思い、博麗神社に行ってみることにする。

辺りを見回して見るが、神社への道という物がない。

この木の板は看板で、雨風で支えていた物が押し折れここまで飛んできたんだろうなと龍也は推察する。

まずはそれを見つける事から始めるかと思いい自分の勘を信じて歩き始める。

そして数時間後、ようやくそれらしき物を発見する。

地面に刺さった押し折れた木の棒を。

ここまで時間が掛かったのはそれほどまでに看板が飛んだのか、それとも龍也が迷ったせいかはわからないが。

荒れ放題ではあるが石でできた階段がある。

恐らくこの先に神社があるのだと龍也は思う。

こういった先にそういった建物があるのはある種のお約束である。

「しっかし……」

荒れすぎではないかと龍也は思う。

これでは参拝客は来てないのではないだろうか。

そう思いつつも、仕方がないかとも思う。

それはここまでの道のりだ。

ここまで来るのに何度か妖怪に襲われた。

一般人であれば一たまりもないだろう。

ここまで来るのに死んでしまう可能性が非常に高い。

そうならば、足取りは途絶えていくだろう。

「……………ん？」

そこまで考えて疑問が浮かぶ。

外の世界に帰る事を決めた外来人の事である。

少なくとも普通の外来人はここまで来ればしない。

神社に行くまでは護衛を付けて貰えると阿求が言っていた。

つまり、護衛を付けて貰えさえすれば里民も神社まで行けると言うことである。

だというのにここまで荒れ放題であるという事は、考えられる事は一つである。

「そうまでしてここに来る気は無いつてことか」

そう呟いて少し心配になった。

博麗の巫女はいったいどのような人物であるのか。

会いについて大丈夫なのであろうか。

そんな事を考えていたら龍也の腹が鳴る。

考えてみれば人里を出てからずっと歩きっぱなし。

途中途中で戦闘も挿んだ。

お腹も減るだろう。

昼飯にするかと思い、石段に座ってベルトに付けていた包み外して阿求が作ってくれたおにぎりを食べることにする。

「いただきます」

そしておにぎりを食べる。

「うまい」

塩の量も龍也好みであり、具も龍也の好きなおおかであった。

内心阿求に感謝しながらおにぎりを食べていく。

そして数分後、おにぎりを食べ終わり立ち上がる、

龍也の胃袋の大きさを考えてかおにぎり自体も結構な大きさであったので、龍也の腹も膨れた。

そのことにもう一度、阿求に感謝をして立ち上がる。

そして長い石段を見る。

「よし、行くか」

そう言って龍也は石段を上り始めた。

「長っ！！」

非常に長い階段であった。

龍也は五百を超えてから数えるのをやめた。

どれだけ続いているんだと龍也は思う。

こんなことなら飛んで行けばよかったかなと龍也は思った。

とはいっても途中でやめる気は更々無いが。

あと、どれくらいあるんだろうと龍也は思いながら足を進める。

だが、そんな思いも簡単に打ち切られる。

突如、石段の両端にある林から何者かが現れ龍也に襲い掛かってきた。

龍也は後ろに跳んで回避する。

丁度龍也がいた石段は襲ってきた者の攻撃で粉碎する。

土煙が晴れ、龍也を襲ってきた者の正体がわかる。

大きさは大体龍也の倍で、体毛は白。

牙を剥き出しにして涎を垂らしたゴリラのような生物だ。

龍也はこれも妖怪かと思った。

だが、他に言わなければならないことがあった。

「ここ、神社の通り道だよな。何で妖怪が出てくるんだよ」

神社と言えば神聖なものだと聞いた事が龍也にはあった。

よくゲームとかでは魔物の類は基本近寄れないという設定が多くある。

あれは嘘だったのかと龍也は思った。

まあ、あれはゲームでこっちはリアルだからなあと思っていた。

そんな現実逃避をしていると、妖怪の数も増えていた。

いい加減これらを何とかしないと命に係わるなと思い構えを取る。

するとそのうちの一体が襲い掛かってくる。

そして殴りかかってくる前に自分から懐に飛び込みその妖怪の顎を殴りつける。

そしてふらついた妖怪に回し蹴りを叩き込んで林の中まで蹴り飛ばす。

それを見た残りの妖怪達は驚きつつも怒りながら龍也に襲い掛かる。普通ならば恐怖で震え上がるであろう。

だが、龍也は落ち着いていた。

何故かと言うと、今まで戦ってきた経験があるからだ。

特にレミリア・スカーレットとの戦いが龍也を大きく成長させたのである。

そんな龍也の状態を知ってか知らずか、一体が真正面から襲い掛かってきた。

力任せに殴りかかってきたので、その力を利用して林の中に投げ飛ばす。

次は両サイドから二体襲い掛かってきた。

龍也は跳び上がって避けると同時に二体の妖怪の顔面に蹴りを放つ。蹴り飛ばされたのを見ていると今度は後ろから襲い掛かって来た。

そいつには裏拳を放って殴り飛ばす。

その光景を見た襲い掛かって来なかった妖怪達は後ろに引き下がっていく。

それを見た龍也は引くかと思ったがそうはならなかった。

その妖怪達の後ろから、二周り程大きい同種の妖怪が現れたからだ。大きき以外に違っているところは、体毛に茶が混じっているくらいであらうか。

この妖怪達のボスか何かかと龍也は思った。

残っていた妖怪達はそいつ通すために道を開けた。

その様子を見て龍也はやはりボスなのかと思う。

そして龍也のボス妖怪は睨み合う形になる。

その威圧感を感じて龍也はさっきまでの奴等とは違うなと思う。

そして龍也は自身の力を白虎に変える。

それと同時に腕と脚に風を纏う。

また睨み合いが続く。

先に動いたのは妖怪の方であった。

巨体さを活かして龍也を押しつぶそうとする。

その瞬間、龍也は消える。

妖怪はどこに行ったかと思ったが、すぐさま拳を後ろに振りぬく。

調度その拳の下に龍也はいた。

龍也の動きは見えていなかったはずではあるが。

野生の勘と言う物であろうか。

その妖怪が第二撃を放とうとした時には龍也の準備は終わっていた。

掌に風の塊を生み出し、それを目の前に妖怪に叩きつける。

それを受けた妖怪は叫び声も上げらず、物凄いスピードで吹き飛んで行く。

その光景を見た妖怪達は我先にと逃げ出していった。

そして気配が無くなった事を確認して龍也は力を消して一息入れる。

「こりゃ、誰もここに来ないはずだ」

神社までの道のりなら兎も角、神社に続く石段にまであんな凶暴な妖怪が現れるのでは誰もこなくなるのもしかたがない。

「ま、ここであれこれ考えてもしかたがないか」

そしてまた博麗神社を目指して歩き始める。

「やっと階段も終わりか」

長い石段も終わり、ようやく平らな場所に出る。

気付けば夕方になっていた。

鳥居を潜って進んでいくと神社が見えてくる。

「意外と普通だな」

てっきり神社も荒れ放題かと思ったがそうでは無かった。

そのまま進んでいくと賽銭箱を発見する。

「ご利益があるかはわからないがここは賽銭を入れるのが礼儀だと龍也は思った。

サイフから小銭を一握り取って、賽銭箱に入れる。

ついでに手を叩いて祈る。

すると視線を感じたのでそちらをしてみる。

巫女服を着た少女が龍也を見ていた。

腋が大きく露出しているがそれかこの巫女服の伝統なのだろうか。声を掛けようと思ったが、先に巫女服を着た少女から声を掛けられた。

「博麗神社にお越しいただきありがとうございます」

やけに丁寧な対応をされた。

「私は当神社の巫女をしております、博麗霊夢と申します」

「あ、ご丁寧にどうも。俺は四神龍也と言います」
そう挨拶を返す。

「お疲れでしょう、お茶を淹れますのでどうぞこちらへ」

「あ、どうも」

霊夢に連れられて神社の縁側につく。

縁側に座りながら風景を楽しんでいると霊夢がお茶を持ってきた。

「どつぞ」

「どつぞ」

そして出されたお茶を飲む。

「うまい」

「ありがとうございます」

お茶を飲みながら風景を楽しんでいたが、何か違和感を覚える。

そう思いながら霊夢の方を見る。

「何か？」

「いやさ、別に喋りづらいんであればそんな丁寧な喋り方しなくてもいいぞ」

「そつ？　ならそつさせてもらつわ」

なるほどなと龍也は思った。

滅多に参拝客など来ないものだから、賽銭を入れた龍也への対応がやけに丁寧になったのだらう。

せつかくなんで気になったことを聞いてみることにした。

「そついや霊夢って今まで何人くらいの外来人を外の世界に帰したんだ？」

「そうね……だいたい十人前後くらいかしら？」

「そんなもんなんだ」

意外と少ないんだなと龍也は思った。

「あんたも外の世界に帰してほしいって口？」

「いんや。ここに来たのは物見遊山目的かな」

「そ。まあ結界に穴を開けるのは面倒だからよかったわ」

龍也は霊夢の性格がだいたいわかった気がした。

「そついや、俺が外人だってわかるのか？」

「まあ幻想郷では見ない服装だし、後は雰囲気かしら」

「そつ言つものなのか？」

「そつ言つものよ」

座ってお茶を飲みながら霊夢はそう答える。

いつの間に自分の分を用意したのだろうか。

「そういやここに来る石段の途中で妖怪に襲われたんだがよくあることなのか？」

「そうね、よくあることね」

「結界とかそういうのを張って入ってこれないようにしないのか？」

「いやよ面倒くさい。空路で来れば襲われることも無いし、それにああいった連中はここまで入ってこないから別にいいのよ」

「そうか」

この神社に客足が途絶えた理由を龍也はよく理解した。

「妖怪に襲われて無事だったて事は、龍也は力が有ったり能力持ちだったりするの？」

「そうだよ」

「へー、珍しい」

「やっぱり俺みたいなのは珍しいのか？」

「珍しいわね」

やはり自分みたいなのは珍しいことなんだと改めて認識した。

「そろそろ夕飯の準備をするけど……食べてく？」

「いいのか？」

「いいわよ」

「そじゃ、食へてくよ」

「わかったわ」

そう言って霊夢は中に入っていった。

龍也は煎餅を齧りながら夕食ができるまで神社から見える風景を楽しんだ。

「ご馳走様」

「お粗末様でした」

阿求の所で食べた豪華さの様なものではなかったが、とても美味しかったと龍也は思う。

古き良き日本の味と言つのはごういづ物なのかと龍也は思った。

「暗くなつてきたけど泊まってく？」

「いいのか？」

「いいわよ。あ、部屋はあっちを使ってね」

そう言つて霊夢が指を差す。

「わかつたよ」

「それとお風呂だけど……」

「さすがに家主より先に入ろつとは思わないよ」

「そ。覗かないでね」

「覗かねーよ」

興味が無いと言えば嘘になるが、さすがにそんなマネをする気は無い。

「俺は縁側にいるから上がったら教えてくれ」

「わかったわ」

そして霊夢は風呂場に行き、龍也は縁側に向かう。

「しっかしよく見えるな」

夜空を見て龍也はそう思う。

外の世界では見れない光景だ。

紅魔館ではレミリアと戦っていたし、幽香の家ではスペルカードを作って

いたし阿求の家では資料室に籠りつきりだったのでこうやって幻想郷で夜空を見上げるのは初めてだ。

そんな風に夜空を楽しんでいると声が掛かる。

「上がったわよ」

その声を掛けられ振り向くと湯上りの霊夢がいた。

中々に色っぽい。

「どうかした？」

「いや、なんでもない」

そう言っただけ立ち上がる。

「湯殿はあつちだから」

「おう」

そして脱衣所に行つて服を脱いで風呂に入る。

ここも檜風呂だったので幻想郷ではこれが普通なのかと龍也は思った。

自身の能力を使って、温度調節をしながらまったりと過ごす。

ぼんやりとして過ごしていると少し眠くなってくる。

このままここで寝てしまふ訳にもいかないので、上がる事にする。

風呂から上がって着替え終わった龍也は霊夢を探す。

そして縁側で涼んでいた霊夢を発見する。

「上がったぜ」

「そう」

霊夢の隣に座って一緒に涼む。

「飲む？」

そう言ってお茶を出してくれた。

「飲む」

そして出されたお茶を飲む。

本当に美味しいお茶だと龍也は思う。

そしてまったりして過している眠くなってきた。

「眠くなってきたからそろそろ寝るよ」

「そ、お休み」

「お休み」

そして言われた部屋に行って布団を敷いて寝ることにする。

阿求の家のように広い訳ではないが、落ち着きがあって言いと龍也は思う。

明日はどつしよつかと考えながら眠りについていった。

放浪編 その5

「ふぁ………」

龍也が目を覚ます。

しばらくボーっとしていたが頭が覚醒してくる。

周りを見渡しながら、ああと思い出す。

自分は博麗神社に泊まっていた事を。

布団から出て学ランを着る。

そして部屋から出て霊夢を探す。

縁側辺りを歩いていると声が掛かる。

「おはよう」

声を掛けられた方を見ると霊夢がいた。

「おはよう」

龍也も挨拶を返す。

「朝ご飯できてるから食べちゃって」

「ありがとな」

そして霊夢の後に付いて行って今に移動する。

朝食はご飯に味噌汁に漬物に焼き魚といったものがあった。

「いただきます」

そして朝食を食べ始める。

美味いと龍也は思う。

昨日の夕食もそうであったが、霊夢の作るご飯はうまい。

そんな事を思いながら箸を進めていく。

そしてしばらくすると庭先に何かに着地する音が聞こえる。

「お客さんか？」

「多分魔理沙だわ」

霊夢がそう言っていると襖が開けられる。

「おーっす、霊夢」

そして魔理沙が入ってきた。

そして部屋の中を見渡すと龍也の存在に気付く。

「お、龍也じゃないか。こんな所会うなんて珍しいな」

「こんな所とはどういう意味よ」

霊夢が軽く怒りながらそう言う。

「悪い悪い」

そう言いながら卓袱台の前に座る。

丁度、霊夢と龍也の間の位置だ。

「そう言えばあんた達知り合いだったの？」

「おう」

そして魔理沙が香霖堂で会った事を話す。

「ふーん……」

霊夢はお茶を飲みながら聞いていた。

「で、何しにきたの？」

「朝食を貰いに来たんだぜ」

「やっぱりね」

霊夢はやれやれと言った顔だ。

「そう言うなよ、お土産も持って来たんだしさ」

そう言いながら袋に入れてきた茸の山を見せる。

中には何やら珍妙な色をした茸もある。

「あの茸、全部食えるのか？」

「全部食べれるぜ」

魔理沙がそう言うならそうなのだろう。

霊夢は霊夢でお昼は天ぷらねと言いながら茸を台所の方に持っていった。

「それじゃ、私もいただくとするぜ」

魔理沙はどこからか自分用の茶碗を出してご飯をつぐ。

ここに馴染んでるなと思いつつも龍也は食事を進めていく。

朝食を食べた後三人で縁側でまったりしながら過ごす。

そして三人で幻想郷の事やら外の世界の事やらを話す。

「そついや、龍也って弹幕ごっこできるのか？」

調度話題が弹幕ごっこになったので魔理沙がその事を龍也に聞く。

「ああ、多分できると思うぞ」

そう言いながらスペルカードを見せる。

「ならば、私とやらごっせ」

魔理沙がそう提案する。

「と言ってもルールをとりあえず知ってるだけでどんなものか知らないぞ」

龍也がそう返す。

よくよく考えてみればルールは知っていてもどんなものかは知らなかったなと龍也は今更ながら思う。

「ならば、私と霊夢がやるからさ、見ててくれよ」

魔理沙がそう言って来る。

弾幕ごっこがどんなものか龍也に見せる気のようにだ。

霊夢の方は暇をしてたのか特に異論は無いようだ。

そのまま二人は上空に上がっていき、弾幕ごっこを始める。

それ見ている龍也はまさに弾幕だなと思う。

無数の弾幕を放ちながら、余裕を持って避けたり紙一重で避けたりなど。

魔理沙は魔力でできた弾、霊夢は御札を弾にしているようだ。

それを見て撃ち出す物は何でもいいんだなと龍也は思った。

そんな状態がしばらく続いていたが状況が変わる。

魔理沙から極太のレーザーが発射される。

それを見て龍也は自分の霊流波に似てるなと思いつつながら幽香が言っていた事を思い出す。

この技と同じ原理の技を使うの者が自分の他にもう一人いると。

あれは魔理沙の事だったのかと龍也は思う。

そんな魔理沙の技も霊夢は回避する。

かなりギリギリのようであったが。

すると、今度は霊夢から七色に光る弾が発射される。

それを魔理沙がうまい具合に回避していく。

だが、何発目かを回避した先に霊夢が放った弾が迫って来ていた。

魔理沙は慌てて回避行動を取るが遅く、弾が命中する。

そして立て続けに残りの弾が命中していく。

それを受けて魔理沙が墜落していく。

まずいと思ったのか龍也が落下予測地点にまで行く。

そして落ちてきた魔理沙を受け止める。

大丈夫かと思つて様子を見てみる。

「あー、くそ、負けたー」

元気なようだ。

魔理沙を下ろすと霊夢が降りて来る。

「今回は私の勝ちね」

「ちえー」

そんな二人のやり取りを見ながら、少し気になった事を聞いて見る。

「そーいや結構な高さから落ちてたけど大丈夫なのか？」

「あれ位の高さからなら落ちても何の問題もないぜ、なあ」

「そうね」

霊夢もそう言う。

「あー」

そう言われて龍也も納得する。

そして自分もあれくらいの高さからなら落ちても平気だなと思う。

レミリアと戦った時なんか壁に叩き付けられたり、突き抜けたり床に叩きつけられたり色々したけど、そこまで深刻なダメージを受けたりはしなかった。

自分も大分人間離れしたなと龍也は思う。

「それじゃ、お昼ご飯の準備よろしくね」

「わかったよ」

そう言いながら魔理沙は神社の中に入っていく。

弾幕じっじでじっじ言っ事も決められるんだなと龍也は思った。

「さて、そろそろ行くかな」

茸の天ぷらを食べて腹が膨れた龍也はそろそろ出発することにした。

見送りは霊夢だ。

因みに魔理沙は茸の天ぷらの食べすぎでダウンしている。

自分で採ってきた茸だったのだが予想以上に美味しかったらしく、
ついつい食べ過ぎたようだ。

「それで、どこかに行く予定はあるの？」

「ああ、紅魔館に行こうと思ってる」

さっき三人で話していた時に紅魔館に図書館がある事を聞いた。

もしかしたらそこなら自分でも読める歴史書などがあるかもしれない
と思ったからだ。

「そ、気を付けてね」

「おう」

そして、石段に向かって歩き出す。

「また来なさい。その時はちゃんとお賽銭入れてね」

「はは、わかったよ」

やれやれと思いながら龍也はそう答えた。

「たしかこの辺りだったな」

魔法の森の中を彷徨いながら目的の場所を探す。

今回は珍しく妖怪にも妖精にも襲われはしなかった。

紅魔館に行くには湖……霧の湖を通った方が行きやすいと龍也は思っている。

前に行った時にそこを通ったからなのだが。

そしてやけに長い草を分けながら進んで行くと思いの外、開けた場所に出る。

「あー、ここだここだ」

まだそんなに経っていないのに非常に懐かしい感じがする。

後は空中に上がって飛んで行けばいいなと思いきや、行動に移そうとする。

「あー、お前は!?!」

「ん?」

声を掛けられてそちらを振り向く。

そこに青い髪をした妖精、チルノがいた。

「チルノ……だったよな」

そう言いながら確認する。

「そうだよ」

合っていた様だ。

一体何の用かと尋ねようとしたら、チルノの後方から誰かが来る。

「チルノちゃん」

緑色の髪をした妖精だ。

龍也の姿に気付いてペコリとお辞儀をする。

お辞儀をされたので龍也もそう返す。

「どちらさん？」

「私は大妖精と言います」

「俺は四神龍也だ」

自己紹介を終えてチルノの方に向き直る。

「それで、何か用か？」

「この前の借りを返しに来たのよ!!」

「借りって何？ チルノちゃん」

大妖精は訳がわからないと言った感じでチルノに尋ねる。

「この前俺がこいつに喧嘩売られて返り討ちにしたからな。その事じゃ

ないか？」

チルノではなく、龍也がそう答える。

「チルノちゃん……」

大妖精が何か言いたそうな目でチルノを見る。

「とにかく！！ あたいと勝負だ！！」

ようは自分と戦いたいという事であろう。

でも、調度いいかもしれないと龍也は思った。

「弾幕ごっこでいいのか？」

「いいよ」

直ぐに了承が取れた。

弾幕ごっこは魔理沙と霊夢のを見てどんなものかはわかったが
実際に体験はしていない。

調度いい機会だと思った。

そうして龍也とチルノは上空に躍り出る。

そして弾幕ごっこが始まる。

先手を取ったのはチルノだ。

龍也に向けて弾幕を放つ。

龍也は苦も無くそれを回避する。

だが、そこで疑問を覚える。

弾幕の密度が薄くないかと。

前にチルノと戦ったときはこんなにも薄くは無かった筈である。

チルノの弾幕を避けながら考える。

そして、そう言えばと思い出す。

妖精は異変時だと強さを増すが、異変時で無い時はそれほどでもない
と言う事を。

チルノは妖精である。

強さにムラがあるのだろう。

それでも異変の時に大量に出てきた妖精よりは強いが。

そう結論を出してチルノの方を見る。

龍也に弾幕が当らなくてイライラしてきてる様だ。

それを見ながら龍也も弾幕を放つ。

だが、難なく避けられる。

そしてまた弾幕を放つが避けられる。

それを繰り返していくたびに龍也は段々とコツを掴んでいく。

そして、

「そこっ！！」

「きゃうー！！」

龍也の放った弾幕がチルノに命中する。

チルノは恨めしそうな顔で龍也を睨む。

そして何やらカードのような物を取り出す。

「氷符『アイシクルフォール』」

すると何やら変わった弾幕が放たれる。

両サイドから龍也の方へ進みながら中央に移動する。

そんな弾幕だ。

あれがスペルカードと言う物であろうか。

そう思いながらそれを回避していく。

中々避けにくいなと思っていると、あることに気付く。

ど真ん中には弾幕がいてない。

龍也は何かの罠かと思ったがその様子はない。

なのでそこに移動する。

やはりと言っか何と言っか、そこには弾幕はない。

そして龍也もスペルカードを取り出す。

初めて使うスペルカードに内心ドキドキしながら。

「霊撃『霊流波』」

すると龍也の掌から青白い閃光が迸る。

それは弾幕諸共チルノを飲み込んでいる。

閃光が晴れると気絶したチルノが墜落して行く。

このままほって置くのもあれなので、落ちる前に龍也がチルノを助ける。

「ハッ!？」

チルノが目を覚ましたようだ。

「よ、大丈夫か？」

そう龍也が声を掛ける。

チルノは周りを見ながら何かに気付いたようで顔を下に向ける。

負けた事がショックだったのだろうか。

龍也が何て声を掛けようか悩んでいると、チルノが顔を上げる。

「あんた、中々やるじゃない!!」

落ち込んではいなかった。

「あたいのライバルにしてあげる!!」

そして勝手にライバル認定された。

あまりの展開に龍也がフリーズしているが、展開は普通に進んでい

く。

「次は負けないんだから！！ 行く、大ちゃん」

そう言っつてチルノは森の中に向かっていく。

「待ってよ、チルノちゃん！！」

大妖精もチルノを追って森の中に消えていく。

それを見ていた龍也が再起動し、状況を確認する。

「ま、いつか」

色々あったがこれで良かったんだと思う事にした。

そして上空に上がって紅魔館を確認する。

霧は出ているが紅い霧の時ほどではない。

紅魔館の姿は確認できる。

そつして龍也は紅魔館目指して足を進める。

放浪編 その6

湖の上空を歩きながら紅魔館を目指す。

異変の時は妖精やら何やらが襲撃を掛けてきた。

だが、今はそんなことはない。

平和だなど思いながら龍也は進んでいく。

そうしながら歩いて行くと湖の終わりが見える。

今度は地面に着地して進むことにする。

自然の多さを楽しみながら歩いて行く。

するとすぐに紅魔館が見えてきた。

美鈴に声を掛ければ入れて貰えるかなと思い、彼女の姿を探す。

すぐに見つかった。

近くに行って声を掛ける。

「おい、美鈴」

反応が無い。

「美鈴？」

もう一回呼んでみるが反応が無い。

この前無理やり押し通った事を怒っているのかと思う。

なので、美鈴の顔色を伺ってみる。

そしてすぐに怒っていない事がわかる。

更に反応が無い事もわかる。

「寝てる……」

そう、寝てたのである。

幸せそうな顔をしながら。

これでは反応が無い事も頷ける。

門番がこれでいいのかと龍也は思う。

まあ、それだけ襲撃が無いのであろう。

忍び込むのもあれなので龍也は美鈴を起こすことにした。

「美鈴」

「……」

反応が無い。

今度は大きな声を出す。

「美鈴！！！！」

「わひゃあ！？」

龍也の発した声で美鈴が飛び起きる。

「ち、違つんです！！ これはですね、瞑想をしていただけであつて……」

起きるなり言い訳を始める。

そして周囲を確認すると龍也の姿を発見する。

「あ、何だ龍也さんじゃないですか」

美鈴はホツとした顔になる。

「いつも寝てるのか？」

「違いますよー、寝てませんよー」

悪魔で自分は寝ていないと手を振りながら主張する美鈴。

龍也はまあいいかと思う。

そんなことを思いながら美鈴の顔を見つめる。

「どうかしましたか？」

「いやさ、この前と雰囲気が違うなと思ってた」

この前来た時はちゃんと門番をやっていた。

なのに今回はこれである。

龍也が疑問を覚えるのも無理はない。

「この前は異変時でしたから」

そう言う美鈴。

「それに私はオンとオフの切り替えがキチンとできる門番なのです」

そう胸を張って自慢げな顔をする美鈴。

そうなのかと思う龍也。

だが、そんな時間も長くは続かなかった。

「つまり、普段の業務はオフだと。そう言いたい訳ね、美鈴」

背後から声を掛けられビクツとする美鈴。

恐る恐る後ろを振り向くと咲夜が立っていた。

「違っんです咲夜さん、これはですね……」

「何が違つのかじっくり説明してもらいましょうか、美鈴」

そうして言い争う二人。

いや、美鈴が怒られていると言つた方が正しいであろう。

音も気配も無く現れた咲夜を見て、龍也は時間を止めて現れたんだなど

思ふ龍也。

色々と便利な能力である。

「それで……」

そう言いながら咲夜は龍也の方を見る。

対して美鈴は肩を落として落ち込んでいる。

何かあつたのだろうか。

大よその想像は付くが。

「紅魔館に何か用かしら？ また襲撃でも掛けに来たの？」

「違うよ。ここに図書館があると聞いてさ、その本を見せて貰いたくてさ」

「本を？」

意外だったのか咲夜は驚いた顔をする。

そんなに意外だったのか龍也は思う。

「だめか？」

「そうね……」

咲夜が少し悩む素振りを見せる。

「ちょっと待ってなさい」

そう言いながら音も無く咲夜は消える。

長距離を移動する時は時間を止めて移動するのであるつかと龍也は思う。

咲夜が戻ってくるまで暇なので美鈴と話すことにする。

「で、何かあったのか美鈴？」

「それがですね……」

美鈴が言葉を続けようとすると、

「お嬢様の許可が取れたわ」

「わひゃあ!？」

又、音も無く咲夜が現れる。

「何驚いてるの、美鈴」

「いえ、別に」

心臓に悪い現れ方だなと龍也は思った。

「図書館まで案内するから付いてきて」

「わかった」

そう言って龍也は咲夜の後を付いて行く。

相変わらず紅いなと龍也は思う。

これは吸血鬼の感性なのであろうか。

気になったので咲夜に聞いてみることにした。

「そこらじゅう紅いのはレミリアの趣味か？」

「ええ、お嬢様の趣味よ」

やっぱりかと龍也は思う。

まあ趣味は人それぞれであろう。

「そーいや、あれから使えそうな妖精メイド増えたか？」

「全然」

「そうか」

そう簡単には増えないようだ。

それにしてもと思う。

この広い館を咲夜一人で切り盛りしているのはとても凄い事だ。

よく続くなと龍也は思う。

「そつだ、執事やってみない？」

「は？」

「だから執事よ執事」

そう言われて想像してみる。

自分の執事姿を。

……似合わないと言う結論に達した。

「パス。似合わないしガラじゃない」

「あら、残念」

そう言ったわりには残念がってない。

元々駄目もとで頼んだからであろう。

そうこうしているうちに目的の場所に着く。

「じいよ」

そう言つて咲夜が扉を開ける。

そして中に入る。

「広……」

その中は庄巻の一言。

非常に広い。

それこそ端が見えないくらいに。

これを見たら学校の図書室など霞んでしまっただろう。

「逸れない様にね」

「あ、ああ」

咲夜の後に付いて行きながら龍也は周りを見渡す。

本、本、本。

本だらけ。

背表紙の色や雰囲気から様々な本があることがわかる。

「あ、そうそう」

咲夜に声を掛けられたのでそちらに意識を向ける。

「この管理人であるパチュリー様はお嬢様の御友人。くれぐれも失礼の無いようにね」

「ああ、わかった」

どんな人物なのだろうと考えながら咲夜の後を付いて行く。

どれくらい歩いたであろう。

そう思っていると何やら人影が見える。

誰だろうと龍也が思っていると咲夜がその人物に声を掛ける。

「パチュリー様」

どうやらその人物がパチュリーのようだ。

紫色の長い髪、変った帽子、そしてかなりゆったりした服を着ている。

文学少女な印象を龍也は受けた。

「何？」

パチュリーが読んでいた本から目を外して咲夜に目を向ける。

その過程で龍也の存在に気付く。

「誰？」

「お客様です」

「客？」

「正確に言うところの図書館にだかな」

そしてパチュリーは龍也の方に向き直る。

「私はパチュリー・ノーレッジ。貴方は？」

「俺は四神龍也だ」

「ああ、貴方がレミィの言ってた……」

レミイ？ と龍也が思っていると咲夜がお嬢様の事ですと教えてくれた。

愛称かと龍也は思った。

「咲夜、もう行ってもいいわ」

「畏まりました」

そう言つて咲夜は音も無く消えた。

「それで、私の図書館に何の用かしら？」

「歴史書とかそう言った類の物を見せて欲しいんだ」

その答えが意外だったのか、パチュリーは驚いた顔をする。

「歴史書ねえ……………」

少し考える素振りを見せる。

「無いのか？」

「勿論あるわよ」

ちゃんとあるようだ。

龍也はそのことに安心する。

「見せてもいいけど……………条件があるわ」

「条件？」

元々ただで見せてくれるとは思ってなかったので別にこれは構わなかった。

「最近本の数が増えてきてね、その整理を手伝って欲しいのよ」

「それくらいなら構わないけど……」

「不満？」

「不満と言うか、俺一人でこの図書館に繰り出したら迷子になると思うぞ」

「それなら大丈夫よ、貴方は小悪魔の手伝いをすればいいから」

「小悪魔？」

龍也の疑問を余所にパチュリーは小悪魔なる人物を呼ぶ。

「呼びましたか、パチュリー様」

黒を基調とした服、紅い髪を少女が現れた。

見れば悪魔っぽい羽も生えている。

「本の整理、この龍也に手伝わせるから好きに使って」

そう言うとまた本に視線を戻す。

小悪魔は龍也に視線を向ける。

「えーと……よろしくお願ひしますね、龍也さん」

「よろしく」

小悪魔の手伝いと言っても意外と簡単なものである。

まず、本を大量に運ぶ。

これは男手があつた方がいいだろう。

事実、龍也なら小悪魔の倍以上の数の本を運べる。

後は指定の場所まで持っていったらそれらの本をあいっえお順に若しくはA B C D順に本棚に入れるだけ。

まあ、この本棚は非常に大きいのだが。

幸いこれなら龍也にもできる。

そんなことを繰り返していると下の方から声が掛かる。

「いらっしやい、龍也」

「レミリアか」

地面に着地してレミリアに向き直る。

「何やってるの?」

「ああ、パチユリーと小悪魔の手伝いかな」

「手伝い?」

「そ。ここにある本を読ませる代わりに自分達の手伝いしろってさ」

「ふーん」

あまり興味は無さそうだ。

「で、龍也」

「ん？」

「私のものにならない？」

「前にも言ったる、断る」

「あら、残念」

この答えはある程度予想していたのでクスクス笑いながらそう言った。

だがその目はいつかは自分の物にしてやると語っていたが。

「それと龍也、紅魔館は好きに使っていいわ」

「いいのか？」

「ええ。食堂や浴場の場所が分からなかったら咲夜かその辺の妖精メイドに聞けばいいから」

「咲夜は兎も角妖精メイドに案内ができるのか？」

「……」

レミリアも言ってからこれは流石に無理があるかも思った。

「パチエは……基本ここに引きこもりだし……小悪魔辺りに聞きなさい」

「わかった」

その後軽く雑談しているとレミリアは図書館から出て行った。

そして龍也も作業を再開する。

「今日はこの辺でいいわよ」

次の本を持っていきこうしたらパチュリーにそう言われた。

「いいのか？」

「ええ。それと咲夜が持ってきた夕食あるけど……食べる？」

「食べる」

パチュリーが指をさした方へ向かう。

ステーキとご飯とワインと豪華な食事だ。

こっちは飲酒関する法律など無いので龍也は普通にワインを飲む。

美味しいなと龍也は思う。

かなり高い物なのだろう。

そして肉も食べる。

高級レストランなどには入ったことは龍也にはないが、そこで出される肉はこういう物なんだろうと龍也は思う。

そして食事を済まし、パチュリーの方に向かう。

「食った物ってどこにおいて置けばいいんだ？」

「そのままにして置いていいわ。咲夜が回収してくるから」

そう言われてそちらを見てみると食器などは無くなっていた。

仕事が早いなと龍也は思う。

「それと歴史書だったわね。小悪魔に案内させるから」

「ご案内します」

「ありがとう」

そして小悪魔の後を付いていく。

しばらく歩いて行くと目的の場所に辿り着く。

「こちらになります」

本の整理をしていたので想像が付いたが、龍也は本の量に圧巻される。

少なくとも万は超えている。

目的の本を探すだけでも一苦労である。

「それでは、何かありましたら呼んでくださいね」

「ああ、ありがとう」

そして小悪魔はその場を離れて行く。

「さて、頑張るか」

そう言つて飛び上がり、端の方から探していく。

一冊一冊確認しながら探していくとある本を見つける。

「これ……小学校の教科書か？」

見つけたの小学校の教科書。

表紙などは見たことないものだったので、自分の住んでいた地方とは別のなのか。それとも昔のものなのか。

それでも龍也は懐かしい気分になった。

教科書のページを捲つて読んでいく。

そして自分の目的を思い出す。

「これを見に来たんじゃないよな……」

そう言いながら本を元あつた場所に戻す。

そして再び本を探し始める。

探しているとまたある本を発見する。

それを手に取つてみる。

「これ……阿求の所にあつた本か」

阿求の家で見た本を発見する。

全然読めなかった本だが、ある事を思い出す。

「そーだ、ここ図書館なら辞書とかあるよな」

図書館と言っなら辞書などもある筈である。

それを見ながら解読していけばいいのではないだろうか。

そう思い、本を持って着地する。

周りを見渡して見ると机を発見する。

そこに本を置いて小悪魔を呼ぼうとする。

そうした時に学ランの裾を引っ張られる。

引っ張られた方を見ると子どもがいた。

金色の髪をして紅い瞳。

枝に宝石を吊るしたような羽を生やしている。

「えっと……誰？」

「私はフランドール・スカーレット」

そしてその少女が自己紹介をする。

「スカーレット?」

「私はレミリア・スカーレットの妹だよ」

そう言われて龍也はああと思う。

そう言われれば顔立ちとかがレミリアに似てる。

「それで、お兄ちゃんは誰?」

「俺は四神龍也だ」

そして龍也も名乗る。

「四神龍也……お兄ちゃんがお姉様の言っていた面白い人間?」

そう言われてレミリアの言動を思い出す。

自分の物になれと言われた。

「多分そうだと思うぜ」

「そっか、なら龍也」

「ん?」

「私と遊ば」

そう上目遣いで見られる。

まあ、別にいいかと龍也は思う。

「ああ、いいぞ」

「やったー!!」

そう嬉しそうな顔をする。

「お姉様が言ってた人間なら簡単に壊れたりしないよね」

そう言いながらフレンドールが腕を振り上げると炎の大剣が現れる。

「な!？」

その事に驚く龍也。

そして遊ぶとはそういう意味かと気付く。

「簡単に壊れちゃ……ヤだよ」

そして腕が振り下ろされる。

紅魔郷編EX

迫り来る炎の大剣を見た龍也は瞬間的に自身の力を変える。

朱雀の力へ。

そして二本の炎の剣を生み出す。

それで炎の大剣を受け止める。

とりあえず何とか均衡しているようだ。

「龍也も炎の剣を使うんだ」

そう言つて満面の笑顔を浮かべる。

「お揃いだね」

「そつだ………な!!」

そして二本の炎の剣を払つてフランドールを弾き飛ばす。

「わっ」

そして龍也はフランドールに肉迫して斬り掛かる。

フランドールは空中に移動して回避する。

龍也も空中に移動して追撃を掛ける。

そして炎の剣と炎の大剣で斬り結ぶ。

しばらくそうしていると、フランドールが後ろに下がって間合いを取る。

そして炎の大剣を大きく振りかぶる。

龍也は何をしてくるのか分かり、防御の体勢を取る。

フランドールが炎の大剣を振り下ろす。

龍也がそれを二本の炎の剣で受け止める。

均衡すると思われたが、

「ぐっ!!」

龍也が叩き落される。

そして本棚に激突し、いくつもの本棚を巻き込みながら飛んで行く。

かなりの量の本棚を巻き込んでようやく止まる。

今の衝撃で炎の剣が消失してしまったようだ、

「イチチチチ……」

起き上がるうしたところで、フランドールが炎の大剣を振りかぶっている

姿が見える。

それに気付いた龍也は後ろに転がり手を弾いてそこから離れる。

それと同時に龍也が居た所に炎の大剣が振り下ろされる。

それを確認した龍也は両手をフランドールに向けて火炎放射を放つ。

だが、簡単に避けられる。

そして龍也に向かって近づきながら再び炎の剣を振りかぶる。

龍也も両手を合わせて炎の大剣を生み出して振りかぶる。

そしてそれらが激突する。

龍也が押されるかと思われたが均衡していた。

「あは、凄い凄い」

楽しそうなフランドールに比べて龍也は歯を食いしばっている。

龍也の体からは青白い光が漏れ出している。

そう、霊力の開放による基本能力の大幅な強化。

それをしていけると言うのに互角である。

フランドールの顔からはまだまだまだ余裕が感じられる。

「おおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

「わっ」

龍也は更に靈力を開放してフランドールを弾き飛ばす。

開放した靈力の影響で散らばっていた本が舞う。

その本で互いの姿が認識できなくなる。

そして本が落下し姿を認識できる様になると、フランドールは弾幕を展開している様子が龍也の目に入った。

そそれが放たれると龍也は炎の大剣を二本の炎の剣にして弾幕を切り払っていく。

全ての弾幕を切り払った瞬間にフランドールが超スピードで肉迫する。

龍也がその事に気付いたと同時にフランドールが龍也の胴体に拳を叩き込む。

「がっ!?!」

血を吐きながら龍也が本棚を破壊しながら吹き飛んで行く。

やっと止まった時には炎の剣が消失していた。

何とか体を起こした時、上からフランドールが落下してくる。

龍也は横に飛び込んで回避する。

そしてフランドールの方を見るともう既に自分の間合いに入っていた。

咄嗟に龍也が腕を交差して防御の体勢をとる。

そのにフランドール拳が叩き込まれるのは同時であった。

「ぐっ!？」

予想以上の力に体勢を崩しそうになるが、足を踏ん張って何とか堪える。

そしてフランドールに向かって蹴りを放つ。

それは難なく回避されてしまう。

だが、龍也からフランドールは離れた。

龍也は腕に炎を纏わせて格闘戦を仕掛ける。

その攻撃を危なげながらもフランドールは回避していく。

その様子を見て龍也は疑問を覚える。

あれだけ強いのに何故あんな危なげなんだろうと。

そして一つの可能性が思い至る。

もしかして、こういった技術は低いのではないかと。

そんな事を考えながら拳を振るっていると炎を纏った腕を掴まれる。

「なっ!?!」

「これぐらいなら全然熱くないよ」

そう言っつてフランドールは龍也を空中に投げ飛ばす。

回転しながらも何とか体勢を立て直す。

吹き飛びながら龍也はフランドールの様子を見してみる。

するともう近くまで来ている。

かなりのスピードだ。

今のままでは翻弄されるだけだと龍也は思う。

そして自身の力を変える。

朱雀の力から白虎の力へと。

力の変換が完了したのと同時に両手をフランドールに向ける。

そして突風を放つ。

これフランドールにとって予想外だったのかモロに喰らいバランス

を崩して
少し吹き飛ばす。

そして龍也の姿を見ると変っていた。

瞳の色が翠色になり、腕と脚に風を纏う姿へと。

「へえー、炎だけじゃなくて風も操れるんだ」

その事にフランドールが感心していると龍也の姿が消える。

常人の目には見えないだろうが、フランドールには見えていた。

自身の背後に向けて裏拳を放つ。

そして裏拳と龍也の放った回し蹴りが激突する。

その瞬間フランドールが吹き飛ばす。

これにはフランドールも驚く。

何故フランドールが吹き飛ばんだかと言うと、フランドールの放った裏拳が激突

した場所は龍也が風を纏っていた場所であったからだ。

そのことを予測できなかった事も原因であろうが。

吹き飛んで体勢を立て直したフランドールが見たのは、自分に殴り掛かろうと

している龍也の姿である。

その拳に合わせる様にフランドールも拳を放つ。

そして二人の拳が激突する。

「ぐっ」

弾かれたのは龍也の方だ。

力と力の勝負ではフランドールの方に分があるようだ。

フランドールが追撃を行おうとするが龍也から突風が放たれ体勢を崩してしまい

中断を余儀なくされる。

そして龍也の方を見ると何かを感じたかのようにフランドールは回避行動をとる。

すると服の肩の部分が切れた。

もう一度龍也の方を見ると何やら腕を振るっている。

そしてそこから何かが飛んで来ている事をフランドールは認識する。

それらを回避しているとその正体がわかる。

風の刃だ。

龍也は風の刃をフランドールに向けて飛ばしている。

そのことを理解したフランドールは強めの弾幕を生み出す。

そしてそれらを一齐に発射する。

龍也の放った風の刃とフランドールの放った弾幕が激突する。

相殺されたかと思われたが、フランドールの放った弾幕は風の刃を破壊し突き進んでいく。

それを見た龍也は風の刃を放つのをやめ、回避行動をとる。

順調に回避していくと弾幕が止み始める。

不審に思い龍也はフランドールに視線を向ける。

「ッ!？」

そして驚愕する。

高密度で大量の弾幕が展開されていたからだ。

そんな龍也の驚愕をよそにその弾幕が発射される。

龍也は慌てて回避行動をとる。

一発、二発、三発とある程度までは普通に回避できる。

だが、数を増すごとに掠る弾幕が多くなる。

次第に弾幕の殆どが掠る事となり、龍也の体をどんどんと傷つけて

いく。

そして最後には回避できなくなる。

なので龍也は防御の体勢をとり堪えることにする。

最初のうちは腕や脚に纏っている風が弾幕を弾いていた。

だが、次第にその風は削れていく。

このままでは全ての弾幕を受けて戦闘不能になると龍也は思った。

そして自身の力を変える。

白虎から玄武へ。

力を変え終わった瞬間に弾幕が全て龍也に直撃する。

爆音が響く。

そして煙が晴れる。

「く……」

大きなダメージを受けたものの戦闘続行は可能なようだ。

防御の体勢を解いてフランドールの位置を探る。

すぐに見つかった。

炎の大剣を振りかぶっている。

それを見た龍也は迎撃も回避も間に合わないと判断する。

そして目の前に玄武の甲羅を生み出す。

玄武の甲羅と炎の大剣が激突し、激突音が発生する。

が、玄武の甲羅には傷一付いていなかった。

その事にフランドールは驚く。

再度炎の大剣を振り上げる。

そして炎の大剣を両手で持ち振り下ろす。

再び激突し、激突音が発生する。

それでも玄武の甲羅には傷一つ付いてはいなかった。

「凄く硬いねそれ。本気でやっても傷一つ付かないなんて」

玄武の甲羅ならばフランドール攻撃を何の問題なく防げる。

龍也はそう認識した。

「でも。邪魔だなそれ」

そう言ってフランドールは玄武の甲羅に右手の掌を向ける。

「壊れちゃえ」

そして、

「ギュっとしてドカーン」

フランドールが掌を握ると同時に玄武の甲羅が破壊される。

「なん……だと……」

龍也の思考が止まる。

何故あかも簡単に破壊されたのか理解できなかった。

「ちょっと硬かったけど……うん、やっぱり破壊できた」

そんなフランドールの呟きも龍也の耳には入らなかった。

そして龍也が再起動した時には、フランドールに顔を掴まれていた時であった。

そのまま龍也を投げ飛ばす。

龍也は一回転して見えない足場を作り、右手と両足を使って減速していく。

そうしているうちにフランドールは近づいて殴りかかるつもりとする。

龍也は再度、玄武の甲羅を生み出す。

フランドールの拳が玄武の甲羅に激突する。

「いったーい!!」

フランドールは若干涙目になりながら手を押さえる。

「壊れちゃえ!!」

先程と同じ動作で玄武の甲羅を破壊される。

これを見て龍也は先程の事が偶然でもまぐれでも無い事を理解する。

そして後ろに跳びながら多数の土の塊を生み出しフランドールに向かって撃ち出す。

フランドールはそれを体を傾けたりしながら回避していく。

その様子を見ながら龍也は斜め後ろ上空に飛ぶ。

それを見たフランドールは龍也を追う。

龍也は飛んでる最中に自身の右手を中心に土を生み出していく。

そしてそれは巨大な土で出来た拳となる。

それが出来たのと同時に龍也は体勢を変え、空中に足場を作りそれを蹴る。

龍也は一直線にフランドールに向かっていく。

それと同時に拳を振り上げる。

フランドールも龍也と同じタイミングで拳を振り上げる。

そして二つの拳は激突する。

「ぐっ!?!」

拳が崩壊したのは龍也のほうだ。

フランドールの拳が土でできた拳にめり込み、そこから放射状に輝が広がっていく。

そして土で出来た拳が崩れる。

その事態に龍也の動きが一瞬止まる。

その隙を付いてフランドールが龍也のわき腹に蹴りを叩き込む。

「がっ!?!」

それを受けて龍也は吹っ飛んで行く。

そして本棚に激突し、いくつもの本棚を崩壊させていく。

龍也が立ち上がった時には、フランドールは龍也の目の前に居た。

その事に龍也が気付いたと同時に拳が放たれる。

それを腕で受け止める龍也。

「あ、やっぱり龍也、硬くなってる」

殴った手ごたえからそんな感想を漏らすフランドール。

「じゃ、もうちょっと強くいくよ」

そして再度拳を放つ。

それを再び腕で受けた龍也は吹き飛び本棚に激突する。

だが、止まらず本棚を貫通する。

いづらか本棚を貫通した後、地面に足を着けて減速していく。

そして止まった頃にはもうフランドールが目の前まで迫って来ていた。

また拳を放ってくる。

それを何とか龍也は回避する。

そして龍也はフランドールの腕を掴む。

「え？」

そのまま龍也は土を生み出して、フランドールの腕と地面をくっ付ける。

そしてその場から離脱してフランドールとの距離を取る。

ある程度距離を取った所で土の塊を破壊して、フランドールは龍也を追う。

思っていたより早いなと龍也は思う。

だが、この距離ならギリギリ間に合うとも龍也は思った。

そして自身の力を変える。

玄武から青龍へ。

龍也は掌をフランドールに向けて水流を放つ。

「水!?!」

フランドールは大慌てで回避し、龍也から大きく距離を取る。

「え?!」

その事に龍也は疑問を覚える。

何故あんなに距離を取るのか。

「……あ」

そして気付く。

レミリア・スカーレットは吸血鬼。

その妹である、フランドール・スカーレットも吸血鬼。

吸血鬼の弱点は水。

今更ながらその事を思い出した。

早いうちから青龍の力を使っていればもう少し楽が出来たであろう。

後悔してももう遅いので、龍也は頭を切り替える。

龍也は大量の水の弾幕を生み出し、それをフランドール目掛けて放つ。

それを危なげながらもフランドールは全弾回避していく。

弾幕は当たらないかと龍也は判断し弾幕を放つのやめる。

そして二本の水の剣を生み出してフランドールに斬り掛かる。

振り下ろした斬撃は回避される。

更に斬撃を放つがそれも回避される。

同じ行為を何度も何度も繰り返す。

その中で龍也に隙が出来、フランドールは蹴りを放ち龍也を蹴り飛ばし

距離を取る。

「ぐっ!？」

ダメージの大きさに呻き声を上げるも、体勢を戻しながら水の剣を消す。

そして自身の両手を水で覆い、手を振るう。

すると爪先から水で出来た斬撃が飛び出し、フランドールに向かっていく。

それらを回避していくフランドール。

だが、そのうちの一つがフランドールに当りそうになる。

命中するかと思われたそれはフランドールに破壊される。

玄武の甲羅を破壊したように。

それを見た龍也は一つの結論を出す。

玄武の甲羅を破壊した技だと。

そしてこのままいつでも消耗するだけだと。

色々と考えを纏めないと突破口が開けそうにない。

そして龍也はフランドールより上の位置まで飛び上がる。

その位置まで付くと両手を掲げ巨大な水球を生み出していく。

フランドールはそれを見て若干怯えた表情になり後ずさる。

水球が満足いく大きさになると体を反らし、

「豪水球！！」

フランドール目掛けて振り下ろす。

慌ててその場から避難するフランドール。

それはフランドール当らず地面に激突する。

すると水球は破裂し、辺りに大量の水を撒き散らす。

飛び散った水の一つ一つにもそれ相応の攻撃力がある。

フランドールは更に大きく距離をとる。

その大量の水が龍也とフランドールの姿を見えなくする。

龍也は自身の力を青龍から白虎に変え、その場から離脱する。

「はあ、はあ、……はあ」

息を整えながら考えを纏めていく。

まずはフランドールの戦闘力。

パワーやスピード、技の破壊力と言った点は姉のレミリアを上回っている。

反面、戦闘技術などの点はレミリアより大きく下回っている。

次に玄武の甲羅を破壊した技。

あの技はまず相手に掌を向け、数秒した後、手を握ると対象物を破壊できる。

あれを自身の体に放たれると思うとゾッとする。

そして弱点たる水。

こちらが水の攻撃を放てばフランドールは全力で回避行動をとる。

そのまま当てることはまず不可能。

何か手を加えなければ当りはしないだろう。

そこまで考えると、

「見つけた」

背後から声を掛けられる。

そちらを見るとフランドールがいた。

「かくれんぼはお終いだね」

そう言っつて右手を見せる。

そこには悪魔の尻尾の様な物が握られている。

「それじゃ、続きを始めましょ」

すると悪魔の尻尾の様な物から炎が吹き出る。

そしてそれは剣の形をした物になる。

フランドールの炎の大剣はそれを媒介にした物だったのかと龍也は思う。

龍也が後ろに跳ぶのと同時にそれは振り下ろされる。

そして自身の力を白虎から青龍に変えて水弾を放つ。

フランドールは炎の大剣を振り回し、水弾を蒸発させていく。

「なっ!?!」

まさかそんな方法で迎撃してくるとは思わなかった。

だが、それは考えられたことだ。

火は水で消えるのと同時に水は火で蒸発する。

龍也の放った水弾よりフランドールの振るう炎の大剣の方が威力が大きいから出来る芸当である。

そしてフランドールが炎の大剣を振りかぶって肉迫して来る。

そして振り下ろされた炎の大剣を龍也は二本の水の剣を生み出して迎撃する。

「ぐっ……!?!」

水の剣が蒸発していく。

フランドールの炎の大剣はまるで衰えない。

ここでも威力の差が出てきた。

龍也は水の剣が消失しないよう再構成し続けているがこれではいかは消えてしまっだろう。

そう思った龍也はまず左手の水の剣を消す。

そして左手をフランドールに向ける。

するとフランドールは攻めるのを止め、大急ぎで龍也から距離を取る。

その事に龍也は一瞬疑問を覚えるが、すぐに理解する。

フランドールは龍也の放つ水を恐れてる。

だから常に炎の大剣を出したままにしているのだ。

龍也の放つ水を防げるように。

そして今のは防げないと判断したので距離を取った。

だが、水の攻撃をフランドールに当てるのは至難の業であろう。

遠距離から放てばあの炎の大剣で無効化されてしまっだろう。

それに玄武の甲羅を破壊した技もある。

そして龍也は賭けに出る事にした。

まず、龍也はフランドールに向けて水流を放つ。

フランドールは炎の大剣を盾にして防ぐ。

その瞬間大量の水蒸気が発生し、互いの姿が視認できなくなる。

そして龍也は空中に飛び上がる。

力を青龍から白虎に変えながら。

フランドールの方を見ると龍也と同じ様に飛び上げて来る。

そして自分と同じ高さまで来ると、全速力でフランドールに接近する。

その事に気付いたフランドールは炎の大剣では迎撃では間に合わないとい

判断する。

なので右手で龍也を突き刺そうとする。

龍也はそれをギリギリ回避でき、米神を掠るだけで終わる。

その瞬間フランドールの右手を左手で掴み、炎の大剣の鏢にあたる部分を

右手で掴む。

「力比べ？」

「まさか、悔しいが純粹な力じゃあ俺はお前に勝てないしな」

そしてフランドールは気付く。

「でも、この状態なら俺の攻撃を避けられも防げもしないだろ」

龍也の瞳の色が蒼色になっている事に。

そして、龍也の左手から水流が放たれる。

「うづうづうづううづう!!!」

フランドールに激痛が走り、呻き声を上げる。

そして龍也を蹴り飛ばす。

「がつ!?!」

血を吐きながら吹き飛ばされ、距離を開けてしまっても目的は果たせ
た。

フランドールの右腕が焼け爛れた様になっているからだ。

「これで、玄武の甲羅を破壊した技は使えなくなっただな」

そして龍也は自分の考えを語る。

「あの技、手を向けて対象を捕捉した後握るとその対象を問答無用
で破壊

できるんだろ?」

「でも、まだ左手が!!」

「その炎の大剣を使わないで俺の水を防げるのか？」

そう言いながら、龍也は自身の周りに大量の水で出来た弾幕を展開する。

「俺の予想通りなら、破壊できる対象は一度に一つ。違うか？」

「……」

フランドールは何も答えない。

それを龍也は凶星と判断し、水の弾幕を射出する。

それに気付いたフランドールは炎の大剣で迎撃していく。

同時に水蒸気が発生し、互いの姿を見えなくする。

そして全ての弾幕が射出され終わった後、自身の力を変える。

青龍から白虎へと。

力の変換が終わった瞬間、龍也は水蒸気の中目掛けて突っ込む。

フランドールの目には、水蒸気の中からいきなり現れたように映る。

「え？」

右手でフランドールの手首を掴み、背中が地面に向く様に体勢を変

えさせる。

「俺の勝ちだ」

龍也の左手には風の塊が生み出されていた。

「暴風玉ー!!」

そしてそれをフランドールの腹に叩き込む。

「ッ!?!」

そのまま龍也とフランドールは落ちて行く。

そしてフランドールは背中から地面に激突する。

その衝撃でクレーターが出来る。

龍也がフランドールの様子を見る。

どうやら、気絶しているようだ。

「ふう………勝てたあ」

「あ………」

「起きたか？」

フレンドールが目を覚ます。

机を並べられて作った簡易ベッドの上で寝ていたようだ。

龍也はフレンドールの上に掛けていた学ランを取って羽織る。

「で、何でいきなり俺と戦おうとしたんだ？」

「うん………」

そしてフレンドールは理由を話し出す。

自分の力の事。

ここでの生活の事。

他にも色々。

龍也はてっきり姉を自分に取られまいしてこんな事をしたのか
思ったが違ったようだ。

要するに誰も遊んでくれずに寂しかった。

みんな自分を恐れている。

霊夢と魔理沙は違ったし、弹幕ごっこもしてくれた。

それでも何かモヤモヤが晴れなかった。

そんな中、図書館に来たら龍也を発見する。

龍也の名前を聞いて、姉が言っていた面白い人間だと確信する。

なら結構本気で遊んでも大丈夫だと思っただらしい。

それを聞いてあれで本気でなかったのかと龍也は思った。

そしてあれが遊びなのかとも思った。

何とも未恐ろしいことである。

青龍の力が使えなければ死んでいたのではないだろうか。

まあ兎に角、龍也はフランドールが色々と悩んでいる事はわかった。

「あんまり俺が言えた義理じゃねえが、もうちょっと周りと接する
ように

してみたらどうだ？」

「え？」

「ま、お前の中に抱えている物は誰かと接して、話したり、

笑ったり、泣いたり、怒ったりしてれば晴れると思うぞ」

そう言いながら自身の幼少期を思い出してみる。

基本家に帰れば一人。

寂しい思いもしたが、幸い金はあった。

それで、ゲームや漫画などの娯楽品を買ったりしていたので寂しさなどは紛れた。

そのおかげで色々と染まったりはしたが。

誰かと接すると言う事も考えた事も考えたが、親が親だったので今

一人が

信用出来なかった。

それに外の世界では騙し騙されが当たり前。

裏切り裏切られが当たり前。

そんな事を放送しているニュースを幼少期から見てきたせいか友達などを

作るうとは思わなかった。

腹の探り合いだけの人間関係は疲れるだけという思いもあったが。

そんな外の世界と比べて幻想郷はそんな事は無いように思える。

自分が今まで会った人物はそうだと龍也は思っている。

外の世界で見た目が濁った者は幻想郷で見なかったと言う理由もあるが。

「でも……」

「あ、そっか。お前力のコントロールが全然できないんだっただか」

引き籠もりが長く、あまり周りと接してこなかったせいか、
フレンドールは力のコントロールが苦手らしい。

少なくとも一般人なら軽く死んでしまっくららしい。

「ならば、最初は俺とかレミリアとか咲夜とか美鈴とか魔理沙とか
霊夢辺りで慣れていけばいいんじゃないか？」

「え？」

「力加減なんてちょっとづつ慣れていけばいいさ」

「でも……」

「恥ずかしいのか？　ならば、レミリアとだけでももっと接して
いけばいいさ。聞いたところ、殆どレミリアから会いに行ってるんだろ。
偶にはお前から会いに行ってみる。同じ所に住んでいて姉妹なんだか
ら遠慮するな」

「……」

まだ何か迷っているようだ。

「待つてるだけじゃ何も変わらないぜ。ちょっと勇氣出して頑張ってみる」

「……うん!! 頑張ってみる!!」

何か吹っ切れたようだ。

もしかして、フランドールに必要なだったのは、背中を押してやることだったのかもしれない。

「あ、後我慢することも覚える事」

フランドールは若干癩癩持ちのようなので、龍也はこの事も付け加えておく事にした。

「うん!!」

そしてフランドールが笑顔を見せる。

それに釣られて龍也も笑顔になる。

二人で笑顔を見せ合っていると、

「綺麗に纏まったところ、悪いんだけど……」

不意に後ろから声が掛かる。

龍也とフランドールはゆっくりと後ろを振り返る。

そこには非常に怒っているパチュリーが居た。

「あ、あのパチュリー……」

「どうして私の図書館がこんなに滅茶苦茶になってるのかしら？」

そう言われて龍也は周りを見渡す。

破壊された本棚。

倒れた本棚。

散らばった本。

それが無数に見てとれる。

おまけにすぐ近くにクレーターもある。

これらの被害はこの図書館にとっては、ほんの「ごく一部」である。

だが、パチュリーとしては許せるものではない。

龍也は自分よりパチュリーとの付き合いがあるフランドールに助けを求めようとすが、

「おい……」

龍也の背中に隠れていた。

ふと、威圧感が強くなった。

威圧感が強くなった方を見ると、パチュリーの体中から魔力が漏れ出して
いる。

これはマズイと龍也は思い一歩後ろに下がる。

フランドールは龍也の陰に隠れながら逃げようとする。

それに気付いた龍也がフランドールの羽を掴んで止める。

フランドールの羽は掴みやすい形状をしているので楽に掴めた。

「あつ」

「何一人だけ逃げようとしてんだよ」

「私、右腕が痛いからこれ以上は……」

「俺なんて全身が痛えよ」

そんな風に口喧嘩していると、パチュリーが詠唱を唱え始める。

それに気付いた龍也とフランドールはビクっとなる。

そして詠唱が終わると、龍也とフランドールの二人が光に包まれる。

光が晴れると二人の傷は癒えていた。

そしてパチュリーが口を開く。

「見ての通り私は傷も癒せるし、体力も回復させることができる」
そして龍也とフランドールを絶望に叩き込む言葉を紡ぐ。

「貴方達が破壊した部分を直すまで、寝かせないから」

放浪編 その7

「ちょっと釘を取ってくれ」

「はい」

そう言ってフランドールが龍也に釘を渡す。

「サンキュ」

そう言った後、木に釘を打ち込んでいく。

何をしているかと言うと本棚を作っているのである。

作っても作っても終わりが見えない。

龍也は一週間ほぼ不眠不休で働き続けている。

疲れてきてもパチュリーが回復させるので眠れない。

肉体的な疲労は無いが精神的な疲労はかなり溜まっている。

龍也はもう眠りたかった。

だが、それは許されなかった。

常にパチュリーが監視しているからだ。

パチュリーも眠っていないなかったので、そのことが気になっ龍也が

大丈夫なのかと尋ねてみた。

パチュリー曰く魔女だから平気との事。

魔女って凄いなと龍也は思った。

「ふー、完成」

ようやく作っていた本棚が完成した。

一息吐いていると、

「おーい、木持ってきたぜ」

魔理沙が木を持ってきた。

何故、魔理沙がいるかというと、作業を始めて一日目の時、
ここの図書館に尋ねて来たからだ。

自分達だけではいつになったら終わるの分からなかったので、
龍也は来ていた魔理沙に仕事の依頼をした。

おかげで少し懐が痛んだのだが。

「そこに置いといてくれ。あ、本棚できたから持ってってくれ」

「了解したぜ」

そう言って筭と本棚をロープで繋いで持っていった。

「よし、次作るか」

それぞれが役割分担をしながら作業を進めている。

龍也が本棚を作る。

魔理沙が木を持ってきて、出来た本棚を運んでいく。

フランドールが散らばった本を集めて、龍也のサポートをする。

何故フランドールが龍也のサポートを兼ねているかと言っと、単純に龍也に懐いているからだ。

龍也はフランドールに懐かれたのは戦った事が原因かと思っている。

そして、

「パチュリー、この本はどこに持って行けばいいのかしら？」

アリスがフランドールの持ってきた本を並び替えて、指定の場所まで持っていく。

何故アリスまでいるかと言っと魔理沙が連れて来たからだ。

このままではいつになったら終わるのかわからんと魔理沙が言い、アリスを助っ人として連れて来た。

という経緯があったからだ。

アリスもアリスでここの図書館に興味があったのでスンナリここに

連れて来れたと魔理沙が言っていた。

アリスもそうだが、アリスの人形にも非常に助けられている。

アリスの人形は一度命令を出せば命令通りに動くとい特徴がある。

しかもある程度は自分で考えることができる。

これで全体のサポートしてくれている。

それを聞いた龍也は戦闘時にも使えるんじゃないかと聞いたが、それは無理との事。

そこまで複雑な事はできないらしい。

なので戦闘時は自分で操った方がいい言っていた。

「それは……雑学関連ね。そっちに行って左側の本棚23個目の所よ」

そう言いながらパチュリーが指をさす。

「わかったわ」

そう言いながら何体かの人形を連れて、指定の場所まで持って行った。

「さて、俺も続きをやるか」

そう言って金槌を取ろうとしたが無い。

どこにいったかと探してみると妖精メイドを発見する。

それを見た龍也は自身の力を変える。

玄武の力へと。

そして土の塊を生み出して投げつける。

それは見事妖精メイドに命中し、妖精メイドから何かが落ちる。

龍也は近づいてそれを拾う。

拾った物は龍也が探していた金槌であった。

やっぱりかと龍也は思う。

この妖精メイド達も最初は手伝ってくれた。

だが、途中から飽きたのか遊びだしたりした。

龍也もそこまではよかった。

だが、しまいには金槌を隠したり本を隠したり釘を隠したりと悪戯をし始めた。

なので龍也は妖精メイドを見つけたら土の塊を投げつけるようにしていた。

「はあ、さっさと続きしよ」

そして夕方になった頃。

「本と本棚はこれで終わったー」

とりあえず本と本棚の方は終わったようだ。

「で、この穴どーするんだ？」

魔理沙がクレーターを指差しながら尋ねる。

「じじする」

そう言つて龍也は自身の力を玄武の力へと変える。

そして土を生み出して穴を埋めていく。

「おー、便利だな」

魔理沙がそんな感想を漏らす。

「さて、後はここに……大理石を埋めるだけだな」

そう言っていると咲夜がカートに大理石を乗つけて現れた。

あのカートも幻想入りしたのかなと龍也は思った。

後は全員で手分けをして大理石を埋めていく。

そして大理石も埋め終わる。

「あー、やっと終わった」

龍也が体を伸ばし始める。

「お疲れ様」

アリスが龍也を労る。

「あー、私も疲れたぜ」

魔理沙も体を伸ばしながらそう言う。

「よかったじゃないの、仕事ができてる。龍也が初めてのお客さんだったんじゃないの？」

魔理沙の店、霧雨魔法店は魔法の森の奥地の方にある。

何でも屋なのだが、いかせん場所が場所だ。

人里の人間はそこまで行けない。

妖怪の客なんてのも来ない。

なので客足は自然と途絶える。

後は外出している魔理沙を捕まえる事なのだが、これまた普通の人間が行けない場所に行っている事が多いのだ。

龍也はどうやって生活しているのか気になって聞いてみると、本人曰く

拾ったガラクタを霖之助に売ってお金にしたり、茸などの山菜を取ったり

して生活しているとの事。

それを聞いてアリスは呆れていた。

ちなみにアリスは人里で定期的に人形劇をしてお金を稼いでるとの事。

「さて、終わったし寝るかな」

「その前に風呂に入ったらどうだ？」

「あー」

魔理沙にそう言われて気付く。

自分が一週間は風呂に入っていない事に。

ちなみに一週間、魔理沙もアリスも泊り込みだったが風呂も睡眠もとっている。

フレンドールもそうだったが。

フレンドールは寝ていても龍也が作業を続けていたのでパチュリーはその事に何も言わなかった。

それと、吸血鬼は水が苦手なのに風呂に入れるのかと尋ねてみたら、吸血鬼が苦手なのは流水、つまり流れる水であって、それ以外は弱点にはならないと返さる。

それを聞いて龍也はそう言うものなのかと思った。

「で、風呂ってどこだ？」

「私が案内するわ」

音も無く咲夜が現れる。

「龍也が風呂に入ってる間は私等はどうしてればいいんだ？」

「貴女達も浴場に行ってなさい。龍也は貴女達に案内した場所とは別の浴場に案内するから」

どうやらこの紅魔館には浴場が幾つかあるようだ。

これだけ広いなら当たり前かもしれないが。

「じゃ、私等も行こうぜ」

魔理沙が女性陣を引き連れて浴場に向かっていった。

パチュリーはまだ図書館に居ると言ったが、フランドールにせがまれたのと魔理沙の強引な説得でしかなく付いて行く事になる。

アリスもやれやれと言った顔をしながら付いて行く。

「それじゃ、案内するわ」

「ああ、よろしく頼む」

そして龍也は咲夜の後を付いて行く。

数十分程歩くと、

「いじよ」

浴場に付く。

「それと貴方の服などは籠に入れておいて」

「ああ、わかった」

「それと換えの服は後で持ってくるから」

「悪いな」

「構わないわ。お嬢様から貴方にはそれ相応の持て成しをしると仰せつかっているし」

貴方が不快に思わない程度にねと付け加えられる。

持て成せと言われているのに咲夜の口調が普段と同じなのもそういう理由なのだろう。

変に畏まった口調や態度をとられても龍也は変に思うだろう。

メイドとして接されるよりも咲夜として接された方が龍也も気が楽である。

そういうしているうちに咲夜が消える。

龍也は脱衣所に入り服を脱いで浴場に入る。

「おお」

西洋の宮殿にあるような浴場だ。

ライオンの石像の口からお湯が流れている。

ちなみにここは一面紅という事は無かった。

そして体を洗って風呂に浸かる。

「ふうー」

いい湯だなと龍也は思う。

こんな豪華な浴場に入る事はないと思っていたので何か得した気分になった。

あまりに気持ちよかったので龍也はウトウトし始める。

そして、

「ウボハア!?!」

溺れ掛けた。

「ゲホ、ゲホゲホ!!」

鼻にお湯が入ったのであろうか。

苦しそうだ。

だがそのおかげか、目がかなり覚めたようだ。

そして、また暫く浸かった後上がることにした。

脱衣所に戻って着替える。

下着はトランク型だったので安心する。

そして着替えていく。

「これ……正装とそういうのか？」

今の龍也の服装はタキシードに蝶ネクタイと言ったものである。

考えても仕方がないと思い脱衣所を出る。

「あら、意外と似合っているじゃない」

そう咲夜が声を掛ける。

「何でこれなんだ？」

「しかたないじゃない、それしか男物の服が無いんだから」

「どうやらこれしか無いらしい。」

服を借りているいる立場なので、龍也はこれ以上文句は言えない。

「はー」

そう言っつて咲夜が龍也の何かを手渡してくる。

「俺のサイフ？」

「ズボンのポケットに入ってたままだったわよ」

そう言われて取り出すのを忘れていたなと思い出す。

「ありがとう」

そしてサイフをポケットにしまう。

「それじゃ、食堂に案内するわ」

「食堂？」

「ええ、お腹空いてるでしょ」

そう言われてみると空腹感がある。

そして咲夜の後を付いて行く。

歩いて行くと大きな扉の前に着く。

そこを開けると、

「広」

とても大きな部屋だった。

「食べ物好きなものを取って食べてちょうだい」

バイキング形式のようだ。

この館は大所帯なのでこれが基本なのかもしれない。

「それじゃ、私はまだ準備があるからこれで」

そう言っつて音もなく咲夜は消える。

龍也は大きめな皿を取って料理を乗っけていく。

肉類を中心に。

そしてある程度乗っけると、近くのテーブルにまで行って食事を取る。

やっぱり美味いと思つて龍也は思う。

ここでの食事は毎日高級レストランで食べているようなものである。

そう思いながら食事を進めていると、

「よっ」

声が掛かる。

「魔理沙か」

魔理沙が龍也の対面の位置に座る。

「お前もここで食べていたのか」

「ああ、こついつのを食べる機会は滅多にないからな」

そう言った後、龍也を見る。

「なんだ、随分畏まった格好をしてるじゃないか」

「しかたないだろ、男物の服がこれしかここには無いんだってさ」

「そうなのか」

「そうなの。そついやお前はいつもと同じ服装だな」

「私は家から換えの服を持ってきてたからな」

「へー」

そして雑談しながら食事を進めていく。

「貴女はもう少し食事を上品に取れないのかしら？」

近くにアリスが料理を持って立っていた。

「アリスもここで食べていたのか」

「ええ、せつかくだしね」

そう言って龍也の隣に座り、龍也を見る。

「あら、似合ってるじゃない」

「そうか？」

そして三人で雑談しながら食事を進めていく。

アリスは都会派魔法使いを自称しているからか、食事のしかたは上品である。

対して魔理沙は龍也に近い食事のしかたである。

「と、無くなったか」

龍也は乗っていた量を全部食べてしまったので、追加を持って来よう

席を立つ。

適当に料理を乗っていると、何やら楽しそうに会話をしているレミリアとフランドールを発見する。

頑張ってるみたいだなと龍也は思った。

邪魔したら悪いのでそっとしておいた。

「ふー、食った食った」

龍也の腹も大分膨れたようだ。

「うー、食べ過ぎたぜ」

「貴女は少し食い意地が張り過ぎてるわよ」

ダウンしている魔理沙の様子を見ながらアリスがそう漏らす。

龍也は魔理沙の介抱をアリスに任せて龍也は寝ることにした。

紅魔館の部屋を使っていいのか咲夜に聞こうと探していると、

「あら、龍也」

レミリアから声が掛かる。

「レミリア」

「どう、食事美味しかった？」

「ああ、美味かったよ」

「それはよかったわ」

「あ、それとそろそろ寝たいんだけど、この館の部屋を使ってもいいの？」

「ええ、後で咲夜に案内させるわ」

べつやら泊まっていってもいいようだ。

「それと」

「ん？」

「フランの事……ありがとう」

レミリアにそうお礼を言われた。

そういえばと龍也は思いだす。

何でもフランドールを地下に幽閉していたのはレミリアだと言っ。

情緒不安定でフランドールは一度火が付くと再現無く暴れまわるとの事。

それでしかたく幽閉していたとの事。

その負い目もあってかレミアアもフランドールの接し方に悩んでいたようだ。

龍也はフランドールが情緒不安定と聞いて外の世界の事を思い出してみる。

龍也のフランドールに抱いた印象はせいぜい物に当たったり、人に当たったりする程度。

外の世界では、力の差を抜いたらフランドールより危険な奴がゴロゴロ
いるぞといった事は話したらみんな何とも言えない表情していた。

「気にすんな」

「そう……。それで、明日はどうするの?」

「ああ、幻想郷中を周ってみるつもりだけど」

そろそろ出ないとズルズルと先延ばしになってしまいそうだと言った龍也は思った。

なので、明日出ようと思った。

「えー、行っちゃあの龍也」

話を聞いていたのかフレンドールがその事を龍也に尋ねてくる。

「そう言つなよ、元々そのつもりだったんだしさ」

「うー」

「また、そのうち来るから……な」

「……わかった、約束だからね」

「ああ」

フレンドールは何とか納得したようだ。

「さて、咲夜いる？」

話が纏まったところでレミリアが咲夜を呼ぶ。

「……」

音も無く現れる咲夜。

「龍也を部屋に案内して」

「畏まりました」

そして龍也は咲夜の後について行く。

しばらく歩いて行くと部屋の前に着く。

「じいよ」

そう言つて咲夜が扉を開ける。

部屋の中は廊下などと違い一面紅という訳では無かった。

一通り部屋の中を咲夜に説明される。

そして咲夜が出て行った後、来ていた上着を椅子に掛け、蝶ネクタイを

外し、ワイシャツのボタンを外してベットに倒れこむ。

龍也は今夜はよく眠れそうだと思ひながら瞼を閉じて眠りに付く。

放浪編 その8

「ん……」

龍也は目を覚まして辺りを見渡す。

その後、自分の格好を見る。

「ああ」

そして思い出す。

自分は紅魔館に泊まっていたのだと。

ベッドから出て少しの間ボートしていると扉がノックされる。

「はい」

そう返事をすると思扉が開かれる。

咲夜であった。

「おはよう」

「おはよう」

二人は挨拶を交わす。

「はい、これ」

そして咲夜から包みを渡される。

何だろうと龍也は思いながら、包みを近くにあったテーブルに置き、中を開く。

「俺の学ラン」

その中には龍也が来ていた学ランが入ってあった。

広げてみると破れた部分が綺麗に直っていた。

「咲夜が？」

「ええ、あまりにも酷かったから縫っておいたわ」

どうやら咲夜が縫って置いてくれたようだ。

「ありがとな」

「別にかまわないわ」

咲夜はそれくらいどうってことないと言った表情で返す。

「着替え終わった物はそこに置いておいて」

そう言って近くにある椅子は指す。

「わかった」

「それで、食事はどうするの？」

「んー……食べてく」

「そう。なら和食と洋食と中華、どれがいい？」

「んー……和食で」

「わかったわ。食堂まで案内した方がいい？」

「いや、大丈夫だ」

「そう。貴方が来る頃にはもう食べれるようにしておくから」

そう言った後、咲夜が音も無く消える。

もしかしてこれから作るのだろうか。

咲夜の発言からはすでに下拵えなどは済ませているように感じられる。

だが、少しゆっくり行った方がいいかなと龍也は思った。

あまり急いで行くのもあれであろう。

そう思いながら龍也は着替え始める。

着替えを済ませて龍也は食堂に辿り着いた。

そして食堂で出されていた料理を食べ始める。

この館の食事はやはり美味しいなと龍也は思う。

半分以上食べた後、今更ながら気付く。

紅魔館のような西洋風の屋敷で和食はかなりシユールではないかと。

龍也自身、和食は好きであるがこれは無いと思った。

とは言っても今更洋食に変えてもらうのは非常に心苦しい行為であ

ろっ。

次からは気を付ける事にしようと言は思った。

「おかわりは？」

「いゑ」

まあ今は鱧腹食べる事にしようと言は思った。

食事を済まして少し腹ごなしをした後、気になった事を咲夜に尋ねてみた。

「そーいや、魔理沙とアリスは？」

「魔理沙はまだ寝てるわ。アリスはパチュリー様の所ね」

魔法使い同士で何か話す事があるのだろう。

方向性は違つようだが、話せばお互い刺激になるのである。

龍也はそう思った。

「レミリアとフランドールは？」

「お二人とも就寝中です」

吸血鬼だからかもう寝ているようだ。

基本的に夜行性のようなので当然の事なのである。

「貴方はどうするの？」

「そうだな……そろそろ出発しようと思つ」

「わかったわ、門まで案内するわ」

そう言つて咲夜が歩き出す。

龍也はその後に付いて行く。

「じゃ、またな」

そう言って、龍也は出発しよつとする。

「待って」

そうしたところ、咲夜に呼び止められる。

「どうした？」

「お嬢様からこれを貴方に渡すように言われていたの」

そう言つて咲夜は持つていた物を龍也に手渡す。

「これは……」

龍也は渡された物を見る。

「懐中時計か」

それは紅い色をした懐中時計であつた。

先の方には紅い鎖が付いている。

それなりに長い。

表面には何やら紋様が刻まれている。

この館の家紋か何かであろうか。

見ただけでかなり高価な物であるとわかる。

中を開けてみるとキッチンと針が時刻を刻んでいた。

「お嬢様がそれを貴方にと」

龍也が疑問に思っていると咲夜が答えてくれた。

「何でこれを俺に？」

こんな高価な物を貰う理由が龍也にはわからなかった。

「妹様が貴方の腕時計を壊してしまったお詫びに、このことです」

「ああ」

そう言われてフランドールに腕時計を壊された事を思い出す。

戦ってる時に壊されたのだろう。

龍也も戦いが終わった後に気付いた。

元々それほど高い時計でもなかったし、フランドールも謝ってくれたので気にしていなかった。

それに腕時計も完膚なきまでに壊されたと言う訳ではなかった。

中には無傷の部品もあったのでバラして財布の中に入れておいた。

そのうち香霖堂で売り払おうと龍也は思っている。

ダメだった部分は破棄したが。

「本当に貰ってもいいのか？」

「ええ、お嬢様もそれを望んでいるわ」

そこまで言われたら貰わない方が悪いであろう。

そう思いながら龍也は咲夜に背を向ける。

少しベルト外して、ベルトに鎖を巻き付ける。

そしてもう一度ベルトを付ける。

調度右ポケットに懐中時計が入る位置だ。

「後、それは非常に頑丈にできているのでそうそうには壊れないし、傷一つ付かないとの事です」

「へー」

龍也はそう言われて懐中時計を取り出しす。

そして触ってみる、

触ってもよくわからない。

「オリハルコンみたいな物で出来てるのかな？」

龍也はそう言葉を漏らす。

「お嬢様はかなり自信有り気な様子でそれを貴方に渡せと仰られていたので、オリハルコンより頑丈な物であると思っわ」

「あるの！？ オリハルコン！？」

思わず口にしてしまったが、龍也は本当にあるとは思わなかった。

ゲームや漫画などの空想の物だと思っていたからだ。

「あるわよ、オリハルコン」

咲夜がそう返す。

そうなのかと龍也は思った。

どんな金属であるかわからないが、霖之助に辺りに聞けばわかるであろう。

そして龍也は気持ちを切り替える。

「それじゃ、またな」

「ええ、また来なさい。いつでも歓迎するわ」

そして門を出ると美鈴の姿を発見する。

「あ、起きてたんだ。珍しい」

「そんな起きてる方が珍しいみたいない方しなさいよー」

美鈴は手を振りながら抗議してくる。

「あれ、どこかに行かれるんですか？」

「ああ、幻想郷中を回ってみようと思ってたからな」

元々そう言う目的であったし、これ以上長居するのもあれだしな

と続ける。

「そうですね……また、いらしてくださいね」

「ああ、またな」

そして龍也は歩き出す。

「あ」

紅魔館が見えなくなった所まで歩いて気付く。

まだ、本を読んでいないという事を。

とは言っても今更戻るのもあれだ。

格好悪すぎる。

「また今度にするか」

そして再び歩き出す。

紅魔館を出て幾日か過ぎる。

幻想郷でのサバイバル生活は始めてであったが、中々大変であった。

まず、食べ物。

茸を食べようと思ったが、どれに毒があるかわからないので却下する事になった。

なので木の実を取ったり、川などで魚を見つけて取ったりした。

また、寝る時も大変であった。

焚き火を付けたままウトウトとしていたら妖怪に襲われたのである。

すぐに振り返りにしたが普通に寝ることは不可能と判断し、玄武の力を使って簡易的な家を作ってそこで寝ることになっている。

そんなこんなだが、龍也なりに幻想郷での生活を楽しんでいる。

そんな事を思い返しながら歩いていると顔の前を何かがよぎる。

何かと思ってそれを目で追う。

「紅葉か……」

紅葉であった。

近くの木々を見てみると紅やら黄に染まっている。

「もう秋か……」

少し感慨に耽りながら足を進める。

すると何やら煙が上がっているのを発見する。

火事かと思ってそちらに近づいてみる。

すると落ち葉に火を付け、その中に何かを入れているのが確認できる。

近くには橙色に近い髪の色を少女が二人いた。

そのうち一人は変った帽子を被っている。

「何やってるんだ？」

龍也がその声を掛けると二人は龍也の存在に気付く。

「あ、人間こんな所にいるとは珍しい」

帽子を被ってる少女がそう言う。

「俺の事を人間って言うことは……お前達妖怪か？」

龍也そう尋ねる。

「違います。私達は神です」

帽子を被っていないほうの少女がそう答える。

「神……？」

そう言いながら龍也は二人を見る。

「信じられない？」

「いや、神様って二人もいるのかなって？」

「あー、そう言う事。そんな事を言うって事は貴方外来人？」

「ああ、そうだ」

「ふーん……」

そう言うって帽子を被っている少女がジロジロと龍也を見る。

「こんな所までこれるって事は力はあるみたいね」

そう言うってその少女は結論を出す。

「それで貴方の質問だけど、八百万の神々と言うくらいだから神様はわりと沢山いるよ」

「へー」

意外な真実だ。

神様は一人しかいないと龍也は思っていたからだ。

イメージとしては、白鬚を生やし、頭にワツカを付けた老人。

その辺りの事を幽香からもっと聞いておけばよかったと龍也は思った。

「あ、自己紹介がまだだったわね、私は秋穰子。豊穰の神よ」

帽子を被った少女が自己紹介をする。

「私は姉の秋静葉。紅葉の神です」

もう一人の少女も自己紹介をしてくれた。

「俺は四神龍也だ」

龍也もそう自己紹介をする。

そして三人で雑談をする。

何でもこの二人は普段は妖怪の山に住んでいるそうだ。

季節が秋になってテンションが上がってその辺を飛び回っている
そうだ。

秋の神様だからであろうか。

テンションが上がるのは。

それに秋が好きそうだ。

妖怪の山がどんな所か聞いてみると、天狗を中心としたコミュニティ
であるらしい。

他にも河童や神、その他妖怪達が住んでいるそうだ。

そのうち行ってみよと龍也は二人にそう言ったがそれは駄目だと
言われた。

何でも妖怪の山は人間入山禁止だそうだ。

天狗達から許可を貰えれば別だが、無理に押し入れれば天狗と敵対することになると言われた。

無闇に敵を作る必要は無いので、龍也は妖怪の山に入る事はやめる事にした。

「そろそろ焼けたかな？」

穰子が落ち葉に突っ込んでいた木の棒を取り出すと、その先には焼き芋が付いていた。

どうやら焼き芋を作っていたようだ。

「貴方も食べる？」

そう言いながら穰子は焼き芋を差し出す。

「いただきます」

それ受け取って食べる。

「……うまい」

焼き芋とはここまで美味しい物なかと感心する。

「でしょでしょー!」

龍也の感想を聞いて穰子のテンションが上がる。

「やっぱり秋はいいよね！！ 食欲、読書、スポーツなど秋の季節というものが沢山あって！！」

「それに秋には美味しい食べ物が沢山食べられますし」

やはりこの二人は秋が好きなのだろうと龍也は改めて思った。

焼き芋をうまいと言っただけでここまで喜ばれるとは思っていなかったからだ。

そして龍也は焼き芋を食べながら楽しく雑談を続けていった。

放浪編 その9

秋の神様である静葉と穰子の二人と別れて数日。

今日と今日とで龍也は自由気ままに幻想郷を回っている。

道中妖怪に襲われる事もあるが、それでも龍也は日々を楽しんでいる。

「ん？」

少し前の方に立て札らしき物を発見する。

何かと思い近づいてみる。

「えー、何々。『この先妖怪の山、人間立ち入り禁止。いいか、入るなよ。』

絶対入るなよ。絶対だからな』と書いてあるな」

立て札に書かれている文章を読んだ後、その先にある物を見る。

大きな山が見える。

あれが妖怪の山であろう。

しかし、と龍也は思う。

「この立て札……これは入ってくれと言っているのか？」

龍也はこの立て札では逆に入ってくれと言っているように聞こえる。
だがしかしと思う。

この前に会った秋の神様である静葉と穰子は無断で入れば天狗と敵
対する
事になると言われた。

龍也はあの二人が嘘を言うとは思えない。

それに今は妖怪の山に押し入らなければならぬ理由も無い。

余計な敵を作る気は無いので妖怪の山に入るのはやめる事にした。

「ま、この周囲を回るぐらいはいいだろ」

そして龍也は妖怪の山の回りを回ってみることにした。

妖怪の山の周囲を回っていると意外と広い事がわかる。

妖怪の山には多数の者達が生活しているらしいので当然と言えば当然であるのだが。

本格的に秋になってきたのか妖怪の山の木々の多数が紅葉を彩っている。

風が吹けば紅葉が舞う。

綺麗な光景である。

その光景を見ながら歩いていると、木々の間から何かが飛び出してくる。

丁度、龍也の立っている場所に着地しようとして来たので、龍也は後ろに跳んで回避する。

そして龍也の居た場所に着地し、土煙舞う。

そして土煙が晴れ、その姿が明らかになる。

猿のような妖怪であろうか。

大きさは龍也の二周り程。

更には凶悪そうな牙を生やしている。

そしてその手には高そうな刀を持っている。

猿のような妖怪も龍也の姿を確認する。

そして、雄叫びを上げながら龍也に襲い掛かってきた。

相変わらずいきなりだなと龍也は思いながら構えを取る。

猿のような妖怪が龍也を叩き潰そうと腕を振り上げる。

その瞬間、龍也は跳び上がると同時に猿のような妖怪の顎を蹴り上げる。

龍也の蹴りをモロに受け、顎をカチ上げられる。

龍也は更に着地する前に胴体に蹴りを叩き込んで蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされるのと同時に猿のような妖怪が持っていた刀が手から離れる。

その刀が地面に落ちる前に龍也が掴み取る。

「思ってたより弱かったな」

龍也はもう少し苦戦すると思っていたが、スンナリ勝てた。

そんな思いをよそに、手持っている刀を見つめる。

やはり高価そうな者であると龍也は思う。

そう思うと同時に何故こんな物をあの妖怪が持っているのかと疑問を覚える。

龍也が疑問を覚えたと同時に又、木々の間から何かが飛び出してくる。

そして龍也の近くに降り立つ。

白い髪に犬耳。

手には紅葉のマークが付いた丸い盾、若干太い刀を持っている。

服は腋を露出したもの。

そして現れた者は龍也と猿のような妖怪を見比べる。

「えーと……」

何が起きたのかわからないと言った様子だ。

「俺は、四神龍也。あんたは？」

このままでは話も進まないので龍也から切り出す事にした。

「あ、私は白狼天狗の犬走椛と申します」

目の前の存在も自己紹介してくれた。

「それで、何があったのか説明してくれますか？」

椛は何があったのか知りたいようで龍也に質問をしてくる。

「ああ、わかった」

そして龍也は先程起きた事を説明した。

妖怪に襲われ撃退した事を。

それを聞いた椛は姿勢を正す。

「ご迷惑をお掛けした様で申し訳ありません」

そして椛は龍也に向かって頭を下げた。

「あーっと、何があったのか説明してくれるか？」

今度は龍也から質問をする。

「はい、実はですね、あの妖怪が大天狗様の自宅から刀を盗み出しました」

「つまり椛はその犯人である、あの妖怪を追っていたと？」

「はい。本来私のような白狼天狗は妖怪の山の見回りと、妖怪の山

への
侵入者の追い返しと迎撃が主な任務なのですが、今回は事態が事態
ゆえ
私が追っていたのです。まあ、一番暇してたのが私と言うのもある
んで
すが」

椛曰く妖怪の山への侵入者など滅多に現れないので基本的に暇な
んで
あるとか。

「その盗まれた刀って言うのは……」

「はい、龍也さんが持っているそれです。その刀はかなり強力な力
がある

そうで、その力を使って何かしようと企んでいたのでしょう。あの
妖怪、

知能は低いですが、狡賢く、卑怯なタイプの妖怪ですから」

「狡賢く、卑怯なタイプって事は……もしかしてあれ気絶したフリ
をして

るだけじゃないのか？」

そう言いながら倒れている妖怪を龍也は見る。

椛の言った通りならその可能性があるからだ。

「いえ……大丈夫なようです。完全に気絶しています」

そう言われてホッとする。

「じゃ、これ椀に渡しておくな」

そう言っただけ持っている刀を椀に差し出す。

「すみません」

椀はその刀を受け取る。

「しかし、大変だな。妖怪の山も」

「そうですね、妖怪の山が一番多いのは天狗ですから妖怪の山は天狗社会と

言われていますが、その他の妖怪や神も住んでいますからね。こつこつ

も偶にですが起きるんです」

「へー、色々あるんだな」

そう言いながら龍也は椀の姿を見つめる。

「何か？」

「いや、天狗って言ってたから、鼻が長くて下駄を履いてるようなのを

想像していたから、椀を見て、やっぱり違うのかなって思ってたさ」

「いえ、そう言う天狗もいますよ」

「いるの？」

「ええ。その事を知らないって事は、もしかして……龍也さんは外来人
ですか？」

「ああ、そうだ」

「珍しいですね、強い外来人って」

龍也が外来人と知って椛は驚く。

自分の事を外来人と知って驚かれたことに何か懐かしさを感じる龍也。

「そう言えば龍也さんは何をやっているんですか？」

「今は幻想郷中を回っているところかな」

「そうなんですか。あ、妖怪の山は……」

「立ち入り禁止だろ。立て札を見たよ」

あの立て札では逆に進入してくれと言っているように見えるとは言わない。

椛のセリフからは滅多に進入者はいないと聞ける。

ならばあの看板でいいのだろう。

きっと自分がそう感じるだけであろう。

「すみません。上の者の許可が取れば話は別なのですが……」
それは滅多に取れないとの事。

「いっていいって、気にするな」

龍也は気にしていないと言ったふうに戻す。

「そう言っていたいただき、ありがとうございます。あ、それでは私はそろそろ……」

「あ、仕事だったな。悪かったな、引き止めたりして」

「いえ」

そう言いながら気絶している妖怪を捕縛していく。

「では、龍也さん、御協力ありがとうございました」

「気にするな。またな、椀」

「ええ、また」

そして椀は気絶した妖怪を持って妖怪の山に消えていった。

それを見送った後、龍也も再び足を進めていく。

大体、妖怪の山を半周した辺りであろうか。

石に刻まれた文字を発見したのは。

そこには、この先中有の道と書かれていた。

何があるのであろうと考えているとその道から誰かが歩いてくる。

こんな所にいるのであれば妖怪であろうか。

人里の人間はこんな所までこないであろうし。

話せる相手ならいいかなと龍也は思い、話しかけて見る事にする。

「すみません」

「何か用かい？」

とりあえずは話は通じるようだ。

話しかけた瞬間襲い掛かれなくてホッとする。

「この先には何かあるんですか？」

「この先には出店があるよ」

「出店ですか？」

「ああ、この先は地獄に落ちた奴の一種の卒業試験のような所だな」

「卒業試験ですか？」

「ああ、地獄での模範囚みたいな奴等がここで出店を開くんだ」

「へえー」

「その売り上げの結果で輪廻転生の輪に入れたり冥界に行けたりするらしい」

「なるほど」

龍也は変わったシステムだなと思う。

「教えていただき、ありがとうございます」

「構わんよ」

そう言ってその人物は去っていった。

何やら面白そうである。

龍也は中有の道へ進んで行く事にした。

先は一本道であった。

そのまま一本道を進んで行くと出店が見えてくる。

中々活気があるようである。

自分以外にも客がチラホラ見える。

せつかくなので何か買って行く事にしようと龍也は思った。

一番近くの出店に行く事にした。

「すみません」

「おう、らっしやい」

何しようか迷う。

悩んでいたら龍也のお腹が減って来る。

なので食べ物を買おうと思った。

「これください」

おにぎりを買う事にした。

「おう、十五円だ」

「十五円ね……ん？」

そう言われて疑問を覚える。

外の世界と幻想郷では通貨が違う。

十五円は外の世界では安い。

だが、十五円は幻想郷では高すぎる。

「ちょっと待て！！ 相場の千倍以上とはどう言っただ見だ！！」

相場の二割り増し、三割増しくらいであれば龍也も何も言わなかった。

だが、相場の千倍以上ともなれば龍也も文句を言わざるを得ない。

それと龍也は一瞬外の世界で死んだ人間かと思ったがそれは無いと切り捨てる。

それならば一万円とか十万円とか言うであろう。

それに出店を開かせるくらいであるのならはお金の価値を教え直す
はずで
ある。

「うるせえ!! 俺がこうと決めたからこうなんだよ!!」

龍也がそう言ったら急にキレだした。

「何も買わねえって言うんなら有り金全部置いていけ!!」

そして屋台から乗り出して龍也に襲い掛かってきた。

龍也は模範囚じゃなかったのかよと思う。

この様子ではただ良い子ぶってただけのようである。

このままいけば全財産取られるであろう。

それは龍也もごめんである。

そして放たれた拳を避けながら自身の力を変える。

白虎の力へと。

そして掌に風の塊を生み出し、目の前の男に当てる。

「暴風玉!!」

するとその男は悲鳴を上げる事もできずに自分の屋台を巻き込んで

吹き飛ばされていく。

そして後ろにあった岩に激突して気絶する。

龍也も本気で放ったわけでは無いので気絶だけなんですたのであろう。

まあ死んだ者が更に死ぬのかは疑問ではあるが。

恐らくあの男は地獄に逆戻りであらう。

そう龍也は思った。

近くにいた者達はその光景に啞然としているのを余所に、龍也は近くにある出店に移動する。

「おい」

「はいい！！」

その出店の店主は怯えたような声を出す。

先程の光景を見たからであらう。

「俺は買い物したい。相場の値段で売ってくれるなら俺は何もしない。

だが……」

そう言って自身の力を変える。

白虎から朱雀へと。

そして片手を上げる。

すると上空でそれなりの大きさのある火炎球が生成される。

「さっきの店のようにふっ掛けて来たら……これをお前に落とすぞ」

そう笑顔で龍也言う。

「はいい！！ 相場の値段で売らせて貰います！！」

そう言ったので龍也は火炎球を消す。

そして買い物をする。

主に飲食関係であるが。

ちなみに龍也が吹き飛ばした店主は龍也の予想通り地獄に逆戻りしたらしい。

まあ龍也の与り知らぬ事ではあるが。

買い物済ませた後、龍也は中有の道の入り口に戻ってきた。

これ以上あそこに留まってもしかたが無いという事である。

妖怪の山を見ながらこれから先の事を考える。

買い食いはしたので自身の腹は膨れた。

それにここ数日の食料も買い込んだので、数日は食べ物の心配はしなくてもいいであろう。

あそこの出店は色々と品揃えがあった。

なので龍也はまたいつか行こうと思った。

「やっ……っ」

そう言いながら龍也は体を伸ばす。

今の目的は妖怪の山の回りを一周する事。

その先はそれが終わった後に考える事にしようと思つた。

そして龍也は再び足を進める。

放浪編 その10

幻想郷のどこか。

そこを歩いている者が一人。

四神龍也だ。

龍也もどこを歩いているのかわからない。

それでいいと龍也は思っている。

特に目的の無い旅とはそう言うものである。

そうして一步、また一步と足を進めていく。

すると、何かが龍也に襲い掛かってくる。

それに気付いた龍也は体を傾けて回避する。

そして襲ってきた者を見る。

獣型の妖怪だ。

その姿を見て幻想郷に来た頃の事を思い出す。

すると、一体、また一体と同じ妖怪が現れてくる。

一体どこに隠れていたのであろうかと龍也は思う。

この辺には身を隠せる草木などは存在していない。
すると土の中であろうか。

いつの間にかこの妖怪のテリトリーの中に入ってきたのか、
それとも妖怪達が龍也の後を付けて来たのか。

どちらかはわからない。

そうこうしているうちに周囲にいる妖怪は涎を垂らしながら
龍也に襲い掛かってきた。

それに対して龍也は身を屈める。

そして自身の力を変える。

朱雀の力へと。

そして二本の炎の剣を生み出す。

その時にはもう妖怪は龍也のすぐ近くにまで迫って来ていた。

だが、龍也は落ち着いて腕を広げる。

そして体を独楽のように回転させる。

すると襲い掛かってきた妖怪達は次々と焼かれていく。

僅かに生き残った妖怪は逃げていく。

「ふう……」

周囲に気配が無くなったのを確認してから力を消して一息吐く。慣れてきたものだと言龍也は思った。

最初の頃は急に妖怪に襲われたら慌てたものだが、今では大分落ち着いて対処ができるようになってきた。

旅をし始めてからは最低でも一日に一回は妖怪に襲われている。

妖怪から見れば一人で歩いている龍也は絶好の餌に見えるのである。う。

襲い掛かり方も様々である。

奇襲を掛けるもの、正面から来るもの、待ち伏せをするものなど、色々いる。

その事を思い返しながら歩いていると分かれ道に出る。

それを見た龍也はキョロキョロし始める。

「お、枝見つけ」

近くに生えている木の下に落ちている枝を発見する。

それを拾って分かれ道の所に立てる。

「倒れた方へ進もつと」

そう言いながら押さえていた手を放す。

先程の分かれ道を過ぎてから数時間。

龍也がのんびり歩いていると、

「お、やっと見つけたぜ」

上空から声が掛かる。

龍也がそちらの方を見てみると、箒に跨った少女が降りてくる。

魔理沙だ。

「魔理沙か」

「よし」

魔理沙がそう言いながら手を上げる。

「久しぶり……って程でもないか。何か用か？」

「ああ、宴会のお誘いだぜ」

「宴会？」

「ああ、今日は満月だからな。秋に満月を見ながら酒盛りって風流だろ」

「ああ」

龍也はもうそんな時期かと思った。

「いやー、見付かって良かったぜ。龍也のように幻想郷中回っている奴は見つからないのが多いからな」

幹事も大変だぜーと続ける。

「参加者どうなってるんだ？」

「基本、私と霊夢の知り合いだな。龍也の他には紅魔館の連中と、アリスとチルノ達だな」

それ以外は見つからなかったと魔理沙が言う。

それを聞いて龍也は自分の他にも色々と動いているのがいるのかと思った。

そして自分が魔理沙の中で宴会の参加決定している事に気付く。

まあ、別にいいかと龍也は思う。

断る理由は無いからでもあるが。

「宴会なら何か持っていった方がいいか？」

「そうだな、酒が必要だな。飲兵衛ばっかだし」

「了解」

そう言われて龍也は酒の他に食べ物が必要だなと思った。

人里で買うべきであろう。

「で、宴会場所は？」

「博麗神社だけ」

神社に妖怪などが入っても大丈夫なのかと思っただが、大丈夫なのだろう。

でなければ博麗神社で宴会などしないであろう。

「そうそう、人里ってどっちだ？」

「えーと……あっちだぜ」

そう言っつて魔理沙が指をさす。

「じゃあ俺は人里で買い込んでから行くけど、魔理沙はどうする？」

「私は博麗神社で宴会の準備を手伝うぜ」

「そっか、なら後でな」

「おお、また後でな」

そう言っつと魔理沙は飛び上がり、すっ飛んでいく。

速いなと龍也は思う。

魔理沙の姿が見えなくなると、龍也も飛び上がる。

そして空中に見えない足場を作りそこに留まる。

「そーいや、全速力で移動したこと無かったな」

そう言いながら人里に方に体を向ける。

どれくらい出来るのかを知るいい機会だな龍也は思った。

「はああああああ………」

そして体中から霊力を放出する。

龍也はそのままの状態を維持し、全速力で空を駆けて行った。

「よつと」

龍也は人里の入り口近くに着地をして霊力の放出を止める。

「思ってたよりずっと早く付いたな」

龍也がそう感想を漏らす。

歩いていたら何日掛かったかわからないであろう。

そして龍也は人里の中に入っていく。

歩きながら何を買おうか考える。

荷物になりそうな物は後回しでいいだろう。

「……まず団子かな」

月見なので団子はあるであろう。

他にも誰かが持ってくるかもしれないが多くても困りはしないだろう。

龍也はそう決意する。

「すみません」

そして近くに歩いていった人に声を掛ける。

「何か用かい？」

「団子屋がどこにあるのかわかりますか？」

「ああ。団子屋ならそこを二つ行った所を左に曲がって、真っ直ぐ行けば見えるよ」

「そうですか、ありがとうございます」

「いって事よ」

龍也は教えられた道を歩いて行く。

そうして行くと団子屋の前に辿り着く。

「すみません」

「はい」

中から定員さんが出てくる。

「えーと、団子三十人前、お持ち帰りと……」

そこまで言っただけで龍也は自分の腹が減っていることに気付く。ついでだから何かを食べていこうと思った。

「それと三色団子五人前。こっちは食べて行きます」

「かしこまりましたー」

そして椅子に座りながら待つ。

しばらくすると注文したものが届く。

団子を食べながら、団子屋から見える風景を楽しむ。

食べ終わった後、団子三十人前は入った袋を持ち、お金を払い団子屋から出る。

歩きながら次に何か買うか迷う。

「酒は最後にするとして……主食にするか」

次に買う物を主食にする事に決める。

そして持ち運びできる物だと龍也は考える。

「おにぎりにするか」

具体的に買う物を決める。

誰かに売っている場所を聞こうと周囲を見渡す。

すると見知った人物を発見する。

「よ、阿求」

「龍也さん」

発見した人物は稗田阿求であつた。

「散歩か？」

「はい。龍也さんは何をしていたんですか？」

「宴会で食べる物の買出しかな」

そう言つて手に持っている荷物を見せる。

「宴会ですか？」

「ああ、博麗神社だな。あ、阿求も来るか？」

せつかくないで、龍也は阿求も誘おうとする。

「すみません。お誘いはうれしいのですが、今日は夜中から書物を纏める仕事があるので……」

阿求が申し訳なさそうに返答する。

「そつか、悪かつたな」

「いえ、お誘いしてくれてうれしかったです。また今度誘つてくだ
さい」

「ああ、わかつた」

そう言つたところで龍也がある事を思い出す。

「そつだ、おにぎり買おうと思ってるんだけど、どこで買えるかな？」

「そうですね……ここからなら茶屋が一番近いですね」

「茶屋？」

「はい。そこを真っ直ぐ行って、三つ目の所を右、そこから二つ目の所を左に曲がって真っ直ぐ行けば付きますよ」

「そうか、ありがとな」

「いえ」

「それじゃ、またな」

「はい、またお会いしましょう」

そして龍也は目的地目指して歩き出す。

しばらく歩くと茶屋の前に辿り着く。

「すみませーん」

「はい」

声を掛けるとすぐに返事が返ってくる。

「おにぎり……三十個ください」

「具はいかがしましょう?」

そう言われて龍也は何にしようか考える。

「うーん……」

中々答えがでない。

だが、これ以上考えても店の迷惑になるであろう。

ならば自分の好きな物でいいかと言う結論になる。

「おなかでお願いします」

「かしこまりました」

おにぎりが出るまで、ボーツとしながら龍也は過ごす。

「おまたせいたしました」

するとおにぎりが出来たようだ。

おにぎりの入った袋を受け取って御代を払う。

そして店から出て行く。

「後は酒屋か」

酒屋の場所を聞くため、近くを歩いていた人に尋ねる。

「すみません」

「なんででしょうか？」

「酒屋にはどう行けばいいでしょうか？」

「それでしたら、この道を真っ直ぐ行けばいいですよ」

「お教えいただき、ありがとうございます」

「いえ」

そして龍也は酒屋を目指して歩く。

程なくして酒屋に辿り着く。

「いらっしやい」

酒屋の中に入るとそう言われる。

何を買おうか迷う。

人数が多いから大量に買うべきか龍也は悩む。

そして魔理沙の言葉を思い出す。

飲兵衛ばかりであると言った言葉を。

それを思い出して買う物が決まる。

「すみせん」

「買う物は決まったかい？」

「はい。そこの酒樽をください」

「構わねえが、兄ちゃんそれ持てるのかい？」

「はい。持てると思います」

霊力で肉体強化すれば大丈夫だろうと龍也は思った。

そして会計を済まし外に出て酒樽を担ぐ。

「よし、ちゃんと持てる」

それを確認して龍也は人里の出口まで歩く。

出口に辿り付くと周囲を見渡す。

「博麗神社は……あつちか」

少し遠くの方に博麗神社らしき物を発見する。

神社は博麗神社しかないしあれで正解だろう。

「荷物があるし妖怪に襲われたら大変だな。霊夢が言つには空路なら安全らしいし」

そう言いながら龍也は飛び上がる。

そして空中に見えない足場を作りその場に留まり、博麗神社目指して駆けて行く。

「到着つと」

博麗神社の敷地に辿り着いたので龍也は着地する。

「本当に空路は安全だったな」

ここまで来るまで一匹の妖怪にも襲われなかった。

そして神社を目指して歩いて行く。

「あら、いらっしやい」

すると霊夢から声が掛かる。

「よし」

「龍也も宴会に参加するの？」

「ああ、魔理沙にお呼ばれしてな」

そう言いながら荷物を下ろす。

「持って来たのは酒樽とおにぎりと団子だ」

「あら、ありがとう」

そうお礼を言った後、霊夢は何かを期待した目で龍也を見る。

「そんな目で見なくても賽銭くらい入れるよ」

そして龍也は賽銭箱の前まで移動する。

サイフから小銭を一握り取って入れる。

その後、手を叩いていて祈る。

「いつもありがとね」

霊夢は笑顔でそう言う。

それを聞いて、龍也はやれやれと言った感じである。

「お、もう来てたのか龍也」

すると神社から魔理沙が出てくる。

「ああ、俺が一番か？」

「そうみたいだな」

「準備は終わったのか？」

「ああ、後はみんなが来るのを待つだけだな」

そしてしばらく三人で雑談する。

「あら、お揃いで」

龍也達の近くに誰かが着地する。

「お、アリス」

龍也の次に到着したのはアリスであった。

そしてアリスを交えて雑談していると、集団が見えた。

「あれは……紅魔館の連中か？」

魔理沙がそう言うとその集団が着地した。

妖精メイドも何人が居るようである。

「りゅーやー！！」

そしてフランドールが龍也に飛びついてくる。

その様子を見た龍也は霊力で身体強化をする。

「おっ……と、元気一杯だな」

飛びついてきたフランドールを龍也が抱きとめる。

「えへへ」

「もうちょっと力加減覚えような」

抱きとめたはいいものの、龍也は若干のぞけた。

霊力で意識的に身体強化をしていなければ倒れていたであろう。

「あ、そうだレミリア」

そう言いながらポケットに仕舞ってある懐中時計を取り出す。

「これ、ありがとな」

「構わないわ。それ、気に入って貰えてよかったですわ」

紅魔館のメンバーを加えて雑談をしていると、チルノと大妖精も来た様だ。

そして満月が出始めた頃に魔理沙が音頭をとって宴会が始まった。

宴会も中盤を過ぎた頃であろうか。

龍也を除いた全員いい感じ暴走してきた。

龍也も酒を結構飲んでしたが、そんなに酔わなかったようである。

魔理沙とアリスとパチュリーは飲み比べをしていた。

龍也の記憶が正しければ最初の方は結構楽しげに飲んでいたはずである。

いつの間にああなったのであろう。

霊夢は美鈴と咲夜が倒れているのを余所に酒を飲み続けている。

あの三人で飲み比べをしていたのであろうか？

「ぎゃおー、食ーべちゃーうぞー」

そんな声が聞こえてきたので龍也はそちらを振り向く。

レミリアが妖精達を追っかけ回していた。

龍也は何をやっているんだかと思った。

「お姉様……」

フランドールがそれを遠い目をしながら見ていた。

姉に対して抱いていた何かが崩れ去ったようである。

龍也はそっとして置いた方がいいだろうと思った。

その場を離れて他を見て回る事にした。

すると見慣れない人物を発見する。

「どちらさん？」

「私？ 私はルーミアだよ」

「俺は四神龍也だ」

「へー、龍也って言うのかー」

「ああ、そついや最初はいなかったよな」

「うん。美味しそうな匂いがしたからこっちに来たの」

「そうなのか」

「うん。それでさ」

「ん？」

「龍也は食べてもいい人類？」

「おい」

「冗談だよ。ここで龍也を襲ったら巫女に怒られるもん」

つまりそれはここじゃなかったら襲って来ると言う事である。

「その辺を俺が歩いてるときに襲ってきてもいいが、その時は全力で薙ぎ払わせてもらうぞ」

そう言いながら龍也は全身から霊力を少し漏らす。

「うー、怖いお兄さんなのだー」

「ま、襲い掛かってこなければそんなことはしないがな」

そう言った後、龍也とルーミアは雑談をする。

それが終わった後、龍也はまた回りを見て回る事にした。

辺りを回りながら酒を飲み、料理などを食べる。

そして、

「う……」

ある程度回ったくらいであろうか。

龍也がトイレに行きたくなったのは。

このまま漏らすのはイヤなので龍也はその場を離れることにした。

「くそ、迷ったせいで時間が掛かった」

龍也は暗かったせいでトイレに付くまでかなり迷った。

そのせいか神社を外れて近くにある森の中に入ってしまい妖怪に襲われもした。

ある程度酔ってはいたが難なく撃退はできた。

その後やっこの事でトイレを見つけたのである。

「さてと、宴会場はどうなっているかな」

そう言いながら宴会場に龍也は戻る。

そして宴会場の光景を目にする。

「……どうしてこうなった」

宴会場は死屍累々。

全員酔いつぶれて寝ていた。

周囲を見てみれば酒瓶を抱えて寝てる者。

肩をくっ付けて寝てる者。

背中合わせで寝てる者。

様々である。

もう少し見てみるとフレンドールが龍也の持って来た酒樽を背にして寝ていた。

自棄酒でもしたのだろうか。

そして酒樽の中身を確認する。

「あれ、全部飲んだのか？」

龍也が最後に見た時には結構残っていたはずであるが。

考えてもしようがないので龍也はそれは置いておく事にした。

「どうすっかな、この状況」

龍也は内心放って置きたった。

だが、この惨状をそのままにしておく訳にはいかないであろう。

「はあ………」

龍也は溜息を付いて、とりあえず全員を神社の中に運ぶことにした。

何往復したかはわからないが、とりあえず全員を神社の中で一番広い部屋に運び込んだ。

このまま寝かせて置くのもあれなので、龍也は神社の中にある布団を探す事にした。

中がかなり暗かったので龍也は自身の力を朱雀に変えて、掌に炎を生み出しそれを明かり代わりにして神社の中を探す。

そうして人数分の布団が確保できたので全員に掛けた後、外に出る。

そしてゴミを一箇所に纏める作業に入る。

まだ元気のあるうちにやっておこうと言う魂胆だ。

明日にやろうとしてもやる気が出ないであろう。

そうして一人寂しく後片付けをする。

そして、

「ふう、こんなものかな」

後片付けも終わる。

そして懐中時計を取り出して時間を確認する。

「げ、もうとっくに日付変ってるじゃん」

時間を見てそろそろ寝ようかと龍也は思ったが、まだ眠気が無い。

もう少し飲む事にしようと思い、まだ残ってた酒瓶と団子を持って神社の屋根に上る。

ここからだと言いつつ満月が綺麗に見える。

「ま、一人満月を見ながら酒を飲むのも中々乙なものだな」

そう言いながら龍也は酒を飲む。

「そーだねー、わいわい騒ぐのもいいけどそれも乙だねー」

「ッ!？」

龍也はすぐに周囲を確認する。

だが、何も無い。

龍也の位置からは綺麗な夜空が見えるだけである。

ついでに殺気や気配も探してみるが、何も感じなかった。

気のせいであろうか。

それとも、もうかなり酔ったのであろうか。

「ま、いつか」

気にしてもしょうが無いと思い龍也は再び満月を見ながら酒を飲み、団子を食べる。

放浪編 その11

「いつつ……」

龍也は目を覚ますのと同時に頭痛に襲われる。

昨日の酒のせいであろうか。

「これが二日酔いつてやつか……」

後片付けをした後、一人でかなり飲んでいたなと思いつ返す。

痛む頭を押さえて外に出る。

龍也が寝ていた部屋は以前泊まった時に使わせてもらった部屋である。

他のみんなはどうなっているかと思い、みんなを纏めた部屋に行く。

「うわぁ……」

死屍累々である。

頭を押さえている者。

気分を悪くしている者。

まだ寝ている者。

とりあえず近くにいた人物に話しかける事に龍也はした。

「おはよう」

「おはよう」

霊夢が頭を押さえながら挨拶を返す。

「大丈夫か？」

「多分……。おかしいな、いつもならこれぐらいで二日酔いにならないはずなんだけど……」

「飲んだ量、覚えてる？」

「……覚えてない」

どうも飲み比べしていたせいかよく覚えてないとの事。

「悪いんだけど、水持ってきてくれない？」

「ああ、いいぞ」

この中で一番軽症なのは龍也のようなので、龍也は霊夢の頼みを引き受ける事にした。

「ありがとう」

「水はどこにあるんだ？」

「神社の裏の方に井戸があるからそこから汲んで来て。そこに桶もあるから」

「了解」

そして龍也は外に出る。

「おつとと」

地面に足を付けた瞬間にふら付く。

「大丈夫？」

「大丈夫だ」

龍也は少し気を入れないと転ぶなと思う。

そうして気を入れながら神社の裏まで歩いて行く。

するとすぐに桶と井戸を発見する。

中々大きな桶である。

そして桶に水を汲んで、さっきの部屋まで戻る。

「戻ったぞ」

そう龍也が声を掛ける。

「お帰り」

霊夢が大量の湯のみを持って廊下から歩いてくる。

そして部屋に戻って湯飲みみに水を汲んで飲む。

「あんたも飲んだら？」

「そうする」

そう言つて龍也も湯のみを取って、霊夢と同じように水を汲んで飲む。

しばらくするとダウンして者もチラホラと龍也達の近くまで来て水を湯のみに汲んで飲んでいく。

「大丈夫か、魔理沙？」

「おー」

そう返事をするが、いつもの元気が見られない。

「二日酔いに続いて快晴とか……」

外の景気を見ながら、レミリアが愚痴っていた。

「ああ、吸血鬼って日光苦手だったっけ」

「ええ、ここから紅魔館まで飛んで行ったら灰になる可能性

が高いわ」

どうしたものかとレミリアが呟く。

「あ、そつだ龍也」

「ん？」

「私の傘知らない？」

「傘って昨日来たとき持ってたやつ？」

「ええ」

そう言えば、レミリアとフランドールが博霊神社に来る時に傘を差しながら来ていた事を思い出す。

日光が苦手と言っても傘などを差せば大丈夫なようである。

そこまで思い出して、部屋の周りを見してみる。

「いや、俺は知らないな」

「そつ……」

昨日の宴会でどこかにいったのであろうか。

かなりヒートアップしていたようであるし。

龍也も思い出そうとしたが、あまりよく思い出せなかった。

酒が入っていたせいであろうか。

自分では酔っていないと思っていたような気がしたが、それは当てにならなかつたようである。

最後の方は妖怪に襲われて酔いが醒めた事もあつてかそれなりに覚えていたが。

「咲夜―」

「……ここに」

そう言いながら咲夜が現れる。

心なしか顔色が悪い。

「私の傘知らない？」

「申し訳ありません。存じません」

「そう……」

そう言うがレミリアにあまり落胆の色は無い。

この惨状を見ればだいたいの予想も付いてからかも知れないが。

「紅魔館に行つて取りに……無理そうね。途中で倒れそうだわ」

咲夜の様子を見てレミリアはそう判断する。

「あ、横になってていいわよ」

「申し訳ありません」

そう言いながら咲夜を横になる。

普段の咲夜なら大丈夫ですと言いつつだが、今回はかなり体調が悪いようだ。

「龍也は……」

そう言いながら龍也の方を見る。

「咲夜はよりは大丈夫そうだけど、傘のある場所わからないだろうし無理ね」

妖精メイドに聞いたとしてもわからないだろうしと続ける。

そうになると霊夢と魔理沙もダメであろう。

ここにいる妖精メイドは論外であろう。

「美鈴は？」

そう言いながらレミリアは美鈴の姿を探す。

「……無理ね」

美鈴を発見したレミリアはそう結論を出す。

酒瓶抱えて幸せそうに寝ていたからだ。

とてもじゃないが起きそうに無い。

「パチエは……」

そう言っつてパチュリーを見る。

「ダメね。行かせたら死ぬわね」

かなり具合の悪そうなパチュリーの様子を見てそう言う。

小悪魔は小悪魔でそんなパチュリーを必死に介抱している。

「頭痛いー」

そう言いながらフレンドールが龍也の近くに来て倒れこむ。

このままでは可愛そうだなと思い、龍也はフレンドールの頭を撫でる。

すると、若干フレンドールの顔が安らぐ。

「龍也、今の貴方の体調はどう？」

そうしているとレミリアから声が掛かる。

「俺の症状は頭痛と吐き気、後、ちゃんと気を入れてないと歩く時に

ふら付くぐらいだな。他のみんなに比べたら結構楽だ。レミリアは？」

「私も似たようなものね」

レミリアが頭を押さえながら言う。

「んー、龍也」

魔理沙が声を掛けてくる。

「何か食べる物ないか？」

「たしか宴会の時の残りがあると思うが、食べれるのか？」

「多分。何か食べないと余計気分が悪くなりそうだな」

「わかった」

そう言って龍也はフランドールの頭を撫でるのをやめて、宴会の余りを置いた場所に行く。

フランドールはその事に不満気であったが、頭が痛くてそれ所ではなっかた。

そして、食べ物を取って龍也は戻ってくる。

「有ったのはおにぎりと団子とサラダだ」

サラダは紅魔館のみんなが持って来たものだ。

「さんきゅー」

魔理沙が食べ物を取ると、他のみんなもノロノロと取り始める。

それを龍也がボンヤリ見ていると、人形が食べ物を取っていった。

その人形を操っていたのは察しのとおりアリスであった。

どうやら動くのも億劫なようである。

大丈夫であろうか。

「あ、水が無くなって来たから汲んで来るな」

そう断りを入れて、龍也は再び水を汲みに行く。

そして戻って来ると、龍也は霊夢に尋ねる。

「そーいや、ここに食料ってある？」

「あるけど、今の私は作れそうにないわよ」

「他は……」

そう言いながら龍也は周囲を見渡す。

「作れそうなのは全滅してるな」

「そうね」

そう言って霊夢は溜息を付く。

「龍也は？」

「俺？ 料理は……作れない事は無いとは思っけど味は保障できないぞ」

「そう」

また、霊夢は溜息を付く。

「人里で何か買ってこようか？」

「それはありがたいけど、いいの？」

「今一番動けるのは俺だろ」

「そう……ね、お願いしていいかしら？」

「ああ」

そう言って龍也は外に出る。

「もう行くの？」

「ああ、結構時間掛かると思うし」

龍也は今の自分の体調を見ると通常の倍以上の時間が掛かると判断したからだ。

「そう、気を付けてね」

「ああ」

そう言っつて龍也は飛び上がる。

そして足場を作っつてそこに留まる。

「お……っつと」

が、そこから落ちそうになる。

もっつと気を入れないとダメだと龍也は判断する。

そして、龍也は空を駆けて行く。

人里の近くで龍也は着地する。

「うっぷ
」

着地したはいいが、その瞬間吐きそうになる。

動いている間に体調が悪化したようだ。

眩暈もしてきたようだ。

何とか堪えて龍也は人里に入っていく。

痛む頭を押さえながら龍也は何を買おうか悩む。

「……おにぎりと……サンドイッチでいいか」

龍也は食べ易い物でいいだろうと思った。

頭を使うと頭痛が増しそうなので、龍也はこれ以上は考えないようにした。

フラフラと歩いているとカフェに付く。

「すみません、サンドイッチ三十セットください。
お持ち帰りで」

「かしこまりましたー」

注文した後、龍也は椅子に座って体力を回復させる。

しばらくそうしていると、

「お待たせしましたー」

出来たようだ。

龍也は代金を払ってカフェを後にする。

またフラフラしながら歩いて行くと茶屋に付く。

「すみません、おにぎり三十個ください。具はおかか
で、お持ち帰りで」

「かしこまりましたー」

龍也は壁にもたたり掛かりながら待つ。

「お待たせしました」

しばらく待っていると出来たようだ。

代金を払って龍也はフラフラと歩いて行く。

フリラフと歩いていると、

「龍也さん」

声を掛けられた。

龍也は声を掛けられた方に振り向く。

「阿求か」

「はい。大丈夫ですか？ 顔色が悪いようですが」

「ああ、実はね……」

そして龍也はここまでの経緯を話す。

「そうですか……」

話を聞いた後の阿求の様子は若干呆れ顔だ。

「それより、龍也さんは大丈夫なんですか？」

「多分」

「お薬、お渡ししましょうか？」

「あるの？」

「はい、私の屋敷に行けば」

「じゃ、頼めるかな」

「わかりました、付いてきてください」

そして龍也は阿求の後を付いて行く。

程なくして阿求の屋敷に辿り付く。

「中に入って、お休みになられますか？」

「いや、大丈夫だ」

「わかりました、すぐに取って来ますね」

そして阿求が屋敷の中に入って行く。

時間が掛かると思ったが、阿求はすぐに出てくる。

「こちらになります」

そう言っつて包みを渡してくれた。

「中身は二日酔いの薬です」

人間用ですけど、それ以外にもそれなりの効果がありますよと付け加えてくれた。

「やっば、こつ言つ屋敷には専属の医師とかがいるのか？」

「いえ、厳密に言えば本格的な医師などはいません」

書物などを見てその通りやっているだけですよと続ける。

そう言われて龍也はそうかと納得する。

現代医学が幻想入りするとは思えない。

昔の人が書いた書物などを見るぐらいしかないであろう。

もしかしたらそう言った能力を持っているが、存在を隠しているという可能性もある。

ま、考えても仕方が無いことではある。

「じゃ、ありがとな」

「いえ、お大事に」

阿求と別れて人里の外に出ると、龍也は飛び上がり、博麗神社目指して駆けて行く。

「ただいま」

「お帰り……顔色悪いみたいだけど大丈夫？」

帰ってきた龍也を霊夢が出迎える。

「動いたら体調が悪くなったただけだ」

そう言いながら荷物を置く。

「そっちがおにぎりです、そっちがサンドイッチ。これが薬だ。食べ終わったら飲んでくれ」

「わかったわ」

そしてみんなは龍也が持って来たものを食べていく。

みんな幾分か体調が回復したようだ。

「あんたは食べないの？」

「今食べたら戻しそうだ。それより水をくれ」

「はい」

霊夢が水の入った湯のみを渡してくれる。

「サンキュ」

水を飲み干した後、霊夢に尋ねる。

「そっぴゃ、宴会の後っていつつもこうなのか？」

「そんな事はないわよ。いつもならこうなる前にお酒が切れるはずだし。

ただ……」

「ただ？」

「何かお酒、増えてたような気がするのよね」

「酒が？」

「うん」

「宴会の最中に？」

「うん」

「まさか。ただ今回がとりわけ強い酒ばかりだったんじゃないか？」

「そうかな」

「そうだぜ」

魔理沙も会話に入ってくる。

「酒が増えるなんてそんな幸せな事、起こる訳ないだろ」

そう言われて霊夢もそれそうかと結論を出す。

頭が痛いのでこれ以上考えたくないというのもあるだろうが。

「て言うか、こんなになっても酒は好きか」

「とーぜんだぜ」

サンドイッチを食べながらそう返す。

そう言った龍也もまた酒を出されたらカブカブ飲むであろう。

結局みんな酒が好きなのだ。

「横になりたいんだけど、今布団とか空いてるか？」

横になりたくなかった龍也がそう尋ねる。

「ああ、空いてるぜ」

「じゃあ休ませてもらうぜ」

そう言って空いている布団の所に行き、布団を被って横になる。

そして龍也はそのまま目を閉じる。

「んあ……」

龍也が目を覚ます。

「お、起きたか」

「魔理沙か」

声の主を確認した龍也は起き上がる。

「体調はどうだ？」

「んー……大分回復した」

体を少し動かしてそう結論を出す。

「しかし結構寝てたな。もう夜だぜ」

「そんなに寝てたのか……」

そう言いながら回りを確認する。

綺麗に片付いている。

「もうみんな帰ったのか？」

「紅魔館の連中と妖精達とルーミアはもう帰ったぜ。
今ここにいるのは私等の他に霊夢とアリスだな」

「あら、起きたの？」

するとアリスが部屋に入って来た。

「ああ」

龍也はそう返事を返す。

「もう大丈夫なのか？」

「ええ、お陰様でね」

アリスの体調は大分回復したようである。

「龍也は？」

「俺もだ」

アリスが近くに來たのでアリスを見ると、髪が濡れている事がわかる。

「風呂入ってたのか？」

「ええ。汗も掻いたしね」

「私と靈夢ももう入ったぜ」

「今、靈夢がお粥作ってるからそれ食べたら龍也も入ったら？」

「そうする」

そして、しばらく三人で雑談をする。

「お粥、持って來たわよ」

すると霊夢が四人分のお粥を持って部屋の中に入ってくる。

「あ、起きたの。調度よかったわ」

そう言いながら霊夢が卓袱台の上にお粥を置く。

いつ卓袱台を出したのであるうか。

「食べれる？」

「ああ、食べそうだ」

そして四人でお粥を食べる。

「ご馳走様。美味しかったよ」

「ありがとう」

「あ、薬ってまだ残ってる？」

「ええ、あるわよ」

そう言ってアリスが薬と水を渡してくれる。

「サンキュ」

そして龍也は薬を飲む。

「あ、お風呂入れる？」

「入れそうだから入るよ」

そう言っつて龍也は湯殿に向かう。

そして脱衣所で服を脱いで風呂に入る。

「はぁー……」

龍也は体に残つてた疲れが抜けていくような感じを受ける。

改めて風呂はいい物だなと思った。

そうしてしばらく風呂に浸かる。

ある程度時間が立つと頭がボーッとし始めたので上がる事にした。

三人を探していると縁側に居るの発見する。

「上がったぞ」

そう言いながら一番近くに居た霊夢の隣に座る。

「はい」

そう言いながら霊夢が龍也にお茶を差し出す。

「サンキュ」

そしてお茶を一口飲む。

その後、風が少し吹き込む。

「秋だけどまだ涼しいな」

「そう？ 少し肌寒いと思うけど」

アリスがそう返す。

「寒くはないでしょう」

「貴女はいつもそんな腋が露出した格好をしてるからでしょ」

「アリスはいつも家に籠ってるからそう感じるんじゃないのか？」

「そう言うあなたは野生すぎるのよ」

アリスは都会派魔法使いを自称しているが、魔理沙は基本ロードワークを主体としている。

そう言った意味ではこの二人は相性が悪いのかもしれない。

「まあまあ……」

喧嘩になる前に龍也が仲裁に入る。

霊夢は我関せずと言わんばかりにお茶を飲んでいる。

そして四人で眠くなるまで雑談して過ごした。

放浪編 その12

「ん……」

部屋の中で龍也が目を覚ます。

そして起き上がり体を少し動かす。

「……直ったみたいだな」

頭痛も気だるさも無い。

それを確認して完全に直ったと龍也は判断する。

そして学ランを羽織って部屋を出て神社の中を歩く。

しばらくすると霊夢を見つける。

「おはよう」

「おはよう」

互いに挨拶を交わす。

「顔色良くなったみたいね。もう直ったの？」

「ああ、直ったみたいだ」

「そう」

霊夢と少し雑談していると、台所から調理音が聞こえてくる。

「誰か作ってるのか？」

「アリスが作ってるわ」

「アリスが？」

「ええ、ただで泊めて貰うのは悪いからって」

私は樂ができるからいいけどねと続ける。

「へー」

「もう少ししたらできると思っから座って待ってたら？」

「そうする」

そう言っって籠也は座る。

そしてしばらく霊夢と雑談していると、アリスが台所から出てくる。

アリスの後ろからアリスの人形を出来た料理を持ちながら出てくる。

便利なものである。

「おはよう」

「おはよう」

龍也とアリスは挨拶を交す。

そしてアリスの人形が卓袱台に料理を並べていく。

「西洋風か」

「ええ、私はこっちの方が得意だし」

「てゆうか、結構食材使ったでしょ」

「四人分だもの。それなりに使うわよ」

「後、どのくらい残ってる？」

「貴女一人なら二、三日は持つわね」

「もうそれしかないの？」

「一昨日の宴会でも結構作ったんでしょ？」

「まあ……ね」

そう言いながら霊夢が溜息を付く。

もっと残っていると思ったのだろう。

「ま、それはそれとして、食べましょ」

すぐに霊夢は持ち直して料理を食べようとする。

「あれ、魔理沙は？」

そう言いながら龍也が周囲を見渡す。

四人分あるが、魔理沙の姿が見えない。

「魔理沙ならそろそろ……」

霊夢がそう呟くと、

「おはよーだぜ」

魔理沙が目を擦りながら部屋の中に入ってくる。

眠そうな顔をしていたが、料理の匂いを嗅ぐと少しずつ
覚醒していく。

「お、美味しそうじゃないか」

そう言いながら卓袱台の前に座る。

とりあえず揃ったのでみんな食べる事にした。

「ごちそうさん、美味かったよ」

「お粗末様」

龍也の感想にアリスはそう返す。

「あんた達は何か無いわけ？」

「ああ、美味しかったぜ」

「楽できてよかったわ」

「まったく……」

そう言いながらアリスは食器を纏めて台所に持っていく。

「水に浸けとくだけでいいわよ。後で私がやっておくから」

「わかったわ」

少し経つとアリスが戻ってくる。

そして四人で雑談をする。

「それじゃ、そろそろ行くかな」

雑談していると結構時間が過ぎたので龍也がそう切り出す。

「そうね、結構長居しちゃったし」

アリスが龍也の発言に同意する。

「そうだな、私もそろそろお暇させてもらっぜ」

魔理沙も同意する。

そして四人で外に出て行く。

「それじゃ、またな」

「ええ、またね」

そう言ってアリスは飛び上がり、博麗神社を後にする。

「またなー」

魔理沙は箒に跨って空を飛び、博麗神社を後にする。

「じゃ、またな霊夢」

「ええ、またね龍也」

龍也は歩いて博麗神社を後にする。

そしてまた長い階段を下りていく。

龍也が飛んで行かなかったのはこれぐらいなら少し鈍った体を解すのに調度いいと龍也は思ったからである。

地に足を付けて歩いた方が旅をしてる気分になると言うのもあるであろつが。

そうして残り半分くらいと言った所で襲撃にあった。

その正体は体毛が白く、龍也の倍以上の大きさがるゴリラのような妖怪である。

上空から来たので前方に跳んで避ける。

そして龍也は居た場所にその妖怪が攻撃を当てて、土煙が舞う。

土煙が晴れると周囲の林から同じような妖怪が次々と現れる。

「お、何か懐かしいな」

前に博麗神社に行く時に襲われた妖怪と同じようなタイプの妖怪のようである。

その妖怪は敵意剥き出しで龍也を睨む。

ただ単に龍也を食べたいのか、それとも前に倒した妖怪の群れなのかは龍也はわからない。

ただ、戦闘が避けられない事は龍也にはわかる。

ならば、降りかかる火の粉は払うだけである。

「いいぜ、ウォーミングアップには調度いい。
掛かって来いよ」

そう言いながら、指をチヨイチヨイとやる。

唯の挑発である。

妖怪達はその挑発に見事に掛かり、一斉に襲い掛かってくる。

その全てが同時に襲い掛かってきたので、龍也は少し屈む。

そして攻撃が放たれる瞬間、龍也は大きく跳躍する。

龍也が跳び上がった事により妖怪達の放った攻撃は外れる。

龍也は空中で体を反転させ、上空に足場を作ってそれを蹴って急降下する。

地面に近くなったら回転し、その勢いで妖怪の一体に踵落としを放つ。

その踵落としは見事命中し、当った妖怪が怯む。

そして着地した瞬間、その妖怪に蹴りを放って蹴り飛ばす。

仲間を吹き飛ばされた事に怒った妖怪のうち一体が、龍也を叩き潰そうと腕を振り落とす。

龍也はそれを横に跳んで回避し、攻撃を放った妖怪に膝蹴りを

叩き込む。

その妖怪は鼻血を出しながら倒れる。

そして龍也が一息入れる。

が、それがいけなかった。

その隙を付かれて後ろから羽交い絞めにされる。

「しまった!!」

何とか外そうとするが、外れない。

そうしてもがいていると、目の前の妖怪が腕を振り上げながら近づいてくる。

このままではあの攻撃が命中してしまう。

またもに喰らえば龍也でもまずいであろう。

何とか拘束から逃れようとするが、逃れられない。

そうしている間にも妖怪は近づいてくる。

このままですと龍也は思い、足元に足場を生み出す。

そして、

「うおおおおおおお!!!!!!!!!!」

靈力を解放しながら一本背負いの要領で、羽交い絞めになっている妖怪を投げ飛ばそうとする。

そうしている間に振る被っていた拳が放たれる。

そして、

「おおおおおおおおお！！！！！！！！」

間一髪。

龍也と放たれた拳の間に羽交い絞めしていた妖怪が入る。

放たれた拳は、羽交い絞めにしていた妖怪に命中する。

そのダメージを受けたせいかわ、龍也の拘束が解かれる。

龍也は瞬時に体勢を立て直し、後ろに跳ぶ。

そして両手を合わせて大きめの霊撃を放つ。

それは命中し、大き目の爆発が起こる。

爆煙が晴れると二体の妖怪は倒れていた。

地面に着地し次は誰かと身構えていたら、自身に影が出来る。

上を見ると、妖怪が龍也の上空にいた。

そして口を開ける。

その口内には桃色に近い光が充滿している。

龍也は砲撃のような物を放つ気かと思い、自信の右手をそちらに向ける。

その瞬間に桃色に近い色をした光線が放たれる。

龍也も右手の靈力を集中させ、圧縮する。

そして放つ。

「靈流波！！」

龍也の右手から青白い閃光が迸る。

その閃光は光線と一瞬均衡して光線を飲み込み、更にその先にいた妖怪を飲み込む。

閃光が晴れると、その妖怪は影も形も無かった。

消滅したようである。

それを見た残りの妖怪達は倒れている妖怪を担いで逃げていった。

「ふう………」

その様子を見て龍也は一息入れる。

どうやら完全に酒は抜けたようである。

それはそれとして、今回の戦闘での反省点があると龍也は感じていた。

油断して敵に拘束され、重い一撃を貰ったところであった。

これは今後気をつけなければならない。

下手をすれば死んでしまったかもしれないのだから。

「よしっ！...！」

龍也は気を入れ直して階段を降りて行く。

そしてしばらくすると人里に付く。

龍也がここに来たのは阿求にお礼をいいに来たのだ。

阿求がくれた薬で完全に治ったとも言えるのだから。

手ぶらで行くの悪いと思い、お土産でも買おうと思い
団子屋を目指す。

そして団子屋に辿り付く。

「すみません、三色団子一人前ください。お持ち帰りで」

「はいよ」

少し待つと注文品が来たので、それを受け取りお金を渡して
団子屋を後にする。

そして阿求の屋敷を目指して歩いて行く。

「ここだここだ。相変わらずデカイな」

屋敷の門の前に辿りいた龍也はそう感想を漏らす。

ここから声を掛けても中には伝わらないと思い、門を

開けて中に入って行く。

そして玄關から声を掛けることにする。

「すみませーん」

しばらくすると女中さんが来た。

「これは龍也様」

そう言って女中さんが頭を下げる。

そう言えば様付けされてるんだったなと龍也は思い出す。

「阿求いますか？」

「はい、いらっしやいます。ご案内致しましょうか？」

「お願いします」

そして龍也は女中さんの後を付いて行く。

少しすると、阿求の部屋の前に着く。

「阿求様、よろしでしょうか？」

「いいわ」

「失礼致します」

そう言って女中さんが襖を開ける。

「何か用ですか？」

「お客様です」

「よ」

「龍也さん」

龍也が居た事に驚く阿求。

「では」

そう言って女中さんは去っていく。

「昨日はありがとな。あ、これお土産」

そう言って買ってきた物を阿求の机の上に置く。

「わざわざありがとうございます」

「いや、昨日世話になったしこれぐらいどつってことないよ」

そう言いながら龍也は座る。

「あ、顔色良くなりましたね。もう体調はいいんですか？」

「ああ、お陰様でね」

そしてしばらく阿求と雑談する。

「あ、もしかして何か仕事してた？」

「はい。書物の纏めを」

「もしかして邪魔したか？」

「いえ、いい気分転換になりました」

阿求が笑顔でそう返す。

「これ以上居たら邪魔になりそうだからそろそろ行くよ」

そう言って龍也は立ち上がる。

「その中身は三色団子だから、小腹が空いたら食べてくれ」

「わかりました」

「それじゃ、またな」

「はい。またいらして下さい、龍也さん」

そして龍也は屋敷を後にする。

「よし、みっけ」

魔法の森の入り口付近で龍也がそう声を出す。

龍也が見つけたのは香霖堂だ。

何故ここに来たのかと言うと、腕時計のパーツを売ると、レミリアから貰った懐中時計の事を聞くためだ。

「こんにちはー」

香霖堂の中に入り、挨拶をする龍也。

そのままカウンターの方に行くと霖之助が本を読んでいた。

「こんにちは、霖之助さん」

龍也がその声を掛けると霖之助が龍也の存在に気付く。

「やあ、龍也君」

霖之助が本を読むのを止めて、龍也に向き直る。

「今日も買取かい？」

「それもあるんですけど、鑑定してもらいたい物があるんです」

そう言ってポケットから懐中時計を取り出す。

「これなんですけど」

「ふむ……」

霖之助は懐中時計を手にとって鑑定を始める。

「これは……緋々色金製でできているね」

「緋々色金？」

聞いた事の無い金属だったので、龍也は首を傾げる。

「ああ、緋々色金とはね……」

そう言って霖之助が緋々色金について説明してくれた。

何やら専門的な単語もあって、わからない事も多かったが、非常に頑丈で、希少価値が非常に高い金属である事はわかった。

「それにしても……これはどこで手に入れたんだい？」

「それはレミリアから貰った物です」

「レミリア……レミリア・スカーレットの事かい？」

「はい」

「驚いたな」

霖之助さんは予想していなかったと言う顔になる。

「彼女が緋々色金製で出来たも渡すとは。龍也君は余程彼女に気に入られているようだね」

「そう……かもしれないですね」

自分の物になれと言われているので嫌われてはいないだろうと龍也は判断する。

「それで、買い取って欲しいものとは？」

「ああ、これです」

返された懐中時計をポケットにしまい、サイフの中から

腕時計のパーツを取り出す。

「これなんですけど」

「ふむ……」

それぞれのパーツを手にとって鑑定していく。

少し立つと鑑定が終わる

「この値段でいいなら買い取る」

そう言ってお金を差し出す。

「これでいいです」

そう言いながらお金を受け取って、サイフにしまう。

「あ、龍也君」

「何ですか？」

「これから何か予定はあるかい？」

「いえ、別にありませんけど……何か用ですか？」

「電化製品がまた手に入ったんでね。できれば君に説明して
買いたいんですけど……」

「俺は構いませんよ」

「それはよかった。まずこれ何だけどね……」

「げ、もう夜か」

電化製品について説明していたら夜になっていた。

前に来た時に見た物も説明していたのでこんな時間になってしまった。

「すまない、つい熱中してしまって」

「別にいいですよ」

そう言っつて外の様子を見る。

どの辺りで野宿をするか龍也は考える。

「あ、泊まっつていくかい？」

龍也が考えていると、霖之助からそう声が掛かる。

「いいんですか？」

「こんな時間まで引き止めたのは僕だからね」

そう言われた逆に遠慮するのもあれであろう。

「それじゃ、泊まっつていきますね」

そうして、この日は香霖堂に泊まっつて行く事にした。

放浪編 その13

香霖堂を出て幾日か過ぎた。

龍也は正確な日数は覚えていない。

そしていつの間にか季節は秋から冬になっていた。

今日と今日とで幻想郷のどこかを歩いている。

龍也は今現在、非常に悩まされている。

それは、

「寒ッ!!!」

吹雪である。

最初は雪が降ってきたので龍也はもう冬かと思った。

そこまではよかった。

段々と雪の量が増え、明日は積もるなと思いながら龍也は歩いていた。

その時はそれほど重く受け止めなかった。

だが、気付いたときには猛吹雪になっていた。

何時の間にか足が埋まるほどに積もっている。

そして少し先が殆ど見えない。

「くそ、人里か香霖堂で防寒具を買っておけば良かった」

今の龍也の格好は学ランである。

コートもマフラーも付けていない。

龍也は寒さにある程度は強い方だが、この状況下でその格好は普通に自殺行為である。

それなのに無事であるのは偏に能力のお陰であろう。

龍也は今、朱雀の力を使って両腕に炎を纏わせている。

これで寒さに耐えているのである。

能力が無ければ倒れて凍死していたかもしれない。

「にしても、ここどこだよ？」

適当に歩いていたことが災いした。

自分が今居る場所がわからない。

これではどこかに行って吹雪が止むまで待つという事ができない。

どこかにすっ飛んで行って、そこがハズレだったら目も当てられない

い。

余計な体力を消費するだけだ。

かと言ってこのままここに留まれば雪に埋もれてしまっただめさるじ。

「……………歩くしかないか」

そう言いながら足を進める。

どれくらい歩いたであろう。

一向に吹雪が止む気配が無い。

いい加減疲れたのでどこかで休みたいと龍也が思った時であった。

「ッ!？」

襲撃を受けたのは。

その事に龍也が気付いた時には痛みが走る。

どうやら脚を切り裂かれたようである。

脚から血が流れ落ちる。

「……動くのには支障はないか」

少し脚を動かして状態を確認し、問題なしと判断する。

この吹雪で姿が確認しづらいが獣タイプの妖怪であるようだ。

体毛は白。

一体だけでは無く、まだ他にもいるようである。

龍也は炎の剣を二本生み出し、構える。

「ぐっ!？」

その瞬間に背後から妖怪の一体が現れて龍也の肩口に噛み付く。

そこから血が漏れ出す。

龍也が体を動かして何とか振り落とすが、その瞬間にまた別の妖怪が攻撃を仕掛けてくる。

それに何とか反応し炎の剣を振るう。

だが、

「外した!?!」

外してしまう。

その事に驚愕している間に別の妖怪に背中を切り裂かれる。

その切り口から血が流れる。

そして龍也は気付く。

波状攻撃を仕掛けられていると。

相手はジワジワと攻撃を仕掛けて龍也の体力を奪っていった。

そして龍也の体力が尽きたところで食べようと考えているのである。

打開策を考えなければなるまい。

龍也はそう考えて炎の剣の出力を上げる。

そして両手を広げて高速で回転する。

これで少なくとも妖怪達は攻撃を仕掛けられないはずである。

事実、龍也が回転している間は妖怪達が襲って来る気配がない。

これで撤退してくれば良かったが、それはなかった。

龍也の目にはその場で待っている妖怪達の姿が見える。

ならば、その間に考えなければならぬであろう。

そしてまず、現状の確認から入る。

相手はからは自分の姿を容易に確認が出来ているようである。

対して龍也からは殆ど確認が出来ていない。

相手は攻撃し放題であり、こちらは迎撃が精一杯。

しかもその迎撃の精度は低いと来た。

適当に攻撃を放つても外れてしまうであろう。

ここまで龍也は考えて……疑問が沸く。

確認しづらいと考えたが何故、先程妖怪達の状態を確認できたか。

答えは自身の生み出した炎の剣にあった。

これが雪を蒸発させているのだ。

雪が無ければただ風が強いだけ。

相手の姿を確認するのも容易であろう。

だが、炎の剣では範囲が不十分だ。

ならば範囲を広げる方法をとればいい。

龍也は二本の炎の剣を消し、両手から火炎放射を生み出す。

するとどうだろう。

かなりの広範囲が見やすくなった。

更には積もっていた雪も解けていった。

これならば足を取られる心配も無い。

そして龍也は回転するのをやめ霊力を解放する。

まず、一番近くにいた妖怪に肉迫し、炎の剣を二本生み出すと同時に斬り掛かる。

一匹仕留めたと瞬間にに次の妖怪を確認し、肉迫して斬る。

これを再び吹雪で視界が塞がれるまで繰り返す。

そして吹雪で再び視界が塞がれるとその場に留まり両手を広げて高速回転する。

回転している間に周囲の状態を確認する。

「……………逃げたか？」

龍也の目には妖怪の姿が映っていなかった。

先程の攻撃で仕留め切れなかった妖怪もいたので、居ないと言う事は逃げたものだと言ったと龍也は判断した。

回転を止め、霊力の放出を止めて龍也は一息入れる。

「今回は危なかったなあ」

この猛吹雪の中の襲撃に波状攻撃。

機転が回らなければかなり危なかったであろう。

普段であれば龍也もここまで苦戦はしなかった。

だが、この猛吹雪が妖怪達の手助けをしていた。

「自然の脅威……………か」

常に野生や自然と共に生きている存在にはこれぐらいはそれ程マイナスにはならないようである。

その事を理解した龍也はより気を引き締めて、再び歩き始めた。

気付くと龍也は周囲が木々で囲まれている場所に居た。

「ここは……魔法の森の中か？」

周囲の景色を見渡し龍也はそう判断した。

この木々のお陰で周囲の景色が見やすい。

木が雪の入りをある程度阻害してくれているからだ。

龍也は火が回りに燃え移らないように火力を下げて歩く。

吹雪が止むまでは魔法の森の中に居た方が安全かもしれない。

そう思い、生み出していた炎を消し、歩くの止めてその場に留まる。

しばらくブーツとしていると近くで何かが動く音がした。

龍也はその音が発生したほうを見る。

「な……」

そこに居たのは茸だ。

全てが白い。

そこまではいい。

そして普通の茸より何十倍も大きい。

まだ、ここまでならいい。

問題は手があり足があり、おまけに目と口まである。

茸型の妖怪で間違いないだろう。

あまりの風貌に龍也が唾然としてみると、その妖怪は襲いかかってきた。

その事に気付いた龍也は咄嗟に後ろに跳んで回避する。

だが、

「あだ!？」

後ろにあった木に激突してしまう。

その事態に怯む龍也。

それを好機と見たのか、茸の妖怪は追撃を掛けて来た。

龍也を頭から丸齧りするように。

龍也は咄嗟に茸で言う傘の部分を両手で押さえて食われまいとする。

この寒さで体の動きが鈍くなっているのか、力が入り切らないからなのか

龍也が徐々に押され始める。

龍也が茸の妖怪の顔を見るともう勝った気である。

「調子に乗るんじゃ……ねえ!!」

そう言い放ち、龍也は両手から炎を生み出す。

それをまともに受けた茸の妖怪は断末魔の悲鳴を上げながら燃えていく。

何とか逃げようとするも、龍也が押さえているのでそれもできない。

そして、最終的に燃え尽きて燃えカスとなる。

それを確認して、その場から離れようとした瞬間、

「うばふ!?!」

頭上から雪の塊が降ってくる。

先ほど龍也がぶつかったせいであろうか。

木の上にあった雪がバランスを崩して降ってきたのは。

「ぶはあ!?!」

龍也が雪の中から這い出てくる。

そして完全に雪の中から這い出ると再び両腕に炎を纏わし足を進める。

この場に留まるのは危険と判断したからだ。

そして数時間後。

「どっかに洞窟か何かないかな」

龍也はまだ魔法の森の中を彷徨っていた。

心なしか吹雪が強まってきた感じがある。

「はぁ……」

体力も大分無くなって来た。

その事を感じながら龍也は歩く。

しばらくすると少し広い場所に出る。

周りに雪を遮る物が無いので視界が悪くなる。

そんな中、龍也の目は建物らしき物を捉える。

吹雪が止むまで中に入れてもらえるかと思い、その建物に近づく。

そしてドアの前に着き、纏っている炎を消しノックをする。

少しするとドアが開かれる。

「誰かと思ったら龍也か」

「魔理沙」

魔理沙が出てきた事に龍也は少し驚く。

「ここって魔理沙の家だったのか」

「そうだけ」

魔理沙が魔法の森に住んでいると言う事を龍也は思い出す。

「とりあえず、入っていくか？」

「ああ」

そして、龍也は力を消して魔理沙の家に入っていく。

「あ、雪は玄関で落としてくれよな」

「ああ」

玄関で雪を落としてから中に入っていく。

そして居間らしき部屋に入ってくる。

「散らかつてるな」

足の踏み場が無いわけではないが、かなりごちゃごちゃしている。

「これはこれで整理されているんだぜ」

そう言いながら魔理沙がカップを持って現れる。

「ほ」

そう言ってカップを龍也に手渡す。

中身はコーヒーのようだ。

「砂糖とミルクはいるか？」

「いや、ブラックのままでもいい」

そしてそのまま飲む。

「それで何でこんな天候の時に歩いていたんだ？」

「ああ、実はな……」

そうして近くにあった椅子に座り、龍也は雪が降り出し気付いたらこうなっていた事を説明する。

「なるほどねえ……」

そう言いながら魔理沙が自分の分のコーヒーを飲む。

「降り始めた時に人里なりどっかに行けば良かったんじゃないか？」

「俺もそう思う」

「まあ、普通はここまで吹雪くとは思わないからな」

魔理沙が窓の外を見ながらそう呟く。

「そう言えば今気付いたんだが怪我してるな」

「ああ、何度か妖怪に襲われたからな。この吹雪のせいで戦いづらかったぜ」

そう言うと怪我をした部分から痛みが走る。

今までこれと言った痛みを感じなかったのは怪我の事を意識していなかったせいであろうか。

その痛みを龍也が若干顔を歪める。

「やれやれ、ちょっと待ってる」

そう言って魔理沙が席を立つ。

そして救急箱を持って戻ってくる。

「ほら、薬塗ってやるから服脱げ」

「ああ」

そう言われて龍也は学ラン、ワイシャツ、シャツを脱いでいく。

「思ったより傷口は深くないな」

そう言いながら魔理沙は薬を塗っていく。

「それって傷薬か？」

「ああ、私が適当に調合した薬だ」

「……ちょっと待て」

今の魔理沙の発言は龍也にとって聞き逃せないものであった。

「今、適当にって言ったか？」

「そうは言ったが、ちゃんと効果はあるぜ」

「本当か？」

「本当だぜ。まあ、本来は別のを作る予定だったんだが何故かこうなってるな。で、効果を調べたら結構使えそうな気がしたんで取って置いたんだ。よかっただろ」

「ああ、ありがとな」

実際こうして治療して貰ったので龍也は礼を言う。

「本来は何を作ろうとしたんだ？」

「魔法に使う触媒をな。ちなみにこれの調合法は実験ノートに書いてあるから、作って欲しかったら有料で受け付けるぜ」

「……そういえば何でも屋をやってるんだっとな」

「おう。この店の名前は霧雨魔法店だぜ」

「ま、薬の件は考えておく」

「そうしてくれ」

「そういや、ちゃんと実験ノートとか取っているんだな」

部屋の惨状を見てそういう事をするようには見えなかった
ので、龍也は今更ながら内心で驚いた。

「当然だぜ。今までの実験で発生した条件や効能、効果、使用した
物の名前と形状は全部書いてあるぜ。見返した時にそこから閃く事
とかあるしな。」

魔理沙がそう答える。

「後、実験に必要なのは柔軟な思考と発想だぜ」

付け加えるようにそう言う。

「よし、終わり」

そうしている間に魔理沙が龍也の体に包帯を巻き終える。

「へえ、うまいもんだな」

自分の体に巻かれた包帯を見て龍也はそう感想を漏らす。

「
へへ」

それを聞いた魔理沙が嬉しそうな顔をする。

「他にはあるか？」

「ああ、後は脚だな」

龍也はそう言って自分の脚を見せる。

「よし」

そう言って魔理沙が脚の治療を始める。

その間に龍也は脱いでいた物を着る。

少しすると、脚の治療が終わる。

「よし、終わり」

「ありがとな」

「おう、どういたしましてだぜ」

そして外の様子を見るがまだ吹雪いている。

「まだ吹雪いてるな」

「ああ」

流石にこの中を再び歩いて行く気は龍也には無い。

「あ、それぞれ食べる物作るけど龍也も食べてくか？」

「いいのか？」

「ああ、一人分作るのも二人分作るのも一緒だから」

そう言われると空腹感を感じる。

龍也は結構な時間何も食べてなかった事を思い出す。

「じゃ、よろしく」

「よろしくされたぜ」

そう言って魔理沙は台所に行き、料理を作り始める。

その間、龍也は外の景色を見て待つ事にした。

「ご馳走様」

「お粗末様だぜ」

魔理沙が作った料理は茸料理だ。

龍也は茸が好きなんだなと思った。

前に博麗神社に来た時に持って来たものも茸であったし。

その後二人で雑談しながら過ごす。
酒を飲みながら。

しばらくすると眠くなってくる。

「ふわ……眠くなってきたな」

「そうだな」

その事に龍也も同意する。

「龍也の寝る場所……どうしよ」

部屋の状態を見て魔理沙がそう漏らす。

「俺は椅子でいいよ」

その事に龍也がそう答える。

泊めて貰う立場である以上贅沢は言えない。

「いいのが」

「ああ」

そう言うと魔理沙が部屋に行って毛布を持ってくる。

そしてそれを龍也に渡す。

龍也は礼を言っ て自分に毛布を掛けて寝る体勢に入る。

そして魔理沙が明かりを消す。

「おやすみ」

「おやすみ」

そう言った後、魔理沙は自分の部屋に戻る。

そして龍也は目を閉じて眠り始める。

放浪編 その14

「これ、どこに置いとけばいい？」

「そっちの机に置いといてくれ」

「了解」

龍也は今、魔理沙の家で片づけを手伝っている。

つい先ほど、魔理沙の実験が失敗して暴発。

幸い魔理沙も龍也も怪我はしなかったものの、その衝撃で色んな物が錯乱した。

なので、その片づけをしているところだ。

持っていた物を机に置いて、床に散らばっている本を拾う。

「この本はどうする？」

「あー……そっちの本棚に適当に入れておいてくれ。並び替えは後で私がやるからさ」

「了解」

そう言われて本を本棚に入れていく。

本を入れている最中にそういえばと龍也は思い出す。

これらの本の殆どがパチュリーの物だとか。

これの事を龍也が魔理沙に聞いたところ、死ぬまで借りてるだけとの事。許可を得ずに。

龍也は最初はおいおいと思ったが、話を聞くところ取り返しに来てはいないとの事。

そうならば、パチュリーは魔理沙が本を持って行く事がある程度黙認しているのではないかと龍也は思った。

もしそれを許さないと思っているのであれば紅魔館への立ち入りを禁止するなり、咲夜に取り返して来るように頼めばいい。

咲夜の時間停止の力を使えばそれくらい容易であろう。

「しかし、止まないな」

本を本棚に入れながら、龍也は外の様子を見ながらそう漏らす。

止み始めたと思ったら、また吹雪き始める。

それが何度繰り返されたか。

もう何日も魔理沙の家にお世話になってる。

その間、雑用したり雑談しながら過ごしたりしているのでそこまで退屈はしていない。

勿論、実験中の魔理沙の邪魔はしないようにしているが。

もしかしたら邪魔をしなかったから暴発したのかもしれないが。

「こっちは終わったぞ」

「私の方も終わったぜ」

そう言いながら、実験で破損した器具を机に置く。

「これ、取っておくのか？」

「おう。何かに使えるかもしれないからな」

「ふーん……」

龍也には何に使うかわからなかった。

魔理沙が言うからには何かに使えるのだろう。

もしかしたら香霖堂に売りつけるつもりなのかもしれないが。

「そろそろご飯作るつもりだけど、何かリクエストあるか？」

魔理沙が突然そう切り出す。

そう言われると、空腹感があるように龍也は感じる。

「んー……魔理沙に任せる」

「りょーかいしたぜ」

そう言いながら、魔理沙は台所に向かう。

「おー、晴れた」

あれから魔理沙の作った料理を食べて、雑談して、ブーツとして、交代で

風呂に入って、また魔理沙に傷薬を塗って貰って包帯を巻いて貰い、その

後また雑談して、また一泊して起きて、魔理沙の作った料理を食べ
て外の
景色を見たら見事に晴れていた。

太陽が懐かしい感じがする。

「いやー、晴れて良かったぜ。そろそろ食料が無くなりそうだった
し」

魔理沙がそう言う。

「じゃあ、これから人里辺りで買い込むつもりなのか？」

「ああ、大急ぎでな。今やってる実験がいいところなんだ」

そう言えば自分が眠り始めた頃に何かやっていたなと龍也は思い出
した。

「と、龍也にこれ渡しておくのを忘れてたぜ」

そう言いながら魔理沙が机の引き出しの中を探る。

そして取り出した物を龍也に投げ渡す。

「おっと……こいつは？」

「ほら、この前の傷薬だ」

「ああ」

結局あの薬を魔理沙に作ってもらったのだ。

その薬が出来た時は龍也が寝ていたので、後で渡せばいいやと魔理沙は思ってた。机の引き出しの中に入れておいたのだ。

色々あってその事を今まで忘れていたようだ。

「代金は……もう渡していたよな」

「ああ、貰ってるぜ」

忘れたら困るので龍也が予め渡しておいたのだ。

その薬を学ランの内ポケットに入れて、二人揃って外に出る。

「龍也はどうするんだ？」

「俺は歩いてのんびり行くよ。これだけいい天気ならしばらく吹雪かないだろうし」

「それもそうだな」

そう言いながら魔理沙が箒に跨って浮かび上がる。

「それじゃ、またな龍也」

「ああ、またな魔理沙」

そうして魔理沙は人里目掛けて飛んで言った。

「さて、俺も行くか」

そして龍也も歩き始めた。

そして、数時間後。

「まただよ」

猛吹雪になっていた。

先ほどはあんなに晴れていたのに。

「山の天気は変りやすいと聞くが、森の天気は変りやすいとは聞いた事無いぞ」

朱雀の力を使って腕に炎を纏わせながら龍也は森の中を歩く。

火が燃え移らないよう細心の注意を払いながら。

しばらく歩くと休めそうな場所を発見する。

心なしか、他よりの場所より風が来ないようだ。

龍也は腕に纏わせた炎の消して近くにあった木に寄りかかる。

そして溜息を一つ吐く。

その後周囲を見渡す。

「……………ん？」

目を擦りながらもう一度見る。

龍也の目がおかしくなっていないければ切り株が近づいている。

その切り株を見ていると、いきなり足が生える。

そして口が現れる。

どうやら切り株の妖怪のようである。

「おい……まさか」

そこまで言うと切り株の妖怪が跳躍し、龍也に突撃して来た。

「うおおー!!」

龍也は急いでその場から離れる。

その切り株の妖怪は木に激突する。

そしてその木は押し折れる。

かなりの力で突撃したのだろう。

その切り株の妖怪はグルリと龍也の方に振り返る。

戦闘は避けられないようだ。

そう思い、龍也が炎の剣を生み出そうするがそれをやめる。

何故かと言うとあの切り株の妖怪が燃え尽きるまで時間が掛かり
そうであるからだ。

この間の草の妖怪はすぐに燃え尽きたが、あの切り株の妖怪はそうは
いかないであろう。

暴れられて火か燃え移って火事になったら目も当てられない。

そこまで考えてどうしようかと思っていると、切り株の妖怪が再度

突撃してくる。

龍也は横に跳んで回避する。

また木に激突し、木を押し折る。

切り株の妖怪の方は何のダメージも受けていないように見受けられる。

この事から耐久力もそれなりにあると思われる。

これ以上この相手に暴れられれば森が滅茶苦茶になるであろう。

一撃で決めなければなるまい。

そう思い龍也は自身の力を変える。

朱雀の力から青龍の力へと。

それと同時に龍也の瞳の色も紅から蒼へと変る。

そして龍也は両手を合わせて通常より大きい水の剣を生み出す。

そして構える。

切り株の妖怪が再び突撃してくる。

龍也は自分の間合い入って来るのをジッと待つ。

そして自分の間合いに入って来た瞬間、

「フツ!!!」

腕を振り下ろす。

水の剣は何の抵抗もなく切り株の妖怪を斬っていく。

そして切り株の妖怪は真つ二つになり絶命する。

「ふっ」

龍也は一息いれて水の剣を見る。

「よかった、やっぱり氷らなかった」

龍也は安心したようにそう言う。

この寒さの中だ。

水の剣を振るえば水の剣が氷ってしまうのではないかと言う
懸念事項があった。

だがそれは杞憂のようであった。

水の剣を生み出し、維持しているのが龍也であったからかもしれな
い。

そう考えていると風が吹き込んでくる。

「寒ッ！！」

龍也は水の剣を消して自身の力を変える。

青龍の力から朱雀の力へと。

それと同時に龍也の瞳の色も蒼から紅になる。

そして龍也は腕に炎を纏わせる。

また襲われたら堪ったものではないので、龍也は再び歩き始める。

そして数時間後。

吹雪は一向に止む気配がない。

上空から人里か魔理沙の家に行こう思ったが、上空は視界が酷い。

一面真っ白と言っくらいに。

それに比べて森の中の方が視界がいい。

なので龍也は森の中を歩いて行く事にした。

そしてしばらく歩いて行くと広い場所に出る。

魔理沙の家かと思ったが、どうやら違うようだ。

とありえず中に入れてくれるかと思ってドアをノックする。

少しするとドアが開かれる。

「あら、龍也じゃない」

「アリス」

中から出てきた人物はアリスであった。

「ここアリスの家だったのか」

「ええ、そうよ」

そう言っ後、アリスは龍也の姿を見る。

「上がったく？」

「うん」

そう言っ龍也はアリスの家の中に入っていく。

「雪は玄関で落としてね」

「ああ」

そして玄関で雪を落として居間に向かう。

居間に入るとアリスの人形がトレイを持ってくる。

その上にはカップが二つ。

中身は紅茶のようだ。

「体冷えてると思ったから……迷惑だった？」

「いや、ありがとう。助かるよ」

そう言っカップを取っ紅茶を飲む。

「うまい」

「ありがとう」

そう言つてアリスもカップを取つて紅茶を飲む。

「それで、何でこの吹雪の中で歩いていたの？」

「あ、何か軽いデジャヴが」

「デジャヴ？」

「いや、何でもない」

そして龍也が事情を話し始める。

「なるほどね……」

「幻想郷つて頻繁に吹雪が起こったりするの？」

「そんな事ないわよ。偶々だと思つわ」

「偶々ね……」

嫌な偶々もあつたものである。

アリスが飲み終わったカップをトレイの上に置いたので、龍也も飲み終わったカップをトレイの上に置く。

するとアリスの人形がそれを持ってどこかに向かつていく。

おそらく台所であろう。

本当に便利である。

その後、龍也はアリスと雑談をする。

「あら、貴方の着ている服、破けてるじゃない」

「ああ」

そういえば洗濯はしたけど、破れたのはそのままだったなと龍也は思い出す。

魔理沙の家で風呂に入るついでに洗濯をしたのだ。

時間が掛かると思ったが、かなり早く終わった。

魔理沙がミニ八卦炉を使って乾かしてくれらからだ。

どうもあれは、とろ火から山を焼き払う火力まで出せるのだとか。

龍也の学ランなどが早く乾いたのはその応用だそうだ。

魔理沙曰くミニ八卦炉の無い生活は考えられないとの事。

それは兎も角、破れていた部分は龍也も忘れてたし、魔理沙も気にしていなかったのものでそのままであった。

その辺りの事をアリスに説明する。

「あの子はその辺り無頓着だからね」

アリスがそう呟く。

「もうお風呂の準備が出来てるから、貴方が入っている間に直そう
と思っ

ているのだけど、いい？」

「それはありがたいけど、と言うか風呂まで」

「その破れた部分を直すの位は大した手間ではないわ。それに体を
冷やした

ままだと風邪引くわよ」

ここまで言ってくれているのだ。

ここは好意に甘えておくべきだろう。

「わかった、よろしく頼むよ」

「ええ、任せて。お風呂場までは上海に案内させるから。その後服
を上海に

渡して。直り次第また上海に持っていかせるから」

アリスがそう言うと、アリスの人形が一体動き出す。

あれが上海であろうか。

「わかった」

そう言って龍也は上海の後に付いて行く。

そして脱衣所に着いたので服を脱ぎ始める。

縫う時に邪魔になるだろうと思いポケットに入れておいたものを出す。

その後、学ランとワイシャツとシャツとズボンを上海に預ける。

それを受け取った上海は脱衣所を出て行く。

そして体に巻いていた包帯を取り、トランクスを脱いで、龍也は風呂に入る事にした。

浴槽は西洋タイプのような。

この辺りは魔理沙の家と同じだなと思いつつながら、龍也は体を洗い始める。

そしてその時気付く。

自分の体に付いていた傷がもう完治していた事に。

もう少し掛かると龍也は思っていたが、こつとも早く直ったのは魔理沙の傷薬のお陰であろう。

まあ、調合した物はそれなりに希少価値があったものようだったので
それなりの金を支払ったが。

でも良い買い物をした龍也は思った。

体を洗い終わった後、湯船に浸かる。

どのくらいで終わるかはわからないが、少しはゆっくりした方がいいであろう。

そのまま暫くボーツとする。

どれくらい経ったかわからないが、もういいだろうと思いき龍也は浴槽を出る。

脱衣所に戻ると、学ランなどが戻ってきていた。

体を拭いた後、学ランを手に取ってみる。

「おー、綺麗に直ってる」

龍也がそう感想を漏らす。

縫い後を見つける事も出来ないほどだ。

アリスに感謝しつつ服を着ていく。

ポケット等に物をしまい、ベルトに紅い鎖を巻きつけて懐中時計をポケットに入れて龍也は脱衣所を後にする。

そして居間に移動する。

「綺麗に直してくれてありがとうな」

「どういたしまして」

そして龍也はアリスの対面の位置に座る。

「もう少ししたらご飯ができると思うけど、食べれない物って無いわよね？」

「ああ。それにしても、ご飯の面倒まで見てもらって悪いな」

「別に構わないわ。あ、そうだお願いがあるんだけど……」

「何だ？　ここまで世話になったんだ。俺に出来ることなら何でもするぞ」

「外の世界の人形……貴方の言うロボットの事を話して貰えないかしら？」

「前に言わなかったか？」

「ああ、言葉が悪かったわね。お話の中のほうよ」

「別に構わないけど、それでいいのか？」

「ええ、その中に何かヒントとなるものがあるかもしれないし」

「わかった」

そして、龍也は話の中にあるロボットの事を話し始めた。

「と、まだほんの一部だけどこんな所だな」

「色々あるのね。ロボットの中に入って操縦するタイプ。金属で出来た生命体。

骨組みとなる物にパーツを付け、そのパーツを組み合わせるロボット……」

「まあ、操縦するタイプはアリスの言う完全自立人形とは違うけどな」

「でも、色々と参考になったわ」

アリスがそう言つと、料理が運ばれてきた。

「それじゃ、食べましょ」

「ああ」

そして出された料理を食べる。

「ごちそうさま」

食べ終わるとアリスの人形が食器を持って台所へ向かう。

「それじゃ、続きを聞かせて」

「ああ」

そうして籠也はまた続きを話し始める。

「あら、もうこんな時間」

アリスが壁に掛けている時計を見てそう漏らす。

「ごめんなさいね、こんな遅くまで付き合わせて」

「いや、構わないよ。世話になっているのは俺なんだから」

「ありがとう。あ、貴方の寝る場所は上海に案内させるわ」

「わかった、おやすみ」

「ええ、おやすみ」

そして龍也は上海の後に付いて行く。

ドアの前に着き、上海がドアを開ける。

「ここか」

綺麗な部屋である。

アリスかアリスの人形が掃除をしてくれたのだろうか。

「案内、ありがとな」

そう言っつて上海の頭を撫でる。

心なしか喜んでいように見える。

上海が出て行った後、学ランを脱いで椅子に掛ける。

そしてランプの明かりを消してベットに入る。

目を閉じて龍也は眠り始める。

放浪編 その15

「ん……」

龍也は目を覚まし。半身を起き上がらせる。

そして周囲を見る。

「……ああ、アリスの家に泊まったんだっけか」

昨日の事を思い出しながら、龍也はベッドから降りる。

そして体を伸ばす。

あれ程度体を解し終わった後、椅子に掛けてある学ランを羽織る。

そして扉を開けて、居間に移動する。

居間に行くと、アリスがテーブルに料理を並べていた。

「おはよう」

「おはよう。丁度よかったわ、朝ご飯できたから起こしに行こうと思ってたところなの」

そう言いながらアリスは椅子に座る。

「さ、冷めないうちに食べましょ」

「ああ」

そして龍也も椅子に座る。

「いただきます」

そして龍也は料理を食べ始める。

「いただきます」

アリスも龍也に続いて料理を食べ始める。

軽い雑談をしながら食事を進めていく。

「」馳走様」

しばらくすると食べ終わる。

「お粗末様。フフ、やっぱり男の子ね。いつもより量を多くしてよかったわ」

アリスが少し笑いながらそう言う。

龍也の食べっぷりに感心していたのだろう。

そして、また軽い雑談をする。

その間にアリスの人形が食器を台所に運んでいく。

そして数十分後、龍也が尋ねる。

「そついや天気はどうなつたんだ？」

「そつね……」

アリスは立ち上がりカーテンを開けて外の様子を確認する。

「吹雪は止んだみたいね」

「そつか」

そう言いながら龍也は立ち上がる。

「もう行くの？」

「ああ、これ以上長居しても悪いからな」

そう言つて龍也は玄関に向かう。

「あ、ちよつと待つて」

アリスが龍也を呼び止める。

何かと思つて龍也は振り返る。

「貴方に渡す物があるの」

「俺に？」

そう言つとアリスは何かをとりに行く。

龍也は何だろうと思いながら待つ。

少しすると、アリスは何かを持ってくる。

「はい、これ」

そしてそれを龍也に手渡す。

「これは……」

「防寒具と手袋とマフラーよ」

アリスが手渡したのは防寒具と手袋とマフラーであった。

「昨日の夜、作っておいたのよ」

「いいのか？」

何やら高価そうな感じがすると龍也は思う。

「ええ、昨日のお礼よ」

「昨日……もしかしてロボットの話の事か？」

龍也はあの程度の事だと思った。

「私にとっては貴方の話はとても有意義なもので、色々と参考になったからね」

「そうか……なら、ありがたく貰っておくよ」

龍也はそう言いながら防寒具を着込み、手袋を着けマフラーを首に巻く。

自分の為に作ってくれた物なのだ。

受け取らなければバチが当るであろう。

「うん、似合っているわよ」

アリスの造形センスは知っているので、自分に似合うように作ってくれたのだなと龍也は思った。

「ありがとう、大切にするよ」

そして龍也は礼を言い、ドアに手を掛ける。

「それじゃ、またな」

「ええ、またね」

そうして龍也はアリスの家を出る。

「はは、こりゃ暖かいや」

魔法森を抜け、雪道を歩いている龍也はそう感想を漏らす。

寒さを殆ど感じる事がない。

これなら多少吹雪いても朱雀の力を使わなくてもいいだろう。

アリスに感謝しつつ、龍也は足を進めていく。

そして歩きながら景色を楽しむ。

一面、雪で覆われた景色。

雪が太陽光を反射してキラキラと光っている。

白銀の世界とはこういつの言つのであろうかと龍也は思つ。

そんな事を考えながら歩いていると、

「あら、こんな所に人間がいるなんて珍しいわね」

不意に声を掛けられる。

「誰だ……あんだ？」

「そう言う場合、まずは自分から名乗るものじゃない？」

「そう……だな、俺は四神龍也だ」

「私はレティ・ホワイトロックよ」

龍也が名乗ると白い髪の女性もそう名乗る。

「それで、何か用か？」

「あら、妖怪は人間を襲うものよ」

レティはそう言う。

その発言に龍也は妖怪だったのかと驚く。

落ち着いてみれば、幽香や美鈴みたいな感じを受けると龍也は思った。

レティの顔を見れば襲つ気満々のようである。

その様子を見て、龍也は不敵な笑みを浮かべる。

「いいぜ、襲つても。だが、簡単にやられるつもりは無いけどな」

そう言いながら龍也は霊力を解放する。

すると、レティは驚いた顔をする。

「？ どうした？」

「いえ、強い男の人なんて幻想郷じゃ初めて見たかなって思っ」

「……ああ」

そう言われて龍也は納得する。

本能のみで生きている妖怪は別として、今まで戦ったり、戦っているところを

見たのは女性ばかりだったなと龍也は思い返す。

見た目が殆ど子どものチルノだっけかなり強かった。

美鈴、咲夜、レミリア、フランドールは言うに及ばず。

魔理沙と霊夢の弾幕ごっこの風景を見て、あの二人は相当の実力者というのもわかる。

まだ戦った事も、戦っているところも見たこと無いが、幽香、アリス、

パチユリー、椀も強いというのはわかる。

そこまで思い返して、強い男は見た事無いなと龍也は思った。

霖之助は以前泊まったときに本人の口から強くないと聞かされていた。

「やっ……」

そう言って龍也は思考に耽っていた頭を切り替える。

レティの顔つきも先ほどと少し変っている。

どうやら戦いは避けられないだろう。

幽香が言うにはこうやって会話ができる相手は基本的に弾幕ごっこで戦う事が

多いらしいが、龍也は一応尋ねておく。

「どう戦う？ 弾幕ごっこか？ それとも普通にか？」

「弾幕ごっこで」

「了解」

そう言うってお互い飛び上がる。

一定の高さまで上昇すると、お互い上昇するのを止める。

「それじゃ、行くわよ」

「ああ、来い！！」

そして、弾幕ごっこが始まる。

先手を取ったのレティだ。

密度の高い弾幕が龍也を襲う。

それを龍也は距離を取りながら避けていく。

そして隙を見つけては数発の霊撃を放つ。

だがそれらはレティに簡単に避けられる。

「あら、弾幕ごっこは慣れてない？」

「悪かったな、まだまだ初心者だよ！！」

そう言いながら龍也は弾幕を避ける。

龍也の弾幕ごっここの経験はそれ程多くない。

取り分け誰かと争う理由が殆ど無かったからだ。

襲ってくるのは本能のままに生きる妖怪ばかりであったと言つのもあるが。

「くっ！？」

弾幕をギリギリで避け、数発の霊撃を放つ。

だが、それも楽に避けられる。

「だめよ、そんな単発で撃ったら。もっと数を増やさなきゃ」

レティからそんなアドバイスが聞いた。

どついう意図かはわからないが、龍也はアドバイスの通りに撃つてみることにした。

「そうそう、そんな感じよ。後はもっと範囲を広くしてみて」

そう言いながらもレティは弾幕の手を休めない。

龍也は移動しながら弾幕を放つ。

龍也の放った弾幕はレティの放った弾幕の一部を相殺するも、龍也の弾幕は

広く展開しながらレティに向かっていく。

「そうそう、そんな感じよ。飲み込みが早いわね。弾幕ごっこの通常弾幕はそうやって範囲を広くするのがコツよ」

龍也の弾幕を避けながらレティはそう言う。

「どついつもりだ？」

龍也は一旦弾幕を放つのをやめてレティに尋ねる。

「何かかしら？」

レティも一旦弾幕を放つのをやめてそれに応じる。

「わざわざ俺にアドバイスを送るなんてよ。言わなければ楽に戦えたはずだぜ」

龍也はそこがわからなかった。

なぜわざわざ敵に塩を送るまねをしたのか。

「そんなの簡単よ」

レティが笑顔で答える。

「弾幕ごっこなんだから、楽しまなきゃ損よ」

ようは楽しみたいから。

異変解決のための弾幕ごっこではないから敵に塩を送る事ができるようだ。

「そうかい……なら!!」

そして、龍也は大量の弾幕を放つ。

「遠慮する必要はないな」

「ええ、遠慮する必要はないわ」

レティも弾幕を放ち始める。

そして互いに弾幕を放ち避けていく。

「やるわね、本当に初心者？」

龍也の弾幕を掠らせながら、レティはそう言う。

「ああ、初心者だよ」

レティの弾幕を避けながら龍也はそう答える。

龍也の放つ弾幕は直線的。

これだけなら避けるのは容易い。

だが、速度が速く数が多く密度もある。

避ける方向を間違えれば立て続けに喰らうであろう。

撃ってる本人はそんな事を考えていないであろうが、この短時間でここまで

できている。

中々センスがあるとレティは思った。

「少し、本気を出すわ」

そう言うレティに龍也は警戒し、距離を取る。

だが何か別段変わった様子はない。

「何も変わっていないようだが？」

「すぐにわかるわ」

そして再び弾幕を放ち、避ける。

しばらくすると、

「ッ!？」

レティの放った弾幕が龍也の頬を掠る。

そして段々と掠る回数が多く。

だが、レティの放つ弾幕が速度が速くなったわけでも密度が高くなったわけではない。

だと言うのを避けれたものが掠り始める。

つまりは、

「俺の動きが鈍くなったのか……」

と言う結論を龍也は出す。

だが何故と龍也が思った瞬間に気付く。

「何だ、この寒さは……」

気温が下がっている事に。

「気付いたみたいね」

そしてレティが口を開く。

「私の能力を使ったのよ」

「能力？」

「そう、私の能力は”寒気を操る程度の能力”」

「それで気温を下げて俺の動きを鈍くしたって訳か」

「正解。でも中々効かないからってつきり寒さを感じないのかと思っ
たわ。

貴方の着てるそれ、相当防寒性能が高いみたいね」

そう言われて龍也は自分の着ている防寒具を見る。

アリスが作ってくれた物だ。

龍也はこんな性能のいい物を作ってくれたアリスに感謝の念を送る。

そして、目の前の相手をどうするか考える。

だが、寒さのせいで龍也の頭がなかなか回らない。

考えを纏め終わる前にレティが行動を起こす。

「それじゃ、いくわよ」

レティはカードを取り出す。

スperlカードだ。

「冬符『フラワーウィザラウェイ』」

そして弾幕が展開される。

最初に花を模った弾幕は形成される。

そしてそれが散っていく。

龍也はそれを見て寒さで散っていく花を連想した。

だが見とれている場合ではない。

龍也は急いで回避行動に移る。

だが、

「ちい!!」

思っていた以上に動きが鈍い。

このどんとんと気温が下がり、寒さが増したせいだ。

そして一発被弾する。

そのせいで体勢が崩れる。

このままでは無防備のまま大量の弾幕を喰らうと思い、龍也は腕を交差させて防御の体勢を取る。

そして立て続けに被弾していく。

「ぐ……」

ダメージはあるものの、まだ戦闘不能にはなっていない。

そして防御の体勢を解いてレティの様子をみる。

再び同じ弾幕が形成されている。

何とかしなければと考える。

寒さで回らなくなっている頭を振り絞って。

「……そう、だ」

そして思いつく。

レティは”寒気を操る程度の能力”と言った。

なら、寒さの逆なら弱点になり得るのではないかと。

再び弾幕が放たれようとしている。

これ以外の手は考え付かないので、龍也は掛ける事にした。

震える手を必死に制御しながらスペルカードを取り出す。

そして、

「炎鳥『朱雀の羽ばたき』」

スペルカードを発動する。

すると龍也の目の前に炎の鳥が現れる。

同時に龍也の瞳の色が黒から紅に変化する。

そして炎の鳥は一声鳴いてレティに向かって突撃していく。

迫り来る弾幕を打ち消しながら。

そして炎の鳥が通った場所に紅い弾幕が生まれ。それが左右に向けて飛んで行く。

宛ら道を無理やり決じ開けているように見える。

それを見たレティは驚き、慌てて回避行動を取る。

炎の鳥はレティを外れて行く。

「驚いた。凄いの持っているわね」

そう言うレティに龍也はレティの後ろに指をさす。

「後ろ、危ないぞ」

「え？」

そう言った瞬間、レティの背中に炎の鳥が激突する。

そしてレティは崩れるように落下していく。

龍也は反射的にレティに近づき、手を掴んで落下を防ぐ。

「あ、暖かくなってきた」

レティを倒したせいであろうか。

段々と暖かくなってきた。

「あ、起きた」

レティが目を覚ましたので龍也が声を掛ける。

「わざわざ起きるまで待っていてくれたの？」

「ああ。ほっとくのも気が引けるからな」

「普通だったらほっといてどっか行っちゃうものなのに」

「そうなのか？」

「そうよ。ふふ、不思議な人間ね」

そして二人は雑談をする。

それでわかったのはレティは冬の妖怪なんだとか。

冬以外は基本的に寝て過ごしているとか。

そして冬になるとテンションが上がり、色んなところで暴れているらしい。

それを聞いて龍也は秋の神様である、秋静葉と秋穰子の二人の姉妹を思い出した。

特定の季節になるとテンションが上がるのが似ているなと思いが
ら。

今は冬なのであの二人はテンションが下がっているのだろうか。

「あー、こんなに喋ったのは久しぶりだわ」

「冬以外寝てるもんな、レティは」

会話を重ねているうちにある程度仲良くなったようだ。

そして龍也は立ち上がる。

「あら、もう行くの？」

「ああ」

「それじゃ、また冬に会いましょう」

「ああ、またな」

「ええ、またね」

そして龍也はレティと別れて歩き出す。

放浪編 その16

「えーと……餅餅つと」

龍也は今、人里に来ている。

餅を探しているからだ。

何故かと言うと、魔理沙から宴会のお誘いがあったからだ。

忘年会と新年会をやるらしい。

と言うわけで龍也も参加する事になり、こうして買出しに来ているわけだ。

ただ、今回は酒をかうつもりはなかった。

何時ぞやの二の舞はごめんであるからだ。

龍也は酒は他の人に任せることにした。

そして餅が売っていきそうな店に辿り付く。

「すみませーん、餅ありますか？」

「ああ、三個残ってるよ」

「三個ですか……」

どうやら来るのが遅かったようである。

どこもかしくも忘年会やら新年会の準備を始めているからでもあるが。

稗田家でも少し前から準備をしていると、先程会った阿求が言っていた

など龍也は思い出す。

兎も角買っておく事にした。

「とりあえず三個ください」

「はいよ」

そして餅を受け取り、代金を払って店を後にする。

「しかたない、虱潰しに探すか」

忘年会、新年会で餅三個はありえない。

餅の買出しが自分に任されている以上、妥協はできない。

来る人数から考えて、最低でもこの百倍は欲しいところだ。

そして、売っていきそうな店を探す事にした。

「ああ、一個残ってるよ」

「ください」

「じめんね。もう売り切れだよ」

「そっぴですか……」

「餅かい？ 十個残ってるよ」

「くださいー！ー！」

「んー……少々出来の悪いのなら五個ほど残っているけど」

「それでいいです」

「残念。さっきのお客さんので完売だよ」

「そうっすか……」

「一個だけなら残ってるよ」

「ください」

「ごめんね、うちは餅を売って無いんだ」

「そうですねか」

「餅？　一セット残ってるけど、買っつ？」

「買います…！」

「餅のお持ち帰りかい？　残り三個ぐらいしかできないけど買っかい？」

「買います」

「餅かい？ それより坊や、やらないか？」

「やりませんし、さようなら。もう二度と来ません」

「餅ならあと五個ほど残っているよ」

「くだらね」

「餅ねえ……君も僕と同じ外来人のようだし、同じ外来人のよしみで
食べようと思ってた餅、二十個程売ってあげるよ」

「ありがとうございます」

「あーくそ、全然足りない」

それなりに買えはしたが、やはり足りない。

この数では、宴会開始一時間もしないうちに餅は尽きてしまっただろう。

「こんな事なら安請け合いするんじゃなかったな」

そう言いながら博麗神社であつた事を思い出す。

魔理沙にお呼ばれして一緒に博麗神社に向かつて宴会の準備を手伝った。

その過程で餅が無い事が発覚。

しょうがないので自分が餅の買出しを買って出た。

年末年始の時期なので、集めるのに苦労すると思つたがここまでとは。

かと言って、諦めるのも投げ出すのも気に入らない。

「あと、どっかに売ってそんな場所ないかな……」

そう呟きながら、考える。

人里の店は殆ど見た。

後は民家にでも行って頭を下げて譲ってもらおう方法が思いつく。

基本、人里に住んでる人々は人が良い人が多いので譲ってもらえる確立は高いであろう。

だが、人の良さに付け入るのも気が引ける。

「うーん……」

中々考えが纏まらない。

そろそろ日が落ち始める頃なので、急いだ方がいいであろう。

「……そうだ!!」

そこで龍也は思いつく。

「香霖堂だ香霖堂」

香霖堂なら売っているのではないかと思いつく。

あそこは色々と売っているので餅も売っている可能性がある。

「でもなあ……」

そこまで考えるが不安要素もある。

色々売っていると書いても基本道具関連だ。

食べ物も売っているかと言われれば、首を傾げてしまう。

「ま、行くだけ行ってみるか」

そして龍也は里の出口に向かう。

そして出口に着くと、飛び上がって香霖堂を目指す。

「到着つと」

そう言つて龍也は地面に降り立つ。

そして扉を開けて香霖堂の中に入って行く。

「霖之助さん、居ますかー？」

その声を掛けながら店の中を歩いて行く。

「ああ、龍也君か、いらっしやい」

「こんにちは」

霖之助の位置を見つけて、龍也はカウンターまで歩いて行く。

「また何か売りにきたのかな？」

「いえ、今日は欲しいものがあつて来ました」

「欲しいもの？」

「ええ、餅つてありますか？」

「餅か……少し待つてくれ」

そう言いながら霖之助は店の奥に引つ込む。

少し待つと何かを持って戻ってくる。

「これならどうか？ 外の世界の餅なんだけど」

「外の世界の餅ですか？」

そう言いながらそれを受け取って調べる。

見た感じカビが生えていなければ、腐ってもいない。

そして賞味期限が記載されているところを見る。

龍也は自分が幻想入りした年を思い出す。

「……もしかして、これ外の世界でわりと最近作られた物かもしれないですね」

「そうなのかい？ ならなぜこれが幻想入りしたのだろうか？」

霖之助はそう言いながら考え込む。

これは別段忘れ去られる物ではないと思ったからだ。

「もしかすると、作ったはいいが出荷されずに放置されたまま忘れ去られた可能性がありますね」

龍也は自分の考えを言う。

外の世界も今は年末年始である。

「外の世界でもこの時期は色々忙しいですからね」

「なるほど……」

「で、これどれくらいありますか?」

「結構な数はあるよ」

「全部売ってください」

「全部かい?」

「はい」

「うーん……これは食べ物と言っても外の世界の物だからなあ……」

そう言いながら霖之助は考え込む。

外の世界の物は色々と興味があるので、全部とばれば霖之助もあまり
売りたくないようだ。

「なら、値段等々含めて交渉といきましょう」

そして交渉が始まった。

「なら、この外の世界の餅は全て五円で売ることにしてよ」

「ええ、ありがとうございます」

そう言って龍也は五円を払う。

長時間の交渉の末、ようやく買う事ができた。

まずは餅を全部売って貰うところか始まり、値切り。

「あーあ、もう夜か」

そろそろ宴会が始まりそうである。

商品を受け取ったら急いで帰ったほうがよさそうである。

「はい、」要望の品だよ」

そう言いながら霖之助がダンボール五箱持ってきてくれた。

一箱一円と考えれば妥当なところであろうか。

霖之助曰く、見つけた時は最初はもっと数があったようなのだが、
野良妖怪

あたりに食い散らかされたり持っていかれたとの事。

無事だった五箱を持ち帰ったとの事。

「あ、そういえば霖之助さんは宴会には行かないんですか？」

「うん、あまり騒がしいのは好きじゃないからね」

「ああー」

そう言われて納得する。

自分も外の世界に居た頃はそうであった。

基本、家でも外でも一人だった。

誕生日やらクリスマスなどはコンビニでケーキでも買って一人で祝った。

正月も似たようなものである。

あまりにも空しくなったので、いつかは忘れたがやめた。

幻想郷に来てからは、みんなでわいわい楽しむ事も覚えたが。

ま、無理に誘っても悪いだろう。

「それじゃ、また」

「またのご来店を」

ダンボールを五個持って、香霖堂を後にする。

そして博麗神社を目指して飛び上がる。

「到着と」

「あら、遅かったじゃない」

周りを見てみるともう全員集まっているようだ。

「餅は？」

「ああ、この中」

そう言っただンボールを降ろす。

その上に人里で買った餅を置く。

魔理沙はダンボールに興味があるのか、率先してダンボールを開けて中を見る。

「これか？」

「ああ、幻想入りした外の世界の餅だ」

「幻想入りした外の世界の餅って……食べれるの？」

霊夢がそう尋ねる。

「ああ、確認したけど問題ねえよ。焼き方は普通の餅とっしょだ」

「そう」

そう言うと霊夢は袋を開けて餅を焼き始める。

それにつられるように、みんなそれぞれ餅を取って焼き始める。

ビニールなどは幻想郷には無いものなので処理はどうしようかと思
ったが、

後で霊流波などの技で消滅させればいいかと龍也は考える。

「袋は上に石でも置いてその辺に置いといてくれ」

「わかったわ」

そついいながら霊夢が空き袋の上に石を置く。

それを見届け周りを見ると、もう宴会が始まっていた。

自分も食べ始めようと龍也は思い、小皿に砂糖と醤油をいれに行く。

そして龍也も餅を焼き始める。

おせちなどもあるが、主食は餅のようだ。

ちゃんと持ってこれてよかったと龍也は思う。

焼けた餅に砂糖醤油を付けて食べ、近くにあった酒を飲みながら宴
会場を

歩いてみて回る。

「フランドール」

フランドールを見つけたので龍也は声を掛ける。

「あ、龍也」

フランドールの方も龍也に気付いたようだ。

「もしかして、餅食べるの初めてか？」

「うん」

引き籠もってた時期が長かったのかもしれない。

「何かを付けて食べるんだけど、俺の砂糖醤油でも付けて食べてみるか？」

そう言って龍也は小皿を差し出す。

「うん」

フランドールは手に持っていた餅に砂糖醤油を付けて食べる。

「おいしー」

「そいつはよかった」

そう言いながら龍也も餅を食べる。

「あ、そうそう。あんまり急いで食つなよ。喉に詰まるから」
「うん」

そう言つと食べるペースが落ちる。

素直だなと龍也は思つ。

「こんばんは、龍也」

後ろから声を掛けられる。

「よ、レミリア」

声の人物はレミリアであった。

そして少し雑談をする。

「そうそう」

「何だ？」

「フランも貴方に懐いているようだし、どう？ 私のものにならな
い」

「断る」

「あら、残念」

笑いながらレミリアはそう言つ。

自分がレミリアの物なるまで一生言われるんだろつなと龍也は思った。

そして途中から話に入って来たフランドールを交えて雑談をする。

しばらくすると、二人と別れて再び会場内を見て回る事にする。

そしてアリスを見つけたので声を掛ける。

「よ、アリス」

「あら、龍也じゃない」

声を掛けられてアリスが振り返る。

「これ、ありがとな。お陰で助かってるよ」

「私としてはお礼のつもりで渡したんだけど、そう言われたらどういたしましてと返しておくわね」

そしてお互い雑談をする。

すると、

「よーし!!! これから新年会を始めるぞ!!!...!!!」

魔理沙の声が響く。

何時の間にか年が明けていたようだ。

「とりあえず、あけましておめでとう」

「ええ、あけましておめでとう」

そして再び雑談を繰り返す。

ある程度経ったら、アリスと別れて龍也は再び会場内を見て回る。

するとおせち料理を見つけたので、それを食べる事にした。

「あけましておめでとう、龍也」

声を掛けられた方に振り向くと咲夜がいた。

「あけましておめでとう、咲夜」

龍也もそう返す。

「これ作ったの咲夜か？」

「ええ、そうよ」

「うまいよ、これ」

「あら、ありがとう」

咲夜は笑顔でそう返す。

「龍也はそう言ってくれたけど、貴女は何もないのかしら、美鈴？」

そう言いながら、食べている美鈴に顔を向ける。

「ほえ！？ 咲夜さんの作るご飯はいつも美味しいですよー」

食べていた物を慌てて飲み込んで美鈴はそう言う。

「あけましておめでとう」

「あけましておめでとうございませー」

そして三人で雑談をする。

しばらくすると、二人と別れてまた適当に見て回る。

また適当な所に行って色々雑談していると、ボチボチとみんな帰り始めた。

懐中時計を取り出して時間を見ると、もう三時を過ぎていた。

時間を意識すると急に眠気が襲ってきた。

「おーい、霊夢」

「なに？」

「泊まっていてもいいか？」

「いいけど、私は日の出あたりから儀式があるから邪魔しないでね」

「はいよ」

寝る前にやる事を思い出し、それを実行に移す。

餅が入っていた空き袋を見つける。

どうやら有った物全部食べたようだ。

今は風も吹いていないので、袋を掌に乗せて上空に向ける。

そして霊流波を放つ。

放ち終わると袋は全て消滅していた。

これなら公害の発生は無いであろう。

そして以前泊まった部屋に向かって龍也は歩き出す。

布団を被って寝始める。

その後、昼過ぎに目を覚まし、博麗神社で昼食を食べて出発した。

放浪編 その17

一面白銀の世界。

そんな中を龍也は歩いている。

幻想郷中どこもかしくもこの光景だ。

冬になってどれくらい経ったのか龍也にはよくわからない。

日付がよくわかる生活をしてないからなのだが。

春になれば魔理沙辺りから宴会の誘いがあるのだろうとな龍也は思った。

そして周りの景色を楽しみながら歩いて行く。

「あ、龍也ー」

急に声を掛けられたので、そちらを振り向く。

そこには氷の羽を生やした妖精がいた。

「チルノか、どうしたんだ？」

「これから雪合戦するの。だから、あたいのライバルであるあんたも入れてあげる」

要約するに、雪合戦をするので龍也も入れて上げるとの事だ。

特に急いでしなければならぬ事は無かったので、龍也は雪合戦に参加する事にした。

「わかった、俺も参加するよ」

「そこなくっちゃ」

そしてチルノが移動し始めたので龍也もチルノの後に付いて行く。

まあ、妖精ばかりの雪合戦に人間である龍也は参加するのはどうかと思っただが、他の妖精達は気にはいなかった。

いざ、雪合戦が始まると、案の定と言っべきか普通の雪合戦にはならなかった。

最初は普通の雪合戦だったが、なぜか途中から弾幕が飛び交い始めた。

そしてそれに呼応してか、氷の塊が飛ぶ始める。

最終的には敵味方関係なしのバトルロワイヤルに発展した。

この雪合戦らしきもので、一番活躍していたのは、サニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイアと言う三妖精だった。

何でもそれぞれ、光の屈折、音の消去、気配探知の能力を持っているらしい。

その能力を使って結構完璧なステルスが発揮できる。

それで、他の妖精達が認識できない所から攻撃を加えるという方法を取っていた。

それでも、移動する時に雪に足跡が付くので龍也にはバレて雪玉をぶつけられたが。

その後、龍也は三人に空を飛んで移動すればよかったんじゃないか

と尋ねた。

なんでも、空を飛んで移動しないのは雪玉やら弾幕やら氷が飛び交う場所に
飛んで移動したくなかったかららしい。

そして何時の間にか雪合戦らしきものは終わったらしい。

一体誰が勝ったのかわからない。

その後、妖精達は人間である龍也に興味を持った。

色々と寄ってきたので、龍也は外の世界の話をする事にした。

その話に興味を持つ者、飽きてどっかに行く者と様々であった。

自由に生きているなと龍也は思った。

しばらくすると話も終わり、妖精達と別れて、龍也は再び幻想郷を
回る事にした。

それから、結構な日数が過ぎた。

そして今日も龍也は白銀の世界を歩いていた。

ボケーっとして歩いていると、

「春ですよー！！」

上空からそんな声が響く。

龍也は声がした方を振り向くと、大量の弾幕が降り注ぐ。

「うおわあー！！」

龍也は慌ててその場から離れる。

放たれた弾幕が地面に着弾する。

そして龍也は弾幕が放たれた場所を見ると、そこには何も居なかつ

た。

少し遠くを見ると、何かが飛び去っていく。

あれが弾幕を放った犯人であろうか。

だが、一つの疑問が浮かぶ。

「春ですよーって言ってたけど……」

そう言いながら辺りを見渡す。

一面雪景色。

どこにも春の要素なんて存在しない。

寧ろ冬の要素しか存在しないであろう。

そんな疑問を覚えながら龍也は歩いて行く。

しばらくすると、

「そのの、貴方」

その声を掛けられる。

声を掛けられた方を見ると少女がいた。

銀色の髪に黒いリボン、長刀と短刀を持っている。

傍らには人魂っぽいものが漂っている。

「俺に何か用か？」

「突然ですみませんが、貴方の持っているその大量の春度、渡して貰います」

そう言いながら長刀を突きつけてきた。

春度と言うのが何かわからないが、ピリピリとした空気を感じると龍也は思った。

だが、突然戦いを挑まれるのは幻想郷ではわりと日常茶飯事だ。

大して驚かない自分に大分染まったなと龍也は感じる。

「いいぜ」

龍也はそう言いながら自身の力を変える。

朱雀の力へと。

すると龍也の瞳の色が黒から紅に変る。

「ただし……」

そう言いながら二本の炎の剣を生み出す。

「俺に勝てたらな」

そして、その一本を突きつけてそう言い放つ。

理由も無く渡せと言われて渡すものは無い。

そう言う意思表示だ。

「わかりました。なら、貴方を倒して頂いていきます」

少女もそう言い放ち、龍也に向かって肉迫する。

そして間合いに入ると長刀で斬りかかって来る。

龍也は右手の炎の剣で迎え撃つ。

そして激突する。

均衡している間に、龍也は左手の炎の剣を突き出す。

少女は後ろに跳ぶ事で回避する。

龍也が追撃を掛けようと肉迫する。

そして左手の炎の剣で斬り掛かる。

その瞬間少女が短刀を抜き、それで防御する。

そしてその短刀を使って龍也の体勢を崩す。

体勢を崩し、隙が出来たところに長刀の柄頭で龍也の鳩尾を攻撃する。

「がっ!?!」

龍也が吹き飛ばされる。

ある程度吹き飛ばされた所で倒れ込む。

起き上がると、少女が長刀を構えながら近づいてくる。

そして放たれた斬撃を二本の炎の剣を使って防御する。

長刀はすぐに離れ、また放たれる。

龍也はそれも二本の炎の剣で防御する。

そしてそのまま連撃が放たれる。

その連撃を炎の剣一本ずつで防御する。

あまりの連撃に龍也は後ろに下がりながらなんとか防御していく。

驚くべきは剣速の速さ。

長刀だと言うのに、二本の炎の剣を使っている龍也は防御で精一杯だ。

このままでは斬られると思った龍也は、斬撃を堪えずに受けて、あえて

吹き飛ばされる。

吹き飛んでいる最中に一旦炎の剣を消し、両手を合わせて火炎放射を放つ。

少女はそれを飛び上がって回避する。

その間に龍也は体勢を立て直す。

そして少女が着地する瞬間を狙って炎の弾幕を放つ。

それを見た少女は短刀を抜き、その場で一回転する。

すると、少女の目の前に水色の色をした丸い盾のような物が現れる。

そこに龍也の放った炎の弾幕が着弾する。

すると。その炎の弾幕が跳ね返ってくる。

「なっ!?!」

これには龍也も驚く。

弾幕が跳ね返されるとは完全に予想外であったからだ。

龍也は慌ててその場から退避する。

炎の弾幕は雪の地面に着弾し、鎮火する。

それを見た龍也は再び少女に視線を戻す。

少女は長刀を振りかぶりながら、肉迫してきていた。

龍也は再び二本の炎の剣を生み出し、長刀を受け止める。

そして斬り合いが再び始まる。

と言っても、龍也が少女の斬撃を受け止めているだけだが。

「ぐっ……!!」

龍也から呻き声が漏れる。

そして感嘆する。

少女が放つ斬撃の重さに。

少女が放つ斬撃の鋭さに。

少女が放つ斬撃の速さに。

どれもこれも龍也を上回っている。

だが、それでも龍也は負ける気はない。

幸い、龍也の目も少ずつ慣れてきた。

後は隙を待つだけ。

斬撃を受けながら、龍也はその隙を待つ。

そしてその隙は来た。

少女が長刀を振り上げた瞬間、龍也は肩から突っ込む。

「くっ!？」

これには少女も驚き、体勢が崩れる。

龍也はその隙を逃さず、炎の剣を振るう。

だが、少女はその攻撃に反応する。

咄嗟に短刀を抜き、それで防御する。

攻撃が当らなかった事に龍也は舌打ちをする。

少女は攻撃を受け止めた瞬間に、後ろに跳ぶ。

龍也は追撃を掛けるために近づこうとしたが、

「がっ!？」

腹部に何か当たり、吹き飛んでしまう。

転がりながら体勢を立て直し、少女の姿を見る。

すると少女の傍らを飛んでいた人魂っぽい物が少女の傍らに戻って行く

のが確認できる。

あれを突撃させたのであろう。

そのような使い方があったのかと龍也は驚く。

てっきりアクセサリーの様な物かと思っていたからだ。

そして少女が長刀を構え直し、油断無く龍也の様子伺っている。

龍也も二本の炎の剣を構えて様子を伺う。

そのままの状態がしばらく続く。

そして龍也は気付く。

まるで隙がないと。

力を変換させ戦闘スタイルが変え、それに対応できないうちに
畳掛けようとも考えたが無理だと悟る。

力を変換させる隙を付かれて逆にやられるであろう。

龍也はそう判断する。

まだ続くと思われたこの静寂は少女によって終わりを告げる。

少女は突然その場で長刀を振るい続ける。

すると斬撃の軌跡から弾幕が生み出され、龍也に向かって飛来する。

龍也はその場を離れてそれらを避ける。

だが、次々と弾幕は龍也に向かっていく。

避け続けていくが、避けた先に弾幕があり龍也は足を止める。

動きを止めたのがいけなかった。

少女の放った弾幕はもう近くまで来ていた。

避けるのは不可能と判断し、龍也は二本の炎の剣で弾幕を切り払っていく。

そしてある程度切り払うと少女の姿が見える。

長刀を振りかぶりながら突っ込んできている。

だが、普通に突っ込んできているのではなかった。

長刀が緑色の輝きを放っている。

刃の長さも長くなっている。

それを見た龍也はやばいと直感的に感じた。

そして弾幕を切り払うのをやめ、二本の炎の剣を一本の炎の大剣にする。

弾幕が体に当たるが気にはしていられない。

そして、炎の大剣を最大出力にする。

少女が長刀を振り下ろすと同時に龍也も炎の大剣を振り下ろす。

長刀と炎の大剣は均衡すると思われた。

だが、そうはならなかった。

少女の放った斬撃は容易く龍也の炎の大剣を斬り裂く。

そして龍也の左肩から右腰の部分までも切り裂く。

そこから血が噴出する。

「なん……だと……!？」

その事態に頭が追いつかないまま、龍也の意識は消えていった。

「ッ!？」

龍也が飛び起きる。

「痛ッ!？」

そして胴体に痛みが走る。

みると上半身裸で包帯が巻かれていた。

自分の体の上にはアリスから貰った防寒具に自分の学ランなどが掛けられていた。

周りを見ると何やら緑色の壁のようなが見える。

その先は雪景色であるのに、この中は暖かい。

ここは結界の中であろうか。

立ち上がって、何があったのか思い出す。

「あ……」

そして思い出す。

銀色の髪をした少女と戦う事になった事を。

そして、

「俺は……負けたのか……」

思い出す。

自分が負けた事を。

自身が生み出した炎の大剣ごと斬り裂かれた事を。

そこから先の記憶がない。

多分、あの少女が治療してくれたのであろう。

しかも結界まで張ってくれた。

「ちくしょう……」

自分は慢心していたのかもしれない。

外の世界で負けなかった事に。

妙な因縁を付けられて多人数に襲われたこともあった。

血を流し、ボロボロになっても最後には自分だけが立っていた。

だから自分は強いと思っていた。

「ちくしょう……」

自分は天狗になっていたのかもしれない。

幻想郷に来てから負けなかった事に。

妖怪の群れに襲われた時も負けはしなかった。

幻想郷の中でも相当強いと言われていた吸血鬼に引き分け、勝った

事で

調子に乗っていたのかもしれない。

そこで変な自信が付いたのであろう。

彼女達は本気で戦っていた訳ではないというのに。

それでも自信は付いた。

だから、次も勝てると楽観視していたのかもしれない。

「ちくしょう……」

自然と涙が零れる。

ポタポタと涙が流れていく。

何に対しての涙か。

悔しさであろうか。

それとも自身の無力さに対してであろうか。

「ちくしょう……」

拳を握り締める。

強く握りしめたからか、そこから血が流れる。

零れ落ちた涙と血が混ざり合っていく。

修行編 その1

妖怪達の群れが一人の獲物に目を付ける。

すぐ近くを歩いている人間に。

こんな所を一人で歩いているのだ。

襲うなど言う方が無理がある。

そして妖怪のうちの一匹が駆ける。

我慢できなくなったのであろう。

その人間は妖怪の餌食になると思われた。

そしてその人間が妖怪に気付いたと同時に腕を振るう。

そんな事をして何になると思われた。

だが、その腕には炎のが纏われていた。

そして襲い掛かってきた妖怪はその炎のに薙ぎ払われ、燃え尽きる。

それを見た妖怪達は一斉に襲い掛かってきた。

その人間は両手に炎の剣を生み出す。

そして屈んで両手を広げ、高速回転する。

すると襲い掛かってきた妖怪は次々と焼かれ、薙ぎ払われていく。
そして戦いが終わる。

「はぁ……………」

この戦いの勝利者である人間、四神龍也は溜息を吐く。

勝つには勝ったが今一調子がでないと言った感じだ。

原因はわかっている。

数日前、銀色の髪をした少女に負けたのが原因だ。

あの敗北以来、今一調子が出ない。

いや、焦っているのかもしれない。

龍也にもどちらのかわからない。

ただ、わかっているのは心と体のバランスが取れていないのかもしれない。

「はぁ……………」

また、溜息を一つ吐く。

力を消してトボトボ歩いていると、大きめ岩を発見する。

とりあえずそこで休もうと思い、そこに近づいて岩の天辺に腰を落ち着ける。

「はぁ………」

溜息を吐きながらボケーツとする。

どれくらい経ったであろう。

また歩き出そうと思い、岩から降りようとする。

「おわぁ!?!」

手が滑り、転げ落ちてしまう。

体を少し打ち付けながら、雪で敷き詰められた地面に落ちる。

「いててて………」

体が少し痛みを訴えると同時に後頭部にヒンヤリしたものを感ずる。

言うまでもなく雪だ。

だが、今はこの冷たさが心地いい。

そんな事を感じながら空を見る。

青い空に流れる白い雲。

そしれ光輝く太陽。

それを見ながらポケットと考える。

「はは……」

そして気付く。

「たく……何をウジウジしていたんだろうな、俺は……」

そう言いながら立ち上がる。

「どんなに言い繕ったって、負けたと言う事実は変わらないし、変えられない」

そして、防寒具やズボンに付いた雪を手で落としてく。

「なら、強くなればいいじゃねえか」

次に頭に付いた雪を落とす。

「修行して強くなって、勝てばいい」

そして空を見上げながら、そう言う。

自分に誓うように。

そう、誓う相手は自分でいい。

なすのは自分なのだから。

そう思い、握りしめた拳を見つめる。

「しかし……」

そう呟きながらもう一度空を見上げる。

空を見ていたら悩みがすんなり解決した。

こう言った身近にある物だから、その大切さに気付かないのかもしれない。

いや、だからこそ悩みが解決したのかもしれない。

そして龍也は体を動かし始める。

「うん……痛みは完全に引いたな」

体を動かすのをやめてそう結論を出す。

手当ての仕方が良かったのか、それとも薬が良かったのか。

魔理沙から買った薬の量は減ってなかったたので、あの少女の薬なのだ
だと

龍也は思った。

「よし……」

龍也は気合を入れなおして歩き始める。

「さーて、起きてるかな？」

紅魔館を視界に入れながら龍也はそう呟く。

ここに来たのは美鈴に修行に付き合っただけだ。

剣と拳の違いはあれど、美鈴に頼むのが妥当だと龍也は判断した。

椛に頼むと言っただけだが、椛は基本的に妖怪の山にいるであろう。

妖怪の山は基本的に人間立ち入り禁止。

自分が妖怪の山に入っていけば、余計な荒波を立てるだけだろう。

そう思い、椀に頼みに行くと言う案は却下した。

少しすると、門の前に辿り付く。

そして、美鈴の様子を確認する。

すると、

「やっぱり、寝てた」

眠っていた、

冬の季節に普段着のまま外で寝ていてよく凍死しないものである。

妖怪が頑丈であるせいだろうか。

気持ち良く寝ているところ悪いとは思いますが、龍也は起こす事にした。

「美鈴！！」

「わひゃあ！？」

龍也の大声で美鈴が飛び起きる。

そして周りをキョロキョロし始める。

「あ、何だ、龍也さんじゃないですか」

そこに居たのが龍也で美鈴がホッとする。

「それで、何か御用ですか？」

「ああ、美鈴に頼みがある」

「私に頼みですか？」

「ああ」

そう言っつて龍也は姿勢を正す。

「俺の修行に付き合っつてくれ」

「修行にですか？」

「ああ、頼めるか？」

「私は構いませんが、突然またどうして？」

美鈴がそう疑問の声を上げる。

当然だろう。

いきなりそんな事言われれば、何故と言っつ気持ちになる。

「端的に言っつとだ……」

「端的に言つと？」

「ある相手にボロ負けして悔しいから修行して強くなってリベンジしたい」

龍也は正直にそう言った。

こう言う事は偽ってはならないと判断したか。

「わかりました。そう言う事ならいくらでもお手伝いしますよ」

美鈴は笑顔でそう言った。

「で、その相手はどういう戦い方をしたんですか？」

「ああ、長短二本の刀を使っていた」

「長短二本の刀ですか……」

「それと、攻撃は長刀一本で戦ってたな。短刀は防御などをする時に抜いてたな」

龍也はそう付け加える。

「どうだ、頼めそうか？」

「そうですね、たしかに私は剣術の心得はありませんが……」

そう言いながら、隅の方から何かを取り出す。

「棒術の心得はあるんですよ」

そう言いながら長短の棒を取り出す。

「剣術と棒術の違いはありますが、参考にはなると思いますよ」

そして長短二本の棒を構える。

「ありがとう、美鈴」

龍也はそう言いながら自身の力を変える。

朱雀の力へと。

そして瞳の色が黒から紅に変る。

「あ、そっぴや俺は炎の剣を使うけど、それ大丈夫か？」

そう言いながら龍也は美鈴の持っている棒を指差す。

自分の攻撃で燃えてしまわないかと言う意味合いを籠めて。

「大丈夫ですよ。これ、少し特殊な素材で出来てますから」

美鈴がそう言う。

「わかった」

そう言いながら龍也は二本の炎の剣を生み出す。

「いくぞー!!」

そして龍也は駆ける。

美鈴が自分の間合いに入るのと同時に右手の炎の剣を振るう。

美鈴は長い方の棒で受け止める。

龍也はそれに構わず左手の炎の剣を突き出す。

美鈴は体の位置をずらして回避する。

そして一回転するように長い棒を振るう。

龍也は二本の炎の剣を使って防御する。

「ぐっ……」

想像以上の重さに呻き声を漏らす。

思っていたより重かったのは遠心力が加わったせいであろうか。

だが、何とか堪えた龍也は右手の炎の剣を突き出す。

美鈴はその突きを後ろに跳んで回避する。

龍也は美鈴を追うように追撃を仕掛ける。

そして連撃を放つ。

それに対して美鈴は長い棒で全て捌いていく。

そんな攻防がしばらく続く。

そして、

「はっ！！」

先程の連撃より重い一撃を龍也は放つ。

だが、

「なっ！？」

短い棒の方でうまく受け止められてしまう。

今まで使ってこなかったなので意識から外してしまったのだ。

「ふっ！！」

そして隙の出来た龍也に向けて美鈴は突きを放つ。

「がっ！？」

それをまともに受けて龍也は吹き飛ばす。

そして雪の地面を削っていく。

ある程度吹き飛んだ所止まる。

立ち上がりながら、今の衝撃で消えてしまった炎の剣を再度生み出す。

「と、今のように使っていなかった方を急に使うという方法をとってくる

かも知れないので気を付けて下さいね」

「ああ、今のでよく理解したよ」

今後は気を付けなければなるまい。

その事を頭に入れて、再度美鈴に肉迫して行く。

「日も暮れてきましたし、今日はこれまでにしましょう」

美鈴がそう言う。

龍也はまだやれると言おうとしたが、やめた。

修行に付き合ってもらっているのは自分だ。

美鈴の都合に合わせるのが道理であろう。

龍也はそう結論付ける。

「ありがとうございます」

そう言って頭を下げる。

「明日も頼んでもいいか？」

「はい、構いませんよ」

美鈴が笑顔でそう答えてくれた。

「お疲れ様」

咲夜が音も無く現れる。

「サンドイッチと飲み物用意したけどいる？」

「いる」

「私もいただきます」

そして二人で軽い食事を取る。

二人が食べ終わった頃に咲夜が口を開く。

「浴場の準備はできているけど入る？」

「入る」

「美鈴は？」

「私も交代の時間になったら入らせて貰います」

「わかったわ。じゃあ龍也付いてきて」

「ああ」

そして龍也は咲夜の後について紅魔館の中に入っていく。

そして長い廊下を歩きながら、龍也は咲夜に尋ねてみる。

「できれば暫く泊めてほしいんだけど……」

「それなら構わないわ。お嬢様も好きなだけ居てもいいと仰られて
いるし」

「そうか」

そうこうしているうちに脱衣所に到着する。

「脱いだ物とかはそこに入れておいてね」

「わかった」

「後、着替えはそこに置いておいたから」

「色々ありがとな」

「構わないわ」

そう言っつて咲夜は音も無く消える。

また時間を止めて移動したのだろうか。

龍也はポケットに入れておいた物を取り出し、服を脱ぎ、包帯を取っつて浴場に入っつていく。

先に体を洗っつて湯に浸かる。

体を洗っつている時に気付いたが、もう傷は完全に塞がったようだ。

傷跡も残らなかつたと言う事は、余程上手に斬られたのだろうか。

そんな事を考えていると、頭がボーツとしてきたので上がる事にした。

脱衣所に戻って着替える。

「やっぱこれか……」

龍也が着ているのはタキシードに蝶ネクタイ。

まあ、贅沢言える立場ではないので文句を言つつもりは無い。

取り出した物をポケットに入れて脱衣所を出る。

すると咲夜が待っていた。

「この後どうする？ 食堂の用意もできるし、もう休むのなら部屋に案内するけど？」

「んー……できれば図書館に案内して欲しいんだけど」

「わかったわ、付いてきて」

この館は相変わらず広いので、下手をすれば迷う可能性がある。

なので、龍也は咲夜に案内を頼む。

そして咲夜の後に付いて行く。

しばらくすると図書館に辿り付く。

そのまま歩いて行くとパチュリーの姿を発見する。

「パチュリー様」

「あら、咲夜に龍也じゃない」

パチュリーが気付いて顔を二人に向ける。

「何か用？」

「彼が図書館を使いたいとの事です」

咲夜がそう言う。

「そう」

そう言ってパチュリーが龍也に視線を移す。

「で、何を探しに来たの？」

「武術書の類があれば見せて欲しいんだけど」

「構わないわ。小悪魔に案内させるわ」

そう言ってパチュリーが小悪魔を呼び寄せる。

「お呼びですか、パチュリー様」

「龍也を武術書関連の場所に案内してあげて」

「かしこまりました」

そう言って小悪魔が龍也を案内しようとする。

「あ、それともう壊さないでね」

「わかってるよ」

そう言っつて龍也は小悪魔の後に付いて行く。

しばらくすると、目的の場所に辿り付く。

「こちらになります」

「ああ、ありがとう」

相変わらず本の量が多いなと龍也は思う。

「では、何かありました呼んでくださいね」

そう言っつて小悪魔は立ち去る。

「さて、探すか」

そう言っつて龍也は飛び上がる。

龍也が探しているものは二刀流関連の本。

勿論あの少女対策のためだ。

しばらくすると、目的の本を発見する。

何冊か持って着地する。

そして本棚を背に、本を読んでいく。

どれくらい読んでいたであろう。

しばらくすると、

「りゅーやー!」

「ん?」

声の上の方から聞こえてきた。

何かと思って龍也は上を向く。

フランドールが降ってきた。

「どっわ!」

見事龍也に命中する。

「うててて……」

「龍也!」

フランドールが龍也のお腹辺りに乗って声を掛ける。

「フランドールか、どうしたんだ?」

「ね、ね、龍也」

「なんだ？」

「遊ぼ！！」

笑顔でそう言ってきた。

龍也が来たので遊んで欲しかったようだ。

そう言われて考える。

ずっと本を読んでいたことだし、少しリフレッシュする必要があるかもしれない。

そう龍也は結論を出す。

「じゃ、遊ぼっか」

龍也は持って来た本を近くにあったテーブルに置いてそう答える。

「うん！！」

そしてフランドールと遊び始める。

結局この日の残りはフランドールと遊んで終わる事となる。

修行編 その2

「はっ!！」

炎の剣と棒がぶつかり合っている。

戦っているのは龍也と美鈴だ。

龍也に頼まれて美鈴が修行に付き合っていると云う形だ。

これでもう一週間以上になるだろう。

そしてまた、激しくぶつかり合う。

そんな打ち合いながら美鈴は思う。

成長スピードが速いと。

斬撃の鋭さ、防御の取り方などが最初の頃には比べ物にならない
ほど

高くなっている。

毎日半日以上こつやって戦っている成果なのかもしれない。

どちらにせよ、龍也はもっともっと強くなるであろうと美鈴は思っ
た。

そしてぶつかり合いの最中、龍也は炎の剣を大きく振りかぶる。

重い一撃を放つつもりであろうか。

美鈴はその一撃を受け止め、カウンターを決めようと思った。

そして美鈴の持っている短い棒に炎の斬撃が当たろうとした瞬間、斬撃が止まる。

その事に美鈴は一瞬唖然とする。

次の瞬間、美鈴の腕が蹴り上げられる。

その衝撃で短い棒が宙に舞う。

「しまっ！！」

その事を認識した時にはもう遅く、炎の剣が美鈴の首筋に突き付けられていた。

「俺の勝ちだな」

「ええ、龍也さんの勝ちです」

そして龍也は炎の剣を消して力も消す。

それを見た美鈴も戦闘態勢を解く。

「お見事でした、龍也さん」

「ありがとう」

「それでどうしますか？ もう一本いきますか？」

「いや、やめとくよ。これ以上つき合わせるのも悪いしな」
そう言いながら龍也は美鈴の提案を断る。

何せ一日の半分以上を自身の修行に付き合わせているのだ。

しかも一週間以上も。

なのでこれ以上は悪いと思ったのだ。

「それに悪かったな、慣れない棒術で俺の修行に付き合ってくれて
棒術の心得があると言っても美鈴の戦闘スタイルは拳術だ。

色々と慣れない部分もあったはずだ。

「いえいえ、気にしないでください。私もいい勉強になりました」
美鈴が笑顔でそう言う。

「それで、龍也さんはこれからどうするんですか？」

「あいつ対策の次は俺自身のレベルアップを図ろうと思っている。
しばらくは
修行の旅だな」

今までの物見遊山ではなく、修行の旅をしようと言うのだ。

「今日はもう遅いし、明日出発するよ」

「わかりました」

そして美鈴と別れて紅魔館の中に入っていく。

明日に備えて今日はもう休もうと思って自分が泊まっていた部屋を探す。

「しかし、未だに迷いそうになるな」

紅魔館の中を歩きながら龍也はそう漏らす。

本当にこの中は広いのだ。

そして数十分後、

「ああ、ここだここだ」

やっと辿り付く。

部屋に入ろうとドアを開けようとするとき、

「龍也」

声を掛けられる。

声を掛けられた方を振り向くとレミリアが居た。

「レミリア」

「聞いたわよ、明日には出て行くそうね」

「ああ、それはそうと色々世話になったな。ありがとう」

「どういたしまして」

そして龍也はレミリアと雑談をする。

しばらくすると、

「少し喋りすぎたかしら？」

レミリアがそう言う。

「そうだな……」

そう言いながら龍也は懐中時計を取り出し時間を確認する。

結構遅い時間になっていた。

「私達にとってはこれからと言う時間だけど、貴方にはもう休む時間みたいね」

「そうだな」

そう言いながら龍也はドアを開けて中に入る。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

そしてドアが閉まる。

ドアの前でレミリアは思う。

龍也はまた強くなったと。

会うたびに強くなったと感じていたが、紅魔館に泊まってからはそれが著しい。

その原因は、

「敗北を知ったからか……」

であるとレミリアは思う。

敗北を知った者は二通りある。

そのまま永遠に立ち止まり、その道を捨てる者が、それとも再び進める者か。

龍也は後者であったようだが。

ウジウジとしているものなら、慰めるついでに龍也を自分の物にしようと思ったが、

龍也は自分一人で立ち上がり、再び歩み始めた。

より強くなるために。

その事に残念に思う反面、嬉しく思う。

「ますます貴方を私のものにしたくなつたわ……龍也」

そう呟いてレミリアは龍也が泊まっている部屋を後にする。

廊下を歩いていると、

「あ、お姉様」

フレンドールがレミリアに声を掛ける。

「あら、フランじゃない。どうしたの？」

「龍也に遊んで貰おうと思って」

どうやら龍也に遊んで貰いに来たようだ。

「フラン、龍也はもう休んでいるわ」

「えー」

その事にフレンドールが不満気な声を上げる。

「わがまま言わないの」

「はい」

フレンドールは不満気だが了承したようだ。

レミリアは、最近フランも我慢できるようになったなと思う。

「昔前なら暴発していた可能性もあったのだが、最近はその心配もない。」

これも龍也のお陰かとレミリアは思う。

「今日は私が遊んであげるから」

「ほんと!?!」

「ええ、本当よ」

そして二人で遊ぶ事にした。

そして、早朝。

「もう出発するんですか？」

「ああ。善は急げと言っしな」

幸い防寒具やら服の破れた部分は咲夜が修繕してくれた。

これには感謝である。

「じゃあこれを」

いきなり音もなく咲夜が現れる。

もう驚かなくなったものである。

そして包みを籠也に渡す。

「これは？」

「おにぎりよ。お腹が空いたら食べて。それと具は貴方の好きなお
かかだから」

「そっか、ありがとな」

龍也はそう礼を言う。

出発する前にレミリアやフランドールに挨拶してから行くことと龍也は思ったが、

この時間帯は二人とも寝てるであろう。

無理に起こすのも悪いだろうと龍也は思った。

「レミリアとフランドールとパチュリーと小悪魔によく言っておいてくれ」

「わかったわ」

そして龍也は紅魔館を後にする。

「またいらっしやい」

「また来てくださいねー」

その声を掛けられたので龍也は振り返る。

「ああ、またな」

そう言って再び歩き始める。

「ふっ！！」

吹雪が吹き荒ぶ早朝、龍也は水の剣を振るう。

その一撃で襲い掛かってきた妖怪が真つ二つになる。

今度は周囲に居た妖怪が一斉に襲い掛かってきた。

龍也は飛び上がりながら自身の力を変える。

青龍の力から玄武の力へと。

それに伴い瞳の色も蒼から茶に変わる。

そして右手から土を生み出し、纏わせていく。

すると巨大な土でできた拳になる。

そして、

「おおおおおおりゃあああああ……!」

それを地面に叩きつける。

そこに居た妖怪達は全て潰される。

そして龍也は土の拳を崩壊させる。

その瞬間に一匹の妖怪が龍也の肩口に噛み付いてくる。

そのまま食い千切られるかと思われたが、そうはならなかった。

歯が刺さりきらないのである。

それでも食い千切ろうとする妖怪を龍也は強引に振り落とす。

そして少し遠くを見る。

残っている妖怪はまだまだいるようである。

今の力では一体一体片付けるのは時間が掛かりすぎるであろう。

なので、龍也は力を変える事にした。

玄武の力から白虎の力へ。

そして瞳の色も茶から緑に変わる。

同時に腕と脚に風を纏う。

すると、次々と妖怪達が襲い掛かってくる。

龍也は次々と撃退していく。

拳で。

脚で。

そして纏っている風で。

気付いた頃にはもう龍也に襲い掛かってくる妖怪は居なくなっていた。

「ふう……」

それを確認した龍也は纏っていた風を消して力を消す。

そしてその場を後にする。

心なしか足取りが速い。

いや、たしかに速い。

なぜこんなに速いのかと、言つと単純に焦っているからだ。

紅魔館を出て早数週間。

龍也はこうやって多くの妖怪達と戦ってきた。

そして強くなってきたという実感はある。

そう思う一方で、銀色の髪をした少女と戦ってもまた負けるのではないかと
言う思いがある。

誰かと一緒に居た……そう、紅魔館に居た頃はこんな思いは抱かなかった。

なら何故今になってか。

答えは単純。

そう、一人になってから表れたくだらない恐怖。

その事は龍也にもわかっている。

わかっているのだが、龍也には振り切れないでいた。

それでも振り切ろうとしてまた一歩足を踏み出す。

「あ？」

だが、踏み出した足は地面を踏むことはなかった。

単純に地面がなかったからだ。

龍也が踏み出した先は崖だったのだ。

「うわあああああああ！？」

そのまま滑るように落ちていった。

「ぶほ！？」

そして顔面から雪に嵌った。

そこから何とか這い出てまた歩き出す。

「どつわあ！？」

だがすぐに滑って仰向けに倒れて雪に埋まる。

「はあ、何やってるんだろ……俺」

そう呟きながら空を見上げる。

前にもこんな事があったなと思いつつ、立ち上がりもせず「ポーン」と

空を見上げる。

そういえばと龍也は思う。

今見てる空は自分の精神世界の空とそっくりだなと。

そしてまたポーンと空を見上げる。

「…………ッ!？」

するとある事を思い出す。

レミリアと戦っていたときの事を。

その中で自分の精神世界いった事を。

そして言われたことを。

自分にはワシ等が憑いているという言葉。

「はは…………」

そこまで思い出して龍也は立ち上がる。

「そつだよ…………俺は一人で戦っているんじゃない」

そして体に付いている雪を落としていく。

「俺には朱雀が、白虎が、玄武が、青龍がいる」

雪を払い落とした後、前を見つめる。

「俺は自分を、そしてこいつ等を信じて進めばいい」

そして自分の胸に手を当てる。

「何も…………恐れる事はない。そつだ…………恐怖を捨て、前を見ればい

い
「

目を閉じながらそう言う。

そして目を開いて正面を見る。

不思議と焦っていた気持ちは無くなっていた。

「よし!」

そして再び足を進めていく。

強くなるために。

想いは変わらないが、足取りは違った。

焦った感じではなく、自信溢れる感に変わっていた。

そして暫く時が進む。

吹雪も止み、見通しも良くなった。

龍也はそんな雪一面の世界を歩いて行く。

すると、見知った姿が見える。

「桜か？」

その声を掛けると、その人物は振り返ってくる。

「あ、龍也さん」

その人物は桃で合っていた様だ。

「珍しいな、こんな所で会うなんて」

近くには妖怪の山はない。

なのでここで会った事を不思議がる龍也。

「今日は休みなんです。せつかくだからにとりと大将棋でもしよう
と思ったのですが
留守でして。なので散歩をしています」

椀が理由を話してくれる。

「にとり？」

知らない名前が聞こえてきたので椀に尋ねる。

「ああ、私の友達の河童です」

椀がそう答えてくれる。

「へー……」

河童もいるんだと龍也は思った。

それと同時に自分が想像している河童とは違うんだろっかなと思った。

そこまで考えた後、龍也は少し考え込む。

「……なあ、椀」

「何ですか？」

「今、少しいいか？」

「ええ、暇ですし構いませんよ」

「軽くでいい。少し手合わせ願えないか？」

「手合わせですか？」

「勿論いやなら断つていい」

「いえ、私はいいですよ」

そう言つて椀は太めの刀と紅葉のマークが付いた盾を装備する。

「ありがとう」

そう言つて龍也は自身の力を朱雀に変える。

そして瞳の色も黒から紅に変わる。

「よし……」

いつもより力が馴染むなど龍也は感じた。

椀を見据えながら二本の炎の剣を生み出す。

「いくぞ」

そう言つて龍也は駆ける。

椀が自分の間合いに入ると同時に龍也は炎の剣を振るう。

椀は盾を前面に押し出して防御する。

そしてその場で回転しながら龍也は斬り付けようとする。

龍也はもう一本の炎の剣でそれを防御する。

そして後ろに跳んで間合いを取る。

すると、今度は椀から間合いを詰めてきた。

そして刀を突き出す。

龍也は体を反らして回避する。

だが、

「がっ!?!」

突如、龍也は吹き飛ばされる。

吹き飛ばされながらも体勢を立て直し、雪道を滑るようになら
止まる。

その中で椀の様子が見れた。

盾を突き出していた。

盾にそのような使い方があるのかと龍也は思った。

そう感心している間に、椀が再び間合いを詰めてきた。

だが、今度は龍也も間合いを詰める。

椀を上回るスピードで。

「ッ!？」

この行動で龍也に攻撃するタイミングを椀は逃してしまっ。

その際に龍也の連撃が始まる。

「くっ!!」

龍也の連撃を盾と刀を使って防いでいく。

そんな攻防がしばらく続く。

このままでは埒があかないと二人とも判断したのか同時に間合いを取る。

お互い息を整えながら、互いの様子を伺う。

その状態からある程度経った後、龍也は二本の炎の剣を合わせて一本の大剣にする。

そしてそれを構える。

それを見た椀は盾を投げ捨てる。

そして太い刀を両手で構える。

そのままお互いギリギリと間合いを詰める。

すると、近くにあった木から雪が落ちる。

それを合図に同時に駆ける。

そしてお互い同じタイミングで振りかぶって、同じタイミングで振り下ろす。

炎の大剣と太い刀が激突する。

そしてお互い力を籠めながらその状態を維持する。

しばらくすると、お互い弾かれるように間合いを取る。

そしてお互い息を整える。

「ありがとな、手合わせに付き合ってくれて」

そう言いながら龍也は炎の大剣を消して力を消す。

「いえ、私の方も色々勉強になりました」

そう言って椀は戦闘体勢を解いて、近くに転がっていた盾を拾う。

そしてお互い近づいて雑談を交わす。

すると日が暮れ始める。

「おっと、もうこんな時間か」

龍也が空を見ながらそう言う。

「あ、私もそろそろ妖怪の山に帰らないと」

椀も同じように空を見ながらそう漏らす。

「それじゃ、またな椀」

「ええ、また会いましょう。龍也さん」

そして龍也は椀と別れて歩き出す。

次はどこに向かうか考えながら。

PV10万記念(前書き)

BLEACHとのクロスです。

BLEACH、四神録ともに時系列は不明です。

四神録の方に関してはネタバレが含まれます。

基本的に本編とは一切関係ないIFストーリーです。

これらの事を踏まえて、見てやるぜって方はそのままお進みください。

人間の数倍の大きさの妖怪らしき生物。

だが、妙だと龍也は思った。

その妖怪から感じるのは妖力ではなく霊力だ。

その事に疑問を覚えているとその妖怪らしき生物が、炎の塊を何発か吐き出す。

それが周りに当り、炎が広がる。

そのうちの一発がサラリーマン風の男の近くに着弾する。

その爆風に巻き込まれて、サラリーマン風の男が吹き飛ばす。

そして地面に叩きつけられる。

その妖怪らしき生物は好機と思ったのか、口を開きながら倒れている男に近づく。

そこで龍也は再起動し、まずいと思いながら力の変換をする。

朱雀の力へと。

それと同時に龍也の瞳の色も紅に変化する。

そして右手に炎の剣を生み出し、妖怪らしき生物に瞬時に近づく。

そして、

「はっ！！」

頭上から真つ二つに切り裂く。

するとその妖怪らしき生物は、塵になって消えていく。

それに疑問を覚えるも、先に倒れている人の安否を確認する事にした。

「おい、大丈夫か！？」

左手で抱き起こして様子を見る。

どうやら気絶しているだけのようだ。

その事に龍也はホツとするが、ある物を見て驚く。

「これは……鎖か？」

倒れている男の胸の中心辺りから鎖が伸びていた。

その鎖は途中で切れていた。

この鎖はどうすればいいのかと考えていたら、近くに誰かが現れる。

オレンジ色の髪。

黒を基調とした、侍などが着るような服。

背中には身の丈ほどの大刀を背負っている。

それは、鍔も柄も鞘も無い変わったものだ。

身長は龍也と同じか少し高い程度。

その男が周囲を見渡し口を開く。

「これは……テメエがやったのか？」

「……あ」

そう言われて龍也は気付く。

周囲の状況に。

先ほどの妖怪らしき生物が吐いた炎の塊のせいで、周囲は火の海になりかけている。

そして自分の右手に持っている物。

炎の剣だ。

見ようによってはこの惨状は龍也が作り出し、これから倒れている男に

止めを刺すように見える。

いや、そうとしか見えないであろう。

逆の立場であつたら自分もそう思うと龍也は結論を出す。

「この状況下じゃ、何を言っても信じて貰えそうにないな」

そう呟きながら抱えていた男性を降ろし、立ち上がる。

そして周りで燃えている火を集めて右手の剣に吸収させていく。

これ以上火が広がるのを防ぐためだ。

少なくともこれで火事になることはないであろう。

範囲によっては水を掛けた方が早い場合もあるが。

「テメエ……」

目の前の男はそう言いながら背中に背負っている大剣に手を掛ける。

「あ……」

そこで龍也は自分の失態に気付く。

目の前の相手にはこれから自分と戦うために周りにあつた炎を集めたように映っただろう。

と言うより、そうとしか映らなかつたであろう。

見ず知らずの男が炎に囲まれた場所で、炎の剣を持ち、広がっている炎を

集めて炎の剣に吸収させる。

これだけ見せれば犯人に思われるであろう。

寧ろ、思うなと言う方が無理である。

これでもう戦闘は避けられないであろう。

こんなことなら素直に青龍の力を使って水を掛けて消せばよかったと龍也は思った。

だが、後悔してももう遅い。

そしてもう一度目の前の男を見つめる。

相当強いと龍也は判断した。

少なくとも周囲の様子を考えながら戦っても勝てはしないと。

このままでは、気絶しているサラリーマン風の男を巻き込むことになる。

思い、龍也は大きく飛び上がる。

「待て!!」

そして目の前にいた男も龍也を追って飛び上がる。

ある程度の高度まで来ると、龍也はこれ以上高度を上げるのをやめる。

ここまで来ればまき込むことも無いと思ったからだ。

そして追ってきた男も同じ高度まで上がってくる。

その事を確認した龍也は左手に炎の剣を生み出す。

それを見たオレンジ髪の男は背負っていた大剣を取り、両手で構える。

その大剣からは強い力を感じると龍也は思った。

風が吹いてその大剣に付いていた白い布のようなものが揺れる。

どうやらあれが鞘代わりになっていたようである。

長さから見るに、ある程度の収縮が可能なようである。

そしてお互い構えたまま様子を見る。

風が止むと同時に、互いが近づく。

そして龍也は二本の炎の剣を。

オレンジ髪の男は大剣を。

それぞれ振りかぶり。

激突させる。

同時に激突音が響く。

そして鏝迫り合いをする。

ある程度その状態を維持すると同時に離れ、間合いをとる。

そして再び激突する。

そんな切り結びを何度か繰り返す。

「やるな!!」

「テメエもな!!」

一撃一撃の重さはオレンジ髪の男の方が上。

手数の方では龍也が上。

お互い攻めあぐねている。

だが攻めなければ始まらない。

そして再び大剣と二本の炎の剣が激突する。

激突音が響くと同時に互いに離れる。

そしてある程度距離をとったところで、オレンジ髪の男が消える。

「ッ!？」

それを見た龍也は二本の炎の剣を頭上に掲げて防御の体勢をとる。

迎撃は間に合わないとの判断したからだ。

「なっ!？」

炎の剣が接触している部分を爆発させる。

その事にオレンジ髪の男が驚く。

まさか爆発するとは思わなかったようである。

爆発の衝撃でオレンジ髪の男は吹き飛ばされ、龍也と距離が離れる。

そして、オレンジ髪の男が空中に着地する。

それを見た龍也は瞬時にその場から消える。

「ッ!？」

そして龍也はオレンジ髪の男の目の前に現れ右手の炎の剣で刺突を放つ。

オレンジ髪の男は大剣の腹で受け止める。

そして滑るように後方に下がってしまう。

これは龍也に刺突の威力と、足の裏から放出している炎のせいであろう。

その間に龍也は左手の炎の剣で斬り掛かろうとする。

だが、それは叶わなかった。

オレンジ髪の男が大剣を振り払って龍也を吹き飛ばしたからだ。

吹き飛ばされている最中に龍也は自身の力を変える。

朱雀の力から青龍の力にへと。

それと同時に龍也の瞳の色も紅から蒼に変る。

そして両手に水を纏わせ、

「水爪牙！！」

両手を振るう。

すると、爪先から水でできた斬撃が十本放たれる。

それらはオレンジ髪の男に向かっていく。

それを見らオレンジ髪の男は大剣を掲げる。

そして、

「月牙天衝！！」

振り下ろす。

すると、剣先から青白い巨大な斬撃が放たれる。

それは龍也の放った水爪牙を破壊しながら突き進んでいく。

龍也の放った水爪牙では威力は殺がれないと言っように。

それに驚くも、龍也は月牙天衝をギリギリのところ避ける。

避けた月牙天衝は空に消えていく。

視線を戻し、オレンジ髪の男を見ると再び大剣を掲げている。

今の技、月牙天衝を再び放つつもりであろう。

龍也は水爪牙では今の二の舞になると思い、手刀を作り構える。

そして、

「月牙天衝！！」

「水刀牙！！」

お互い、同時に振り下ろし同時に技を放つ。

オレンジ髪の男は青白い巨大な斬撃を。

龍也は巨大な水の斬撃を。

それらはお互いの中間距離で激突する。

そして激突音が響き。周囲に衝撃が走る。

互いの技の影響で周囲に水と霊力が撒き散らされる。

視界が晴れると互いの放った技は消滅していた。

どうやら互いの放った技の威力は互角のようである。

すると真正面からオレンジ髪の男が突っ込んできた。

そして大剣を振るう。

龍也は体を屈めて避け、右手に水の剣を生み出す。

それをオレンジ髪の男に振るう。

オレンジ髪の男はそれを大剣で防ぐ。

そして何かを削る音が発生する。

「チィ!!!」

音が発生している場所を見て龍也は舌打ちをする。

その大剣には傷一つ付いていなかったからだ。

少しは傷を付けられると思っていた龍也にとって誤算であった。

あの大剣は相当な強度を持っているようだ。

「はあ!!!」

そしてオレンジ髪の男が大剣を振るって龍也を弾き飛ばす。

吹き飛ばされると同時に水の剣が崩壊する。

水の剣は殺傷能力は高いが水の剣自体の耐久力は低い。

昔よりは頑丈になったのにと龍也は思う。

オレンジ髪の男の力が強かったのか、それとも水の剣の強度が龍也が思っていた以上に脆かったのか。

そこまで考えて、龍也はオレンジ髪の男に意識を戻す。

オレンジ髪の男は大剣を振りかぶりながら突っ込んで来ている。

水の剣で受ければ剣が崩壊し、斬られる可能性が高いであろう。

かと言ってこちらも水の剣で攻撃をしても水の剣が崩壊する可能性が高い。

目の前の男の放つ一撃一撃は威力が高いからだ。

なので、瞬時に力を変える。

青龍の力から朱雀の力へと。

瞳の色も蒼から紅に変る。

そして両手を合わせて炎の大剣を生み出す。

それを構えて、龍也もオレンジ髪の男に向かって突っ込む。

そしてお互いの大剣を振り下ろす。

二つの得物が激突し激突音が響く。

それと同時に衝撃波が発生する。

無骨な大剣と炎の大剣。

最初は均衡していたが、徐々に炎の大剣が徐々に押され始める。

龍也も踏ん張っているが、少しずつ後ろに下がり始める。

「ぐ……お、おおおおおおおおお……!!!!!!」

このままでは押し切られると思い、龍也は霊力を解放する。

すると、押されるのが止まる。

今度は無骨な大剣が炎の大剣に押され始める。

オレンジ髪の男も耐えようとしているが、後ろに下がってしまう。

そして、

「おおおおおおおおお……!!!!!!」

オレンジ髪の男も霊力を解放する。

すると、また均衡した状態に戻る。

黒い髪が紅く染まっていく。

瞳も輝き始める。

そして炎の剣もより紅くなる。

龍也が炎の剣を振ると、龍也の周りに漂っていた靈力が消える。

その様子を見たオレンジ髪の男は油断無く構える。

すると龍也が消える。

そしてオレンジ髪の男の目の前に現れる。

「ッ!？」

その事態にオレンジ髪の男が驚く。

自分は一瞬も目を離していなかったのにと。

そう思っていると、龍也は右腕を上げる。

それを見たオレンジ髪の男も両腕を上げる。

そして振り下ろし、無骨な大剣と炎の剣が激突する。

「なっ!？」

均衡すると思われたが、オレンジ髪の男は簡単に吹き飛ばされる。

体勢を整えたところに、龍也の刺突が迫る。

オレンジ髪の男は大剣の腹で何とか受け止める。

そして更に吹き飛ばされる。

オレンジ髪の男は吹き飛ばされながらも、何とか体勢を立て直し必殺の一撃を放つ。

「月牙天衝！！」

青白い強大な斬撃が龍也に迫る。

それを前に龍也は慌てず、左腕を右肩辺りに持っていく。

そして目の前に月牙天衝が迫ってくると、一気に振るう。

すると月牙天衝が斬られる。

「ッ!？」

それを見たオレンジ髪の男は驚く。

そして悟る。

このままでは勝てないと。

そして、思う。

ならば、自分も力を解放するまでだと。

「？」

オレンジ髪の男の雰囲気が変わった事を感じ、警戒心を抱く龍也。

そして、オレンジ髪の男は無骨な大剣を前方に突き出すように構える。

その瞬間、オレンジ髪の男から大量の霊力が放出される。

「霊力が……跳ね上がっていく……！！？」

オレンジ髪の男から大量に漏れ出し、放出されている霊力の余波を片腕で防ぎながら、龍也はそう声を漏らす。

「卍……解！！！！」

そして、その霊力がオレンジ髪の男を包む。

龍也がどうなったか見ていると、霊力の中から何かが煌く。

すると、包んでいた霊力が四散していく。

そしてオレンジ髪の男の姿が露になる。

「天鎖斬月……」

オレンジ髪の男の姿が変わっていた。

袴の部分は別段変っていない。

着物の部分が、着物のとロングコートを足したようになっていた。

衣の中の色は紅。

そして、得物も変っていた。

無骨な大剣から、漆黒の刀へ。

鐔は卍の形をしている。

柄頭の部分からは漆黒の鎖の垂れている。

目貫の部分は紅い。

そしてその刀、天鎖斬月からはもの凄い力を感じると龍也は思った。

先程の無骨な大剣の比ではないと。

そう思っていると、オレンジ髪の男の姿が消える。

龍也は咄嗟にその場から体の位置をずらす。

その瞬間、龍也の右腕が切り裂かれ血が吹き出る。

かなり速いスピードだ。

龍也は殆ど反応できなかった事に驚愕する。

オレンジ髪の男の方を見ると、もう目の前まで迫っていた。

そして、天鎖斬月を振りかぶっている。

龍也は二本の炎の剣で防御の体勢をとる。

そして、そこに天鎖斬月が激突する。

「ぐっ……」

龍也は呻き声を漏らす。

そう、オレンジ髪の男はスピードだけではなく力も上がっていた。

そして龍也は炎の剣と接触している部分を爆発させて距離を取る。

すると爆煙の中からオレンジ髪の男が現れ、斬り掛かって来る。

龍也は右手の炎の剣で天鎖斬月を受け止める。

その均衡は一瞬。

オレンジ髪の男は天鎖斬月をそこから離し、再度斬り掛かる。

龍也はその斬撃を左手の炎の剣で受け止める。

そして右手の炎の剣で斬り掛かる。

その瞬間にはオレンジ髪の男はいなかった。

「ッ!？」

そして自信の背後に気配を感じ、振り返る。

そこにはオレンジ髪の男の残像しかなかった。

そしてまた近くに気配を感じる。

そちらに振り向くと同時に炎の剣を振るう。

剣先からは爆炎が迸る。

だが、爆炎が当たったのはオレンジ髪の男の残像であった。

そこで龍也は気付く。

自分はオレンジ髪の男の残像に囲まれていると。

事実、龍也の周囲は無数のオレンジ髪の男の残像で囲まれていた。

「どうした、ついてこれねえか？ もうちょい、速く出来るんだけどな」

どこからか声が聞こえる。

あの無数の残像のうちのどれかだろう。

今の龍也ではどこにいるかはわからない。

かと言って、力を変える隙もない。

ならば、全てに攻撃を加えればいいだけだ。

そう思い、龍也は少し屈み両手を広げ、炎の剣の出力を最大にまで上げる。

そして、

「豪炎旋風！！」

その場で高速回転する。

そして龍也を中心に炎で出来た小型の竜巻が発生する。

どれが本物かわからなければ全て攻撃すればいい。

何とも力付くな発想である。

そして龍也は見た。

オレンジ髪の男がその場から離れて行くところを。

その瞬間に龍也は回転するのをやめる。

そして右手の炎の剣を消して、右手をオレンジ髪の男に向、大量の
炎の
弾幕を放つ。

周囲を囲んで逃げ場を無くし、中央の密度を高くした弾幕だ。

龍也は防御したところを叩こうと思った。

だが、

「なっ!?!」

その目論見は外れた。

オレンジ髪の男は自身に当たる全ての弾幕を斬り払ったのだ。

そして、オレンジ髪の男はその場から消える。

「後ろだ」

「ッ!?!」

龍也が後ろを振り向くと、オレンジ髪の男は天鎖斬月を突き出して
いた。

龍也は慌てて左手の炎の剣を盾にする。

一瞬の均衡の後、龍也は吹き飛ばされる。

吹き飛ばしながらもオレンジ髪の男の様子を見る。

すると、天鎖斬月を振りかぶってるのがわかる。

「月牙……」

刃からは黒い霊力が発生しているのがわかる。

それを見て龍也は目を見開く。

感じる霊力が先程までの月牙天衝の比ではない。

龍也は慌てて自身の力を変える。

朱雀の力から玄武の力へと。

髪の色が紅から茶に変わる。

そして、紅に輝く瞳が茶に輝く瞳に変わる。

「天衝！！！！」

そして、オレンジ髪の男から黒い月牙天衝が放たれる。

それを見て、やはり先程までの月牙天衝とは比較にならないと改めて思った。

そう思いながら目の前に玄武の甲羅を生み出す。

そこにオレンジ髪の男が生み出した黒い月牙天衝が激突する。

同時に周囲に大きな衝撃が走る。

爆煙と黒い霊力が晴れると、無傷の玄武の甲羅が現れる。

「なん……だと……」

その事にオレンジ髪の男は驚愕する。

何かを出したのは見たが、まさか無傷であるとは思わなかったからだ。

対して龍也は安堵していた。

黒い月牙天衝は最初に見た月牙天衝とは比べ物にならない程の威力があった。

なので玄武の甲羅が粉碎され可能性があった。

現に過去にフランドールに破壊された事があった。

だが、その心配はなかった。

玄武の甲羅は黒い月牙天衝に耐えた。

だが、それだけだ。

あのスピードには付いていけない。

それにあの斬撃の威力。

龍也は一度その身に受けたから分かる。

例え、玄武の力を使っても斬られる。

なのでカウンターを仕掛ける事ができない。

仮に仕掛けられても当たるかどうかは疑問だが。

一旦玄武の甲羅を消して、オレンジ髪の男の様子を見る。
用心したように構えている。

今仕掛けてこないのは龍也にとって都合だ。

あのスピードに対抗するには力を変えるしかない。

龍也はそう思っただけで自身の力を変える。

玄武の力から白虎の力へと。

すると、茶に輝く瞳が翠に輝く瞳になる。

そして髪の色も茶から翠に変わる。

同時に腕と脚に風が纏われる。

「ッ!？」

龍也の姿がまた変わった事にオレンジ髪の男が驚く。

すると、龍也の姿が消える。

すぐにオレンジ髪の男の目の前に現れる。

そして拳を放つ。

オレンジ髪の男が咄嗟に反応し、龍也の拳を天鎖斬月の腹で受け止める。

激突音が響き、周囲に衝撃が走る。

少しの間その状態を維持すると、お互い同時にその場から消える。

そして少し離れた場所に同時に現れる。

オレンジ髪の男が天鎖斬月を振るう。

龍也はそれを風を纏っている腕で受け止める。

するとどうだろう。

風に接触した瞬間、斬撃の速度が激減する。

腕に纏っている風が斬撃の進行を阻害しているのだ。

その間に、龍也は防御していない腕で、オレンジ髪の男の顔面に拳を放つ。

オレンジ髪の男は咄嗟に顔を傾けて放たれた拳を避ける。

そしてまたお互い同時に消える。

どこに行ったかと思われたが、すぐにまた現れる。

今度先手を取ったのは龍也だ。

鋭い拳を放つ。

オレンジ髪の男はその拳を受け止める。

そして斬撃を放とうとする。

龍也は天鎖斬月を握っている拳を掴む事によってそれを防ぐ。

そのままの状態でお互い力比べをする。

そしてある程度力比べをすると、また同時にその場から消える。

また同時に現れるが、先程とは状況が違っていた。

「ぐっ……」

現れた時には龍也の蹴りがオレンジ髪の男に叩き込まれていた。

消えていた時に叩き込んでいたのだろうか。

龍也の蹴りにオレンジ髪の男が怯んでいたのかと思われたが、それも一瞬。

すぐさま突きを放っていた。

「チィー!!」

龍也は咄嗟に反応して顔を傾ける。

だが完全に回避出来た訳ではなく、頬を掠ってしまっ

お互い受けたダメージを気にせずに睨み合う。

そしてまた同時に消える。

どこかで激突音が響いたと思ったらまた消える。

そしてまた激突音が響いて消える。

これを何度も繰り返す。

そして何度目かの激突の後、お互い同時に間合いを取る。

息を整えながら互いの様子を伺う。

しばらくそのままの状態が続く。

先に動いたのはオレンジ髪の男であった。

真正面から龍也に向かって突っ込んでくる。

そして間合いに入ると同時に斬撃を放つ。

その瞬間に龍也は一步前に出て手を伸ばす。

「なっ!？」

オレンジ髪の男が驚く。

龍也が手を伸ばし掴んだのは天鎖斬月の刃。

刃と言っても最も切れ味が鈍いと言われている鏢に一番近い部分ではあるが。

鈍いと言っても全く切れ味が無いと言うわけではない。

事実、掴んでいる部分からは龍也の血が零れ落ちている。

「皮を斬らせて肉を斬る」

そう言いながら力付くで体勢を変える。

オレンジ髪の男の体勢を変える。

背中が斜め下になるように。

「肉を斬らせて」

そして拳を振りかぶり、

「骨を断つ!!!」

オレンジ髪の男の胴体に叩き込む。

「がっ!?!」

その一撃をモロに受けたオレンジ髪の男は吹き飛ばされ、林の中に突っ込んでいく。

それを見た龍也は両手を合わせて、圧縮した突風を両手の掌から放つ。

それはオレンジ髪の男が落下したと思わしき場所に叩き込まれる。

木々を吹き飛ばして、クレーターが出来る。

それを龍也が確認した同時に砂煙が舞って、その部分が見えなくなる。

そして龍也はオレンジ髪の男がどこから現れるか探す。

あの程度で終わったとは思えないからだ。

注意深く探してすると、

「月牙……」

そんな声が後方から聞こえる。

慌てて振り返ると、オレンジ髪の男が居た。

黒い霊力を纏わせた天鎖斬月を振りかぶっている。

ボロボロではあるが、まだまだ戦闘続行可能なようである。

龍也はこれから起こること予測して瞬時に防御の体勢を取る。

同時に自身の力を白虎から玄武に変える。

「天衝！！！！」

龍也が力の変換が終わったと同時に黒い月牙天衝が放たれる。

龍也は霊力を解放しながら耐える。

そして黒い霊力が晴れていく。

「く……」

ポロポロにはなったが、龍也もまだまだ戦闘続行可能だ。

霊力の解放を止め、龍也は土の塊を無数に生み出し、それをオレンジ髪の男に
射出しながら後退する。

オレンジ髪の男はそれを天鎖斬月で全て叩き落していく。

龍也は間合いが離れたのと同時に、自身の力を再び玄武から白虎に戻す。

そして腕と脚に風を纏う。

オレンジ髪の男の様子を見ると、息を切らしている。

だが、それは龍也も同じだ。

そして受けているダメージもだいたい同じ。

これ以上長引かせるのは得策ではないと龍也は思い、一気に勝負を

みんながみんな、同じ仮面を付けている。

「何だ、あいつら……」

龍也が疑問の声を漏らす。

「何だって虚じゃねえか」

龍也の漏らした声を聞いて、オレンジ髪の男がそう答える。

「虚？ 何だそれ？」

「って、虚を知らねえのかよ！？ お前虚の仲間じゃなかったのか
!?!」

「生憎、虚って言葉を生まれて初めて聞いたぞ」

龍也がそう言うと、二人の間の空気がシーンツとなる。

「もしかして、墓地のあれ……やったのお前じゃないのか？」

「ああ」

龍也がそう言うと、何とも言えない空気になる。

「……あー、悪かったな、犯人扱いしちゃって」

オレンジ髪の男がそう謝罪する。

「いや、疑われる行動を取った俺も俺だ。俺の方こそ悪かったよ」
龍也もそう言っただけで謝る。

「そーいや、名前、聞いてなかったな」

再び何とも言えない空気になりそうだったので。龍也がそう切り出す。

「ああ、俺は一護。黒崎一護だ」

「一護だな。俺は龍也。四神龍也だ」

自己紹介が終えた後、二人は巨人に目を向ける。

「ところで、あれは何だ？」

「あれは大虚でギリアンって言う名前だ」

龍也の質問に一護がそう答える。

「あれは倒さなきゃマズイものなのか？」

「ああ」

そう言っただけで一護は構えを取る。

それを見た龍也も構える。

そして同時に駆け出そうとした瞬間、

「一護！！」

後から声が掛かる。

龍也と一護は同時に振り返る。

そこには最初の見た一護と同じ格好をした黒い髪をした少女がいた。

「ルキア！！」

どうやらルキアと言う名のようだ。

「空座町の方の虚は？」

「全部倒した」

「そうか」

そう言われて一護はホッとす。

「それで、どうしてこっちに来たんだ？」

「たわけ、貴様の帰りが遅いからわざわざ様子を見に来てやったのだ。

ありがたく思え」

ルキアはそう言う。

そう言うが、一護が無事でホッとしたものも感じられる。

「へっ、そーかい」

一護がそう返す。

「それはそうと」

そう言いながら一護はギリアンの方に向き直る。

「ああ、まずはあれを何とかせねばな」

そう言いながらルキアが腰ある刀を抜く。

そして戦闘開始と思われた瞬間、

「ちょっと待った」

突如龍也がそう声を掛ける。

そしてルキアの方に向き直る。

「えっと、ルキアでいいんだよな？」

「そうだが……さっきから気になっておったのだが、貴様は誰だ？」

「俺は龍也……って、自己紹介は後だ。あんたに頼みがある」

「頼み？」

「ああ、下の方にサラリーマン風におっさんが倒れてるからどこか

安全な場所に運んでおいてほしいんだ」

「あ、忘れてた」

龍也がそう言っで一護は今思い出したと言っ顔をする。

「おっさん？」

ルキアが首を傾げる。

「普通の魂魄だ」

一護が捕捉する。

「わかった。そっちの方は私が何とかしよう。あのギリマン共は貴様等二人に任せろがいいか？」

「ああ」

「問題ねえよ」

二人がそう言っるとルキアはその場から消える。

どうやら下の方に移動したようだ。

「それじゃ」

「行くか」

そして二人同時に飛び出す。

まず、一番近くに居たギリアンの顔面を龍也が殴りつける。

仮面が割れてそのまま倒れこむ。

そして塵になっていく。

その後ろに居たギリアンは一護が斬り裂く。

そして龍也と一護は左右に分かれて飛んで行く。

龍也はまた近くにいたギリアンを殴りつけて倒す。

そうして一体一体倒していくと、何時の間にか囲まれていた。

だが、龍也は慌てず自身の力を変える。

白虎の力から朱雀の力へと。

瞳の色は翠から紅に輝く瞳の色へ。

髪の色も翠から紅に変わる。

そして両手を広げて二本の炎の剣を生み出し、回転して纏めてギリアン共も倒す。

その後、一護の様子を見る。

一護の後ろに居るギリアンが、口から何かを放出しようとしている。

それを見た龍也はその場で拳を振りかぶり、

「炎鳥!!」

拳を放つ。

すると拳から炎で出来た鳥が生み出される。

その鳥は真つ直ぐ何かを放とうとしてたギリアンに激突し、ギリアンを倒す。

すると一護も何かに気付いたように龍也の方を見る。

そして、

「月牙天衝!!」

黒い月牙天衝を放つ。

その月牙天衝は龍也の後ろに居たギリアンに命中する。

「サンキュー!!」

「お互い様だ!!」

そして再び二人はギリアンを倒していく。

龍也の方が最後の一体となった時、そのギリアンが口から赤い光線を発射する。

すると、一護の方も丁度終わったようだ。

戦いが終わった後、龍也は色々と事情を話す事になった。

その結果、浦原商店と言う場所に居候する事になった。

迎えが来るまで雑用をしながら。

修行編 その3

日が暮れ、月も上がった時間帯。

龍也は玄武の力で作った簡易の家の中で寝る準備をしていた。

幸い防寒具の性能はいいので、そのまま寝ても凍死する心配が無い。

そして腕を組み、目を閉じながらシミュレートをする。

銀髪の少女との戦いを。

あの少女の動き、技。

これらを正確に思い出しながら。

こう言ったイメージトレーニングも大事である。

最近は体力が以前より増え、すぐに寝ると行った事もなくなったの
でこういう事も
できるようになった。

しばらくそれが続く。

「……あ」

そしてある事を思い出す。

彼女が弾幕を使う事。

剣技ばかりに目がいつていたので、その事をすっかり忘れていた。

「どうすっかな……」

それ対策も考えなければなるまい。

前に戦った時はそれで隙を付かれて、必殺の一撃を受けたのだ。

「うーん……」

今いる位置から近い場所を考える。

「……魔法の森か」

龍也はそう判断を下す。

ならば、明日にでも魔理沙かアリスに頼んでみようと龍也は思った。

兎も角、明日に備えてもう寝る事にした。

「相変わらず迷いやすいな、ここは」

魔法の森を歩きながら龍也はそう漏らす。

この森は未だによく迷う。

魔法の森の独特な雰囲気があるのだから。

暫く歩くと家を見える。

「ここは……魔理沙の家だな」

家の外見を見て龍也はそう判断する。

近づいてドアをノックする。

少しするとドアが開かれる。

「お、龍也じゃないか」

「よっ」

「どうしたんだ？」

「ちょっと頼みがあったな」

「頼み？」

魔理沙が首を傾げる。

「ああ、俺の修行に付き合ってほしい」

「修行？」

そう言っつて魔理沙は考え込む。

「勿論いやなら断つて貰っても構わない。俺も無理強いする気はないしな」

「いや、それくらいなら構わないぜ」

魔理沙から了承が取れる。

「そっか、ありがとう」

「いいっていいって。それで私は何をすればいいんだ？」

魔理沙がそう尋ねる。

「俺に弾幕などを放ってほしい」

「弾幕を？」

「ああ、俺はそれを避けたり捌いたりしてお前に近づく。で、お前はそれをさせない様に

弾幕を放ってほしい。放つ弾幕は弾幕ごっここのルールを無視で頼む」

「それでいいのか？」

「ああ」

「わかった。じゃ、空に上がるうぜ」

そして二人で上空に上がる。

互いにある程度離れると、龍也は自身の力を朱雀に変える。

それに伴い瞳の色が黒から紅に変わる。

そして二本の炎の剣を生み出す。

「よし、それじゃいくぜ!」

そう言って魔理沙は星型の弾幕を放つ。

龍也はそれを二本の炎の剣を使って捌いていく。

「くっ!」

次第に捌いていくのが難しくなる。

このままでは捌ききれなくなると思い、一旦後方に下がる。

そして円を描くように動きながら魔理沙に近づく。

同じ場所に照射される時間が短ければ密度が薄くなると判断したからだ。

その考えは正しく、先程より密度が薄い。

自分に当たりそうなのを炎の剣で捌いていく。

そして隙を見つけたので一気に近づこうとする。

すると、魔理沙がニヤリと笑った。

その瞬間、先程までとは打って変わって、広範囲、高密度の弾幕が放たれる。

「しまっ!?!?」

この距離ではとてもじゃないが、炎の剣で捌ききれぬ量じゃない。

龍也は慌てて防御の体勢を取る。

そして放たれた弾幕が龍也に次々と着弾する。

「ぐ……」

何とか耐え切るも、ふら付いてしまう。

そのせいで、見えない足場から足を踏み外してしまう。

そのまま地面に墜落してしまうかと思われたが、

「おっと」

魔理沙が龍也の手首を掴んで落下を防ぐ。

「大丈夫か？」

「……ああ、大丈夫だ」

頭を振りながら龍也はそう答える。

隙が出来たと思って突っ込んだらこれだ。

次からは用心しなければなるまい。

「もう一回頼めるか？」

「おう、構わないぜ」

そう言ってお互い再び距離を取る。

そして魔理沙が弾幕を放ってきたので龍也も炎の剣を構えてそれに備える。

「悪い!!」

そしてあれから数日後、魔理沙が謝ってくる。

何でもこれから魔法の実験に掛かりつきりになるので、龍也の修行に付き合えないとの事。

「いや、いいよ。元々無理言っただけ頼んだのはこっちなんだし」

龍也はそう言う。

魔理沙の予定を崩してまで修行に付き合わせる気はない。

「ほんと、悪いな」

「いっていいって。それじゃ、またな」

自分がここにおいても魔理沙の実験の邪魔になる可能性があるので、魔理沙の家を出て行く事にした。

「おう、またな」

そして魔理沙の家を出て、魔法の森の中をい歩く。

次はどこに行こうかと考える。

「……そうだ、アリスの家に行こう」

そう言って龍也はアリスの家に行って修行に付き合っつて貰おうと思
う。

そしてアリスの家を目指して足を進める。

暫くすると洋館を見つける。

アリスの家だ。

近づいてドアをノックする。

少しするとドアが開かれる。

「っと、アリスの人形か」

ドアを開けたのはアリスの人形だ。

「アリスは居るか？」

龍也がそう尋ねると、アリスの人形は頷いて家の中に入っていく。

龍也は後に続くように家の中に入っていく。

「よし」

アリスの姿を見つけたので挨拶をする。

「あら、龍也じゃない。いらっしやい」

アリスも龍也に挨拶を返す。

「実は頼みがあるんだけど、いいか？」

「頼み？　これが終わった後でいいかしら？」

見るとアリスは何か作業をしているようだ。

「ああ、それまで待たせて貰って構わないか？」

「いいわ。どこかその辺に座っていて」

「わかった」

そう言っただけで龍也は近くにあって椅子に座る。

しばらくポケーツとしてると、アリスの人形が紅茶を持ってきてくれた。

「ありがとな」

そう言っただけで紅茶を飲む。

相変わらず美味しいと龍也は思う。

しばらくするとアリスの作業が終わったようで、龍也に近づいてアリスは尋ねる。

「それで、頼みって何？」

「ああ、修行に付き合ってほしいんだ」

「修行に？」

アリスがそう言って首を傾げる。

「ああ、俺がアリスに近づこうとするから、アリスはそれを弾幕などを張って

阻止してほしい。放つ弾幕は弾幕ごっこのルールを無視で」

そう言うとアリスは少し考える。

「いいわよ。それが終わったら外の世界のロボットの話、また聞かせてね」

「ああ、そくらいならお安い御用だ」

龍也はそう言う。

そして二人揃って外に出て、上空に上がる。

ある程度上がると龍也は自身の力を朱雀に変える。

瞳の色が黒から紅に変わる。

そして二本の炎の剣を生み出す。

それを見たアリスは人形を展開させる。

「私の方の準備はいいわ」

「なら……いくぜ」

そうやって龍也やスピードを落としながら正面から突っ込む。

まずは様子見だ。

するとアリスの人形が弾幕を放つ。

それを見た龍也は後ろに跳んで距離を取る。

そして炎の剣で弾幕を捌きながら、円を描きながら移動する。

そうやって移動していると、

「ッ!?!」

龍也の真横にアリスの人形が現れる。

そして弾幕が放たれる。

「くっ!?!」

龍也は体を屈めてそれを避ける。

そして大きく距離を取る。

その間にアリスの人形はアリスの下に戻っていく。

中々やり難いと龍也は思った。

アリスだけではなく、あの人形にも意識を向けなければなるまい。

そう考えながら龍也は再び移動を開始する。

アリスの人形が近づいてきたら大幅に移動スピードを上げる。

現段階ではこれぐらいしか対抗策が思いつかなかったからだが。

そして隙を見つけて龍也は一気にアリスに近づく。

すると、龍也から見て正面の位置にアリスの人形が現れる。

何やら魔力が収束していく。

龍也は慌てて退避しようと、その時には赤いレーザーが放たれる。

龍也は自分の体とレーザーの間に炎の剣を割り込ませる。

そして炎の剣にレーザーが命中する。

その衝撃で大きく距離を開けてしまう。

体勢を立て直すと、もう目の前には大量の弾幕が迫って来ていた。

龍也はそれらを炎の剣を使って迎撃する。

突如弾幕が止んだので、龍也はアリスの方を見る。

「ねえ」

すると、アリスが話しかけてきた。

「何だ？」

「弾幕ごっこのルール外なら弾幕を避けたり捌いたりしてるだけじゃ限界が来ると
思うの。考えて避けるもの大切だけど、弾幕を打ち消すと言つのも加えてみたら
どうかしら？」

アリスからそんなアドバイスが聞ける。

「打ち消す……」

そう言われて龍也は考える。

「弾幕は基本的に攻撃力より量。休む間も無く大量に当ててダメージを与えたり、動きを
制限したり誘導したりするのが本来の使い方だから不可能じゃない
と思うんだけど……。」
まあ、この辺は弾幕ごっこと一緒なんだけどね」

「……あ」

そして龍也が何かを思いつく。

「ちょっと弾幕を撃ってくれないか」

「わかったわ」

そう言っアリスの人形が弾幕を放つ。

そしてその弾幕が近くに来たら、龍也が炎の剣を振るう。

すると、剣先から爆炎が迸る。

その爆炎は弾幕を飲み込む。

これならば相手側からも龍也の姿を一時見失わせる効果もある。

応用すれば攻撃にも使えるだろう。

「そうそう、そんな感じよ」

爆炎が消えるとアリスがそう言う。

「ありがとう。しかしよくこう言うのが思いつくな」

アリスの頭の柔らかさに感心する。

少し意固地になっていた龍也では考えも付かなかったであろう。

「弾幕ごっこはブレインよ。だからこれくらいは……ね」

アリスがそれ程でもないと言った感じで返す。

「それじゃ、続きといくけど……いい？」

「ああ」

そして再び龍也の修行が始まる。

「それじゃ、そろそろ行くな」

あれから大体一週間程経ったころ、龍也はそう切り出す。

「あら、もう行くの？」

「ああ、これ以上付き合わせても悪いしな」

アリスにもアリスのやりたい事があるだろうしと付け加える。

「私も貴方の話を色々聞かせてもらったしお相子だと思っけどね」

「まあ、俺は衣食住の面倒も見てもらってるしな」

そして色々話しながら玄関に向かう。

「それじゃ、またな」

「ええ、またね」

そしてアリスの家を出て、歩き出す。

弾幕対策は出来た。

「後は……体を鍛えなおすか」

そう言っつて龍也は考え始める。

やはり、基本となる体も鍛えなおす必要があると思っただからだ。

どこか安全で集中して体を鍛えられる場所はないかと。

「……あつた」

そしてある場所が思い至る。

龍也は飛び上がって、そこを目指して空を駆ける。

「と、言っ訳で泊めてくれ」

「まあ、お賽銭入れてくたし私は構わないわよ」

龍也が居る場所は博麗神社。

ここなら妖怪に襲われる心配もないので安心して鍛えられる。

霊夢の許可も取れたので龍也は神社の裏手に回る。

そして上半身裸になる。

かなり寒いが、すぐに温まるであろう。

そう龍也は思い、飛び上がって太い木の枝を掴む。

そして懸垂を始める。

要するに筋トレだ。

それから約一ヶ月、この生活が始まる。

ぶら下がってでの懸垂や腹筋。

腕立て伏せや背筋、スクワット。

博麗神社に遊びに来た魔理沙が面白がって龍也にぶら下がったり、乗っかったりしてきたが。

後は瞑想など。

これで自身の精神世界に行けるかと思っただが、そう上手くはいかなかった。

他にも雑巾掛けや埃落としなど雑用もした。

料理などは霊夢が作ってくれたが。

この一ヶ月で大分鍛えられたと龍也思う。

「それじゃ、そろそろ行くな」

「それにしてもよく続いたわね」

霊夢が感心したようにそう言う。

「ま、こう言うのは積み重ねが大事だからな」

「ふーん」

あまり興味がなさそうだ。

「それじゃ、またな」

「ええ、またいらっしやい」

そして龍也は博麗神社を後にする。

目指すはあの銀色の髪をした少女。

どこに居るかはわからない。

ならば自分の足で探すしかあるまい。

そして龍也が抱いている想いはただ一つ。

勝つ。

ただ、それだけだ。

妖々夢編 その1

博麗神社を出てから一週間程。

龍也は銀色の髪をした少女の足取りが未だに掴めないでいた。

前に戦った場所やら色々と回ったが収穫はゼロだ。

「あ、すみません。団子おかわり」

なので休憩がてらに人里の団子屋で団子を食べている。

そして食べ終わった後、代金を払って店を出る。

人里を歩きながら考える。

次はどこを探すべきかと。

すると、何やら話し声が聞こえてくる。

どうも不思議がってる様子だ。

「どうかしたんですか？」

なので、少し話を聞いてみる事にした。

「ああ、今年は冬が長いなと思ってさ」

「冬が？」

「ああ、もう五月だって言つのにね」

それを聞いた龍也は驚く。

もう五月になつていたのかと。

その後里民と雑談をし、別れて出口まで歩いて行く。

いくらなんでも冬が長すぎないかと。

「……あ」

そこで思い出す。

あの銀色の髪の少女が言っていた事を。

春度。

それを集めていると。

もしかそれが原因ではないかと龍也は思う。

春度は名前からして春に関係していそうだ。

それを集めているから春が来ないのではないか。

龍也はそう推察する。

「暖かい場所を探しながら移動すれば見つかるのかな？」

そして、龍也は人里を出た後空に飛び上がって行く。

「っと」

飛んできた弾幕を避けながら龍也は進んで行く。

弾幕を放ってきたのは無数の妖精達だ。

普段であれば、こつも妖精達の襲撃を受ける事は殆どない。

それなのに襲撃を受ける。

ならば、冬が来ないのは異変でほぼ確定であろう。

龍也はそう結論付け、弱めの弾幕を無数の放つ。

それらは妖精に命中し、どんどん墜落していく。

しかし、やりにくいなと龍也は思う。

弾幕を放ってくる妖精の殆どからは殺気やら敵意を感じない。

あるのは無邪気さとかそういうものだ。

明確な殺気や敵意がないからキチンと意識していなければ、咄嗟の
反応が遅れる。

こちらの戦意が薄まると言う事もあるが。

「はあ………」

溜息を一つ吐き、また進んで行く。

そうして進んで行く道中でも妖精がわんさか出てくる。

どれだけいるんだと龍也は思う。

また弾幕を避け、弾幕を放って龍也は進んで行く。

少しすると、

「りゅーやー」

「ん？」

声を掛けられてので、声を掛けられた方に振り向く。

「チルノか」

いたのはチルノであった。

「どうかしたのか？」

「散歩の途中で龍也を見かけたから声を掛けた」

どうやら、散歩の途中で龍也を見つけたようだ。

「しかし、元気そうだな」

「うん！！ 寒いとアタイも元気になるの」

氷の妖精だからだろうか。

寒い方が調子が出るのだろうか。

「ねえねえ、龍也も一緒に散歩しよう」

「悪い、俺は用があるんだ」

「えー」

「また今度……な」

「しょうがないわね。ライバルであるアンタの肩を持ってあげるわ」
そう言つてチルノがどこに飛んでいく。

微妙に文法が違うような気がしたが龍也は気にしない。

そしてチルノが去るのを見届けた後、龍也も再び進んで行く。

当たり前のように妖精の襲撃を受けながらも進んで行く。

しばらくすると、

「あら、龍也じゃない」

「レティか」

レティと会った。

「元気そうだな」

「ええ。冬が長いと元気になるわよ。私は冬の妖怪だしね」

レティが笑顔でそう言つ。

「そうそう、この長い冬は異変だぜ」

「あら、そうなの？」

レティは少し驚いた表情になる。

「ああ、春度と言う物を集めてる奴がいるからこうなってるんだと思っぞ」

「なるほどねえ……」

「で、だ。暖かい方向に向かって来てるんだが方角はこっちで合ってるか？」

「そうね……合ってるわ」

「そりゃ良かった」

方角は間違っていなかったようなので龍也はホッとする。

「それを聞くなって事は貴方は異変解決？」

「あー……そうなるのかな？」

本来の目的は銀色の髪をした少女にリベンジなのだが、春度を集めているのがあの少女なのだから、あの少女を倒すと言う事はそう言う事になるのであろう。

「じゃあこの長い冬も終わっちゃったのかしら」

レティは残念そうな顔になる。

「そう言っとなって。今回の冬が長くなり過ぎると、次の冬が短くなるかも
しれないぜ」

「それは困るわね」

そう言っってレティは仕方がないかと言う顔になる。

「それじゃ、そろそろ春に休めそうな場所を探しに行こうかしら」

「そうしとけ」

若干レティには悪い気もするが、まあ仕方が無いと割り切る事にした。

「それじゃ、異変解決頑張ってね」

「ああ」

そう言う応援を受けて、龍也は再び飛んで行く。

「じじは……」

しばらく進んで行くと、急に景色が変わる。

何故こんな所にと思ったが、それよりももう一つの事に驚く。

「暖かい」

そう、ここら一帯は暖かいのだ。

先程までは寒さが支配していたのに。

ここまで急激に気温が変化すると言っ事は、

「ここにあいつがいるのか？」

龍也はそう考える。

もっと良く見れば木に葉っぱが付いている。

他の場所で見えた木に葉っぱが付いていなかった。

ますますここに銀色の髪の少女が居る可能性が高くなる。

期待を胸に龍也は進んで行く。

少しすると妖精の襲撃を受ける。

放たれる弾幕を避け、龍也も弾幕を放って進んで行く。

すると、何かを見つける。

「あれは……鳥居か」

紅色をした鳥居を発見する。

この辺りに神社でもあるのだろうか。

神社と言えば博麗神社を思い浮かべるが、あの神社の周囲にこのような

景色はない。

そう思いながら、襲って来る妖精を適当に相手しつつ進んで行く。

また、少し行くと何かを発見する。

「あれは……民家か？」

民家らしき建物を発見する。

一旦屋根の上に降りて確認してみる。

「やっぱり家だな」

龍也はそう思った。

ならばここは集落か何かであろうか。

その割には人の気配がしない。

上空で暴れていたからかもしれないが。

考えてもしかたがないので再び上空に上がって進んで行く。

その途中でまた妖精が襲撃を仕掛けてくる。

弾幕を放って落とすのだが、妖精は落としても落としても次から次へと湧いてくる。

ほんと、どれだけ居るんだと龍也は改めて思った。

妖精達の相手をしながら進んで行くと、

「じゃじゃーん」

目の前に何かが現れる。

茶色い髪で猫耳の女の子。

妖力を感じるので妖怪だろうか。

「え……と、誰？」

「私？ 私は橙だよ」

どうやら橙と言う名前らしい。

「お兄さんの名前は？」

「龍也。四神龍也だ」

「龍也って言うんだ」

「ああ」

「処でお兄さんは、どうしてこんな所にまで来たの？」

「暖かい場所を探して……って、もしかして橙も春度を集めてたりするの？」

「ううん、私は違うよ」

首を振って橙はそう答える。

どうやらここには銀色の髪の少女はいないようだ。

「そーいや、ここって何処なんだ？」

「ここはマヨヒガだよ」

「マヨヒガ？」

聞いた事の無い単語に龍也は首を傾げる。

「迷い家とも言っね。迷った人が偶に迷い込んでくることがあるんだよ」

「へー」

「ここは普通は入って来れない所何だけど、入ってこれたって事はお兄さん運がいいね」

だからここは普通に春が来ているのだろうか。

迷ったりしなかったので、あの銀色の髪の少女はここには来なかった。

春度が奪われなかったのだからここは春なのだろう。

龍也はそう結論付ける。

「ここは適当に進んで行けば外に出れるのか？」

「うん、出れるよ」

ならばさっさと出ようと龍也は思って、移動をしよとする。

「ねえねえ、お兄さん」

「ん？」

「唯で出れるとは思ってないよね」

そう言われて龍也は身構える。

今の自分は侵入であるのだ。

ならば撃退されるのは当然であろう。

「……弾幕ごっこか？」

「うん」

そう橙が言つとお互い間合いを取る。

「弾幕ごっこに付き合ってくれたら出て行ってもいいよ」

「そいつはごうも」

龍也がそう言つと同時に橙は弾幕を放ってきた。

いきなりだなと龍也は思い、放たれた弾幕を避けていく。

そして龍也も弾幕を放つ。

だが、橙には避けられてしまふ。

猫の妖怪だからかすばしっこい。

そしてまた弾幕が放たれる。

「っつ」

龍也はそれを落ち着いて避けていく。

「やるね、お兄さん。なら、これならどうかな？」

橙はそう言って放つ弾幕の種類を変える。

速い弾幕。

遅い弾幕。

ある程度のホーミング性能がある弾幕。

これらの弾幕を織り交ぜながら放ってきた。

「ッ!?!」

これには龍也も驚く。

こんな器用なマネが出来るとは思っていなかったからだ。

何とか回避していくが、何発かは掠ってしまう。

タイミングが読みづらいからだ。

この弾幕にはそう言う狙いもあるのであろう。

それぞれの弾幕を読みきる前に他の弾幕を放って読むタイミングを見失させる。

有効な手であると龍也は思った。

そんな弾幕であるにも係わらず、龍也が直撃を受けないのは修行のお陰であろう。

元々は銀色の髪をした少女対策のものであったが、こんなところで役立つとは。

あの修行のお陰で龍也の弾幕ごっこのレベルが上がったのである。

修行に付き合ってくれた魔理沙とアリスに龍也は内心感謝をする。

そして少しずつ橙の放つ弾幕にも慣れてきた。

龍也は橙の放つ弾幕を観察し始めた。

アリス曰く弾幕ごっことはブレインとの事。

弾幕ごっこである以上、どこかに突破口が必ずあるはずである。

龍也はそれを探し始める。

「……もしかして」

そしてそれらしきものを発見する。

それぞれの弾幕を放つ間に隙があるというのを。

そして、弾幕を避けながらタイミングを計っていく。

「……そこー!!」

隙を見つけて弾幕を放つ。

「にゃ!?!」

龍也の放った弾幕の何発かが橙に当たる。

少しふら付いたようだが、まだまだ健在のようだ。

すると、橙がカードを取り出す。

スペルカードのようだ。

「仙符『屍解永遠』」

そしてスペルカードが発動する。

すると、橙が回転しながら小刻みに動き赤と青の弾幕を放つ。

それを避けながら、龍也も弾幕を放とうとするが、

「チィー!!」

放てなかった。

中々に弾幕の密度が濃い。

長時間同じ場所に留まっては危険だからだ。

何とか隙を見つけて移動しながら弾幕の隙間に霊撃を放つが、橙には当たらない。

他にも広く弾幕を展開したりしたが、相殺したりするだけであった。

このままでは埒があかない。

「……あ」

そこで思い出す。

自分にはこの状況を打開するスペルカードがあると言う事を。

そして龍也もスペルカード発動する。

「咆哮『白虎の雄叫び』」

龍也の瞳の色が黒から翠になる。

そして無数の小型の竜巻を生み出し放つ。

すると橙の動きを大きく制限する。

更に龍也が翠色の弾幕を放つ。

お互いの放った弾幕が竜巻に当たり、様々な方向に反射されていく。

龍也はこの事を知っていたので、自分に向かってきた弾幕を、己が反射神経と動体視力のみで避けていく。

だが、橙はその事を知らないなのでこの事態に慌ててしまう。

そんな状態ではまともな回避行動は取れなく、自分や龍也の放った弾幕が

次々と命中してしまう。

そして、煙が晴れると真っ逆さまに落ちてしまう。

動かないところを見ると気絶したようだ。

これはまずいと思った龍也は落下しきる前に橙に近づき抱き上げる。

とりあえず、近くにある民家の中に入れる事にした。

「お、起きたか」

近くにあった民家に入り暫くすると、橙が目を覚ます。

「ここは……」

「近くにあった家の中だ」

「もしかして、私が起きるまで待っていてくれたの？」

「ああ、ほっとくのも寝覚めが悪いからな」

「ありがとう。お兄さん優しいね」

それから少し橙と雑談をする。

橙は妖怪ではなく妖獣なんだとか。

そして式神でもあるらしい。

あんまりよくは分からなかったが、そう言うもの何だと龍也は

理解しておくことにした。

「それじゃ、俺はそろそろ行くよ」

「うん、またねお兄さん」

「ああ、またな」

そう言って龍也は民家を出て空を飛ぶ。

そしてマヨヒガを抜けていく。

妖々夢編 その2

マヨヒガを抜けると、寒さが龍也を襲う。

先程まで暖かい場所にいたせいか、余計に寒く感じる。

それでも耐え切れない程ではない。

これもこの防寒具を作ってくれたアリスのお陰だろう。

異変のせいで冬が長いので余計にありがたく感じる。

そんな事を思いながら進んで行くと、妖精の大群が現れる。

そして弾幕を放ってくる。

龍也はそれらを避けながら弾幕を放っていく。

その弾幕に当たって妖精達は墜落していく。

そして少し進むと強い風が吹く。

その影響で雪が舞う。

龍也は一旦目を閉じてやり過ごす事にする。

そして風が止むと同時に目を開ける。

先の景色がちゃんと見える。

視界は問題ないようだ。

「よし」

そしてまた進んで行く。

するとすぐに妖精達の襲撃を受ける。

放たれる弾幕を避け、弾幕を放って妖精達を打ち落としていく。

放たれる弾幕を見て龍也は思う。

妖精達が放つ弾幕が激しいと。

目的地が近いせいであろうか。

そして前の異変の時の事を思い出す。

あの時はレミアアに近づけば近づくほど妖精の放つ弾幕は激しくなっていた。

ならば、今の状況もそれに当て嵌まるのではないだろうか。

目的地に近いから妖精の攻撃が激しくなる。

龍也そう言う仮設を立てる。

もし、この仮説が正しいのなら龍也は順調に目的地に近づいていると言っ事になる。

「まあ……今はそれを信じるしかないか」

龍也は一応は暖かい方向を目指して飛んでいる。

暖かい方と妖精の攻撃が激しい方向。

この二つがイコールで結ばれるのなら、今向かっている方向が目的地であると言う

龍也の考えにも信憑性が増す。

答えがどうであれ、今は進むしかないのだが。

妖精達を打ち落としながら進むと、

「あら、龍也じゃない」

「アリス」

アリスと出会った。

「こんな所で何をやっているの？」

「まあ……異変解決って事になるのかな？」

「異変解決……ああ、この長い冬の事ね」

アリスが納得がいったと言う顔になる。

「一応暖かい方と妖精の攻撃が激しい方向に向かっているんだけどあ

ってるか？」

自身の考えが正しいか龍也はアリスに尋ねてみる。

「ええ、合ってるわ」

アリスがそう言う。

「そっか」

合っていた事に龍也はホッとする。

「次はあっちの方に進めばいいわ」

そしてアリスが指をさしながら方向を教える。

「あっちの方に春度が集まってるのを感じるわ」

「へー」

龍也は良くわからないが、アリスにはわかるようだ。

「春度を集めて暖まる気？」

「いや、春度を集めている元凶を叩きにいく」

「ああ、やっぱりこれ人為的なものだったのね」

アリスはやっぱりかと言う顔になる。

「気付いてたのか？」

「ええ。春度が一箇所に集まるなんて自然現象とは考え難いしね。犯人は春告精辺りかしら？」

「春告精？」

「春を告げる妖精の事よ」

「妖精……いや、銀色の髪をした女の子が春度を集めていたな」

「あら、春告精じゃなかったの。何のために春度何て集めてるのかしら」

「さあ、そこまでは」

これに関しては龍也もわからない。

まさか自分だけが暖まろうとしている訳ではないだろう。

「ま、とりあえず異変解決頑張ってね」

「ああ」

そして龍也はアリスが指さした方へ進むことにした。

「随分暗い場所に来たな」

龍也は周りの景色を見ながらそう漏らす。

移動時間がどれだけ掛かったかはわからないがもう夜なのだろうか。

そんな事を考えながら飛んでいると、回転する謎の飛行物体が編隊を組んで

飛んできた。

そしてかなりの速度と密度を持った弾幕を放ってきた。

「っと」

少し危なげながらも弾幕を回避していく。

そして龍也も弾幕を放って打ち落としていく。

何度も飛行物体を撃退していくと妖精も現れる。

先程までの妖精とは違って、弾速も密度も高い。

やはりこの先で正しいのではないかと龍也は思う。

そして次々と現れる妖精と飛行物体は押しながら進んで行く。

「春ですよー！！」

そんな事を言いながら一体の妖精が現れる。

その妖精を見て、龍也はどこかで見たことあるなと思った。

そして思い出そうとする。

「ああ、思い出した。あの時の妖精か」

そう言っただけで龍也はあの時の光景を思い出す。

幻想郷のどこかを歩いていた時、急に空から弾幕を放たれた事を。

その時も先程と同じようなセリフを言っていた。

どうしてこんな所にと龍也は思った瞬間、目の前の妖精は弾幕を放ってきた。

「いきなりだな!!」

龍也は弾幕を避けながらそう言う。

幻想郷で急に戦いを挑まれることはいつもの事ではあるが。

そして龍也も反撃の弾幕を放とうとするが、

「消えた!?!」

その妖精が消える。

龍也がどこに行ったか探していると、消えた場所のすぐ近くに現れる。

そしてまた弾幕を放つ。

龍也がそちらに手を向けるとまた消える。

「ちい!!」

舌打ちをしながらまた妖精の姿を探す。

すると、また消えた位置の近くに現れ、弾幕を放ってくる。

つい先程放った弾幕もあつてか、龍也も回避に専念する。

弾幕を避けながら龍也はどうするべきか考える。

その妖精が現れた瞬間に反応して手を向けても、放つ前に消えてしまふ。

何とか反撃の手を考えなければジリ貧だ。

「……………!!」

そして気付く。

一旦消えてから次に再び現れるまでにある程度のタイムラグがあると。

見えている間に距離を詰めてもまた距離を離されるかもしれない。

だが、消えている間ならどうだ。

おそらく距離は離されないであろう。

幸い消えて現れても龍也との距離は然程変わらない。

後はタイミングだ。

距離を詰めるタイミングを見極める。

そして距離を詰めた後に広範囲に弾幕を放つ。

これでこの状況を打破出来るはずだ。

そう龍也は判断し、弾幕を避けながら待つ。

タイミングを。

ある程度の被弾を覚悟して。

そしてそのチャンスは来た。

ほんの僅かだが弾幕が薄くなっているのを発見する。

そして妖精が消えたのを確認して一気に突っ込む。

弾幕が何発か掠るが気にしない。

そして龍也も広範囲の弾幕を放つ。

調度、龍也が弾幕を放ったところで消えていた妖精が現れる。

そして龍也が放った弾幕が妖精に命中していく。

煙が晴れると妖精はどこかに逃げていった。

あのセリフから今のが春告精なのだろうかと龍也は思う。

何も言わずにどこかに行ってしまったのでなんだったんだらうと思
うと

同時に思っていたより強かったなと龍也は思った。

強かったのは異変の影響であらうか。

考えても仕方がないので、龍也は再び進む事にする。

すると明るくなってきたので、周りの景色が見えるようになる。

「いつのまにか雲の上まで来ていたのか」

今いる位置を確認して龍也は驚く。

まさか雲の上まで来ているとは思わなかったからだ。

それに然程息苦しくもないと龍也は感じた。

それだけ強くなったのであろうか。

別に悪いことではないので龍也は気にしないでおく事にした。

少しするとまた妖精達が現れて弾幕を放ってきた。

雲の上でも妖精は出てくるんだなと龍也は感心する。

妖精と言っても数が数だ。

おまけに弾幕の量と密度もある。

龍也は油断なく弾幕を避け、弾幕を放って妖精達を落としていく。

そして、やけに強い妖精が一体現れる。

弾幕の量に密度、耐久力が先程まで現れていた妖精の比ではない。

それでも一体だけであったので、落ち着いて集中すればそれ程脅威ではなかった。

その妖精を倒して先に進むと、大きな扉のような物を発見する。

近くには角材らしきものが下から伸びている。

ここには何も無い事から、この先が目的地ではないかと龍也は思っ

「こんな所にお客さんとは珍しい」

門を見ていた龍也に何者かが声を掛ける。

茶色い髪に赤い帽子を被っている。

「誰だい、アンタ？」

「私？ 私はリリカ・プリズムリバー」

目の前の相手はリリカと言っらしい。

「そう言っ貴方は？」

「龍也。四神龍也だ」

「ふむふむ、龍也ね」

「なあ……」

龍也が言葉を紡ごうとした時、

「あれ、お客さんかい？ リリカ」

また二人現れた。

黒い帽子と金色の髪をした少女と白っぽい帽子と水色の髪をした少女。

二人ともリリカと顔立ちが似ている。

姉妹か何かであろうか。

「誰？」

一応尋ねてみることにした。

「ルナサとメルラン。二人とも私の姉だよ」

リリカがそう答えてくれた。

「貴方はだーれ？」

メルランがそう尋ねてくる。

「龍也って言うらしいよ」

龍也ではなくリリカがそう答える。

「龍也か。それで、何の用だい？」

今度はルナサがそう尋ねて来る。

「その門の先によろがある。できれば開けて欲しいんだが……」

龍也そう言うと、リリカの顔色が変わる。

「いいけど、私と遊んで勝てたらね」

リリカがそう言う。

頼んでいるのはこちら何だから、この程度の条件なら飲もうと龍也は思った。

「いいぜ、それで」

龍也がそう言う。

「頑張つてねー」

「手助けが必要ならいつでも受け付けるよ」

そう言ってルナサとメルランの二人は一旦その場から離れる。

「それじゃ、いくよー」

そう言ってリリカが弾幕を放つ。

かなり密度の高い弾幕だ。

龍也はまずは回避に専念することにする。

よく見れば僅かな隙間があるのでそこに体を割り込ませる。

そして隙を見つけて龍也も弾幕を放つ。

弾幕の密度が高くなると再び回避に専念する。

しばらくそうやって弾幕ごっこをする。

「やるねえ、龍也」

そしてこのままでは埒があかないと判断したのか、リリカがスペルカードを取り出す。

「冥鍵『ファイオーリ冥奏』」

スペルカードが発動する。

これは左右から挟みこむようにするタイプのようだ。

間合いの取り方を間違えれば、挟み撃ちに合うであろう。

龍也は慎重に間合いを計っていく。

「……ん？」

回避に専念していると、ある事に気付く。

間合いを取らねばならない位置が変わってきていると。

これでは龍也も中々攻撃に転じられない。

これ以上時間を掛けるのもあれなので、龍也もスペルカードを使う事にした。

「靈撃『靈流波』」

龍也の掌から青白い閃光が迸る。

飛んできている弾幕を打ち消しながら。

リリカはギリギリのところまでそれを避ける。

「危ない危ない」

軽いようにそう言うがリリカは冷や汗を掻いていた。

「大丈夫？」

「苦戦してるね」

その様子を見てか、ルナサとメルランが戻ってきた。

「手助け必要？」

「必要」

リリカがそう言うと三人はフォーメーションを取る。

そしてスペルカードを取り出し、

「『合葬』プリズムコンチェルト』」

スペルカードが発動する。

一人が攻撃し、残りの二人が相手の移動を制限するようだ。

何とか避けていくが、

「ッ!？」

回避した先に残りの二人がいた。

このままでは直撃を受ける。

何とか足場を作り、その場から離れようと力を籠める。

「『え!?!』」

二人が驚きの声を上げる。

「……ん?」

そして龍也も驚く。

自分は何とか離れようと動いた。

それでも間に合うか、間に合わないかというタイミングであった。

だと言うのに、二人からは大分距離がとれた。

その事を考えていると、再び弾幕が迫ってくる。

龍也はそれを避けながら考える。

そして先程の感覚を思い出し、実行してみる。

するとまた瞬時に移動できた。

その感覚を忘れないように、繰り返していく。

移動した先が弾幕が密集していた所で焦ったりもしたが、

しかし、この感覚は覚えられた。

これは今後役に立つであろう。

「だが……」

現状ではこの弾幕を避け続けるのが精一杯だ。

このままでは何れ疲弊してしまうだろう。

まずはあの三位一体の動きを何とかしなければと考える。

そして龍也もスペルカードを取り出す。

「龍腕『青龍の鉤爪』」

スペルカードが発動する。

龍也の瞳の色が黒から蒼に変わるのと同時に上空に青い龍の腕らしき物が出現する。

そしてそれは三人目掛けて振り下ろされる。

それを見た三人は攻撃をやめて、慌てて回避行動に移る。

腕が通った跡には弾幕が生まれて全方位に飛んで行く。

何発かが三人に当たる。

龍也の発動したスペルカードが消えると同時に三人の発動したスペルカードも消える。

これで終わったかと龍也は思ったが、

「『大合葬』霊車コンチエルトグロツソ」

三人はまたスペルカードを発動する。

今度は三角形形状のフォーメーションを取り、弾幕を放ってくる。

今度は密度も量も桁違いだ。

龍也は回避に専念しながら反撃の糸口を探す。

だが、

「ッ!？」

見つからない。

弾幕を当てる隙が見つからない。

三対一と言う状況がここまで不利だとは龍也は思っていなかった。

次第に、移動範囲も少なくなってくる。

このままではやられてしまつてあろう。

龍也がもう一枚のスペルカードを使おうとした時、

「なっ!？」

後方から星型の弾幕が降り注ぐ。

龍也を守るように。

後ろを振り向くと、

「助っ人その一参上だぜ」

「魔理沙」

魔理沙が居た。

何でこんな所にと龍也が言おうするとすると、先に魔理沙が口を開く。

「一対一なら手を出す気はなかったんだが、三対一だったんで手を出させてもらったぜ。
ちなみに私も異変解決だぜ」

龍也が言う前に疑問に答えてくれた。

「その一って事は……」

そう言ったところで今度はナイフが飛来する。

「となると、私は助っ人その二かしら」

「咲夜」

龍也がそう言うのと咲夜がペコリとお辞儀をする。

すると龍也に影が出来る。

上を見ると霊夢がいた。

「神霊『夢想封印』」

現れると同時にスペルカードが発動する。

霊夢を中心に虹色に光る弾が現れ、それが次々と三姉妹に飛来する。

「ちよっ！？ 四対三はするっ！？」

そこまで言ったところで霊夢の夢想封印が直撃する。

「いや、三対一で挑んできたお前等が言っても……」

龍也のそんな呟きは風に流され消えていった。

妖々夢編 その3

「で、お前達も異変解決なのか？」

弾幕ごっこが終わった後、龍也が三人にその事を尋ねる。

「おう、そうですぜ」

「私は冬が異常に長いと思ってね」

「私の方は紅魔館の燃料が切れそうだったからね」

理由はそれぞれ三者三様のようだ。

だが、異変解決に来ている事には変わらないようだ。

「で、この先に異変の首謀者がいるのかしら」

咲夜が龍也にそう尋ねる。

「ああ、多分間違い無いだろうな。少なくともあっち側の方が暖かく感じるしな」

それに今居る場所の気温は冬じゃないしなと付け加える。

「この先に行こうとしたらさっきのに襲われたって訳？」

「ああ。それが終わったらこの門の開け方をあいつ等に聞こうと思っただんだ」

龍也がそう言いながら先程の三姉妹を探す。

すぐに見つかった。

「いたいた、この門どうやって開けるんだ？」

そして龍也はその事を質問する。

「知らないよ」

「え？」

さっきと言っている事が違う。

龍也がその事に文句を言おうとすると、

「だって私達門の上から入っているから」

そんな事を言ってきた。

「それって、門の意味あるのか？」

「さあ？」

そんな龍也の呟きに誰かがそう相槌を打つ。

「行くなら止めないけど、その先は冥界だから気をつけてね」

ルナサがそう言ってくる。

「そっか、情報ありがとな」

龍也がその事に礼を言う。

「それじゃ、お先に行かせて貰うぜ」

そう言いながら魔理沙が門の上空に向かっていく。

「それじゃ、私も」

そして咲夜も魔理沙の後に続く。

「私達も行きますよ」

「ああ」

二人の後を追うように霊夢と龍也も門の上に向かう。

そしてやけに大きい門を越えて先に進んで行く。

龍也は地上を見ながら進んで行く。

冥界といってもそれ程地形が変化していると言つ訳ではないんだなと龍也は思った。

人魂などがチラホラ見かけられたが。

「そーいや龍也って、変わった飛び方してるよな」

龍也が地上を見ながら進んで行くと、魔理沙がそんな事を尋ねてきた。

龍也の飛行方法が飛んでいるとは言い難かったため気になったのだろつ。

「俺の場合は空中に見えない足場を作って飛んでるからな。飛行しているとは
言い難いかな」

見えない足場を作るのに最初の頃は意識して行ってたが、今ではほぼ無意識で行う
ことができるようになっていた。

「はー、器用な事してるわね」
それを聞いて霊夢がそう感想を漏らす。

「俺としてはそうやって飛んでる方が不思議なんだが、どうやって飛んでるんだ？」

「私は魔力を使って」

「私は………適当？」

「私は霊力を使って」

今一要領を得ない。

「もっと、こつ………何かないの？」

「んー……飛ぶぞーって気持ちを籠めるとか？」

「実際やってみたら？」

霊夢がそう言つと一旦全員が止まる。

とりあえず龍也は試してみることにした。

飛ぶぞと思いつながら霊力を少し解放して体中から漏らす。

そして見えない足場を消す。

「おわあ!？」

案の定と言つべきか落ちた。

龍也は慌てて手を伸ばして掴める何かを作り、それを掴む。

「ほっ」

落下せずに済んだため、龍也は安堵する。

「あら、本当に見えない何かがあるわ」

咲夜が龍也が掴んでいる場所の近くを触ってそう感想を漏らす。

「これは……霊力で出来てるわね」

霊夢も触ってそう結論付ける。

「へー、どれどれ」

そして魔理沙も触りに来る。

「これが大気中の霊力を集めて出来てるのか、それとも龍也の霊力で出来てるのかはわからないけど」

霊夢がそう自身の考えを言う。

「へー」

龍也もその辺の事はよく分かっていなかったなので、霊夢の考えは参考になった。

「よっと」

そして懸垂の要領で飛び上がり、見えない足場を作って元の場所に着地する。

「そろそろ行くこうぜ」

「そうね」

そして四人は再び移動を開始する。

少しすると、妖精達が襲撃を掛けてきた。

妖精達が弾幕を放ってきたので、四人は散開する。

そしてそれぞれ弾幕を放って迎撃していく。

「しかし、冥界にも妖精がいるとはな」

弾幕を放ちながら龍也がそう漏らす。

「妖精だからね、どこにでもいるんじゃない？」

霊夢がそう返す。

「そうかもな」

龍也もそう返しながら弾幕を放っていく。

四人だからか、そこまで時間が掛からずに妖精達が全滅する。

それを確認し、四人は再び先に進む。

暫くすると、異様に長い階段を見つける。

博麗神社の階段よりずっと長いように感じられる。

ふと、龍也の顔に何かが当たる。

龍也はそれを手に取る。

「これは……桜の花びらか」

龍也の顔に付いた物は桜の花びらであった。

降った来た桜の花びらは一枚だけではなかった。

何枚も何枚も降ってきている。

どこから降ってきているかと言いつつ、

「この先か……」

そう、この異様に長い階段の先。

そこから桜の花びらが流れてきているのだ。

「この先に犯人が居るんだな」

「十中八九、間違いないわね」

そして、四人は階段の先に向かって飛んで行く。

その過程で当たり前のように妖精の襲撃に合う。

その襲撃を四人は難なく突破する。

そしてどのくらい進んだ頃であろうか。

突如、

「貴方達、人間ね」

銀色の髪をした少女が現れた。

その傍らには人魂らしきものもいる。

それを見て、龍也は目を見開く。

そして、あの時の少女であると確信する。

龍也は瞬時に自身の力を変える。

朱雀の力へと。

それと同時に龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

そして龍也は正面から銀色の髪の少女に突っ込む。

間合いに入ると同時に右手に炎の剣を生み出し、斬り掛かる。

銀色の髪の少女はそれに気付いて長刀を受け止める。

「よお、久しぶりだな。俺の事を覚えているか？」

「貴方は!？」

龍也の顔を見て銀色の髪の少女は驚く。

目の前にいる相手は大量の春度を持っていた少年。

まさかあの時の相手がここに居るとは思わなかったからである。

「覚えていてくれたてようで嬉しい……ぜ!」

「くっ!?!」

龍也は力任せに炎の剣を押し込んで、銀色の髪の少女を真横に吹き飛ばす。

「こいつの相手は俺に任せて、お前等は先に行け!」

「え、ちょ!」

龍也は返事を聞かずに再度、銀色の髪の少女に突っ込む。

今度は左手にも炎の剣を生み出し、両手で斬り掛かる。

銀色の髪の少女は再び長刀で受け止める。

「ッ!?!」

だが、今度は勢い良く押されてしまう。

そして階段から外れて、龍也と一緒に強制的に移動してしまう。

「たあ！！」

銀色の髪 of 少女は龍也の炎の剣を弾いて間合いを取り、平地に着地する。

龍也も同じように着地する。

あの階段からは大分離れたようだ。

「さて、早速あの時のリベンジをさせて貰おうか」

「やはりそれが目的ですか」

そう言っ て銀色の髪 of 少女は長刀を構える。

「あの時の俺と同じだと思っ ていると……ただじゃ済まないぜ」

それを聞いて銀色の髪 of 少女は、より集中する。

先程の斬撃を受けてわかってた。

あの時よりもずっと強くなっている。

少なくとも彼を無視して、一緒にいた三人を追いかけて行く事はできない程度には強くなっていると感じていた。

「そっいや、まだ名前を名乗っていなかったな」

龍也はそう行つて右手の炎の剣を銀色の髪の少女に突きつける。

「俺の名前は、四神龍也。お前を倒す男の名だ。よろしく」

そう言われて、銀色の髪の少女も長刀を龍也に突きつける。

「私は白玉楼の庭師、魂魄妖夢。貴方を倒す女の名です」

そう言つて、長刀を再び構える。

龍也も二本の炎の剣を構える。

そして、その状態が少し続く。

どちらが先に動いたかはわからない。

ほぼ同時に両者が駆け出し、中間地点で長刀と二本の炎の剣が激突する。

そしてお互い力を籠める。

しばらく均衡状態が続く。

そして、お互い弾かれるように大きく間合いを取る。

その後、間髪入れずに再び激突する。

今度は大きく間合いを取らず、数歩分互いに離れる。

次に先手を取ったのは妖夢であった。

刀の長さを活かし、龍也の射程距離外からの攻撃である。

龍也は左手の炎の剣で防ぐ。

そして滑るように前に進み、右手の炎の剣を突き出す。

妖夢あ後ろに跳んで回避する。

龍也はそのまま前に進み、連撃を叩き込む。

妖夢はそれを長刀を使って防いでいく。

そしてその中の一撃を短刀を抜いて防ぐ。

自分の攻撃を短刀で受け止められた龍也は、またカウンターを放たれると

判断する。

妖夢がカウンターを放つ前に、炎の剣が短刀と接触している部分を

爆発させる。

「ッ!？」

この突然の爆発に妖夢は驚く。

爆発を利用して、龍也は一旦間合いを取る。

妖夢はこの爆発で宙を舞った短刀を取って間合いを取る。

妖夢は短刀を鞘に納め、長刀を両手で構えて様子を見る。

龍也も二本の炎の剣を構えて様子を見る。

これだけ間合いが離れているのだ。

力を変えて戦い方を変えろと言う事ができる。

だが、龍也はそれをしなかった。

それはただの意地。

以前戦ったときは朱雀の力だけを使って負けた。

ならば、朱雀だけの力を使って勝たなければ意味がないと思っ
ているからだ。

「……………」

「……………」

お互い間合いを少しずつ詰めながら隙を探る。

そんな時、すこし強い風が吹く。

それを合図にしたかのように同時に間合いを詰める。

そして長刀と二本の炎の剣が激突する。

均衡は一瞬。

すぐに二人とも離れる。

その瞬間、妖夢が傍らに佇んでいた人魂らしきものを飛ばす。

もの凄いスピードだ。

その人魂らしきものはそのまま龍也に当たるかと思われた。

しかし、当たる瞬間に龍也は消えた。

「なっ!？」

その事に妖夢は驚く。

そしてどこに行ったか探していると、

「ここだぜ」

龍也は妖夢の真横に現れる。

妖夢は顔をそちらに向けて目を見開く。

そして炎の剣が振るわれる。

妖夢は咄嗟に短刀を抜く。

炎の剣はその短刀に命中する。

そして妖夢は吹き飛ばされる。

「くっ!!」

吹き飛ばされている最中に体勢を立て直す。

龍也は更なる追撃を掛け様としたが、飛んでいった人魂らしきものが龍也の近くまで来て、弾幕を放ってきた。

「なっ!?!」

龍也は驚きながらも進行を止めて後ろに跳ぶ。

そして二本の炎の剣を使って弾幕を斬り払っていく。

弾幕が止むと、人魂らしきものは妖夢の傍に戻る。

そして、

「なん……だと……」

人魂らしきものは妖夢そっくりの姿になる。

分身の術のようなものであるうか。

そんな事を考えていると、二人の妖夢が突撃して来た。

龍也は瞬時に頭を切り替えて二本の炎の剣を構える。

そして龍也が自身の間合いに入ると同時に長刀を振るう。

龍也はその一撃を右手の炎の剣で受け止める。

妖夢は押し込む事もせずすぐにその場から離れる。

その瞬間、もう一人の妖夢が攻撃を仕掛けてくる。

「くっ!!」

その一撃も何とか受け止める。

だが、体勢が不十分であつたため吹き飛ばされてしまう。

そして体勢を立て直した瞬間にまた妖夢が攻撃を仕掛けてくる。

龍也はそれを受け止めて弾き飛ばす。

すると今度は龍也の死角からもう一人の妖夢が攻撃を仕掛けてくる。

龍也は何とか反応し、攻撃を受け止めて弾き飛ばす。

そしてまた妖夢が攻撃を仕掛けてきた。

死角から来る攻撃を受け、弾き、また死角からの攻撃に反応する。

それを何度も繰り返す。

こう何度も繰り返されると、龍也も次第に疲弊してくる。

次第に攻撃を掠り始める。

このままではジリ貧だ。

元の人魂らしきものに戻るの待とうと思っていたが、それも無理である。

龍也は判断する。

そして攻撃を受けて弾き飛ばした後、龍也は屈んで両手を広げる。

そのままの状態で炎の剣の出力を最大にする。

妖夢がギリギリの所まで近づいた瞬間、龍也は高速回転する。

「ッ!？」

妖夢は咄嗟に防御の体勢を取る。

直撃こそしなかったものの、弾き飛ばされてしまっ。

それを見た龍也は回転を止めて、その場で二人の妖夢に向かって炎の剣を振るっ。

すると炎の剣から爆炎が迸る。

二人の妖夢は龍也の放った爆炎に飲み込まれる。

そして、片方の爆炎からは妖夢が飛び出す。

所々焦げてはいるが、まだまだ戦闘続行が可能なようだ。

もう一つの爆炎からは人魂らしきものが飛び出し妖夢の傍らに戻る。

そして暫く睨み合いが続く。

その睨み合いを先に破ったのは妖夢だ。

妖夢はその場で長刀を振るう。

その斬撃の軌跡から弾幕が生まれて放たれる。

それを見た龍也も炎の剣を振るう。

そして炎の剣から爆炎が迸る。

龍也の放った爆炎は妖夢の放った弾幕を飲み込む。

その瞬間、龍也は突っ込む。

この爆炎で見えないところに奇襲を掛けるつもりだ。

そして爆炎の中に入ると、

龍也の体中から青白い霊力が溢れ出る。

その溢れ出た霊力の一部が朱雀の姿を型作る。

それを見た妖夢は、龍也がこの一撃で勝負を決めるつもりであると判断する。

そして、妖夢は長刀をもう一度構え直し、

「はあああああああああああああああああああああ！！！！！！」

自身の妖力を解放する。

妖夢の体中から妖力が溢れ出ると同時に、長刀が青白い光を纏う。

それは見方を変えれば長刀が巨大化したように見受けられる。

以前見た緑色の光を纏った斬撃より威力は大きいと龍也は判断する。

暫くそのままの状態でお互い力を溜める。

そして、お互い同時に駆け出し、同時に振りかぶり、同時に振り下ろす。

大きな激突音と同時に衝撃が周囲に走る。

暫く均衡状態が続く。

だが、

「ッ!？」

次第に龍也が押され始める。

龍也は力を籠めて堪えようとするが、それでも徐々に押されていく。

そして、妖夢の長刀が炎の大剣に僅かに喰い込む。

このままでは炎の大剣ごと斬られてしまうであろう。

いつかのように。

また、負けてしまうのかも知れない。

そんな思いが龍也の心を支配し始める。

このまま心が折れてしまうかと思われたが、

「……………違う」

龍也はそう呟いて自身の心中を否定する。

そして自分の心に問う。

何のためにここに来たのかと。

「そうだ、俺は負けるためにここに来たんじゃないねえ」

「ッ!？」

妖夢が急に驚き始める。

今まで押していたのに、それが急に止まったからだ。

「勝ちに来たんだ」

そして、徐々に妖夢が押され始める。

「勝つためにここに来た」

龍也から溢れ出る霊力の量が更に増える。

「だから」

そして

「こんな所で」

龍也の姿が

「負ける訳にはいかねえんだよおおおおおおおおおおお！
！！！！！！！」

変わる。

紅い瞳は輝きだし、黒い髪が紅く染まっっていく。

そして、炎の大剣がより紅くなり、大きくなる。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！
！！！！！！！！！！」

「なっ!?!」

そして、妖夢は一気に押され始める。

妖夢が力を籠めるが、それは無意味であった。

均衡状態に戻す事ができない。

そして、

「ッ!?!」

長刀が弾き飛ばされる。

その事に妖夢が啞然としていると、炎の大剣が突きつけられる。

「俺の……勝ちだな」

龍也がそう言うと、妖夢の長刀が地面に刺さる。

「ええ、貴方の勝ちです」

妖々夢編 その4

「成程ねえ……」

戦いが終わった後、龍也は妖夢から春度を集めていた理由を尋ねた。

彼女の主である、西行寺幽々子の命令であったとか。

彼女は亡霊姫とも言われているらしい。

兎も角、春度を集めていたのは白玉桜にある妖怪桜、西行妖を満開に咲かせるためだとか。

何でも、西行妖は何故か枯れていて桜を付ける事がない。

なので、春度を叩き込めば桜が咲くのではないかと思ったようだ。

その考えは当たっていた。

事実、満開まであと少しといったところのようだ。

はた迷惑な話だなと龍也は思った。

「そろそろ向こうの方も終わっているだろうし、白玉楼に向かってみるか」

「わかりました、ご案内致します」

そして、二人揃って飛び上がる。

「そーいや、お前の主って強いのか？」

「はい、お強いですよ」

妖夢が何の迷いもなくそう言う。

「あの向かっていった三人も勝てるかどうか……」

「多分、大丈夫だろ」

「え？」

「お前の主の強さは知らないが、俺のあの三人の強さは知っている」
そう言いながら龍也は思い出す。

魔理沙と霊夢の弾幕ごっこの風景。

咲夜と戦った事。

「特に咲夜とは一度戦っているからな。大丈夫だよ、多分」

そして白玉楼に付く。

「こいつは……」

白玉楼の中を見て龍也は驚く。

一面見事な桜に囲まれている。

そして風が吹いて桜の花びらが舞っている。

何とも幻想的な雰囲気だ。

「凄いな……」

つい、龍也はそんな感想を漏らす。

「ありがとうございます」

龍也の感想に妖夢が礼を言う。

どうしてと思ったが、すぐにその理由を思いつく。

「そう言えば、ここに庭師だったな」

「はい、白玉楼の庭の管理などは私がやっていますのでそう言っ
貰えると

嬉しいです」

そして、二人は進んで行く。

龍也は周囲の桜に見とれながら。

しばらく進む四人を見つける。

「幽々子様!？」

妖夢はボロボロになって倒れている着物姿の女性に慌てて近づく。

あの人が西行寺幽々子であろう。

霊夢、魔理沙、咲夜の三人は幽々子程ボロボロにはなっていない。

「よし」

「あら、龍也」

龍也の声に反応して三人が振り返る。

「そつちも終わったみたいだな」

「ええ。龍也の方も終わったみたいね」

「勝つたの？」

霊夢がそう尋ねて来る。

「ああ、そつちは？」

「あ、うん。勿論勝つたわよ」

霊夢達の方も無事勝つたようだ。

「ああ。そーいや、何で三人ともボロボロなんだ？」

龍也は疑問をぶつけてみる。

弾幕ごっこなのだから、てっきり一対一でやるのだと龍也は思っていた。

「ああ、最初は一対一で誰が戦うか決めようとしていたらさ、三人同時

いいから掛かって来いって事を言うもんだから」

魔理沙がそう言う。

それで三人一緒に戦ったと言う事らしい。

「さ、私達が勝ったんだから春度を返してもらおうよ」

霊夢が幽々子にそう言い放つ。

「はぁー、わかったわよ」

そう言いながら幽々子は立ち上がり移動を開始する。

それに伴い、他のみんなも移動を開始する。

少しすると巨大な桜が目に入る。

「あれが、西行妖です」

「あれが……」

何とも見事で巨大な桜だ。

かなりの桜のようだが、あれでもまだ満開ではないらしい。

満開になった状態を見てみたいという気持ちもわからなくはない。

「あの中に春度があるのね」

霊夢がそう言いながら西行妖に近づく。

そして春度を解放しようとする。

「……あら？」

「どうかしたか？」

「春度を解放しようとしてるんだけど、できないの」

「え？」

「どうも春度が一塊になってるみたいで……これをバラバラにしたいと」

解放できないわね」

そう言いながら霊夢はどうしたものと考え始める。

魔理沙と咲夜も同様だ。

龍也も考え始めるが、その前に気になった事を妖夢に尋ねる。

「そっぴや俺の春度もあの中に入っているのか？」

「はい、龍也さんの春度も西行妖の中に入っていますよ」

「そうか」

そして龍也は西行妖に近づいて右手を当てる。

「……見つけた」

中を探っていると大量の春度を見つける。

そして、その春度の中心にあるのが自身の春度であるというのも理解する。

あれが他の春度を引きつけているのだ。

そのせいで霊夢が春度を解放出来なかったのだらう。

春度が巨大なせいで。

ならば、その中心に春度を取り除いてやればいい。

元々は自分の中にあつた春度だ。

自分の中に戻す事ぐらい造作もないことであろう。

「返して貰うぜ、俺の春度」

そう言いながら龍也は西行妖の中にある自身の春度を引っ張り出す。

その瞬間、

「ッ!!」

西行妖から少しずつ春度が解放されていく。

その光景はどこなく神秘的だ。

龍也以外のメンバーはその光景に見とれている。

そして、

「…………ッ!？」

龍也が自身の春度を完全に取り込んだのと同時に、西行妖の中にあつた春度が一気に解放される。

その春度は幻想郷中に散っていく。

すると、西行妖が付けていた桜が散っていき枯れ木の様な状態になる。

これが春度を集める前の西行妖の姿なのかもしれない。

「あーあ、枯れたちゃった」

幽々子が残念そうに呟く。

「何言ってるのよ。お陰でこっちはいい迷惑したんだから」

そう霊夢が文句を言う。

「ま、これで幻想郷にもやっと春が来るんだろ」

魔理沙が笑顔でそう言う。

「まあ、春が来るまで少し時間が掛かりそうだけどね」

それに対して咲夜が自分の考えを言う。

そんな会話をよそに龍也はじっと自身の右手を見つめる。

そして考える。

西行妖に有った自分の春度は取り返した。

つまりは春度を自分の体に取り込んだ。

だが、春度と一緒に別の何かを取り込んだように龍也は感じていた。

西行妖の中にある何かを。

手を開いて握ると言う動作を龍也は繰り返す。

別段違和感は感じない。

気のせいであろうか。

「あの、どうかないさましたか？」

妖夢が心配そうな顔つきで龍也に尋ねる。

「いや、何でもないよ」

自分の体に何の違和感も感じない。

龍也は気のせいであると結論付ける。

「さて、帰るか」

龍也はそう切り出す。

「帰ると言っても今何時だ？」

魔理沙にそう言われて龍也は懐中時計を取り出して時間を確認する。

「うわ、もうこんな時間か」

時間はすでに夜遅くになっていた。

「だったら泊まっていきなさい」

幽々子がそう言ってくる。

今回の異変のお詫びも兼ねてだそうだ。

疲れている事だし、全員その提案を飲む事にした。

そして龍也は白玉楼の広さに驚く。

豪邸と言っても差し支えない。

阿求の屋敷よりもずっと広い。

こんな広い屋敷を妖夢一人で切り盛りしているのかと聞いてみたら
そうではないとの事。

そこら辺をウロウロしている人魂が手伝ってくれているらしい。

龍也は手も足もないのに何をどう手伝っているのだと気になったが、
気にしない事に
した。

そして白玉楼で食事を取る事になる。

この人数では不釣合いの量の食事が出された。

どういう事なのか考えると疑問が氷解する。

氷解した理由は幽々子だ。

あの量の大半を平らげてしまったのだ。

一体、どこにあの量が入ったのだろう。

亡霊であるからだろうか。

その後、食事を済ました後に交代で入る。

屋敷同様ここの湯殿も非常に広い。

広さなら紅魔館といい勝負であると龍也は思った。

風呂から上がるとそれぞれ就寝し、朝になるとそれぞれ帰宅する。

そして、異変から数日後。

少しずつ暖かくなってきている。

もう少しで本格的な春になるだろう。

そして現在、博麗神社では、

「飲むぞー！！」

「歌うぞー！！」

「騒ぐぞー！！」

宴会が開かれていた。

異変解決した後はいつもこうやって宴会を開くんだとか。

宴会開いて仲直り的な意味合いもあるのだろう。

みんな結構仲良くやってる。

龍也も気にせず宴會を楽しむ事にする。

酒を飲みながら会場内を歩く。

途中で幽々子が山の様な量の食べ物を抱えていた。

妖夢はそれを嗜めている。

龍也は気にしない事にした。

「あ、いた。美鈴」

龍也は見つけた美鈴に声を掛ける。

「龍也さん」

美鈴も龍也に声を返す。

「ありがとうな、修行に付き合ってくれたお陰で勝てたよ」

「そうですか。それは何よりです」

美鈴は笑顔でそう返してくれる。

そのまま談笑していると、美鈴のカップの中の酒が無くなっている

事に気付く。

「あ、酒注ぐよ」

「あ、ありがとうございます」

こんなやり取りしてまた暫く談笑を続ける。

そして会話を切り上げてまた適当に歩き回る。

するとフレンドールの姿を見つけて声を掛けようとするが、やめた。

何やら橙とチルノとルーミアと楽しそうに話している。

フレンドールもフレンドールで色々頑張っているようだ。

「龍也」

後ろから声を掛けられたので振り向く。

そこにはレミアがいた。

「レミア」

龍也もそう返す。

「勝ったそうじゃない。とりあえずおめでとつ」

「ああ、ありがとつ」

「それにしても……」

そう言いながらレミリアはフランドールの方を見る。

「あの子も大分変わったわね」

「いい事なんじゃないか？ あんなに楽しそうにしてるし」

「そうね」

そしてレミリアはフランドールから目を外して龍也を見る。

また強くなったなと思う。

例えるなら壁を一つ越えた。

そのようにレミリアは感じた。

一体、どこまで強くなるのであろうか。

レミリアはその事に少し興味を覚える。

「ふふ」

「？ どうかしたか？」

「いや、別に。それより龍也」

「ん？」

「私のものにならない？」

「断る」

「ふふ、残念」

その後また雑談をして、龍也は会場内を再び歩き回る。

適当に食べ物を取って歩くと、

「龍也さん」

声を掛けられる。

「阿求か」

声を掛けてきたのは阿求であった。

「本日はお誘い頂きありがとうございます」

「別にいいよ、そんな畏まらなくて」

阿求を宴会に誘ったのは龍也であった。

宴会の買出しのために人里に寄ったら阿求を見つけた。

なので宴会のお誘いをした。

今日は特に用事がなかったらしいので参加する事になった。

「そう言えば龍也も今回の異変解決をした一人なんですよね？」

「ああ、そうなるのかな」

今回の異変を思い出しながら龍也はそう言う。

「あ、なら今度インタビューさせて貰えませんか？」

「インタビュー？」

その言葉に龍也は首を傾げる。

「あれ、言ってますでしたっけ？ 私、幻想郷縁起と言つのを書いています」

「……ああ」

そう言われて龍也は思い出す。

以前そんな事を言っていたなど。

俗に言う人物図鑑と言つ物らしい。

「で、その中に龍也さんの内容を付け加えたいなと思ひまして」

「いいのが、俺なんかで？」

「はい」

そう言われて、別にいいかと龍也は判断する。

「じゃ、その時がきたらインタビューに応じさせて貰うな」

「わかりました。約束ですからね」

「ああ、約束だ」

そう言って雑談をした後、龍也はまた会場内を歩き回る。

すると見知った顔を発見する。

「レティ」

「あら、龍也」

「どうしたんだ、こんな所で？ 春になるから休む場所を探しに行
ったんじゃない
なかつたのか？」

「それなんだけどね、中々良い場所が見つからなくてね」

「それでここに？」

「ええ、探している最中に楽しそうな声が聞こえたからね。参加さ
せて貰ってるの」

「成程」

そして龍也はレティと雑談する。

その後別れてまた会場内を歩く。

すると、プリズムリバー三姉妹が演奏を行っているのに気付く。

せつかなので聞いていく事にする。

龍也は音楽の事を分かっていると言う訳ではないが、いい演奏であった

と言う事は分かった。

一通り聞いた後、また会場内を歩いて行く。

「あ、いたいた。おーい龍也」

「ん？」

呼ばれたので龍也は振り返る。

「魔理沙」

声を掛けてきたのは魔理沙であった。

「どうしたんだ？」

「龍也を探してたんだぜ」

そう言いながら龍也の手を引っ張ってどこかに連れて行く。

着いた先には霊夢と咲夜が居た。

この四人で異変解決をしたのだから、四人で乾杯しようとの事だ。

そう言われて、それもいいかと龍也は思った。

そして杯に酒が注がれる。

「『『『乾杯』』』」

宴会が終わるまで四人で酒を飲みながら雑談を交わしていく。

宴会も終わり、それぞれ勝手に解散していく。

その中で、龍也は阿求を探している。

阿求は飛べないので龍也が送っていく必要がある。

博麗神社に来るときも龍也が背負って来た訳であるし。

キヨロキヨロと周りを見てみると、阿求を発見する。

少し話した後、龍也は阿求を背負って飛び立つ。

無論、阿求に負担を掛けない様にスピードを調整しながら。

「わあー」

「ん、どうかしたか？」

「いえ、こんな所から星空を見たのは始めてです」

阿求がそう言ったので龍也も星空を見る。

満天の星空だ。

たしかに空の上から星空を見ると言う事は普通なら滅多にできないであろう。

目を輝かせながら見ている阿求に気を使って、龍也は少しスピードを落とす。

そんな風に飛んでいると、何時の間にか眼下に人里が見える。

「と、阿求の家ってどこら辺だっけ？」

「えーと……あっちです」

「了解」

そう言っつて、阿求が指をさした方に向かって進んで行く。

そして阿求の家の前で着地する。

「本日はありがとうございます」

阿求を背中から降ろした後、阿求からそう礼を言われる。

「別にいいよ。誘ったのは俺なんだし」

龍也が何とも無いようにそう言っつ。

「あ、もう遅いですし泊まっつていきますか？」

阿求がそう提案する。

もう眠くなつてきた事だし、龍也は阿求の提案を受ける事にする。

「そうだな、お世話になるよ」

「わかりました。それでは部屋に案内しますね」

そして龍也は阿求の屋敷に泊まる事になった。

放浪編 その18

異変解決から、一週間と少し。

雪も少しずつ解け始め、だんだんと春を感じさせ始める。

そんな幻想郷のどこかで龍也は戦っていた。

春になり始めたからか、冬の間に見なかつた妖怪の姿が見て取れる。

龍也の瞳の色は紅。

朱雀の力を使っているようだ。

また妖怪の一匹が龍也に襲い掛かってくる。

龍也はその妖怪が自分の間合いに入る前に蹴りを放つ。

するとどうだろう。

足の先から炎のが迸る。

その炎が命中し、襲い掛かってきた妖怪は燃え、そして燃え尽きる。

先程から襲い掛かっていく妖怪が返り討ちにあい、残りの妖怪達が後退りし始める。

それを見た龍也は自身の力を変える。

朱雀の力から白虎の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が紅から翠に変わる。

そして妖怪達の塊がいる場所に向き直り、少し手首を上げる。

すると、妖怪達の居る場所に超小型の竜巻が発生する。

そこに居た妖怪達はその竜巻に当てられて、宙に舞う。

ある程度宙を舞うと、次々と墜落していく。

その妖怪達は立ち上がっていく。

それ程ダメージを与えられたと言う訳ではないようだ。

まだ続くかと思われたが、生き残った妖怪達は悲鳴を上げて逃げていく。

「ふう………」

それを見た龍也は力を消して一息入れる。

そして自分の掌を見る。

妖夢と戦って以来、どうも力が上がっていると龍也は感じていた。

基本能力だけではなく、四神の力を使った技の威力も上がっている。

炎の剣にしる、放つ風にしる全部だ。

いつもの調子で力を使ったり動いたりすると、いつも以上の力が出る。

そんな感じだ。

他にも出来ることが増えた。

基本的には炎などを手からしか出せなかったのに、先程の様に足からも出せた。

それ以外にも、その場にある物を使えるようになった。

具体的に言うと、炎、風、地、水だ。

今では龍也自身が生み出したものしか扱えなかった。

だが、今では龍也が生み出したもの以外も扱えるようになった。

言うなれば、支配できるようになった。

先程のように妖怪の群れの中心に超小型の竜巻を発生させたりなど。

勿論欠点はある。

龍也自身が生み出したものより威力がかなり劣ると言う点と複雑な形をとれないと言う事。

例えば剣にしたり盾にしたりと言った様に。

元々が唯の炎や風だからと言うのもあるかであるが。

風に関してはその場にある空気などを無理やり操って風に行っているからかも
しれないが。

これではそれなりの実力差がなければ主に牽制程度にしか使えない。
時には牽制にもならない事もあるだろう。

だが、玄武の力は別だ。

あの力は大地そのものを操ることが出来る。

隆起させたり、地割れを起こしてそれを閉じるなど。

威力もそれなりにある。

まあ範囲は狭いが。

この辺は要練習と言ったところだ。

何はともあれ、戦いの幅は広がるであろう。

「……………」

そして少し考えた後、龍也は前を見据える。

もう一つのできる様になった事を試そうと言うのだ。

そして再び自身の力を変える。

朱雀の力に。

すると龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

そして思い出す。

妖夢と戦ったときの感覚を。

「はあああああああああああああああああ！……！！」

龍也の霊力が解放され、体中から青白い霊力が溢れ出す。

そして、龍也の姿が変わり始める。

髪の色が黒から紅に染まる。

そして紅い瞳が輝き始める。

そうなると同時に龍也は両手を合わせ、炎の大剣を生み出す。

だが、いつもの炎の大剣ではなかった。

いつもの炎の大剣より紅く、大きい。

龍也はその炎の大剣を振り上げて、振り下ろす。

そして炎の大剣の先から炎が迸る。

その炎は龍也の前方に見える雪を蒸発させる。

そう、できる様になった事の最後の一つはこのパワーアップ。

つまり、四神の力を使うときにもう一段階上の力を出せるようになった。

この状態になると、技の威力が大幅に上がり、基本能力も大幅に上がる。

だからと言って、いい事ばかりではない。

「はあ……はあ……ふう……」

龍也は息を切らせながら炎の剣を消して、力も消す。

なぜ龍也は息を切らせているのか。

答えは簡単だ。

そう、消耗が激しいのだ。

少しただけで息を切らせてしまう。

この状態での戦闘可能時間は大よそ五分ほどであると龍也は推察している。

様は短時間だけの大幅なパワーアップである。

普通であればここぞと言う時に使うものであるが、龍也の考えは違った。

パワーアップになれる様にできるだけ使っていこうと言うものであった。

体に慣らしていけば限界時間も延びるのではないかと考えたのである。

だが、勿論使いどころと使用時間は考えなければならない。

旅をしている以上、いつ襲撃を受けるかわからない。

襲ってきた相手を返り討ちにするぐらいの力は残して置かねばなるまい。

「ふう……」

息が整い始めたので体を少し動かして調子を確認する。

「ま、強くなってきたのかな」

龍也はそう呟きながら歩き始める。

そして数日後。

日に日に暖かくなってきている。

この調子なら近日中に雪は全て解けるであろう。

いい事であろう。

だが、龍也には一つの問題があった。

それは、

「……暑い」

暑いのである、

あの長かった冬とは違い、今は急速に春になってきている。

つまりは急速に気温が上がっていつていると言つ事である。

そんな中、龍也が着込んでいるのは防寒具。

しかも手袋とマフラー付きだ。

これで暑がるなと言つ方が無理であろう。

「どうすつかな……これ」

龍也は自身の防寒具を見て呟く。

勿論捨てたり売つたりと言つ選択肢は龍也にはない。

これはアリスが自分のために作ってくれたものだ。

そんな事をすればアリスに失礼だ。

「ほんと、どうするかな……」

家が無いのでそこに保存するという手は使えない。

かと言って荷物置きのために紅魔館の部屋などを貸して貰うのも悪い。

「んー……」

そして考え始める。

何かいい手はないかと。

「……そうだ」

何か思いついたようである。

「家を作るなり探せばいいじゃん」

何とも単純な発想である。

見つけるのであれば洞窟みないな所がいいかなと龍也は考える。

だが、一つの問題点が思い浮かぶ。

「防犯面とかはどうするかな？」

そう、一番の心配面はそこである。

基本的に龍也はその家には居ない事が多いであろう。

妖怪やら妖精などが盗みに入る可能性がある。

何か結界とかそう言ったものを張ればいいが、生憎龍也にはその手のスキルが無い。

「……そうだ、霊夢に相談してみよう」

思いついたのは霊夢である。

「こう言った事なら霊夢は詳しいであろう。」

そう思い、龍也は飛び上がって博麗神社を目指す。

「と、言う訳で何かないか？」

「そっね……」

そう言って霊夢は考え始める。

「そう言った効力のあるお札を作ればいいんでしょ？」

「頼めるか？」

「いいわ。いつもお賽銭入れてもらってるし。作ってあげる」

了承が得られたようだ。

「お昼ぐらいにはできると思うから、それまでゆっくりしていて」

そう言いながら霊夢は神社の中に入っていく。

龍也はできるまで何をしようか考えていた。

あの力を体に馴染ませるためにあの状態になろうと考えたが、やめた。

あの状態になるためには霊力を解放しなければなれない。

そんな事をすれば霊夢の作業の邪魔になるであろう。

そう思い、龍也は邪魔にならないように瞑想を始める。

もしかしたら自身の精神世界に行けるかもと思い。

しばらくすると、

「出来たわよ」

霊夢が戻ってくる。

龍也は目を開いて霊夢を見る。

結局、自身の精神世界には行けなかった。

龍也が立ち上がると、

「はい、これ」

霊夢がお札を龍也に手渡す。

「それは球状に結界を張るタイプ。龍也は以外は結界に弾かれ、龍也が結界に触れると一時的に結界が解除されるの。龍也が中に入れば再び結界は展開されるわ」

「へー」

そう言いながら龍也はお札をマジマジと見つめる。

「それと、定期的に霊力を補充しておいてね」

「わかった」

そしてお札を懐に仕舞う。

「ありがとな」

「いいわよ、それくらい」

霊夢はこれくらいどつって事ないと言つ顔だ。

「それじゃ、またな」

「ええ、またね」

そう挨拶を交わして龍也は博麗神社を飛び去る。

「しかし、中々見つからないな」

龍也は上空から大地を見下ろしながらそう呟く。

すぐに見つかると思ったが、中々見つからないものである。

そんな事を考えていると、前方から何やら飛行物体が突っ込んでくる。

龍也は襲撃かと思い身構える。

だが、その飛行物体は龍也の目の前で止まる。

そこにいたのは黒い髪をした少女だ。

黒い羽を生やし、下駄を履いている。

「えーと……誰？」

「始めまして。私、”文々。新聞”の記者をしております、鴉天狗の射命丸文と申します」

天狗であった。

龍也は椀と同じく妖怪の山に住んでいるのかと思った。

それは兎も角、挨拶をされたのだから龍也も挨拶を返そうとする。

「」丁寧にごうも。俺は……」

「四神龍也さんですよね」

龍也が名乗る前に文が龍也の名を言い当てる。

「俺の事知ってるのか？」

「ええ、有名ですよ。幻想郷中を歩き回っている強い外来人と言う事で」

「はー……」

何時の間にやら有名になっていたようである。

「その他にもレミリアさんや幽香さんと言った一部の実力者が龍也さんの事を高く評価していますからね」

これはこの前ネタ探しに行った時に聞いたんですよと文が付け加える。

「それで俺をネタにしに？」

「はい。強い外来人って事ならそれなりの需要があると思いますし」
「そう言われて龍也は考える。」

別にインタビューに応じてもいいかなど。

「……そうだ」

龍也は何かを思いつく。

「なあなあ、文って新聞記者なんだよな？」

「はい、そうですよ」

「なら幻想郷の地形に詳しいか？」

「それは勿論。私は自分の足でネタ集めをしていますから」

「ならば、洞窟とかしらないか？」

「洞窟ですか？」

「ああ。今住む場所探していき。できれば洞窟みたいな所がいいんだけど」

「……あ、ありますよ」

少し考えて文はそう答える。

「ならそこを教えてくださいませんか？　そしたらインタビューに答えるよ」

「本当ですか!？」

文が勢い良くそう言う。

インタビューに応じてくれるまでもう少し苦戦すると思っていたからだ。

「ああ、約束は守るよ」

「わかりました。それでは付いてきてくださいね」

そう言って文が移動を開始したので、龍也はその後に続く。

しばらくすると見たことのない場所に到着する。

「ここは？」

「ここは無名の丘と言われる場所です」

龍也は初めて来る場所だなと思う。

近くには鈴蘭畑が見える。

そこからある程度進むと、

「ここですよ」

そう言って文が着地し始めたので、龍也もそれに続いて着地する。

大きな洞窟だ。

龍也は中に入って見る。

奥に行くと暗かったので、龍也は自身の力を変える。

朱雀の力へと。

瞳の色が黒から紅に変わると同時に掌から炎を生み出す。

すると明るくなり、洞窟内の全貌が明らかになる。

龍也が思っていたより広い。

今まで誰かが住んでいた形跡がない。

ここならいいだろうと龍也は思う。

そう思って炎を消し、力を消して洞窟から出て行く。

「どうでしたか？」

文が尋ねて来る。

「ああ、いい場所を紹介してくれてありがとう」

「じゃあ」

そう言って文が手帳とペンを取り出す。

「インタビューだったな。何が聞きたいんだ？」

「まずはですね……」

「取材のご協力、ありがとうございました!!」

結構な時間が過ぎた頃、取材が終わる。

「いいよ、お互い様だ」

龍也は何てことないといった顔でそう返す。

「新聞が出来たら俺にも見せてくれよな」

「ええ、勿論です。ただ、」

「ただ？」

「どこに新聞を入れればいいのかと？」

そう言いながら文は洞窟を見る。

たしかに、新聞を入れる場所がない。

「後で家具を揃える序にポストみたいな物も買ってからそこに入れておいてくれ」

「わかりました」

そう言った後、手帳とペンを仕舞う。

「それでは、またお会いしましょう」

そして黒い羽を開いて、文は飛び去っていった。

文の姿を見送った後、

「さて、香霖堂なら色々売っているだろ」

そう呟いて、龍也は香霖堂目指して飛んで行く。

放浪編 その19

「……ん？」

龍也が目を覚まし、周囲を見渡す。

一面真っ暗である。

ポーツとしていると少しずつ頭が覚醒していく。

そして、思い出す。

文に案内して貰った洞窟に住み始めたという事を。

そして龍也は自身の力を変える。

朱雀の力へと。

龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

そして掌から炎の生み出す。

その影響で辺りが照らし出される。

明るくなった洞窟内を龍也は見渡す。

するとランプを発見する。

これは昨日のうちに香霖堂で買ったものだ。

龍也はそれに近づきながら、掌の炎を指先に移す。

そしてランプに火を入れるのと同時に指先の炎を消す。

ランプを持ちながらもう一度周囲を見渡す。

家具や寝具や本棚などが見て取れる。

壁際の方にはアリスに作ってもらった防寒具などをハンガーに掛けている。
である。

こういった家具の類も昨日のうちに香霖堂で買った物だ。

ほんとにあそこには色々な物が売っていると龍也は思った。

洞窟の奥の方には霊夢に作ってもらった御札が貼られている。

効果の程はよく分からないが、霊夢を信じようと龍也は思う。

少しすると龍也は空腹感を覚える。

なので昨日、霖之助に新築祝いとして貰った酒とつまみに手を付ける事に
した。

朝っぱらから酒とつまみと言つのはどうかと思うが、龍也は気にしない。

ある程度すると空腹感もなくなり、そろそろ出発しようと思いたつた。

まずはランプの火を消し、再び掌に炎のを生み出す。

そして出口まで歩いて行く。

外に出るとポストに新聞が入っているのを発見する。

このポストも香霖堂で買った物だ。

それは兎も角、龍也はポストに入っている新聞を手取る。

”文々。新聞”と書いてある。

「早いな。インタビュー受けたの昨日だろ」

インタビューされてから記事にされる時間が早くて龍也は驚く。

それはさて置き、せっかくなので新聞を読んでみる事にする。

「はは、何か照れくさいな」

今更ながら自分が記事にされている事に若干気恥ずかしくなる。

一通り読んだともう一度洞窟内に戻って新聞を置き、出発する。

そして数日後、雪はもう殆ど溶け切ったようだ。

気温も春真っ盛りと言った感じだ。

そんな一時を龍也が楽しんでいると、

「うわあああああああああ！！」

そんな叫び声が聞こえてくる。

何事だと思い、声が聞こえた方を見る。

何人かの子ども達が妖怪に追いかけられていた。

何故こんな所にと龍也は思った。

この位置は人里から結構離れている。

そんな所になんで子ども達だけで、とそこまで考えたところですが理由が思いつく。

入っちゃだめな場所とか危険な場所とかには子ども達は大人の目を盗んで入っていくものである。

子どもと言うのは好奇心が強いものである。

そこまで考えていると、子どもの一人が妖怪に追いつかれそうになっている。

このまま見殺しにしたら、いくらなんでも寝覚めが悪すぎる。

龍也はそう思いながら、その場から消える。

そして、

「え？」

瞬時に追っている妖怪の真横に現れ、その妖怪を蹴り飛ばす。

妖怪は悲鳴を上げながら吹き飛んで行く。

いきなりの事態に子ども達が啞然としている。

「危ないから少し離れてろ」

龍也はそう言って妖怪の群れに向き直る。

妖怪達は龍也を敵と認識し、唸り声を上げる。

そしてそのうちの一匹が襲い掛かってくる。

龍也は慌てずに右ストレートを叩き込む。

それをまともに受けてその妖怪は吹き飛んで行く。

その光景を見た妖怪達は、今度は一斉に襲い掛かって来た。

それを見た子ども達はもうダメだと思った。

だが、龍也は非常に落ち着いていた。

その光景を見ながら龍也は自身の力を変える。

朱雀の力へと。

その伴い瞳の色が黒から紅に変わる。

そして龍也は炎の生み出し、それを腕全体に纏わせる。

妖怪達が自身の間合いに入った瞬間、

「りゃあー!!」

一気に振るつ。

襲い掛かってきた妖怪達はその炎に飲み込まれる。

その光景を見た襲い掛かって来なかった妖怪達は後退る。

それを見ながら龍也は睨みを効かせる。

すると、悲鳴を上げて残っていた妖怪達は逃げていった。

それを見届けた龍也は炎のを消して、力も消す。

そして子ども達に向き直る。

「もう大丈夫だぞ」

龍也がそう言うと、子ども達は泣き始め龍也に泣き付いてきた。

どうやら緊張の糸が切れたようだ。

龍也はそのまま泣き止むのを待つ。

しばらくすると泣き止み色々話してくれた。

まあ、案の定人里の子ども達であった。

なんでこんな所に居たかと言うと、遊びまわっていたら何時の間にかこんな所に居たとの事。

どうも冬が長く遊べる時間が少なかったため、ハシヤギ過ぎたらしい。

それでも、よくまあこんな所まで人里からこれたなと龍也は思った。

子どもは元気がいいと言うからこんなものなのかと龍也は思った。

このままほっとくのはあれなので、龍也は人里まで送って行く事にした。

子ども達を人里まで送り届けた後、適当に何か食べていこうと思って

人里内を

適当に散策していた。

あの子ども達は送り届けた後、今日あった事をチャンと親なり先生なりに

説明するように言っておいた。

子どもは素直なので正直に言うであろう。

キツチリ怒られるであろうがそれが子ども達のためになると龍也は思う。

適当に歩いていると団子屋を発見する。

ここで食べていこうと思い、団子を注文する。

少しすると団子が運ばれてくる。

そして食べ始め少しすると、

「黒を基調とした服に金色のボタン、白いシャツ……もしかして君か？」

そう声を掛けられて自分の事だと思って龍也は顔を上げる。

そこには、変わった帽子を被り水色の髪をした女性が居た。

「えーと……」

「あ、申し送れた。私は寺子屋で教師をしている上白沢慧音と言っ

「俺は四神龍也です」

自己紹介をした後、慧音の名前をどこかで聞いた事があるなと龍也は思う。

少し思い出そうとすると、すぐに思い出す。

何時ぞやだったか幽香が言っていた人物だ。

たしか人里で守護者をしていたなと龍也は思う。

「龍也君か。君が里の外で子ども達を助けてくれた人かい」

「ええ、そうですけど」

「そうか、君だったか」

そう言つと慧音は姿勢を正して、帽子を取る。

そして、

「ありがとう」

そう言つて頭を下げる。

「ええと……」

「君が助けてくれた子ども達は私の教え子でもあるのだ。だから、君には直接お礼が」

言いたかった」

そう慧音が言う。

それを聞いて龍也はいい先生だと思った。

そして自分が学校に行っていた時の教員とは大違いだなとも思った。

「できれば子ども達の親にも会ってくれないか？ 是非とも君に会ってお礼を言いたいそうだ」

「まあ、そう言う事でしたら」

そしてお金を払って団子屋を出る。

慧音に案内される形で子ども達の親に会って回る事になる。

「しっかし色々貰っちゃったな」

子ども達の親から食べ物やらお金やら色々貰う事になった。

最初は断ったのだが、是非にとも言われ、慧音にもそう言った厚意は受け取っておくものだぞと言われて結局貰う事になった。

「ま、みんなそれだけ君に感謝しているんだ」

「そうですかね」

損はなかったしこれでいいかと龍也は思う事にした。

「そうだ、慧音先生。少し聞きたい事があるんですが」

「うん？ なんだい？」

「人里に入ってから気付いたのですが、人魂が漂っている事って普通なんですか？」

龍也はチラホラ飛んでいる人魂を指さして訪ねる。

「いや、こんな風に入魂が漂い始めたのはつい最近だな」

今の所は漂っているだけで害はないから里民もほおっているけどと付け加える。

慧音がそう言つと龍也は考え始める。

冥界の方で何かあったのではないかと。

「そうですか、ありがとうございます」

そう言つて慧音と雑談をしながら歩く。

その後別れて龍也は人里に出る。

目指すは冥界だ。

人魂が漂い始めた原因を探るためだ。

一応異変解決した者の一人なので気になるのであろう。

「たしか、この辺だったな」

龍也は上空を飛びながらそう漏らす。

前の異変からそう時は経っていない筈であるが、変に懐かしく感じている。

進んで行くと、妖精を発見する。

とは言っても異変の時のように攻撃を仕掛けてくる事はなかった。

そしてまた進んで行くと巨大な門に辿り付く。

龍也は以前の様に門を乗り越えて進んで行く。

冥界に着くと、着地して歩いて進む事にする。

せつかなので、冥界の風景をよく見ておこうと言う魂胆である。

こう歩いて進んで行くと、静かだが道が荒れ放題と言う訳では無い

事に気付く。

空から見下ろしていると分からない事がよく発見できる。

少し進んで行くと、人魂の姿もチラホラ見て取れる。

「すみません」

一応、人魂が溢れている理由を人魂に聞いてみる事にする。

話しかけたが返事が返ってこない。

無視されたのかと思ったが、喋れないのではないかと龍也は思った。

妖夢の近くに居る人魂、半霊と言っらしいがあれも喋れなかった。

龍也は何でもないですと言ってその場を後にする。

また少し進むと、今度は人間らしき存在の姿を確認する。

ここにいるという事はそう言う姿をした幽霊であろう。

今度は話を通じるかと思い、声を掛けてみる事にする。

「すみません」

「ああん!？」

その声を上げながら振り返ってくる。

随分ガラが悪いなと龍也は思った。

「少し聞きたいことが……」

龍也がそう言つと、その幽霊が俯く。

様子がおかしいと龍也が思つと、

「憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い……」

急にそんな事を呟き始めた。

何やら雲行きが怪しくなつてきた。

龍也はそんな事を思いながら、後ずさる。

すると、

「憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い……」

そう叫び声を上げながら襲い掛かってきた。

「おわあ!?!」

龍也は後ろに跳んで一旦やり過ごす。

それで諦める事は無く、再度襲い掛かってきた。

それを見ながら龍也は自身の力を変える。

青龍の力へと。

そして龍也の瞳の色が黒から蒼に変わる。

突っ込んでくる幽霊を見据えながら龍也は水の剣を生み出す。

そして、

「は!!」

タイミングを合わせて斬る。

その幽霊は真つ二つになる。

そして龍也が幽霊の方に振り向くと、

「な!?!」

元通りくっ付いていた。

それを見て龍也は考える。

直接的な攻撃は効かないのではないのかと。

だが、そうやって考えたのがいけなかった。

その幽霊は龍也に取り憑いてきたのだ。

そうされた瞬間、龍也は急に寒さを感じる。

それと同時に体から力が抜け、膝を付く。

龍也はこのままでは取り殺されると思った。

体を動かして振り払おうとするが、離れない。

だんだんと体の動きが鈍くなってくる。

このままではまずい。

龍也はそう思い、

「あああああああああああああああああああああ……！！！！」

体中から霊力を解放する。

他に手と言ったらこれしかない。

龍也のその判断は当たったらしく、すぐに体は軽くなる。

そして立ち上がって、霊力の解放を止める。

あの幽霊は龍也の霊力で吹き飛んだのか、それとも消滅したのかわからないが

もう龍也の周辺には居なかった。

力を消して一息付く。

「やれやれ」

こつなつたら迂闊に話を聞くわけにはいかない。

下手をすればまた同じ事になるであらう。

とりあえず白玉楼にいるであらう妖夢と幽々子に話を聞きに行こう
と思い、龍也は
再び足を進める。

妖々夢編 EX

龍也は冥界を歩きながら進んで行く。

辺りには普通に人魂が漂っている。

別段変わった風には見えない。

まあ、冥界の普通と言うのは分からないが。

それでも冥界なのだ。

人魂などが漂っているのが普通なのだろう。

「それにしても……」

龍也は一旦立ち止まり辺りを見渡す。

木々には見事な桜が咲き誇っている。

絶景と言うのはこういうものなのだろうと龍也は思う。

白玉桜で見た桜程ではないが、それでも外の世界ではとうてい見れないもので

あると龍也は思う。

「……」

桜の美しさに見とれて本来の目的を忘れるところであった。

龍也は頭を振ってここに来た目的を思い出す。

人里の方で人魂が現れ始めた原因を探るためだ。

滅多な事ではあれ程の数の人魂が漂うと言う事はないらしい。

なので、冥界に何かあると思ってここまで来た。

龍也はもう一度その事を思い返して進む。

しばらく歩くと長い階段を発見する。

白玉桜へと続く階段だ。

ここまでの道中特に異常は無かった。

ならばこの先が怪しいのではないかと龍也は思う。

そして一歩一歩階段を上がっていく。

少し進むと龍也の目の前に弾幕が迫る。

「ッ!？」

妖精達の襲撃だ。

龍也は一旦その場から飛び上がって、放たれた弾幕を避ける。

そして、龍也は妖精達に向き直る。

すると妖精達はまた増える。

そして再び弾幕を放ってくる。

かなり強力な弾幕だ。

密度も量も弾速も妖精が放つものとは思えないほどだと龍也は思った。

龍也は素早く移動しながら弾幕を避けていく。

そして龍也も弾幕を妖精達に向けて放っていく。

龍也の放った弾幕は見事妖精達に命中し、妖精達は墜落していく。

放つ弾幕は強力でも、耐久力そのものは然程上がっていないように龍也は感じた。

襲撃を受けた龍也は階段を上っていくのではなく、飛んで行く事にする。

そして現れる妖精達を打ち落としながら進んで行くと、今度は回転する

謎の飛行物体が現れる。

こいつも大量の弾幕をばら撒いている。

龍也はうまく避けながら弾幕を放って打ち落としていく。

それが終わると妖精達がまた現れ、弾幕を放ってくる。

進んでも進んでも妖精達は次々と現れる。

妖精が現れる頻度と強さ。

これらの事から龍也はまだ異変が終わっていないのではないかと思
った。

そんな思いを抱きながら進んで行くと、

「あれ、お兄さん？」

目の前に猫耳を生やした女の子が現れる。

「橙か？」

現れたのは橙であった。

こんな所で会うとは思わなかったのでお互い驚く。

「こんな所で何やっているんだ？」

「藍様のお手伝いです」

「手伝い？」

「はい。結界修復のお手伝いです」

結界修復。

もしかして、その結界に不備があったから人魂などが人里に現れたのだろうかと龍也は思った。

「お兄さんは何しに来たんですか？」

「こつち……冥界を調べに来たんだ」

「調べにですか？」

「ああ、人里の方に結構な数の人魂が現れてな。普段はあんなに漂ったりしないそう

だからこつちに原因があるんじゃないかと思ってな」

そして龍也もここに来た理由を話す。

「そうだったんですか」

「それで、結界の修復の方はどれくらい進んでいるんだ？」

龍也は一番気になっている事を尋ねる。

「ごめんなさい、私にはよくわかりません。結界修復の大部分は藍様ま

やっているのです……」

橙が申し訳なさそうにそう言う。

「なら、その藍って人に聞けば結界がどれくらい直っているのかわかるのか？」

「はい、わかると思います」

「藍って人はこの先にいるのか？」

「いますよ」

「俺ってこの先に行ってもいいのか？」

龍也がそう言つと橙が考え始める。

少しすると、

「お兄さんなら通つてもいいですよ」

了解が取れた。

「そっか、ありがとな」

その事に対して龍也は礼を言う。

「それじゃ、橙も頑張つてな」

「はい、頑張ります!!」

橙の返事を聞いて龍也は先に進む。

少し進むとまた妖精の襲撃を受ける。

放たれる弾幕を避け、龍也も弾幕を放つて撃ち落していく。

そして、回転する謎の飛行物体も現れる。

龍也は先程と同じだなと思いながら先に進んで行く。

ある程度進むと急に襲撃が止む。

龍也はその事に疑問を覚えると、

「ん？」

前方に魔方陣らしきものが現れる。

龍也は何だろうと思いつつ近づいてみると、

「ッ!？」

突如弾幕を放ってきた。

龍也は咄嗟に体を反らして回避する。

龍也が何事だと思っていると、今度は龍也を取り囲む様に魔法陣が現れる。

そして、一斉に弾幕が放たれる。

それを龍也は急上昇する事で回避する。

安堵するも束の間、また同じように魔方陣に囲まれてしまう。

今度は急下降することで、放たれた弾幕を回避する。

先程と同じ位置に戻ってきてしまう。

もう魔法陣は展開されないだろうと龍也が思った瞬間、

「なっ!?!」

龍也は魔方陣に囲まれていた。

前後左右、上下含めて。

そして一斉に放たれる。

考えてる時間はないだろう。

龍也は己が本能と直感を信じる事にする。

まずは前に進む。

無論、弾幕は前方からも迫ってきている。

そんな事は龍也も百も承知だ。

進んでいる間に龍也は自身の力を変える。

朱雀の力へと。

そして龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

同時に龍也は二本の炎の剣を生み出す。

それで、前方から迫ってきている弾幕を斬り払っていき突破口を開く。

そして何とか前方に抜ける。

次は後方から迫ってきている弾幕だ。

龍也は二本の炎の剣を消しながら反転する。

そして両手を前に突き出し手首を合わせる。

すると、両手の中心から火炎弾が生み出される。

それはどンドンと巨大になっていく。

弾幕が龍也に直撃する直前にそれを放つ。

放たれた火炎弾は弾幕を飲み込んでいく。

そして火炎弾は空に消えていった。

それを見届けた龍也は周囲を警戒する。

これ以上の追撃はないようだ。

その事に龍也は一息入れて反転し、また進んで行く。

少しすると、

「おや、こんな所に人間かい？」

目の前の金色の髪をした女性が現れる。

変わった帽子を被り、九本の尾を持っている。

「あんたは？」

「ああ、申し送れた。私は八雲藍と言う」

目の前にいる女性、藍の名前を聞いて龍也は目的の女性だと悟る。

「あんたが橙の言ってた……」

「おや、橙を知っているのかい？」

「ああ。先に進めばあんたに会えると聞いてな」

「橙は普通に通ってしまったのか……」

そう言いながら藍は龍也の顔を見る。

そして何かを思い出したように藍は龍也に尋ねる。

「君の名を聞いても？」

「龍也。四神龍也だ」

龍也がそう名乗ると、藍は少し驚いた顔になる。

「君が紫様の言っていた……」

「紫様……?」

紫と言う名前を聞いて龍也は何か引っかけかかりを覚える。

「覚えてないか? 君を幻想入りさせた御方なのだが……」

そう言われて龍也は思い出す。

空間を裂いて現れた女性を。

「思い出した。あの時の人か……」

「その様子だと覚えていたようだね」

藍がそう言ったところで、気になった事を尋ねる。

「あんたの名字は……」

「ああ、私は紫様の式だからね。だから八雲姓を与えられたんだ」

藍が龍也の疑問に思った事に答える。

「それと、橙が言ってたよ。君に随分優しくしてもらったと。ありがとう」

「あ、いや、別に礼を言われるような事は……」

「それでも、ありがとう」

どうこう言っても仕方が無いので、龍也は礼を受け取っておくことにした。

「それで、一体何しにここまで来たんだい？」

「そつだ、結界の修復状況を聞きに来たんだ」

「結界の修復状況を？」

「ああ。人里の方で結構な数の人魂が現れてさ。で、冥界の方に異常があると思って

ここまで来たら橙に会ってさ。その事を橙に聞いてみたら、俺は結界に問題があると
思っつて結界修復をしているあんたに修復状況を聞きに来たんだ」

「成程、そうだったのか」

「で、だ。どのくらい終わっているんだ？」

「私の担当している部分は終わっている」

「私の担当している部分は？」

龍也はその言葉に僅かな引つ掛かりを覚える。

「ああ。後の部分は紫様でないと手を付けられない部分なのだが……」

「なのだが？」

「紫様がまだ冬眠から目覚められなくてな……」

「は？」

冬眠するのかと言う言葉を龍也は飲み込む。

他に気になる言葉があったからだ。

「冬眠って……もう春だぞ？」

「ほら、今回は冬が長かっただろ」

そのせいでまだ寝てるのかと龍也は思った。

「で、いつ起きるんだ？」

「今日……もしくは明日の朝に起きると思うよ。結界の方は明日の夜には直っているはずだ」

「そうか……」

今はそれを信じるしかないかと龍也は思った。

「俺がここまで来た意味はあまりなかったな」

龍也がそう言ったところで藍は何かを思いついた顔をする。

「そうだ、私と手合わせしてみないか？」

「手合わせ？」

「ああ。私は紫様が起きられるまで殆ど暇だしな。それに、紫様が幻想入りさせた君に興味がある」

藍にとって自分の主が幻想入りさせた目の前の少年には興味がある事は本当だ。

だが、それだけではない。

同時にこれは橙に優しくしてくれた龍也への藍なりのお礼だ。

前に紫が藍に言っていた事を思い出したからだ。

彼、四神龍也の本能は戦う事と強くなる事を求めているという事を。

なので、藍は龍也に手合わせを申し込んだのだ。

「そうだな……俺もここまで来て無駄足と言うのもゴメンだしな」

そう言いながら龍也は二本の炎の剣を生み出して、突きつける。

「その申し出、受けるぜ」

そして龍也は構えを取る。

それを見た藍も構えを取る。

先に動いたのは龍也だ。

正面から突っ込んで炎の剣を振るう。

藍はそれを一步引いて回避する。

龍也はさらに一步踏み出して剣を突き出す。

藍は体を反らして避ける。

そして己が爪で龍也を引き裂こうとする。

龍也は体を傾けてその攻撃を避ける。

避けたと同時に龍也は炎の剣を振るう。

藍は後ろに大きく跳んで回避する。

龍也は距離を詰めて接近戦に移ろうとするが、その前に藍が炎を飛ばしてくる。

「ッ!？」

龍也それに驚くものの、距離を詰めるのを止めてその場から離れることで炎を避ける。

「驚いたぜ。炎の使うなんてな」

「今のは属に言う狐火と言うものだ。聞いた事ないかい？」

そう言われてやはりかと言つ顔に龍也はなる。

「その九本ある特徴的な尻尾を見てもしやと思つたが、藍は九尾の妖狐の妖怪かい？」

「おいしい。私は妖怪ではなく妖獣だ。まあ細かい違いではあるがね」

そして藍は再び炎を飛ばしてくる。

龍也はそれを避けながら考える。

自分も炎のを放つてもあまり効果はないであろうと。

炎を扱うぐらいだ。

炎に耐性はあるであろう。

龍也はそこまで考えて龍也は二本の炎の剣を消す。

そして自身の力を変える。

朱雀の力から青龍の力へと。

そのの伴い、龍也の瞳の色が紅から蒼に変化する。

そして二本の水の剣を生み出す。

「お、式神の弱点が水だと言つ事を知っていたのかい？」

「そうなの？」

「知らなかったのか」

知らないのに水を出した。

藍はかなりの戦闘センスがあると思った。

「だが、私にはそれ程効果があると言っ訳ではないがな」

そして、今度は藍から突っ込んできた。

今までよりも速いスピードだ。

そして龍也が自身の間合いに入るのと同時に爪を振るう。

龍也が体を傾けて回避しようとするが、

「ッ!？」

頬を掠ってしまふ。

だが、それでも龍也は怯まず水の剣を振るう。

藍は後ろに一歩下がって回避する。

そして再び爪を振るう。

その爪が龍也に当たる直前に龍也の姿が消える。

だが、藍は慌てずに何も無い空間にもう一本の手を伸ばし、掴む。
するとそこには龍也の腕があった。

「なっ!?!」

「驚いたよ。かなりのスピードじゃないか」

そう言っつて藍は龍也を更に上空に放り投げる。

龍也が体勢を立て直すと、藍も同じ高さにあがってくる。

それを見た龍也は一旦、息を整える。

そして、

「はあああああああああああああああああああ!?!?!?!」

霊力を解放する。

「な……」

藍は思っていたよりも遥かに大きい霊力の驚いた顔になる。

そして、龍也の姿が変わっていく。

髪が蒼く染まっていく、蒼い瞳が輝き始める。

水の剣もより深い青色になる。

その変化が完了したのと同時に霊力の解放も止む。

龍也の雰囲気が変わったことに警戒する藍。

そして龍也が消える。

その次の瞬間、藍の目の前に現れて水の剣を振るう。

藍は拳の部分を受け止めるが、

「ッ!？」

弾かれたように後ろに跳ぶ。

龍也の力が予想以上に強かったからだ。

醸し出す雰囲気から先程までよりも強くなっている事には気付いていたが、
これ程までとは思っていなかったようである。

龍也を見ると、物凄いスピードで突っ込んできていた。

藍は右手を前に出して、大き目の炎の塊を生み出す。

そして放つ。

龍也は避けるであろうと藍は思ったが、それは違った。

斬ってきたのだ。

炎の塊を。

それだけには留まらず、藍の掌の表を少し斬った。

この事には藍も驚く。

龍也の方は藍から少し離れた位置で様子を見ている。

「私の負けだ」

「え？」

急にそんな事を言ってきたので、龍也は啞然となる。

「あれを斬られるとは思っていなかったし、私も手傷を負ったからな。

それに、これは殺し合いじゃないだろ」

龍也は藍の雰囲気からこれ以上戦う気がないと悟り、水の剣と力を消す。

髪も瞳も元に戻る。

「にしても、藍って強いな」

「これでも紫様の式だからな」

そう言いながら龍也に近づぐ。

「それと、その頬の傷を治しておこう」

そう言っただけで藍が龍也の頬に触れると、頬の出来ていた傷が治っていく。

見ると藍の掌の傷も治っていた。

その後、龍也と藍は雑談をして時間を潰す。

ある程度時間が過ぎると龍也は帰っていった。

龍也の姿が見えなくなった後、

「成程、紫様が興味を持つのも分かる気がする」

藍はそう呟く。

戦っている最中に気付いた、あの潜在能力の高さ。

今の龍也の力は、ほんの極一部。

藍は戦っている時にその事に気付いた。

そして、いつかは本気で戦っても負けるなと藍は思った。

だが、例えそうなっても問題はないなと藍は思った。

龍也からは悪党独特の臭いを感じなかったからだ。

「よし」

そう言いながら藍は空を見上げる。

「紫様、早く起きてこないかな」

妖々夢編EX(後書き)

活動報告の方にアンケートのような物があります。
お暇でしたら答えてやってみてください。

妖々夢編PH

長い階段を見下ろしながら龍也は空中を移動してる。

結界の方は明日の夜には直るらしいとの事で龍也はもう帰る事にしたのだ。

階段を大分降りていく行くと、

「あ、お兄さん」

橙に声を掛けられる。

「もう帰られるんですか？」

「ああ」

「結界の方はどうでしたか？」

「後は紫って人が起きてこないと終わらないってさ」

「そうなんですか」

そして橙と少し雑談して別れる。

長い階段も終わり、龍也は冥界から出ようと思って巨大な門を目指す。

少しすると、

「あら、龍也じゃない」

「霊夢」

霊夢が現れた。

そのすぐ後ろには魔理沙と咲夜も居る。

「どうしたんだ、わざわざ冥界まで」

「実はね……」

そして霊夢は理由を話す。

龍也と似たような理由だ。

「はー、神社や紅魔館の方にも幽霊が出てるのか」

「ええ、それで私は神社の方に行っただけど……」

「その神社も幽霊だらけだな。そしてそこで結界を修復してる奴が暴れてるって聞いてな」

「それで、ここまで来たのか」

龍也がそう言つと三人とも頷く。

「にしても、結界を修復している奴が暴れているねえ……」

そう呟いて藍の事を思い出す。

そして、暴れていなかったと言う結論に達する。

「結界修復しているのって藍だろ。別に暴れてはいなかったけどな」

「もう会ったの？」

「ああ。藍はちゃんと結界修復してたぞ」

「変ね、妖夢はそいつが暴れてるって言ってたけど」

霊夢が口元に手を当てながらそう言う。

「暴れてたのは妖精だけだったぞ」

龍也がそう言うのと、

「妖夢の見間違いないのか？ あいつ結構抜けてるところがあるし」

魔理沙がそう言う。

それを聞いて龍也は以前の宴会の事を思い出す。

結構オタオタしていたなど。

戦闘中と日常生活で大分変わるのであるうか。

戦闘中の時はしっかりしていたし。

「で、結界の方はどうなってなの？」

「藍が担当している部分は終わったそうさ。後は藍の主であるらしい紫って人が来ないと終わらないらしい」

「で、その紫ってのはいつ来るんだ？」

「遅くても明日の朝には来るそうさ」

「じゃあ、結界の方は？」

「明日の夜には直ってるそうさ」

龍也がそう言うと、三人はがっくりした表情になる。

「もしかして、私達は無駄足を踏んだのかしら？」

「ならさ」

そう言いながら魔理沙は帽子の中から何かを取り出す。

それは酒瓶であった。

「ここで花見でもしようぜ」

魔理沙がそう言うので、龍也は周りを見る。

見事な桜が沢山存在している。

ここで花見をしたいと言う魔理沙の言い分もわかる。

結局、四人で花見をして帰る事となった。

何もせずに帰りたくはなかったからであるが。

そして、翌日の夜。

龍也は再び白玉楼を目指していた。

何故かと言うと、状況がまるで変わってなかったからである。

昨日、藍は明日の夜になれば結界が直ると言っていた。

そして今がその夜。

だと言うのに現世では普通に人魂やら何やらが闊歩していた。

むしろ酷くなっていると龍也は感じた。

なので、その確認のために再び冥界に来て白玉楼を目指しているのだ。

そして長い階段が目に入る。

ここまでくれば白玉楼までもう少しだ。

今度は歩いて階段を上らずに飛んで行く。

そして少し進んだ頃にまた妖精達の襲撃を受ける。

やはりと言つべきか、妖精達の攻撃の頻度が激しい。

弾幕の量も速度も妖精が放つそれとは思えない程である。

異変がまだ終わってないからなのか、それともこの近辺の妖精がそうなのか。

その判断が龍也には付かなかった。

妖精と、回転する謎の飛行物体を退けて先に進む。

そして、

「おや、今日も来たのかい？」

藍が現れた。

「藍」

「何かようかい？」

「知らないのか？ 状況がまるで変わってないんだが……と言っか、酷くなってる感じがあるんだが」

「ええ！？」

龍也がそう言つと藍が驚く。

「知らなかったのか？」

「ああ。もう既に結界の方は紫様が手を付けておられるから、私はもう結界の方には関与してはいないんだ」

「じゃあ今は何をしているんだ？」

「紫様の結界修復が邪魔されないように警備をしている」

相手は主に妖精達だがねと藍が付け加える。

「できればこの先に行って確認したいんだが」

龍也がそう言つと藍は悩み始める。

「うーん……まあ、君ならいいかもしれないな」

悩んだ末、了承が取れた。

一度戦つた事があるのと、自分の主が幻想入りさせた事が主な原因だろう。

龍也は藍に礼を言つて、再び先に進む。

妖精達はチラホラ出てきたが、藍と会う時程の数じゃない。

襲い掛かつてくる妖精達を打ち落とし先に進んで行くと、見覚えのある魔法陣が現れる。

昨日来た時にも現れた弾幕を放ってくる魔法陣だ。

そして魔方阵から龍也目掛けて弾幕が放たれる。

龍也はそれをギリギリまで引きつけ、その場から消える。

どこに消えたかというと、更に上空だ。

すると、魔法陣がまた現れて龍也を囲む。

これも以前と同じだ。

同じだからこそ落ち着いて対処ができる。

そしてまたギリギリまで引きつけてから消える。

それをもう一回繰り返した後、今度は魔方阵に完全に囲まれる。

前は弾幕が放たれるまで動けなかったが今度は違つう。

弾幕が放たれる前に魔方阵に突っ込む。

するとどうだろう。

龍也はそのまま突き抜けた。

魔方阵自体には何の拘束力はなかったのである。

そして、弾幕が放たれる。

それが背中に迫ってきているのを感じながら龍也は消える。

現れた場所は石段の上。

弾幕が通り過ぎたのを確認し、龍也は再び飛び上がって前に進んで行く。

そして、

「あら、お久しぶりね」

突然声が掛かる。

声が聞こえた方を向いても誰もいない。

龍也がその事に疑問を覚えていると、突如空間が裂ける。

そして中から金色の髪をした女性が現れた。

「あなたは……」

その顔を見て龍也はピンと来た。

外の世界にいた頃、自分を幻想郷に入れた張本人。

名を

「八雲……紫」

「覚えていてくれてうれしいわ」

センスで口元を隠しながら紫はそう言う。

「それで、こんな所まで一体何の様かしら？」

「結界の事だ」

「結界？」

「あんたが結界の修復をしていると聞いたんだが」

「ああ、その事ね。結界の修復ぐらいなら私なら簡単にできるわよ。他にも神社の結界を弄ったりとか」

「じゃあ何で今だに幽霊とかが大量に闊歩してるんだ？」

「さあ、何でかしら？」

会つのはこれで二回目だが、掴み所がない相手だと龍也は思った。

「知りたかったら聞いてみなさい。力尽くまで」

そう言いながら紫はニコリと笑う。

「力尽くは嫌いじゃないでしょ？」

紫がそう言つと龍也は自身の力を変える。

朱雀の力へと。

それに伴い瞳の色も黒から紅に変わる。

そして二本の炎の剣を生み出し、そのうち一本を紫に突きつける。

「いいぜ。なら力尽くまで洗いざらい色々聞き出してやる」

「そうそう。男の子はそうでなくっちゃ」

紫がそう言った瞬間に龍也は突っ込む。

彼女が自身の間合いに入るのと同時に炎の剣を振るう。

紫は炎の剣が当たる前に自身が作った隙間の中に消える。

龍也がどこに行ったのかと探していると、

「ッ!?!」

後方の空間が縦に割れ、そこから傘が突き放たれて龍也の肩を掠る。

龍也は振り向きながら炎の剣を振るうが、炎の剣はただ空を斬るだけであった。

そしてまた龍也の後方の空間が割れる。

それに気づき、龍也は後ろに振り返る。

また傘が突き出されると思っていたが、違った。

今度は弾幕であった。

龍也は後ろに下がりながら炎の剣で弾幕を斬り払っていく。

弾幕を斬り払った後、炎の剣を振るって爆炎を飛ばす。

その爆炎は一直線に隙間に叩き込まれる。

隙間は爆炎を飲み込んだ後、何事もなかったかのように消えてしま
う。

そして次の瞬間、龍也の目の前の空間が割れる。

「なっ!?!」

龍也が驚く。

空間が割れた事ではない。

そこから爆炎が龍也に向かって飛んで来たからだ。

それだけであつたのなら龍也も驚きはしなかつたであろう。

問題は、その爆炎が龍也が放つた爆炎であつたという点だ。

龍也は咄嗟に炎の剣を盾にする。

その爆炎は炎の剣に吸収されていく。

「結構便利ね、その剣」

割れた空間から上半身を出しながら紫はそう感想を漏らす。

「それがあんたの能力か」

「そう。私の能力は”境界を操る程度の能力”。これは色々と応用が効いてね。

この隙間もその一つよ」

紫がご丁寧にも自分の能力の一部を教えてくれる。

今現在わかっているのは、その隙間を使った移動、遠距離攻撃の返し、弾幕を放った事からの攻撃補助。

ここからどうやって反撃に移るか龍也は考える。

理想としては、隙間が出来た瞬間に攻撃を掛ける事。

時間を掛ければ隙間の奥などに行かれてしまい、紫に攻撃は届かないであろう。

最もこれは、相手が攻撃を放つ時にはこちらの攻撃も届くであろうと言っ

龍也の予想でしかないのだが。

とは言っても現状はこれぐらいしか對抗策がないのだが。

理想としては隙間が現れた瞬間に攻撃を加える。

この一点に尽きる。

それを行うにしても今のままではスピードに欠ける。

なので龍也は炎の剣を消し、自身の力を変える。

朱雀の力から白虎の力へと。

龍也の瞳の色が紅から翠へと変化する。

そして腕と脚に風が纏われる。

その変化を紫は面白そうな顔で見る。

そして龍也が油断無く構えているのを目に押さえながら紫は隙間の中に消えていく。

龍也は全神経を集中させながら辺りを探る。

そして何かを感じ取った方に全速力で突っ込む。

感じ取った場所にはあと少しで開きそうになっている隙間があった。

そこに向かって突風を放とうとして龍也が拳を振り上げる。

そして拳を放とうとした瞬間、

「がっ!？」

龍也の背中に何か当たる。

そして石段に向かって一直線に落ちて行く。

叩きつけられる前に両手足を使って何とか着地する。

その時、背中が重く感じた。

龍也は首を傾けて背中を見る。

「墓石!？」

そこにあつたのは墓石であつた。

何故墓石がと思つたが、すぐに理由が思いついた。

「あんたの仕業か」

「正解」

そう言いながら紫が目の前に現れる。

「その隙間の中には色々と入ってるわけだ」

「その通り」

「他にはどんなものが入ってるんだ？」

「あら、女の子の秘密を聞こうだなんて無粋よ」

「そいつは……悪かつたな!!」

龍也は霊力を解放して墓石を吹き飛ばし、拳の力を使って空中に躍り出る。

そしてまた油断無く構える。

今度は前方の少し離れた場所に大きめの隙間が開く。

龍也は両手を合わせて突き出し突風を放つ。

同時に隙間から大量のレーザーは放たれる。

龍也は突風を放つのを止めて回避に専念する。

いくらスピードが上がっていてもレーザーを避け切るのは些か無理があつた様で

結構な数のレーザーを掠ってしまう。

おまけとばかりに龍也が放つた突風も返つて来る。

龍也は右手を突き出しその突風を受け止め、それを再び自分の支配下に置く。

そしてそれを圧縮した後、唯の風に戻す。

「……………くそ」

龍也は悪態を吐く。

今のタイミングでもダメであつた。

距離があつたと言えど、簡単に返された。

これでは、本当に同時でなければ意味が無いのかもしれない。

ほぼ同時ではなく同時。

しかも、ある程度の広範囲をカバーできる技。

今の龍也にそんな技があるだろうか。

「……………あ」

一つだけ思い当たる物があった。

初めて幽香と会った時の事だ。

あの時、幽香は火柱の上がった原因を探りに来たと言っていた。

そしてその居たのは自分。

つまり、龍也は火柱を生み出すことが出来る言う事になる。

だが、あの時は自分の意識なんて無かった。

火柱は無意識に出したのであろう。

そんな無意識に出した物を今出せるであらうか。

いや、出さなくてはなるまい。

今はそれしか勝機を見出せていないのだから。

龍也は纏っていた風を消して再び自身の力を朱雀に変える。

そして、

「はあああああああああああああああああああ……！！！！」

霊力を解放し、力を解放する。

龍也の紅い瞳は輝き出し、黒い髪も紅に染まっていく。

その変化を隙間の中から見えていた紫は驚く。

紫の記憶の中にはあのような変化は無かったからだ。

自分が冬眠している間に更に力をつけたのだろうか。

少なくとも先程までの龍也とは桁違いの強さになっていると紫は感じた。

力の解放が終わったのと同時に龍也は霊力の解放を止める。

そして目を閉じて集中する。

できないと思うな。できると信じる。

この言葉を心の中で反復しながら。

そして隙間が現れる瞬間を待つ。

「……………」

短いようで長い時間が過ぎる。

そして龍也が何かを感じ取った瞬間、龍也を中心に火柱が上がる。

通常の炎のより紅い紅蓮の火柱。

火柱が消え、その中心から龍也の姿が現れる。

そして龍也の正面に隙間が現れ、そこから紫が出てくる。

「驚いた。中々思い切った事をするじゃない」

そう言う紫の姿は所々焦げていた。

やはりあの火柱はそれなりの効果があったようである。

「もうコツは搦んだ。次はもっとダメージがいくぜ」

龍也が余裕そうに言う。

だが、龍也は言う程余裕があるという訳ではなかった。

何せ、今の状態には時間制限がある。

それを過ぎれば一気にヘトヘトになってしまう。

相手が雑魚であるならばその状態になっても問題ないが、目の前にいる相手は雑魚ではない。

おまけに与えられたダメージが対して大きくなかった事。

直撃はしなかったであろうが、あそこまで低かったとは思わなかったのである。

力を解放した状態でこれである。

この状態でない火柱を当てたとして、どれだけのダメージになるであろうか。

龍也がこの先どうしようかと考えていると、

「やっぱり龍也も来ていたのね」

後ろから声が掛かる。

後ろを見るとそこには咲夜がいた。

そのすぐ後ろには霊夢と魔理沙もいる。

「ここに来たと言う事は……」

「ええ、ちっとも幽霊の数が減らないから様子を見に来たのよ」

どつちら、みんなの目的はまた同じのようだ。

「ところで、髪染めたの？」

霊夢が龍也にそう尋ねる。

「いや、そう言う訳じゃないんだが……」

「ところで、あいつは誰だ？」

魔理沙が紫を指差してそう言う。

「そいつが紫だ」

龍也がそう言うと三人の顔つきが変わる。

「結界の修復をやってるそうだけど、なんで状況が変わってないのかしら？」

「やっぱり、半分寝ながらやってたせいかしら」

いきなり理由を言い始めた。

その事に

「は？」

龍也はそんな疑問符を上げることしかできなかった。

「ほら、起きたばかりの時って中々眠気が抜けないじゃない」

掻い摘んで言うと、半分寝ながら作業していた所に龍也が来たので、眠気覚まし代わりに遊んでたと言う事らしい。

それを聞いて龍也は思った。

さっきの緊張感はどこに行ったのかと。

同時に戦う気がどんどんと失せていった。

要するに、どつどもよくなった。

そして全部丸投げする事にした。

「……なあ、霊夢」

「何？」

「何かあいつ、神社の結界弄ったらしいぞ」

「へえ……」

それを聞いた霊夢の顔つきが変わる。

「他にも色々としてるらしいぞ」

「つまり、使える妖精メイドがないのもあいつのせいだ？」

「多分そう」

「え？」

「最近私の実験もうまくいってないんだが、それもあいつのせいだと？」

「多分そう」

「え？」

「つまり、あいつをボコボコにすれば結界の件は全て片がつくというところかしら？」

「多分そう」

「え？」

「つまり、あいつをボコボコにすれば使える妖精メイドが現れると言っ事かしら？」

「多分そう」

「え？」

「つまり、あいつをボコボコにすれば私の実験もうまくいくと言っ事か？」

「多分そう」

「え？」

そして、八雲紫は霊夢、魔理沙、咲夜の三連合に弾幕ごっこを挑まれてボコボコにされた。

その後、結界は無事修復された。

ただ、妖精メイドの件と実験の件はうまくいったかはわからなかった。

放浪編 その20

冥界の方の結界は修復された。

そのお陰で人里などに出てくる幽霊の数が激減した。

かと言って、冥界へ自由に行き来できなくなったという訳ではない。普通に行き来することが出来る。

なので龍也はしばらく冥界を散策しようと思って再び冥界にやってきた。

こうやって落ち着いて散策するのは初めてなので中々新鮮である。

冥界には基本的に生きてる者はいない。

当然と言えば当然である。

そして喋る事が殆ど無い。

いや、亡霊以外は喋れないと言った方がいいであろうか。

そうそう、亡霊といえば冥界を歩いているとたまに襲われることがある。

基本的に取り付いて殺すと言った感じで。

しかも亡霊と言うのは普通の攻撃では倒すことができない。

例え斬ったとしても、すぐにくっ付いたり再生したりしてしまうからだ。

この特徴は以前襲われた時もそうであった。

あの亡霊だけが特別かと龍也は思ったが、亡霊はみなそうであると龍也は推察した。

襲ってきた亡霊と戦ったがみながみな同じ特徴を持っていたからだ。ならば、対処法はないのか。

そう言われるとそうではない。

霊力だ。

これを使えば亡霊などは撃退ないしダメージを与える事ができる。

これについては、幽霊などはエネルギーの塊であるのではないかと龍也は考えた。

なので、同じ高エネルギーをぶつけてやれば、強い方が勝つ。

だから幽霊などは撃退することができると龍也は思っている。

他にも魔力や妖力などでも同じことができるであろう。

これは龍也の勝手な推察でしかないが、それでちゃんと撃退できているのであっている

だろうと龍也は思っている。

亡霊と敵対している時、同じ亡霊でも西行寺幽々子とは違うなと龍也は思った。

前の異変と宴会の時に会っただけでの印象だが、いきなり襲い掛かっているタイプには見えなかった。

人間同士でも妖怪同士でもそれぞれ性格も考えも違うので、それが亡霊にも当て嵌まるのである。

それでも友好的な妖怪は幽々子以外は見た事はないが。

話は逸れたが、幽霊などは基本的に喋らないので冥界は静かなのである。

そんな中、龍也は冥界の景色を楽しみながら歩いている。

風が流れる音なども風流であろう。

そんな中を歩いて行くと、

「んっ。」

何やら音楽のようなものが聴こえてくる。

冥界に来て数日だが、音楽など聴いた事がない。

「どっかで聴いた事あるような……」

聴こえてくる音楽にどこか聴き覚えがあると龍也は首を傾げる。

何はともあれ確認してみようと思い、音楽が聴こえ来る方に足を向ける。

少し歩くとすぐに音楽の発生源を見つける。

そこにいたのは、

「リリカにルナサにメルランか？」

プリズムリバー三姉妹であった。

「あれ、龍也？」

リリカの方も龍也の存在に気付く。

それに釣られてルナサとメルランも龍也の存在に気付き、演奏が止まる。

「何やってるんだ、こんな所で」

「見ての通り練習中よ」

ルナサが答えてくれる。

「練習中？」

「そう。近々白玉桜で演奏会があるの」

「プリズムリバー楽団って有名なんだよー」

そう言っつて色々と話してくれた。

冥界で練習しているのは冥界は静かなので練習するには最適との事。

住居は霧の湖の方にある廃洋館だそうだ。

他にも色々な所で演奏会を開いていると。

かなり人気があるのでチケットは中々手に入らないとか。

聞いてもない事まで話してくれた。

「チケットは依頼者が管理しているんだけどね」

「白玉桜の人と仲が良いなら貰えるかもね」

そう言われて龍也は白玉桜の住人を思い浮かべる。

妖夢と幽々子だ。

妖夢とは一度戦った事もありある程度は打ち解けてはいるが、幽々子は別だ。

前の異変の時に白玉桜に泊まった時に少しと宴会の時に一言二言話した程度だ。

なので、頼めるとしたら妖夢ぐらいであろうか。

「それで、龍也は何しに冥界まで来たの？」

「まあ、ただの散策かな。冥界をこやっつてじっくり見て回る機会なんてなかったし」

「生きていてる人間が冥界散策ね……」

「まずいのか？」

「まずくはないと思うけど、亡霊とかに襲われたりしなかった？」

「ああ、襲われた。返り討ちにしたけどな」

「……ああ、龍也の実力を忘れていたよ。君ぐらいの実力があれば、そこんじよ

そこらの亡霊じゃ相手にならないか」

ルナサが呆れた顔でそう言う。

「そうだ、折角だから一曲聴いていかない？」

「一曲？」

「うん。一人とはいえ観客がいた方がいい練習になると思うし」

「そう言う事なら聴かせて貰おうか」

「オッケー、それじゃあいくよー！……」

そして三姉妹の準備が整い演奏が始まる。

音楽に関しては龍也はあまりよく分からないが、それでも凄いなと思えた。

気付けば演奏しか耳に入らなくなっていた。

そして演奏が終わる。

「これにて終了」

演奏が終わった事に気付くと龍也は拍手をしていた。

「で、どうだった？ 私達の演奏」

「あ、うん。凄かった。言葉ではうまく言い表せないけど凄かった」

陳腐な感想ではあるが、龍也にはこれしか言えなかった。

そんな感想ではあるが、それを聞いて三姉妹は笑顔になる。

「龍也の顔を見れば満足してくれたってわかるよ」

「言葉を並べるより、そう言ったストレートな感想の方が嬉しい場合もあるしね」

そして、龍也はしばらく三姉妹と雑談をして過ごす事にした。

白玉桜で開かれる演奏会に行こうと思いつきながら。

そして三姉妹と別れた後、龍也は白玉桜を目指していた。

白玉桜で開かれる三姉妹の演奏を聴きたいからだ。

とりあえずは行ってみて交渉しようと思っただけだ。

そして、長い階段が見えてくる。

白玉桜はこの先だ。

そういえばと龍也は思った。

結局、この長い階段をちゃんと上ったことはなかったなど。

もう異変は起こっていないのだからちゃんと上ってみることにした。

階段を上り続けてしばらくしても襲撃はない。

チヲホラと人魂が漂っているだけだ。

同じ階段でも、博麗神社へと続く階段とはえらい違いだ。

あそこは必ずと言っていい程妖怪に襲われる。

それにくらべたらここは平和なものだ。

階段を上りながら龍也はそんな事を考えていた。

そして、夕方と夜の間くらいの時間。

「長かった」

やっと白玉桜の門の前に辿り着いた。

歩いて来たとはいえここまで時間が掛かるとは思わなかったようである。

飛べるという事は非常に便利なことであるなと龍也は思った。

何はともあれ、白玉桜内の庭園に入って行く事にした。

白玉桜内の庭風景は相変わらず見事なものだと龍也は思った。

これら全部を妖夢一人で手入れをしているのだから凄いものである。

そな庭先の風景を見ながら先に進んで行くと、突如上空から殺気を龍也は感じとった。

龍也が慌てて後ろに跳ぶ。

それと同時に龍也の居た場所に何者かが降り立つ。

「曲者め!! 白玉桜に何のようだ!!」

その人物は妖夢であつた。

妖夢は長刀を龍也に突きつけている。

そして、

「あれ、龍也さん？」

刀を突きつけている人物が龍也だと言う事に気付く。

「よっ」

「あ、失礼しました」

妖夢はそう言いながら刀を鞘に納める。

「にしてもいきなり斬り掛かれるとは思わなかったな」

「すみません。龍也さんと確認できなかつたものですから……」

そう申し訳なさそうに妖夢は謝る。

「それで、白玉桜に何か御用ですか？」

「ああ、ここで近々プリズムリバー三姉妹の演奏会が開かれるだろ

「？」

「はい、そうですよ」

「出来れば俺にも聴かせてほしいなって思ってます」

龍也がそう言うのと妖夢は少し考えた後、口を開く。

「幽々子様に尋ねてみないと何とも……」

「じゃあ、会わせて貰えないか？」

「わかりました。御案内します」

そして龍也は妖夢の後を付いて行く。

少し歩くと屋敷が見えてくる。

相変わらず大きいなと龍也は思った。

そして玄関内に入り、靴を脱いで屋敷の中に入っていく。

しばらく歩くと他の部屋よりも大き目の襖の前に辿り付く。

「幽々子様、失礼します」

そう言って妖夢は襖を開ける。

「どうかしたの、妖夢？」

幽々子はそう反応を返す。

そして龍也の存在に気付く。

「あら、龍也じゃない。いらっしやい」

「ああ」

「じゃあ、妖夢。お茶とお茶菓子持ってきて」

「わかりました」

そう言っつて妖夢はどこかに向かう。

おそらく台所であろう。

「ほら、そんな所に立っつてないで中に入っつてらっしやい」

「ああ、そうだな」

そう言っつて幽々子の部屋の中に入り、適当な場所で胡坐を搔く。

「そう言えはこっつやっつて貴方とちゃんと話をするのっつて初めてね」

「ああ……そう言われればそうだな」

記憶を掘り返しながら龍也はそう言っつ。

「貴方の事だけなら紫からある程度は聞いっつてるのよ」

「そうなのか？」

「ええ。私と紫は親友同士だしね。色々交友があるのよ」

「へー」

「それで、何の用かしら？」

「ああ、ここでプリズムリバー三姉妹が演奏会をやるだろ」

「ええ」

「俺もそれを聴かせて貰いたくってさ」

「それでここに来たの？」

「ああ。で、依頼者がチケットを扱っていると聞いてさ」

「なるほどね」

幽々子がそう言いながら自分の胸元の部分に手を突っ込む。

いきなり何をやってるんだと龍也は思った。

幽々子が胸元から手を取り出すと、

「はい、チケット」

その手にはチケットがあり、それを龍也に手渡す。

「あ、ああ」

龍也はそのチケット受け取る。

「あああら、赤くなっちゃって。年頃の男の子には刺激が強かったかしら?」

「何でもねえよ」

「そう言われるとちよつとショックかも」

そう言いながら幽々子は着物の袖の部分を垂らしながらヨヨヨと言った感じなる。

「俺にどうしろと……」

「冗談よ。ちよつとからかっただけ」

すぐに幽々子は元の体勢に戻る。

「ついこの間紫に年頃の男の子は色気からかうと面白いぐらいに反応するって
言われたのよ」

「何を言ってるんだ、あの人は」

この間、霊夢、魔理沙、咲夜の三人を睨けてボロボロにした事を根
に持っているの
だろうか。

「でも、思ったたより反応しなかったわね。ムツリスケべってやつ?。」

「ちげーよ」

「ほんとかしら? 男は狼って言うし。二人つきりなったのも、私の体が目当てで……」

「あんた、からかうのはやめるんじゃないのか? てゆうか、二人つきりになる様に仕組んだのは幽々子だろ」

「そうだったわね」

そう言いながら幽々子は扇子で口元を隠す。

紫と言い幽々子と言い掴み所がないと龍也は思った。

ついでに愉快犯であるとも。

「それはそうと、演奏会は明後日よ」

「明後日なのか」

どれまでどうしようかと龍也は考える。

「それまで白玉桜に泊まっていてもいいわよ」

「いいのか?」

「ええ。まあ、チケットをタダで上げて、その上ただで泊めると言うのもあれだから、
泊まっている間は雑用をしてくれればいいわ」

「わかった。それぐらいなら任せてくれ」

龍也がそう言うと、襖がノックされる。

「失礼します」

そう言いながら妖夢が入って来る。

「あらあら、早いわ妖夢。私達が情事の最中だったらどうするの?」

「みよん!? 情事!?!」

妖夢は真っ赤になりながらそんな声を上げる。

「おい……」

「ふふ、可愛い反応でしょ」

つまり、幽々子は従者でも遊んでいるようだ。

真っ赤になってる妖夢を正気に戻して、お茶とお茶菓子を頂く。

やはりと言つべきか、幽々子のお茶菓子の量は大量であった。

その後、三人で雑談をした。

それが終わると妖夢に空いてる部屋に案内してもらった。

次の日からは龍也の雑用が始まる。

雑用と言っても廊下の雑巾掛けと埃落としぐらいであったが。

後は妖夢と軽い手合わせ。

これに関してはお互い、いい勉強になったと思っている。

そして次の日。

プリズムリバー三姉妹の演奏会が始まる。

観客は龍也、妖夢、幽々子を除くと人魂や亡霊達である。

演奏を聴いて、龍也は聴いてよかったなと思った。

言葉で言い表せない感動があった。

その後、白玉桜で宴会が開かれた。

生きてる奴も死んだ者も関係ない賑わいであった。

放浪編 その21

「はああああああ!!」

龍也は巨大な土の拳を振り落とす。

妖怪の何体かは押しつぶされ、それを免れた妖怪は衝撃で吹き飛ばされる。

そう、今龍也は妖怪と交戦中である。

そして龍也の使っている力は玄武。

髪の色は茶である事から力も解放しているようである。

龍也は地面に着地すると同時に土で出来た拳を崩す。

そしてまだ健在な妖怪達の方に向き直る。

その妖怪達は唸り声を上げて龍也に敵意をぶつけている。

まだまだ戦う気のようにである。

それを見た龍也は大地に手を付ける。

すると、妖怪達いる場所に地割れが起こる。

妖怪達はそれに驚き、何も出来ずに地割れなの中に落ちていく。

そして、その地割れが閉じる。

落ちた妖怪達は圧殺されていく。

それを見届けた龍也は息を整え力を消す。

「よし!」

自分の手を見ながらそう言う。

力の扱いがうまくなってきたと龍也は感じた。

それと同時に力を解放した状態での戦闘可能時間も伸びた。

ジワジワとはあるが、確実に伸びている。

こういふのがあると、自分は強くなっていると言う実感を持てる。

龍也はそう思いながら周囲の風景を見る。

桜も少しずつ散り始め、夏が近づいてきたなと感じさせる。

今年は冬が長かったせいで春は短かったようであるが。

春になって一月程で夏になるというのも些か寂しいものを感じるが。

ま、普通の春は来年に期待することにしようとな龍也は思った。

「さて、次はどこに行こうかな」

龍也は何となく思い立った方向へ進むことにした。

「と、もう夜か」

気付けば何時の間にか夜になっていた。

そろそろどこかで寢床を作る必要があると龍也は思った。

そして周囲を見渡して見るが、木々に囲まれていてとてもじゃないが寢床を作れる余裕がない。

龍也はもう少し開けた場所を探そうと移動を開始する。

しかし、歩けど歩けど中々見つからない。

仕方がないので一旦上空に上がって探す事にした。

「……見つからないな」

上空から見下ろしても中々見つからない。

どうしたものかと考えていると、

「りゅーやー!」

後ろの方から自身の名前を呼ぶ声が聞こえる。

誰だろうと振り返ってみる。

そこをいたのは

「フランドール?」

フランドール・スカーレットであった。

フランドールは勢いよく龍也に突っ込んでくる。

龍也は慌ててフランドールを受け止める。

「うおおおおお!」

受け止めることには成功したものの、かなり後方に下がってしまっ

「とと、危ないな」

「えへへ」

龍也に会えたのが嬉しいのだろうか。

フランドールは笑顔だ。

「何やってたんだ、こんな所で？」

「散歩」

そういえばと龍也は思い出した。

昔のフランドールは紅魔館に閉じ籠りつきりで外に出ることは殆どなかったとか。

だが、最近は外にも出るようになったとか。

色々と成長しているようだ。

「ねえねえ」

「ん？」

「龍也も一緒に散歩しよ」

フレンドールが散歩に誘ってきた。

そう誘われて龍也は考える。

一緒に散歩してればいい寝床が見つかるかもしれないと。

なら、一緒に散歩するのもいいかもしれないと思った。

「じゃ、一緒に散歩するか」

「うん……」

「お腹すいた……」

一緒に散歩しているとフランドールがそう漏らす。

それを聞いた龍也も空腹感を覚える。

「そっぴゃ吸血鬼って何を食べるんだ？」

「んー……何でも」

「へー」

血だけではないんだと龍也は思った。

そして紅魔館で食事を出された時は普通の食べ物だったなと龍也は思い出す。

「つつてもな……」

龍也はそう言いながら眼下を見下ろす。

見えるのは森と獣道だけ。

とてもじゃないが飲食店なんて

「お？」

そう思った矢先に龍也は何かを見つける。

それは屋台であろうか。

あそこになら何か食べる物があるかもしれない。

「あそこに言ってみようぜ」

「うん」

そして二人はそこに目掛けて降下していく。

見れば見るほど屋台である。

紅い提灯には八目鰻と書かれている。

「あ、いらっしやい」

その店主と思わしき少女が声を掛けてくる。

羽の様な耳と、背中から生える羽が見える。

おそらく彼女は妖怪であろう。

「あんたがここの店主かい？」

「そうよ。私はミスティア・ローレライ。貴方達は？」

「俺は四神龍也」

「私はフランドール・スカーレット」

「龍也にフランドールね」

ミスティアはそう名前を呟きながら何かに気付く。

「ん、スカーレット？」

「ああ、フランドールは紅魔館の主の妹だよ」

「へー、あそこの主に妹がいたんだ」

「まあ、こいつは最近まではあまり外に出歩かなかったそうだしな」

「ふーん。ま、それはそれとして、貴方達二人はお客様第一号と第二号だから

色々サービスするよ」

「なんだ、今日開店したのか」

「そ。焼き鳥撲滅のためにね」

ミスティアはそう言う。

龍也は鳥の妖怪か何かかと思う。

「それで、何にする？」

龍也は屋台の中を見ながら注文を決める。

「じゃあ、俺は焼酎と焼き八目鰻三つ。フランドールはどうする？」

「えっと、えっと……龍也と同じ物がいい」

フランドールは龍也と同じ物を注文する事にした。

「はいよ、ちょっと待っててね」

そう言いながらミスティアは目の前で八目鰻を焼いていく。

そこから良い匂いがし、食欲をそそる。

そして焼きあがるとタレを付ける。

「はい、お待ち」

そう言いながら焼き八目鰻が出される。

「いただきます」

そして食べ始める。

「うまい」

素直にその感想が漏れた。

「えへへ、ありがとう」

その感想を聞いたミスティアが笑顔になる。

美味しそうに食べる龍也の姿を見ながらフランドールも食べ始める。

「熱ッ!?!」

だが、すぐに放してしまっ。

どうやらフランドールにとっては熱かった様だ。

「そういう時は息を吹きかけながら冷まして食べるんだ」

「っん」

龍也がそう言つとフランドールは息を吹きかけながら焼き八目鰻を冷ます。

そして冷めたなと思うと食べ始める。

「おいしー」

どうやらフランドールもこの味に満足したようだ。

そしてある程度食べていくと

「はい」

茶碗が差し出される。

中身はご飯だ。

「それはサービスだよ」

「サンキュ」

そして鰻と一緒にご飯を食べていく。

こういったものはご飯と一緒に食べていくのが一番美味しいと龍也は思っている。

そのまま三人で雑談を交えながら食事を進めていく。

その中で焼き八目鰻をやつてる理由を聞いた。

何でも、健康マニアの焼き鳥屋なる者がいるらしい。

これは噂に聞いただけの眉唾物らしいが。

でもそんな事はミステリアには関係ないらしく、それに対抗して焼き八目鰻の屋台を出しているのだとか。

八目鰻の人気が出れば焼き鳥撲滅に繋がっていくんだそうだ。

何とも気の長い計画である。

まあ、妖怪の寿命は人間とは比べ物にならないほど長いので、気の長い方が
調度いいのかもしれない。

「あ、焼酎もう一本」

「はいよ」

龍也は空になった焼酎をもう一本頼む。

そういえば、先程からフランドールが喋らなくなったので気になつて様子を見てみる。

すると、フランドールはうつうつらうつらしていた。

「なんだ、眠くなつたか？」

「んー……」

どうも意識の半分以上が夢の世界にいつているようだ。

龍也はポケットから懐中時計を取り出して時間を確認する。

今の季節ならそろそろ日が昇る頃だ。

吸血鬼の弱点は日光である。

これはフランドールを連れて紅魔館に行つた方がいいだろう。

龍也は懐中時計をしまい、焼酎を飲み干して代金を払う事にする。

「毎度あり」

代金を支払つた後、龍也はフランドールの腕を掴んで立たせようとする。

「立てるか？」

「んー……」

何とか立たせてみるが、足元が覚束ない。

こりゃ無理だなと龍也は思う。

そしてフランドールを背負って紅魔館に向かうことにする。

「それじゃあな」

「うん、また来てね」

「ああ、見つけたらまた寄らせて貰うよ」

そう言って龍也は飛び上がる。

「えっと……たしか方角は……」

龍也は周りを見ながら紅魔館のある場所を探す。

「たしかこつちだったな」

そして龍也は空を駆けて行く。

少しすれば紅魔館が見えてくる。

「よかった、当たってた」

何とか日が出る前に紅魔館に辿り着いた。

そして門の前に降り立つ。

美鈴の姿を探すとすぐに見つかる。

「美鈴」

「あ、龍也さん」

龍也が声を掛けると美鈴も龍也の存在に気付く。

「おや、背負っているのは妹様ですか？」

「ああ、実は……」

そして龍也はフランドールを背負っている理由を話す。

「そうだったんですか」

「と、言う訳で日が出る前に中に入りたいたんだが」

「わかりました」

そう言っつて美鈴は門を開ける。

「そういえば、妹様はもう眠ってしまってますね」

「え？」

龍也は背負っているフランドールの様子を確認する。

するて寝息を立てて寝ているのが確認できる。

「ありゃ、何時の間に寝てたんだ？」

「妹様も疲れてたんでしょうね。一人で外に出るようになったのもつい最近ですし

一人で遠出したのも今日が初めてでしたからね」

「一人で遠出って今日が初めてだったんだ」

「ええ、そうなんです。少し前までは外に出るにしてもお嬢様や咲夜さんと一緒に
と言つ事が多かったんです」

「へー」

「それと結構前にお嬢様から聞きましたよ。妹様がこつも変わったのは龍也さんのお陰だとか」

「俺としてはただ背中を少し押しただけなんだけどな」

あの時フランドールに足りなかったのは一歩踏み出す勇気だったと龍也は思っている。

「それでもですよ」

「そついつものかね」

「あ、そろそろ日が出始めるので……」

「おっと……」

少し長話しすぎたようだ。

「それじゃあな」

「ええ」

そう挨拶を交わして龍也は紅魔館の扉まで歩いて行く。

そして扉を開けて紅魔館の中に入る。

「さて、どうするかな」

龍也は未だに紅魔館の全容を把握していない。

まあ、ここが広すぎるといいうのもあるのだが。

そのためフランドールの部屋の場所がわからない。

龍也はどこか適当な部屋に置いとけばいいかなと考える。

「あら、いらっしやい」

そう考えていると咲夜が音も無く現れる。

「咲夜」

「背負っているのは妹様かしら？」

「ああ、実は……」

そして美鈴のときと同じように事情を話していく。

「なるほど……」

「それでフレンドールを部屋まで運びたいんだが」

「それは私がやっておくわ」

「そりゃ助かる。俺だったら迷いそうだし」

そう言いながら龍也はフレンドールを咲夜に渡す。

すると、咲夜とフレンドールの姿が消える。

大方、時間を止めて移動したのであろう。

そして、少しすると咲夜が再び現れる。

「それで、貴方はどうする？ 泊まっていくな？」

そう言われると途端に眠気が龍也を襲う。

ここは言葉に甘える事に龍也はした。

「ああ、そこをさせて貰うよ」

「なら、案内するから付いて来て」

そして咲夜の後に続いて龍也は移動を開始する。

少し歩くと部屋の前に辿り付く。

「部屋の中は自由に使って構わないから」

「ああ、ありがとう」

そう礼を言っただけで龍也は部屋の中に入ろうとすると

「龍也」

声を掛けられる。

声を掛けられた方を向くとレミリアが居た。

「レミリア」

「こんばんは……いえ、今の時間帯ならおはようの方がいいかしらね」

あれから時間が経ったのでもう日が出ている時間帯だろう。

「そうだな、おはようだな。それで、どうしたんだ？」

「咲夜から聞いたわ。フランが世話になったみたいだからお礼を言いにね」

「別に対した事はしてないんだけどな」

「そう言えば屋台に行ったそうね」

「ああ。ミスティアって言う妖怪がやっている焼き八目鰻屋にな」

「へえー、妖怪がやってる屋台ね」

「ああ、俺達が行った時が開店日だったみたいだぜ」

「私も行ってみようかしら」

「多分夜中の獣道辺りを探してみれば見つかると思うぞ」

そして少し雑談をする。

「と、もう眠いな」

「私もそうね」

どうやらお互いもう眠いようだ。

「それじゃ、おやすみ」

「ええ、おやすみ」

レミリアは咲夜を連れて自分の寝室に向かう。

龍也はドアを開けて中に入る。

この部屋は窓が無く、暗い。

咲夜がこれから眠る龍也への配慮だろう。

龍也はその事をありがたく思いながら近くにある椅子に学ランを掛ける。

そしてドアを閉めてベットに向かう。

靴を脱いでベットに倒れこむ。

倒れたまま移動しながら布団を羽織って目を閉じて龍也は眠る。

放浪編 その22

「……ん」

龍也は目を覚ます。

上半身を起き上がらせて周囲を伺う。

真っ暗である。

どうしてこんな暗いのかと龍也は思う。

そして寝ぼけた頭で何があったかを思い出す。

「……ああ」

そして紅魔館に泊まったことを思い出す。

そこでこれから寝る龍也に咲夜が気を使って窓の無い部屋に案内してくれたのだ。

そこまで思い出して龍也は自身の力を変える。

朱雀の力へと。

そして黒い瞳が紅い瞳に変わる。

龍也は力の変換が完了した事を感じると同時に掌の炎を生み出す。

すると部屋が明るくなる。

龍也はもう一度辺りを見渡す。

すると蝋燭を発見する。

龍也はそこに移動する。

「にしても高そうなのに刺さってるな」

龍也はそう感想を漏らしながら蝋燭に火を尽けて、生み出している炎を消す。

そしてもう一度部屋の中を見渡す。

するとテーブル上に冷やされたワインとグラスを発見する。

その横にはサンドイッチとチーズも置いてある。

寝ている間に咲夜辺りが持って来てくれたのだろうか。

龍也はお腹も空いていることだし椅子に座って頂く事にした。

まずはワインを飲む事にした。

コルクを取ってグラスにワインを注ぐ。

起きて早々ワインを飲む事に対して龍也は上流貴族にでもなった気分になる。

そしてワインを飲む。

「うまい」

龍也は素直にそう感じた。

西洋の物では紅魔館の右に出る場所はないであろう。

そしてチーズ、サンドイッチを食べて食欲を満たす。

食べ終わると龍也は懐中時計を取り出して時間を確認する。

「げ、もう三時過ぎてるじゃん」

思ってたより寝ていたなと龍也は感じる。

龍也は立ち上がって蝋燭の火を消す。

そして再び自身の掌に炎のを生み出す。

その明かりを頼りに龍也は部屋を出る。

「あら、起きたのね」

「咲夜」

部屋の前には咲夜がいた。

「あ、ワインと食べる物ありがとな」

「別に構わないわ」

「それと、中にある食器はどうすればいい？」

「それは後で私が片付けておくわ」

相変わらず紅魔館は殆ど咲夜で一人で切り盛りしてるようだ。

「ああ、それと魔理沙から伝言よ」

「魔理沙から？」

龍也は何だろうと思う。

「そろそろ桜が散り始めるから、散りきる前に博麗神社で宴会をするそうよ」

「花見と言つ名の宴会か」

「そうね」

「この連中も行くのか？」

「ええ。お嬢様と妹様が起きられてからになるわね。貴方はどうする？」

「んー……折角だし一緒に行くよ」

「お嬢様と妹様が起きられるまでまだ時間が掛かるけどそれまでどうする？」

「図書館で時間を潰してるよ」

「そう。案内は必要？」

そう言われて龍也は考える。

ここから図書館まで迷わずに行けるかと聞かれた首を傾げざるを得ない。

「案内お願いします」

「わかったわ」

そして咲夜に案内してもらって図書館に着く。

「ここまで来たら後は一人でいけるでしょ？」

「ああ、助かったよ。ありがとう」

龍也はそう礼を言って図書館の奥に進む。

「パチュリー」

龍也はパチュリーの姿を見つけて声を掛ける。

パチュリーもそれに気付いて顔を向ける。

「あら、いらっしやい」

そしてパチユリーも挨拶を返す。

「何か用かしら？」

「本を読ませてもらおうと思ってさ」

「本を？」

「ああ、ダメか？」

「別に構わないわ」

「そっか、ありがとう」

龍也はそう言って適当に図書館の中を歩く。

少し歩くと雑学関連の本棚を見つける。

龍也はそれを手に取って読み始める。

「あ、こんな所にいた」

「ん？」

声を掛けられたので龍也はそちらを見る。

そこには咲夜がいた。

「どうしたんだ？」

「お嬢様と妹様が起きられてもう出発の準備が整ったから貴方を呼びに来たのよ」

「ああ、もうそんな時間か」

龍也は読んでいた本を仕舞い、咲夜の後に続いて図書館を後にする。

そして門の方に行くともう全員揃っていた。

「来たようね」

「龍也、おそーい」

「はは、悪い悪い」

フランドールに怒られたが、龍也はそれを何とか宥める。

そして龍也は紅魔館のメンバーと一緒に博麗神社に向かう。

移動している最中に雑談を交えながら。

そして日が完全に落ちきる前に博麗神社に到着する。

博麗神社に着くと、他のメンバーはすでに到着していた。

霊夢と魔理沙は言わずもがな。

アリスに妖夢に幽々子も来ている。

プリズムリバー三姉妹も。

みんな見た事ある人達ばかりだ。

当然と言えば当然だが。

そして魔理沙の音頭で宴会が始まる。

案の定と言つべきか、みんな花見そっちのけで飲んで騒いでいる。

まあ、想像してしかるべきであった。

それもらしいと言えはらしい。

龍也がそんな事を思っている、

「はあい、楽しんでる?」

「おおわあ!?!」

いきなり龍也の目の前に八雲紫が降ってくる。

正確に言うと、隙間から降ってきた。

上半身だけ。

何ともホラーである。

「酷いわ。そんなに驚かなくてもいいじゃない」

「だったらそんな登場の仕方をするなよ」

龍也は何とか持ち直しそう突っ込む。

「ちょっとしたお茶目じゃない」

紫がそう可愛らしく言う。

「はあ……」

龍也はもうどうでもよくなって来た。

「それで、何か用か？」

「実はね……」

紫はそう言つて真面目そうな顔になる。

それに釣られて龍也も真面目な顔になる。

何か真面目な話しだろうか

「あれを見なさい」

そう言つて紫は逆さまの状態のまま扇子を向ける。

龍也は扇子を向けられた方を見る。

そこには宴会を楽しんでいるみんなの姿がある。

「？ あの光景がどうかしたのか？」

「気付かないの？」

「何がだ？」

「ここにいるのは貴方を除けばみんな女。そして男は貴方だけ。これって

ハーレムじゃない」

紫がそんな事を言い出した。

「……おい」

龍也は気の抜けた声を出す。

てつきり真面目な話しをしてくると思っていたのにこれだ。

真面目に聞こうと思っていた自分が馬鹿馬鹿しくなる。

「あらあら、意識したら恥ずかしくなっちゃったかしら」

そんな龍也の心情を知ってか知らずか紫は更に言葉を紡ぐ。

「みんな綺麗所だものねえー。ここは酒の力を使って一夏の過ちならぬ、

一春の過ちでも……」

「あなた、何時ぞやの時に三人を睨けてポロポロにした事まだ恨んでるのか？」

「さて、どうかしら」

紫は扇子で口元を隠しながらそう言う。

そして隙間の中に消えていく。

龍也は唯単に自分を引っ搔き回したかっただけではないかと思った。

「やあ、龍也」

「藍か」

龍也は一息入れようと思った時に藍が声を掛ける。

「どうしたんだい？ やけに疲れているようだが」

「ああ、あんたの主にちよつとな」

龍也が疲れた感じにそう言うと、藍は全てを理解した。

「紫様がご迷惑を掛けたようですまない」

そう言つて藍が頭を下げる。

「いや、もういいよ。酒の席だしな」

「そう言つて貰えると助かるよ」

藍が頭を上げるとある事に気付く。

「空じゃないか。酒を注ごうか？」

「あ、じゃあ頼むよ」

そう言うと藍が龍也の持っている杯に酒を注いでくれる。

そして龍也は注がれた酒を飲む。

酒を飲み干すと藍と雑談をする。

「それにしても……」

雑談をしている最中に藍がふとある場所を見る。

龍也も釣られてその場所を見る。

そこには、橙とフレンドールとルーミアとチルノと大妖精が楽しそうに

雑談している光景があった。

「橙にも友達が出来たようでよかったよ」

藍が嬉しそうにそう語る。

「それにしても、噂と言うのは当てにはならないな」

「フレンドールの事か？」

「ああ、噂では相当な危険人物と聞いていたのだが……」

あの光景を見ているととてもそうには見えないと藍は言う。

「ま、所詮噂は噂ってことだろ」

「そうだな。あの様子を見てるとそう思えるよ」

そしてまた軽い雑談をすると藍は紫のいる場所へ移動する。

その後、龍也は桜に背中を預けて桜を鑑賞する。

「龍也、飲んでる?」

「龍也さん、こんばんは」

「幽々子に妖夢か」

次に現れたのは幽々子に妖夢だ。

幽々子は何か思いついたように、龍也に近づく。

そして、

「ああん、少し酔っちゃった」

幽々子は色っぽい顔で龍也に抱きつくような形で倒れこむ。

「幽々子様!?!」

妖夢は真っ赤な顔になりながらそう叫ぶ。

どうもこういった事に対する耐性は低いようだ。

「で、何をやってるんだ?」

「あら、冷たい反応。妖夢ぐらい反応がないとつまらないじゃない」

龍也はまた自分と妖夢で遊ぶつもりだなと思った。

「そう何度も同じ手を喰うか」

「あら、残念」

そう言いながら幽々子は龍也から離れる。

そして何を考えたのか着ている着物を緩める。

そのせいで色々な部分が見せそうになる。

「おまつ！？ 何やってるんだ！？」

これには龍也も驚く。

前フリもなくこんな事をされれば当然だ。

「ふむふむ、前フリなく肌を見せるような事をすればつるたえると」

「はっ」

どうやら余計な情報を与えてしまったと龍也は思った。

「真っ赤な顔しながらも見る所は見ていたくせに。スケベねえ」

見たではなく見せられたのだが事実のため反論は出来ない。

そんな龍也の様子を見ながら幽々子はまた龍也に寄り掛かってきた。

その時、龍也は自身の胸元にやわらかい感触を感じる。

今度はただ倒れこむのではなく。潤んだ瞳で幽々子は龍也を見上げる。

酒を飲んでいたせいか、頬も上気している。

中々に色っぽい。

立て続けにこんな事態が起きたため、龍也も冷静ではいられなくなる。

そんな龍也の様子を知ってか知らずか、幽々子は右手を龍也の頬に添える。

そして顔を近づけていく。

その様子を妖夢は顔を真っ赤にしながら見ていた。

そして、

「もーらい」

幽々子は左手で龍也の摘みを奪い取る。

「あ」

それに気付いた龍也がようやく正気に戻る。

「ふふ、気を付けなさい。貴方は幻想郷中を歩いて旅をしているよ
うだけど、中には

今の様に色仕掛けで仕掛けてくる者もいるかもしれない。私がある
気ならもう貴方は
死んでいるわよ」

そう言いながら幽々子は龍也から離れる。

そして着崩れた着物を直す。

「今の経験を活かして次からは気をつけなさい」

そして幽々子は妖夢を連れて去っていく。

妖夢は最後まで顔が赤いままであったが。

「心配……してくれたのか……」

龍也はそう呟きながら幽々子と妖夢の後ろ姿を見送る。

そしてすぐに心配半分、からかい半分だなと思った。

また桜を見ながらボンヤリしていると、

「久しぶりね、龍也」

「幽香」

現れたのは風見幽香であった。

「たしかに久しぶりだな」

思えば結構長く会ってなかったかもしれない。

「幽香も宴会に？」

「それもあるけど、ここの桜が散りきる前に見ておこうと思っ
てね」
そう言いながら幽香は桜を見る。

「見事な物ね。ここの桜は」

「そうだな」

博麗神社にある桜は冥界や白玉桜にある桜ともそう変わらない美
さを感じさせる。

「また、強くなったみたいね」

「そう、なのかな……」

強くなったという実感はあるものの、どれだけ強くなったかはわ
からない。

「ええ、そうよ」

そう言いながら幽香は持っている傘を龍也に向けて振るう。

龍也は慌てずにそれを掌で受け止める。

ちょっとした激突音が発生する。

「何するんだよ」

「ちゃんと、止められたでしょ」

そう言って幽香が笑顔になる。

「私と初めて会った頃の貴方なら今の一撃に反応すら出来なかったでしょうけど、」

「今なら余裕で受け止められたでしょ」

「そう言う事は事前に言っていて欲しかったな」

「あら、ごめんなさい」

そう笑いながら幽香は傘を退ける。

そして幽香は内心やはりと思った。

今の一撃を放ってわかった事。

龍也は自分の予想を上回るスピードで強くなっている。

この異常に長かった冬。

幽香はおそらく異変であったと思っている。

詳しい情報はないが、異変解決に龍也が一役になっているとも思っている。

そのお陰で龍也が強くなった。

冬の花を長く見られた反面、春の花をあまり長く見られなかったが龍也が強くなったので

よしとする事にしようと思つた。

だが、まだまだとも思つた。

まだ、自分と対等以上に戦える強さではない。

今、龍也と戦つても本気を出すまでも無く自分の圧勝になると幽香は思っている。

だが、何れは自分を上回る程の力を手に入れると思つている。

その時こそが龍也と戦う時になるだろうと思つている。

「どうかしたか？」

「ううん、何でもないわ」

そう言いながら幽香は龍也の持っている杯を見る。

「あら、空じゃない。入れましょうか？」

「あ、頼むよ」

そう言うと幽香は龍也の杯に酒を注ぐ。

その後、幽香も自分の杯に酒を入れる。

そして二人揃つて桜を見ながら酒を見る。

「ふふ、夜桜を見ながら酒を飲むと言つのもいいものね」

「そうだな」

そしてお互いまったくとした時間を楽しむ。

すると、

「おい、龍也」

誰かに呼ばれる。

その人物は魔理沙であった。

「どうしたんだ？」

「ああ、これから酒飲み大会が始まるから参加しないかって聞きにきたんだ」

「あら、なら私も参加しようかしら」

「なんだ、幽香も来てたのか」

「ええ、先程ね」

「お前も幻想郷中を回っているから中々捕まらないんだよな」

夏の間は別にしてと魔理沙が付け加える。

「それはごめんなさいね」

「とりあえず幽香は参加な。龍也はどうする？」

「俺も参加するよ」

「りょーかい」

そう言いながら魔理沙は指をさす。

「あそこでやるから待っていてくれ。私は他にも呼び込みに行くから
さ」

そう言って魔理沙はどこかに移動する。

「それじゃ、行きましようか」

「そつだな」

そして幽香と龍也は酒飲み大会が始まる場所に移動する。

翌日、参加者全員が二日酔いに悩まされたのは言つまでも無い。

放浪編 その23

龍也はいつものように幻想郷中を歩き回っていた。

春も終わり、完全に夏になってきた季節だ。

そんな事を感じながら龍也が歩いていると、見覚えの有る石段を発見する。

「ああ、何時の間にか博麗神社の近くにまで来ていたのか」

その石段を見て龍也はそう言う。

近くには折れた案内板もある。

最近では飛んで博麗神社に向かっていたので何だかこの光景が懐かしく感じる。

「せっかくだしお参りしていくか」

そして龍也は石段を上っていく。

半分くらい来た頃であろうか。

妖怪が現れる。

大きさは龍也の倍程で、体毛は白。

ゴリラのような妖怪だ。

数もそれなりにいる。

「なんだ、ここを通るとよくお前等に会うがここら一帯はお前達の住処か？」

龍也がそう尋ねるが妖怪達は答えない。

そして、答えの代わりに襲い掛かってきた。

まず、正面の妖怪が襲い掛かってきた。

龍也の顔面に拳を放ってきたので龍也はそれを屈んで避ける。

そしてすぐさま妖怪の顎にアップercutを放つ。

それを受けて妖怪の体が浮かび上がる。

龍也は間髪入れずに正拳突きを放って妖怪を吹き飛ばす。

今度は背後から別の妖怪が襲い掛かってくる。

龍也はそのままの体勢で真後ろに蹴りを放つ。

すると後ろから襲い掛かってきた妖怪が吹っ飛んで行く。

今度は真横から妖怪が腕を振り下ろして攻撃を仕掛けてくる。

龍也は迎撃は不可能と判断し、一歩後ろに下がることで攻撃を回避する。

そして振り下ろされた腕を掴み、

「うおおおりゅあああああ!!!」

そのまま振り回す。

振り回している妖怪が別の妖怪達に当たって次々とダメージを与えていく。

ある程度振り回した後、龍也は掴んでいた手を放す。

掴んでいた妖怪は別の妖怪に見事命中する。

龍也はまだ戦える妖怪がいると思い構えを取るが、

「あれ？」

もう全ての妖怪が地に伏していた。

龍也は何か拍子抜けした気分になった。

再び博麗神社に向かって歩き出そうとした時、

「ッ!？」

突如足を掴まれる。

龍也は何事だと思って掴まれた部分を見る。

龍也の足を掴んでいたのは気絶していたと思われていた妖怪であった。

その妖怪は口を開く。

そこにはピンク色の光が膨れ上がっていく。

妖力で出来た光線を放つ気だ。

だが、今の龍也の体勢では防御が出来ない。

そうしている間にも妖力は膨張していく。

そして妖力が放たれようとした時、龍也は足を振り上げて妖怪の口に叩きつける。

龍也の足と放とうとしていた妖力が均衡する。

そして、

「ッ!？」

妖力が暴発する。

爆発音が響きと爆風が吹き荒れる。

龍也は腕で顔を覆いながら様子を見る。

すると、龍也に妖力を放とうとしていた妖怪の頭部は吹き飛んでいった。

完全に死んだようだ。

「ふう……油断大敵だな」

そう一息入れて、気絶している妖怪達を見る。

本来であれば、とどめを刺すべきであろう。

龍也はその心情で一歩前に出ようとしたが、

「やめた」

そう言っつて反転する。

やはり、戦う気ももう戦う力もない者に止めを刺すのは気が引ける。

それが例えどんな存在であってもだ。

甘いと言われればそれまでだが。

龍也はそれでもいいさと思いつながら、石段を上がっていく。

「到着つと」

頂上に着き、鳥居を潜って賽銭箱の近くに移動する。

そして賽銭箱の中に小銭を入れて拝む。

「あら、いらつしゃい」

すると、その様子を見ていたのか霊夢が笑顔で出迎える。

「あんただけよ、お賽銭入れてくれるのは」

「そうなのか」

そして雑談を交えながら龍也は霊夢と一緒に神社の中に入っていく。

「今お茶を入れてくるわ」

「あるがと」

そう言つて龍也は縁側でポーツとする。

たまにはこうやってポーツとするのもいいものだと思ひながら。

「はい、お茶が入ったわよ」

そう言つて霊夢がお茶を持ってくる。

差し出されたお茶を手に取りお茶を飲む。

「相変わらず美味しいな」

「ありがと」

その後、雑談を交えながらマツタリとした時間を過ごしていく。

「それじゃ、そろそろ行くかな」

「あら、もう行くの?」

「ああ」

龍也はそう言って立ち上がり体を伸ばす。

「次はどこに行くの?」

「そうだな……そう言えば神社周辺にある森の中はまだ探索したことがなかったから

そこを見て回ろうかな」

「そう。そこも一応妖怪が出るから気を付けなさい……って龍也なら大丈夫か」

「ま、一応気をつけるよ」

油断してやられたとなれば目も当てられない。

「それじゃ、またな」

「ええ、まらいらっしやい」

そして龍也は神社周辺の森の中に入っていく。

森の中に入ってしばらく経った。

何度か襲撃を受けたが龍也は問題なく撃退していった。

「しっかし、魔法の森とは雰囲気全然違うな」

この森を探索して龍也はそういった感想を抱く。

瘴気もないし、全体的に日の光が差し込んでいる。

そして珍妙な茸も存在しない。

ごくごく普通の森だと龍也は思った。

だが、

「うわああ……」

その思った事は簡単に打ち碎かれる。

何故ならば、

「藁人形が一杯とか……」

大量の藁人形が打ち込まれている木々を見てしまったからだ。

ご丁寧に藁人形の中心に呪とかかれた物が貼り付けられている。

「これ、どうしたらいいんだろうか……」

放置しておいた方がいいのか、それとも燃やしてしまったほうがいいの

龍也には判断が付かなかった。

だが、

「俺の炎のなら何とかなるのか……」

そう言っつて龍也は考える。

自分の扱っている炎のはだたの炎のではない。

朱雀の炎のだ。

風も白虎の。

地も玄武の。

水も青龍の。

どれもこれも通常のものとは異なる。

四神の力を借りているものだ。

戦闘中は気にしてはいないが、特殊な力があってもおかしくはない。

龍也はそう思っつて自身の力を変える。

朱雀の力へと。

そして瞳の色が黒から紅になる。

刺さっている藁人形を引っこ抜いて、一体一体燃やしていく。

どれだけ燃やしたかはわからないが、全部燃やし終わった後
力を消して一息つく。

その時、

「あやややや、これは龍也さん」

射命丸文が現れた。

「文じゃないか、どうしたんだ？」

「いや、もう一度現場を見ておこうと思ひまして」

「現場？」

「ここに藁人形が打ち付けられていますませんでしたか？」

「ああ、それなら燃やした」

「燃やしたんですか？」

「ああ。あのまま放置していい物が迷っただけで、とりあえず燃
やしておこうかと」

「はあー、そうでしたか」

「もしかして、まずかったか？」

「いえ、もう写真には収めていたのでいいんですけどね」

「写真？」

「ええ、打ち付けている人物の写真もありますが見ますか？」

「ああ、見せてくれ」

龍也はこれを行った人物に興味があったので見てみる事にした。

「これです」

そう言って文が写真を差し出す。

龍也はそれを受け取り写真を見る。

「うわああ……」

そこに写っていた人物は思いっきり自分の知っている人物であった。

アリスとアリスの人形。

何とも凶悪そうな顔で打ち付けている。

おまけに頭に蠟燭まで付けている。

「もしかして、アリスさんとお知り合いでしたか？」

「ああ」

「これからアリスさんの所にインタビューしに行くところですが一緒に来ますか？」

「あゝ」

色々と気になったので付いて行く事した。

そしてアリスの家に辿り着き、アリスの人形に案内される形でアリスの家に入っていく。

「あら、龍也に新聞記者じゃない。いらっしやい」

挨拶もそこそこに文は例の写真を見せた。

「あらやだ、見てたの？ だから効果が薄かったのね」

「効果？」

何やら物騒な事いいたした。

「あ、いや、何でもないわよ」

「って言うか何のためにこんな事をしたんだよ。呪いたい相手でもいたのか？」

「違うわよ。完全自立人形のためよ」

「？」

龍也は呪うための藁人形と完全自立人形がどう結ぶかはわからなかった。

「わかりやすく言うと、藁人形って釘を打ち込んだ場所と同じ場所に呪いたい相手の
同じ場所にダメージが行くでしょ。そのプロセスが分かれば完全自立人形の完成に
一歩近づけるかなと思ったのよ」

「成程」

分かり易い解説だったので龍也も楽に分かる事ができた。

「じゃあ、次は私のインタビューに答えて貰えますか？」

「いいわよ」

そして文のインタビューが始まる。

龍也は蚊帳の外になって暇を持て余していた。

するとアリスの人形が紅茶とクッキーを運んできた。

龍也はアリスの人形に礼を言って近くにあったソファアームに座って食べ始める。

そのままマツタリと過ごしていると、

「ありがとうございます」

そう言って文がアリスの家から出て行く。

どうやらインタビューは終わったようである。

「龍也はどうする？ もう暗くなってきたし泊まっていくなら今から食事を作るけど」

「あー……じゃあお言葉に甘えようかな」

「分かったわ。その代わりに……」

「ロボットの話しだろ」

「ええ。貴方の話しは色々と参考になるからね」

その日はアリス邸に泊まる事にした。

PV20万記念(前書き)

これはNARUTOとのクロスです。

四神録の時系列は不明。

NARUTOの方は第一部と第二部の間です。

基本的に本編とは一切関係ないIFストーリーです。

四神録のネタバレが若干含まれます。

以上の事を踏まえて、見てやるぜと言う方はそのままお進みください。

PV20万記念

「……ん？」

龍也は突如魔法の森の雰囲気が変わった事に気付く。

わかり易く言うのであれば、瘴気が感じられない。

普通の人間であるならば瘴気でやられてしまいが、龍也にとっては問題ではない。

ある一定レベル以上の力があれば問題ないのだ。

事実、魔理沙やアリスは魔法の森に住んでいるのだから。

その話は置いておき、龍也は周囲を見渡す。

森は森だが魔法の森ではない事がわかる。

瘴気以外にも珍妙な色や形をした草を見かけないという理由もあるのだが。

ここで留まっても仕方がないと思い、龍也は足を進める。

少し歩くと、

「ッ!？」

突如後方から殺気を感じる。

龍也は慌てて頭を下げる。

するとそこを何かが通り抜ける。

そして何かをしでかした者が龍也の前方に現れる。

音符のマークが付いた額宛を付けている。

そして手には真っ直ぐに伸びた刀を持っている。

俗に言う忍者刀と言うものである。

「いったい何のようだ？ いきなり命を狙われる覚えはないんだが」

龍也はそう尋ねる。

よく妖怪に襲われたりするがそれとは別だ。

目の前の相手からは妖怪特有の気配を感じない。

「光栄に思うがいい！！ お前は俺に殺されて大蛇丸様の実験体になるのだ！！」

目の前の男はそう言い放ち襲い掛かって来る。

龍也は放たれる斬撃を避けながら相手の動きを観察する。

攻撃の全てが自分の急所を狙ってきている。

そしてよく見ると刀の色がどす黒い。

ちよつとでも斬られるとまずいと龍也は本能的に理解する。

龍也は攻撃を避けながら自身の力を変える。

朱雀の力へと。

黒い瞳は紅い瞳になる。

そんな龍也の変化に気付かずに男は斬撃を放つ。

龍也は思いつきり踏み込んで、男の腕を自身の腕で払う。

すると斬撃はあらぬ方向に向かう。

龍也はそのまま男の後ろに抜けて、炎を剣を生み出す。

そして男の方を見ずに、男に炎の剣を突き立てる。

「がっ!?!」

炎の剣は男の背中を貫通し、胸元から飛び出る。

その時には心臓も貫通していた。

「相手の命を奪いに来たと言う事は自分の命も奪われる可能性がある
ると言う事だぜ」

龍也がそう言うと男は燃え上がる。

そしてその時を置かずに灰になる。

する、どこからともなく拍手の音が聞こえる。

龍也は音が聞こえた方に体を向ける。

そこから髪の毛の長い男が現れる。

その男を見た龍也は蛇みたいな男だと思った。

「中々見事な腕ね」

その男は龍也の事をそう褒める。

「誰だ、あんた」

「初めまして、私の名は大蛇丸」

割と簡単に教えてくれた。

「大蛇丸……さっきの奴が様付けで呼んでた奴か……」

その時なにやら実験体とか言っていたことも思い出す。

「あなたは部下の敵討ちにでも来たのかい？」

「まさか。あんなのがどうなるかと私にはどうでもいいのよ」

大蛇丸にとって龍也が倒した男の存在はどうでもいいらしい。

「青いわねえ……」

そう言いながら大蛇丸は龍也を観察する。

「やはり興味深い。印を組まずに火遁系統の術を発動した点と言い、
チャクラじゃない
エネルギー……」

「……………」

「徹底的に調べてみたいわあ……………」

目の前の相手は自分を欲している。

龍也は言動からそう判断する。

連れて行かれたらただでは済むまい。

龍也がそう思った瞬間、龍也は一旦霊力の放出をやめる。

そして消える。

次の瞬間、大蛇丸の真横に現れて炎の剣を振るう。

大蛇丸は体を屈めて回避する。

「瞬身の術……に似たような術ね」

大蛇丸は龍也の移動方法をみてそう言う。

攻撃を避けられた事を理解した龍也はすぐに蹴りを放つ。

蹴りの先からは炎が迸る。

大蛇丸はそれを後ろに跳んで回避する。

「足の裏からも炎が出せるのね。それにも印を必要としない」

「チツ……」

攻撃が全て避けられた事に龍也は舌打ちをする。

そして気付く。

大蛇丸の強さに。

向こうからはまだ攻撃を仕掛けてきてはいないが、相当強いと龍也は判断した。

それは先の攻防だけでわかった事。

そしてもう一つ問題点。

それはこの地形だ。

目の前の相手には出し惜しみが出来ない。

それを朱雀の力で行えば、山火事ならぬ森火事が発生してしまうであらう。

龍也としてもそれは避けたい。

そう思い、龍也は自身の力を変える。

朱雀の力から青龍の力へと。

それに伴い、瞳の色が紅から蒼に変わる。

それだけでは終わらない。

「はあああああああああああああああああああ……！！！！！！」

龍也は靈力を解放しながら力を解放する。

すると、龍也の髪の色が黒から蒼に染まっていく。

蒼い瞳も輝きを発していく。

大蛇丸はその変化を興味深そうに観察していく。

龍也は力の解放が終わったのと同時に靈力の解放を止める。

そして二本の水の剣を生み出す。

より深い青い色をした水の剣を。

それを見た大蛇丸は驚く。

「驚いたわ……火遁だけではなく水遁まで印を組まずに術を発動するとわね……」

大蛇丸が興味深そうにそう言うと、龍也の姿が消える。

そして大蛇丸の目の前に現れるのと同時に斬り掛かる。

「ッ!？」

大蛇丸は慌てて後ろに跳んで回避する。

先程とは比べ物にならない程の速さだったため、咄嗟の反応が遅れたのだ。

大蛇丸が龍也の方を見ると、右手の水の剣を消して大地に手を付けている。

するとそこから津波が発生し大蛇丸を襲う。

龍也は大蛇丸が津波に飲み込まれるのを見ると、再び右手に水の剣を生成する。

そして大蛇丸に向かって突っ込んでいく。

青龍の力を使っている今なら水に動きを阻害されることはない。

大蛇丸が自身の間合いに入ったのと同時に水の剣を振るう。

龍也の振るった水の剣は見事大蛇丸に当たり、大蛇丸を真っ二つにする。

その瞬間、大蛇丸の体は煙の様に消える。

「なっ!?!」

この事態に龍也は驚く。

本物の大蛇丸はどこに行ったのかと龍也は探す。

「後ろよ」

そう声が龍也の後方から聞こえた。

龍也が後ろを振り向くと、そこには腕を突き出している大蛇丸がいた。

「潜影蛇手」

すると、大蛇丸の手から無数の蛇が現れる。

そしてそれら全てが龍也に襲い掛かってくる。

龍也は後退しながら水の剣で斬り払っていく。

「中々やるわね」

「さっきのあれ、分身の術ってやつか?」

「影分身の術というのよ。知らなかったの?」

龍也は分身の術と影分身の術の違いは分からなかったが、自分の分身が作れるというのは理解した。

「それにしても……中々いい動きをするわね」

「そういつはどうも」

「でも……」

そう言うと大蛇丸から大量の蛇が出現する。

「これならどうかしら？」

そしてそれら纏めて龍也に襲い掛かってきた。

数は万を越えているであろう。

それらが一斉に襲い掛かり龍也を飲み込んでいく。

それを見て大蛇丸は終わったと思った。

後は龍也を連れて返って実験体にすればいいと。

大蛇丸がそう考えた瞬間、突如龍也に襲い掛かっていた蛇達が吹っ飛ぶ。

大蛇丸は何事だと思いきそれを見ていると、中から風の塊が出てきた。

そしてそれは大蛇丸に向かって突撃してくる。

「くっ!？」

大蛇丸は回避行動を取る。

だが、スピードと攻撃範囲が非常に大きかった。

完全には避けきれず、左腕が削り取られてしまう。

「ぐっ……」

そして大蛇丸の後ろで風の塊が止まり、風が消えていく。

そこにいたのは龍也であった。

翠の髪と、翠に輝く瞳を持ち、腕と脚に風を纏った姿。

「ふふ、まさか火遁、水遁だけではなく風遁までとはね……」

そう呟いた大蛇丸顔は驚きに満ちていた。

火遁、水遁、風遁、この三つをかなりの高レベルで扱えるという事実に。

大蛇丸は名のある上忍でもここまで出来るのはそうはいないと思っていた。

何より、龍也の若さでそれが出来ると言つ事に。

「天才……と言つ奴かしら……」

その眩きが聞こえていたのか、龍也が反応を示す。

「褒めて貰えるのは嬉しいが、どうするよ？ 左腕のないあんたと俺とじゃあ

俺の方が有利だぜ」

「あら、心配してくれるの？ 大丈夫よ」

そう言うと大蛇丸は大きく口を開ける。

何をするつもりかと龍也は見ていたが、

「なん……だと……」

驚愕する。

それも無理はない。

何故ならば、大蛇丸の口の中から大蛇丸が現れたからだ。

しかも左腕が健全な状態で。

幻想郷を歩き回り、様々な妖怪と戦ってきたが目の前の相手のようなものは始めて見た。

「てめえ……不死身か？」

「不死身……いい響きねえ……」

そう言いながら大蛇丸は言葉を紡ぐ。

「なりたいわねえ……不死身」

それを聞いた龍也は大蛇丸は不死身ではないと推察する。

ならば倒しようもあると考える。

それは、細胞を一欠けら残さず消滅させる事。

だが、それをするにしても問題はある。

先程の風を纏った突撃。

あれを避けられた。

風の範囲を増やせばいいと考えたが、それでは攻撃力が落ちる。

それでは削り取れない。

それに同じ手が二度も通用するとは思えない。

水と地での攻撃も同様だ。

どちらも相手を消滅させる技がない。

残るは朱雀……炎なのだが。

そう思って龍也は周囲を見渡す。

これまでの戦闘で森の中が破壊されたが、まだまだ木々は健在だ。

これでは森林を燃やし尽くしてしまうかもしれない。

倒した後に森全体に水を掛ければいいと考えたが、それは却下する事になった。

何故ならば、一撃で仕留め切れる自身がないからだ。

それだけ、目の前の相手は得たいが知れない。

「あら、こないの?」

龍也が考えを張り巡らせていると、大蛇丸がそう尋ねて来る。

「こないのなら、こっちからいくわよ」

大蛇丸がそう言うと、首を伸ばしてきた

「なっ!?!」

龍也は驚きつつもその場から飛び上がる。

一旦上空に逃げてやり過ぎそうと言っただ。

だが、大蛇丸の顔を更に首を伸ばして追ってきた。

そして、大蛇丸が口を開くと中から何かが飛び出してきた。

龍也は咄嗟に体の位置をずらして避けるが、

「ッ!？」

完全には避けられなかった。

腕に纏っている風を切り裂いて、龍也の腕を傷つけたのだ。

龍也の腕を斬り裂いたのは剣であった。

割とシンプルな剣に見えるが切れ味は相当な様だ。

その事を龍也は身を持って体感した。

「中々良い反応ね」

直撃しなかった事に大蛇丸が龍也を褒める。

そして何時の間にか舌が引っ込んでいる。

あの剣は再び口内に入ったのであろうか。

「それにしても……飛行術が使えるなんてね」

龍也の動きを見て空が飛べるものだと大蛇丸は推察する。

「やはり……興味深いわ……貴方」

そう言いながら大蛇丸はねっとりとした視線を龍也に送る。

その視線を見た龍也は寒気を感じる。

すると、また大蛇丸が口を開く。

また先程の剣を射出するつもりであろう。

そう思つて龍也は自身の力を変える。

白虎の力から玄武の力へと。

髪の色が茶に変わり、翠輝く瞳から茶に輝く瞳になる。

そして再び剣が射出されると同時に龍也は玄武の甲羅を生み出す。

甲羅に剣が激突し、龍也は更に上空に上がっていく。

そして剣が引つ込んだのを見計らつて、龍也は超巨大な土の塊を生み出し、

それを叩き落す。

轟音と共にそれが地面に激突する。

龍也は土の塊の上に着地して大蛇丸の位置を探る。

命中したとは思つたが、あれで終わったとは思えないからだ。

龍也のその予想は当たり、土の塊の中から大蛇丸が現れる。

「ふふふ……」

大蛇丸が不気味に笑い始める。

龍也は油断無く構えを取り、様子を見る。

「まさか、火遁、水遁、風遁に続いて土遁まで自由自在に操れるなんてね……」

「……………」

「いいわね、貴方。私は貴方の全てが欲しくなっただわ……」

「うわ……やだ、お前、気持ち悪い……」

大蛇丸の言葉を聞いて龍也はそんな言葉を漏らした。

よく、レミリアに自分のものになれと言われているが、その事に龍也は別に嫌悪感を抱いてはいない。

それはレミリアが女性と言つのがあるからであろう。

だが、同姓に自分のものとなれと言われて喜ぶ者がいるであろうか。

中にはいるかもしれないが、龍也はそれには当て嵌まらない。

つつい龍也が一步後ずさると、大蛇丸は一步前に出る。

その様子を見た龍也は早々に勝負を決めたいと思っていた。

だが、目の前の相手は早々に勝負を決めさせてくれる相手ではない。

そう思いながら、龍也は再び自身の力を朱雀に変える。

髪と瞳の色が変化したのと同時に龍也は二本の炎の剣を生み出す。

通常の炎の剣より紅い炎の剣を。

超巨大な土の塊の上にいるお陰で、全力で朱雀の力を使って戦っても森林を巻き込む事は無いであろう。

後は隙を見つけて最大火力の一撃を叩き込む。

これで消せばそれでよし。

そうでなくともダメージを与えられれば、そこから勝率が上がる。

無論、大蛇丸もその事はわかっているだろう。

そう易々と龍也の思い通りにはいくまい。

だが、しなければ勝ち目はない、

そしてお互いジリジリと間合いを詰めていく。

そして、

「あら、残念。ここまでね」

突如、乱入者が現れる。

「大蛇丸！！」

龍也は現れ乱入者に目を向ける。

乱入者は二人であった。

一人は白い髪の大柄な男。

もう一人は金色の髪をした少年。

年かさは龍也よりも下に見える。

「あら、久しぶりね。自来也」

「そうだのう、大蛇丸」

二人の間にピリピリしたものを龍也は感じた。

敵同士なのだろうか。

「よく戦っているのが私だとわかったわね」

「ふん、お前の気配を読み間違えるはずがなかつ。……今度は何を企んでいる？」

「たまには月夜の散歩もするものね。お陰で面白いものを見つける事ができたわ」

「……その小僧か」

自来也と呼ばれた人物は、龍也を見てそう答える。

「ええ、ある意味サスケ君以上の存在だわ」

その言葉に金色の髪の少年が反応する。

「大蛇丸！！ サスケはどこだ！？」

「ああ、そう言えば九尾の人柱力も一緒だったわね」

「いいから答える！！ サスケはどこだ！！」

金色の髪の少年は今にも大蛇丸に飛び掛りそうな状態だ。

「落ち着け、ナルト」

そんな状態の金色の髪の少年……ナルトを自来也が嗜める。

そして、自来也が一步前に入る。

「どのみち、ここでお前を倒せば全て片が付く……」

そう言って自来也が戦闘体勢に入る。

それに続いてナルトも戦闘体勢に入る。

「……ここで貴方達三人を相手にするには分が悪いわね」

大蛇丸はそう言いながら土の中に沈んでいく。

「ッ!! 待て!!」

「よせ、ナルト。もう間に合わん」

そう言った時にはもう大蛇丸の姿は土の中に消えていた。

そして声だけが響く。

「ふふ、また会いましょう。黒い少年」

「俺はもう二度と会いたくはねえよ」

「ふふふ、必ず貴方の全てを手に入れてみせるわ……」

そう言ったのと同時に辺りに漂っていた気配が消える。

そして、龍也に寒気が走る。

「あー、ところでお前さんは誰かのう?」

大蛇丸の気配が無くなったの同時に自来也が龍也にそう尋ねる。

一定の注意を払いながら。

「そつ言う貴方達は?」

龍也は炎の剣を消してそう尋ねる。

「ふふん、儂か?」

そう言いながら自来也は何やらポーズを取る。

「聞いて驚け！！ 僕は」

「俺はうずまきナルト。こっちは俺の師匠のエロ仙人。兄ちゃんは何？」

自来也の名乗りを遮り、ナルトがそう名乗る。

「ナルトにエロ仙人さんですね」

「え、ちょっと」

「俺は龍也。四神龍也だ」

「兄ちゃんは龍也って言うのか。で、兄ちゃんは何で大蛇丸の野郎と戦ってたんだってばよ？」

「ああ、実はな……」

そして、龍也は理由を話し始める。

龍也が恐らく違う世界から来たと言ったら、ナルトはスゲーっと言った表情だった。

自来也の方は半信半疑であったが。

それでも敵ではないと言う事は分かってもらえたようである。

ついでに自来也は自分の呼称がエロ仙人で固定された事にガツクリと肩を落としていたが。

そして話し合いの結果、龍也が元の世界に戻る日まで、ナルトと自来也の修行の旅
に付き合っことになった。

その中でナルトと手合わせしたり、自来也に手解きを受けながら。

萃夢想編 その1

「あ、その醤油取ってくれ」

「はい」

「ありがとう」

そして霊夢から手渡された醤油を焼き魚に掛けて食べる。

龍也が今何をしているかと言うと博麗神社で朝食を取っている。

と言うより、ここ最近はずっと博麗神社に泊まりこんでいる。

何故かと言うと、ここ最近三日おきに宴会があるからだ。

最初は何となくフラフラと龍也が博麗神社に来た時に、宴会があると言われて

そのまま参加。

次の日からは何故か博麗神社から移動する気がなく、そのまま居座る。

そしてまた宴会が博麗神社で開かれる。

そのまま定期的に宴会が開かれるのでそのまま博麗神社に居座っているのだ。

「しちそうさま」

龍也は食べ終わると食器を持って台所に行き、水洗いをする。

居候している立場なのでこれぐらいはしなければ悪いと思つての事である。

それが終わると少しまったりとした後に庭先の掃除。

随分平和な日々を満喫しているなど龍也は思った。

「終わったぞ」

掃除が終わると龍也はその事を霊夢に報告する。

「お疲れ様」

霊夢はお茶を飲みながらそう答える。

「いやー、あんたが来てから楽が出来ていいわー」

「あまり横着するなよ」

龍也はそう言いながら霊夢の隣に座りお茶を飲む。

本当に穏やかな日々だと龍也は思った。

「そーいや、また宴会があるんだよな？」

「ええ、今日入れて後三日でね」

「最近多いよな。いつもならこんな頻度ではやらないだろうし」

「そうよね」

そう言った後、お茶を飲んで一息付く。

「そう言えば……」

そこで霊夢が何かを思い出したように呟く。

「ん、どうした？」

「あんたが泊り込むようになってからよね。こつも宴会が続くようになったの」

「そう言われてみれば……そうなのかな」

そう言いながら龍也は思い返してみる。

確かに、自分が博麗神社に泊まる様になってから宴会が続くようになった。

「もしかして……何かした？」

霊夢は龍也を見ながらそう言う。

「まさか」

龍也はそう言いながら煎餅を齧る。

「それにこの妖力……」

「妖力？」

そう言いながら龍也は辺りを探ってみる。

「あー……確かに妖力は感じるな」

妙に薄いけどと付け加える。

「宴会に参加しているのが人間より妖怪の方が多いからかしら」

「かもねええ」

そう言いながら龍也はボンヤリ空を眺める。

「しかし、こつも宴会が続くのは異変かもね」

そう言った龍也の何気ない発言に霊夢は反応する。

「異変……」

「ん、どうした？」

「そつよ、異変よ」

そう言いながら霊夢は急に立ち上がる。

「おかしいと思ってたのよ。こんな頻度で宴会が続くなんて」

何やら霊夢は一人で考えを纏めていく。

「そうと決まれば異変解決ね」

霊夢の中で異変と確定したらしい。

そして龍也に向き直る。

「まずはあんたから倒すわ」

「え？」

何故そうなったか龍也には分からなかった。

「何故に俺？」

「何となく怪しいから」

「それだけかよ」

「いいのよ、それだけで。とりあえず、怪しい奴を片っ端から倒していけば犯人に辿り付くのよ」

「やれやれ」

そう言いながら龍也は立ち上がる。

どのみち、戦闘は避けられないと思ったからだ。

それに、霊夢とは戦った事がなかったし戦ってみたいという思いもあった。

そして場所を移動する。

霊夢はお払い棒を持って構える。

何でも最近は接近戦込みの弾幕ごっこが流行り始めたと宴会の時に言っていたので、それに乗ったようだ。

そして霊児も構える。

少しの間、その状態が続く。

先に動いたのは霊夢だ。

龍也に肉迫し、お払い棒を振るう。

龍也は後ろに跳んで回避する。

霊夢は体勢を変えて、弾幕を放ってくる。

お札の弾幕だ。

一直線に飛んできたので龍也は飛び上がって回避する。

そして今度は龍也が霊夢に向かって靈力でできた弾幕を放つ。

霊夢は後ろに跳んで回避する。

それを見た龍也は、その場所から霊夢に向かって飛び蹴りを放つ。勢いよく突っ込んで行ったのだが、霊夢は一步下がったため回避された。

霊夢は龍也が次の攻撃を放つ前にお払い棒を突き出す。

龍也は咄嗟に顔を傾けて回避する。

お払い棒が突き出されたままなので、その隙を逃さず龍也は蹴りを放つ。

霊夢は龍也が蹴りを放つたのと同時に後ろに跳んで回避する。

僅かに当たったようだが、それほどダメージを与えたわけではないようだ。

龍也は肘打ちを放って間合いを詰め、そのまま連撃を放つ。

霊夢はそれらの攻撃をうまい具合に避けていく。

龍也はこう言った対人戦では弾幕ごっこが多いため、接近戦の心得が霊夢にはないと
思っていたがそうではなかったと思わせられる。

そして勢いを付けた裏拳を放つと、

「ッ!？」

裏拳が弾かれる。

霊夢の前方に障壁が現れ、龍也の裏拳を弾いたのだ。

それで体勢の崩れた龍也に向かって霊夢がその場でサマーソルトを放つ。

「がっ!？」

それは見事龍也の顎に命中する。

霊夢は無防備になった龍也に向かって連続で攻撃を放とうとする。

龍也はこのままでは連撃を喰らうと思い、サマーソルトで体が浮いた勢いを利用してバク転をして間合いを取る。

間合いが取れると龍也は霊夢に掌を向けて霊力でできたレーザーを放つ。

簡易版の霊流波だ。

霊夢はそれを避けずに障壁で防御する。

それを見た龍也は駆けて接近戦に持ち込もうとする。

駆けて来た龍也の姿を見て、お払い棒を構える霊夢。

そして龍也が霊夢の間合いに入ろうとした瞬間に龍也の姿が消える。

霊夢はどこに言ったのかと探していると、すぐに見つかる。

龍也が上空から落下しながら踵落しを放とつとしている。

霊夢はその踵落しをお払い棒で受け止める。

「ッ!？」

予想以上の重さに霊夢は驚く。

そして龍也もお払い棒の頑丈さに驚く。

てっきり押し折れると思っていたからだ。

そのままの状態がしばらく続く。

霊夢はお払い棒を振り払って龍也を弾き飛ばす。

龍也は空中で回転しながら着地する。

また間合いが放たれたなと龍也は思った。

龍也がそう思っていると、霊夢が何かを射出する。

龍也は体を反らしながら何だと思って飛んできたものを見る。

それは針であった。

危ないなと思って霊夢の方を見ると、今度は大量のお札が飛来してきていた。

龍也は飛び上がって回避し、両手を向けて霊夢に大量の弾幕を放つ。霊夢はそれをうまい具合に避けながら弾幕を放ってくる。

それを見た龍也は、弾幕ごっこについてはやはり向こうの方が一日の長があるなと思った。

そして暫く通常の弾幕ごっこが始まる。

お互い何発か直撃したり、掠りはしたがまだまだ戦闘続行可能だ。

このままでは埒が開かないと思ったのか、霊夢がスペルカードを取り出す。

「霊符『夢想妙珠』」

そしてスペルカードが発動する。

霊夢から七色に光る弾が射出される。

そしてそれらが龍也に向かって次々と向かっていく。

龍也は急降下し、大地を駆けながら回避していく。

だが、

「ッ!?!」

何発かはもう目の前に来ていた。

龍也は避けられないと思い、両腕を交差させて防御の体勢を取る。

そして着弾する。

龍也は歯を喰いしばって耐える。

着弾が終わり、霊夢の様子を見ると再び七色に光る弾が射出された。

今から回避行動を取っても間に合わないと思い、再びその状態を維持する。

そしてまた歯を喰いしばって耐える。

また様子を見ると再び射出された。

また防御しながら、龍也はこのままではジリ貧だと考える。

何とか突破口を見つけなければ、ジワジワと削り取られてしまう。

そう思いながら霊夢の様子を見て隙を探す。

すると、あることに気付く。

あの弾は立て続けに放たれるのではなく、ある程度のインターバルがある。

ならばそれを付けばいい。

そしてこの状態を打破できるスペルカードが龍也にはある。

勝負は弾が着弾し終わってからだ。

そう思い龍也はより防御の体勢を固める。

そして腕から衝撃が伝わる。

だが、今は耐える。

これが終わるまで。

そして着弾が終わると同時に龍也はスペルカードを二枚取り出す。

「鉄壁『玄武の甲羅』」

まず一枚目を発動する。

発動すると、目の前に玄武の甲羅が出現する。

それと同時に龍也の瞳の色も黒から茶に変わる。

そしてそれを盾に霊夢に向かって突き進む。

霊夢の放った弾が玄武の甲羅に直撃するが何のその。

傷一つ付くこともなかった。

龍也はそのまま突っ込んでいく、霊夢に玄武の甲羅を激突させ吹き飛ばす。

あの技を発動している最中は無防備であると龍也は睨んだのだが、当たっていたようだ。

そして玄武の甲羅を破棄して右手を霊夢に向けて二枚目のスペルカードを発動する。

「霊撃『霊流波』」

龍也の右手から青白い閃光が迸る。

それはそのまま霊夢に向かって進んで行く。

吹き飛ばされている最中なので、霊夢は防御も回避もできずに、青白い閃光に飲み込まれる。

「あーあ、負けちゃった」

「ま、無実の罪でボコられる訳にもいかないしな」

龍也はそう言いながら体を伸ばす。

「それに、霊夢だって俺が犯人とは思ってなかったんだろ」

だから、何が何でも勝ってやるといふ気迫が感じられなかったと龍也は付け加える。

「まあね。怪しいとは思ってたけど犯人だとは思ってなかったわね。充滿しているのは妖力だし。龍也が扱ってるのは私と同じで霊力でしょ」

「ああ、そうだ」

「後は騒がしいのが好きな魔理沙も怪しいけど……」

「魔理沙が使ってるのは魔力だろ」

「そうよねえ……」

中々答えが出ない。

「一番怪しいの紫なんだけどね。胡散臭いし」

「それには同意する」

紫の顔を思い浮かべながら龍也はそう言う。

色々と掴み所がないせいが一番怪しく感じる。

「でもどこに居るのか分からないのよねえ」

そして二人揃って溜息を付く。

「どの道これは異変なのかな」

龍也もこんな頻度で宴会が続くのも怪しいとってたので、異変と
言う事しよう
と思った。

今までの異変に比べれば何とも平和なものであるが。

「ま、俺は俺で調べてみるよ」

龍也はそう言う。

宴会続きで財布の中の消費が激しくなったからだ。

龍也としてもこの異変は早めに終わらせたい。

「そ、なら私も私で調べてみるわ」

その発言を受けて、霊夢もそう言う。

霊夢は霊夢で独自に調べるつもりのようなのだ。

そして二人揃って空中に浮かび上がる。

そして別れて飛んでいった。

龍也が目指すのは紅魔館。

パチュリーならこの妖力について何か知っていると思ったし、知ってなくても本を調べさせてもらえばいいと考えたからだ。

萃夢想編 その2

霧の湖上空。

龍也はそこを通りながら紅魔館を目指している。

移動しながら龍也は妙だなと思った。

異変の時であれば妖精がいやと言うほど現れて弾幕を放ってくる。

だと言うのに今は妖精の襲撃がない。

これを見て龍也は異変でないのかなと思う。

もしかしたら異変の危険度が低いから出てこないだけかもしれないが。

襲撃一つ無い平和な道中である。

しばらくすると湖の端まで来た事に気付いた龍也は着地し、紅魔館まで

歩いて行く事にする。

少し歩けば紅魔館が見えてくる。

龍也はそのまま近づいて行く。

すると美鈴の姿が見えたので声を掛ける。

「美鈴」

声を掛けるが反応がない。

「美鈴？」

もう一度声を掛けるが、やはり反応がない。

龍也が気になって美鈴の顔を覗き込む。

「……寝てやがる」

そう、美鈴は寝ていた。

確かに、今日はいいい天気で暖かい。

眠りたくなる気持ちも分からなくはない。

でも門番としてはどうなのだろうと龍也は思った。

何はともあれ、無段で入るのはあれなので起こすことにした。

「美鈴」

そう声を掛けて肩を揺するが一向に起きる気配がない。

もう一度声を掛けて揺するが同じであった。

龍也は肩を揺するのをやめて大きく息を吸い込む。

そして、

「美鈴!!!!!!」

大きな声で美鈴の名前を呼ぶ。

「ひゃい!?!」

これにはキチンと反応できたようで、美鈴は飛び起きる。

そして辺りをキョロキョロ見回して龍也の存在に気付く。

「あ、何だ、龍也さんじゃないですか。脅かさないでくださいよー」

近くに居たのが龍也だと知って美鈴は安心する。

「てか、門番が居眠りとか拙いんじゃないか?」

「ち、違いますよー。寝ていたのではなく瞑想していただけです」

「……ま、そう言う事にしておくか」

「そ、それで本日はどのような用件ですか?」

「ああ、パチユリーに話があるんだ」

「パチユリー様にですか?」

「ああ」

「分かりました」

そう言っつて美鈴は門を開ける。

「あ、それと先程の件は咲夜さんには御内密に……」

「はは、分かってるよ」

そう言いながら龍也は紅魔館の扉まで進んで行く。

庭の景色を見ながら龍也は相変わらず広いなと思った。

そして扉まで半分くらい進んだ時に、

「あら、いらっしやい」

咲夜が現れた。

「よ」

現れた咲夜に龍也は挨拶を返す。

咲夜の神出鬼没にはもうなれたものである。

「今日は何の用？」

「パチユリーに用があるんだ」

「パチユリー様に？」

すると咲夜は少し驚いた顔になる。

「ああ、神社近辺にある妖力についてパチュリーなら何か知ってるかもと思つてさ。」

「知らなかったとしてもあれだけ本があるんだ。何か手掛かりがあるんじゃないかと思つてさ。」

「成程」

それを聞いて咲夜は納得した顔になる。

「そう言えば咲夜はどこかに出掛けるのか？」

「ええ、出かけようと思つたら貴方が居たので声を掛けたの」

「へー。もしかして咲夜も宴会続きの原因を探ろうとしていたのか？」

「ええ。でも手間が省けたわ」

「どう言う事だ？」

「貴方に用があつたからよ」

「俺に？」

「ええ。貴方が博麗神社に居座るようになってから宴会が三日おきに行われるようになった。」

「まず貴方を疑うのは当然じゃない？」

「……成程」

確かに、自分は疑われる要素があるなと龍也は思った。

霊夢に続いて咲夜にまで疑われたとなればそう思わざるを得ない。

「俺はやってないと言っても変わらないんだろ？」

「ええ、そうね」

「ま、幻想郷ではいきなり戦いを挑まれるのは日常茶飯事だしな」

龍也はそう言いながら後ろに跳んで間合いを取る。

「と言っても、俺が怪しいと言うだけで戦いを挑んできたんじゃないんだろ？」

「ええ。ついでに何時ぞやのリベンジもしておきたいしね」

そう言いながら咲夜はナイフを取り出す。

「はたして、そう上手くいくかな？ 俺はあの時よりずっと強くなつたつもりだぜ」

「あら、それは私もよ」

戦いが始まりそうになって、龍也はある事を確認する。

「と、ルールは接近戦有りの弾幕ごっこでいいのか？」

「ええ」

その返事を聞いた後、龍也は構えを取る。

少し静寂が流れた後、先に動いたのは龍也。

まずは牽制の意味合いも籠めて軽めの弾幕を放つ。

咲夜は避ける事なく、正面から突っ込んできた。

龍也の放った弾幕を体を避けながら。

咲夜が弾幕をすり抜けているように見えるがそれは違う。

体を必要最低限に傾けているのだ。

だから見ようによってはすり抜けているように見える。

「ハッ！！」

龍也が咲夜の間合いに入ると、咲夜はナイフを振るう。

龍也は一步後ろに下がって回避する。

そして龍也は間髪入れずに、咲夜に向かって肘打ちを放つ。

咲夜は大きく後ろに跳んで回避する。

その中で龍也に向かってナイフを投げつける。

龍也は上空に飛んでナイフから逃れる。

咲夜は地上からナイフを龍也目掛けて投げると、自身も空中に躍り出る。

龍也が地上からナイフが飛んできたので避けると。その先のは咲夜がいた。

咲夜が蹴りを放ってきたので龍也は咄嗟に腕で防御する。

その蹴りで龍也は少し吹き飛ばされてしまう。

龍也は追撃が来ると思って身構えるが、咲夜は構えたままで動かない。

その事を不審に思っていると、龍也は後ろから何かが近づいてくるのを感じる。

龍也は後ろを振り返りながら腕を振るう。

すると腕にはナイフが当たる。

どうして後ろからナイフかと龍也は思った。

そしてある事に気付く。

咲夜が最初に投げたナイフ。

あれが反射してきたのではないかと言う事に。

そして咲夜の方を振り向いたときにもうすでに距離を詰めていた。

斬り掛かってきたので、龍也は咲夜の手首を掴んで受け止める。

咲夜はもう一本の腕でも斬り掛かろうとしてきたので、龍也ももう一本の手で

手首を掴んで受け止める。

そしてそのまま力比べになる。

「く……」

少しずつ咲夜が押され始める。

純粹な力勝負では龍也には敵わない様だ。

それを理解した咲夜は龍也の胴体に蹴りを放つ。

「ぐっ!？」

龍也は思わずよろめいて掴んでいた手を放してしまふ。

咲夜はその隙を逃さず、龍也の頭部に踵落しを放つ。

龍也はそれをモロに喰らって地面に向けて落下していく。

だが、落下しきる前に何とか体勢を立て直し、回転して着地する。

咲夜も龍也の後を追うようにして、龍也から少し離れた位置に着地

する。

そして咲夜が龍也に向かってナイフを一直線に投げつける。

龍也は姿勢をギリギリまで低くしながら咲夜に向かって突っ込んでいく。

幸い、咲夜の投げたナイフは龍也の背中のギリギリ上を通過していった。

咲夜が自身の間合いに入ると、龍也は咲夜に蹴りを放つ。

咲夜はそれを腕で防御する。

龍也はそのまま蹴りを振り切って咲夜を蹴り飛ばす。

咲夜は龍也から距離が取れた事を好機と思い、吹き飛ばされながらナイフを放つ。

龍也は地面を転がりながら回避していく。

そして龍也が体勢を立て直し、立ち上がった時には咲夜がすでにナイフを展開していた。

龍也がそれを見て回避行動を取ろうとした瞬間に、一斉にナイフが射出される。

龍也はもう回避は不可能と判断し、弾幕を放って迎撃する事にする。

弾幕はナイフと激突すると爆発し、ナイフをあらゆる方向に飛ばす。

その様子を見ていた咲夜はこのままでは埒が開かないと判断する。

そして何かを取り出す。

スペルカードだ。

「幻符『殺人ドール』」

そしてスペルカードが発動する。

すると咲夜を中心に無数のナイフが全方位に飛んで行く。

かなりのスピードで。

龍也は慌てて自分の所に飛んで来たのを回避する。

そして龍也は疑問に思う。

なぜ、自分にだけではなく全方位に飛ばしたのかと。

その疑問はすぐに氷解する事となる。

「なっ!?!」

様々な方向に飛んでいったナイフが、全て龍也に向かって戻ってきたからだ。

何とか体をずらして避けていくが、それも限界になる。

龍也は直撃するよりマシだと思って腕を盾にする。

腕に刺さるであろうナイフの痛みに耐えるように龍也は歯を喰いし
ばるが、

「あれ？」

ナイフは刺さらずに、当たったら地面に落ちていった。

その事に疑問を覚えたが、すぐにいつだったか咲夜に聞いた事を思
い出す。

弾幕ごっこでは過失や不可抗力などを除いて、殺生はご法度だと言
う事を。

なので咲夜は弾幕ごっここの時はナイフを靈力でコーティングして刺
さらないように
しているのだとか。

その事を思い出して龍也が安堵していると、第二波がやってくる。

思考に耽っていたお陰で回避が間に合わなくなり、腕を交差して防
御の体勢を取る。

いくら刺さらないと言ってもダメージはある。

このままでは龍也の体力が削がれる一方だ。

何とか突破口を見つけようと攻撃を耐えながら咲夜の様子を観察す

る。

するとある事に気付く。

ナイフを射出している間は無防備であると。

だが、どうやって攻撃を当てるかが問題だ。

ナイフを射出した瞬間に近づいても、ナイフが全弾当たるだけ。

攻撃をする以前に龍也がダメージを受けるだけだ。

ならば、ここから動かずにナイフを射出した瞬間にダメージを与えればいい。

龍也はそう思ってスペルカードを取り出す。

幸い、咲夜はナイフを射出する直前のようだ。

これならばギリギリ間に合うであろう。

「咆哮『白虎の雄叫び』」

そして、スペルカードを発動する。

「なっ!?!」

これには咲夜も驚く。

自分の周りに超小型の竜巻が発生する。

ここまでがいい。

だが、それに自分が射出したナイフが当たるとあらぬ方向へ飛んで行くのだ。

そして射出したうちの何本かは咲夜に命中する。

無防備な状態だったため、まともに喰らってしまっ。

更には龍也が翠色の弾幕を放つ。

それも竜巻にあたるとあらぬ方向へ飛んで行く。

こうなった以上、咲夜はスペルカードの発動を止めて回避に専念するしかない。

だが、思うように避けれない。

竜巻で動きを阻害されるといふのもあるが、一番の問題は弾幕の軌道が読めない事。

竜巻に当たった弾幕はどこに飛んで行くかわからないためである。

そうやって咲夜が回避に専念していると、突如竜巻が消える。

スペルカードの発動が終わったのかと思い、咲夜が龍也の姿を探そうとすると、

「ッ!？」

龍也は目の前にいた。

手にはスペルカードを持っている。

「霊撃『霊流波』」

スペルカードが発動する。

その瞬間、龍也の手から青白い閃光が迸り、咲夜を飲み込む。

「俺の勝ちだな」

「そうね。それにしても接近戦込みの弾幕ごっこはまだ慣れないものね」

「これから少しずつ慣れていけばいいんじゃないか？」

「それもそうね」

咲夜はそう言いながら立ち上がる。

「そう言えばパチュリー様の所に行くのよね。案内無しで行ける？」

「ここからだつたら迷わずに行けそうだよ」

「そう、なら私はそろそろ行くわ」

「犯人探しか？」

「ええ、とりあえず怪しそうな所からね」

龍也は幻想郷では怪しい奴を片っ端から倒していくのが当たり前なのかと思った。

そう思っている間に、咲夜はすでに移動していた。

龍也は気持ちを切り替えて扉を開け、紅魔館の中に入っていく。

萃夢想編 その3

紅魔館の紅い廊下を歩きながら龍也は図書館を目指す。

相変わらず紅いなと龍也は思いながら近くにいたメイド妖精を見つめる。

何やら仕事をしているようである。

少しはマシになっているのかなと龍也は思った。

が、すぐに飽きたようで何やら遊び始めた。

まだまだ咲夜の苦勞は抜けそうにはないようである。

そう思っていると図書館の入り口に辿り付く。

扉を開けて図書館の中に入って行く。

図書館の中に入り、中を歩いて行くとパチュリーの姿を発見する。

「お」

「あら、いらっしやい」

パチュリーは読んでいた本から目を外し、龍也に目を向ける。

「また本でも読みに来たの？」

「いや、今日はパチュリーに聞きたい事があってきたんだ」

「私に？」

「ああ、博麗神社周辺にあるあの妖力。パチュリーなら何か知っているかもって思ってたさ」

「ああ、あれね」

「知ってるのか？」

「ええ。私の憶測の混じるけどいい？」

「ああ、頼むよ」

「あれ自体には直接的な害はない。ただ、無意識のうちにみなを集めると言う効力があるの」

「無意識のうちに？」

「ええ。だからこつとも定期的に博麗神社に行つて宴会を開く事になった」

「誰が犯人かは分かるか？」

「そこまではまだ」

「そっか」

結構な収穫はあった。

ここに来てよかったと思う。

「漂っているのは妖力だから妖怪、若しくは妖力を扱う者を当たっていけばいいんじゃないかしら？」

「情報ありがとう」

パチュリーの話を聞いて龍也は今後の行動方針を固めていく。

「ああ、それと気を付けた方がいいわよ。貴方が博麗神社に寝泊りするようになってからこの妖力が発生したみたいだし、龍也が犯人だと言って襲い掛かってくる者もいると思うわよ」

「もう、襲われたよ」

「それはご愁傷様」

そう言ってる割にはあまり同情はしていないようである。

「あ、それと話は変わるけど接近戦込みの弾幕ごっこっていつから流行り出したか分かるか？」

ついでなので気になった事をパチュリーに尋ねてみる。

「何時からかは分からないけど、流行り出した原因は貴方よ」

「え、俺？」

自分を指差しながら龍也は驚く。

まさか自分が原因とは思ってなかったからだ。

「えっと確かこの辺に……」

そう言いながらパチュリーは何かを探し始める。

「あ、あつたあつた」

そして見つけた物を龍也に手渡す。

龍也は何かと思って手に取る。

「これは”文々。新聞”？」

パチュリーが手渡してきたのは”文々。新聞”であった。

龍也は何が書かれているんだろうと思いつつ内容に目を通していく。

そこに書かれていたのは

「俺の記事？」

龍也の記事であった。

内容は以前にインタビューを受けた時のとは違う。

その新聞には炎の剣で妖怪を倒している龍也の写真が張った。結構アップで。

別の新聞にも似た様な写真が張られていた。

両手に纏った水の爪で妖怪を倒す龍也の写真。

土の拳で妖怪を倒す龍也の写真。

腕と脚に纏った風で妖怪を倒す龍也の写真。

いつこんな写真を取られたのだろう。

龍也には見に覚えがなかった。

まあ隠し撮りでもされたのであろう。

「それは少し前に外来人特集と言う特集が組まれていて、貴方の内容がメインの記事ね」

パチュリーが簡単に新聞の内容を教えてくれる。

「その記事を見た者が感化されて接近戦込みの弾幕ごっこをやり始めたら広まった
と言った感じかしら。特に炎の剣なんて写真映えするからね」

どつやら自分に原因があったようだ。

「まさか俺が原因とはね……」

そう呟きながら新聞をパチユリーに返す。

「やっぱり接近戦用のスペルカードを作ったほうがいいかな」

そう言いながら龍也は考える。

今あるのは通常の弾幕ごっこ用のスペルカードだ。

もっと言うならば遠距離用のスペルカード。

接近戦でも使えない事はないが、少々使い勝手が悪い。

「やっぱり、作ろう」

そう言って龍也はパチユリーに向き直る。

「と、言う訳で手伝って」

「え？」

「頼むよ」

そう言って龍也は両手を合わせる。

「一人で作れないの？」

「作れない事もないと思うけど一人で作ると失敗しそうで……」

前に作った時は幽香に付きっ切りで手伝ってもらったなと思い出しながら龍也はそう言う。

「そう難しい事はないと思うんだけど……」

パチュリーは少し考えるとある事を思いつく。

「本の整理を手伝ってくれるならスペルカードを作るのを手伝ってあげるわ」

「分かった。それでいいよ」

「ならさっさと作りましょ」

「あー、終わった」

龍也が首を回したりしながらそう言う。

時間が掛かったとはいえ、前に作ったときよりは早くに終わった。

作ったスペルカードは五枚。

龍也が近いうちに試そうと思っていると、

「いらっしやい、龍也」

「レミリア」

レミリアがいた。

「何をやっていたの？」

「スペルカードを作ってたんだ」

「スペルカードを？」

「ああ、接近戦用のな」

「成程」

それを聞いてレミリアは納得する。

レミリアも接近戦込みの弾幕ごっこが流行っているのは知っているようだ。

「なら、私で試してみない？」

「レミリアで？」

「ええ。龍也もそのテストをしたいでしょう？」

レミリアにそう言われて龍也はパチュリーの方を見る。

スペルカードを作り終わったらパチュリーの本の整理を手伝う約束だったからだ。

「別にいいわよ。それが終わったら手伝ってね」

パチュリーがそう言ったのでいいかなと龍也は思い、場所を移動する。

そして少しは暴れても問題が無い場所まで来る。

「それじゃ、行くわよ」

レミリアはそう言いながら龍也に向かって突っ込んでくる。

自身の爪で引き裂こうとする。

龍也は一歩前に出て、振るってきた腕を自身の腕で押さえる。

そしてレミリアの胴体に蹴りを放つ。

レミリアは後ろに跳んでダメージを大幅に軽減する。

「それじゃ、まずは私から行くわよ」

そう言いながらレミリアはスペルカードを取り出す。

「必殺『ハートブレイク』」

そしてスペルカードが発動する。

レミリアの手に真紅の槍が現れる。

それを見た龍也は投げつけて来る物だと直感的に思い、体を屈める。

その瞬間に龍也の背中の上を真紅の槍が通過する。

もの凄いスピードだ。

そう思いながら龍也は地を蹴って駆ける。

駆けながら龍也はスペルカードを取り出し発動する。

「炎爆『爆発する剣の軌跡』」

スペルカードを発動すると龍也の瞳は紅くなり、手には炎の大剣が

現れる。

それを両手で持ち、一閃。

だが、レミリアも咄嗟に反応して飛び上がる。

直撃は避ける。

だが、次の瞬間

「ッ!？」

炎の大剣が通った場所が爆発が起きる。

レミリアは爆発に巻き込まれて龍也から少し距離を取る。

「炎の大剣による一閃と剣の軌跡の爆発の二段構えか。中々良いスペルカードね」

そう感想を漏らしながらレミリアは弾幕を放つ。

龍也も迎え撃つように弾幕を放つ。

お互が放った弾幕が相殺されると、レミリアは己がスピードを活かした突撃を行う。

相殺した時の煙の中から現れたレミリアの龍也は反応が間に合わず、吹き飛んでしまう。

レミリアは倒れている龍也に追撃を掛けようと、もう一度突撃を行う。

それを感じ取った龍也は立ち上がると同時にスペルカードを取り出し発動する。

「風拳『零距离突風』」

龍也の瞳の色が翠になると同時に拳を下か斜め上に放つ。

調度突撃してきたレミリアの胴体に当たる。

そしてその瞬間、龍也の拳から突風が放たれ、レミリアは吹き飛ばされる。

吹き飛ばされたレミリアが落下し始めると龍也は飛び上がる。

レミリアは落下している最中に体勢を立て直し着地する。

そして龍也の方を見ると、龍也は飛び蹴りを放ってきていた。

それを見ながらレミリアはスペルカードを取り出す。

「紅符『不夜城レッド』」

そしてスペルカードを発動する。

レミリアを中心に巨大な紅いエネルギー状の十字架が出現する。

調度レミリアに突っ込んでいた龍也には避け様が無く、直撃を喰ら

ってしまっ。

そして龍也は上空に吹き飛ばされてしまっ。

レミリアは追い討ちを掛けようと思っ、羽を羽ばたかせて飛び上がる。

吹き飛ばされながらレミリアが自分に向かって来ている事を認識した龍也は

無理やり体勢を立て直してスペルカードを取り出す。

「拳脚『巨人の拳に巨人の脚』」

そしてスペルカードを発動する。

龍也の瞳の色が茶に変わると同時に右手から土が生まれ、それが巨大な拳となる。

そしてそれをレミリアに向かって振り下ろす。

レミリアは体を反らして回避する。

次の瞬間、今度は下から巨大な脚が蹴り上げられる。

レミリアは急上昇をして避ける。

すると今度は巨大な拳がレミリアを打ち払おうと側面から襲い掛かってきた。

避けるタイミングを見失ったレミリアは腕で防御する。

大きさに違わずにそれ相応の重さである事に若干歯を喰いしぼる。すると急に土で出来た拳がレミリアから離れる。

その事をレミリアが疑問に思うと同時に、今度は逆側から衝撃が走る。

そちらを見ると、土で出来た脚があった。

レミリアは吹き飛ばされながらあれで蹴られたんだなと認識する。

体勢を立て直すと弾幕が迫って来ていた。

レミリアは慌てた様子も無く、余裕の表情で回避していく。

そして、弾幕の中を突っ込みながらレミリアは龍也に向かっていく。

龍也はあの弾幕の中を抜けて来たことに驚くも、すぐに構えを取る。

レミリアが振るってきた爪を避け、拳を放つ。

レミリアはそれを腕で払って蹴りを放つ。

龍也は腕で防御し、同じように蹴りを放つ。

レミリアはそれを掌で受け止め、羽で龍也の顎を攻撃する。

龍也はそれに反応できずに喰らってしまう。

レミリアは無防備になった龍也の胴体に蹴りを放って、地上に落下させる。

龍也が地面に落下してバウンドしたのを見届けると、レミリアは龍也に向かつて急降下する。

起き上がりながらそれを見た龍也はスペルカードを取り出す。

「霊撃『霊散波』」

そしてスペルカードを発動する。

龍也の掌から広範囲の霊力が放出される。

霊流波とは違って高威力、長射程ではなく、広範囲、短射程のものである。

レミリアはそれに気付いて急ブレーキを掛ける。

幸い射程距離が短かったため、当たる事はなかった。

霊散波の発動が終わると、レミリアは再び龍也に向かつて突っ込んでいく。

だが、その時には龍也は新たなスペルカードを取り出していた。

「龍爪『龍の爪』」

そしてスペルカードが発動する。

龍也の瞳が蒼くなるとの同時に両手に水を纏わせる。

そしてその水で出来た爪で、まず右手を左斜め上に向けて振るう。
次に左手を右斜め上に向けて振るう。

最後は相手を引き裂くように両手を元に位置に戻すように振るう。
放った斬撃はしばらくその位置に現れているというおまけ付きだ。

それを受けたレミリアは吹っ飛んで行く。

「と、大丈夫か？」

そう言いながら龍也はレミリアに近づく。

今更ながら、吸血鬼の弱点が流水であると思いついたかだ。

「うー、まさか最後に水を使ってくるとは……」

「立てるか？」

そう言いながら龍也はレミリアに手を差し出す。

「ええ、大丈夫よ」

レミリアは龍也の手を取って立ち上がる。

「思ったより大丈夫そう良かったよ」

「まあ水と言ってもスペルカードだからね。そこまで影響はないわよ」

そう言いながらレミリアは服を叩いて埃を落とす。

弾幕ごっこに付随して生まれたスペルカードなら当然と言えば当然である。

「やっぱり貴方が欲しいわ。ねえ、私の物にならない？」

レミリアは色っぽく龍也にそう言う。

「前にも言ったる、断る」

「あら、残念」

少しの間雑談をした後、龍也はパチュリーの居る場所まで戻る。

そして約束通り本の整理を手伝う。

本の整理をしていると途中でフランドールが遊んどって現れたため、後半はあまり作業が捗らなかったが。

そしてその日は紅魔館に泊まる事になった。

萃夢想編 その4

「ん……」

龍也は目を擦りながら目を覚ます。

紅魔館に泊まった事を思い出しながら、龍也はベッドから抜け出す。

そして椅子に掛け経った学ランを羽織って部屋を出る。

廊下を歩いていると、

「おはよう」

挨拶を掛けられる。

振り返ると咲夜がいた。

「おはよう」

龍也も挨拶を返す。

「戻ってきてたんだな」

「ええ、夜のうちにね」

紅魔館での仕事もあるしねと咲夜は付け加える。

「今日も行くのか？」

「ええ、一通り掃除などをした後だね」

中々のハードスケジュールのようだ。

「それで、朝ご飯食べてく？」

咲夜がそう言うと龍也は急に空腹感を感じる。

そう言えば、昨日は図書館で手伝いを始めてから何も食べてないな
と言う事を
思い出した。

「そうだな、食べていくよ」

「それなら、和食、洋食、中華の何がいいかしら？」

「洋食」

「分かったわ。それじゃ、付いて来て」

そして龍也は咲夜の後を付いて行く。

少し歩くと大きな扉の前に辿り付く。

その扉を咲夜が開ける。

その中は食堂。

前にも来た事がある場所だ。

「どこか適当な場所に座っていて」

そして龍也が椅子に座ると、テーブルの上に料理が現れる。

咲夜が時間を止めて料理を作ったのだろう。

龍也はそう思いながら料理を食べていく。

そして、

「じちそうさま」

食べ終わるとテーブルの上から食器が消える。

「出口まで案内は必要かしら？」

「いや、大丈夫だ」

龍也はそう言って立ち上がり、食堂を出る。

そして紅魔館の廊下を歩く。

出入口の扉の前に着くと、扉を開けて外に出る。

「んー……」

日光を浴びながら龍也は体を伸ばす。

そして今日はどこに行くか考える。

とりあえず、妖怪連中に片っ端から会えばいいかと考える。

そう考えていくと、

「お、龍也じゃないか」

上空から声が掛かる。

声が聞こえてきたほうを見ると魔理沙が近づいて来ていた。

そして龍也の目の前で着地する。

「よ」

龍也は片手を上げて挨拶をする。

「何やってたんだ、こんな所で？」

「ああ、昨日は紅魔館に泊まっていたんだ」

「へー」

「魔理沙は？」

「私か？ 私は図書館で調べ物だな」

魔理沙が紅魔館に来た理由は調べ物のようだ。

「調べ物……博麗神社に漂っている妖力の事か？」

「おう、その通りだぜ」

魔理沙はそう言いながら、龍也から間合いを取る。

「だが、その前に龍也を倒す事になるかな」

魔理沙がそう言った事に疑問を覚えるが、龍也はすぐに合点が行く。

「……成程、お前も俺が怪しいと」

つい昨日にパチュリーに言われた事だ。

自分が一番怪しいと言う事を。

「その通り。怪しい奴を倒していけばそのうち犯人に当たるはずだ
ぜ」

またかと龍也は思いながら構えを取る。

まあ、自分が博麗神社に泊まり始めてからこうなったので疑われても仕方が無いと
言えば仕方が無い。

とりあえず犯人を見つけたらボコボコにする事を決めるのと同時に、
魔理沙と戦うの
も初めてだなと龍也は思った。

それなら、案外犯人扱いされるのも悪くないかなと龍也は思った。

「こないなら、こつちからいくぜ!!」

そして開始の合図と言わんばかりに魔理沙が星型の弾幕を放ってくる。

小手調べの意味合いもあるのか、弾幕の密度は薄い。

龍也は魔理沙に突き進みながら弾幕を避けていく。

そして魔理沙が龍也の間合いに入ると、龍也は拳を放つ。

魔理沙は後ろに跳んで回避する。

それを見た龍也は握っていた拳を開いて弾幕を放つ。

魔理沙は放たれた弾幕を的確に避けていく。

その間に龍也は再び魔理沙に近づき拳を放つ。

魔理沙は避けきれないと判断したのか、目の前に障壁を発生させて防御する。

龍也は障壁が現れた事に驚くも、そのまま連撃を放って障壁を破壊しようとする。

すると、

「げ!?!」

障壁が破壊される。

その衝撃で体勢が崩れたのを龍也は見逃さず、右ストレートを放つ。魔理沙は慌てて箒を盾にする。

龍也の放った右ストレートは箒に命中し、魔理沙は吹っ飛んで行く。

「頑丈な箒だな……」

押し折れるどころか輝一つ入らなかった箒に龍也は驚きの声を出す。すると、

「ん？」

上から何かが落ちてくるのが見えた。

龍也がそれをよく見てみる。

「フラスコ？」

それはフラスコであった。

そのフラスコが地面に落ちると、

「な!？」

爆発を起こす。

龍也は咄嗟に両腕を交差して防御する。

爆煙が晴れると、

「ッ!？」

今度は両腕に衝撃が走る。

衝撃が走った方を見ると、魔理沙が箒に乗って突撃を仕掛けていた。

仮に防御の体勢を解いていたら直撃を受けていたであろう。

そう言う意味では自分は運がいいと龍也は思った。

「りゃあ!！」

龍也が勢いよく防御の体勢を解くと、魔理沙は吹き飛ばされる。

だが、うまい具合に回転して魔理沙は着地する。

「さっきのフラスコ投げたのお前だろ？」

「そっだぜ」

一体何時の間の投げたのであろう。

「とゆうーか、あれ何なんだ？」

「私特製の魔法薬。中々威力があっただろ」

魔理沙が笑顔でそう言う。

あの顔つきからするに、まだまだ似た様な物を持っている可能性がある。

そう思いながら龍也がジリジリと魔理沙に近づいて行く。

それを見た魔理沙は龍也に向かって弾幕を放つ。

龍也は避けながら魔理沙に近づこうとするが、

「ちっ！！」

近づけなかった。

弾幕は放射状に広がっており、魔理沙に近づけば近づくほど密度が高くなる。

どうやら接近戦は不利と考えて、龍也を近づけまいとしているようだ。

龍也は間合いを取りながら弾幕を放っていくが、中々決定打にならない。

そう思った龍也は飛び上がって、霊力でできた弾を掌から生み出す。

そしてそれを、魔理沙の近くに投げつける。

それが地面に着弾すると、爆発する。

すると、弾幕が止む。

龍也はこれを好機と思い、上空から魔理沙に向かって一気に突っ込む。

魔理沙まであと少しと行った所で、爆煙の中から何かが光る。

龍也は咄嗟に体を傾ける。

すると、何かが龍也の顔を掠る。

その発射した何かの衝撃で煙が晴れる。

そこには龍也に向けて掌を翳している魔理沙がいた。

龍也はそこからレーザーの様な物を発射したのだろうと考える。

すると再び魔理沙の掌に光が集まる。

そして第二射が発射される。

龍也はこれ以上近づくのは無理と判断し、発射されたレーザーを避けながら

着地する。

すると、魔理沙はそれを見計らったようにスペルカードを取り出す。

「魔符『スターダストレヴァリエ』」

そしてスペルカードが発動する。

魔理沙が箒に跨り、回転しながら龍也に向かって突っ込んでくる。

咄嗟の事に龍也は反応できずに直撃を受けてしまう。

「ぐっ!？」

そこから少し吹き飛ばされ、立ち上がると、魔理沙は再び突っ込んでくる。

龍也はそれを地面を転がりながら回避する。

また立ち上がると、魔理沙は再び突っ込んできた。

このままではジリ貧であろう。

まずはあれを止める必要がある。

そう思って龍也はスペルカードを取り出す。

そしてタイミングを計る。

魔理沙が自分にギリギリ近づいた所で、

「風拳『零距离突風』」

スペルカードを発動する。

龍也の放った拳を箒の先端に当たる。

そして龍也の瞳の色が翠に変わったと同時に拳から突風が放たれる。

魔理沙は突風で、龍也は突撃してきた衝撃で吹っ飛ぶ。

そしてお互いの距離が離れる。

幸い、受けたダメージはそれ程大きくなり、二人と立ち上がる。

そして同時にスペルカードを取り出す。

「霊撃『霊流波』」

「恋符『マスタースパーク』」

同時にスペルカードが発動する。

互いから放たれた霊流波とマスタースパークは激突する。

均衡すると思われたそれは、少しずつ龍也の放った霊流波が押され始めた。

「ぐ……」

どうも、スピードの方は霊流波の方が上の様だが、パワーはマスタースパークの方が上の様である。

真っ向勝負では霊流波の方が分が悪い。

もう少し互いの距離が近ければ結果は違っていたであろう。

龍也も何とか踏ん張ってはいるが、完全に押され始めている。

このままでは直撃を受けると思い、龍也は霊流波の発動を止め、その場から離れる。

龍也が霊流波を止めるのと同時に魔理沙の放ったマスタースパークが一気に進行する。

幸い、ギリギリの所で直撃を避ける事が出来た。

龍也はマスタースパークの横を走りながら魔理沙に向かっていく。

それに気付いた魔理沙はマスタースパークをずらして龍也に当てようとする。

その事に気付いた龍也は飛び上がって回避する。

魔理沙は龍也の後を追うようにマスタースパークを上方に向けて。

すると龍也の姿が消える。

魔理沙がどこに行ったのか探していると、

「ここだぜ」

魔理沙のすぐ近くから声がする。

魔理沙が下を見ると、龍也が屈んだ状態でそこにいた。

場所が場所だけにマスタースパークを当てる事ができない。

更には龍也の手にはスペルカードが握られている。

魔理沙が焦ったときにはもう遅く、

「炎爆『爆発する剣の軌跡』」

スペルカードが発動される。

龍也の瞳の色が紅に変わると、右手に炎の大剣が現れる。

龍也はそれを両手で掴み一閃。

そして剣の軌跡が爆発を起こす。

魔理沙はその爆破に当てられて舞い上がり、落下する。

「あー、くそ、負けたー」

魔理沙は帽子に付いてた埃を落としながらそう愚痴る。

「俺は無実の罪でボコられるのは勘弁したいしな」

「龍也が犯人じゃないとすると、誰だ？ レミリアか？」

「レミリアではなさそうだったな。レミリアだったら宴会会場をここにするだろうしな」

「それもそうだな」

魔理沙が埃を落とした帽子を被りながらそう言う。

「それじゃ、私は図書館に行ってくるぜ」

「ああ、わかった」

そして魔理沙は紅魔館の中に入って行く。

「さて。俺も行くか」

どこに行くかは勘を頼りにするかと思いつながら。

「大丈夫か？」

紅魔館の門に行くとは何か門が破壊されていて、美鈴が倒れていた。

「うー……何とか」

このままほっとくのも寝覚めが悪いので、龍也は美鈴の介抱をしてから

出発することにした。

萃夢想編 その5

紅魔館から出て暫らく。

龍也は空中を歩きながら次の目的地をどうするか考えていた。

どこに行けば手がかりが得られるのかわからない。

今回の異変は危険性のない異変だができるだけ早いうちに解決したいと

言うのが龍也の本音だ。

そう考えながら歩いていると、

「あら、龍也じゃない」

前方から声が掛かる。

龍也は顔を声を掛けられた方へ向ける。

「アリス」

そこに居たのはアリスであった。

「どこに行くんだ？」

「私？ 私は紅魔館に向かうところよ」

「紅魔館に？」

「ええ、調べ物がしたいからね」

「調べ物……博麗神社に漂っているあの妖力か？」

「正解。と、すると龍也も？」

「ああ」

龍也はそう言いながらアリスから距離を取る。

「？ どうしたの？」

「いや、あの妖力の事を調べている奴等の殆どに戦いを挑まれたかな。犯人扱いされて」

「ああ、成程」

龍也がそう言うつとアリスは納得したといった感じになる。

「安心しなさい。別に私は貴方が犯人だとは思ってないから」

「ホントか？」

「ホントよ。第一、博麗神社に漂っているのは妖力でしょ。龍也が扱ってるのは霊力。」

これだけでも龍也を犯人から除外する理由になるわ。まあ、妖力を集める術式がない

事はないけど……そう言った術式知ってる？」

アリスがそう尋ねると龍也は首を横に振る。

やっぱりねと言いながらアリスは自分の考えを述べていく。

「確かに、貴方が博麗神社に居座るようになってからあの宴会は続いたけど、それだけじゃねえ。みんな単純なんだから」

そう言ってアリスはクスリと笑う。

「そう言えば貴方を犯人扱いしたのって誰？」

「霊夢に咲夜に魔理沙だ」

「霊夢と魔理沙は兎も角、あそこのメイド長もだとは……」

アリスは意外だと言った表情になる。

「まあ、咲夜の場合は俺へのリベンジも含まれていた様だけだな」

「リベンジ？」

そう言ってアリスは首を傾げる。

「ああ。前に発生した紅い霧の事を覚えているか？」

「ええ、覚えているわ。あそこの主が犯人だったんでしょ？」

「ああ。で、その時俺は紅魔館に乗り込んで咲夜と戦ったんだ」

そう言つて龍也はその時の事を思い出す。

よく生きてたなと思つた。

「で、その時は俺が勝つたからそのリベンジをしたかつたみたいなんだ」

「成程ね」

「そーいや、アリスは図書館で何を調べるつもりなんだ？」

「私はこの妖力の効果と妖力を集める術式について調べたいの」

「術式の方は知らないが、効果の方ならパチュリーから聞いたぞ」

「本当？」

「ああ。あの妖力自体に害はないが、様々の者を集める効果があるらしいぞ」

「へー」

それを聞いて、アリスは考えを纏めていく。

「……ありがとう。お陰で調べる内容が減つたわ」

「どづいたしまして。まあ、パチュリーにそれを聞いたのは昨日だから、

あれから更に進展があつたかもしれないわ」

「分かったわ。図書館の方に行ったらパチュリーに聞いてみるわ」
そう言っただけでアリスは移動しようとしたが、急に止まる。

「あ、そうそう」

「ん？」

「龍也はこれからどこに行こうとしてたの？」

そして思い出したかの様に龍也に尋ねる。

「それを悩んでいな」

龍也はそう言いながら頭を掻く。

「パチュリーからは妖怪や妖力を扱う者を調べてみる的なアドバイスを受けたんだが、どうしたものかなど。一番怪しいのは紫なんだがどこにいるか分からなくてな」

「そうね」

アリスは顎に手をあてて考える。

「冥界の方に行ってみたらどうかしら？」

「冥界」

「ええ。たしかあそこの庭師は妖力を扱っていたはずよ。それと亡霊姫は隙間妖怪と親友らしいじゃない」

「ああ」

そう言われて龍也は思い出す。

幽々子と紫が親友同士である事を。

妖夢は妖力を扱ってたことを。

半霊の方は霊力だったが。

「ありがとう」

「どういたしまして。それじゃ、頑張ってるね」

「ああ、アリスの方もな」

アリスの姿を見送った後、龍也は冥界へ向かっていく。

巨大な門を越え、冥界の地に足を着ける。

もしかしたら、この道中に犯人がいるかもしれないと思ったからだ。
だが、見かけるのは人魂や亡霊やら。

犯人らしいものは見かけない。

先に進めば分かるであろうかと言う思いで龍也は先に進んで行く。

「あれ、龍也さん」

「妖夢」

すると妖夢が現れる。

「どうしたんだ、こんな所で？」

「それはどちらかと言うと私の台詞なんですけどね。まあ、いいです」

そして妖夢は長刀を……楼観剣を抜き放つ。

「宴会続きの件、一番怪しいは龍也さんですからね」

「やっぱそうなるか」

そう呟きながら龍也は構えを取る。

自分が犯人ではないにしろ、疑われる要因はある。

なら、受けて立つだけだ。

「龍也さんが犯人かどうかは、斬ってみれば分かります!!」

「それ、意味合いが違くないか？」

龍也がそう言ったのと同時に妖夢が肉迫してくる。

そして、龍也が自身の間合いに入ると楼観剣を振るう。

龍也は後ろに大きく跳んで回避する。

そして、また妖夢から近づいてくる。

龍也は構えを取って様子を見る。

龍也が妖夢の間合いに入ると、妖夢は楼観剣を振るう。

剣筋は下から上へ。

龍也の上体狙いだ。

龍也は体勢を低くして回避する。

そして妖夢の顎目掛けて掌打を放つ。

妖夢は龍也の胴体に蹴りを放ち、その反動で後ろに下がる。

蹴りを受けた龍也は蹴り飛ばされる。

だが、ただで飛ばされはしない。

飛ばされている最中に妖夢に向かって弾幕を放つ。

それを見た妖夢は短刀……白楼剣を抜き、それで弾幕を斬り落とすていく。

だが、距離が距離であったため全部を斬り落とせなかった。

何発か喰らってしまった。

龍也はその間に体勢を建て直し、妖夢に接近戦を仕掛ける。

妖夢はそれを避けたり、白楼剣の腹で防御していく。

そんな攻防をしばらく続ける。

「だあー!!」

「くっ!!」

そして一際重い一撃が襲い掛かる。

妖夢は何とか白楼剣で防御するが、吹き飛ばされてしまう。

妖夢が体勢を立て直し、龍也の姿を見ると再び近づいて来ていた。

それを見た妖夢は、白楼剣を鞘に収めてスペルカードを取り出す。

「人符『現世斬』」

そしてスペルカードが発動する。

スペルカードの発動を感じ取った龍也は咄嗟に体を反らす。

すると、剣の軌跡が現れ龍也を吹き飛ばす。

「ぐっ!?!」

龍也は吹き飛ばされ、地面を転がるもすぐに地面に片手を突けて体勢を立て直す。

かなりのスピードだと龍也は思った。

これが弾幕ごっこでなければ、かなりの致命傷を負ったであろう。

妖夢が再び体を屈める。

龍也はまた同じ技が来ると思い、飛び上がる。

龍也の予想は当たり、龍也の眼下の剣の軌跡が現れる。

そして妖夢のいる位置を確認しながら着地する。

技を発動する前に妖夢を潰すのがセオリーだが、距離が離れすぎて
いる。

これでは潰す前に技が放たれて喰らってしまう。

ならば、

「真っ向から潰すだけだ」

そう言いながら龍也はスペルカードを取り出す。

そして、妖夢が再び技を放ってきたタイミングを見計らって、

「炎爆『爆発する剣の軌跡』」

スペルカードを発動する。

龍也の瞳が紅に変わると同時に、右手に炎の大剣が現れる。

それを両手で掴み、一閃。

そして爆発。

「ぐっ!？」

「くっ!？」

その爆発の影響で互いの距離が離れる。

そして炎の大剣が消え、瞳の色が黒に戻った龍也を見て妖夢が尋ねる。

「先程から気になってたのですが、何で以前の様に炎の剣を使わないんですか？」

「いや、俺の炎の剣って俺の能力で生み出してるものだろ。だからスペルカード以外で使ったらルール違反になるんじゃないかと思ってさ」

「ならないと思いますよ」

「え？」

「私の能力は” 剣術を扱う程度の能力” ですし、魔理沙は” 魔法を扱う程度の能力” 。

これは普段の弾幕ごっこでも、接近戦込みの弾幕ごっこでも普通に使ってますし」

「……………」

そう言われればそうだなと龍也は思った。

そもそもスペルカードは必殺技を封じ込めた物だと幽香が言ってい

た。

ならば、通常技として扱うぐらいなら問題ないのである。

この辺は個人個人の匙加減だろう。

龍也はそう思いながら自身の力を変える。

朱雀の力へと。

瞳の色が黒から紅に変わる。

そして両手に二本の炎の剣が生み出される。

それを確認した龍也は出力を最低限まで抑える。

出力を最低まで抑えれば弾幕ごっここのルールには反しないであろう。

「それじゃ、第二ラウンド始めるか」

妖夢に炎の剣の一本を突きつけてそう言う

「そうですね」

妖夢は何か毒気が抜かれたような顔をしながらそう言う。

そして、お互い同時に駆ける。

互いの得物を振りかぶりながら中間地点で激突する。

そして互いに弾かれるように間合いを離し、再び駆ける。

今度は互いに弾かれず、その場で剣撃の応酬が始まる。

二本の剣を操っている龍也が有利かと思われたが、妖夢も負けてはいない。

手数少なさをスピードでカバーしている。

よくあの長刀であるスピードが出せるものである。

そう思いながら龍也は炎の剣を振るう。

そして炎の剣と楼観剣が激突し、龍也と妖夢は立ち位置を変える。

互いに間合いを調節しながら様子を見る。

そして、

「しっ！！」

龍也は炎の剣を振るう。

剣先からは爆炎が迸る。

妖夢は僅かに体を反らして回避し、スペルカードを取り出す。

「断命剣『冥想斬』」

そしてスペルカードが発動する。

楼観剣は緑色の光を纏い、刀の長さが増える。

それを見て龍也は以前に炎の大剣ごと斬られたことを思い出す。

あれをスペルカードにしたのだろう。

ならばと龍也は思いながら、炎の剣の上に構えながら妖夢に向かって突き進む。

そして、楼観剣が振り下ろされる。

「ぐうー！」

両足が地面にめり込む。

渾身の力を籠めて受け止めたが、堪えるだけで精一杯だ。

威力がある程度は軽減されると思い、鏝に近い部分で受けたと言うのに
これである。

妖夢は再び楼観剣を振り上げる。

第二撃を放つつもりだ。

龍也はめり込んだ足をそこから抜いて再び妖夢に近づく。

そして、

「この距離なら。刀は振れないだろう？」

互いの鼻が触れ合いそうな位置に来る。

「ッ!？」

そして妖夢も気付く。

この位置では楼観剣を振っても当たるのは刃ではなく己が腕。

ダメージはそれ程期待できないであろう。

妖夢が間合いを取ろうと思った時には、龍也の手にはスペルカードが握られていた。

「この距離なら剣より拳の方が早い」

そして、

「龍爪『龍の爪』」

スペルカードが発動する。

龍也の瞳の色が蒼になると同時に、両手に水が纏われる。

そして妖夢は、右手、左手の順で斬り上げられ、両手で斬り落とされる。

「うー、負けました」

「ま、今回は俺の勝ちだな」

「それで、龍也さんはどこに行っつとっていたのですか？」

「白玉楼にな」

「白玉楼にですか？」

「幽々子に会いにな」

「幽々子様にですか？」

「ああ。幽々子なら紫の居場所を知っているんじゃないかと思っ
た。あいつが

一番怪しいし」

「まあ、確かに紫様が一番怪しいですが……」

そう言いながら妖夢は悩む。

「まあ、犯人じゃなくても犯人を知ってそうだしな」

「そうですね……紫様なら」

そう言って妖夢は納得する。

「妖夢はどうする？」

「私ですか？　そうですね……怪しい輩を片っ端から当たっていき
ます」

なんとも妖夢らしい回答だと龍也は思った。

「それじゃ、またな」

「ええ、また」

妖夢の後姿を見送った後、龍也も白玉楼に向けて足を進める。

萃夢想編 その6

妖夢と一戦してから少し。

龍也は冥界の空を飛びながら白玉楼を目指していた。

最初の頃は冥界を歩きながら白玉楼を目指していた。

何故ならば、歩きながら犯人を探していたからだ。

何故それをやめたかと言うと、全然犯人らしい奴がいなかったからだ。

このまま歩いて行っても時間の無駄だと判断し、空から行く事にした。

空中では障害物などもなく、一直線に行く事ができる。

この分なら後少しで白玉桜に着くなと龍也が思っていると、

「あれ、龍也だ」

目の前に誰かが現れる。

「ちょ!?!」

龍也は目の前に急に誰かが現れたため急ブレーキを掛ける。

だが、間に合わず、

「え？」

激突してしまう。

そしてそのまま二人揃って墜落してしまう。

落下している最中に龍也は何と体勢を立て直し、一緒に墜落している者を抱きとめて着地する。

ホッと一息吐き、抱きとめている者を確認する。

「メルラン？」

「やっほー」

抱きとめていた者はメルランであった。

龍也はメルランを離して話を聞く事にする。

「何だって俺の目の前に現れたんだ？」

「龍也の姿が見えたから挨拶しようと思って」

それで目の前に出て来たとの事。

龍也が危ないマネするなと思っていると、

「メルランに……龍也じゃないか」

「なになに、見つめ合って。ラブロマンス?」

ルナサとリリカが現れる。

「ちげーよ」

龍也はそう言っただけで事情を説明する。

「移動している人の目の前に現れない」

そう言っただけでルナサがメルランの頭を軽く叩く。

「あいた」

「なーんだ、ラブロマンスじゃなかったのか」

この二人を見ていると、龍也はルナサが苦労人のよな気がした。

「お前等はここで何してんだ?」

「私達は練習中だよ」

「練習って言うと……ライブのか?」

「そうそう。ほら、ここずっと宴会続きじゃん。そろそろ曲もマンネリ気味になった

かなと思ってさ。だからここらで新曲をね」

宴会をやっていけばプリズムリバー三姉妹は何時の間にか現れ、ラ

イブを始める。

騒霊だから騒がしい宴会が好きなのだろうか。

「そうそう、この宴会続きは多分明日で最後だぜ」

「え、そうなの」

「ああ。上手くいけば明日にはこの異変は解決するだろうかからな」

「この宴会続きって異変だったの？」

「ああ、そうだ」

「と言う事は龍也は異変解決？」

「そうなるな。俺以外にも色々と動いている奴も多いけどな」

そう龍也が言うと、プリズムリバー三姉妹は感心する。

「龍也の他には誰が動いてるんだい？」

「俺が確認したのは霊夢に咲夜にパチュリーに魔理沙にアリスに妖夢かな」

レミリアは何かに気付いてる様子であったが、特には動いてはいない。

咲夜に任せているのだろうか。

「はー、みんな色々動いてるんだ」

「因みに龍也はどこに向かっているの？」

「白玉楼だな」

「白玉楼？」

「ああ。幽々子なら何か手掛かりを持っていそうだからな」

「ふーん」

「あ、そうだ」

リリカが何か思いついた顔になる。

「景気づけに一曲どう？」

そしてそう提案する。

「そうだな……なら一曲頼むよ」

折角なので好意は受け取っておくことにした。

「オッケー！！ それでは、プリズムリバー楽団の演奏会が始まるよー！！」

そして、演奏が始まった。

その曲は不思議と元気が出てくる曲だ。

「到着つと」

白玉楼の門の前に着いた龍也はそう漏らす。

思っていたより早く着いたのはプリズムリバー三姉妹のライブを聞いたから
だろうか。

いつもよりも元気が出ていたので、無意識のうちにペースを上げて

いたのだろう。

門を開けて龍也は中に入っていく、幽々子を探す。

すると、縁側でお茶を飲んでいる幽々子を発見する。

「幽々子」

「あら、龍也じゃない。いらっしやい」

幽々子は笑顔で龍也に挨拶をする。

「紫、知らないか？」

「紫？」

「ああ」

「どこにいるかは知らないわね」

「そうか……」

どつやら当てが外れたようだ。

「どうしてそんな事を聞いたの？」

「紫なら神社に漂っている妖力の事を知っているんじゃないかと思
つてさ」

「ああ、あれね」

そう言つて幽々子は納得がいったと言つ顔になる。

「若しかして、幽々子は何か知ってるのか？」

「そうね……」

そう言いながら幽々子は立ち上がる。

「腹ごなしの運動に付き合ってくれたら教えてあげる」

「分かった」

そう言つて龍也は構えを取る。

対して幽々子は自然体だ。

だが、隙が全く感じられなかった。

かと言つてこのままの状態を続けても時間が過ぎるだけだ。

そして龍也から仕掛ける事にした。

幽々子に近づき拳を振るう。

幽々子は慌てずに龍也の腕を掴んで投げ飛ばす。

「なっ!?!」

龍也は空中に投げ出されたが、回転して着地する。

幽々子の方は笑顔を絶やさずに龍也の様子を伺っている。

それを見ながら、龍也は再び幽々子に近づいて行く。

そしてまた拳を振るう。

だが、今度は当てる気はなく寸止めをする。

そして間髪入れずに反対の方向から蹴りを放つ。

今度こそ当たると思われたが、

「ッ!？」

何時の間にか幽々子が持っていた扇子で受け止められ、救い上げられる。

そして体勢を崩した龍也のお腹に幽々子が掌を当てる。

すると、

「がつ!？」

龍也は面白いように吹き飛んで行く。

地面に倒れこむも直ぐに起き上がる。

そしてお腹を押さえながら龍也は考える。

今、何をされたかと。

霊力か何かで吹き飛ばされたのだろつと推察する。

そう思つて再び突撃する。

今度は攻撃せずに幽々子の目の前で消える。

そして上空から飛び蹴りを放つ。

それに対して幽々子は後ろに下がって回避する。

龍也はそのまま連撃を叩き込む。

だが、その攻撃を幽々子は全て避けていく。

幽々子の動きは舞を思わせる。

攻撃している最中、龍也はその動きに魅せられていた。

そしてある程度回避を続けると、幽々子は両手に扇子を持って龍也に近づき、

回転して攻撃を加える。

「がつ!?!」

調度懐に入られた龍也に防御する手段はなく、まともに喰らつて吹き飛ばされてしまつ。

地面を転がって行くも起き上がりながらブレーキを掛ける。

幽々子は龍也から少し離れた場所で佇んでいる。

今までの攻防で分かった事は、幽々子の動きは舞を思わせる物。

カウンターが得意という二つだ。

ならば弾幕の方はどうだろうと思って龍也は幽々子に向かって弾幕を放つ。

龍也の放った弾幕を優雅な動きで避ける幽々子。

そして掌から蝶の形をした弾幕を生み出してそれを龍也に向けて放つ。

弾幕も得意そうだなと思い、龍也はその弾幕に正面から突っ込む。

様子見程度の物だったのか、隙間が多々ある。

龍也はそこに体を滑り込ませながら幽々子に近づく。

弾幕を放った直後なら攻撃が通ると思っただからだ。

龍也は幽々子に肉迫し、拳を放つ。

「残念」

幽々子は龍也の腕を掴み、振るった拳の勢いを利用して投げ飛ばす。

今度は体勢を立て直したり、受身を取ることが出来ずに地面に叩きつけられる。

「着眼点は良かったけれどね」

龍也は起き上がり、幽々子から間合いを取って構える。

今度は掌に靈力の弾を生み出し、龍也は再び幽々子に肉迫する。

そして幽々子まであと少しと言った所で龍也は掌の弾を地面に向けて投げつける。

そして土煙が発生する。

龍也と幽々子は互いの姿を視認できなくなる。

その間に龍也は幽々子の背後に回りこむ。

そして攻撃を放つ。

幽々子は攻撃が来るのが分かっているように体を反らす。

龍也は幽々子の横を通過し、

「がつ!?!」

扇子による一撃を叩き込まれる。

「後ろから攻撃すると言うのは良かったけど、亡霊の私からすれば生きている貴方の

気配は読みやすいのよ」

そう言いながら幽々子は龍也の様子を伺う。

それなりに強い攻撃を加えたが、龍也はまだまだ戦えそうだと。

そして目の強さを少し衰えていない。

そんな龍也の様子に感心していると、龍也は再び突撃する。

そして再び拳が放たれる。

幽々子はまたカウンターを掛け様と龍也の腕を掴もうとしたが、

「ッ!？」

逆に幽々子の腕が龍也の腕に掴まれてしまう。

そして、龍也は幽々子の自分の方に引き寄せながら、もう一本の腕で拳を放つ。

その拳が幽々子顔面スレスレで止まる。

「……………どうだ？」

「お見事」

そしてお互い離れる。

「それはそうと最後の寸止め。あれを優しさとするべきか甘さとする

るべきか……」

「倒さなきゃならない奴なら俺も容赦はしないさ」

そう言った龍也の瞳に揺らぎはなかった。

今の言動は本当の事であろうと幽々子は思った。

「なあ、聞いていいか？」

「何をかしら？」

「何で俺に稽古を付ける様なマネをしたんだ？」

今回の一戦は龍也にとってそう感じた。

全部を全部マスターしたとは言えないが、カウンター及びその対
処を

幽々子は龍也に教えてくれたようであった。

何故そんなマネをしたのが龍也には分からなかった。

「ふふ、頑張ってる男の子は応援したくなるのよ」

そう言って幽々子は扇子で口元を隠す。

「……それだけか？」

「それだけよ」

何かを隠しているようではあるが、紫の様な胡散臭さは感じられなかったため

龍也はそれ以上追求しないでおく事にした。

「それはそうと、神社に漂っている妖力の事を教えてくれないか？」

「いいわよ」

「犯人が誰かは分かるか？」

「誰か……までは分からないけど、どこにいるかは分かるわ」

「どこにいるんだ？」

「博麗神社」

「神社に？」

「ええ。灯台下暗しといったところね」

「暫らく神社に泊まってたけど、俺と霊夢以外に誰かいたかな……」

「普通は気付かないわね。非常に薄くなってるから」

そんな幽々子の話を聞いて、龍也は神社に向かおうとしたが、

「待ちなさい」

幽々子に呼び止められる。

「行くなら明日にきなさい。もう暗くなってきたいるし、大分消耗してるでしょ」

そう言われると確かに龍也は疲労感を感じた。

「宴会は始まるのは明日の夜。なら、明日の宴会が始まる前に終わらせればいいんじゃない？」

「……分かった。そうさせてもらおうよ」

龍也は少し考えてそう言う。

「妖夢が帰ってきたら晩ご飯にしましょう」

そう言って幽々子は屋敷の中に入っていく。

龍也もその後が続くように屋敷の中に入っていく。

深夜。

龍也も妖夢も眠った時間。

幽々子は縁側で涼んでいた。

「いるんでしょう？」 紫

幽々子がそう言つと隙間が現れ、

「こんばんは」

そこから紫が現れる。

そして幽々子の隣に座る。

「今回の異変、一枚噛んでる？」

「私は噛んでないわ。犯人は私の友人」

「友人？」

「昔、話した事がなかったかしら？」

そう言われて幽々子は昔を思い出す。

「……犯人は鬼？」

「正解」

「龍也を少し鍛えてくれと言つたのもその鬼と少し関係しているのかしら？」

幽々子はこの異変が始まった頃に龍也が自分を訪ねてきたら龍也を少し鍛えてくれと紫に頼まれていた。

紫の頼みであったし、幽々子も龍也の事は気に入っていたので快く了承した。

「ま、友人の願いを少し叶えてあげようと思ってね。性格上、霊夢や魔理沙、咲夜より龍也の方が良かったのよ」

そう言いながら紫はどこから取り出したお茶を飲む。

「それはそうと、龍也の成長スピードはどう？」

「かなり速いわね。会うたびに強くなってる。そして戦っている最中にも強くなっている」

「そう」

「あの成長速度、紫は何か知ってるの？」

「いえ。唯、幽香曰く龍也の本能は戦う事と強くなる事を望んでいるから……らしいわ」

「そう……」

そして幽々子もお茶を飲む。

そのまま幽々子と紫はマッタリとした時間を過ごす。

萃夢想編 その7

「ん……」

龍也が目を覚まし、布団の中から出る。

部屋の中を見渡して白玉桜に泊まったんだなと思い出す。

龍也は部屋を出て廊下を歩き、幽々子と妖夢を探す。

「おはよう」

居間の前を通りかかると挨拶をされる。

そっちを振り返ると、幽々子がいた。

「おはよう」

龍也も挨拶を返して居間の中に入っていく。

「どう、よく眠れた？」

「ああ、お陰様でな」

そう言って龍也は幽々子の対面の位置に座る。

「もう少ししたら朝ご飯が出来ると思うから食べて行きなさい」

腹が減っては何とやらと言つたと龍也は思い、

「わかった。ごちそうになるよ」

幽々子の言葉に甘えることにした。

幽々子と雑談をしながらチラリと廊下を見る。

そこには人魂が色々と動いている。

「そう言えば冥界って当たり前だけど幽霊とかが多いな」

「そうね、何処も飽和状態だから冥界に留まるしかないのよ」

「えーと……」

龍也は今一よく分からないと言った感じだ。

「分かり易く言っなら、天国も地獄も定員オーバーなのよ」

「……何と言っか……何だな」

「で、行き場の無い霊が溢れかえないように前に冥界を拡張をしたのよ」

「へー」

「若しかしたら貴方も死んだ時にはそのまま冥界に留まることになるかもね」

「そうなのか？」

「そうね……生きてる者も霊も増え続けてるからね。そうなる可能性は高いわ」

あまり知りたくないあの世事情を知った気がした。

「その時はここで雇って上げましょうか？」

「そうだな……死んでここに来た時に返事をさせて貰うよ」

龍也がそう言ったところで襖が開き、妖夢と多数の人魂が現れた。

「幽々子様、朝食をお持ちしました」

「あら、」苦労様

幽々子がそう言ったところで妖夢は龍也の存在に気付く。

「あ、龍也さん。おはようございます」

「ああ、おはよう」

そう挨拶したところで、料理がテーブルの上に並べられていく。

「……前に泊まった時にも思ったんだが、よく食べれるな」

龍也は幽々子の前に並べられている料理を目にして、そう漏らす。

量は龍也のざっと数倍以上。

龍也自身、普通よりは食べる方だと思っではいるが、あれはどつだろつと思つ。

「あら、これぐらい普通じゃない?」

幽々子はキョトンとした顔でそう返す。

そんな幽々子の顔を見ながら、龍也は妖夢の方を見る。

妖夢は苦笑いをしていた。

「ほら、冷めないうちに食べてしまいましょう」

「そうだな」

妖夢が席に着いたのを確認してからそれぞれ食べ始める。

食卓に並んでいるのは和食。

この屋敷は基本和なので別に不思議はない。

「美味しいな」

「ありがとうございます」

そんなやり取りをしながら龍也は箸を進めていくと、

「妖夢、お代わり」

幽々子はお代わりを求めてきた。

龍也の量はまだ半分以上残っている。

早過ぎはしないであろうか。

「は、はい。只今」

妖夢は幽々子から食器を受け取り、「ご飯などをよそっていく。

「……ほんと、早いな」

「そう？　龍也は男の子なんだからこれぐらいできないの？」

「やろうと思えばできると思うが……確実に喉に詰るな」

「いえ、こんなに早く食べるのは幽々子様だけで十分ですよ」

「あら、それはどついう意味かしら？」

「あ、いえ。別に深い意味はありません」

そんなこんなで食事は進んで行く。

「……ご馳走様」

そして食事が終わり、食器などが片付けられていく。

それを見て、龍也は手伝おつかと言ったが、妖夢からお客様なんだから

別にいいですよと言われた。

そしてまた幽々子と二人つきりになる。

「それで、もう行くつもり？」

「ああ、妖夢に挨拶してから行くつもりだ」

この異変の元凶がいるのは博麗神社らしい。

目指すべきはそこだ。

「そう……油断しないようにね」

「分かってるさ。前に油断と慢心が原因で妖夢にやられたしな。同じ轍は踏まないさ」

あの敗北は、実力差よりも油断と慢心の方が大きかった。

龍也としても同じ過ちを繰り返す気は無い。

相手がどんな奴であれ、油断無く挑むつもりである。

「食器洗い、終わりました」

そして妖夢が帰ってくる。

「あら、いいタイミングね」

「え、何がですか？」

「そろそろ出ようと思ったから、その前に妖夢に挨拶をしておこうと思ってるな」

「あ、そんな気を使わなくて……」

そう言っつて妖夢は何かに気付く。

「もしかして、あの宴会続きの件ですか？」

「ああ、その解決のために出ようと思ってるな」

「あ、それでしたら私も……」

妖夢もこの件については調べていたので、一緒に付いて行くつもり。

「あら、だめよ。まだ庭掃除と屋敷の掃除が残ってるでしょ」

「あつ……そうでした」

幽々子にそう言われて妖夢はがっくりと肩を落とす。

「あ、龍也さん。気を付けてくださいね」

「ああ、分かってるよ」

そして龍也は白玉桜から出て行く。

「あ、龍也だ」

声を掛けられたので龍也は止まり、声の発生源を探す。

「こっちだよ」

すると、龍也の右隣に誰かが現れる。

「リリカか」

そこに居たのはリリカであった。

「何やってたんだ、こんな所で？」

「私達はこれから家に帰るところだよ」

「私達？」

リリカしかいないと思ったら、後ろからルナサとメルランがやってきた。

「あ、龍也だ。やつほー」

「昨日ぶりだね」

「よし」

メルランとルナサも龍也とリリカの近くにやってくる。

「昨日からずっと練習していたのか？」

「うん、そうだよ」

何とも練習熱心な事である。

「いい感じに仕上がって来たから、家に帰ろうとしていたら龍也を見つけたんだ」

「龍也はどこに行こうとしてたの？」

「勿論、異変解決にだ」

「と、言う事は犯人のいる場所の目星は付いているのかい？」

「ああ、これから犯人を倒しに行くところ」

「なら今日で宴会は最後かな？」

「多分な。異変解決の宴会やったら何時も通りのペースに戻るだろ」

「そっか。それじゃ、また宴会の時にねー」

「私達はこっちだから」

「異変解決頑張ってるねー」

リリカ、ルナサ、メルランがそれぞれそう言って去っていった。

その姿を見送りながら、龍也は拳を握る。

龍也としては、ああ言ってしまった以上、もう勝つしかないだろう。

自分の言った言葉を嘘にしないためにも。

そう決意を新たにし、龍也は再び博麗神社を目指して飛んで行く。

博麗神社が眼下に見える所までくる。

「よっと」

そして龍也は博麗神社に降り立つ。

「霊夢、いるかー？」

神社の周辺を歩きながら龍也は霊夢を探す。

声を掛けるが、反応は帰ってこない。

「留守か……」

どうやら霊夢は出掛けている様だ。

一応、一声掛けてから調べようと思ったが居ないのであれば仕方がない。

龍也はそのまま調べ始める。

確かに、神社には妖力が漂っている。

だが犯人がどこにいるかは分からない。

幽々子曰く、非常に薄くなっているせいらしいが。

「どうした物かな……」

龍也がそう呟くと、

「手を貸して上げましょうか？」

そう言った声が聞こえる。

「ッ!？」

すると、龍也は光に包まれる。

眩しくなり目を瞑ってしまふ。

そして光が止み、龍也が目を開けてみる、

「なん……だと……」

昼と夜が分かっていた。

もっと言つのであれば神社を中心に、龍也から見て左側が昼、右側が夜と言った感じだ。

普通では見ることでできない光景だ。

「どう？ 気に入ってくれた？」

龍也は声を掛けられた方に振り向く。

そこにいたのは、

「紫……」

隙間から顔を出している八雲紫であった。

「はい」

「……これやったのは……あなたか」

「そうよ。昼と夜の境界を弄ってね。中々神秘的な光景でしょう」

「そうだな……」

龍也はそう言いながら構えを取る。

「……あなたはこの宴会続きの犯人が誰か知っているのか？」

「ああ、どうかしら」

紫はそう言いながら隙間から出てくる。

そして地面に降り立つ。

「聞きたいことは力尽くで聞きなさい。好きでしょ、そう言っのっ。」

また、何時かの様に自分を誘っている。

龍也はそう感じた。

「いいぜ、後悔するなよ!!！」

そう言い放って龍也は紫に突っ込む。

そして紫が自身の間合いに入ると龍也は拳を振るう。

紫はその拳が自分に当たる直前に、背後に展開した隙間の中に入っていく。

龍也はすぐさま反転して弾幕を放つ。

すると、隙間から出て来た紫に命中する。

そして爆煙が発生する。

「中々鋭いじゃない」

煙の中から傘を構えた紫が出て来る。

当たったのは紫ではなく、紫の傘であったようだ。

「次はこっちからいくわよ」

そして紫は数本のレーザーを龍也目掛けて発射する。

龍也は飛び上がって回避するが、

「なっ!?!」

そのレーザーは軌道を変えて龍也に向かっていった。

龍也はこれには驚きながらも、空中で無理矢理位置を変えてやり過ぎず。

その瞬間、紫は龍也の目の前に迫って来ていた。

そして龍也に傘を突き出す。

防御しようとしたが間に合わずに直撃を喰らってしまう。

龍也は地面に一回叩きつけられてから体勢を立て直す。

そして再び紫が接近し、傘を突き出す。

今度の一撃はキチンと反応する事ができた。

龍也は体を反らして回避し、傘の先の部分を掴んで紫を引き寄せる。

それと同時に紫の胴体に蹴りを叩き込み、掴んでいた部分を放して蹴り飛ばす。

間合いが離れた所で紫はスペルカードを取り出す。

「式神『八雲藍』」

そしてスペルカードが発動する。

スペルカードが発動されると、どこから兎も角八雲藍が現れて龍也に回転しながら突撃を仕掛ける。

「とお!?!」

龍也は驚きながらもその突撃を避ける。

「おや、相手は誰かと思ったら龍也だったか」

「これどう言うスペルカードだよ!?!」

まさか藍が召喚されるとは思わなかった龍也は、叫び気味に藍に尋ねる。

「私が相手に突撃を仕掛けるタイプの物だな。その間に紫様は攻撃をしたり、
休んだりとだな……」

藍にそう言われて紫の様子を見る。

紫は攻撃を仕掛ける様子はない。

舐められているのか、それとも別の思惑があるのかは分からない。

「ッ！？」

だが、先にこっちの対処が先のようなのだ。

藍の突撃は中々に速い。

下手に意識から外せば直撃を喰らうであろう。

おまけに狙いが正確だ。

「……あ」

そこで龍也は一つの手を思いつく。

だが、

「こんな手効くかなあ？」

一抹の不安を覚える。

「どおっ！？」

また突撃してきた藍を龍也は間一髪で避ける。

もう考えている時間はないであろう。

このままいけば喰らってしまう。

龍也は賭ける事にした。

後ろに藍が迫って着ている事を確認しながら、龍也は紫に向かっていく。

そして、紫の目の前で龍也は消える。

すると、

「え？」

「ちよっ!?!」

藍と紫は激突する。

その隙に龍也は紫の背後に回る。

そして紫の背中に手を付け、

「霊撃『霊流波』」

スペルカードを発動する。

龍也の放った霊流波は紫と藍の二人を飲み込む。

そして霊流波が消えると二人がボロボロの状態で出てくる。

「俺の勝ちだな」

「うー、何もここまでしなくてもいいじゃない」

「約束通り、色々と話して貰おうか」

龍也は無視して話を進める事にした。

「分かったわよ」

「で、犯人は誰か知ってるのか？」

「知ってるわよ」

「どこにいる？」

「今、見える様にして上げるわ」

紫がそう言うと閃光が走る。

「ぐっ!？」

龍也は咄嗟に腕で目を覆いながら目を瞑る。

萃夢想編 その8

「なっ!?!」

光が消えて目を開いた龍也は驚く。

先程までの光景とはまるで違う光景になっていた事に。

周りにある何かが空の彼方に向かって行っている光景。

地面も神社の地面ではなく、半透明の何かになっていた。

そんな不可思議な光景だ。

「あれ、宴会にはまだまだ早いよね?」

「ッ!?!」

背後から聞こえてきた声に龍也は振り向く。

そこに居たのは二本の角を生やした女の子であった。

髪の色は茶で髪の長さは長い。

「誰だ……お前?」

「私かい? 私は伊吹萃香。鬼だよ」

「伊吹萃香……」

「そう。そういう君は四神龍也だよな」

萃香は名乗ってもいない龍也の名を言い当てた。

「なんで……俺の名を……」

「あれ、覚えてない？ 一人で月見酒している時に声を掛けたじゃん」

そう言われて龍也は考え込む。

そして思い出す。

「あの時の声か……」

龍也が初めて宴会の参加した時の事だ。

「だが、あの時俺はお前の声は聞いたが姿は見ていないな」

「宴会会場にはいたよ。まあ、非常に薄くしていたから誰も気付かなかったけどね」

萃香はあっけらかんといった感じ言う。

龍也は幽々子の言っていた事を思い出しながら萃香に尋ねる。

「とりあえず聞いておこうか。この宴会続きの原因、お前だな」

「正解。みんなを無意識のうちに集めて宴会を開くようにしてたん

だ

「……………それをやめる気は？」

「えー、何で？ 賑やかな方がいいじゃん。私も賑やかなのは大好きだし」

萃香の言動から、この異変を止める気はないようだ。

「なら……………力尽くになるぜ」

「へえ……………力尽くで私を止める気かい？」

そう言っつて萃香はニヤリと笑う。

「果たしてそれができるかな？ 私は鬼。そこんじよそこらの凡百な妖怪なんかとは訳が違う」

「それが何だよ」

龍也はそう言っつて少し足を開く。

「お前がいくら強かろうが凄い存在だろうが知った事か。お前を倒さなきゃ
この宴会続きが終わらないって言うんであれば……………倒すだけだ」

そう言っつて龍也は靈力を開放する。

その開放された靈力で萃香の髪が揺れる。

龍也が開放した霊力を感じながら萃香はまたニヤリと笑う。

「ふふふ、いいねいいねえ！！ 私を鬼と知ってそこまで私に啖呵を切った人間は

あんたが初めてだよ。それにこの気合の入った霊力……」

そう言つて萃香も足を開く。

「これは楽しい喧嘩になりそうだ！！」

そして萃香も妖力を開放する。

開放した霊力と妖力がぶつかり合う。

そんな中、二人は同時に構える。

そして龍也は萃香の妖力を感じながら気付く。

これから始まるのは弾幕ごっこではない。

普通の戦いであると。

龍也がそれに気付いたと同時に二人は同じタイミングで駆ける。

そして同時に拳を振りぬき、互いの拳を激突させる。

激しい激突音と衝撃波が発生する。

その数瞬後、龍也が弾き飛ばされる。

「チイツー!!」

「ほらほら、どうした!!! 威勢がいいのは口だけかい!?!」

萃香はそう言いながら弾き出された龍也に追い討ちを掛けるように後を追う。

龍也は体勢を立て直しながら自身の力を変える。

朱雀の力へと。

瞳の色が黒から紅に変わる。

瞳の色が変わったと同時に右手に炎の剣を生み出す。

そして萃香が攻撃を仕掛ける前に斬り掛かる。

「へえ……炎の剣を使うんだ」

「なっ!?!」

龍也の放った斬撃は萃香の腕で受け止められていた。

萃香の顔を見るにダメージはない様だ。

「でも、炎のなら私も」

そう言いながら萃香は拳を振りかぶり、

「使えるんだよ!?!」

その拳を龍也の胴体に叩き込む。

同時に萃香の拳から炎の塊が放たれる。

「ガ……ハッ!？」

龍也は血を吐き出しながら吹っ飛んでいく。

そして途中で炎の塊が爆発し爆煙が発生する。

「どうしたの？ まさか、もう終わりって事はないよね？」

萃香は爆煙を見ながらそう言う。

すると、急に爆煙が晴れる。

いや、これは内側から吹き飛ばしたのだろう。

同時に龍也から感じる力も強くなる。

煙が晴れた中心には龍也の姿があった

「ん……変わった？」

萃香がそんな言葉を漏らす。

具体的に言うならば龍也の髪の色が黒から紅に変わっているのだ。

そんな龍也の変化を萃香が観察していると、龍也と目が合う。

紅い瞳が輝いている。

萃香がそれを見た瞬間、龍也が駆ける。

両手を合わせ、炎の剣を炎の大剣にしながら。

その炎は先程までの炎のより紅い。

そして、先程までとは桁違いのスピードで萃香に迫る。

「ッ!？」

跳ね上がったスピードに萃香が驚きながらも後ろに跳ぶのと同時に炎の大剣が振り下ろされる。

そして剣先から炎が迸り、萃香を呑み込んでいく。

だが、

「先程とは、比べ物にならない炎だね」

すぐに炎の中から出てくる。

片手で炎の振り払って。

「おまけに力も速さも随分上がったる」

そう言いながら萃香は構えを取る。

「龍也みたいな人間は初めて見たよ」

「そいつはどうも」

龍也はそう言いながら炎の大剣を構える。

「なら、私ももう少し強いほうがいいかな」

萃香がそう言った瞬間、萃香は龍也の懐に潜り込む。

「ッ!？」

龍也は後ろに下がりながら炎の大剣を盾の様に構える。

その瞬間に萃香の拳が炎の大剣に当たる。

龍也は後ろに下がって距離を取ろうとするが、萃香がそれを許さない。

萃香が距離を詰めてくるからだ。

龍也は萃香の攻撃を炎の大剣で防御していくが、今の二人の距離では分が悪い。

間合いが近すぎて、炎の大剣を活かせない。

そう思った龍也は萃香の攻撃を炎の大剣で受け止めた瞬間に炎の大剣を爆発させる。

その爆発の影響で二人の距離は離れる。

そして龍也は自身の手に炎の纏わせて、萃香に殴りかかる。

「おっと」

それを萃香は体を傾けて回避する。

そして体を回転させながら龍也に向けて裏拳を放つ。

「ぐっ！！」

その裏拳を腕で防御した龍也は呻き声を上げる。

想像以上に重い拳だったからだ。

それに堪えながら龍也は蹴りを放つ。

「と」

萃香はその場から離れて回避する。

そして距離が取れたところで萃香は拳を放つ。

その拳からは炎の塊が放たれ、龍也に向かっていく。

それを見た龍也は再度炎の大剣を生み出す。

そして野球のバッターのように打ち返そうとして炎の大剣を振るう。

だが、打ち返す事はなかった。

「ありや、吸収されちゃった」

そう、萃香の放った炎の塊は炎の大剣に吸収されたのである。

龍也はそのまま炎の大剣を振り切り、再び剣先から炎が進り萃香を襲う。

だが、その炎をまた片手で振り払う。

それを見た龍也はやはり炎に耐性があると思った。

萃香も炎を使うのだから当然と言えば当然である。

このまま炎で攻撃を加えていっても効果は薄いと思い、龍也は自身の力を変える。

朱雀の力から青龍の力へと。

炎の大剣が消えると、瞳と髪の色が紅から蒼に変わる。

そして手に水を纏い、構える。

その龍也の変化を興味深そうに萃香は見ている。

すると、龍也の姿が消える。

萃香は上を見上げると、そこには龍也が腕を振りかぶりながら降下している

姿があった。

萃香に気付かれたが、龍也はそのまま降下しながら技を放つ。

「水爪牙!!」

龍也が腕を振ると水を纏った手の爪先から五本の水でできた斬撃が放たれる。

萃香はそれを後ろに跳んで避ける。

地面に命中したそれは、五本の深い爪跡を地面に残す。

「今度は水か……」

そう言いながら萃香は着地する。

同じく着地した龍也は間髪入れずに突っ込んでいく。

そして萃香が自分の間合いに入ると水の爪を振るう。

萃香はそれを体を傾けながら回避していく。

だが、龍也は構わずに攻撃を放っていく。

萃香の方も変わらずに回避していく。

「ッ!？」

突如、萃香のバランスが崩れる。

何故かと言つと、龍也は急に足払いを掛けてきたためだ。

この一撃は完全に意識の外から放たれたものだ。

地に伏せる前に足を踏ん張って転倒だけは避ける萃香。

その瞬間に龍也の腕が振り下ろされる。

この状態では回避は間に合わないと判断した萃香は咄嗟に腕を交差する。

「ッ!？」

腕を振り切った龍也は驚愕する。

振り切りはしたが、途中で弾かれたからだ。

自身の能力の中で最も殺傷能力が高い青龍の力でこれなのだ。

萃香はどれだけ頑丈な体をしているのだろうか。

「驚いた。まさか血を流す事になるとはね」

対する萃香も驚いていた。

腕から僅かに血を流している事実。

「こりゃ、楽しくなってきた」

そう言いながら萃香は一瞬で龍也の懐に入り拳を放つ。

龍也は咄嗟に反応し、腕を交差して防御する。

「ぐっ!？」

吹き飛ばされながら手に纏った水が崩壊していく。

水の剣よりは強度が高いのに、一撃受けただけでこれだ。

殺傷能力は高いが、耐久性が低いと龍也は改めて認識した。

龍也は体勢を立て直しながら掌を地面に着けて減速していく。

完全に止まったところで萃香の方を見ると、萃香は何やら自分の髪を筆記取っている。

一体何をしているのだろう。

それはすぐに分かる事になる。

萃香は筆記取った髪に息を吹き掛け飛ばすと、それは無数の小さな萃香になる。

そしてそれらは龍也に向かっていく。

「ほんと、何でもありだよな……」

龍也はそう愚痴りながら自身の力を変える。

青龍の力から白虎の力へと。

瞳と髪の色が蒼から翠に変わる。

そして腕と脚に風を纏い終わった瞬間に両手を合わせて前方に向ける。

すると、そこから竜巻が放たれる。

その竜巻は小さな萃香を呑み込み、吹き飛ばしていく。

それを確認した龍也は竜巻を消して萃香の姿を探す。

「へえー、今度は風を使うか。器用だね」

何時の間にやら龍也の懐に入り込んでいた萃香はそう言いながら拳を放つ。

だが、

「ッ!？」

萃香の拳が龍也の胴体に当たる瞬間、龍也の姿が消える。

その事に驚きながらも萃香は右隣を向きながら腕を盾にする。

その瞬間、萃香の腕に衝撃が走り吹っ飛んで行く。

萃香が吹き飛ばされながら自分の居た位置を見ると、そこには蹴りを放った状態の龍也が居た。

唯、風を使えるようになっただけではなく、スピードが大幅に強化されていると
萃香は思った。

萃香が体勢を立て直すと、龍也は萃香の目の前に来ていた。

そして格闘戦が始まる。

攻めるは龍也。

守るは萃香。

龍也の放つ拳や蹴りを萃香は防御したり回避したりしていく。

「随分速さが上がっているね」

そんな中で萃香はそう漏らす。

「腕や脚に纏っている風で力の底上げをしているようだけど……」

そして龍也の拳を掌で受け止め、

「力その物はさっきより落ちてるよ!!」

同時に龍也の胴体に蹴りを放つ。

「ガッ!？」

蹴りが当たったのと同時に萃香が手を放したため龍也は吹っ飛んで

いく。

龍也は片手を地面に刺して無理矢理止まり、萃香の位置を確認する。萃香は龍也に飛び掛るようにしながら拳を振りかぶっている。

その拳からは膨大な熱量を感じる。

また炎の塊を放ってくるつもりだろう。

そう思った龍也は地面に刺さった腕を抜きながら、掌に風の塊を生み出していく。

萃香が拳を放ったと同時に龍也も掌を突き出す。

「暴風玉!!」

そして、炎の塊と風の塊がぶつかり合い、爆発する。

辺り一面を爆風と爆煙が包み込む。

少しすると煙が晴れる。

そこに見えたのは拳が突き刺さっている萃香と、拳を放っている龍也の姿であった。

「いい拳だね」

萃香はそう言いながら頭を振りかぶり、

「けど、まだ甘い!!」

「グツ!?!」

龍也に頭突きを叩き込む。

龍也は数回地面をバウンドしながら地面を転がっていく。

ある程度進むと止まえい、龍也は両手を使いながら立ち上がる。

そして何時の間にか消えていた風を再び纏い直す。

「はあ……はあ……はあ……」

「あれ、もう限界?」

「はっ、冗談!! まだまだ余裕だぜ」

口では強がってはいるものの、龍也は限界に近づいて来ていた。

力を解放した状態にいるのももう限界だ。

だが、この状態でなければ萃香とは戦えないだろう。

だから龍也は無理矢理この状態を維持しているのだ。

でなければあつと言っ間にやられてしまう。

「うんうん、そこなくっちゃ」

そんな龍也の強がりを知ってか知らずか、萃香は感心したようにそう言う。

「……ちっ」

龍也は額から流れてきた血が目に入りそうだったので、親指で拭う。

「実際、龍也は凄いや。私とここまで戦えた人間って龍也が初めてだと思うよ」

「そいつはどうも」

「だから、龍也には私のおきを見せてあげる」

そう言いながら萃香は屈む。

龍也は萃香の雰囲気からか、用心したように構える。

「ミッシングパワー!!」

すると、

「な……に……」

萃香が巨大化した。

大きさは大体龍也の十倍くらいであろうか。

龍也がその事に啞然としていると、萃香が口を開く。

「私の能力は”密と疎を操る程度の能力”この巨大化もその応用だよ」

「……」
「丁寧にごつも」

「それじゃ、いつくよー!!」

そう言いながら萃香は龍也に向けて腕を振り下ろす。

龍也はその場から消えて、萃香の拳は地面に着弾する。

その瞬間に龍也は萃香の背後に現れて、萃香の背中に蹴りを放つ。

だが、

「クツ!!」

龍也は手応えから、まるでダメージが無い事を確信する。

その攻撃で萃香は龍也の位置に気付く、そこ目掛けて腕を振るう。

「ぐっ!!」

直撃は避けたものの、腕を振るった風圧で龍也は吹き飛ばされてしまふ。

ある程度吹き飛ばされた所で龍也は止まる。

萃香はズシンズシンという音を立てながら龍也に近づいて行く。

均衡は一瞬。

龍也の土の拳に輝が入り、崩壊する。

それを予想していた龍也はその場で回転しながら脚に土を集めていく。

そして回転し終える頃には巨大な土の脚が出来ており、それを萃香に叩き込もうとする。

萃香はもう一本の腕で防御する。

その瞬間、また激突音と衝撃波が発生する。

「チィッ!」

「やるねえ。大きさを私と張り合おうとするなんてね」

そう言いながら萃香は拳を放った手で土の脚を掴む。

そしてその場で回転しながら龍也を投げ飛ばす。

龍也は投げ飛ばされながら土の脚を崩壊させ、顔を萃香の方へ向ける。

萃香は腕を振り回している。

その腕の周囲は膨大な熱量で歪んでいる。

また、拳から炎の塊を放つつもりであろうか。

この体勢で喰らった一溜まりもない。

龍也は慌てて空中で体勢を立て直す。

その瞬間、萃香の拳から巨大な炎の塊が撃ち出される。

龍也を一飲みにしても余裕でお釣りがくるだろう。

回避は不可能の判断した龍也は前方に両手を向け、

「玄武の甲羅！！」

玄武の甲羅を生み出す。

龍也に使える最強の盾。

これで巨大な炎の塊を防ぐつもりなのだ。

そして、その炎の塊が玄武の甲羅に着弾する。

着弾した瞬間、炎の塊は爆発した。

「ぐぐぐぐぐぐううううう！！！！！！」

龍也は歯を喰いしばって衝撃に耐える。

衝撃が消え、龍也は玄武の甲羅を消して辺りの様子を探る。

爆煙のお陰で萃香の姿を視認する事が出来ない。

龍也はこの爆煙に紛れて萃香に奇襲を掛けようと思いつき、上空に躍り出る。

そして、巨大な土の拳を生み出そうとした瞬間に龍也に影が出来る。

龍也が上を見ると、

「なっ!?!」

そこには萃香がいた。

萃香も同じように空中に躍り出っていたのだ。

その事実には龍也は一瞬動きを止めてしまう。

萃香はその隙を逃さずに、巨大な拳を龍也に叩き込む。

「ガッ!?!」

その拳を受けた龍也は、何の抵抗も出来ずに地面まで一直線に吹き飛んで行く。

そして地面に叩きつけられる。

「ぐ………つ………う………」

地面に叩きつけられた龍也の瞳と髪の色は元の黒色に戻っていた。

それでも龍也は中々動かない体を動かさし、うつ伏せの状態になる。

そして両手、両脚を使って何とか起き上がろうとする。

龍也は何処から血を流しているのか分からない。

龍也は何処の骨が折れてるのか分からない。

痛みが酷い事だけは分かっていた。

普通は痛みが酷くて動けはしないだろう。

それでも龍也は戦おうとしていた。

そして、何とか立ち上がった時には萃香が龍也まであと少しと言った所まで迫っていた。

萃香は一旦止まって何かを言っているようだが、龍也には聞こえなかった。

そして萃香は再び龍也に近づいて行く。

このままでは負ける。

動かなければ負ける。

それでも龍也に体は中々動かない。

そして気付いた時には萃香の拳が目前まで迫って来ていた。

『手紙』

突如、龍也の体が勢い良く動く。

萃香に掌を向け、そこから圧縮された霊力が放出される。

それは、龍也が普段使っている霊流波よりも範囲も威力も上だ。

攻撃が来るとは思っていなかった萃香は、何の抵抗も出来ずに飲み込まれていく。

飲み込まれる瞬間に萃香は龍也の瞳を見た。

その瞳は黒ではなく、紫色に輝いていた。

霊力の放出が終わると、龍也の瞳は元の色に戻っていた。

「ぐっ!？」

龍也は体が崩れ落ちそうになるのを耐えながら周囲の状況を確認する。

「俺は……何をしていた……？」

萃香の拳が目の前に迫ってきた事は覚えている。

だが、龍也にはそこから記憶がない。

気付いた時にはこの状況になっていた。

萃香はどこにいったのであろうか。

「いやー、驚いたよ」

「ッ!？」

龍也は声が聞こえた方向に体を向ける。

そこには少しポロポロの状態になった萃香がいた。

体の大きさは元の大きさに戻っていた。

「まさか、あんな隠し玉があったなんてね」

そう言いながら萃香は龍也に近づいて行く。

「でも、流石にもう限界かな？」

龍也の様子を見ながらそう漏らす。

体の至る所から血を流し、息も絶え絶え。

感じる霊力も低くなっている。

萃香はそう漏らすのも無理はない。

だが、

「……………はっ、冗談だろ」

龍也はそれを否定し萃香を睨みつける。

「限界？ 誰がだよ！？ 俺……………まだまだやれるぜ！！」

そう言い放つ龍也の目を萃香は見る。

その目は怯えた目でも許しを乞う目でもない。

自分に勝ってやると言つ目だ。

あんなボロボロの状態になってもそんな目をできる龍也に萃香は驚くと同時に感心する。

「そんな状態になっても許しを得ようと命乞いもせずに戦って勝とうとするか……………
いいねいいねえ！！ 本当にいい男だね、龍也は！！ 攫ってしまいたいぐらいだよ！！」

そう言つて萃香は妖力を開放する。

それに呼応する様に

萃香がその水の冷たさにそう声を出す。

何が目的だと思った瞬間にその答えが分かった。

「氷った!？」

そう、水が氷ったのである。

龍也の放った水は唯の水ではなく極低温の水。

龍也が制御を放棄した瞬間に氷ったのである。

萃香は自分を磔にするのが目的だと悟る。

何が目的であろうかと思っていると、上空には髪と瞳の色を翠にした龍也がいた。

龍也は猛スピードで急降下する。

そして龍也と萃香の距離が半分ほどになると、龍也の髪と瞳の色は紅になる。

その瞬間、龍也の足の裏の先で爆発が起き、龍也は更に加速する。

ここまで来て萃香は理解する。

龍也は必殺の一撃を放つつもりであると。

萃香は必死になって自信を縛っている氷を砕こうともがく。

その時には龍也の髪と瞳の色は茶になっており、振りかぶった拳は土でできた

巨大な拳となっていた。

「うううううおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」

そして、萃香が氷を砕いたのと同時に土でできた巨大な拳は萃香に突き刺さった。

萃夢想編 その9

萃香に突き刺さっている土の拳がバランスを崩して倒れていく。

拳を放っている龍也ごと。

土の拳は完全に倒れたのと同時に崩壊し、龍也は地面に投げ出される。

同時に龍也の髪と瞳の色が黒に戻る。

うつ伏せに倒れていた龍也は、両手足を使って何とか立ち上がる。

「ぐう……ううう……」

何とか立ち上がった龍也は右手で左肩を押さえながら萃香に近づいて行く。

萃香の様子を確認するためだ。

一歩、また一歩と近づいて行く。

そして龍也と萃香の距離が半分程になった。

萃香まであと少しだと、龍也が思った瞬間

「あ………?」

龍也が前のめりで倒れる。

龍也はもう一度立ち上がるつもりだったが体が動かない。

手足は勿論、指先まで。

首はほんの僅かに動いたが、萃香の状態を確認出来る程動いてはいない。

それでも龍也は体を動かそうする。

だが、動かない。

同時に龍也の目の前が少しずつ闇に染まっていく。

こんな所で意識を失う訳にはいかないと思い、龍也は必死に抵抗するが無駄な努力であつた。

体が動かないまま、龍也の意識は闇に染まっていった。

「…………ツ！？」

龍也は意識を取り戻したのと同時に飛び起きる。

正面に見えたのは襖。

どこかの部屋の中の様だ。

「おはよう……………と言つよりはこんばんは、かしら」

右隣から声が聞こえる。

そこに居たのは

「アリス」

アリスであつた。

「何やってるんだ？」

「何って貴方の服を修繕してるのよ」

「服？」

そう言っつて龍也は自身の体を見る。

素肌の上から包帯が巻かれている。

下半身も同様だ。

だが、トランクスは穿いたままである。

その事に龍也は安堵する。

「体の痛みの方はどう？」

「痛み……」

そう言っつと鈍い痛みが龍也を襲っつ。

「痛い事には痛いけど、どうしようもないって事はないな」

龍也がそう言っつと、襖が開けられる。

そこには水の入った桶を持ったフランドールと咲夜がいた。

「りゅ」

「？」

「龍……也……!!!!!!」

フランドールは桶を放り投げて龍也に飛び込んでくる。

「ぎゃあああああああああ……!!!!!!」

抱きつかれた龍也は悲鳴を上げる。

痛みで。

「あ、ごめんなさい」

龍也の悲鳴を聞いてフランドールは龍也から離れる。

ちなみに投げた桶は咲夜が見事にキャッチしていた。

水の一滴も零さずに。

流石は完璧瀟洒なメイドであろう。

「そーいや、今何時だ？」

「もう夜よ」

「夜？」

「ええ、そして今は宴会の真っ最中。異変解決のね」

それを聞いて異変は無事解決したんだなと龍也は思った。

「異変解決ねえ……誰がやったんだ？」

「何言ってるの、貴方じゃない」

「俺が？」

龍也は疑問の声を上げる。

「俺は最後の方で完全に意識を失ったんだが……」

「そうは言ってもあの鬼……伊吹萃香が自分の負けだって言ってたけど」

そう言われて龍也は後で萃香に聞きに行こうと思った。

「宴会やってるって言ってたけど、みんな来てるのか？」

「ええ、それこそいろんな所からいろんな奴等が」

「だったら、フランドールも行って来たらどうだ？ どうせチルノとかルーミアとかも来てるんだろ？」

「え、でも……」

そう言いながらフランドールは龍也の包帯の巻かれている場所を見る。

まだ龍也の様子が心配なようだ。

「俺の方は大丈夫だからさ。あんまり友達を待たせるのはよくないぞ」

「うん」

龍也がそう言うとフレンドールはそう言って部屋の中から出て行った。

「お宅の所の主の妹、噂と全然違うわね」

アリスはフレンドールの様子を見てそう漏らす。

「妹様があそこまで変わられたのは龍也のお陰だとお嬢様が仰っていたわ」

咲夜がそう言うとアリスは龍也の方を見る。

「俺としては唯、背中を押してやってただけなんけどな」

龍也は頬を掻きながらそう答える。

「妹様を恐れずに接して真っ向から戦った事も原因の一つだと思うけどね」

「貴方そんな事してたの？ 今回の鬼と言い吸血鬼といいよく戦う気になったわね」

アリスは呆れ顔になりながら龍也を見る。

「男の子ってみんなそうなのかしら？」

「どうだろ？」

龍也はそう言いながら体を軽く動かす。

痛みは走るがなんとか無視はできる。

そして三人で軽い雑談をしていると、

「はい、終わり」

アリスがそう言いながら龍也に修繕していた物を渡す。

「着替え終わったら宴会に出なさい。一応この宴会の主演は貴方な
んだから」

「では」

そう言ってアリスと咲夜は部屋から出て行く。

それを見送った後、龍也は布団から出て着替える。

自分の学ランは新品と変わらない状態になっていた。

流石はアリスだなと思いつつながら龍也は部屋から出る。

そして廊下を移動し、外に出る。

「おおっ」

見事に宴会で盛り上がっていた。

この状況では主役も何もあったものじゃないなと思いつながら龍也は適当に歩き回る。

「龍也さん」

「ん？」

声を掛けられた方に振り向く。

「美鈴」

声を掛けてきたのは美鈴であった。

「お体の方は大丈夫なんですか？」

「ああ、動き回る程度にはな」

そう言いながら龍也は肩を回す。

「それは良かったです。妹様何て物凄く心配なさってましたから」

「ああ、フレンドールならさつき会ったよ」

そして軽く美鈴と雑談する。

「そうだ、何か軽く食べれるものってないか？」

「そうですね……」

美鈴はそう言いながら辺りを見渡す。

「あっちの方に野菜中心の物がありますよ」

そう言っつて美鈴は指をさす。

「ありがとう」

龍也は礼を言っつて美鈴が指をさした方へ向かっていく。

そこでサラダ中心に食べていく。

ある程度腹が膨れたので龍也は萃香を探し始める。

勝負の事を聞きためた。

神社内を歩き回ってみるが見つからない。

どこに行ったのかと思っつていると、

「龍也」

自分と呼ぶ声が聞こえてくる。

声の主を確認するため龍也は振り返る。

「魔理沙」

「よし」

声を掛けてきたの魔理沙であった。

「聞いたぜ、大活躍だったらしいじゃないか」

そう言っつて私が解決したかつたんだけどなと続ける。

「誰か探しているのか？」

「ああ、萃香をな」

「あの鬼か……私は知らないぜ」

「そっか」

そして魔理沙と少し雑談した後、龍也はまた探し始める。

今度は探していない場所をと思つて神社の裏に回る。

すると、紫と一緒に飲んでる姿を発見する。

「あ、いたいた」

「え？」

「あら、龍也じゃない」

龍也は二人に近づき、萃香の隣に座る。

「なあ、一つ聞きたいことがあるんだが」

「ん？ 何だい？」

「何で俺が勝った事になってるんだ？」

龍也が疑問に思っている事を尋ねる。

「ああ、簡単だよ。私は龍也より先に意識を失ったからだよ」

「え？」

「私が説明してあげましょうか？」

そう言っつて紫が会話に入っつて来る。

「龍也が土の拳を打ち付けた時に萃香の意識が飛んでたのよ。そして、龍也が萃香に

近づこうとし、倒れて意識を失った瞬間に萃香が目を覚ましたのよ」
つまりは自分の方が先に意識を失ったから負けだと萃香は言っつたよ
うだ。

「それで俺の勝ちねえ……」

龍也はそう呟きながら萃香を見る。

怪我は少しもしていなような状態である。

それに比べて自分はどうかだろう。

服で隠れていない部分にも包帯などが巻かれている。

おまけに体中に鈍い痛みが走っている。

勝った龍也はポロポロで、負けた萃香はピンピンしている。

ついでに戦っていた時の事を思い出す。

殆ど萃香が龍也を圧倒していた。

「……………納得いかねえ」

そう呟いて龍也は萃香を見る。

「何？」

「やっぱり俺の負けだと思っつて言ってもお前は意見を変えないと思っつ」

「そうだね。あれは私の負けだよ」

「だから今、宣言する。俺は今よりもっと強くなってお前に再び戦いを挑む。

そして、勝つ！！」

そう宣言した龍也は見て、萃香はポカーンとした顔になる。

「……………あはははは、やっぱり龍也はいい男だね。ホントに攫って私の物にしたくなるほど」

そう言って萃香は龍也の目を見つめる。

「ねえ、私に攫われてみない？」

そう言った萃香には不思議な色っぽさがある。

龍也がそれに気付いて唾を飲む。

すると、

「あら、ダメよ」

突如声が聞こえてくる。

龍也が声を聞こえてきた方を見る。

「こんばんは」

「レミリア」

声を発した人物はレミリアであった。

そしてレミリアは龍也の隣に座る。

「思っていたより元気そうでしたわ」

レミリアがそう言った後、萃香はレミリアに尋ねる。

「どうしてダメなのさ」

「決まってるじゃない、龍也は私のものになるからよ。それに……」
「それに？」

「貴女のような泥臭い土着の民と貴族である私とじゃ格が違うじゃない。格上相手の
言う事は聞くものよ」

「へえ……言ってくれるじゃないか。吸血鬼風情が、鬼である私より上のつもりかい？」

「あら、学が無いわねえ。吸血鬼には鬼と言う字が入っているじゃない」

「入っているだけ……でしょう。それだけで鬼より上だと思つとは……貴女の
言う通り格が違うわね」

「それはそうでしょう。高貴なる者である私と貴女とじゃねえ……」
「その高貴なる者とやらは口だけは随分と回る様だ。口だけは……
ね」

「あら、言ってくれるじゃない。それなら口だけかどうか試してみ
る？」

「試させてほしいの？」

そしてレミリアと萃香は睨み合った後、同時に飛び上がり弾幕ごっこを始める。

「……どうしてこうなった」

「あらあら、一人の男を巡って二人の女が争う。モテモテね、龍也」
そう言っつて紫は龍也をからかう。

「はいはい」

「あら、冷たい反応。幽々子の言う通り前触れなく肌を見せるよう
な事をしないと
だめかしら？」

「おい……」

「冗談よ冗談」

結局、二人はレミリアと萃香の弾幕ごっこを着に酒を飲む事にした。

放浪編 その24

日が上り始めた時間。

龍也は博麗神社の敷地内で体を動かしている。

体を捻ったり反らしたり。

他にも手足を伸ばしたりなど。

何故こんな事をしているのかと言うと、体の調子を確認するためだ。

萃香と戦って怪我をして安静にしていたが、今日やっと直ったのだ。

そのため、体を動かして調子を確認していたのだ。

「……………」

龍也は一旦体を動かすのをやめてその場に佇む。

そして、正拳突きを放つ。

放ち終わった後、拳を戻す。

今度は蹴りを放つ。

そして放ち終わった後、脚を戻す。

「……………」

今度は精神を落ち着け精神を集中する。

すると龍也の体から青白い光が漏れ出す。

それは霊力である。

龍也の霊力が勢い良く放出され、突風を生み出す。

ある程度すると放出が止み、青白い光も止む。

そして龍也は自分の掌を握ったり開いたりする。

「……よし、治った」

体を動かしても痛みは無い。

霊力に関しても問題なく放出が出来る。

これなら何時でも旅を始める事が出来るであろう。

「朝っぱらから何やってるの？」

「ん？」

龍也が振り返るとそこには霊夢がいた。

「おはよう」

「おはよう。で、何やってたの？」

「体の調子を確かめていたんだ。完全に治ったよ」

「完全に？」

霊夢が少し驚いた顔になる。

「確か全治数ヶ月って言われてなかったかしら？」

「そういえば……そうだな」

龍也は少し思い返しながらそう言う。

「それをたった半月足らずでねえ」

「まあ理由はどうあれ早く治ってよかったよ」

龍也は気にしていないと言った顔をしながらそう言う。

「それよりご飯出来てる？」

「出来てるわよ」

そして二人揃って神社の中に入っていく。

居間に入って食事を進めて暫らくすると、

「おっはよー！ー！」

萃香が現れた。

「あら、来てたの?」

「おはよう」

「お、龍也、もう治ったの?」

「ああ」

「流石私に勝った男だ。随分早く治ったものだね」

そう言いながら萃香も卓袱台の前に座る。

萃香が起こした異変を解決してから、萃香は良く博麗神社に現れる様になった。

だが、毎日と言う訳ではない。

数日に一回と言つぐらいだ。

それ以外は幻想郷中をブラブラしているらしい。

「霊夢霊夢、私のご飯は?」

「そこに茶碗があるから勝手について」

「はい」

そう言つて萃香は「ご飯をよそっていく」。

何時の間にか随分馴染んだものだと言龍也は思った。

意外と人当たりが良いのかも知れない。

そして三人で雑談を交えながら朝食を進めていく。

「……ご馳走様……」

食べ終わると龍也が食器を台所に持っていく。

暫らくの間居候しており、包帯なども巻いてもらったりと色々世話になったため、

これ位は自発的にやらねばバチが当たるであろう。

食器洗いをした後、居間に戻って三人で雑談をする。

ある程度雑談をした後、龍也は外に出る。

「おや、そろそろ出るのかい？」

「ああ、そのつもりだ」

体も治ったので旅を再開しようとしていたのだ。

そして歩き出して、ふと振り返る。

「どうしたんだい？ 忘れ物かい？」

「なあ、萃香」

「何だい？」

「ちょっと頼みがあるんだけどいいか？」

「龍也の頼みだったら何でも聞いてあげるよ」

萃香は笑顔でそう言う。

「ならば、ちょっと組み手に付き合ってもらえないか？」

「組み手に？」

「ああ。体は治ったが、ここ暫らくは体を動かしてなかったからな。鈍ってないか

確認しておきたいんだ」

「いいよいいよ。それじゃ、早速始めようか」

そう言って萃香は龍也かた少し距離を取って構える。

龍也も同じように構える。

そしてお互いジリジリと間合いを詰めていく。

「ッ！ー！ー！」

ある程度間合いを詰めると龍也が駆ける。

萃香に肉迫し、蹴りを放つ。

鋭い蹴りだ。

その鋭い蹴りを萃香は腕で受け止める。

受けきつた後、萃香は龍也に向かって拳を放つ。

龍也はそれを掌で受け止める。

そして少しの間膠着状態が続き、お互い弾かれる様に間合いを取る。

同時に着地した後、萃香が拳から炎の塊を龍也に向け放つ。

迫ってくる炎の塊を龍也は手の甲で上空に弾き飛ばす。

その瞬間に萃香が龍也の懐に現れる。

どうやら炎の塊に隠れて接近してきたようだ。

完全に不意を付かれた結果になった龍也は、萃香の拳をまともに受けてしまう。

「がっ!？」

萃香の拳を受けた龍也は、吹っ飛んでしまう。

吹き飛ばされながら龍也は体勢を立て直して地面に手を付ける。

それがブレーキ代わりとなり、減速していく。

そして完全に止まると龍也に影が出来る。

疑問に思った龍也は顔を上に向ける。

そこには拳を振りかぶりながら降下してきている萃香がいた。

そして拳が振り下ろされ、土煙が上がる。

土煙で互いの姿が見えなくなる。

土煙が晴れ、龍也と萃香の姿が見えてくる。

そこに見えたのは、萃香の拳を体を反らして回避している龍也と、拳を地面に

打ち付けている萃香の姿であった。

龍也はその場で回転しながら膝蹴りを萃香に叩き込む。

それを受けた萃香は吹っ飛んでいく。

龍也は吹っ飛んでいる萃香に追い討ちを掛けるため、萃香に掌を向ける。

そしてそこから霊力でできた弾を撃ち出す。

それは萃香に当たり爆発し爆煙が発生する。

すると、爆煙の中から萃香が飛び出してくる。

ダメージは全く無い様だ。

そして龍也に突っ込んで連撃を放つ。

萃香の放ってくる拳や蹴りを龍也は避けたり腕で防御していく。

そしてある程度その状態を維持すると、龍也が拳を放つ。

龍也の放った拳は萃香の放った拳と激突する。

同時に激突音と衝撃波が発生する。

暫らく拳と拳をぶつけ合っていると、同時に弾かれたように離れる。

「付き合ってくれてありがとう」

龍也はそう言って構えを解く。

「私はもっと続けてても良かったんだけどね」

萃香もそう言いながら構えを解く。

そしてお互い近づいて行く。

「で、調子はどうだったい？」

「絶好調。鈍ってるかもしれないと思ってたけど、そんな事なかったぜ」

そう言って龍也は腕を回す。

「あら、まだ居たの？」

そう言いながら霊夢がやってくる。

「ああ、萃香に組み手の相手をして貰ってたんだ」

「ふーん……ま、掃除する前でよかったわ」

「何だ、掃除するつもりだったのか」

霊夢の持つてる箒を見ながら龍也はそう言う。

「そう言えばあなたの能力なら楽に塵とか集められるんじゃない？」

萃香を見ながら霊夢はそう言う。

「それ位なら楽勝だよ」

「ならやってよ。タダで飲み食いしてるんだからそれぐらいはしてくれるわよね？」

「いいよ」

萃香がそう言うのと、塵やら埃やらが集まってくる。

「これでいい？」

「ええ、ありがとう」

「じゃ、そろそろ俺も行くわ」

そう言つて龍也は博麗神社を後にしようとする。

「あ、ちよつと待った」

「何？」

霊夢に呼び止められたので、龍也は振り返る。

「あんた確か……無名の丘にある洞窟に住んでいるんだっただわよね？」

「ああ、そつだ」

「へえー、龍也つてそこに住んでいるんだ」

「まあな」

「最近……と言つよりは萃香が起こした異変より前に帰つてる？」

「いや……帰っていないな」

「ならそろそろ帰つた方がいいわ。あのお札の結界、そろそろ霊力補充しておかないと効果が切れるわよ」

「そうなのか……分かった、先に帰るよ」

龍也はそう言つて博麗神社を後にする。

それを見送つた後、霊夢は神社の中でゆっくりするために神社の中

へ入っていく。

そして萃香もどこかに消えていく。

幻想郷のどこかにでも行ったのだろう。

流れ解散の様な状態になった。

放浪編 その25

「到着つと」

龍也は無名の丘を眺めてそう呟く。

そして、歩いて自分の住居である洞窟を目指す。

暫らくここに来ていなかったせいか、何やら新鮮に感じる。

「お、大分溜まってたな」

洞窟の前に辿り付くき、ポストを見ると龍也はそんな声を上げる。

そこには大量の新聞が入っていたからだ。

文の新聞であろう。

暫らく帰っていなかったがちゃんと届けてくれていた様だ。

龍也は脇に新聞の束を抱え、自身の力を変える。

朱雀の力へと。

瞳の色が黒から紅に変わったのと同時に洞窟の中に入っていく。

そして掌から炎の生み出す。

その炎のが洞窟を照らす。

「やっぱり変わってないな。当然と言えば当然か」

辺りを見渡しながら龍也はそう漏らす。

そして新聞をテーブルの上に置き、ランプのある場所まで近づく。

龍也はランプに火を入れると、炎の消して力を消す。

「さてと……」

そう言ってお札が貼ってある場所まで移動する。

龍也はそれに触れて靈力を送り込んでいく。

「こんなもんか……」

そしてお札から手を離す。

その後、隅に置いてある四角いボックス状の中から何かを取り出す。

取り出した物は保存食だ。

ここに住み始めた頃に香霖堂で家具と一緒に買った物だ。

外の世界から流れてきた物らしい。

そう頻繁に戻ってくる事がないと思っていた龍也は調度いいと思っ
て買って置いた

のだ。

おまけに洞窟内は気温が低いので飲食物を保管して置くのにも都合がいい。

とは言っても普通の食べ物などは数ヶ月も保存できないだろうが。

それでも保存食などは問題ない。

龍也は今日は保存食などを食べながら新聞に目を通しす事にした。

「……結構面白かったな」

新聞を読み終えた龍也はそう感想を漏らす。

自分の事が書かれていた内容は少々気恥ずかしかったが。

体を伸ばした後、懐中時計を取り出して時間を確認する。

「もうこんな時間か……」

龍也は懐中時計をポケットに入れ、立ち上がる。

そして布団に入り、ランプの火を消して目を閉じる。

布団の量が多いので大して寒くは無い。

少しすると睡魔が襲って来る。

龍也はその睡魔に身を委ねて眠っていく。

「……んあ」

龍也が目を覚まし、上半身を起き上がらせる。

そしてある事に気付く。

「……明るい？」

そう、明るいのだ。

その事に龍也が疑問を覚える。

自分は寝る時にキッチンとランプの火を消した筈である。

だが、疑問はすぐに氷解した。

「おはよう」

近くに八雲紫が居たからだ。

「……何やってんだ？ 人の家で？」

「あら、冷たい反応ね。朝起きたら可愛い女の子が朝食の準備をしている。」

男なら普通は感涙物でしょ？」

「てゆうか、どっから入った？ この洞窟には結界があるんだが？」

「あら、私の能力忘れたの？ 私の能力を使えば結界ぐらいどつて事ないわ」

「……そうか」

龍也はどこか諦めた様に呟きながらテーブルの上を見る。

そこに並んでいたのはご飯に味噌汁に焼き魚に漬物。

和食だ。

「これ、あんたが作ったのか？」

「そう見える？」

「見えねーな」

「あら酷い。でもまあ正解ね。これ作ったのは藍よ」

「藍がか？」

そう言って藍の姿を思い出す。

見た感じしつかりしている風貌だ。

確かに藍なら料理の一つや二つは楽に出来るだろうと龍也は思った。

「でも、何だつて俺の所に持って来たんだ？」

「食材が大量に在ったからね。腐る前に藍に調理させたら結構な量になってね。

私達だけじゃ食べきれないからお裾分けよ」

「……成程」

そう言う事ならありがたく貰っておこうと龍也は思った。

「それじゃあね」

そう言つて紫は隙間を開いてその中に入って行く。

紫が完全に隙間の中に入ると隙間が消える。

何を急いでいたんだろうと龍也が思うと、ある物が目に入る。

大きなダンボールだ。

龍也はそれに近づき中を確認する。

「……やられた」

その中は空であった。

ここに龍也は酒を保管しておいたのに。

「……はあ、朝食の飯代だと思つ事にするか」

龍也は溜息を吐きながらそう呟き椅子に座つて朝食を取り始めた。

味は非常に美味しい物であつた。

朝食を取り終わると食器を洗い、ランプの火を消して外に出る。

「んー……いい天気だ」

空を見上げ、体を伸ばしながら龍也はそう言う。

一通り体を伸ばした後、龍也は出発する。

少し歩けば鈴蘭畑が目に残まる。

すると、そこに人影を発見する。

龍也は目を凝らして見ると、どうやら金色の女の子の様だ。

こんな所に誰がいるのかと龍也は思いながら、龍也はその女の子に声を掛ける。

「ちよつといいかな？」

「ひゃあ!？」

女の子は悲鳴を上げながら振り返る。

「あつと、ごめん。驚かせるつもりはなかったんだけど……」

「……貴方……誰？」

「俺は四神龍也。君は？」

「私はメディスン・メランコリーよ」

この女の子はメディスンと言っらしい。

「ここに何しに来たの？ すーさんを盗みに来たの？」

「すーさん？ ……鈴蘭の事か？ 別にそんな気はねーよ」

「本当？」

「本当だよ」

龍也がそう言うと、メディスンは安心した表情になる。

だが、すぐに何かに気付いた顔になる。

「貴方……人間？」

「ああ、そつだが」

龍也がそう言うのと同時に、メディスンは妖力で出来た弾を放つ。

「おわあ！？ 何すんだよ！？」

龍也は避けながらそう言い放つ。

「人間なら私はお前を倒す！！」

そしてメディソンは龍也に襲い掛かってきた。

龍也はメディソンの攻撃を避けながら龍也は空中に躍り出る。

メディソンも龍也の後を追う様に空中に躍り出る。

そして互いに弾幕を放つ。

「襲って来るにしても何か理由はないのか！？」

メディソンの弾幕を避けながら龍也がそう言うが、メディソンからの反応はない。

唯、妖怪が人間を襲うと言うのの実行しているだけなのか、それとも理由を

話さないだけなのか。

龍也は何となく後者の様な気がした。

龍也がそう思っても戦いは続く。

互いの放つ弾幕は互いの決定打にはならない。

そんな状況にメディソンは埒が開かないと思ったのか、突如弾幕を

放つのを
やめる。

突然弾幕を放つのをやめたメディスンに龍也は疑問を覚え、龍也も弾幕を放つのをやめる。

そして構えを取りながら様子を見る。

すると、メディスンから何かが放出される。

「紫の……煙？」

メディスンから放出されたのは紫の煙であった。

そしてそれは広がって行き、龍也を包む。

「……ゴフツ！？」

龍也は突如口から血を吐く。

口を手で押さえながら龍也はメディスンを見る。

そこには得意気な表情をしたメディスンがいた。

「これは……毒か？」

「正解。私の能力は”毒を操る程度の能力”」

それを聞いて龍也は驚愕する。

そして思う。

何て凶悪な能力なんだと。

メディスンの力は文字通り必殺の威力を持っている。

口や鼻を押さえ、呼吸を止めても何処からか毒が入ってきている。

龍也はそう感じた。

無論、龍也がそう感じているだけかもしれないが。

「ふふふ、どう？ もう打つ手は無いでしょう？」

確かにそうだ。

少しずつではあるが、体の自由が効かなくなってきた。

だが、龍也はまだ打つ手がある。

龍也は自身の力を変える。

白虎の力へと。

龍也の瞳が黒から翠に変わると同時に龍也から突風が発生する。

その影響で紫の煙が吹き飛んで行く。

「……嘘」

メデイスンはポツリとそう呟く。

まさかこう来るとは思っていなかったからだ。

龍也は風で自身を覆いながら、

「どうだ、これでお前の毒は効かないぞ」

そう言う。

「なら、効くまで続けるだけ!!」

メデイスンはそう言って再び毒を発生させ、それを龍也目掛けて飛ばす。

だが、その毒は龍也に届かなかった。

全て風に弾かれてしまっているからだ。

それでもメデイスンは毒を発生させ続ける。

そんな状況は暫らく続くと、突如毒の発生が途切れる。

「ん?」

龍也は疑問に思いながらメデイスンを見る。

「体の毒……切れちゃった……」

メディソンはそう呟いて落下していった。

「チィ！！」

龍也は舌打ちしながらメディソンを追っかける。

「……ジュン、どジュン？」

メディソンは起き上がりながら辺りの様子を伺う。

「お、起きたか？」

メディソンは声が聞こえてきた方を向く。

そこには岩の上に座っている龍也の姿があった。

「……あんたが助けてくれたの？」

「ん？ お前、落下する時に体の毒が切れたって言ってただろ。だから鈴蘭畑に寝かせて置いたんだ」

そう言われてメディソンはもう一度辺りを見渡す。

確かにここは鈴蘭畑だ。

「何で助けたの？」

メディソンはそれが分からなかった。

自分は目の前の相手を殺そうとしたと言うのに。

「まあ、お前を助ける理由はないけど、助けない理由も無いしな」

そう言う龍也にメディソンはポカーンとした表情になる。

「……ップ、変な人間」

そして龍也はメディソンと雑談をする。

少しはメデイスンと打ち解けたと龍也は思った。

ある程度雑談をした後、龍也は出発する事にする。

「えつと……またね」

「ああ、またな」

メデイスンと挨拶を済ませ、龍也は歩き出す。

放浪編 その26

「んー、人里に来るのも久しぶりな感じがするな」

人里に訪れた龍也はそう呟く。

そして人里を歩いて行く。

龍也は人里で昼食を取ろうと思い、飯屋を探していく。

「龍也兄ちゃん!!」

「ん?」

自分の名前を呼ばれたので龍也は振り返る。

そこに居たのは子ども達であった。

その子ども達に見覚えがあると龍也は思い、思い出そうとする。

「……ああ、あの時の子ども達か」

そう呟きながら龍也はその時の事を思い出す。

人里の外で妖怪に襲われてた子ども達を助けた事を。

てっきりもう忘れていたかと思っていたが、ちゃんと覚えていたようだ。

「よ、寺小屋の帰りか？」

「うん！！　これから家に帰ってお昼食べてみんなで遊ぶんだ！！」
子ども達の中で一番元気がありそうな子どもがそう答える。

その様子を見て元気だなと龍也は思った。

「そっか。でも、人里の外には出ない様にな」

「はいー！！」

元気良く返事して子ども達は走ってその場から離れる。

「俺にも……あれ位の頃があつたな……」

子ども達の姿を見送りながら龍也はポツリとそう漏らす。

懐かしい気分になりながら龍也は再び足を進める。

そんな気分のまま曲がり角を曲がると誰かにぶつかってしまつ。

ちよつと抜けていたなと龍也は思いながら、

「すみません、大丈夫ですか？」

頭を下げながら謝罪の言葉を述べる。

「いや、こちらこそすまない」

すると相手からも謝罪の言葉が聞けた。

龍也は誰だろうと思って相手の顔を見てみる。

「慧音先生」

「おや、龍也君だったか」

龍也がぶつかった相手は上白沢慧音であった。

「何処かに行くつもりだったのかな？」

「はい、人里でお昼を取ろうと思ひまして」

「それなら直ぐ其処に蕎麦屋があるよ」

そう言つて慧音が指をさす。

慧音が指さした先には蕎麦屋の暖簾があつた。

「あ、ならお昼は其処で取ります」

そう言つて龍也は蕎麦屋に向かう。

「龍也君龍也君」

「はい？」

慧音に呼ばれて龍也は振り返る。

「私も一緒にいいかな？」

「はい、構いませんよ」

そして龍也は慧音と一緒に蕎麦屋に入って注文を取る。

「そう言えば龍也君は無名の丘にある洞窟に住んでいるんだよね？」

「そうですね。まあ、あまり居ませんけど」

そう言った後、龍也は出された水を飲む。

「あれ？ 俺、無名の丘に住んでるって言いましたっけ？」

慧音が自分の家を知っている事に龍也は疑問を覚える。

「ああ、その事なら前に天狗の新聞に書かれていたよ」

そう言われて龍也はああと思いついた。

最初にインタビューを受けた時にそんな事も書かれていたなど。

「それと少し前に外来人特集が組まれていただろう」

「ああ、ありましたね。俺の記事がメインだった様で気恥ずかしかったですけどね」

その事を思い出した龍也は頬をポリポリと掻く。

紅魔館でそれを見た時は驚いた物だ。

そして、それが原因で接近戦込みの弾幕ごっこが流行るとは龍也は思わなかった。

「ははは。まああの記事は君が助けた子ども達の間ではちょっとした人気だぞ」

「そんな事になってたんですか」

そんな感じで雑談をしていると、注文した蕎麦が来る。

そして蕎麦を食べ始める。

「美味しい」

自然とそんな感想が龍也の口から漏れる。

そのままガツガツと食べていく。

「い」馳走様」

「早いな。男の子はみんなそうなのかな」

慧音はそんな感想を漏らしながら箸を進めていく。

そして

「い」馳走様」

慧音も食べ終わる。

その後、勘定を払って店を出る。

「いい所を紹介して頂きありがとうございます」

「気に入って貰えた様で良かったよ」

慧音が笑顔でそう言う。

「それじゃあ龍也君、道中気をつけて」

「ええ、ありがとうございます」

慧音と別れた龍也は里の外を目指して足を進める。

途中で阿求の家に寄ったが留守だったので、女中さんによろしく言
っておいてくれと

頼んでおいた。

そして、人里を出る前に団子屋を見つけたので、途中で食べようと
思っ龍也は団子を買う。

それから龍也は人里を出る。

「んー……平和だ」

幻想郷の何所かを歩いている龍也はそう漏らす。

今回は珍しく、道中一度も妖怪の襲撃に合っていない。

無論、今のところは……ではあるが。

龍也はマッタリとした気分で歩いて行く。

少しすると大き目の岩を発見する。

一旦休憩しようと思い、龍也は岩の上に上がり腰掛ける。

そして空を見上げる。

青い空に流れる白い雲。

龍也はポケットとしながら空を見つめる。

すると、其処に何やら黒い点を発見する。

それが段々と大きくなる。

要するに何か近づいているのだ。

そして姿形が見て取れる距離になる。

「あれは……椋」

龍也はそう呟くと、椋が龍也の目の前に降り立つ。

「よっ」

「あ、龍也さん。こんにちは」

そう言って椋がペコリと頭を下げる。

「どうしたんだ？」

「あ、そうでした。文さんを見てませんか？ あ、文さんって言うのは」

「烏天狗の射命丸文だよな？」

「あ、ご存知でしたか」

「ああ、前にインタビューを受けたしな」

「……そう言えば前に文さんの新聞に龍也さんの記事が載ってましたね」

椀は思い出したかのように言う。

「てっきり隠し撮りでもされたのかと思いましたか」

「一番最初以外は隠し撮りだな」

「あの人は……」

そう言っ**て**椀が頭を押さえる。

「それはそうと文だったな。悪いが見ていないな」

「そうですか」

そう言**っ**て椀が肩を落とす。

「何かあったのか？」

「あ、実はですね、大天狗様から書類を預かってましてそれを文さんに届ける最中

なんです。能力を使っても見つからないので直接探しに来たんです」

「能力？」

「あ、私の能力は”千里先まで見通す程度の能力”です。分かり易く言うなら遠見が出来ると言っただ感じですね」

「へえー、凄いな」

龍也が率直な感想を漏らす。

すると、

「あっ……」

椀のお腹が鳴る。

その事に気付いた椀が顔を赤くしながら龍也を上目遣いで見る。

「団子あるけど……一緒に食うか？」

「……いただきます」

そう言っただけは岩の上に向かって龍也の隣に座る。

そして龍也が団子を渡してきたので、それを受け取って食べ始める。

「それにしても大天狗様は何で私にこう言う事を頼むんでしょうか。確かに、

私と文さんはそれなりの付き合いはありますが、他にも誰かいたでしょうに」

何やら愚痴り始めた。

「あれ、基本的に白狼天狗って暇だっつて前に言っただけ？」

「いやまあ……そんなんですけどね」

そう言っつて椀は苦笑いをする。

「そう言えば、椀って文と知り合いなのか？」

「ええ、まあ。一応、先輩後輩の間柄ですね、それと同じ大天狗様が上司です」

そして椀は言葉を続けていく。

「大体、文さんは能力はあるのに仕事に手を抜きすぎなんです。もう少し真面目に仕事をですね……」

また愚痴り始める。

「まあまあ」

龍也はまた団子を差し出す。

「ありがとうございます」

椀は礼を言いながら団子を受け取る。

「ずっと力を入れっぱなしってのも疲れると思うけどな」

「まあ、そうですね。それでもあの人は普段から手を抜きすぎなんですよ」

「ははは」

何やら権も大変な様だ。

龍也はこのまま権の愚痴に付き合っことにした。

「す、すみません。何か愚痴に付き合っって貰っちゃって」

「いいって。俺の方も前に組み手に付き合ってもらったしさ。お互い様だよ」

「そう言っつて貰えると助かります」

そうお礼を言っつて椀は岩の上から飛び降りる。

「それでは休憩も済んだので、また文さんを探しに行きますね」

「そう言えばそうだったな。それじゃ、またな」

「ええ、また。それと、お団子ありがとうございました」

そう言っつて頭を下げた後、椀は飛び上がる。

それを見送った後、龍也も岩の上から飛び降りる。

「さて、俺も行くかな」

そう言っつて龍也は体を伸ばし、歩き始める。

放浪編 その27

「この森も相変わらずだな」

龍也は魔法の森の中でそう呟く。

何故龍也が魔法の森の中に居るかと言うと、理由は特にない。

ただ、幻想郷を歩いている時に魔法の森が目に入ったので何となくそのまま魔法の森に入ってしまったのだ。

「…………お？」

龍也は何か人影らしき物を発見する。

何かなと思って龍也は近づいてみる。

「えーと、サニーミルクにルナチャイルドにスターサファイアだったか？」

龍也が声を掛けるとその三人はビクツとなって振り返る。

「えっと…………龍也…………さん？」

「お、覚えててくれたんだ。何時ぞやの雪合戦で会ったきりだったけど」

「ええ、まあ。それと”文々。新聞”に龍也さんの記事が載ってま

したから」

「ああ、あれか」

そう言っつて龍也は何か気恥ずかしくなる。

「そついやお前等はここで何やってるんだ？」

「私達は虫捕りに来たんです」

「虫捕り？」

「はい。珍しい虫が居ると言つ噂を聞いて」

「あ、そつだ。龍也さんも一緒にませんか？」

「俺も？」

そう言っつて龍也は少し考える。

と、同時にサニールとルナチャイルドがスターサファイアを引っ張つて少し離れる。

「ちよつと、何でこの人連れて行くのよ？」

「ほら、新聞に滅法強い外来人で書いてたじゃない。だからボディガードみたいな事をしてくれるかなつて」

「ああ、そう言えばそんな事書いてあつたわね」

そして、サニーミルクとルナチャイルドは連れて行ってもいいかな
と考える。

「おーい……」

「「「はい!?!?!」」」

龍也に突然声を掛けられ、三妖精は驚きながら振り返る。

「? 何驚いてるんだ?」

「いえ、別に」

「そっか。それと俺は暇だから一緒に行ってもいいぞ」

龍也がそう言つと、

「それじゃあ、行きましょー!」

ルナチャイルドは元気良くそう言った。

龍也は三妖精の後に続いて魔法の森の中を歩いて行く。

所々に虫を見かけたが、この虫達は三妖精の行っている珍しい虫ではないらしい。

何でも、探しているのはカブトムシとクワガタを足し合わせた様な虫なんだとか。

それを聞いた龍也はそんな風貌のカブトムシが居たようなど考え始めた。

龍也が考えに耽っていると、

「龍也さん！！！！！！」

何やら悲鳴が聞こえてきた。

何事だと思って龍也は悲鳴が聞こえてきた方に顔を向ける。

そこには巨大なクワガタに追いかけられている三妖精がいた。

そして何とか龍也の所まで来た三妖精は龍也の後ろに隠れる。

「何で追われる事になってるんだ？」

「それはルナが……」

そしてサニーミルクが簡潔に説明する。

ルナチャイルドが木の上に登って虫を探していると、足を滑らして落下。

その先の巨大なクワガタがあり、見事にそのクワガタの怒りを買ったらしい。

そして現在に至る。

「成程……」

「龍也さん！！ 前！！ 前！！」

スターサファイアが慌てた様に声を張り上げる。

目の前にはクワガタが迫ってきており、そのハサミで龍也と三妖精を挟み込もうとしている。

「おっと」

龍也は三妖精を抱えて跳び上がる。

そしてクワガタの反対側に降り立ち、振り返る。

「おお、凄い切れ味だな」

振り返った龍也と三妖精が見た物は挟み込んだ木が綺麗に切断されている光景だった。

あんな物をまともに受けたら龍也も三妖精も真っ二つになるであろう。

そして、その巨大なクワガタは反転して再び龍也と三妖精目掛けて近づいてくる。

龍也はそれを見ながら三妖精を降ろして、自身の力を変える。

玄武の力へと。

力を変えるのと同時に龍也の瞳の色が黒から茶に変わる。

そして両サイドから迫ってくるハサミを龍也は手で受け止める。

更にそれを掴んで、

「おおおおりゃあああああああ！！！！！！！」

後ろへ思いつきり投げ飛ばす。

飛んで行ったクワガタは魔法の森のどこかに落下した。

「っと、大丈夫だったか？」

龍也は力を消して三妖精に向き直る。

三妖精はポカーンとした表情で龍也を見ている。

「ん？ どうした？」

「やっぱり新聞の情報通り強かったんだなって」

ルナチャイルドがポツリとそう漏らした。

あの後、引き続き探してみたが珍しい虫は見つからなかった。

その時には日も暮れ始めていたので、そこで解散となった。

「暗くなってきたし、どこか野宿出来る場所が見つかればいいんだけど……」

暗くなり始めた魔法の森を歩きながら龍也はそう呟く。

普通なら不安がる場所であるが龍也の顔には不安はない。

襲われても撃退できる自信があるのと、いざとなれば空を飛べばいいと言う考えがあるからだろう。

「お？」

草木を分けて進んで行くと拓けた場所に出る。

そして其処には洋館が見える。

「あれは……アリスの家だったな」

龍也は泊めてくれないかと思ってドアの前まで行き、ノックをする。

少しするとドアが開かれる。

「こんな遅くに誰かと思ったら龍也じゃないの」

「よっ。いきなりで悪いんだが泊めてくれないか？」

「別にいいわよ。貴方に聞きたい事があつたし」

「俺に？」

「ええ、取り合えず上がって」

龍也はアリスに促されるままに上がっていく。

そして居間に辿り付く。

「飲み物は紅茶でいいかしら？」

「ああ、それでいいよ」

龍也がそう言った後、二人はソファアに座る。

少しするとアリスの人形がトレイに紅茶乗せて持って来る。

「ありがとう」

龍也は礼を言ってから紅茶を受け取る。

「それで、聞きたい事って？」

紅茶を少し飲んだ後、龍也はアリスに尋ねる。

「今、私は人形の巨大化と言う実験をしているの」

「人形の巨大化？」

「ええ。ほら、貴方と戦った鬼の伊吹萃香。彼女は自身を巨大化させる術を

持つてるでしょ？」

「ああ、そうだな」

そう言っつて龍也は萃香と戦った時の事を思い出す。

「なら、私の人形でも同じ様な事が出来るんじゃないかと思って色々実験しているんだけど」

そこまで言っつたところでアリスは言葉を一旦切つて紅茶を飲む。

「中々上手くいかないのよねえ」

そう言っつて溜息を吐く。

「それで、以前のロボットの話しの際の様に俺の話で参考になる物があるかもしれないと？」

「ええ、何かないかしら？」

そう言っつてアリスは龍也の目を見つめる。

「そうだな……そう言っつのはロボット物よりヒーロー物だろ……」

「ヒーロー物……」

「ああ。お約束としては何らかのアイテムを使って変身して巨大化するって言う」

「パターンが多いかな」

そこまで龍也が言うとアリスは何やら考え始める。

「アイテム……何らかの物を媒介とし、それをエネルギーとして人形に働きかければ」

「……いや、それより、それを媒介とした術式を探すなり生み出せば……」

「他には人形の素材を収縮自在の物に変えてみるとか……」

「収縮自在の物……ゴム製の物……いや、それでは強度に問題があるし、手に入れる」

「手段が……いや、香霖堂になら置いてあるか。それでも強度の問題は……合成とか……」

「でも、それは専門じゃないからなあ……」

「後は……巨大化からは離れるけど最初から大きい人形を作ると言う手段があるな」

「……今の所はそれが現実的かな」

そう言ってアリスはメモ帳を取り出す。

「それにするにしろ巨大化させるにしろ、気をつける事とかあるかしらっ」

「そうだな……まずは下半身の強化だな。大きいって事はそれだけ下半身に」

負担が掛かるからな。できるだけ頑丈にした方がいいな」

「ふむふむ」

「あ、そう言えば戦闘は想定しているのか？」

「ええ、それも一応想定しているわ」

「だったら懐に入られた時の対策が必要だな。例えば腹部から攻撃が出るとか、巨大な

人形から小型の人形が展開出来る様になるとか、頭部から攻撃が出来る様になるとかさ」

「ふむふむ」

「バリアの様なのが展開出来ると言つのもいいかもな。他には……」

そして議論が進んで行く。

「ふう、かなり参考になったわ。ありがとう」

「……ああ」

龍也は眠たそうに答える。

「あ、もうこんな時間だったわね。ごめんなさい、遅くまで付き合せて」

「いや、いいよ。俺は世話になる立場なんだしさ」

「兎も角、部屋に案内するわね」

そう言ってアリスは立ち上がる。

「頼む」

龍也も立ち上がり、アリスに後に続いて移動する。

そして部屋に到着する。

部屋に入ると龍也は学ランを脱いで椅子に掛ける。

「それじゃ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

挨拶を交わした後、アリスがドアを閉めるのと同時に龍也はベットに潜り込む。

そして目を瞑りって眠り始める。

放浪編 その28

「アリスの作ったご飯、美味しかったな」

魔法の森を歩きながら龍也はそう漏らす。

昨日、アリスの家に泊まった龍也は朝食も貰っていたのだ。

そして少し雑談をした後にアリスの家を出て現在に至ると言う訳だ。

「ん？」

歩いている龍也は足を止め、前方にある物を観察する。

茸だ。

ただ、異様に大きい。

大体……龍也の数倍程だ。

だが、龍也に然程の驚きはない。

これが普通の道端や森などで見かけたならば驚いたであろうが、こ
こは

魔法の森だ。

魔法の森なら大きい茸なんて物はそこまで珍しい物ではない。

だが、分からない事が一つだけ龍也にはある。

それはこの草がただの大きいだけの草なのか、それともただの草に擬態した妖怪なのか。

龍也は注意深くその草を観察していく。

「んー……普通の草に見えるな……」

観察し続けた龍也は、ただの大きな草と結論を出す。

そしてその草の横を通り過ぎ様とすると、

「ッ!？」

突如その草が襲い掛かってきた。

龍也は慌てて後ろに跳んで間合いを取る。

「妖怪だったのか。まったく分からなかったな」

擬態能力高すぎるだろ龍也は思った。

妖怪は不意打ちを外した事を気にせずに、龍也に迫ってくる。

龍也は落ち着いて迫ってくる妖怪を見据える。

そして、自身の間合いに入った所で、

「りゃー!ー!」

裏拳を放つ要領で腕を振るう。

すると、龍也の手の甲が当たった場所から千切れ、崩壊し、吹き飛んで行く。

元々が茸だからか耐久力は低い様だ。

「何だ、茸の欠片が無数に飛んできたから何事かと思って来てみた
ら龍也だったか」

「ん？」

龍也は声が聞こえて来た方へ振り返る。

「魔理沙」

そこに居たのは魔理沙であった。

「よっ」

そう言っつて魔理沙は近づいてくる。

「何があつたんだ？」

「ああ、実は……」

そして龍也は理由を話し始める。

「成程ねえ……」

魔理沙は理由を聞いて納得する。

「確かに茸型の妖怪は擬態してると見分けが殆ど付かないからなあ」

「何か見破るコツってないのか？」

「ああ、それなら簡単なものがあるぜ」

「簡単なの？」

「ああ、弾幕を掠らせるんだ」

「弾幕を？」

「おう。そうすると妖怪だった場合すぐに正体を現すぜ」

良い事を聞けたと龍也は思った。

「ありがとな」

「いって事よ」

礼を言われて魔理沙は満更でもないって表情だ。

「あ、そうだ。今暇か？」

「ああ、暇だけど」

「じゃあさ、茸狩りに付き合ってくれないか？」

「茸狩り？」

「ああ。私は魔法の媒介や実験には茸を多用してるんだけどさ、茸のストックが切れ
ててさ。だから茸狩りに来たんだけど、一人より二人の方が大量に
運べるだろ」

要するに人手が欲しい様だ。

「別にいいぞ。たった今世話になったばかりだしな、それぐいさせ
て貰うよ」

「やрий」

龍也が快く引き受けたので魔理沙は喜ぶ。

「じゃ、早速行こうぜ」

そう言って魔理沙は先に進んで行き、龍也も後に続いて付いて行く。

「この草でいいのか？」

「ああ、それでいいぜ」

「この草は？」

「あ、気を付ける。その草は衝撃を与えると爆発するぜ」

「マジ？」

「マジ」

「あれは？」

「あれは皮膚接触でも毒が回る毒キノコだな。あれを取る時はこの手袋を使うんだ」

「ゴム手袋？ どこにあったんだ、そんな物？」

「香霖の所にあつたぜ」

「何でもあるんだな、あそこは」

「あの見るからに毒草っぽい草は？」

「あれは食用草だぜ」

「マジで？」

「マジだぜ。見た目はあんなんだけど滅茶苦茶美味しいんだぜ」

「へえー」

「あれは?」

「おお、あれは実験に最適な茸だ!! ラッキーだぜ!!」

「あの見るからに毒茸っぽいの……実は食用?」

「いんや、ただの毒茸だ」

「そうか……」

「あの茸は……」

「馬鹿！！ それは茸型の妖怪だ！！」

「え？」

「私は今両手が塞がってるんだ、龍也が撃退してくれ！！」

「了解！！」

「龍也が居てくれたお陰で大量に持つて変える事ができたぜ」

魔理沙はホクホク顔でそう言う。

「ありがとな、龍也」

「いっていいって。俺もお前に世話になってるんだしさ」

「上がったか？ お茶ぐらいなら出すぜ」

「そこまで気を使わなくていいぞ。それにこれから実験するつもりなんだろ？」

「あ、分かる？」

「そりゃな。実験の邪魔をするのも悪いしお暇するよ」

「何か気を使わせたみたいで悪いな」

そう言っつて魔理沙は頬を掻く。

「それじゃ、またな」

「ああ、またな」

そして龍也は霧雨魔法店を後にする。

「ありや、何時の間にか紅魔館の近くに来てたのか」

龍也は紅魔館を見ながらそう漏らす。

「折角だし、寄ってくか」

そして龍也は紅魔館目指して歩いて行く。

「美鈴は起きてるかな……」

そう呟きながら紅魔館の門に近づいて行く。

「あ、起きてた」

「いやいや、そんな起きてる方が珍しいみたいない顔しないでくださいよー」

「ははは、悪い悪い。にしても……」

そう良いながら龍也は紅魔館の庭先を見る。

何やら忙しそうに妖精メイドが動いている。

「忙しそうだな。何かあるのか？」

「あ、実はですね、今夜にプリズムリバー楽団のライブがここであるんですよ」

「そうなんだ」

「ええ、それで今は中で飾りつけや掃除などをしてるんですよ」
それで忙しそうにしていた訳だ。

「あら、良い所に」

「はわあ!？」

突如、咲夜が現れる。

「何驚いてるのよ、美鈴」

「いえ、別に……」

「それはそうと、良い所になって？」

「そうそう、忙しそうにしている理由は知ってる？」

「ああ、美鈴から聞いたぜ」

「なら話が早いわ。実はね、人手が足りないのよ」

「人手が……ここから見る限りだと足りてる様に見えるけど？」

「見る限りはね。妖精メイドも大分マシにはなったけど、まだまだ手際が悪かったり
見てない所でサボろうとするしね」

そう言って咲夜は溜息を吐く。

「だからと言ってお嬢様に妹様、パチユリー様を働かせる訳にはいかないし、美鈴は門番、小悪魔はパチユリー様のお付があるしね」

「成程」

「だから貴方にも手伝って欲しいのだけど……」

「いいぞ、別に」

龍也は直にそう答える。

「よくここで飯を食わせて貰ったり寝床を貸して貰ったり本を読ませて貰ってるからな。それ位手伝うよ」

「ありがとう。それじゃ付いて来て」

そして龍也は咲夜の後の続いて紅魔館の中の入っていく。

少しすると何かの部屋の前に辿り付く。

「それじゃ、まずこれに着替えて」

そう言って咲夜はどこから出したのか分からないが、服を出す。

龍也はそれを受け取って観察する。

「これ……執事服か？」

「そうよ。一応は紅魔館で働くのだからそれなりの格好をして貰わないとね。
それに……」

そう言っつて咲夜は龍也の服を見る。

「結構汚れているわよ、それ」

「あ……」

咲夜に言われて龍也は学ランを観察する。

確かに、所々汚れている。

「碌に洗濯とかしてなかったんでしょ？」

「あ……」

確かに、汚れても手で払い落とすぐらいしかしていなかったなと龍也は思った。

「そう言っつ訳よ。貴方の着ているのは私が洗濯してくから」

「分かった。頼むよ」

龍也はそう言っつて部屋の中に入る。

少しすると、

「んー……やっぱりこう言っつた物は着慣れないな……」

執事服を着た龍也が部屋から出てくる。

「あら、意外と似合うじゃない」

咲夜が率直な感想を言う。

「そうか？」

咲夜に言われて龍也は自分の見える範囲で執事服を観察していく。

「取り合えず、貴方の服を渡して」

「ああ」

そう言って龍也は咲夜に自分の脱いだ物を渡す。

「ポケットの中の物は全部出したかしら？」

「ああ、全部こっちに移したよ」

「そう。それで貴方にして貰いたい事だけ……」

そう言いながら咲夜は目線を龍也の後ろに移す。

それに釣られて龍也は後ろを振り向く。

「まず、此処から端までの窓拭き。その後に廊下の雑巾掛けをお願いね」

「了解」

この距離は一人で手間だなと龍也は思った。

「それが終わったら外の手伝いをお願いできるかしら？」

「分かった」

「それじゃ、宜しくね」

そう言つて咲夜は消える。

咲夜が居た場所にはバケツと雑巾が置いてあつた。

「それじゃ、やるかね」

そう言つて龍也は自身の力を変える。

青龍の力へと。

瞳の色が黒から蒼に変わったのと同時に掌をバケツに向け、掌から水を放つてバケツに水を溜める。

そして雑巾を水に付け、絞り、窓拭きを始める。

「しかし、窓拭きなんて学校の大掃除以来だな」

そう呟くと何やら懐かしい気分になる。

「っと、モタモタしてる暇はないな。さっさとやらないと日が暮れるな、この距離じゃ」

そう言っつて龍也はペースアップをする。

そして暫らくすると、

「っし、終わり」

窓拭きは終了した様だ。

次は廊下の雑巾掛けだ。

雑巾を水に付け、絞った後に龍也は自身の力を変える。

青龍の力から白虎に力へと。

そして瞳の色が蒼から翠に変わる。

白虎の力を使っている状態なら風を纏わなくても、単純なスピードが大幅にアップする。

作業時間短縮のためだ。

「よーい……ドン……」

そして雑巾掛けがスタートする。

暫らくすると、

「よし、終わり」

雑巾掛けも終了する。

そして龍也はバケツがある所に行き、力を白虎から青龍にする。

力の変換が完了したのと同時に、龍也は掌をバケツに向ける。

すると、バケツの中に入っている水が浮かび上がる。

そしてその水が消滅する。

「っと、今何時だ？」

力を消し、龍也は懐中時計を取り出して時間を確認する。

「そろそろ日が落ちる頃か？」

龍也は時間を確認した後、懐中時計を仕舞い、バケツを持って外に出ようとすると、

「龍也」

声を掛けられる。

龍也は声が聞こえて来た方に振り返る。

「レミリア」

そこに居たのはレミリアであった。

「執事服、似合ってるじゃない」

「そうか？」

「ええ」

レミリアにも肯定され、案外似合ってるのかもなと龍也は思った。

「それで、どうしてその格好なのかしら？」

「ああ、それはな……」

そして理由を話し始める。

「成程ねえ……」

そう言ってレミリアは考え始める。

「妖精メイドの教育方針、本気で考えた方がいいかしら？」

「そうしとけ。咲夜の負担が溜まらないうちに」

「そうしとくわ。それはそれとして……」

そう言ってレミリアは龍也を見つめる。

「どっ、そのまま私専属の執事にならない？」

「悪いが断る」

「あら、残念」

レミリアはそう言って懐から何かを取り出す。

「はい、これ」

「これは……チケット？」

「そう。プリズムリバー楽団のね」

「いいのか？」

「ええ、貴方も聞いていきなさい」

「ありがとう」

龍也は礼を言ってチケットを仕舞う。

「俺は外の方へ手伝いに行くけど、レミリアはどうする？」

「私はパチエの所に行くわ」

「そっか。それじゃ、後でな」

「ええ、また後でね」

レミリアと別れ、龍也は外の方を手伝いに向かう。

「ふー、終わり」

外の準備も終わり、龍也はそう言いながら体を伸ばす。

「お疲れ様」

龍也の近くに咲夜が音も無く現れる。

「っと、咲夜か。どうしたんだ」

「もう準備も終わったから好きにしていいわよって言いに来たの

「よ」

「そっか、ならそうさせて貰うよ」

「それはそうと、ありがとつ。お陰で間に合ったわ」

「いって事よ。あ、そう言えばライブって外でやるのか？」

「ええ。今夜は天気が良いからね」

そして咲夜と少し雑談をした後、龍也は会場内を見て回る。

「ん？」

会場内を見て回っていると、ある人物達を発見する。

ルナサ、メルラン、リリカのプリズムリバー楽団だ。

「ルナサにメルランにリリカ、何してるんだ？」

「あ、龍也」

龍也の声に反応して三姉妹が振り返る。

「よっ。で、何してたんだ？」

「本番前のリハーサルだよ」

「あんまり音を出さない様にだけどね」

「それはそうと龍也は何でそんな格好をしてるの？ 転職？」

「いんや、バイトみたいな感じかな」

「ふーん。それよか龍也も聴いてくの？」

「ああ、そのつもりだ」

「なら楽しみにしていて。新曲が多数あるから」

「なら楽しみにさせて貰うぜ」

その後少し雑談をし、また会場内を回っていく。

「龍也ー！！」

「ん？」

龍也が振り向くとフレンドールが龍也に向かって飛び込んで来た。

「っと！？」

飛び込んで来たフレンドールを龍也は抱きとめる。

「もう！！ 来てるなら来てるって言ってよ」

「悪い悪い」

そう言いながら龍也はフレンドールを降ろす。

「こんばんは、龍也」

「こんばんはです、龍也さん」

挨拶をしながらパチユリーと小悪魔が現れる。

「こんばんは、パチユリーに小悪魔」

龍也も挨拶を返す。

「似合ってるじゃない、その執事服」

「咲夜とレミリアにも言われたけど似合ってるのか？」

「ええ、似合ってるわよ」

「お似合いですよ、龍也さん」

「ね、ね、龍也」

「ん？」

フレンドールに腕を引っ張られた龍也はそちらに振り向く。

「私あっちの方に行ってみたい」

そう言ってフレンドールは向こう側を指さす。

「んじゃ、行ってみるか？」

「うんー!」

「あ、じゃあまた後でな」

「ええ、また後でね」

そしてフランドールと一緒に会場内を回っていく。

暫らくすると、プリズムリバー楽団のライブが始まる。

ライブが始まるとレミリア達と合流する。

良く見えないとフランドールが言ってきたので、龍也はフランドールを

肩車してライブを見ていく。

リリカの言っていた通りに新作が多数あった。

そして、言葉では上手く言い表せない感動があった。

このライブを聴けて良かったと龍也は思った。

そしてライブも終わり、後片付けが始まったので、龍也もそれを手
伝う。

片付けが終わった頃には日付も変わった後だったので、龍也は紅魔
館に

泊まる事にした。

放浪編 その29

「ん……いい天気」

紅魔館の外に出た龍也は体を伸ばしながらそう呟く。

「あらあら、有能な執事が居なくなってしまったわ」

咲夜が残念そうにそう言う。

「執事になったつもりはないけどな」

そう言いながら龍也は振り返る。

「また手が足りなくなったら言ってくれ。その時はまた手伝うよ」

「あら、それはありがとう」

「にしても咲夜も大変だな。殆ど一人で館を切り盛りしてるんだろ？」

「慣れよ慣れ。そこまで大変と言う訳ではないわ」

そう言う咲夜の表情はどうって事ないと言った表情だ。

「あ、そうそう」

ふと、咲夜が何かを思い出した表情になる。

「どうした？」

「新しいスペルカードを作ったからそのテストをしたいのだけど……
お相手願える？」

「構わないぜ」

龍也はそう言った後、後ろに跳んで間合いを取り、構えを取る。

構えを取った龍也を見ながら咲夜はスペルカードを取り出す。

そして、

「時符『プライベートスクウェア』」

スペルカードが発動する。

「……？」

何も起きない。

その事に龍也は疑問を覚える。

スペルカードが発動したら弾幕なり何なりが現れる筈である。

なのに何も起こらない。

だが、そんな龍也の疑問も直に氷解する。

「ッ！？」

咲夜が動いた。

それはいい。

だが、速過ぎるのだ。

咲夜の動きが。

前に戦った時とは比べ物にならないスピード。

龍也は肉体強化のスペルカードではないかと推察する。

そう推察した時には、咲夜はもう龍也の目前に迫って来ていた。

龍也は慌てて拳を放つ。

が、その時には咲夜の姿は目の前から消えていた。

そして、咲夜は龍也の後ろに現れる。

龍也が顔を後ろに向けたのと同時に龍也の首にナイフが翳される。

「……………何をした？」

「当ててみて？」

咲夜が若干色っぽくそう言う。

「……………自身の肉体を強化した？」

「外れ」

そう言われて龍也は考え込む。

そして咲夜の能力を思い出す。

咲夜の能力は”時間を操る程度の能力”である。

ならばそれを使った物ではないかと龍也は考える。

時間を停止した様子はなかった。

それならば、咲夜が移動している状態を見る事はできなかったであろう。

ならば、

「……自分以外の時間の流れを減速させた？」

「正解」

咲夜はそう言って龍也からナイフを放す。

「てか、時間を止められるのは知ってたけど減速とかもできたんだな」

そう言いながら龍也は咲夜に振り返る。

「ええ。私は時間の停止、減速、加速ができるわ」

咲夜はそう言いながらナイフを仕舞う。

「普段は時間を減速させて食料を保存したり、逆に加速させて年代物のワインを作ったりしてるんだけどね」

「へえー」

便利な力である。

「そのせいで戦闘に応用させると言うのは思い付かなかったのよね」

「だけど、最近になって思い付いたと？」

「そう言う事。それで色々調整し、スペルカードにして貴方で試してみたの」

「だけど……ルール違反の可能性があるわね」

「ああ……回避不可能の攻撃は禁止だっけ」

「スペルカードルール……弾幕ごっこではそう言った物も禁止だ。」

咲夜の台詞から減速の割合も落とすのだらう。

と言うより、どれくらい遅くなるかは分からないが白虎の力を解放した

状態でも反応できない可能性がある。

龍也はそう思った。

「だったら減速している時間を減らすか、減速の割合を減らしたらどうだ？」

「そうした方が良さそうね」

咲夜の中でもそうする事に決まった様だ。

「それはそうと、何れは貴方へのリベンジを果たさせて貰うから」

「なら、負けない様に俺も腕を磨かなきゃな」

そう言っつて龍也は門の方へ移動する。

「それじゃ、またな」

「ええ、またいらっしやい」

「咲夜ー、美鈴が立ったまま寝てるぞー」

「美鈴!!!!!!」

「ごめんなさい!!!!!!」

「ここは……霧の湖か？」

適当に森の中を歩いていたら霧の湖に着いた様だ。

そしてそのまま歩いていると、

「ッ!？」

背後から何かを感じ、その場から離れる。

すると、龍也が居た場所に十数個の氷の塊が命中する。

「流石あたいのライバル!! よく避けたわね」

「チルノか」

氷で分かったいたが、放ってきたのはチルノであった。

「チルノちゃん、行き成り弾幕を放つのはダメだって……」

「違うよ、あたいのライバルの腕が鈍ってないか試したんだよ」

「まあまあ」

喧嘩になりそうだったので龍也が宥める。

「処でどうしたんだ？」

「あ、龍也。これ見てよこれ」

そう言つてチルノは紙を龍也に手渡す。

「紙？」

「見普通の紙である。」

龍也は一通り紙を見ると裏返す。

「ん？」

すると何やら書かれている。

「 $36 + 57$ 」

簡単な足し算である。

「これがどうかしたのか？」

「これの答え分かる？」

「これの答えか？ 93だろ」

龍也が即答すると、チルノと大妖精は尊敬の眼差しを龍也に向ける。

「凄い、こんな簡単に答えるなんて流石あたいのライバル」

「凄い……」

どうやら、妖精にとっては二桁同士の足し算は難しい様だ。

「てか、どうしたんだこれ？」

「実はね……」

チルノが事情を話し始める。

何でも、道を歩いていたら人間にこれを渡されたそうだ。

それで分からなくてずっと悩んでいたようだ。

「大ちゃんに聞いても分からないって言うし」

「一桁同士の計算なら大丈夫なんですけど……」

「……若しかして筆算って知らないのか？」

「筆算？」

二人は首を傾げる。

「筆算って言うのはな……」

龍也は近くに落ちていた枝を拾って筆算の説明をする。

「すっげー！！ これならどんな数も計算できる」

「こんなやり方があったんですね」

チルノと大妖精は大喜びの様だ。

「これならどんな問題が来ても平気だ！！ 待ってるよー」

そう言いながらチルノは森の中へ消えていく。

「待ってよ、チルノちゃん」

大妖精もチルノを追って森の中へ消えていく。

元気だなと龍也はその様子を眺める。

そして自分も出発しようかと思つて足を進めると、霧の湖から魚が跳び上がる。

それを見た龍也は小腹が空いてきたなと感じる。

「……………魚でも釣つて食べるか」

龍也はそう呟きながら自身の力を変える。

玄武の力へと。

瞳の色が茶に変わったのと同時に、土でできた棒状の物を生み出す。

「えつと……………」

そして周囲を見渡す。

「あつたあつた」

木に巻き付いている蔓を発見する。

蔓が巻かれている木に近づき、蔓を取って土でできた棒状の物に付ける。

そして蔓の先端に土でできたフックを付ける。

その後、湖の近くに行つて釣りを始める。

通常であれば、この様に土でできたもので釣をすれば竿が折れたり、フックの部分が溶けてしまつてあつた。

だが、その土を制御しているのは龍也だ。

釣で壊れたりはいしない。

龍也はのんびりと釣を楽しむ。

そして、暫らく時が立つ。

「……釣れないな」

中々魚が釣れない。

初めての釣りだからか。

「釣れてるかい？」

ふと、背後から声が掛かる。

龍也が振り向くと、そこには白い髪をし、リボン付けた少女がいた。

彼女も釣りに来たのであろうか。

「いや、全然だ」

龍也は素直にそう言う。

「そう」

その少女はそう言うと、龍也の隣に座って釣りを始める。

「そう言えば初めて見る顔ね」

「此処でって言うか釣り自体初めてだしな」

そう言って龍也は少女の方を向く。

「俺は四神龍也。あんたは？」

「四神龍也……若しかして慧音が言った」

「あれ、慧音先生の知り合い？」

「ええ、まあね」

そう言つて少女は龍也をジロジロ見る。

「言われてみれば慧音が言つて格好ね……あ、私の名前は藤原妹紅」
目の前の少女は妹紅と言う名の様だ。

「慧音が言つてわよ。自分の生徒の命の恩人だつて」

「ああ、あの時の事が……」

そして、龍也は妹紅と雑談をしていく。

その中で妹紅は順調に魚を釣り上げていく。

「……良く釣れるな」

今だの釣上げ数ゼロの龍也は羨ましそうに妹紅を見る。

「ま、経験の差ね」

そう言いながらもまた魚を釣上げる妹紅。

それから暫らく時が流れる。

「……………」

「ま、まあ、今日は運が悪かつただけだつて」

一匹を釣れなかつた龍也を妹紅が慰める。

すると、龍也のお腹が鳴る。

「あー……焼き魚にするけど食べてく？」

「食べてく」

そして、落ちている木を集めて火を起こして魚を焼いていく。

その後、焼けた魚を取って食べてく。

「美味しい」

お腹も空いていたからだろう。

龍也は普段より美味しく感じた。

そして次々と食べていく。

「男の子って良く食べるわね」

龍也の食べっぷりを見て妹紅はそう呟く。

そして、妹紅も焼き魚を食べ始める。

放浪編 その30

「はあああああああああ！！！！！！」

龍也は両手を前方に突き出す。

すると、両手の掌から超小型の竜巻が発生する。

今の龍也の状態は翠輝く瞳に翠色の髪。

白虎の力を解放した状態だ。

その竜巻は龍也の前方に居た猿に近い姿をした妖怪達を呑み込み、吹き飛ばしていく。

龍也が竜巻を放ち終わった瞬間、龍也の背後から同種の妖怪が襲い掛かる。

そして龍也の頭を吹き飛ばそうと腕を振るう。

だが、その腕は龍也の頭に届かなかった。

届く前に龍也が自身の体から突風を生み出したからだ。

不意打ちを仕掛けた妖怪はその突風をまともに受けて吹き飛ばされ、龍也から

少し離れた地面に墜落する。

が、然程間を置かずに立ち上がる。

ただ風で吹き飛ばされただけか、対したダメージは受けてはいない様だ。

そして、立ち上がった妖怪が龍也に近づいて襲い掛かろうと思った時、

妖怪の視線の先に龍也はいなかった。

だが、どこに居るかは直に気付いた。

何故なら、龍也は既に妖怪の懐に潜り込んでいたからだ。

迎撃しようとして妖怪が腕を振り上げた時には、もう龍也の拳は放たれていた。

「零距离突風」

そして龍也の拳が妖怪の胴体に叩き込まれ、拳から突風が発生する。

妖怪はそのまま遠くまで吹き飛ばされていった。

周囲に気配がなくなったのを確認した後、龍也は一息吐く。

「……………やっぱりだ」

自身の掌を見ながら龍也はそう呟く。

「疲労感が……………なくなっている」

そう、疲労感がなくなっていたのだ。

力を解放した状態でいれば、何もしていなくても疲労感が増していく。

それが限界までいくと、力を解放した状態が解けてしまう。

だから龍也は力を解放した状態でいられる時間を延ばそうとしてきた。

単純に力を解放した状態になり続けると言う方法で。

それが成功したのか、少しずつその時間は延びていった。

だが、それでも無制限と言う訳ではなかった。

何故急に疲労感が無くなったのだろうか。

「……若しかして」

龍也には思い当たるが一つだけあった。

「萃香と戦ったせいか……」

そう、萃香との戦闘。

戦いの中で解放状態を無理矢理維持した。

そして、あの戦いは死に掛ける様な戦いであった。

あの死闘が自分を強くしたのであろうか。

確かに、今までも強者と戦った後は自分でも分かるぐらいに強くなっていた。

だが、それが何度も都合よく起こるのであるのか。

「……考えても仕方ないか」

そう言って龍也は自身の力を消す。

どうせ考えた処で答えは出ないのだ。

「自分の強さに疑問を覚えなくていい」

そう、大切なのは自分を信じる事。

「自分の強さを、そしてこいつ等を信じればいい」

こいつ等とは、自身の中に居る四神の事。

妖夢と戦い、負けて、そして修行している時に出した答え。

その時の事を思い返していると、心が楽になった気がした。

一人ではないと言うのは心強い事なのかもしれない。

「……よし!!」

龍也は両手で頬を叩いて気持ちを入れ替える。

「そう言えば……今なら考えてた技、使えるかな」

そう言って龍也は考え始める。

四神の力を使った状態だけでは出力が足りない。

かと言って、解放した状態でも技発動前に通常状態に戻ってしまうだろう。

だが、今ならどうだ。

力を解放した状態の制限時間が無くなった今なら。

そして、龍也は考えながら歩き始める。

「ん？」

今日も今日とで幻想郷を歩いていた龍也は、気付けば向日葵に囲まれていた。

「ここは……太陽の畑だったか？」

「正解」

龍也がそう言うのと後ろから声が掛かる。

そして龍也は振り返る。

「幽香」

「元気そうね、龍也」

そこに居たのはやはりと言つべきか幽香であった。

「そういや、ここにお前の家があるんだっけか？」

「夏場だけのね」

「？ どう言つ事？」

「つまり、夏以外は貴方と同じ様に私も幻想郷中を回っているのよ」
幽香は笑顔でそう答えてくれた。

「そうそう、お昼食べてく？」

そう言われると、僅かに空腹感がある。

ここは言葉に甘えようと龍也は思った。

「じゃあ、頂いていくよ」

「分かったわ、それじゃ付いてきて」

龍也は幽香の後に続いて移動する。

暫らくすると幽香の家に着く。

そして上がり、居間で少し待っていると幽香が料理を運んでくる。

メニューは野菜を中心とした物だ。

それを食べた後、龍也は幽香と雑談をしていく。

「ああ、そうだ。ちょっといいか？」

「何かしら？」

「新しいスペルカードを作ろうと思ってるんだけど少し助言をくれないか？」

「助言を？」

「ああ。弾幕ごっこのルール違反じゃないか見て欲しいんだ」

龍也が作るうとしているのは力を解放した状態でのスペルカード。

力を解放した状態で使える技をスペルカードにしようと言うのだ。

だが、まだ自分一人では判断が付かないので、龍也は幽香に助言を求めたのだ。

「ええ、構わないわ」

「ありがとう」

そしてスペルカードを作り始めていく。

今回作ったのは四枚。

一枚目は、憤怒『朱雀の怒り』

通常戦闘では、相手に向けて広範囲、高密度の火炎放射を放つ。

その後に朱雀を模した炎の塊を相手に飛ばし、炸裂させると言う技だ。

弾幕ごっこでは、広範囲、高密度の紅色の弾幕を相手に向けて放つた後、朱雀を模した炎の塊を相手に飛ばすと言うスペルカードだ。

二枚目は、憤怒『白虎の怒り』

通常戦闘では、巨大な竜巻を発生させて相手を飲み込んでダメージを与える。

その後、白虎を模した風の塊を相手に叩きつけ、炸裂させると言う技だ。

弾幕ごっこでは、渦を巻くように飛ぶ翠色の弾幕を大量に放ち、その後に

白虎を模した風の塊を相手に突撃させると言うスペルカードだ。

三枚目は、憤怒『玄武の怒り』

通常戦闘では、地割れを起こした後に地面を隆起させて地割れを閉じて相手を挟み込む。

その後、玄武を模した土の塊を上空から叩き落して炸裂させると言う技だ。

弾幕ごっこでは。相手の両サイドに茶色の弾幕を生み出して挟み込む様に放ち、その後、玄武を模した土の塊を落下させると言うスペルカードだ。

四枚目は、憤怒『青龍の怒り』

通常戦闘では、圧倒的な水量で相手を叩き潰し、その後に青龍を模した水の塊を斜め上空から相手にぶつけ、炸裂させると言う技。

弾幕ごっこでは、相手の頭上から大量の蒼色の弾幕を降らし、その後に青龍を模した

水の塊を斜め上空から突撃させると言うスペルカードだ。

「ふいー、終わった」

「お疲れ様」

幽香が労いの言葉を掛けてくれる。

「っと、もう夜か」

気付けば外は真っ暗になっていた。

「悪いな、こんな遅くまで付き合わせて」

「別に構わないわ」

そう言って幽香は笑う。

「それにしても、随分と思いついた技を作った物ね」

「ああ、俺の技の中には広域広範囲殲滅型の技がなかったからなあ
だから作ってみたと言えは続ける。」

「チャージ時間などを考えれば通常戦闘ではそうそう使えはしないだ
ろう。」

「威力と範囲と密度を落とせば別ではあるうが。」

「だが、弾幕ごっこならば使えるだろう。」

「ある種、弾幕ごっこでの切り札的なスペルカード。」

「言うなれば、ラストスペルと言ったところであろう。」

「そうそう、魔理沙から聞いたわよ。異変を解決したんだって？」

「ああ、あれか……」

「魔理沙が自分が解決したかったのに愚痴ってわよ」

「つつてもあれは萃香が自分の負けだって言っただけだからなあ」

「萃香って、伊吹萃香の事？」

「そうだけど……知ってるのか？」

「ええ、随分久しく会ってなかったけどね。それはそうと萃香が自分の負けだつて
言つてたつてどう言う事？」

「ああ、それはな……」

そして龍也はその時の事を説明する。

「成程、それで自分の負けか。萃香らしいわね」

「だから俺は萃香にリベンジ宣言をした。もっと強くなって、また戦つて俺が勝つつてな」

「貴方なら強くなれるわ。萃香よりも」

そして誰よりもと幽香は小声で続ける。

「ん？ 何か言つたか？」

「ううん、別に。それはそうと、今日は泊まっていきなさい」

「いいのか？」

「ええ」

「それじゃ、お言葉に甘えさせて貰つよ」

その後、酒盛りをし、幽香に案内された部屋で就寝した。

龍也が寝入った後、幽香は風呂に入りながら思う。

龍也はどんどん強くなっている。

自分が思っている以上の速さでと。

それは分かり切っていた事だが幽香は嬉しく思う。

きっと、自分が思っているよりも早くに自分と対等以上の強さを身に着けるであろう。

その時こそ龍也と全力で戦える日。

幽香はその日を待ち遠しく想う。

「それにしても……私を……女を待たせている事に気付かないなんて、中々

罪作りの男ね……龍也は」

そんな幽香の呟きは、水音で掻き消えていった。

放浪編 その31

朝方、幽香の家で朝食を貰って暫らく。

太陽の畑を出た龍也は次にどこへ向うか考える。

だが、直に考えるのをやめる。

別に何か目的がある訳ではないのだ。

何も考えずに歩いている方が楽しめると言うものだ。

「にしても言い天気……ん？」

空を見上げると龍也は何かを見つける。

黒い点だ。

それがどんどんと大きくなる。

「ッ!？」

それが龍也の目の前で着地する。

着地した影響で砂埃などが舞い上がる。

龍也は両手を口元まで持っていき、砂埃などを防ぐ。

砂埃が晴れていく。

砂埃を起こした人物は、

「どうもー！！ 清く正しい射命丸文でーす！！」

射命丸文であった。

「やっぱりお前だったか」

「あや、分かりましたか？」

「俺の知り合いには超高速で突っ込んでくる知り合いはお前しかないからな」

まあ、隙間を使って現れるどこかの妖怪よりはマシかなと龍也は内心思った。

「それよか、俺に何か用か？」

「はい！！ とても重要な用があります！！」

そう言っつて文は手帳を取り出して顔を近づける。

「何でも異変が起き、それを解決したのが龍也さんだって言っつじゃありませんか！！」

「ああ、一応そつだな」

「それを聞いた時に直に龍也さんが住んでいる洞窟に向ったのですが、ご不在だった様で」

「まあ、基本的に居ない方が多いからな」

「それでも諦めなかった私は幻想郷中を飛び回って探しました!!」
「何やら文の語りに力が入る。」

「ですが、今日、やっと見つけました!!」

少々演技が入っている様な気がしたが、龍也は気にしないで置く事にした。

「と、言う事で!! 私のインタビューに答えてください!!」

「あ、ああ、別にいいぞ」

文の熱意に押されながら、龍也はインタビューを受ける事を了承する。

「ありがとうございます!! では、早速インタビューの方に移させていただきます!!」

文はそう言っ手帳にペンを走らせる準備をする。

「今回はどの様な異変だったのですか？」

「色々な奴等を集めて宴会させる異変だな」

「ほうほう。何とも平和的な異変ですね」

そうやって文はペンを走らせる。

「それで、犯人は誰だったんですか？」

「伊吹萃香って言う鬼だよ」

「ほうほう、鬼で伊吹萃香……」

そうやって文の動きが止まる。

「ん？ どうした？」

「あ、あの、その伊吹萃香さんってこれ位の大きさで、こんな感じで角が生えてたり
しますか？」

そうやって文は手で説明する。

「ああ、合ってるぞ」

龍也がそう言うのと文の動きが完全に止まる。

そして、何やらブツブツ呟き始める。

「おーい、文？」

「ひゃい!？」

龍也が声を掛けると文は大げさに反応する。

「どうかしたのか？」

「いや、実はですね、今の妖怪の山を統治しているのは天狗なのですが、昔は鬼が統治していたのです。ですがある時、妖怪の山にいた鬼全てがどこかに消えてしまいました」

ね。それから妖怪の山は天狗が統治する事になったのです」

「ほうほう」

「ですが、鬼が再び妖怪の山に戻ってくるとなればそれはもう一大事です。下手をすれば全面戦争の恐れが……」

「あー、文」

「何ですか？」

「多分、そんな状況にはならないと思うぞ」

「へ？」

「いやな、萃香と色々話をしたけど、妖怪の山をどうしようとしてのは感じられなかったぞ」

「そう……何ですか？」

「ああ。心配だったら博麗神社に行ってみたらどうだ？ 萃香は博

麗神社

よくいるみたいだしな」

「……分かりました。萃香さんに会ってみます」

文はそう言って飛び上がり、羽を羽ばたかせて博麗神社に向って行った。

それを見送った後、龍也は再び歩き始める。

気付いたら人里が見える距離まで来ていた。

龍也は適当に回って行こうと思い、人里の中に入っていく。

暫らく人里の中でフラフラしていると、

「龍也さん」

自分の名前を呼ばれる。

龍也は呼ばれた方に振り返る。

「阿求か」

そこに居たのは阿求であった。

「こんにちは、龍也さん」

「ああ、こんにちは」

挨拶を交わすと、

「あの、少しいいですか？」

阿求がそう切り出して来る。

「ん、何だ？」

「実は龍也さんに頼みたい事があるんです」

「頼みたい事？」

「はい、私を冥界の方へ連れて行って欲しいんです」

「冥界に？」

「はい。私が幻想郷縁起と言う物を書いているのはご存知ですよね？」

「ああ。前にインタビューの約束も受けたしな」

「あ、覚えていてくれたんですね」

そう言つて阿求は嬉しそうな顔をする。

「で、今は幻想郷の地名を書いているんですが、些か冥界の方の情報不足してまして」

他の場所なら人里の自警団の人に護衛をして貰えばいけるんですけどねと阿求は続ける。

「ですが、冥界へは飛べないと行けないと聞きました。人里で飛行できる人なんて殆ど

いませんし、長距離を飛べる人は慧音先生しか居ません。ですが、慧音先生はお忙し

そうにしていますで、どうしようかと思っていますと」

「俺が現れたと？」

「はい」

そう言っつて阿求は頷く。

「あ、勿論龍也さんのご都合が付けばですが」

「いいぞ」

「え？」

「別に対した用事もないしな」

「あ、ありがとうございます」

そう言っつて阿求は頭を下げる。

「今から行く……でいいのか？」

「あ、一旦屋敷の方に戻っつてその旨を伝えてくるので待っつて貰えますか？」

「ああ、分かつた」

龍也がそう言っつと、阿求は走りながら移動していった。

龍也は暫らくポーツとしながら阿求が戻っつてくるの待つ。

「あ、お待たせしました」

そう言っ て阿求は走りながら戻っ てくる。

「大して待っ てないよ」

そう言っ て阿求の方へ向き直る。

「それじゃ、行くか」

「はい」

龍也は阿求を背負っ て飛び上がり、冥界を目指す。

「あの門の先が冥界だ」

「あの先が……」

龍也と阿求の目の前に巨大な門がある。

阿求は門の大きさに少々圧倒されている。

「それで、あの門をどうやって開けるんですか？」

阿求は門を開けて入るものだと思います、龍也に尋ねる。

「開けない」

「え？」

「あの門の上を通り越えていく」

そう言っつて龍也は門の上を指さす。

「……門の意味ってあるんですか？」

「安心しろ。俺も疑問に思っているから」

そして、龍也は高度を上げて門を越えていく。

そこから暫らく進んで龍也は着地し、阿求を降ろす。

「ここが冥界だ」

「ここが……」

阿求は物珍しそうに辺りを見ていく。

そして一緒に奥の方まで歩いて行く。

「綺麗な所ですね」

「ああ。俺も最初に来た時は驚いたよ」

そして雑談をしながら歩いて行く。

「これで冥界に関しての事は書けそうです」

「そういつはよかった」

冥界を自分の目で見た事で阿求は満足そうだ。

「それで……」

「次は白玉楼だろ」

「はい。お願いしますね」

そして龍也は再び阿求を背負って飛び上がり、移動する。

暫らくすると、長い階段が見えてくる。

「あの階段の先に……」

「そう。あの先に白玉楼がある」

そして、龍也は高度を上げながら進んで行く。

普通に階段を上がって進んで行けば日が暮れてしまっただ。

少しすると、白玉桜の門の前に辿り付く。

「大きな門ですね。私の所より大きい」

阿求は門を見てそんな感想を漏らす。

そして門を開けて中に入っていく。

「わぁ………」

阿求が白玉楼の庭を見て感嘆の声を上げる。

確かにここの庭は見事なものだからなと龍也が思っているよ、

「ッ!？」

殺気を感じた。

龍也は自身の力を朱雀に変えながら阿求の近くに移動する。

黒から紅に変わった龍也の瞳は襲撃者を捕らえる。

襲撃者が刀を振るったのと同時に、龍也は二本の炎の剣を生み出し、
その

一撃を受け止める。

「曲者め!! 白玉楼に一体何の……って、龍也さん？」

「やっぱり妖夢か」

そして互いに剣を下ろす。

「まあ、勝手に入ってきた俺達も俺達だが、せめて相手を確認してから
斬り掛かってくれ」

「す、すみません」

そう言っつて妖夢は楼観剣を鞘に仕舞う。

そして龍也も炎の剣を消して阿求に向き直る。

「怪我はないか？」

「あ、はい。それよりも龍也さん、瞳の色が……」

「ああ、これか。俺の能力の影響だな」

そう言っつて龍也は力を消す。

すると瞳の色が紅から黒に戻る。

「あ、戻った」

「ま、能力も含めてインタビューを受けた時に話すよ」

「それで、お二人は白玉楼に何の御用ですか？」

「ああ、実は……」

そう言っつて龍也は事情を話し始める。

「成程……それでしたら幽々子様に……」

「別に構わないわ、妖夢」

妖夢の背後から幽々子が現れる。

「幽々子様」

「構わないから案内して上げなさい」

「分かりました。では、阿求さん、ご案内しますので付いて来て下さい」

「あ、はい」

そして阿求は妖夢の後に付いて行く。

「ごめんなさいね。妖夢が斬り掛かった様で」

「ま、勝手に入った俺達も俺達だしな。お互い様だ」

「そう言ってくれてありがとう。妖夢ももう少し落ち着きがあればねえ」

そして阿求と妖夢が戻って来るまで、龍也は幽々子と雑談をする。

阿求と妖夢が戻って来ると、別れの挨拶をし、龍也と阿求は白玉楼を後にし、人里に戻る。

そして、阿求の屋敷の前に戻る。

「本日はありがとうございました、龍也さん」

そう言って阿求は頭を下げる。

「どういたしまして」

「あ、よろしければ今日は泊まっていきませんか？」

確かにもう日が落ちている。

そしてお腹も減ってきている。

なら泊まっていこうと龍也は考える。

「じゃあ、泊まらせて貰うよ」

その日は阿求の屋敷に泊まる事になった。

放浪編 その32

「ここは……」

今日も幻想郷のどこかを歩いていた龍也。

気付けば今まで歩いていた場所とは風変わりな場所に出る。

龍也は辺りを見渡しながら進んで行く。

自分はこの景色を見たことがあるぞと思いながら。

「……思い出した、たしかここはマヨヒガだったか？」

幽々子が起こした異変を解決するために動いた時に通った場所だ。

確か、普通はこれない場所だと橙が言っていたなと龍也が思い出すと、

「あれ、お兄さん？」

龍也の後ろから声が聞こえる。

茶色い髪をし、猫耳を生やした女の子。

橙だ。

「ようっ」

「こんにちは、お兄さん」

そう言っただけで橙が龍也に近づいてくる。

「お兄さん、運が良いんですね」

「そうか？」

「そうですよ。普通はここに何度もこれないんですよ」

そう言いながら橙は龍也の腕を引っ張る。

「お兄さん、少し手伝ってください」

「何を？」

理由を聞けないまま龍也は橙に腕を引っ張られて移動する。

少し進むと猫の溜まり場に着く。

「で、俺に手伝って欲しい事って？」

「それはですね……」

そして橙は事情を説明する。

ここにいる猫を自分の式神にしたい様だが、今一仲良くなれないらしい。

そこで、龍也に仲良くなれる様に協力して欲しいらしい。

「それ位なら別にいいぞ」

「ありがとうございます」

橙は龍也にお礼を言つと、

「よし、待ってるよー!!」

そう言いながら橙は猫の群れに突撃して行った。

「うー……」

橙が龍也の羨ましそうな視線をぶつける。

「ははは……」

それに対し、龍也は乾いた笑いしか返せなかった。

橙は奮闘したが、猫達は橙に懐く事はなかった。

だが、龍也には懐いた。

「むー……何でお兄さんにはそんなに懐くんですか？」

「いや、俺に聞かれても……」

そう言っている間にも猫は龍也の足に擦り寄ってくる。

それを見て、橙はまた羨ましそうな視線を龍也に向ける。

「まあ……気長にやっていくしかないんじゃないかな？」

「気長にですか……」

そう言っつて橙が溜息を吐くと、

「ちえーん、居るかーい？」

何処からか声が聞こえて来た。

「あ、藍様だ」

「藍？」

二人がそう言うと、藍が物陰から現れる。

「ああ、ここに居たのか」

そう言って藍は近づいてくる。

「おや、龍也じゃないか」

「よし」

そう言って龍也は手を上げる。

「それにしても運がいいね。此処に辿り着けるなんて」

「それ、橙にも言われたよ」

そう言いながら龍也は擦り寄ってきた猫の頭を撫でる。

「それで、二人は何してたんだい？」

「ああ、実は……」

そう言って龍也は事情を説明する。

「ははあ、成程……」

そう言った後、藍は橙の頭を撫でる。

「大丈夫。橙ももう少しすれば一人前になれるよ」

そう言われた橙は、少し不満気ではあったが顔は綻んだ。

「そつだ、藍様」

「何だい？」

「私に何か御用ですか？」

「ああ、そつだった。これから結界の見回りに行くから橙を連れて行こうと思ってる」

「結界の見回りにか？」

「ああ。橙にも何れは結界の管理の一部を任せるつもりだからね。その勉強さ」

龍也の疑問に藍が答える。

「しかし、結界の管理も大変そつだな」

「そつだね。紫様はこう言った事に関しては殆ど動かないからね」

「だろうな。動いてるとこなんて予想もできねえ」

「あ、やっぱりそう思うかい？」

藍もその辺りは同意している様だ。

「それじゃ、そろそろ行こうか」

「はい、藍様」

「またな、二人とも」

「うん、また」

「また会いましょう、お兄さん」

そして二人はどこかに移動した。

それを見送った後、龍也は立ち上がり、移動を始める。

夜中。

プラプラと歩いていた龍也は屋台を見つける。

夜はここで食べていこうと思い、屋台に近づいて行く。

「いらっしやいー!」

元気な声で迎えられる。

「よっ、ミステイア」

「あら、龍也じゃない」

挨拶をした後、龍也は椅子に座る。

「少し久しぶり?」

「そう……だな、色々あったからな」

主に異変がと龍也は内心思った。

「で、どうだい景気は？」

「そつね、順調よ順調」

そう言つてミスティアは笑顔になる。

「常連客も増えたし……そうそう、この前なんか紅魔館の主が来たのよ」

「へえー」

そう言えば以前にそんな事を言つてたなと龍也は思い出す。

「焼き鳥撲滅の日も近いわね」

そう言つてミスティアは拳を作る。

燃えてるなと龍也は思った。

「そつそう、注文は何？」

「焼酎と焼き八目鰻とご飯……いつものだな」

「はいよー!」

そう言つてミスティアは調理を進めていく。

いい匂いだなと龍也が思っているよ、

「あ、いい匂いー」

何やら真っ黒な球体が龍也の隣に現れる。

そして真っ黒な球体が消える。

「……ルーミア？」

「あ、お兄さん」

中に居たのはルーミアであった。

「ルーミアもここに食べに来たのか？」

「うーん……どっちかと言うと、いい匂いがしたから釣られて来たのかな？」

ルーミアは顎に手を当てながらそう答える。

「それよりもお兄さん」

「ん？」

「お兄さんは食べてもいい人類？」

「襲い掛かって来たら力尽くで撃退するって言わなかったか？」

龍也は何時でも襲い掛かられてもいいように警戒をする。

「ちよつとちよつと、ここでは乱闘厳禁だよ」

そう言いながらミスティアは龍也が注文した物を持って来る。

「それにこの人は常連さんなんだから食べちゃダメ。ルーミアにも何か作って上げるから」

「はい」

何とかこの場は戦わずに収まった様だ。

龍也は警戒を解きながら注文した物を食べていく。

「……美味しい」

相変わらず美味しいなと龍也は思った。

「ありがとう」

美味いと呟いた龍也にミスティアはお礼を言う。

龍也はそのままガツガツと食べていく。

「少し冷えてきたか？」

幻想郷のどこかを歩いている龍也がそう漏らす。

夏特有の暑さを感じなくなってきた。

若しかしたらもう夏は終わったのかもしれない。

「ん？」

龍也は何かを見つける。

楽しそうに踊っている二人組みを。

龍也は近づいて様子を見てみる。

「あれは……確か、静葉と穰子……だったか？」

龍也がそう呟くと静葉と穰子の二人が龍也の存在に気付く。

「貴方は確か……龍也だっけ？」

「お久しぶりです」

二人も龍也の事を覚えていた様だ。

「どうしたんだ、ご機嫌じゃないか」

「それはそうよ」

「やっと秋が来ましたからね」

そう言っつて二人は更にご機嫌になる。

「今年の冬は異様に長く、憂鬱な時期が長かったけど……」

「それももう終わり！！ 秋は私達の季節だ！！」

そう言っつて二人は盛り上がっていく。

「……そうか、もう秋か」

そんな二人を尻目に、龍也はそう呟く。

そして思う。

時期的に春、夏と異変が起きた。

ならば今の季節、秋にも異変が起こるのではないだろうか。

「……考えすぎか」

そう言つて龍也は自身の考えを否定する。

「そつだ、龍也」

「ん？」

「せつかくだから秋の珍味をご馳走しよう」

そう言つて二人は龍也の手を引つ張つて移動する。

「お、おい」

「気にしなくていいですよ」

「そうそう。神から贈り物される人間なんて殆どいないんだから、誇つていいよ」

少々強引な気もするが、これも秋になつて機嫌がいいせいであろうか。

まあ、いいかと龍也は思った。

龍也は秋の珍味をご馳走になる事にした。

永夜抄編 その1

夜。

人間が出歩かない時間帯。

そんな時刻、一人の女性が妖怪の群れに囲まれたいた。

女性はやれやれと言った感じで溜息を吐く。

その瞬間、困っていた妖怪が襲い掛かってきた。

普通であれば絶体絶命である。

だが、女性は落ち着いた様子で持っていた傘を構える。

そしてその場で一回転。

すると、女性から突風が放たれる。

その突風で、襲い掛かってきた妖怪は空の彼方へ吹き飛んで行く。

「……………つたく、厄介ね」

その女性……風見幽香はそう呟く。

こんな下級妖怪の更に下が襲って来るとは、と幽香は思う。

だが、襲い掛かってくる原因は分かっている。

「どこの馬鹿か知らないけど厄介な事をしてくれたわね」

そう言って空にある満月を見る。

いや、正確に言うと満月ではない。

ほんの僅かに欠けているのだ。

満月と殆ど変わりはないが満月ではない。

「あれのせいで、もう狂い始めてる妖怪がいる……か」

先程の妖怪がそうであろう。

「多分、妖精辺りはもう狂っているわね」

そう言って幽香は溜息を吐く。

「私は月がどうこうなっても狂う事なんて有り得ないが、問題は花ね」

自分が花を観賞している時に襲われてしまったら大変な事となる。

自分一人だけならば襲い掛かれても赤子の手を捻るが如くに容易く撃退できる。

だがだ。

もしも万が一、花が踏まれたり、戦闘の影響で吹き飛ばされでもし

たら
大変だ。

「異変解決は妖怪の仕事ではないのに……」

だが、それも仕方がない事かもしれないと幽香は思う。

人間には満月が欠けている事に気付いてもいないだろう。

恐らく霊夢も動かないだろうと幽香は思う。

これはある意味妖怪が解決すべき異変だ。

ならば、自分が早々に解決するのが良いだろうと思い、幽香は飛び上がる。

「場所は……あっちね」

そして移動を始める。

暫らく移動していると、

「あれは……」

眼下に何かを見つける。

「……龍也」

見つけたのは四神龍也だ。

よく見ると、何かと戦っている。

それは妖精だ。

恐らく幽香と同じ様に急に襲い掛かれたのだろう。

幽香の予想通りに、すでに妖精は狂い始めていた。

「……そうだ」

幽香は何か良い事を思いついたと言う顔になる。

「龍也を連れて行こう」

一人で解決しに行くのも暇だと言うのもあるが、上手くいけばこの
異変が

龍也の力を上げる事になるのではないかと思ったからだ。

思い立ったら何とやら。

幽香は龍也の近くに降りて行った。

「……何だったんだ？」

襲い掛かってきた大量妖精を追い払った龍也はそう呟く。

こちら辺で野宿をしようかと思っていたら急に大量の妖精が襲い掛かってきたのだ。

簡単に追い払えたが、疑問が残る。

「大量の妖精に襲い掛かれた事なんて異変の時ぐらい……まさか、異変か？」

「正解」

後ろから声が聞こえたので龍也は振り返る。

「幽香」

後ろに居たのは幽香であった。

「こんばんは」

「ああ、こんばんは」

まずは挨拶を交わす。

「それはそうと、正解って……異変が起きてるのか？」

「ええ、あれを見なさい」

そう言っつて幽香は空に浮かぶ満月を指さす。

「……満月がどうかしたのか？」

「目を凝らしてよく見てみなさい。ほんの僅かに欠けているから」

「え？」

幽香にそう言われて龍也は目を細めて見てみる。

「……言われてみれば欠けてる様な気もするな」

そう言った後、龍也は幽香に顔を向ける。

「でも、それがどうかしたのか？」

「そのせいで狂い始めてる妖怪がいるの。分かり易く言えば暴走してる」

「暴走？ 何でまた」

「妖怪と言うのは月に影響を受けている者が多いのよ」

勿論、影響を受けない妖怪もいるけどねと幽香は続ける。

「へえー」

「人間に例えるなら、太陽が何ヶ月も見えなくなると言った状態かしらね」

少し大袈裟だけどねと幽香は続ける。

「そりゃ大変だ」

そんな状態にでもなったら、狂い始める人間が出てくるだろう。

「そう、大変なのよ。今でさえ、下級妖怪の更に下の妖怪は狂い始めている。

これが続けば大変な事になるでしょうね」

「だな」

龍也もそれには同意する。

「と言う訳で、私と一緒に異変解決に行かないかしら？」

幽香がそう提案してくる。

「分かった、一緒に行くよ」

「そこなくっちゃ」

そして二人は空中に躍り出る。

「場所は分かるのか？」

「ええ、付いて来て」

龍也は幽香の後に付いて移動していく。

少しすると、妖精が現れ弾幕を放ってくる。

「おっと」

龍也は回避しながら弾幕を放って妖精を撃ち落とす。

すると、次から次へと妖精が現れる。

「私は左から来るのをやるから、龍也は右の方をお願い」

「了解」

龍也と幽香は左右に別れて妖怪を撃ち落していく。

「んー……何か妖精の力が強い様な……」

「月に狂わされて普段よりも実力が上がってるのかしら？」

「そうなのか？」

「可能性でしかないわね」

そう言いながらも二人は妖精を撃ち落していく。

「でも……」

幽香はそう言いながら掌を一行に並んでいる妖精に向ける。

そして、掌サイズのレーザーを放つ。

「私達の敵ではないわ」

そう言ってレーザーを放つのをやめる。

「だな」

龍也もそれに同意する様に弾幕を放って妖精を撃ち落していく。

「？ 何だあれ？」

また妖精が現れた。

それはいい。

だが、その妖精の周囲には白い塊の様な物がある。

龍也は何だろうと思っていると、その白い塊から弾幕が放たれる。

「つと」

龍也は少し驚いたものの、余裕で回避していく。

そして、反撃と言わんばかりに弾幕を放つ。

龍也の放った弾幕の何発かは白い塊に防がれたものの、すぐに打ち破って

妖精本体に命中する。

「あれ、盾にもなるんだ」

龍也はそんな感想を漏らす。

確かに、色々とパワーアップしている様だ。

龍也はその事を頭に入れ、再び弾幕を放っていく。

その後も襲い掛かってくる妖精、回転する飛行物体を撃ち落としながら進んで行くと、

「こんな夜更けにこんな場所で何をしてるのかしら？」

緑色の髪をし、触覚を生やした少女が現れる。

「妖怪か」

妖力を感じたため、龍也は妖怪だと判断した。

「ええ、私の名前はリグル・ナイトバグ。察しの通り妖怪よ」

そう言って、リグルは自己紹介をする。

「ふーん……貴女、虫妖怪ね」

そう言いながら幽香は傘を構える。

「花を食い荒らすような悪い害虫は退治するに限るわね」

そう言って幽香は笑顔になる。

「ちょっと!! この人怖いんだけど!!」

そう言ってリグルは怯えた表情になりながら後ずさる。

「大体、私は虫妖怪だけど虫の妖怪なんだから花を食い荒らす様な事は

しないって!!」

「へー、虫の妖怪か」

そう言って龍也はリグルを観察する。

虫なんて殆ど見た事がないから珍しいようである。

「そうそう、虫の妖怪!! いくら私が” 蟲を操る程度の能力” を持っているから

ってそんな、花を食い荒らすなんてマネは……」

「へえー……” 蟲を操る程度の能力” ね……」

「あ……」

そこでリグルは自分の失言に気付く。

「後顧の憂いはここで絶っておくべきかしら……ね」

「ひいー！ー！」

そして、弾幕ごっこが始まった。

「……どうしてこうなった」

飛んでくる弾幕を避けながら龍也はそう漏らす。

だがまあ、ばやいても戦う事には変わりはないだろう。

そう思いながら龍也は弾幕を放っていく。

ある程度被弾させると、リグルは白い塊を飛ばして来た。

「あれは……」

妖精達が飛ばして来た物と同じ物だと龍也は思った。

「っっ」

龍也の思った通り、その白い塊は弾幕を飛ばして来た。

龍也はさっさと破壊しようとする。

数が増え、弾幕が増えると退路が無くなるからだ。

龍也は破壊するために弾幕を放とうとすると、白い塊が爆発した。

何故と思ったが、答えは簡単であった。

幽香だ。

幽香が龍也よりも上空から弾幕を放って破壊したのだ。

「サンキュー!!」

龍也は礼を言いながらリグルに向って弾幕を放つ。

最初は上手い具合に避けていたリグルだが、次第に被弾していく。

「うー……」

このままでは分が悪いと思ったりリグルはスペールドを取り出す。

「蛍符『リトルバグストーム』」

そしてスペルカードが発動する。

リグルから円を描く様に大量の弾幕が発射される。

それはリグルからある程度離れると止まり、その弾幕は別れるように飛んで行く。

更にリグルから白い塊が飛び出して援護攻撃を放つ。

龍也はそれらを避けながら考える。

下手に移動すれば弾幕が立て続けに当たってしまうだろう。

かと言って、ここから弾幕を放つても相殺されるだけだろう。

ならば、弾幕を真っ向からぶち抜ぬいて攻撃を当てる。

龍也はそう考えてスペルカードを取り出す。

「炎鳥『朱雀の羽ばたき』」

そしてスペルカードが発動する。

同時に龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

すると炎でできた大きな鳥が現れて、リグルに向かって突撃していく。

目の前にある弾幕なんぞ物ともせず。

そして、炎のできた大きな鳥は見事にリグルに命中する。

それをまともに受けたリグルは森の中に墜落していく。

龍也は墜落したリグルを追う様に移動する。

「イタタタタ……」

どうやら無事であった様だ。

「あー、私の負け……」

リグルはそう言い掛けたところで龍也の隣にいる存在に気付く。

「あ、幽香。さっきはありがとな」

「どういたしまして」

幽香はそう言つとリグルの方を見る。

「ひ、ひいー！！ 命だけはお助けを！！」

リグルはそう言いながら後ずさる。

「何を怯えているのよ」

「え」

「さっきのは冗談よ。虫が居なければ花にも悪いしね」

花粉を運んだりする事を言っているのだろうかと龍也は思った。

「じゃ、じゃあ」

「ただし……花を食い荒らすようなマネをしたらどうなるか……分かってるわね？」

「はい！……！……！」

リグルは大きな声でそう返事をした。

「それじゃ、先へ進みましょう」

「ああ」

やはり幽香にとって、花は何よりも大切な物なんだなと龍也は改めて思った。

永夜抄編 その2

リグルを倒して少し進むとまた襲撃が始まる。

最初に現れたのは回転する飛行物体だ。

回転する飛行物体が次から次へと現れる。

それは突撃してきたり、弾幕を放ったりして龍也と幽香を攻撃してくる。

だが、龍也と幽香の二人にとっては何のその。

先に攻撃して撃ち落したり、攻撃を避けた後に攻撃して撃ち落したりしながら進んで行く。

そして、次は妖精が現れる。

その妖精も先程現れた妖精と同じ様に白い塊を出し、それを自分の周囲に展開させる。

「あれは少し面倒なんだよな」

龍也そう呟きながら弾幕を放っていく。

龍也の放った弾幕は妖精が出した白い塊を破り、妖精本体に直撃し、
墜落

していく。

その後、また回転する飛行物体が現れる。

それを順調に落として進んで行くと、また妖精が現れる。

また白い塊を出してきたので、またそれで防御するつもりかと龍也は思ったが、それは違った。

「な……」

防御したのではない。

白い塊を飛ばして攻撃してきたのである。

龍也は驚きながらもそれを避けていく。

「ッ!!」

そして、何かに反応したかの様に龍也はその場を離れる。

龍也が居た場所に弾幕が放たれていたのだ。

どうやら、あの白い塊と通常の弾幕を同時に放って来た様だ。

そんな事ができるのかと龍也は内心驚きながらも弾幕を放って妖精を撃ち落とす。

それを合図にしたかの様に次々と妖精が現れ、弾幕やら白い塊やらを放ってくる。

弾幕よりも白い塊の方が速度は上の様である。

「うーん……本当に妖精は強化されてるみたいね」

弾幕を避けながら幽香はそう漏らす。

「やっぱり、あの月が原因か？」

龍也も弾幕を避けながら幽香にそう尋ねる。

「そうね……その可能性が高いわ」

幽香はそう返しながら弾幕を放って妖精を撃ち落していく。

「他にも元々この辺りの妖精は強く、異変で強化されたと言う可能性も

あるわね」

「成程」

龍也もそう返しながら弾幕を放って妖精を撃ち落していく。

「けど、この数は少し厄介ね」

「そうだな。少しは考えて動かないと退路が断たれるからな」

そう、問題は出てくる妖精の数。

文字通り大量にいるのだ。

その大量にいる妖精が一斉に弾幕を放つて来ると、移動範囲が大幅に制限されてしまうのだ。

下手に移動しよう物なら、退路を断たれ、弾幕全てが当たると言う事態になりかねない。

なので、少しは考えて動かなければならない。

「そう言えば、進路はこのままでいいのか？」

妖精を撃ち落しながら龍也は幽香にそう尋ねる。

「ええ、合ってるわ。このまま真っ直ぐに行けば異変を起こしている場所まで行ける」

幽香も同じ様に妖精を撃ち落しながらそう答える。

そして攻撃したり避けたりしながら進んでいく。

龍也と幽香が放たれた弾幕を避けると。

「あ」

「おっと」

龍也と幽香の背中がぶつかる。

どうやら龍也が避けた方向には幽香が、幽香が避けた方向には龍也がいたようだ。

二人は顔を見合わせた後、正面を見る。

そこには良い感じに固まっている妖精達がいる。

二人は何も言わずに腕を伸ばし、妖精達に掌を向ける。

「いくわよ」

「ああ」

それを合図に龍也は靈力を、幽香は妖力を掌から同時に放つ。

放たれた靈力と妖力は途中で混じり合い、威力と大きさを激増させて突き進んでいく。

そして二人が放ったそれは前方にいた妖精達を呑み込んでいく。

後に残ったは通り易くなった道であった。

「それじゃ、サクサク進んで行きましょう」

「ああ」

そして二人は進んで行く。

暫らく進むと、

「あら、人間と妖怪が仲良くお散歩？」

何者かが現れる。

龍也は誰だろうと思いながら、現れた者を見る。

そこに居たのは、

「ミステリア？」

ミステリア・ローレイであった。

「あれ、龍也じゃない」

ミステリアの方も人間が龍也だと気付いて少し驚く。

「あら、知り合い？」

「ああ、よくミステリアは屋台を出しているからな。俺はその常連」

幽香に尋ねられた龍也がそう答える。

「ミステリア、俺達は急いでいるんだ。このまま通して欲しいんだが……」

「うーん……残念だけど、今の私は屋台の店主ではなく一妖怪」

そう言ってミステリアは自身の羽を羽ばたかす。

「こんな真夜中に出歩くって事は、妖怪に襲ってくれ言ってる様なもの」

そして構えを取る。

「そして、妖怪と会った人間は襲われて食べられちゃっただけど…」

そう言ってミスティアはチラリと龍也を見る。

「でも、龍也は私の屋台のお得意様だから……ボコボコにするだけで許してあげる」

ミスティアの発言を聞いて、戦闘は避けられないと龍也は悟る。

「さて……そう上手くいくかな？」

そして弾幕ごっこが始まる。

まずはミスティアが弾幕を放つ。

龍也は落ち着いて放たれる弾幕を回避していく。

「あら、意外とやるじゃない」

普通に弾幕を回避していく龍也にミスティアは驚く。

「なら、これならどう？」

そう言ってミスティアは白い塊を飛ばしてくる。

道中で妖精達が飛ばして来たのと同じタイプの様である。

「ッ！？」

だが、妖精達のは決定的に違う部分があった。

それは、白い塊が通った場所には少し大きめの弾が設置されていると言っ点だ。

「移動制限か」

龍也はそう呟きながら弾幕を避けていく。

そんな中である事に気付く。

設置された弾はくっ付いてはおらず、弾と弾の間には隙間がある事に。

龍也はその隙間に滑り込んで、ミステリアから見えないように隠れる。

すると、ミステリアは一旦弾幕を放つのをやめる。

どうやら龍也を探しているようである。

弾幕が止んだのを見て、ミステリアが自分を捜していると判断した龍也は

弾と弾の間から勢い良く現れ、弾幕を放つ。

それに気付いたミスティアは回避行動を取る。

だが、何発かは被弾してしまう。

そして互いに弾幕を放ち合う。

「あれ、龍也って思ってたより強い？」

弾幕を撃ち合いながらミスティアはそんな感想を漏らす。

そして、このままでは分が悪いと判断したミスティアはスペルカードを
取り出す。

「鷹符『イルスタードライブ』」

そしてスペルカードを発動する。

龍也はミスティアから放たれた弾幕を回避していると、ある事に気付く。

「視界が……暗くなった……」

そう、龍也の視界の一部が暗くなっていたのである。

暗くなったのはほんの一部。

だが、龍也の目にはミスティアの姿が映ってはいなかった。

龍也は近づいてミスティアの姿を確認しようとした瞬間、

「ッ!？」

突如、目の前に弾幕が現れた。

龍也は反射的に身を反らして回避する。

どうやら、暗闇のせいで弾幕が見えていなかった様である。

これでは不用意に動くのは危険である。

そう判断した龍也は一旦後ろに下がって間合いを取る。

そして、放れて来る弾幕からミスティアの大体の位置を推察して弾幕を放っていく。

命中精度はあまり良くなかったが、それでも何発かはミスティアに当たったようである。

「うわ、これでも当てて来る!？」

ミスティアは驚きながらも、またスペルカードを取り出す。

「夜盲『夜雀の歌』」

そしてスペルカードが発動する。

「ッ!？」

龍也は驚く。

視界の殆どが暗くなった事に。

見える範囲は自分の周囲ぐらいである。

だが、弾幕は容赦なく迫ってくる。

龍也は己が動体視力と反射神経を頼りに避けていく。

だが、それも長くは続かず、

「ぐっ！！」

掠り始めてくる。

意図的に掠らせてるのではなく、避けようとして掠った。

このままでは直撃を受け、弾幕を立て続けに受けてしまったらう。

早めに倒さなければマズイと龍也は判断する。

だが、今の状況では放たれている弾幕からミスティアの位置を推察するのは無理であらう。

かと言って、適当に弾幕を放つても当りはしまい。

「もう少し見える範囲があれば……範囲……そうだ」

龍也は何か気付いた様にスペルカードを取り出す。

そして、その場に佇む。

迫ってくる弾幕を、腕を交差させて耐えていく。

ある程度耐えていると、真正面から飛んでくる弾幕を発見する。

龍也はこれだと思い、

「霊撃『霊流波』」

スペルカードを発動する。

龍也の掌から青白い閃光が迸る。

少しすると暗闇が消え、墜落していくミステリアの姿を発見する。

どうやら、龍也の考えが当たった様だ。

龍也の考えとは、真正面から来た弾幕ならその先にミステリアがいるだろうと言う考えだ。

ミステリアのいる位置に多少の誤差があっても、霊流波の範囲ならカバーできると
思っ
て
霊流波を使ったのだ。

そして、それはうまく行った。

龍也はうまい具合に事が運んだ事に安堵しつつ、ミステリアを追って森の中に

入っていく。

「あいたたた……龍也ってこんなに強かったの……」

「大丈夫か？」

そう言って龍也をミスティアに手を差し伸べる。

「あ、ありがとう」

ミスティアは龍也の手を掴んで立ち上がる。

「そう言えば、龍也ってどこに行こうとしてたの？」

「どっつつても……異変解決に」

「異変？ 異変なんて起きてたの？」

異変と聞いてミスティアは驚く。

「あら、気付いてなかったの？」

そう言いながら幽香が現れる。

「ほら、あの満月を見なさい。僅かに欠けているでしょう」

幽香に言われてミスティアは満月を見る。

「あ、ほんとだ」

「人間が気付かないならまだしも、妖怪である貴女が気付かないなんてね……」

「じめんなさい」

そう言ってミスティアがしょんぼりとする。

「まあまあ。それよか進路ってどっちだっけ？」

「あっちよ」

そうやって幽香は指でさし示す。

「それじゃ、行きましょう」

そうやって幽香は飛び上がる。

龍也も同じ様に飛び上がると、

「龍也」

ミステリアから声が掛かる。

「何だ？」

「異変解決、頑張ってね」

「ああ」

ミステリアの応援を受けて、龍也は幽香の後を追って行く。

永夜抄編 その3

「あれ？」

ミスティアを倒してある程度進むと、龍也はある事に気付く。

「どうかした？」

「いや、人里が」

そう言つて龍也は指をさす。

今の高度なら、目の前に見えるはずの人里が見えないのだ。

「ああ、人里の半獣の仕業ね」

「半獣……慧音先生の事か」

「そう、人間の時の彼女の能力は”歴史を食べる程度の能力”。それを使つて

人里を隠しているんでしょう」

「異変だからか？」

「それもあるでしょうけど、彼女は満月の日に獣人化するタイプ。なのに

今日は獣人化しなかった。それを怪しんだ彼女は何かあると思い、人里に

危険が迫る前に人里を隠した……と言つた感じかしら」

幽香は顎に手を当てながら自分の考えを言う。

「だとしたらマズイわね」

「何がだ？」

「こんな状況下で人里に人間と妖怪が近づいてみなさい。襲撃者と
思われて一戦
交える事になるわよ」

「それは……考えすぎじゃないか？」

「彼女、少し思い込みが激しいところがあるからね。この状況下じ
ゃあ何を言っても
信じて貰えないでしょ」

龍也は慧音とそこまで付き合いが深い訳ではないので、「ここは幽香
の言葉に従って
置く事にした。

「なら、どうするんだ？」

「戦っても負ける事は在り得ないけど、それで時間を取られるのは
あまりよろしく
ないわね。仕方ない、回り道をしましょう」

「分かった」

あまり時間を掛けられないと言うのは事実だ。

そして二人は回り道をして進んで行く。

「JJJJは……」

何やら竹が生い茂っている場所に出た龍也は、そう漏らす。

「JJJJは迷いの竹林と言われている場所よ」

「迷いの竹林？」

「ええ、来るのは初めて？」

「ああ」

今まで来る機会が無かったのは不思議だ。

この異変が終わったら、じっくり探索して見ようと龍也は思った。

「処で気付いてる？」

「ん？ 何にだ？」

「夜が止まっている事に」

「夜が？」

そう言われて、龍也は月を見る。

「月の位置が変わっていない……」

龍也は思わずそう漏らす。

結構な時間が過ぎているのに、月の位置が変わっていない。

「そう、それが夜が止まっている証拠」

幽香も月を見ながらそう言う。

「夜を止めている理由は、俺達以外にも異変解決の為に動いている

者がいるからか……」

「若しくは、犯人が更なる混乱を招くために止めているかの二つね」

幽香がそう言った瞬間、妖精達が現れる。

龍也と幽香の二人は同時に妖精達に向き直り、

「ま、答えは進めば分かるだろ」

「それもそうね」

妖精達に向って弾幕を放っていく。

そして、妖精達を撃ち落としながら進んで行く。

「ん？」

少し進むと、また妖精が現れる。

その妖精が白い塊を出し、盾の様に展開してきた。

白い塊を二重にして。

龍也はそれに驚きながらもそれを破壊し、妖精を撃ち落していく。

「ここまでの道中の妖精よりも強い。そろそろ異変の犯人が居る場所に着きそうだな」

「あら、分かるの？」

幽香が妖精を撃ち落しながらそう尋ねる。

「ああ。今までに起こった異変も犯人に近づけば近づく程、妖精が強くなってたしな」

龍也はそう言いながら弾幕を避けていく。

避けた方向に竹があった為、龍也は竹に足を付ける。

すると、その竹が思いつきり反れる。

そして、反れた竹が元に戻る反動を利用して龍也は跳躍する。

跳躍した龍也は、妖精達の頭上を取る。

そしてそこから弾幕を放って妖精達を撃ち落していく。

その後、幽香と同じ高度に移動する。

幽香の方も一通り妖精を撃ち落した様だ。

「処で気付いてる？」

「ああ、妖精の襲撃が少ない事か？」

そう、妖精の襲撃が今までの道中よりも少なかったのだ。

「これは恐らく……私達より先にここを通って行った者がいる」

敵か味方かは分からないけどねと幽香は続ける。

「兎も角、先に進んでみようぜ。鬼が出るか蛇が出るかは分からないけどな」

「ええ」

そして、二人は先に進んで行く。

少し進むと、

「うわぁ……」

龍也はそんな言葉を漏らす。

鬼が出たとか、蛇が出たとかの話ではなかった。

何があったかと言つと、

「何やってるんだ、あいつ等……」

決戦中であつた。

戦っているのは、霊夢、魔理沙、咲夜、妖夢、紫、藍、アリス、レミリア、幽々子の
九人。

戦っている様子を見れば、霊夢と紫と藍、魔理沙とアリス、咲夜とレミリア、
妖夢と幽々子がチームの様だ。

3 + (3 × 2) のバトルロワイヤルと言ったところか。

「っと!」

自分達の所にまで流れ弾がかなりの速度で飛んできたため、龍也は慌てて避ける。

「と云うか、どうしてあんな状況になったんだ？」

「うーん……異変解決のためにここまで来たら、怪しい輩を見つけたから取り合えず倒して置こうと思ったのかしら？」

幽香が顎に手を当てながら自分の考えを言う。

「ああ……」

それを聞いて龍也は思わず納得してしまった。

あのチームの片方は基本的にそんなスタンスだ。

「でも、それだったらもう片方が止めると思っただけ……」

「大方、その片方同士で挑発し合って引っ込みが付かなくなったんじゃない？」

「ああ……」

そう言われて、龍也はその光景が容易に想像できた。

自分達が異変解決するから引っ込んでる的な事を言ったんだらうと
龍也は思った。

「それで、どうする？ 下手近づき過ぎればこちらに飛び火するわ
よ」

「うーん……」

異変の元凶はこの先にいる。

ここで無駄な体力の消費は避けたいところである。

「ん？」

龍也がそう考えていると、向こうの気配が変わる。

何だろうと龍也が思っていると、それぞれスペルカードを取り出した。

そして、

「神霊『夢想封印』」

「恋符『マスタースパーク』」

「空虚『インフレーションスクウェア』」

「六道剣『一念無量劫』」

「紫奥義『弹幕结界』」

「式神『アルティメットブラスト』」

「闇符『霧の倫敦人形』」

「紅符『スカーレットマイスタ』」

「幽雅『死出の誘蛾灯』」

それぞれが同時にスペルカードを発動する。

「うおおう!?!」

同時にスペルカードを発動したものだから、大量の流れ弾が龍也と幽香の方へ向って来る。

それを回避していく龍也と幽香。

「どうしたものかしら、これ」

飛んで来る弾幕を避けながら幽香がそう漏らす。

「……はあ、こつ言つのは好きじゃないが」

龍也はそう呟きながら一枚のスペルカードを取り出す。

「あら、それこの前作つた……」

「そ。いくら夜が止まっているからと言っても、これ以上時間を喰う訳にも

行かないからな。漁夫の利を狙う」

そう言つて、龍也は向ってくる弾幕を避けながら、連中が弾幕ごっこをしている

真下に移動する。

そして真下に着くと、

「憤怒『青龍の怒り』」

スペルカードを発動する。

同時に、龍也の髪の色が黒から蒼に変わり、瞳が蒼く輝き出す。

すると、上空から大量の蒼い弾幕が降り注ぐ。

完全に予想外の所から弾幕が降って来たので、弾幕ごっこをしていた九人は

回避行動が遅れ、降り注いだ弾幕の大半を受けてしまう。

そして、止めと言わんばかりに青龍を模した水の塊が斜め上空から突撃し、

弾幕ごっこをしていた九人を纏めて地面に叩き落した。

「痛ってー……幾らなんでもあれは酷いんじゃないのか？」

魔理沙が頭を摩りながらそう文句を言う。

「こっちにまで流れ弾が来たんだ。正当防衛だ正当防衛」

「随分物騒な正当防衛もあつた物だぜ」

そう言いながら魔理沙は帽子を被る。

「それよか、お前等も異変解決か？」

龍也は気になった事を尋ねる。

「私は紫に言われてよ。報酬も出すって言われたし」

「私はアリスに言われてな。魔導書をくれるって言っから」

「私はお嬢様が出かけると言っのでその御付で」

「私も幽々子様の御付ですね」

それぞれから事情が聞けた。

「それよか、何でお前等は戦ってたんだ？」

「それは……」

そう言って霊夢が説明する。

大体は、幽香が想像した通りであった。

幽香が想像した以外では、紅魔館組と白玉楼組は以前に異変を起こしていたので信用が無かつたらしい。

「てか、お前等三人は幽々子が起こした異変の時は協力していただろ」

そう言っつて龍也は霊夢、魔理沙、咲夜の三人を指さす。

以前に協力したんだから、今回も協力できるだろうと龍也は思った。

「それはそれ、これはこれよ」

咲夜がシレッとした表情でそう答える。

「それよりも、私としては幽香が誰かと組むと言うのが珍しいわね」
紫がそう言いながら幽香の方を見る。

「異変解決しに行こうとしていたら龍也を見つけてね。折角だから誘ったのよ」

紫の問いに幽香はそう答える。

「でもまあ、負けは負けだしな。異変解決はお前等に任せるぜ」

「へ？」

唐突にそんな事を言われ、龍也は固まる。

「終わったら神社に集合な。異変解決の宴会やるから」

「また私の神社でやるの？」

「あら、いいじゃない。お酒や材料はこっちで用意するから」

「材料って……分かってますよ、私が調理しますよ、紫様」

「そう言う訳だから頑張りなさい龍也。それはそうと、紅魔館からワインを

持ってきてね、咲夜」

「畏まりました、お嬢様」

「紫、白玉楼の食料庫に隙間繋いでくれる？ 取りに戻るのが面倒だから」

「はあ……また買出しに行かなきゃ」

そう言っつて、アリスを除いた八人は去って行く。

「あ、ここは迷い易いから私の人形を渡しておくわね。この子に付いて行けば」

目的の場所に着くから。それじゃ、頑張っつてねお二人さん」

アリスは龍也に人形を渡すと、他の連中と同じ様に去って行った。

「……………なあ？」

「何かしら？」

「あいつ等は潔いのか？ それとも、ただ単に押し付けられただけか？」

「両方ね」

幽香がそう言っつと、龍也は思わず溜息を吐いた。

アリスの人形が付いて来い言わんばかりに、龍也の手元を離れて浮かびながら

龍也と幽香を見詰めていたので、二人は移動する事にした。

永夜抄編 その4

「ここか……」

アリスの人形の後を付いて行くと、大きな屋敷の前に辿り付く。

「永遠亭……と書いてあるわね」

幽香が表札を見ながらそう呟く。

アリスの人形は役目は終わったと言わんばかりに龍也の頭の上に乗っかる。

「迷いの竹林には何度も足を運んだ事があるけど、この屋敷を見たのは初めてね」

「そうなのか？」

「ええ。取り合えず、中に入りましょう」

そして二人は永遠亭の中に入って行く。

「ほづ……」

屋敷の中は純和風と言った感じだ。

そう言った意味では白玉楼に似ているかもしれない。

そして、長い廊下を少し進んで行くと

「兎の耳を生やした妖精……」

兎の耳を生やした妖精が現れる。

その妖精は白い塊は三重にして自分の周囲に展開し、それを防御にするのと同時に

そこから弾幕を放って攻撃も仕掛けてきた。

「強くなつてきている……」

龍也は放たれている弾幕を避けながらそう漏らす。

確実に弾幕の量、密度、速さが上がっていると思いつつながら。

「なら、この先に犯人が居る可能性が高い」

そして龍也も弾幕を放って妖精を撃ち落していく。

すると今度は左右から同じ様な妖精が現れて弾幕を放ってくる。

この妖精が放ってくる弾幕の量も速さも密度も、今まで現れた妖精よりも上である。

龍也と幽香は、弾幕を避けながら左右に分かれる。

左から来た妖精は幽香が。

右から来た妖精は龍也は。

それぞれ撃ち落とす。

すると今度は何も無い所から急に妖精が現れ弾幕を放ってくる。

「おわ!？」

急に現れた事に、龍也は驚きながらも間合いを取りながら放たれてくる弾幕を避けていく。

「ふむ……瞬間移動的なものでも使ったのかしら？」

そう言つて幽香が妖精を撃ち落していく。

「それとも召喚魔法的なものか……」

そう呟きながら幽香は龍也の方を向く。

「大丈夫？」

「ああ、助かった。ありがとう」

龍也はそう礼をいい、二人は更に進んで行く。

すると白い塊を三重にして展開し、それを盾にしながら弾幕を放ってくる

妖精がまた現れる。

それも何体か。

「またか」

龍也はそう言いながら弾幕を放って妖精を撃ち落していく。

幽香の方を見ると、同じ様に妖精を撃ち落していつている。

それから少しすると、

「あれれ、侵入者？」

兎の耳を生やし、黒い髪をした女の子が現れた。

「あんだ……この住人か？」

「そう。私は因幡てゐ」

すんなり自己紹介をしてくれた。

「それで、お兄さんとお姉さんは侵入者だね」

てゐはそう言いながら構えを取り、

「お師匠様からは侵入者は追い返せって言われてるからね。悪く思わないでよ」

弾幕を放ってくる。

その放たれた弾幕を、龍也と幽香の二人は避けていく。

分かっていたが、妖精とは比べ物にならない弾幕だ。

龍也は弾幕と弾幕の間に体を入れながら、てゐに向って弾幕を放つていく。

その弾幕は最初はてゐに当たらなかった物の、次第にてゐに掠り始める。

「あれ、若しかしマズイ？」

てゐはそう言いながらスペルカードを取り出す。

そして、

「脱兎『フラスターエスケープ』」

スペルカードを発動する。

その瞬間、繋がった様に見える弾幕をいくつか放つ。

龍也は慌てずにその弾幕を避ける。

すると、てゐがまた同じ様な弾幕を放つ。

龍也はそれも避け様と動くと、

「ッ!？」

背中に何かが掠る。

龍也は何だと思つて背後を見る。

それは、てゐがスペルカードを発動した時に最初に放つた弾幕であつた。

「ツー!! まさか!!」

龍也はそう言つて周囲を見渡す。

何時の間にかてゐが放つた弾幕に囲まれていた。

龍也は慎重に動きながら弾幕を避けていく。

だが、そのせいで龍也はてゐに弾幕を放てないでいた。

てゐが直接放つ弾幕は読めても、戻ってきた弾幕は中々読めない。

弾幕を避けながら、龍也はどうすべきか考える。

「放つた弾幕が戻るとか咲夜の反射させるナイフに……ん？」

そこで龍也は思い出す。

咲夜の使つたスペルカードにどう対応したかを。

「……やれる」

龍也はそう呟きながらスペルカードを取り出す。

そして、

「咆哮『白虎の雄叫び』」

スペルカードを発動する。

龍也の瞳の色が翠に変わると同時に、無数の超小型の竜巻が現れる。

それにてゐの弾幕が当たると、

「げげ!?!」

あらぬ方向に飛んで行く。

これでは龍也にもてゐにも弾幕がどこに飛んで行くか分からない。

龍也は避けながら、翠色の弾幕を放っていく。

それも超小型の竜巻に当たり、様々な方向に飛んで行く。

こうなったら、後は自身の反射神経と動体視力で避けて行くしかない。

その事を知っている龍也は必死になって弾幕を避けるが、それを知らない

てゐは上手く避けられず、弾幕に当たっていく。

「あいたたた、これは……逃げるが勝ち!!!」

てゐはそう言つて、その場から逃げ出した。

同時に龍也の瞳の色が翠から黒に戻る。

「びびりする？」

「ほっときましょ」

そう言つて幽香は正面を見る。

「本命は……この先にいそうだしね」

「だな」

龍也は幽香の意見に同意する。

そして、二人は先に進む。

襲撃してくる妖精を撃ち落とし、先に進んで行くと、

「遅かつたわね」

兎の耳を生やし、薄い紫色の髪をした少女が現れる。

「全ての扉は封鎖したわ。もう姫様を連れ出す事はできない」

兎の耳を生やした少女は胸を張つてそう言つ。

「あいつが犯人か？」

「うーん……どうかしら？」

「って、男女二人？ こんな所でデート？」

「デートするにしても屋敷の中とかないだろ」

「デートをするなら私は花が一杯ある場所がいいわ」

「じゃあ何しに来たのよ？」

「満月を元に戻しに」

龍也がストレートにそう言う。

「ああ、あれの事。あれは私の師匠が生み出した地上を密室にする術。永琳の秘術」

「地上を密室に？」

「そう」

龍也の疑問に答えるかの様に、銀色の髪をした女性が現れる。

青と赤の二色で構成された服を着ている。

「……あなたが永琳か」

「ええ、そうよ」

「単刀直入に言わせて貰おうか。満月を元に戻せ」

「それはダメ。まだ早いわ」

「なら……力尽くになるぜ」

「あら、怖い。鈴仙、ここは任せたわよ。荒事とか得意でしょ？」

「お任せください、師匠！！」

鈴仙がそう言うと、永淋はその場から去って行った。

「先に進みたければお前を倒して行けと……」

「ええ、そう言う事。でも、貴方達にそれができるかしら？」

「試してみるか？」

「試して上げるわ」

そして、弾幕ごっこが始まる。

先手必勝と言わんばかりに鈴仙が弾幕を放つ。

鈴仙が放つ弾幕は拳銃の弾に似ている。

龍也はそんな事を思いながら弾幕を避け、弾幕を放つ。

龍也の放った弾幕は、鈴仙に避けられる。

「あら、思ってたよりやるわね」

龍也の弾幕を避けながら鈴仙はそう漏らす。

「そいつはどうも」

龍也はそう言って弾幕の量と密度を上げる。

「おっと」

鈴仙は少し危なげに龍也が放った弾幕を避け、自分も弾幕の量と密度を上げる。

互いに弾幕を撃ち合ってる状況下だが、お互い直撃はしていない。

精々掠るぐらいだ。

このままでは埒が開かないと思ったのか、鈴仙はスペルカードを取り出す。

そして、

「散符『真実の月（インビジブルフルムーン）』」

スペルカードを発動する。

スペルカードが発動すると、広範囲に弾幕が展開される。

だが、これだけで終わるはずがない。

龍也はそう思って警戒する。

そして、弾幕が龍也の近くまで来ると、

「なっ!?!? 消えた!?!?」

弾幕が消えたのである。

全て。

龍也は慌てて周囲を見る。

だが、周囲には何も無い。

仕方なく龍也は鈴仙に向き直ると、

「なっ!?!?」

目の前に弾幕が現れていた。

回避できる距離でないと判断した龍也は慌てて両腕を交差させ、防御の体勢を取る。

そして着弾。

「ぐっ!?!?」

腕から伝わってくる衝撃に龍也は歯を喰い縛って耐える。

衝撃が止むと同時に龍也は前方をチラリと見る。

すると、また同じ様に弾幕が迫って来ていた。

龍也は衝撃に備えて歯を喰い縛るが、

「……………あれ？」

衝撃が来なかった。

不審に思った龍也が前を見る。

そこには弾幕が無かった。

少しすると前方に再び弾幕が現れて龍也に着弾し、龍也の腕に衝撃が走る。

「まさか……………」

龍也は一つの可能性を得る。

弾幕が消えている時は見えなくなっているのでは無く、本当に消えていると言う可能性を。

龍也は可能性を確信に変えるために行動を起こす。

弾幕が見えなくなった瞬間に、龍也は弾幕があった場所に突撃する。

するとどうだろう。

龍也に全くのダメージは無かった。

これで、龍也の考えは確信になった。

「後は……」

龍也そう呟きながらスペルカードを取り出して腕を交差する。

弾幕の衝撃を堪えながら龍也は再び弾幕が消える瞬間を待つ。

そして、弾幕が再び消えた瞬間、龍也は瞬時に移動する。

どこに移動したかと言うと、鈴仙の目の前だ。

そして、

「霊撃『霊散波』」

スペルカードを発動する。

龍也の掌から広範囲の青白い閃光が迸る。

光が止むと、鈴仙は龍也から少し距離を取る。

少しポロポロではあるが、まだまだ健在だ。

「まさか、抜けてくるとは……」

鈴仙はそう言いながら顔を上げ、

「少し反則な気もするけど」

そう言いながら、

「さあ、狂いなさい」

龍也を見つめる。

「ぐっ!?!」

鈴仙の紅い瞳を見た龍也は頭を押さえながら後ろに下がる。

「私の能力は”狂気を操る程度の能力”。そして、私の目を直接見れば……狂っ」

鈴仙の言葉通り、今の龍也の視界は歪み、頭の中もグラグラしている。

下手をすれば文字通り狂ってしまうだろう。

「これで貴方は……」

そう言いながら鈴仙は右手で拳銃の形を作り、指先を龍也に向ける。

「ふふ……」

そんな中、不意に幽香の笑い声が聞こえる。

「何が可笑しいの?」

「あら、聞こえた? ごめんなさいね」

幽香は悪びれた様子もなくそう言う。

「もう一度聞いわ。何が可笑しいの？」

「その程度で勝ったと思っている貴女が」

「勝ったって……現に彼は……」

「貴女は四神龍也と言う存在を甘く見すぎている」

「何を……ッ!?!」

鈴仙がそう言い掛けた瞬間、莫大な量の霊力を感じる。

鈴仙はその発生源を慌てて確認する。

発生源は龍也だ。

龍也の体中から青白い光が漏れている。

その青白い光は霊力だ。

そして、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお……!」

龍也の体から爆発的な勢いで霊力が解放される。

「なっ!？」

鈴仙は、解放された霊力の余波で少し吹き飛ばされる。

そして、これ以上吹き飛ばされまいと必死に堪える。

幽香は揺れる髪をそのままに、様子を見る。

そして思う。

保有霊力も相当なものだと。

解放した霊力の影響で、まるで突然台風がやって来た様な状況になっている。

今、龍也がやるうとしているのは、自身の霊力を使って精神操作から抜け出そうと
しているのだ。

隙だらけではあるが、鈴仙は龍也が解放している霊力で吹き飛ばされまいと
しているので問題はない。

「あら?」

自分の目の前に何かが飛んできたので、幽香は反射的に受け止める。
受け止めた物はアリスの人形であった。

どうやら、龍也の頭の上からここまで吹き飛んできた様だ。

幽香はやれやれと思っていると、

「ッ!？」

何かを感じて幽香は慌てて龍也の方を見る。

「……………気のせい？」

龍也を見て幽香はそう呟く。

幽香が感じたのも見えたのも一瞬よりも短い一瞬。

見えた物も感じた物も龍也が解放している霊力。

まず色が違った。

青白い色ではなく、どす黒い色。

次に感じた龍也の霊力。

霊力と言うには重く、濃く、禍々しかった。

そして、霊力から死を感じた。

「……………」

幽香はもう一度龍也を注意深く見る。

霊力の色も感じ方も何時もと変わらない。

「後は永琳って言うのを倒せばいいのか？」

「さっきの言動をそのまま受け取ればそうなるわね」

幽香がそう言いながら近づくと、幽香の手からアリスの人形が離れて龍也に近づく。

そして、龍也の胸をポカポカと殴り始める。

「ちよ、どうしたんだ？」

「貴方が霊力を解放した時に吹っ飛ばされたのよ」

幽香が理由を話し始める。

「あ、そうだったの。ごめん、ごめんって」

龍也はそう言って謝る。

一通り殴って満足したのか、アリスの人形は再び龍也の頭の上に乗っかる。

そして二人が進もうとすると、

「貴方達、分かっているの？ 師匠は力も頭も私とは比べ物にならないのよ」

鈴仙がそんな言葉を投げかけてくる。

「だから？」

「え？」

「お前の師匠がいくら強かろうが凄かろうが関係ねえ。お前の師匠を倒さなければ

月が元に戻らないって言うんであれば……倒す。それだけだ」

龍也がそう言い切る。

絶対に勝つと言う目をして。

そんな龍也を鈴仙はポカーンとした表情で見る。

「ん？ どうかしたか？」

「別に」

そう言っつて鈴仙は顔を反らす。

「処で龍也」

「ん？」

「あれは何かしら？」

そう言っつて幽香は指をさす。

その先には破壊されている襖があった。

「ああー！！ 封印が破れてる！！ さっきの影響！？」

破壊されている襖を見て、鈴仙が声を上げる。

「封印……そう言えばそんな事を言っていた様な……」

「あ……」

鈴仙は慌てて口を押さえるがもう遅い。

「なら、あっちが正解のルート？」

「あの慌てぶりから察するにその様ね」

鈴仙の反応から確信を得た龍也と幽香の二人は、その襖の先に進んで行った。

「ああー！！ 師匠に怒られるー！！！！」

そんな鈴仙の悲痛な叫びが廊下を反響していった。

永夜抄編 その5

封印が破れたと言った襖の先に進んで行くと、また長い廊下に出た。今までの廊下と比べると随分と暗い。

更に、ここからは外の景色が見える。

龍也がそちらに視線を移すと、妖精が現れる。

白い塊を自身の周囲に展開させ、大量の弾幕を放ちながら。

龍也と幽香の二人は放たれた弾幕を回避しながら撃ち落していく。

すると今度は、白い塊と妖精が横一列になって現れる。

それが何体か現れ、一斉に弾幕を放ってきた。

「っと」

龍也は少し考えながら弾幕を回避し、妖精を撃ち落とす。

すると、その妖精の横にあった白い塊は崩壊していく。

それを制御している妖精を倒せば、自然と崩壊していく様である。

龍也はもう少し早く気付いていればと思いつつ、白い塊を無視して妖精を

撃ち落していく。

そんな風に妖精を撃ち落しながら進んで行くと、

「ああ、もう！！ こっちに來させたらダメだって言ったのに！！」

永琳が慌てた様子で現れる。

「やけに焦ってるな」

「これ以上先に進まれると不味いんからじゃないかしら？」

幽香がそう言ったところで永琳が弾幕を放ってきた。

焦っているせいであろうか。

弾幕の量は多いが、避けるのにそれ程困難はないと龍也は思った。

そして隙を見つけながら弾幕を永琳に当てて行く。

「くっ！！」

このままでは分が悪いと思った永琳はスペルカードを取り出し、

「薬符『壺中の大銀河』」

スペルカードを発動させる。

すると無数の白い塊が現れ、龍也は取り囲む。

龍也を取り囲むと、弾幕を放ちながら広がっていく。

内側にも放たれているが、外側にも放たれているのを白い塊の僅かな隙間から
龍也は見た。

量で言えば、外側の方が圧倒的に多い。

不用意に外に出ようものなら、大量の弾幕をその身に受けてしまう
だろう。

だが、これでは白い塊に邪魔されて永琳に弾幕を当てる事はできない。

龍也は弾幕を避けながらどうするか考えていると、

「ん？」

ある事に気付く。

広がっていく白い塊は、ある一定の距離まで行くと消えると言う事に。

消えると永琳から再び白い塊が放たれ、龍也を取り囲む。

再び放たれてくる弾幕を避けながら、龍也は突破口を考え付く。

それは白い塊が消え、再び囲んでくる間に攻撃すると言う物。

だが、その時間は短い。

龍也は慎重にタイミングを計って行く。

そして、

「ッ！！」

白い塊が消えた瞬間、スペルカードを取り出しながら永琳に向かって一瞬で近づく。

永琳の懐に入った龍也は、

「風拳『零距离突風』」

スペルカードを発動させる。

永琳の胴体に拳が放たれ、龍也の瞳の色が翠に変わったのと同時に龍也の拳から突風が放たれる。

それをまともに受けた永琳は吹き飛ばされていく。

「……………思ってたより、ずっと簡単に決着が付いたな」

龍也がそう呟いたのと同時に瞳の色が翠から黒に戻る。

「彼女、相当焦っていたからね」

幽香はそう言いながら龍也の隣に移動する。

「そのせいで思う様に実力を出せなかった様ね」

「成程」

龍也はそう言いながら周囲を見る。

「処で、月っでもう戻ったのか？」

「んー……発動していた術が消えたという感じはなかったわね」

幽香の発言を聞き、龍也は前方に目を向ける。

「永琳の焦り様から……」

「この先に何かはあるわね」

そして、二人は先に進んで行く。

すると、何やら開けた場所に出た。

「外……？」

龍也はそんな事を呟きながら辺りを見渡す。

「……あれは」

その時、龍也は何かを見つける。

「何か見つけたの？」

そう言って、幽香は龍也が見ている物に視線を移す。

「月……」

そう、龍也と幽香の目に映っているのは月であった。

「偽者の……いや、違う。これは本物の月よ」

その月を見て幽香はそう漏らす。

すると、

「そう、地上から見える本物の月」

何者かが現れる。

長い黒い髪に着物を着た少女だ。

「……誰だ、あんた？」

「私は蓬莱山輝夜。永遠亭の主よ」

「あんたが……」

そう言って龍也は輝夜を見る。

「それにしても、人間と妖怪のお客様とはね」

そう言って輝夜は龍也と幽香の二人を見る。

同時に龍也の頭に乗っかているアリスの人形が吹き飛び、幽香の手の中に納まる。

「貴女はこっちにいなさい。龍也の近くにいとまた吹き飛ばわよ」

幽香は自分の手の中にいるアリスの人形にそう言う。

「あら、靈力を解放して狂うのを防ぐか。中々の力技ね」

輝夜はクスクスと笑いながらそう言う。

「てか満月は戻ってる様だし、これ以上ここにいる必要はないんじゃないのか？」

龍也はそう言って帰ろうとする。

「残念、本物の満月はここでしか見れないわよ」

「何？」

輝夜にそう言われて龍也は再び輝夜を見る。

「なら、お前を倒して満月を取り戻す」

「そうそう、そうこなくっちゃ」

そう言いながら輝夜は龍也と幽香から間合いを取る。

「永琳が屋敷から全然出してくれないから、退屈していたのよね」

輝夜はそう言いながら懐に手を入れる。

「今まで、数多もの人間が解けなかった五つの難題。貴方達に幾つ解けるかしら？」

「五つの難題？」

その言葉に龍也は引っかかりを覚える。

昔、古文だったか古典の授業で習った様など。

龍也がそんな事を考えていると、輝夜はスペルカードを取り出し、

「難題『龍の頸の玉 - 五色の弾丸 - 』」

スペルカードが発動する。

すると、五色に光る弾と細長い弾が次々と放たれる。

「っつ」

龍也は慎重に回避していく。

下手に動こうものなら動きが大幅に制限される可能性があるからだ。

そして隙を見つけないながら弾幕を放っていく。

「あら、意外とやるじゃない」

輝夜はそう言いながらスペルカードを取り出す。

そして、

「難題『仏の御石の鉢 - 碎けぬ意志 - 』」

二枚目のスペルカードが発動する。

その瞬間に輝夜から無数の白い塊が放たれる。

それは輝夜を守るように配置され、

「ッ!？」

レーザーが一斉に放たれる。

それは龍也の体に何本も掠ったものの、直撃はしなかった。

レーザーが止んだ後、龍也は反撃の弾幕を放つが白い塊に阻まれて輝夜本人には当たらなかった。

「チィ!!」

その事に龍也が舌打ちすると同時に、白い塊から再びレーザーが放たれる。

龍也はそれを避けながら考える。

どうやって攻撃を当てるかを。

「……ん？」

龍也はそこである事を思い出す。

妖精が放ってきた白い塊は破壊できた。

ならば、今ある白い塊にも同じ事が言えるのではないか。

そう考えた龍也は白い塊に向けて弾幕を放つ。

するとどうだろう。

暫らく当て続けていると白い塊が崩壊する。

「いける」

それを見た龍也は放たれるレーザーを避けながら弾幕を放ち、白い塊を

破壊していく。

「あら、力で強引に破ってきたわね」

その様子を見ていた輝夜がそう漏らす。

「昔はそんな強引な男はいなかったわね」

そう言いながら輝夜はまたスペルカードを取り出す。

そして、

「難題『火鼠の皮衣 - 焦れぬ心 - 』」

三枚目のスペルカードが発動する。

すると火の玉を模した弾幕が現れ、それが龍也に向って飛んで来る。物が燃えながら落ちて来る様に連想させられる。

「熱ッ!!」

それが自身を掠った時、龍也は思わずそう漏らす。

不用意に掠らせれば体力を減らしていく結果になるだろう。

そう考えた龍也は余裕を持ちながら回避し、弾幕を放っていく。

「あら、これも破ってくるか」

輝夜はそう言いながら懐に手を入れる。

「鈴仙と永琳を倒して来たんだから当然か」

そう言ってスペルカードを取り出す。

そして、

「難題『燕の子安貝 - 永命線 - 』」

四枚目のスペルカードが発動する。

すると、一個の白い塊が放たれる。

それが動きを止めると、

「どっわー!!」

無数の方向に無数のレーザーを放って来たのだ。

レーザーが止んだ後、龍也は白い塊を破壊しようとした瞬間、

「何!？」

その白い塊が消えた。

すると再び白い塊が輝夜から放たれ、

「ッー!!」

そこからレーザーが放たれる。

回避が間に合わないと判断した龍也は、レーザーを左腕で防御する。

レーザーが止むと、また白い塊が消える。

これまでの流れを見て、あの白い塊の破壊するのは得策ではないと龍也は判断する。

破壊してもまた同じのが現れるのでは、破壊するだけ無駄である。

そう判断した龍也は白い塊は無視して輝夜にのみ弾幕を放っていく。

放たれてくるレーザーを避けたり防御しながら。

「痛……、随分やるじゃない」

そう言いながら輝夜はスペルカードを取り出す。

「でも、これをクリアできるかしら？」

そして、

「難題『蓬萊の弾の枝 - 虹色の弾幕 - 』」

五枚目のスペルカードが発動する。

すると、また白い塊が放たれる。

数は七。

それらは輝夜を守るように配置される。。

そして、それぞれの白い塊から赤、橙、黄、緑、青、藍、紫色の弾幕が放たれる。

まるで虹の様だ。

それを見た龍也は、初めて美鈴と戦った時の事を思い出した。

「っつと」

そんな感慨に耽っていると目の前に弾幕が迫って来ていたので、龍也は慌てて回避をする。

すると、今度は白い塊があらぬ方向に弾幕を飛ばす。

同時に輝夜が龍也目掛けて弾幕を飛ばしてくる。

これも赤、橙、黄、緑、青、藍、紫と虹を思わせる弾幕だ。

その弾幕を避けると、

「が!？」

龍也の背中に何かが着弾する。

何だと思いつながら龍也は後ろを振り返る。

「これは……」

あらぬ方向に飛んでいって弾幕だ。

それが戻ってきたのだ。

咲夜やてゐのと同じ様な物だと龍也は思った。

だが、厄介である事に変わりはない。

下手に動こうものなら退路が塞がれ、集中砲火を受ける事になるだろう。

輝夜に攻撃を加え様にも、白い塊が盾になっているのでそれもできない。

破壊するにしても時間が掛かり過ぎるであろう。

回り込もうにも弾幕が邪魔でそれもできない。

「ッ!!」

目の前に弾幕が通ったので龍也は慌て後ろに戻る。

「くそ!!」

龍也は思わず悪態を吐く。

突破口が見つからないからだ。

「あらあら、ここまでかしら?」

輝夜のそんな言葉に耳も向けずに龍也は必死になって弾幕を回避していく。

だが、それも長くは続かず、

「くっ!!」

次第に掠り始め、

「がっ!?!」

ついには頭に直撃した。

龍也はふら付きながら頭を押さえる。

だが、そんな状態でも弾幕は迫ってくる。

龍也は必死に体を動かし、回避しながら

「……………やめだ」

突如そんな事を言い出す。

「あら、ギプアップ宣言？」

「ちげーよ」

龍也は懐の手を入れながらそう答える。

「こつ……………ごちゃごちゃ考えるのをだよ」

そして懐から何かを取り出す。

「俺らしくなかったぜ」

取り出した物はスペルカードだ。

「打つ手が思いつかなかったら……………真っ向から潰す……！」

そして、

「憤怒『朱雀の怒り』」

スペルカードが発動する。

同時に龍也の瞳の色が紅く輝き出し、髪の色が黒から紅に変わる。

すると、龍也から広範囲、高密度の紅い弾幕が放たれる。

それは輝夜を守るように配置されている白い塊に次々と当たり、

「ッ!？」

それを破壊する。

輝夜は慌ててその場から離れようとしたが、

「しまっ!？」

その時には朱雀を模した炎の塊が迫って来ていた。

輝夜は為す術も無くそれに飲み込まれた。

龍也の髪と瞳の色が元に戻ると朱雀を模した炎の塊も消えた。

すると、輝夜が落下しているのを龍也は発見した。

龍也は急いで近づき、地面に激突する前に輝夜の手を掴む。

「ふうー」

龍也が一息吐くと同時に霊力の解放を止めると、

「お疲れ様」

そう言って幽香が近づいてくる。

「ああ……って痛え!!」

すると、幽香の手の中からアリスの人形が飛び出して龍也をポカポカと殴り始める。

「その子、貴方が霊力を解放した時にまた吹き飛ばされたみたいよ」

幽香がまた理由を話してくれた。

「ごめん!! ごめんって!! 俺が悪かったって!!」

龍也が謝るが、アリスの人形は中々殴るのを止めない。

暫らく殴っていると気がすんだのか、アリスの人形は殴るのを止めて龍也の頭の上に乗っかる。

「と言うより、月は戻ったのか？」

「うーん……」ここからじゃ分からないわね」

そう言って幽香は少し考えると、

「紫一、どうせ見てるんでしょ。この屋敷の連中全員隙間で神社に送ってくれる？」

幽香がそう言つと、龍也と幽香の二人の足元に隙間が現れる。

「行きましよう」

「ああ」

そして二人は隙間の中に入って行った。

永夜抄編 その6

周囲にある無数の目。

ここは隙間の中だ。

ここに来るのも随分と久しぶりだなと龍也は思う。

初めて隙間の中に来たのは幻想入りした時であったか。

龍也はそんな事を思っていると出口に着く。

眼下に見えるのは博麗神社。

博麗神社に送られた様だ。

落下中にアリスの人形は龍也の頭から離れてアリスに向かって飛んで行った。

それから少し後、龍也と幽香は地面に着地する

そして龍也は輝夜から手を放し、地面に横たわらせる。

同時に龍也の背後から落下音が聞こえる。

龍也は落下音が聞こえた方へ目を向ける。

そこに居たのは、

「てゐに鈴仙に永琳」

てゐに鈴仙に永琳の三人であった。

「お疲れ様」

そう言いながら紫が歩いて近づいてくる。

「さて、どうして月を欠けさせたのか理由などを色々と聞かせて貰おうかしら」

紫はそう言いながら永琳達に向き直る。

「はぁ、分かったわ」

永琳は観念したかの様に事情を話し始めた。

何でも、鈴仙、永琳、輝夜の三人は月から来たらしい。

それで、色々あつて幻想郷に来たそうさ。

それから隠れる様に幻想郷で生活していた様だ。

だが、月の住人が強制的に三人を連れ戻そう言う情報を鈴仙がキャッチした。

月の住人が地上に来るためには満月が出ていなければダメらしい。

なので満月を欠けさせた。

大まかだが、これが今回の異変を起こした理由だそうさ。

ならば、満月を元に戻したら月の住人が来るのではと龍也は思ったがそれは無いと紫がそう断言した。

紫がそう言うならそうなのだろうと龍也は思った。

今回は事態が事態であったため、二度とこんなマネをしない様念を押させる。

そして、

「ま、こうなるわな」

宴会が始まる。

ちなみにもう満月は元に戻っており、夜も止まってはいない。

龍也は宴会会場にある料理を食べながら適当に散策してしていく。

「お」

龍也は見知った顔を発見する。

話しをしようと思いついて行く。

「よし」

「あ、龍也」

龍也の存在に気付いてミスティアが振り返る。

そして一緒にいたリグルも振り返る。

龍也の存在に気付いたリグルは慌ててミスティアの後ろに隠れ、キ

ヨロキヨロと

周囲を探る。

「ん？ どうした？」

「あ、あの怖いお姉さんは……」

「幽香の事か？ 幽香だったら……」

龍也はそう言いながら顔をキョロキョロと動かす。

すると幽香を発見する。

紫と一緒に飲んでいる様だ。

「あっちの方で紫と飲んでいるみたいだぞ」

龍也がそう言うと、リグルはホツとした表情になる。

「何かあったの？」

リグルの様子が気になったのか、ミステアが龍也に何かあったのか尋ねる。

「ああ、ちよつとな……」

龍也が簡単に事情を話し始める。

「成程……」

事情を理解したミステアがリグルの方を向く。

「まあ、仕方ないんじゃない？」

「ううー、人事だと思って……」

「はは……」

「ま、それはそうと焼き八目鰻持って来たんだけど食べる？」

「ああ、食べる」

龍也はミステリアから焼き八目鰻を貰い、食べる。

「相変わらず美味しいなこれ」

「えへへ、ありがとう」

そして適当に雑談した後、龍也またブラブラと会場内を回っていく。

「龍也」

自分と呼ぶ声が聞こえたので龍也は振り返る。

「レミリア」

龍也の名を呼んだのはレミリアであった。

「流石ね。キッチンと異変解決してくるなんて」

「ありがとう」

龍也は褒められた事に対して礼を言う。

「どう、私のものにならない?」

「断る」

「あら、残念」

レミリアがそう言うと咲夜がワインとグラスを持って現れる。

「年代物のワイン……飲んでく?」

レミリアが若干色っぽくそう言う。

「ああ、飲んでくよ」

龍也はレミリアのお誘いを受ける事にした。

咲夜からグラスを受け取ると、レミリア、龍也の順でワインがグラスに注がれていく。

その後、グラスを合わせてから二人はワインを飲み始める。

「お、美味しいなこれ」

「ふふん。そうでしょそうでしょ」

レミリアは少し自慢げにワインに付いて語る。

そして少し雑談をした後、龍也は再び宴会場を歩き回る。

すると、魔理沙とアリスを見つけたので声を掛ける事にした。

「よっ」

「お、龍也じゃないか」

「あら、龍也じゃない」

魔理沙とアリスの二人が龍也の存在に気付く。

「しかし、今回はよく分からない異変だったな」

魔理沙は満月をそう呟く。

「さっきまで満月と今の満月ってどこが違うんだ？ 私にはよく分からん」

そう言って魔理沙は首を傾げる。

「貴女も魔法使いならそれ位分かりなさいよ」

アリスが呆れた様にそう言う。

「なにを」

そう言ったアリスに魔理沙は喰って掛かるつとする。

「まあまあ……」

喧嘩になりそうだったので龍也が二人を宥める。

「それよかアリス、人形ありがとな」

「別にそれぐらい構わないわ。ま、役に立った様で何よりだわ」
そして雑談をしながら酒を飲んでいく。

暫らくすると、龍也はまた宴会会場内を歩いて回る。

すると、拝殿近くで霊夢が飲んでいるのを発見したので近づいて行く。

「よう」

「あら、龍也じゃない」

龍也は霊夢の隣に座りながら酒を飲む。

「気楽に騒いじゃって。後片付けを誰がすると思ってるのかしら」

霊夢はそう言いながら龍也をジッと見る。

「分かってるよ。俺も手伝うよ」

「催促したみたいで悪いわね」

霊夢はそう言いながら笑顔になる。

「それと、素敵な寶錢箱はそこよ」

「そんな事言わなくても寶錢ぐらい入れるって」

龍也はそう言いながら財布を取り出し、小銭を入れる。

「ありがとう」

そう言っつて霊夢はまた笑顔になる。

「やれやれ」

龍也がそう口を開いたところで

「やっほー!!」

龍也の頭の上に何かが降つて来る。

「あら、萃香じゃない」

龍也の頭の上に降つて来たのは萃香であった。

「どうしたの、急に?」

「いやー。楽しそうな雰囲気からして来たからね」

萃香はそう言っつて龍也の頭の上から降りる。

「それにしても楽しそうだね。何の宴会?」

「異変解決の」

「異変? 異変なんてあったの?」

「さっきまでね」

「私はさっきまで寝てたからなー」

どうやら寝ていたので異変の事には気付かなかった様だ。

「それで、異変は誰が解決したんだい？」

「龍也と幽香よ」

霊夢がそう言いつたのを聞いて萃香は

「流石私に勝った男だ」

そう言いながら龍也の背中をバシバシ叩く。

「ご褒美に私の酒を上げよう!!」

そう言って萃香は瓢箪を取り出し、

「えい!!」

「もが!?!」

龍也の口に突っ込む。

萃香が瓢箪を龍也の口から離すと龍也が咽る。

「ゲホ!!　ゴホゴホ!!　何すんだよ!!」

「ご褒美だよご褒美。美味しかったでしょ？」

「まあ……美味かったな」

確かに、今まで飲んだ酒より萃香の瓢箪に入っていた酒の方が美味ではあったと龍也は思う。

酒を飲みながら霊夢と萃香の二人と雑談をした後、龍也はまた宴会会場内を彷徨っていく。

手に持ったおにぎりを食べようとすると、

「もーらい」

横から掠め取られてしまった。

誰だろうと思いつながら龍也は横を見る。

「幽々子が」

予想通りと言つべきか幽々子であった。

「相変わらずだな」

幸せそうな顔をしながらおにぎりを食べている幽々子を見ながら龍也そう漏らす。

「幽々子様ー」

後ろの方から妖夢が近づいてくる。

「溜まっていたお饅頭、お持ちしました!！」

そう言っつて饅頭を幽々子の目の前に差し出すと、すぐに消えた。

どこに消えたかと言うと幽々子の口の中である。

それを見た龍也と妖夢は何とも言えない表情をしている。

そして、龍也と妖夢は顔を見合わせる。

「よっ」

「こんばんは、龍也さん」

そして三人で雑談した後、龍也はまたブラブラとして行く。

そんな中、永遠亭のメンバーを発見したので近づいてみる。

「よっ」

「あら、いらっしやい」

こっちはこっちで盛り上がってるいる様だ。

龍也はそんな様子を見ながら輝夜を見る。

「私の顔に何か付いてる？」

「お前があの輝夜姫だつて事に驚いてるんだよ」

そう、輝夜は輝夜姫であつたのだ。

絵本や古文なのでも有名な。

その事を聞いた時には龍也は驚いたものだ。

「見惚れちゃつた？」

「別に」

「あら、淡泊な反応。からかいがないわねえ」

輝夜はそう言いながら酒を飲む。

「それにしても、幻想郷に居れば月の追っ手を心配しなくてもいいなんてね」

永琳はそう言いながら月を眺める。

「私の数十年は何だつたんでしょつか？」

鈴仙がそんな事をポツリと漏らした。

「貴女はたかだか数十年でしょ。私と永琳なんて千年以上よ。永遠亭に籠つて」

「まあ、姫様は元々引き籠もり気味でしたけどね」

随分引き籠もってたんだなと龍也は思った。

「もう引き籠もってる必要もないし、何かやった方がいいのかしらね」

ふと、永琳がそんな事を呟いた。

「だったら医者でもやったらどうだ？」

「医者を？」

「ああ。あんた医者なんだろう？」

「本業は薬師だけど、医者もできるわね」

「だったら人里で病人見たり、薬を売ったりとかやったらいいんじゃないか？」

人里の方ではそう言った知識を持つてる人が殆どいないって話らしいぜ」

「ふむ……確かにそう言った交流も必要かもね」

そう言っつて永琳は考え込む。

「お兄ーさん」

その声が聞こえて来たのと同時に龍也は背後から何かに抱きつかれる。

龍也は誰だと思いながら首を動かす。

「こんばんは、お兄さん」

「てゐか」

後ろから抱きついて来たのはてゐであった。

「何か用か？」

「お兄さんにお得な情報を持ってきました」

てゐはそう言いながら小型の寶錢箱を龍也の目の前に持って来る。

「何だこれ？」

「ここにお金を入れるとお兄さんに幸運が訪れるよ」

「また貴女は……」

鈴仙はそう言いながら頭を押さえる。

何時もこんな事をやっているのであらうか。

「ま、いつか」

龍也はそう言って財布から小銭を取り出す

別段そこまでお金には困ってないし、これで幸運でも訪れれば儲け物である

と言った気分で小銭を寶錢箱の中に入れる。

「えへへ」

小銭を入れるとてゐは嬉しそうな顔する。

龍也が幸運って何だろうと思っていると、てゐは龍也から離れて鈴仙に近づき、

「とりゃー!」

鈴仙のスカートを持ち上げる。

スカートの中身が龍也に見える様に。

鈴仙は慌てて捲れ上がったスカートを押さえ、真っ赤な顔をしながらてゐを

睨む。

そのてゐは、すでに逃走していた。

「てゐ!」

そして鈴仙はてゐを追っかけ回す。

「………今のが幸運？」

龍也は若干赤い顔をしながらポツリとそんな事を漏らした。

放浪編 その33

「何時まで寝てるのよ」

霊夢はそう言いながら襖を開け、居間の中に入っていく。

そして目の前にある布団を剥ぎ取る。

「…………んあ？」

布団の中に居た人物、四神龍也は目を覚ます。

上半身を起こ上げらせ、周囲の状況を確認する。

「あ、霊夢。おはよう」

霊夢の姿を確認した龍也は挨拶をする。

「おはよう、じゃないわよ。もうお昼過ぎよ」

「マジで？」

龍也はそう驚くと、体を伸ばし始める。

「あー…………体が微妙にダルいな…………」

龍也はそう言いながら首を回す。

「だったら運動がてらに昨日の宴会の後片付けでもしたら？」

ダルそんな表情をしている龍也に靈夢がそう提案する。

「片付け？ てか、まだ片付けしてなかったのか？」

「龍也が片付けを手伝ってくれるんでしょ？」

「そうだったけ？」

「そうよ。昨日そう言ってたじゃない」

靈夢にそう言われて龍也は宴会の時の事を思い出す。

思い出そうとしたが、あまり思い出せなかった。

思い出せた事と言えば、どこかで飲み比べをしたと言っ事ぐらいだ。

「ま、手伝つと言ったらしいからさっさとやるか」

龍也はそう言いながら立ち上がり、外に出る。

そして、

「うわぁ……………」

外の惨状を見て思わずそう漏らす。

まさに散らかり放題と言った惨状だ。

「こいつ酷いな……………」

「あいつ等、騒ぐだけ騒いでこれだもの」

霊夢はそう言っつて溜息を吐く。

「あんたが参加してくれる時は大体は手伝ってくれるから楽できていいわ」

「俺がない時は霊夢一人でやってるのか？」

「そうよ。極稀に魔理沙が手伝ってくれたりする時もあるけど」

そう言っつて、霊夢は龍也を見る。

「あんたは宴会する時に捕まらない時が結構あるからね。ちゃんと捕まってくれれば私が楽できるのに」

龍也は幻想郷を旅して回っているため、宴会をやる時に捕まらない時が結構ある。

因みに探しに行くのは主に魔理沙である。

「一箇所に落ち着いたりはしないの？」

「さあな。少なくとも今の処そんな気はないな」

龍也はそう言っつて、また散らかり放題の惨状を見る。

「さて、片づけをするか」

「思ってたより時間が掛かったな」

片づけが終わった後、龍也はそう呟く。

「お疲れ様」

霊夢が労いの言葉を龍也に掛ける。

「途中から殆ど俺一人で片付ける事になってたけどな」

「別にいいじゃない」

「まあ、いいけどな」

そう言っつて龍也は溜息を吐く。

「何よその溜息。お腹減つてると思っつてご飯作つたけど、いらなのかしら？」

「いただきます」

龍也はそう言い、霊夢と一緒に居間の中に入って行つた。

そして卓袱台の前に座り、食事を進めていく。

「霊夢の作る料理つて、これぞ和食つて感じがするな」

「そつ？」

そんなやり取りをしながら二人は食事を進めていく。

「それじゃ、そろそろ行くかな」

食事を終えた後、神社の外に出た龍也は体を伸ばしながらそう漏らす。

「あら、もう行くの？」

「ああ。今回は大した怪我もしなかったしな」

そう言っつて龍也は歩き出す。

「それじゃ、またな」

「ええ、またね」

そう挨拶を交わした後、龍也は石段を降りていく。

石段を降りて少しすると、

「ん？」

龍也は何かの気配を感じて立ち止まる。

そして周囲を探っていると、龍也の背後から何かが飛び掛る。

それを感じ取った龍也は前方に跳びながら反転し、構えを取って襲い掛かって来た相手を確認する。

襲い掛かってきたのは爬虫類っぽい四足歩行の妖怪であった。

「あれ、てつきりゴリラっぽい妖怪が襲い掛かって来たのかと思っただけで違うのか」

ここを歩いていた時に何度かゴリラっぽい妖怪に襲われた事を思い出しながら

龍也はそんな事を呟く。

すると、その妖怪の何匹かが妖力でできた弾を龍也に向けて口から放つ。

龍也はそれを跳躍する事で回避する。

今度は、空中にいる龍也に向けて地上にいた妖怪の何体かが突撃を仕掛けてくる。

龍也はその突撃をを体を反らしたりして避けていく。

そして龍也が着地すると、地上に残ってた妖怪達が一斉に龍也に突撃して来た。

その突撃を龍也は体を反らして避け、すれ違い様に攻撃を掛けて突撃して来た妖怪を吹き飛ばしていく。

突撃して来たのを全て迎撃した瞬間に、空中に居た時に突撃して来た妖怪が、落下しながら妖力でできた弾を放ってくる。

龍也はそれを手の甲で弾き飛ばし、掌から靈力でできた弾を落下してきた妖怪に向けて放つ。

龍也の放った靈力の弾は妖怪に命中し、煙を上げながら妖怪は落下していく。

それを見届けた龍也は、次の襲撃に備えて周囲を見渡す。

だが、一向に次の襲撃はなかった。

どうやら全滅させたか逃げた様だ。

そう思った龍也は構えを解く。

そして自分の掌の見つめる。

「んー……何か違和感があった様な……」

石段を降り終えると龍也はそう呟き、周囲を見渡す。

「ここに来るのも何か久しぶりな気がするな」

そう言いながら龍也は体を伸ばす。

「さて、当初の予定通り迷いの竹林の探索に……あ」

龍也は何かを思い出し、言葉に詰まる。

「行く前にお札に霊力を補充しておくべきか……」

お札とは、無名の丘の洞窟にある龍也の住処に貼られているお札。

そのお札が結界を発生させており、防犯の役目を担っている。

だが、定期的に霊力を補充しなければその役目は果たさない。

「んー……暫らくは帰らないだろうし、今の内に補充しておくか」

そう決心した龍也は飛び上がり、無名の丘を目指す。

「到着つと」

無名の丘付近に降り立った龍也は歩いて洞窟を目指していた。

そして洞窟までもう少しと言った所で、

「あー!!」

そんな声が聞こえて来た。

龍也は誰だろうと思ひ、声が聞こえて来た方に振り向く。

そこに居たのは

「メデイスン？」

メデイスンであった。

「そーいや、お前もこの辺りに住んでるんだっけか」

龍也はそう言いながらメディスンに一步近づく。

するとメディスは一步下がる。

龍也が一步近づくとメディスは一步下がる。

それを何回か繰り返す。

「……別に取って食ったりはしないって」

メディスンに近づくのをやめて、龍也はそう言う。

「……人間なんて信用できないもん」

そう言つてメディスはプイっと言つた感じで顔を背ける。

少しは分かり合えたと龍也は思っていたが、そうではなかったらしい。

「それで何しに来たの？ すーさんを盗みに来たの？」

「別に鈴蘭を盗みに来たんじゃないって。ここに俺の住んでる洞窟があるから」

ここに来ただよ」

龍也はそう言いながらメディスンに一步近づくが、

「……………」

メディスンは一歩後ろに下がる。

「……………はあ」

その様子を見た龍也は溜息を吐く。

「まあいいや。俺はもう行くけど、体には気をつけろよ」

そう言って龍也はその場を去ろうとする。

「あ、あの」

「ん？」

「えと、その……………また……………ね」

「ああ、またな」

そう言って、龍也はその場から去る。

メディスンに嫌われてるのかそうでないのか今一分からなかったが、これでいい

だろうと龍也は思うことにした。

そして少しすると、

「おー、着いた着いた」

洞窟の前に辿り付く。

少し懐かしみながら、龍也は自身の力を変える。

朱雀の力へと。

瞳の色が黒から紅に変わると、龍也は掌に炎を生み出して中に入っていく。

そして奥まで行き、ランプに火を点けると生み出していた炎を消す。

「ここも変わってないな。当たり前と言えば当たり前か」

龍也はそんな事を漏らしながらお札に霊力を注ぎこんでいく。

「さて……結構言い時間だし、出発は明日にするか」

ポケットに入れてある懐中時計で時間を確認した龍也は出発は明日に決め、

久々に洞窟で寝泊りする事にした。

放浪編 その34

「ふあ……んん……」

目が覚めた龍也は上半身を起し、両腕を伸ばす。

そして周囲が暗い事を認識すると、自身の力を変える。

朱雀の力へと。

力が変わり、瞳の色が黒から紅に変化したのと同時に龍也は自身の掌から炎を生み出す。

すると、辺りが照らされる。

明るくなると龍也は周囲を見渡す。

そして龍也はランプを見つける。

そのランプに火を点けると、龍也は生み出していた炎を消す。

その後、ダンボールの中に入ってある保存食を朝食として食べる。

「んー……今度帰って来る時には香霖堂で買ってから帰るかな」

残りの在庫から龍也はそんな事を漏らす。

保存食を食べ終わるとランプの火を消す。

その後、再び掌から炎を生み出して外に出る。

「んー……いい天気」

外に出た龍也は体を伸ばしながらそう漏らす。

そして予定通り迷いの竹林に出発し様と思っていると、ある物が目に付く。

ある物とはポストだ。

「あー……そう言えば昨日中身確認してなかったな」

龍也はそう言いながらポストに近づき、中身を確認する。

すると、中からドサドサと新聞が落ちてくる。

全て”文々。新聞”だ。

「あー……結構溜まってるな」

新聞の量を見て龍也は思わずそう呟く。

また帰って来る時にも結構な量の新聞が溜まっている事である。

ならば今のうちに読んでおく方が良いと龍也は考え、龍也は大量の新聞を

抱えて洞窟内に戻って行く。

この新聞を全て読むために。

結局、” 文々。新聞 ” を全て読んだら日が暮れていた。

序に懐中時計で時間を確認した龍也は、翌日に出発する事にした。

そして、今日がその翌日。

龍也はウキウキした気分で外に出ると、

「うわあお……」

龍也は思わずそんな言葉を漏らす。

何故かと言うと、大雨が降っていたからだ。

これでもかと言うくらいに。

龍也のウキウキした気分は一気に無くなった。

例えるならまだ外の世界にいた頃、学校に行こうと外に出たら大雨で、学校に

行こうとしていた気分が一気に無くなった状態であろう。

そんな気分になった龍也は回れ右して洞窟の中に帰って行った。

明日は晴れるよと思いながら。

そして、また翌日。

龍也の願いが届いたのか、見事な快晴になった。

気分良く洞窟を出た龍也は、人里に来ていた。

おにぎりでも買ってから行こうと思ったからだ。

おにぎりを売っている店を探しながら歩いていると、

「あー、どっすかなー」

そんな声が聞こえて来た。

気になった龍也はその声を聞こえた方に歩いて行き、

「どうかしたんですか？」

何があったか尋ねてみる。

「ん、ああ、いらっしやい」

声を掛けられた方はそう返事をする。

いらっしやいと言っからには何かの店なのだろう。

そう思った龍也は周囲を見てみる。

そこには布地やら沢山置いてある。

布などを扱っている店なのかと龍也は推察する。

「それで、どうかしたんですか？」

「ああ、客が買った物を忘れていったみたいでな」

「買った物をですか？」

「ああ、昨日店閉める少し前に来て結構な量を買っていった客がいてな。

で、その買っていった物の一部を忘れていったんだよ」

そう言っって店主が顔の向きを変える。

龍也も釣られる様に顔の向きを変える。

そこには包みがあった。

あれが忘れて行った物であろう。

「あの時は店閉める準備もしてたからなあ。俺も気付かなかったんだよ」

そうやって店主は溜息を吐く。

そんな店主を見ながら龍也は考える。

布地などを大量に買う様な人物を。

「……………ん？」

そして、一人の人物が思い当たる。

「あの一」

「どうしたい？」

「その買っていった人物って、金色の髪で長さは肩ぐらい。そして白と青を基調とした服を着た女の子ですか？」

「そうだが、知り合いか？」

「ええ、多分」

十中八九アリスであろうと龍也は思った。

「でしたら、俺が届けて着ましようか？」

「いいのかい？」

「ええ、構いませんよ」

そう言つて籠也は包みを手に取る。

「ありがとな、坊主」

「別に構いませんよ、これぐらい」

そう言つて籠也は店を出る。

そして、人里の外へ向つて行く。

「えーと……アリスの家はどこかな……」

龍也はそう呟きながら魔法の森を見下ろす。

龍也が今居る場所は魔法の森上空。

普通に魔法の森を歩いて行ったのではアリスの家に着くまで何日掛かるか
分からない。

なので、上空からアリスの家を目指そうというのだ。

「アリスの家の周辺には木が無かったから上空からなら分かり易いと思うんだが……」

そう言いながら龍也は移動を開始する。

少しすると、

「お

龍也は何かを発見する。

「あそこ……少し開けてるな」

そう言いながら、龍也はその場所に近づいて行く。

その場所に着くと、龍也はその場所を見下ろす。

龍也の瞳に移った光景は西洋風の館であった。

「魔法の森で西洋風の館と言ったらアリスの家だよな」

そう呟いた後、龍也は見えない足場……霊力で作ってある足場を消す。

すると龍也はそのまま落下し、

「よ……っと」

アリスの家の前に着地する。

そしてドアの前まで行き、ドアをノックする。

少しすると、

「誰？」

そんな声と共にドアが開かれる。

「あら、龍也じゃない」

「よし」

挨拶もそこそこに、龍也は包みをアリスに見せる。

「何これ？」

「昨日買い物した時の忘れ物だって聞いているぞ」

「え？」

龍也にそう言われて、アリスを少し驚く。

「中身確認してもいい？」

「ああ」

龍也の了承が取れると、アリスは龍也から包みを受け取って中身を確認する。

「……………確かに私が買った物だわ」

そう言っアリスは溜息を吐く。

「はあ、どうしてこんなミスをしたかな。浮かれてとはいえ……………」

そう呟きまた溜息を吐いた後、アリスは顔を上げる。

「とは言えありがとう。お礼と言っは何だけど、お茶でも出すから上がっっていっって」

「ああ」

そして龍也はアリスの家上がり、居間の方へ進んで行く。

「そこ座っって。すぐにお茶とお茶菓子持って来るから」

そう言っ、アリスは台所の方へ向った。

それを見た後、龍也は椅子に座る。

少しポケーツとしていると、

「お待たせ」

トレイに紅茶とクッキーを乗せて戻ってきた。

そしてアリスも龍也の対面の位置に座る。

「改めてありがとう」

「別にいいよ」

そう言っただけで龍也は紅茶を飲む。

「にしても珍しいな。アリスが忘れ物するなんて」

「あの時は浮かれてたからね」

そう言った後、アリスは少し照れくさそうに顔を染める。

「浮かれてたって……何か良い事でもあったのか？」

「ええ、例の巨大人形がもう少しで完成しそうなものよ」

「巨大人形って言うとは……前に言ってたあれか？」

「ええ、そう。人形を巨大化させると言うのはまだ無理だけど、巨大な人形を」

作ると言う点に関しては後は組み立てるだけと言った感じね」

アリスは少し自慢気にそう語る。

「そいつはおめでとう」

「ありがとう」

そう言ってアリスは少し嬉しそうな顔をする。

「で、忘れ物を届けて貰って悪いんだけど……」

「ああ、邪魔になるから出てった方がいいか？」

「そうじゃないの。またアドバイスが欲しいのよ」

「アドバイス？」

「ええ」

そう言ってアリスは何かを取り出し、それをテーブルの中央に持っていく。

どうやらそれは設計図の様だ。

「これは……巨大人形の設計図か？」

「ええ、そうよ。貴方から見て修正点とかあるかしら？」

「そうだな……」

そして龍也はアリスと意見交換などをしていく。

「色々ありがとう。随分参考になったわ」

「気にするな」

そう言って龍也は体を伸ばす。

「って、もう夜か」

窓の外を見た龍也は思わずそう呟く。

「あ、ごめんなさい。また遅くまで付き合わせて」

「別にいいって。俺もアリスには色々世話になってるじゃ」

そう言っつて龍也は立ち上がる。

「泊まっつていっつてもいいか？」

「ええ、構わないわ」

そう言っつてアリスも立ち上がる。

「部屋に案内するわね」

「ああ、ありがとう」

そして部屋の前まで案内される。

「それじゃ、お休み」

「ええ、お休み」

そう挨拶を交わし、龍也は部屋の中に入る。

近くにある椅子に学ランを掛け、ベットに入る。

「……あ」

そこで思い出す。

迷いの竹林に向うと言う事を。

「まいつか」

そう呟いて目を瞑る。

別段急ぐ旅路ではないのだ。

それに急いで迷いの竹林に向う理由もない。

明日行けばいい。

そう思いながら、龍也は夢の世界に旅立って行った。

放浪編 その35

朝、目が覚めた龍也は上半身を起き上がらせて周囲を見渡す。

そして少しずつ頭が覚醒していき、アリスの家に泊まった事を思い出す。

そこまで思い出すとベットから出て、椅子に掛けてあった学ランを羽織り、

居間に移動する。

「あ、おはよう」

居間に着くとアリスが挨拶をしてくれた。

「ああ、おはよう」

龍也も挨拶を返す。

「丁度よかったわ。朝ご飯できたから起しに行こうと思ったの」

そう言われて、いい匂いがするなと龍也は思った。

アリスに促される様に席に着き、朝食を食べる。

朝食はパンとスープとサラダであった。

「ご馳走様」

「お粗末様」

朝食を取り終え、食後のコーヒーを飲む二人。
飲み終わると龍也とアリスは軽い雑談をする。

それが終わると龍也は立ち上がる。

「それじゃ、俺はそろそろ行くぜ」

「どこに行くの?」

「迷いの竹林。あそこを探索しようと思ってた」

「あ、ならちよっと待ってて」

そう言ってアリスは立ち上がり、台所に向う。

そして二つ包みを持って戻ってくる。

「これは?」

「サンドイッチとクッキーよ。お腹が空いたら食べて」

「ありがとな」

そう礼を言って龍也は包みを受け取る。

そして二人は外に出る。

「それじゃ、またな」

「ええ、またね」

そう挨拶を交わすと、龍也は空中に飛び出して迷いの竹林へと向う。

「異変の時の以来だな。ここに来るの」

迷いの竹林の入り口に着いた龍也はそう呟く。

異変の時は空中を移動してであったが、今回は地に足を着けての探索となる。

その事にワクワクしたものを抱きながら龍也は迷いの竹林に足を入れる。

「竹林の中を歩くのって初めてだから結構新鮮だな」

竹林をキョロキョロと見ながら龍也はそう漏らす。

博麗神社近辺にある森や魔法の森、霧の湖周辺にある森とは違った雰囲気がある。

当たり前と言えば当たり前だが。

「お？」

周囲を見て回ると、龍也は何かを見つける。

そして見えた場所まで行き、屈んで見つけた物を見つめる。

「これは……筍か？」

龍也が見つけた物は筍であった。

ここは竹林なので生えていても不思議ではない。

「そうだ。夜は筍を食べよう」

今日の夕食を決め、立ち上がった時、

「ッ！！」

龍也は何かを感じて頭を下げる。

その数瞬後、龍也の頭があつた場所に何かを通る。

龍也は前方に飛びながら反転する。

そして龍也の瞳に移つた物は、

「……竹？」

竹であつた。

と言つてもただの竹ではない。

手足が生え、目が付いている。

竹に擬態した妖怪であろうか。

魔法の森にも木に擬態した妖怪がいるので、別段不思議ではないと龍也は思った。

龍也が少し考えに耽っていると、竹に擬態した妖怪が龍也に向つて突撃して来る。

そして龍也が間合いに入ると腕を振るつて攻撃を仕掛ける。

「おっと」

それを龍也は後ろに跳んで回避する。

狙いは龍也自身か、左手に抱えている包みの中身か。

若しくはその両方か。

どっちにしる目の前の相手を倒す事に変わりは無い。

そう思った龍也は自身の力を変える。

青龍の力へと。

同時に瞳の色が黒から蒼に変わる。

再び突撃して来る竹に擬態した妖怪を見据えながら、右手から水の剣を生み出す。

そして龍也は大地を駆け、竹に擬態した妖怪と交差する。

すると、竹に擬態した妖怪が真っ二つになり崩れ落ちる。

それを見届けた龍也は水の剣を消し、力を消す。

瞳の色が蒼から黒に戻った後、一息吐く。

「やれやれ、ここも油断できないな」

そう漏らした後、龍也は再び足を進めて行く。

「腹が減ってきたな……」

空腹感を覚えた龍也は、ふとそう呟いた。

今の時間を確認し様と思い、龍也はポケットから懐中時計を取り出す。

「うわあ……昼、かなり過ぎてるな」

時間を確認した龍也は懐中時計を仕舞い、周囲を見渡す。

すると少し大き目の岩を見つけたのでそこに近づく。

そしてそれを背凭れにする様に座り、サンドイッチが入っている方の包みを広げる。

「いっただきまーす」

そしてサンドイッチを食べ始める。

「アリスの作る物は相変わらず美味しいな」

龍也はそんな事を漏らしながらサンドイッチを食べていく。

大体半分程食べた頃、

「ん？」

何かが龍也に近づいて来た。

それは白い毛に長い耳をしていた。

「……………兔か？」

そう、兔であった。

龍也が兔を観察していると、兔は龍也の手に持っている物を見つめる。

「なんだ、これが欲しいのか？」

そう言つて龍也はサンドイッチのパンの部分を少し箸取り、それを掌に乗せて
兎の方へ持つていく。

兎はその匂いを嗅いだ後、それを食べ始める。

「はは、可愛いな。お前」

それを食べた後、兎は満足したのかその場を去つて行った。

それを見届けた後、龍也は再び食事を進めて行く。

少しすると、

「ご馳走様」

サンドイッチを食べ終わった。

「んー……まだ少し足りないな」

そう漏らした後、龍也はクッキーが入っている方の包みも開ける。

そしてクッキーも食べ始める。

「お、これも美味しいな」

このクッキーの程好い甘さ。

龍也好みの味だ。

クッキーも食べ終わり、包みを仕舞った龍也は立ち上がり、

「さーって、行くか」

再び迷いの竹林探索に出る。

時刻は深夜。

そろそろ寢床を探そうと、龍也は開けた場所を探すために彷徨って

いた。

「ここって結構月明かりが入るんだな」

ふと空を見上げた龍也は思わずそう呟く。

今居る場所は月明かりが良く入る場所のため、朱雀の力を使って炎を生み出して
灯り代わりにする必要もない。

「とと、寝る場所探さなきゃ」

龍也はずれていた思考を戻し、寝床探しに戻ろうとすると、

「ん？」

何かが近づいて来るのを感じ、そちらへ体を向ける。

すると、何かが走って近づいて来ているのが見て取れる。

「あれは……サニーミルクにルナチャイルドにスターサファイア…
…」

近づいて来ているのはよく三人で行動している三妖精であった。

向こうの方も龍也の存在に気付いたのか、

「龍也さん!!」

その声を上げて龍也の所まで行き、慌てて龍也の背後に隠れる。

「どうしたんだ？」

「追われてるんです！！ 助けてください！！！」

「追われてる？」

龍也がそう言った瞬間に、龍也の目の前に何かが降り立つ。

降り立ったのは薄い紫色をした髪に兔耳。

「お前は……鈴仙……だよな？」

龍也がそう尋ねると、

「そう言う貴方は……龍也……で良かったわよね？」

鈴仙は少し驚いた様にそう尋ね返す。

「こんな夜中に何しに来たの？」

「迷い竹林の探索だな」

「えっと……お知り合いですか？」

龍也の背中から少し顔を出したスターサファイアがそう尋ねる。

「ああ」

龍也はスターサファイアに顔を向けてそう返した後、鈴仙に顔を向

ける。

「こいつ等はお前に追われてたって言ったるけど」

「追わ……追っていたのは事実だけど別に危害を加えようとした訳ではないわ」

三妖精の怯え様を見たからなのか、鈴仙は少し慌て気味に弁解を始めた。

永琳の命令で光る竹を手に入れなければならない。

その光る竹を手に入れるためにはてゐの力が不可欠らしい。

なので、てゐを探すために迷いの竹林の波長を弄って出れない様にした。

光る竹を手に入れるためにはてゐの力が不可欠らしい。

それを聞いた龍也と三妖精は傍迷惑なと思った。

そして、てゐ探している時に三妖精を見つけたのでてゐの居場所をしっかりとっているか

どうか尋ね様としたら逃げられたとの事。

三妖精が逃げた理由としては、自分達の能力で姿を消していたのに見つかったからなのだが。

因みに、三妖精が見つかった理由は鈴仙の能力の特性上らしい。

で、てゐを見つけるのに三妖精は協力するとの事。

てゐは見つからなければ帰れないからなのだが。

「本当、ありがとう」

鈴仙はそう礼を言う。

そして、

「はあ、何かあるたんびに師匠に怒られるのは私なのよねえ。この前だって……」

何やら愚痴を言い始める。

色々と溜まっているのだろうか。

かなり長い間愚痴を言っている。

そして愚痴が永琳の事メインになった所で、

「後でお師匠様に報告してやるーっ」と

てゐが姿を現して去って行く。

「……って待てー!!」

数瞬後、鈴仙は大慌てでてゐを追っかけて行った。

それをポカーンとした様子で龍也は見送った。

「ほら、起きなさいよルナ」

「ふにゃ？ もう朝」

鈴仙の愚痴の途中で寝てしまったルナチャイルドをサニーミルクが起す。

「そう言えばお前等は何しに迷いの竹林に来たんだ？」

「私達はちよつと遊びに」

スターサファイアがそう答える。

「あの人が探してた人が見つかったみたいだから私達もそろそろ帰れる……」

スターサファイアがそう言い掛けた瞬間、近くの茂みが音を発する。

三妖精は慌てて龍也の背中に隠れる。

そして茂みから

「いやー鈴仙も甘い甘い」

てゐが現れる。

「やっほ、お兄さん」

そう言いながらてゐるは龍也に近づいて来る。

「どうだい、この賽銭箱にお金を入れるといい事が起こるよ」

そう言つててゐるは賽銭箱を取り出す。

「またか」

そう言いつつも、龍也は財布から小銭を取り出して賽銭箱の中に入れる。

「あのー……本当に良い事が起きるんですか？」

スターサファイアが疑問気な顔でそう尋ねる。

「失礼な。私の能力は本物だよ」

てゐるはそう言いながら賽銭箱を仕舞う。

「それじゃまつたねー」

そう言いながらてゐるはどこかに消えて行く。

それを見届けた龍也は、鈴仙が苦勞している理由が少しは分かった気がした。

「さて」

そして龍也は立ち上がり再び移動を開始する。

寝床を探すために。

そんな龍也の後ろを、三妖精が付いて来ていた。

「あら、お前等帰ったんじゃないのだったのか？」

「良い事が起きるんならそれを見届けようかと思ひまして」

龍也の質問にサニーミルクがそう答える。

「……………まいつか」

別にいいだろうと思ひ、龍也はそのまま進んで行く。

暫らく進むと、

「あれは……………」

龍也は何かを見つけて立ち止まる。

「何か見つけたんですか？」

「ああ」

そう言つて、龍也は見つけた場所に近づいて行く。

龍也が見つけた物は、

「光る竹……………」

光る竹であつた。

一本丸々光っている。

「あ、綺麗」

それを見たルナチャイルドと思わずそう漏らす。

「持って帰れないのかな」

そう言うサニーミルクに

「流石に無理じゃない？」

スターサファイアがそう突っ込む。

「んー……」

龍也は近づきながら、自身の力を変える。

青龍の力へと。

同時に瞳の色が黒から蒼に変わる。

そして光る竹の前に着くと水の剣を生み出し、

「ふっ」

その竹を四つに斬る。

斬ったたけをそれぞれ拾い、

「ほら」

そのうちのの三つを三妖精に渡す。

「あ、えと、いいんですか？」

「ああ。欲しがってたみたいだからな。迷惑だったか？」

「いえいえ、ありがとうございます」

そう言つてサニーミルクが頭を下げると、ルナチャイルドとスター
サファイアも
頭を下げた。

三妖精と別れ、龍也は再び寢床探しをしていた。

「しっかし便利だなこれ」

そう言いながら龍也は手に持っている光る竹を見る。

灯り代わりには持ってこいだ。

そう思っていると、

「てゐの奴、どこ行ったのよ……」

そんな事を呟きながら鈴仙が現れた。

「鈴仙」

「あら、龍也じゃ……」

鈴仙はそう言い掛けて、龍也の手に持っている物に目が行く。

「あー！！ それ！！」

そう言いながら鈴仙は龍也に詰め寄る。

「それ！！　どこで手に入れたの！？」

「どっつて……」

龍也はそう言いながら振り返る。

「……どこだろう？」

「そんなー」

そう言っつて鈴仙は項垂れる。

「光る竹が見つからないと師匠に何されるか……」

そう言いながら鈴仙は暗い雰囲気になっていく。

その様子があまりにも可哀想だったので、

「ほら、やるよ」

龍也は持っている光る竹を鈴仙に差し出す。

「ふえ？　いいの？」

「いいよ、別に」

龍也がそう言っつと鈴仙は光る竹を受け取り、

「ありがとう！ー！ー」

龍也の手を握って礼を言う。

そして頭を下げて鈴仙は去って行った。

それを見届けた後、

「……………永遠亭に泊めて貰えばよかったな」

そんな事に気付いた。

龍也は溜息を一つ吐いた後、再び寝床を探すために移動する。

放浪編 その36

龍也が迷いの竹林に入って数週間。

迷いの竹林はその名の通り迷い易い。

一度入ってしまったえばそうそう出られはしないであろう。

事実、龍也はこの数週間迷いの竹林から出られてはいない。

とは言っても龍也はまだ迷いの竹林から出る気はないのだが。

なので、龍也は変わらずに迷いの竹林の探索を楽しんでいた。

そんな風に探索していると、

「っと、分かれ道か」

左右に分かれた道を発見する。

龍也は一旦立ち止まり、二つの道を見る。

そしてどっちに行こうか考える。

考えていると、足元に落ちていた落ち葉を発見する。

「そっだ」

龍也は何かを思い付き、その落ち葉を拾う。

そしてその落ち葉を自分の胸元の位置まで持っていき、落ち葉を掴んでいた手を離す。

落ち葉は当たり前の様に地面に向かって落ちて行く。

普通に落下するのではなく、右へ行ったり左へ行ったりしながら。

そして、

「……左か」

落ち葉は左側の道付近に落ちた。

そして、龍也は左側の道へ進んで行く。

そう、龍也はこの落ち葉で行く道を決めたのだ。

左側の道を進んで少しすると、

「ん？」

龍也は足元に違和感を覚えた。

大地に足を付けている感触がないと。

そして、龍也は足元に目を向ける。

すると、

「……………ない？」

足場がなかった。

要するに穴、落とし穴である。

龍也がそれを認識した瞬間に、

「うわあああああああああああああああ！？」

龍也は落下していく。

龍也は慌てて靈力の足場を作り、そこに着地する。

「ふうー、危なかった」

龍也は一息吐き、跳躍して落とし穴から抜け出す。

そして、落とし穴をしてみる。

「結構深いな。誰が掘ったんだ？」

龍也は落とし穴を見ながらそう呟く。

「普通の人間が落ちたら怪我じゃ……………いや、普通の人間はこんな奥深くまでこないか」

龍也はそう結論付け、再び足を進める。

迷いの竹林の中をプラプラ歩いていると

「ん？」

龍也は何かを見つけた。

何だろうと思いながら、見つけた場所の方へ龍也は近づく。

近づくにつれ、全貌が明らかになる。

龍也が見つけた物とは、

「永遠亭……か」

永遠亭であった。

何時の間にか永遠亭の近くに来ていたらしい。

折角なので上がらせて貰おうと思い、龍也は扉の前に近づく。

「すみませーん、居ますかー？」

ノックをしながら声を掛ける。

だが、反応がない。

留守なのか。

龍也がそう思った時、

「どちらさん？」

扉が少し開かれた。

扉を開いた人物は黒い髪に兔耳。

因幡てゐだ。

「てゐか」

「ありゃ、お兄さん」

てゐはそう言いながら扉を全部開く。

「どづしたんだい？」

「近くに寄ったから遊びに来た。上がらせて貰ってもいいか？」

「いいよいいよ」

てゐの了承が取れたので、龍也は永遠亭に上がる。

「この前来た時にも思ったが、この屋敷は広いな」

キヨロキヨロと周りを見ながら龍也はそう漏らす。

「迷わないように注意してね」

「ああ」

そうこうしていると、襖の前に辿り付く。

てゐがその襖を開けて、

「ここで見いでてよ」

そう勧めてくる。

部屋の中は居間であった。

「ああ、そうするよ」

そう言っただけ居間の中に入って寛ぐ。

居間の中は外観通り純和風と言った感じである。

秀困気的には阿求の屋敷や白玉楼と似た感じがあると龍也は思った。

そのまま寛いでいると、

「てめ、居るかしら？」

そんな声と共に襖が開かれる。

「永琳」

「あら、龍也じゃない。いらっしやい」

そう言いながら永琳は近づいて来る。

「ねえ、てめを見なかったかしら？」

「てめなら俺をここに案内して、どっかに行ったぞ」

「あら、そうなの」

「何か用事があったのか？」

「ええ、ちよつとね」

そう言いながら永琳は腰を落ち着かせる。

「貴方をここに案内したのであれば、またここに戻ってくるでしょ」「
そう言つて永琳も寛ぎ始める。

「そう言えば薬を売るとかつて言う話、どうなったんだ？」

龍也は気になった事を尋ねてみる事にした。

「売る事にしたわ」

永琳はシレッとそう答える。

「どんな風にだ？」

「まず最初に人里の各家庭に置き薬と言つた感じで薬を一通り揃えた物を
置かせて貰つたの」

了承が取れた家だけねと永琳は付け加える。

「定期的に置き薬の在庫を確認して、使つた分だけ料金を取ると言うシステムを
取ってるの」

「へえー」

中々斬新なアイデアだと龍也は思った。

「それだけだとあれだから、週に二、三回程人里の方に薬を売りに
いったりしてるの」

「そう言う事もやってるんだ」

「主に鈴仙がだけどね」

「鈴仙がか？」

「ええ。あの子、少し人見知りなところがあるから」

それで直ってくればいいんだけどねと永琳は言葉を続ける。

「そう言えば、貴方の言った通りね」

「何が？」

「人里の方では医療などの知識を持った者が殆どいないって話し」

「……ああ、そう言えばそんな事を言ったな」

そう言って、龍也はこの前の異変解決の宴会の事を思い出す。

「だから、ありがとう。貴方のお陰で人里の人達は私達を受け入れてくれたわ」

永琳はそう言いながら龍也に頭を下げた。

「別にいいよ、それぐらい」

「でも、やはりお礼ぐらいした方が……」

「だったらさ、大怪我とかした時はタダで診てくれよ」

龍也は何となく思いついた事を口にする。

「分かったわ。その時がきたらタダでキチンと治して上げるわ」

永琳は笑顔でそう答えた。

「師匠、只今戻りました」

すると、玄関の方から声が聞こえて来た。

「あら、鈴仙が帰って来たみたいね」

永琳はそう言って立ち上がる。

「もうそろそろ夕食の時間だし、貴方も食べて行きなさい。序に部屋も用意させるわ」

夕食を食べて泊まっていけと永琳に提案される。

龍也は少し考え、

「そうさせて貰うよ」

永琳の提案を受ける事にした。

夕食を食べ終え、少したった頃、

「ほらほら、もっと飲みなさいよー」

プチ宴会状態になっていた。

「どうしてこうなった」

龍也は思わずポツリとそう呟いた。

「ほらほらー、私が酌をしてるんだからもっと嬉しそうな顔をしな

さいよー」

そう言いながら輝夜が龍也の背後から抱きついて来る。

「あー、はいはい。輝夜姫様に酌されて私は幸せでございます」

「全然気持ちが悪くないわね」

そう言いながら輝夜は龍也から離れる。

「そんな態度を取られるとプライドが傷つくわね」

「……ああ、そう言えば文字通り腐るほどの人数に求婚された事があるんだっけか？」

「そうそう。千は軽く超えてたわね」

そう言って輝夜は少し昔を思い出した顔になる。

「でも、それだけだった」

「え？」

「結局は私の美貌……言わば体だけが目当て。本当に私の事を想ってくれた人なんて……」

そう言って、輝夜は顔を俯ける。

「お、おい……」

龍也は心配になって輝夜の肩に手を掛け様とした瞬間、

「なんちゃってー!!」

輝夜がいい笑顔で顔を勢い良く上げる。

「何時の時代も泣き落としは使えるわね」

そして龍也は気付く。

騙されたと言っ事に。

「テ、テメエ……」

「ほらほら、怒らない怒らない」

そう言っつて輝夜は龍也の杯に酒を注ぐ。

「ちゃんとお詫びもするから」

「お詫び?」

龍也がそう言っつと、輝夜は顔を近づけて来る。

「お、おい」

行き成りの事態に龍也は慌て始める。

輝夜の顔が近づくにつれ、龍也は顔は赤みを増していく。

「ちよ、あ、え？」

どんと輝夜の顔が龍也に近づいて行く。

そして、

「ふむふむ、ある一定ライン以上に踏み込むと面白いぐらいに焼けるのね」

そう言っつて輝夜は龍也から顔を離す。

「……あ」

そして龍也は気付く。

またやられたと。

よくよく思えば、輝夜は数多の男から求婚された身だ。

男を手玉に取る方法の一つや二つぐらい熟知しているだろう。

「……はあ」

様々な想いが籠められた溜息を龍也は吐く。

そして、杯の中にある酒を一気に飲み干した。

永夜抄編EX

龍也が迷いの竹林に入って大体一ヶ月程経ったであろうか。

そろそろ他の場所に行こうと迷いの竹林の出口を目指している龍也であるが、

「……出口ってどこだ？」

迷っていた。

迷いの竹林は、やはりその名の通り迷いの竹林だなと龍也は思った。

空を飛んで行けばさっさと出られるであろうが、それはそれで何かあれである。

なので、龍也は自分の足で出口を目指している。

そして気付いた時には

「もう夜か」

すでに夜になっていた。

空を見れば満月が輝いている。

「そう言えば一ヶ月程前は偽者の満月だったんだよな」

龍也は満月を見ながらそんな事を呟いた。

そして一ヶ月程前の満月を思い出してみる。

「んー……やっぱり違いがある様には見えないな……」

龍也には今の満月と、一ヶ月程前の満月に違いがある様には見えなかった。

自分が妖怪なら違いが分かったのであろうか。

龍也はそんな事を思っていると、

「ッ!？」

突如、夜を照らす様な光が発生する。

「なんだ？」

そう言つて龍也は光が発生した場所を注視する。

すると、また光が何度か発生する。

何かが起きている。

そう思った龍也は上空に躍り出て、光の発生源を目指して進んで行く。

光が発生している場所に近付くにつれ、爆発音が聞こえてくる。

戦闘でもしているのだろうか。

龍也がそう考えていると、龍也の視界の端から一人の人影らしきものが飛び出してきた。

見えた人影は腰ぐらいまである長い白い髪をしていた。

「あれは……妹紅か？」

龍也がそう呟くと同時に光線が妹紅に向かって迫る。

体勢が悪いのか妹紅は回避行動が取れないでいる。

このままでは光線が妹紅に直撃すると思った龍也はその場から消え、妹紅と光線の射線上に現れて、

「はあ!！」

龍也はその光線を拳で叩き落す。

「お前……龍也？」

背後から、少し驚いたような声色で声を掛けられる。

その声を聞いて龍也は後ろを振り返る。

「あ、やっぱり妹紅だった」

自分の勘は当たっていたと龍也は思った。

「どうしてここに？」

「いや、迷いの竹林を探索していたら光源が見えたから何かなと思っ
つて」

そう言っつて龍也は前方を見る。

そこには魔理沙が居た。

魔理沙は少々驚いた顔をしながら龍也を見ている。

若しかしたら弾幕ごっこをしていたのだろうか。

先程弾いた光線の威力は然程高くはなかったなのでその可能性が高いであろう。

だとしたら余計な事をしたのかもしれない。

龍也がそう思っていると、

「……………あ？」

魔理沙の近くに次々と人数が集まってきた。

アリスに霊夢に紫に藍にレミリアに咲夜に幽々子に妖夢。

合計九人。

そしてそのメンバーはこの前の異変で解決に向ったメンバーだ。

ここに幽香が居れば全員集合だろう。

「お前等……………揃いも揃ってこんな所で何やってるんだ？」

何故ここに居るのか気になった龍也は霊夢達にそう尋ねる。

「肝試しよ肝試し」

皆を代表してか、霊夢がそう答える。

「肝試し？」

そう言っつて龍也は首を傾げる。

「そう。暇してたら輝夜が神社に来て迷いの竹林で肝試しをしないかって言っつてきてね」

「私等っつて言うか、私と霊夢と咲夜と妖夢は神社に居たんだぜ」

「それで、この前の異変で組んだ相方を連れて来いっつて言っつていたの」

「龍也さんが居ない事に彼女、少し残念がっつていましたが」

「どうやら輝夜は龍也も巻き込もうとしていたらしい。」

「まあ、大体分かった」

龍也はそう言い、気になった事を尋ねてみる。

「で、何で妹紅と戦う事になっつてんだ？」

「えっつと……何でだっつたかしら？」

そう言っつて霊夢は首を傾げる。

「どうでもいい理由だっつたのか、それとも弾幕ごっこをしている最中に忘れたのかは定かではない。」

だが、龍也は九人の目を見て分かった事がある。

それは弾幕ごっこを続ける気満々であると言う事だ。

まあ、分かっていた事ではあるが。

そしてチラリと龍也は妹紅の方を見る。

このままいけば九対一で戦う事になるだろう。

流石にそれはどうかと龍也は思った。

なので、

「で、弾幕ごっこは続けるつもりなんだろう？」

「当然。ちゃんと決着付けないと気分が悪いからな」

「なら、今から俺は妹紅と組ませてもらうぜ」

龍也は妹紅と組む事にした。

その龍也の発言にみなは驚くものの、

「あら、いいじゃない」

レミリアからそんな声が聞こえた。

「九対一で戦ってても面白くなかったし、龍也が向こうにつくのであれば面白く

なりそうじゃない」

そう言ってレミリアは面白うな顔をする。

「お、おい」

「ん？」

背後から妹紅の声がしたので龍也は振り返る。

「いいの？」

「何が？」

「私と組んでも」

そう言って妹紅は霊夢達の方をチラッと見る。

それで龍也は妹紅が何を言いたいのか大体は理解した。

「問題ねえよ。お前とも知らない仲じゃないし、みんな何時もどうでもいい事でも」

弾幕ごっこにかしてるしな。それに……」

そして龍也は再び前方を見る。

「九対一って言う状況だけで向こう付く……って言うのはどうかと
思っしな」

そう言って龍也は構えを取る。

「いいの？ 向こうの方が圧倒的に有利なのに」

「いいのいいの。俺は妹紅の方に付きたいと思ってるからこっちに付いただけだし」

そう言っつて龍也は妹紅の方に顔を向ける。

そして、

「それに向こうが有利かなんてやってみなきゃ分かんねえよ」

そう言い切った。

龍也のその発言を受けて妹紅はポカンとした表情する。

だが、すぐに笑みを浮かべ、

「頼りにさせて貰っわ、龍也」

そう言っつて妹紅は背中から炎の羽を生み出す。

不死鳥の羽を思わせるような羽だ。

「おお！！ かつこいい！！」

龍也は思わずそう言っつてしまう。

そのうち自分もマネして見ようかと考える。

同時に、ある事に気付く。

「妹紅って炎を使うのか？」

「ええ、そうよ」

「なら炎の耐性も相当高い？」

「勿論よ。私自身が炎を生み出してるわけだしね」

「なら……」

そう言いながら龍也は自身の力を変える。

朱雀の力へと。

龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

そして、

「はあああああああああああああああ!!!!!!」

力を解放する。

龍也の髪の色が黒から紅に染まっていき、紅い瞳が輝き始める。

その変化に妹紅は驚いた表情を龍也に向ける。

霊夢達の方も、妖夢、紫、藍以外のメンバーは驚く。

この変化していく様子を始めて見たからだ。

その後、龍也は両手から炎の剣を生み出す。

「俺達が互いの技でダメージを受ける事はないな」

少なくとも、弾幕ごっこで戦う際の出力なら問題ないであろうと龍也は考える。

「そうみたいね」

妹紅は表情を戻し、それに同意しながら龍也の隣まで来る。

そんな龍也と妹紅の様子を見ながら霊夢達はそれぞれ戦闘体勢を整える。

それを見ながら龍也は一旦左手の炎の剣を消し、龍也は妹紅と目を合わせる。

そして龍也と妹紅は同時に手を伸ばし、合わせる。

「いくぜ」

「ええ」

そして、龍也と妹紅は同時に掌から巨大な火炎放射を放つ。

二人が放った炎は混ざり合い、更に巨大な火炎放射となって霊夢達に迫る。

霊夢達はそれに当る気はなく、バラバラに避ける。

それを見た龍也と妹紅の二人は互いの顔を見合わせ、二手に分かれる。

バラバラになっているうちに各個撃破していること言う作戦だ。

妹紅と離れた龍也は誰が一番近くに居るか探そうとした瞬間、

「ッー!!」

上空に何かを感じ、再度左手から炎の剣を生み出す。

そして二本の炎の剣を頭上に持っていく。

すると、そこに何かが激突する。

激突したのは真紅の槍だ。

あのメンバーの中で真紅の槍を扱う者は

「レミリアか」

「正解」

レミリア・スカーレットだけである。

龍也は二本の炎の剣を払ってレミリアを弾き飛ばす。

弾かれたレミリアはクルクルと回転しながら、龍也と同じ高度で佇

む。

「分かっていたけど、初めて戦った時より随分強くなったわね」

「そいつはどうも」

レミリアは贅辞の龍也は礼を言う。

「色々と変則的な弾幕ごっこではあるけど、こつやって貴方と戦うのは二度目になるのかしら？」

「そうだな……あの時は俺のスペルカードのテストに付き合ってたから、あれはノーカンだな」

そう言いながら龍也は萃香が起した異変の事を思い出す。

「まあ、折角の機会だし……」

レミリアはそう言いながら右手に持った真紅の槍を構える。

「龍也、ここで貴方に私の力を見せつけ屈服させ、私に永遠の忠誠を誓わせてあげる」

「そう簡単に……俺は膝を折らねえぞ」

そして二人は同時に駆け、互いの得物を振り上げ、激突する。

激突後、鏝迫り合いの形になり互いが互いを押し切るうとする。

「ぐ……」

「ふふ……」

最初は均衡していたが、少しずつ龍也が押され始める。

このままでは完全に押し切られると思った龍也は、

「うづうづううううおおおおおおおおお……！！！！！！」

霊力を解放して一気に押し返そうとする。

すると、今度はレミリアが押され始める。

龍也の解放した霊力の影響でレミリアの服が揺れ、被っている帽子が吹き飛ばす。

それと同時にレミリアも魔力を解放して対抗し、均衡状態に戻る。

そして二人は少しの間その状態を維持し、弾かれるように間合いを開ける。

二人は息を整え、再び駆けて激突する。

今度は罅迫り合いではなく、互いの剣と槍の応酬である。

斬撃、刺突を避けたり防御し、隙を見つけての攻撃。

そんな攻防を二人は何度も繰り返す。

その状態に痺れを切らしたのか、レミリアは一旦間合いを取る。

そして高速で近づきながら突きを放つ。

龍也は慌てて二本の炎の剣をバツの字状にして防御の体勢を取る。

その瞬間、そこに真紅の槍が激突する。

レミリアの攻撃を何とか防御する事が出来た物の、

「ぐっ!!」

龍也の体勢は大きく崩れてしまう。

それを好機と見たレミリアは再度突きを放つ。

防御は無理だと判断した龍也は体勢を更に崩して強引に避けようとする。

「痛ッ!!」

掠りはしたが直撃は避けられた様だ。

避けられるとは思わなかったレミリアはその事に驚く。

レミリアが驚いてる間に龍也は体勢を整え、攻撃に移ろうとするが、

「ッ!!」

再びレミリアから突きが放たれる。

それを龍也は慌てて避ける。

その瞬間、

「ッ!？」

また放たれる。

今度の突きは単発ではなく連続。

傍から見れば、槍が増殖した様に見えるだろう。

その突きのラッシュを龍也は必死に避けていく。

体の位置をずらしたり、体を反らしたりしながら。

その間に龍也は必死に反撃の糸口を探そうとする。

だが、

「……………くそ!！」

見つからない。

不用意に反撃し様ものなら、あのラッシュを全てその身で受ける事になるだろう。

そんな中、

「……………ん？」

龍也はある事に気付く。

レミリアの動きに付いていけると言う事に。

でなければ、攻撃を避ける事はできないであろう。

その事に気付いた龍也はレミリアの腕の動きを見る。

必死に。

その腕の動きを見ながら体を逸らし、

「ッ！？」

左手にある炎の剣を消し、その手でレミリアの腕を掴み取る。

すると、槍による突きのラッシュは止まる。

龍也が掴んだ腕から突きが放たれていたのだから当然である。

レミリアは腕を捕まれ、突きを止められた事に一瞬驚く。

龍也はその隙を逃さず、右手の炎の剣で攻撃に移る。

斜め下から斜め上へ一気に振り払う様に。

そして炎の剣がレミリアの体に当る瞬間、

「ッ!!」

龍也は攻撃を止め、レミリアの腕から手を放して後ろに跳ぶ。

その瞬間、龍也の体があつた場所をナイフが十数本通過する。

そのナイフで誰が攻撃してきたか龍也に分かった。

「咲夜か」

「よく避けたわね」

そう言いながら咲夜はレミリアの隣に佇む。

「ご無事ですか？ お嬢様？」

「ええ、取り合えず礼は言っておくわ」

「恐縮です」

そう言つて咲夜は頭を下げる。

龍也はそのやり取りを見ながら再び左手から炎の剣を生み出して構える。

「さて……」

そう言いながらレミリアは龍也に向き直る。

「流石ね。あの突きを止められるとは正直思っていなかったわ」

レミリアはそう言って面白そうな顔をする。

「でも……」

そして真紅の槍を投擲し様と体を反らす。

すると真紅の槍が大きなり、輝きを発する。

レミリアの左手にはスペルカードが握られている。

「これは避けられるかしら？」

レミリアがそう言った瞬間、龍也は何とも言えないものを感じた。

龍也は慌ててその場から離れ様とした時、

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

スペルカードが発動する。

その瞬間、

「痛ッ!？」

龍也の左肩に何かが掠っていた。

殆ど反応できなかった事に驚きながらも、龍也はレミリアの方を見る。

すると、レミリアの右手に持っていた真紅の槍がなくなっていた。
あれを投擲したのだと龍也は思った。

「あら、掠っただけか。直撃すると思っていたのだけど」

「お嬢様が投擲するほんの少し前に龍也が体を動かしていました。
そのせいかと」

「成程」

「咄嗟に動けたのは運でしょうか？」

「いえ、恐らく今までの戦闘経験か本能のどちらかでしょう」

そう言った後、レミリアは再び龍也の方を見る。

そして再び真紅の槍を生み出し、構える。

咲夜もレミリアの一步後ろに下がりながらナイフを構える。

そして再び激突すると思われた瞬間、

「危ないじゃないか！！ こっちにも当たるところだったぜ！！」

龍也の後方からそんな声が聞こえる。

気になった龍也は後ろに顔を向ける。

声を発したのは魔理沙であった。

レミリアが放った真紅の槍の射線上に居たため、当たりそうになったのだろう。

「あら、それは悪かったわね」

レミリアは少しも悪びれた様子はなくそう返した。

その返答に魔理沙は気分を害したのかスペルカードを取り出す。

そして、

「恋心『ダブルスパーク』」

スペルカードを発動する。

発動すると、魔理沙から二本の極太レーザーが発射される。

あのスペルカードは二つのマスタースパークを発射するものなのだろう。

龍也はそんな事を考え、

「って、ボサツとしてる場合じゃねえ!!」

慌ててその場から消え、今いた場所よりも上空に現れる。

「危ねえ危ねえ」

そう言って一息吐くと、

「っと」

背中に何かが当たる。

何だと思って龍也は振り返ると、

「妹紅」

妹紅が居た。

「龍也」

妹紅も龍也の存在に気付く。

「そっちはどうだった？」

「ダメね。みんな一筋縄ではいかないわ。そっちは？」

「俺も同じだ」

龍也がそう言つと、

「魔符『アーティクルサクリファイス』」

どこからか、スペルカード宣言が聞こえる。

龍也と妹紅の二人はどこから聞こえてきたのか探ろうとする。

その瞬間、龍也と妹紅の目の前に一体の人形が現れ、爆発する。

数瞬後、龍也と妹紅の二人は爆発の中から飛び出す。

そして息を整えていると、

「やっぱりね。炎は無効化できても爆発の衝撃までは無効化できないよね」

そんな声が聞こえてくる。

声を発した人物はアリスであった。

アリスはよく『弹幕ごっこはブレインよ』と言っているからか頭の回転は速い。

ならば、その事に気付いても何ら不思議ではないだろう。

龍也がそう思っていると、また相手側のメンバーが集まりだした。

魔理沙とレミリアは何やら口喧嘩している様だが。

「最初に放った火炎放射でバラバラにした後、各個撃破する予定だったのに……」

「そう上手くはいかないものね」

そう言って二人は軽い溜息を吐く。

とは言っても、このまま九対二で戦っても分が悪い。

出来れば短時間でも一対一の状況に持っていきたい。

そう思った龍也は妹紅の方を見る。

すると、妹紅も同じタイミングで龍也の方を見る。

互いの顔を見合わせた後頷き合い、スペルカードを取り出す。

そして、

「炎鳥『朱雀の羽ばたき』」

「不死『火の鳥 - 鳳翼天翔 - 』」

同時にスペルカードを発動する。

すると大き目の炎の鳥が現れ、その後ろを大量の炎の弾幕が追従し、更にその後ろから小さめの炎の鳥が突き進んでいく。

この大量の弾幕を前に、霊夢達は再び散開を始める。

それを見た龍也は、各個撃破するために自らこの弾幕の中に入っていく。

「らあー!!」

最初に目に入った相手目掛け、龍也は炎の剣を振るう。

それに気付いた相手はその攻撃を、

「くっ!!」

刀で受け止める。

「妖夢か」

「龍也さん!!」

龍也が最初に目に入った人物は妖夢であった。

二人はそのまま鏢迫り合いをする事になると思われたが、

「くっ!!」

妖夢は慌てて引き、鏢迫り合いを解除する。

何故鏢迫り合いを解除したかと言うと、炎の弾幕が迫ってきていたからだ。

龍也は妖夢を追い、斬り掛かる。

その斬撃を楼観剣で防ぐ妖夢。

反撃に移りたい妖夢であるが、迫ってくる炎の弾幕が邪魔でそれができない。

このまま終始龍也が攻め続けると思われたが、

「はあ!!」

龍也の真横から何者かが襲い掛かって来た。

それに気付いた龍也は妖夢への攻撃を止め、炎の剣で防御する。

龍也に襲い掛かって来た人物は

「藍!!」

八雲藍であつた。

「忘れてないかい？ 君と彼女が炎に耐性がある様に、私にも炎に耐性があると言う事を」

そう言つて藍は腕を振るう。

龍也はそれを防御したものの、弾かれて後方に下がってしまう。

「妖夢、ここから離れた方がいい」

「すみません」

そう礼を言い、妖夢は後方に下がる。

龍也はそれを目の端に入れ、藍に向き直つて構えを取る。

そして互いにジリジリと間合いを詰め、

「ッ!!」

一気に駆けて激突する。

龍也が振るった炎の剣に対し、藍は己が爪で対抗する。

「そう言えばこうやって君と戦うのは久しぶりだな」

「そうだな」

そう言いながら二人は炎の剣と爪をぶつけ合う。

「最近の調子はどうだい？」

「俺か？ 楽しくやってるよ。そっちは？」

「私もだよ。ま、紫様の変な思い付きなどが無ければもっといいんだが」

「中々苦労してるみたいだな」

龍也はそう言いながら突きを放つ。

「それなりにね」

藍はそう言いながら体を反らして避け、お返しと言わんばかりに己が爪を突き出す。

龍也はそれを体を傾ける事で回避する。

そして一進一退の攻防を繰り返していく。

ある程度それを繰り返し、二人が間合いを取った瞬間、

「境符『波と粒の境界』」

「死蝶『華胥の永眠』」

どこからか、スペルカード宣言の声が聞こえる。

龍也はスペルカード宣言が聞こえた場所に振り向く。

スペルカードを発動したのは紫と幽々子だ。

紫は自身を守る様に展開されている弾幕を、幽々子は自身を守る様に展開されている蝶を模した弾幕をそれぞれ放っている。

攻防一体とも言える弾幕だ。

しかも、数が多い。

恐らくあれで炎の弾幕を打ち消しながら妹紅に攻撃を当てるつもりなのだろう。

敵を見つけて突撃を繰り返す龍也のスペルカードより、大量に弾幕を放ってくる

妹紅の弾幕の方が脅威と見た様だ。

二人のスペルカードの発動を止めさせ様と龍也は二人に近づこうするが、

「させん!!」

藍に邪魔される。

炎の剣で藍の爪による刺突を防御する。

あまり時間を掛けていたられないと判断した龍也は

「おおおおおおおおおおおおおおお……!!」

霊力を解放して押し通ろうとする。

龍也が解放した霊力の影響で藍は僅かに体勢を崩す。

龍也はその隙を逃さず、

「はあ!!」

「しまっ!!」

炎の剣を降りぬいて藍を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた藍には目をくれず、一気に紫と幽々子の二人に近付こうする。

二人のまでもう少しと言った所で、

「ここは通さないわよ」

そう言いながら、霊夢が龍也よりも高い位置から飛び蹴りを放つて来た。

「ぐっ!!」

反応が送れ、腹部に直撃を受けた龍也は後方に下がってしまう。

龍也は一旦左手の炎の剣を消し、腹に手を当てながら霊夢を見る。

霊夢はお払い棒を右手に持ち、左手の指の間にお札を挟んだ状態で構えていた。

龍也は腹部から左手を離し、再び炎の剣を生み出して接近戦を仕掛け様と

間合いを詰める。

迫ってくる龍也に対し、霊夢はお札を投げつける。

龍也はそれを左手の炎の剣で薙ぎ払う。

そして、

「はあ!」

一気に間合いを詰めて右手の炎の剣で斬り掛かる。

霊夢はそれをお払い棒で受け止め、左手から針を何本か龍也目掛けて投げつける。

「っとお!」

龍也は慌てて顔を傾けて回避する。

霊夢はその時にできた隙を逃さず、龍也の顎目掛けて蹴りを放つ。

霊夢の蹴りが龍也の顎に当たる瞬間、

「ッ!?!」

龍也の姿が消える。

霊夢はどこに行ったのか探そうとすると、

「正面だ!?!」

再び龍也は正面に現れて炎の剣を振るう。

霊夢は慌てて炎の剣をお払い棒で受け止めるが、

「くっ!?!」

後方に吹き飛ばされてしまう。

だが、直にブレーキを掛けて止まる。

「にして、ここにも結構弾幕が飛んで来るのによくそうも動けるな」

龍也は気になった事を霊夢に尋ねてみる。

「そう? 私は何となく弾幕がどこに飛んで来るか分かるんだけど」

霊夢はしれっとそんな事を言う。

龍也は凄いなと思いつつ紫と幽々子の方を見る。

かなり押している様だ。

このまま行けば妹紅はスペルブレイクされるだろう。

そうさせないためには紫と幽々子を止める必要があるのだが、

「……………」

それを霊夢が邪魔をしている。

急がなければと龍也が考えを張り巡らせていると、

「……………ん？」

ある事に気付く。

何も霊夢を抜いて近付かず、ここから攻撃を仕掛ければいいと言っ
事に。

思い立ったら速行動。

龍也は二本の炎の剣を合わせて一本の炎の大剣にする。

龍也が何をしようとしているのか気付いた霊夢は慌てて止めに入る
が、

「はあ!!!!!!」

その時には炎の大剣は振り下ろされていた。

そして剣先から巨大な爆炎が迸り、それが霊夢に迫っていく。

防御はもう間に合わないと判断した霊夢はその場から離れる事で回避する。

そしてその爆炎は紫、幽々子の二人に迫って行く。

それに気付いた二人はスペルカードの発動をやめ、慌ててその場から離れる。

それを見届けた龍也は一本の炎の大剣を二本の炎の剣に戻して構える。

戦況は、龍也と妹紅がスペルカードを使った状態に戻る。

後はこの状態を維持しつつ、一人一人倒していけばと龍也が考えたところで、

「埒が開かないわね」

ふと、アリスがそんな事を呟く。

そして、

「仕方ない。テストはまだなんだけど……」

スペルカードを取り出し、

「試作『ゴリアテ人形』」

スペルカードを発動する。

すると、

「な……に……」

アリスが良く扱っている人形が現れる。

だが、大きさが異常である。

以前、龍也が萃香と戦った時に萃香が巨大化した事があるが、アリスが出した人形の大きさは巨大化した萃香の倍位はある。

そして妹紅が放っている炎の弾幕、炎の鳥を受けてもビクともして
いない。

その巨大人形は体を動かし妹紅に顔を向け、目からレーザーを放つた。

「わ!?!」

妹紅は慌ててスペルカードの発動を止め、その場から離れる。

巨大人形が目からレーザーを放つの止めると、龍也が放った炎の鳥

が人形目掛けて
突撃をする。

だが、当たる前に巨大人形からバリアが発生する。

そこに激突した炎の鳥は消滅してしまう。

それを見た龍也は接近戦を仕掛け様と巨大人形に突っ込む。

だが、龍也は突っ込んでいる最中にある事に気付く。

この巨大人形、自分にアドバイス通りに作られてないかと。

龍也がある程度近付いた所で、巨大人形のスカートの中から小さな人形が現れ、

龍也に向って行く。

やっぱりと思った龍也は高度を上げてやり過ぎそうとする。

すると龍也の目の前に巨大な腕が現れ、

「がっ！！」

薙ぎ払われて吹き飛んでしまう。

ある程度吹き飛ばされると、

「つと、大丈夫？」

妹紅に受け止められていた。

「ああ、大丈夫だ」

そう言つて龍也は妹紅から離れ、今の衝撃で消えてしまった二本の炎の剣を再度生み出す。

「処で、あれは……」

「アリスの人形だな」

「知ってるの？」

「ああ。俺が色々とアドバイスしたからな」

「……弱点とかは？」

「無い。強いて言うなら機動性が低い事と、戦闘時間に制限がある事位かな」

龍也がそう言うと巨大人形は両手の指先を二人に向け、そこから大量の弾幕を放つて来た。

それを二人は必死に避けながら二人は会話を繰り返して行く。

「機動性は兎も角、戦闘時間に制限って？」

「ああ、アリスに巨大な人形を操るとなったら結構な負担になるから何か良い方法がないかと聞かれてさ。なら人形の中に魔力を溜め込んだ物を入れて、それを消費していけばいい」

いんじゃないかって言うアドバイスをしてさ」

「ならこうやって避けてれば、あの人形は勝手に止まってくれるの？」

「理論上はそうだけど、お勧めはできないな」

「どうして？」

「あれって元々は通常戦闘を想定してるらしくてさ。だけど今は弾幕ごっこだからさ、弾幕ごっこ用に出力を落としているだろうから戦闘可能時間はかなり延びている筈だ」

「だったら……」

そうやって妹紅は弾幕を避けながら、巨大人形をチラリと見る。

龍也も同じ様に巨大人形を見る。

「あれを倒すしかない？」

「うん」

二人の間に何とも言えない空気が流れる。

「……ん？」

龍也はある事に気付く。

攻撃を仕掛けて来ているのはあの巨大な人形だけである事に。

他のメンバーは何やっているのだろうと、探してみる。

すると直に見つかった。

どうやら同士討ちを避けてか、巨大人形の後ろに居た。

そしてそれぞれがこちらの様子を伺っていたり、息を整えたりしている。

今はまだいいが、他のみんなも攻撃を仕掛けて来たら非常にマズイ。

そうなる前にあの人形を倒さなければならない。

龍也は何とかして倒そうと思考を張り巡らせていると、

「ん？」

突如、弾幕が止む。

何だと思いつながら龍也は巨大人形に目を向ける。

巨大人形は拳を作り、その拳を射出した。

「ロケットパンチ!？」

そんな声を上げながら龍也は飛んで来た拳を慌てて避ける。

放たれた拳は龍也の真横を通り過ぎて行く。

拳の方に目を向けると、龍也はある物を見つける。

「これは……鉄線か」

そう、鉄線である。

どうやらこのロケットパンチは有線の様である。

そして巨大人形の拳は巨大人形に戻っていく。

それを見てると、

「……お」

龍也はある作戦が思いつく。

「妹紅妹紅、ちょっと耳貸して」

「何？」

そう言っつて妹紅は龍也に顔を近づける。

そして龍也は二本の炎の剣を消して、妹紅に耳打ちする。

「大丈夫なの、それ」

「ああ、これしか方法ない」

「分かったわ。龍也を信じる」

そう言って、二人は巨大人形に向き直る。

すると弾幕が再び迫って来たので、それを避けていく。

次のチャンスが来るまで。

そのチャンスは二人が思っていたより早く来た。

巨大人形が再び拳を放って来たのだ。

それが丁度自分に当たる様に龍也は自分の位置を調節し、自身の力を変える。

朱雀の力から玄武の力へ。

すると、龍也の髪と瞳の色が紅から茶に変化する。

その瞬間に巨大人形の拳が龍也に命中する。

「か……」

龍也は口から息が漏れつつも、巨大人形の拳を受け止める。

そして、

「妹紅、今だ!!」

妹紅が鉄線を掴み、炎の発生させる。

すると、鉄線が少しずつ赤くなっていく。

アリスは龍也達が何をしようとしているのか理解したのか、巨大人形の拳を慌てて引っ込める。

龍也と妹紅も一緒に。

そして、巨大人形の拳が元の位置に戻る直前で巨大人形は動きを止める。

そして、巨大人形から煙が上がる。

見事、龍也の作戦が成功した様だ。

龍也の作戦とは、巨大人形を内部から破壊すると言う物。

その為に内部に繋がっているであろう鉄線を熱したのだ。

そして、内部を熱せられた巨大人形は動きを止めた。

熱を伝え易い鉄線で助かったものだ。

龍也はそう思いながら一息入れ、自身の力を消す。

すると、髪と瞳の色が元の黒色に戻る。

そこで龍也は思い出す。

まだ霊夢達が健在であると言う事を。

龍也は巨大人形から少し離れ、霊夢達がどこにいるのか探る。

すると、直に見つかる。

霊夢達は巨大人形の近くに居た。

様子を見るに、まだまだ戦闘続行可能な様だ。

龍也は再び自分の力を変え様としたところで巨大人形が光を放ち、

「ん?」

大爆発を起した。

迷いの竹林のとある場所。

竹が殆ど吹き飛んだ場所で、

「生きてるかー？」

仰向けになって倒れ、ボロボロの状態になった龍也がそう声を掛ける。

「おー……」

そしてチラホラとそんな声が聞こえて来た。

そんな声を聞きながら龍也は上半身を起き上がらせ、みんなの様子を見る。

みんな、龍也と同じ様にボロボロだ。

そして服もボロボロで、結構際どい感じになっていた。

「あらあら、男の子である龍也には嬉しい光景かしら？」

紫はからかう様に龍也に話し掛ける。

「はいはい、そうですね」

「あら、てつきり紅くなってうるたえと思ったのだけど」

「もう突っ込む元気もねえよ」

「あら、それは残念」

そう言っつて紫は溜息を吐く。

「あいたたた……」

すると、アリスが瓦礫の中から出てきた。

「まさか爆発するとは……」

そう言っつてアリスは頂垂れる。

結構時間を掛けて作ったからなのか、ショックが大きい様だ。

「なあ、私の帽子知らないか？」

そう言っつて、破れ掛かった服を押さえながら魔理沙が尋ねて来た。

「知らね」

「そうか……」

そう言っつて魔理沙は瓦礫の中を探し始める。

「紫ー、私の帽子知らない？」

そう言いながら幽々子が現れる。

「おまー！！ ちょっとは隠せー！！」

近くに来た幽々子に龍也は思わずそう突っ込む。

「あら、隠すって何をかしら？」

そう言って、幽々子は龍也に近付く。

「え、いや、ちょ、あれだ」

そう言いながら、龍也は幽々子から視線を外す。

「ほら、龍也はこれ位やらないとつろたえないわよ、紫」

「成程」

またからかわれた事に龍也は内心溜息を吐く。

その後、周囲の様子を見る。

レミリアと咲夜は何かを探しているようだ。

何か無くしたのであろうか。

妖夢も同じ様に何かを探している。

持っている刀が一本足りないので、刀であろう。

霊夢はどこだろうと思っていると、瓦礫の中から出てきた。

まだ埋まっていた様である。

藍は何やら自分の帽子を修復している。

「あれ？」

妹紅の様子が見えなかったので龍也はもう一度探していると、

「あ、無事な様ね」

背後からそんな声を掛けられる。

振り返ると、そこには妹紅がいた。

「お、妹紅も無事だったか」

そう言つて龍也は妹紅の様子を見る。

服はボロボロであつたが、体の方を大した傷はなかった。

その事を龍也は不思議に思っていると、

「不老不死は再生能力が高いわねー」

紫はそんな事を言つた。

「不老不死？」

そう言って龍也は妹紅の顔を見る。

「え、あ……うん」

妹紅は言いづらそうにしながら、肯定する。

「へー」

「えーと……それだけ？」

妹紅は少し驚いた様に、そう龍也に問い返す。

「それだけって？」

「いや、ほら、何かこう……」

「んー、ぶつちゃけ不老不死でもそうなんだとしか言い様がないな。幻想郷には色んな奴がいるし、不老不死が居ても不思議じゃないだろ」

龍也がそんな事を言うと妹紅は少し驚いた顔をした後、少し嬉しそうな顔をする。

「ん？　どうかしたか？」

「別に」

龍也は何かは知らないけど、嬉しそうならいいかと思いき空を見上げる。

「あー……満月が綺麗だな」

龍也は満月を見ながらそう呟いた。

放浪編 その37

迷いの竹林での一件から翌日。

龍也はアリスの家に居た。

何故、アリスの家に居るかと言うと服を修繕して貰うためだ。

弾幕ごっこの影響と言うより、アリスの巨大人形の爆発で服がボロボロになったためである。

龍也の服は文字通り一張羅。

流石にボロボロの格好で旅するのは気が引けたので、龍也はアリスに服の修繕を頼んだのだ。

そして昼頃、

「はい、終わったわよ」

学ランなどの修繕が終る。

「お、ありがとう」

そう礼を言い、龍也はアリスから自分の服を受け取る。

受け取った龍也の腕などには包帯などが巻かれている。

擦り傷や火傷などを負っていた龍也をアリスが治療してくれたのだ。
アリス自身の傷はすでに完治している。

自前の魔法薬を使ったからだ。

その魔法薬は龍也には使われていない。

何故龍也に魔法薬を使わなかったかと言うと、その魔法薬はアリス
用に調整

されているらしく龍也に使っても効果がないからだ。

なので、龍也は普通に治療を受けたのだ。

因みに現在の龍也の格好はシートに包まった格好である。

何故その様な格好をしているかと言うと、一人暮らしの女性の家で
トランクス一丁の
まま歩き回るのはどうかと思ったからだ。

服を受け取った龍也は一旦部屋から出て、着替える。

「バツチリ。ありがとな、アリス」

そう言いながら龍也は部屋に戻ってくる。

「どういたしまして」

アリスは裁縫道具を仕舞いながらそう返す。

「あ、お昼食べてく？」

アリスにそう言われると、龍也は空腹感を感じ始めた。

思えば昨日の夜から何も食べてない。

「頂いてくよ」

そう言っつて龍也は椅子に座る。

「分かったわ」

アリスはそう言っつて指を動かす。

人形に命令でも送っつているのだろうか。

龍也はそんな事を思いながら、

「それにしても、魔法薬っつて便利だな」

魔法薬についでアリスに尋ねる。

「そう？」

「そうそう。傷だっつて綺麗に治っつてるじゃん」

アリスを見ながら龍也はそう言っつ。

「大した傷じゃなかつたしね。どんな傷でも治すっつて言っつ程の効力

は私の魔法薬にはないわ」

「そうなのか？」

「そうよ。私の本職は人形遣いで、目指しているのは完全自立人形の製作。」

そっち方面の知識はかなりあると自負しているけど、魔法薬とかに
関しては

そこまで深い知識がある訳じゃないの」

アリスがそう言ったところでアリスの人形が二人分のコーヒーを運んで来た。

そしてコーヒーを二人の前に置き、台所へ向って行った。

「砂糖かミルクはいる？」

「いや、ブラックのままでもいい」

そう言って龍也はコーヒーを飲む。

「話を戻すけど、魔法薬とかが専門な魔法使いなら文字通り万能薬とか作れるかもしれないわね」

そう言ってアリスもコーヒーを飲む。

「まあ、魔理沙ならそう言った物も作れるかもしれないけど」

「魔理沙が？」

「そう。あの子は光や熱を扱った魔法をメインとしてるけど、それとは別に色々」と

実験してるじゃない。特に考えずに片っ端から」

「あー……そういやそうだな」

魔法の森に生えている茸を使つての実験。

龍也にはそんな情景が思い浮かんだ。

「そんな事をしているから本来作ろうとしている物とは別な物ができるとは別に色々ある」

らしいのよ」

偶にその事を宴会の席で愚痴ったりしてるのよとアリスは続ける。

確かに龍也も酔つた魔理沙にそんな事を愚痴られた記憶があつた。

それとは別に、以前魔理沙に作つて貰つた傷薬の事を思い出す。

まあその薬は萃香と戦つた時、龍也の治療の為に全部使われてしまつた。

龍也自身、その事をすっかり忘れており今思い出したのだが。

「ま、そう簡単に作れはしないと思つけど」

そう言つてアリスはこの話を締め括る。

確かに、そんな凄い魔法薬などはホイホイ作れはしないであろう。

「あ、そうそう。話は変わるけど、貴方のアドバイスが欲しいのよ」

「俺のアドバイスって言うと……巨大人形の事か？」

「そうよ」

そう言ってアリスは手帳とペンを取り出す。

「今回の件、貴方から見て改良点とかあるかしら？」

そう言われ。龍也は昨夜の事を思い出しながら答える。

「そうだなー……そう言えばあれの動力って言うか、魔力を溜めるのに何を使ったんだ？」

「ちよつとした特殊な鉱石よ」

「鉱石？」

「ええ。香霖堂で買ったね」

そう言った後、アリスは溜息を吐く。

「あれ、高かったのに粉々になっちゃって……」

「あー……そう言えば爆発した原因って何だ？」

「それは膨大な熱量が発生し、それで鉱石が熱せられて爆発って感じかしらね。」

まさかあの不死人にあれ程の炎を発せられる力があるなんて……」

そう言つて、アリスはまた溜息を吐く。

「ならば、その鉱石がある部分を独立させたブロックにすればいいんじゃないのか？」

「独立させたブロックに？」

「ああ。それなら今回の様な事態になつてもその部分だけ緊急脱出させればいいんだし」

「成程」

龍也の話を聞きながらアリスは手帳にペンを走らせていく。

「他には関節部分などを切り離せる仕様にするとかすれば被害が拡大するのを防げるな」

「ふむふむ」

「後は魔力を溜めている鉱石をメインの他にもサブとしてもう一個積んで置くとかさ」

そんな感じで龍也はアリスにアドバイスをしていく。

暫らくすると食事が運ばれてきたので、食事をしながら続けていく。

「ふいー、食った食った」

龍也は腹を擦りながら魔法の森を歩く。

アリスの家で昼食を食べた後、アリスの家を出て再び旅を始めた。

次はどこへ向うのか考えながら。

すると、

「あ、そう言えば」

唐突に龍也は昨夜の事を思い出す。

正確には妹紅の事を。

更に言うならば、妹紅が生やしていた炎の羽の事を。

あれがかっこよかったので龍也もやってみようと思っていたのだ。

とは言っても、そのまま炎の羽を生やしたところでただの妹紅のマネだ。

何かオリジナリティが欲しいところだ。

そしてまた考え始める。

「炎の羽………炎………」

そんな事を呟きながら炎で何かないかと思いつく。

漫画、ゲームと思い出していくとフランドールの顔が龍也の頭の中を過ぎった。

「そう言えばフランドールも炎の大剣使っていたな」

そう言いながらフランドールと戦った時の事を思い出す。

今にして思えばよく勝てたものである。

「あの炎の大剣、確かレーヴァティンって言う名だったな」

その名を聞いたのは戦った後ではあるが。

「そうだ、フランドールの羽みたいなのはどつだろつ」

そして龍也はイメージを膨らませていく。

フランドールの羽にくっ付いている宝石みたいなのは除外し、枯れ枝っぽいのを生やしてみる。

一対ではあれなので、三対の計六本で。

思い立ったら何とやら。

龍也は自身の力を変える。

朱雀の力へと。

すると、龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

「よっ」

龍也はそう意気込んで、背中から炎の羽を生やしてみる。

そして少しドキドキしながら龍也は後ろを振り返る。

「……っわあ」

結果はシヨボイ羽っぱいのあるだけであつた。

一応は三対六本の炎の羽があるのだが出力はジヨボク、形もフニヤフニヤしている。

とは言つてもこれで諦める龍也ではない。

「うづうづううううう　おおおおおおおお　おおおお　おおお
！……！」

霊力を解放しながらまた同じ事をやる。

すると三対の羽が繋がり一対の羽となり、勢い良く伸びる。

勢い良く伸びたものだから当然、

「……………あ」

近くにあつた木に当たり、木が燃えていく。

「ああああああ！！　ここが魔法の森だつて事忘れてた！！」

龍也は慌てて自身の力を朱雀から青龍に変える。

瞳の色が紅から蒼に変わると、生えていた炎の羽が消失する。

そして龍也は振り返り、燃えている木に両方の掌を向け、掌から水を放出する。

水は燃えている木に当たり、見事鎮火した。

「ふうー」

大事に至らなかったので、龍也は安堵の息を吐く。

「上手くいかないものだな」

そう言っつて龍也は自分の掌を見つめる。

すると、掌から掌サイズの水球が生み出される。

少しすると、水球が水の剣に変化する。

また少しすると、水の剣が形を崩して手に纏わり着いていき、龍の手の様になる。

「手から生み出すのは結構自由自在なんだけどな」

そう呟いて龍也は手に纏っている水を消す。

もっと練習が必要である。

龍也がそう思っていると、

「ん、龍也じゃないか」

木々の間から魔理沙が現れる。

「魔理沙」

そう言つて龍也は魔理沙の方へ振り向く。

「何やってたんだ、こんなところで？」

「俺は散策だけだ。魔理沙は？」

「私は茸狩りをしてたら焦げ臭いを感じてな」

魔理沙のその発言に、龍也は思いつきり思い当たるものがあつた。

何せ、その臭いの原因は自分にあるのだから。

「何か知らないか？」

魔理沙は龍也にそう尋ねる。

正直に話すのはあまりにも恥ずかしいと感じた龍也は、

「いや、知らないな」

誤魔化す事にした。

「そっか」

龍也の発言を信じたのか、魔理沙はそれ以上追及する事はしなかつた。

「あ、そつだ。お前に会つて思い出した事があるんだけど」

「ん？ 何をだ？」

そう言っつて魔理沙は首を傾げる。

「前に買った傷薬、あれっつてまた作れるか？」

「傷薬……あー、あれか。作れるぜ」

「じゃあ作っつてくれ」

「何だ、無くなつたのか？」

「ああ、使い切つた」

「了解。今から作るから私の家に来てくれ」

「あいよ」

そう言っつて龍也は力を消した後、魔理沙の後を付いて行く。

「ああ、ちゃんと代金は頂くぜ」

「分かつてるよ」

そして談笑をしながら二人は歩いて行く。

「しかし散らかってるな、相変わらず」

魔理沙の家上がった龍也はそう漏らす。

「これはこれで整理されてるんだぜ」

そう言っつて魔理沙は採って来た茸を机の上に置く。

「早速作成に取り掛かるが結構時間掛かるぞ」

「あー……どうすっかな」

「何だったら、床の掃除でもしててくれ」

「床掃除？」

「ああ、本以外は全部捨てていいからさ」

ただ待つのも暇なので、龍也は魔理沙の提案を受ける事にした。

「分かった、掃除しておくよ」

「サンキュー、傷薬の代金は割り引いておくぜ」

魔理沙はそう言って実験室に向った。

それを見送った後、

「さて、掃除を始めるか」

そう言って龍也は掃除を始める。

結局、掃除が終わり、傷薬ができた頃には真夜中になっていた。

今から出歩くのあれなので、龍也は魔理沙の家で夕食を取った後、
魔理沙の家に
泊まる事にした。

魔理沙の家にはベッドが一つしかない。

家主を差し置いてベッドを使う訳にはいかなかったので、龍也はソ
ファーで寝た。

放浪編 その38

「…………んあ？」

目が覚めた龍也はボケーッと天井を見る。

「お、やっと起きたか」

「ん？」

龍也は声が聞こえた方へ顔を向ける。

そこにはフライパンを持った魔理沙がいた。

「…………魔理沙？」

「おう、魔理沙さんだぜ」

そう言いながら魔理沙は龍也に近付く。

その手に持っているフライパンからは何やら良い匂いがする。

料理を作っていたのだろうか。

「ここは？」

「私の家だぜ」

それを聞いた龍也はまたボケーッとする。

「おいおい、寝ぼけてるのか？ 昨日は私の家に泊まっただろ」

魔理沙は少し呆れながらそう言う。

「……………あー」

魔理沙にそう言われ、ようやく龍也の頭は覚醒をし始める。

そして上半身を起き上がらせて体を伸ばす。

その後、魔理沙の方を見て

「おはよう」

挨拶をする。

「おう、おはよう」

魔理沙も笑顔で挨拶を返す。

「もう朝ご飯ができるから座って待っててくれ」

「分かった」

そう言って龍也はソファから降り、テーブルの前にある椅子に座る。

そして直に魔理沙が料理を運んで来る。

茸ご飯に茸の味噌汁に茸のソテー。

見事に茸オンリーだ。

「茸ばかりだな」

「食用の茸が結構余ってたからな」

そう言いながら魔理沙も席に座る。

「私一人じゃ食べ切る前にダメなっただろうけど、龍也は男なんだしこれぐらい楽に食べれるだろ」

魔理沙にそう言われ、龍也は自分の前に並べられている茸料理を見る。

そして魔理沙の前に並べられている茸料理を見る。

その後、その二つを見比べる。

龍也の方が魔理沙の倍くらいの量があった。

「……つまり、ダメになる前に食ってくれと？」

「そう言う事だぜ」

そう言って魔理沙は胸を張る。

そんな魔理沙は龍也少しジト目で見る。

「おいおい、そんなに見られたら照れるぜ」

魔理沙は龍也の視線を別の意味に解釈する。

「まあ冗談はさて置き、さっさと食べようぜ。味は保障するからな」

そう言っつて魔理沙は龍也に食べるように急かす。

それを聞き、龍也はさっさと食べるかと思った。

魔理沙の作る料理は今まで何度も食べた事がある。

それら全て、普通に美味しかった。

ならば今回もそうであろうと龍也は思った。

そして、

「「いただきます」」

二人揃って朝食を食べる事にした。

因みに、味は普通に美味しかった。

「んー……やっと魔法の森から出れた」

そう言っつて龍也は首を回す。

魔理沙の作った茸料理を食べた後、雑談をし、傷薬を受け取って魔理沙の家を出る。

そして何日か魔法の森を彷徨った後、今に至ると言っつ訳だ。

「時間は掛かったが、結構な収穫はあつたな」

龍也はそう言いながら、手に抱えている物を見る。

そこには大量の木の实やら茸があつた。

何故そんな大量に持っているかと言うと、龍也が魔法の森で彷徨っている時に

木の実や茸が沢山ある穴場の様な場所を発見したからだ。

なので、其処から木の実やら茸を採って来たのだ。

茸に関しては、魔理沙と一緒に茸狩りをした時の記憶を思い出しながら茸を採っていった。

最も、記憶があやふやだったり記憶に無い茸は放置したが。

「腹が減ったら茸を焼いて食べよ」と

そんな事を言いながら龍也は歩き始める。

テクテクと歩きながら龍也は周りの景色を楽しんでいく。

暫らく歩いていると、強めの風が吹く。

思っていたより冷たい風だ。

その風を受けた龍也は、

「……もう少ししたら秋も終わりかな？」

ポツリとそう呟く。

そして歩いてきた道を振り返る。

もう、魔法の森は視認できない場所まで来ていた。

「よし、ここで食べるかな」

龍也はそう言って地面に座り込み、抱えていた物を地面に置く。

そして自身の力を変える。

朱雀の力へと。

同時に龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

力の変化が完了した事を感じた龍也は茸を拾って掌に乗せる。

その後、掌から炎を生み出す。

少しした後炎を消すと、龍也の掌には見事に焼き上がった茸があった。

龍也は焼き上がった茸をそのまま口に放り込む。

すると、

「あちゃあ!?!」

あまりの熱さに茸を嘔き出しそうになる。

が、龍也は何とか堪えて口の中で冷ましていく。

そして改めて食べ始める。

「……うん、美味しいな」

そう言って再び茸を掌に乗せ、掌から炎を生み出して茸を焼いていく。

茸を半分程食べた後、今度は木の実に手を手に取って食べる。

「……うん、これも美味しいな」

果物の様な甘さがあると龍也は思った。

もう一個食べようと木の実に手を伸ばすと、

「ん?」

龍也は何かを発見する。

龍也が発見した物は、ふよふよと浮かんでいる黒い球体だ。

その球体はどんどんと龍也に近づいて来る。

そして茸や木の実が置いてある場所の前に着くと止まり、黒い球体が消えていく。

すると、中に居たものの正体が見える。

中に居たのは

「ルーミア」

ルーミアであった。

「あ、お兄さん」

ルーミアの方も龍也の存在に気付く。

「何してたんだ？」

「私？ 美味しそうな匂いがする方へ来たんだ」

匂いと言うのは先程焼いた茸の匂いであろうか。

龍也がそう思っていると、ルーミアは茸や木の実を見て食べたそうな顔をしている。

「……食うか？」

龍也は茸と木の実を指さしてルーミアにそう尋ねる。

「いいの？」

「ああ」

龍也がそう言っているとルーミアは凄く嬉しそうな顔をし、茸や木の実を食べ始める。

龍也はその様子をやれやれと言った感じで眺めていた。

夕方と言える時間帯、龍也は幻想郷のどこかを歩いていた。

だが、普段と様子が違う。

何が違うかと言うと、

「何時までそうしているつもりだ？」

「分かんない」

ルーミアと一緒にいると言っ点だ。

何故一緒にいるかと言うと、草と木の実を食べ終わった後に出発した龍也に付いて来たのだ。

何でか。

そして今では龍也がルーミアを肩車していると言っ状態になっていた。

「……………どうしてこうなった」

龍也は現状を思っポツリとそう呟いた。

「でも、お兄さんも不思議だよね」

「ん？ 何が？」

「妖怪の私としても平気だなんて。妖怪は人間を襲うものだよ」

「平気な奴だっっているだろ？」

「そんなの極一部だと思っよ」

「ふーん」

その極一部とは、霊夢や魔理沙であろっかかと龍也は思った。

「それは兎も角、俺を襲っ気か？」

「んーん。お兄さん襲つとその後が怖そうだもん」

「どうやら、ルーミアは龍也を襲う気はないらしい。」

「それに今はそんなにお腹空いてないし」

訂正。

今は襲う気がないらしい。

「まあ、俺は人間を襲う事に関してはどうこう言う気はねえよ」

「そうなの？ お兄さんも人間なのに？」

「人間だって牛やら鳥やら豚やらを食ってるんだ。だと言うのに妖怪は人間を食べたら」

ダメって言うのは傲慢だと思ってる。俺はな」

そう言つて龍也は首を回してルーミアに顔を向ける。

「ま、目の前で襲われているのを見たら助けるけどな。見捨てるのも気分が悪いし」

そう言つた後、最も進んで悪党や下種な奴は助ける気ねえけどな、と龍也は続けた。

それを聞いたルーミアは、

「やっぱり不思議って言うか変わっているって言うか、よく分から」

ない人間だね、
お兄さんは」

そう呟いた。

それを聞いた龍也は確かになと思った。

自分の価値観や考えは普通の人間……一般人とは違つと。

外の世界に居た頃から龍也はその事を自覚していた。

だからと言つて自分の考えを変える気はなかったが。

そしてこつなるに至つたであろう原因を思い出そうとした処で、

「ねえねえ」

「あだ!？」

ルーミアに髪の毛を引っ張られ、龍也は思考を中断した。

「何すんだよ!!」

「あつち、あつちの方からいい匂いがする!!」

そう言つてルーミアは匂いがすると言つ方向に指をさす。

龍也は釣られる様にルーミアが指をさした方向を見る。

その先には何やら人影らしきものが龍也には見えた。

「行く行く」

そう言いながらルーミアは龍也の髪の毛を引っ張って急かす。

髪の毛を抜かれても困るので、龍也は人影が見えた場所に向つ。

近付くにつれ、龍也の鼻も匂いを感じる。

そして普通に視認できる距離まで来ると、

「静葉に穰子か」

龍也はそう声を掛ける。

声を掛けられた二人は龍也の方へ振り向く。

そう、見えた人影は静葉と穰子の二人であつた。

「龍也さんと……妖怪？」

静葉は首を傾げながらそう尋ねる。

「ああ、こいつはルーミアって言つんだ」

そう言つて龍也はルーミアを親指で指さす。

「それにしても人間と妖怪……まあ、龍也は幻想郷中を旅して回つてみたいだし、

妖怪との交友関係があつても不思議じゃないか」

そう言って、穰子は一人で納得する。

「てか、どうしたんだ？　こんな所で」

こんな所で何をしてるのか気になった龍也は二人に尋ねる。

「もうそろそろ秋も終わり」

「秋が終り切る前に秋の珍味でパーツと騒ごうと思っ

だが、騒ごうとしている二人にあまり元気はない。

秋が終りそうであるからであろうか。

そんな二人を尻目に

「秋の珍味……」

ルーミアは秋の珍味を食べたそうにしていた。

「おい、そこで涎を垂らそうものならマジで許さねえぞ」

龍也はルーミアにそう忠告する。

位置的にルーミアは涎を垂らせば龍也の頭に掛かる。

龍也としてもそれだけは避けたかった。

「あ、じゃあ一緒に食べますか？」

静葉はそう提案する。

「いいの!？」

そう言ってルーミアは龍也から飛び降りる。

それを見て、食い意地張ってるなど三人は思った。

その後、四人でプチ宴会状態に突入し、朝が来るまで騒ぎ続けた。

内に巢食いしもう一人の自分編 その1

雲一つ無い晴れた天気。

そんな日、幼い年頃の男の子が公園で遊んでいた。

たった一人で。

鉄棒で遊んだり、アスレチックで遊んだりとしていた。

寂しそうであったが、体を動かしていれば気が晴れると言わんばかりの勢いで遊んでいた。

男の子が公園内を走り回っていると、変な音が聞こえて来た。

その音が気になった男の子は走り回るのを止め、聞こえて来る音に耳を傾ける。

すると、その音がどんと近づいて来る。

何かが押し折れる音と車が発生させる音。

男の子は聞こえる音をそう認識した。

すると、茂みの中から大きな車が現る。

その車は男の子目掛けて猛スピードで突き進む。

男の子は訳が分からないまま車に撥ね飛ばされた。

その瞬間、男の子の意識は闇に閉ざされた。

男の子は朝に目が覚める様な自然さで目を開いた。

男の子の目に映った物は白い天井だった。

どうしてこんな所に居るのだろうと思った。

自分は公園で遊んでいたのにと。

そして、公園で遊んでいた時の事を思い出ししていく。

一番新しい記憶は目の前に大きな車が迫って来ていると言う記憶であった。

その記憶を頼りに男の子は必死に考える。

そして、自分はその大きな車に轢かれたと言う結論に達した。

今になって、幼稚園の先生が『車には気を付けなさい』と言っていた意味が

男の子には漸く理解できた。

幼稚園の先生や両親にその事を言おうと思い、男の子は体を動かさうとしたが

体が動かなかった。

そして声も出なかった。

仕方が無いので男の子は眼球だけを動かした。

すると、自分の周囲が白いカーテンで囲まれている事が分かった。

何でこんな風になっているのだろうと男の子が思っていると、何やら話し声が

聞こえて来た。

その声から、話しているのは自分の両親だと男の子は認識した。

何とかして自分の無事を伝え様としていると、両親の話し声が男の子の耳に入ってきた。

『何で生きていたんだか』

『全くだ。死んでいれば楽だったのに』

『慰謝料は入ったけど、死んでいればもつと入っただろうにね』

『あんなのが生きていても邪魔なだけなんだが』

『医療事故に見せかけてここで殺してしまおうかしら』

『そんな事したら必ずバレる。私達の全く関与していない状態で死んで貰わなければ意味がない』

『分かっているわよ。だけど、今回は惜しかったわね』

『全くだ』

『それにしても何度も見舞いにこなければならないなんて、人前で普通の親を演じるのは苦勞するわ』

『全くだ。私が今やっている仕事もいいところなのに、こんな下らない事で』

『帰されるとは。人前で普通の親を演じるのは本当に苦勞する』

聞こえて来たのはこんな会話だ。

その会話を聞いて男の子は思った。

自分の両親にとって、自分は邪魔な存在なのだ。

必要ない存在なのだ。

今まで男の子は自分の両親に好かれ様と、構って貰おうと色々していたが何の意味もなかった。

最初っから、自分の両親は自分の事を見ていなかったのだ。

男の子はその事を完全に理解した。

そして、その瞬間に男の子が両親に抱いた感情は無関心であった。

不思議と、男の子は両親に何の感情も抱けなかった。

怒りも、憎しみも、悲しみも。

男の子の中で、両親はどうでもいい存在になったのだ。

「ッ!？」

龍也は目を覚ましたのと同時に飛び起きた。

そして周囲を確認する。

見えるのは土の壁。

自分が玄武の力を使って作った簡易型の家の中だ。

その事を認識した後、

「チッ!！」

舌打ちをしながら、龍也は自分の手で頭を押さえる。

「何だって今更こんな夢……」

つい先程まで見ていた夢は、紛れも無く自分の過去の夢。

龍也は自分の遺伝子提供者に何の感情も抱いていない。

それは今も変わらない。

だが、見ていて気分の良い夢でもない。

「……くそっ!!」

龍也は八つ当たり気味に土の壁を蹴る。

すると、土の壁が蹴り抜かれて穴ができる。

そしてその穴から外の空気が入って来る。

「……寒ッ!!」

その空気を受けた龍也は思わずそう漏らした。

「大分冷えてきたな……」

幻想郷の何処かを歩いていた龍也は思わずそう呟いた。

そして吐いた息は白くなった。

もう既に冬になっているのかも知れない。

「一旦、防寒具を取りに戻った方がいいかもしれないな」

そんな事を呟きながら、アリスに作って貰った防寒具を思い出す。

あれは非常に保温性と防寒性が高い防寒具だ。

本当に、アリスには良い物を作って貰ったと龍也は思った。

また改めてお礼に行こうかと考えていると、

「妖怪か……」

それなりの数の妖怪が現れた。

両腕を肥大化させた熊の様な妖怪だ。

その妖怪達は唸り声を上げながら龍也に近づいて来る。

何時も通り問答無用だなと龍也は思いながら一番近くの妖怪に肉迫し、

「うおおおりゃー!!」

拳を叩き付ける。

拳を叩きつけられた妖怪は、勢い良く吹き飛んで行く。

そして次の妖怪を倒そうと、妖怪がいる方に振り向く。

すると、龍也が振り向いた先にいた妖怪が腕を振り上げていた。

どうやら龍也より先に攻撃を仕掛け様としているようだ。

そして、その腕は振り下ろされる。

普通の人間ならば受けただけで叩き潰されるような一撃。

そんな一撃を、龍也は腕で防御し、

「らあっ！！」

攻撃してきた妖怪を蹴り飛ばす。

「次い！！」

そう言つて、龍也はまた違う妖怪目掛けて駆けて行く。

一体、また一体と妖怪を倒していく。

そしてまた次の一体を倒そうとした瞬間に、

「ッ！？」

異常が起きる。

突如、龍也の動きが止まった。

何故止まったのか。

それは龍也にも分からなかった。

ただ、急に体が動かなくなったのだ。

今の龍也の状態は隙だらけ。

そんな隙だらけの状態を妖怪が見過ごす訳がなく、妖怪はその巨大な腕を龍也に叩き付ける。

「がつ!？」

それをまともに受けた龍也は吹っ飛んで行く。

そして地面を数回バウンドした後、地面を滑る様に移動しながら止まる。

「ぐ……ぐぐ……」

龍也は両腕を使って何とか立ち上がろうとする。

「ッ!？」

その瞬間、龍也は自分の額から血が流れている事を認識する。

目に入りそうだったので、手の甲で血を拭う。

だが、拭ったところで次から次へと血が流れてくる。

血が出やすい場所を切ったなと龍也は思いながら血を拭うをやめ、左目を閉じる。

左目を開けたままでは血が目の中に入ってしまうからだ。

そして片膝を着きながら立ち上がると、龍也に影が掛かる。

顔を見上げると、そこには先程の妖怪がいた。

今の龍也の状態を見てか、余裕そうな表情をしている様にも見える。

その表情を見た龍也は腕を振り被り、

「なめんじゃ……ッ!？」

殴り掛かるうとした瞬間に、また龍也の動きが止まる。

その瞬間、妖怪の蹴りが龍也の胴体に叩き込まれる。

「かつ!！」

龍也は血を吐き出しながら吹き飛び、地面に落下する。

地面に落ちた龍也は再び立ち上がろうとする。

「ぐ……く……ッ!？」

その時、龍也には声が聞こえた。

自分の内側から聞こえる様な声が。

何を言っているのか龍也には分からないが、声を発していると言っただけは分かった。

「誰だお前は!？」

龍也は思わずそう叫ぶ。

だが、その声に反応する者はいない。

ただ内側から声が聞こえるのみ。

「邪魔すんな!!」

そう叫んでも、内側から聞こえて来る声は消えない。

そして、気付いた時には先程の妖怪の何体かが龍也の目の前まで迫ってきていた。

龍也は追い払おうと腕を振り被ったが、

「ッ!？」

また体が動かなくなる。

龍也がその事を認識した時には、妖怪の腕が龍也の眼前に迫って来ていた。

妖怪の腕が龍也の顔面に当たると思われた瞬間、

「メテオニックシャワー!!」

そんな声とともに無数の星型の弾幕が現れ、それは妖怪達に次々と命中し、妖怪達を吹き飛ばしていく。

突然の襲撃に妖怪達は驚きつつも、攻撃があつた方を見る。

すると、また大量の星型の弾幕が降り注いだ。

これは堪らんと思ったのか、生き残った妖怪達は尻尾を巻いて逃げ出した。

妖怪達が居なくなった後、

「おい、大丈夫かー？」

そんな声とともに誰かが歩いて来た。

「誰かが妖怪に襲われてたから助けたが……まさか龍也だったとは」

「……魔理沙」

龍也を助けてくれたのは魔理沙であった。

「それにしてもらしくないな。あれ位の妖怪に追い詰められるなんて」

「……ああ、そうだな」

そう言う龍也の声には元気が無い。

その事を心配に思った魔理沙は龍也の顔を覗き込む。

「……大丈夫か？」

「……ああ」

「……本当に大丈夫か？」

「……………ああ」

「……………」

魔理沙の目には大丈夫な様には見えなかった。

「取り合えず私の家に来い。怪我の治療してやるから」

「ああ……………」

そう言っつて龍也は立ち上がるが、すぐにふらつく。

「おっと」

そんな龍也を魔理沙は支えて倒れない様にする。

「全然大丈夫じゃなさそうだな」

「……………悪い」

「気にすんな。私の箒に乗っけてやるから後ろに乗れよ」

「ああ……………」

魔理沙と龍也が箒に跨ると箒は浮かび上がり、魔理沙の家を目指して進む。

その間、龍也は魔理沙に凭れ掛かる。

「おいおい、あんまり無理するなよ」

「……………ああ」

龍也はそう言っつて右目を閉じた。

内側から聞こえていた声は、何時の間にか聞こえなくなっていた。

家に着いた魔理沙は、まず龍也を椅子に座らせる。

そして龍也の傷の治療を始めた。

治療と言ってもまず血を拭き取り、その次に傷口に傷薬を塗って包帯を巻くと言った簡単なものだ。

包帯を巻き終わった後、

「ほい、終わったぜ」

そう言っつて魔理沙は龍也の頭から手を離す。

「ありがとな」

「いいっていいって」

魔理沙はそう言いながら龍也を立ち上がらせ、自分の部屋に入れる。

「私のベットを使っつていいから寝てるよ」

「いや、だけど」

「幾らなんでも怪我人をソファーに寝かせる訳にはいかないからな。気にせず寝てろよ」

そう言っつて、魔理沙は部屋から出て行つた。

どうしたものかと思ひながら、龍也はベットを見る。

すると、眠気が襲つて来た。

眠気に勝てなかった龍也は、そのままベットに潜り込んで寝始める。

ふと気付くと、龍也は真っ黒い空間の中に居た。

ここはどこだと思いつながら周囲を見渡していると、何か龍也の顔に絡み付いて来た。

龍也は引き剥がそうと顔に手を伸ばす。

だが、引き剥がせなかった。

触っている感触では、龍也の顔に絡み付いている物は少しずつ何かを形作り始めていた。

それに比例するかの様に、龍也の意識が薄れ始めた。

自分が自分でなくなる様な、何かに乗っ取られる様な感覚を抱きながら。

それに必死に抵抗していると、誰かが龍也の肩に手を置く。

龍也は手が置かれた方へ振り返る。

龍也に手を置いた者は……………

「ッ!?!」

龍也は慌てて上半身を起き上がらせ、周囲の様子を探る。

そしてここは魔理沙の家である事を思い出す。

龍也は少し安堵しながら窓に目を向ける。

窓から見える景色から、今は夜であると言う事が分かった。

そう認識すると、龍也は再びベットに体を落とす。

少しポケーツとした後に、今見た夢を思い出す。

不気味なくらい、今見た夢は良く覚えていた。

だが、自分の肩に手を掛けた者の顔だけは思い出せなかった。

ただ、とても嫌な感じをした事だけは覚えていた。

そして、龍也はうつ伏せになりながら、

「くそ!?!」

自分でも良く分からない感情を籠めた拳をベットに振り下ろした。

内に巢食いしもう一人の自分編 その2

魔理沙の家に泊まって数日。

傷口も塞がった龍也は、魔理沙の家を出て行く事にした。

「何だ、もう行くのか？」

「ああ、これ以上世話になるのも悪いしな」

「そんな気にしなくてもいいのに」

そう言いながら魔理沙は龍也の顔色を見る。

「大丈夫か？ まだ顔色悪い様だけど……」

それを聞き、ここ数日は夢見が悪かったせいだなと龍也は思った。

自分が自分でなくなる。

そんな夢ばかりを見ていたから。

全部魔理沙に言ってしまうえば楽になるかもしれない。

だが、正直に全部言えば魔理沙に余計な心配を掛けるだろう。

そんな心配を掛けなくなかった龍也は、

「ああ、大丈夫だ」

そう返した。

そして龍也は魔理沙に背を向け、外に出ようとする。

「なあ」

そんな龍也を魔理沙は呼び止める。

「ん？」

そう言っつて、龍也は振り返る。

「何かあつたら言っつてくれ。格安で頼まれてやるぜ」

そう言いながら、魔理沙は笑顔を作る。

数瞬程、その笑顔に見とれた後、

「……ああ、ありがとう」

龍也はそう礼を言っつて魔理沙の家を出る。

魔理沙の家を出た龍也は空中に上がってアリスの家を探す。

アリスの家を見つけると、龍也は霊力でできた足場を作り、その上を歩いて進む。

何故アリスの家を目指しているかと言うと、今の自分の体に起きている変調を

尋ねるためだ。

戦っている最中に体の自由が効かなくなった。

ここ数日考えた結果、龍也はこれを何者かに操られたのではないかと考えた。

そして、何かを操ると言えば人形遣いのアリス。

なのでアリスに意見を聞きに行く事にしたのだ。

要は餅は餅屋にと言う事だ。

暫らくすると、アリスの家の前に辿り付く。

龍也は玄関のドアをノックして反応を待つ。

少しすると玄関のドアが開かれる。

「あら、龍也じゃない。いらっしやい」

玄関のドアを開けたのはアリスであった。

「よっ」

龍也は片手を上げて挨拶をする。

「ええ、こんにちは」

アリスも龍也に挨拶を返す。

そしてアリスは龍也を自分の家の中に上げ、居間に移動する。居間に着くと龍也を椅子に座らせた後、アリスも椅子に座る。すると、アリスの人形が紅茶とクッキーを運んでくる。

龍也はアリスの人形に礼を言いつつ紅茶とクッキーを受け取る。

そして、紅茶を一口飲んで一息吐くと、

「それで、私に何を聞きたいのかしら？」

アリスがそう切り出した。

「……分かるのか？」

「分かると言うより、私に何かを聞きたいと言う雰囲気を出していたわよ」

それを聞き、そんな雰囲気を出していたかなと龍也は思った。

だがそれならば話が早い。

龍也は早速尋ねてみる事にした。

あまり心配を掛けない様、当たり障りの無い部分だけを。

「実はさ、少し前に体の自由が効かなくなる事があってさ」

「ふむ……」

「アリスなら何か分かるかもって思ってたさ」

「つまり、何者かに操られた可能性があるから調べて欲しいと？」

「ああ」

龍也は頷きながら肯定した。

「分かったわ。調べて見るから後ろを向いて服を脱いで」

「分かった」

龍也はアリスの言とおりに後ろを向き、学ラン、ワイシャツ、シャツを脱いで上半身裸になる。

脱ぎ終わると、アリスは龍也の背中を手で触れて調べていく。

背中を調べ終わった後、アリスは肩や肘や手も調べていく。

手を触れられた時、女の子らしい柔らかい手だなと龍也は思った。

龍也の手からアリスの手が離れると、今度は龍也の後頭部をアリスは調べ始めた。

暫らく調べてると、アリスは龍也の後頭部から手を離し、

「結論から言うと、龍也の体に魔力系が付けられていたと言う痕跡

はなかつたわ」

結論を言った。

「魔力糸？」

龍也はそう言いながら、アリスに振り返る。

「魔力で作った糸。略して魔力糸」

アリスはそう言いながら指先から光る線の様な物を生み出した。

「これが魔力糸よ。今は見える様になっているけどね」

「これが……」

龍也は興味深そうに魔力糸を見る。

「私は人形を操るのが専門で人体を操るのは専門じゃないけど、それでも分かる事はある」

そう言いながらアリスは魔力糸を消す。

「それは、操り主と操られる対象に何らかのラインが必要だった事」

「ライン？」

龍也はそう言って首を傾げる。

「実際に説明した方が早いかしらね。もう一回後ろを向いて」

「あ、ああ」

龍也は言われるままに後ろを向く。

すると、

「ん？」

背中に何かがつつ付いた感触があった。

「今、魔力系を分かる様にくっ付けたんだけど分かった？」

「ああ、背中に何かがつつ付いた感触はあったな」

そう言いながらこれが魔力系かと龍也が思っていると、

「うお！？」

急に右腕が上がった。

何が起こったのかと思いつながら龍也は後ろを向く。

「今、私が魔力系を使って貴方の体を操ったの」

「へー……でも魔力系が見えないけど？」

龍也は疑問に思った事を尋ねる。

アリスの指先と自分の背中の間に魔力系が見えなかったからだ。

「それはそうよ。本来、魔力系って言うのは見えない状態が基本なのよ」

でないとどれをどう動かしているのかバレちゃうでしょとアリスは続ける。

「とは言っても見えない状態が基本と言っても問題があるのよね。例えば強度とか」

「強度？」

「そう。ちょっと右腕を動かしてみて」

アリスにそう言われ、龍也は右腕を動かしてみる。

最初は少し抵抗があったが、何かが切れる音とともに抵抗がなくなる。

「魔力系を見えなくすると、今の様に少し抵抗するだけですぐに切れちゃうのよ」

そう言っアリスは魔力系を消す。

「かと言って丈夫なのを作ろうとすると……」

そう言っアリスは再び魔力系を生み出す。

今度のは光を放っており、よく見える。

「とまあ、この様に非常に目立つちゃうのよね」

そう言つてアリスは魔力糸を消す。

それを見て、体の自由が効かなくなつた時にその様なものは見なかつたなど

龍也は思つた。

「脳みそに糸を付けて操つていふと言ふ線もあつたからそつちも調べてみたけど

その痕跡もなかつたわ」

「そつか……」

「まあ、龍也ぐらいの力があるならば、そこんじよそこらの魔力糸の拘束ぐらい
楽に抜け出しそうだけどね」

そう言つた後、アリスは頭を下げる。

「ごめんなさい。あまり力になれなくて……」

そう言つて、アリスは申し訳なさそうな顔をした。

「いや、糸とかで操られているって可能性がなくなつただけでも収穫だ。だから、

ありがとう」

そう、龍也は礼を言う。

「そう……」

その言葉を聞いて幾分かアリスの表情が柔らかくなる。

そして、アリスは窓から外の景色を見る。

「そろそろ日が暮れる頃だから、今日は泊まっていきなさい」

「……ああ、そうさせて貰うよ」

暗い空間。

龍也は一人でその空間に立っていた。

『……………』

声が聞こえる。

『……………』

自分ではない、自分と似たような声。

『……………』

最初は何を言っているのか聞き取れなかったが、少しずつだがはっきりと聞こえて来た。

そして、

『幾ら足掻いても無駄だ。テメエの体は俺が貰う』

今度ははっきりと聞こえた。

声が聞こえた方へ龍也は顔を向ける。

そこに居たのは……………

「ッ!？」

龍也は勢い良く上半身を起き上がらせる。

「ハアハアハア……ハア!！」

息を荒げながら龍也は周囲の様子を確認する。

窓から差し込む光は月光。

周りを見れば整理整頓された部屋。

「……そうだ、俺はアリスの家に泊まったんだ」

その事を思い出すと、龍也は急に左手で左目辺りを押さえる。

「くそ……………」

悪態を付きながら思う。

自分ではない何か自分が自分に近付いていると。

そして自分が自分でなくなる様な感覚が自分を襲っていると言つ事。

この事を龍也は本能的に理解していた。

それと同時に、外側から干渉されているのではなく内側から干渉されていると

言つ事も。

「このままじゃ……………俺は……………消える……………」

その事を口に出した瞬間、底知れぬ恐怖が龍也を襲う。

嘗て妖夢戦った時に負けて、修行して再び戦った時に抱いた負けるかもしれないと言つ恐怖。

あれとは比べ物にならない恐怖を。

「俺は……………どうすればいい……………どうしたらいい……………」

震える声で龍也はそんな事を呟きながら龍也は拳を振り上げ、

「……くそ!!」

ベットに拳を振り下ろした。

早朝、アリスの家で朝ご飯を食べた後、龍也はアリスの家を出て魔法の森の中を歩いていた。

何かをしていないと気が参ってしまいそうだったからだ。

だが、余計に気が悪くなった様な気が龍也にはした。

朝食を取りながらアリスと会話していた時はそんな気分になりはしなかったのだが。

「俺……こんなに弱かったか……？」

龍也がそう呟くと、目の前に茸型の妖怪が現れた。

向こうは龍也を襲う気満々の様だ。

撃退し様と思った龍也は大地を駆け、距離を半分程詰めた所で動きを止めた。

急に体の自由が効かなくなったのではなく、自分の意思で止めたのだ。

何故かと言うと、戦っていると魔理沙に助けられた時に聞こえた声の様なものが
また聞こえて来るのではないかと思ったからだ。

この声が今回の夢ではっきり聞こえた。

ならば、これが戦っている時に聞こえたら俺は……。

龍也がそう思っていると、

「ッ!？」

茸型の妖怪が龍也の目の前に迫り、攻撃を仕掛けて来た。

龍也は体を倒し、転がる事で攻撃を回避する。

ある程度距離を取った所で体勢を立て直し、攻撃を仕掛け様としたところで、

「ッ!？」

また動きを止めてしまう。

龍也が攻撃をして来ないのを好機と思ったのか、茸型の妖怪は龍也との距離を詰める。

それに対し、龍也は一步一步と後ろに下がる。

そうしていると、龍也は何かにぶつかる。

龍也は何かと思って後ろを見る。

「木……?」

龍也の後ろにあったのは木だ。

それを見てみると、思い出したかの様に龍也は前を見る。

茸型の妖怪がもう目の前にまで迫って来ていた。

迎撃し様にも龍也の体は思う様に動かなかった。

恐怖心が龍也の体を縛っているからだ。

茸型の妖怪の攻撃が龍也に当たる直前、

「くっそー!!」

龍也は上空に飛び上がり、魔法の森から逃げた。

「はあ……」

気落ちした様子で龍也が歩いていると、

「痛ッ」

誰かにぶつかった。

「すみません」

そう謝った後、周囲の様子を見ると、

「ここ……人里か……」

自分が人里に来ている事が分かった。

恐怖や不安があったから、無意識にのうちに人が多い場所に来たのだろうか。

「……くそ」

そう呟き、龍也は足を進める。

暫らく進むと、

「おや、龍也君じゃないか」

声を掛けられた。

龍也は声を掛けられた方へ向く。

そこに居たのは、

「慧音先生に……妹紅？」

慧音と妹紅であった。

「やつ」

妹紅は手を上げて挨拶をした。

「どうしたんですか？」

「妹紅と話していたら君を見つけてな」

それで声を掛けたのだと言う。

「そうそう、聞いたぞ。この前起きた異変を解決したらしいじゃないか」

「ああ、あの時の……」

そう言って、龍也は満月が欠けた時の事を思い出す。

そして少し雑談をする。

「あ、そうそう聞いてくれ。妹紅が迷いの竹林の案内を始めたんだ」

「へえ……」

「これを機に妹紅ももう少しみんなと交流を持ってくれれば……」

「別に私はそこまで交流は……」

そう言つて妹紅は顔を背ける。

それを聞き、龍也は考える。

妹紅に永遠亭に案内して貰おうかと。

永遠亭で精神安定剤でも貰えば少しは今の自分の状態もマシになるのではないかと
思つたからだ。

「妹紅」

「ん、何？」

「ちよつと永遠亭まで案内してくれないか？」

「永遠亭に？」

そう言い、妹紅は嫌そうな顔をする。

その顔を見て、龍也はそう言えばと思ひ出す。

あの九対二の変則的な弾幕ごっこが終つた後に妹紅から聞いた事を。
何でも、輝夜とは顔を合わせれば殺し合いをする様な仲であるんだ
とか。

序に輝夜も不老不死らしい。

まあそれは兎も角、そんな仲ではあるが積極的に顔を合わせる気とかはないらしい。

それでも、どちらかから殺しに行く事はあるらしいが。

お互い不老不死なのに。

何か不毛な様な気がしたが、龍也は突っ込まない事にした。

お互い譲れないものもあるだろうし。

「それで、永遠亭に何か用？」

考えに耽っていた龍也に妹紅がそう尋ねる。

「ん、ああ、ちょっと薬を貰いに」

「薬を？」

そう言い、妹紅と慧音は龍也の顔を伺う。

「確かに……顔があまり優れていないようだな」

「あ、本当」

龍也の顔を伺った後、妹紅は仕方がないと言った表情で

「分かったわ、案内してあげる」

龍也を永遠亭に案内することに決めた様だ。

「ありがとう」

龍也は妹紅にそう礼を言い、歩き出した妹紅の後を付いて行く。

「お大事に」

背後から掛かる、そんな慧音の声を受けながら。

「はい、着いたわよ」

気付けば永遠亭の前に付いていた。

「ありがとな」

「別にいいわよ、これ位」

そう言つて妹紅は永遠亭から背を向け、歩き出す。

「あ、そうそう」

妹紅は何かを思い出し、振り返る。

そして、

「お大事にね」

そう言つてまた歩き出した。

妹紅の後姿を見送つた後、龍也は永遠亭の扉をノックする。

少しすると扉が開かれる。

扉をひらいた人物は、

「あら、龍也じゃない」

鈴仙であつた。

「いらつしゃい、何か用？」

「ああ、永琳いるか？」

「師匠？ 居るけど」

「案内してくれるか？」

「分かったわ」

龍也は鈴仙の後に続きながら永遠亭の廊下を歩く。

少しすると、比較的大きな部屋の前に来た。

「師匠、宜しいでしょうか？」

鈴仙はそう言いながら襖をノックする。

「ええ、構わないわ」

部屋の中からそう声が掛かる。

「失礼します」

鈴仙はそう言って襖を開け、中に入る。

龍也も釣られる様に中に入る。

どうやら、永琳は何か薬を作っている様だ。

「あら、龍也じゃない」

龍也がいた事に永琳は少し驚く。

「彼が師匠に用があるとの事で」

「分かったわ。鈴仙、下がっていいわよ」

「分かりました」

鈴仙はそう言って永琳の部屋から退出し、襖を閉める。

永琳は薬を作るのを一旦やめ、龍也に向き直る。

「それで、私に何か用かしら？」

「ああ、精神安定剤が欲しいんだけど……」

「精神安定剤を？」

「ああ」

龍也の肯定の発言を聞き、永琳は木でできたケースから何かを取り出す。

「はい、精神安定剤とお水」

そう言って、薬と水を龍也に手渡す。

「ありがとう」

龍也はそう礼を言い、薬を飲む。

「それと、あまり抱え込まずに全部吐き出した方が楽な場合もあるわよ」

薬を飲み終わった龍也に対し、永琳はそう言う。

尋ねたところで答えてはくれないだろうと思ったからだ。

「……忠告、受け取っておくよ」

そう言って龍也は襖を開け永琳の部屋から出る。

そして襖を閉める前に、

「薬、ありがとな」

そう礼を言って襖を閉める。

「しかし、上空からだと言遠亭が見えないな」

薬を貰った後、永遠亭を出た龍也は次の目的地を目指すために上空に出た。

その後、真下を見下ろしてそう漏らした。

「俺一人で来たら迷うわな、これは……」

そう言った後、少し急ぎ気味に移動を開始する。

目指している場所は博麗神社。

呪いとかに掛かっているのならば、霊夢ならば分かるだろうと考えたからだ。

精神安定剤を飲んだからか、気分は落ち着いている。

そんな事を龍也が認識していると、博麗神社が真下に見えていた。

龍也はブレーキを掛けて止まり、足場を消して落下する。

神社の境内に着地した後、龍也は霊夢の姿を探す。

「珍しいわね、上空から来るなんて。何時もなら石段を上って来るのに」

声が聞こえて来た場所に龍也は目を向ける。

霊夢は賽銭箱の隣で茶を飲んでいた。

「何はともあれ、いらっしやい」

「ああ」

龍也はそう言いながら霊夢に近付き、財布から小銭を取り出す。

そしてそれを賽銭箱の中にはおり込む。

「何時もありがとう」

そう言って霊夢は笑顔になる。

龍也はやれやれと思いつつながら、

「霊夢、ちよつと頼みがあるんだが……」

そう切り出した。

「頼み？」

「ああ、俺に呪いが掛けられてないか調べて欲しいんだ」

「呪い？ 何でまた」

「最近ちょっと不調だな」

「ふーん……ま、いいわ」

そう言っつて霊夢はお茶を飲むのやめて立ち上がり、龍也に近付く。

そして背伸びをしながら龍也の肩を掴む。

「私の目を見て」

「分かった」

霊夢にそう言われ、龍也は霊夢の目をじっと見る。

何か、吸い込まれそうな感覚を龍也が感じていると、

「もついいわ」

そう言っつて霊夢は龍也の肩から手を離す。

「結論から言っつと、呪いに掛かってはいないわ」

「そっか……」

どつやら呪いと言う考えは外れた様だ。

「と言つかちゃんと寝てる？ 顔色悪いわよ」

「ん、最近はちょっと……」

「そのせいじゃないの？ 不調を感じてるの」

「あー……そうかもな」

「ここ最近夢見が悪かったが、今は精神安定剤のお陰で気分も落ち着いている。」

「これなら良い夢を見れそうである。」

「部屋借りてもいいか？」

「いいわよ」

「霊夢の許可が取れたので、神社に泊まる時に使わせて貰っている部屋に龍也は移動する。」

真っ暗闇の空間。

そこに龍也は立っていた。

そして、

『もう遅えよ』

声が聞こえてくる。

『幾ら足掻いても無駄だ』

どこからか聞こえてくるのか分からない。

『テメエは消える。俺に喰われてな』

突如、龍也の顔に何かが絡み付いてくる。

『そして、この体は俺のものになる』

顔に絡みついたものを龍也は必死に剥がそうする。

そんな時、龍也の目の前に誰かが現れる。

龍也は誰なのか確認し様と顔を上げる。

そこに居たのは……………

「ッ!？」

龍也は飛び起き、息を荒げる。

そして少しずつ息を整えていく。

「……………夢か」

そう呟いたのと同時に龍也は理解した。

また、近付いていると。

言い知れぬ恐怖心が龍也を支配していく。

「くそ!！」

そう言って立ち上がり、龍也は襖を開ける。

太陽が沈みそうな光景。

もう少しで夜になりそうである。

その光景を見て、

「そつだ、紅魔館にある図書館」

紅魔館の図書館の事を思い出した。

あそこになら、解決に繋がる何かがあるかもしれない。

少し落ち着いた龍也は、霊夢に一声掛けてから出ようと思って霊夢の姿を探す。

そして居間の襖を開けると、

「あ……」

霊夢を発見した。

卓袱台に突っ伏しながら寝ている状態であるが。

いくらこの部屋が暖を取っており、暖かいからと言ってもこのままでは風邪を引くと

思った龍也は、別の部屋から布団を持ち出して霊夢に掛ける。

そして起すのは悪いと思った龍也は書置きを一つしてから博麗神社を後にする。

紅魔館の近くまで来ると、龍也は着地して門を目指す。

門の前まで来ると、

「……やっぱり」

門番である美鈴が立ったまま幸せそうな顔をしながら寝ていた。

よく風邪を引かないものだと言ったと龍也は思った。

とは言っても、門番が寝てるからと言っても勝手に入るわけには行かない。

なので、龍也は大きく息を吸い込んで、

「美鈴！……！！！！！！」

美鈴の耳元でそう叫ぶ。

「わひゃあ！？」

そんな声を上げながら美鈴が飛び起きる。

「ち、違うんですよ!! こゝ、これ、そう!! 寝たふりをしていただけであって……」

そこまで言つて、美鈴は龍也の存在に気付く。

「な、なんだ龍也さんじゃないですかー」

そう言つて凄く安心した顔になる。

「で、中に入りたいたんだがいいか？」

「あ、はい。いいですよ」

そう言つて、美鈴は門を開ける。

そして龍也の表情を見て、美鈴は気付く。

「あの、大丈夫ですか？」

「ん、何が？」

「何と言つか……いえ、何でもありません」

そう言つて、美鈴は言つのをやめる。

龍也の表情が、あまり聞いて欲しくなさそうであつたからだ。

「しゅっくじりびんぞ」

「ああ」

そして龍也は紅魔館の中に入る。

入り口からなら一人でも図書館を目指せるので、龍也は一人で図書館を目指す。

そして、図書館の中に入った龍也はパチュリーの姿を探す。

程なくして、本を読んでいるパチュリーの姿を発見する。

「パチュリー」

龍也はそう声を掛けながらパチュリーに声を掛ける。

パチュリーは本から視線を外し、龍也の方を見る。

「あら、龍也じゃない。いらっしやい」

「よっ」

そう言って、龍也は片手を上げる。

「本を読みに来たのかしら？」

「ああ、構わないか？」

「ええ、構わないわ」

そう言い、パチュリーはキョロキョロと周囲を見る。

「小悪魔、いる？」

そして小悪魔を呼ぶ。

「お呼びでしょうか、パチュリー様」

程なくして小悪魔が現れる。

「龍也が本を読みたいそうだから、案内してあげて」

そう言っつてパチュリーは本に視線を戻す。

相変わらずだなと龍也が思っていると、

「龍也さんは何の本をご所望ですか？」

小悪魔がそう尋ねて来た。

「精神関連の本なんだが……あるか？」

「精神関連ですな……ありますよ。ご案内しますから付いて来て下さいね」

そう言っつて小悪魔は歩き出し、龍也は小悪魔の後を付いて行く。

暫らくすると、

「こちらになります」

目的の場所に辿り付く。

相変わらずの量だなと龍也は思った。

「何かありましたら呼んで下さいね」

そう言つて小悪魔はどこかに移動した。

それを見送つた後、龍也は目に付いた一冊を取つて床に座つて読み始める。

読み始めて暫らくたつたが、本の内容が中々頭に入らなかつた。

単純に、龍也が焦っているからである。

自分じゃない何かが近づいてきているから。

さつきよりも今の方が近い。

それを理解しているからこそ、何とかしよつと龍也は焦っている。

だが、本の中身が頭に入らない。

そんな悪循環に陥っていると、

「随分とらしくない顔をしてるわね」

そんな声が掛けられた。

龍也は声を掛けられた方へ顔を向ける。

そこに居たのは、

「咲夜……」

咲夜であった。

「何か用か？」

「用と言うより、あまりにもらしくない顔をしていたから見るに見かねて……っと言ったからかしら」

「らしくない……か……」

そう言つて、龍也は俯く。

「これは重傷ね……」

咲夜がそう言つた後、

「あれ？」

龍也が読んでいた本が消えていた。

どこにいった探そうと立ち上がると、

「ッ！！」

目の前に咲夜が振るつたナイフが迫っていた。

龍也は慌てて咲夜から間合いを取る事で避ける。

「何すんだ!？」

「あら、幻想郷では突然戦いを挑まれる事何て日常茶飯事じゃない」

「そうだけだよ……」

そう言いながら龍也は後ろに下がる。

「ほんと、らしくないわね」

そう言っつて咲夜は溜息を吐く。

「特に、その目」

「目?」

「そうよ、その何かに怯え、恐怖し、気落ちした様な目」

そう言っつて、咲夜は龍也に一步近付く。

「覚えてる? 私と初めて戦った時の事を」

そしてまた一步、咲夜は龍也に近付く。

「どれだけ不利な状況になっても、どれだけ追い詰められても、貴方の目は諦めず、絶望せず、勝つと言っつ目をしていた」

また一步、咲夜は龍也に近付く。

「そして、私に勝った」

そう言つて、また一步近付く。

「相手がどんな存在だろうと、どれだけ強かろうと真正面から打ち倒す。怯えず、

恐怖せずに。それが貴方じゃないの？ 龍也」

咲夜にそう言われ、龍也は気付いた。

自分は何をしていたのかと。

確かに、咲夜の言うとおりにしなかったと龍也は思った。

相手が誰であろうと、何であろうと真正面から打ち倒す。

そうして来た。

自分を信じて。

それが自分だ。

本当にらしくなかったと思ひながら、龍也は咲夜の目を見て、

「ありがとな、咲夜」

そう礼を言つた。

そう言った龍也の目は、何時もと同じ目に戻っていた。

「どういたしまして」

そう言った咲夜の表情は、どこか嬉しそうであった。

「あらあら、龍也を慰める役目を咲夜に取られちゃったわ」
そんな二人の様子を見ていたレミリアはそう漏らした。

パチュリーに会いに図書館に来たら、パチュリーに龍也の様子を聞き、慰めようと
思っていたら咲夜に先を越された。

その事がレミリアには若干不満であった。

「少し不満ね」

「あら、そう言うわりには結構嬉しそうな顔をしてるわよ、レミィ
そんなレミリアに対し、パチュリーがそう言う。

「そりゃね。何かに怯え、恐怖し、気落ちしていた龍也もあれはあれでそえられる
ものがあつたけど……」

そう言いながら、レミリアは再び龍也を見る。

「やっぱり、龍也はああでなくっちゃ」

そう言いながらレミリアは紅茶を飲む。

「あれでこそ、私のものにしたいたい龍也よ」

「ふーん……」

そう言いながらパチュリーも紅茶を飲む。

「それにしても、意外だったわね」

「何かかしら、パチエ？」

「咲夜が龍也に湯を入れた事よ」

そうやってパチユリーは龍也の方を見る。

すると、何時の間にか来ていたフランドールに手を引っ張られていた。

遊んでくれとせがまれているのだろうか。

「ああ、それなら簡単よ。龍也が人間だからね」

「人間だから？」

「そう。龍也に限らず、霊夢や魔理沙にも甘いみただけど」

そう言って、レミリアは再び紅茶を飲む。

「咲夜、自分の能力のせいで人間と殆ど交友関係ができなかったからね」

咲夜の”時間を操る程度の能力”。

それのお陰で咲夜に近寄ってくる人間が殆ど居なかったとレミリアは語る。

「龍也に限らず、霊夢と魔理沙もそんな能力関係ないと言った感じだからね。」

咲夜の能力に怯えたり、恐怖したりと言ったのもないしね」

「成程」

だから咲夜は結構甘いのかとパチュリーは思った。

序に、『死ぬまで借りてくぜ』と言いながら本を持っていく魔法使いを

積極的に迎撃したりしないのはそのせいかとも思いながら。

そしてパチュリーも再び紅茶を飲む。

その後、龍也、咲夜、フランドール、レミリア、パチュリー、小悪魔の六人で

トランプで遊ぶこととなった。

内に巢食いしもう一人の自分編 その3

「ん……」

もう朝かなと思いながら龍也は目を開ける。

龍也が最初に見た物は

「え……?」

無数にある大量の目であった。

「うおわあああああああああ!?!」

龍也の頭は一気に覚醒する。

それと同時に龍也は飛び起きた。

そして思う。

確か自分は紅魔館の一室で寝ていたはずであると。

「あら、お目覚め?」

龍也が状況を確認する前に、背後から何者かが近づいて来る。

その気付いた龍也は間合いを取りながら振り返る。

龍也の背後にいた者は、

「…………紫？」

八雲紫であった。

「はあい」

紫はそう言いながら手を振る。

龍也は紫を無視して周囲を見る。

そして、

「…………ここは隙間の中か？」

紫にそう尋ねる。

「正解」

紫は可愛らしくそう答える。

「…………で、何で俺はこんな所にいるんだ？ 俺は確か紅魔館の一室で寝ていたはずだが？」

「それは簡単。私が貴方を拉致って来たからよ」

「…………おい」

龍也はジト目で紫を見つめる。

同時に、何やら遣る瀬無い気持ちで龍也を襲った。

「大丈夫よ。ちゃんと置手紙も置いてきたから」

「置手紙？」

「そうよ」

そう言っつて紫は紙切れを龍也に投げ渡す。

龍也はそれを受け取り、書かれている内容を読み上げた。

「何々……『眠れる王子様は頂いた。隙間美少女快盗ゆかりんより』」

そんな事が書かれていた。

しかも無駄に可愛らしい字で書かれているのが龍也を余計に遣る瀬無い気分させた。

「うわぁ……」

読み終わった後、龍也は思わずそう漏らしてしまった。

そして紫の顔を見て、

「うわぁ……」

再びそう漏らしてしまった。

「……コホン、一時のテンションって怖いわね」

紫は咳払いしそう言った後、頬を赤く染めた。

どうやら、今になって恥ずかしくなって来た様だ。

「……で、何で俺をこんな所に連れて来たんだ？」

このままの状態が続いてもあれなので、龍也は本題に入る事にした。

「冬眠する前に幻想郷の様子を見ていたら、何やら悩みを抱える男の子を発見してね」

そう言っただけ紫は扇子で口元を隠す。

悩みを抱える男の子とは自分の事だろうと龍也は思った。

「それと俺をここに連れて来たのと何か関係があるのか？」

「ええ、勿論あるわよ」

そう言った後、紫は扇子を仕舞って龍也に近づく。

「貴方の悩みを解決して上げ様と思ってね」

「……それをして、あなたに何の得がある？ 何を考えている？」

紫は色々と胡散臭いので何か裏があるのではないかと龍也は勘ぐってしまふ。

「あら酷い。何も考えて無いわよ」

紫はそう言って笑みを作りながら、龍也の頬を手で触れる。

「ただ、頑張ってる男の子は応援したくなるものなのよ」

何時ぞや幽々子に言われたのと同じ事を龍也は言われた。

「さあ、私の目を見なさい」

そう言われ、龍也はつい紫の目を見る。

すると、どんどんと龍也の意識は遠くなっていっただ。

「いつてらっしやい。どうなるかは全て貴方次第よ、龍也」

「ッ!？」

気付いた時には龍也は別の場所居た。

空を見上げれば青い空に流れる白い雲に太陽が見える。

龍也はこの景色に見覚えがあった。

「ここは……俺の精神世界……」

そう呟いた瞬間、龍也は自分の足元を見る。

すると、大きな塔の上に立っている事が分かる。

そして眼下に広がるのは古い日本の町並み。

今にして思えば絢爛豪華で煌びやかと言う表現が似合う町並みだ。

「やっぱり、ここは俺の精神世界だ……」

龍也がそう呟くと、

「何ポケットとしてやがるんだ?」

後ろからその声を掛けられた。

龍也は慌てて後ろを振り返る。

そこに居たのは、

「な……あ……」

白い髪に白い肌、黒い眼球に紫色の瞳をし、

「あ……」

白い学ランに黒いワイシャツに黒いシャツを着た、

「お……俺……？」

四神龍也が居た。

「ああ、そうだ。俺はテメエだ」

そう言ってもう一人の龍也は口を釣上げ、

「俺はテメエと全く同じ存在であると同時にテメエと全く違う存在でもあるがな」

そう言った。

「……どう言う意味だ？」

「いいぜ、教えてやるよ」

そう言ってもう一人の龍也が語り始める。

「そもそも、俺が生まれたのはテメエがガキの頃さ」

「俺がガキの頃……」

「そう。覚えているか？ 車に撥ねられて入院した時の事を」

「ああ……」

最近、その時の事を夢で見たから龍也はよく覚えていた。

「その時テメエは遺伝子提供者の会話聞き、そいつ等に抱く感情が無関心になった」

「……それが何だよ？」

「本当にそれだけだったか？」

「何？」

「僅かなりとも怒りも憎しみも悲しみも抱かなかったかと聞いてんだ」

「……………」

「自覚が無え様だから言っただけ。テメエは確かに抱いたぜ。怒りも憎しみも悲しみもな」

「何!？」

これには龍也は驚いた。

本当にそんな感情を抱いたのかと。

「自覚が無えくらいだ。その感情はテメエが気付かないうち消え失せ……いや、この言い方じゃ語弊があるな。零れ落ちたんだ」

「零れ落ちた……」

「もう気付いただろ。その時零れ落ちた感情が形を成し、意思を持ったのが俺だ」

そう言っつて、もう一人の龍也はまた口元を釣上げる。

「最も、所詮はテメエから零れ落ちたものだ。俺はテメエに干渉したり、どうこうしたりする力なんてなかった」

そう言っつてもう一人の龍也は首を振る。

「だがな、力を得る機会が来たんだよ」

「力を得る機会？」

「ああ、そうだ。テメエが奪われた春度を取り返した時だ」

「春度を……ッ!」

龍也は春度を奪い返した時の事を思い出す。

あの時、西行妖の手を触れて春度を取り戻した。

だが、春度以外にも何か別の物を取り込んだ感覚があった。

「思い出したか。そう、西行妖の力そのものが大量にテメエに流れ込んだ」

そう言い、もう一人の龍也は再び口元を釣上げる。

「その流れ込んだ西行妖の力を俺が喰らい、俺自身の糧にし、俺はテメエと対等以上の存在になった」

「それで、俺に干渉する力を得た……と？」

「正解だ。そうそう、西行妖の力つてのは誰構わず死に追いやる……要するに

西行妖が司っている力は死。最初に俺が『俺はテメエと全く同じ存在である』と

同時にテメエと全く違う存在でもある』と言ったのはそう言う意味だ」

西行妖の力を喰らったもう一人の龍也は存在そのものが死に変わった。

そして、生者である龍也の存在は生。

生きている龍也と死んでいる龍也。

言いては妙ではあるが、二人の龍也はまるで正反対の様な関係なのだ。

「話を戻すぞ。テメエと対等以上の存在になったと言っても、直にテメエをどうこうできるって事はなかった。精々、テメエが消耗し切った時にほんの僅かに干渉できるくらいだった」

「消耗し切った時……ッ!? あの時か……」

龍也のは覚えがあった。

何時ぞやの異変で萃香と戦った時。

自分の意識が一瞬無くなった覚えがあった。

あれは、

「そうだ。あの鬼の小娘と戦った時に力を貸してやったのは俺だ」

そう言って、もう一人の龍也は龍也に一歩近づく。

「さて、話を戻すぞ。俺がテメエに本格的に干渉するためにはまだまだ時間が掛かるはずだった。だが、ある奴のお陰で随分速くなった」

「ある奴？」

「兎耳した女だ」

「兎耳をした女……鈴仙か？」

「そうだ。あの女の能力で狂わされただろ。その時、テメエの精神にデカイ隙ができた」

そう言ってもう一人の龍也はまた一歩、龍也に近付く。

「デカイ隙ができたから……一気に俺に近づけたと？」

「正解だ」

そしてまた一歩、龍也に近付く。

「そして本格的に干渉できる様になったのが……」

「ついこの間……か」

「そうだ。後をそのままテメエをゆっくり喰らってやるつもりだったんだが……」

もう一人の龍也は忌々しい顔をする。

「あのメイドと言い、隙間女と言い余計な事をしゃがる」

前者は龍也を持ち直させた事を。

後者は精神世界に連れてこさせた事を言っているのだろう。

「まあ、いい」

そう言つて、もう一人の龍也は龍也は見る。

「俺が言いたい事はもう分かつただろ？ 大人しく俺に喰われて俺の糧になれ！！」

そう言いながらも一人の龍也は靈力を解放する。

どす黒い色をした靈力を。

それを見た龍也は構えを取り、

「ざけんなよ」

そう言つて龍也は靈力を解放する。

青白い色をした靈力を。

「俺はお前に喰われる気はねえ。寧ろ逆だ。お前が俺に喰われて俺の糧になれ！！」

龍也はもう一人の龍也にそう言い放つ。

それを聞いたもう一人の龍也は口元を釣上げ、

「できんのか？ テメエに」

そう言つ。

「できるぞ」

それに対し、龍也はそう言う。

そして、二人は同時に駆け、

「はあ!!」

「ハア!!」

拳と拳を激突させる。

大きな激突音とともに衝撃波が発生し、塔の屋根の部分にある瓦が吹き飛ぶ。

その数瞬後、二人は弾かれる様に間合いを取る。

そして龍也は自身の力を変える。

朱雀の力へと。

瞳の色が黒から紅に変えると、

「はあああああああああああ!!!!!!」

力を解放する。

黒い髪が紅に染まっていき、紅の瞳が輝き出す。

「頭の緩い野郎だな、テメエは。言っただろ、『俺はテメエと全く同じ存在であると同時にテメエと全く違う存在でもある』ってな。一応は俺も四神龍也と言う存在だ」

もう一人の龍也は少し呆れ顔で語り始める。

「四神どもがテメエに力を貸すって事は、自動的に俺にも力を貸すって事になる」

そう言っつて、もう一人の龍也は強引に炎の剣を振り払って龍也を弾き飛ばす。

弾き飛ばされた龍也はどこかの建物の屋根に激突し、貫通して行く。

「今回のこれは四神龍也と四神龍也の戦い。だから四神どもはどんな事があっても

この戦いに干渉はしない。四神どもが姿を現さないのはそう言う理由だ」

「そうかい」

そう言いながら龍也は飛び上がり、もう一人の龍也と同じ高さまで上がる。

「朱雀、白虎、玄武、青龍が消えたわけじゃ無かったんだな。安心したぜ」

そう言っつて龍也は消え、もう一人の龍也の背後に現れて炎の剣を振る。

龍也の振るった炎の剣がもう一人の龍也に当たる瞬間、

「ッ!？」

もう一人の龍也の姿が消えた。

龍也はその事に驚くも、何とか動きを追えたので振り向き様に炎の剣を振るう。

すると、そこにもう一人の龍也が振るった炎の剣と激突する。

「ハッ!! 何を驚いた顔をしてんだ? 俺が超速歩法を使える事がそんなに不思議か？」

「超速歩法……」

「何だ、テメエ今まで自分が使ってた技の名前も知らなかったのか? 呆れる位

頭の緩い野郎だな!!」

そう言ってもう一人の龍也は炎の剣を振り抜き、龍也を弾き飛ばす。

「くそっ!!」

吹き飛ばされながら、龍也は自身の力を変える。

朱雀の力から青龍の力へと。

それに伴い龍也の髪の色が紅から蒼に変わり、紅に輝く瞳から蒼に輝

く瞳に変わる。

力の変換が完了すると龍也は水を生み出す。

それを龍の手の様にして両手に纏い、

「水爪牙!!」

両手を振る。

すると両手の爪先から計十本の水でできた斬撃が放たれ、もう一人の龍也に向って行く。

迫ってくる十本の水の斬撃を見ながら、もう一人の龍也は龍也と同じ様に自身の力を

朱雀から青龍に変え、龍也と同じ様に両手に水を纏い、

「水爪牙!!」

龍也と同じ技を放つ。

互いに放った水の斬撃は中間距離で激突し、消滅する。

「俺と同じ技を……」

「何度も言わせんなよ。言っただろ、『俺はテメエと全く同じ存在であると同時に

テメエと全く違う存在でもある』ってな。テメエに出来て俺に出来ないなんて事は

無えんだよ!!」

そう言ってもう一人の龍也は超歩法で龍也の目の前に現れて、龍也の顔面を突き刺そうとする。

「ッ！！」

龍也は慌てて顔を傾けるが完全には回避できず、頬を斬られてしまふ。

龍也は流れ出る血を気にせず、

「だあ！！」

苛立ち気味に己が爪を振るう。

「おっと」

もう一人の龍也は後ろに跳ぶ事で回避する。

龍也は距離を詰めて、同じ様に爪を振るっていく。

もう一人の龍也はそれを全て回避していく。

「おいおい、何カリカリしてんだ。もっと楽しくやろうぜ」

「うるせえ！！」

そう言つて、龍也は爪を大きく振るうと同時に爪先から水で出来た斬撃を放つ。

されたりしたからだ。

何百発もの打ち合いの後、埒が開かないと思ったのか二人は同時に間合いを取る。

そして右手の掌に風の塊を生み出し、

「「暴風玉!!」」

互いに同じ技をぶつけ合う。

ぶつかり合った二つの風の塊は崩壊し、炸裂して二人を飲み込む。

そして炸裂した風の中から茶色い髪をし、茶色に輝かせた瞳の色をした二人の

龍也が飛び出した。

どうやら、二人とも自身の力を白虎から玄武に変えたようだ。

そして、二人は巨大な土の塊を生み出して投擲する。

当然の様に二つの土の塊はぶつかり、崩壊する。

その瞬間、龍也は土でできた巨大な拳を生み出して突撃する。

すると、もう一人の龍也も同じ様に土でできた巨大な拳を生み出して突撃していた。

龍也はその事に驚きながらも構わずに拳を振りぬぎ、互いの土でできた拳が激突する。

先程よりも大きい激突音と衝撃波が発生する。

二人の龍也は土の拳を崩壊させながら、吹き飛んで行く。

だが、ある程度吹き飛ばされると二人は体勢を立て直す。

体勢を立て直した後、龍也はもう一人の龍也に右手を向け、掌に靈力を集中させて圧縮させていく。

もう一人の龍也も同じように右手を龍也に向け、掌に靈力を集中させて圧縮する。

そして、

「「靈流波！！！！」」

同じタイミングで同じ技を放つ。

違う点があるとすれば龍也は巨大な青白い閃光を、もう一人の龍也は巨大な

どす黒い閃光を放つたと言う点であろう。

そして二つ閃光は激突し、均衡すると思われたが、

「なっ！？」

均衡したのはほんの一瞬で、どす黒い閃光が青白い閃光を一気に押し込んだのだ。

青白い閃光を押し込んだどす黒い閃光はそのまま龍也に迫り、

「ッ!？」

龍也を飲み込んだ。

どす黒い閃光が消えた後、その中から出て来たのは、

「はあはあ……はあ………」

学ランなどが半壊以上の状態になり、額や肩や脚や腕などから血を流し、重度の火傷を負い、ボロボロの状態になった龍也の姿であった。

ダメージが大きいせいか、元の黒髪黒目の姿に戻っていた。

「ハッ!! 馬鹿が!!」

そう言いながらも一人の龍也が龍也に近づいて来る。

龍也が力を消した状態になっているからか、もう一人の龍也も力を消して白髪、紫目の状態に戻る。

「あの子鬼にテメエの霊流波を上回る威力の霊流波を放ったのは誰だ? この俺だぜ」

そう言って、もう一人の龍也は龍也に近付くのを止める。

「テメエの靈流波と俺の靈流波、ぶつけ合って勝つ俺の靈流波に決まってるだろ」

「……………ッ」

「やっぱりテメエは甘えよ、龍也」

「……………何？」

「甘いつつたんだよ、龍也」

そう言つて、もう一人の龍也は龍也に一步近付く。

「テメエの甘さが、テメエの攻撃も殺意も本能も何もかもを半端以下に成り下がらせているんだよ!!」

そしてまた一步、もう一人の龍也は龍也に近付く。

「誰が……………お前に甘さなんか……………」

「ああ、確かに俺相手にそんな甘さはない。だがな、一度抱いた甘さがテメエにこびり付いてんだよ!!」

「何……………？」

「勿論、俺に抱いた甘さじゃねえ。毒人形の小娘相手に抱いた甘さだ!!」

「毒人形……メディスンの事が……？」

「ああ、そうだ。なあ、何であいつを生かした？ 最初っから殺しに来たあの小娘を。」

「テメエを食い殺そうと襲い掛かって来た雑魚妖怪を蹴散らす様によ
！！」

「それは……………」

「見た目がガキの姿だったからか！？ それとも意思相通ができたからか！？」

そう言ってもう一人の龍也は、再び龍也に向けて足を進める。

「理由なんざどうでもいい！！ 前々から甘いところが在ったが、その一件でテメエに甘さがこびり付いた！！」

そして、もう一人の龍也はまた一步前が出る。

「だからテメエはどっかこっかで無意識のうちにブレーキを掛けちまってるんだよ！！」

素の力が上がったところでそれじゃ何の意味もねえ！！」

そう言つて、もう一人の龍也は止まる。

「だからテメエは俺より弱えんだよ！！ 龍也！！」

そして、もう一人の龍也が超歩法で龍也の目の前に現れ、

「……………え？」

龍也の腹を己が腕で貫いた。

同時に龍也が口から血を吐き出す。

「一つの肉体を支配する者は二人もいらぬ」

そう言っつて、もう一人の龍也は龍也の目を見る。

「テメエが俺より弱いなら、俺はテメエを喰らつて俺自身の糧にする」

そして、龍也の腹に突き刺さつてゐる己が手を引き抜いていく。

龍也にはその動作が、やけにゆっくりとした動作に見えた。

そして、

『頼りにさせて貰うわ、龍也』

『私は蓬萊山輝夜。永遠亭の主よ』

『ああ、もう！！ こつちに来させたらダメだつて言ったのに！！』

『ああ、あれの事。あれは私の師匠が生み出した地上を密室にする術。永琳の秘術』

『お師匠様からは侵入者は追い返せつて言われてるからぬ。悪く思わないでよ』

『ええ、私の名前はリグル・ナイトバグ。察しの通り妖怪よ』

『……ッブ、変な人間』

『私かい？ 私は伊吹萃香。鬼だよ』

『ふふ、頑張ってる男の子は応援したくなるのよ』

『そうよ。私はミステリア・ローレライ。貴方達は？』

『あ、そうだ。龍也さんも一緒にませんか？』

『はい。珍しい虫が居ると言う噂を聞いて』

『私達は虫捕りに来たんです』

『そうだ、私と手合わせしてみないか？』

『あ、申し送れた。私は寺子屋で教師をしている上白沢慧音と言っ』

『始めまして。私、”文々。新聞”の記者をしております、鴉天狗の射命丸文と申します』

『私は白玉楼の庭師、魂魄妖夢。貴方を倒す女の名です』

『手助けが必要ならいつでも受け付けるよ』

『頑張ってねー』

『私？ 私はリリカ・プリズムリバー』

『私？ 私は橙だよ』

『私はレティ・ホワイトロックよ』

『私？ 私はルーミアだよ』

『あ、私は白狼天狗の犬走椀と申します』

『私は姉の秋静葉。紅葉の神です』

『あ、自己紹介がまだだったわね、私は秋穰子。豊穰の神よ』

『簡単に壊れちゃ……ヤだよ』

『えーと……よろしくお願ひしますね、龍也さん』

『私はパチュリー・ノーレッジ。貴方は？』

『あたいのライバルにしてあげる!!』

『私は大妖精と言います』

『私は当神社の巫女をしております、博麗霊夢と申します』

『そうですか。あ、申し遅れました。私は稗田家当主をしております稗田阿求と申します』

『それにしても、外来人で能力持ちで強いってホントに珍しいわね』

『私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだぜ。よろしくな』

『うん。僕がこの香霖堂の店主、森近霖之助だよ』

『ねえ、龍也。私のものにならない？』

『ええ。紅魔館のメイド長をしております十六夜咲夜と申します』

『申し遅れました。紅魔館の門番をしております紅美鈴と申します』

『風見幽香。幽香でかまわないわ』

『連れて行って上げましょうか？ その退屈がなくなる場所に』

今まであった事が龍也の脳内を駆け巡る。

まるで走馬灯の様だと龍也は思った。

そして、ここまあいつの糧になるのかとも思った。

だが、『それでいいのか』と龍也の中の何かが言う。

『もうあいつ等に会えなくなっても』と。

『旅を続けられなくなっても』と。

そして、

『負けてもいいのか』と。

すると、龍也の中の何かが目覚めた。

もう一人の龍也が突き刺した腕を半分程抜いた瞬間、

「ッ！！」

龍也の右手がもう一人の龍也の肘を掴んだ。

その事にもう一人の龍也は驚く。

そして、

「ッ！？」

龍也の手がそのままもう一人の龍也の肘を握りつぶした。

もう一人の龍也は慌てて後ろに下がる。

その時千切れた腕の事など気にせず。

龍也からある程度離れた後、もう一人の龍也は龍也は見る。

龍也の腹に刺さっていたもう一人の龍也の腕が塵になって消えていつている

様子が見て取れた。

そして、完全に消えると龍也の腹から血が漏れ出す。

その瞬間、龍也が顔を上げる。

「ッ!？」

龍也の目を見たもう一人の龍也が驚く。

先程とはまるで違う目をしていたからだ。

獰猛な獣の様な、殺意を凝縮した様な、そんな目をしていたから。

そして、

「くそ……………」

気付いた時には、もう一人の龍也の胸元は龍也の腕に貫かれていた。

その瞬間、もう一人の龍也の体が少しずつ塵になって消えていく。

「確かに、俺はお前の言うとおり甘いのかもれない」

龍也はそう言い、一旦息を吐く。

「だが、殺らなきゃならない相手や殺らなきゃならない状況下で容赦する

気は……………ない」

「ハッ……………テメエの様な甘い奴が何を……………」

「今、お前で証明しただろ」

「……………いいぜ」

そう言ってもう一人の龍也は龍也の目を見る。

「一応は俺に勝ったんだ。取り合えずはテメエの糧になってやる」

そう言った後、もう一人の龍也は口元を釣上げる。

「だが忘れんなよ！！ 俺は消えるわけじゃねえ！！ 必ずまたテ
メエの前に

現れる！！」

そしてもう一人の龍也は龍也の肩を掴む。

「その時こそ！！ テメエを喰らって俺の糧にする時だ！！」

もう一人の龍也がそう言った瞬間、龍也の精神世界は光で包まれた。

「痛ッ!!」

龍也が体の痛みを認識した時には、今居る場所が隙間の中であると
言うことを

龍也は認識した。

そして、意識が遠くなって行くのを感じながら龍也は妙な仮面を見
付ける。

基本色は白で、形は憤怒した鬼と悪魔を足し合わせ、それを骨にし
た様な仮面。

そして、両方の目元の部分から米神に掛けて黒い線が走っている。

そう言えばと、龍也は思い出した。

もう一人の龍也は、自分から零れ落ちた怒りと憎しみと悲しみから
生まれた存在で
あると言う事を。

その事を思い出した瞬間、

「何度出てきてもこの体は渡さねえし、お前の糧になる気はねえ…

…
「

仮面そう語りかけた。

言い終わった後、龍也の意識は闇に包まれた。

入院編 その1

「う……う……う……」

龍也は瞼が重いなと感じながら目を開ける。

すると、木でできた天井が目に入る。

それをボケーツとした目で暫らく見た後、顔を動かして周りを見てみる。

畳や壺や掛け軸や襖と言った物が目に入った。

これらの事からここが和室と言う事が分かる。

そしてまたボーツとした後、

「……う……う……ど……」

龍也はそう漏らした。

そして立ち上がるうと思つて上半身を起き上がらせると、龍也は自分の腕に刺さっている管を発見する。

その管を目で追っていくと、液体が入った袋を発見する。

「……点滴？」

これが点滴ならば、ここは病院なのかと龍也は思い少し考える。

そして幻想郷で病院と言えば、

「永遠亭？」

永遠亭と言う結論に達した。

すると、

「あら、お目覚め？」

襖が開かれる音と同時にそんな声が掛けられる。

声が聞こえた場所に龍也は顔を向ける。

そこに居たのは

「永琳……」

八意永琳であった。

「その様子だと記憶の混濁は見られない様ね」

永琳はそう言いながら龍也に近付いて座る。

「あの時は吃驚したわ。朝ご飯を食べ終わったら卓袱台の上に貴方が降って来たんだもの」

「……卓袱台の上？」

「ええ。貴方が現れた場所に隙間があったから八雲紫の仕業だと思っけど」

その事を聞き、龍也は思った。

もう少し場所を考えてくれと。

「それにしても、あれだけの大怪我を負ってよく生きてたわね」

「……そんなに酷かったか？」

「ええ、腹部に貫通の跡、重度の火傷、裂傷、出血多量、骨折、内臓損傷と言った感じ」

「だったかしらね。貴方の怪我の度合いは」

「どうやら精神世界で負った傷がそのまま現れた様である。」

「永琳が俺を？」

「ええ。私が手術と怪我の治療をしたわ」

「そっか、ありがとう」

龍也はそう礼を言って頭を下げる。

「別に構わないわ。大怪我したらタダで綺麗に治すって約束だったしね」

永琳は何て事ないって顔でそう言う。

「それでもだ。永琳がいたから俺は死なずに済んだ。だから、ありがとう」

「……そう言う事なら、どういたしましてと返しておくわ」

そう言うって、永琳は少し照れくさそうにする。

「ごっちゃって礼を言われる事に慣れていないのだろうか。」

「それはそうと、体の調子はどう？」

永琳にそう言われて龍也は軽く体を動かす。

「んー……ちょっと体がダルイ感じがあるな……」

「あら、一ヶ月近くも寝ていたのにそれだけで済んでいるのね」

「一ヶ月!? 一ヶ月も寝てたのか!? 俺!？」

一ヶ月も寝ていたと言う事に龍也は驚く。

龍也の体感時間では二、三日ぐらいしか寝ていないと思っていたからだ。

「ええ、序に言うなら年明けも過ぎたわ」

「あー……今一実感が湧かないな……」

「まあ、そつでしょうね」

永琳はそう言っつて立ち上がる。

「貴方の傷は殆ど塞がっているから、リハビリがてらに永遠亭の中を歩いてみたら？」

「そつするかな」

永琳にそつ勧められて、龍也は立ち上がる。

立つてみると、自分の格好が入院患者が着る様な格好になっている事に気付いた。

「おつと」

その時に自分のズボンがずれている事に気付き、直そつとした瞬間、

「……………ん？」

龍也はある事に気付いた。

自分の下着……………トランクス**の柄**が変わっている事に。

「あ、あの、俺の……………下着……………」

「ええ、衛生面の問題もあつたから勝手に変えさせて貰つたわ」

そつ言っつて、

「あら、あの子は私の弟子で一応は医者よ。まだまだ未熟だけど」

「……………あんた、俺をからかっているのか？」

驚きが一周したせいか、龍也はある程度落ち着きを取り戻した。

「さあ？　でも、それだけ元気があれば数日中には退院できるでしょ」

そう言って永琳は部屋を出ようとする。

「あ、一寸待って」

部屋を出ようとした永琳を龍也は呼び止める。

「何？」

「俺の服はどこにあるんだ？」

「貴方の服なら修繕が終ったから洗濯してるわ」

「そっか。何から何まで悪いな」

「気にしなくていいわ。あ、そうそう。ポケットに入ってた物は私が預かっている

から、ここを出て行く時には私の所に来てね」

そう言って、永琳は部屋から出て行った。

それを見送った後、龍也は立ち上がって永遠亭の中を散歩する事にした。

「やっぱり広いな、ここ」

永遠亭の中を歩きながら龍也はそう呟く。

ここも外観に比べて中は広い。

紅魔館は咲夜の能力の応用で広くなっている様だが、ここもそれと

似た様な事を
しているのだろうか。

龍也がそんな事を考えながら歩いていると、

「おっと」

目の前を兎の大群が通過した。

確かここにいる兎は妖怪兎だと言う。

ならば、今のが妖怪兎なのだろうか。

「見た感じ普通の兎と変わらなかったな」

龍也がそう呟くと、

「あれ、お兄さん」

「てゐ」

てゐが現れた。

「いやー、お兄さんが全然目覚めなくて心配で心配で……」

「お前の寶錢箱に金を入れる奴がないからか？」

龍也がそう言うと、てゐは体をビクッとさせる。

「……おい」

「わ、私はお兄さんを純粋な気持ちで心配してたんだよ」

てゐはそう言いながら目をキラキラさせる。

「……………ま、信じとくよ」

龍也はてゐの目を見ながらそう答えた。

「それは兎も角」

てゐはそう言いながら小さめの賽銭箱を取り出す。

「ここにお金を入れるとお兄さんに幸運が……………」

「悪い、今財布持ってないから金は入れられないぞ」

龍也がそう言つと、

「……………チッ」

てゐが舌打ちをした。

「……………おい」

「あはは、何でもないよ」

そう言つて、てゐは直に表情を戻す。

「それじゃ、またねお兄さん」

そう言いながらてめは何処に行く。

「……何つーか、自由に生きてるな」

龍也はポツリとそう漏らし、再び移動を始める。

暫らく進むと洗面台が見えた。

鏡が見えたので龍也は自分の顔が見える位置まで近付く。

鏡から見える自分の顔は普段と何も変わらない。

だが、自分の顔を見ているともう一人の自分の事を龍也は思い出した。

「そう言えばあいつは、取り敢えずは俺の糧になるって言ってたな」
糧は何だろう。

龍也がそう思っていると、龍也の左手は自然と自分の額に向って動いた。

そして額まで行くと止まり、左手の掌からどす黒い霊力が溢れ出した。

龍也はその事を気にせず左手を勢い良く下ろす。

すると、

「なっ……」

鏡には眼球を黒く、瞳を紫にし、白を基調とした仮面を付けた龍也の姿が映っていた。

仮面のデザインは憤怒した鬼と悪魔を足し合わせて骨にした様なもの。

そして目元の部分から米神に向けて黒い線が走っていた。

「……この仮面は……」

今、自分が付けている仮面に龍也は見覚えがあった。

自分の精神世界に居たもう一人の自分を倒した後、意識を失う前に隙間の中で見た仮面。

それが龍也が付けている仮面の正体だ。

その事を認識すると、龍也は自分の本能が既に理解していた事を理解する。

この仮面の事と、この仮面の出し方を。

その事を理解してから数秒程立つと、

「ッ!?!」

突如、仮面全体に輝が走って崩壊した。

仮面が崩壊すると、龍也の眼球と瞳の色が元に戻っていた。

それと同時に、

「ッ！！ はあ！！ はあ！！ はあはあ……………はあ……………」

途方もない疲労感が龍也を襲った。

龍也は何とか倒れるのを堪えていると何歩か後ろに下がってしまう。

すると壁にぶつかり、壁を背にしながら崩れ落ちてしまう。

ポタポタと床に落ちていく汗を見ながら龍也は思った。

四神の力を解放できる様になった時と同じだと。

「要はまだ、使えこなせていないって訳か……………」

そう言っつて龍也は溜息を吐く。

そして思う。

これは骨が折れるぞと。

何せ、四神の力を解放できる様になった時と比べれば制限時間は圧倒的に短く、
疲労感は圧倒的大きい。

これでは旅の中で使いこなせる様にすると言っつのは難しいかもしれ

ない。

この疲労感の後に雑魚妖怪数体に襲われると言う事態になっただけでも非常にマズイ。

だが、これも自分の力であるならば使いこなせる様にしなければ意味がない。

「……暫らく修行が必要か」

龍也がそう結論付けると、

「ちよ、一寸!! 大丈夫!？」

誰かが慌て気味に近付いて来た。

近付いて来たのは、

「鈴仙……」

鈴仙であった。

「鈴仙じゃないわよ!! 貴方、一体に何したの!？」

「いや、一寸……」

「一寸じゃないわよ。貴方、怪我人だつて自覚あるの?」

「いや、永琳からはもう傷口は殆ど塞がったって……」

「だからと言って、そんなになるまで無茶して言い訳ないですよ。師匠から聞いたけど今日意識を取り戻したばかりなんですよ？」

「ああ、まあ……」

「兎に角、部屋に戻ってゆっくり休む事」

鈴仙の言うとおりだと龍也は思った。

この疲労感は暫らく休まないと抜けはしないだろう。

「分かったよ」

そう言って龍也は立ち上がるが、

「っとー!」

また倒れそうになったので龍也は慌てて壁に手を付ける。

どうやら、膝が震えている様だ。

「はぁ……ほら、肩を貸してあげるから」

そう言って、鈴仙は龍也の肩に手を回す。

「悪いな」

「別にいいわよ。一応、貴方はこの入院患者なんだしね」

そして、龍也は鈴仙に肩を貸して貰いながら自分が寝ていた部屋に向っていた。

「はい、あーん」

永琳がご飯を食べても問題ないと言ってくれたので、龍也は永遠亭で夕食を一緒にさせて貰ったのだ。

で、夕食を食べ様とした時、

「ほら、どうしたの？ 口を開けて」

何故か輝夜が龍也にご飯を食べさせようとしているのだ。

「……………何のマネだ？」

「あら、怪我人である貴方にご飯を優しく食べさせ様とだけただけなのに……………
そんな言い方酷いわ」

輝夜はそう言っつて、ヨヨヨと言いながら泣き崩れる。

「流石にもう騙されないぞ」

「あら、残念」

輝夜はそう言いながら元の表情に戻る。

「なら、正攻法で行くしかないわね」

「正攻法？」

また色仕掛けでもするのかと龍也は思ったが、

「私にある借りを返すと言う事で大人しく私からご飯を食べさせられなさい」

龍也の予想は外れ、輝夜はそんな事を言い出した。

「借り？」

そう言つて龍也は首を傾げる。

輝夜相手に借りなんてあつたかと。

「貴方が何時も着ている服、私が修繕してあげたのよ」

「え？」

それを聞いた龍也は、永琳、鈴仙、てゐの顔を見る。

三人は同時に頷き始めた。

それを見た龍也は信じられないと言つた表情で輝夜を見る。

「何よ、そんな信じられないって顔は？」

「いや、だつてなあ……」

「ただ長く生きるのも退屈だね。永琳が外に出してくれなかったから暇つぶしに」

色々やったのよ。裁縫もその一つ」

龍也は意外だと言つた表情で輝夜を見た。

「で、貴方は受けた借りを返さずにいられるタイプかしら？」

輝夜はそう言つて少々挑発的な目で龍也を見る。

そして、

「分かったよ」

龍也が折れた。

龍也は折れたのと同時に、

「はい、あーん」

「ご飯を食べさせようとする。」

龍也は差し出されたものを食べる。

「どう、美味しい?」

「ああ」

一ヶ月振りに食べたからか、余計に美味しく感じられた。

「にしても、何で俺に構いたがるんだ?」

「ああ、それは簡単。貴方が私に求婚してきた男達と全然違っからよ」

要するに面白半分、興味半分なのだろう。

文字通り、腐る程の数の男達に求婚された輝夜。

そんな男達と違うタイプの龍也は、輝夜の目には新鮮に映っている

のだろう。

腐るほど人数に求婚されるなんて、お姫様みたいだなと龍也が思ったところで、

「……ああ、お姫様だったな。お前」

何かを思い出したかの様に龍也はそう呟いた。

「ええ、お姫様よ。私」

それを聞いた輝夜がそう返した。

修行編 その4

「しかし、綺麗に直ってるな……俺の学ラン」

永遠亭を出て行く日、龍也は修繕が済んだと言つ自分の学ランを受け取って

着替えようと思つて服の状態を見たらそんな感想が漏れた。

てつきりどつかこつかにミスがあると龍也は思っていたのだが、そんなのは

何処にもなかった。

「輝夜に感謝だな」

そう呟いて龍也は着替え始める。

着替え終わった後、龍也は軽く手足を動かす。

「着心地も以前と変わってないな」

そう漏らして手足を動かすのをやめて、永琳の部屋に向つ。

永琳が預かっている自分の持ち物を返してもらつたためだ。

自分が使わせてもらった部屋と永琳の部屋は近いので迷わず向つことができた。

永琳の部屋の前に着くと、龍也は襖をノックする。

すると、

「どござ」

と言う声が聞こえたので龍也は中に入る。

「あら、もう行くの？」

龍也の姿を見た永琳はそう声を掛ける。

「ああ。で、俺の持ち物なんだが……」

「今出すわ」

そう言って永琳は木のケースの中から龍也の持ち物を取り出す。

「財布もボロボロだったから直しておいたわ」

「悪いな」

「まあ、直したのは輝夜だけだね」

それを聞き、少し驚いた後に龍也は財布をポケットに仕舞う。

「傷薬が入ったケースは罫割れ酷かったから、ケースは換えさせてもらったわ」

「わざわざありがとな」

そう言って、魔理沙に作って貰った傷薬をポケットに仕舞う。

「懐中時計に関しては傷一つ付いてなかったわ」

「緋々色金製だからな、それ」

そう言っつて、龍也は懐中時計の鎖をズボンのベルトに括り付け、ポケットに仕舞う。

「あら、緋々色金製だったの。久しく見ていなかったから分からなかったわ」

永琳が少し驚いた様にそう漏らす。

その後、龍也は永遠亭の玄関に向う。

見送りに、永琳、てみ、鈴仙の三人が来てくれた。

「何か悪いな。見送りまで」

「一応貴方はこここの入院患者だったからね」

永琳がそう言う。

「そう言えば輝夜は？」

「姫様ならまだお休み中よ」

そう言っつて鈴仙は少し疲れた表情をする。

「お兄ーさん」

そう言いながらみてゐるが龍也の目の前にやってくる。

そして、

「ここにお賽銭入れるとお兄さんに幸運が訪れるよ」

そう言つて小さめの賽銭箱を出す。

「また貴女は……」

鈴仙はそう言いながら頭を押さえる。

「ま、ここには世話になつたからな」

そう言つて龍也は財布から小銭を数枚取り出して賽銭箱の中に入れる。

「えへへ」

それを見たてゐるは嬉しそうな顔をする。

「それじゃ、世話になつたな」

「ええ、体に気を付けてね」

「今度は怪我しない様にね」

「またね、お兄さん」

「おう」

永琳、鈴仙、てゐの三人から言葉を受けて龍也は永遠亭を出て行った。

数時間後、

「思ったたより早く出れたな」

迷いの竹林をリハビリがてらに歩き、腹が空いたら飛んで脱出し様

と思っていた龍也は
少し拍子抜けした気分になった。

「上手い事ストレートに来れたのかな？」

振り返り、迷いの竹林を見ながら龍也はそう漏らした。

若しかしたら、迷わずに出れたのがてゐるが言っていた幸運なのかもしれない。

「さて……」

冬の肌寒さを感じながら龍也は体を伸ばす。

本来であれば、一旦洞窟に帰って防寒具を取り戻ってから旅を再開する予定で

あったが、それは先送りになりそうである。

何故ならば、あの仮面の力を使いこなせる様に修行しなければなら
ないからだ。

「俺の修行に付き合ってくれそうなのは……やっぱりあいつかな」

そう言って龍也は空中に躍り出て、目的の場所を目指す。

暫らく空を移動していると、目的の場所が見えてくる。

見えてきたのは紅魔館。

そう、龍也は美鈴に修行の相手をして貰おうと思っていたのだ。

門の近くまで来ると龍也は地上に降り、歩いて紅魔館を目指す。

少し歩くと美鈴の姿が見えてきた。

どうやら今回は起きている様である。

「美鈴」

「おや、龍也さんじゃないですか」

龍也が声を掛けた事で美鈴が龍也の存在に気付く。

「どうやら無事に意識を取り戻せた様ですね」

「あれ、何でその事知ってるんだ？」

「それはですね……」

そう言つて美鈴が事情を説明してくれた。

龍也が八雲紫に拉致られ、もう一人の自分を倒して気を失った後、意識を失つて

永遠亭に入院してる事をここに知らせに来たそうだ。

紫曰く、紅魔館に泊まっていた龍也が居なくなった事でレミリアが暴れない様にとの事。

意外とアフターケアはしていたらしい。

「その事で妹様が凄く心配してましたよ」

「あ……なら後で顔でも見せに行くか」

「是非そうしてください。それで、本日のご用件は図書館ですか？」

「いや、美鈴に用があるんだ」

「私にですか？」

そう言って美鈴は首を傾げる。

「ああ、俺の修行に付き合っって欲しい」

「修行ですか？　すると……また誰かへのリベンジですか？」

以前、美鈴に修行に付き合っって貰った時は妖夢へのリベンジだったので美鈴が

そう思うのは無理もない。

「いや、リベンジじゃない」

そう言って龍也は首を振る。

「新しい力を手に入れたから、それを使いこなせる様に修行したいんだ」

「ほう、新しい力ですか……」

そう言つて、美鈴は興味がありそうな顔をする。

「で、どうだ？ 頼めるか？」

「ええ、私は構いませんよ。暇でしたし……それに龍也さんの手に入れた

新しい力と言うのにも興味がありますし」

「そっか、ありがとう」

「いえいえ、これ位で構いませんよ」

美鈴は笑顔でそう言う。

「それでは、早速始めますか？」

「ああ、頼む」

「分かりました」

そう言つて美鈴は龍也から距離を取り、構えを取る。

美鈴が構えを取ると、龍也も構える。

そして少しの静寂が流れた後、

「ハッ！！」

美鈴が龍也に一気に近付いて拳を振るう。

その一撃を、龍也は体を傾ける事で回避する。

その瞬間、

「りゅあー!!」

龍也は美鈴に向けて蹴りを放つ。

その蹴りを美鈴は腕で防御し、

「はあ!!」

気合で弾く。

脚を弾かれた龍也はバランスを崩してしまう。

バランスの崩れた龍也に対し、美鈴は一気に近付いて龍也の懐に入り込み、

「はあ!!」

鉄山靠を叩き込む。

「がつ!?!」

それをまともに受けた龍也は吹き飛ばされて行く。

追い討ちを掛ける為に美鈴が龍也の姿を追うが、

「ッ!?!」

美鈴が追い討ちを掛ける前に龍也が体勢を立て直し、美鈴に近付きながら肘打ちを放って来ていたのだ。

美鈴はその事に驚きながらも慌てて防御の体勢を取る。

「ぐっ!!」

防御には成功したものの、その衝撃で美鈴は吹き飛ばされてしまう。ある程度吹き飛ばされると美鈴は地に足を付け、体勢を立て直す。

そして目の前を見る。

そこには拳を振り被っていた龍也の姿があった。

「くっ!!」

放たれた拳を美鈴は紙一重で避けるのと同時に龍也の腕を弾いて龍也の背後に回り込む。

そして回り込んだ勢いを利用して、龍也の後頭部に蹴りを放つ。

「ッ!!」

龍也はその蹴りを頭を下げる事で回避し、その体勢のまま美鈴に向かって蹴りを放つ。

その蹴りを美鈴は後ろに跳ぶ事で回避する。

その瞬間、龍也は振り返って美鈴に肉迫して拳を放つ。

放たれた拳を美鈴は掌で受け止め、

「はっ！！！」

美鈴も龍也に向けて拳を放つ。

龍也もそれを掌で受け止める。

そして、

「「はあああああああああああああ！！！！！！！！！！」」

龍也と美鈴は霊力と妖力を解放して力比べの状態に持って行く。

暫らくその状態を維持した後、

「「ッ！！！」」

二人は弾かれる様に間合いを取る。

そして息を整えながら、

「いやー、龍也さん相当腕を上げましたね」

美鈴が龍也に向けてそう声を掛ける。

「そいつはどうも」

「さて、体も大分温まった事ですし見せてくださいよ。新しく手に入れた力とやらを」

美鈴にそう言われて龍也は左手を額に持っていていき、

「いいぜ。元々これを使いこなせる様にするためにここに来たんだからな」

左手の掌からどす黒い霊力が溢れ出るのと同時に龍也は左手を一気に振り下ろす。

すると龍也は仮面を付け、黒い眼球、紫の瞳になった姿になる。

「ッ!?!」

龍也の変化を見た美鈴は驚愕する。

それと同時に、

「なっ!?!」

龍也が美鈴の目の前に迫って来ていた。

美鈴は慌てて防御の体勢を取ると、吹き飛ばされたいた。

腕に走る痛みから殴られたのだと美鈴は推察する。

吹き飛ばされながら美鈴は顔を上げる。

美鈴の目には自分に向って飛び蹴りを放っている龍也の姿が映っていた。

体勢を立て直しては間に合わないと判断した美鈴は、今の体勢のまま

カウンターの蹴りを叩き込むとする。

そしてタイミングを合わせて龍也に蹴りを叩き込もうとした瞬間、

「え？」

突如、龍也の付けていた仮面全体に輝が入って仮面が崩壊する。

仮面が崩壊したのと同時に龍也の瞳や眼球の色も元に戻る。

同時に、

「あがつー!!」

美鈴の蹴りが龍也の顎に突き刺さり、吹っ飛んでいく。

突然の事態に美鈴は受身を取る事も忘れて背中から地面に落ちる。

そして立ち上がった美鈴は、

「だ、大丈夫ですか!？」

慌てて龍也に近づく。

「あ、ああ……」

息を切らせ、汗を流しながら龍也はそう答える。

「み、見ての通り……この制限時間が非常に短く……制限時間を過ぎると……」

この様にへトへトになるんだ……」

「確かに、数秒程でしたからね。あの仮面を出していられた時間は」

そう言いながら美鈴は龍也の隣に座る。

「それにしても、随分変わった力を手に入れましたね」

「まあ……な」

「あの仮面を出した時にはパワーやスピードと言った面も大幅に強化されてましたが、

龍也さんの霊力の質も変わってましたね」

「質？」

そう言っつて龍也は首を傾げる。

「ええ、あの仮面を出した瞬間に龍也さんから感じる霊力の量や濃度と言うものが

上がってましたね。それとは別に禍々しさも」

「へえー」

龍也がそう言うど、

「よっ、お二人さん」

上空から声が掛かる。

誰だと思って龍也と美鈴が上空を見る。

すると、上空から何かが降りてくる。

降りて来たのは、

「よっ」

魔理沙であった。

「魔理沙」

龍也がその声を掛けると美鈴が立ち上がり、

「今日と言う今日は通さないぞ!!」

そう言い放ちながら構えを取る。

「おいおい、酷いぜ」

魔理沙はそう言いながら箒から降りる。

「最初は何時もどおり図書館に行こうと思ってたんだが……」

魔理沙はそう言いながら龍也を見て、

「無事に退院できたみたいだな」

そう言う。

「あれ、何でお前も俺が入院してた事知ってるんだ？」

そう言って龍也は首を傾げる。

「ああ、前にここに来た時に咲夜から聞いたんだ」

「へえー」

「一応私も見舞いに行ったんだが、お前寝てたからなあ」

「そうだったのか……何か悪かったな」

「いっていいって」

そう言いながら魔理沙は手を振る。

そして、

「あ、そうだ。宴会やろうぜ宴会」

魔理沙が良い事を思いついたと言わんばかりの表情でそう言う。

「宴会？」

「そ。龍也の退院祝いつて事で紅魔館でさ」

魔理沙がそう言うのと、

「宴会ね……それならもう準備を始めた方がいいかしら？」

そう言いながら咲夜が現れる。

「よっ、咲夜」

「十分元気そうみたいね」

咲夜は龍也を見ながらそう言う。

「と言うか、勝手にここで宴会の企画をしてもいいんですか？」

美鈴が咲夜のそう尋ねる。

美鈴がそう尋ねるのは当然である。

何せ、ここの主の許可を取らないで勝手に企画しているのだから。

「問題ないと思うわ。お嬢様は龍也の事を気に入ってるから、龍也のための宴会だと」

言えば直に許可が取れるわ」

「そこなくっちゃ！！」

魔理沙はそう言いながら指を鳴らす。

「てか、ただ単に騒ぎたいだけじゃないのか？」

「それは言いつこなしだぜ」

そう言いながら魔理沙は箒に跨って空に上がる。

「それじゃ、私は色々と声を掛けて来るぜ」

そう言っつて、魔理沙はどこかに飛んで行った。

そんな魔理沙の姿を見送った後、

「あ、そうそう」

咲夜は龍也に声を掛ける。

「日が暮れ始めたら妹様に会いに行つてあげてね。妹様、貴方の事を心配してたから」

「分かった」

龍也がそう返事をすると、咲夜が消える。

宴会の準備をしに行ったのだろう。

そう思いながら、龍也は空をポケットと見ながら早く体力が回復しないかと思つた。

その後、龍也の体力が戻りしだい美鈴に修行に付き合っ
て貰い、日が暮れ始めると

龍也はフランドールに会いに行った。

龍也の顔を見るや否やフランドールが思いつきり龍也に飛び付いて
来た為、龍也が

壁にめり込むと言う事態も起こったが。

そしてフランドールと色々と話した後、龍也がフランドールと一緒
に外に出ると

宴会が始まっていた。

龍也が外に出た後、それに気付いた者達が龍也に近づく。

皆、龍也と少し話した後に自分達が思うがままに騒ぎ始めたが。

まあ、分かりきってた事である。

だが、久しぶりにこうやって騒ぐと言う事が龍也には楽しく感じられた。

そんな感じで一日が過ぎていった。

放浪編 その39

「はああああああああああ!!!」

眼球が黒く、瞳の色を紫にし、仮面を付けた龍也が美鈴に突撃しながら拳を放つ。

美鈴は放たれた拳を体を反らす事で紙一重で避け、

「はあ!!!」

回し蹴りを龍也に向けて放つ。

龍也は周り蹴りが当たる直前に超速歩法を使ってその場から消える事で攻撃を回避する。

そして美鈴が蹴りを振り切った瞬間に龍也は再びその場に現れ、

「だあ!!!」

美鈴に向けて拳を放つ。

美鈴は両腕を交差させる事で防御するが、

「くっ!!!」

後ろに吹き飛ばされてしまう。

龍也は追い討ちを掛ける為に吹き飛ばされた美鈴を追う。

美鈴は龍也に追いつかれる前に大地に足を着けて体勢を立て直し、

「破！！」

目の前に迫って来た龍也に向けて正拳突きを放つ。

龍也は放たれた拳が当たる前に美鈴の腕を掴んで自分の体を持ち上げ、

「りゃあ！！」

掴んでいる美鈴の腕を支点にしながら体を回転させ、美鈴の後頭部に向けて蹴りを放つ。

「危なっ！！」

美鈴は頭を下げる事で蹴り回避し、

「はあ！！」

掴まれている腕から気を解放して龍也を弾き飛ばす。

弾き飛ばされた龍也は体を回転させながら着地し、大地を駆けて美鈴に肉迫する。

美鈴も同じ様に大地を駆ける。

そして二人は同時に拳を振り被り、拳を放つ。

互いの放った拳が相手に当たると思われた。

その瞬間、龍也の付けている仮面全体に輝が入り、

「ッ!？」

仮面が崩壊した。

仮面が崩壊したのと同時に龍也の眼球と瞳の色が元に戻る。

それと同時に龍也は力が抜け落ちたかのように地面に座り込む。

「はあ……はあはあ……はあ……」

龍也は汗を流し、息を切らしながらも何とか息を整えようとする。

すると、

「お疲れ様」

そう言っつて咲夜が龍也にタオルを手渡す。

「ありがとう」

そう礼を言っつて龍也はタオルを受け取る。

「はい、美鈴も」

「ありがとうございます、咲夜さん」

美鈴も同じ様に礼を言ってタオルを受け取る。

「それで、どうだった？」

汗を拭き終わった後、龍也は咲夜にそう尋ねる。

こうやって龍也が美鈴に修行に付き合っただけの時、咲夜が差し入れを持って来てくれた事があった。

その時に龍也は咲夜に仮面を出していただける時間を計って貰う様に頼んだ。

そう時間を取られる訳ではなかったので、咲夜はそれを了承してくれた。

それから、咲夜がいる時は咲夜が龍也の仮面を出していただける時間を計ってくれる様になったのだ。

「きっかり13秒よ」

「13秒か……」

伸びてるんだか伸びていないんだか龍也にはよく分からなかった。

「でもこの一ヶ月で結構伸びましたよね」

そう言つて、美鈴が龍也にその声を掛ける。

「最初の頃は確か……3秒くらいでしたよね？」

「正確には2・8秒だけどね」

咲夜がそう訂正する。

「まあ、私は龍也さんのその力は使えないので分かりませんがちゃんと伸びてる様です
し良いんじゃないですかね？ それに仮面が崩壊した後の疲労感も
少なくなってる様で
すからちゃんと成長してますよ」

美鈴の言つとおりだなと龍也は思った。

一ヶ月前だつたら仮面が崩壊したら疲労感で殆ど動けないと言つた
感じであつた。

だが、今では逃げるくらいの体力は残っている。

確かに、美鈴の言つとおり成長はしている。

その事を思いながら、

「……そろそろ旅を再開しようかな」

龍也はそう呟いた。

仮面を出していられる時間が13秒なら旅をしながら仮面の保持時

間を延ばすのも
可能だ。

道中で妖怪に襲われた時、仮面を出して妖怪を倒し仮面を消す。

妖怪の数にもよるが、13秒もあればおそらく大丈夫であろう。

「おや、もう行かれるんですか？」

「ああ。それにこれ以上俺の修行に付き合わせるのも悪い気がする
しな」

「私の方もいい修行になっているのでお相子だと思っただけですけどね」

「と言うより、貴方は一箇所に留まり続けられるタイプじゃないし
ね。まあ、
落ち着きがないとも言えるけど」

そう言って咲夜は龍也を見る。

「ははは……」

「まあまあ、男の子ならそれ位の方がいいですって」

美鈴がそうフォローを掛ける。

「ま、そう言う事ならおにぎりでも作って上げるわ」

「何か悪いな」

「別にいいわよ、これ位」

咲夜はそう言っただけ消える。

時間を止めて移動したのだろう。

龍也はそう思った。

咲夜が消えた後は体力を回復させながら美鈴と雑談して過ごす。

そして龍也の体力が回復し切り、そろそろ行くかどうかと考えていると咲夜が現れて

龍也におにぎりを渡してくれた。

龍也は礼を言い、レミリア達に宜しく言って置いてくれと頼んで紅魔館を後にした。

「おにぎりの具って言ったらやっぱりおかかだよな」

龍也はそう言いながら咲夜に作って貰ったおにぎりを食べる。

龍也が今いる場所は冥界。

紅魔館を出た後、無名の丘にある洞窟に帰って防寒具を取ってから冥界に来たのだ。

龍也が冥界に来た理由は白玉楼に行くためだ。

正確に言つと白玉楼内にある西行妖を見るためだ。

龍也が取り込んだ西行妖の力。

その事で少し思つ所があった龍也はまた西行妖を見て置こうと思つたのだ。

「……よし」

おにぎりを食べ終わった龍也が立ち上がり足を進めて行く。

冥界は幽霊などがしか居ないせいaka地上より静かで寒い。

とは言っても寒くて動けなくなる程ではない。

これもアリスに作って貰った防寒具の性能がいいからであろうか。

そんな事を思いながら龍也が歩いていると、

「あ、龍也だ。ヤッホー」

その声を掛けられる。

龍也は声を掛けられた方へ顔を向ける。

そこに居たのは

「メルラン」

「ヤッホー」

岩の上に座っていたメルランであった。

「何やってるんだ、こんな所で」

そう言いながら龍也はメルランに近付く。

「今度人里でライブをやるからその練習よ。で、今は休憩中。龍也は？」

「俺は白玉楼に行くところ」

「ふーん。ね、ね」

「ん？」

「今少し暇してたのよ。だから少しお話しよ」

メルランそう言われて龍也は少し考える。

別段、急いでいる訳ではなかったの

「ああ、いいぞ」

そう言つて龍也はメルランの隣に腰を落ち着かせる。

「やった」

そして、メルランと雑談をしていく。

それから暫らくすると、

「あ、いたいた」

「メルラン見つけー」

ルナサとリリカが現れる。

「あ、姉さんにリリカ」

「よっ」

龍也とメルランがルナサとリリカの存在に気付く。

「あら、龍也も一緒なの」

「やつほ」

ルナサとリリカも龍也の存在に気付く。

「そう言えば、今度人里でライブするんだって？」

「うん。まだ正確な日は決まっていけないけどね」

「一応、予定は近日中よ」

「それで冥界で練習か」

「ええ、ここは静かだから練習には最適なの」

「それにしても……」

そう言いながらリリカは龍也を見る。

「ん？ 何だ？」

「いやー、龍也もよく何度も冥界に来れるなと思って。ここに来るまでに襲われたりしなかったの？」

「んー……ここに来るまでに妖怪やら幽霊やらには襲われたりはしたな」

普通に撃退したけどなと龍也は続けた。

それを聞いてプリズムリバー三姉妹は驚いた表情になったが、

「……ああ、龍也の強さならそこんじょそこらの妖怪やら悪霊やら怨霊やらに

襲われても何の問題もないか」

直に龍也の強さを思い出して普段の表情に戻る。

「龍也だけじゃなく、前に来た巫女やら魔法使いやらメイドも強かったけどね」

それを聞いて、龍也は冬が長かった異変の事を思い出す。

確かあの異変は春雪異変と言う名前だったなと、以前阿求から聞いた事を龍也は思い出す。

「あ、そうだ」

龍也が少し前の事を思い出していると、リリカが良い事を思いついたと言う表情をする。

「ねえねえ、一曲聴いてかない？」

リリカはそう龍也に提案する。

「一曲？」

「そうそう。やっぱり人がいるとリハーサルもビシッってなるからね」

リリカにそう言われて龍也は少し考える。

今までも何度かプリズムリバー三姉妹の曲を聴いて来たが、どれもこれも素晴らしい
ものであったと龍也は記憶している。

なので、

「ああ、聴かせて貰うよ」

聴いて行く事にした。

「オツケー！！ それじゃ、プリズムリバー楽団のライブが始まるよー！！」

リリカの号令を合図に、三姉妹はそれぞれの楽器を準備して演奏を始めた。

「しっかし、良い曲だったな」

長い石段を上がりながら、龍也は先程の演奏を思い出す。

「ライブが始まるまで人里に居ようかな？」

そんな事を考えながら石段を上っていると、

「おっ」

白玉楼の門の前に着いていた。

龍也は門を開け、中に入って行く。

そして白玉楼の庭を歩いて行くと、庭掃除をしている妖夢を発見する。

なので、

「妖夢」

龍也は声を掛ける事にした。

声を掛けられた妖夢はビクツとなった慌てて振り返る。

「あ、何だ。龍也さんじゃないですか」

龍也の顔を見て妖夢はホツとした様な表情になる。

「それで、何か御用ですか？」

「いや、ちょっと遊びに来ただけなんだが」

「あ、そうでしたか。でしたらお茶とお茶菓子をお持ちしますね」

「別にそこまで気を使わなくても……」

「いえいえ、気にしないでください」

そう言つて妖夢は白玉楼内に入つて行く。

その様子を見ながら龍也は何か悪い事をしたかなと思ひながら、白玉楼の庭を歩いて行く。

少し歩くと巨大な枯れ木を見つける。

その枯れ木が西行妖だ。

西行妖の前に来た龍也はじっと西行妖を見つめる。

「……………別に何も感じないな」

そう呟きながら龍也は自分の掌を見つめ、握ったり開いたりを繰り返す。

その後、西行妖に手を付ける。

これも、何の反応も示さない。

西行妖から手を離し、再び西行妖を見つめる。

「力を使いこなす切欠になるかと思ったけど……………そう上手くはいかないか」

そう呟き、龍也は溜息を吐く。

龍也が取り込んだ西行妖の力は全て龍也の支配下にあるのか、取り込んだ事で別の力に

なったのか、はたまた西行妖の力全てを取り込んでしまったのか。

それは龍也にも分からない。

そう思っていると、

「いや、下手したら力が暴走したかもしれないからこれで良かったのかもな」

その可能性に思い至った。

若しかしたら、結構危ない事をしていたのかもしれない。

そう思いながら頬を指で搔いていると、

「いらっしやい」

そう言いながら幽々子が現れた。

「ああ、お邪魔してるよ」

龍也はそう言くと、幽々子は龍也の隣に立って西行妖を見つめる。

「龍也もこれが満開になっているのを見たいの？」

「いや、そう言う訳じゃ……」

「あら、残念。それなら龍也にも協力して貰ってまた春度を集め様と考えたのに……」

「おい……」

龍也はそう言いながら幽々子をジト目で見る。

「ふふ、冗談よ冗談」

幽々子はそう言って、扇子を口元で隠す。

その様子を見た龍也は溜息を一つ吐いて、再び西行妖に視線を戻す。

そして、幽々子と一緒に西行妖を見続ける。

妖夢が呼びに来るまで。

放浪編 その40

「はあ!!」

「たあ!!」

白玉楼の庭先。

そこで龍也と妖夢が戦っていた。

龍也は炎の剣を。

妖夢は楼観剣を振るいながら。

そして二人は激突し、鏝迫り合いの形になる。

ある程度その状態を維持すると、二人は弾かれた様に間合いを取る。

その後、二人は息を整えながら

「随分……腕を上げましたね、龍也さん」

「お前もな、妖夢」

そんな会話をする。

そもそも何故二人が戦っているのか。

答えは簡単。

ただの手合わせだ。

朝、早くに目が覚めた龍也が白玉楼内を歩いていると、庭先で素振りをしている妖夢を
発見した。

そこで挨拶を交わし、雑談をしていると妖夢の方から手合わせをしようと言う申し出があった。

断る理由がなかったし、久しぶりに妖夢と戦ってみたいと思っていた龍也はそれを
了承。

そして現在に至る。

「そう言えば聞きましたよ、龍也さん。何でも新しい力を手に入れたとか」

互いに隙を伺っていると、妖夢がそんな事を言い出す。

「……誰から聞いたんだ、それ？」

「この前、紅魔館で開かれた龍也さんの全快祝いの宴会で」

それを聞き、漏らしたのは美鈴かなと龍也は思った。

まあ、知られても困ることではないが。

「見たいのか？」

「はい」

妖夢にそう言われ、少し考えた後、

「……いいぜ。見たいなら見せてやるよ」

龍也はそう言いながら左手の炎の剣を消し、左手を額の辺りまで持つていく。

「ただ、まだ完全に扱え切れてなくてな。制限時間が13秒しかないんだ」

「分かりました」

妖夢はそう言つて、楼観剣を構え直す。

それを見た龍也は左手からどす黒い靈力を溢れ出させる。

そして、左手を一気に振り下ろす。

すると、龍也は紅い瞳はそのままに、眼球を黒く、仮面を付けた姿になる。

「ッ!？」

突然に変化に妖夢は驚くのと同時に気圧された。

龍也から感じる禍々しい靈力に。

「いくぜ」

そう言いながら龍也は左手から炎の剣を再び生み出し、右手の炎の剣と合わせて一本の炎の大剣にし、大地を駆けて妖夢に向う。

それを見た妖夢は気を取り直し、楼観剣を構えながら大地を駆ける。

そして、

「はあ!!」

「たあ!!」

互いが放った炎の大剣と楼観剣が激突する。

その次の瞬間、

「なっ!?!」

妖夢が吹き飛んでいた。

完全に力負けしたと妖夢が思っていると、龍也は再び妖夢に迫っていた。

追い討ち掛けるつもりだと思った妖夢は、白楼剣を抜いて龍也が炎の大剣を叩き込むと思われる場所に持って行く。

その瞬間に龍也が放った炎の大剣が白楼剣に叩き込まれる。

それにより、妖夢はまた吹き飛ばされてしまう。

だが、それが妖夢の狙いであった。

今のまま体勢を立て直しても間に合わないと思った妖夢は、吹き飛ばされる事で

間合いを取る事にしたのだ。

妖夢は白楼剣を鞘に収め、体勢を立て直して大地に足を着ける。

そして顔を上げると、妖夢に向って突っ込んでくる龍也の姿が見て取れた。

予想通りと思っただ妖夢は、

「はあああああああああああああ！！！！」

妖力を解放して龍也に突っ込む。

そして互いの得物を振り被り、激突させる。

そのまま鏢迫り合いの状態を維持していると、

「……………あ」

突如、龍也の付けている仮面全体に輝が入って崩壊する。

仮面が崩壊すると龍也の眼球が元の色に戻る。

それと同時に龍也の力も抜け、龍也は妖夢に吹き飛ばされて地面を転がっていく。

その様子を妖夢は啞然とした様子で見ている。

「だ、大丈夫ですか!？」

慌てて龍也に近付く。

「あ、ああ」

そう言いながら龍也は体を起こし、息を整える。

その瞳の色は何時の間にか黒に戻っていた。

「とまあ、この様に13秒過ぎると仮面が勝手に壊れて俺自身もヘトヘトになるんだ」

「成程……完全に扱い切れていないと言うのはそう言う意味でしたか」

妖夢はそう言って楼観剣を鞘に収める。

「それにしても随分変わった力を手に入れましたね」

妖夢はそう言って龍也に手を差し出す。

「ああ、まあな」

龍也はそう言っつて妖夢の手を掴んで立ち上がる。

「そう言えば、仮面を付けた俺を見て何か感じた事はあったか？」

「龍也さんから感じる霊力の量と密度が増し、禍々しくなったと言
う事ぐらい
ですかね」

「そうか……」

それを聞き、この力は西行妖とはもう別物になっているのではない
かと龍也は
考えた。

「では、私は朝食の準備をして来ますね。龍也さんは居間で待つて
いてくださいね」

「なんか悪いな、俺までご馳走になって」

「構いませんよ。それに龍也さんはお客様なんですから気にしない
てください」

そう言っつて妖夢は白玉楼内に入り、台所に向っつて言った。

それを見送っつた後、龍也も白玉楼内に入っつて居間に向っつた。

「さて、人里に着いたはいいがどうしたものかね」

白玉楼で朝食を頂いた後、龍也は人里に来ていた。

プリズムリバー三姉妹のライブを聴くためだ。

とは言っても、ルナサからは近日中と聞いていただけで正確な日は分からない。

最も、正確な日も決まっていないのだが。

「ライブが始まるまで阿求の屋敷に泊めて貰うかな」

そう呟きながら龍也は阿求の屋敷を目指す。

阿求の屋敷は人里で一番大きいのでそれを探せば直に見つかるであろう。

そう考えながら歩いていると、

「お」

阿求の姿を発見した。

龍也は運が良いなと思いながら阿求に声を掛ける。

「おーい、阿求」

その声を掛けながら龍也は阿求に近付く。

「龍也さん」

阿求の方も龍也の存在に気付く。

「あのさ、実は頼みがあるんだが」

「何ですか？」

そう言って阿求は首を傾げる。

「ああ、実は……」

そう言って龍也は阿求に事情を説明する。

「で、構わないか？」

「ええ、構いませんよ」

阿求からは了承が取れる。

龍也がやったと思っていると、

「私の方からも龍也さんに二つ程お願いがあるのですが……」

阿求がそう良いながら上目遣いで龍也を見つめる。

「ん、何だ？ 俺に出来る事があれば何でも聞くぞ」

「ありがとうございます。一つ目は龍也さんにインタビューしたいのですが……」

「インタビュー？」

「はい、幻想郷縁起に龍也さんの事を載せたいので」

それを聞いて、そんな約束をしてたなと龍也は思い出す。

「いいぞ、そう言う約束だったしな」

「あ、覚えていてくださっただんですね」

そう言って阿求は嬉しそうな顔をする。

「ああ。それで二つ目は？」

「私を永遠亭に連れて行ってくれませんか？」

「永遠亭……それも幻想郷縁起関連か？」

「はい。永夜異変が終ってから永遠亭とそこに住まう住人が明らかになりましたので、
そこの方達も記載したいと考えてまして」

「ああ、俺に其処までのボディガード……用心棒を？」

「はい。それと龍也さんは永遠亭の方達と面識があると慧音先生からお聞きしたので」

それで交渉もスムーズに行くと阿求は考えたのだろう。

「分かった、いいよ」

「ありがとうございます」

龍也から了承が取れると阿求は頭を下げる。

「今から向うでいいのか？」

「はい」

阿求がそう返事をした後、龍也は阿求を背負って人里を飛び出した。

迷いの竹林の入り口前に降り立つと

「以前、幻想郷縁起に迷いの竹林の事を記載するために慧音先生と一緒にここに入った

事が在ったのですが、永遠亭には行けなかったんですよ」

阿求がそう龍也に言う。

「聞いた処、意図的に隠してた言った言ってたな」

何時だったか、永琳に聞いた事を思い出しながら龍也はそう言う。

「さて……」

そう呟きながら、龍也は迷いの竹林を見つめる。

普通に入ったら二人揃って迷子になるだろう。

となれば永琳や輝夜の霊力、てみや鈴仙の妖力を探しながら進めば良い。

だが、できるかなと言う不安が龍也にはあった。

戦闘時の距離なら兎も角、離れている相手の霊力や妖力などを感じる事ができるで

あろうかと言う不安が。

とは言っても、永遠亭まで連れて行くと言った以上、やらねばなるまい。

龍也はそう決心し、目を瞑って集中し様とすると、

「あら、龍也に……阿求？」

そんな声を掛けられる。

龍也は誰だと思いつながら声を聞こえた方へ顔を向ける。

そこに居たのは、

「妹紅」

「妹紅さん」

妹紅であつた。

「どうしたんだい？　こんな所で」

「ああ、実は……」

そして龍也は事情を話し始める。

「成程ね」

事情を聞いて妹紅は納得した。

「あ、そうだ。妹紅、永遠亭に案内してくれよ」

「私が？」

妹紅はそう言って、少し嫌そうな顔をする。

「妹紅が案内してくれた方が早く着くだろ」

「うーん……」

龍也にそう言われ、妹紅は少し考えた後、

「分かったわ。案内してあげる」

妹紅はそう言った。

「ありがとう」

「ありがとうございます」

「別にいいわ。私から逸れない様にね」

そう言って迷いの竹林の中に入っていく妹紅を龍也達は追いかける。

「はい、着いたわよ」

妹紅に案内されて、龍也達は永遠亭の前に着く。

「それじゃ、私はこれで」

そう言つて、妹紅は竹林の中へ消えて行つた。

「あれ、妹紅さんはご一緒しないんですか？」

妹紅が永遠亭には寄らずに帰つた事に疑問を覚えた阿求は龍也にそう尋ねる。

「ああ、妹紅はこの主である輝夜と相当仲が悪いらしいからな」

「へえー……そうだったんですか」

そう言つて、阿求は少し驚いた表情になる。

「あ、龍也さん。もう降ろしてくれていいですよ」

「あ、そうだったな」

龍也はそう言つて、阿求を背中から降ろす。

そして、永遠亭の扉をノックする。

少しすると、

「どちら様？」

そんな声とともに扉が開かれる。

扉を開いたのは、

「永琳」

永琳であった。

「龍也と……そちらの方は？」

「初めまして。私は稗田家当主の稗田阿求と申します」

阿求はそう言っ頭を下げる。

「稗田……ああ、あの人里で一番大きなお屋敷の……」

稗田と言う単語を聞いて、永琳は思い出したかの様にそう呟く。

「それで、何の御用かしら？」

「実はですね……」

そう言っ阿求が説明する。

「ふむ、幻想郷縁起ね……」

幻想郷縁起の事を聞き、永琳は少し考えた後、

「そのインタビューに答えさせて貰うわ」

「ありがとうございます」

そう言っつて阿求は頭を下げる。

「ここでは何だから中に上がつて。お茶とお茶菓子を用意させるわ」

永琳にそう言われ、龍也と阿求は永遠亭の中に入って行く。

永遠亭でのインタビューが終わり、阿求の屋敷に戻った龍也と阿求。

そこで龍也は阿求のインタビューを受けていた。

そして、

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

インタビューが終わった。

「龍也さんのお陰で思っていたよりもずっと早くに幻想郷縁起を出版できそうです」

「そうなのか？」

「はい。特に冥界関連の方が思っていたよりも早くの纏められたのが幸いでした」

そう言って、阿求はあそこが一番苦戦すると思っていたんですけどねと続ける。

「それに人里の周辺なら兎も角、それ以上の距離となると結構な数の護衛の方や慧音

先生がいないと行けませんからね。そう上手く私とみなさんの都合が付いたりはいしませんからね」

「そう言う時に俺が来たりしたと？」

「はい。私って運が良かったりするんですかね？」

「かもな」

そして、龍也と阿求は眠くなるまで雑談をしながら過ごした。

放浪編 その41

「やっぱ凄いな、あいつ等のライブ」

プリズムリバー楽団のライブが終わった後、龍也はそう漏らす。

阿求の屋敷に泊まって数日。

やっとライブをする日になったのでこうして龍也は見に来たのだ。

何度聞いても凄いと云う感想しか出てこなかった。

ライブが終わり、ライブを見ていた人が解散し始める。

龍也もその流れに乗る様に移動し、プリズムリバー三姉妹に会いに行く事にした。

ライブ会場の裏の方に行くと、三姉妹が揃っていた。

「よっ」

龍也がその声を掛けると、

「あ、龍也」

三姉妹は龍也の存在に気付く。

「見に来てくれたんだ」

「ああ」

「どうだったどうだった？」

「凄いつて感想しか出てこないよ」

「ありがとう。凝った感想よりもそう言うストレートな感想の方が私はいいかな」

そして、龍也はプリズムリバー三姉妹と雑談をしていく。

「さて、そろそろ帰ろうか」

話が一段落すると、ルナサがそう切り出す。

「そう言えば霧の湖方面にある廃洋館に住んでるんだっけ？」

「そうそう」

「結構奥地で見付け難いけどね」

「まあ、見た事はないな」

そう言いながら、龍也は霧の湖方面を思い出す。

紅魔館はよく目立つので見付け易いが、廃洋館は見た事がなかった。

「近くに寄ったら寄ってって」

「その時は歓迎するよ」

「ま、居るかは分からないけどね」

三者二様のそう答える。

「その時はよろしくな」

そう言った後、お互い一言一言交わして解散する。

それから人里歩きながら再び旅を再開しようとして龍也が考えていると、

「龍也兄ちゃん」

そんな声を掛けられる。

声を掛けられた方へ振り返ると、

「お前等か」

子ども達がいた。

その中には何時ぞや時に龍也が助けた子ども達もいた。

「どうしたんだ？ 揃いも揃って」

「あのね、皆で雪合戦をする事になったの。それで龍也お兄ちゃんを見つけたから

龍也お兄ちゃんも誘おうと思って」

「雪合戦？」

何やら懐かしい感じを龍也は受けた。

少し感慨に耽っていると、

「ほら、龍也兄ちゃんもいこー!」

子ども達に手を引っ張られる。

「お、おい」

そんな事を言っても子ども達は止まらない。

子ども達のパワーに逆らえぬまま、龍也はまいっかと思いつながら子ども達に連れられて行く。

暫らく進むと、広場の様な場所に出る。

そこでチーム分けになるのだが、

「龍也兄ちゃんはこっちー!」

「違う、こっちー!」

「……うん、まあこうなる事は予想できた」

両チームのリーダーが龍也の両腕を引っ張り合って奪い合いをしていた。

子どもの力で引っ張られても龍也はどろって事はないが、ずっとこのままの状態にいる訳にはいかないのです、

「ジャンケンで勝った方のチームに俺は入るから……な」

龍也はそう提案した。

そして、

「「ジャンケン……」」

雪合戦前の一勝負が

「「ポンー!!」」

開始された。

「ふうー……子ども達は元気だったな」

雪合戦が終わり、子ども達と別れた後、龍也は蕎麦屋で蕎麦を食べながらそう漏らす。

「まっ、子どもが元気なのは良い事だ」

そう呟き、蕎麦の汁を飲んでいると、

「龍也兄ちゃん!!」

「ぶふう!?!」

子ども達が蕎麦屋に突撃して来た。

飲んでいた汁が気管に入りかけたので龍也は咽る。

「ゲホ……ゲホゲホ!! 何だどうした?」

「大変なんだよ!! 龍也兄ちゃん!!」

そう言って、子ども達は事情を話し始める。

「何、鬼ごっこして遊んでいたら一人いなくなった？」

子ども達は言うには雪合戦が終わった後、別の場所で鬼ごっこをしていたら一人の子どもがいなくなったと言っただ。

「いなくなったのは誰だ？」

「あのね……」

居なくなった子どもの風貌を聞き、雪合戦の時に見たあの好奇心旺盛そうな腕白坊主かと龍也は思った。

「まさか……」

その子どもの特徴や性格を思い出し、龍也は一つの可能性に思い至った。

人里から一人で出たと言う可能性を。

好奇心旺盛な子どもならやりかねない。

「お前等、慧音先生がどこにいるか分かるか？」

「慧音先生なら……寺子屋にいると思うよ」

「なら、慧音先生にその事を伝えて来い。俺は人里の外を探す」

そう言って龍也は立ち上がり、

「勘定、ここに置いておくぞ」

テーブルの上に小銭を置き、龍也は店の外に出て飛び上がり、人里の外を目指す。

龍也が人里を出て上空から子どもを捜しているど、

「おっ、」

何やら白い熊の様な妖怪達が子どもを追っかけているのを発見した。

「あれだな……」

龍也はそう呟いて、超速歩法を使って一気に近付く。

そして妖怪が振り下ろした腕が子どもに当たる瞬間、

「……セーフ」

龍也が子どもを横から掻っ攫った。

龍也の左手に抱えられた子どもは何が起こった分からずに目をパチクリさせる。

そして龍也の顔を見て、

「りゅ、龍也兄ーちゃん」

泣きそうな顔になる。

「ったく、好奇心旺盛なのは結構な事だが……」

龍也そう言いながら体を屈めて後ろから攻撃した妖怪の一撃を回避する。

「一人で人里の外に出るのはまだまだ早すぎるぞ」

冬なんだから腹を空かせている妖怪が沢山いるしなと続ける。

「さーて……どうしたものかね」

周囲の様子を見ながら龍也はそう呟く。

何時の間にか妖怪達に囲まれたこの状況。

妖怪達は皆が皆、唸り声を出して涎を垂らしている。

龍也も子どもも食う気であろう。

龍也一人ならば何の問題もないが、今は戦えない普通の子どもを抱えている。

抱えている子どもに衝撃が伝わるような攻撃は避けた方がよいだろう。

仮面を出すなどの行為は論外である。

龍也から発せられる禍々しい靈力に、抱えている子どもが耐えられないとは思えないからだ。

となると、使える手は限られてくる。

龍也がそう思っていると、

「じゅめんね、龍也兄ちゃん。僕のせいでこんな事に……」

妖怪に囲まれたという状況下からか、龍也が抱えている子どもが諦

めた様に
そう呟く。

「……これに懲りたら、もう勝手に人里から抜け出さないと誓えるか？」

「うん……」

「人里に帰ったら慧音先生の説教を受けると誓えるか？」

「うん……」

「なら、この状況を何とかしてやるよ」

「え……？」

子どものそんな言葉を聞きながら龍也は自身の力を変える。

白虎の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が黒から翠に変化する。

同時に、目の前にいた妖怪の腕が龍也に迫る。

龍也はそれを後ろに跳んで回避し、右手首を軽く上げる。

すると龍也に攻撃を仕掛けて来た妖怪の居る場所に小型の竜巻が発生し、妖怪はそれに
吞まれてどこかに吹っ飛んで行った。

その次の瞬間、

「おっと」

龍也の背後にいた妖怪が腕を振るって来たので屈んで回避。

その次の瞬間、別の位置に居た妖怪が口から妖力でできた弾を放って来たので、

龍也は飛び上がって回避する。

そして体の位置を反転し、地面に右手を向ける。

「はあ！！」

すると、龍也が居た場所に竜巻が発生してその周囲にいる妖怪が全て吹き飛ばされる。

妖怪が全て吹き飛ばされると龍也は竜巻を消し、体を反転して着地する。

「ほれ、もう大丈夫だぞ」

龍也がそう言うと、

「う、うわああああああああああああん！！！！！！！」

龍也が抱えた子どもが大声で泣き始めた。

緊張の糸が切れたのだろう。

「あーよしよし、もう大丈夫だから」

龍也はそう言って子どもを慰める。

子どもが泣きやんでから人里に変える事にした。

人里に帰って龍也達は慧音の所に行った。

すると、雷が落ちた。

慧音の。

説教している慧音の姿は龍也でさえ気圧された程だ。

説教を受けている子どもはさぞ恐ろしい事であろう。

勿論、子どもの事を想つての事であろうが。

どれ位たったか。

慧音の説教が終つた頃には日が暮れ、子どもの母親が迎えに来ていた。

母親は慧音と龍也に涙混じりに礼を言いながら頭を下げ、子どもに拳骨を入れてから帰って行った。

二人の姿を見送り一息吐くと、

「何はともあれ、ありがとう龍也君」

そう言つて慧音は龍也に頭を下げる。

「いや、気にしないでいいですよ。俺も偶々でしたし」

「それでもだ。君のお陰で子ども一人の命が助かつたんだ」

「まあ……そう言つ事でしたら」

そう言いながら龍也は頬を指で搔く。

「それで、龍也君はこれからどするんだい？」

「どうしますかね？ もう日も暮れてしまいましたし……」

そう言いながら、龍也は窓から外を見る。

もう日が暮れている。

これから旅を再開と言つ気分には龍也はなれなかった。

龍也はどうするか悩んでいると、

「お礼代わりと言つ訳ではないが、私の家に泊まりにくるか？」

慧音がそう提案する。

「え、いいんですか？」

「ああ、君さえよければだが」

慧音にそう言われ、龍也は少し考える。

すると、空腹感を感じた。

お腹も減ってきたので慧音の提案を受ける事にした。

「それじゃ、今日はお世話になります」

龍也はそう言つて慧音に頭を下げる。

そして、本日は慧音の家にお世話になる事にした。

放浪編 その42

「うーん……」

龍也は目を開き、上半身を起して周囲の様子を探る。

少しボケーンとした後、

「……ああ、慧音先生の家に泊まったんだっけか」

慧音の家に泊まった事を思い出す。

その後、腕を伸ばしたり腰を回したりしたりする。

それが終わると布団から抜け出し、

「ふあ……ああ……」

体を伸ばす。

ある程度眠気が取れると、借りていた部屋を抜け出して居間に移動する。

すると、

「ああ、おはよう」

そう朝の挨拶を掛けられる。

聞こえて来た場所は台所の方からだ。

声の主を慧音だなど龍也は思いながら、

「おはようございます」

そう挨拶を返す。

「もう少ししたら朝ご飯ができるから、向こうの方で顔を洗ってくるといい」

「あ、何かすみません。朝食まで用意して貰って」

「何、それぐらい構わないさ」

「ありがとうございます。取り合えず顔を洗ってきますね」

そう言つて龍也は洗面所の方へ移動する。

そこへ行くと、桶の中に水が入っていたのでそれを使って龍也は顔を洗つ。

顔を洗い終わり、居間に戻ると卓袱台の上にご飯が並べられていた。

白いご飯に味噌汁に焼き魚に漬物と言つた感じの和食だ。

「さあ、座ってくれ。食べよう」

「はい」

慧音に促される様にして龍也は卓袱台の前に座る。

「いただきます」

そして、二人は朝食を食べ始めた。

「ご馳走様でした」

食べ終わった後、龍也がそつ口にする。

「お粗末様。男の子だから沢山食べると思っただけで普段よりも多めに作っておいて良かったよ」

「どうやら、慧音は龍也のために普段よりも沢山作ってくれた様だ。」

「何か、すみません……」

「何、気にする事はないさ」

慧音はそう言っただけで立ち上がり、食器を持って台所へ移動しようとする。

「あ、洗い物ぐらいでしたら俺が……」

「いや、構わないよ。暫らくは居間で寛いでいるといい」

そう言っただけで、慧音は台所に消えて行った。

お客様の立場である龍也に手伝わせる気はないと言っただけである。

色々と気を使わせて悪い気がするなと龍也は思いながら、居間でボケーッとする。

すると、畳の上に”文々。新聞”があったので、それを手に取る。

龍也はそれを読みながら時間を潰す。

暫らくすると、

「お待ちせ」

慧音が台所から戻ってくる。

戻ってきた慧音の手には小さめの包みがあった。

「はい」

そう言っつて、慧音は持っていた包みを龍也に渡す。

「これは？」

「おにぎりを作ってみたんだ。良かったら、お腹が空いた時にでも食べてくれ」

「何か……すみません。色々と気を使わせてしまつて……」

「君が気にする事じゃないさ。私が好きでやってる事だ」

慧音は申し訳なさそうな顔をしている龍也に対して、そう言つ。

その言葉を受け取つた龍也は、

「何はともあれ、ありがとうございます。後で頂かせて貰います」

素直に礼を言う事にした。

「うん、どういたしまして」

礼を言われた事に、慧音はそう返す。

「さて、私はそろそろ寺子屋に向つが……龍也君、君はどうする？」

「なら、俺もそろそろ行きますね」

「分かった」

そして、防寒具を着た龍也と慧音の二人は一緒に家を出る。

二人は、雑談をしながら人里の中を歩いて行く。

暫らくすると

「さて、寺子屋の道はあつちだが、里の出口はあつちだな」

分かれ道に出る。

「昨日今日と、ありがとございました」

龍也はそう言つて頭を下げる。

「何、私の方も楽しかったよ」

それを聞き、頭を上げた龍也は

「それでは、また」

そう言つ。

「うん、また。旅の道中、気を付けて」

慧音はそう返し、寺子屋へ向って行く。

それを見送った後、龍也は里の出口へ行き、人里を離れる。

「すっぺ」

人里から離れ、腹が減ってきた龍也は近くにあった岩の上に座り込んで慧音から貰ったおにぎりを食べる。

食べた時に漏れた感想がすっぱいである。

どうやら、おにぎりの具は梅干の様である。

そしてこの梅干、どうも種がない様だ。

おそらく、旅をしている時にそう都合よくごみ捨て場がないと思っ
た慧音が気を
効かせて取ってくれたのだろう。

「すっぱいものは疲労回復にいいと聞くしな」

この辺も慧音が気を使ってくれたのだろう。

ありがたいと思いつながらおにぎりを食べていく。

「ご馳走様」

全部食べ終わった龍也は包みをしまつて立ち上がり、岩の上から降
りて再び足を
進めていく。

暫らく進むと、女性の後ろ姿が見えた。

龍也はその女性を見た事があった。

「レティ？」

龍也がその声を掛けられると、その女性は振り返る。

「貴方は……龍也じゃない」

「どうやら、レティで当たってた様だ。」

「久しぶりだな」

「ええ、久しぶりね」

「そう言いながら二人は近付いて行く。」

「確か、冬以外はどっかに隠れているんだっけ？」

「ええ、そうよ。冬以外は調子がでなかったり調子が悪かったりするからね」

「で、冬の今は？」

「絶好調」

「そう言つて、レティは笑顔を作る。」

それから少し雑談をした後、

「折角だし、再開を祝して私と弾幕ごっこをしない？」

レティが急にそんな事を提案してくる。

龍也は少し考えた後、

「いいぞ」

その提案を受け入れる。

そして二人は上空に上がり、

「いくわよ」

「じつ」

弾幕ごっこが始まる。

まずはお互い様子見の意味合いを籠めながら弾幕を放つ。

そして、当たりそうなものを避けていく。

「あら、前に私と弾幕ごっこした時より随分と腕を上げたじゃない」

「そいつはどうも」

そんな会話を交わしながら弾幕を放ちあう。

時間が経つにつれ、二人が放つ弾幕の量、密度が増えていく。

ここまでくると二人は弾幕を完全に避けきれなくなり、弾幕を掠り始めていく。

だが、それが決定打になる事はなかった。

弾幕が掠る事はあれど、直撃する事がなかったからだ。

「ふーむ……これじゃ罅が開かないわね」

レティは言いながら一旦弾幕を放つのをやめる。

そしてスペルカードを取り出し、

「寒符『コールドスナップ』」

スペルカードを発動する。

すると、レティの周囲に目に見える程の冷気が現れ、

「ッ!」

そこから弾幕が龍也に向って行く。

龍也は驚きながらそれを避け、レティに狙いを定めるが

「何!？」

また冷気が現れてレティの姿を隠してしまった。

そして、また冷気の中から弾幕が放たれる。

龍也は弾幕を放てずにその場から離れる。

それを何度か繰り返すと、

「ッ!？」

龍也は自分がレティの放った弾幕に囲まれて気付く。

この状況下で下手に動いてその辺を漂っている弾幕に当たって動きを鈍らせば、その瞬間に大量の弾幕を叩き込まれてしまうだろう。

だが、そうは言ってもレティの方からも弾幕は放たれて来る。

「っつ」

龍也は放たれた弾幕を、何とか避ける。

そして龍也は自分から弾幕を放つのをやめ、回避だけに専念する事にした。

この状況下で回避行動以外の事を考えれば命取りになると考えたからだ。

「落ち着け……落ち着けよ……」

龍也はそう呟きながら弾幕と弾幕の間に体を滑り込ませて回避していく。

必ず、どこかに隙ができると思っながら。

だが、暫らくすると

「ッー!!」

龍也はレティが放った弾幕の直撃を受けかけてしまう。

別にミスをしたとか、集中力を切らしてしまったと言つ訳ではない。レティが生み出しているであろう冷気が原因だ。

その冷気が周辺の気温を下げていく。

アリスに作ってもらった防寒具を着ている龍也でも寒さを感じる程に。

そのお陰で、龍也は少しずつ動きを鈍らせていつてしまっているのだ。

龍也もスペルカードを使おうと考えたが、今の状況下ではスペルカードを発動する前に弾幕を受けてしまうであろう。

こんな事なら早めに使っておけばよかったと龍也は思った。

そして、

「ッ！！」

龍也に弾幕が直撃する。

その影響で龍也は体勢を崩してしまふ。

このままでは、弾幕をまとめて受けてしまふ。

龍也はそう思った瞬間、

「…………あれ？」

弾幕が消えた。

どう言う事だと龍也が思っているよ、

「あーあ、時間切れか」

レティがそんな事を漏らす。

「時間切れ？」

「スペルカードには、発動してられる時間があるでしょ」

それを聞いて、

「……………ああ」

龍也は思い出した。

今まで、スペルカードの時間切れが来る前に相手を倒したりしていたので龍也はその事をすっかり失念していたのだ。

「しかし、今回は危なかった」

龍也はそう言って息を吐く。

今回はルールに助けられた結果になった。

その後、龍也とレティは地上に降り、雑談をして過ごした。

放浪編 その43

「ふっ！！」

瞳の色を蒼くした龍也が妖怪の隣を抜けるのと同時に二本の水の剣で妖怪を斬り裂く。

龍也が斬り裂いた妖怪は、蜥蜴を二足歩行させた様な妖怪だ。

何故この妖怪と龍也が戦っているかと言うと、何時もの様に幻想郷のどこかを歩いて
いると、襲われたのだ。

冬のなのに蜥蜴かよと龍也は思ったが、ここは幻想郷だ。

冬の季節に適応した蜥蜴がいても何の不思議もない。

それは兎も角、襲われたので龍也は迎撃に出たのだ。

「っと、後何体だ？」

そう言いながら龍也は振り返って残っている妖怪の数を確認する。

最初は数十体以上いたが、気付けば残り三体になっていた。

生き残った妖怪は逃げようとせずに戦おうとしている。

その様子を見た龍也は、

「残り三体か……なら!!」

そう言っつて左手の水の剣を消し、

「はああああああああああああああああ!!!!!!」

力を解放する。

すると龍也の髪は蒼く染まっていき、蒼い瞳は輝き始める。

力の解放が完了すると龍也は左手を額の辺りまで持って行き、左手からどす黒い霊力を溢れ出させる。

そして、左手を一気に振り下ろす。

すると龍也の顔面に仮面が現れ、龍也の眼球の色が黒くなる。

龍也の姿の変化、及び龍也から感じる霊力が変化した事を認識した三体の妖怪が一瞬動きを止めてしまう。

その一瞬の間に、

「ッッッ!?!」「」

三体の妖怪は斬り裂かれていた。

何が起こったのかわからないまま三体の妖怪が倒れていく。

その様子を見ながら龍也は左手をまた額の辺りに持っていく。

すると、仮面がどす黒い靈力に変化し、

「ふう………」

風に流される様に消えていった。

仮面が消えた龍也の眼球の色は元の白に戻っていた。

「はあ………はあ………はあ………」

龍也は息を整えながら右手に持っている水の剣を消し、力も消す。

すると、龍也の髪と瞳の色が元の黒色に戻る。

「制限時間を過ぎる前に仮面を消せばへトへトの状態になる事はないが………それでも疲労感はあるな」

息を整え終わった後、龍也はそう漏らす。

これは美鈴に仮面の保持時間を延ばすための修行に付き合ってた時に分かった事だ。

修行に付き合ってくれた美鈴には感謝である。

「あれから少しは経ったから、俺の仮面の保持時間は最低でも13秒………」

最も、あれからと言ったがそこまで時間が経っている訳ではないので、延びていても
精々1秒プラスされているかいないかであろう。

「やっぱり一時間前後は欲しいよな……」

そう呟き、龍也は溜息を吐く。

仮面の保持時間を一時間前後にするまで一体どれだけ掛かるであろう。

「ま、気長にやるしかないか」

そう言って、龍也は再び足を進めて行く。

「ん？」

気付くと、龍也は雪だるまに囲まれている事に気付いた。

「雪だるま型の妖怪か？」

龍也はそう呟きながら周囲を警戒する。

暫らく待っても雪だるまが襲って来る事はなかった。

「……若しかして……ただの雪だるまか？」

龍也はそう呟いて警戒を解く。

自分の勘違いに一寸した恥ずかしさを龍也が感じていると、

「あ、龍也」

背後の方からそんな声が聞こえる。

龍也は声が聞こえた方へ振り返る。

龍也に声を掛けて来た者は

「チルノ」

チルノであった。

「よう、元気そうだな」

龍也はそう挨拶をしながらチルノに近付くと、ある物に気付く。

龍也が気付いたのはチルノが転がしている雪玉だ。

その雪玉を見た龍也は、

「なあ、ここら一带にある雪だるまってお前が作ったのか？」

チルノにそう尋ねる。

尋ねられたチルノは、

「ふふん、流石はあたいのライバル。よく気付いたわね」

そう言つて胸を張る。

「大きな雪だるまを作つてる最中なの」

「ん？ そう言つわりには、そこまで大きい雪だるまはないよな」

龍也はそう言いながらもう一度、周囲を見渡して見る。

雪だるまの大きさは一般的な物よりも僅かに大きいぐらいだ。

龍也がそう思っていると、

「あたい一人の力じゃあれぐらいの大きさのしか作れないの……」

そう言っつてチルノはシュンとなる。

「あ、そうだ!!」

だが、直に笑顔になって顔を上げる。

そして、

「ねえ、龍也!!」

「ん？」

「雪だるま作るの手伝って!!」

龍也に手伝ってくれと頼んだ。

「え、俺に？」

龍也は自分を指さしてチルノにそう訪ねる。

「うん、そう!!」

チルノはいい笑顔でそう答える。

龍也は少し考え、

「まいつか」

そんな結論に達した。

別段、急いで何かをしなければならぬと言つ事もない。

久々に雪だるまを作るのもいいだろう。

「じゃ、手伝つよ」

「ありがとう、龍也」

そして、龍也とチルノの二人は雪だるまを作り始める。

龍也とチルノが雪だるまを作り始めて数時間後、

「いやー………思っでよりもでかいのが出来たな………」

龍也はそう呟きながら雪玉が二つ乗っかっている物体を見る。

大きさは龍也の数倍程ある。

思いのほか、雪だるま作りに熱中していた様だ。

「さて、まずは目とボタンを作るか」

そう呟き、龍也は自身の力を変える。

玄武の力へと。

すると、龍也の瞳の色が黒から茶へと変る。

力の変換が完了すると龍也は飛び上がり、雪だるまの頭の部分に移動する。

そして両手から土の塊を生み出し、それぞれを目に見える様に雪の中に埋め込んでいく。

それが終わると今度は高度を下げて同じ様に土の塊を生み出し、それ

をボタンに見える
様に雪だるまの胴体に埋め込んでいく。

「さて、次は帽子と鼻と腕だな」

着地した龍也がそう呟くと、

「それはあたいがやる!!」

チルノはそう言って飛び上がり、氷を生み出す。

そしてそれをバケツの形にし、雪だるまの頭に乗つける。

その後同じ要領で氷の鼻、腕を作って雪だるまに付けていく。

「おおー」

チルノがそれぞれのパーツを付け終わると、見事な雪だるまが完成していた。

結構時間を掛けて作ったからか、完成した物を見ると何やら感慨深いものを

龍也は感じた。

ここまで大きな雪だるまを作ったのは生まれて初めてなので尚更だ。

暫らくの間、龍也とチルノは作った雪だるまを見つめていた。

月が天に上った時間帯。

「そろそろ眠れそうな場所を探すべきかな？」

龍也はそんな事を呟きながら足を進める。

玄武の力を使って簡易的な家を作るのならどこでも出来る事だが、
警沢を言うので

あれば、体を伸ばせてゴロゴロと転がれるくらいのスペースが欲しいところだ。

「ま、眠気がどうし様もないとこまで来たらそんな警沢は望めない

けどな」

そう言って龍也は溜息を吐く。

すると、

「お」

龍也は屋台を発見した。

大方、ミステリアの屋台であろう。

折角見つけたのだ。

龍也は熱いのを飲んで体を温め様と思いながら屋台に近付き、

「やってるかい？」

暖簾を潜って中に入る。

「いらっしゃい」

ミステリアはそう言いながら振り返る。

「あら、龍也じゃない」

そしてやって来た客が龍也だと気付く。

「熱いの一杯と……焼き八目鰻を何本か」

龍也はそう注文を言いながら椅子に座る。

「はいよ」

ミスティアはそう言いながら注文されたものを準備していく。

「最近の景気はどうだい？」

「順調よ」

ミスティアは笑顔でそう答える。

「最近では固定客もできたしね」

ミスティアはそう言いながら八目鰻を焼いていく。

「へえー……」

「はい、熱燗」

「お、サンキュ」

そう言っつて龍也は飲み始める。

飲みながらミスティアと雑談をしていると、

「焼き八目鰻お待ち」

八目鰻が焼き上がる。

「待ってました」

龍也はそう言って焼き八目鰻を食べる。

「相変わらず美味しいな、これ」

「当然よ」

そう言ってミスティアは胸を張る。

「焼き鳥よりもずっとずっと美味しいわ!」

ミスティアはそう言いながら拳を作る。

「はは……」

そう言えば焼き鳥撲滅を掲げているんだっ たなと龍也が思い出しているよ、

「おお、やってるね」

客がやってくる。

誰だろうと思って龍也は声が聞こえた方へ顔を向ける。

そこに居たのは、

「萃香」

萃香であった。

「ありゃ、龍也じゃん」

萃香も龍也の存在に気付く。

「あ、お酒沢山ね」

「はいよ」

注文を終ると、萃香は龍也に向き直る。

そして萃香は龍也を見る。

「ん？ どうかしたか？」

「いや、前に私と戦った時よりも随分強くなったねと思ってね」

龍也の顔を見ていた萃香がそんな事を言う。

「それに聞いたよ」

「何をだ？」

「何でも、新しい力を手に入れたって」

そう言いながら、萃香は何時の間にか出されていた酒を飲む。

「何時の間にか結構噂になってるのな」

龍也はそう言いながら焼き八目鰻を頬張る。

「その事、誰から聞いたんだ？」

「ん？ 紫からだよ」

「紫か……」

「うん。紫が冬眠する前にね」

紫なら知っててもおかしくはないだろう。

何せ、自分の身に起こった事を知っていたのだ。

何故かは分からないが。

だが、お陰で龍也はもう一人の龍也に喰われ、乗っ取られずに済んだのだ。

おまけに自分の怪我を見て直接永遠亭に送ってくれた。

色々と胡散臭い存在であるが、今度会ったら礼の一つでも言っておくべきだろうと

龍也が思っていると、

「それは兎も角、龍也と再戦する日も近いかな？」

萃香がそう言いながら龍也を見る。

「そうは言っても、俺はまだその新しい力を使いこなせてはいないからな。再戦はまだ」

先になりそうだ」

「それは残念」

萃香はそう言って溜息を吐く。

「萃香……」

「ん？」

「次……戦う時は俺が勝つぜ。今度こそ、納得できる形でな」

以前、萃香が起した異変で戦った時は萃香に勝ちを譲られた様に龍也は感じていた。

だから、あの異変の後の宴会で龍也は萃香に再戦を申し入れ、勝つと宣言した。

そして今、あの時と同じ様に龍也は萃香にそう宣言した。

あの時と同じ様な宣言を聞いた後、

「……分かってはいたけど、やっぱり龍也はいい男だ」

萃香はそう言って嬉しそうな顔をする。

そして萃香は龍也の目を見る。

あの時、自分に勝つと宣言した時と同じ目だと萃香は思った。

そして、

「私も楽しみにしてるよ。龍也と再び戦う時を」

萃香はそう言いながら杯を二つ取り出し、その中に酒を注ぐ。

「はい」

そう言いながら、萃香は杯の一つを龍也に差し出す。

「ん？」

「いいからいいから、取って取って」

「あ、ああ」

龍也は萃香に言われるがままに杯を受け取る。

「ほら、乾杯しよ。乾杯」

萃香のその発言を聞き、龍也は萃香のしたい事が分かった。

そして龍也は杯を持って、

「乾杯」

萃香の持っている杯とぶつけた後、杯の中に入っている酒を飲む。

その後、朝までドンチャン騒ぎになった。

放浪編 その44

「どこだ……どこ？」

吹雪の真っ只中、龍也は立ち止まってそう呟く。

「こんなに吹雪くとは……こんな事ならどこかで大人しくしてればよかった」

そう言っつて、龍也は溜息を吐く。

今日も、龍也は何時もの様に幻想郷の何処かを歩いていた。

そしたら雪が降って来た。

それを見た龍也は雪が降って来たなぐらいにしか思わず、そのまま足を進めて行く。

暫らくすると降ってくる雪の量は増え、風も強くなってきた。

そして気付いた時には、ほんの少し先も見えなぐらいの吹雪になっていた。

「はぁ……まいったなこりゃ……」

そう言っつてまた溜息を吐くと、

「ッ……」

龍也は何かを感じて前方へ跳ぶ。

その瞬間に龍也の居た場所に何かが叩き込まれる。

龍也は空中で回転し、振り返りながら着地して襲撃者の姿を確認し様とする。

だが、吹雪のせいで完全に確認できた訳ではなかった。

分かった事は龍也よりも大きい体格の妖怪と言う事だけだ。

それと唸り声が聞こえた。

そして一つ、また一つと気配が増えるのを感じた。

どうやら、何時の間にやら腹を空かせた妖怪の群れの中に入っていた様だ。

「はあ……吹雪の時に歩くと碌な目に合わないな」

龍也はそう呟いて自身の力を変える。

朱雀の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が黒から紅に変化する。

その後、両手から炎の剣を生み出す。

そして構えを取って周囲を警戒していく。

すると、

「ッ！！！」

龍也は何かを感じて上半身を倒す。

その瞬間に龍也の上半身があつた場所に何かを通る。

恐らく妖怪の腕であろう。

そう思った龍也は振り向きざまに炎の剣を振るう。

だが、

「外した！？」

炎の剣は妖怪に当たる事はなかった。

妖怪の姿を完全に視認できない龍也に対し、妖怪の方は龍也の姿を視認できる様だ。

どうやら地の利処か天候までも妖怪に味方している様だ。

「どっしする……」

龍也がどう状況を打開すべきか考えていると、

「ぐわー！！」

背中に何かがあたつて爆発する。

無数にいる妖怪のうちの一体が妖力でできた弾を発射したのだろう
と思いながら

龍也は振り返る。

だが、妖力の弾を放って来た妖怪の姿は確認できなかった。

「くそ……」

視認出来なかった事に龍也が舌打ちをすると、

「ッ!!」

龍也の目の前に、腕らしきものが通過する。

龍也は腕らしきものが来た場所に顔を向ける。

距離が近かったお陰で妖怪の姿を確認できた。

白い体毛をし、牙を剥き出しにした妖怪であった。

龍也が妖怪の姿を確認できたのと同時に、妖怪は腕を振るって龍也
に接近戦を仕掛けて
来た。

龍也はその攻撃を後ろに下がりながら回避していく。

そして隙を見つけて跳び上がり、

「りゃあ!!」

蹴りを放つ。

足の先から炎の放つと言うおまけ付きで。

だが、その妖怪は大きな体格に見合わない身軽さで後ろに跳んで龍也の攻撃を回避する。

「図体に似合わない身軽さだな……」

龍也はそう呟きながら周囲の状況を探る。

すると、あつちこつちから殺気を感じた。

どうやら、何時の間にか完全に囲まれてしまった様だ。

このままでは全方位から一斉攻撃を受けてしまつかもしれない。

だが、妖怪達を纏めて倒すチャンスでもある。

このまま戦っていてもジリ貧になると思った龍也はそのチャンスに掛ける事にした。

その為に、

「はああああああああああああああああああ……！！！！！！」

最大の一撃を放てる様に力を解放する。

すると、龍也の髪が黒から紅に染まっていき、紅い瞳が輝き出し、炎の剣がより
紅くなる。

その後、左手の炎の剣を消して左手を額の辺りまで持っていく。

そして、龍也はその状態のまま様子を見る。

暫らくすると周囲の殺気が膨れ上がるのを感じた。

その瞬間、龍也は左手からどす黒い靈力を溢れ出させて左手を一気に振り下ろす。

すると龍也は眼球を黒くし、仮面を付けた状態になり、

「だあああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

自分を中心に巨大な火柱を発生させる。

龍也に攻撃しようとして突撃した妖怪は皆火柱に呑み込まれてしまう。

少しすると龍也は発生させている火柱を消し、左手を再び額の辺りまで持っていく。

すると、龍也の付けている仮面がどす黒い靈力になり、

「ふう………」

風に流れる様にして消えていった。

仮面がなくなると、龍也の眼球の色も元の色に戻る。

力を消して一息入れようと龍也が思った瞬間、

「ッ!？」

先の攻撃で生き残った妖怪が龍也の顔面目掛けて腕を突き出して来た。

龍也は慌てて顔を傾け、右手に持っている炎の剣を突き出す。

龍也の頬から血が流れるのと同時に炎の剣が妖怪の体を貫く。

そして龍也が妖怪の体から炎の剣を引き抜くと、妖怪の体は燃え上がり、灰となる。

それを見届けた後、龍也は周囲の状況を確認する。

「……………何の気配もなし……………か」

そう呟いて龍也は力を消す。

すると龍也は右手の持っていた炎の剣が消え、髪と瞳の色が元の黒色に戻る。

「油断したつもりはなかったけど……………どこかで油断してたのか……………」

龍也はそう言いながら頬から流れている血を手の甲で拭う。

手の甲に付いた血を見た後、

「行くか……」

再び足を進めた。

妖怪達に襲われて数時間経ったが、

「一向に止む気配がないな……」

吹雪は止まなかった。

「歩いてればそのうち止むと思ったんだがなあ……………」

そう呟き、龍也は溜息を吐く。

そして再び足を進めて行くと、

「ん？」

龍也は何かを見つける。

何だろうと思って龍也は近づいて来る。

近付いて行くにつれ、見えた物の全貌が明らかになっていく。

どうやら建物の様だ。

「ん？ 看板があるな」

看板を見つけたので、龍也は読み上げる事にする。

「何々……………香……………霖……………堂……………ここ香霖堂か」

看板を読み上げる事で、この建物が香霖堂である事に龍也は気付く。

「丁度いい。吹雪が止むまで中に入れて貰おう」

そう言って、龍也は香霖堂の中に入る。

暖を焚いているからか、中は暖かい。

「霖之助さん、居ますか？」

その声を掛けながら龍也は奥へ進んで行く。

「ああ、龍也君か。いらっしやい」

カウンターの方で本を読んでいた霖之助がその声を掛ける。

「吹雪が止むまで、ここで休ませて貰ってもいいですか？」

「うん、構わないよ」

霖之助はそう言ってカウンターに本を置き、龍也の方に目を向ける。

「おや、怪我をしてるようだね」

「あ、はい。さっき妖怪に襲われたのでその時に」

「なら良い物があるよ」

「良い物ですか？」

龍也がそう尋ねると、霖之助はカウンターの下の方から何かを取り出す。

「これだよ」

そう言って取り出した物をカウンターの上に置く。

カウンターの上に置かれたのは何かの箱の様だ。

それを見た龍也は、

「絆創膏ですか？」

霖之助にそう尋ねる。

「やはり知っていたか」

どうやら絆創膏が入っている箱であっていた様だ。

龍也は懐かしいなと思いつながら箱の中から一番大きい絆創膏を取り出して頬に貼る。

「そうだ、龍也君に聞きたい事があつたんだ」

「俺に聞きたい事ですか？」

「うん。構わないかい？」

「ええ、構いませんよ」

「それは良かった。少し待っていてくれ」

霖之助はそう言って、店の奥に移動する。

少しすると、

「これを見てくれないか？」

そう言っつて、手に持っている物を龍也に見せる。

「これは……デジカメですか？」

「その通りだよ」

そう言っつて、霖之助は嬉しそうな顔をする。

「君の言っつとおり、これはデジタルカメラだよ」

「で、これがどうかしたんですか？」

「カメラと言っつわりには天狗が持っているカメラと違っつて使い方がよく

分からなくてね」

「それで、俺なら分かるかもしれないと？」

「うん、そうなんだ」

「取り合えず貸してください」

そう言っつて、龍也は霖之助からデジカメを受け取る。

「バッテリーが残っつてれば点くと思っつんですが……」

そう言っつながら龍也はデジカメの電源ボタンを押す。

すると、

「あ、点いた」

デジカメが起動した。

「おおー!!」

霖之助はカウンターから身を乗り出してデジカメを見る。

「それで、どうやって写真を撮るんだい!？」

「一寸待ってください。まずバッテリーの残量を確認しますから」

そうやって龍也はデジカメを操作してバッテリーの残量を確認する。

「あー……残り20%か。一通りの説明はできそうだな」

そうやって、龍也はデジカメを構える。

「撮りますんで。何かポーズを取って下さい」

龍也がそう言うと、

「こ、これでいいかい?」

霖之助はポーズを取る。

「それでいいですよ。はい、チーズ」

龍也はそう言ってシャッターを切る。

「撮れました」

「その辺りは天狗が持っているカメラと変わらないんだね」

そう言っつて、霖之助は少し拍子抜けした感じになる。

「あ、今撮ったの見ます？」

「そんな事ができるのかい!？」

霖之助はそう言いながら再びカウンターから身を乗り出す。

「はい」

龍也はデジカメを操作して、今撮った物を霖之助に見せる。

「おお、これは凄い……」

霖之助は興味深そうに今撮ったものが映っているデジカメを見つめる。

「それで、どうやったら写真を出せるんだい？」

「写真ですか？」

霖之助にそう言われ、龍也は少し考える。

「そのデジカメのタイプですとパソコンとプリンタが必要ですね。」

ほら、前に言った
電化製品ですよ」

「電化製品……」

「電気の問題……解決できました？」

「いいや」

「なら無理ですね」

「そっか」

霖之助はガツクリと肩を落とした。

「まあまあ、このデジカメで他にできる事を教えますから」

「本当かい!？」

龍也がそう言うと、霖之助は急に元気になる。

「え、ええ。まずは……」

吹雪が止むまで龍也はデジカメの使い方を見せ、霖之助に教える事になった。

放浪編 その45

「春ですよー!!」

そんな声上空から聞こえて来たので、龍也は上空を見る。

龍也の目にはリリーホワイトがどこかに飛んで行く様子が映った。

「そうか……もう春か」

そう呟き、周囲の様子を見る。

もう雪など殆ど残ってはいなかった。

そして、龍也は体を伸ばす。

「んー……」

一通り伸ばし終わった後、元の体勢に戻る。

「そろそろ防寒具を仕舞いに戻るか……」

龍也はそう言いながら今着ている防寒具を見る。

暑いと言う事はないが、寒いと言う事もない。

何とも微妙な感じだ。

「どうすっかな……」

龍也は顎に手を当てて考える。

今仕舞いに戻るべきか、それとも暑いと感じてから仕舞いに戻るべきか。

暫らく考え、

「……よし、戻ろう」

そう言う結論に達した。

思い立ったら何とやらである。

龍也は空中に躍り出て、無名の丘にある洞窟まですっ飛んでいく。

「到着つと」

無名の丘に着いた龍也は着地し、歩いて洞窟を目指す。

「この辺も大分雪が溶けたな……」

龍也はそう呟きながら周囲の様子を見ていく。

そして少しすると、

「ここだここだ」

洞窟前に辿り付く。

後は中に入って防寒具を仕舞うだけ。

序にお札に霊力を補充しよう。

龍也はそう考えていると、

「お、いたいた」

後ろの方からそんな声が掛かる。

龍也は誰だろうと思いつきながら振り返る。

すると、魔理沙が近付いて来るのが見て取れた。

魔理沙は龍也の近くにまでくると、

「よっ」と

箒から飛び降りて着地する。

そして、

「よっ」

片手を上げて龍也に挨拶する。

「よっ」

龍也も同じ様に片手を上げて挨拶を返す。

「で、俺に何か用か？」

「ああ、宴会のお誘いに来たんだ」

魔理沙が笑顔でそう言う。

「宴会？」

「ああ。博麗神社に咲いてる桜を見ながらな」

それを聞き、龍也は花見兼宴会だなと思った。

「いやー、運が良いぜ。龍也はどこにいるか分からなかったから、まず龍也が住んでるここに来たら大当たりだったぜ」

もし、自分がここに戻ってこなければ魔理沙に余計な手間を掛けさせたかもしれないと龍也は思った。

「お陰で幻想郷中を飛び回らなくて済んだぜ」

そう言っつて魔理沙は嬉しそうな顔をする。

「で、参加するよな？」

「ああ、参加させて貰うよ」

龍也は宴会に参加する事にした。

「で、何時開始するんだ？」

「今日の昼頃だぜ」

それを聞き、龍也は懐中時計をポケットから取り出して時間を確認する。

「後、二時間ぐらいか」

そう言いながら懐中時計を仕舞う。

「行く時には酒とか持って行った方がいいか？」

「ああ、頼むぜ」

魔理沙はそう言って箒に跨る。

「あ、そうそう。神社に来るまで誰か見たら誘って置いてくれ」

そう言っつて、魔理沙はどこかにすっ飛んで行った。

その姿を見送った後、龍也は洞窟の中に入って防寒具をハンガーに掛け、お札に霊力を注ぎ込んで洞窟の中から出てくる。

「酒は……人里で酒樽を買っていけばいいか」

買う物を決め、龍也は飛び上がって人里を目指す。

「さつてと、酒屋酒屋……」

人里に着いた龍也は酒屋を探しながら歩いて行く。

その中で龍也は人だかりを発見する。

「何かあるのか？」

そう呟き、龍也は人だかりの方へ移動する。

そして、背伸びをして何かがあるのか見てみる。

龍也の目に映ったものは、

「アリス」

アリスであった。

何をしているのだろうかと思っていると、人形劇をしていた。

以前、人形劇で金を稼いでいると言っていた事を思い出しながら龍

也は人形劇を
見る。

アリスが操っているであろう人形はまるで生きている様に動いている。

アリスにそれ位の技量がある事は龍也も知っていたが、こつやって改めて見ると

「……凄え」

思わずそんな言葉が漏れた。

見惚れる様にアリスの人形劇を見ていると、周りから拍手の音が聞こえて来た。

何時の間にか終わっていた様だ。

そして、人だかりが無くなったのを見計らって、

「アリス」

龍也はアリスに声を掛ける。

「あら、龍也」

声を掛けられ、アリスは龍也の存在に気付く。

「凄かったな、さっきの人形劇」

「あら、見てたの。知り合いに見られるのって少し恥ずかしいわね」

そう言っつて、アリスは少し気恥ずかしそうにする。

だが、直に表情を戻し

「それは兎も角、何か御用かしら？」

龍也にそう尋ねる。

「ああ、この後暇か？」

「ええ、特にやらねばならない事はないわ」

「ならば、宴会に参加しないか？」

「宴会？」

「ああ。博麗神社での桜を見ながらの宴会」

「桜か……そう言えば、もうそんな季節だったわね」

アリスはそう言いながら空を見上げる。

「で、どうだ？ 参加するか？」

「そうね……参加させて貰うわ」

アリスは少し考えた後、宴会に参加することにした。

「それで、このまま博麗神社に向うのかしら？」

「いや、酒屋で酒樽を買ってから向うつもりだ」

「そう……なら、それに私も付き合おう」

「分かった。なら行こうぜ」

龍也のその言葉を合図に二人は酒屋へと向った。

酒屋で酒樽を買った龍也とアリスの二人は博麗神社へと向う。

二人が博麗神社の来た時には、もう殆どの者が集まっていた。

龍也達が適当に挨拶をし、少しすると宴会が始まった。

皆が皆、思い思いに騒いでいる。

これも当たり前の光景だ。

そう思いながら龍也は桜を見ながら酒を飲む。

すると、何やらキョロキョロしているリグルを発見した。

気になった龍也は、リグルに声を掛ける事にした。

「リグル」

「ひゃあ!？」

龍也に声を掛けられたリグルはビクツとなって振り返る。

「あ、何だ龍也か」

龍也の姿を見てホッとす。

「どっしたんだ？」

「宴会に参加したのはいいんだけど……あの怖いお姉さんは来てるの?」

「怖いお姉さん……幽香の事か」

どうやら、すっかり苦手意識が付いてしまった様だ。

そう思いながら龍也は周囲を見る。

「どうやら来てないみたいだな」

龍也がそう言うと、リグルはホッとした表情になる。

「随分苦手意識が付いた様だな」

「だってだってー」

リグルはそう言いながら龍也に色々愚痴る。

それを適当に聞き、一緒に酒を飲む。

それから暫らくすると、龍也は適当に宴会場内を歩き回る。

すると、神社の中で一番見事とも言える桜を発見する。

龍也はその桜を見ながら酒を飲み、摘みを食べる。

それを何度か繰り返した後、

「ん？」

摘みが無くなっている事に気付く。

まだ残っていた筈だがと思いながら、龍也は皿に目を向ける。

そこに在ったのは、

「……………隙間？」

隙間であった。

おまけにその隙間から手が出ていた。

そして、

「このお摘み、中々美味しいわね」

「うおわあ!？」

紫が龍也の真横に現れた。

「あら、そんなに驚いてくれて嬉しいわ」

龍也の真横に現れた紫はそんな事を言い出す。

「あなた、普通に登場できないのか？」

「あら、それじゃ面白くないでしょ」

そう言って、紫はウインクをする。

「はあ……………」

龍也は溜息を着いた後、紫に向き直る。

「ありがとな」

「あら、何がかしら」

「冬の時の事だよ。あんたのお陰で助かった。だから、ありがとう」

そう言って、龍也は頭を下げる。

「そうね……そこまで言われたのならば、どういたしましてと返して置きましょう」

紫はそう返しながら酒を飲む。

その後、龍也は紫と雑談をしながら酒を飲んでいく。

結局、宴会は昼夜ぶつ通しで続けられたと言う。

花映塚編 その1

朝、玄武の力で作った簡易型の家の中で目が覚めた龍也は、体を伸ばしながら
少しずつ頭を覚醒させていく。

ある程度頭が覚醒すると、扉を開けて外に出る。

外に出て、外の景色を見た龍也は

「なん……だと……」

行き成りそんな言葉を漏らした。

何故ならば、龍也の目の前には無数の花が咲いていたからだ。

ただ無数の花が咲いているだけであるならば、龍也も驚きはしなかつただろう。

ならば何故驚いたのか。

それは咲いてある花に問題があった。

春の花、夏の花、秋の花、冬の花、それぞれ咲く季節が違う花が
一斉に咲いていたのだ。

花にはそこまで詳しくない龍也ではあるが、それぞれの季節を代表する花の一つくらい

は知っている。

だから分かる。

これは異常であると。

季節の違う花が一斉に咲くなどありえないのだから。

となると、

「異変か？」

異変と言う結論に達する。

「ま、取り合えずは動いてみるか……」

龍也はそう呟きながら手首足首を回す。

そしてまずどこを目指すか考える。

暫らく考えた結果、

「まずは洞窟の様子を確かめるか」

洞窟の状態を確かめると言う事にした。

花があつちこつちに咲いている事から、自分の住んでいる洞窟の中も同じ事になって
いるのではないかと考えたからだ。

そのせいで洞窟の中が花粉塗れになっていたら目も当てられない。

そうなっていたら掃除も大変だ。

そこまで思い至った龍也は玄武の力で作った簡易型の家を消し、自分が住んでいる

無名の丘にある洞窟へと移動を開始する。

「別に何ともなかったな」

洞窟の中を確認した龍也はそう呟く。

花の一本も生えてはいなかった。

まあ、日光が殆ど差し込まない洞窟の中なのである意味当然と言えば当然だ。

「無駄足を踏んだかな……」

そう言いながら頭を掻き、ランプの火を消す。

その後、掌から炎の生み出して洞窟の外へと向う。

そして外に出ると、炎を消して力も消す。

すると、龍也の瞳の色が紅から黒に戻る。

「あれ？」

外に出た龍也はある事に気付く。

それは、

「鈴蘭の数が何時もより多い……」

鈴蘭畑の鈴蘭の数の多さであった。

最初は洞窟の中を調べる事を優先していたので気付かなかったが、今改めて鈴蘭畑を
見てみると鈴蘭の数が普段よりも多い事が分かる。

「これも異変の影響か？」

龍也はそう呟きながら無名の丘を歩き、鈴蘭畑を観察していく。
暫らくすると、

「あっ！！！」

鈴蘭畑の中からそんな声が聞こえる。

龍也は声が聞こえた場所へ顔を向ける。

そこに居たのは、

「やっぱりメデイスンか」

メデイスンであった。

「またここに来たの？」

「ああ、一寸洞窟の中の確認にな」

龍也はそう言いながらメデイスンに一歩近付いてみる。

「おっ」

今度は逃げられる事はなかった。

「どうかした？」

「いや、別に」

そう言っつて龍也は首を振る。

「処で龍也は何してるの?」

「俺か? 俺は異変の調査だな」

「異変?」

メデイスンはそう言っつて首を傾げる。

「ああ、何やら花が大量に咲く様になつたからその事をな」

「花が大量……」

メデイスンはそう呟き、眼下の鈴蘭を見る。

その後、龍也を睨みつける。

「ん? どうかしたか?」

メデイスンの視線に気付いた龍也がそう尋ねる。

すると、

「すーさんが一杯あるから……すーさんを持っていく気でしょ!?!」

メデイスンは龍也にそう言い放つ。

「いや、待て!! 違っから!!」

「させない!!」

そう言いながら、メデイスンは龍也に向けて弾幕を放つ。

「おっとお!!」

龍也はそれを空中に躍り出ること回避する。

そして空中に留まっていると、メデイスンも空中に上がってきた。

どうやら龍也と戦うらしい。

その様子を見ながら、もう少し話が分かる奴だった筈だと龍也は思った。

だが、それと同時にある可能性が思い付いた。

その可能性とは毒だ。

メデイスンは毒をエネルギーして動いている。

普段はその毒を無名の丘の鈴蘭畑の鈴蘭から吸収している。

だが、今の鈴蘭畑の鈴蘭の数はどうだ。

普段よりも多い。

普段よりも大量の毒を吸収したせいで、メディソンの気分は高揚している。

つまり、軽い興奮状態になっているのではないかと龍也は考える。

ならば、適当に戦って毒を消費させれば落ち着くのでないか。

龍也がそう考えると、

「ッー!!」

メディソンから大量の弾幕が放たれる。

龍也は更に高度を上げる事で回避する。

どうやらこれ以上考えている余裕はなさそうである。

「いいぜ、久しぶりにやろうぜ」

そう言っつて龍也も弾幕を放つ。

こうして、龍也とメディソンの弾幕ごっこが開始された。

龍也とメディソンは弾幕を放ちながら移動していく。

そんな中、メディソンの動きを見て龍也は思う。

以前よりも動きが数段良いと。

まあ、前にメディソンと戦ってから暫らく経ったので強くなってい

ても何の不思議はないだろう。

そう思いながら龍也は弾幕を放ち、向って来た弾幕を避ける。

メディスンも向って来た弾幕を避け、弾幕を放つ。

二人が放つ弾幕は掠る事はあれど、直撃をする事はない。

そんな状態が暫らく続く。

一向に事態が変化し無い事に痺れを切らしたのか、メディスンはスペルカードを取り出し、

「毒符『ポイズンプレス』」

スペルカードを発動させる。

すると、メディスンは四方向に向けて密度のある弾幕を飛ばす。

どう言うスペルカードだと龍也が思っていると、メディスンはその弾幕を風車を

回す様に回転させてきた。

回転している方向は反時計回り。

龍也はその流れに乗る様に移動する。

これだけなら、流れに乗りながら弾幕を放てばいい。

龍也がそう思っていると、メディソンは色の付いた気体を飛ばしてきた。

それが龍也に命中すると、

「ッ！？」

龍也の動きが鈍った。

今の龍也の動きより、弾幕の回転の方が速い。

このままでは弾幕をまともに喰らってしまう。

龍也がそう思っていると、

「ッ！！」

色の付いた気体が龍也を完全に通過する。

すると、龍也の動きは元に戻る。

龍也は慌てて移動スピードを上げ、後ろから迫ってきた弾幕から離れる。

これでは下手に動きを止めたら最後、毒で動きが鈍った所に弾幕が叩き込まれるであらう。

弾幕の動きを読もうにも、メディソンが色々と動いたりしているの

で中々読めない。

「一番の問題はあの毒ガスだな……」

龍也はそう言いながら、飛んで来た毒ガスを見る。

この毒ガス、かなりの広範囲で放たれているので避ける事ができない。

毒ガスを吸っても血を吐くと言った事はないが、問題は動きが鈍ると言う点。

下手に弾幕との距離が近ければ、弾幕を避ける事ができない。

これのお陰で龍也は攻撃に中々移れないでいた。

「ま、毒ガスが通り抜ければ動きが元に戻るから何とかなってるが……」

判断ミスをすれば弾幕の洗礼を受ける事になるであろう。

「せめて毒ガスがなければなあ……」

そう呟きながら、龍也はメディスンの方を見る。

自分が優位に立っているからか、表情に余裕がある。

そしてその表情のまま、また毒ガスを放つ。

その毒ガスを受け、毒ガスを吹き飛ばせばいいのにと龍也は思っ

た。

その瞬間、

「……………あ」

龍也は気付く。

自分には毒ガスを吹き飛ばす方法があると。

思い立ったら何とやら。

龍也はスペルカードを取り出し、

「咆哮『白虎の雄叫び』」

スペルカードを発動する。

同時に、龍也の瞳の色が黒から翠に変わる。

すると、龍也から超小型の竜巻が無数に放たれる。

その竜巻は毒ガスを吹き飛ばしていく。

「あ!!… また風!!」

そう言って、メデイスンはいやな顔をする。

以前、龍也と戦った時に風で毒を吹き飛ばされたのを思い出したの
だろうか。

「でも、そんな風くらい!!」

そう言いながらメディソンは竜巻に弾幕を当てる。

すると、

「あっ!!」

竜巻に当たった弾幕が、様々の方向へ飛んで行く。

中にはまた竜巻にあたっでどこかに飛んで行く弾もあった。

こうなつては龍也にも弾幕がどこへ飛んで行くか分からない。

なので、龍也は飛んできた弾幕を己が動体視力と反射神経で回避していく。

メディソンも最初はその様に弾幕を避けていたが、次第にどう避けていいか分からなくなり、

「きゃ!!」

自分の放った弾幕が何発も当たってしまう。

すると、メディソンから弾幕が放たれなくなる。

龍也は終わったかと思ひながら、メディソンの様子を見る。

メデイスンはバツの悪そうな顔をしている。

「落ち着いたか？」

龍也がそう言つと、

「……………ほんとにすーさんを持っていったりはしない？」

「だからしないって」

「……………分かった、信じる」

メデイスンはボソツとそう呟いた。

龍也はやれやれと思ひながら、力を消す。

すると、瞳の色が翠から黒に戻る。

そして、今居る位置から無名の丘を眺める。

暫らく無名の丘を眺めていると、

「……………ここに異変の元凶がある様には思えないな」

龍也はそう言つ結論を出す。

なので別の場所を探そうと考え、ここ離れようとするよ、

「あ、あの……………」

メディスンが龍也に声を掛ける。

「ん？」

声を掛けられた龍也は振り返る。

「あの……また……ね」

「ああ、またな」

そう言って、龍也は無名の丘から移動した。

花塚塚編 その2

「うーん……」

超速歩法の連用で龍也は幻想郷を移動し、この異変の元凶を探している。

だが、元凶のげの字も見つかっていない。

見つかるのは花ばかりである。

「どこへ行って花ばかりか……」

そう言って、龍也は溜息を吐く。

正直、どこへ行っていいのか検討も付かない。

このまま適当に進んでいても仕方ないのかも知れない。

「どうすっかな……」

そう言いながら龍也は如何すべきか考える。

すると、

「龍也さん？」

背後から声が掛かる。

声を掛けられた事に気付いた龍也は後ろを振り返る。

そこに居たのは、

「妖夢」

妖夢であった。

「どうも」

そう言っつて、妖夢は頭を下げる。

「何処かに向うところでしたか？」

妖夢はそう龍也に尋ねる。

「何処にっつて言うより、この多種多様な花が大量に咲いた原因を調べるところだ」

そう言っつて、龍也は眼下を指さす。

「妖夢は？」

「私もです。幽々子様が『地上には大量の花が咲いているのよ。一寸調べてきかない』と
言っつてきたので」

「そうか」

妖夢は幽々子に頼まれて来た様だ。

「ん？ 幽々子は地上に大量の花が……って言ったのか？」

「はい、そうです」

「その口ぶりだと、冥界にはこんな風に花は咲いていないのか？」

「はい。冥界はこの様に節操なくは咲いていませんね」

「ふむ……」

この事から考えられる事は二つ。

一つは冥界には影響及ばさず、地上にのみ影響を及ぼす異変。

もう一つは、犯人が冥界にいると言う可能性。

だが、後者なら幽々子が犯人の存在に気付いているだろう。

犯人が幽々子なら別ではあるが。

そう思いながら龍也は妖夢を見る。

幽々子が犯人なら妖夢にも協力させるであろう。

以前の異変の時もそうであったし。

この事から、幽々子が犯人と言う可能性は薄れる。

「？ どうかしましたか？」

「いや、何でもない」

龍也はそう言っつて首を振る。

「処で、妖夢は何か分かったか？」

「いえ、それが全然……」

そう言っつて、妖夢は俯く。

「龍也さんは？」

「俺もだ……」

そう言っつて、龍也は溜息を吐く。

どうやら、お互い何の手掛かりもない様だ。

「あ、そうだ」

妖夢は何かを思い付いたかのように顔を上げる。

「どうでしょう、気分転換がてらに私と手合わせをしませんか？」

「手合わせ？」

「はい。一回頭の中をリセットして、体を動かせば何か良い案が浮かぶかも

しれませんし」

龍也は少し考え、妖夢の案を、

「分かった、手合わせをしませ」

受け入れた。

妖夢の言うとおり気分転換が必要だと思ったからだ。

そして、自身の力を変える。

朱雀の力へと。

すると、瞳の色が黒から紅に変わる。

同時に龍也は両手から炎の剣を生み出し、構える。

それを見た妖夢は楼観剣を鞘から抜き、構える。

「……………」

二人は互いの様子を伺いながら距離を詰めていく。

そして、

「ッ！！」

同時に駆け、

「はあ！！」

「やあ!!」

互いの得物をぶつけ合う。

少しの間鏢迫り合いの状態を維持すると二人は離れる。

その瞬間、

「ッ!!」

龍也は直さま妖夢に肉迫し、右の炎の剣で突きを放つ。

妖夢のその事に驚いたものの、体を反らす事回避する。

だが、龍也の攻撃はそれだけでは終らなかった。

その状態から一步踏み出し、左手の炎の剣を振るう。

「くっ!!」

妖夢は防ぐ事もその場での回避も無理と判断し、後ろに跳ぶ事で回避する。

ただ後ろに跳んでも追撃を喰らうだけだと判断し、後ろに跳びながら白楼剣を抜き、

「はあ!!」

楼観剣と一緒に振るって斬撃を飛ばす。

それを見た龍也は追撃を掛けることをやめ、炎の剣を振るって飛んで来た斬撃を斬り払う。

そして妖夢を姿を確認しようとしたが、

「いない!？」

妖夢の姿はなかった。

どこに行ったのかと龍也が思っていると、後ろから気配を感じて振り返る。

後ろには、楼観剣を両手で振り被りながら突っ込んで来ている妖夢の姿があった。

どうやら、先程の斬撃を隠れ蓑にしながら龍也の背後に回ったようだ。

このまま妖夢の攻撃を受けても吹き飛ばされるだけと思った龍也は、二本の炎の剣を合わせて一本の炎の大剣にする。

そしてそれを、妖夢が振るった斬撃と合わせる様にして振るう。

すると楼観剣と炎の大剣が激突し、激突音と衝撃波が発生する。

二人はこのまま押し切ろうと力を籠め、鏝迫り合いの状態を維持する。

暫らくはその状態が続くが、

「ッ!？」

次第に妖夢が押され始めた。

だが、これは仕方が無い事なのかもしれない。

ここは地上ではなく空中。

空を飛んでいる妖夢に対し、龍也は靈力で空中に見えない足場を作っている。

妖夢は踏ん張りが利かないが、龍也は踏ん張りが利く。

龍也が優位なのは自明の理だ。

このままでは完全に押し切られると思った妖夢は後ろに跳んで鏢迫り合いを解除する。

その事で龍也は少しバランスを崩すが、直に体勢を立て直し、妖夢に肉迫する。

だが、妖夢も同じ様に龍也に肉迫していた。

そして二人が交差する。

その瞬間、激突音が発生する。

距離が離れた二人は同時に振り返り、再び肉迫して交差する。

これを何度か繰り返す。

そして、

「はあ!!」

「やあ!!」

再び鏢迫り合いの形へ持っていく。

だが持っていたのは一瞬。

妖夢は直に楼観剣を引く。

そのせいで龍也はバランスを崩す。

妖夢はその隙を逃さず、楼観剣を振るう。

「くっ!!」

龍也は慌てて炎の大剣を盾にする様に構える。

間に合うかどうかは微妙な所ではあったが、

「ぐっ!!」

何とか間に合った様だ。

だが、体勢が不十分であったため龍也は吹き飛ばされてしまう。

追撃を掛ける為、妖夢は吹き飛ばされた龍也を追う。

それに気付いた龍也は体を回転させて体勢を立て直し、妖夢の攻撃が来た瞬間に後ろに跳んで間合いを取る。

そして炎の大剣を構えて妖夢に突撃する。

妖夢はそれを迎え撃つように楼観剣を構える。

そして、炎の大剣と楼観剣が激突する。

今度は鏢迫り合いの形には持っていかず、激突した後、一旦互いの得物を離す。

そして、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」

「はああああああああああああああああ……！」

互いの得物を超高速で振るう。

一度ぶつかり合ったら直に離し、再度ぶつける。

これを何度も繰り返す。

何度も何度も。

そして何回目かのぶつけ合いの時、

「くっ!!」

「ッ!!」

二人は弾かれたかのように体勢を崩す。

そして、龍也よりもほんの一瞬先に体勢を立て直した妖夢はスペルカードを取り出し、

「断命剣『成仏得脱斬』」

スペルカードを発動する。

スペルカードを発動した瞬間、妖夢は白楼剣を抜き、楼観剣と同時に振るう。

すると、妖夢が刀を振り切った場所からエネルギー体の柱が現れる。

それを受けた龍也は、上空へと舞い上がってしまう。

妖夢は追い討ちを掛ける為に龍也を追う。

だが、龍也は妖夢の間合いに入る前に体勢を立て直して体の位置を変える。

そして、スペルカードを取り出し、

「炎爆『爆発する剣の軌跡』」

スペルカードを発動させる。

その瞬間、龍也は妖夢の間合い入り、二人は同時に得物を振るい、互いの得物が激突する。

だが、ただ激突した訳ではなかった。

龍也が振るった炎の大剣の軌跡が爆発を起したのだ。

その爆発の影響で妖夢は吹き飛ばされ、爆風に呑み込まれてしまう。

妖夢が爆風の中から抜け出した時には

「くっ!!」

龍也の位置を見失っていた。

慌てて龍也の居る位置を探そうとすると、

「え………?」

自分の首元に炎の大剣を突き付けられていた。

「一体どこから………」

妖夢は龍也にそう尋ねる。

「爆風の中を突っ切ってきた」

「そうですか……」

そんな所から来るとは思わなかったなと妖夢は思いながら、

「私の負けですね」

そう言う。

それを聞いた龍也は炎の大剣を消して力も消す。

すると、龍也の瞳の色が紅から黒に戻る。

それを見た妖夢は楼観剣を鞘に収める。

「相変わらずお強いですね、龍也さん」

「そう言う妖夢もな。体勢を直すのが遅れていたら俺が負けてたかもしれないし」

そう言うって龍也は一息吐く。

「話は変わりますが、便利ですよ。龍也さんの飛行方法」

「俺の……空中に足場を作るのがか？」

「はい。それなら空中でも踏ん張りが効きますし」

「俺としては普通に飛べる方が便利だと思っけどな」

「そうですかね？ 私も空中に足場を作る練習してみようかな」

妖夢がそう呟いた後、二人は少しの間雑談をする。

「処で、何か良い案はありましたか？」

雑談が一段落すると、妖夢がそう尋ねる。

それに対し、

「ああ、一回頭をスッキリさせたからか、良い案と言っか行くべき場所を考え付いたよ」

龍也はそう返す。

「妖夢の方はどうだ？」

「はい、私の方も調べてみたい場所が思い付きました」

どうやら、妖夢の方も何か閃いた様だ。

「それじゃ、またな」

「ええ、また」

そう言って、二人は別々の場所を目指して移動を開始する。

花映塚編 その3

妖夢と別れた後、龍也はある場所を目指して移動する。

龍也が目指している場所は太陽の畑。

そう、幽香に会いに行こうとしているのである。

今の季節は春なので太陽の畑に幽香が居るかは分からないが、この多種多様な花が

一斉に咲いている状況ならば、太陽の畑の向日葵も咲いている可能性もある。

ならば、太陽の畑に居る可能性も高い。

何故、幽香に会いに行こうとしているのかと言うと、今回のこの異変は多種多様な花が一斉に咲いていると言う類のもの。

そして、幽香は花に詳しい。

なので、幽香なら何か知っているかもしれないと思ったからだ。

幽香が犯人と言う説も考えられたが、龍也には幽香が犯人とは思えなかった。

幽香の能力は”花を操る程度の能力”。

本人に聞いたところ、この能力でできる事は花を咲かせたり、花の

向きを変えたり、
枯れた花を元の状態に戻すと言った事ができるとの事。

この異変の様に多種多様な花を一斉に咲かせる事も可能だろう。

だが、幽香がそんな事をしたと言われたら疑問が残る。

幽香が花を非常に大切にしている事は龍也も知っている。

そんな彼女が多種多様な花を一斉に咲かせる様な事をするであろうか。

龍也はそんな事をするとは思えなかった。

なので、龍也は幽香が犯人とは思っていない。

「後、どれくらいかな……」

太陽の畑へ移動しながらそんな事を呟いていると、

「おっと」

胸元に何かがぶつかった。

ぶつかったものとは、

「てゐる？」

「あ、お兄さん」

てゐであつた。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ」

そう言つて、てゐは龍也から離れる。

「あ、ごめん。私、一寸急いでいるんだ」

「そうか」

龍也がそう言つた瞬間、てゐは何かを思いついた顔をする。

そして、

「またね、お兄さん」

龍也の胸元を叩いてどこかに飛んで行く。

何をそんなに急いでるんだと龍也が思っていると、

「あ、龍也」

また誰かが現れる。

今度は誰だと思ひながら、龍也は声が聞こえて来た方をへ顔を向ける。

そこに居たのは、

「鈴仙」

鈴仙であった。

龍也が口を開く前に鈴仙が先に口を開く。

「あ、聞きたい事があるんだけどいい？」

「ん、何だ？」

「てゐを見なかったかしら？」

「てゐなら……」

龍也はそう言いながらてゐが向った方を指さす。

「あっちの方へ行つたぞ」

「……………」

だが、鈴仙は龍也が指をさした方を見ずに、龍也の胸元に目を向ける。

「ん？ どうかしたか？」

「ねえ、貴方の懐から見えてるそれ……」

「懐から見えてるそれ？」

そう言いながら、龍也は自身の胸元に目を向ける。

そこには何やら服の様な物が見えていた。

「何だこれ？」

龍也はそう言いながら首を傾げる。

「……それ、私のブレザーじゃない？」

「え？」

そう言いながら、龍也は鈴仙を見る。

するとブレザーを着けていない事が分かる。

「ブレザーがないと思っていたら……まさか貴方が……」

「一寸待て、誤解だ!!」

龍也は慌てて両手を振る。

すると、

「あ……」

「ん？」

何かが更に出てくる感触を龍也は感じた。

何だろうと思つて龍也は再び視線を下げる。

そして手に取る。

龍也は手に取つた物は、

「……………下着？」

下着であつた。

それも女性物の。

何故こんな物が自分の懐からと龍也は思つていると、

「それ……………私の下着……………」

鈴仙がそんな事を言い出した。

「え？」

龍也は慌てて鈴仙の方を見る。

鈴仙は顔を赤く染めながら右手を拳銃の形にして龍也に向ける。

そして、

「この……………下着ドロボー……………」

龍也に向けて弾幕を放つ。

「うおー!!」

突然の事であったが、龍也は何とか回避し、

「待て!! 落ち着け!!!! 誤解だ!!!!!!!!」

慌てて弁明を始める。

「じゃあ何で私のブレザーと下着があんたの懐から出てくるのよ!」
「?」

「んな事言われて……………あ」

分からないと言っ言葉を言い掛けたところで龍也は先程の出来事を思い出す。

先程の出来事とはてると会った時の事だ。

てるは龍也と別れる時、龍也の胸元を叩いた。

「まさかあの時……………」

鈴仙のブレザーと下着を入れたのかと龍也は思った。

「鈴仙!! 俺の話を……………」

「聞く耳持たん!!!!!! この変態!!!!!!」

鈴仙はそう言いながら龍也に弾幕を放つ。

どうやら完全に頭に血が上がっている様だ。

当然と言えば当然であるが。

だが、この状況は何とかせねばなるまい。

鈴仙の誤解を解かなければ、龍也は下着ドロボーと言つ汚名を一生背負う事になる。

無実なのに。

そんな事は龍也もごめんだ。

「とは言つても……」

龍也はそう呟きながら弾幕を避け、鈴仙を見る。

とてもじゃないが、龍也の話を聞いてくれるとは思えない。

なら、取れる方法は一つ。

「頭を冷やさせるしかないか……」

龍也はそう言つて、弾幕を放つ。

こうして、龍也の無実を掛けた弾幕ごっこが開始された。

暫らく弾幕を放ち合っているとある事が分かった。

それは鈴仙の弾幕だ。

鈴仙の弾幕は何時もなら狙いが正確であるが、今回は頭に血が上がっているせいにか少々狙いが粗い。

最も、その分弾幕のスピードは速いのでプラマイ零ではあるが。

「くっ!!」

中々弾幕が当たらない事に鈴仙は少しイライラして来た。

今回は最初っから頭に血が上がっていたので沸点が大分低く成っているのかもしれない。

そして、痺れを切らしたのか鈴仙はスペルカードを取り出し、

「波符『赤眼催眠（マインドシェイカー）』」

スペルカードを発動させる。

すると、鈴仙は龍也に向けて円状の弾幕を放つ。

放った弾幕がある程度進むと、

「なっ!!」

景色が歪んで弾幕の位置が変わり、弾幕が増えた。

そして景色が元に戻る。

「くっ!!」

龍也は慌てて回避行動を取る。

だが、その間にも鈴仙は弾幕を放ち

「またっ!!」

景色を歪ませて弾幕の位置をずらす。

「くそっ!!」

龍也は回避しようとしたが、何発か着弾してしまっ。

この様な弾幕が何度も繰り返される。

鈴仙の不可思議な弾幕を前に、龍也は少しずつ冷静さを失っていく。

「くっ……落ち着け……落ち着けよ……俺……」

龍也はそう自分に言い聞かせる。

今回は何が何でも勝たなければならない。

負ければ色々なものを失う。

負ければ皆に色々言われるだろう。

変態だとか下着ドロボーだとか。

そんな事になったら死んでも死に切れはしないだろう。

無論、そんな事で死にたくはないが。

「皆……」

そう呟き、龍也は今まで会ってきた者達の事を思い出す。

そして、

「……………はっ、何考えてんだか、俺」

そう言っつて、龍也は頭を掻く。

「これじゃ、また咲夜にらしくないって言われるな」

今までだつて、勝てるから戦ってきた訳ではない。

勝たなきゃいけないから戦ってきた。

龍也のこの想いは今も、そしてこれからも変わらないだろう。

「ウジウジ考えるのはやめだー!!」

龍也はそう言いながら頬を叩いて気合を入れなおす。

「ちっ……」

そう呟いて龍也は前を見る。

そして考える。

この状況を打破し、鈴仙の頭を冷やす方法を。

「そんな方法……」

龍也はそう言いながら懐に手を入れ、

「これしかねえよな!!」

スペルカードを取り出し、

「憤怒『青龍の怒り』」

スペルカードを発動させる。

すると、龍也の髪が蒼く染まり、瞳の色が蒼に変わって輝き出す。

そして、

「なっ!?!」

鈴仙の真上から大量の蒼い弾が降り注ぐ。

「こ、これくらい!?!」

鈴仙はスペルカードの発動を止め、回避行動に専念する。

弾幕を掠る事は多々あるものの、直撃をする事はなかった。

暫らくすると、蒼い弾幕は止む。

これでスペルブレイクしたと鈴仙が思っていると、

「ッ!？」

斜め上空から飛来した青龍を模した水の塊が鈴仙に激突した。

その直撃を受けた鈴仙は地面に落下していく。

そのまま鈴仙は地面に激突するかと思われた瞬間、

「大丈夫か？」

龍也が鈴仙の腕を掴んで落下を防いでいた。

その後、龍也は鈴仙をゆっくり地上におろし、自身も着地する。

その時には龍也の髪と瞳の色が元に黒色に戻っていた。

そして、

「あ、あのな、俺はお前のブレザーや下着を盗んだりは……」

龍也は恐る恐る弁明を始める。

すると、

「……そうよね」

鈴仙が口を開き、

「よくよく考えれば、貴方はそんな事するような奴じゃないわね」
そう言う。

どうやら鈴仙の頭も冷え、何とか誤解は解けた様だ。

「処で、私のブレザーと下着は？」

「ああ、それなら……」

龍也はそう言いながら自分の懐を見る。

そこには何もなかった。

「……………」

「……………」

「……………さっきの弾幕がこの影響でどっか行っちゃった」

それを聞いた鈴仙は、

「はぁ……………」

溜息を吐いた。

そして立ち上がり、

「探してくるわ」

そう言う。

「あ、俺も手伝おうか？」

龍也はそう提案するが、

「何？ そんなに私の下着をじっくり見たいの？」

鈴仙にそう言われ、

「すみませんでした」

土下座をする。

それを見た鈴仙は、

「いいわよ、そんな事をしなくても」

龍也にそう言う。

そう言われて、龍也は顔を上げる。

「下心があって言った訳じゃないって分かってるし。それでも……
ねえ」

鈴仙はそう言いながら龍也から顔を背けて頬を少し赤く染める。

その様子で、鈴仙が何を言いたいのか大体分かった龍也は、

「分かった。俺は手伝わないよ」

そう言う。

その言葉を受けた鈴仙は顔を龍也の方へ戻し、

「取り合えず、貴方を疑ってごめんなさい」

そう言いながら頭を下げる。

その後、鈴仙はどこかへと移動する。

それを見送った後、

「あー……誤解が解けて良かった……」

そう呟きながら龍也は仰向けに倒れこむ。

そして暫らくの間、雲の流れを観察していた。

花塚塚編 その4

「いつけねえいつけねえ、鈴仙の誤解が解けたからって終わった訳じゃないんだよな」

龍也はそう呟きながら太陽の焔を目指す。

鈴仙の誤解が解けたため、それで安心してポケットと空を眺めて暫らく。

ふとした拍子で本来の目的を思い出したのだ。

この多種多様な花が咲きまくっている原因を調べると言う目的を。

思い出したのと同時に慌てて空に飛び上がり、現在に至る。

「遅れた分を考えて、少しペースを上げるべきか」

龍也はそう呟き、超速歩法を使おうとした時、

「龍也さん」

そう自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

龍也は超速歩法を使うのやめ、声が聞こえて来た方へ顔を向ける。

自分の名を呼んだ者は、

「大ちゃん」

大妖精であつた。

「こんにちは、龍也さん」

大妖精はそう言つて頭を下げる。

「ああ、こんにちは」

龍也も同じ様に挨拶を返す。

そして互いに顔を上げると、

「龍也さん、チルノちゃんを見ませんでしたか？」

大妖精は龍也にそう尋ねる。

「チルノか？ いや見てないな」

龍也がそう言つと、大妖精はがっかりした様子になつた。

「チルノがどうかしたのか？」

「あ、いえ、朝から姿が見えないもので。お花が沢山咲いている時に居なくなつたので

若しかしたら何かあつたんじゃないかと思つて……」

どうやらチルノが心配で探しに来た様だ。

「そっか……見つけたら大ちゃんが探してたつて置いて置くよ」

「ありがとうございます」

大妖精はそう言って頭を下げ、チルノを探しにどこかへ飛んで行った。

その様子を見送った後、龍也は再び出発しようとする時、

「おい、龍也」

再び自分の名を呼ぶ声が聞こえた。

今度は誰だと思いつつながら、龍也は声が聞こえて来た方へ振り返る。

龍也の名を呼んだ者は、

「チルノ」

先程話に出たチルノであった。

「どうしたんだ？」

「龍也の姿が見えたから声を掛けたんだ」

どうやら用があった訳ではなく、飛んでいると龍也を見つけたので声を掛けた様である。

「そうそう、大ちゃんがお前を探してたぞ」

「大ちゃんが？」

「ああ、お前が急に居なくなったからって」

「あー……今日は朝から出かけてたからな……」

チルノはそう言いながら頭を掻く。

「それで、お前は何をしてたんだ？」

「うーんとね、何か皆が騒いでるみたいだから、あたかも騒ぐ事にしたんだ」

「皆……って言うのは妖精か？」

「うん」

そう言っつて、チルノは頷く。

それを聞き、やはりこれは異変なのかと龍也は考える。

異変が起きれば妖精は活性化する。

これは今までの異変で分かった事だ。

最も、萃香が起した異変では妖精は然程活性化しなかったが。

そんな事を龍也は考えていると、

「ねえねえ、あたい今日とっても調子がいいから、あたいと弾幕」

っ
「っっよ」

チルノがそんな事を言い出す。

「弾幕ごっこ?」

「そうそう」

「うーん……」

龍也は少し考えるが、

「やろうよー。あたいのライバルだろ。逃げるなよー」

チルノは龍也の腕を引っ張りながらそう言う。

チルノのその発言を受けた龍也は、

「……いいぜ、そこまで言うなら……やるっぜ」

弾幕ごっこをする事にした。

「やったー!! そうこなくっちゃー!!」

そして、二人は間合いを取って弾幕を撃ち合い始める。

放たれているチルノの弾幕、及びチルノの動きを見て龍也はある事に気付く。

それは、

「……強くなっている？」

チルノの強さが上がっている事に。

それも相当なレベルで。

元々、チルノは妖精の中でも力ある存在だ。

その事は龍也も知っている。

龍也が幻想入りしたばかりの時、初めて苦戦を強いられた相手はチルノなのだから。

その時はレミアアが起した異変の真っ最中であった。

そして、今も異変の真っ最中である。

あの時のチルノと今のチルノ。

今のチルノの方があの時のチルノよりも圧倒的に上である。

勿論、あの時より月日が経っているのでチルノが純粹に腕を上げたと言っ可能性もある。

他に可能性があるとしたら、今回のこの異変。

この異変が、これまでの異変以上に妖精の力を上げていると言っ可能性。

少し龍也が考えに耽っていると、

「ほらほら、どうしたの!？」

チルノのそんな声で現実に戻される。

そして、龍也は考えるのは後にする事にした。

正直、今のチルノは油断ができない。

何せ弾幕の量や密度、そして動きなどが霊夢や魔理沙などと比べても劣らないレベルであるのだから。

龍也は気合を入れなおし、弾幕ごっこに集中する。

チルノ放たれる氷の弾幕を避け、それと同時に弾幕を放っていく。

だが、チルノも同じ様に弾幕を避けていく。

中々互いが弾幕を放ち合い、避けると言った状況から先に進まない。すると、

「ふっふっふ、流石はあたいのライバル。やるじゃない」

チルノはそんな事を言い出す。

そして、

「だけど、これで勝負を決めさせて貰うわ!!」

そんな事を言いながらスペルカードを取り出し、

「凍符『マイナスK』」

スペルカードを発動させる。

すると、チルノが移動をし始める。

そして、チルノから三方向に向けて少し大きめの弾幕が円を描く様に放たれる。

放たれた弾幕は少し進むと止まって炸裂し、

「なっ!?!」

中から大量すぎる量の小さめの氷の弾幕が現れた。

「くっ!?!」

龍也は弾幕を放つのをやめ、回避行動に専念する。

だが、あまりにも数が多すぎるために掠る弾幕も多い。

このままでは一方的に消耗するだけだ。

何か突破口がないかと思いつながら龍也はチルノの方を見る。

だが、

「弾幕が濃すぎてチルノの姿が見えねえ……」

あまりの弾幕の濃さのせいでチルノの姿が見えなかった。

これでは今居る位置から霊流波でチルノを狙い撃つと言つのも難しいだろう。

おまけに時間が経つにつれ弾幕も更に濃くなっている。

このまま今の位置に居ても状況は悪化するだけであろう。

「なら……」

そう呟きながら龍也は気合を入れ、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお……！！！！」

霊力を解放し、

「だああああああああああああああああああ……！！！！」

弾幕の中に突っ込んで行った。

突破口を見つけるために。

そして、弾幕の中を突っ切ると、

「見つけた!!」

チルノの姿を発見する。

「ッ!？」

龍也が弾幕の中を突っ切って来た事にチルノは驚くも、スペルカードの発動は維持し続けていた。

龍也は今居る位置を維持し続けながらチルノの様子を観察する。

すると、ある事に気付く。

チルノの近くは安全であると言う事に。

それに気付いた龍也は、回転するに放たれている弾幕の流れに乗る様にしてチルノに近付いて行く。

龍也がチルノにある程度に近付くと、

「ッ!！」

氷の塊が龍也に向けて放たれた。

それを龍也は距離を開けることで回避する。

「離れれば大量の弾幕。近付けば氷の塊」

中々に隙が無いスペルカードである。

だが、

「それでも勝てる方法がない訳じゃあ……ない!!」

勝ち目がない訳ではなかった。

龍也はスペルカードを取り出し、チルノから放たれている氷の塊を見ながらチャンス伺う。

そして、氷の塊が放たれているタイミングを見極め、

「ッ!!」

一気に近付き、チルノに右手を向けて

「霊撃『霊散波』」

スペルカードを発動する。

すると、龍也の右手から広範囲の霊力が放たれる。

その放たれた霊力は、チルノと丁度龍也の目の前に迫って来ている氷の塊を呑み込む。

そして放たれている霊力が消えると、

「うー……」

少しボロボロになり、悔しがっているチルノが現れる。

今までのチルノならこれで気絶していても可笑しくはなかったが、チルノは普通に意識を保っている。

この事から、本当に強くなっているんだなと龍也が思っていると、

「流石はあたいのライバルね！！ 次は負けないわよ！！」

チルノは龍也にそう言って、何処かに飛んで行った。

それを見送った後、

「異変が妖精に与える力って馬鹿にできないもんなんだな……」

龍也はそう呟いた。

そして、再び太陽の焔を目指して移動を開始する。

花映塚編 その5

「ふうー、やっと着いた」

太陽の畑に着いた龍也はそう漏らす。

そして周囲を見渡し、

「やっぱり……」

そう呟く。

龍也の予想通り、太陽の畑は向日葵で一杯であった。

「この様子だと、多分幽香は居ると思うんだけど……」

龍也はそう言いながら太陽の畑を探し回る。

暫らく進むと、

「あ、居た」

向日葵に水を遣っている幽香を発見する。

「おい、幽香」

龍也は幽香の名を呼びながら近付いて行く。

するじ、

「あら、龍也じゃない」

幽香も龍也の存在に気付く。

「私に何か用かしら？」

「ああ。幽香に聞きたい事があるんだ」

「私に？」

幽香はそう言って首を傾げる。

「ああ。急に多種多様な花が節操なく咲き始めた。幽香なら何か知ってるんじゃないかと思ってる」

「多種多様な花……」

幽香はそう呟きながら少し考え、

「……………思い出した。もう六十年経ったのね」

そんな事言う。

「六十年？」

「ええ。花が大量に咲くと言うのは異変ではなく自然現象よ」

「自然現象？」

「ええ。説明して上げるわ」

幽香はそう言って向日葵に水を遣るのを一旦やめる。

「そもそも、この花が大量に咲くと言うのは六十年周期で起きる現象なの」

「六十年に一回？」

「ええ。どう言っ訳か六十年に一回、外の世界の幽霊が幻想郷に流れ込んでくるの。
大量にね」

「外の世界の幽霊が大量に……」

龍也はそう呟きながら少し考える。

「……………そう言えば、俺が幻想入りする前にどっかの国とどっかの国が戦争する
何歩か手前の状態になってたな」

「なら、それが原因ね。戦争が始まって多くの命が失われた」

「それで……………幻想郷に大量の幽霊が来た？」

「多分ね。話を戻すわよ」

「ああ」

「本来、幽霊と言うのは三途の河で死神に渡し賃を払って閻魔の所に行つてその後の処遇を決められるの。天国に行つたり、地獄に行つたり、冥界に行つたりと言つた感じだね」

「ふむふむ」

「だけど、幽霊の量が死神の仕事量を大きく超えてしまった。それで途方に暮れた幽霊達は花に憑依する事にした。これが多種多様な花が一斉に咲いた理由よ」

「へえー」

龍也は感心した様にそう漏らす。

「なら、このままほつといたら勝手に収まるのか？」

「ええ。その筈だけど……」

「何だけど？」

「ねえ、龍也。花つてどれぐらい咲いてたかしら？」

「そりゃあ……幻想郷中に大量に。冥界はそうじゃないって話しただけ」

「ふむ……」

龍也の話を聞き、幽香はまた考え始める。

「どうかしたのか？」

「……六十年前はそこまで咲いてたつて訳じゃなかった筈。何かあったのかしら？」

幽香はそう呟くと、何か思い付いた顔をしながら顔を上げる。

「そつだ、ねえ龍也」

「何だ？」

「一寸調べて来てくれないかしら？」

「別にいいけど……どこに行けばいいんだ？」

「そつね……再思の道と無縁塚に行けばいいわ」

「再思の道と無縁塚？」

そつ言つて龍也は首を傾げる。

「ええ、あつちの方向へ行けば再思の道へ行けるわ」

幽香はそつ言つて指をさす。

「再思の道を抜ければそのまま無縁塚に着くわ。多分、再思の道は彼岸花が大量に

咲いている思うから分かり易いと思つわ」

「成程……分かった、行ってみるよ」

龍也はそう言って飛び上がり、幽香が指をさした方へ向った。

超歩法を連用して。

「……再思の道か？」

龍也は眼下を見下ろしながらそう漏らす。

眼下には大量の彼岸花が見えるので、おそらくそうであろう。

龍也は眼下を見下ろしながら進んで行く。

少しすると、

「おっと、そんな若い年齢で自殺とは感心しないね」

そんな声とともに一人の女性が現れる。

赤い髪に和服、そして大きな鎌を持った女性だ。

「誰だ、あんた？」

龍也がそう尋ねると、

「あたいは小野塚小町。三途の河で船頭をやってる死神さ」

そう自己紹介をしてくれた。

「俺は四神龍也。人間だ」

自己紹介されたので、龍也も自己紹介をする。

「龍也ね。さつきも言ったけど自殺なんて感心しないね。死ぬんだつたらもつと年を

取ってからにшина。今死んでも船に乗せて上げないよ」

小町は龍也に言い聞かせるようにそう言う。

「いや、俺は死にに来たんじゃないんだが」

「それじゃあ、こんな所に何しに来たのさ？」

「調べものをな」

「調べもの」

小町はそう言っつて首を傾げる。

「ああ、六十年前より花が大量に咲いている言っつからそれを調べに」

「花？」

小町はそう言いながら眼下を見下ろす。

そして、

「あれ！？ 何であんなに彼岸花が！？」

眼下の彼岸花を見て驚き始める。

「何でって、あんたの管轄じゃないのか？」

龍也がそう言っつと、小町は顔を背ける。

「そう言えば幽香が六十年前よりも咲いてる花の数が思いっきり増えたっつて言っつたけど……」

龍也がそう言うと、小町は冷や汗を流し始めた。

「まさか……」

「違うんだよー!!」

小町はそう言いながら龍也に向き直る。

「仕事何てずっと力入れてやっても疲れるだけだろ!? だからあたいは適度に休憩を入れながら仕事してたのさー!! ただ、最近は仕事の量が多くて休憩時間を延ばしていただけで……」

「……………」

「……………」

「……………お前の上司って閻魔?」

「おっ、よく知ってるね」

「じゃ、閻魔にお前がサボってたって報告してくる」

「一寸待ったー!!」

小町は慌てて龍也に近付き、龍也の肩を掴む。

「頼む!! それだけは勘弁して!!」

「んな事言っても……」

「じゃあ、ごうしよう!! あたいと接近戦込みの弾幕ごっこで戦ってあたいが勝てば見逃すってのはどうだい!？」

小町はそう言いながら龍也の肩を揺らす。

「分かった分かった、それでいいよ」

「やった!!」

小町はそう言いながら後ろに下がって間合いを取る。

そして、鎌を構える。

それを見た龍也は自身の力を変える。

朱雀の力へと。

すると、瞳の色が黒から紅に変わる。

それと同時に、龍也は両手から炎の剣を生み出す。

互いの準備が整うと、二人はジリジリと間合いを詰める。

少しの間牽制し合っているよ、

「ッ!!」

龍也が先に動く。

小町が自分の間合いに入ると、炎の剣を振るう。

放たれた斬撃を、小町は鎌の中央部分で受け止め、

「おっ、やるねえ」

そう言いながら鎌を回転させて龍也の体勢を崩させ、柄頭で薙ぎ払う様にして龍也を攻撃する。

「ぐっ!!」

それをまともに受けた龍也は吹き飛ばされていく。

だが、直に体勢を立て直す。

そして小町の方を向く。

すると、先程までいた場所に小町は居なかった。

どこに行ったか探そうとすると、龍也は上空に気配を感じて顔をそちらに向ける。

そこには鎌を振り被りながら落下してきている小町の姿があった。

それを見た龍也は慌てて防御の体勢を取る。

その瞬間、激突。

「ぐう！！」

龍也は体中に力を入れて耐え、

「らあ！！」

炎の剣を振るって小町を弾き飛ばす。

弾かれた小町はクルクルと回転しながら龍也から離れ、体勢を整える。

その瞬間、龍也は小町目掛けて炎の剣を振るい、剣先から爆炎を迸らせる。

小町は迫って来る爆炎を見ながら鎌を回転させ、

「はあ！！」

振るう。

すると、何本かの風の刃が放たれる。

それは、龍也が放った爆炎を切り裂きながら龍也目掛けて進んで行く。

それが自分の体に当る直前に龍也は超速歩法を使って避け、小町の側面に回りこんで

炎の剣を振るう。

「おっと」

その動きを見切っていた小町は鎌を盾にする様にして龍也の斬撃を防ぐ。

「チツ」

防がれた事で龍也は舌打ちをし、後ろに跳んで小町から間合いを取る。

「にしても随分強いな、小町」

「そりゃね。死神の仕事には天人や仙人のお迎えも入ってるしね」

「天人に仙人？」

龍也はそう言っつて首を傾げると、

「あー……分かり易く言えば寿命を大幅に超えて生きている人間と
思っつて貰えれば
いいよ」

小町がそう説明してくれた。

「天人や仙人は強い奴が多いからねえ。そう言っつのと渡り合う為にも死神は強いのが
多いのさ。それにあたいは結構優秀な方でね」

「へえー」

先程よりも大きく上がったスピードに小町は驚きつつも、鎌で防御の体勢を取る。

だが、

「くっ!!」

防御には成功したものの、小町は吹き飛ばされてしまう。

龍也は小町が体勢を立て直す前に追撃を掛ける為、距離を詰める。

そして、小町まであと少しと言った距離に達すると、

「ッ!!」

急に小町との距離が開いた。

龍也は何故と思いながらも気持ち切り替え、超速歩法を使って小町に近付き炎の剣を振るう。

だが、その時には小町は既に体勢を立て直しており、龍也の斬撃は鎌に受け止められていた。

今度は吹き飛ばされずに耐えた様だ。

「チッ」

龍也は舌打ちをし、小町から距離を取る。

「いやー、参ったね。髪の色が変わって瞳が輝きだした位でここまで強くなるなんて」

「そいつはどうも」

「それにさっきの移動術。能力使って距離を開けたのに一瞬で詰められるとはね」

「さっきのあれ……能力だったのか」

「そうさ。あたいの能力は”距離を操る程度の能力”。仕事の最中によく使う能力何だけどね」

「……いいのか？ 態々俺に自分の能力を教えて」

「構いやしないさ。もう戦闘中に能力を使う気はないからさ」

小町はそう言っつて鎌を構える。

「戦闘中に開ける距離には限界があるからね。そんな事しても一瞬で距離を」

詰められると分かった以上、使っても意味がないからね」

それを聞きながら、龍也も構えを取る。

そして少しの静寂の後、二人は同時に駆け、激突し、鏝迫り合いの形になる。

ある程度鏢迫り合いの形を維持すると、小町は唐突に後ろに下がり、

「はあ!!!」

龍也の足元を薙ぐ様に鎌を振るう。

それに気付いた龍也は跳躍する事で回避する。

その後、

「はあああああああああああ!!!」

二本の炎の剣を小町に向けて振り下ろす。

「ぐっ!!!」

それを小町は何とか受け止めるものの、力負けして地上に落下して行き。

龍也もそれを追う様に降下して行く。

小町は地面に激突する前に体勢を立て直し、地面に足を着けて大きく後退する。

そして龍也も地面に足を着け、小町の方を見る。

すると、小町はスペルカードを取り出しおり、

「舟符』河の流れのよう』」

スperlカードを発動させる。

スperlカードが発動すると何処からか小船が現れ、小町はその上に乗る。

その瞬間、簡易的な川が現れて小町は小船ごと龍也に突撃を仕掛ける。

「その小船と川はどっこから出てきたんだ!？」

龍也はそう突っ込みを入れながら自身の力を変える。

朱雀の力から玄武の力へと。

それに伴い、龍也の髪と瞳の色が紅から茶に変化し、炎の剣が消える。

その後、龍也は前方に両手を突き出して土を生んでいき、土の壁を作る。

すると小町と小船は土の壁に激突し、小町は龍也の真上を通過する。

そして龍也から少し離れた場所に着地し、鎌を振り被りながら龍也に肉迫する。

それを見た龍也は土の壁を消し、再度自身の力を玄武から朱雀に変える。

力の変換が住むと、龍也は再び炎の剣を生み出して鎌による攻撃を

防ぐ。

「結構良いタイミングだと思ったんだけどね……」

小町はそう言いながら再び龍也から間合いを取ってスペルカードを取り出し、

「死符『死者選別の鎌』」

スペルカードを発動する。

スペルカードを発動した後、小町は鎌を振り上げて振り下ろす。

何をやっているんだと龍也が思っていると、

「ぶふう!?!」

龍也の頭上から何かが龍也を襲った。

その衝撃で炎の剣は消え、龍也に地に伏せる事となる。

「何が起こった……」

龍也がそう呟くと、自身に影が出来ている事に気付く。

そちらに顔を向けると、小町が鎌の柄頭を龍也に叩き付け様として
いる様子が目に入った。

「うっうおおおお!?!」

龍也は側転をする事で回避する。

だが、小町のその攻撃は何度も繰り返される。

龍也は側転を続ける事で回避していく。

側転している最中に、これでは埒が開かないと思った龍也は自身の力を変える。

朱雀の力から青龍の力へと。

すると、龍也の髪と瞳の色が紅から蒼に変わる。

同時に、龍也は自分の腕に水を纏わせ、

「水爪牙!!」

側転の勢いを利用して、爪先から水で出来た斬撃を飛ばす。

「おっとお!?!」

その攻撃を小町はギリギリの所で避けるが、体勢を崩してしまふ。

そこに龍也は立ち上がる。

龍也が攻撃行動に移る前に体勢を戻した小町は、龍也が攻撃に移る前に鎌を振るって攻撃をする。

龍也はそれを体を屈める事で回避するのと同時にスペルカードを取り出し、

「風拳『零距离突風』」

スペルカードを発動する。

すると、龍也の髪と瞳の色が蒼から翠に変化する。

その瞬間、龍也の拳が小町の胴体に叩き込まれ、拳から突風が放たれる。

それをまともに受けてた小町は吹き飛ばされていく。

直に戻ってくるだろうと思いき、龍也はその場で構えて待っていたが、

「……………あれ？」

小町は戻って来なかった。

少し心配になった龍也は、小町が吹き飛んだ方へ探しに行く事にした。

花塚塚編 その6

龍也は小町が吹き飛んだ場所へと向かい、小町を探す。

少しの間探していると、

「小町！！ 大体貴女は！！」

「きゃん！！ すみませーん！！」

そんな声が聞こえて来た。

龍也は声が聞こえて来た方へ顔を向ける。

すると、紫色をした桜の近くで小町が緑色の髪をし、変わった帽子を被った少女に

説教されている姿を発見した。

どう言う状況なのかと思いながら龍也が近付いて行くと、説教をしている緑色の髪を

した少女が龍也の存在に気付く。

「おや、貴方は……」

「あ、俺は四神龍也と申します」

「これはご丁寧に。私は四季映姫・ヤマザナドゥと申します」

龍也が自己紹介をすると、映姫も自己紹介をしてくれる。

「小町に説教している所を見ると、あんたは閻魔か？」

「はい、そうです」

どうやら目の前の少女が閻魔の様だ。

龍也はこんな所で会えるとは思いながら、

「ならば、聞きたい事があるんだけど」

そう尋ねる。

「何でしょう？」

映姫はそう返事をしてくれた。

「幻想郷中に多種多様な花が一斉に咲いたのは花に外の世界に幽霊が宿っているのと六十年周期で起きるって言うのは聞いたんだけど、この現象って何時収まるんだ？」

「そうですね……遅くても夏が来る前には収まると思いますよ。小町が仕事をサボらなければ」

そう言って映姫は小町を睨む。

小町は冷や汗を掻きながら顔を背ける。

「後、紫色をした桜ってここら一帯の特色なのか？」

「そうですね。因みに、紫色をした桜には罪深い者の霊が宿ります」

「へえー……」

龍也は驚いた表情をしながら紫の桜を見る。

その後、もうこれ以上ここに用はないかなと龍也は思っ
て帰ろうとすると、

「待ちなさい」

映姫に呼び止められる。

「何だ？」

龍也はそう言いながら振り返る。

「貴方に言わなければならない事がある」

「俺に？」

「ええ、貴方は少し自由過ぎる」

「自由？」

「そう。貴方は日々を自分が思うがまま、気の向くままに生きてい
る。それが悪い事

とは言えないが、良い事とも言えない」

「……………」

「だが、生きる事はそれだけでも罪」

「……そう言えば、何かの本で人間は生きながらにして罪人って書いてあったな」

映姫の話聞き、龍也はそんな事を呟く。

「このままの生活を続けて行けば貴方は地獄に落ちるでしょう。それを避けるために貴方が積める善行は……」

映姫がその言葉を続ける様とした瞬間、

「悪い」

龍也が映姫の言葉を遮る。

「あんたが俺の為に想って言ってくれているのは分かる。だけど、俺は俺の生き方を
変える気はない」

そう言って、龍也は映姫の目を見る。

そして、

「俺は俺が思うがままに、俺自身の魂に従って生きる。それが罪だ
って言うのであれば」

それでもいい。俺はそのまま生く。俺は自分に後悔する様な生き方はしたくない!!」

そう言い放つ。

それを受けた映姫は、

「成程……あくまで我を通すか……」

そう言い、龍也の目を見る。

「それは貴方の美点であると同時に欠点だ」

そう言った後、映姫は悔悟の棒を突き付け、

「生きている時に後悔しなくとも、死んで後悔する事なっても遅い。罪と言うのは裁き

以外で清算出来るものではない!! 故に、今この場で貴方を裁く
!!」

そう言い放つ。

その発言を受けた龍也は両腕両脚に風を纏い、構える。

そして、

「ッ!!」

一気に駆け、映姫に向けて拳を放つ。

すると、激突音と衝撃波が発生する。

手応えありと思われた一撃。

だが、

「な……」

その拳は映姫の掌に受け止められていた。

「我を通すにはそれ相応の力が必要です」

映姫はそう言いながら龍也の拳を掴み、

「その程度では我を通すには程遠い」

龍也を上空へとほおり投げる。

空中にほおり投げられた龍也は体を回転させながら体勢を立て直す。

その後、映姫の位置を探ろうと龍也が顔を上げた瞬間、

「ッ！！」

映姫が龍也に目の前に来ており、悔悟の棒を振るっていた。

それを見た龍也は慌てて防御の体勢を取る。

「ぐっ！！」

防御には何とか間に合ったものの、龍也は吹き飛ばされてしまう。

映姫は吹き飛ばされた龍也を追う様にして移動をする。

それを見た龍也は、吹き飛ばされている最中に自身の力を変える。

白虎の力から朱雀の力へと。

すると、龍也の髪と瞳の色が翠から紅に変わる。

それに伴い、両腕両脚に纏っていた風が消える。

そして体勢を立て直し、両手を合わせて一本の炎の剣を生み出し、構えを取る。

映姫が自分の間合いに入った瞬間、

「はあああああああああああああ！！！！！！」

龍也は炎の剣を振るい、悔悟の棒と激突させる。

その瞬間、炎の大剣から爆炎が迸り、映姫を呑みこむ。

爆炎に呑み込まれた映姫は怯むかと思われたが、

「甘い」

そんな声とともに爆炎の中から左手を突き出して龍也の顔面を掴み、

「この程度ではまだまだ温い」

そう言いながら龍也を猛スピードで地面に投げ付ける。

そして、

「がつー！」

龍也は体勢を整える前に地面に激突してしまう。

その衝撃で炎の大剣は消えてしまう。

「ぐ……くく……」

龍也は痛みに堪えながら立ち上がり、超速歩法を使って映姫と同じ高度にまで移動し、

「はあはあ……はあ……」

息を整えながら映姫の様子を見る。

龍也と違って随分と余裕がある様に見える。

そんな映姫の様子を見た後、

「保持時間に不安があるが……」

龍也はそう呟き、これを使っしかなれないかと思いつながら左手を額の辺りまで持っていく。

そして左手からどす黒い霊力をあふれ出させ、左手を一気に振り下ろす。

すると龍也の顔面に仮面が現れ、眼球の色が黒くなる。

その龍也の変化した様子を見た映姫は少し驚いた表情になり、

「成程……理解しました」

そう漏らす。

「？何をだ？」

急にそんな事を言い出した映姫に龍也はそう尋ねる。

「貴方を見た時、妙な親近感を抱いた理由をです」

映姫はそう言いながら表情を戻す。

「親近感？」

「ええ。私の能力は”白黒はつきりつける程度の能力”の能力です」

「それが？」

「貴方のその力……いえ、貴方は生きながらにして死を内包している。特にその仮面を

出した時には仮面を出していない時に比べて死がとても強くなる」

「……………」

「私の能力風に言うのであれば、貴方のそれは”白と黒を混在させる程度の能力”になるでしょう」

”白黒はつきりつける程度の能力”と”白と黒を混在させる程度の能力”。

別物ではあるが、確かに似てはいる。

そこに映姫は親近感を覚えたのだろう。

「生と死の二つの力を拒否反応、拒絶反応なく融合させた様に使えると言うのには驚きを隠せませんが」

「成程……だが、それを理解したからと言って手心を加える気はないんだろ？」

「ええ」

「それを聞いて……安心したぜ」

龍也はそう言って両手を合わせ、一本の炎の大剣を再び生み出す。

そして炎の大剣を振り被りながら、映姫に向かって駆ける。

映姫はその炎の大剣を防ぐ様に悔悟の棒を構える。

その瞬間、炎の大剣が悔悟の棒に激突し、

「ッ！！」

映姫が吹き飛ばされる。

「先程までとは比較にならない程のパワーとスピードですね。それに炎の剣の出力も上がっている」

映姫はそう呟きながら体勢を立て直し、顔を上げる。

その時にはすでに龍也は映姫の目の前に迫ってきおり、炎の大剣を振るっていた。

映姫は落ち着いた様子で高度を上げてその攻撃を回避する。

そして、

「はあ！！」

龍也の頭部目掛けて悔悟の棒を振るう。

「ッ！！」

それに気付いた龍也は炎の大剣を上にも構えて防御する。

「ふむ、反応速度も上がっている」

己が一撃を防がれた事に対し、映姫はそう呟く。

その瞬間、

「はあ!!」

龍也は炎の大剣が悔悟の棒と接触している部分を爆発させて映姫を弾き飛ばす。

弾き飛ばされた映姫は体を回転させながら体勢を立て直し、龍也と同じ高度に留まり、悔悟の棒を突きつける。

すると、映姫の周囲に様々な色をした光球が無数に現れ、

「ッ!!」

それがレーザーとなって龍也に襲い掛かる。

龍也は超速歩法を連用して迫ってくるレーザーを避けていく。

だが、これではジリ貧だ。

そう思った龍也は自身の力を変える。

朱雀の力から玄武の力へと。

それに伴い龍也の髪と瞳の色が紅から茶に変わる。

同時に炎の大剣が消失する。

そして、レーザーが目の前に迫ってきた瞬間、龍也は右手を前方に

突き出し、

「玄武の甲羅！！」

玄武の甲羅を生み出す。

その瞬間、レーザーが玄武の甲羅に激突する。

だが、映姫の放ったレーザーは傷一つ付ける事もできなかった。

龍也はそのまま玄武の甲羅を盾にして映姫に突撃を仕掛ける。

それに気付いた映姫はレーザーを放つのをやめ、玄武の甲羅が自分の体に当る瞬間、

超スピードで龍也の背後に回りこんで悔悟の棒を叩き付ける。

それをまともに受けた龍也は勢い良く吹き飛んで行く。

だが、龍也は直に体勢を構えを取る。

その様子を見ながら、

「随分と防御力が上がっていますね」

映姫はそう漏らす。

「そう言えば、貴方には四神が宿っているのでしたね。だから四神の力を扱う事ができる。ならば、今使っている力は玄武の力ですか？」

「ああ……」

映姫の問いに龍也は肯定をする。

バレているのなら隠しても意味がないと思ったからだ。

「そしてその仮面……」

映姫はそう言いながら龍也の仮面に目を向ける。

「その仮面を付けると、貴方の力もスピードも防御力も反射神経も技の破壊力も霊力も何もかも、戦闘に必要な技能が大きく上昇する。その反面、その仮面は貴方の体に負担を強いている様に見えます」

映姫がそう言うと、龍也の仮面の左目付近に輝が走る。

「もう限界なのでは？」

映姫がそう言うと、龍也は左手を左目付近にもって行き、

「限界？ 誰がだよ」

左手からどす黒い霊力を溢れ出させて左手を払う様に動かす。

すると、左目付近にあった輝が綺麗に消える。

そして龍也は思う。

何時の間にか仮面の能力が上がっていると。

今の輝だって直せるのに何の疑問もなかった。

ただ、直せると言う確信があった。

それに仮面の保持時間もそうだ。

何時の間にか上がっている。

今までの仮面の保持時間を上げるための修行の成果がでたのか、それとも映姫の能力に

反応する形で上がったのか、はたまた何か別の要因があったのか。

それは龍也にも分からない。

分かるのは、自分も映姫もまだまだ戦えるところだけだ。

そう思い、龍也は自身の力を変える。

玄武の力から白虎の力へと。

それに伴い、龍也の髪と瞳の色が茶から翠に変わる。

同時に玄武の甲羅が消失し、龍也の腕と脚に風が纏わされる。

「やはり……まだ続けますか」

「当然だ」

龍也はそう言って構えを取る。

「……貴方のそれが勇気であるのか蛮勇であるのか……それとも別の何かであるのか
私が見極めて上げましょう」

映姫はそう言いながら龍也に突撃し、悔悟の棒で突きを放つ。

龍也はそれを紙一重で避け、

「りゃあ!」

拳を放つが、その拳は映姫に避けられる。

だが、それだけでは終らなかった。

龍也はそのまま連撃を放つ。

目にも止まらぬ様なスピードでの連撃。

その連撃を映姫は時には避け、時には悔悟の棒で払う事で防いでいく。

そしてある程度その状態が続くと映姫は龍也から距離を取り、再び光球を生み出してレーザーを放つ。

龍也はそれを先程の同じ様に超速歩法の連用で避けていく。

しかしそれだけでは留まらず、レーザーを掻い潜って映姫に近付い

て行く。

「スピードが上がっている……成程、今度は白虎の力か」

映姫はそう言いながらレーザーを放つのをやめ、龍也から距離を取ろうとする。

その瞬間、龍也は両手を合わせて突き出し、

「大嵐旋風!!」

両腕に纏う風を合わせ、竜巻にして放つ。

それは映姫を呑み込んでいく。

だが、

「ッ!!」

その竜巻の中から直に映姫が出て来る。

そして、

「はあ!!」

悔悟の棒を振るう。

今までの一撃とは比べ物にならない程の鋭さ。

「ッ!!」

龍也は辛うじて直撃を避けたものの、

「痛ッ！！」

仮面の右目付近の部分が砕かれ、米神に近い部分から血を流していた。

それを認識した瞬間、龍也は映姫から間合いを取り、映姫の姿を観察する。

無傷と言う訳ではない様で、服などが多少ボロボロになっており、被っていた帽子がなくなっていた。

龍也がそう映姫の様子を観察していると、

「まずは謝罪致します」

映姫がそう口を開く。

「正直、貴方の事を見くびっていた」

そう言っつて映姫は構えを取り、

「これは貴方に取って侮辱に当たるでしょう」

体中から神力を解放させ、

「ですので、ここからは私も本気でいきます」

そう言い放つ。

映姫のその発言を受けた瞬間、龍也は自身の力を変える。

白虎の力から朱雀の力へと。

それに伴い、髪と瞳の色が翠から紅に変わる。

同時に両腕両脚に纏っている風が消える。

そして龍也は両手を合わせて炎の大剣を生み出し、霊力を解放する。

その瞬間、

「ッ!!」

映姫は龍也の目の前に迫り、悔悟の棒を振るう。

龍也は慌てて炎の大剣を盾の様にして構える。

攻撃は防げたものの、龍也は後方へと吹き飛ばされてしまう。

龍也は直に体勢を立て直し、顔を上げる。

その時には映姫は既に龍也の背後に周っていた。

その事に気付いた龍也は振り返りながら炎の大剣を振るう。

それを映姫は避け、龍也の右頬へカウンター気味に蹴りを放つ。

「がつ!!」

それをまともに受けた龍也はまたもや吹き飛ぶ。

同時に、今の蹴りで龍也の仮面の右側部分は完全に碎かれる。

ある程度吹き飛ばされると龍也は体勢を立て直す。

その瞬間、

「かつ!?!」

映姫は龍也の頭頂部に踵落しを叩き込む。

踵落しを叩き込まれた龍也は地面に向けて一直線に落下していく。

映姫は龍也が地面に激突する前に無数の光球を生み出し、それをレーザーにして放つ。

龍也が地面に激突した瞬間に着弾。

爆発と爆煙が発生する。

映姫はその場から動かず、爆煙が晴れるのを待つ。

爆煙が晴れると、

「はぁ……………はぁ……………はぁ……………」

辛うじて立っでいられるレベルの状態の龍也が姿を現れた。

所々から血を流し、服もボロボロ。

仮面も殆どが割れ、左目付近にしか残っていない様な状態であった。

おまけに先の衝撃で炎の大剣も消失した様だ。

そんな状態の龍也を見ながら、

「まだ……やりますか？」

映姫はそう尋ねる。

それに対し、龍也は

「たり……めえだろうが！！」

そう答え、自身の力を変える。

朱雀の力から青龍の力へと。

それに伴い、龍也の髪と瞳の色が紅から蒼に変わる。

その後、龍也は両手から水を発生させ、それを両手に纏わせて龍の手の様にする。

そして両手を映姫に向け、

「水流！！」

膨大な量の水を放つ。

映姫はそれが目の前に来た瞬間、悔悟の棒を下から上に向けて振るう。

すると、映姫に迫ってきた水が真つ二つになる。

暫らくすると放たれた水がなくなり、映姫は龍也の目を向け様とする。

「居ない？」

龍也は居ない事に気付く。

どこへ行つたか探そうとすると、

「おおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

そんな声とともに、龍也が映姫の真横に迫って来ていた。

それに気付いた映姫が龍也の方へ振り向くと、

「ッ！！！！」

龍也は己が爪を振るって映姫の横を抜ける。

映姫は龍也の位置を追う様に体の向きを変えると、

「なっ！！」

龍也が目の前に居た。

髪と瞳の色を翠にして。

どうやら、かなり短い時間で自分の力を青龍から白虎へ変えた様だ。

映姫がそう推察していると、龍也は映姫に向けて蹴りを放つ。

それに気付いた映姫は蹴りが来る場所に左手を置く。

その瞬間、映姫の掌に龍也の蹴りが叩き込まれる。

防いだ。

映姫がそう思った瞬間、

「ッ！！」

龍也が脚に纏っていた風が弾ける様に吹き荒れる。

完全に予想外だったせいかわ、映姫は更に上空へと吹き飛ばされる。

ある程度吹き飛ばされ、ブレーキを掛けて映姫が止まると自分に影が出来ている事に
気付く。

何だろうと思いながら映姫が振り返る。

そこには髪と瞳を茶にし、巨大な土の拳を振り被っている龍也の姿があった。

これから何が起こるの映姫が理解した瞬間、土に拳が映姫に叩き込まれる。

同時に土の拳が崩壊し、龍也の髪と瞳が紅くなった状態になる。

斜め下へ吹き飛ばされていく行く映姫を見ながら龍也は両手を天に向ける。

すると龍也の上空に炎の玉が生み出され、それがどんどん大きくなっていく。

ある程度の大きさになると、

「豪炎……」

龍也は体を反らし、

「火球!!!!!!」

それを映姫に向けて投げ付ける。

そして、それは映姫に着弾し、爆発して巨大な火柱が発生する。

これで終わった訳ではない。

龍也がそう思いながら構えていると、

「今のは……良い一撃でしたよ」

そんな声とともに、龍也の胴体に悔悟の棒が突き刺さっていた。

龍也も気付かないうちに、龍也の懐に入り込んでいた様だ。

「く……」

悔悟の棒が引き抜かれると同時に、龍也は何歩か後方に下がり、手を映姫に向け、

「霊流波!!」

青白い閃光を迸らせる。

映姫は何の抵抗もしないまま、青白い閃光に飲み込まれる。

そして青白い閃光が消えると、その中から普通に佇んでいる映姫が現れる。

その見た龍也は、

「ちく……しょう……」

そう漏らした。

その瞬間、残っていた仮面が完全に崩壊し、龍也の眼球が元の色に戻る。

そして髪と瞳の色が元の黒色に戻ると龍也は意識を失い、落下して

行
っ
た。

「おっと」

龍也が激突する前に、何者かが龍也を抱き止める。

龍也が地面に激突する前に抱き止めようと降下していた映姫がそれを見て動きを止める。

「貴女は……風見幽香」

そして、龍也を抱き止めた者の名を言う。

「はあい、久しぶりね。閻魔様」

声を掛けられた幽香は映姫にそう挨拶をする。

「……貴女の差し金ですか？」

「差し金とは人聞きの悪い。私は仕事をサボっているであろう死神の居場所を
教えてあげただけよ」

幽香は笑顔でそう言う。

「まあその後、貴女と会って戦う事になるとは予想していたけど」

「貴女は……」

映姫が何かを言おうとした時、

「龍也と戦ったのなら分かったでしょ。龍也の本能は強くなる事と戦う事を望んでいる
と言う事を」

そう言って、映姫の発言を切る。

「確かに……」

「それに、龍也の強さはまだまだ発展途上。龍也はまだまだ強くなる」

「……成程。貴女は彼の成長のために私を当て馬にしましたね」

「さて、それはどうかしら？」

そう言って、幽香はクスクスと笑う。

「貴女は……」

「あら、説教がてらに私とも戦ってみる？ 私の記憶が確かなら結構前に貴女と戦った
時には私の圧勝だったわね。貴女はズタボロなのに私は掠り傷一つ負わなかったし」

幽香にそう言われ、映姫は何かを言おうとしたが押し黙る。

事実だけに何も言えない様だ。

「それに、貴女だって随分楽しそうに戦ってたじゃない」

「うっ……」

映姫はそう漏らし、一步後ろに引く。

龍也に抱いた親近感の理由を理解した時には閻魔としての本分を忘れていたと言われても否定はできない。

これは反省すべき点である。

「確かに、それは反省しなければならない事です」

「別に反省しなくても良いと思うけどね」

幽香はそう言い、龍也の顔を見る。

「さっきも言ったけど、龍也はまだまだ強くなる。必ず私と対等以上の存在になる。」

その時こそ……」

「彼と戦う……ですか？」

「ええ、そうよ」

幽香はそう言って笑顔を作る。

「さて……紫、居るんでしょう？」

幽香がそう言うと、幽香の隣に隙間ができる。

そしてその中から、

「あら、ばれちゃってたわ」

紫が現れる。

「やはり居ましたか」

「お久しぶりです、閻魔様」

映姫にそう言った後、紫は幽香に顔を向ける。

「それで、私に何か用かしら？」

「大丈夫とは思っけど、一応龍也を永遠亭に運んでおいて」

「分かったわ」

紫はそう言つて幽香の前に隙間を作り、幽香はその中に龍也を入れる。

すると、隙間は閉じた。

「あーあ、それにしても残念だったわ。若しかした閻魔様が負ける所が見れるかもつて思つたのに」

その発言を聞き、

「丁度いい。八雲紫。貴女には言わねばならない事が……」

映姫がそう言つた瞬間、

「それじゃ、お暇させて貰うわね」

紫はそう言いながら隙間の中に消えて行つた。

「私も用が済んだから帰るわね」

幽香もそう言つて帰って行つた。

それを見送つた後、

「……はあ」

映姫は溜息を吐いた。

そして小町の気配を探る。

無縁塚近辺には気配がなかったので真面目に仕事をしてるのかと思
っている。

再思の道方面で小町の気配と人間、妖怪の気配を感じた。

龍也と同じ様に六十年周期で起こるこれを調べに来たんだと映姫は
思った。

同時に、まだまだ帰れそうにないなと思い、映姫はまた一つ溜息を
吐いた。

幻想郷縁起〜四神龍也の項〜（前書き）

花映塚近辺の龍也の設定を幻想郷縁起風にしてみました。
興味のある方はそのままお進みください。

幻想郷縁起(四神龍也の項)

四神をその身に宿し者

四神 龍也

S i z i n R y u u y a

能力 四神の力を使いこなせる程度の能力

危険度 中

人間友好度 普通

主な活動場所 幻想郷全域

英雄伝に載せるか迷ったが、折角外来人の項があるのでここに記す。
外の世界からやって来た(1)人間で、外の世界には帰らずに幻想郷を旅して
回っている一寸変わった少年。

彼の住居は無名の丘にある洞窟の様だが、殆ど帰ってはいない模様。
無名の丘に
行って彼に会えたらラッキーである。

幻想郷中を旅して回っているせいか、人妖含めてかなりの人数と交友関係があり、

その者達の殆どと親しい関係にある模様。人間の里の外などで妖怪などに襲われた

場合、彼の友人と言えれば見逃して貰えるかもしれない。(2)

外の世界の道具の知識はそれなりにある様なので、どんな道具が判らない物が

あれば、彼に聞いてみるのもいいかもしれない。

能力

彼の能力は”四神の力を使いこなせる程度の能力”である。

名前を聞いただけではどんな能力か判らないので本人に聞いてみたところ、

”炎を生み、操り、支配する程度の能力”、”風を生み、操り、支配する程度の能力”

”地を生み、操り、支配する程度の能力”、”水を生み、操り、支配する程度の能力”

の四つの能力が組み合わさった能力らしい。(3)

つまり炎、風、地、水の四つを自由自在に操る事ができるらしい。

だが、常に操れると言う訳ではないらしく、それぞれの能力の使用時に対応したものしか操れない模様。炎の時は紅、風の時は翠、地の時は茶、水の時

は蒼と言った様にはそれぞれの能力を使っている時は瞳の色が変わる模様。そこから力を解放(4)

すると、髪も瞳と同じ色に染まり、瞳が輝き出す。

能力を使っている状態だと、身体能力も変わるらしい。

彼の能力は戦闘時以外にも日常生活で大いに役立っているらしい。

火を起こしたり、

洗い物をしたり、濡れた物を乾かしたり、簡易型の家を作ったりなどなど。非常に

便利な様である。一家に一人欲しいくらいである。

因みに四神とは朱雀、白虎、玄武、青龍の事。彼曰く、四神が自分の精神世界（ 5 ）

におり、自分に力を貸してくれているので其々の能力が使えるとの事。

本人曰く能力かは不明だが、変わった仮面（ 6 ）を出すことができ、仮面を出すと

基本能力が大きく上昇するらしい。詳しい事は不明。

戦闘能力

外の世界の人間の身体能力などは幻想郷の人間（ 7 ）と変わらないが、彼は別で

ある。身体能力、戦闘能力が非常に高い。

どれ位高いかと言うと、そこんじよそこ等の妖怪が束になって襲い掛かって来ても軽く

蹴散らす事ができる。他にもガチンコ勝負で吸血鬼（ 8 ）に勝つ

た、鬼（9）に
勝ったと言われている。吸血鬼、鬼に関しては本人達に詳しい話は聞けなかったので
詳細は不明。異変解決にも一役担っている事がある模様。

これだけの実力があるなら、その身一つで幻想郷を旅して回れるのも納得である。

腕に覚えのある人は彼に挑戦してみるのもいいかもしれない。人間、ここまで強くなれるのかと思えるであろう。

目撃報告例

この間、プリズムリバー三姉妹と仲良く話しているのを見た。妬ましい（ファン倶楽部
会員No.4）

彼は人妖含めてかなりの人数と交友関係があるので、プリズムリバー三姉妹と仲良く
してても不思議ではない。

幻想郷中を旅してるせいで宴会に誘うのにも一苦労だぜ（霧雨魔理沙）

そんな彼を見つけられる貴女は大したもの。

人里の外で妖怪に襲われてるところを助けてもらったよ（豆腐屋の

息子)

襲われているところを彼が発見すれば助けてくれる。と言うか、子どもが一人で人間の里の外に出てはいけない。

対策

人間に対しても妖怪に対しても基本的には友好的なので恐れる事はない。

ただし、彼は下種な輩や悪党などを嫌っているので心当たりのある人は注意が必要である。心当たりのない人は注意する必要はない。

万が一彼に襲われた場合、襲われる覚えがない人は必死に説明しよう。余程頭に血が上ってなければ普通に謝罪してくれるだろう。襲われる覚えがある人は大人しく念仏を唱え、これまでの行いを深く反省し、もうしないと誓おう。幸い、彼は戦意が無く
なった者、戦えなくなった者に止めを刺す様なマネはしない。ただし、相手が彼にと
って倒さねばならない敵、救い様の無い悪党などであれば話は別であろうが。

1、八雲紫の手によって幻想入りさせられた模様。

2、嘘だとバレたら酷い目に合わされると思つので注意が必要である。

3、言い換えれば、四つの能力を持っている事になる。

4、力を解放すると基本能力が上がるらしい。

5、中央に巨大な塔、眼下には絢爛豪華で煌びやかと言つ言葉が似合う町並み、
空は青い空に流れる白い雲、太陽と言つた世界の様だ。

6、白を基調とし、形は憤怒した鬼と悪魔を足し合わせて骨にした様な物で、目元
から米神に掛けて黒い線が走っている。仮面を付けると彼の眼球は黒くなり、瞳の色は
紫になる、ただし、能力を使っていると瞳の色は使っている能力が優先される。

7、一部例外有り。

8、スカーレット姉妹。

9、伊吹萃香。

入院編 その2

「あ……」

目が覚めた龍也は上半身を起き上がらせ、周囲の様子を伺う。

すると、鈴仙の姿を発見する。

龍也が鈴仙に声を掛けようとした瞬間、

「あんだ、馬鹿？」

鈴仙が龍也に向けてそんな言葉を投げ掛けた。

「……いや、何で行き成り馬鹿呼ばわり？」

少し呆気にとられたものの、直に立ち直った龍也は鈴仙にそう尋ねる。

「はあ、少し待ってなさい」

鈴仙は溜息を吐いた後、そう言って立ち上がり部屋を出る。

少しすると鈴仙は戻り、

「はい。これを見なさい」

そう言って新聞紙を龍也に差し出す。

「新聞紙？」

龍也はそう呟きながら差し出された新聞紙を受け取る。

「これ、”文々。新聞”か」

「それに書かれている記事を読んでみなさい」

「記事？」

鈴仙にそう言われ、龍也は記事の内容に目を通すと、

「何々……『幻想郷を旅して回る外来人の四神龍也さん、閻魔様相手に戦いを挑む』」

そんな事が書かれていた。

どうやら、何時の間にか文に付けられていた様だ。

「勝敗の結果は書かれていないみたいだけど」

「あ、ほんとだ」

新聞には、途中で発生した爆風に巻き込まれて文が吹っ飛び、カメラやらネガの多数が紛失したと書かれていた。

だからこの記事は写真が一枚しかなかったのだろう。

運良くこの一枚だけは無事であった様である。

因みに、この写真は龍也は白虎の力を使って映姫に拳を振るって受け止められている瞬間の写真であった。

「普通はしないわよ。閻魔様相手に戦いを挑もうだなんて」

「はは、まあ譲れないものがあって……」

龍也はそう言いながら後頭部を搔く。

そんな龍也の目を見た鈴仙は、

「はあ、呆れた」

そんな事を呟く。

「え？ 何が？」

「リンベンジを考えてるって目、してるわよ」

「あ、分かるか？」

「分かるわよ。男の子って皆そうなのかしら」

鈴仙はそう言って溜息を吐く。

「まあ、閻魔様の服は結構ボロボロだったけど傷らしい傷は付いていなかったし、

貴方はボロボロの状態で気絶してらしいから、負けたものだとは思

っていたけど」

「あれ？ 何でそんな事まで知ってるんだ？」

そう言っつて龍也は首を傾げる。

「ああ、私達も無縁塚に言ったのよ。時間的には貴方と閻魔様の戦いが終わった少し後だと思っけど」

「達？」

そう言っつて、龍也はまた首を傾げる。

「ええ。私の他にはてゐに霊夢に魔理沙に咲夜に妖夢にミステリアだったかしら？」

妖夢の事は知っていたが、どうやら龍也の他にもこの花が無作為に咲きまくった理由を調べている者が居た様だ。

「と言う事は、その中の誰かが俺を永遠亭に運んでくれたのか？」

「違うわ」

鈴仙は手を振っつて否定をする。

「師匠が言っつには薬を作っつている時に隙間が開いて、そこから貴方が落ちてきたっつて言っつてたわ」

どうやら紫が龍也をここまで運んでくれた様だ。

「て言うか、俺が映姫と戦ってるのを見てたのか」

「そうなるわね」

もう一人の自分と戦った時言い、今回の事と言い、紫は覗き見が好きなのだろうか
龍也は思った。

「他に聞きたい事はあるかしら？」

「あー……俺ってどの位寝てたんだ？」

「二日程ね」

「そんなものなのか……」

「今回は前に入院した時と違って大怪我って訳じゃなかったしね。
内臓損傷とか
も無かったし。まあ、骨に痺位はあったと思うけど」

「へえー……」

龍也はそう言いながら体を動かしてみる。

「んー……骨に痺が入ったって言うわりには痛みは全然感じないな」

「それはそうよ。師匠が作った特性の薬だもの。もう治っているわ」

鈴仙はそう言って胸を張る。

「相変わらず凄いな、永琳は」

「そりゃねえ。頭脳もさる事ながら、師匠は”あらゆる薬を作る程度の能力”を持っていてからね」

「よく薬を作っているのは知ってたけど、そんな能力を持っていたのか」

そう言いながら、龍也は驚いた表情をする。

「でも、材料がなければ作れない薬も多いんだけどね」

「そうなんだ」

何でもありと言う訳ではなかった様だ。

「あ、そうそう。俺ってどれ位で退院できるんだ？」

「そうね……師匠に貴方が目を覚ました事を伝えて、師匠が貴方の退院の日程を決められる事になると思うけど……多分数日後じゃないかしら？」

「そっか……」

意外と早くに退院できそうである。

「あ、そうそう」

「何？」

「俺の事、看病してくれただろ？　ありがとう」

龍也はそう言って鈴仙に頭を下げる。

「べ、別にいいわよ、お礼なんて。貴方は入院患者なんだし、師匠に貴方の看病をしなさいって言われただけなんだから」

鈴仙はそう言いながら龍也から顔を背ける。

その顔は少し赤い様だ。

「兎に角、師匠に貴方が目を覚ましたって報告をしてくるから」

鈴仙はそう言って立ち上がる。

「そうそう、晩ご飯ができるまで寝てなさい。この前の時みたいに
出歩いて無理
されても困るし」

鈴仙にそう言われ、

「はは……」

龍也は苦笑いを浮かべながら顔を背ける。

「くれぐれも、大人しくね」

鈴仙は念を押す様にそう言い、部屋から出て行った。

その姿を見送った後、龍也は上半身を倒す。

そして天井を見ながら考える。

自分の仮面の力。

映姫と戦っている時、保持時間が大きく伸びた。

どれ位かは分からないが、少なくとも一戦闘中はずっと出しているだろう。

おまけに仮面自体の能力も上がっていた。

多少の損壊は修復できたし、自身の能力上昇の効果も上がっていた。どうして急にこれらの事項が上昇したのか、改めて考えても龍也には分からなかった。

あの時思ったように、今までの仮面の保持時間を上げるための修行の成果がでたのか、それとも映姫の能力に反応する形で上がったのか、はたまた何か別の要因があったのか。

答えは出ない。

若しかしたらあの時限りだったのかもしれない。

これは退院した後にでも仮面を出して確認すればいいだろう。

ただ一つ、分かっている事は、

「俺は……映姫に負けた」

映姫に敗北したと言う事だけ。

ならば、する事は一つだけである。

「俺はもっと強くなる。そして次は……必ず勝つ!!」

龍也は一人、自分自身の魂にそう誓った。

「あ、トランクスの柄が変わっている……」

少し汗ばんでいたので着替えようとした龍也が何とも言えない表情でそう呟いた。

そして、夕食の時。

「はい、あーん」

龍也は輝夜にご飯を食べさせられている状況になっていた。

永琳、鈴仙、てゐの三人は止める気はないらしい。

輝夜が永遠亭の主なので仕方が無いのかもしれないが。

「何だって俺にそう構うんだ？」

「前にも言ったでしょう。貴方が私に求婚して来た男どもと全然違うタイプだからよ」

そう言えばそうだったなと龍也は思い出した。

「ほらほら、もっと嬉しそうな顔をしなさいよ。私にこんな事をし
て貰える男なんて
貴方が初めてよ」

「あー、はいはいそうですね。私は天下第一の幸せ者でございます」

龍也はそう言っつて、差し出されたご飯を食べる。

「あら、素直に食べたのね」

素直に食べた龍也に、輝夜は少し驚いた表情をする。

「どうせ、今回も俺の学ランを直したのはお前なんだろう？」

「あら、よく分かったわね」

「そりゃ……な」

龍也はそう言っつて、お茶を啜る。

「で、何時までこれが続けるんだ？」

「私が飽きるまで」

輝夜は非常に可愛らしい笑顔でそう言っつ。

「はぁ……」

その発言を聞いた龍也は、思わず溜息を漏らした。

アルバイト編 その1

「よし」

いつもの格好に着替え終わった龍也はそう呟く。

そして部屋を出る。

次に目指す場所は永琳の部屋。

自分が使わせてもらった部屋は以前と同じ部屋なので、永琳の部屋へは迷わずに行けた。

永琳の部屋の前に着くと、龍也は襖をノックをする。

すると、

「どござ」

直に反応が返って来る。

反応が返って来たので龍也は襖を開けて中に入る。

すると、永琳が龍也に顔を向ける。

「着替え終わったって事はもう出るんでしょ？」

「ああ」

「ここを出る前の挨拶かしら？」

「それもあるが、治療代を払って置こうと思ってな」

「治療代を？」

永琳はそう言いながら、椅子ごと龍也の方へ体を向ける。

「ああ。前回もただで診て貰って今回もって言うのは虫が良過ぎるだろ」

「別に気にしなくてもいいのに」

「けど、気にしないって訳にもいかないだろ」

「まあ、貴方がそう言うのなら……」

永琳はそう言いながら再び机に体を向ける。

そして、紙に何かを書き始める。

少しすると、

「はい」

再び体を龍也の方に向け、何かを書いていた紙を龍也に差し出す。

「これは？」

「治療費の請求額とその内約」

永琳にそう言われ、紙に書かれた数字を見ていく。

見終わった後、龍也は財布を取り出し、中からお金を取り出す。

そして、

「はい」

お金を永琳に手渡す。

永琳は受け取ったお金を確認し、

「確かに」

そう言ってお金を仕舞う。

それを見届けた後、

「永琳、頼みがあるんだが……」

龍也はそんな事を言い出す。

「何？」

「……ここでバイトさせて貰えないか？」

「……え？」

「だから、ここでバイトさせて貰えないか？」

「何でまた？」

「いや、実は……今の支払いで財布の中身がスツカラカンになった」

「……………そう言う事なら、お金返しましょうか？」

「いやいや、そう言う訳にもいかないだろ」

龍也はそう言って両手を振る。

「律儀ねえ」

永琳はそう言い、龍也の顔を見る。

「今まではどうやって稼いでいたの？」

「稼いではいなかったな」

「あら、そうなの？」

「ああ。俺が幻想入りした時に携帯電話……外の世界の道具と外の世界のお金を

香霖堂で売ったんだ」

「へえー」

「それを霖之助さんはかなりの値段で買い取ってくれたから今まで金に困った事は

なかったんだ。使う機会と言ったら宴会での酒代ぐらいだったしな」
龍也は思い出しながらそう言う。

「で、ここでバイトさせてくれるのか？」

「そうね……」

永琳が少し考えていると、

「あら、いいじゃない」

そんな声とともに襖が開けられる。

襖を開けた人物は、

「輝夜」

輝夜であった。

「起きてたのか」

「失礼ね。起きてたわよ」

輝夜はそう言いながら永琳の方を見る。

「別にいいでしょ、こいつを雇っても」

「まあ、輝夜がそう言うのであれば」

「永琳から許可も取れたし……さ、行きましょつか」

「お、おい」

輝夜はそう言って龍也の腕を掴んで永琳の部屋から出て行った。

「で、俺は何をやればいいんだ？」

輝夜に連れられ、廊下の端に着いた龍也はそう尋ねる。

「まずはお約束として……はいこれ」

輝夜はそう言っつて雑巾を手渡す。

「つまり雑巾掛け？」

「そ。こここの端からあつちの端までお願いね」

そう言っつて輝夜は廊下の先を指さす。

「端っつてこつからは見えないな」

「ここは広いからね」

そう言いながら輝夜は胸を張る。

「で、どうする？ やっぱりやめる？」

「まさか」

「一応はここで働く事になつた身だ。」

その働く場所の主の命令をそう易々と断る訳にもいくまい。

龍也はそう思いながら自身の力を変える。

青龍の力へと。

すると、龍也の瞳の色が黒から蒼へと変化する。

そして龍也は屈み、右手で雑巾を押させ、左手を前方に向ける。

そして左手の掌から水を軽く放ち、雑巾掛けを始める。

「あら、お帰り」

雑巾掛けから帰って来た龍也に輝夜はそう声を掛ける。

「思ってたより随分早かったわね」

「そりゃな……」

龍也はそう言いながら雑巾と手を洗って余分な水分を消す。

そして自身の力を消し、雑巾を仕舞う。

「それにしても、変わった力よね」

輝夜はそう言いながら龍也の顔を覗き見る。

「ん？ 何がだ？」

「能力を使うと外見的变化が起こるって事がよ」

「そうか？」

「まあ、鈴仙も能力を使うと少し瞳が輝いたりするけどね」

輝夜はそう言って、龍也から顔を離す。

「で、次は何をすればいいんだ？」

「そうね……付いて来て」

そう言って輝夜は歩き出す

龍也も続く様に歩き、輝夜の後を付いて行く。

すると、大きな襖の前に辿り付く。

「ここは？」

「私の部屋よ」

そう言って輝夜は部屋の中に入っていく。

その様子を龍也がポケットと見ていると、

「何やってるの。早く入ってきなさい」

輝夜が龍也にそう言う。

「あ、ああ」

輝夜にそう言われ、龍也は輝夜の部屋の中に入る。

部屋の中は中々豪華な感じだ。

まあ、お姫様なのだから当然かもしれないが。

そう思っていると輝夜は椅子に座り、

「じゃ、早速肩でも揉んで貰いましょうか」

そう言った。

「了解」

龍也はそう言って輝夜に近付き、肩を揉む。

「んー……もう少し強く」

「あいよ」

そう言っつて、龍也は揉む力を強くする。

「あー……いい気持ち。中々上手いわね」

「そいつはどうも」

そう言いながら、龍也は輝夜の肩を揉んでいく。

「そう言えば……お前って普段は何してるんだ？」

「私？ そうね……ダラダラして過ごしたり兎と遊んだり盆栽の世話をしたりとか
趣味を探してみたりとか色々……」

「へえー……意外とつて程でもないけど色々やってるんだな」

「そりゃね。不老不死の一番の敵は退屈だもの。貴方の様に旅とかしてみたら退屈を
感じなくなるかもしれないけど、それは流石に永琳が許してくれないだろうし」

それを聞き、妹紅との殺し合いもその退屈を紛らわせるものの一つなのかなと

龍也は考える。

輝夜と殺し合いをしているって言う話を以前妹紅から聞いたとき、

妹紅からは真剣な
想いがあるのを龍也は感じていた。

なら輝夜の方にも何か真剣な想いがあるのだろうか。

龍也がそんな事を考えていると、輝夜は何かを思いついたかの様に
して龍也に訪ねる。

「ねえねえ、何か部屋に籠りながらもできる暇潰しってないかし
ら?」

「部屋に籠りながらの?」

そう言われて龍也は考える。

テレビゲームなどは電気がないので無理。

プラモデルもここにあるとは思えない。

若しかしたら香霖堂にあるかもしれないが。

一人でのトランプは余りにも寂しすぎる。

となると、

「小説を書いたり漫画を描いてみたりするのはどうだ?」

「小説に漫画……」

「後は永遠亭って大きいから何かのイベントをお前が主催してみる

とか

「イベント……」

そう呟いて輝夜は何かを考え込む。

暫らく考え込むと、

「……これは煮詰める必要があるわね」

輝夜はそう言っって顔を上げる。

何か名案の様なものがあるようだ。

「ま、今日のところは龍也で遊ぶか」

「おい、今俺で遊ぶとか言わなかったか？」

「気のせいよ気のせいよ」

そう言っって輝夜は手を振る。

「……はあ」

その様子を見て、龍也は溜息を吐く。

バイト先を間違えたかもしれないと言っ想いを籠めながら。

結局、この日は殆ど輝夜の遊び相手をするだけで終わった。

アルバイト編 その2

「後、皿何枚だ？」

龍也はそう呟きながら皿を洗っていく。

今、龍也がやっているのは皿洗い。

何故、龍也が皿洗いをやっているかと言うと、朝食を永遠亭で取らせて貰った後、輝夜から皿洗いをしろと言われたからだ。

元々皿洗いくらいはするつもりであったため、龍也はそれを了承。

そして現在に至ると言う訳である。

洗い終わった皿を仕舞い、次の皿を手に取ると、

「おい、アルバイター」

そんな声を掛けられる。

龍也は声を掛けられた方へ顔を向ける。

そこに居たのは、

「てゐ」

てゐであった。

「どうかしたのか？」

「ねえねえ、ここに水を入れてよ」

てゐはそう言つて桶を指さす。

「あいよ」

龍也はそう言いながら桶に手を向け、掌から水を放つ。

すると、直に桶に水が溜まる。

「いやー、それにしても便利だね。あんたの能力」

「まあ……な」

現在、龍也が使っている力は青龍の力。

これのお陰で水汲みに行く時間がカットされているのである。

「ねえねえ、どう？ このままここに永住しない？」

てゐはそう提案するが、

「そう言う訳にはいかねえよ」

龍也はその提案を断る。

「ちえ、残念」

てゐはそう言いながら水の入った桶を持ってどこかに向う。

龍也は雑巾掛けかなと思ひながらその姿を見送る。

そして、てゐの姿が見えなくなると再び皿洗いを始める。

「よし、終わり」

皿洗いが終わった後、龍也はそう呟きながら力を消す。

すると、龍也の瞳の色が蒼から黒に戻る。

そして肩を回していると、

「皿洗いは終わったかしら？」

そう言いながら誰かがやって来る。

龍也は振り返ってやって来て人物を確認する。

やって来たのは永琳であった。

「ああ、終わったよ」

龍也は永琳にそう告げる。

「そう。なら貴方に頼みたい事があるのだけど……いいかしら？」

「ああ、構わないよ」

「そう……なら付いて来て」

「分かった」

そう言って、龍也は永琳の後を付いて行く。

少しすると、永琳の部屋の前に辿り付く。

そして部屋の中に入ると、

「師匠に……龍也？」

「鈴仙？」

鈴仙が部屋の中にいた。

「どうしてここに居るんだ？」

「私は師匠にここで待つてろ言われたんだけど……」

鈴仙はそう言いながら龍也を見る。

「俺は永琳が頼みたい事があるからって言われたんだけど……」

龍也がそう話した後、二人は永琳を見る。

「二人に頼みたい仕事があるのよ」

永琳はそう言っつて木箱を取り出す。

「まず鈴仙。貴女は何時もの様に人里へ行っつて、それぞれの民家の薬の在庫の確認と補充をお願いね」

「はい、分かりました」

鈴仙はそう言っつて永琳から木箱を受け取る。

「次に龍也だけど……」

永琳はそう言いながら先程のと同じ様に木箱を取り出す。

だが、数は三つと先程より多い。

「これは新しく作った薬で、貴方から見て左から腰痛、頭痛、二日酔いの薬よ」

「へえー」

龍也はそう呟きながら木箱を眺めていく。

「因みに、腰痛の薬は飲み薬ではなく塗り薬だから注意してね」

「分かった」

「で、貴方に頼みたい事は……」

「これを運べばいいんだろ」

「あら、よく分かったわね。流石にこの量は鈴仙一人では無理だなと思っていたけど、

貴方がいてくれて助かったわ」

永琳のそんな発言を聞きながら龍也は木箱の一つを背負い、もう二つを両手に持つ。

「つまり、俺は鈴仙に付いて行ってこの薬を各家庭に置いて行けばいいんだな？」

「正解。それじゃ二人とも、頼んだわよ」

「はい!!--」

「あいよ」

それぞれ返事をし、二人は人里へ向う。

「それにしてもよく迷わないで迷いの竹林を抜けれるな」

「まあ、私は波長とかを弄ったり見れたりするしね……」

「今更何だが、何で飛んで人里へ向わなかったんだ？」

「薬を入れてる瓶とかの種類によっては着地の衝撃で割れるって事があるからね」

「あ、成程」

二人はそんな雑談をしながら人里の中を歩いてくと、

「お、龍也の兄ちゃんにいつもよく分からない事を言ってる兎さん、こんにちは」

「こんにちは」

挨拶されたので龍也は挨拶を返し、鈴仙は頭を軽く下げる。

「ん？ よく分からない事？」

龍也は何かに気付いた様に鈴仙の方を見る。

「何故か何時もそう言われるのよね。だからここに来るのは少し苦手」

鈴仙はそう言っつて溜息を吐く。

「よく分からない事ねえ……」

鈴仙は普段ここで何を言ってるのか龍也が考えていると、

「着いたわ。ここが最初のお家よ」

何時の間にやら薬を置く家に着いていた。

鈴仙がノックをすると返事があつたので二人は中に入る。

家の中には老夫婦が居た。

二人は家の中に中に入り、木箱を床に置くと、

「では、まず新しい薬から説明しますね」

鈴仙はそう言つて、木箱の中から薬を取り出して薬の説明する。

「まず、これは腰痛の薬です。これは飲み薬ではなく塗り薬なので注意してください。」

それでこれの使用成分及び相乗効果なのですが……」

そして何故か薬の使用成分、相乗効果を説明し始めた。

鈴仙の説明がある程度進むと、

「鈴仙、ストップストップ」

龍也は鈴仙の説明を止める。

「何？」

「お前が訳分からない事を言つて言われる理由が分かつた」

「え、本当!？」

鈴仙はそう言いながら龍也の方に振り向く。

「ああ」

「その理由は!？」

「薬の使用成分と相乗効果を説明したからだ」

「……え？」

それを聞き、鈴仙は少し拍子抜けした顔をする。

「あのな、薬品関係の知識がない奴そんな説明しても分かるわけないだろ。見ろ。」

爺さん婆さんが困った様な笑みを浮かべてるぞ」

龍也にそう言われ、鈴仙は老夫婦の方を見る。

龍也の言うとおり、困った様な表情を浮かべていた。

「まさか……そんな理由があつたとは……」

鈴仙がそう言いながら肩を落とす。

「まあ、俺でも殆ど分からない単語ばかりだったしなあ……」

そう言いながら龍也は鈴仙の肩に手を置く。

「貴方、薬品関連の知識があったの？」

「名前を知っているだけだがな」

「ああ……そう言えば、貴方は外の世界の人間だったわね」

そう言って鈴仙は納得した表情になった。

そして、この日を境に鈴仙の薬の説明は簡単になったと言っ。

「しっかし、意外と時間が掛かるものなんだな。薬売りって」

龍也はそう呟きながら迷いの竹林をそう呟く。

もう日が暮れる頃の間帯だ。

永遠亭を出たのが昼過ぎだったので龍也がそう言うのも無理ないのかもしれない。

薬売りの仕事も大変なんだなと龍也が思っていると、

「ねえ、一寸聞いてもいいかな？」

鈴仙が龍也に話し掛けて来た。

「何をだ？」

「何で閻魔様に戦いを挑んだの？」

「あれ、前に言わなかったっけ？」

「そうじゃなくて、何で戦う事になったかって事」

「ああ、何か俺は自由すぎるって言われて、このままじゃ地獄に落ちるって言われて

それを避けるためにはって言われたからかな」

龍也はその時の事を思い出しながらそう語る。

それを聞いた鈴仙は驚いた表情をしながら振り返る。

「……………それで、戦いを挑んだの？」

「ああ、俺は俺が想うがままに生きるって言ったら戦う事になっ
な」

龍也がそう言って、その時の事を思い出していると、

「……………地獄に落ちるのが怖くないの？」

鈴仙がそんな事を尋ねる。

「別に怖いとか怖くないとかじゃなく、先の事……………地獄に落ちるの
が怖くて自分の生き
方を変えるなんて性に合わないからな。俺は俺自身の魂に従って生
きるだけだ」

そう言い切る龍也を鈴仙はポカーンとした表情で見る。

そして少しすると、

「……………ねえ、一寸相談に乗って貰ってもいいかな？」

鈴仙が龍也に相談を持ちかけた。

「相談？」

「うん。過去の事って……………どうすればいいのかな？」

「何だ、映姫に何か言われたのか？」

龍也がそう言うと、鈴仙はコクリと頷く。

「んー……まあ、深く聞く気はねえけど、過去との決着の着け方は人其々だからなあ。

お前が納得できるやり方でいいんじゃないか？」

「私の納得できるやり方……」

「そ。過去から逃げるのも、過去と向き合って生きるのも、過去を背負って生きるのも

そいつの自由だ。ただ、自分の納得できる方法を見つけなければいいんじゃないか？」

「……見つかるかな？」

鈴仙は少し不安な表情で龍也にそう尋ねる。

「見つかるんじゃないか？ お前は妖怪何だから俺よりもずっと長く生きられるだろ。

その長い人生で見つければいいじゃないか？」

龍也がそう言うと、鈴仙はスッキリした表情で、

「うん、何かスッキリした。ありがとう、龍也」

そう言った。

そんな鈴仙に、

「おじい」

龍也はそう返した。

アルバイト編 その3

「はい、今までのお給金」

「サンキュ」

龍也は永琳からお金を受け取って財布に仕舞う。

「これからはどうするの？」

「そうだな……今度は人里辺りでバイト先を探すよ」

「やっぱりね」

「やっぱりねって……分かってた？」

「そりゃね。怪我が完治している状態で何時までも一箇所に留まれる様な性格は

していないでしょ、貴方は」

「ははは……」

永琳にそう指摘され、龍也は苦笑いを浮かべながら後頭部を搔く。

「ま、気を付けて行きなさい」

「ああ」

そう挨拶を交わし、龍也は永琳の部屋を出る。

そして出口を目指して歩いているよ、

「あら、もう行くのかしら?」

背後から声を掛けられる。

龍也が振り返ると、

「輝夜」

輝夜が居た。

「それで、もう行くのかしら?」

「ああ」

「それは残念。遊び相手が居なくなってしまったわ」

「そのお陰で俺は真夜中に叩き起こされて将棋やら囲碁やらオセロに付き合わされる事になったがな」

「あら、私みたいな良い女の遊び相手が出来たんだから光栄に思いなさいな。それに

二人でババ抜きをしていた時には貴方もかなり熱中してたじゃない」

「まあ……な……」

そう言いながら龍也は頬を掻く。

二人でのババ抜きは何故か熱中していた。

無駄に高度な駆け引きもしたものだ。

あの時は変なテンションだったなと龍也はその時の事を思い返す。

「ま、いいわ。また貴方が来るのを楽しみに待ちましょつか」

「そしてまた俺を遊び相手にする気か」

「あら、私の相手は不服かしら？」

そう言って、輝夜は無駄に色っぽい表情で龍也にそう尋ねる。

「へいへい、輝夜姫様のお相手をできて光栄でございます」

「むっ……普通の反応。少しは赤面すると思ったのに」

輝夜はそう言って、少し不満気な表情をする。

「流石にもう耐性が付いた」

龍也がそう言うと、

「ふむ……なら……」

輝夜は突如、着物を着崩す。

「おま！？ 何を！？」

そう言っ取り乱した龍也に、輝夜はニヤリと言った表情を向ける。

「……ハッ!!」

龍也が何かに気付いた時には、

「ふむふむ、今度からはこっち方面で攻めてみようかしら」

輝夜はそう言いながら着崩した着物を元に戻す。

「……俺をからって楽しいか？」

龍也がそう尋ねると、

「うん」

輝夜は良い笑顔でそう答える。

「はあ……」

その笑顔を見て龍也は溜息を吐く。

「ま、道中気を付けなさいな」

「はいはいどうも」

そう挨拶を交わし、輝夜と別れて龍也は再び永遠亭の出口へと向う。

そして玄関に辿り付くと、

「あ、龍也」

また龍也の名前を呼ぶ声が聞こえる。

龍也は声が聞こえて来た方へ振り返る。

龍也に声を掛けてきた人物は、

「鈴仙」

鈴仙であった。

「もう行くのかしら？」

「ああ」

「そ。取り合えず気を付けてね」

「ああ、ありがとな」

「それと、また大怪我して入院しない様に。貴方は無茶ばかりするんだから」

「あー……善処はするよ」

龍也がそう言つと、

「お兄さん!!」

「うお!？」

龍也の背中に何かが飛びついて来た。

今度は誰だと思いつながら龍也は背中を見る。

そこに居たのは、

「てるか」

てるかであった。

「何か用か？」

「お兄さんがここを出て行くって聞いて……」

てるかはそう言いながら寶錢箱を取り出し、

「ここにお金を入れるとお兄さんに幸運が……」

そう言う。

その様子を見て、

「また貴女は……」

鈴仙はそう言いながら頭を押さえる。

「まあ……一応は効果があるみたいだし……」

そんな鈴仙を余所に、龍也は財布から小銭を取り出して賽銭箱の中に入れる。

「えへへ……」

龍也が賽銭を入れるとてゐは嬉しそうな顔をする。

「それじゃ、俺は行くな」

「うん、気をつけてね」

「またね、お兄さん」

鈴仙とてゐの声を受けながら龍也は永遠亭を後にした。

「やっぱりてゐのお陰が……すんなり人里までこれたな」

人里に着いた龍也はそう呟く。

ここまで迷う事なくこれたし、おまけに道中妖怪にも会わなかった。てゐの賽銭箱には今まで何度も小銭を入れたが、その度に良い事が起こった。

「ま、てゐの言葉には嘘はないって事が」

そんな事を呟きながら龍也は人里を歩いて行く。

そしてどこで働こうか考える。

すると、

「おや、龍也君かい？」

その声を掛けられる。

龍也は声を掛けられて方へ振り向く。

そこに居たのは、

「慧音先生」

慧音であった。

龍也が慧音の存在に気付くと、慧音は龍也の様子を観察する。

「？ 何かしましたか？」

「いや、随分な無茶をしたと聞いていたが、元氣そうで良かったよ」

「無茶ですか？」

「新聞で読んだぞ。閻魔様相手に戦いを挑んだそうじゃないか」

「ああ……」

そう言えば文が新聞にしてばら撒いていたなと龍也は思い出した。

「弾幕ごっこで挑むなら兎も角、ガチンコ勝負で挑むとは……君も無茶をする」

「ははは……」

龍也は苦笑いを浮かべながら後頭部を搔く。

「あ、そつだ。慧音先生に聞きたい事があるんですが」

「私にかい？」

そう言って、慧音は首を傾げる。

「はい。何かいいバイト先を知りませんかね？」

「バイト先を？」

「はい。一寸金欠でして……」

「ふむ、そつだな……」

そつ言いながら慧音は少し考え、

「そつだ、寺子屋で少しの間働いてみないかい？」

「寺子屋で……ですか？」

「うん。君さえ良ければだが……」

「願ったり叶ったりですよ。よろしくお願いします」

龍也はそつ言つて、慧音に頭を下げる。

「うん。それじゃ今から行くつか」

そつ言つて慧音が歩き出したので、龍也はその後ろの付いて行く。

「これから授業ですか？」

「いや、今日は寺子屋は休みだ」

「それじゃあ、何をするんですか？」

「昨日やったテストの採点だ」

「ああ、成程。俺はそれを手伝えばいいんですね」

「うん、よろしく頼むよ」

「分かりました」

そう言った後、雑談をしながら歩いて行くと寺子屋に着く。

そして寺子屋の中に入り、職員室と思わしき場所到着すると、慧音が棚の中から

テストの答案と思わしき物を持って来る。

「俺はその半分をやればいいんですね？」

「うん。答えはここにおいて置くからこれを見ながら採点をしてくれ。一問五点の

計二十問だ。部分点などは私に聞いてくれ」

「分かりました」

龍也がそう言うと、慧音は赤い色をした墨汁を筆に染み込ませて採点を始める。

龍也はこの墨汁を使うと本当に先生になった気分になるなと思いついていく。から採点を

書道なんて学校の授業でやって以来だが、テストの採点ぐらいであれば龍也にも綺麗にできる。

「そう言えば、このテストに書かれてる問題文って全て慧音先生が書かれてるんですか？」

「うん、そうだよ」

龍也の質問に慧音はそう答える。

「これだけの量を書かれるのって大変じゃないですか？」

「大変と言えば大変だが……それを苦に思った事はないな」

これを本心で言っているのだから慧音は良い先生だなと龍也は思った。

「そう言えば、慧音先生って普段の授業で何を教えているんですか？」

「そっだね……文字の読み書き、数の計算の仕方、幻想郷の歴史、日常生活に役立つ知識などかな」

「へえー……体育は教えてないんですか？」

「体育？」

慧音はそう言って首を傾げる。

「体を動かし方を教える授業と違って貰えればいいですよ」

「体の動かし方……」

「まあ、幻想郷の子ども達には必要ないかもしれないですね。みんな外で遊ぶ事が非常に多いですし」

「外の世界では子ども達は外で遊ばないのかい？」

「そうですね……かなり少なくなっただと思いますよ」

龍也がそう言つと慧音は少し考え、

「体育と言つのも取り入れてみようかな……」

慧音はそう呟く。

「まあ、試験的に取り入れてみて好評だったら続けてみると言った感じでいいんじゃないでしょうか？」

龍也は同意する様にそう言つ。

「導入するにあたって、まずどんな事から始めたらいいだろうか？」

「そうですね……跳び箱やマット運動などは器材の入手が少々難しいですから……」

ボール遊びから始めるのがベターだと思いますよ」

「ボール遊び……サッカーの様なものかい？」

「サッカーってこっちにもあるんですか？」

「うん。何時だったか人里に住み始めた外来人が広めてね」

「そうなんですか」

龍也は少し驚いた様にそう言う。

「まあ、サッカーよりはドッチボールの方が子ども達に合うと思いますけどね」

「ドッチボール？」

慧音はそう言いながら首を傾げる。

「ドッチボールと言うのは……」

龍也はそう言いながらドッチボールのルールを説明する。

「ふむ、ルールは分かったが……少し危ないかい？」

「その辺はボールを柔らかいゴムボール辺りにすれば問題無いと思いますよ」

「そうか……次はボールを何処で手に入れるかだが……」

「それでしたら、採点が終わった後に俺が香霖堂に行って探してきま
すよ」

「いいのかい？」

「ええ、これ位なら構いませんよ」

「分かった。よろしく頼むよ。それじゃ、気持ちを切り替えて採点
を進めようか」

「はい」

そして、龍也と慧音はテストの採点を進めていった。

アルバイト編 その4

寺子屋でテスト採点が終わった龍也は、香霖堂を目指して空中を移動していた。

慧音に提案したドッチボール用のボールを捜すためだ。

香霖堂の品揃えなら多分あるだろうなと龍也が思っていると、

「お、着いた着いた」

眼下に香霖堂が見えた。

龍也は空中に靈力で作っている見えない足場を消して降下し、香霖堂の入り口前に着地する。

そして、扉を開けて中に入る。

「霖之助さん、いますかー？」

龍也はそう声を掛けながら奥へと進んで行く。
すると、

「おや、龍也君か。いらっしやい」

カウンター席の方で霖之助がそう声を掛ける。

「こんにちは、霖之助さん」

龍也はそう言ってカウンターへと近付く。

「実は探している物があるんです」

「探している物？」

「はい。ボールつてありますか？」

「ボールかい？ 少し待っていてくれ」

霖之助はそう言ってカウンターから離れる。

それから少しすると、

「今ここにあるボールはこれ位だね」

大き目のダンボールを持って霖之助は戻って来る。

その中には沢山の種類のボールが入っていた。

「結構な数がありますね」

龍也はそう言いながら物色していく。

少しすると、

「お、あつたつた」

目的のゴムボールを見つける。

少し強く握れば余裕でへこむのでこれならば思いっきりぶつけても怪我する事もないであろう。

「そう言えば、ボールなんて何に使ったい？」

霖之助は気になった事を龍也に尋ねてみる。

「ああ、実はですね……」

龍也はそう言って霖之助に事情を話し始める。

「成程……人里の子ども達の為にね……」

「はい、この結果次第では慧音先生が寺子屋の授業で体育を導入するって言うてました」

龍也が捕捉するかの様にそう言う。

それを聞いた霖之助は、

「ふむ……そう言う事ならただで譲ろう」

そう言う。

「え、いいんですか？」

龍也は確認を取る様にそう聞き返す。

「うん、それに龍也君には色々世話になってるしね」

外の世界の機器の使い方を教えている事を言っているのだろう。

「分かりました。そう言う事なら」

龍也はそう言って、霖之助からボールを譲り受けた。

その後、店内を少し見てみると服を発見する。

「これ……外の世界の服ですか？」

「うん、そうだよ」

「結構ありますね……」

そう言いながら、龍也は服を見ていく。

学ランを着て長くなるが、衣替的な意味で新しい格好でもしてみようかと龍也は

考えながら、気に入った物を手に取る。

「何か気に入ったのはあったかい？」

わりと真剣に服を見ている龍也に霖之助はそう声を掛ける。

「そうですね……幾つかは……」

「何なら、買っていくかい？」

「んー……もう少しお金が入ったら買いに来ます」

龍也はそう言って、手に取っていた服を戻す。

そして、

「それでは、また」

龍也はそう言って霖之助に頭を下げ、出口に向う。

「またの御来店を」

霖之助のそんな言葉を受け、龍也は香霖堂を後にする。

香霖堂を出て、再び人里に戻って来た龍也は寺子屋を目指す。

「到着つと」

寺子屋の前に着いた龍也は中に入り、職員室と思わしき場所をへと向う。

「慧音先生、只今戻りました」

その声を掛けながら、職員室と思わしき場所の襖を開ける。

「ああ、お帰り」

中に入ると、慧音がそう言ってくれた。

「そろそろ戻ってくると思ってお茶とお茶菓子を用意して待っていたんだ」

「あ、何かすみません」

龍也はそう言いながら卓袱台の前に座る。

「それで、ゴムボールと言うのは手に入ったのかい？」

「あ、はい。これです」

そう言って、龍也はゴムボールを慧音に手渡す。

「ほう、これがゴムボール……」

慧音は受け取ったゴムボールを興味深そうに触っていく。

「これならぶつけ合っても怪我する事はなさそうだな」

慧音はそう言いながらゴムボールを床に置く。

「それで、幾ら掛かったんだい？ お金を払おう」

「いえ、ただで譲って貰ったんでお金は掛からなかったです」

「ただで譲ってもらったのかい？」

「はい」

「珍しい事もあるものだな……」

慧音はそう呟き、

「まあ、それは兎も角食べよう」

「はい」

龍也と慧音の二人は雑談を交えながらお茶を飲み、お茶菓子を食べていく。

「ご馳走様でした」

「お粗末様」

慧音はそう言って空になった湯飲みと皿をどこかへ持っていく。

慧音が戻ってくると

「それで、他にやる事は何かありますか？」

龍也は慧音にそう尋ねる。

「そうだね……教室と廊下の掃除をしようと思うのだが……いいかな？」

「俺は構いませんよ」

「そうか。教室の掃除は私がするから廊下の雑巾掛けを頼めるかな？」

「分かりました」

龍也がそう言った後、二人は二手に分かれてそれぞれ場所の掃除を始める。

雑巾を手にとった龍也は自身の力を変える。

青龍の力へと。

すると、龍也の瞳の色が黒から蒼に変わる。

そして永遠亭で掃除した時の様に前方に少し水を放ち、体を屈めて左手で雑巾を

押さえ、右手を前方に向けながら雑巾掛けを始める。

それから十数分後、

「よし、終わり」

雑巾掛けが終了する。

龍也は力を消し、雑巾掛けが終わった事を慧音に伝えに教室へと移動する。

「慧音先生、雑巾掛け終わりましたよ」

龍也はそう言いながら教室の襖を開ける。

「もう終わったのかい、随分早かったね」

慧音は少し驚いた様にそう言う。

「ええ、まあ」

龍也はそう言いながら慧音に近付いて行き、

「何か手伝う事はありますか？」

そう尋ねる。

「そうだね……教室を掃除するために外に出した長机を持って来てくれるかな？」

「分かりました」

龍也はそう言って、教室の窓から外に出る。

机を廊下に出さなかったのは、龍也の雑巾掛けの邪魔にならない様に配慮したから

であろう。

龍也は内心で礼を言いながら、机を持って教室に戻る。

「机、どこに置けばいいですか？」

「そうだね……後ろから二列で等間隔で並べてくれるかい」

「分かりました」

慧音にそう言われ、机を置く。

そして外に出て机を持って教室に入り、並べる。

その行為を何度も繰り返すと、机の全てが教室に並ばされる。

それを見ながら、

「いやー、君が来てくれたお陰で随分早く終わったよ。ありがとう」

慧音は龍也にそう礼を言う。

そう言った慧音に

「別にそれ程大した事はしていませんよ」

龍也はそう返す。

「こら。こつ言う時は、素直に礼を受け取って置くものだぞ」

「はあ……それじゃあ、どういたしまして」

慧音にそう言われ、龍也はそう言う。

「うん」

それに満足したのか笑顔になる。

「それはそうと、お給金の方を渡さなければな」

慧音はそう言うって自分の財布を取り出し、中からお金を抜き取り、

「はい」

それを龍也に渡す。

「どうも」

そう言うって、龍也はお金を受け取る。

「って、こんなにですか!？」

受け取ったお金が思ったよりも多かったので、龍也は驚く。

「幾らなんでも、これは多すぎるのでは……」

「気にしなくていいよ。その代わりに、明日も来てくれるかい。ドッジボールのルールを

説明できる者が欲しいからね」

「そう言う事でしたら」

龍也はそう言って、受け取ったお金を財布に仕舞う。

今日と明日の分も含まれているんだなと思いつながら。

それでも多い気がしたが。

そして、二人は寺子屋を出て人里を雑談しながら歩いて行く。

その後、龍也は慧音の提案を受け、慧音の家に泊まる事になった。

翌日、龍也は寺子屋に行ってドッチボールの事を子ども達に教えた。

ドッチボールは子ども達に好評であったと言う。

100話達成記念(前書き)

これは、Gガンダムとのクロスです。

四神録の時系列は不明。

Gガンダムの時系列はガンダムファイト決勝トーナメント中です。

基本的に本編とは一切関係のないIFストーリーです。

以上の事を踏まえ、興味のある方はお進みください。

100話達成記念

「ん？」

龍也は気付いた時に見知らぬ場所に出ていた。

「ここ……何処だ？」

龍也はそんな事を言いながら周囲を見る。

そして、

「……幻想郷にこんな場所あったか？」

そう呟く。

周りに見えるのはビルやら車やら。

その事から、

「……外の世界か？」

龍也はそう呟いて首を傾げる。

何時の間に外の世界に出たのだろうかと思いつつ、龍也はもう一度周囲を見渡す。

すると、何かの看板を幾つか見つける。

そこに書かれていた文字は、

「……………漢字？」

漢字であつた。

だが、見える看板全ての文字が漢字で書かれていた。

その漢字が読もうと思つても読めなかつた事から、

「……………日本じゃないのか？」

龍也はそう思つた。

だとするならば、言葉が通じない可能性がある。

そうなれば、ここは何処なのかも聞けはしないだろう。

おまけに言葉が通じない事から変なトラブルになる可能性もある。

とは言つても、動かない事には何も変わらない。

なので、何処なのかは自分の足で歩いて確かめる事にした。

暫らく歩くと、

「ジジイ！！ この俺にぶつかるとはどつ言つた見だ！！」

そんな怒鳴り声が聞こえて来る。

龍也は怒鳴り声が聞こえて来た方へ顔を向ける。

龍也の視線の先には、赤い長い髪をしたガラの悪そうな男が老人に凄んでいた。

言葉が日本語である事から言葉は通じるんだなと思っていると、男が腕を振り上げていた。

このままではマズイと思った龍也は超速歩法を使ってその場から消える。

そして、男の腕が老人に当たる瞬間、

「年寄り相手に何やってんだ」

龍也が老人の近くに現れ、男の腕を掴み、そう言う。

腕を掴まれた男は行き成り現れた龍也に驚きながらも、

「てめえ!!! 何処から現れた!?!」

そう言い放つ。

「何処だっでもいいだろ。それより、こんな年寄り相手に何をしようとしていた?」

龍也はそう言いながら男の腕を締め上げようとすると、

「チイツ!?!」

男は腕を振るって龍也の拘束から逃れ、間合いを取る。

「少しはやる様だな」

龍也はそう言いながら数歩前に出て構える。

「たりめえだろうが！！ この俺を誰だと思っでやがる！！ 知らねえとは言わせねえ

ぞー！ このネオイタリアのガンダムファイター、ミケロ・チャリオット様をよー！！」

龍也の発言に対し、男が怒鳴り気味そう名乗る。

だが、

「……………誰？」

ミケロ・チャリオットと言つ名にまるで心当たりにない龍也は思わずそう

呟いてしまう。

その呟きが聞こえたのか、ミケロは

「てめえー！！」

怒りながら龍也に駆ける。

それを見た龍也は、同じ様にして駆ける

龍也はミケロの顎を蹴り上げる。

顎を蹴り上げられたミケロは宙を舞い、そのまま地面に叩き付けられる。

そう思われたが、

「ッ!!」

ミケロは地面に激突する前に体を回転させ、着地する。

今で意識を飛ばすつもりだった龍也は、少し驚きながら

「思ってた以上にやる様だな」

そう呟く。

その発言を聞いたミケロは、

「この糞餓鬼!! 舐めやがって!!!!!!」

そう言いながら跳躍する。

龍也もミケロを追うように跳躍する。

二人がある程度の高度に達すると、

「喰らいやがれ!! 必殺!! 虹色の脚!!!!!!」

その瞬間、

「なっ!?!」

龍也はある事に気付く。

それはミケロの腕だ。

ミケロの腕のから金属の様な物が見えた。

色はメタリックグレー。

アクセサリーとかそういう物ではない。

金属の様な物が腕と融合している。

そんな感じだ。

それを見られている事に気付いたのが、

「チイツ!?!」

ミケロは舌打ちをしながら龍也に蹴りを叩き込む。

「ぐっ!?!」

今の意識を取られていたせいで、龍也は回避できずにミケロの蹴りを喰らってしまっ。

その影響で龍也が数歩下がると、ミケロはその場から離れ始める。

「ッ！！ 待ちやがれ！！」

龍也は慌ててミケロを追い始める。

どこをどう追いかけたのか龍也には分からなかった。

だが、気付いた時には

「……どこだここ？」

どこかの通路にいた。

「ミケロがどっかの建物の中に入って行き、俺もそれを追って中に入り、見失ったから
適当に探していたら……ここに付いたと」

龍也はここまで来た経緯を思い出しながら歩いて行く。

すると、扉の前に辿り付く。

龍也はその扉を開け、先へと進む。

扉の先は何やら広い空間があった。

広いなと思いつつながら龍也が周囲を見渡していると、

「何だ……あれ……」

機械の塊の様なものを発見し、それに近付いてみる。

そして近くで見ると、

「ロボット……？」

そんな音が漏れた。

アンテナに二つ目の顔。

龍也にとって、これだけでロボットと表現するには十分であった。だが、それと同時に龍也はこのロボットから何とも言えないものを感じた。

この感覚は何だろうと思いつながら、龍也は更に近付いてみる。

近付いてみると、このロボットは壊れている様に見えた。

龍也がそう思っていると、

「ん？」

コックピットと思わしき部分に人が居るのを発見する。

そこには生きているんだが死んでいるんだか分からない状態の男がいた。

その男はコードの様な物で吊るされている様だ。

しかも、ミケロと同じ様にメタリックグレーの色をした金属の様な物がこの男の体の至る所に融合している様である。

龍也は気になって更に近付こうとした瞬間、

「ッー!!」

何かを感じてその場から離れる。

その数瞬後、龍也の居た場所に白い布が突き刺さる。

「ほお、今のを避けたか」

そんな言葉とともに白い布がその場から離れる。

龍也はその白い布がどこへ向ったのか目で追う。

どうやら、龍也が居る位置よりも高い位置から放たれた様だ。

そして、白い布が向った場所には男性が居た。

銀色の髪をおさげにし、紫色の拳法衣を着た初老の男性。

先程の布はこの男性の腰布であつた様だ。

「……………誰だ、あんた？」

龍也は気圧され気味にその男性にそう尋ねる。

この男性から放たれているプレッシャー。

それが文字通り、ケタ違いと呼べる程のものだからだ。

龍也がこの男から発せられているプレッシャーに屈しまいとしていると、

「ふん……………他人の名を尋ねる前に、自分から名乗るのが礼儀ではないか？」

男性がそう口にする。

その発言を受け、

「ああ……それもそうだな。龍也。俺の名は四神龍也だ」

龍也はまず、自分から名乗る事にした。

「四神龍也か……良い名だな……」

男性はそう呟きながら今居る位置から飛び降り、着地する。

そして龍也の目を見て、

「俺の名は東方不敗！！ 東方不敗マスターアジア！！！！」

そう名乗りを上げる。

その瞬間、東方不敗から放たれるプレッシャーが増大する。

「ッ！！」

龍也はそれに吞まれまいと脚を踏ん張り、

「はあああああああああああああああああああああああ！

！！！！」

霊力を解放する。

「ほお……」

龍也の解放された霊力を感じ、

「霊力とはな……貴様、陰陽師の類か？」

東方不敗は少し驚きながら、龍也にそう尋ねる。

「そんな大層なものじゃねえよ。俺は……ただの人間だ!!」

尋ねられた龍也は、東方不敗にそう言い放つ。

「ふふ……中々に面白い小僧だ。だが……この地下の秘密格納庫を見た以上……生かしては帰す訳にはいかん!!」

東方不敗はそう言って構えを取る。

「なら……俺はあんたを倒して生きて帰るぜ」

龍也はそう言って構えを取る。

「ふふ……威勢のいい小僧だ」

東方不敗はそう言って、面白いと言った顔をする。

そして暫らくその状態を維持すると、

「ッ……」

龍也は駆けて東方不敗に肉迫し、

「はあ!!」

拳を放つ。

東方不敗は放たれた拳を涼しい顔で避ける。

龍也は避けられた事を気にせず、続けて蹴りを放つ。

「ほう……これは中々……」

だが、その蹴りも東方不敗に避けられてしまう。

「くそ!!」

一発一発放つてもダメだと感じた龍也は、

「だああああああああああああああ!!!!!!」

連撃を放つ。

しかし、

「ふむ、荒削りではあるが筋は良い。それに若いだけあって思いっ切りも良い」

その全ては東方不敗には通用せず、全て避けられてしまう。

龍也が連撃を放ってから少しすると、

「ッ！！」

龍也の両腕は東方不敗に掴まれ、

「はあ！！」

「かつ！！」

がら空きになった胴体に蹴りを叩き込まれる。

東方不敗の蹴りをまともに受けた龍也はそのまま吹き飛び、

「がつ！！」

壁に激突して壁を陥没させ、そのまま地面に落ちる。

「ふむ、どうした？ もうお終いか？」

そう問いかける東方不敗に、

「へっ……まさか」

龍也はそう言って立ち上がり、東方不敗を睨みつける。

「ふふ……良い目だ」

睨みつけられた東方不敗はそう言って笑みを浮かべる。

少しの睨み合いの後、龍也は自身の力を変える。

「はあ!!」

炎の剣を振るう。

だが、その一撃は東方不敗が体を逸らす事で回避される。

「ふむ……カモスピードも大幅に上がっておる」

「ちい!!」

龍也は舌打ちをしながらもう一本の炎の剣を振るう。

「中々不可思議な術を使うものよ」

しかし、その一撃も見切られているかの様に避けられてしまう。

龍也はそのまま次の攻撃に移ろうとしたが、剣を振り切った後の隙を東方不敗が見逃すはずもなく、

「はあ!!」

「がつ!!」

東方不敗は龍也の顎を蹴り上げる。

それをまともに受けた龍也は宙に舞い上がり、天井に激突する思われた時、

「ッ!!」

龍也は完全に体勢を崩してしまふ前に地面に足を着けたからだ。

しかし、勢いは完全に殺せなかったため、地面を滑るようになつて後退してしまふ。

「ぐっ！！」

龍也は足に力を籠めて止まろうとする。

その中で龍也は顔を上げて東方不敗を視界に入れる。

視界に入った東方不敗は右手を突き出し、それを円を描く様に動かしていた。

すると、円の軌跡に何やら文字が浮かび上がり、

「秘技！！ 十二王方牌…… 大車併！！！！」

そこから小人サイズの東方不敗が現れ、それら全てが龍也へと向つて行く。

今の状況では回避は無理と龍也は判断し、防御の体勢に移行しながら自身の力を
変える。

白虎の力から玄武の力へと。

すると、龍也の髪と瞳の色が翠から茶に変わる。

同時に龍也の後退も止まり、無数の小人サイズの東方不敗が龍也に攻撃を仕掛ける。

龍也はその攻撃を黙って耐える。

それから少しすると、

「帰山笑紅塵!!!」

小人サイズの東方不敗が龍也から離れ、東方不敗に還って行く。

その瞬間、東方不敗は駆ける。

そして己が手から暗黒色の光を発せさせ、

「ダークネス……フィンガー!!!!!!」

それを龍也の頭部に叩きつけ、握り潰そうとする。

「ぐああああああああああああああああ!!!!!!」

あまりのダメージに龍也は絶叫を上げる。

「ほう……これに耐えるか」

耐えている龍也に東方不敗は少し驚いた表情を浮かべ、

「ふむ……今度は防御力が上がっておるのか……」

そう推察する。

すると、

「悠長に……俺の力を推察……している……余裕が……あるのか？」

龍也がそう呟く。

「何を……ッ!!」

東方不敗は何かを言いかけて気付く。

龍也の両手が巨大な土の手になっている事に。

東方不敗がそれに気付いた瞬間、龍也はそれで東方不敗を押し潰す様に両手を合わせ様とする。

龍也がしようとしている事に気付いた東方不敗は、土の手が当たる数瞬間に龍也の頭部から掴んでいた手を離し、その場から跳び上がる。

すると、土で出来た手と手が激突する。

そして、龍也から少し離れた場所に東方不敗は着地し、

「僕のダークネスフィンガーに耐え、その上反撃までしてくるか……やりおる……」

そう呟き、笑みを浮かべる。

そんな東方不敗の眩きを聞きながら、龍也は自身の力を変える。

玄武の力から青龍の力へと。

それに伴い、龍也の髪と瞳の色が茶から蒼へと変化する。

同時に土の手が崩壊し、代わりに両手から水が生み出される。

そしてそれは龍也の両手に纏わり着いていき、龍の手の様になる。

それを見た東方不敗は

「炎、風、地、水……か」

そう呟いて少し遠い目をしながら構えを取る。

東方不敗の雰囲気少し変わった事に龍也は警戒しながら両手を振り被り、

「水爪牙!!」

両手の爪先から水でできた斬撃を十本放つ。

放たれた水の斬撃を、東方不敗は苦も無く避ける。

その瞬間、

「ッ!!」

超速歩法で東方不敗の後ろに回り込んでいた龍也が右手突き出す。

寸前で気付いた東方不敗は体を捻りながら回避をし、

「ぬん!!」

その勢いを利用して龍也に回し蹴りを放つ。

「ぐうっ!!」

龍也はその蹴りを左腕で受け止め、

「はあ!!」

蹴りを放つ。

当たると思われた一撃。

だが、

「中々鋭い蹴りよ……」

それは東方不敗に受け止められ、

「だが、まだまだ甘いわ!!」

ジャイアントスイングの要領で振り回され。投げ飛ばされてしまう。

地面に激突し、バウンドした後に一回転し、龍也は着地する。

その後、顔を上げて東方不敗を見据えながら龍也は思う。

このままでは勝てないと。

ならば、使うしかあるまい。

龍也は両手に纏っていた水を消し、左手を額の辺りまで持つていくのと同時に
右手から水の剣を生み出す。

そして、左手からどす黒い靈力を溢れ出させて一気に左手を下ろす。
すると龍也の眼球が黒くなり、白を基調とした仮面が龍也の顔面に
現れる。

仮面のデザインは憤怒した鬼と悪魔を足し合わせて骨にした様なもの。

そして目元の部分から米神に向けて黒い線が走っている。

その突然の変化に東方不敗が驚いていると、龍也が東方不敗の目の
前に一瞬で
現れ、

「しまっ！！」

水の剣を一閃。

並大抵の者なら何も出来ずに一刀両断されるであろう。

だが、そこは東方不敗。

水の剣が当たる前に後ろに跳んで攻撃を避けたのだ。

だが、完全に避けられた訳ではないようで、胸元を僅かに斬られてしまった。

龍也は追撃を掛ける為に駆ける。

そして東方不敗が龍也の間合いに入った瞬間、東方不敗の姿が消える。

普通なら見失ったと思える様な速度ではあるが、龍也には追えた。

龍也は振り向くと同時に水の剣を振り降ろす。

だが、その斬撃は、

「ふん!!」

東方不敗の真剣白刃取りによって止められてしまう。

その瞬間、

「ッ!!」

水の剣が崩壊してしまう。

水の剣の唯一の弱点。

殺傷力が非常に高い反面、剣自体の耐久性が低いのだ。

それでも、並大抵の者では破壊する事は叶わないであろう。

ただ、東方不敗が並大抵の者ではなかった。

それだけの話しである。

そして、水の剣が崩壊した時の隙を付き、

「はあ!!」

「ぐっ!!」

東方不敗は龍也の胴体に蹴りを叩き込む。

蹴りを叩き込まれた龍也は吹き飛び、東方不敗との距離が離れてしまふ。

龍也は直に体勢を立て直し、構えを取ると、

「小僧……いや、四神龍也よ。この儂を一瞬とは言え気圧した事……
…まずは見事と
言って置いよう」

東方不敗が龍也にそう語りかける。

それを受けた龍也は、

「そいつはどうも」

すると、東方不敗の全身は黄金色に染まり上がっていく。

拳法衣も髪も何もかもを含めて。

「なっ!?!」

その変化を見た龍也は驚く。

「はあっ!?!」

そして、東方不敗の全身が完全に黄金色に染まり上がると東方不敗から放たれる
プレッシャーが桁違いに跳ね上がる。

同時に黄金の光が東方不敗の体中から溢れ、天に上って行く様になる。

神々しさの様なものを龍也は感じた。

だが、ここで屈したら負けだ。

龍也はそう思いながら一歩前に踏み出し、右手を前へと向ける。

すると、

「東方不敗が最終奥義いいいい……………」

東方不敗も技を放つ準備に入る。

その事を感じながら、

すると、互いの中間距離で青白い閃光と灼熱色をした巨大な拳が激突する。

そして、ぶつかり合った時に発生した余剰分のエネルギーが周囲の物を破壊していく。

それから長い様で短い様な時間が過ぎていくと、

「なっ！！」

均衡状態に終わりが見え始めた。

青白い閃光が灼熱色をした拳に押され始めたのだ。

少しずつ、そして確実に。

龍也は何とか押し返そうとするが、それは意味を成さず、

「ッ！！！」

灼熱色をした巨大な拳は龍也に激突し、大爆発を起す。

爆発が消えると、爆煙が龍也の居た周囲を覆う。

その爆煙が消えると、龍也がうつ伏せの状態で倒れていた。

仮面は完全に碎け、学ランもボロボロ。

そして髪の色も元の黒色に戻った状態で。

「ふむ……」

東方不敗が元の色に戻り、龍也の生死を確認しようと歩いて近付く
うとすると、

「いやー、流石は東方先生。お見事でしたよ」

拍手の音とともに男が現れる。

その男は長い黒髪に丸いサングラスのスーッ姿。

その上にコートを羽織っている。

そんな格好だ。

「ウォンか」

東方不敗はそう言いながらやって来た男の方に向く。

どうやら、現れたこの男の名はウォンと言っらしい。

「どうやら、こそこそと覗き見をしていた様だな」

東方不敗はそう言いながらウォンを一睨みする。

「これは手厳しい。しかし、私の様な者が東方先生とあの少年の戦
いの場にいるも

お邪魔になるだけでしょう?」

「ふん……喰えん男よ」

東方不敗がそう言つと、

「ぐ……ぐぐ……」

龍也が呻き声を上げながら立ち上がるうとしていた。

「ほう……まだ生きている様ですね」

ウォンはそう言いながら少し驚いた表情になる。

「どうです？ あの少年はこのままDG細胞の洗礼を与えて我等の配下にすると言つのは？」

「それは得策ではないな」

東方不敗はそう言いながら一步前が出る。

「ほう、それは何故です？」

「目だ」

「目……ですか？」

そう言つて、二人は起き上がろうとしている龍也の目を見る。

こんな状態でも、龍也の瞳は光を失ってはいなかった。

「その通り。あの目…… D G細胞の洗礼を与えたところで屈する事はあるまい。必ずや我等に牙を剥くであろう」

「それは残念。東方先生とあそこまで戦えた者ならさぞや有能な駒となった

でしょうに……」

そう言いながらウォンはサングラスを中指で押し上げる。

「ぐく……ぐく……」

東方不敗とウォンが話している間に、龍也は両腕を使って何とか上半身を起き

上がらせている状態になっていた。

そして、龍也の黒い瞳が東方不敗を睨みつける。

「ほう……その様な状態になってもまだ諦めずに戦って勝とうとするか」

東方不敗はそう言いながら感心したと言った表情になる。

「ここで死なせるには惜しい男よ」

東方不敗はそう言いながら腰布を外し、構える。

すると、その布は槍の様になる。

「せめてもの情け!! 苦しめぬ様に黄泉路へと送ってくれる!!」

そして、投擲。

龍也は何とか体を動かして避けようとする。

だが、間に合いそうにはなかった。

布の槍が龍也を貫くと思われた瞬間、布の槍に無数の閃光が走り、布の槍が細切れになる。

「何!？」

自身が投擲した布の槍が細切れになった事に東方不敗は驚きを隠せないでいた。

その瞬間、何者かが龍也を横から搔っ攫って行った。

「何が……」

龍也はそう呟きながら顔を上げる。

そこには黒、赤、黄の三色の色を配色した覆面を被った男性がいた。

「あ、貴方は……」

「喋るな!! 舌を噛むぞ!!」

龍也の発言を覆面を被った男性がそう言って切る。

どつやら自分を助けてくれた様だ。

龍也がそう思うと、龍也の意識は急速に薄れていった。

「ッ……！」

目が覚めた龍也は勢い良く上半身を引き上げらせる。

その時、自分はソファアーの上で寝ている事が分かった。

そして毛布を掛けられている事も。

その事を認識した後、

「ここは……」

龍也はそう呟きながら周囲を見渡す。

すると、ここが何処かの倉庫の中であると言っ事が分かった。

同時に、

「ロボット……？」

巨大なロボットを発見する。

しかも、そのロボットの頭部は先程見た壊れかけていたロボットの頭部の造形と似ていた。

何か関係があるのかと龍也が思っていると、

「目が覚めたか」

背後から声を掛けられる。

龍也が声を掛けられた方へ振り向くと、

「貴方は……」

そこには先程自分を助けてくれた男性がいた。

「コーヒーだ。飲めるか？」

そう言っつて、男性は龍也に金属製のカップを差し出す。

「いただきます」

龍也はそう言っつてカップをコーヒーを受け取り、コーヒーを飲む。

龍也がコーヒーを半分程飲むと、

「さて、君に聞きたい事があるのだが……」

男性はそう言いながら反対側にあるソファに座る。

「何でしょうか？ それと俺も聞きたい事があるのですが……」

「私に答えられる範囲であれば」

「ありがとうございます。では、まず俺の事からお話しますね」

そして、二人は互いの持っている情報を話し始めた。

二人が話し終わると、

「ふむ……異世界に幻想郷か……」

男性はそう言いながら考え込む。

「まあ、普通は信じられませんよね」

「いや、君が嘘を言っていないのは目を見れば分かる」

覆面の男はそう言いながら顔を上げる。

「だが、君自身は異世界に來た事をあまり驚いている様には見えな
いが……」

「まあ、幻想郷では色々ありましたからね。異世界に行った位では
驚いて取り乱す輩は

幻想郷には居ないと思いますよ」

そう言いながら、龍也は苦笑する。

「まあ、俺としては……」

龍也はそう言いながら顔を上げ、

「巨大ロボット……ガンダムと言う名でしたよね。そんな巨大ロボ
ットが普通にある事

に驚きましたけどね。後、人類が宇宙空間で生活していることにも」

目の前の男性の機体、ガンダムシユピーゲルを見てそう呟く。

実際、外の世界でコロニーを作って宇宙空間で生活する様になるの
は一体どれ位先で
あるう。

後、人工重力発生装置の完成も。

「それで、君はこれからどうするつもりだ？」

「そうですね……俺自身は異世界に移動する術がないので、迎えが来るまでこの世界で

生活するしかありませんね。異世界の移動が自由にできるのが一人いるので」

龍也はそう言いながら拳を握り閉める。

だが、その前にと龍也は思う。

紫が迎えに来る前にやらねばならない事がある。

それは、東方不敗マスターアジアへのリベンジ。

龍也は負けたままで大人しくしていられる性格ではない。

しかし、今の自分と東方不敗の力量差は明白だ。

また戦いを挑んでも、同じ結果になるだけであろう。

修行が必要だ。

龍也がそう思っていると、

「……悔しいか？」

「え？」

「東方不敗マスターアジアに負けたのが悔しいかと聞いている」

男性は龍也にそう尋ねる。

それに対し、

「……ええ、悔しいです」

龍也はそう答える。

「勝ちたいか？」

「勝ちたいです」

男性の再度の問いに龍也がそう答えると、

「いいだろう!!」

男性は立ち上がり、

「この私が鍛えてやる!!」

そう言い放つ。

それを聞き、

「いいんですか？」

龍也はそう尋ねる。

鍛えてくれると言っているのであれば、龍也としても願ったり叶ったりだ。

「勿論、ただでとは言わん。君がこの世界にいる間、私のサポートをして貰いたい」

「サポートですか？」

「ああ」

男性のその言葉を聞き、龍也は少し考える。

この男性の目的は聞かされていないが、こうやって話してみても悪党と言った感じを龍也は受けなかった。

おまけに自分を助けてくれた。

その事から、

「分かりました、お願いします」

龍也は目の前の男性を信じる事にした。

「あ、そう言えば」

龍也は何かを思い出したかの様にそう言う。

「まだ、お互いの名前を名乗ってませんでしたね」

「そう言えば、そうだったな」

男性も思い出したかの様にそう呟く。

「俺は龍也。四神龍也と申します」

「私の名はシュバルツ。シュバルツ・ブルーダーだ」

そして、二人は互いの名前を名乗りあつた。

こうして、龍也はこの世界にいる間、シュバルツに鍛えて貰う事になった。

それとは別にこの世界での戦いにも巻き込まれていくのだが、それはまた別のお話。

アルバイト編 その5

「さて、これが今日の分だ」

「ありがとうございます」

龍也はそう言って、慧音からお金を受け取る。

「それにしても、君が来てくれたお陰で私も随分楽ができたよ」

「そこまで大した事はしてないんですけどね……」

龍也はそう言いながら頬を掻く。

実際、龍也が寺子屋でした事と言えば殆どが慧音の補佐。

慧音の変わりに教材を運んだり、生徒が帰った後は率先して掃除をしたり、

慧音が作ったプリントの誤字脱字をチェックしたりなどなど。

劇的に慧音の助けになったと言う訳ではない。

「しかし毎回思ってますが、俺への給金……多すぎませんか？」

「これ位は正当な報酬だと思うけどね」

慧音はそう言って言葉を切り、

「それに、君は私の生徒達の命を救って貰った事があったからね。」

その分も
入っていると思ってくれていいよ」

「別に報酬欲しさに助けた訳ではないんですがね……」

「分かっているさ。ただ、それは私の気持ちだ」

「まあ……そう言う事でしたら」

龍也はそう言ってお金を仕舞う。

そこまで言われたのなら、受け取らなければ悪いと思ったからだが。

「それで、これからどうするんだい？　もう暫らく寺子屋でのバイトを続けて

みるかい？」

「そうですね……そろそろ別の場所でバイト先を探そうと思います」

「なんだ、もう行くのか」

「ええ。一つの場所に留まり続けると言うのはどうも性に合わなくて……」

そう言いながら、龍也は後頭部を掻く。

「落ち着きがないとも言えるが……君位の年齢だとそれ位が丁度いいのかも
しれないな」

慧音はそう言って、龍也の目を見る。

「大丈夫だと思うが、道中気を付けて」

「はい、ありがとうございます」

龍也はそう言って寺子屋を出て、空中に躍り出る。

そして、次のバイト先を探しに向った。

龍也は現在、紅魔館を目指して移動中である。

何故かと言うと、次のアルバイト先を紅魔館に決めたからである。

序に、仮面の力をどの程度まで使いこなせているか美鈴と組み手をして確かめようと

思ったからでもあるが。

「おっ、見えてきた」

紅魔館が見えてくると龍也は地面に降り立ち、歩いて紅魔館を目指す。

少し歩くと、門の前に立っている美鈴の姿が見える。

「美鈴」

龍也は門に近付きながら美鈴に声を掛ける。

「あ、龍也さん。こんにちは」

龍也の存在に気付いた美鈴はそう挨拶をする。

そして、龍也が近くまで来ると、

「図書館へご用ですか？」

美鈴はそう尋ねる。

「いや、一寸金欠何でここでバイトをさせて貰おうかと思って……」

「ここでバイトですか……」

美鈴はそう言って少し考え込む。

「何か問題でもあるのか？」

「問題……と言う程ではないんですが……うちの妖精メイドがどう言う待遇で働いているか知ってますか？」

「いや」

龍也はそう言って首を横に振る。

「うちの妖精メイドの待遇は、三食有りの昼寝、休日、給与なしです」

「うわぁ……」

美鈴のその発言を聞き、龍也は思わずそう漏らす。

「まあ、お嬢様は龍也さんの事を気に入っていますし、最低でも給与は出ると
思いますよ」

それを聞き、龍也は給与が出ればいかと考える。

「もう少ししたら咲夜さんが来ると思いますので、ここでバイトする
のであれば、」

咲夜さんにそう言えばいいと思いますよ」

「分かった、ありがとう。それと、美鈴に一つ頼みがあるんだが…」

「私にですか？」

「ああ。仮面の力をどれだけ使いこなせているか確かめたいんだ。手合わせ……お願いできるか？」

「ええ、私は構いませんよ」

美鈴はそう言っつて、龍也から間合いを取って構える。

それを見た龍也は構えを取り、左手を額の辺りまで持って行く。

そして、左手からどす黒い霊力を溢れ出させて一気に左手を下ろす。

すると仮面を付け、眼球を黒くし、瞳の色を紫にした状態になる。

その状態の龍也の様子を見て、

「ッ!」

美鈴は感じる霊力の量、密度、禍々しさが上がったなと思った。

そして、

「いくぜ」

龍也はそう言って大地を駆け、美鈴に肉迫して拳を振るう。

予想よりもずっと速い事に美鈴は驚きながらも、龍也の拳を両腕を交差させる事で防御する。

その瞬間、

「ぐっ!!」

美鈴は吹き飛ばされてしまう。

スピードが上がった事を考慮して力を籠めて防御したのにこれである。

見積もりが甘かったかと美鈴は思いながら大地に足を付けて止まる。

同時に、大地を蹴って龍也に駆ける。

そして龍也が自身の間合いに入った瞬間、

「はあ!!」

肘打ちを放つ。

しかし、その肘打ちは龍也が体を逸らした事で回避されてしまう。

だが、美鈴はその事を気にせず、

「しっ！！」

間髪入れずに回し蹴りを放つ。

最高のタイミングで放たれたと思われる一撃。

が、

「なっ！！」

その回し蹴りを龍也は腕で防御をしてみた。

今の回し蹴りを防がれた事に美鈴が驚愕していると、

「はあ！！」

龍也は空いている腕で美鈴の顎目掛けて掌打を放つ。

寸前で気付いた美鈴は、

「くっ！！」

頭部を後ろの倒す事で何とか回避に成功する。

その後、美鈴は後ろに跳んで龍也から間合いを取る。

その瞬間、再び龍也に近付いて、

「はあああああああああああああああああ！……！！！」

連撃を放つ。

正拳突き、裏拳、肘打ち、掌打、前蹴り、回し蹴り、膝蹴り、踵落しなどが流れる様に放たれていく。

そんな美鈴の連撃を、龍也は全て紙一重で回避していく。

その状態から少しすると、

「なっ!?!」

龍也は美鈴が振るった拳を掴み、

「はあ!?!」

肘打ちを美鈴の胴体へと叩き込む。

「くっ……」

肘打ちをまともに受けた美鈴は数歩後ろに下がり、

「ッ!?!」

大きく後ろに跳んで龍也から間合いを取り、

「はああああああああああああああああああああ……!?!」

妖力を解放する。

美鈴が妖力を解放すると、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおー!!!」
「！」

龍也も同じ様に靈力を解放する。

その後、二人はジリジリと互いの間合いを詰め、タイミングを見計
い、

「ッ!!!」

同時に駆ける。

そして二人は同じタイミングで拳を振り被り、

「はあ!!!」

拳と拳を激突させる。

その瞬間、大きな激突音と衝撃波が発生する。

それから少しすると、

「随分……強くなりましたね、龍也さん」

そう言って、美鈴は拳を離す。

「手合わせ、ありがとう。美鈴」

龍也もそう言って拳を離して左手を額の辺りまで持って行く。

すると、仮面がどす黒い霊力になり、

「ふう……」

風に流される様に消えて行った。

仮面が消えると、龍也の眼球と瞳の色が元の色に戻る。

その様子を見た美鈴は、

「それにしても……仮面の保持時間……かなり延びましたね。あの時からそれ程時間が経った訳でもないのに……」

そう言う。

「ああ、俺も驚いたよ。仮面の保持時間が延びた事に伴い、疲労感もかなり下がった

しな。あの時限りだと思ってたけど……これも映姫と戦ったお陰かな」

「映姫……閻魔様の事ですか。天狗の新聞には龍也さんが閻魔様と戦ったと

書かれていましたが、本当だったんですね」

美鈴はそう言って、少し呆れた表情になる。

「閻魔様に戦いを挑むとか……随分な無茶をしますね」

「ははは……」

龍也は苦笑いを浮かべながら後頭部を搔く。

「あ、そうだ。仮面を付けた俺って前と比べて何か変わった事があったか？」

「そうですね……保持時間と疲労感を除けば、龍也さんから感じる霊力の量、密度、禍々しさなどが前に比べて格段に上がってますね。基本能力に関しては、龍也さんの力があれからの程度上がっているのかと言う事と、仮面が龍也さんの力をどの程度上げているか分からないので詳しくは言えませんが……前の時よりも格段に上がってますね」

美鈴は龍也が仮面の保持時間を上げる修行をしていた時の事を思い出しながら
そう言う。

「それとは別に……少し気になった点が……」

「気になった点？」

「はい、もう一度仮面を出して貰えますか？」

「分かった」

美鈴にそう言われ、龍也は再び仮面を出す。

龍也が仮面を出すと、美鈴は真剣な表情で仮面を観察し、

「あ、やっぱり」

そう呟く。

「何がやっぱりなんだ？」

そう言っつて、龍也は首を傾げる。

「この仮面の目元から米神に掛けて走っている黒い線。これが前の時より太くなっています」

「え？」

美鈴にそう言われ、龍也は両手を目元の所に持って行く。

「……そうなのか？」

「ええ、確かに太くなっています」

美鈴にそう言われ目元から米神の部分を少し触った後、龍也は仮面を消す。

すると、

「お疲れ様」

咲夜がタオルと飲み物を持って現れた。

「咲夜さん」

急に咲夜が現れた事で美鈴が少し驚いた表情になる。

「取りあえず、はい」

咲夜はそう言って、二人にタオルと飲み物を手渡す。

「ありがとうございます」

「サンキュ」

二人はそう言って、タオルと飲み物を受け取る。

二人が汗を拭き終わり、飲み物を飲み終わると、

「それで、龍也は図書館の用かしら？」

「いや、実は……」

龍也はそう言って事情を話し始める。

「そっね……」

それを聞いて咲夜は少し考え、

「お嬢様に聞いてくるから少し待ってて」

そう言っつて消える。

咲夜が消えてから少しすると、

「ちゃんとお給金は出すそうよ」

再び咲夜が現れてそう言っつ。

「良かったですね、龍也さん」

それを聞き、美鈴がそう言っつ。

「ああ」

龍也がそう返すと、

「なら、二二二で暫らく働くと言っつ事ばいいのかしら？」

咲夜が龍也にそう尋ねる。

それに対し、

「ああ、宜しく頼む」

龍也はそう返す。

それを聞いた咲夜は

「それじゃ、付いて来て」

そう言っただけで歩き出したので、龍也は咲夜の後について行く。

「やっぱり、これを着る事になるのか」

紅魔館の中に入った後、ある一室で咲夜に渡された執事服を見ながら龍也はそう言う。

「当然よ。ここでの仕事着と言ったらそれかメイド服になるわ。そ

れとも……メイド服
を着る？」

咲夜は少し悪戯っぽく龍也にそう尋ねる。

そう尋ねられた龍也は、

「これでいいです」

間髪入れずにそう答える。

「そう。着替え終わったら外に出てね。貴方の着ている服はその籠
の中に入れて

置いて。後で洗濯しておくから」

咲夜はそう言っ、部屋の中から出て行く。

龍也はそれを見送った後、ポケットなどに仕舞っている物を出して
執事服に着替える。

着替え終わった後、龍也は部屋を出て、

「俺は何をすればいいんだ？」

咲夜にそう尋ねる。

「そうね……館の掃除は一通り終わっているから……パチュリー様
の所へ行って

貰おうかしら。パチュリー様が何も用がないと仰られたらまたここ
に戻って来て

くれるかしら」

「分かった」

龍也はそう言っ、パチユリーの所へ向った。

「パチユリー、居るかー？」

龍也はそう言いながら図書館の中を進んで行く。

少しするど、

「あら、龍也じゃない」

本棚の間からパチュリーが姿を現す。

そして、

「何で執事服なの？」

龍也にそう尋ねる。

「ああ、それは……」

そう言っつて、龍也は事情を話し始める。

「成程、それで執事服を着てるのね」

龍也から事情を説明してもらい、パチュリーは納得したと言っつ表情になった。

「それで、何か手伝う事はないか？」

「そうね……小悪魔と一緒に本の整理をして貰えるかしら？」

「分かった」

龍也はそう言っつて、近くに居た小悪魔と一緒に本の整理を始める。

本の整理を始めて暫らくすると、

「小悪魔が頼まれてたって言う本の整理は終わったけど、他に
事はあるか？」

本の整理が終わった龍也がパチュリーにそう尋ねる。

「そうね……今日はもういいわ。」苦労様

「おう」

パチュリーからの労いの言葉に龍也がそう返すと、

「いじ」

咲夜が龍也の後ろに現れて、龍也の後頭部を小突く。

「何だ、咲夜か。どうしたんだ？」

龍也は振り返りながらそう尋ねる。

「私はパチュリー様に紅茶をお届けに来たのよ。それよりも……」

咲夜はそう言いながら龍也に一歩詰め寄る。

「何だよ？」

「貴方は短期間とは言え、今は紅魔館の執事なのよ。その執事が、
お嬢様の御友人に

対して、『おう』はないんじゃないかしら？」

「あ、それもそうか……」

咲夜のそう言われ、龍也は少し考える。

そして再びパチュリーに向き直り、

「その御言の葉、有り難く承り候」

そう言い直した。

「んー……何かが違う様な気が……」

龍也のその言葉に咲夜が少し考えていると、

「りゅーやー!」

フランドールが龍也に飛び込んで来た。

「お……っ」と

飛び込んで来たフランドールを龍也が抱き止めると、

「ねえねえ、龍也。一緒に遊ぼ」

フランドールがそう言って来た。

すると、

「それじゃあ、貴方は妹様のお相手をお願いね」

咲夜がそう言って来た。

咲夜がそう言ったのと同時に、

「ほら、行く行く」

フレンドールは龍也の胸元から降りて、龍也の手を引っ張って行く。

「お、おい」

フレンドールに手を引っ張られている龍也がそう言っても、フレンドールは止まらない。

結局、龍也はそのままフレンドールと遊ぶ事となった。

こうして、紅魔館での執事生活の一日目が終わった。

アルバイト編 その6

「お嬢様、クッキーをお持ちしました」

龍也はそう言いながら少し小さめのテーブルの上にクッキーを乗せた小皿を置く。

「ありがとうございます」

レミリアはそう礼を言って、クッキーを一つ掴んで食べる。

「ふむ……貴方が紅魔館で執事をやり始めて一週間程になるけど、大分執事が板に付いて来たじゃない」

「恐縮です」

龍也はそう言って、レミリアに頭を下げる。

それと同時に、ここ一週間の事を思い返す。

ここで執事のバイトをやり始めて最初に指導された事は言葉使いであった。

美鈴、咲夜、小悪魔、妖精メイドなどは立場上同格であったり、龍也の方が立場が

上であったりするので言葉使いは変えなくてもよかったが、レミリアとパチュリー

は別である。

二人はこの主とその親友である。

咲夜にその事をキチンと理解するようにと言われていた。

最も、フランソールは何時もの口調のままがいいと言われたのでそのままだが。

「どう？ このままここで執事をやってみない？」

「それはまたの機会と言う事で」

「それは残念」

レミリアはそう言い、クッキーをまた一つ掴んで食べる。

そして、レミリアがクッキーを食べ初めて少しすると、

「ねえ、龍也」

「何でしょうか？」

「少し頼みたい事があるのだけど」

そう切り出した。

「お嬢様の命とあらば」

「ありがとう」

レミリアはそう言って、龍也に顔を向ける。

「それで、頼みというのは？」

「何か面白い物を探してきて」

「面白い物……ですか？」

「ええ」

龍也は無茶振りだなと思いつつも、

「畏まりました」

そう答えて一礼をした。

一時的とはいえ、今の龍也は紅魔館の執事だ。

主の命は可能な限り従わねばなるまい。

そう思いながら龍也はテラスへと移動する。

そして咲夜が時間を止めて消える様に移動するのを真似る様にして、龍也は超速歩法を使って消える様に移動をする。

「それにしても面白そうな物ねえ……」

龍也は空中を移動しながら考える。

少しすると、面白そうな物がありそうな場所として香霖堂が思いついた。

あそこには様々な物がある。

そこに無くとも、霖之助に相談をすれば何か良い物が思い付くかもしれない。

まずは香霖堂を目指そうと龍也は考え、その場に止まって魔法の森を探す。

香霖堂は魔法の入り口付近にあるので、魔法の森を発見すれば香霖堂の発見は容易だ。

「……………お、見つけ」

魔法の森を発見した龍也は体の向きを魔法の森へと向け、移動を開始する。

魔法の森へと移動を開始して少しすると、

「あやややや、これは龍也さん」

文が現れ、龍也と同じ速度で龍也の隣を飛行する。

「文か」

龍也はそう言って文に顔を向ける。

「処で龍也さん」

「何だ？」

「その格好どうしたんですか？」

「ああ、これが」

龍也はそう言いながら視線を下に向け、自分の着ている執事服を見る。

「今、一寸金欠でな。紅魔館で執事のバイトをしてるんだ」

「ほうほう、紅魔館でアルバイトですか」

文はそう言っ手帳を取り出し、

「これは記事になりそうですね」

手帳にペンを走らせる。

「相変わらずだな……」

龍也は少し呆れ気味にそう呟く。

「龍也さんの記事は人里の子ども達に結構な人気がありますからね。定期的に龍也さんの記事を作るようにしているんですよ」

「……殆ど隠し撮りみたいな物だったよな。俺の記事」

「その方が、そのまんまの龍也さんを撮る事ができると思ひまして」

それを聞き、物は言い様だなと思ひながら、

「そついや、俺が映姫と戦った時ってお前どこにいたんだ？」

龍也は気になった事を文に尋ねてみた。

「それは御二人が戦っている場所から離れた所ですよ。正確に言つと無縁塚の入り口」

付近ですね」

文はその時の事を思い出しながらそう呟く。

「御二人の戦闘の余波が来ない場所で撮影していたんですが……」

文はそう言いながら龍也をジト目で見る。

「龍也さんが放った火球の爆発の余波のせいで私は吹き飛ばされてカメラなども壊れてしまっただんですよね……」

「いや、それを俺に言われても……」

「まあ、それはもう過ぎた事なのでいいんですが……」

そう言った後、文は溜息を一つ吐き

「龍也さんに聞きたい事があるんですよ」

そう尋ねる。

「聞きたい事？」

「はい。閻魔様との戦い、どうなったんですか？」

「ああ、あれは俺の負けだ」

「そうだったんですか……」

文はそう呟きながら手帳にペンを走らせる。

「そう言えば、お前の新聞には勝敗の結果までは書かれてなかったな」

「先程も言いましたが龍也の放った火球の爆発の余波で吹き飛ばされましてね。私が龍也さんと閻魔様の戦っていた場所に戻った時には、もう御二人ともいませんでしたから勝敗の行方までは分からなかったのです」

文はその時の事を思い出しながらそう語る。

「てかあの時、お前何時から俺の事を付けてたんだ？」

「龍也さんが再思の道へ入る少し前ですかね」

文の発言を聞き、鈴仙との一件を見られていないと分かって龍也はホッとする。

「それはそうと、龍也さんは閻魔様に負けてしまいましたがりベンジとかは考えていますか？」

「ああ、もっと強くなって再び戦いを挑む積りだ。今度は俺が勝つ」

「成程、龍也さんはリベンジする気満々と……」

文はそう言いながら手帳にペンを走らせ、

「てか、閻魔様相手にリベンジを決め込もうとか考えるのは龍也さん位ですね」

ポツリとそう呟く。

「そうなのか？」

「そうですね。閻魔様に逆らうとか……下手をしたら死後、天国にも地獄にも行けなくなるかもしれないんですよ」

「ふーん……」

それを聞き、龍也は解っているんだか解っていない様な表情をする。

そんな表情をしている龍也を見た文は溜息を一つ吐き、

「ま、龍也さんがそんな調子ですから私もネタには困らないんですけどね」

そんな事を呟く。

「おい……」

文のそんな発言を聞いた龍也はジト目で文を見つめる。

すると、

「あはは……それではまた!!」

文はどこかへ猛スピードで飛んで行った。

「……………はあ」

文の姿を見送った後、龍也は溜息を一つ吐いた。

そして、再び香霖堂へと向かった。

「霖之助さん、居ますか？」

龍也はそう声を掛けながら香霖堂の扉を開け、中に入っていく。

そのままカウンターの方へ進んで行くと、

「やあ、いらっしやい」

カウンターの方で本を読んでいた霖之助がそう声を掛けて来た。

「おや？ 執事服とは珍しい格好だね」

龍也に視線を向けた霖之助はそう声を掛ける。

「ああ、この格好はですね……」

龍也はそう言っつて、霖之助に説明する。

「成程……それで紅魔館で執事のアルバイトか」

「ええ」

「それにしても……紅魔館でアルバイトとは。君も中々命知らずだね」

そう言っつて、霖之助は少し呆れた表情をする。

「ははは……」

そう言われた龍也は、後頭部を搔く。

「ま、君はレミリア・スカーレットに随分気に入られている様だか

「それでも問題ないのかもしれないね」

そう言った後、霖之助は少し考え、

「そうだ。龍也君、少しいいかい？」

そう尋ねる。

「何ですか？」

「紅魔館でのアルバイトが終わった後、ここでもアルバイトをしてみないかい？」

「ここですか？ 俺としては願ったり叶ったりですが」

「それは良かった。内容はその時に教えるよ」

「分かりました。紅魔館での執事のバイトが終わったらまた来させて貰いますね」

「うん、よろしく頼むよ。それで、本日は何の御用かな？」

「ああ、そうでした。実は……」

そう言って、龍也はレミリアに頼まれた事を霖之助に説明する。

「うーん……面白い物ねえ……」

霖之助はそう呟いて少し考え、

「あ、そうだ。これなんかどうかな」

カウンターの下に置いてある物を取り出す。

取り出された物は花の置物だ。

だが、ただの花の置物ではないようだ。

花の部分にはサングラスが付けられていた。

「これはあれですか？ これの前で音を立てるとこの花が踊りだすって言う……」

「何だ、知っていたのかい」

「ええ、まあ。にしても、懐かしい物だな」

龍也は懐かしさを感じながら花の置物を見ていく。

「それで、どうする？」

「そうですね……」

龍也は花の置物を見ながら少し考え、

「これ、買います」

これを買う事を決意する。

「毎度」

龍也は代金を払って花の置物を受け取る。

「それじゃ、紅魔館でのアルバイトが終わったらよろしくね」

「ええ」

そう挨拶を交わし、龍也は香霖堂を後にした。

「あら、お帰り」

紅魔館に戻り、廊下を歩いていた龍也に咲夜はそう声を掛ける。

「ああ、ただいま」

声を掛けられた龍也は足を止め、咲夜の方に振り返ってそう返す。

「レミ……じゃなかった。お嬢様は？」

「お嬢様は寝室でお休みになっているわ」

「そうか……」

となると、レミアアが起きて来るまで暇である。

龍也がどうやって暇を潰そうか考えていると、

「暇なのかしら？」

咲夜がそう尋ねる。

「ああ。お嬢様に頼まれてた物を渡すのはお嬢様が起きてからになるからな。それまで暇と言えば暇だな」

「それなら、パチュリー様の所へ向ってこないかしら」

「パチュリー……様の所へか？」

「ええ。先程パチユリー様の所へ紅茶を届けに行った時に、暇ができたら自分の所へ来てて仰られてたから」

「分かった。これから向うよ」

「ありがとう。貴方の持つてる荷物は貴方の部屋に運んでおくわ」

「頼むよ」

そう言って買って来て来た物を咲夜に渡すと、龍也は図書館へと向った。

「お呼びでしょうか、パチュリー様」

図書館に着いた龍也は、パチュリー所まで言ってその声を掛ける。

「あら、貴方が来たの」

龍也の姿を見たパチュリーは少し驚いた表情し、読んでいた本を閉じる。

「まあ、力仕事になるだろうから咲夜よりも貴方の方がいいかもね」

「力仕事……ですか？」

「ええ。あれの整理を手伝って」

パチュリーはそう言ってある一角を指さす。

龍也はそれに釣られる様にして、パチュリーが指をさした方へと顔を向ける。

そこには大量の本が積み重なっていた。

数千冊はあるだろうか。

「あれは？」

「魔導書と外の世界の本ね。幻想入りしたものであると思うけど」

積み重なった本を見ながらパチュリーはそう語る。

「小悪魔一人じゃ時間が掛かりすぎると思って助っ人を咲夜に頼んだのよ」

「成程」

「それで、頼まれてくれるかしら？」

「ええ、お任せください」

龍也はそう答え、仕事に取り掛かるうとすると、

「おー、こりやまた大量の本があるな」

龍也の背後からそんな声が聞こえて来た。

誰だと思って龍也は振り返る。

そこに居たのは、

「よっ」

魔理沙であった。

「貴女……一体どこから入って来たのよ？」

パチュリーは少し呆れた表情で魔理沙にそう尋ねる。

「どこからって……正面からだぜ」

「あの子は一体何をやってるのかしら……」

パチュリーはそう呟いて頭を押さえる。

「処で、龍也は何でそんな格好をしてるんだ？」

龍也の着ている服を見た魔理沙はそう尋ねる。

「ああ、これは……」

今日はよくこの事を聞かれるなと思いつつながら、龍也は執事服を着ている理由を説明する。

「それで執事のバイトをしてるのか」

龍也の説明を聞き、魔理沙は納得がいったと言う表情のなる。

「本の整理の前に、鼠狩りを龍也に頼もうかしら」

「おいおい、それは酷いぜ」

そして、魔理沙とパチュリーの二人は言い争いを始める、

そんな二人を尻目に、龍也は小悪魔と一緒に本の整理を始めた。

それから少しすると魔理沙も本の整理を手伝い始めた。

何でも、本の整理を手伝う代わりに魔導書を何冊か借りると言う事になったらしい。

何時もなら勝手に本の持っていくのだが魔理沙曰く、今日はそんな気分らしい。

こうして、魔理沙の手を借りながら本の整理を進めていった。

アルバイト編 その7

「はい、今までのお給金」

咲夜はそう言いながら龍也にお金は手渡す。

「サンキュ」

龍也は礼を言いながらお金を受け取り、財布の中に仕舞う。

「次の予定はあるのかしら？」

「ああ。霖之助さんにここでのバイトが終わったら来てくれって言われてるからな。

香霖堂の方へ向うつもりだ」

「そう、それは残念ね」

咲夜はそう呟き、溜息を一つ吐き、

「次の予定がなければもう暫らくここで働かないかって言う提案を
し様と違って
いたのに。貴方がここで執事をやってくれると私も随分楽ができて
いいのに」

残念そうな顔でそう言う。

「はは、それはまた今度の機会と言う事で」

龍也がそう言つと、

「ええー!!! 龍也もう行っちゃうの?」

フレンドールが咲夜の後ろから現れた。

「フレンドール」

「妹様」

龍也と咲夜は少し驚いた様にフレンドールの方を見る。

「あれ、お前つてこの時間帯は寝てるんじゃないのか?」

龍也は疑問に思った事をフレンドールに尋ねる。

今の時間帯は朝と昼の間位である。

偶に起きてる事はあれど、レミリアもフレンドールもこの時間帯は寝ているのである。

龍也がそんな事を思っていると、

「少しお腹が空いて寝付けなくて……」

フレンドールが理由を説明してくれた。

それで咲夜を探していたら二人を見つけたとの事。

「それでしたら、後でケーキと紅茶をお持ちします」

お腹が空いたと言うフランドールに咲夜はそう返す。

「うん、お願い」

咲夜にそう言った後、

「それより、龍也はもう行っちゃったの？」

フランドールは龍也に再びそう尋ねる。

「ああ。一箇所の場所に留まり続けるって言うのは性に合わないからな」

「落ち着きがないわねえ」

咲夜が少し呆れた様にそう呟いた。

「うるせい。この性分はまだ暫らくは直りそうにないしな」

咲夜にそう返した後、龍也はフランドールの方を見て、

「また来るから……な」

そう言う。

「うー……」

フランドールは少し不満そうであったが、

「絶対だからね」

「おう、絶対だ」

龍也の返答を聞いて、直に機嫌を直す。

「それじゃ、またいらっしやい」

「また来てね」

「おう」

そう挨拶を交わし、龍也は紅魔館を後にした。

「霖之助さん、居ますかー？」

香霖堂に着いた龍也は、そう尋ねながら扉を開けて中へと入って行く。

「ああ、龍也君。待っていたよ」

カウンターの方に居た霖之助が待っていたと言わんばかりの表情で迎えてくれた。

「執事服でここに来たんじゃないと言う事は紅魔館でのアルバイトは終わったのかい？」

「はい」

龍也はそう肯定しながらカウンターへと近付いて行く。

「それで、俺は何をすればいいんですか？」

「それを説明する前に、一寸した問題を出そうと思う」

「問題ですか？」

そう言って、龍也は首を傾げる。

「うん。知つての通り、ここにある商品の中には外の世界の道具も置いてある。その

外の世界の道具を僕は一体どうやって手に入れていると思う?」

「それは……幻想入りした物を集めているんですよね?」

「うん、正解だ。では、僕は主にどんな場所で外の世界の道具を拾っていると思う?」

「それは……」

龍也は頭を捻って考えてみるが、答えは出なかった。

「すみません、一寸分かりません」

「正解は無縁塚だよ」

「無縁塚って言うと……再思の道の先にある無縁塚ですか?」

「うん、そうだよ。あそこは色々な所と繋がり易くてね。それで外の世界の道具もよく落ちてるんだよ」

だから其処をよく利用しているんだよと霖之助は付け加える。

「へえー……」

霖之助の説明を聞き、龍也は感心した様な表情になる。

「ただ、問題があつてね」

「問題ですか？」

龍也がそう尋ねると、

「うん。知つての通り僕は対して強くない上に空も飛べないからね。必然的に徒歩で向う事になる」

霖之助は眼鏡を中指で押し上げ、語り始める。

「僕は半妖だから普通の人間と比べて妖怪に襲われ難いがそれでも零と言う訳ではない。なので基本的に妖怪などが出難い時間帯に出歩く事になる。だが、それでは大した量を運べない上に残してきた道具を妖精や妖怪に持っていかれたり壊されたりと言つた事態になってしまう」

「成程、分かりました。つまり、俺が無縁塚に行つて落ちている道具を拾ってくればいいんですね？」

「うん、その通りだ。龍也君の強さなら問題ないと思つが……頼めるかい？」

「分かりました、任せてください」

「ありがとう」

霖之助はそう礼を言い、カウンターの下の方から大き目の葛籠を取り出す。

「これは……葛籠ですか？」

「うん。葛籠なら蓋を閉められる分、入れた物が零れ落ちると言う可能性はグッと低くなるからね。序に動きを阻害しない様に背負えるタイプの物に改造をしているんだ」

霖之助はそう言いながら葛籠を龍也に手渡す。

「それと報酬は持って来た量が多ければ多い程増やさせて貰うよ」

「分かりました」

龍也はそう返しながら葛籠を背負う。

「それじゃ、行って来ます」

「うん、気を付けて」

そう言葉を交わした後、龍也は香霖堂を後にした。

「しっかし、無縁塚に外の世界の道具が落ちているってのは知らなかったなあ……」

そんな事を呟きながら、龍也は再思の道上空を進んでいた。

ここ、再思の道を通るのはあの多種多様な花が咲き乱れた自然現象の様な異変の時以来。

あの時からそこまで時間が経っている訳ではないが、龍也には妙に懐かしく感じられた。

まだ様々な花が咲き乱れているが、それでもあの時程ではない。

「完全に落ち着くまでもう暫らく掛かるかな？」

龍也はそう呟き、前方をポケットと見つめる。

基本的に空を飛んでいる時は妖怪に襲われる事はない。

このままのんびり行こうと思っていると、

「ッ!」

龍也の目の前を妖力の弾が通過する。

真下からの攻撃かと思いつながら龍也は妖力の弾が飛んできた方へと目を向ける。

其処には、四足歩行で爬虫類の様な少々大きい妖怪が無数に居た。

どうやら、今で龍也を撃ち落として食べ様としていたらしい。

このまま進んでいっても再び攻撃を放ってきてそうなので、龍也はここで倒す事を

決め、降下して妖怪と戦おうと思ったところである事を思い付く。

それは仮面の力だ。

前に美鈴と手合わせした時に確認したが、仮面の力も保持時間も大きく上がっていた。

だが、それは手合わせの時に確認したもの。

実際の戦いでどうなっているかは未知数だ。

なので、龍也はどくなっているか確かめる事にした。

思い立ったら何とやら。

龍也は左手を額の辺りに持っていく。

そして左手からどす黒い霊力を溢れ出させ、左手を一気に下ろす。

すると、龍也は仮面を付け、眼球を黒くし、紫の瞳になった状態になる。

その瞬間、龍也は一気に降下して一番近くに居た妖怪の顎を蹴り上げる。

龍也が降下して来た事に気付いた残りの妖怪は一斉に龍也の方を見る。

だが、その時には既に龍也から一番近い位置に居た妖怪が殴り飛ばされていた。

龍也が次の妖怪に狙いを定めようとすると、妖怪のうちの一体が龍也の向けて妖力で出来た弾を放つ。

それが龍也の目の前に迫った時、龍也はそれを手の甲で弾き、妖力の弾を放って来た妖怪に掌を向け、霊力で出来た弾を発射する。

龍也の放った霊力の弾は見事に命中し、爆発を発生させる。

その様子を見た妖怪達はそのままでは不利と思ったのか、龍也目掛けて一斉に飛び掛かる。

一斉に飛び掛れば一体位は龍也に食い付けると考えたのだろう。

だが、その考えは間違いであった。

妖怪達が龍也に触れる距離まで後僅かといった所で、飛び掛った妖怪達が一斉に吹き飛んだのだ。

何故吹き飛んだのか。

答えは簡単だ。

龍也が迫って来た妖怪達に攻撃を放ったのだ。

拳や蹴りなどを物凄い速さで。

龍也が一息吐こうと思うと上空から気配を感じて顔を上に向ける。

其処には降下してくる妖怪の姿が何体かあった。

どうやら、龍也の周囲に飛び掛ってきた妖怪が全てではなかった様だ。

先程のは陽動かと思いつながら、龍也は右手を天へと向ける。

すると、右手の掌に青白い光が集まっっていく。

霊力が集中し、圧縮されている証拠だ。

そして、

「霊流波！！」

巨大な青白い閃光が迸る。

加減なく放った本気の一撃。

龍也が放ったそれは、上空に居た妖怪達を飲み込み、消滅させていった。

巨大な青白い閃光が消えた後、龍也は周囲を見渡す。

龍也の目にはまだ生き残っている何体かの妖怪の姿が映った。

龍也が少し睨みを効かせると、妖怪達は悲鳴を上げてその場から逃げて行った。

妖怪達が逃げ去り、周囲に何の気配も感じない事を認識すると、龍也は左手を額の辺りへと持っていく。

すると龍也の付けている仮面がどす黒い霊力に変わり、風に流される様にして消えていく。

龍也の顔面を覆っていたどす黒い霊力が消えると、

「ふう………」

龍也の眼球と瞳の色が元の色に戻る。

その後、左手を下ろして自分の左手を見る。

そして左手を握ったり開いたりといった動作を行う。

その動作を何度か繰り返すと、

「……やっぱり上がったままだ」

龍也はポツリとそう呟いた。

どうやら仮面の力が上がっていたり、保持時間が延びていたり、疲労感が下がっていたのは映姫と戦った時のみや美鈴と手合わせの時だけではなかった様子だ。

これならば、もう通常戦闘でも問題なく使用する事ができるであろう。

「やっ………」

龍也は首を少し回しながら前方を見据える。

ここに来た本来の目的は仮面の力を確かめるためではない。

あまり遅くなるのはあれだなと思い、龍也は少し急ぎ気味に無縁塚に向った。

「お、またまた見つけ」

落ちている道具を広い、それを葛籠の中へと入れる。

以前、無縁塚に来た時は直に映姫と戦う事なっただから分からなかったが、こうして

落ち着いて見ると、様々な物が落ちているのが分かる。

「霖之助さんがここを利用する理由が分かった気がするなあ……」

龍也がそう呟き、次の道具を拾うために移動を開始し様とすると、

「おやあ？ こんな所に生きてる者が来るとは感心しないねえ。死ぬんならもつと

年を喰ってからにしな」

背後からそんな声が聞こえて来る。

龍也は誰だと思いながら振り返る。

そこに居たのは、

「小町」

小町であった。

「おや、どこの葛籠を背負った老人かと思ったら龍也じゃないか」

小町は少し驚いた表情をしながらそう言う。

「どうしたんだい、その葛籠？ どっかの雀から貰ったのかい？」

「ああ、これは……」

龍也はそう言いながら理由を説明し始める。

「成程、あそこの店主の依頼か……」

小町は龍也の説明を聞き、納得いったと言う表情になる。

「小町って霖之助さんの事を知ってるのか？」

「知ってるよ。あたかも偶にあそこの店を利用したりするからね」

小町はそう言いながら懐から何かを取り出し、

「例えばこれとかね。あの店で買ったんだ」

取り出した物を龍也に見せる。

「それは……知恵の輪か？」

「正解。これ、暇潰しに最適だね」

小町は少し嬉しそうな表情をしながらそう語る。

「暇潰しって……お前、仕事はどうした？」

「休憩中さ、休憩中。ちゃんと休憩を入れないと仕事の能率も下がるだけだって」

あははと笑いながら小町は言うが、

「ほう……貴女の言う休憩と言うのは一体どれ位の時間を差すのでしょうか？ 是非とも教えて貰いたいものです」

そんな声が聞こえて来たのと同時に小町の笑いは止まる。

そして、ギギギと言う音が聞こえる様な動作で小町は声が聞こえて来た方へと顔を向ける。

そこに居たのは、

「え、映姫様……」

四季映姫・ヤマザナドゥであった。

映姫は現れて早々、

「ここ最近の幽霊量がやけに減ったと思い、様子を見に来て見れば……」

静かにそう語り始める。

そんな映姫に対し、

「え、映姫様、これは違うんです、その……」

小町は何とか弁解をし様とするが、

「小町!!!!!!」

「きゃん!!! ごめんなさい!!!!!!」

無駄に終わった。

そして、映姫の説教が始まった。

「さっさと仕事に行ってください!!」

「はい!! 行ってきます!!」

映姫の説教が終わったのと同時に小町は急いで仕事へと向った。

「まったく、初めて見た時はもっと真面目な子だと思ったのに……」

そう呟き溜息を吐いた後、映姫は龍也の方へと振り向く。

そして、

「少し、久しぶりですね。龍也」

「そうだな、映姫」

挨拶を交わす。

「貴方は相変わらずですか？」

「ああ、相変わらずだ」

「そうですね。ま、それが貴方の美点なのでしょう」

映姫はそう言って、少し表情を柔らかくした後、

「と、いけないいけない。貴方に親近感を抱いてから言うもの、どうも貴方に対してだけは甘くなってしまう」

そう言いながら直に表情を戻し、

「貴方が死して私の所に来た際に判決を甘くすると言う事はありませんからね」

そう言う。

「ああ、分かってるよ」

「ならいいです」

映姫のそんな様子を見ながら、龍也は真面目だなと思った。

若しかしたら、小町と足して二で割れば丁度良くなるのではないだろうか。

「ん？ どうかしましたか？」

急に押し黙った龍也は不審に思ったのか、映姫がそう尋ねる。

「いや、何でもないよ」

龍也は首を振りながらそう返した。

「そうですか」

そう言った後、映姫は龍也の目を見る。

「貴方に対してどうこう言った処で、これからの行動を変える気はないのでしょうか？」

「ああ、そうだな。俺は俺の魂が想うがままに、俺の信じた道を進むだけだ」

龍也は映姫の目を見ながらそう返す。

「………そうですか。なら、私が言える事は一つだけです」

「一つ？」

「ええ。貴方は貴方が信じた道を進み続けなさい。その道は言うは易し。しかし、行うは難し」

「そうかねえ……」

龍也はよく分からないと言った表情で後頭部を搔く。

「分からないならそれでもいいです」

映姫はそう言っで一息吐いた後、再び語り始める。

「歩みを止めてもいい。膝を着いてもいい。しかし、ずっとそのままではいけない様に。

その様な状態になっても必ず再び歩み始める様に。私が言えるのはこれ位です」

「……解った。その言葉、心に留めて置くよ」

真剣な表情で語る映姫に対し、龍也も真剣な表情でそう返した。

「なら、いいです」

「あ、そうそう」

龍也は何かを思い出したかの様に呟き、

「今はまだお前には適わない。だが、必ず俺はお前より強くなってお前に勝つ」

先程とはまた違った真剣な表情で龍也は映姫にそう言う。

龍也の宣戦布告とも取れる言葉を受けた映姫は少し驚いた表情をし、

「そうですか。なら、その時が来るのを楽しみにしましょうか」

少し嬉しそうな口調でそう返した。

その後、映姫と雑談を交わし、龍也は再び無縁塚に落ちている道具を拾い始めた。

「只今戻りましたー」

日も暮れた時間帯、龍也はそう言いながら香霖堂の扉を開ける。

そしてカウンターの方へ進んで行くと、

「お帰り」

カウンナーの方で本を読んでいた霖之助が出迎えてくれた。

「それで、道具などは見つかったかい？」

「はい、結構見つかりましたよ」

そう言って、龍也は背負っていた葛籠をカウンターの上に置く。

「どれどれ」

霖之助は楽しみと言った感じで葛籠の蓋を取る。

葛籠の中にピッシリと入っている道具を見る事ができた。

「おお、思っていた以上だよ」

霖之助はそう言いながら葛籠の中に入っている道具を手に取る。

「こんなに持って来てくれるとは……龍也君に頼んで正解だったね」

霖之助はそう呟きながらまた別の道具を手に取る。

「……そうだ、前に来た時に服を欲しがっていたね。追加報酬と言
う訳ではないが、

好きな服を持っていくといい」

「いいんですか？」

「うん、構わないよ」

霖之助の言葉を受け、龍也は服がある場所に移動し、早速服を選び
に掛かる。

暫らく選んでいると、気に入った物を発見する。

黒っぽい色をしたジーンズに黒いジャケット。

黒いジャケットは首周りに白い毛が着いており、両腕の二の腕部分、
背中に銀色をした
十字架の染め抜きがある物だ。

これを貰っていいこうと龍也が決めると、

「おい、この道具はどうやって使うんだい？」

カウンターの方からそんな声が聞こえて来た。

その声を受けた龍也は、

「今いきまーす」

そう言いながらカウンターの方へと向かい、霖之助に外の世界の道具の説明をする。

この日は霖之助に外の世界の道具の使い方を見せて終える事になった。

アルバイト編 その8

「ん……」

若干の肌寒さを感じながら龍也は目を覚まし、上半身を起す。

同時に周囲を見渡す。

すると、ここが和室である事が分かる。

それから、少し経つと、

「……ああ」

何故自分がここで寝ていたのかを思い出した。

昨日、龍也が拾って来た外の世界の道具の使い方を霖之助に教えていた。

だが、量が量であったため、全ての道具の使い方を教え終わる頃には完全に日が落ちてしまった。

なので、霖之助が泊まっていくといいと提案してくれたので香霖堂に泊まり、現在に至ると言う訳である。

そこまで思い出したのと同時に龍也は布団から抜け出し、立ち上がって着替え始める。

着る服は今までの学ランではなく、昨日追加報酬と言う事で貰った服だ。

昨日貰った服とは黒いジーパンに黒を基調としたジャケット。

このジャケットは首周りに白い毛が付いており、両腕の二の腕部分と背中に銀色の十字架の染め抜きが入っていると云うデザインだ。

「へえー、意外と動き易いな」

昨日貰った服と、白いシャツを着た龍也は体を少し動かしながらそう呟く。

デザインだけで決めたため、動かし易さなどは考慮に入れてなかったが、これならば動きを阻害する事はなさそうだ。

一通り体を動かした後、左ポケットに財布を入れ、右腰のベルトの部分にレミアから貰った紅い懐中時計から伸びている鎖を巻きつけ、懐中時計を右ポケットに入れる。

その後、床に置いていた学ランを左手に持って居間へと移動する。

「やあ、おはよう」

居間に着くと、霖之助が朝食の準備をしながら挨拶をしてくれた。

「あ、おはようございます」

龍也も挨拶を返し、卓袱台の前に座る。

「何か手伝いましょうか？」

「いや、もう終わるから構わないよ」

霖之助はそう言って、茶碗にご飯をよそう。

「その新しい服、似合ってるよ」

「あ、ありがとうございます」

龍也はそう言って頭を下げる。

「以前着ていたその服……確か、学ランと言ったかい？ 要らないのであれば僕が
買い取るけど？」

「そうですね……」

龍也は少し考え、

「記念に取って置こうと思います」

取って置くと言う事にした。

「分かったよ」

霖之助はそう言って、龍也に箸を手渡す。

「それじゃ、朝ご飯を食べようか」

「あ、何かすみません。朝食をご一緒させて貰って」

「これ位構わないよ。龍也君のお陰で外の世界の道具の大量入手及び使い方が解ったからね」

そう言った後、まあ、電気と言つのがないと殆どが使えないのが残念だけどねと霖之助は続けた。

「ま、それはそれとして、冷めないうちに食べようか」

「そうですね」

そうして、二人は朝食を食べ始めた。

「あ、龍也君。昨日の分の報酬だ」

朝食を食べ終わった後、香霖堂を出ようとしていた龍也を呼び止めて霖之助がお金を渡す。

「あ、ありがとうございます」

昨日色々あったから忘れてたな思いながら、龍也は受け取ったお金を財布に入れる。

「次の予定は決まっているのかい？」

「そうですね……この学ランを無名の丘にある俺の住んでる洞窟に置いて来て、それから適当に彷徨いながら次の働き口を探しますよ」

「そうか……大丈夫と思うが、道中気を付けて」

「はい、ありがとうございます」

その言葉を交わした後、龍也は香霖堂を後にした。

「到着つ……と」

龍也は無名の丘にある自分の住んでいる洞窟の前に降り立ち、自身の力を変える。

朱雀の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

瞳の色が変わると同時に龍也は右手の掌から炎のを生ま出して洞窟の中へと入って行く。

奥まで進み、置いてあるランプの中に火を入れ、生み出している炎を消す。

「当たり前と言えば当たり前だが、変わってないな」

龍也は周囲を見渡し、そう呟く。

それも当然だろう。

ここに入れるのは龍也だけなのだ。

ただ、この洞窟に展開されている結界の発生源であるお札を作った
霊夢とどんな場所
でも自由自在に行き来する事が出切る紫は入ってこれそうではある
が。

と言っか、紫は入って来た。

龍也はそんな事を思いながら学ランをハンガーに掛け、アリスに作
って貰った防寒具の
隣の壁に掛ける。

「さて、後は……」

龍也は壁に貼っているお札に近付き、そのお札に手を触れる。

そして、そのお札に霊力を流し込む。

霊力の補充が完了すると龍也はお札から手を離す。

「次は……」

そう呟き、龍也はもう一度周囲を見渡す。

「何もないな」

もうする事がないと言う結論に達した龍也はランプの中の火を消し、再び右手の掌から炎を生み出し、出口へと向う。

「んー……」

外に出た龍也は右手の掌の炎を握り潰す様に消し、腕を伸ばしながら力を消す。

龍也が力を消すのと同時に龍也の瞳の色が紅から黒に戻る。

「さて、次はどこへ行こうかね？」

そんな事呟きながら無名の丘を歩いていると、

「あ……」

鈴蘭畑から微かな声が聞こえて来た。

龍也はそれに反応し、足を止めて声が聞こえて来た方へ振り向く。
声を発した者は、

「メディスン」

メディスンであった。

「少し久しぶりか？ 元気にしてたか？」

「うん……」

メディスンはコクリと頷いて龍也は見る。

暫らく見た後、

「服装……変えたの？」

メディスンはそんな事を尋ねる。

「ああ、香霖堂で貰ったんだ。どうだ、似合うか？」

「……よく、分からない」

「……そうか」

メディスンの反応を聞き、龍也は若干落ち込んだ風になる。

「そう言えば……あんたって此処に住んでるんだっけ？」

「ああ。あんまり帰ってはいないけどな」

「ふーん……」

「それがどうかしたのか？」

「別に……」

そうやって、メディソンは龍也から顔を背ける。

そんなメディソンの様子を見て、龍也はやれやれと思いつつも以前よりは会話が

続く様になったので少しは仲良くなれたかなと思った。

「それじゃ、そろそろ俺も行くな」

そう言って、龍也は飛び立とうとすると、

「あの……」

メディソンが呼び止めた。

「ん？」

何だろうと思ひ、龍也は顔をメディソンに向ける。

「その……また……ね」

龍也が顔を向けると、メディソンはそう呟いた。

「おう!! またな!!」

龍也もそう返し、無名の丘を後にした。

「さて、どこへ行こうかな」

空中を移動しながら龍也はそんな事を呟く。

「ま、風の向くまま気の向くまままでいつか」

こうやって移動していればそのうち誰かに会うであろう。

そんな楽観的な事を考えながら龍也は進んで行く。

暫らく進むと、

「あら、龍也じゃない」

真横から声を掛けられる。

その声に龍也は反応し、一旦止まって声を掛けられた方へ振り向く。

龍也に声を掛けて来た人物は、

「幽香」

「こんにちは、龍也」

風見幽香であった。

「あら、服装変えたの？」

龍也の服装が何時もと違う事に気付いた幽香がその事を尋ねる。

「ああ、香霖堂で買ったんだ。どうだ、似合うか？」

「ええ、似合ってるわ」

「そっか、ありがとう」

こうやって似合っていると云われたのは霖之助に続いて二人目であつたため、龍也は嬉しく感じた。

「そうそう、貴方に聞きたい事があつたの」

「聞きたい事？」

そう言つて龍也は首を傾げる。

「ええ。天狗の新聞で見たのだけど、最近色々な所でアルバイトしてゐるって本当？」

「ああ」

そう答えながら、また文が勝手に自分の事を新聞にしたのかと龍也は思った。

「なら、私の所でアルバイトをしてみないかしら？」

「幽香の所で？」

「ええ、どうかしら？」

「いいぞ。俺も次の働き口を探すつもりだつたし」

「そう、ありがとう」

幽香はそう礼を言い、懐から大量のお金を取り出す。

そしてそれを龍也に手渡す。

「これは？」

「まず、貴方には人里の花屋に行って肥料をあるだけ買って来て欲しいの」

「肥料をあるだけ？ 何でまた？」

「もう少ししたら夏が来るでしょう」

嬉しそうにそう語る幽香を見て、龍也は合点がいった。

「ああ、成程。向日葵か」

「正解」

龍也が言い当てると、幽香はこれまた嬉しそうな顔をする。

「向日葵の芽が出始める前に土壤の整理とか害虫駆除とかもしておきたいからね。

ないとは思うけど、肥料は余りにも痩せこけた土壤があつた場合の保険よ」

「それであるだけ……か？」

「あら、向日葵が出始めたら本格的に使う事になるから無駄にはないわよ」

無駄にはならなさそうなのでまあ、いいかと龍也は思った。

「それじゃ、宜しくね。買い終わったら太陽の畑に来てね」

「分かった」

「あ、そうそう。お釣りは全部貴方の報酬にしていいわ」

そう言って、幽香は龍也に背を向けて太陽の畑へと向って行った。

その後姿を見送った後、

「さて、俺も仕事を済ませるかな」

龍也は幽香から受け取ったお金を仕舞い、人里へと向った。

「さーで、花屋花屋……」

人里に着いた龍也は花屋を探して歩き回る。

暫らく歩いても見つからなかったため、龍也は近くを歩いている人に聞いてみる事にした。

「すみませーん」

「はい、何でしょう?」

声を掛けられた男性は立ち止まって龍也の方を振り向く。

「ここから花屋へはどう行けば行けますか?」

「ああ、花屋でしたらここから三つ目の角を左に曲がり、その後五つ目の角を右に曲がれば見えてきますよ」

「そうですか、ありがとうございます」

龍也は頭を下げて礼を言う。

「いえ、これ位構いませんよ」

男性はそう言って去って行った。

その後姿を見送った後、龍也は教えて貰った道順の通りに足を進めて行く。

暫らくすると、

「お、見つけ」

花屋を見つける。

「すみませーん」

龍也はそう声を掛けながら花屋の中へ入って行く。

「はい、いらっしやいませー!!」

中に入ると店員がそう声を掛けてくる。

「何をお求めでしょうか？」

「ここにある肥料全部ください」

龍也がそう言くと、店員の動きが止まる。

だが、直に再起動をし、

「せ、全部ですか？」

今の言葉が本当か尋ねる。

「ええ、全部です」

「……しよ、少々お待ちください」

店員はそう言って奥の方へと引つ込む。

少しするとカートを押しながら店員が現れた。

紅魔館にもあったがここにもあったのか龍也が思っていると、店員は肥料が入った袋を

カートに乗せれるだけ乗せると、それらを縄で固定し、外へと運ぶ。

そして再び戻り、同じ行為を何度か繰り返すと、

「こ、これで全部です」

店員が行き絶え絶えにそう言ってくれた。

「あ、ありがとうございます」

龍也はそう礼を言って外に出る。

その後、積みまれた袋を見て思っていたよりも量があるなと思った。

「そ、それで代金の方なのですが……」

「ああ、はい。幾らですか？」

店員から金額を言われ、言われたお金を支払う。

それでも、幽香から渡されたお金は結構余ったが。

最初っから自分に結構なお金をくれる積りだったのかなと龍也が思っている。

「あの、量が量ですので人を呼びましょうか？」

店員がそう提案してくる。

だが、

「あ、いえ。お構いなく」

龍也は断り、肥料が入った袋へと近付く。

そして、縄の結び目辺りをそれぞれの指に引っ掛けていく。

それでも余った物は両手で持つ事にした。

「では、肥料、ありがとうございます」

龍也はそう礼を言って空中に躍り出て人里を後にした。

「お帰りなさい」

龍也が太陽の畑に着くと、幽香出迎えてくれた。

「ただいま」

龍也はそう返し、幽香の方を向き直る。

「この肥料、どこに置けばいい？」

「私の家に置いて来てくれるかしら。鍵は開いているから」

「分かった」

そう言つて、龍也は幽香の家へと移動を開始する。

幽香の家に肥料を置き終わると、龍也は再び幽香の元へと向う。

「次に何かやる事はあるか？」

「そうね……なら、私と一緒に土壌整理とか害虫駆除をして貰おうかしら」

「了解。お釣りが思っていたよりも多かったから気合入れて手伝わせて貰うぜ」

「あら、それなら頼りにさせて貰うわね」

こうして、龍也は一週間ほど幽香の手伝いをする事になった。

アルバイト編 その9

「ほら、起きなさい」

「ん……」

誰かに体を揺すられる感覚を感じながら、龍也の意識は少しずつ覚醒していく。

「ほら、もう朝よ」

その一言で龍也の意識は完全に覚醒し、瞼を開ける。

その瞳に映ったのは、

「幽香」

幽香であった。

「やっと起きたのね」

そう言って、幽香は龍也の揺すっていた手を離す。

その様子を見ながら、龍也は太陽の畑の整理の手伝いでここ一週間、幽香の家に

泊まっていた事を思い出す。

「もう朝ご飯が出来てるから、居間の方に来てね」

そう言って、幽香は部屋から出て行く。

それを見送った後、龍也は上半身を伸ばしてベッドから降りる。

そして、椅子に掛けて置いたジャケットを着て部屋から出て居間へと向う。

居間に着くと、幽香の急かされる様にして龍也は椅子に座る。

龍也が椅子に座ると、

「いただきます」

二人は食事を始める。

本日も野菜が中心の食卓である。

ある程度食事が進むと、

「そう言えば、ありがとうね」

幽香がそう切り出した。

「ん？ 何がだ？」

「貴方が手伝ってくれたお陰で太陽の畑の整理、随分早く終わったわ」

「こっちとしても、結構な量の金を貰ったしな。あれ位手伝うのは当たり前だ」

「あら、肥料だけ持って来てさよならって言うのも出来た訳でしょう？」

「そうは言っても、あれだけの金を貰ってお使いで終わりって言うのもなあ……………」

「ふふ、義理堅いのね」

「そうなのかねえ？」

そんな雑談を交わしながら、二人は食事を進めていった。

「朝ご飯、ありがとな」

朝食を食べ終えて外に出た後、龍也はそう口にする。

「一人分作るのも二人分作るのも対して変わらないから別に構わな
いわ」

幽香はどうって事無いと言った表情でそう返す。

「あ、そうそう」

幽香は何か思い付いたと言った表情になる。

「出来れば向日葵が咲き始める頃にまた此処に来て貰えるかしら？」

「向日葵が咲き始める頃に？」

「ええ、その頃になるとまた害虫も増えるだろうし」

「分かった。そう言う事なら向日葵が咲く頃にでもまた来るよ」

そう言って、龍也は空中に躍り出る。

「それじゃ、またな」

「ええ、またね」

そう挨拶を交わし、龍也は太陽の畑を後にした。

幻想郷の何処かの空中。

「次は何処でバイトし様かな……」

龍也はそんな事を呟きながら移動をしていると、

「あっ……」

何かを思い付き、移動を止める。

「そついや、どれ位貯まったのか数えてなかったな」

そう言つて、龍也は財布を取り出して中身を確認する。

「……………かなりあるな」

財布の中身がかなり増えていた事を認識した。

ここまでお金があるのなら、これ以上バイトをする必要はなさそうである。

龍也がそう思いながら財布を仕舞い、再び旅を再開させようと思つた瞬間、

「龍也!!」

後ろから声を掛けられた。

こんな所で誰かに会うなんて珍しいなと思ひながら、後ろへ振り返る。

龍也に声を掛けて来た人物は

「穰子」

秋穰子であつた。

「こんにちは、龍也さん」

その穰子の背後から姉の秋静葉が顔を出し、挨拶をする。

「よお」

龍也は片手を上げて挨拶を返す。

「そう言えば、以前お会いした時と服装が違いますね」

「服変えたの？」

「ああ。どうだ？」

「似合ってますよ」

「うん、結構似合ってるわね」

「はは、ありがとう」

そう言っ、龍也は後頭部を掻いた後、

「それはそうとどうしたんだ、こんな所で？」

そんな事を尋ねる。

すると、

「それはね……秋の良さを大々的に広めに来たのよ!!」

穰子が高らかにそう宣言する。

「……秋の良さを広めに？」

龍也はそう呟いて首を傾げる。

今の季節は春。

序に言えば、もう少ししたら夏になろうとしている時期だ。

秋の良さ広めるのであれば、秋の季節にやればいいのではないだろうか。

そう疑問に思った龍也は、

「なあ、何で今の時期なんだ？ 秋にやればいいんじゃないのか？」

ストレートにそう尋ねてみた。

「それはね……ある噂話を聞いてしまったからよ……」

「噂話？」

「そう……それは、秋が春と大差ないと言う噂話をねー！」

穰子が力強くそう言い放ちながらプレッシャーを放つ。

その後ろにいる静葉も黙ってはいるが、何やら力強いプレッシャーを放っている。

龍也は二人のプレッシャーに気圧されながらも、

「そ、その噂話って何処からの情報だ？」

そう尋ねる。

「何処って……主に妖精から」

「妖精ねえ……」

穰子の返答を聞き、龍也は少し考えてみる。

妖精は何も考えず、勢いだけで行動する事が多かったする。

なので、この噂話も勢いだけで出て来た可能性が高い。

「でも、妖精の噂話程度なら直に消えると思うけど……」

龍也はその事を提案してみたが、

「甘いですよ、龍也さん」

静葉にバツサリと斬られてしまう。

同時に、

「火の無い所に煙は立たないと言います」

「それにこの噂話が元で秋と春は大差無いと言う概念が広まったら
どうするのよ……」

穰子と静葉の二人はプレッシャーを増大させながら龍也へと詰め寄る。

「そ、そうか。俺が悪かった」

二人に詰め寄られた龍也は気圧されながらそう口にする。

「そ、それで、お前達は何をし様としてたんだ？」

「決まってるでしょ」

「秋と言う季節の良さを広める為です」

二人がそう言った後、静葉はプラカードを龍也に見せる。

そのプラカードには、”秋こそ至高の季節！！”と書かれていた。

それも、かなり気合の入った字で。

秋の神様だからか、秋を貶された事で火が着いたのだろう。

それならば、秋以外は妖怪の山で大人しくしているこの二人の行動力にも納得がいく。

「そ、そうか」

「折角だわ、龍也」

「はい？」

「あんたも付き合いなさい」

「……へ？」

穰子に突如、そんな事を提案される。

「私達は神と言ってもそんなに戦闘力が高くないのです」

穰子に続く様にして、静葉がそう口にする。

「だから、道中を安全に進むために用心棒が必要になって思ってたのよ」

「そんな時、龍也さんを見つけました」

二人はそう言って、更に龍也へと詰め寄る。

「龍也の事は度々天狗の新聞の記事にされてたからどれ位強いかわかってるつもり」

「おまけに、龍也さんは色々な所に顔が効きますよね」

二人はそう言いながら更に龍也へと詰め寄り、顔と顔がぶつかりそうな距離にまで近付くと、

「勿論、私達に付き合ってくれるわよね？」

「勿論、私達に付き合ってくださいよね？」

そう言う。

「……はい、分かりました」

二人のあまりの迫力の前に、龍也は折れるしかなかった。

最初に向ったのは紅魔館。

この館に住んでる人数が多かったのでまず最初の来たのだが、龍也達は門の前で足止め

を喰らってしまった。

何故ならば、

「……寝てるな」

「……寝てますね」

「……寝てるわね」

門番である美鈴が幸せそうな顔をしながら寝ていたからだ。

てつきり、先程までのヒートアップぶりから無理矢理門を通り抜けて中へ進入するの

かと龍也は思っていたが、そうはならなかった様だ。

どうやら、ある程度の冷静さは残っていた様だ。

「どうします?」

若干不安気な表情で静葉は龍也は見つめる。

「どうするもこうするも……」

そう言いながら龍也は美鈴の近付き、大きく息を吸い込む。

そして、息を限界まで吸い込んだ後、

「美鈴!!!!!!!!!!!!!!」

大きな声で美鈴の名を呼ぶ。

「わひゃい!?!」

近くで自分の名を叫ばれたからか、美鈴は直に飛び起きた。

飛び起きたのと同時に、美鈴は周囲の状況を確認し、

「あ、何だ。龍也さんじゃないですか」

龍也の存在に気付く。

「あれ? 服装変えました?」

「ああ、この前にな」

「そうなんですか。似合ってますよ」

「はは、ありがとう」

龍也はそう礼を言う。

「本日はどんなご用件で?」

「俺と言うより、こっちの二人がここに用があるんだ」

龍也はそう言って、静葉と穰子の二柱を指さす。

「おや? そちらのお二方は……」

「秋の神様の秋静葉と秋穰子だ」

「神様でしたか」

美鈴はそう言っつて、姿勢を正す。

「龍也、この人っつて……」

「ああ、ここの門番の紅美鈴だ」

穰子疑問に、龍也はそう答える。

「へえー、門番……」

穰子はそう呟いて、美鈴を見た後、

「でも、この人さっき思いつ切り寝てたわよね。門番なのに」

そう呟いた。

「いやー……あまりに眠気を誘う雰囲気だったと言いますが……」

美鈴が苦笑いをし、後頭部を掻いていると、

「あら、仕事中に居眠りとは……いい御身分ね、美鈴」

咲夜が音も無く現れる。

「さ、咲夜さん……」

美鈴はゆっくりとした動きで咲夜の方へと顔を向ける。

その瞬間、

「後で……じっくりと話し合いましょうか。弾幕ごっこと言っ名の話し合いを」

そう言い放った。

「そ、そんなー」

美鈴はそう言って、ガツクリと肩を落とした。

まあ、美鈴は弾幕ごっこは余り得意ではないので肩を落とすのも無理はない。

近接戦闘込みの弾幕ごっこなら話は別であろうが。

そんな美鈴を尻目に咲夜は龍也達の方へと向き直り、

「それで、何の御用かしら？」

「ああ、それはな……」

龍也は咲夜に近付いて事情を説明する。

「成程ねえ……」

そう呟いて、咲夜はチラリと秋姉妹の二柱を見る。

「そう言うお話であれば、お嬢様に任せるのが筋だと思っただけど……お嬢様、今はお休み中なのよね」

「まあ、この時間帯ならな」

吸血鬼であるレミリアは、この時間帯なら大体は寝ているであろう。それを忘れてこんな時間帯に紅魔館に連れて来た龍也も龍也だが。

「それはそれとして、話だけでも聞いてくれないか？ そうしないと、あいつ等も帰りそうにないし」

龍也は咲夜にそう耳打ちをする。

「そうね……私も人里で食材を買ったりするからあの二柱を余り邪険に扱うのもねえ……」

咲夜も龍也の提案に同意するかの様にそう呟く。

「私が話を聞いて、それを妖精メイドに広めるのが妥当かしらね？」

「ああ、その辺りが妥当だな」

咲夜の提案に同意するかの様に龍也はそう呟く。

「なら、話だけでも聞いてきましょうか」

そう言つて咲夜は秋姉妹の方に向おうとすると、

「あ、そうだ」

何かを思い出したかの様に咲夜は振り返る。

そして、

「その服装、似合つてるわよ」

そんな事を口にした。

不意打ち気味にその事を言われたせいか、

「あ、ああ。ありがとう」

龍也は照れ臭そうにそう返した。

紅魔館での秋広めが終わった後、龍也達は人里へと来ていた。

秋姉妹曰く、この時間帯が人里が一番賑わっているんだとか。

この二柱は人里の秋の収穫祭に毎年お呼ばれしてる様なので、そう言う事を分かって
いるのだろう。

事実、秋姉妹が人里にやって来て演説を始めると人里の人間が集ま
って来た。

この様子なら人里に来なくても良かったんじゃないかと龍也が思っ
ていると、

「あら、龍也じゃない」

後ろの方から声を掛けられる。

秋姉妹の演説に気を取られてたかなと思いつながら龍也は振り返る。

龍也に声を掛けてきた人物は、

「アリス」

アリスであった。

「こんにちは。何をしてたの？」

「ああ、実はな……」

そう言っつて、龍也は事情を話し始める。

「成程、それで秋の神様の御付をしてるのね」

事情を聞いた後、アリスはそう呟いて秋姉妹の二柱を見る。

「まあ、神様にとって信仰はなくてはならないものだから仕方がないんじゃない？」

「そう言っつものなのかねえ」

龍也はそう呟き、チラリと秋姉妹の方に視線を向ける。

その後、直に視線を戻して

「そういや、お前が人里にいるって事は人形劇でもしてたのか？」

「ええ。それと少し買い物ね」

そう言っつて、アリスは買い物籠を見せる。

「そう言えば、服装変えたのね」

「ああ、少し前に」

「似合ってるわよ」

「ありがとう」

龍也が礼を言うと、アリスは龍也の服装を観察する。

「ん？　どうかしたか？」

「いえ、人形の服を作るのに参考になるかなって思ってた」

「参考って……アリスの作る人形って女の子タイプだろ。俺のは男物だからなあ……」

「まあ、その辺はアレンジを加えれば……」

「何だったら、今度外の世界の服の事を教えようか？」

そう言った後、女物の服はそんなに詳しくないけどなと続け様とした瞬間、

「ほんと!?!」

そう言って、アリスは少々興奮気味に龍也に詰め寄る。

「あ、ああ……」

アリスの迫力に少し気圧されながら龍也はそう答える。

少し早まったかと思ったが、アリスの喜び様を見て龍也は何も言えなかった。

「それじゃ、今度私の家に来た時にじっくり聞かせて貰うわね」

「ああ」

「出来るだけ、早くに来てね」

そう言っつて、アリスは嬉しそうな顔をしながら去って行った。

その後姿を見送った後、龍也は出来るだけ早くにアリスの家へと向った方がいいなと思っつた。

「龍也」

「龍也さん」

龍也が思考に耽つてると、穰子と静葉の二人に声を掛けられた。

「お、終わったのか？」

「はい、それで次へ向いたいのですが……」

「次つて……次の目的地は決めたのか？」

「ええ、次は永遠亭とやらに行くつもりよ」

「永遠亭？」

「はい、永遠亭も紅魔館と同じく住んでる人数も多いと聞きました」

「それに、去年の秋頃から活動を始めたって言うしね。折角だから加護でも授けて来ようと思って」

「どうやら、次の目的地は決まった様だ。」

「それでは案内をお願いしますね、龍也さん」

静葉が上目遣いでそう言う。

「永遠亭までねえ……」

「そう呟いて龍也は少し考える。」

「迷いの竹林の中にある永遠亭。」

「普通に行っても辿り着けはしないであろう。」

「永琳や輝夜の霊力を探しながら行けば辿り着けるであろうが龍也の探査能力は其処まで高くはない。」

「おまけに迷いの竹林ではそう言った探査能力が大きく阻害されると、この前永遠亭でバイトした時に龍也は鈴仙に聞かされていた。」

龍也一人であるならば、永遠亭に着くまで気ままに迷いの竹林をブラブラしてればいいが、今回はそうはいくまい。

どうしたものかと龍也が思っていると、

「あら？ 龍也に……秋の神様達？」

「妹紅」

妹紅が秋姉妹の後ろに現れた。

静葉と穰子の二柱は吃驚しながら後ろを振り向くが、声を掛けて来た人物が妹紅だと分かって安心した顔をする。

「珍しい組み合わせね。何かあったの？」

「ああ、実はな」

そう言つて、龍也は妹紅に事情を話し始める。

「成程、それで人里に来て今度は永遠亭と……」

妹紅はそう呟いて、チラリと秋姉妹を見る。

静葉と穰子の二柱は期待を籠めた目で妹紅を見つめている。

それから数瞬後、

「……はあ、分かったわ。私が案内してあげる」

妹紅が永遠亭まで案内する事に決まった。

「はい、着いたわよ」

妹紅の案内で、永遠亭にはすんなりと着いた。

「それじゃ、私はこれで」

「おう、ありがとな」

「ありがとうございます」

「ありがとねー」

妹紅は三者三様のお礼を受けて去って行った。

妹紅の後姿を見送った後、龍也は永遠亭の扉をノックする。

少しすると、

「どちらさん？」

そんな声とともに扉が開かれる。

扉を開いたのは、

「おっす」

「ありゃ、お兄さん」

てゐであつた。

「後ろに居るのって秋の神様だよね？ どうしたの？」

「ああ、実はな……」

そう言って、龍也はてゐに事情を話し始める。

「……成程、それで秋の良さを広めにね来た訳ね」

「ああ、話だけでも聞いてやってくれないか？ 加護もくれるらしいし、そっちに

とつても損な話じゃないと思うんだが……」

「いいよ」

「……いいのか？ そんな即答で」

「うん。姫様も暇してたし丁度いいんじゃないかな」

そう言つて、てゐは永遠亭の中へと入つて行く。

それに続く様にして龍也達も中へと進んで行く。

暫らく歩くと、大きな襖の前に辿り付く。

「ここが姫様の部屋だよ」

てゐはそう言つて、襖をノックする。

「姫様、宜しいでしょうか？」

「いいわよー」

襖の奥からそんな声が聞こえて来る。

「失礼します」

そう断りを入れて、てゐは襖を開ける。

「てゐに龍也に……後の二人は初めて見る顔ね」

「ああ、実はな……」

これで何度目になるのかなと龍也は思いながら輝夜に事情を説明する。

「ふーん、それでここに来たのね……」

輝夜はそう呟いて秋姉妹をチラリと見る。

「いいわ。丁度退屈していたところだし、話位聞いてあげる」

輝夜がそう言うと、静葉と穰子は嬉しそうな表情をし、

「それではお話ししよう」

「秋の素晴らしい話をね」

秋に付いて語り始める。

この二柱と一人の邪魔にならない様に、龍也とてゐはこっそり輝夜の部屋を後にした。

「あの様子じゃあ、長くなりそうだね」

「そうだな」

輝夜の部屋の前でそう話す二人。

「そうそう、お兄さん」

「何だ？」

「その新しい服装、似合ってるね」

「お、そうか？」

「だ・け・ど」

てゐはそう言つて賽銭箱を取り出し、

「これにお賽銭を入れるともっと似合う様になるよ」

そんな事を言い出した。

「しっかりしてるよ、お前」

龍也はそう言いながら財布を取り出し、小銭を何枚か入れる。

その後、龍也は永遠亭の一室でのんびりしながら過ごした。

現在、龍也達が居るのは冥界。

白玉楼へと向うためだ。

何故、白玉楼へ向う事になったかと言うと、輝夜の入れ知恵だ。

輝夜が秋姉妹に白玉楼にも沢山の者が住んでると言った為、こうなったのである。

龍也は永遠亭でお終いと思っていたものだから寝耳に水だ。

一応、幽霊相手でもいいのかと龍也は聞いてみたが問題ないと返された。

「龍也さん、後どれ位ですか？」

「もう少しすれば石段が見えてくるからその先だ」

「早く着かないかなー」

そんな会話を繰り返しながら進んで行くと、

「オオオオオオオオオオ……………」

そんな呻き声が聞こえて来た。

「ん？ 誰か何か言ったか？」

「いえ、私は何も」

「私じゃないわよ」

龍也達は一旦立ち止まって周囲を見渡す。

すると、

「「ひっ！？」」

龍也達の目の前に怨霊が現れる。

それと同時に、静葉と穰子二柱は龍也の後ろに隠れる。

「……………おい」

「言ったでしょ！！ 私達はそんなに戦闘力は高くないって！！」

「弾幕ごっこなら兎も角、通常戦闘となると……」

「あーはいはい、わーったよ。お前等の事は俺が護ってやるよ」

投げやり気味にそう言っつて、龍也は怨霊の方へと向き直る。

通常、冥界で怨霊などに襲われた場合、霊力を解放して威圧して追い払うのが常道だ。

だが、今回は龍也の直近くに静葉と穰子がいる。

この二柱、戦闘力はそんなに高くないと言ったので龍也の霊力の解放に耐えられるかと思つと疑問が残る。

仮面を出すのは確実にアウトであろう。

ならばどうするか考え、龍也は

「……威嚇するか」

そう呟いて右手を怨霊に向ける。

そして、

「霊流波」

右手の掌から青白い閃光を迸らせる。

龍也の掌から迸った閃光は怨霊の真横を通過する。

その数瞬後、怨霊は大急ぎでその場から消えた。

どうやら、完全に實力差を悟った様である。

「いやー、流石ね」

「龍也さんが強いと言う事は知ってましたがこれ程とは……」

そんな事を呟きながら、二柱は龍也の背後から顔を出す。

それと同時に、

「それはそうと、ありがとうございます」

「ありがとうね」

静葉と穰子はそうお礼を言った。

「ん？ 何がだ？」

「私達の事を気遣って力を余り出さない様にしてくれたでしょ」

穰子にそう言われ、龍也は驚いた顔をする。

「何でって顔をしていますね。私達はこれでも神です。それ位の事は分かりますよ」

驚いた表情をしている龍也に、静葉は笑顔でそう語りかける。

「ほら、早く先へ行きましょ」

「あ、ああ」

「はいはい、今行きますよ」

穰子に急かされる様にして、龍也と静葉は先へと進んで行く。

「へえー、じじが……」

白玉楼の大きな門を前にして、穰子は感嘆とした声を漏らす。

「じゃ、開けるぞ」

そう言っつて、龍也は門を開く。

そして、龍也達は白玉楼の庭園へ足を進めて行く。

「ここにはどんな方が住んでいらっしやるのですか？」

「冥界の管理人の西行寺幽々子にその付き人の魂魄妖夢。後は人魂とか幽霊とかだな」

「凄い人が住んでるのね」

龍也達がそんな会話を繰り返しながら歩いて行くと、

「あ、幽々子発見」

縁側で饅頭を食べている幽々子を発見する。

「おーい、幽々子ー」

龍也は幽々子の名を呼びながら近付いて行く。

「あら、龍也じゃない」

幽々子の方も龍也の存在に気付く。

「あら、服変えたの？」

「ああ」

「そう。前の服装も良かったけど、その服装も似合ってるわよ」

「お、ありがとな」

「それで、貴方がここに来た理由……貴方の後ろに居る二柱の神様の事かしら？」

「ああ、実は……」

そう言って、龍也は幽々子に事情を説明する。

「成程、それで遙々冥界までね……」

幽々子はそう呟いて静葉と穰子を見る。

「いいわ、折角冥界まで来てくれたんだもの。話位聞いて上げるわ」

こうして、途中で幽々子のお茶を持って来た妖夢も含めて秋姉妹の秋に付いての話が始まった。

「今日はありがとね」

「本日はありがとうございました」

冥界での話が終わり、秋姉妹を妖怪の山近くまで送ると、穰子と静葉にそう礼を言われた。

「別にいいって」

急ぎ足であったが、何だかんだで色々な所に顔を出せたので龍也にとっても無駄足ではなかった。

「それはそうと、最後まで御付き合いましたのでお礼を差し上げますね」

「そうね。それ位しないと神の名折れだわ」

静葉と穰子がそう言うと、龍也の目の前に大量の秋の珍味が現れた。

これも秋の神としての能力であろうかと龍也が思っていると、

「それでは、また今度」

「またねー」

静葉と穰子は妖怪の山へと帰って行った。

二柱の後姿を見送った後、

「これ……どうするかな」

大量の秋の珍味を見て龍也はそう呟いた。

こんなに大量の食物は持ち運べないので、暫らくここに留まって消費させる事を龍也は考えた。

それから少しすると萃香が現れた。

こんな所で何をしてるのと訪ねられ、有りの俣の事を話すと、萃香が自身の能力で様々な者達を集めた。

集められた者達は龍也が知っている者ばかりであったが。

数が揃えば宴会になる事が殆どの幻想郷。

今回もその例に漏れず。

こうして、三日三晩の宴会が続いた。

放浪編 その46

「さーてと、アリスの家はどの辺だったかな？」

今現在、龍也は魔法の森の中に居る。

何故かと言うと、アリスに外の世界の服を教えると言う約束を果たす為だ。

アリスも出来るだけ早くに来てと言っていたし、三日三晩続いた宴会も終わったので
今回が丁度いい機会であろう。

と言う訳で、龍也は魔法の森に来ているのである。

「それにしても魔法の森に来たのは少し久しぶりな感じだけど、こ
こも相変わらず
だな」

龍也はそう呟きながら足を進めるのと同時に周囲を見渡していく。

珍妙な色や形をした草。

独特な色や形をした草など。

普通の森とは一線を画している森だ。

おまけに魔法の森全体に存在している瘴気。

魔法使いにとつては己が力量を上げてくれる様なものだが、普通の人間にとつては毒みたいなものらしい。

龍也みたいに力ある人間はその限りではない様ではあるが。

「とと、感慨に耽つてる場合じゃないな。少し急ぎ目に行けば日が暮れる前には着くだろう」

そう言って、龍也は足を速めて行く。

数時間後、

「ここ……何処だ？」

龍也は切り株に座りながらそう漏らした。

魔法の森は迷いの竹林程ではないにしろ、迷い易い場所なのだ。

おまけに魔法の森は魔的なものが非常に多いのでアリスの魔力を探索と言う事も出来ない。

最も、龍也の探査能力はそんなに高くないし、そんなに使ってる訳でもないのでも魔的なものがなくても見つけられたかと言われれば疑問が残るが。

「都合良く魔理沙でも通り掛かってくれればアリスの家に案内して貰えるんだが……」

龍也はそう呟きながら空を見上げる。

魔法の森の木々に邪魔されて空はあまり見えないが、箒に跨って空を飛ぶ白黒の魔法使いの姿は見られなかった。

「ま、そう都合良くはいかないよな」

そう言って、龍也は溜息を吐く。

そして休憩も済んだしそろそろ出発し様と思い、龍也が立ち上がった瞬間、

「龍也さん！！ 助けてくださいーい！！！！！」

何やら切羽詰った声が聞こえて来た。

何事だと思いながら龍也は声が聞こえて来た方を見る。

龍也の瞳に映ったのは、

「スターサファイアにサニーマルクにルナチャイルドか」

三人で行動しているのが多い、妖精トリオであった。

どうもこの三人、切り株の妖怪に追い回されている様だ。

「あっ」

気付くと、最後尾を走っていたルナチャイルドが転んだ。

このままでは切り株の妖怪に踏み潰されかねないと思った龍也は駆け、

「おおおおりゃあああ！！」

切り株の妖怪目掛けて飛び蹴りを放つ。

龍也の飛び蹴りは切り株の妖怪に見事に命中し、切り株の妖怪は勢

い良く吹き飛んで行く。

それを見届けた後、龍也は振り返り、

「大丈夫か？」

そう言つて、ルナチャイルドに手を差し出す。

「あ、ありがとうございます」

ルナチャイルドはそう礼を言い、龍也の手を取つて立ち上がる。

ルナチャイルドが完全に立ち上がると、

「お陰で助かりました」

「ありがとうございます、龍也さん」

スターサファイアとサニーミルクが礼を言いながら二人の傍まで駆け寄つて来る。

「てか、どうして妖怪に追われてたんだ？」

「あ、それはですね……」

龍也の疑問にスターサファイアが事情を説明してくれた。

「……つまり、木の実を取つてたらルナチャイルドが落下し、落下した先にさっきの

切り株の妖怪が居て、そのまま追いかけられたと

「はい」

つまり、ルナチャイルドが鈍くさかったのでこうなったらしい。

「ほんと、ルナは鈍くさいわね」

「悪かったわねえ……」

そして、サニーミルクとルナチャイルドが口喧嘩を始める。

それを横目に見ながら、

「あ、そうだ」

龍也は何かを思い付き、スターサファイアを見る。

「どうかしましたか？」

「お前等ってさ、魔法の森に住んでるんだったよな」

「はい、そうですよ」

「ならば、アリス・マーガトロイドって言う人形遣いは知ってるか？」

「はい、知ってますよ」

どうやら、この三妖精はアリスの事を知っている様だ。

「それなら一寸頼みがあるんだが……いいか？」

「頼みですか？」

そう言って、スターサファイアは首を傾げる。

「ああ、アリスの家まで案内してくれるか？ 一寸迷っちゃってな」

「いいですよ、それ位の事でしたら」

スターサファイアはそう言って、サニーミルクとルナチャイルドの喧嘩を仲裁する。

そして、それから龍也達はアリスの家へと向っていた。

「ここが、アリスさんの家ですよ」

三妖精に案内され、龍也は無事にアリスの家に着く事が出来た。

「案内、ありがとう」

「えへへ、これ位どうって事ないですよ」

礼を言われた三妖精は少し照れ臭そうにしながらそう返す。

そして、龍也はアリスの家のドアを数回ノックする。

少しするとドアが開かれ、

「あら、龍也」

アリスが顔を出す。

「それに、何時ぞやの三妖精じゃない」

「あははは、どうも」

アリスは龍也の存在に気付くと、三妖精の存在にも気付く。

「一寸迷ってな。こいつ等にここまで案内して貰ったんだ」

「ふーん……」

アリスはそう呟いて龍也と三妖精を数度見た後、

「それじゃ、早速上がって外の世界の服の事を……教えてくれる？」

「ああ、分かってるよ。それと、時間が掛かって悪かったな」

「別にいいわよ。ちゃんと約束通り来てくれたしね。三日位、想定
の範囲内よ。あ、

そうそう。貴女達も入って来なさい。紅茶くらいはご馳走してあげ
るわ」

「あ、はい」

龍也と三妖精はアリスに促される様にして家の中へと入って行く。

居間に着くと、

「座って」

アリスに席に着く様に言われ、龍也は椅子に、三妖精はソファア
座る。

少しすると、アリスの人形達がクッキー、ケーキ、紅茶を運んで来
る。

そしてそれらがテーブルの上に並ぶと、

「それじゃ、早速外の世界の服に着いて教えてね」

手帳を取り出しながら龍也にそう尋ねる。

「分かった」

アリスに促される様にして、龍也は外の世界の服の事を話し始めた。

深夜、日が完全に落ち、日付が変わった頃、

「こ、これで全部だ」

「ありがとう」

外の世界の服の事を龍也はアリスに教え終えた。

途中、休憩を挟みながらであったが、ここまで時間が掛かるとは龍也は思ってもいなかった。

「ごめんなさいね、こんな遅くまで付き合わせて」

「いや、いいよ。教えるって言ったのは俺だし」

そう言って、龍也は体を伸ばす。

「でも、女物服より男物の服の情報の方が多かったけど……よかつたのか？」

「ええ。男性の貴方が女性の服を詳しく知っているとは思ってなかったしね。」

その辺は私なりにアレンジを加えてみるわ」

そう言って、アリスも体を伸ばす。

「さて、私はこれから貴方の情報を元に早速服を作ってみるわ」

「あまり根は詰めるなよ」

「あら、私は魔法使いよ。食事と睡眠を取った方が色々効率が良いから私は取ってる
けど、本来魔法使いと言うのは食事も睡眠も必要ないのよ」

「それでもだ。要するに、自分の体を大切にしろって言ってるんだよ、俺は」

龍也にそう言われ、アリスは一瞬言葉に詰まるも、

「貴方がそれを言う？ 天狗の新聞に色々書かれてるわよ、結構な無茶をしてるって」

そう言い、

「でも、ま……貴方の言う通り、あまり根を詰めない様にするわ
少し照れ臭そうにしながらそう返した。

「あ、そうそう。部屋は貴方が泊まる時に使っている部屋を使っ
ね」

「ああ、分かった。処で……」

龍也はそう言って、ソファーの方に顔を向ける。

其処には、幸せそうな顔をしながら寝ている三妖精の姿があった。

「「いつらはどうする？」」

「起すのは可哀想だし、このままにして置きましょう」

アリスはそう言って、手首を少し動かす。

すると、二体のアリスの人形が現れて三妖精に毛布を掛ける。

それを見届けた後、

「おやすみ」

「ええ、おやすみ」

挨拶を交わして龍也はアリス家に泊まる時に使わせて貰っている部屋へと移動した。

朝、目が覚めた龍也は居間へ移動すると、

「あら、おはよう」

アリスが挨拶をして来た。

「ああ、おはよう」

龍也も挨拶をし、居間を見渡すとアリスの人形が朝食の準備をしていた。

「あ、そうそう。何着かの服を作ってみたのだけど、どうかしら？」

そう言って、アリスは人形サイズの服を龍也に見せる。

「どうって……完璧だよ」

アリスが作った人形サイズの服を見ながら龍也は少し驚いた顔をしながらかう漏らす。

「貴方の説明も良かったからね。足りない部分は私のアレンジで補ったけど、貴方の

反応を見る限り、アレンジの方向性は間違っていなかったみたいね」

そう言って、アリスは人形サイズの服を仕舞う。

「朝ご飯の準備も終わったから食べましょう」

朝食の準備が終わったので、アリスと一緒に食べる様に勧める。

「ありがとな」

龍也はそう礼を言い、席に付いて朝食を食べ始める。

軽い雑談をしながら食事を進めていき、

「「ご馳走様」」

朝食を取り終える。

すると、台所の方からアリスの人形が現れて食器を持って再び台所へと向った。

その様子を見て、龍也は便利だなと思いつつながら体を伸ばし、椅子から立つ。

「それじゃ、俺はそろそろ行くな」

「あ、一寸待って」

アリスはそう言ってテーブルの下に置いておいたバスケット取り出し、

「はい」

紙の包みを手渡す。

「これは？」

「サンドイッチよ。良かったらお腹が空く頃になったら食べて」

「どうやら、お昼の弁当を用意してくれた様だ。」

「ありがとな。後で頂かせて貰うよ」

龍也はそう礼を言っ、サンドイッチが包まれた紙の包みを受け取る。

「別にいいわよ、これ位。昨日は大分お世話になったしね」

龍也の礼に、アリスはどうって事ないと言った風に返す。

「そう言えば」

アリスは何かを思い出したかのようにそう呟いて、ソファの方を見る。

それに釣られる様にして龍也もソファに目を向ける。

其処には、幸せそうに眠る三妖精の姿があった。

「妖精ってお気楽ねえ」

そう言っ、アリスは少し呆れた様に溜息を吐く。

「ま、起きるまでほおって置きましょう」

三妖精の処遇を決めたアリスは、再び龍也の方を向く。

「それじゃ、またね」

「ああ、またな」

そう挨拶を交わし、龍也はアリスの家を後にした。

放浪編 その47

今日も今日とで幻想郷の何処かを歩いている龍也。

日に日に結構なハイペースで暑くなつて来ている事からもつ夏になつたのかと思ひ、

龍也は空を見上げる。

空には雲一つ無く、キラキラに光っている太陽が見受けられた。

それを見た後、龍也は周囲を見渡す。

龍也の瞳に映つたのは緑生い茂る木々に草の数々。

この事から、

「もう、完全にあの異変は収まつた様だな」

少し前に起きた異変は収まつたと思つた。

六十年周期で起こる、自然現象の異変。

映姫曰く、夏になるまでには収まると言っていたが本当の様であつた。

若しかしたら、映姫にすっかり怒られた小町が頑張つたからかもしれないが。

そんな事を思いながら足を進めて行くと、

「おっ」

長い石段を発見する。

長い石段と言えは博麗神社に続く道と白玉楼に続く道が思い当たる。

しかし、ここは冥界ではない。

よって、この石段の先には博麗神社があるであろう。

「そっぴゃ……最近、博麗神社には行ってなかったな」

龍也はそう呟きながらここ最近の事を思い出し、

「……………よし、博麗神社に行って霊夢の顔でも見てくるか」

博麗神社に行く事を決める。

思い立ったら何とやら。

早速、龍也は石段を上って行く。

周囲を警戒しながら上って行くが、何の気配も感じられなかった。

「おっかしーな、何時もだったらこの石段を上って行くと敵意やら殺意を感じだし、それから暫らくすると妖怪に襲われるんだけど……………」

龍也はそう言いながら立ち止まり、周囲を見渡す。

だが、周囲には敵意や殺意処か何の気配も感じられなかった。

その事を疑問に感じ、龍也は考え始める。

龍也が考え始め少しすると、

「……………気温変化でバテたか？」

そんな結論に至った。

今回は結構なハイペースで暑くなっていった。

その気温変化に付いていけずにバテたり体調を崩したりする存在が出て来ても

不思議ではない。

「ま、道中平和ならそれでいいか」

そう言っつて、龍也は再び足を進めて行った。

「結局、妖怪には襲われなかったな」

博麗神社の鳥居に着いた龍也はそう呟く。

若しかしたら妖怪が出てくるのではない、龍也は少し身構えながらここまで来たので少し拍子抜けした気分になっていた。

「ま、いいや。賽銭箱に金を入れてくるか」

そう言つて、龍也は賽銭箱の方まで歩いて行く。

賽銭箱の前に着くと、財布を取り出して小銭を賽銭箱に入れて適当に祈る。

祈り終わった後、龍也は周囲を見渡して見るが

「……………あれ？」

霊夢の姿が見えなかった。

何時もであれば、その辺で掃き掃除をしていたり縁側で茶を啜っていたりする筈だ。

だと言うのに、周囲には霊夢の姿が見えなかった。

その事を不審に思った龍也は霊夢の姿を探し始めた。

まずは最初に外を探そうと思い、跳躍する。

ある一定の高さになると、霊力で出来た見えない足場を作って其処に着地する。

そして、眼下を見下ろす。

「……………居ないな」

一通り見てみたが、博麗神社の周りに霊夢の姿はなかった。

「中かな？」

そう呟き、龍也は足場を消して落下する。

地面に着地した後、龍也は縁側から神社の中に入って霊夢の姿を探し始める。

少しの間探しているど、

「あ、霊夢」

廊下で霊夢の姿を発見する。

だが、何時もの服装が違う。

巫女装束ではなく、白い着物を着ている。

そんな霊夢を不審に思いながらも龍也は霊夢に近付いて行く。

ある程度近付くと、誰かが近付いて来たのが分かったのか霊夢が振り返る。

「……あ、龍也」

「よっ。こんな時間帯に中に居るなんて珍しいな」

龍也がそう言うと突如、霊夢が体勢を崩して倒れ掛かる。

「おっと」

完全に倒れる前に龍也が支えて倒れるのを防ぐ。

「大丈夫か？」

龍也はそう言いながら霊夢の顔を覗き込むと、ある事に気付く。

霊夢の顔が全体的に赤みを帯びているのだ。

おまけに息も少々荒い。

この事から、龍也は一つの可能性を思い浮かべながら霊夢の額に手を当てる。

「……熱いな」

霊夢の額は熱かった。

これで、龍也の中で可能性が確信に変わる。

それと同時に、

「……お前、風邪引いただろ」

龍也は霊夢にそう言う。

龍也にそう言われた霊夢は数回瞬きした後、

「……風邪？」

そう尋ね返す。

「いや、それが風邪じゃなかったら何だって言うんだよ」

龍也は少し呆れた顔でそう言う。

「いや、何かダルくて体が熱くて、歩くのも億劫で咳も出るから変だと思ってたのよね」

「いや、そこで気付けよ」

再び、龍也は少し呆れた顔でそう突っ込む。

「取り合えず、お前は部屋で寝ている。神社の掃除とかそう言った
事位俺がやっとしてやるから」

「……………いいの？」

靈夢が上目遣いでそう尋ねる。

「いいも何も、今の状態のお前を放置してさよなら何てしてら幾ら
なんでも寝覚めが悪すぎるだろ」

「……………そう。なら宜しく頼むわ」

そう言っつて靈夢は龍也から離れて自分の部屋に戻ろうとするが、

「……………あ」

また体勢を崩して倒れそうになる。

「っと」

が、靈夢が倒れる前に龍也が支えて倒れるのを防ぐ。

そして、龍也はそのまま靈夢を抱き上げる。

「ちよ、一寸……………」

「お前を一人で部屋まで移動させたら途中で倒れている光景が目に見えなからな。このまま大人しく運ばれてろ」

そう言って、龍也は霊夢の意見を聞かずに霊夢の部屋へと移動する。

霊夢の部屋の前に辿り付くと、龍也は襖を足で開けて中に入る。

そのまま引かれている布団の前まで移動し、霊夢をそこに降ろす。

「それじゃ、まずは掃き掃除でもすればいいのか？」

「……うん」

「了解」

そう言って龍也が霊夢の部屋を後にしようとするど、

「……ねえ」

霊夢が龍也を呼び止める。

「ん？」

そう言って、龍也が振り返ると、

「……その……ありがとう」

少し照れ臭そうにしながら霊夢がお礼を言った。

風邪を引いてるせいかな素直だなと龍也は思いながら、

「おっ」

そう返して霊夢の部屋を出た。

龍也が外に出て暫らく掃き掃除をしていると、

「おっ、龍也じゃないか」

そんな声と共に何者かが龍也の目の前に降り立つ。

降り立って来た者は、

「魔理沙か」

「おっす」

霧雨魔理沙であった。

「霊夢じゃなくてお前が掃き掃除してるとはな。今度はここでバイトでも始めたのか？」

「ああ、実は……」

そう言っつて、龍也は事情を説明する。

「ははあん、霊夢が風邪を引いたから龍也が掃き掃除してるのか」
龍也の説明を受け、魔理沙は納得したと言う表情になる。

「しつつかし、霊夢が風邪を引くとはねえ。珍しい事もあるもんだ」

「ま、ここ最近結構なハイペースで気温が上がったりしてたからな。それで体調を崩して風邪を引いても不思議じゃないだろ」

そこまで言っつたところで、龍也はある事を思いつく。

「そつだ、お前つて今日は暇か？」

「ああ、暇だぜ」

龍也の問いに、魔理沙はそう答える。

「ならば、霊夢の看病をしてくれないか？」

「霊夢のか？」

「ああ。汗を拭いたり寝巻きを変えたりとかさ。流石に男の俺がそれをする訳には
いかないだろ」

「ああ、成程。確かにな。了解したぜ」

「後、序にお粥とかも宜しくな」

「分かつたぜ」

そう言つて、魔理沙は神社の中へと入つて行く。

それを見送つた後、龍也は再び掃き掃除を始める。

それから少しすると、

「おい、龍也ー」

縁側を歩いていた魔理沙が龍也に声を掛ける。

「何だー？」

「これからお粥作るから、裏の方から薪を持って来てくれー」

「あいよー」

「それと、霊夢が薪の数が少なくなってたら補充しといてくれって」

「分かった」

龍也はそう返事をして掃き掃除を中断し、神社の裏へと回る。

少し探すと薪を蓄えてある場所を見つけ、

「あー……結構少ないな」

そう漏らす。

魔理沙の方へ薪を運んだら薪を補充する必要があるであろう。

そんな事を思いながら龍也は薪を手に持って台所へと移動する。

「薪、持って来たぞー」

その声を掛けながら、龍也は台所へ入る。

「あんがと。薪はその中に入れといてくれ」

下準備をしている魔理沙が指をさしながらそう言う。

それに従い、龍也は魔理沙が指をさした場所に薪を入れていく。

それが終わると、下準備が終わったのか魔理沙が薪を入れた場所に移動する。

そして薪に掌を向けると、

「おっ」

薪に火が着く。

その様子を見て、魔理沙が料理を作る時、何時もこんな感じで火を着けてたなと龍也は

魔理沙の家に泊まった時の事などを思い出した。

「さて、私はこのままお粥を作るが龍也はどうする？」

「薪が少なくなってるから薪の補充だな」

「分かったぜ。頑張れよ」

「あいよ」

そう言って、龍也が台所を去ろうとするとある物を見つける。

それは幾つかの林檎だ。

それを見つけた時、揺り林檎する事を思い付いた。

なので、

「序に揺り林檎も作って置いてやれ」

龍也は魔理沙にそう提案する。

「分かったぜ」

龍也の提案を、魔理沙は快く受け入れる。

魔理沙のその返事を受けた後、龍也は再び薪を取って来た場所へと移動する。

「さて……」

そう呟きながら丸太をセットし、地面に刺さっていた斧を引っこ抜き、構える。

「やりますか」

そして、斧を振り下ろす。

かなりの薪を作成した頃、

「おい、お粥と擂り林檎が出来たから運ぶの手伝ってくれー」

台所の方からそんな声がして来た。

「分かったー」

そう言つて龍也は斧を地面に突き刺し、作った薪を薪入れ庫に入れて台所に戻る。

「こつちのお粥を運んでくれ。私は擂り林檎を運ぶから」

「了解」

そう言い、龍也はお粥を持って魔理沙と一緒に霊夢の部屋へと向う。

「霊夢ー。生きてるかー？」

魔理沙がそんな声を掛けながら襖を開けると、

「生きてるわよ」

上半身を起した霊夢がそう返す。

「それは何よりだぜ」

魔理沙はそう言いながら霊夢の部屋に入り、それに続く様にして龍也も中へと入って行く。

中に入ると、二人は霊夢の近くに腰を落ち着けて持って来た物を床に置く。

「顔色……結構良くなったな」

霊夢の顔を見て龍也がそう言う。

「ま、ゆっくりできたからね」

そのお陰で、体調も良くなった様だ。

「お粥と搦り林檎持って来たんだが、食べられるか？」

「作ったのは私だけだな」

「そうね……頂かせて貰うわ」

霊夢がそう言うと、魔理沙は何かを思い付いた表情をする。

霊夢が散蓮華を取る前に魔理沙が散蓮華を取ってお粥を掬う。

そして、

「風邪を引いててつらいだろ。アーンで食べさせてやるつか?」

そんな事を言い出した。

「なっ!! 一人で食べれるわよ!!」

「またまた、一人じゃつらいだろ?」

そんなこんなで言い合いを始める二人。

言い合いをしている二人の様子を眺めていると、龍也はある事を思いつき、実行に移す事にした。

「まあまあ、落ち着けよ二人とも」

龍也はそう言いながら霊夢と魔理沙の間に入る。

「霊夢が嫌がつてるんならしょうがない」

そう言って、龍也は魔理沙から散蓮華を取り、

「俺がアーンで食べさせてやるよ」

そんな事を言い出した。

要するに、悪乗りしたのである。

「ちょ、一寸!! 一人で食べれるって……」

「いいからいいから」

「そっだぜそっだぜ」

結局、風邪で体力が落ちている霊夢は抗う事が出来ず、龍也と魔理沙の二人にアーンで食べさせられる事になった。

霊夢に食事を取らせた後、空になった食器を持ちながら龍也と魔理沙は台所へと向う。

「そついや、俺らのご飯はどうなってんだ？」

「お粥だぜ」

龍也の問いに魔理沙がそう答える。

「お粥か……」

「文句を言うなよ。量だけは確保してるからさ」

まあ、お粥の他に他の料理を作れば二度手間なので仕方が無いと言えは仕方が無い。

「ま、いいや。味付けは醤油とバターで頼むぜ」

「醤油とバター？ 結構変わった味付けだな」

「そつか？」

そう言つて、龍也は首を傾げる。

幼少期の頃、風邪を引いた時に近くのコンビニで温めるだけで食べられるお粥を買って食べる事にした龍也。

そのままでは味が薄かったので、何かないかと思って冷蔵庫の中を漁ると醤油とバター

が在ったのでそれを混入して食べてみるとかなり美味しかった。

以来、お粥は醤油とバターの味付けで龍也は食べる様になったのだ。

「そう言う魔理沙はどんな味付けをするんだ？」

「私か？ 私は梅干しか茸を入れるな」

「茸？」

龍也はそう魔理沙に聞き返す。

梅干しは聞いた事はあるが、茸は聞いた事がなかった。

「ああ、茸だぜ」

龍也は美味しいのかと思ったが、魔理沙は気に入っている様なので美味しいのだろう。

「まあ、いいや。そう言えば、林檎ってまだ残ってるか？」

「ああ、残っているぜ」

「それじゃ、林檎もくれ」

「あいよ」

そして、龍也と魔理沙は少し遅めの昼食を食べた。

「うっし、これで廊下の雑巾掛けは終わりっ」と

そう言いながら、龍也は廊下を見渡す。

昼食を食べ終わった後、龍也と魔理沙は手分けをして社内内の掃除を始めた。

青龍の力を使いながら雑巾掛けをしていたので通常よりも大きく時

間が短縮できた。

「後はつと……」

そう呟きながら龍也は水を生み出して雑巾を洗い、余分な水分を消す。

後は、消しきれなかった水分を白虎の力を使って乾かして消すだけ。

そう思いながら龍也は自身の力を青龍から白虎へと変え様とすると、

「おーい、龍也ー」

そんな声が掛かる。

声を掛けてきたのは魔理沙だ。

「どうした？」

龍也はそう言いながら魔理沙の方へ顔を向ける。

「いやさ、霊夢が風呂入りたいて言うから風呂を沸かしてくれないか？ お前なら直ぐに沸かせるだろ」

「分かったけど、霊夢を風呂に入れても大丈夫なのか？」

「私が見た感じだと、顔色も大分良くなってるから大丈夫だと思うぜ。それに私も一緒

に入るから入浴中に倒れてそのままって事はないと思うぜ」

「了解。じゃ、代わりにこれを片付けて置いてくれ」

そう言つて、龍也は雑巾を魔理沙に手渡す。

「分かつたぜ」

雑巾を受け取つた魔理沙はそれを片付けるために移動を開始する。

魔理沙の後姿を見送つた後、龍也は湯殿へと移動する。

湯殿に着くと、龍也は浴槽に手を向けて水を放つ。

それなりの出力で放つたためか、浴槽は直ぐに水で一杯になつた。

浴槽が水で一杯になると龍也は水を放つのやめて自身の力を変える。

青龍の力から朱雀の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が蒼から紅へと変化する。

力の変換が終了すると、龍也は水の中に手を突っ込んで炎を生み出す。

すると、水が温まり始める。

ある程度温まると龍也は炎を生み出すのをやめる。

「うーん……こんなもんかな？ 風邪を引いてる時はぬるま湯が良
いって聞くし」

そう呟きながらこれ以上暖めるか考えていると、

「お。もう沸いたのか」

「便利よねえ。あんたの能力」

魔理沙と霊夢が湯殿中に入って来た。

そして、霊夢が湯に手を突っ込む。

「んー……温くない？」

「風邪を引いてるときはぬるま湯がいらいらいぞ」

「……まあ、いいわ。温かったら暖めればいいだけだし」

霊夢はそう言って、龍也を見る。

「つまり……」

「外に出て火の管理をしなさい」

やっぱりかと龍也は思いながらも、

「へいへい」

了承した。

風邪を引いてる事だし、その程度の我侭位は快く聞いてやるつもり

気持ちで。

そして、龍也が湯殿から出ようとするど、

「あ、そうそう」

「一つ言い忘れてた事があったぜ」

霊夢と魔理沙が思い出したかの様にそう言って、龍也の方を見て、

「覗かないでね」

「覗くなよ」

そう言った。

「はいはい、分かってるよ」

龍也はそう返して今度はそ湯殿を後にした。

その後、

「一寸、温いわよー」

「もう一寸熱くしてくれー」

「へいへーい」

竹筒を使って火に空気を送り込む龍也の姿があった。

翌日。

龍也と魔理沙の看病が良かったのか、霊夢は全快した。

その代わりに、

「ヘックシユン!!」

「……クシユン!!」

龍也と魔理沙の二人が風邪を引いた。

看病された者が治り、看病していた者が風邪を引くと言つある意味
お約束的な事を
してしまったのだ。

そして今現在、龍也と魔理沙は並んだ布団で横になっている状態
である。

そんな状態を暇だなと二人が思っていると、

「お粥と搦り林檎持って来たわよー」

霊夢が二人分のお粥と搦り林檎をお盆に乗せて持って来た。

「お、ありがとな」

「別にいいわよ。昨日は私が看病されたしね」

霊夢はそう言って腰を落ち着かせ、お盆を床に置く。

その後、龍也と魔理沙を見比べて何かを思い付いた顔をし、

「アーンして食べさせて上げましょうか？」

そんな事を言い出した。

それに対し、龍也と魔理沙は

「一人で食えるわ!!」

「一人で食えるぜ!!」

そう返した。

が、

「あら、風邪を引いててつらいでしょ？ 遠慮をするものじゃないわ」

霊夢は二人の言い分を受け入れなかった。

そんな霊夢の顔を見て、龍也と魔理沙の二人は同時にある事を思った。

こいつ、昨日の事を根に持ってやがると。

風邪を引いて体力が落ちている龍也と魔理沙は抗う事は出来ず、アインでお粥と
揺り林檎を食べさせられる事になった。

こうし、龍也と魔理沙の二人は霊夢に看病されながら過ごした。

放浪編 その48

風邪を引いた霊夢の看病をしていた龍也と魔理沙。

その翌日に今度は龍也と魔理沙が風邪を引き、霊夢に看病された。

それからまた翌日。

「魔理沙、醤油取って」

「はいよ」

「龍也」

「ん？」

「掛け終わったら、次は私に回して頂戴」

「あいよ」

龍也と魔理沙は全快した。

勿論、二人の看病をしていた霊夢が再び風邪を引いた……何て事はなかった。

無事、全員が健康な状態で朝を迎えられたのだ。

「二日ぶりだな。お粥以外の物を食べるの」

龍也はそう言いながら焼き魚を口に運ぶ。

「そうだな。そのせいか、やけに美味しく感じるぜ」

龍也の発言に同意しながら魔理沙は漬物を口に運ぶ。

「それはお粥以外を作るのを面倒臭がったせいでしょうに」

霊夢はそう言いながら白米を口に運ぶ。

「そう言っお前さんは違うのかよ」

魔理沙が箸で霊夢の方をさしながらそう尋ねる。

「……ま、違うはないけどね」

霊夢はそう呟いて茶を啜る。

「何だ、霊夢も一緒じゃないか」

「ま、また別に作るのも面倒臭いしな」

「て、お前は作ってないだろ」

まるで自分も作った様に言う龍也に魔理沙が突っ込む。

「同意する位はいいだろ」

「いいけどな。てか、龍也って料理とか全然作れそうにないしな」

「失敬な。切る焼く位は出来るぞ」

「…………それは料理が出来ると言えるのかしら？」

霊夢が少し疑問顔になりながらそう呟く。

「出来るって言っても切る焼く位だろ…………まさか、米を石鹼で洗うって思ってたりは…………」

「流石にそれはねーよ」

龍也は呆れ顔になりながらそう突っ込む。

「だよなー」

魔理沙はそう言って、あははと笑う。

「てか、幻想郷じゃ米を石鹼で…………って言ったな」

「あら、外の世界じゃ違うの？」

龍也の発言に、霊夢はそう尋ねる。

「ああ、外じゃ米を洗剤で…………って言うな」

「洗剤…………ああ、あれね」

洗剤と言う単語を聞き、霊夢は何かを思い出す。

「何だ、洗剤ってこっちにもあるのか？」

「ええ。偶に幻想入りして来たりするからね」

そう言って、霊夢は味噌汁を啜る。

「でも、あれって環境に悪いんでしょ？」

「ああ……そうだな」

龍也は洗剤が原因で起きた環境破壊の記事を何とか思い出してそう言う。

「あまりにもしつこい汚れとかがある場合使ったりもする事もあるけど、環境への悪影響があるから使った後の水の処分に困るのよね」

「その時は私がマスターパークで消し飛ばしてるけどな」

「あ、それなら安全か」

マスターパークで消滅させるのなら安全だろう。

「だからと言っても進んで使おうとは思わないけどね。正直、多少の汚れなら石鹼でも間に合うし」

「そうしとけ」

そう言いながら龍也は茶を啜る。

そして、様々な雑談をしながら三人は箸を進めていく。

「じゃ、そろそろ行くな」

朝食を食べ、縁側で三人並んで茶を啜り終わった後、龍也はそう切り出した。

「なら、私もそろそろ行くかな、一日余計に潰しちゃったし」

魔理沙もそう言って立ち上がり、箒に跨る。

「何だ、何か予定でもあるのか？」

「ああ。寝込んでる間に新しい魔法薬の配合を思いついてな。その材料となる茸を採りに行く積りだ」

「なら、今度来る時は食用の茸でも持って来てくれるかしら？」

魔理沙の発言を聞き、霊夢がそう言う。

「分かったぜ。どうせ近いうちに宴会するだろ。その時に纏めて持って来てやるよ」

そう言って、魔理沙は龍也の方を見る。

「フー訳だから、お前はここ暫らくは見付け易そうな場所に居ろ」

「行き成りだな、おい」

魔理沙の行き成りの発言に龍也は思わずそう突っ込む。

「しょうがないだろ、お前は幽香と一緒に全然居場所が掴めなくて宴会に誘えないって

事が多々あるんだから。幽香は夏の間は太陽の畑に居る事が殆どだから、春夏秋冬と一

年中何処に居るか分からないお前の方が余計に性質が悪い」

「……まあ、一年中居場所が掴めないって言われても否定は出来ん

な
」

龍也はそうポツリと呟いた。

「と、言う訳だからここ暫らくは見付け易い場所に居る」

「わーったよ、出来るだけ努力するよ」

龍也がそう言うと魔理沙は笑顔になって、

「ならばよし」

そう言った。

「それじゃ、まったなー」

魔理沙はそう言い残し、筭に跨って去って行った。

それを見送った後、

「宴会は人数が多ければ盛り上がるしね。魔理沙は賑やかなのが好きだし諦めなさい」

霊夢はそう言って龍也の肩に手を置く。

「そう言う霊夢も騒がしいの、結構好きだろ？」

そう言いながら龍也が霊夢の方を見ると、

「……ま、否定はしないわよ」

霊夢は少し気恥ずかしそうにそう呟く。

そして龍也の肩から手を離して立ち上がり、体を伸ばす。

「私はそろそろ……掃き掃除を始めるけどあんたはどいつする？」

「さっき言った通り、俺も行くよ」

そう言っつて、龍也も立ち上がって体を伸ばす。

「そ。それじゃ、またね」

「ああ、またな」

そう挨拶を交わし、龍也は博麗神社を後にした。

「しっかし、平和だなー」

現在、龍也は幻想郷の何処かにある草原を歩いていた。

博麗神社を出てから此処に来るまで一度も妖怪の襲撃に合わなかったのだ。

今までであれば一度や二度の襲撃はあるものだが。

だが、偶にはこんな日もあってもいいだろう。

龍也がそんな事を思っていると、

「龍也さん」

背後から声を掛けられる。

誰だろうと思いつながら龍也は後ろを振り返る。

そこに居たのは、

「椛」

「こんにちは、龍也さん」

犬走椀であった。

「こんな所で会う何て珍しいな」

「ああ、実はですね……」

そう言っつて、椀は事情を話し始めた。

今日は休みの日だったので友達の河童であるにとりと大将棋をし様
とにとりの家に行

ったら外の世界の機械の類が幻想入りしていて、それを弄くるので
忙しいと言っ張り

紙がにとりの家の扉の前に貼られてたそうだ。

仕方がないので適当に散歩をしていると、龍也を見つけたので声を
掛けたつて事
らしい。

「あ、龍也さん。今暇ですか？」

期待を籠めた目で椀がそう尋ねる。

「え、ああ。暇だけど……」

龍也がそう言っつと、椀は詰め寄っつて、

「じゃあ、私と大将棋をしましょうー!!」

そう言う。

「いや……別にいいけど、俺は大将棋のルールは知らないぞ。普通の将棋なら出来るんだけど……」

龍也がそういい掛けると、

「じゃあ、普通の将棋をしましょう」

椀はそう言うって、盤と駒を取り出す。

何処から取り出したんだと龍也は思ったが、

「ま、いつか」

深くは考えない様にした。

そして、龍也は椀と将棋をする事になった。

「だあ！！ また負けた！！」

あれから椀と五回程対局したが、龍也は五回全て負けてしまった。

「まあ、大将棋とかをずっとやってますからねえ……」

椀はそう言いながら頬を搔く。

流石に将棋歴が相当長い椀に龍也が将棋で勝て言うのは無理があったのかもしれない。

「つつても、あそこまで手も足も出ないとなあ……」

そう呟きながら龍也は落ち込み始める。

「あ、でも、龍也さん。将棋のセンスはありましたよ」

椀は龍也を慰める様にそう言う。

「……あんがとよ」

龍也はそう言って、体を伸ばし始める。

「しかし、結構長い時間将棋をやったから体が少し硬くなったな
そう言いながら首を回している龍也に、

「でしたら、これから体を動かしませんか？」

盤と駒を仕舞いながら椀はそう提案する。

「体を？」

「ええ、久しぶりに手合わせをしませんか？」

椀のその提案を、

「いいぜ。久しぶりにやろうか」

龍也は受けた。

そして二人は同時に立ち上がり、同時に間合いを取る。

太目の刀と盾を装備する椀を見ながら龍也は自身の力を変える。

朱雀の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

同時に両手から炎の剣を生み出し、構える。

「……………」

「……………」

龍也と椛はジリジリと間合いを詰め、

「ッ！！」

同時に駆け、中間地点で激突する。

互いが右手に持っている得物をぶつけ合い、鏝迫り合いをしている状態だ。

少しの間その状態を維持していると、

「ふっ！！」

龍也が左手の炎の剣で椛に斬り掛かる。

が、

「甘い！！」

それを読んでいたかのように、椛は斬撃が来る場所に左手に持っている盾を向わせていた。

そして、こちらも激突。

それから少しの間その状態を維持していると、

「ッ！！！！」

二人は同時に後ろに跳んで間合いを取る。

その状態で先に攻撃を仕掛けて来たのは椛だ。

跳んでいる最中に龍也に向けて弾幕を放ったのだ。

龍也はそれを目に入れながら地面に足を着け、

「はあ！！！！」

両手に持っている炎の剣の柄頭を合わせて回転させ、炎の盾を作る。

椛の放った弾幕は全て炎の盾に防がれていく。

弾幕が炎の盾に当たる感触が無くなると、龍也は炎の盾を二本の炎の剣に戻して椛の姿を探す。

その瞬間、龍也は背後に気配を感じて振り返ると、

「はあ！！！！」

椛が刀を突き出していた。

「くっ！！！！」

その突きを龍也は左手の炎の剣で防ぐ。

そして、その瞬間から椀の攻めが始まる。

猛スピードで放たれる突きの雨。

龍也はそれを後ろに下がりながら二本の炎の剣で防いでいく。

攻める椀に守る龍也。

暫らくはそんな攻防が続いていく。

そんな中、龍也はチャンス待っていた。

この攻防の状況を一変させる様な行動を椀が取る事を。

辛抱強くそれを待っていると、その時が来た。

突如、椀が刀ではなく盾を突き出したのだ。

突然攻撃方法が変わる。

普通であれば虚を付かれて反応が遅れたり防御方法が同じだったり、何も出来なかった

りと言う事態なるであろう。

普通であれば。

龍也は攻撃方法を変える事を予測していたので龍也は冷静に対処した。

突き出される盾に合わせる様にして龍也は蹴りを放った。

「なっ!?!」

予測していなかった事態に椀は思わず驚いてしまう。

龍也はその隙を逃さず、

「はあ!?!」

蹴りを放っている足の裏から椀を飲み込む程の炎を放つ。

そして炎の放つをやめると、

「なっ!?!」

そこには盾だけが残っていた。

避けられた。

龍也はそう思いながら椀の姿を探そうとする。

その瞬間、

「ッ!?!」

龍也は上空から気配を感じて顔を上げる。

そこには、刀を振り被りながら降下して来ている椀の姿があった。

地点目掛けて駆ける。

そして椛が地面に着地した瞬間、

「はあ！！」

龍也は炎の大剣を振るう。

「くっ！！」

椛は何とか反応し、刀で防御したものの、体勢が不安定の状態を受けたせいか体勢を僅かに崩してしまふ。

その隙を龍也は見逃さず、畳み掛ける様にして炎の大剣を嵐を思わせる様な勢いで振るう。

「くっ！！」

だが、それでも椛は完全に体勢を崩すことは無く後ろに下がりながら龍也の攻撃を防いでいく。

攻める龍也と守る椛。

奇しくも、先程とは逆の状態になっていた。

龍也の攻めが始まって暫らくすると、

「しまっ！！」

遂に椛が体勢を崩してしまっ。

龍也はその隙を逃さず、炎の大剣を振り下ろす。

だが、

「外した！？」

龍也の一撃は外れてしまっ。

何故外れたのか。

答えは椛にある。

椛は体勢が崩れた勢いを利用して地面を転がって攻撃を避けたのだ。

そして地面を転がり、龍也の側面へと移動した椛は立ち上がった瞬間、

「はあ！！」

龍也に向けて刀を振るっ。

それに気付いた龍也は反射的に後ろへと跳ぶ。

「痛ッ！！」

だが、完全に避けられた訳ではなく、腹部を僅かに斬られてしまっ。

地面に着地した後、龍也は超歩法を使って更に距離を取ってから腹部に手を当てて掌を見る。

その掌に付いた血の量、出血具合、痛みからそれ程深い傷ではないと推察する。

その後、椀を見ると妖力を解放しながら龍也に近付いて来ているのが分かる。

どうやら、あの一撃で決着を着ける積りの様である。

そう判断した龍也は炎の大剣を再び両手で持ち、

「はあああああああああああああああああ……！」

霊力を解放し、炎の大剣を振り上げる。

そして、椀が龍也の間合いに入ると、

「はあ……！」

二人は同時に互いの得物を放ち、ぶつけ合う。

その瞬間、大きな激突音と共に衝撃波が発生する。

二人は暫らくの間、押し切ろうと力を籠めていたが、

「ッ……！」

突如、弾かれる様にして間合いを取る。

そして息を整えていると、

「流石ですね、龍也さん。相当腕を上げましたね」

椀はそう言って、戦闘体勢を解除する。

「椀も相変わらず強いな」

龍也はそう返して炎の大剣を消し、力を消す。

すると、龍也の瞳の色が紅から黒に戻る。

「と言うか、すみません。龍也さんの服、斬ってしまって」

椀は龍也に近付きながらそう謝る。

「これ位いって。気にするな」

龍也は斬られたシャツの部分に手を当てながらそう言う。

同時に、アリスに頼んで直して貰おうかと思っていると、

「あの、直しければ私が直しましょうか？」

椀がそんな事を言い出した。

「出来るのか？」

「はい」

椛はそう肯定し、懐から裁縫道具を取り出す。

「私達、白狼天狗の主な役目は哨戒ですから、色々動き回ったりします。その過程で

どっかこっかに引っ掛けて着ている物を破いてしまったりって言う事があったりしますからね」

それで裁縫道具を持ち歩く様になっているらしい。

折角なので龍也は椛に修繕を頼む事にした。

「それじゃ、お願いできるか？」

「はい。任せてください」

椛の返事を受け、龍也はジャケットとシャツ脱ぎ、それらを椛に手渡す。

ジャケットとシャツを受け取った椛は、渡された二着の修繕に直ぐに取り掛かった。

それと平行しながら椛と龍也の二人は雑談をしながら過ごしていった。

放浪編 その49

「そろそろ焼けたかな？」

龍也はそう言いつて木の枝に刺して焼いていた魚を手取る。

現在、龍也は霧の湖に居る。

何故龍也が霧の湖に居るかと言うと、適当に森の中を散策していると霧の湖に出たからだ。

その時、丁度腹が減って来ていたので魚を獲って食べる事を決める。

とは言つても、龍也の釣りの技量はそんなに高くない。

寧ろ低い方だ。

それは以前に霧の湖で釣りをした時に分かった事だ。

普通に釣りを始めてもまともに魚が釣れるかは疑わしい。

下手をしたら魚が一匹も釣れないまま日が暮れると言つ事態になる可能性もある。

ならば、どの様にして龍也は魚を獲たのか。

答えは一つだ。

青龍の力を使ったのだ。

青龍の力を使い、湖の一部を巻き上げながら回転させる。

すると、巻き上げられた水から魚が次々と飛び出して来たのだ。

自身が生み出した物以外は地を除けば戦闘には中々使えないが、こう言った事であれば
幾らでも応用が効く。

そして枯れ枝を集め、朱雀の力を使って火を着け、魚を焼いて現在
に至ると言う訳で
ある。

「いったただつきまーす」

そう言いながら龍也は焼き魚に齧り付き、

「……………うん。しっかりと焼けてるし美味しい」

そんな感想を漏らし、再び食べていく。

そして何匹目かの焼き魚を食べ様とすると、

「ねえねえ、あたいにも頂戴」

そんな声が聞こえて来た。

「ほらよ」

龍也は特に考えずに声が聞こえて来た方に焼き魚を渡す。

手に持っていた焼き魚の感触が無くなると、龍也は他の焼き魚に手を伸ばす。

その瞬間、

「熱ッ!!」

そんな声が聞こえた。

龍也は何事だと思い、声が聞こえて来た方へ顔を向ける。

龍也の瞳に映った存在は、

「チルノに大ちゃん？」

チルノと大妖精であった。

「チルノちゃん、大丈夫!？」

涙目になっているチルノに大妖精が心配そうな顔をしながらその声を掛ける。

「うー……こんな物、こうよ!!」

チルノはそう言いながら焼き魚に冷気を当てる。

すると、焼き魚がカチンコチンに氷る。

「ふふん。あたいたら最強ね」

カチンコチンに氷った焼き魚を見ながら、チルノが胸を張りながら誇らしげに
そう言う。

「お前は何がしたいんだよ……」

龍也はそう呟きながら焼き魚に手に取り、

「ほら、大ちゃんも食うか？」

大妖精に差し出す。

「いいんですか？」

「ああ、これ位構わねえよ」

「それじゃ、頂きますね」

そう言って、大妖精は龍也から焼き魚を受け取る。

「あ、熱いから気を付けろよ」

「はい」

こうして暫らくの間、三人は焼き魚を食べながらのんびりと過ごした。

「で、お前等は俺に何か様があつたのか？」

焼き魚を食べ終え、火の始末を終えた龍也はチルノと大妖精にそんな事を尋ねる。

「そうそう!! 龍也に聞きたい事があつたんだ!!」

チルノは何かを思い出した表情をしながらそう口にする。

「話せば長くなるんだけど……」

「ほっ」

龍也は長くなるのかと思っっているながらチルノの方へ向き直る。

「筆算を覚えたあたり達に敵はなかった。どんな足し算だろうと引き算だろうと答える
事が出来た」

「ああ、そう言えば前に筆算のやり方を教えてやったっけ」

チルノ達に筆算のやり方を思い出した龍也はそう呟く。

「そんなある時、人間を脅かしてやろうと思いつながら人間の前にあたいは姿を現した」

「……………少し突っ込み所があるが黙っておこう」

「そしたら、人間があたいに足し算の問題を出して来たからあたいは答えてった」

「ふむ」

「そしたら、その人間は驚いたのさ」

「そつだろうなあ……………」

妖精の大多数はそんなに頭が良くないらしいので、その妖精が問題の正解を答えたら
驚くであろう。

「そのままあたいの最強っぷりを教えてやろうと思ったたら……」

「思ったら？」

「何とその人間！！ 新たな問題を出して来たんだ！！」

チルノはそう言いながら拳を握り始める。

「新たな問題？」

そう言って龍也は首を傾げる。

「そう！！ 3×8っていう問題を！！」

どうやら掛け算の問題を出された様である。

「あたいが悩んでる間にその人間、逃げたんだ！！」

チルノは悔しそうにそう語る。

「で、この問題を大ちゃんに聞いてみたんだけど……」

「私も分からなくて」

そう言って、大妖精はシヨンボリとした表情になる。

「それで相談した結果」

「龍也に聞こうって事になったんだ」

其処まで聞き、思ったより長くなかったなと龍也は思った。

「それで龍也さんを探していると良い匂いがして来て……」

「それで現在に至るって言う訳か」

龍也がそう言うと、チルノと大妖精の二人はコクンと頷く。

「で、龍也。さっきの問題の答えって分かる？」

「 3×8 だろ。答えは24だ」

龍也が答えを言うと、チルノと大妖精が尊敬の眼差しで龍也を見つめる。

「因みにこの問題は掛け算と言うんだ」

「「掛け算？」」

そう言つて、チルノと大妖精は首を傾げる。

「簡単に言えば、足し算を簡略化させたものかな」

龍也はそう言いながら落ちている木の枝を拾い、地面に数式を書き始める。

「例えば、この $2 + 2 + 2 + 2$ は 2×4 で表す事が出来るんだ」

そして地面に書いた数式を説明し始め、

「で、さっきの問題…… 3×8 は $3 + 3 + 3 + 3 + 3 + 3 + 3 + 3$ で表す事が出来るんだ」

先程の問題についても説明をする。

「「ふむふむ」」

二人は龍也の説明を真面目に聞いていく。

そんな二人に感化されたのか、

「序だ、掛け算で使う基本公式の九九と掛け算の筆算のやり方を教えてやるよ」

龍也はチルノと大妖精の二人に九九と掛け算の筆算のやり方を教える事にした。

「えーと……3×3が9で3×4が12で3×5が15で……」

「うーん……逆にただけのも結構あるとは言え、81通りを一気に全部教えたのは流石に無理があつたか？」

唸っているチルノを見ながら龍也はそう呟く。

「大丈夫だよ、チルノちゃん。この九九っていうの全部紙に書いて置いたから」

大妖精はそう言いながら紙に書き写した九九をチルノに見せる。

「おお!! 流石大ちゃん!!」

「確りしてるな、お前」

大妖精を見ながら龍也はそう呟く。

「でも、龍也はよくこんな便利なものを知ってたわね。流石はあたいのライバル!!」

「ほんと、凄いですよ龍也さん!!」

チルノと大妖精の二人はそんな事を言いながら尊敬の眼差しで龍也を見る。

「そうかねえ……」

そう言いながら龍也は後頭部を搔く。

「それはそうと、これならあの人間に仕返しが出来るわね!!」

チルノはそう言って立ち上がる。

「行こ!! 大ちゃん!!」

そう言つて、チルノは何処かへ飛んで行く。

「あ、待ってよー!! チルノちゃん!!」

大妖精はそう声を上げながらチルノの後を追っかけて行く。

二人の後姿が見えなくなると龍也はそろそろ出発し様と思い、立ち上がる。

すると、

「ん?」

森の方から何かか聞こえて来た。

龍也は何だと思いつながら耳を澄ませていく。

「……………これは……………歌声？」

耳を澄ますと、森の方から聞こえて来るのは歌声だと言っているのが分かる。

そしてその歌声は段々と近付いて来る。

龍也は少し身構えながら歌っている者が現れるのを待つと、森の中から何者かが現れる。

現れた者は、

「ミスティア……………」

ミスティア・ローレイであった。

おまけに屋台を引いている。

こちら辺で屋台でも開くのであろうか。

龍也はそう思いながら、

「おい、ミスティアー」

声を掛ける。

声を掛けられたミスティアは、

「ぴゃ!？」

悲鳴を上げ、慌てて屋台の影に隠れる。

急に声を掛けられた事で驚いたのだろう。

そして、ソーツと屋台の影から顔を出す。

「……あ、何だ。龍也じゃない」

声を掛けてきた人物が龍也だと分かって安心したのか、ミステリアは屋台の影から出て来る。

「もう、脅かさないでよね」

「悪い悪い」

龍也はそう謝りながらミステリアに近付いて行く。

「屋台を引いてたって事はここで開店するのか？」

「ええ。ここでならいざと言う時にあそこから魚を獲れるし」

そう言って、ミステリアは霧の湖を指さす。

「何だ、霧の湖にも八目鰻っているのか？」

「うーん……居るとは思うけど何時も獲ってる場所に比べると数は少ないと思うわ」

焼き八目鰻以外の物を出す気なのだろうか。

まあ、ミスティアの屋台は焼き八目鰻が主なだけであるのでそれ以外の物を出していても不思議ではない。

「そっぴゃ、何時もは何処で獲ってるんだ？」

龍也は気になった事をミスティアに尋ねてみる。

「内緒」

ミスティアは可愛らしくそう言う。

「ま、いつか」

八目鰻が獲れる場所には興味があるが、ミスティアが言う気は無い以上無理に聞きだす事もあるまい。

龍也がそう考えていると、

「あ、そうだ！！ 龍也、今暇？」

突如、ミスティアがそんな事を尋ねて来る。

「あ、ああ。暇だけど」

「ならば、屋台の下準備を手伝って！！」

「下準備を？」

「そうそう」

「でも、何で俺なんだ？」

「それはこれを見たからよ」

そう言って、ミスティアは屋台の中に入り、

「確かこの辺に……」

屋台の中の下の方にある棚を漁り始める。

それから少しすると、

「あつたあつた」

何かを取り出し、龍也に近付いて取り出した物を見せる。

「これは……」 文々。新聞”か？」

「そう……！ で、この記事を見て」

そう言って、ミスティアが新聞のある部分を見せる。

「これは……俺か……」

ミスティアが見せた場所には、龍也の写真が写っていた。

丁度、炎の剣を振り切った所の写真だ。

「新聞に書いてあったけど、炎以外にも水とか風とか地とかも操れるんでしょ？」

「ああ、そうだな」

「龍也が手伝ってくれたら、下準備も大分早く終わると思うんだけど……」

「ミステリアはそう言いながら龍也を上目遣いで見つめ、

「手伝ってくれたら今夜はタダで飲み食いしていてもいいよ」

そんな提案をして来る。

今夜はタダで飲み食い出来ると聞いて、

「分かった、手伝うよ」

屋台の下準備を手伝う事にした。

「やった！！ それじゃ、早速お願いね！！」

ミステリアはそう言いながら龍也の手を掴み、屋台へと向った。

「こんなものか？」

「こんなものね」

日が暮れ始めた時間帯、屋台の下準備が終わった。

「後は私がやるから、のんびりしていていいわよ」

「分かった」

ミスティアにそう言われ、龍也はその場を離れる。

そして、湖の近くに腰を落ち着かせてボケーツとしていると、

「ん？」

光る何かが目の前を通る。

龍也は何だろうと思いながらそれを目で追おうとする。

「お？」

また目の前を光る何かが通る。

その数は一つ、また一つと増えていく。

龍也はその一つを注意深く観察する。

すると、

「これは蛍……か」

蛍だと言う事に気付く。

蛍なんて外の世界では見なかったなと思っていると、

「あれ……龍也？」

龍也の隣からそんな声が聞こえて来た。

龍也は誰だろうと思いながら顔を声が聞こえて来た方へ向ける。

龍也に声を掛けて来た者は、

「リグル」

リグルであった。

龍也がどうしてここにと尋ね様とすると、リグルは何かを思い出したかの様な表情をして、周囲の様子を伺い、

「あの怖いお姉さんは？」

そんな事を尋ねて来た。

「怖いお姉さん……ああ、幽香の事か」

そう言い、永遠亭の面々が起した異変以降、リグルが幽香に苦手意識を持っている事を思い出した。

「幽香なら居ないよ。と言うか、幽香は夏の間は太陽の畑に居る事が殆どだ」

龍也がそう言うと、リグルはホッとした表情になる。

「で、お前は何してたんだ？」

「あ、この子達と一緒に一寸散歩をね」

そう言って、リグルは飛んでいる虫を見る。

「そういや、幻想郷には蛭ってどの位いるんだ？」

「うーん……沢山かな。でも、どうしてそんな事を聞くの？」

「いや、外の世界じゃ見た事なかったからな」

「外の世界って……龍也って外来人？」

「あれ？ 言っただけ？」

「うーん……聞いた事ある様な無い様な……」

そう呟きながらリグルは何とか思い出そうとする。

だが、思い出せないと分かると、

「まあ、いいや」

直ぐに諦めた。

「それより、外の世界って蛭とか全然居ないの？」

「まあ……蛭が住める環境が少なくなっただけかなあ。少なくとも、

俺が居た地域には

蛭なんて居なかったな」

「そう……」

龍也の話聞き、リグルはシヨンボリとした表情になる。

「でも外の世界で見なくなった分、幻想郷には蛍が増えたんじゃないか？」

「……そうかも。年々増えていつてる感じがするし」

そう呟き、リグルの表情が幾分か戻る。

そんな時、

「ん？」

真っ黒い球体が龍也とリグルに近付いて来る。

そして、その球体が二人まで後僅かと言う距離まで来ると進行が止まる。

同時に球体が消えて中の存在が露になる。

中に居たのは、

「ルーミア」

ルーミアであった。

龍也が声を掛ける前にルーミアが口を開いき、

「ねえねえ」

「ん？」

「私、お腹空いてるんだけどお兄さんを食べてもいい？」

そんな事を言い出した。

龍也はそれに対し、

「だめだ」

当然の様に断りを入れる。

「えー」

断られたルーミアは不満そうだ。

そして視線を移し、

「じゃあ、あそこの光ってる虫は？」

「それもだめー！！」

今度はリグルが止めに入る。

そして何やら言い争いになって二人を見ながら、

「腹減ってるんだったらミステリアの屋台で何か食っていったらどうだ？ そろそろ

開店すると思うぞ」

龍也がそう言うと、二人の言い争いはピタリと止んだ。

同時に、

「じゃあ、今日はお兄さんの奢りなのかー」

ルーミアはそんな言いながらミスティアの屋台へと向って行く。

「は？」

「それじゃ、ご馳走になります」

リグルもそんな事を言いながらミスティアの屋台へと向って行く。

「おい……」

龍也が呼び止める暇も無く、二人は屋台の椅子に座りながらミスティアに注文している
様子が見て取れた。

そんな様子を見ながら、

「……………どうしてこうなった」

龍也はポツリとそう呟いた。

結局、ルーミアとリグルの飲み食い代は龍也が払う事になった。

放浪編 その50

幻想郷の何処かにある草原を龍也が歩いていると、

「あれは……」

大きな紅い建物を発見する。

幻想郷に存在する大きな紅い建物。

それは紅魔館である。

「そうか……何時の間にか紅魔館の近くに来てたんだな」

龍也はそう呟きながら周囲を見渡す。

一通り見た後、龍也は再び前を向き、

「折角だ。紅魔館に寄って行くか」

そう言って歩き出す。

それから暫らくの間歩いてみたが、中々門が見えて来ない。

紅魔館の外周って結構あつたなと龍也は思い出し、ペースを上げることがどうかを考える。

考えながら歩いて少しすると、

「お……」

門と人影らしきものが見えてくる。

龍也は後少しかと思いつながら歩くペースを上げる。

そしてある程度の距離まで近付くと、

「おつす、美鈴」

そう挨拶を掛ける。

それに気付いた美鈴は龍也の方に体を向け、

「こんにちは、龍也さん」

挨拶を返しながら頭を下げる。

「てか、今日は普通に起きてたんだな」

龍也はそう言いながら美鈴に近づく。

「そんな、何時も寝てるみたいに言わないでくださいよー！……」

そんな龍也の発言に、美鈴は腕を振りながらそう返す。

その後美鈴と雑談をする。

そして雑談が一段落すると、

「それで、本日は何の御用ですか？」

美鈴は龍也に紅魔館来訪の理由を尋ねる。

「用って程、大層なものじゃないさ。近くに来たから顔を見せただけだ」

「そうですか。では、上がって行きますか？」

「ああ、上がらせて貰うよ」

「分かりました」

そう言つて、美鈴は門を開放する。

「そついや、レミリアとフランドールって起きてるのか？」

門が解放し切つた後、龍也は美鈴にそんな事を尋ねる。

「お嬢様と妹様ですか？ まだお休み中ですよ」

「そつか……」

当然と言えば当然である。

最も昼間でも起きている事はあるが、今日はそれに当てはまらなかった様だ。

レミリアとフランドールが起きて来るのは夕方過ぎ位になるであろう。

ならば二人が起きて来るまでは図書館で暇を潰してい様と龍也が考えていると、

「おっ、見つけ!!」

上空からそんな声が聞こえて来た。

龍也と美鈴は声が聞こえて来た方へ顔を向けようとするど、

「よつと」

声を掛けて来た者は龍也と美鈴の間に降り立つ。

降りて来た者は、

「よつ、お二人さん」

「「魔理沙」」

魔理沙であった。

「紅魔館に何か用か？」

「ああ、明日の夜に博麗神社で宴会をする事が決まってな。そのお誘いだ」

どうやら、以前言っていた宴会の日取りが決まったらしい。

「でも丁度良かったぜ。お前も居てさ」

魔理沙はそう言いながら龍也を見る。

「ちゃんと私が言った通り、分かり易い場所に居たな」

「ま、偶然に近いけどな」

龍也はそう言いながら後頭部を搔く。

「で、お前はその後どうするんだ？ 他の場所にも伝えに行くのか？」

龍也がそんな事を尋ねると、

「ああ、その積りだ。でも、その前に……」

「その前に？」

魔理沙は、

「図書館で本を借りていく積りだ」

そんな事を言っただけだ。

「……パクッてるんじゃないかって？」

「失敬な。私は死ぬまで借りてるだけだぜ」

魔理沙は胸を張りながらそう言う。

それに対し、龍也は

「それよか、一人忘れてないか？」

そんな事を言う。

「忘れて……あつ」

龍也にそう言われ、何かを思い出した魔理沙は慌てて美鈴の方へと体を向ける。

すると、魔理沙の瞳にはプルプルと体を震わせている美鈴の姿が映った。

それを見て、魔理沙は冷や汗を流す。

どうやら、龍也と話す事に集中していたせいで美鈴の存在を忘れていた様だ。

「よ、よお。美鈴……」

魔理沙はそう言いながら顔を引き攣らせ、後ろへ一歩下がる。

その直後、

「この距離は……私の距離だ!!」

美鈴はそう言いながら魔理沙にを攻め立てる。

まあ、毎度毎度門を突破されて進入されていたのだ。

おまけに本も持って行くと言う宣言もしたのだ。

このような状況になるのも無理はない。

「うおおおお！？ 落ち着け、美鈴！！」

魔理沙はそう声を掛けながら美鈴から距離を取ろうとする。

だが、

「今日と言う今日は門を越えさせたりはしないぞ！！」

美鈴は直ぐに距離を詰める。

こうして、魔理沙と美鈴の接近戦込みの弾幕ごっこが始まった。

龍也はそれをほおって置き、そのまま門を越えて紅魔館の扉へと向う。

「相変わらず中は紅いな」

紅魔館の中に入って早々、龍也はそう漏らす。

最も、一面紅と言うのが紅魔館のモチーフではあるのだが。

「さて、早速図書館へと向うかね」

そう言い、龍也が図書館の方へと足を向け様とすると、

「あら、いらっしやい」

咲夜が音も無く現れた。

時間を止めて現れたのだろうか。

龍也は咲夜が行き成り現れた事に驚きながらも、

「……っと、相変わらずの登場の仕方だな、お前も」

そう返した。

それに対し、咲夜は

「あら、これ位はメイドの嗜みですわ」

そう返し、

「それはそれとして、貴方はこれから図書館へと向うのかしら？」

そんな事を尋ねる。

「まあ……そうなるのか？ 近くを通ったから顔を出しに来たんだ。
レミリアと

フランドールが起きるまでは図書館で暇を潰す予定」

「成程ね。それにしても、相変わらず彼方此方を周っているのね」

「まあな」

そう言つて、龍也は咲夜と雑談を交わす。

そして雑談が一段落すると、

「そう言えば、お昼は食べたかしら？」

「昼？ いや、まだだけど」

「だったら貴方の分も作って上げましょうか？」

「いいのか？」

「ええ。そろそろパチュリー様の所へ昼食を持って行く時間だからね。その序よ」

「そっか、ありがとう」

龍也は咲夜の申し出を受け入れ、そう礼を言う。

「別にこれ位、構わないわ」

咲夜はそう言って時間を止めて厨房へと向うとする。

その瞬間、

「あ、一寸待って」

龍也が呼び止める。

龍也の声に気付いた咲夜は時間を止めるのを止め、

「何かしら？」

そう尋ねる。

「魔理沙からの伝言……って言うのかな？　それがあってさ」

「魔理沙からの伝言？」

そう言って咲夜は首を傾げる。

「ああ。明日の夜から博麗神社で宴会をするってさ」

「宴会……分かったわ。お嬢様にも伝えておくわ」

「ああ、頼むよ」

「それよりも、その伝言を伝えに来た魔理沙は？」

「ああ、魔理沙なら……」

外で美鈴と弾幕ごっこをしていると龍也が続け様とした瞬間、

「ッ!?」

外から大きな爆発音が聞こえて来る。

二人は何事だと思い、外に出ようと外との出入り用への扉へ近付く。
すると、

「あー……何発か貰っちゃった」

そんな事を言いながら魔理沙が扉を開け、中へと入って来る。

多少服がボロボロの様ではあるが。

他にも、埃やら土やらが付着している。

そんな状態の魔理沙を龍也と咲夜が見ていると、魔理沙が二人の存在に気付く。

「お、いい所にいたな。実は……」

「宴会の件なら俺が伝えたぞ」

魔理沙の言葉を遮り、龍也がそう言う。

「何だ、そっか」

そう言っつて、魔理沙は少し残念そうな顔をする。

「それより、さっきの爆発音は何だ？」

龍也は気になった事を魔理沙に尋ねる。

「ああ、それはこれだぜ」

魔理沙はそう言いながらスペルカードを取り出す。

「スペルカードか？」

「そう。私の新スペルカード、魔廃『ディープエコロジカルボム』だ」

そう言いながら、魔理沙はそのスペルカードの説明に入る。

「これは私が研究の末に生み出した魔法薬型爆弾だな。威力も結構あるぜ」

「爆弾って……」

「おっと、どんな素材で作ったかは教えないぜ」

「別にそれは聞く気はないが、それよかそれを喰らった美鈴は大丈夫なのか？」

「スペルカードを通して使ったからな。其処までの威力はないぜ」

魔理沙はそう言いながらスペルカードを仕舞う。

「まあ、私は上手い事爆風に乗れたが美鈴はこれの直撃を受けたかな。気絶位はしてるかもしれんな」

そう言った後、魔理沙は咲夜の方を見て、

「色々と汚れたから風呂を借りたいんだがいいか？」

そんな事を言い出す。

「貴方も大概図々しいわね」

そう言って、咲夜は溜息を吐く。

「まあ、いいわ。序だから貴女の服の洗濯と修繕もして上げましょうか？」

「いいのか？ それやったら結構時間が……掛からないな。お前の

能力なら」

そう言いながら魔理沙は咲夜の能力を思い出す。

「それじゃ、宜しく頼むぜ」

魔理沙はそう言いながら風呂場へと移動をする。

そんな魔理沙の後姿を見送った後、

「そう言えば魔理沙は美鈴が気絶してるって言ってたけど、ほっといていいのか？」

龍也は咲夜にそんな事を尋ねる。

「美鈴なら後で昼食を持って行く時にでも起すわ」

咲夜はそう言って消える。

時間を止めて移動したんだなと龍也は思いながら図書館へと向った。

紅魔館の地下に存在する巨大な図書館。

龍也はその図書館を歩きながらパチュリーを探す。

パチュリーに顔を見せると言つ目的だが、ここ図書館を使わせて貰うのだから一声

掛けに行くと言つ目的もある。

周囲を見ながら歩いていると、

「お

椅子に座って本を読んでいるパチュリーの姿を発見する。

「パチュリー」

龍也はそう声を掛けながらパチュリーに近付く。

声を掛けられたパチュリーは本から視線を外し、龍也の方に顔を向

け、

「あら、龍也じゃない。丁度良かったわ」

そんな事を言った。

「丁度良かった？」

龍也はそう言いながら首を傾げる。

「ええ、話をするからそこに座ってくれろ？」

パチュリーはそう言いながら近くにある椅子を指さす。

「あ、ああ」

そう言っつて、龍也は指をさされた椅子に座る。

「で、丁度良かったつて言っつのは？」

座った後、龍也はその事を尋ねる。

「その前に、貴方は外人よね？」

「ああ、そうだけど」

「だったら、ロケットの事を知ってるかしら？」

「ロケットつて……あのロケットか？ 宇宙まで行くやつ？」

「ええ、そうよ。知ってる？」

「まあ、一応は」

そう言いながら、龍也は小さい頃の夢は宇宙飛行士だったなと思いつ出した。

「だったら教えてくれるかしら？」

「別にいいけど……何でまた？」

「前に起きた永夜異変。あれ以来、レミィが月に興味を持ってね。最も、直ぐに飽き

たんだけど最近になってまた興味を持ってね。それと、ロケットと言つのは筒状の形をしているって言うのだけは分かっているんだけど……」

パチュリーの話を聞き、

「んー……ロケットで一般的なのは多段式ロケットかな……」

龍也は顎に手を当てながらそう言う。

「多段式ロケット？」

そう言うって、パチュリーは首を傾げる。

「ああ、多段式ロケットって言うのは……」

龍也がパチュリーに多段式ロケットに付いて説明しようとするど、

「失礼します、お昼をお持ちしました」

音もなく咲夜が現れた。

「ご苦労様。そこに置いておいて」

「畏まりました」

そう言って、咲夜はパチュリーと龍也の前に昼食を置く。

本日の昼食はスパゲッティの様だ。

「それでは、失礼します」

昼食を並べ終わると、咲夜は音も無く消える。

その後、

「それで、多段式ロケットと云うのは？」

パチュリーが再びその事を尋ねる。

「ああ、多段式ロケットって云うのは三段で構成されているんだ」

「三段で？」

そう言って、パチュリーは首を傾げる。

「そう。分かり易く云うのであれば、打ち上げて、第一エンジンの

燃料が空になったら
それを切り離して第二エンジンに火を着ける。そして第二エンジン
の燃料も空になった
らそれを切り離して第三エンジンに火を着ける。そうやって宇宙へ
上がるタイプのロケ
ットだな」

「成程……つまり、ロケットと言うのは唯の筒で構成されているの
ではなく、三段の
筒で構成されているのね。だから上手くいかなかったのね」

「その口ぶりだと、ロケットを作った事があったのか？」

「ええ。でも、作ったと言っても唯の置物みたいな感じになっただけ
どね。一応、その事
であの天狗の取材を受けたんだけどね」

それを聞き、龍也は無名の丘にある洞窟に戻ったら”文々。新聞”
の記事を確認して
みようと思った。

そして、龍也はスパゲッティを食べながら

「でも、ロケット何て作ってどうするんだ？ 本当に月にでも行く
気か？」

その事を探ねる。

「……どうかしらね」

パチュリーはそう言ってスパゲッティを食べる。

「でも、まだまだ時間が掛かりそうなのよね。モデルの様な物でもあれば、もう少しは早くなったりはするんだろっけど」

「モデルの様なものねえ……」

龍也はそう呟きながら自身の力を変える。

玄武の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が黒から茶へと変化する。

そして龍也は掌から土を生み出し、その土の形を変えていく。

少しすると、その土は掌サイズの多段式ロケットになる。

「これでいいか？」

龍也はそう言いながら作ったそれをパチュリーの近くに置く。

それを見たパチュリーは少し驚いた表情をし、その後、

「貴方の能力、色々と応用性が高いわね」

そんな事を言い、

「でも、いいの？」

そう尋ねる。

「それ位いいって。ここの図書館は結構使わせて貰ったりしてるぞ。そのお礼
代わりだ」

龍也はそう言って、力を消す。

すると、龍也の瞳の色が黒に戻る。

「そう言う事なら、ありがたく受け取っておくわ」

パチュリーはそう言って、多段式ロケットのミニチュアを手に取り
て観察を始める。

それを尻目に龍也は食事を進めて行くと、

「ご馳走様」

スパゲッティを食べ終わる。

「あら、もう食べ終えたの？」

少し驚いた表情をしながらパチュリーがそう尋ねる。

「ああ。てか、お前もそれを見てないで食べた方がいいぞ」

「それもそうね」

そう言って、パチュリーは多段式ロケットのミニチュアを端の方に

置く。

「それはそうと、貴方は本を読みに来たのよね？」

「ああ」

龍也はそう言つと、

「小悪魔ー、一寸来てー」

パチユリーは小悪魔を呼ぶ。

それから少しすると、

「お呼びでしょうか、パチユリー様」

小悪魔が現れる。

「龍也が本を読みたい様だから案内して上げて」

「畏まりました」

小悪魔はそう言つて龍也に近付き、

「それで、龍也さんはどんな本をご所望ですか？」

そう尋ねる。

「小説とかそういうのはあるか？」

「ありますよ」

「そうか。じゃあ、案内を頼めるか？」

「分かりました」

小悪魔の発言を受け、龍也は立ち上がる。

そして、目的の場所まで案内して貰おうとすると

「あ、一寸待って」

パチュリーが二人を呼び止める。

「小悪魔、本の整理は終わったの？」

「それでしたらもう少しですね」

「だったら龍也を案内し終わったらお昼を食べなさい。さっき咲夜がお昼を持って来たから」

そう言つて、パチュリーは自分の机から少し離れた机を指さす。

其処には、スパゲッティが置いてあった。

おそらく、あの机は小悪魔の机なのだろう。

「分かりました。後で頂かせて貰いますね」

小悪魔はそう言って移動を開始する。

その後が続く様にして龍也も移動を開始する。

「……………んあ？」

目を覚ました龍也は二、三回瞬きをし、寝ていた理由を思い出す。

小悪魔の案内で小説が収められている本棚に辿り着き、適当な一冊を引き抜いて本棚を

背にして読み始める。

暫らく経った後、急な眠気が龍也を襲う。

久々に活字を長時間読んだから疲れが出たのかなと龍也は思い、本を戻して一眠りする事にした。

そして目を覚まして現在に至ると言う事である。

「俺、どれ位寝てたのかな？」

龍也はそう呟き、懐中時計を取り出す為に左腕を動かそうとすると、

「……………ん？」

左腕に重さを感じた。

何だろうと思いながら龍也は左腕に目を向ける。

其処には、

「フランドール？」

フランドールが眠りながら引っ付いていた。

その事に気付くのと同時に、

「……………ん？」

鈍い痛みを感じた。

何だろうと思いつながらフレンドールを見ると、フレンドールが龍也の腕に牙を
衝き立てていたのだ。

おまけに何かを吸い出す音も聞こえる。

「……ああ、そう言えばフレンドールもレミリアも吸血鬼だったのか
そう呟き、何で今まで血を吸おうと言う素振りを見せなかったんだ
ろうと龍也が
思っている」と、

「あ、龍也さん。起きられましたか」

近くを通った小悪魔がそう声を掛ける。

「ああ。それよか、何でここにフレンドールが居るか知ってるか？」

「妹様ですか？ 何でも早くに目を覚まされて図書館内を散歩して
ると寝ている

龍也さんを発見し、起きるまで待つって言ってました」

それを聞き、待っている間に寝てしまったんだろうと龍也は思った。

「あ、それと龍也さん」

「何だ？」

「その……妹様の事を嫌いにならないで上げてください」

「何で？」

「何でって……その、龍也さんは人間ですから吸血鬼に血を吸われる事に嫌悪感を感じるよりは……」

「いや、別に」

龍也はキツパリとそう言う。

龍也の目を見て、小悪魔は龍也が嘘を言っていない事を確信し、

「龍也さんって、本当に変わってますね」

そう呟いた。

「そうか？」

そう言っつて龍也は右手で後頭部を搔く。

「別に吸血鬼何だから血を吸う位は普通だと思っけどな」

龍也はそう言い、フレンドールの方を見て、

「だからフレンドールは俺の血を吸う素振りをみせなかったのか」
そう呟く。

龍也に嫌われなくなかったから血を吸う素振りをみせなかったのだろつ。

今、龍也の血を吸っているのは夢の中で誰かの血を吸っている夢でも見ているからであるろつ。

龍也はその様に考えた後、小悪魔の方を見て

「レミリアも同じ理由で俺の血を吸わないのか？」

思つた事を尋ねる。

「いえ、お嬢様は契約の証として吸血をしたい様です」

龍也の問いに小悪魔がそう答える。

「契約の証？」

龍也はそう言つて首を傾げる。

「はい。龍也さんを自分のものにした時にその契約の証としてって仰られていました」

「成程」

それを聞いて納得したのと同時に

「今思い出したんだけど、吸血鬼に血を吸われると吸われた対象も吸血鬼になるって

話を聞いた事があるんだけど本当か？」

思い出し事を小悪魔に再び尋ねる。

「いえ、妹様は吸血鬼化させる方法を知りませんし、お嬢様は少食ですから無理を

しなければ吸血鬼化させる程血を吸えません」

「ふーん……」

龍也と小悪魔がそんな風に雑談をしていると、

「うーん……」

フランドールが目を覚まし始める。

二人の話し声で目を覚ましたのだろう。

「お、起きたか」

龍也はそう声を掛けながらフランドールの方へ顔を向ける。

フランドールは周りを少しキョロキョロとし、

「あ……」

自分が何をしていたのか理解し、龍也の腕から口を離す。

そして何かに怯えた様な表情をしながら龍也を見る。

それに対し龍也は、

「フランドール、別に俺の血を吸いたかったら吸ってもいいぞ」

そんな事を言った。

「……………え？」

全く予想外の事を言われたフランドールは少し啞然とし、

「その……………怒らないの？」

そう尋ねる。

「フランドールは吸血鬼何だから血を吸った位で怒ったりはしねえよ」

龍也はそう言ってフランドールの頭を撫でる。

その後、フランドールの頭から手を離し、

「ただし、俺が失血死するまで吸ったりはしない事」

そう言う。

その様に言われたフランドールはポカーンとした表情をする。

そんな表情をしているフランドールに

「どつだ、約束できるか？」

龍也はそう尋ねる。

すると、

「うん……」

フレンドールは笑顔でそう答えた。

フレンドールとの一件が終わると、龍也、フレンドール、小悪魔の

三人はパチュリーが
居る場所まで移動を開始する。

パリュリーの居る場所まで来ると、

「あら、いらっしやい」

何時の間にか図書館に来ていたレミリアがそう挨拶をする。

起きた後にパチュリーと話をしに来たのだろう。

「あら、フラン。何か良い事でもあったの？」

フランドールを顔を見て、レミリアがそう尋ねる。

その問いに対し、

「えへへ……一寸ね」

フランドールは嬉しそうな顔をしながらそう答える。

そんなフランドールの表情を見て、

「良い事があったのならそれでいいわ」

レミリアは深く問うのをやめた。

嬉しそうな表情をしている妹の姿を見て深く追求するのは無粋と思
ったのだろう。

その後、龍也の方を見て

「ねえ、龍也。一寸頼みがあるんだけど」

そう言う。

「頼み？」

「ええ。少し話しは古くなるけど、貴方が手に入れたって言う力を見せてくれないかしら？」

「力って言うと……仮面の事か？」

「ええ」

そう言うて、レミリアは頷く。

「咲夜と美鈴から話は聞いていたけど、まだ直接見てはいなかったからね。貴方がここで執事をやってた時に頼めばよかったんだろうけど、あの時は忘れていてね」

レミリアの話聞き、直接見せた者は咲夜、美鈴、妖夢、映姫の四人だけだったたと龍也は思い出した。

それと同時に別に見せてもいいかと思い、

「いいぜ。見せてやるよ」

仮面を見せる事にした。

そして左手を額の辺りまで持って行き、掌からどす黒い靈力を溢れ出させ、左手を一気に振り下ろす。

すると龍也は仮面を付け、眼球を黒くし、瞳を紫にした状態になる。

「ほう……これが……」

レミリアが興味深そうに仮面を付けた状態の龍也を見る。

「ふむ……靈力の量が高くなり、濃度も濃くなり、靈力の質そのものが禍々しくなるか」

パチュリーがそう言いながら龍也の付けている仮面に触れ、

「これは……靈力そのものが物質化している……のかしら？ 何はともあれ、非常に興味深いわね」

そう呟く。

「と言うより、そんな禍々しい靈力を放っていてよく龍也さんは自分を保っていられますね。正直凄いですよ」

仮面を付けている龍也を見ながら小悪魔が少し啞然とした表情でそ

う漏らす。

「そうか？」

「そうですね。普通でしたらその禍々しさに飲まれて簡単に暴走すると思いますよ」

小悪魔にそう言われ、龍也は少し考える。

もう一人の自分を倒し、その力を自身の糧にするまではジワジワと
もう一人の自分に
乗っ取られそうになっていた。

今はもうその兆候はないが、小悪魔の言う事にも一理あると思っ
ていた。

龍也がそんな事を思っていると、

「ねえ、貴方のその仮面を研究してみたいから一欠けら程譲ってく
れないかしら？」

パチュリーがそんな事を言ってきた。

「うーん……それは一寸無理だと思っぞ」

「どうして？」

「この仮面さ、俺の体から離れて少しする離れた部分が勝手に崩壊
するんだ」

龍也はそう言いながら映姫と戦った時に事を思い出す。

映姫に仮面の一部分を破壊され、その部分が空中を漂っている時に
砕け散るようにして

崩壊した事を龍也は僅かに覚えていた。

それを聞き、

「それは残念」

そう言つてパチュリーは溜息を一つ吐く。

「それにしても、やっぱりいいわね。貴方は」

レミリアはそう言いながら龍也の目を見て、

「ねえ、私のものにならない？」

そう言つ。

「悪いが、断る」

龍也はそう言いながら左手を額の辺りまで持っていき、仮面をどす
黒い靈力に変える。

すると、どす黒い靈力は風に流される様にして消えていく。

龍也の顔を覆っているどす黒い靈力が消えると、龍也の眼球と瞳の
色が元の色に
戻る。

その様子を見ながら、

「そう。それは残念」

レミリアはそう言った。

そして、それからはレミリア達と雑談をしながら過ごした。

放浪編 その51

「んあ……」

目が覚めた龍也は上半身を起して両腕を伸ばす。

その後、周囲を見渡し、

「……ああ」

ここが紅魔館の一室である事を理解する。

同時に、紅魔館に泊まった経緯を思い出す。

経緯と言っても大した理由は無く、レミリア達と雑談をしていたら完全に日が落ちたので泊まって行けと勧められただけなのだが。

「にしても、紅魔館のベッドって高級品って感じだよな」

龍也はそう言いながら自分が寝ているベッドを数回叩き、ベッドから降りる。

そして椅子に掛けて置いたジャケットを着て部屋から出る。

すると、

「あら、おはよう」

丁度廊下を歩いていたら咲夜に挨拶を掛けられる。

「ああ、おはよう」

龍也も挨拶を返す。

「朝ご飯、食べていく?」

「ああ、宜しく頼むよ」

「和、洋、中と何でも作れるけど何が良い?」

「んー……昨日は昼も夜も洋食だったから……中華をお願い出来るか?」

「料理の種類はどうする?」

「咲夜に任せるよ」

「分かったわ。それと、ここから食堂までの案内は必要かしら?」

「いや、大丈夫だ。この部屋って何時も俺が泊まる時に使っている部屋だろ?」

「ええ、そうよ」

「なら平気だ。この部屋から食堂まではお前に何度も案内されたしな」

「そう。なら、貴方が食堂に着く頃には食べれる様にして置くわ」

そう言って、咲夜はその場から消える。

時間を止めて移動したのだろうと思いつつながら、龍也は食堂へと足を進めて行く。

「ご馳走様」

「お粗末様でした」

そう言つて、咲夜は食器を洗い場へと持って行く。

因みに咲夜が作った料理は麻婆豆腐、チャーシュー、ワンタンと言つた物であつた。

「それにしても、お前の作る料理つて相変わらず美味しいな」

龍也はそう言いながら咲夜に顔を向ける。

「あら、ありがとう」

咲夜はそう返しながら食器を棚に戻す。

「てか、もう洗い終わったのか？」

「ええ。その辺は時間を操れば直ぐに終わるわ」

「相変わらず便利な能力だな」

龍也がそう言つと、咲夜は龍也の方へと戻つて来る。

「それはそうと、料理もメイドの必須技能だからね。数え切れない程作つたし」

「上手くなるのは当然………つてか？」

「そう言つ事」

咲夜は可愛らしくそう言つ。

「それで、龍也はどうする？ 私達と一緒に博麗神社に向う？」

「いや、流石に手ぶらで行くのもあれだしな。人里で酒でも買って
から行くよ。序に

宴会場の準備の手伝いでもする予定」

龍也はそう言って椅子から立ち上がる。

「そう。なら外までお見送りをさせて貰うわ」

「悪いな」

「気にしなくてもいいわ。これもメイドの務めだから」

「そうか」

そんな風に雑談をしながら龍也と咲夜は外へと向う。

そして外に出ると、

「それじゃ、また後でな」

「ええ、また後で」

そう言い合い、龍也は空中に躍り出て人里へと向った。

「到着……っと」

龍也はそう呟きながら人里の入り口に付近に降り立つ。

少し周囲を見渡した後、龍也は人里の中へと入って行く。

「酒屋、酒屋ーっと」

そう言いながら酒屋を探していると、

「龍也君」

後ろから声を掛けられる。

龍也は一旦立ち止まって後ろを振り向くと、

「慧音先生」

「やっ」

上白沢慧音が居た。

「龍也君は相変わらず幻想郷中を周っているのかい？」

「ええ、そうですね。慧音先生の方は何時もの様に寺子屋で先生を
？」

「うん、そうだよ」

そんな風に龍也は慧音と雑談をする。

雑談が一通り終わると、

「あ、そうだ。慧音先生って今夜暇ですか？」

「今夜と言うと……博麗神社での宴会の件かい？」

「あ、知ってましたか」

「うん。昨日の夜中に魔理沙からそう連絡を受けたよ」

どうやら、本当に色々な所へ宴会開催の知らせを広めたらしい。

こう言った時の魔理沙の行動力は凄いものだ。

「まあ、私は少し仕事が残っているから参加するのは少し遅くなると思うが」

「そうなんですか」

龍也がそう言つと、

「おはようございます。龍也さん、慧音先生」

二人の真横からそんな挨拶が掛けられる。

龍也と慧音の二人は挨拶が聞こえて来た方へ顔を向ける。

二人に声を掛けて来たのは、

「阿求」

「どうも」

稗田阿求であった。

「珍しいな。君がこんな時間に出歩くなんて」

「ここ最近ずっと書の纏めをしましてね。それだけでは健康に悪いので今日は朝から散歩をする事にしました」

それを聞き、書を纏めるのも大変だなと龍也は思いながら、

「そう言えば阿求、今夜暇か？」

そう尋ねる。

「今夜ですか？」

そう言っつて阿求は首を傾げる。

「ああ、今夜博麗神社で宴会があるんだ」

「そうですね……多分大丈夫だとは思いますが、少し遅くなると思いますよ」

阿求は顎に指を当てながらそう答える。

すると、

「なら、私が博麗神社まで連れて行くことか？」

慧音がそう提案する。

「いいんですか？」

「ああ。私も夜まで仕事があるからな」

「でしたら、お願いしますね」

どうやら、阿求は慧音が連れて行く事に決まった様だ。

その後、三人で雑談を交わし、ある程度話が纏まると三人は分かれ

る。

龍也は酒屋で酒樽を買って博麗神社へと向った。

「ちり……と」

博麗神社に着いた龍也は周囲を見渡す。

すると、掃き掃除をしている霊夢の姿を発見する。

龍也は靈夢に近付き、

「よっ」

その声を掛ける。

龍也の存在に気付いた靈夢は掃き掃除を一旦止め、

「いらっしゃい」

そう返す。

そして、

「素敵な賽銭箱ならあそこよ」

そんな事を言いながら賽銭箱を指さす。

「そんな強請らなくても賽銭位入れるよ」

龍也はそう言いながら酒樽を置き、賽銭箱の方へと歩いて行く。

賽銭箱の前に辿り付くと、龍也は財布から小銭を取り出して賽銭箱の中へ入れ、手を数回合わせて拝む。

それが終わった後、靈夢の所へ戻ると、

「何時もありがとう」

可愛らしい笑顔で霊夢はそう言ってきた。

龍也はやれやれと思いつながら、

「そついや、宴会の準備はまだしなくていいのか？」

霊夢にそう尋ねる。

「もう少ししたらするわ」

霊夢はそう言って溜息を吐き、

「どいつもこいつも、ここで宴会をやる時は準備も後片付けも殆どしてくれないのよね」

そう言いながら龍也をジーっと見つめる。

「……分かってるよ。何時も通り手伝ってやるよ」

「あら、急かしたみないで悪いわね」

霊夢はそう言いながら龍也に箒を手渡す。

「……え？」

「龍也は料理を作れないでしょ。だったら出来る事は限られて来るわよね。掃き掃除が」

終わったら神社の雑巾掛けね。私は暫らくはお茶でも飲んでるから」

言うだけ言って、霊夢は神社の中へ入って行った。

いい様に使われている気もしたが、宴会場にここを使わせて貰うのは確かである。

序に料理が作れないのも。

龍也はそう思いながら掃き掃除を始めた。

余談ではあるが、お昼になると霊夢が昼食を用意してくれた。

日が暮れ始めると、チラホラと宴会に参加する者がやって来た。

そして夜になると結構な人数が集まって賑わい始めた為、宴会開始となった。

宴会が開始したので、龍也は酒を片手に持ってプラプラと宴会場内を歩き回っていると

「龍也」

「幽香」

幽香に声を掛けられる。

「お前も来てたんだな」

「ええ、魔理沙に誘われてね」

幽香はそう言いながら酒を一口飲み、

「それはそうと、約束覚えてる？」

龍也にそう尋ねる。

「ああ、覚えてるよ。太陽の畑の向日葵が咲き始める頃になったら
其処で害虫駆除
だろ」

そう答え、龍也も酒を一口飲む。

「で、後どれ位で向日葵は咲くんだ？」

「そうね……五日後には」

「分かった。五日後に太陽の畑に向つよ」

龍也がそう言つと、

「あ、龍也に幽香さん」

「ルナサ」

ルナサが二人に近付いて来る。

その後ろに、

「楽しんでる？」

「やつほー！！」

メルランとリリカが居た。

「私達に何か用かしら？」

「はい。お二人への挨拶と、太陽の畑でやるコンサートの事で」

ルナサがそう言うと、

「ああ、もうそんな時期か……」

幽香はそう呟く。

「時期？」

そうやって龍也が首を傾げると、

「あれ、龍也知らない？ 私達、毎年太陽の畑でコンサートしてるんだよ」

メルランのそんな言葉を聞き、

「そうなのか？」

龍也がそう聞き返すと、

「そうだよ」

リリカがそう返す。

どうやら、上手くかち合わなかった様だなと龍也は思った。

「あ、そうだ。龍也に頼みたい事があるんだけど」

何かを思い出した表情をしながら、ルナサが龍也の方を見る。

「俺に頼みたい事？」

「ええ。前に貴方が色んな所でアルバイトをしてるって聞いたんだけど……」

「ああ、そうだけど」

龍也がそう肯定すると、

「なら、私達からのアルバイトを受けてくれないかしら？」

ルナサがそう願うする。

「別にいいけど、どんなバイトだ？」

「会場設営を手伝って欲しいのよ。それ自体は一日程度で終わると思うから」

「報酬はチケットの売り上げの一部とコンサートの最前列でどう？」

ルナサがバイトの説明を、リリカが報酬の説明をする。

「分かった、それでいいよ。それと、コンサートって何時だ？」

「一週間後よ」

「一週間後か……」

そう言って、龍也は幽香の方を見る。

「太陽の畑の害虫駆除をやったら、コンサートが始まるまで泊まってるでもいいか？」

「ええ、構わないわ。それとチケットの管理は私がする事になるからチケットはその時に渡してあげる」

「分かった」

龍也がそう言った後、五人で雑談を繰り広げ、それが終わると龍也は再び会場内を歩き回る。

そんな時、

「お兄さん」

そう声を掛けられる。

その声に反応する様に龍也は振り返る。

そこに居たのは、

「橙」

橙が居た。

「橙も来てたんだな」

「はい。紫様が宴会があるから行くつって仰られて」

「ああ……」

それを聞いて、前に霊夢が言っていた事を思い出す。

何でも、紫は宴会に誘ってなくても勝手に宴会に参加していると。

「あ、そうだ。お兄さん、この刺身を食べますか？」

橙はそう言って、刺身を乗せている小皿を龍也に見せる。

「いいのか？」

「はい」

「じゃあ、一つ貰うよ」

そう言つて龍也は刺身を一つ摘まんで食べる。

「お、美味しいな。この刺身」

「紫様が持つて来た外の世界の魚らしいですよ」

「外の世界のねえ……」

そう呟きながら刺身を見る。

紫の能力ならば外の世界との行き来は楽に出来るであろう。

どうやって手に入れているかは分からないが。

「橙……と龍也も居たのか」

「あ、藍様」

少し龍也が思考に耽つていると何時の間にか藍がやって来ていた。

「元気そうだな」

「ああ。元気にやつてるよ」

龍也がそう答えると、

「あ、そうだ。稲荷寿司を作ってきたんだが、食べるかい？」

藍が小皿を取り出す。

その上には幾つもの稲荷寿司が乗っている。

「いいのか？」

「ああ。自分で言うのも何だが、一寸作りすぎてしまったな」

藍はそう言って、ハハハと笑う。

「そう言う事なら」

そう言って、龍也は稲荷寿司一つ取って食べる。

「美味しいな」

「そうか、それは良かった」

そう言って、藍は嬉しそうな顔をする。

自分が作ったと言うのもあるだろうが、自身の好物が褒められて嬉しいと言うのもあるのだろう。

龍也はそう思いながらも一つ食べようと稲荷寿司に手を伸ばすと、その稲荷寿司が真上から掠め取られた。

誰が犯人かは分かっている。

何せ、

「うん、美味しい。また腕を上げたわね、藍」

稲荷寿司の真上に隙間が開いていたのだから。

「元気そうね、龍也」

紫はそう言いながら隙間を使って龍也の正面に顔を出す。

「お前は相変わらず神出鬼没だな」

「褒め言葉して受け取っておくわ」

紫はそう言って隙間の中に引っ込み、龍也の後ろから歩いて現れる。

その後、紫は龍也の目を覗き込む。

「ん？　どうかしたか？」

ジッと見つめる紫を不審に思った龍也がそう尋ねる。

「何でもないわ」

紫はそう言いながら扇子で口元を隠し、

「それよりも、私の様な良い女に見詰められたんだからもっと嬉しそうな顔を

しなさい」

そんな事を言っただけだ。

それに対して龍也が何かを言おうとすると、

「ああああ、紫は若い燕に唾を付ける気がしら？」

幽々子が現れた。

手に大量の食べ物を持ちながら。

「ああ、幽々子」

紫はそう言って、幽々子の方を見て、

「それにしても、相変わらずの量ね」

そう呟く。

「ああ、美味しい物を沢山食べるのが長生きの秘訣よ」

「長生き？」

龍也がそう言いながら首を傾げると、幽々子は龍也に近付き、

「何だ？」

「一寸ジッとしてみなさい」

そう言って龍也の目を見る。

それから少しすると、

「……成程」

そう呟いた。

龍也がまたかと思っていると、

「あら、幽々子こそ若い燕に唾を付ける気かしら？」

紫がそんな事を言う。

「それはどうかしら？」

幽々子はそう言いながら扇子で口元を隠す。

この二人は親友同士だからか似た様なところがあるなと龍也が思っている。

「幽々子様ー！！ お酒とお摘みをお持ちしましたー！！」

妖夢が酒と摘まみを持って現れた。

「ご苦労様。其処に置いていて」

「はい」

幽々子に言われた場所に持って来た物を置く。

その後、

「紫様、龍也さん、藍さん、橙さん、こんばんは」

そう挨拶をする。

龍也達も挨拶を返し、雑談をする。

雑談が一段落付くと、龍也は再び別の場所へと向う。

色んな所に顔を出し、雑談をし、また分かれて別の場所へ向う。

それを何度か繰り返すと、

「あ、見付けたわ。龍也」

そんな声が聞こえて来た。

龍也は一旦立ち止まって声が聞こえて来た方へ振り返る。

龍也に声を掛けて来た者は、

「アリス」

アリスであった。

「こんばんは、龍也」

アリスがそう挨拶をすると、

「ああ、こんばんは。アリス」

龍也も挨拶を返す。

「楽しんでるか？」

龍也がそう尋ねると、

「ええ、それなりにね」

アリスはそう返す。

「それより、これを見てくださいませんかしら」

そう言っつて、アリスは人形を展開する。

だが、何時もの人形とは違う。

何が違うのか。

それは服だ。

人形が着ている服が外の世界の服なのだ。

おまけに、人形が着ている服は全部デザインが違う。

「これ、全部お前が作ったのか？」

人形を指さしながら龍也がそう尋ねると、

「ええ、そうよ」

アリスはどうって事ないと言った表情でそう答える。

「……凄いな、お前」

「そうかしら？」

アリスは首を傾げながらそう言い、

「それより、感想を聞かせてくれないかしら」

そう言う。

「感想を？」

「ええ。外の世界の服の事を教えてくれたのは貴方だしね」

アリスにそう言われ、龍也は人形の服を一体一体見ていく。

全ての人形を見終えた後、

「……どれもこれも文句なしだ」

龍也はそう漏らした。

どの人形の服も完成度がかなり高い。

所々、服にアリスのアレンジが入っているがそのセンスも良い。

「それなら良かったわ」

龍也の感想を聞いた後、アリスはそう言って人形を仕舞う。

「それにしても、よくあれだけの量の服をあの完成度で作れるな」

「人形を作っていると自然と裁縫技術が上達するからね」

そう言って、アリスは手に持っていたグラスの中に注がれているワインを一口飲む。

そしてアリス雑談をしていると、

「お、居た居た」

魔理沙がやって来る。

「どうしたんだ？」

「これから酒飲み大会が始まるんだけど、お前等は参加するか？」

どうやら、酒飲み大会の知らせに来たらしい。

「いいぜ、俺は参加するよ」

「龍也は参加な。アリスは？」

「私は止めとくわ」

「何だ、逃げるのか？」

魔理沙が挑発する様にそう言つと、

「前言撤回。参加するわ」

アリスは参加する意思表示をする。

「そこなくつちゃ」

「出るからには勝つわ」

そんな会話をしている魔理沙とアリスを見ながら、アリスって意外と熱くなり易いなと

龍也は思った。

こうして、酒飲み大会などをしながら宴会は盛り上がっていった。

放浪編 その52

「あいてててて……」

朝、博麗神社の一室で龍也は目を覚ます。

それと同時に龍也は頭痛を感じた。

何故、朝から頭痛を感じているのか。

原因は分かっている。

昨日の宴会で行った酒飲み大会が原因だ。

自分の限界も弁えずに飲み続けたから二日酔いになった。

まあ、自業自得である。

今度から気を付け様と思っても無理だろうなと思いつながり、
龍也は立ち上がり、

ジャケットを着て泊まっていた部屋から出る。

そして居間に向かって歩いていくと、

「あいてててて……」

頭を押さえながら歩いている魔理沙を発見する。

「はよう」

龍也がそう挨拶をすると、

「おお、おはよう」

魔理沙も挨拶を返す。

朝の挨拶が済むと、

「二日酔いか？」

龍也は魔理沙の顔色を見ながらそう尋ねる。

それと同時に魔理沙も酒飲み大会に参加してたなと思い出す。

「ああ。そう言うお前もか？」

「ああ」

お互い今の状態を確認すると、同時に溜息を吐く。

「そう言えば、酒飲み大会に参加してた奴は皆ここに泊まっているのか？」

「いや、確か従者持ちの奴等は従者に付き添われる様にして帰ったと思うぜ。私の記憶が確かなら」

「あー……そんな記憶がある様な無い様な……」

龍也はそう言いながら頭を押さえ、記憶を掘り起こそうとする。
が、思い出せなかった。

「……思い出せねえ」

「ま、宴会終盤の時には意識が殆どなかったからな。龍也は」

「……それでよく部屋まで辿り着けたな、俺」

龍也は自分の事ながら少し感心した。

「ま、それより居間に行こうぜ」

「だな」

そう言って、龍也と魔理沙の二人は居間へと移動する。

そして、居間の襖を開けると、

「霊夢とアリスか……」

畳の上につっ伏している霊夢と卓袱台につっ伏してるアリスの姿があった。

「おーい、大丈夫かー？」

龍也がその声を掛けると。霊夢とアリスは顔を上げ、

「何とかね」

「取り敢えずは」

そう口にする。

それを聞き届けた後、龍也と魔理沙の二人は卓袱台の近くに移動して腰を落ち着かせる。

「処で、水は無いのか？」

魔理沙がそう尋ねると、

「無いわね。井戸から汲んでこないと」

霊夢がそう言うと、女性陣の視線が龍也に集まる。

「……つまり、俺に汲んで来いと？」

「あら、龍也は苦しんでる女の子にそんな重労働をさせる気？」

霊夢にそう言われ、龍也は三人を見る。

女三人寄れば何とやら。

口で何かを言っても無駄と龍也は悟ったのか、

「……行って来る」

井戸に行って水を汲んで来る事にした。

龍也が水を汲んで戻って来ると、

「おかえり」「」

「おかえりなさい」

霊夢、魔理沙、アリスの三人がそう言って出迎えてくれた。

「おっ」

龍也はそう返し、水が入った桶を卓袱台の上に置く。

すると、霊夢が湯飲みを龍也に差し出す。

おそらく自分が水を汲みに行っている間に用意したのだろう。

龍也はそう思いながら霊夢から湯飲みを受け取る。

そして、各々がそれぞれのペースで桶から水を汲んで飲み始め、皆がある一定以上の水を飲んだ後、

「処で朝ご飯は？」

龍也がそう切り出した。

「悪い。流石に今の状態じゃ何かを作る気にはなれん」

「私もね。料理が出来る程体調は良くないわ」

「私もよ。今の状態だと料理を作れる様な精度では人形を操れないわね」

龍也に問いに魔理沙、霊夢、アリスはそう口にする。

アリスの発言を聞き、

「あれ？ お前の人形って半自立型もある筈だから料理位作れるんじゃないのか？」

魔理沙が疑問に思ったを口にする。

「半自立型と言っても結果までの過程をある程度自分で判断するっただけよ。流石に

料理の様な完成までの過程が複雑な物までは無理よ」

魔理沙の問いにアリスはそう答える。

「そっか……」

魔理沙がそう言うと同は肩を落とし、このまま餓えた状態で過す事になるのかと思った。

その時、

「あ、そうだわ」

霊夢は何かを思い出した表情になる。

「お、何か思い出したのか？」

「ええ。林檎よ林檎」

「「「林檎？」「」」

そう言って龍也、魔理沙、アリスの三人は首を傾げる。

「そう。確か台所に結構な量の林檎が在った筈。それなら調理せず

に食べれるでしょ」

確かに、林檎ならそのまま食べる事が出来るであろう。

「なら、この子達に持ってこさせるわ」

アリスがそう言って指を動かすと、アリスの人形数体が台所へ向って行く。

それから少しすると、アリスの人形は林檎が入った籠を持って戻ってくる。

そしてそれを卓袱台の上に置くと、龍也達は林檎を手に取って食べ始めた。

林檎を食べ、腹が膨れて頭痛がある程度収まった後、龍也は宴会の後片付けをする事にした。

龍也一人でやる予定であったが、霊夢、魔理沙、アリスも手伝ってくれた。

何でも、食後の運動をしたくなつたからとか。

そのお陰で後片付けは予定よりも早く終わった。

後片付けが終わり、適当に雑談をし、その後流れ解散の様に分かれて暫らく。

龍也は太陽の畑に向けて進んでいた。

無論、四日後にある幽香との約束を守る為に。

博麗神社から太陽の畑までの道中、何のも問題もなく行ける筈であった。

そう、筈であったのだ。

では、何があったのか。

それは、

「くそ！！ 何処か雨宿り出来る場所はないのか!？」

突然のどしゃ降りである。

龍也がのほほんと歩いていたらパラパラと雨が降り始め、現在では雨の音しか

聞こえなくなる程に降り始めた。

おまけに風も強い。

最初のうちは青龍の力を使い、頭上に水球を生み出して傘代わりにしていたのだが、

雨の量が増え、風も強くなり、それも今では意味を成さなくなった。

その後、白虎の力を使い、体を覆うように風を纏って雨を防ぐと言う方法を行ったが、
全方位が見えなくなると言う結果になった。

おまけに、風に乗る様にして回転している水が吹き飛ばされて龍也自身に当たると言う

事態にもなったので、この方法も意味を成さなくなった。

と言う訳で現在、龍也は雨宿りが出来る場所を求めて走っているのである。

だが、走っても走っても一向に雨宿りが出来る場所は見つけられなかった。

本降りになる前に歩いていた場所が草原と言うのも悪かった様だ。

このままでは本日の寝る場所を探す事も出来ない。

龍也がそう思っていると、

「ん？」

突如、地面が揺れるの感じた。

不審に思った龍也は一旦立ち止まって様子を見る。

すると揺れはどんどん大きくなり、

「なっ!?!」

龍也の足元近くの地面が割れた。

龍也は慌てて後ろへ跳ぶ。

その瞬間、割れた部分から何かが出て来る。

出てきたのは巨大な骸骨だ。

その骸骨を見て、

「あれは……がしゃどくろか?」

龍也はそう呟いた。

同時に、その骸骨が龍也を薙ぎ払う様にして腕を振るう。

「おおっと!!」

龍也は再度後ろに跳ぶ事でその攻撃を回避する。

通常、骸骨が動く訳が無い。

更に言うのであれば、あんな大きな骸骨は在り得ない。

骨の妖怪みたいな存在である。

炎に対する耐性は通常の骨よりも高いであろう。

更に言うのであればがしゃどくろ巨大だ。

そのせいで炎がより効きにくくなっている。

おまけに今の天候はどしゃ降り。

これでは炎属性の技などは余計に効きづらくなる。

龍也が其処まで考えると、

「おわ!?!」

がしゃどくろが頭部を振って龍也を吹き飛ばす。

ある程度吹き飛ばされると、龍也は空中に靈力で出来た見えない足場を作って減速していく。

そして完全に止まると大きいだけあってパワーがあるなと思いがらだが、がしゃどくろを見て考える。

朱雀の力ががしゃどくろを倒すのは簡単だ。

力を解放し、仮面を付ければがしゃどくろを燃やす事も溶かす事も可能であろう。

それを見届けた後、

「はぁ……はぁ……はぁ……」

龍也は多少息を乱しながら膝に手を着け、

「雨を操るのって思ったたより集中力があるな」

そう呟く。

これならば、雨粒大の水を無数に生み出して攻撃した方がよさそう
だ。

戦闘中に雨を操るのは避けるべきだなと龍也が考えていると、

「お」

がしゃどくろが立ち上がって来た。

先程の攻撃のせいかな、所々に孔が空いたり、欠けたり、輝が入って
いたりしている。

が、それでもがしゃどくろは健在の様だ。

「根性あるな、お前」

龍也はそう言いながら後ろに下がって構えを取る。

何故ならば、がしゃどくろの戦意が消えていなかったからだ。

それから少しの間、睨み合いが続く。

そんな中、突如雷が鳴り響く。

それを合図にしたかの様にがしゃどくろは口を開き、そこから妖力の塊を放つ。

迫って来る妖力の塊を見ながら龍也は掌をがしゃどくろに向けて、

「霊流波！！」

霊流波を放つ。

そして、二人の中間地点で青白い閃光と妖力の塊が激突し、爆発して爆煙が発生する。

が、雨と風の影響で爆煙も直ぐに消え去る。

爆煙が消え去った時には龍也の姿はなかった。

がしゃどくろは龍也が何処に行った探そうとすると、

「おおおおおおおおおおお！！！！！！」

上空からそんな声が聞こえて来た。

がしゃどくろが上空に顔を向けると、そこには水の大剣を振り被りながら降下して来て
いる龍也の姿があった。

がしゃどくろがその事を理解すると、がしゃどくろは真っ二つに斬り裂かれた。

龍也が着地すると同時に、真っ二つに斬り裂かれたがしゃどくろが倒れる。

龍也は着地した体勢のまま周囲を警戒する。

暫らく警戒すれど、がしゃどくろが復活する様子はなかった。

この事から完全に倒したと思った龍也は水の大剣を消し、力を消す。

同時に、瞳の色が蒼から黒に戻る。

「ふう……」

龍也は一息吐き、周囲を見渡すと割れていた地面が何時の間にか塞がっていた。

その事に少し驚きながら、龍也は再び雨宿り出来る場所を探す為に移動を始めた。

がしゃどくろを倒して暫らく。

龍也は、

「あー……濡れまくったせいか服が重い」

まだ雨宿り場所を見つけてはいなかった。

おまけに日も完全に落ちてしまっていた。

もう雨が止むまで彷徨っていいようか。

龍也がそう考えた時、

「お？」

何か、建物らしき物を見つける。

雨宿りできればラッキーと思いながら龍也はその建物に近付いて行く。

建物が目視出来る距離まで来ると、

「これ……寺か？」

龍也はそう呟いた。

龍也の目に映ったのは寺。

しかし、結構ボロボロで廃寺と言つ言葉が似合う状態であった。

「ま、雨宿りが出来ればいいか」

龍也はそう言つて、寺の中に入って行く。

「お、外見とは裏腹に中はボロボロつて感じじゃないな」

寺の中に入った龍也は関口一番にそう漏らす。

外見がボロボロだったので中もボロボロだと思っていた龍也にとつ

てこれは虚を
付かれた感じである。

この状態なら誰かが住んでいる可能性がある。

そう思い立った龍也は、

「すみませーん！！ 誰か居ませんかー！？」

そう声を掛けた。

少しすると、誰かが近付いて来る足音が聞こえて来る。

そして、

「どなたでしょうか？」

一人の少女が現れる。

虎を思わせるような髪の色。

服は袖の部分がゆったりしており、色は白い。

それ以外の部分は赤く、スカートも赤い。

腰周りには虎柄模様の布地が巻かれている。

虎を思わせる様な風貌だと思つると同時に妖力を感じる事から妖怪かなと思ひ、

「夜分遅くにすみません。俺……私は四神龍也と申します。宜しければ、雨が止むまで

雨宿りをさせて貰えませんか？」

龍也はそう口にする。

すると、

「あ、そうでしたか。どうぞお上がりください」

目の前の少女はそう言ってくれた。

どうやら、上げて貰える事になった様だ。

「ありがとうございます」

龍也はそう礼を言い、靴を脱いで廊下にとがと、

「申し遅れました。私は寅丸星と申します」

目の前の少女、星はそう名乗って頭を下げる。

「あ、御丁寧どうも」

そう言って、龍也も頭を下げる。

そして二人が頭を上げると、

「宜しければ、湯殿の準備をしましょうか？」

星がそう尋ねて来た。

「いいんですか？」

「はい。それにそのままの状態ですと風邪を引いて仕舞いますよ」

そう言われて、龍也は今の自分の格好を見る。

ここまですつと雨に打たれて来たせいで龍也はビショビショに濡れている。

おまけに、このままでは廊下を水で汚してしまうだろう。

そうなつては星に悪いであろう。

龍也はそう考え、

「それでは、ご好意甘えさせて頂きます」

星の申し出を受ける事にした。

「はい、では少々お待ちください」

そう言つて、星は急ぎ目に廊下を駆ける。

それから少しすると、

「湯殿の準備が終わりました」

星が戻つて来た。

「随分早かったですね」

「私もそろそろ身を清めようと思つてましたから」

「すみません、一番風呂を貰つ形になつてしまつて……」

「構いませんよ。貴方が風邪を引いてしまう方が大変ですから」

星はそう言って龍也に背を向け、

「それでは、湯殿にまで案内しますので着いて来て下さい」
歩き出した。

龍也も星の後を追う様にして歩き始める。

そして少しの間歩くと、

「この先が脱衣所、更にその先が湯殿となっております」

星が襖の前に立ち止まってそう説明する。

「少々古いですが中に代えの衣服を御用意しましたので」

「あ、ありがとうございます」

「いえ。それとお召し物が入って左側にある籠の中にいれて置いて
ください。洗濯して
置きますので」

「何から何まですみません」

星の心遣いに感謝しながら龍也は頭を下げる。

「お気になさらず。」「ゆっくりとびそ」

星はそう言って頭を下げる。

「ありがとうございます」

龍也はそう礼を言っつて脱衣所の中に入る。

そして財布と懐中時計を取り出して服を脱ぎ、脱いだ服を星が言っつていた籠の中に入れ、湯殿へと向う。

「おお……」

湯殿へ入った龍也は思わずそう感嘆してしまふ。

一人二人が入れる位のスペースだと思つていた湯殿が十人前後は入れるスペースであつたのならばそう感嘆しても無理はないだろう。

何時までもポケットとしていてもあれなので、龍也はまず体を洗う事にした。

体を洗い終わると龍也は湯船に浸かり、

「……はあー、生き返るー」

そんな言葉を漏らす。

体中から疲れが取れていくのを感じながら、龍也はのんびり過ごした。

「一寸長湯し過ぎたかな？」

龍也はそう呟きながら廊下を歩く。

星に迷惑を掛けぬ様にさつさと上がる積りであったが、あまりの気
持ち良さについつい
長湯をしてしまったのだ。

因みに、龍也が今着ているのは浴衣。

色は深い青だ。

星は少々古いと言っていたが、龍也には新品同様に思えた。

龍也は星に内心で感謝し、風呂から上がった事を星に伝えようと星を探していると、

「あ、こちらに居ましたか」

廊下の曲がり角から星が現れた。

「すみません。何だか長湯をしてしまって」

「いえ、お気になさらず。それより、湯加減はどうでしたか？」

「あ、凄く良かったです」

「それは良かったです」

星はそう言って一息吐き、

「それと、精進料理ですがお夕飯を用意しました。宜しければどうぞ」

そう言う。

「あ、すみません。ご飯まで用意して貰って」

「お気になさらず。一人分作るのも二人分作るのも大した手間ではありませんから」

そう言って、星は龍也に背を向けて歩き出す。

その後を追う様にして龍也は足を進める。

それから少し歩くと、

「こちらになります」

目的の部屋の前に辿り付く。

その後、襖を開けて二人は中へと入って行く。

中に入って直ぐに卓袱台の上に乗っている料理を発見する。

「どうぞ」

星にそう言われ、龍也は卓袱台の前に座る。

それを見届けると、星は龍也の反対側の方に座る。

そして、二人は手を合わせて

「いただきます」

そう言って料理を食べ始める。

精進料理を食べ、

「あ、美味しいですね」

龍也はそう口にする。

「お口に合った様で何よりです」

それを聞いた星はそう言っつて少し嬉しそうな顔をする。

少し雑談を交えながら二人は箸を進めて行く。

それから少しすると、

「そう言えば、妖怪が寺に住んでいるって言っつのも珍しいですね」

龍也は少し気になった事を口にする。

その瞬間、星は箸を止め、

「……………どうして私が妖怪だと？」

そう尋ねる。

「貴女から妖力を感じたからですけど……………」

「そうですか」

龍也の返答を聞きいた星は箸を置き、

「それでどうしますか？ 私を討伐しますか？」

少し目を鋭くさせながらそう言っつ。

「え？ どうしてですか？」

「……え？」

龍也のそんな返答を受け、星は目が点になる。

「えと……貴方は人間ですよね？」

「はい」

「それで、私は妖怪です」

「そうですね」

「だと言うのに貴方は私を討伐し様と思わないのですか？」

「思いませんね。それ以前に貴女は俺……私の恩人ですし」

龍也はキッパリとそう言う。

「そりゃ、貴女が俺……私に敵意とか殺意とか……俺……私を殺そうと襲い掛かって

来たりするのであれば話は別ですけどね」

そう言って、龍也は箸を置く。

そして、

「それに俺……私は人間に限らず妖怪とか妖精とか妖獣とか半妖と

か魔法使いとか幽霊
とか吸血鬼とか悪魔とか不老不死とか天狗とか鬼とか神とか死神と
か閻魔とか色々な存
在と交友関係がありますからね。貴女が妖怪だからと言ってどうこ
うする気はありませんよ
んよ
」

今まで出会った存在を思い浮かべながらそう言う。

その発言を聞き、

「……あ、貴方はそんな多種多様な存在と交友関係があるのですか
!?!?」

星は驚きながらそう尋ねる。

「え、ええ。そうですが……」

龍也がそう言つと、

「そうですか」

星は救われた様な報われた様な……そんな感じの表情をした。

「あの……星さん、どうかしましたか？」

龍也がそう尋ねると、

「いえ、何でもありません」

星はそう言って表情を戻し、

「私の事は星で構いません。それと、喋り易い口調で結構です」

そんな事言っ て来た。

「いいんですか？ お……私としてはその方が楽ですけど」

「構いませんよ」

「じゃあ……星、これでいいか？」

「はい、それでいいですよ。龍也君」

一夜にして、龍也と星は随分と打ち解けた様だ。

そして、龍也と星の二人は雑談をしながら再び食事を進めていった。

放浪編 その53

「龍也君、ありがとう。お寺の掃除まで手伝って貰って」
星はそう言っつて龍也に頭を下げる。

「いいって。俺だつて色々世話になつたんだから」
頭を下げる星に対し、龍也はそう言つ。

「でも、丸一日掛かつてしまいましたし……」

「それこそ気にするなだ。俺は元々自由気ままに幻想郷中を旅して
るしな」

龍也はそう言いながら寺の掃除を手伝つた経緯を思い出す。

寺に泊まつた翌日には雨も止んでおり、空には見事な晴天が広がつ
ていた。

そして雨で濡れていた龍也の着ていた服も乾いていた。

これならば直ぐに旅を再開出来たのが、龍也は食事に風呂に寝床と
色々世話になつて

置いて何もせずに出発するのはどうかと思つた。

なので、この寺の掃除を手伝おうと考えた。

その旨を最初に星に伝えた時、星は気にしなくてもいいと言つてく

れたが、龍也が
どうしても手伝いたいと言ったら了承してくれた。

こうして、龍也は星と二人で寺の掃除をする事になった。

朝早くから掃除を始めたので昼過ぎには終わるだろうと龍也は思っていたがそうはいかなかった。

この寺、龍也が思っていた以上に広がったのだ。

二人掛り、そして龍也の能力をフルに使っても掃除し終わった頃には日が暮れていたのだ。

そんな訳で龍也はもう一泊する事になったのだ。

これについては龍也にとって予想外であったが、許容範囲内だ。

まだ、幽香との約束の日まで二日はある。

少しペースを上げれば二日後には太陽の畑には着くであろう。

「それにしても、龍也君の能力って便利ですよね」

龍也が少し思考に耽っていると星がそんな事を言う。

「龍也君のお陰で水を汲んだりしに行く時間がなくなりましたし」

「俺の能力よりも星の能力の方が便利と言うか凄いなと思うが……」

龍也はそう言いながら星の能力を思い出す。

星の能力は”財宝が集まる程度の能力”である。

その気になれば一夜で億万長者になる事も可能であろう。

とは言っても、星自身は財とかに然程興味を示してない。

寺に住んでいるからであろうか。

龍也はそんな事を思いながら、

「それはそうと、色々世話になったな。ありがとう」

星に向って頭を下げる。

「いえいえ、こちらこそ」

そう言っつて、星も再び頭を下げる。

そして二人が頭を上げた後、

「それじゃ、またな。近くに来たらまた寄らせて貰おう」

「はい。また会えるのを楽しみにしています」

そう挨拶を交わし、龍也は星に背を向けて歩き出すが、

「あ、そうだ」

龍也は何かを思い出して振り返り、

「もう水の入ってる桶に足を引っ掛けて一緒に転ぶ何て事、するなよー」

そんな事を言う。

その後、

「それは忘れてくださいー!!」

そう叫びながら顔を真っ赤にし、両手を振る星の姿があったという。

「うっし、間に合ったな」

二日後、無事に太陽の畑に着いた龍也がそう漏らし、

「さて、幽香は何処かなー？」

幽香の姿を探す。

暫らく太陽の畑を探していると、

「あ、いたいた」

幽香の姿を発見する。

「おーい、幽香ー」

龍也はそう声を掛けながら幽香に近付く。

龍也の声に気付いたのか、幽香は顔を上げ、

「いらっしやい、龍也」

そう言う。

「ちゃんと来てくれたのね」

「約束したからな」

龍也はそう言っただけで周囲を見渡し、

「にしても、綺麗に咲いたな」

そう言う。

「そうでしょ、そうでしょ」

龍也の言葉を聞いて幽香は嬉しそうな顔をする。

幽香が嬉しそうな顔を無理もない。

太陽の畑に咲く向日葵は本当に見事なものなのだ。

それが褒められれば嬉しそうな顔になるであろう。

「この前結構な量の雨が降ったけど、この向日葵は無事そうだな」

「花って言うのは生命力が強いからね」

そう言って、幽香は誇らし気な顔をし、

「それじゃ、早速害虫駆除の手伝いをしてくれるかしら？」

そう言う。

「ああ、分かった」

龍也は頷きながらそう言う。

その後、龍也と幽香の二人は太陽の畑の害虫駆除を始めた。

そしてその翌日。

幽香の家に泊まり、幽香が作った朝食を食べた龍也は幽香に連れられて外へ出る。

暫らく歩くと、他の場所に比べて向日葵が少ない場所に出ると、

「ここで毎年コンサートをやってるの」

幽香がそう説明してくれる。

「へえ、ここで……」

龍也はそう呟きながら周囲を見渡す。

ここでならコンサートを開いても向日葵が踏み荒らされるって事はないであろう。

最も、幽香の直ぐ傍でそんな事を仕出かす輩は存在しないであろうが。

「で、ここで俺はステージの作成をすればいいのか？」

「ええ。もう少しすればプリズムリバー三姉妹が設計図と資材を持って来ると思っただけだ……」

幽香はそう言いながら顔を上げる。

龍也も釣られる様にして顔を上げる。

二人の目に映ったのは青い空に流れる白い雲。

「……まだ来てないわね」

「だな」

どうやら、プリズムリバー三姉妹はまだ到着してない様だ。

プリズムリバー三姉妹が到着するまで幽香と話して時間を潰そうかと龍也が思っている、

「ねえ、龍也」

先に幽香が話し掛けて来た。

「何だ？」

「噂で聞いたんだけど、何でも新しい力を手に入れたって言うらしいじゃない。それが本当なら見せてくれないかしら？」

「ああ、別にいいぞ」

そう言っつて、龍也は左手を額の辺りにまで持って行く。

そして左手からどす黒い霊力を溢れ出させて一気に振り下ろす。

すると、龍也は仮面を付け、眼球を黒くし、瞳の色を紫にした状態になる。

「ほづ……これが……」

その状態の龍也を見て幽香は理解する。

仮面を付けた状態の龍也は戦闘能力が大幅に上がり、今の龍也から感じる靈力は普段の龍也の靈力と永夜異変の時に龍也から一瞬だけ感じた靈力が合わさったものだ。

同時にこの前の六十年周期で起こる異変でもこの力を使って映姫の戦ったのだろうとも思った。

最もあの時幽香が無縁塚に着いた頃には龍也は墜落していたし、それまで感じられていた靈力は映姫の神力と混ぜて良く分からなくなっていたので今の状態の龍也を見るのもこの状態の龍也の靈力を正確に感じるのは幽香にとって初めてである。

今の状態の龍也の靈力を感じながら幽香は思う。

楽しみだと。

そして龍也と戦う日が早まったと。

龍也がこんな力を入れる事は幽香にとっては完全に予想外である。

それ即ち、龍也が幽香と対等以上存在になるまでの時間が早まったと言っ事である。

自分と対等以上の存在になったら龍也と戦う。

それが龍也と初めて出会った日に幽香が抱いた想いであり、龍也が自分と対等以上の存在になる事を確信した日でもある。

龍也の成長スピードならそう遠くない未来にその日が来ると思っていたが、龍也が

新たな力を手に入れた事でその日は確実に早くなった。

そう思うと、幽香は思わず笑みを零した。

「ん？　どうかしたか？」

急に笑みを浮かべた幽香を不審に思ったのか、龍也がそう尋ねる。

「いえ、何でもないわ」

そう言っつて、幽香は表情を戻す。

「それにしても、随分と変わった力を手に入れたものね」

「そうか？」

龍也はそう言いながら左手を額の辺りにまで持って行き、仮面をどす黒い靈力に

変え、そのまま手を振り払うように動かす。

すると、どす黒い靈力は風に流される様にして消える。

それと同時に龍也の瞳と眼球の色が元の色に戻る。

その後、龍也と幽香が雑談をして少しすると、

「お待たせー」

プリズムリバー三姉妹が現れた。

「その大量に束ねている木材が会場設営に使う物か？」

「そう」

ルナサがそう言うと、プリズムリバー三姉妹は持って来た木材を降ろす。

「あー重かった」

「もう、女の子にこんな重い物を運ばせて。迎えに来てくれてもよかったのに」

メルランとリリカはそう言いながら龍也の方を見る。

「悪かったって」

「はいはい、そんな事より」

ルナサはそう言いながら龍也に近付き、

「はい、これ」

紙切れを見せる。

「これは……設計図か？」

「そう。これの通りにステージを作って欲しいの。龍也は男の子だし、こう言うのが得意でしょ？」

ルナサのそんな言葉を聞きながら龍也は設計図を注意深く見る。

作り自体は単純な様なので、龍也でも十二分に作れるであろう。

それに、こう言った工作は龍也もそれなりに得意である。

「おっけ。じゃ、早速作りに掛かるか」

「お願いね。私達はその間に色々と打ち合わせをするから」

こうして、各々が各々の作業を始めた。

そしてその翌日。

コンサート会場前で、

「流石だな……」

龍也はそう呟いた。

何故ならば、まだコンサート開始時刻前なのに太陽の焔はプリズムリバー三姉妹のライブを見に来た客で賑わっていたからだ。

改めてプリズムリバー楽団の人気の高さを龍也が感じていると、

「あ、良かった」

幽香がその声を掛けながら龍也に近付く。

「どうした？」

「これを渡しに来たのよ」

そう言つて、幽香はチケットを龍也を差し出す。

「チケットか」

「最前列のね」

「ああ、報酬のか」

そう言つて、龍也はチケットを受け取る。

「それと、お金の方はライブが終わったら渡すつて」

「分かつた」

そして幽香と少し雑談をしていると、

「ライブが始まるまでまだ少し掛かるけど……一緒に行く？」

幽香がそう提案をして来る。

「そうだな……」

幽香の提案を聞き、龍也は少し考え、

「特にする事もないし、会場内で待ってるか」

「なら、行きましょう」

幽香に急かされる様にして龍也は会場内に入り、ライブが始まるまで待つ事にした。

それから暫らくした後、ライブが始まった。

そのライブを聞きながら龍也は改めて思った。

こいつ等のライブは凄いと。

そしてプリズムリバー楽団のライブが終わった後、そのまま宴会に突入したのは言うまでもない。

放浪編 その54

幻想郷の何処か。

そんな場所を龍也は歩き、

「いやー、思わぬ臨時収入が手に入ったな」

自身の財布の中身を見てそう呟く。

太陽の畑で行ったプリズムリバー楽団のコンサート。

そのコンサートで使うステージの設営などを龍也が手伝い……要するにアルバイトをした。

その報酬としてチケットの売り上げの一部が龍也の懐に入った。

本来は入るべきではなかった収入なので、

「今度、宴会が開かれる時は少し奮発し様かな」

龍也はそんな事を考える。

そして気の向くままに足を進めて行くと、

「ん？」

目の前に霧が発生する。

その霧は少しずつ一箇所に集まっていき、

「やつほ!! 龍也!!」

「萃香!!」

伊吹萃香になった。

「この間神社でやった宴会以来だね」

「そうだな」

そう言いながら二人は近付き、雑談を交わす。

雑談が一段落付くと、

「そう言えば機嫌が良さそうだね。何かあったの？」

萃香がそんな事を尋ねる。

「ああ、実は……」

龍也が事情を説明すると、

「成程……太陽の焔でプリズムリバー楽団のコンサートをやって、その後には宴会……」

萃香は納得した表情になり、

「ああー、私も宴会に出たかったなー！！ 何で気付かなかったかなー！！」

悔しそうな顔になる。

「ああー……今度はもっと散らせる範囲を広くし様かな……」

そしてそんな事を呟いた後、龍也の顔を見る。

「ん？ どうした？」

「そう言えばさ、龍也が新しく手に入れた力……使いこなせる様になった？」

「ああ」

龍也がそう肯定する。

仮面の力も一戦闘の位であれば問題なく維持し続けてられる。

龍也がそんな事を思っていると萃香は嬉しそうな顔になり、

「ならぬ……」

そう言って、

「私と戦おうよ」

構えを取る。

突然の宣言に龍也は少々呆気に取られながらも

「そうだな……」

そう言いながら周囲を見渡し、

「ここなら誰かに被害が掛かる心配もないし……」

そう言っつて萃香から距離を取って、

「それに……前に強くなって再びお前に挑んで勝つって宣言したからな」

構えを取る。

そんな風に言い放った龍也を見て、萃香はまた嬉しそうな顔をし、

「やっぱり、龍也は良い男だね」

そう言っつ。

「私ね、凄く楽しみにしてたんだよ。龍也とまた戦う時を。基本、龍也と会う時つて宴会の時が多かったしね。流石に宴会の空気をぶち壊して私と戦おう……つてな事は言えなかつたしね」

「まあ、宴会の時にガチで戦うつて言っつのは空気のぶち壊しになるからなあ……」

龍也はそう言いながら自分が多数参加した宴会の時の事を思い出す。

宴会のでの勝負事と言ったら早食いが酒飲みが定番だ。

他にも色々あるが、少なくともガチで戦闘する事はない。

あつたとしても弾幕ごっこ位であろう。

龍也は其処まで思い返し、自身の力を変える。

朱雀の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

そして、

「はあああああああああああああああああああ……！！」

龍也は力を解放する。

すると紅い瞳は輝き出し、黒い髪は紅く染まっていく。

その変化していく様子をみながら萃香は口元を釣上げる。

龍也の変化が完了すると、

「これ以上、御託は……」

「いらないよなあ」

そう言つて二人は同時に駆け、拳を振り上げ、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお！……！」

拳を激突させる。

その瞬間、大きな激突音と衝撃波が発生する。

拳を激突させたままの状態で力比べをしていると、

「へえ……随分力を上げたね、龍也。紅い髪と紅い瞳の状態でも、
前に戦つた時の龍也
なら吹き飛んでる位の力で拳を放つたのに」

萃香はそう言いながら笑みを浮かべる。

「嬉しいよ、龍也」

「そいつは……」

龍也はそう言いながら

「どうも……！」

蹴りを放つ。

「おっと……！」

その蹴りを萃香は空いている腕で防御し、

「とりゃー!!」

同じ様に蹴りを放つ。

「くっ!!」

その蹴りを龍也は萃香と同じ様に空いている腕で防御する。

二人はそのままの状態をある程度維持していると、

「ッ!!」

突如、弾かれる様にして距離を取る。

萃香から距離が取れると龍也は両手から二本の炎の剣を生み出し、
駆ける。

そして萃香が自身の間合いに入ると、

「ッ!!」

龍也は炎の剣を振り下ろす。

その瞬間、萃香は両手の拳に炎を纏わせ、その拳で

「はあ!!」

炎の剣を迎撃する。

その隙を付く様にして萃香は拳を振り上げ、

「おおおおおおおおおおおおおおりゃ！！！！！！」

拳を放つのと同時に拳から巨大な炎の塊を飛ばす。

「ッ！！」

それを見た龍也は慌てて二本の炎の剣を交差する。

その直後、

「ずあっ！！」

交差した二本の炎の剣に炎の塊が激突し、龍也は吹っ飛んで行く。

吹き飛ばされながら、龍也は自身の炎の剣に激突している炎の塊を吸収させていく。

炎の塊が少しずつ小さくなり、それ完全に消えると龍也は地に足を着け、顔を上げる。

その瞬間、龍也は目を見開く。

何故ならば、直ぐ目の前に拳を振り上げた萃香の姿があったからだ。

龍也が反撃を行おうとした時にはもう遅く、その時には萃香が放つ

た拳が龍也の頬に

突き刺さり、

「がつ!!」

龍也は殴り飛ばされる。

そしてその衝撃で炎の剣が消失する。

何とか体勢を立て直そうと龍也が体を動かすと、

「ずがつ!?!」

頭部が地面に激突してしまう。

そしてそのまま地面を転がる様にして吹き飛んで行く。

十数回程転がった後、

「ッ!!」

龍也は手を地面に着けて体勢を立て直すのと同時に減速していく。

完全に止まると、龍也に影が掛かる。

それに気付いた龍也は顔を上げる。

顔を上げた先には拳を振り上げた萃香の姿があった。

その次の瞬間、

「どーん!!」

萃香は拳を振り下ろした。

だが、

「……あれ？」

萃香の拳には龍也を殴りつけた手応えがなかった。

あるのは地面に拳を叩きつけた感触と、それによって生まれたクレターだけ。

一体龍也は何処へと萃香が思った瞬間、

「ッ!？」

萃香は蹴り飛ばされていた。

何が起こったかと思いつつながら萃香は蹴りが放たれたであろう場所に顔を向ける。

其処には髪と瞳を翠にし、両手両脚に風を纏った龍也の姿があった。

あの短時間で自身の力を変え、自分の攻撃を避け、逆に自分に攻撃を放って来たのかと

萃香が考えると、

「ッ!！」

龍也の姿が消えていた。

それを見た萃香は無理矢理体勢を立て直し、

「はああああああああああああ！！！！！！」

自身の本能が指し示す方へ拳を放つ。

その瞬間、激突音と衝撃波が発生した。

萃香の放った拳は見事龍也が放った拳に命中した。

その直後、

「零距离突風！！」

龍也の拳から突風が放たれ、

「しまっ！！」

萃香は吹き飛ばされてしまふ。

その数瞬後、萃香が体勢を立て直した時には真横に並走する様に
て空中を駆けている

龍也の姿があつた。

萃香がその事を認識したのと同時に龍也が拳を放つ。

そのまま直撃すると思われたが、

「甘い！！」

萃香が体を捻って龍也の拳を回避する。

そしてその勢いを利用し、

「らあ!!」

龍也の後頭部に蹴りを叩き込む。

「がつ!!」

蹴りを叩き込まれた龍也はそのまま地面に一直線に向い、激突する。

激突した影響で砂埃が舞うが、萃香は気にせず追い討ちを掛けようとし、龍也が激突

したであろう場所へ突っ込む。

が、

「ッ!! 居ない!?!」

其処には龍也の姿はなかった。

何処に行ったか探そうとした瞬間、

「ッ!!」

萃香は何かに気付き、裏拳を放つ。

何かを破壊した手応えありと萃香が思っていると、

「これは……水？」

自身の手に水が付着している事に気付く。

それと同時に、萃香から少し距離が離れた場所に髪と瞳を蒼くしている龍也の姿があった。

おまけに両手に水を龍の手の様な形にして纏わせている。

そんな龍也の状態を見ながら萃香は思い出す。

髪と瞳を蒼くした龍也は殺傷力が非常に高くなると言う事を。

その事を萃香が思い出した瞬間、龍也は駆け、

「おおおおおおおおおおおおおおお……！！！」

己が爪を連続で振るう。

萃香はその攻撃を体を逸らしたり、体の位置をずらしたりて回していく。

そんな状態が少しの間続くと、

「どうした？ 避け続けるだけか？」

龍也が挑発する様にして萃香にそう問い掛ける。

その挑発を受けた萃香は、

「……確かに避け続けるだけって言うのは……私らしくないね!!」
龍也の挑発に乗る事にした。

それと同時に萃香は両手を伸ばして龍也の両手を掴む。

その瞬間、龍也の水の爪が萃香の手に刺さって血が流れたが、萃香はその事を気にせず

「はあ!!」

龍也の胴体に蹴りを叩き込む。

「ぐうっ!!」

それをまともに受けた龍也は蹈鞴を踏む様にして数歩後ろへ下がってしまふ。

萃香はその隙を逃さず、手を伸ばして龍也の顔面を掴むのと同時に跳び上がり、

「おおおおおおおおおおおおおおおお!!」

龍也を思いつ切り投げ飛ばす。

投げ飛ばされた龍也はそのまま地面に激突し、そのまま地面を削る様にして吹き飛んで

行く。

そして萃香は龍也を追う様にして飛行し、龍也が真下に来ると、

「どーん！！」

萃香は龍也にドロップキックを叩き込む。

「かつ！！」

ドロップキックを叩き込まれた龍也は地面に叩きつけられる。

その次の瞬間、クレーターが発生するとともに龍也は地面にめり込んでいく。

クレーター付近に降り立った萃香はクレーターをじっと見つめる。

何故そんな事してるのか。

答えは簡単だ。

龍也をこんな事で倒せたとは思っていないからだ。

なので何時クレーターから龍也が飛び出して来てもいい様に備えているのだ。

萃香がまだかまだかと思っていると、背後から何かが飛び出して来る音が聞こえて来た。

「ッ！！」

萃香が慌てて振り返るとそこには髪と瞳を茶にし、土で出来た巨大な脚を振り上げて
いる龍也の姿があった。

それを見た萃香は髪と瞳を茶色にした龍也は土を操れたなと思い出し、両腕を頭上まで
持って行って交差する。

その瞬間、交差していた腕に土で出来た脚が踵落しの要領で叩き込まれる。

「ぐ……ぐく……」

予想以上に重い一撃に、萃香は歯を食い縛って耐える。

すると突如、土の脚が崩壊する。

萃香が何事だと思っていると、

「ぐう！？」

萃香の頬に衝撃が走る。

何で衝撃が走ったかは萃香には分かった。

それは拳だ。

龍也の拳が萃香の頬に突き刺さっていたのだ。

崩壊した土の脚を隠れ蓑にし、自分の一瞬の隙を付いて拳を叩き込んだのだらうと
萃香は思いながら、

「はあ!！」

拳を放つ。

萃香が放った拳は龍也に直撃するが、

「痛ッ……らあああああああああああああ!!!!!!!」

龍也は殴られた事を気にせず再び拳を放つ。

「くっ!！」

萃香は思っていたよりもダメージが龍也に行っていない思いながら一つの確信を得る。

土の力が使える時には防御力も格段に上がっていると言う確信を。

確信を得たのと同時に萃香は拳を振るいながら

「防御力は上がっている様だけど、力そのものは炎、水、風の時より落ちてるよ!！」

と言う言葉を述べた。

萃香が言った事は確かに当たっている。

玄武の力を使用している状態の龍也の力は朱雀、白虎、青龍の力を使用している時に比べてパワーは劣る。

故に、玄武の力を使用している時は土で出来た巨大な拳で攻撃するなどの重量を活かした攻撃を行うのが龍也の基本である。

では何故、今の龍也はその方法で戦っていないのか。

それは、

「確かに力は劣っているが早々に沈む程……俺は脆くはねえぞ!!」
自信があるからである。

萃香……鬼の力で殴られても沈まないと言う自信が。
なので、龍也は隙を見つけながら重い一撃を叩き込むと言う戦法ではなく殴り合いと言う勝負に持ち込んだのである。

「成程ねえ……」

龍也の拳を受けながら萃香は口元を釣上げ、

「私と我慢比べをする気か。その勝負……乗った!!」

そう言い放ちながら拳を放つ。

萃香の放った拳をその身で受けながら龍也は拳を放つ。

龍也の放った拳をその身で受けながら萃香も拳を放ち返す。

お互い、防御を考えない殴り合い。

何度も何度も殴り合い、気付いた時には二人とも霊力と妖力を解放している状態になっただけ、

そして、一体どれだけの拳を放ったか分からなくなった頃、

「はあ!」「はあ!」

龍也と萃香の拳がぶつかり合い、大きな激突音と衝撃波が発生する。

その数瞬後、

「チイツ!」

龍也が弾かれる様にして後ろに跳ぶ。

やはりと言うべきか、純粋な力では萃香に分があった様だ。

龍也が萃香からある程度距離を取ると、

「はあ……はあ……いやー、流石だよ龍也」

萃香は若干息を切らせながらそんな事を言い出す。

現在の萃香の風貌は服が多少ボロボロになり、所々から血を流していたり痣が出来ていると言う状態だ。

「同じ鬼ならいざ知らず、私と殴り合えた人間なんて龍也が初めてだよ」

そう言っつて、萃香は口元から流れていた血を手の甲で拭う。

「はあ……はあ……そいつはどつも」

龍也も若干息を切らしながらそう言い返し、口元に流れていた血を手の甲で拭う。

因みに、龍也も萃香と同じ様な状態だ。

「それはそれとして……」

萃香はそう言いながら数歩前に出る。

「体も十分に温まったから……そろそろいくよ」

そして、

「ミッシングパープルパワー……!!」

萃香は巨大化する。

その大きさは、以前戦った時に見せた巨大化よりも大きく見える。

龍也がそんな事を思っていると、

「さあ、私は見せたよ！！ だから、龍也も見せてよ！！」

萃香がそう急かす。

要は新しく手に入れた力……仮面の力を見せろと言っているのだ。

「いいぜ……見せてやるよ」

龍也はそう言いながら左手を額の辺りにまで持って行き、左手からどす黒い靈力を

溢れ出させ、左手を一気に振り下ろす。

すると龍也は仮面を付け、眼球を黒くした状態になる。

そんな龍也の姿を見ながら、

「へえ……それが……」

口元を釣上げる。

「ああ、俺が手に入れた新しい力だ」

「随分……変わった力を手に入れたもんだ」

「よく言われるよ」

そう二人が少し笑いあった後、

「それじゃ……」

萃香は拳を振り上げ、

「第二ラウンドを……」

「始めようか!!」

龍也に向けて拳を振り下ろす。

その瞬間、砂埃が舞い上がる。

手応えが無い事を萃香は感じながら、

「上か!!」

拳を抜いて顔を上げる。

其処には、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!……!!」

土で出来た巨大な拳を振り下ろしながら降下して来ている龍也の姿があった。

それを見た萃香はその拳に合わせる様にして、

「てりゃあああああああ!!……!!」

拳を放つ。

二つの拳が合わさると、大きな激突音と衝撃波が発生する。

そのまま暫らく拳と拳をぶつけ合っていると、突如土で出来た拳が崩壊する。

崩壊した土の拳を見なた萃香は先程と同じ様に崩壊した土の拳を隠れ蓑にする気だと思

い、龍也の姿を探す。

すると直ぐに見つかった。

龍也は、

「正面!!」

萃香の正面に居た。

居場所がバレた事を龍也は気にせず、右脚から土を生み出し、それを巨大な土の脚にして

「てえええええりゃあああああああ!!!!!!!!」

回し蹴りを放つ。

「っとお!!」

萃香はそれを左腕で防御し、

力の変換が完了すると龍也は体勢を立て直し、萃香に向って突撃を掛ける。

龍也が自身に向けて突撃をして来る事を理解した萃香は足を止め、

「はあ！！」

突撃して来る龍也にタイミングを合わせる様にして拳を放つ。

萃香の放った拳が龍也に当たる直前、龍也の姿は消えた。

その次の瞬間、

「ッ！！」

萃香の腹部に連続した衝撃が走る。

何事だと思いながら萃香が自身の腹部に顔を向けると、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお！！！！」

其処には物凄いスピードで拳を叩きこんでいる龍也の姿があった。

そう、龍也は萃香の拳を超速歩法で避け、萃香の腹部に移動して連続で拳を叩きこんでいたのである。

龍也を捕まえ様と萃香が両手を動かそうとすると、

「ッ！！」

萃香の体が宙に浮く。

そしてどンドンとその高度を上げていく。

このまま高度を上げ、ある一定以上の高さになったら龍也は自分を叩き落す積りだと思った萃香は、

「そう思い通りにはさせないよ！！」

両手を使って龍也を掴み、

「しまっ！！」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

急降下しながら龍也を地面に叩き付ける。

地響きと砂煙が舞う中、萃香が追撃の一撃を叩き込もうとすると、

「っとお！？」

突如、萃香が居る場所に竜巻が発生し、萃香が弾き飛ばされる。

萃香が弾き飛ばされると竜巻は弾ける様にして消え、その中から龍也が現れる。

左目付近部分の仮面が割れ、額から血を流しているが健在だ。

弾き飛ばされた萃香が地面に片手を付け、体勢を立て直すと、龍也は萃香に両手を向け

「大嵐旋風！！」

両手に纏う風を合わせ、それを竜巻にして放つ。

「ぐっ！！」

防御の体勢が取れていなかった萃香はそれをまともに受け、吹っ飛んで行く。

その様子を見ながら龍也は左手を左目付近に持って行き、左手からどす黒い靈力を溢れ出させるのと同時に自身の力を変える。

白虎の力から青龍の力へと。

龍也が左手を払う様に動かして仮面の修復を完了させるのと同時に、龍也の髪と瞳の色が翠から蒼に変わる。

その瞬間、龍也は両手を上げ、水球を生み出す。

その水球はどんどん大きくなり、相当な大きさになると龍也は体を逸らしながら

「豪水球！！！！」

その水球を萃香目掛けて放つ。

自身に迫って来る巨大な水球を見た萃香は地に足を付け、減速しながら萃香は腕を回転させ、拳を放つと同時に巨大な炎の塊を撃ち出す。

水球と炎の塊が激突すると、水蒸気爆発が起こる。

その爆発の衝撃で龍也が吹き飛ばされない様に踏ん張っていると腕を交差させて爆発の中を突っ切る様にして萃香が現れ、

「なっ！？」

腕の交差を解いて拳を放って来た。

その事には龍也は驚くのと同時に後ろに跳んだ。

が、龍也は爆発の中から萃香が現れた事は心の何処かで納得していた。

今の萃香は巨体だ。

それならば今の龍也の様に吹き飛ばされない様に踏ん張る必要がないと。

それ故に、龍也は萃香が現れるのと同時に後ろに跳ぶ事が出来たのだ。

「がつ!？」

龍也は右頬に衝撃を感じながら吹き飛ばされる。

右半分の仮面が割れ、その破片が宙を舞い、崩壊している様子を視線に入れながら

龍也は視線を動かす。

すると、左腕を振り切った状態の萃香の姿が目映った。

どうやら、炎の塊を隠れ蓑にして近付いて来たようだ。

先程自分がやった事をやられたたと龍也は思いながら体を起こし、

「水爪牙!！」

水爪牙を連続して放つ。

萃香は無数に迫って来る水の斬撃を、

「おりゃあ!！」

刃で言う側面を攻撃していく事で無効化しながら龍也に迫っていく。

「くそ!！」

これでは効果が無いと龍也は思い、自身の力を変える。

青龍の力から朱雀の力へと。

それに伴い、龍也の髪と瞳の色が蒼から紅に変わる。

力の変換が完了すると、龍也は吹き飛ばされた状態のまま両手を上げ、その上部に火球を
を生み出しながら体を反らす。

火球がどんどんと大きくなっていく様子を見ながら、萃香は何か
身構える様な表情を
取る。

そんな萃香の表情を目に入れた龍也はそのまま放つても当たる事はないと思いつながら、

「豪炎火球！！！！」

火球を放つ。

何時火球が来ても避けれる様な心構えていた萃香であったが、

「あれ？」

その火球の軌道に疑問を覚える。

何故ならばその軌道は萃香ではなく、もっと下の方に向いていたからだ。

このまま行けば火球は地面に激突する。

そう思った瞬間、

「ッ!!」

萃香は龍也の狙いに気付き、慌てて急ブレーキを掛けるがもう遅い。

火球は龍也と萃香の中間地点に激突に大爆発を起す。

「ぐっ!!」

「くっ!!」

その爆発に吞まれ、二人はダメージを受けながら吹き飛んで行く。

結構な距離を吹き飛ばされると龍也は体勢を立て直し、

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

息を整え、体中に走る痛みを堪えながら今の自分の状態を確認する。

着ている服はボロボロ。

仮面も左目付近にある物以外全て砕け散っている。

おまけに血も結構流れてる。

だが、まだ体は動く。

そう思いながら龍也は萃香の方を見る。

距離が離れているせいでよく分からないが、健在の様だ。

萃香の様子を見た龍也はこのまま普通に戦ってもかなり分が悪いと思ひ、自身の力を
変える。

朱雀の力から白虎の力へと。

髪と瞳の色が紅から翠に変わると、

「ああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

龍也は靈力を解放する。

解放し、龍也の体中から溢れ出ている靈力の一部が白虎の姿を型作る。

龍也が解放した靈力を感じながら、萃香はこれで勝負を決める積りだと思ひながら口元
を釣上げ、

「やっぱりね……」

そう呟く。

何がやっぱりなのか。

それは龍也の底力だ。

以前、萃香が起した異変で龍也戦った時もそうであった。

ズタボロにされ、これ以上は無理と思える様な状態になっても龍也は立ち上がり、戦った。

その状態の龍也から解放された霊力はとてもズタボロの状態の者が出せる様な霊力ではなかった。

その事から萃香は考えた。

龍也の追い詰め方を間違えなければ、自分の想像以上の力を発揮するのではないかと。

そして、その考えは当たった。

今の龍也から感じられる力は仮面を付けた時よりも上だ。

普段から無意識のうちに力を抑えているのか、潜在能力が漏れ出しているのかは萃香には分からなかったが、そんな事はどうでもいい。

ただ、今はこの瞬間を

「楽しむだけ!!」

楽しむだけである。

萃香はそう言い放って妖力を解放し、右腕を回しながら右手に炎を纏わせる。

龍也の攻撃を真つ向から迎え撃つ為だ。

本来であれば、そんな事をする必要はない。

萃香の能力、”密と疎を操る程度の能力”を使って小型のブラックホールを作り、龍也

が体勢を崩したところに渾身の一撃を叩き込めばいい。

だが、そんなマネは

「無粋だよねえ……」

無粋である。

萃香がそう呟いた瞬間に、龍也は動いた。

猛スピードで萃香に向けて突っ込んで行く。

その様子を見ながら、やはり以前の様に巨大な土の拳で最大の一撃を叩き込む積りだなと萃香は思った。

萃香がそう思っていると龍也と萃香の距離が半分程になる。

その瞬間、龍也は自身の力を白虎から青龍に変える。

髪と瞳の色が翠から蒼に変わると同時に、白虎の姿を型作っていた霊力が青龍の姿に変わる。

同時に龍也は両脚の裏に大きめの水球を生み出し、また力を変える。青龍の力から朱雀の力へと。

それに伴い龍也の髪と瞳の色が蒼から紅に変わり、青龍の姿を型作っていた靈力が朱雀の姿に変わる。

そして、水球が崩れ落ちる前に龍也は両脚の裏から高温の炎を放つて水蒸気爆発を起させて一気に加速する。

「ッ!」

てっきり以前の様に炎を爆発させて加速して来るものだと思っていた萃香は驚くも、直ぐに表情を戻す。

何せ龍也はもう既に髪と瞳を茶に、溢れ出ている靈力の一部が玄武の姿を型作っている状態で直ぐ近くに迫ってきていたからだ。

龍也は右腕を振り被るのと同時に土を生み出し、右手を土で出来た巨大な拳にし、

「ううううううううおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお!」

放つ。

それに合わせる様にして、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお！！！！」

萃香も炎の纏わせた拳を放つ。

そして土で出来た拳と炎を纏わせた拳が激突し、巨大な激突音と衝
撃波が発生し、
大爆発が起きた。

大爆発が起きてから少しすると、爆発が晴れる。

二人はどうなったのか。

「ぐづつづうう……」

「いつつつ……」

二人は生きていた。

龍也と萃香の二人は前のめりの状態で倒れてはいるが生きている。

最も、龍也の仮面は完全に碎け、眼球も髪も瞳の色も元の色に戻っており、萃香の体の大きさも元に戻った状態であるが。

「はあ……はあ……はあ……」

龍也は息絶え絶えに体を動かして仰向けになると、

「はあ……はあ……はあ……いやー……やっぱり龍也と戦うのは楽しいねえ」

何時の間にか胡座を掻いて座っていた萃香が息を切らせながらその声を掛ける。

そんな萃香の様子を見た龍也は、

「……俺の負けか」

そう呟いた。

「んー……ダブルノックダウンみたいな感じだったから引き分けだと思っけどね」

「つつても、俺は起き上がる体力も無いのにお前は起き上がって座ってるじゃねえか」

「ほら、私は妖怪って言うか鬼だからね。体力とかタフさとか回復力には自身があるのよ」

「種族の差なんて言い訳にはならねえよ。俺が地に伏せ、お前が立ってる……て言うか座ってる。それが真理だろ」

「んー……龍也って結構頑固だねえ」

萃香はそう良いながら寝っ転がり、両手の上に顎を乗せ、

「でも、やっぱり龍也は良い男だね。ほんと、攫って私のものにしたくなる位」

そんな事を呟く。

「ん？ 何か言ったか？」

よく聞き取れなかった龍也がそう訪ねると、

「何だろっね？」

萃香はそう言い、

「それはそうとこの勝負、龍也は自分の負けだと思ってるし、私は引き分けだと

思ってる。けど、龍也は自分の負けを撤回する気はないよね？」

そう尋ねる。

「ああ」

「やっぱりね。でも、私も引き分けと言つのを撤回する気はない」

萃香はそう言つて龍也の目を見て、

「だからさ、また私と戦おうよ」

そんな事を言つ。

「三度目の正直って言つてしょ。次に戦つた時は私と龍也の意見が合致すると思つよ」

「……………いいぜ。俺は今よりもっともっと強くなる。そして……………次こそ萃香、お前に勝つー!!」

龍也は萃香に指を突きつけ、そう宣言する。

そう宣言された萃香は、

「ふふ……」

嬉しそうな顔をしていた。

龍也の体力がある程度回復すると、二人の近くに隙間が現れ、そこから紫が現れた。

聞くところによると、龍也と萃香の戦いを観戦してたらしい。

龍也がまたか、萃香が相変わらずだと思っていると、紫が酒を取り出した。

何でも、超高級な酒らしい。

それを聞いた萃香は目を輝かせた。

その後、三人でのプチ宴会状態になった。

永琳がその声を掛ける。

「あ、はい、師匠!!」

声を掛けられた鈴仙はそう返事をして塗り薬を龍也の腕に塗っている。

塗り薬を塗られている感触を龍也は感じながら、

「そついや、何で鈴仙が俺の治療をしてるんだ？」

そう尋ねる。

「何よ、私じゃ不満？」

それを聞いた鈴仙がムスツとした表情でそう言う。

「いや、別にそう言う意味じゃないんだけど……」

そう言って、龍也が言葉を続け様とすると、

「それはうごんげに経験を積ませる為よ」

永琳が割り込む様な形でそう言う。

「経験？」

「そう。薬の調合とかは幾らでも出来るんだけど、怪我人の治療って中々経験を」

「積ませる事が出来ないのよね」

「そうなのか？」

「ええ。人里には置き薬を常備させてるから簡単な怪我なら永遠亭に運ばれてこないし、逆にここに運ばれて来る患者は私にしか対処出来ない患者が多いしね」

「つまり？」

「つまり、うどんげに任せられる様な程好い怪我をした患者が来たからこうして任せてるって訳」

「つまり、研修みたいな感じか？」

「そう言う事。まあ、私が監督してるからミスは起こらないし、研修をさせて貰ってるから治療費は幾らか安くさせて貰うわ」

龍也と永琳がそんな会話をしていると、

「よし、包帯巻き終了」

鈴仙が龍也の腕に包帯を巻き終える。

「胴体と脚はもうやっちゃってるし、後は額だけね」

そう言って、鈴仙は龍也の額に固まっている血を拭っていく。

そして傷跡を見て、

「んー……これ位なら塗り薬だけで大丈夫ね」

そう言って、塗り薬を塗っていく。

少しすると、

「はい、終了」

そう言って鈴仙は龍也の額から手を離す。

「ありがとう」

龍也はそう礼を言って、立ち上がって体を少し動かしながら

「そう言えば、俺の怪我の具合ってどの程度だったんだ？」

気になった事を尋ねる。

「そうね、内出血に痣に裂傷に火傷。後は骨に僅かな痺が入って程度ね。折れてはいなかったわ」

永琳はそう言って木のケースから小瓶を取り出す。

そして小瓶の中に入っている錠剤を数個取り出し、コップに水を入れて龍也に手渡す。

「これは？」

それを受け取った龍也はそう尋ねる。

「自然治癒力を高める錠剤よ。貴方の回復力なら明日明後日にでも治るでしょ」

「ありがとう」

龍也は礼を言っ て錠剤を飲む。

その後、

「そう言えば、俺の服ってどうなってるんだ？」

龍也はそんな事を尋ねる。

因みに現在、龍也が着ている服は俗に言う入院服と言う物だ。

「それなら姫様が修繕中よ」

その問いに、鈴仙が答える。

「ああ、結構ボロボロになってたからなあ……あれ」

そう言いながら、龍也は自分が着ていた服を思い出す。

「ま、あの子にとっては丁度良い暇潰しになって良いんじゃないかしら」

お茶を飲みながら永琳はそう呟く。

「それにしても、よくまあ鬼何かとガチンコで勝負する気になっ
たわね」

鈴仙は呆れ顔になりながらそう言う。

「ははは……」

龍也は苦笑いを浮かべながら後頭部を搔く。

「そう言えば貴方と戦った鬼……伊吹萃香だけ？ 彼女は？」

「萃香ならこの程度の怪我は平気だって言って何処かに行ったけど」

「彼女、妖怪と言うか鬼でしょ。鬼の回復力なら貴方と同程度の怪
我でも問題ないわ。」

最も、貴方が冬の時の負った様な怪我なら話は別でしょうけど」

「あー……あれは酷かったですね……」

永琳の発言を聞き、鈴仙はそう呟く。

あの時の龍也の主な怪我は腹部に貫通の跡、重度の火傷、裂傷、出
血多量、骨折、
内臓損傷と言った感じである。

今にして思えばよく生きていたものである。

それも偏に龍也の生命力が高かった事と永琳の医者としての腕が相
当良かったからで

あろうが。

「貴方は人間にしては相当回復力が高いけど、それでも妖怪には及ばない。まして私や

姫様、妹紅の様に蓬莱人……不老不死と言う訳でもない。だから、もう少し自分の体を大切にしなさい」

「そうそう。あなたの怪我の治療する身にもなりなさい」

永琳の発言に同意する様に鈴仙がそう発言する。

その後、

「あらあら、心配なら心配ってはっきり言えばいいのに」

永琳がからかう様にそう言うと、

「べ、別にそんなんじゃないありません!!」

鈴仙は若干顔を赤く染めながらそっぽを向く。

それを微笑ましく見ながら、

「取り合えず、貴方の財布と懐中時計を返して置くわね。後、治療費の明細票」

永琳は籠也に財布と懐中時計と明細票を手渡す。

「財布の中から治療費だけを抜き取ってあるけど、一応確認してく

れるかしら？」

「分かった」

そう言つて、龍也は明細票を見ながら財布の中を確認していく。

それから少しすると、

「確かに」

龍也はそう言つて財布を懐に仕舞う。

その後、懐中時計から伸びている鎖を腰帯に巻き付けて吊るす。

「それと、大事を取つて一泊位していきなさい」

永琳はそう提案をする。

その提案を

「ああ、分かった。世話になるよ」

龍也は受ける事にした。

こう言つ時は医者と言つ事に従つて置くべきである。

その後、適当に三人で雑談をした後、龍也は医務室を兼ねている永琳の部屋を出る。

部屋を出た後、自分の服の修繕状況をしりたいと思い、輝夜の部屋

へと向う事にした。

暫らく歩くと、輝夜の部屋の前に着く。

「輝夜ー、居るかー？」

龍也はそう声を掛けながら襖をノックする。

すると、

「入っていいわよー」

部屋の中からそんな声が聞こえて来た。

許可が貰えたので、龍也は襖を開けて輝夜の部屋の中に入る。

そして輝夜に近付き、

「俺の服の修繕状況はどうだ？」

自身の服の修繕状況を尋ねる。

「ジーパンの方は終わったから、後はジャケットとシャツだけね」

修繕を続けながら輝夜はそう答える。

「ありがとな」

龍也がそう礼を言うと、

「別にいいわよ。私としてもいい暇潰しになってるし」

輝夜はどうって事ないと言った風にそう返す。

「でも、この事に恩義を感じているのなら……まずは肩でも揉んで貰いましょうか」

「はいはい」

龍也はそう言って、輝夜の背後に回って肩を揉み始める。

実際、輝夜にはこうして世話になっているのだ。

これの程度の頼み位は快く引き受けるべきであろう。

龍也はそう思いながら肩を揉んでいくと、

「んー……一寸お腹が空いてきたわね」

輝夜がそんな事を言い出し、

「と言う訳で龍也、何か持ってきてきなさい」

龍也にそんな命令を出す。

「はいはい、仰せのままに」

龍也はそう言って、お菓子を探しに向った。

因みに、この日の大半は輝夜の小間使いをする事で終わった。

翠口。

「ありがとう、世話になったな」

何時もの服装に戻った龍也は永遠亭の玄関の前でそう口にする。

「今度は怪我しない様にね」

鈴仙がそう口にする。

「あら、てゐは何処かしら？」

永琳がそんな事を言う。

「そう言えば……昨日から見てませんね」

「ああ、だから何か足りなかったのか」

何時もだつたら昨日の夜か今の時点でお金を入れると幸福になれるよと言いながら

賽銭箱を見せてくる筈である。

龍也がそんな事を思っていると、

「ま、てゐの事だから迷いの竹林で遊んでるんでしょうけど」

鈴仙が自分の考えを述べる。

「なら、後で貴女に探して来て貰おうかしら」

「え！？ 私がですか！？」

鈴仙は驚いた顔をしながら永琳の方へ顔を向ける。

「貴女以外誰が居るのよ？」

「うっ……はい、了解しました」

そう言つて鈴仙はがっくりと肩を落とす。

そして、今後は不用意な発言は控え様と誓った。

そんな二人の様子を見ながら、

「それじゃ、またな」

龍也はそう声を掛けて背を向ける。

「ええ、またね」

「さっきも言っただけど、怪我しない様にね」

そんな二人の声を受け、龍也は永遠亭を後にした。

龍也が永遠亭を後にして暫らく。

日も暮れそうと言う時間帯。

龍也は、

「ここ……何処だ？」

迷っていた。

何時もであれば永遠亭から迷いの竹林の出口まですんなりで行ける筈なのであるが。

そんな事を考えながら龍也は周囲を見渡し、

「てゐの賽銭箱に金を入れなかつたせいかな？」

そんな事を呟いた。

永遠亭に居る時、若しくは出る時に龍也はてゐの賽銭箱にお金を入れている。

そのお陰か、龍也は今まで永遠亭を出る時は迷いの竹林の出口まで迷った事がない。

が、今回は見事に迷った。

「ま、初めて迷いの竹林に入った時も思いっきり迷ったしな。やっぱり今まではてゐのお陰で迷わなかったのかな？」

龍也はそう言つて足を進める。

適当に彷徨つてて、てゐに会えればそれでよし。

会えなくてもそれはそれでいい。

別段、急ぐ旅路ではないのだ。

会えなかったら会えなかったで、自力で迷いの竹林を徒歩で脱出に挑戦するのも一興であらう。

龍也はそう考えながら歩き続けて行く。

それからまた暫らくすると、完全に日が落ちた。

龍也がそろそろ寢床を探そうとすると、

「ッ！！」

少し離れた場所から草と草が擦れる音が聞こえて来た。

龍也は妖怪かと思ひながら音が聞こえて来た方へ体を向ける。

その音は段々と龍也の方へ近付いて行き、

「あれ？ 龍也？」

「……妹紅？」

妹紅が姿を現した。

現れたのが妹紅であった為、龍也は警戒心を解く。

すると、

「こんな時間にこんな所で何をやっているの？」

妹紅が龍也にそんな事を尋ねる。

「ああ、実は……」

龍也が事情を説明すると、

「成程、それで迷いの竹林を彷徨っていたと……」

妹紅が納得した表情になる。

そして、

「でも、よくもまあ鬼とガチンコ勝負し様と思ったわね」

少し呆れた顔をしながらそう言う。

「男の子はやんちゃな位が丁度良いつて言っけど、龍也のはやんちゃを超えてるんじゃない？ この前の六十年周期の異変の時も閻魔様相手に戦ったって言うし」

「ははは……」

妹紅にそう突っ込まれた龍也は、苦笑いを浮かべながら後頭部を掻く。

「ま、いいわ。ここで会ったのも何かの縁。私の家に泊めて上げるわ」

「いいのか？」

「ええ。付いて来て」

妹紅はそう言っつて龍也に背を向けて歩き出す。

その後を龍也は付いて行く。

「そう言えば、妹紅は何処へ行つてたんだ？」

「一寸慧音と会ってたのよ。そしたらこれを貰ってね」

妹紅はそう言いながら大き目の包みを見せる。

「それは？」

「おにぎりとか野菜炒めとかよ。私の住んでる場所が場所だからね。」

筍や魚ばかりじゃ
健康に悪いって言うてこつ言うつのをくれたよ。慧音、私が不老不死
だって事を忘れてる
のかしら？」

「それだけ妹紅の事を心配してるんじゃないのいか？」

「……ま、一応ありがたくは思ってるけどね」

妹紅は少し照れ臭そうにしながらそう返す。

そんな風に雑談をしながら足を進めて行くと、

「ここが私の家よ」

妹紅の家に着いた。

「ほー……ここが」

そう呟きながら龍也は妹紅の家を見る。

木造建築の一軒家と言った感じだ。

それなりに大きい様なので龍也一人位泊まっても何の問題もないで
あろう。

「さあ、入って」

「お邪魔します」

そう声を掛けてから龍也は妹紅の家にかかる。

すると妹紅は指先から炎を生み出し、蝋燭に火を着けて指先の炎を消す。

その後、妹紅は蝋燭を持って居間へ移動し、ランプに火を移して蝋燭の火を消す。

ランプの明かりで居間全体が見える様になると、

「へー……結構綺麗にしてるな」

龍也は居間を見渡してそう呟く。

「そりゃね。油虫とか出たら嫌だし」

妹紅はそう言いながら座布団と箸を持って来る。

「そこに座って」

「ああ」

龍也が座布団の上に座ると妹紅も座布団の上に座り、包みを開けると、おにぎりが包まれた包みと、大きな鍋が出て来た。

その鍋の蓋を取ると、中に野菜炒めが入っている事が分かる。

「さ、食べましょ」

「今更だけど、俺も貰ってもいいのか？」

「ええ、私一人じゃ食べきれないしね。慧音、私の胃袋の大きさ分かってるのかしら？」

妹紅はそう言いながら龍也に箸を手渡す。

「はは……」

そう言って龍也は箸を受け取る。

その後、二人は雑談を交えながら食事を進めていく。

そして、

「「ご馳走様」」

食事を終える。

「さて、この鍋は洗って慧音に返さない」と

そう言って妹紅は鍋を持って立ち上がる。

「手伝おうか？」

「別にいいわ。龍也はのんびりしていて」

そう言って妹紅は台所へと向っていた。

のんびりしていると云われたので龍也は壁を背にしてポケットと
している。」

「布団はこれを使って」

妹紅はそんな事を言いながら布団を持って来る。

「布団を使う事なんて殆どなかったから綺麗なものよ」

「殆ど使わなかったって……寝る時はどうしてるんだ？」

「それは壁を背にして」

「それでよく寝れるな……」

龍也が感心した様にそう言うと、

「幻想郷に来る前は龍也の様に旅してたからね。その殆どが野宿だ
つたし、夜中に妖怪

の襲撃とかもあるから自然とそう言う体勢で寝れる様になったのよ」

妹紅が壁を背にして寝れる理由を説明してくれた。

「と言うか、龍也は幻想郷中を旅して回ってるんでしょ。こう言う
技能って必須技能
だと思っけど？」

「あ、俺の場合は能力を使って簡易型の土の家を作ってるから」

龍也がそう言うと、妹紅はポカーンとした表情になり、

「ああ、そう言えば貴方の能力って炎、風、地、水を自由自在に操れたりするんだったわね。便利な能力よね」

そう呟いた。

それから雑談をし、二人は就寝した。

放浪編 その56

「本当にいいの？ 迷いの竹林の外まで案内しなくて？」

龍也が妹紅の家に泊まったその翌日。

朝食を食べ、外に出た後、妹紅は龍也にそう尋ねる。

「ああ、別に急ぐ旅路でもないからな。のんびり行くさ」

「そう……まあ、龍也の強さなら問題ないとは思っけど気を付けてね」

「ああ、心配してくれてありがとな」

龍也がそう言って妹紅に背を向けると、

「あ、一寸待って」

妹紅が何かを思い出した様な声色で龍也を呼び止める。

「どうかしたか？」

そう言って龍也が振り返る。

「渡し忘れてた物があつてね」

「渡し忘れた物？」

そう言つて龍也が首を傾げると、

「少し待つてて」

妹紅はそう言つて、家の中に入って行く。

妹紅が家に入つて少しすると、

「はい、これ」

包みを持って出て来た。

「これは？」

「おにぎりよ。朝食作る時にお米が余つたから作つてみたの。良かったらお腹が空いた時にでも食べて」

妹紅は少し気恥ずかしそうにしながら包みを差し出す。

「ああ、ありがとう。腹が減つたら食べさせて貰つよ」

龍也はそう礼を言つて包みを受け取る。

「それじゃ、またな」

「ええ、またね」

そう挨拶を交わし、龍也は妹紅の家を後にした。

龍也が妹紅の家を出てから数日後。

龍也は

「お、筍発見」

まだ迷いの竹林に居た。

まあ、当然と言えば当然である。

迷いの竹林は素人が抜け出せる様な場所ではないのだから。

「ま、永夜異変が終わった後に迷いの竹林に入った時は一ヶ月位は彷徨っていたからな。気長に行くか」

龍也はそう呟き、近くに在った岩に腰を掛ける。

そして自身の力を朱雀に変えて筍を焼いて食べ様と思っていると、

「……ん？」

草が揺れる音が聞こえて来た。

妖怪かと思ひ龍也が少し身構えていると、

「あれ、お兄さん？」

「てゐ」

近くの草の中からてゐとそのてゐに付き従う様になっている妖怪兎が何体か出て来た。

「こんな所で会う何て奇遇だね」

てゐはそう言いながら岩の上上がり、龍也の隣に腰を落ち着かせ

る。

「そつだな」

龍也はそう言ってるの方に顔を向ける。

「少し前に永遠亭に行ったんだがお前居なかったけど、どこに行ってたんだ？」

「ふふふ……内緒」

てゐは悪戯を企んでいる子どもの様な笑みを浮かべながらそう答える。

その笑みを見ながら、龍也は碌でもない事を企んでいるなと思った。その事を嗜めるべきかどうか悩んでいると、

「処でお兄さん」

てゐはそう言いながら賽銭箱を取り出し、

「この中にお金を入れると幸運が訪れるよ」

そんな事を言い出す。

「そんな事を言わなくても賽銭位は入れてやるって」

龍也はそう言って筭を近くに置き、財布を取り出して小銭を何枚か賽銭箱の中に入れる。

小銭が賽銭箱の中に入ったのを確認すると、

「えへへ」

てゐは嬉しそうな顔をする。

「てか、そんなに賚銭を強請るなよ。何か、お前が霊夢に見えてきたぞ」

「えー、私はあの巫女みたいに守銭奴じゃないけどな」

龍也に霊夢みたいだと言われ、てゐは心外だと言わんばかりの表情になる。

「それはそれとして、前から気になってたんだが何だってそんなに金を集めてるんだ？

何か欲しい物でもあるのか？」

以前から気になっていた事を龍也が尋ねてみると、

「えへへー、内緒」

てゐは可愛らしい笑みを浮かべながらそう答える。

言う気がないのであれば無理に問い質すのもあれだと龍也は思い、この話題を打ち切る事にした。

そしててゐと雑談をしながら過ごす。

それから暫らくすると、

「んー……良い休憩になった」

てゐはそう言つて岩から降り、

「それじゃまたね、お兄さん。行くぞお前等」

その声を掛けて去つて行つた。

その後を追う様に妖怪兎達も去つて行つた。

それを見送つた後、龍也は近くに置いてある筍を食べようと思つて自身の手を筍に伸ばして掴むと、

「…………あれ？」

握つた感触が筍ではなかつた。

何だと思い、龍也は視線を握っている手に移す。

握られていたのは筍ではなく竹が握られていた。

どうして筍が竹にと龍也は思ったが、

「…………てゐか」

直ぐに筍と竹を摩り替えた犯人がてゐであると思ひ至る。

まあ、当然と言えば当然である。

つい先程まで龍也と話していたのだから。

どうしてくれようかと思ったが、

「ま、いつか」

龍也はそう呟いて竹を岩の上に置いて岩の上から降りる。

こんな事で目くじらを立てても仕方が無い。

それに永遠亭に色々と世話になってるのだ。

おそらく、これからも世話になるであろう。

その永遠亭に住むてゐの悪戯位は大目に見るべきだ。

龍也はそう思い、足を進める。

それから数十分後、

「……………出れたよ」

龍也は迷いの竹林の出口に居た。

「……………やっぱりてゐのお陰か」

龍也は後ろを振り返り、迷いの竹林を見てそう呟く。

てゐの賽銭箱にお金を入れないと迷いの竹林内で迷い続け、今回、
てゐに会えたので
てゐの賽銭箱にお金を入れると迷わずに迷いの竹林を出る事ができ
た。

龍也はてゐのお陰で迷いの竹林から楽に出ること出来たのだと確信
した。

「ま、折角出られたんだ」

龍也はそう言って迷いの竹林から目を離す。

「さーで、次は何処へ行こうかなー」

そして、龍也は風の向くまま気の向くままと言った感じで足を進める。

「しくじった……ここに入るべきじゃなかった……」

現在、龍也の居る場所は魔法の森。

普段であれば、魔法の森に入ったとしても龍也はそんな事を口にし

たりはしないで
あるう。

では、何故そんな事を口にしたのか。

それは、

「……暑い」

暑いからである。

ただ暑いだけなら龍也もまだ我慢できたであろうが、現在の魔法の森にはムワツとした暑さがある。

要は湿度がかなり高いのである。

魔法の森は湿度が高かったり低かったり、日によってバラバラなのだ
だと何時だったか
魔法の森に住んでいる魔理沙とアリスが言っていたのを龍也は思い出した。

どうやら、今日は偶々湿度が高い日に当たってしまった様だ。

「あー……いかにいかに、暑さで頭がポーツとした来た」

龍也はそう言いながら頭を振る。

そして着ているジャケットを脱いで肩に掛ける。

これで少しは涼しくなるかと龍也は思ったが、

「……暑い」

そんな事はなかった。

「あー……この近くに魔理沙かアリスの家なかったかな？」

龍也はそつ口にしながら周囲を見渡す。

が、

「そう都合よく見つかりはしないか」

二人の家は見つからなかった。

見つければ涼ませて貰おうと言うのが龍也の心中なのだが。

まあ、ジツとしていても仕方が無い。

取り合えずは二人の家を探す事にし様と思い、龍也は少し急ぎ気味に足を進める。

その道中、龍也は妖怪に襲われる事はなかった。

妖怪もこの暑さには参っているのだろうと龍也は考えた。

それから暫らくするよ、

「……………お？」

龍也は家らしき物を発見し、それに近付いて行く。

そしてそれに触れていくと確かな感触が返って来た。

この事から、

「……暑さのせいで見えた幻覚じゃないか」

幻覚ではないと言う事が分かる。

その事に安心し、龍也が顔を上げると

「霧雨魔法店……」

霧雨魔法店と言う看板が目に入る。

この事からここが魔理沙の家だと言う事が分かる。

ここで涼ませて貰おうと思い、龍也は扉の前まで移動してノックをする。

それから少しすると、

「誰だ？」

そんな声と共に扉が開かれる。

「……っと、何だ龍也か」

龍也の姿を確認して魔理沙はそう漏らす。

「今いいか？」

龍也がそう尋ねると、

「おう、いいぜ。上がれよ」

魔理沙は快くそう応える。

「お邪魔します……っと」

龍也はそう言いながら魔理沙の家にかかる。

「いやー、それにしても龍也も運が良いな」

「運が良い？」

龍也は近くにある椅子にジャケットを掛けてそう返す。

「何せ、この魔理沙さんの画期的な実験を見る事が出来るんだからな」

「実験？」

龍也はそう言っつて首を傾げる。

「ああ、ここ最近はずっと暑かっただろ」

魔理沙はそう言いながら実験器具が置いてある場所へと近付いて行

く。

「ああ、そうだな」

魔理沙の発言に同意し、龍也は魔理沙の後を追う。

「おまけにここ最近の魔法の森は蒸し風呂状態だったからな」

「ここ最近の魔法の森ってそんな事になってたのか」

龍也が少し驚いた様にそう口にする。

「ああ、だから私は考えた。どうすれば涼しく出来るのかな」

魔理沙はそう言って椅子に座り、

「そしてその答えが……これだ!!」

そう言いながらフラスコを指さす。

中には青色の液体が入っている。

「これは……何かの魔法薬か？」

「お、察しが良いな。正解だぜ」

魔理沙はそう言って緑色をした液体が入った試験管を手取る。

「後はこれを入れれば完成だ。それで一気に涼しくなるぜ」

「ほっ……」

魔理沙の発言を聞いて龍也は少し驚いた表情になると同時に思う。

それならば自分は本当に丁度良いタイミングでここに来た事になると。

その瞬間、緑色をした液体がフラスコの中に入っている青色の液体に注がれる。

二色の液体が完全に混ざり合うと、少し大きめの爆発音と共に部屋中を白い煙が埋め尽くす。

そして白い煙が晴れると、

「……おい」

「……何だ？」

「……確かに涼しくはなったけどさ」

「だろ」

「………何で俺達は氷り付いているんだ？」

龍也と魔理沙の首から下が氷り付いていた。

それどころか、部屋の至る所が氷り付いている。

「いやー、私もこうなるとは予想外だったぜ」

「この状況は俺も予想外だ」

そう言っつて、龍也は溜息を吐く。

涼しくなると言っていたから室温が下げるものだと思っ
た。龍也は思っ
た。

が、答えは氷り付けにされると言うものであった。

斬新過ぎると龍也は思いながら少しずつ霊力を解放し、体中に力を籠めて

「……ッ!」

自身に纏わり付いてる氷を砕く。

まだ多少体に氷が纏わり付いているが、動きを阻害する程ではない。

龍也がそう思いながら手首を動かしていると、

「……なあ」

魔理沙がその声を掛けてくる。

「何だ？」

そう言いながら龍也が魔理沙に顔を向けると、

「私の氷も砕いてくれないか？」

魔理沙はそんな事を言い出す。

「何でだ？ この程度だったら楽に砕けるだろ」

「いや、そうなんだけどさ……」

そう言いながら魔理沙は視線を下に向ける。

「私と机がいい感じでくっ付いててな。無理に砕こうとすると机もバキッっていきそう
でな」

「ああ……」

龍也も魔理沙と同じ場所に視線を向けて納得した。

無理に砕こうとすると机ごと砕けそうである。

「と言う訳で、砕いてくれるか？」

「あいよ」

龍也はそう返事をして、魔理沙と机を繋げている氷に手を乗せる。

「ああー……冷たくて気持ち良い……」

氷に触れて気持ち良ささそうにしている龍也に、

「うおーい、早く砕いてくれ」

魔理沙はそう突っ込む。

「ああ、悪い悪い」

龍也はそう言っただけを籠め、

「……っと」

魔理沙と机を繋げている氷を握り潰す。

それと同時に魔理沙は魔力を少しずつ解放し、力を籠めて、

「……よっと」

自身に纏わり付いてる氷を砕く。

そして体を少し動かし、

「……おっかしーなー、どうしてこうなったんだ？」

そう呟く。

「何だ、氷り付かせる様な魔法薬じゃなかったのか？」

龍也は少し疑問気な顔でそう尋ねると、

「違う違う」

魔理沙は片手を振ってそう言う。

「本来の予定ではフラスコから冷気を発せさせて部屋全体を冷やす筈だったんだが……」

そう言いながら氷り付いたフラスコに視線を向け、

「どうしてこうなったんだ？」

魔理沙は首を傾げる。

そして、

「……茸を液状にする過程で性質変化が起きた？ それとも混ぜ合わせる前に不純物が入った？ いや、室温で性質変化が起きたと言う可能性も捨てきれん……」

何やらブツブツ呟きながら考え始める。

それから少しすると、

「まあ、それは後で考察するとして」

魔理沙は龍也の方を見て、

「この氷り付いた部屋の片付けを手伝ってくれ」

そう口にする。

「……あいよ」

龍也は若干疲れた雰囲気を出しながらそう答えた。

「ふいー、やっと終わったぜ」

そう言って、魔理沙は氷が殆ど除去された部屋を見てそう漏らす。

「まあ、一番頑張ったのは俺だけだな」

龍也はそう言いながら力を消すと、瞳の色が紅から黒に戻る。

「だって、こう言う時ってお前の能力が一番便利だからさ」

魔理沙はそう言いながら笑みを浮かべる。

確かに、龍也の能力……朱雀の力を使えば氷の除去などは楽であるう。

「まあ、お前の言う通りだから否定は出来んがな」

そう言いながら龍也が微妙な顔をしながら後頭部を搔くと、

「そんな顔すんなって。後でご飯とか作ってやるから」

魔理沙にそう言われ、それならまあいいかと龍也は思った。

結構釣られ易い男である。

「でもま、部屋全体が氷り付いたのは予想外だったが、結構な収穫だぜ」

「収穫？」

「ああ、これを上手く使えば新しい魔法ができそうだしな。後は新しいスペルカードとか」

魔理沙の発言を聞き、

「スペルカードか……」

龍也はそう呟く。

「何だ？ スペルカードがどうかしたのか？」

そう言つて、魔理沙は首を傾げる。

「いやさ、俺のスペルカードの枚数つて多いのか少ないのかよく分からないなと思つて」

「龍也つてスペルカードを何枚待ってるんだ？」

「えーと……遠距離用が四枚、近距離用が五枚、防御用が一枚、広域殲滅型が四枚の計十四枚だな」

「んー……少ないと言えば少ないかな」

魔理沙は少し考え、そう呟く。

「やっぱり二十枚はあった方がいいと思つぜ。思いついたらさっさとスペルカードにしたりする奴も多いからな」

「そうなのか？」

「ああ、弾幕ごっこは遊びだからな。思い付いたのをスペルカード

にしてさつさと試す
って言う奴も結構いるぜ」

「ふーん……」

魔理沙の発言を聞き、

「んじゃ、何枚か作ってみるから」

龍也は新しいスペルカードを作ってみる事にした。

そう思い立ったのと同時に魔理沙の方を見て、

「と言う訳だから手伝ってくれ」

そんな事を言う。

「別にいいが、何でだ？」

そう言っつて、魔理沙は首を傾げる。

「いやさ、どのラインを超えたらルール違反になるのか未だによく
分からなくてな」

「基本的に回避不可能なのはルール違反になるが、その辺は個人個
人の物差しで

変わってくるからな……」

そう言いながら魔理沙は少し考え、

「いいぜ、手伝ってやるよ」

手伝う事を了承する。

「自分から言っただけ置いて何だが、いいのか？」

「別にいいぜ。龍也のスペルカードを作ってるところを見て何か新しい魔法を
思い付くかもしれないからな」

そう言っただけ、魔理沙は自分の部屋に向う。

「今、白紙のスペルカードを持って来てやるからそっこのテーブル
の所にある椅子に
座ってる」

「分かった」

龍也がそう返して魔理沙に指定されたテーブルの前にある椅子に座る。

それから少しすると魔理沙が白紙のスペルカードを持って来たの、
龍也はスペルカード
の作成に取り掛かった。

それから数時間後。

日が暮れ始めた頃、

「ふいー……やっと終わった」

スペルカード作成が終わった。

「結構時間が掛かったな」

そう言いながら魔理沙は体を伸ばす。

出来たスペルカードの枚数は八枚。

遠距離用四枚、近距離用四枚の計八枚だ。

「早速で悪いんだが、これのテストに付き合って欲しいんだが……」

「おう、いいぜ。どんなスペルカードかは分かってはいるが、実際に使ってみないと分からん事もあるだろうし」

そう言いながら魔理沙は立ち上がり、

「ただ、もう少ししたら晩ご飯の準備もしなけりゃならんからな。テスト出来るのはどっちか片方になると思うぜ」

そう言う。

魔理沙の発言を聞き、龍也は少し考え、

「なら遠距離用の方を頼めるか？」

そう口にする。

遠距離用にした理由は、魔理沙が得意とする距離は遠距離なので遠距離用の

スペルカード方が使い勝手や易さなどを掴めると思ったからだ。

近距離用は後日、魔理沙に頼むなり別の人に頼めばいいであろう。

「分かったぜ。それじゃ、外に出ようぜ」

「おう」

龍也は魔理沙の後に続く様にして外に出る。

外に出た二人はその場で上昇し、空中に躍り出る。

ある一定の高度まで上昇すると、二人は距離を取る。

「それじゃ、行くぜ」

そう言つて、魔理沙は自分の周囲に赤、青、黄、緑の色をした光る弾を四つ生み出す。

そして、その弾から放たれる星型の弾幕を合図に弾幕ごっこが始まる。

龍也は迫つて来る弾幕を避けながら、

「何だ、それ？」

魔理沙にそう尋ねる。

「何って私の使い魔だぜ。龍也に見せるのは初めてだったか？」

「使い魔？」

龍也はそう呟きながら魔理沙の周囲にある光る弾を見て、何かイメージと違うなと思っていると、

「まあ、私のこれは一般的な使い魔とは違うがな」

龍也の心中を察したのか、魔理沙がそう答える。

「これは私の魔力の塊……言うなればオプション兵装だな」

「へえ……」

便利な物だなと龍也が思っていると、

「ほらほら！！ ポケツとしてると沈んじまうぜ！！」

光る弾から放たれる弾幕が激しくなる。

それを見て、龍也は気を入れ直して弾幕を避けるのと同時に弾幕を放ち返す。

互いが互いの放っている弾幕を避けていくと言う状況が少しの間続く、

「そろそろいくぜ」

龍也はスペルカードを取り出し、

「誕生『炎より生まれし炎鳥の群れ』」

スペルカードを発動する。

その瞬間、龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

そして龍也が両手を突き出すと大きめの炎の塊が生まれ、放たれる。

炎の塊は龍也と魔理沙の中間地点で止まり、その中から炎鳥が次々と飛び立って行く。

「おっと!！」

魔理沙は少し驚いた表情しながら避けていく。

意外と範囲とスピードがあるなと思った。

同時に、百聞は一見にしかずとはこの事だなとも思った。

このスペルカードの作成には魔理沙も関与していたからどんなスペルカードなのかは大体分かっていた。

だが、実際にこう見ると見ないのでは大分印象が違う。

そう感じながら魔理沙は龍也から距離を取りながら炎鳥を避ける。

それから少しすると、魔理沙の瞳はある物を捉えた。

魔理沙が捉えた物は、龍也が新たに取り出したスペルカードだ。

何でこのタイミングでと魔理沙が思っていると、

「隆起『飛翔する大地の欠片』」

龍也が二枚目のスペルカードを発動する。

スペルカードを発動するとそれまで現れていた炎鳥が消え、龍也の瞳が紅から茶に変化する。

その次の瞬間、

「うおっ!!」

魔理沙の真下から無数の土の塊が急上昇して来た。

真下から飛んで来る土の塊を避けながら、

「弾幕ごっこで真下メインで攻撃が来るってのはあまりないから、結構避けづらいな」

そう漏らす。

これは回避だけに集中した方がいいかもしれない。

魔理沙はそう考えながら真下から迫って来る土の塊を避けていく。

それから少しすると下から迫って来る弾幕が止む。

その瞬間、魔理沙は顔を上げ、

「昇って行った物が落ちてくるのは……自明の理だな!!」

落下して来る土の塊を避けていく。

下と上で攻撃して来るスペルカードも面白いものだと魔理沙が思っ

ていると、

「風檻『縦横無尽の風』」

龍也が三枚目のスペルカードを発動した。

その瞬間、降り注いでいた土の塊が消え、魔理沙の真正面を瞳の色を翠にした龍也が突っ込んできていた。

「っとおお!？」

寸前で気付いた魔理沙はその突撃を何とか避ける。

その後、龍也の姿を目で追いながら移動をする。

何故か。

答えは龍也が通った軌跡にある。

龍也が通った軌跡には竜巻が残っていた。

そう、これがこのスペルカードの真骨頂。

龍也が通った場所には竜巻が残り、どんどんと移動を範囲が狭まっ
ていく。

回避先を考えて移動しなければ、直ぐに追い詰められてしまうのだろ。

魔理沙は冷静に次の回避先を考えながら龍也の突撃を避けていく。

そして数十回目の突撃を避けると、

「ッ！！ またか！！」

魔理沙の瞳はある物を捉える。

それは龍也の手に握られているスペルカード。

まだスペルカードを発動していられる時間は半分程残っている。

なのに何故、新たなスペルカードを使おうとするのか。

そんな疑問の答えが出ぬまま、

「乱斬『水爪牙』」

龍也はスペルカードを発動する。

龍也の瞳の色が翠から蒼に変わると同時に竜巻は消え、龍也の両手は水に包まれる。

その形は龍の手を模している。

龍也は魔理沙を視界に入れながら両手を振り上げ、順々に振るう。

すると、爪先から水で出来た斬撃が五本放たれた。

何て事はない。

このスペルカードは龍也が青龍の力を使っている時に使う技、水爪牙をスペルカードに
しただけである。

五本で一セットの水の斬撃を次々と放つ。

これはそんなスペルカードである。

そんな風に迫って来る水の斬撃を、魔理沙は斬撃と斬撃の間に体を滑り込ませて回避
していく。

もう少しでスペルカードの制限時間が来る。

魔理沙がそう思っていると、

「あっ!!」

水の斬撃の一部が魔理沙の帽子に当たり、魔理沙の帽子が吹き飛んでしまう。

それに一瞬気を取られた瞬間、

「げっ!!」

魔理沙の直ぐ近くにまで水の斬撃が迫って来ていた。

間に合うか微妙な所ではあったが、魔理沙は回避行動を取る。

このまま行けばギリギリ間に合うか。

魔理沙がそう思った瞬間、

「……あれ？」

水の斬撃が消えた。

どうしてと魔理沙が思ったが、直ぐにスペルカードの制限時間が来たのだと思った。

これでテストは終わりかと魔理沙が思っていると、

「付き合ってくれてありがとうな」

背後から魔理沙の帽子を持った龍也がそう声を掛けた。

因みに、瞳の色は元の黒色に戻っている。

魔理沙は後ろを振り返りながら、

「おう」

そう言っつて帽子を受け取っつて被り直す。

「しっかし、あれがスペルカードじゃなかったら私の帽子は真つ二つになつてたな」

そう呟いた後、

「そういや、何でスペルカードを連続して使つたんだ？」

魔理沙は気になっていた事を龍也に尋ねてみた。

「ああ、あれか。思考が切り替わる前に連続して使えば上手い事当たるんじゃないかと
思ってたさ」

「ああ……確かに避けづらかったな」

そう言いながら、魔理沙は龍也が使ったスペルカードを思い出す。

中々有効的な方法だと思ったが、

「でも、弾幕ごっここのルール上スペルカードを使い切ったら負けだから諸刃の剣だと思っぜ」

それ相応のリスクもあると思った。

「ああ、お前に全部避けられてそう思ったよ」

そう言って、龍也は溜息を一つ吐く。

「さて、腹も減ったし戻ろっぜ」

「そうだな」

そう言い合い、二人は降下して行く。

「今日の晩ご飯って何だ？」

「葺のシチューだぜ」

そんな会話をしながら二人は家の中に入って行った。

放浪編 その57

「起きろー!!」

そんな声と共に金属同士がぶつかり合う音が発生する。

「うおおおおおおうー!？」

その音で龍也は目を覚まし、飛び起きる。

そして上半身を起こして辺りを見渡すと金属製の鍋とお玉を持った魔理沙が目に入った。

「やっと起きたか、おはよう」

「おはよう」

そう挨拶を交わして龍也は自分が寝ていたソファから降りて体を伸ばす。

「それにしてもよく寝てたな。もう朝ご飯出来てるぜ」

「お、悪いな」

「いいって。私だけ食べて龍也に食べさせないって言うのもあれだしね」

魔理沙はそう言いながらテーブルを指さし、

「もう並べちゃったからさっさと食べようぜ」

そう言う。

「ああ、そうだな」

龍也がそう返した後、二人は朝食が並べられているテーブルへと向う。

そして椅子に腰を落ち着かせた後、

「いただきます」

朝食を取り始める。

献立は、目玉焼きに白米に焼き茸と言った物だ。

龍也と魔理沙は雑談を交えながら箸を進めて行く。

暫らくすると、

「「ご馳走様」」

食事を取り終える。

それ同時に、魔理沙が食器を纏めて台所へ持って行くこととする。

その行為を見た龍也は

「食器洗い位、俺がやるのか？」

そう尋ねる。

「それじゃあ、頼むぜ」

魔理沙はそう言って龍也に食器を突き出す。

「台所はあっち。洗い終わった食器は適當の重ねて置いてくれ」

「あいよ」

龍也はそう返事をして魔理沙から食器を受け取り、台所へ向う。

台所に着くと、龍也は食器を洗い始める。

それから暫らくすると、

「終わったぜ」

龍也はそう声を掛けながら居間へと戻る。

「おう、ごくろつさん」

ソファに座って寛いでいた魔理沙が龍也に顔を向けながらそう言
い、

「今日って暇か？」

そんな事を尋ねる。

「ああ、暇だけど」

魔理沙の問いに龍也がそう答えると、

「よし！！」

魔理沙はそう言いながら立ち上がって龍也に近付く。

そして、

「今日は私に付き合え」

そんな事を言い出す。

「付き合えって……何処にだ？」

「玄武の沢だ」

「玄武の沢？」

そう言っって龍也は首を傾げる。

「魔法の森の奥地にあるんだが……行った事はないのか？」

「ああ」

そう言っって、龍也は頷く。

まあ玄武の沢の存在が分かっていたとしても、基本的に陸路で幻想

郷中を回っている

龍也なら迷って辿り着けなかった可能性が高いが。

「なら丁度良いじゃないか。私が案内してやるよ」

それを聞き、龍也は少し考え、

「じゃあ、案内頼むな」

魔理沙に玄武の沢までの案内を頼む事にした。

「おう、任されたぜ」

魔理沙はそう言いながら外へと向う。

龍也はソファーに掛けてあったジャケットを着て、魔理沙の後を追う。

そして外に出た二人は飛び上がり、玄武の沢へと向った。

「ここが玄武の沢だぜ」

「ここが……」

龍也は興味深そうな顔付きで周囲を見渡す。

中央は川が流れ、周りは土の壁。

今、龍也達が居る場所は谷の間と言った所である。

「それにしても、玄武の沢ねえ……」

龍也はそう呟きながら自身の胸元に視線を落とす。

自分の中には玄武が居るので、ここ玄武の沢に何か反応を起こすのかもしれない。

そう思いながら龍也は自身の力を変える。

玄武の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が黒から茶に変化する。

これで何か変化があるかと思い、少し集中してみたが特に変わった事はなかった。

自分の中に居る玄武はこの玄武の沢と何の関係もないのか。

龍也がそう思っていると、

「どうかしたか？」

魔理沙がそう話し掛けて来る。

急に反応が無くなったので不審に思ったのだろう。

龍也はそう思い、

「何でもねえよ」

力を消し、顔を上げてそう返す。

因みに、顔を上げた時には龍也の瞳の色は茶から黒に戻っていた。

「それで、俺は何をすればいいんだ？」

「ああ、茸とか草とかそういうのを集めて欲しいんだ」

魔理沙はそう言いながら袋とゴム手袋を龍也に突き出す。

「そんなんでいいのか？」

龍也がそう尋ねると、

「ああ。二人の方が数が集まるだろ」

魔理沙は笑顔でそう返す。

「了解。少なくとも飯代分位の仕事はさせて貰うぜ」

龍也はそう言って袋とゴム手袋を受け取り、ゴム手袋を両手に着ける。

「それじゃ、宜しく頼むぜ。一通り集まったらここに帰って来てくれ」

そう言って、魔理沙は箒に跨って飛んで行く。

それを見送った後、

「さて、俺も探しに行くか」

龍也も茸などを探しに向った。

「見つけ」

龍也はそう言いながら虹色をした茸を手に取り、袋の中に入れ、

「しっかし、玄武の沢って魔法の森の面影があんまりないから普通の茸や草もあると思っただが、そんな事はなかったぜ」

そう言っただ袋の中を覗き込む。

袋の中には珍妙な形をした茸、光を発している茸、毒々しい色をした草、やけに硬い草などなど、普通の茸や草はなかった。

「ま、奥地であまり森って感じはしないが……ここも魔法の森の一部って事か」

龍也はそう眩き、再び採取出来そうな物を探し始める。

それから少しすると、

「ん？」

無数にある洞穴の一つを注視する。

何故ならば、その中から僅かに漏れ出している光を発見したからだ。

龍也は何だろうと思いつながらその洞穴に近付いて中を覗き込むと、

「……………おお」

その光に見惚れた。

光の色は黄緑色で、奥の岩が光源の様だ。

不思議と惹き付けられる魅力がある。

龍也が暫らくの間その光に見惚れていると、

「おーい、どうしたんだ？」

そんな声を掛けられた。

その声で龍也は我に振り返り声を掛けられた方へ振り向く。

龍也に声を掛けてきた者は

「魔理沙」

魔理沙であった。

「どうしてここに？」

「私の方は大体集まったから集合場所に戻る為に飛んでいたら龍也を見つけて降りて来

たんだ。それより何してたんだ？ 洞穴の奥に何か面白い物でもあったのか？」

「ああ。あれを見てくれよ」

そう言っつて龍也は洞穴の奥を指さす。

その指に釣られる様にして魔理沙が視線を動かすと、

「おおー！！」

魔理沙がそんな声を漏らしながら黄緑色の光を発する物体を注視する。

どうやら、興味津々の様だ。

暫らく二人でその光を眺めていると、

「あれは光苔だな」

魔理沙が光源の正体を言い当てる。

「光苔？」

そう言つて、龍也は首を傾げる。

「光苔つて言うのは光を発するつて言う珍しい苔だな。私も噂程度にしか聞いた事がなかつたが……まさかこんな所にあるとはな……」

そう言つて魔理沙は感心した表情になる。

「それにしても綺麗な光だな」

「ああ」

魔理沙の発言に同意する様に龍也はそう呟く。

そして再び二人で光苔を観察した後、

「折角だ、この光苔を研究させて貰うか」

魔理沙はそう言つて光苔を一欠けら程、手に取る。

「研究つて何をするんだ？」

「どうやって光を発しているのかとか、魔法の触媒に使えるのかとかさ」

指を立てながら魔理沙はそう語り、

「それはそうと収穫の方はどうだった？」

龍也にそう尋ねる。

「この通り」

そう言っつて、龍也は魔理沙に袋を差し出す。

「どれどれ……おお！！ 大量じゃないか！！」

龍也から袋を受け取り、中身を見た魔理沙はそんな声を上げる。

袋の中身を一通り見た後、

「お前に協力を頼んで正解だったな」

笑顔でそう言う。

「ま、飯代分は働くつて言ったからな」

龍也はそう言いながらゴム手袋を脱いで魔理沙に返す。

ゴム手袋を龍也から受け取った後、

「私は一旦戻るけど、龍也はどうするんだ？」

魔理沙はそう尋ねる。

「俺は暫らくの間この玄武の沢を探索する予定だけど」

「なら、これを渡しておくぜ」

魔理沙はそう言いながら帽子を外して中から包みを取り出し、それを龍也に差し出す。

「これは？」

受け取った龍也がそう尋ねると、

「おにぎりだぜ」

魔理沙はそう答える。

「ここでの採取が時間が掛かると思って持って来たんだが、そんな事なく終わっち

まったからな。龍也が貰ってくれるんなら無駄にならなくて済むんだが」

「そう言う事ならありがたく貰っておくよ」

そう言って龍也は包みを受け取る。

龍也が包みを受け取ったのを見届けた後、魔理沙は箒に跨って飛び上がり、

「それじゃ、まったなー！！」

そう言って玄武の沢を後にした。

それを見送った後、

「さて、もう暫らくこれを見ているか」

龍也はそう言って再び光苔の観察を始めた。

因みに、おにぎりの具は茸であった。

「さて、そろそろ寢床を探すか」

日が暮れ、月が出始めた時間帯、龍也は玄武の沢を歩きながら寢床を探していた。

それから少しすると、

「お、ここはいいんじゃないか？」

大き目の洞穴を発見する。

少し中を除いて見たが、中々に広い。

今日の寝床はここにし様と龍也が思つと、

「ん？」

近くから大きな水音が聞こえて来た。

誰か居るのかと龍也は思い、音が聞こえて来た方へ足を進める。

そこに居たのは、

「サニーミルクにルナチャイルドにスターサファイアじゃないか」

一緒に居る事が多い三妖精だ。

そのうちの一人、ルナチャイルドは水で濡れている。

大方、足でも滑らせて水にダイブしたのだろうと龍也は思った。

一方、声を掛けられた三妖精はビクツとしながら恐る恐る振り返るが、

「……って何だ、龍也さんじゃないですか。脅かさないで下さいよ」

声を掛けてきた人物が龍也だと分かり、安心した表情になる。

「ああ、悪い悪い」

そう謝つた後、

「お前等、こんな所で何やってるんだ？」

龍也は三妖精がここに居る理由を尋ねる。

「私達は一寸探し物を……」

「探し物？」

そう言つて龍也が首を傾げると、

「あ、そうだ。龍也さん、光る苔つて知ってますか？」

スターサファイアがそんな事を尋ねてきた。

「光る苔……光苔の事か。お前等、それを探してるのか？」

龍也がそう言つと、三妖精はコクンと頷いた。

「探してるんですけど全然見つからないんですよ。夜中なら直ぐに分かると思つたんですが……」

「それなら仕方がねえよ。あの苔、日中しか光らないんだ」

龍也がそう言つと、三妖精は驚いた表情になる。

「そ、そうなんですか!？」

「ああ。俺は今日ずっと光苔を観察してたからな。あの苔、日が落ち始める頃になると光を発しなくなつたし」

龍也がそう言つと、

「はぁー、どうりで見つからない訳だわ」

サニーミルクがそう漏らす。

その後、龍也は三妖精と雑談をして時間を潰す。

それからある程度経つと、三妖精は自分の家に帰って行つた。

何でも、明日は朝一で光苔を探すんだとか。

元気だなと思つていと、

「今、飛んでつたのって何時も一緒にいる三妖精だろ。あいつらこんな所で何やってたんだ？」

背後からそんな声が聞こえて来た。

龍也が振り返ると、

「よっ」

片手を上げている魔理沙の姿が目映った。

「何だ、また来たのか」

「ああ。夜中だからこそ新しく見つかる物があるかもしれないから

な」

熱心だなと龍也が思っていると、

「それよか、あいつ等何しに来たんだ？」

「ああ、それは……」

そう言って、龍也は事情を説明する。

「成程、あいつ等も光苔を探しに来たのか。と言う事は、私と霊夢の会話を聞いてたな」

龍也から事情を聞いた後、魔理沙はそんな事を呟く。

「何だ、光苔の事を霊夢に話したのか？」

「おう、自慢しにな」

魔理沙はそう言って悪戯が成功した時の様な笑みを浮かべる。

「そついや、魔理沙ってあの三妖精の事を知っているのか？」

「ああ、一寸前にあいつ等から依頼を受けたんだ」

そう言って、魔理沙は少し前の事を思い出す。

それから少しすると、

「そついや、龍也は光苔が光を発する条件に気付いたか？」

そんな事を尋ねる。

「日が出てる時間帯にしか光らないって事位かな」

「ほう、そこまで分かったのか。だが、私は更にその上を行ったぜ」

「お、なら他に何か分かったのか？」

「ああ。あの苔な、光を集めて乱反射させているんだ」

魔理沙は少し自慢気にそう語る。

「と言う事は、自分で光を発しているって訳じゃないのか」

「ああ。最も、どの程度の光で光っている様に見えるのかはまだ調査中だけどな」

そう言っつて魔理沙は一息吐くと、

「さて、魔理沙さんの講釈を聞いたんだからその礼代わりにまた素材集めを手伝って貰おうか」

そんな事を言い出す。

「え？」

「どうせ暇なんだから？」

魔理沙にそう言われて龍也は言葉に詰まる。

魔理沙の言う通り、龍也は寝るまで暇である。

龍也が黙っているのを凶星と感じたのか、

「なら、決まりだな」

魔理沙の中では龍也が同行する事が決まった様だ。

「やれやれ」

そう言って、龍也は溜息を一つ吐いた。

そして、これは必ず付き合わされるなと思い、

「まあいいか」

そう呟いた。

寝るまで暇なのは確かなのだ。

それまで暇潰しをするのもいいであろう。

こうして、龍也は魔理沙の素材集めに付き合うことになった。

放浪編 その58

「あー……こっちは涼しいな……」

龍也はそんな事を呟きながら足を進める。

現在、龍也は冥界に来ている。

何故冥界に来ているのか。

答えは簡単。

避暑だ。

日に日に暑くなって来ているこの夏の日々。

いい加減暑さでダレ始めた龍也は暑さから逃れる為に冥界にやって来たのだ。

序に冥界の探索をし様とも思いながら。

「おっと」

少しポーツとしながら歩いていると目の前の人魂が横切ったので龍也は足を止める。

因みに、冥界が涼しいのはこの人魂が大量に居るお陰であろう。

人魂の体温……言っただけいいかは分からないが、人魂は非常に冷たい。

故に冥界は涼しいのだ。

「龍也さん？」

また龍也がボーツとしていると、背後から声を掛けられた。

龍也は誰だと思いながら振り返ると、

「妖夢」

「やっぱり龍也さんでしたか」

そこには結構な量の荷物を持った妖夢が居た。

「どうしたんだ、その大量の荷物？」

「これですか？ 食材ですよ」

そう言っつて妖夢は溜息を吐く。

「幽々子様、かなり食べられますから」

「ああ、食事とかはお前が作ってるんだっけか」

「基本はですね。白玉楼に住んでいる人魂も手伝ってくれますが、如何せん人魂には手がありませんからね。それでも助かっているとさえ言えば助かっています」

そう言った後、

「そう言えば、龍也さんは冥界に何かご用ですか？」

妖夢はそう尋ねる。

「避暑に」

「避暑って……」

龍也の返答を聞いた妖夢は若干呆れ顔になり、

「そんな理由で冥界に来る人間何て普通はいませよ」

そう言う。

「そうかね？」

そう言って、龍也は後頭部を搔く。

「そうですね。まあ、霊夢と魔理沙辺りは普通に来そうですね。と言うか

来ましたし」

「何だ、あいつ等も来てたのか？」

「あの二人は避暑目的と言うよりは人魂が目的でしたけど」

「人魂？」

そう言っつて首を傾げる。

「はい。人魂は冷たいですからね。人魂を瓶詰めにして涼むのが目的の様です」

「へえ……」

妖夢の話聞き、自分も人魂を瓶詰めにし様かと考えていると、

「ん？ どうした？」

ジト目で自分を見詰めている妖夢の視線に気付いた龍也がそう尋ねる。

「龍也さん、まさか龍也さんも人魂を瓶詰めにし様だ何て事を考えてたりは……」

「か、考えてねえよ」

考えている事を当てられた龍也は驚きながらそう口にする。

「本当ですか？」

「ほ、本当だつて……！」

「………ならいいですが」

そう言っつて、妖夢は一息吐く。

「それはそうと、龍也さんも白玉楼に来ますか？ お昼をいこ馳走し

ますよ」

「いいのか？」

「はい。多少作る量が増えても大して変わりはありませんし」

そう言って、妖夢は乾いた笑みを浮かべる。

「なら、ご馳走させて貰おうかな」

「分かりました。それでは一緒に行きましょう」

「ああ、それと荷物は俺が持つよ」

「いいんですか？」

「ああ。俺はご馳走になる立場だからな。これ位はさせてくれ」

「分かりました、それではお願いしますね」

そう言って妖夢は龍也に持っている荷物を差し出す。

龍也がそれを受け取ると、二人は白玉楼へと足を進めて行った。

白玉楼に着くと、妖夢は『龍也さんのはんびり寛いでいてください』
と言って食材を
持って台所へ向ってしまった。

手持ち無沙汰になった龍也はブラブラと白玉楼の敷地内を散策して
いると、

「……………」

西行妖の前に来ていた。

「別段意識してここに来た訳じゃないんだが……………」

そう呟きながら龍也は西行妖を見上げる。

この西行妖の力が龍也の中にあるせいとか力は感じられず、ただの巨

大な枯れ木にしか
見えない。」

自分がこの西行妖を求めて無意識にここまで来たのか、それとも自分の中にある西行妖の力が西行妖に引つ張られてここまで来たのか。

龍也がそんな事を考えていると、

「だーれだ？」

そんな声を共に龍也の視界が塞がれた。

「……幽々子だろ」

龍也がそう答えると、

「もー、ちゃんと悩んでくれないと面白くないでしょ」

幽々子はそう言って自分の体を龍也に押し付ける。

「ちょー！！ おまー！！ 当たってる当たってる！！」

幽々子に体を押し付けられた事で龍也が慌て気味にそう言葉を発すると、

「あら、当たってるって何が？ ちゃんと言ってくれないと分からないわ」

幽々子は悪乗りするかのように更に体を押し付ける。

「ちよ、おま!! だから……」

「ふふ、怒られる前にやめるとしましよつかね」

そう言って幽々子は両手を龍也の目から離し、龍也に自身の体を押し付けるのをやめる。

そして龍也の隣に並び、

「龍也もこの西行妖が気に入ったのかしら？」

そう口にする。

「まあ……そうだな」

龍也がそう返すと、

「それなら今度は龍也にも春度を集めるの手伝って貰ってまた異変でも起こそうかしら」

そんな事を提案する。

「いや、流石にそれは……って、こんな会話前にもしなかったか？」

「あら、そうだったかしら？」

幽々子はそんな事を言いながら口元を扇子で隠す。

それから暫らくの間二人で西行妖を見ていると、

「さ、そろそろご飯が出来る頃だろうから戻りましょ」

そう言つて幽々子は屋敷の中へと足を進める。

その後が続く様にして龍也も足を進める。

すると、幽々子は振り返つて

「そうそう、あれの力は既に龍也、貴方のもの。ちゃんと自分を保つていれば引つ張られる事もないわ」

そんな事を言う。

「え……」

幽々子の発言に龍也は驚きの表情を浮かべる。

自分の中に西行妖の力がある事は誰も知らない。

まあ、紫辺りは知っていそうであるが。

龍也自身は別段隠している訳ではなく、尋ねられなかったから言わなかつただけであるが。

それはそれとして、自分の中に西行妖の力がある事を知っているの

かと幽々子に尋ね様
とすると、

「さ、早く行きましよう」

幽々子はそう言って龍也に笑顔を向け、屋敷内へと向って行った。

その後姿を見ながら、話術や腹芸では敵わないなと龍也は思いながら幽々子の後を追った。

妖夢の作った昼食を食べ、居間でのんびりしていると、

「龍也さん、食後の運動がてらに手合わせしませんか？」

妖夢からそんな提案がされる。

「ああ、いいぞ」

龍也が直ぐに了承の返事をする。妖夢は嬉しそうな表情をし、

「では、早速庭先に行きましょう!!」

龍也の手を引いて妖夢は庭先へと向う。

庭先に出ると二人は間合いを取ると、

「あ、そうだ」

そう言つて、龍也は何かを思い出した顔になる。

「妖夢、一寸頼みがあるんだがいいか？」

「頼みですか？」

妖夢はそう言いながら首を傾げる。

「ああ、新しく作った近接用のスペルカード四枚のテストをしたいんだ。それに付き合つてくれないか？」

「いいですよ。龍也さんがどんなスペルカードを作ったのか興味がありますし」

龍也の頼みを妖夢は快く引き受けてくれた。

「ありがとう」

龍也はそう礼を言って自身の力を変える。

朱雀の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

瞳の色が変わると同時に龍也は一本の炎の剣を両手から生み出し、構える。

それを見た妖夢は楼観剣を鞘から抜き、構える。

そして二人はジリジリと間合いを詰め、

「ッ！！」

一気に駆け、互いの得物を激突させる。

少しの間鏖迫り合いを維持し、二人は弾かれた様に間合いを取る。

二人が地面に足を着けた瞬間、妖夢は地面を蹴って龍也に肉迫し、

「はあ！！」

楼観剣を横一文字に振るう。

その一撃を跳躍する事で龍也は避け、

「らあー!!」

降下と同時に二本の炎の剣を振り下ろす。

振り下ろされる斬撃を見ながら、楼観剣での防御は間に合わない
と妖夢は判断し、右手

で白楼剣を抜き放って龍也の斬撃を防御する。

が、

「ぐっ!!」

予想以上の力に妖夢は顔を歪める。

それも仕方がない事かもしれない。

妖夢が片手なのに対し、龍也は両手。

更には降下と言うおまけも付いている。

これで龍也と力比べをしようのは妖夢の分が悪いであろう。

このままで完全に押し切られると思った妖夢は白楼剣を傾け、龍也
を自分の真横に
滑り落とさせる。

「なっ!?!」

予想外の事態であったからか、この事に龍也は驚いてしまう。

その隙を付き、妖夢は龍也の脇腹に、

「たあ!?!」

蹴りを叩き込む。

「がっ!?!」

妖夢の蹴りをまともに受けた龍也は吹き飛んで行く。

吹き飛んで行く龍也を目に入れながら妖夢は白楼剣を鞘に収め、楼観剣を両手で掴み、地を蹴って駆ける。

吹き飛ばされている龍也が顔を上げると、自分に向かって迫って来る妖夢の姿が見て取れた。

それを見てマズイと思ったのか龍也は体を回転させて着地し、二本の炎の剣を合わせて一本の炎の大剣にし、龍也も地を蹴って駆ける。

そして互いが互いの間合いに入ると、

「はあああああああああああああああああああああああああああ!

「！！！！！！」

互いの得物を振るう。

その瞬間、炎の大剣と楼観剣は激突し、大きな激突音と衝撃波が発生する。

また鏢迫り合いの状態になるが、今度は直ぐに互いの得物を離す。

先程とは違って間合いを取る様な事はせず、二人はその場で互いの得物を高速で振るう。

その結果、炎の大剣と楼観剣は何度も激突する。

何度も、何度も。

そして何十回目の激突の後、龍也と妖夢は自分の得物を大きく振りかぶり、

「はあ！！！！！！」

激突させる。

その影響で大きな激突音と衝撃波が再び発生し、再び鏢迫り合いの形になると、

「随分と腕を上げましたね、龍也さん」

妖夢はそう口にし、力を籠めて龍也を押し切ろうとする。

「そう言うお前もな、妖夢」

龍也もそう返し、力を籠めて妖夢に対抗する。

「そりゃそうですよ。私だって負けたくはありませんから」

「それは俺も同じだ」

そう言い合い、二人は軽い笑みを浮かべ、

「そっいや、こう言った手合わせなどを除いてお前と戦うのは何
度目だっけか？」

龍也はふと思つた事を尋ねてみる。

「そうですね……確か三度目だったと思いますよ」

妖夢はそう言つて、龍也と戦つた時の事を思い出す。

「最初は私が春度を集めてた時でしたね」

「あの時は俺がボロ負けしたんだつたよな」

そう言いながら龍也はその時の事を思い出す。

「で、次に戦つたのが……お前達が起こした異変の解決の時だった
な」

「ええ、そうですね。あの戦いは私の完敗でした」

そう言って、妖夢が少し遠い目をする。

「その次が……」

「萃香が起こした異変の時だったな」

そう言いながら龍也は萃香が起こした異変を思い出す

「近接戦込みの弾幕ごっこだったけど、俺の勝ちだったな」

「そうですね、それで私の一勝二敗。負け越しですね」

そう言って、妖夢は溜息を吐く。

「他には永夜異変と妹紅さんとの弾幕ごっこで戦いましたが……」

「あの時は俺が不意打ち気味にスペルカードを使ったし、妹紅の時は二対九の変則的な弾幕ごっこだったからなあ。あれはノーカンだろ」

「後は……あ、花の異変の時にも戦いましたよね」

「戦ったけどあれは手合わせだったろ」

「あ、そうでしたね」

そう言いながら、妖夢はあの時発した自分の言葉を思い出す。

「またそのうち、龍也さんとは本気で戦いたいですね」

「そうだな……また何時か本気で戦おう」

「約束ですよ。今度は私が勝ちます」

「いや、次も俺が勝たせて貰うぜ」

そう言い合った後、二人は笑みを浮かべ、弾かれる様にして間合いを取る。

距離が離れた後、妖夢は先程と同じ様に地を蹴って駆ける。

龍也はそれを見ながら炎の大剣から右手を離し、懐に手を入れ、スペルカードを

取り出し、妖夢が自分の間合い入るのを待つ。

そして妖夢が自分の間合いに入ると、

「炎柱『駆け上がる炎』」

スペルカードを発動する。

その瞬間、龍也から炎柱が発生する。

「くっ!!」

丁度その範囲内に居た妖夢は炎柱に飲まれるも、何とかそこから脱出し、

「火柱を上げるスペルカードですか……」

そう口にしなからスペルカードを取り出した時点で用心して置いてよかったと妖夢は思った。

そうでなければ抜け出す事が出来ずに全てをその身に受けていたであらう。

妖夢は龍也を目に入れながら着地すると、

「ッー!!」

龍也の姿が消えた。

その事に驚くものの、妖夢は振り返りながら楼観剣を振り降ろす。

その瞬間、妖夢が振るった楼観剣と龍也が振るった炎の大剣が激突する。

そう、龍也は超速歩法を使って妖夢の背後に回ったのだ。

その動きに付いてこれる妖夢も流石である。

「ッ………それにしても便利な移動方法ですね。私も覚えてみようかな………」

「超速歩法の事か？ 間合いを詰めたり離したり、不意を付いたり
と色々使えるな、

この技」

「やっぱり便利ですね、それ。空中に足場を作る方法と一緒に練習しよう」

そんな会話をしながら二人は力を籠める。

そのまま均衡するかと思われた。

が、

「はあああああー!!」

龍也が靈力を解放した為、龍也の力が大きく増大し、妖夢は両腕をカチ上げられてしまう。

「しまっ!!」

これでは隙だらけである。

逸早く体勢を立て直そうとする妖夢の目に、あるの物が映った。

それは、龍也の左手にあるスペルカードだ。

このタイミングで発動かと妖夢が思った瞬間、

「超速『閃風連牙』」

スペルカードが発動する。

スペルカードが発動すると炎の大剣が消え、龍也の瞳の色が紅から

龍也の予想以上の速さに驚くものの、妖夢は楼観剣の腹で龍也の拳を防ぎ、

「たあ!!」

楼観剣を振るって龍也を弾き飛ばす。

弾き飛ばされた龍也は妖夢から少し離れた場所に着地し、構えを取る。

妖夢も龍也の姿を視界に入れながら楼観剣を両手で構え、

「そう言えば、龍也さんは炎、風、地、水の四つを操る事が出来た
んでしたよね。

何時も炎の剣を使うのでつい忘れていました」

そんな事を言う。

「まあ、お前との手合わせの時は朱雀の力をメインで扱ってたから
な。これからは別の
力も使っていこうか？」

「是非」

そう言っつて、妖夢は地を蹴って龍也に肉迫し、楼観剣を振るう。

妖夢が放った斬撃を龍也は紙一重で避け、

「りゃあ!!」

龍也は蹴りを放つ。

妖夢は楼観剣から片手を放し、

「くっ!!」

その腕で防御する。

そして龍也の脚に纏っている風に吹き飛ばされまいと踏ん張っていると、

「なっ!?!」

龍也の脚に纏っている風が炸裂した。

その影響で妖夢は吹き飛ばされ、地面を転がって行く。

何回転かした後、妖夢は地面を掌で弾いて体勢を立て直して龍也が居た位置に目を向ける。

が、

「……居ない？」

そこに龍也の姿はなかった。

何処へ移動したのかと探そうとすると、

「ん？」

妖夢の顔に影が掛かる。

その瞬間、

「上か！！」

妖夢は龍也が自分の上に居ると思い、顔を上げる。

妖夢の思った通り、龍也は妖夢の上空に居た。

降下して来る龍也を迎撃しようとして妖夢は楼観剣を構え、龍也の攻撃に備える。

妖夢が楼観剣を構えたのを見た龍也は、このまま降下して攻撃をするのは分が悪いと

思い、スペルカードを取り出し、

「粉塵『炸裂する土の拳』」

スペルカードを発動する。

スペルカードが発動すると龍也の瞳の色が翠から茶に変わり、両腕両脚に纏っている風が消える。

その代わりに右手から土が生まれ、その土が形を成して巨大な土で出来た拳になる。

土で出来た巨大な拳を振り被りながら降下して来ている龍也の姿を見て、このまま受けるのは分が悪いと思い、その場から離れる事にした。

そして龍也が土の拳を地面に叩きつけた瞬間、土の拳が破裂し、無数の土の塊が辺り一面に飛び散る。

「なっ！！！」

てつきり、巨大な土の拳の一撃で終わると思っていた妖夢は予想外と言う顔になる。

が、直ぐに表情を戻し、白楼剣も抜いて飛来して来ている土の塊を切り払っていく。

「く……」

予想よりも多い土の量に妖夢は顔を歪めながらも何とか全ての土の塊を切り払う。

その後、白楼剣を鞘に収めると、

「ッ！！！」

龍也が自分の目の前に来ている事に気付く。

どうやら、あの土の塊を目晦ましにして接近して来た様だ。

妖夢がその事を理解したのと同時に、龍也から拳を放たれる。

その瞬間、妖夢は後ろに跳んで龍也の拳を避ける。

龍也が拳を完全に振り切ったのを見計らい、妖夢は突撃するのと同じ時に刺突を放つ。

妖夢が放った刺突は見事龍也の胴体に命中する。

が、

「ッ！！」

刺突を受けた龍也にさしたるダメージは見られなかった。

その事実には妖夢は驚きの表情を浮かべる。

今回のこれは手合わせだ。

殆ど切れ味のない白楼剣は別として、楼観剣は普通に斬れる。

故に妖夢は手合わせや弾幕ごっこの時には楼観剣の刀身を妖力でコーティングして斬れない様になっている。

偶にコーティングする事を忘れたりもするが。

しかし、今回はちゃんとコーティングしている。

なので刃が刺さっていないと言うのは分かる。

だが、衝撃そのものは伝わる筈である。

だと言うのに龍也には大したダメージが見られない。

何故、龍也にダメージがないか調べ様とすると、

「……………硬い」

楼観剣から硬い感触が伝わって来た。

その感触を感じ、妖夢は理解した。

龍也の体が何時もよりも硬くなっている事に。

だから今の刺突が効かなかった妖夢が判断すると、

「ッ！！」

龍也は妖夢の懐に入り込んでいた。

どうやら、妖夢が思考に耽っていた数瞬の間に入り込んで来た様だ。

妖夢がその事に気付いた時にはもう遅く、龍也は妖夢を

「おおおおおおおりゃ！！！！！！」

巴投げで投げ飛ばす。

妖夢を投げ飛ばした後、龍也は起き上がって落下予測地点へと向う。

妖夢は足の裏を叩き込まれた場所を手で押さえ。空中で回転しながら体勢を立て直して着地し、

「防御力が上がっているのなら!!」

妖力を解放しながら楼観剣を両手で掴んで龍也へと突っ込み、

「攻撃力を上げるのみ!!」

龍也の鳩尾に楼観剣の柄頭を叩き込む。

相手の防御力が上がっているのなら攻撃力を上げる。

単純明快ではあるが、

「ぐ……」

それ故に効果はあった。

鳩尾に楼観剣の柄頭を叩き込まれた龍也は踏鞴を踏みながら数歩後ろに下がる。

妖夢はその隙を付き、

「はあああああああああああああああああ!!!!!!」

渾身の力で楼観剣を降り抜く。

「がつ!!」

それをまともに受けた龍也は吹き飛んで行く。

そして、追い討ちを掛ける為に妖夢は龍也を追う。

それを見た龍也は地に足を着け、減速しながら懐に手を入れてスペルカードを取り出し

「噴出『地より出ずる水流』」

スペルカードを発動する。

その瞬間、龍也の瞳の色が茶から蒼に変化し、龍也の目の前の地面から水が噴出する。

追い討ちを掛ける為に龍也に近付いていた妖夢はそれを喰らって上空へと舞い上げられ、地面に叩きつけられる。

その後、立ち上がるうたとすると、

「みよん!？」

舞い上がった水が落下して来て妖夢に命中した為、妖夢は再び地面に激突した。

再び地面に激突した妖夢を見ながら、

「大丈夫か」

龍也はそう言いながら力を消し、瞳の色を蒼から黒に戻して妖夢に手を差し出す。

「ええ、何とか」

妖夢はそう言いながら龍也の手を掴んで立ち上がる。

「ありがとな、俺のスペルカードのテストに付き合っただけで貰って」

「いえ、私の方も手合わせに付き合っただけで貰いましたしお相手ですよ」
そう言いながら妖夢は楼観剣を鞘に収める。

すると、

「随分と楽しそうに戦ってたわね」

縁側からそんな声が聞こえて来た。

二人に声を掛けて来たのは、

「幽々子」

「幽々子様」

幽々子であった。

「見てたのか？」

「ええ。お茶を飲みお茶菓子を食べながらね。それにしても随分と

腕を上げたわね、
妖夢」

「あ、ありがとうございます！..！」

そう言って、妖夢は頭を下げる。

「でも……」

「でも？..！」

「この庭の惨状はどうするのかしら？..！」

「「庭の惨状？」」

そう言い、龍也と妖夢の二人は白玉楼の庭に目を向ける。

「「あ……」」

二人の目に映った白玉楼の庭は、結構無惨な姿になっていた。

まあ、あれだけ派手に戦ったり、霊力やら妖力やら解放すればそう
なってる当然で
あるうが。

「二人とも、お夕飯までにはこの庭を直して置いてね」

「「……はい」」

そう言って、龍也と妖夢の二人は頂垂れる。

この惨状を引き起こしたのはこの二人なので仕方がないと言えは仕方がない。

こうして、龍也と妖夢の二人は大急ぎで庭の修復に取り掛かった。

放浪編 その59

龍也が白玉楼に泊まり込んでから一週間。

龍也は冥界を後にしていた。

一週間もすれば涼しくなっているだろうと思ったからだ。

その結果は、

「……暑い」

涼しくなっではいなかった。

いや、幾分かは涼しくなっているのだろうがそれでも暑い。

「……冥界を後にするタイミングを間違えたかな」

龍也はそう呟いて溜息を一つ吐く。

こんな事なら冥界の探索をしていれば良かったと思ったがもう遅い。

やっぱり暑かったから冥界に戻る……何て言うのは幾らなんでも格好悪すぎる。

この暑さを乗り切る為に人魂を捕まえて瓶詰めにし様かと考えたが、それも直ぐに無理だと悟る。

既に霊夢と魔理沙が人魂を瓶詰めに行っていると妖夢が言っていたので、人魂に関しては妖夢の目が光っているだろう。

流石に人魂を瓶詰めしに冥界の入り口付近に行って妖夢と遭遇でも様ものなら幾ら何でもばつが悪い。

この暑さでも動き回る分には問題ないが、それでももう少し涼しくなってから動き回りたいと言つのが龍也の心情だ。

何処か冥界以外で涼しい場所がないかと龍也は頭を回転させる。

それから少しすると、

「……………ああ」

ある場所を思い付く。

それは自分の家がある無名の丘の洞窟だ。

あそこなら涼しい事間違いないであろう。

思い立った何とやら。

龍也は空中に上がり、無名の丘へ向った。

「ふっ」と

無名の丘に辿り着いた龍也は地面に降下し、歩いて洞窟を目指す。

「この鈴蘭も相変わらずだな」

そう呟き、鈴蘭畑を見ながら龍也は足を進めて行く。

それから少しすると、

「あ、龍也」

龍也はそう声を掛けられた。

声を掛けられた龍也は一旦立ち止まり、声を掛けられた方へ顔を向ける。

龍也に声を掛けて来たのは、

「メディスン」

メディスンであった。

「その……元気……だった？」

少し小さな声であったがその発言を聞き取れた龍也は、

「ああ、元気だよ」

笑顔でそう返した。

「メディスンは？」

「私は……すーさんが居れば何時でも元気よ」

そう言って、メディスは胸を張る。

「鈴蘭があればずっと元気って言うのも凄いな」

「龍也はそうじゃないの？」

メディスは首を傾げてそう尋ねる。

「俺は鈴蘭があれば元気って事はないな。もう少し涼しければ俺も十二分に元気でいられるんだけどな」

「ふーん。私はすーさんが居れば暑くても寒くても元気だけだな…
…あ、そうだ!!」

メデイスンはそう言いながら何かを思い出した顔になる。

「私ね、毒の使い方が上手くなったの」

「毒の使い方？」

「うん、見て見て」

メデイスンはそう言いながら掌から濃い紫色の煙を出し、

「毒を圧縮して出せる様にしたの」

そう言っつて自慢気な表情をする。

「後は強い風が吹いても毒が消えなければ完璧ね」

そう言いながら、メデイスンは毒を消滅させる。

「何気に恐ろしい事を言うのな、お前」

龍也はそう言いながら口元を引く付かせる。

「ねえねえ、龍也」

「ん？」

「龍也つてさ、幻想郷中を旅して回っているんだよね？」

「ああ」

龍也がそう言っただけで肯定すると、

「ならば、龍也がどんな所を見て回ったか教えてよ」

メディスンはそんな事を言い出す。

「んー……」

龍也は少し考え込むと、

「だめ？」

メディスンは上目遣いでそう尋ねる。

龍也としてはさっさと洞窟に戻って涼みたいところである。

だが、メディスンと会話する事はあれど、長時間会話する事はあまりない。

そして今回は何故か結構長い間会話をしている。

このままメディスンと長時間会話するのも良いかと龍也は思い、

「いいぜ、話してやると」

自分が旅して見た事などをこの炎天下の中でメディスンに話す事にした。

「あー……暑かった」

メディスンとの話が終わり、洞窟の中に入った龍也は関口一番そう呟いた。

メディスンとの会話は思った以上に長く続き、一番暑くなる時間帯まで続いた。

会話が終わった後、メディスンは機嫌が良さそうな顔で鈴蘭畑の奥へ向ったが、疲労の色は見られなかった。

どうやら、鈴蘭があれば元気と言っ言葉に嘘は無い様だ。

それを羨ましく思いながらメディスンの後姿を見送り、龍也は自分の住処である洞窟に向った。

そしてポストに溜まりまくっていた新聞を持って洞窟の中に入って現在に至ると言う訳である。

「しかし、思ってた以上に新聞が溜まってたな」

龍也はそう言いながら大量の新聞を机の上に置き、ランプを左手で取って右手の掌から生み出している炎を消し、指先から生み出してランプに火を入れる。

ランプに火が着くと、龍也は生み出している炎を消して力を消す。

すると、龍也の瞳の色が紅から黒に戻る。

その後、机の上にある大量の新聞、”文々。新聞”に目を向け、

「ま、暇潰しにはなるから丁度良いか」

そう漏らし、奥の方に張ってあるお札に近付く。

そしてお札に手を付けて霊力を供給した後、ダンボールの中を除きこむ。

中には酒と保存食が入っていた。

因みに酒は人里、保存食は香霖堂で買った物だ。

「んー……この量から見るとまだ結構持ちそうだな」

そう呟きながら、龍也は保存食を取り出す。

「ま、今度帰って来る時には霖之助さん所で買ってから帰る事にするか」

龍也はそう呟き、保存食を食べながら新聞を読み始めた。

「んー……少しはましになったな」

洞窟の中で過ごして幾日か過ぎた後、日が上る少し前に無名の丘を後にし、どこかにある草原を歩きながら龍也はそう呟く。

本音を言えばもう少し涼しくなるまで待っていたかったが、早く外に出て動き回りたいと言う欲求が勝った様だ。

「ま、これ位の暑さならダレる事もないだろ」

龍也はそう言いながら足を進めて行く。

それから暫らくすると、

「ん？」

足に何かが当たった感触を覚える。

何だろうと思いながら龍也は視線を足元に向ける。

龍也に目に映った物は、

「……本？」

古い本であった。

何でこんな所にも思いながら龍也はその本を拾う。

見た感じは古いが、作り自体は普通の本である。

どんな事が書かれているんだろうと思いながら龍也は本を開くが、

「……何処の国の字だ、これ？」

読めなかった。

本に書かれている文字は龍也が見た事の無い文字で書かれていた。

どう頑張っても読めそうにない。

紅魔館にでも行って辞書を片手に読み解いてみようか。

龍也がそんな事を考えていると、

「あれ、龍也じゃないか」

上空から自身の名を呼ぶ声が聞こえて来た。

それに反応して龍也が顔を上に向けると、

「よっ」

箒に跨っている魔理沙の姿があった。

魔理沙がそう挨拶をすると降下して地面に着地し、

「こんな所でブーツと突っ立ってて何してたんだ？」

そう尋ねる。

「ああ、こんな本を拾ってな」

そう言いながら龍也が拾った本を見せると、魔理沙は驚愕の表情を浮かべる。

「ん？　どうかしたのか？」

「そ………それ、かなり高位の魔導書じゃないのか!？」

「え、そうなのか？」

そう言いながら龍也は手に持っている本を見る。

魔理沙にそう言われて見れば、高位の魔導書の様な気がする。

気がするだけだが。

「な、なあ!!」

「ん？」

「その本を私に貸してくれないか!？」

突如、魔理沙がそんな事を言い出す。

魔理沙の貸してと言う言葉は一生借りると言う事であろうが。

とは言っても、これが魔導書ならば龍也には必要の無い物である。

何せ、龍也には魔法が使えないのだから。

序に言えば魔力が欠片も無い。

魔導書何て言う物を龍也が持っていてても宝の持ち腐れだろう。

それならば魔理沙に上げた方が有効活用してくれるだろう。

そう思い、この魔導書を魔理沙に上げる旨を龍也が伝えようとする
と、

「待ちなさい!！」

そんな声と共にアリスが現れた。

「アリス」

龍也と魔理沙の二人は少し驚いた表情をしながらアリスの方を見る。

「おいおい、盗み聞きとは趣味が悪いぜ」

「失礼ね、盗み聞き何てしてないわよ。それに聞かれたくない話ならもう少し声の

トーンを落としなさい」

アリスは少し呆れた表情でそう言い、

「それはそうと、こんにちは。龍也、魔理沙」

そう挨拶をする。

「ああ、こんにちは」

龍也も挨拶を返し、

「何処かへ向う途中だったのか？」

そう尋ねる。

「帰りよ。人里で人形作成に使う素材を買った帰り」

そう言っアリスは買い物籠を龍也に見せ、

「それはそれとして、その魔導書は私に譲ってくれないかしら？

勿論、それ相応の

お礼はするわよ」

そんな事を言い出す。

「おいおい、横入りはするいぜ」

魔導書を譲ってくれと発言したアリスに対し、魔理沙はそう返す。

「あら、貴女よりも私の方が間違いなく有効活用出来るわよ。私は貴女と違って人形を操る事以外にもそれなりに出来るしね」

「何をー！！ 私だって光と熱以外の魔法を使う事だって出来るぜ
！！」

そして言い合いを始める魔理沙とアリス。

そんな二人の様子を見て、何やら雲行きが怪しくなってきたのを龍也は感じた。

どうしたものかと龍也が考えていると、

「それなら、その魔導書は私に譲ってくれないかしら？」

龍也の背後からそんな声が聞こえて来た。

龍也は驚いた表情をしながら後ろに振り返る。

それに釣られる様にして魔理沙、アリスも龍也と同じ方向に顔を向ける。

龍也に声を掛けて来た人物は、

「パチユリー」

パチュリーであつた。

「珍しいな、お前が宴会以外で紅魔館から出て来る何て」

「レミイも小悪魔も偶には外に出たらどうだって煩くてね。落ち着いて本も読めやしない」

そう言つて、パチュリーは疲れた表情をしながら溜息を吐き、

「でもま、偶には外出をするものね。お陰でかなり高位の魔導書を見つける事が出来たし」

そう呟く。

「おいおい、それは龍也が私に貸してくれる事になつてるんだぜ」

「一寸、まだ貴女に譲るだなんて決まつてないでしょ」

その発言を皮切りに再び魔理沙とアリスが言い合いを始めようとするが、

「少なくとも、パワー馬鹿の魔法使いと人形一辺倒の魔法使いよりは私の方が有効活用出来るわね。私は全ての属性、全ての系統の魔法をオールマイティに扱えるし」

パチュリーのその発言にイラツと来たのか、魔理沙とアリスは矛先

をパチュリーに向け

「何だ、一芸特化と言う言葉を知らないのか」

「あら、紅魔館の魔女は器用貧乏と言う言葉を知らないのね」

そう挑発する。

その挑発を合図にしたかの様に魔理沙、アリス、パチュリーの三人が一触即発の雰囲気になる。

これはどうしたものと龍也が悩みながら数歩後ろに下がると、三人は一斉に龍也の方を見て、

「それは私に貸してくれるんだよね？」

「それは私に譲ってくれるのよね？」

「それは私に譲ってくれるわよね？」

龍也に近付きながらそう尋ねる。

「いや……その……」

そう言いながら龍也は一步下がると三人は一步前が出る。

三人の表情を見ながらどうしたものかと頭を回転させると同時に龍也は思う。

誰に渡しても一波乱あるぞと。

何とか場を上手く収める方法がないかと龍也は考えたが、良い考えが浮かばなかった。

なので、

「あつー!!」

「「「えっ!?!」」」

三人の注意を逸らし、自身の力を変える。

白虎の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が黒から翠へと変化する。

同時に龍也は空中に躍り出て、その場から離れた。

それから少し時間が経つと龍也は後ろを振り返る。

「げ……」

龍也の目には自分を追って来ている魔理沙、アリス、パチュリーの三人が目に映る。

まあ、当然と言えば当然である。

龍也としては、自分が居なくなっている間に頭が冷えてくれれば良

かったのだがそう
上手くはいかなかった様だ。

「てか、ジワジワと距離が縮まって来てないか？」

後ろから追って来る三人を見ながら龍也はそう呟く。

このまま追い付かれたらどうなるか分かったものではない。

力を解放し、仮面を付けて一気に振り切ろう。

龍也がそう決心すると、

「これはこれは龍也さん」

龍也と並走するかの様にして、文が龍也の隣に現れる。

「文……」

龍也は驚いた表情をしながら文に顔を向ける。

すると、

「それにしても三人の女性に追っ掛けられるとは……モテモテですね!!! よっ!!!」

色男!!! 次の”文々。新聞”の題名は『幻想郷の旅人、龍也さんが三人の女性に求婚
される!!!』で決まりですね!!!」

文はそんな事を言い出す。

「ちげーよ」

龍也がそう否定すると、

「あや、それでは何故あのお三方に追っ掛けられているのですか？」

文はそう尋ねる。

「ああ、実は……」

龍也が事情を説明すると、

「何だ、そんな事情ですか。つまらないですね」

そう言っつて溜息を吐く。

「お前なあ……」

「やっぱり、色恋沙汰があった方が面白いと思うのですよ」

「そう言っつものなのか？」

「そう言っつものです。どうです、ここらで誰かと色恋を起こしてみ
ては？ インパクト

の大きさで言えば人間と妖怪が恋仲になっつたつて言うのが一番だと思
いますし……あ、

そう言えば龍也さんは椀と仲が良かったですよ。何なら椀辺りと
……」

文がそんな事を言った瞬間、

「ん？」

龍也は何かを感じて後ろへ振り返ると、

「げっ！！」

大きな光が迫って来ているのが見えた。

おそらく、魔理沙のマスタースパークであろう。

そう思った龍也は直ぐに射線上から離れる。

そんな龍也の行動を不審に思った文は龍也が見た方へ顔を向けと、

「あ……」

文の目の前に大きな光が迫っていた。

慌ててその射線上から文は逃れようとしたが時既に遅く、文はその光に飲み込まれて

しまった。

因みに龍也も完全に回避が出来ず、魔理沙のマスタースパークに掠つて地面に墜落してしまった。

「いてててて……」

龍也はそう声を漏らしながら頭を押さえて上半身を起こす。

先程掠ったマスタースパークの感触から、あれはスペルカードを用いて放ったものだと龍也は思った。

でなければ、掠ったとしてももう少しダメージを受けていた筈である。

「ま、スペルカードでの一撃の様だったし、飲み込まれた文も無事

だろう」

そう言いながら頭を振って顔を上げると、

「あ……」

魔理沙、アリス、パチュリーの三人が直ぐ近くに居た。

これでは再び距離を取る事は出来ない。

先程と同じ手はもう通用しないであろう。

何か手はないか。

龍也が頭をフル回転させて考えると、

「……………弾幕ごっこ」

そんな言葉が口から漏れた。

龍也のその言葉が聞こえたのか、三人の顔色が変わる。

これはチャンスだと龍也は思い、

「弾幕ごっこで勝った奴にこの本をやるよ」

そう口にする。

すると、魔理沙、アリス、パチュリーの三人は空中に躍り出て弾幕ごっこを始めた。

その様子を見ながら、

「……最初っからこう言えばよかった」

龍也はポツリとそう呟いた。

一周年記念 その1（前書き）

これはIFストーリーです。

本編とは基本的に関係ありません。

時系列は不明です。

他の一周年記念とも関係ありません。

以上の事を踏まえ、興味のある方はそのままお進みください。

一周年記念 その1

一人の男と一人の女が楽しそうにしている。

じゃれ合ったり、ふざけ合ったりしながら。

それから暫らくすると女は立ち上がり、走り出す。

楽しそうな顔をしながら。

女が走り出すのを見た男は立ち上がり、女を追う様にして走り出す。

そのまま二人は楽しそうにしながら追いかけてこを始める。

少しすると男は女に追いつき、女を捕まえる。

捕まえられた女は嬉しそうな顔をし、目を瞑る。

それを見た男は、自分の顔を女の顔に近づけながら目を瞑っていく。

そして……………

「はっ！！」

少女は飛び起き、周囲を見渡す。

目に映ったのは自分の部屋。

その事から、少女はここは自分の部屋だと認識する。

その後、視線を落とすと自分の机と作り掛けの人形が目に入る。

作り掛けの人形を見て、自分は人形を作っている間に寝てしまったんだなと少女は考える。

そして、

「……………何て夢をみてるんだろ、私」

少女……アリス・マーガトロイドはそう呟いて溜息を一つ吐いた。

朝、目が覚めた後、アリスは風呂に入って朝食を食べ、再び人形を作っていた机に移動し、椅子に腰掛けてさっき見ていた夢を考える。

今朝、見た夢の中に出て来た男と女。

女の方はアリス。

そして男の方は

「龍也……よね」

四神龍也。

アリスが一番親しいと言える異性である。

「でも……何で……」

確かに、龍也はアリスにとって一番親しい異性である。

自分の研究の事を相談したら色々アドバイスをくれた。

アドバイスと言っても外の世界のロボットアニメと言うもの話が
多かったが。

だが、そのお陰で劇的とは言えないが完全自立人形の研究が少しは
進んだ気がする。

他にも巨大人形……ゴリアテ人形と言う物を作ったが、それには龍
也のアドバイスが
ふんだんに盛り込まれている。

そのお陰でこの人形は相当強い。

そう言った事もあり、自分は龍也には友情以外にも恩義などを感じ
ていたりはする。

それだけだった筈である。

だが、今朝見た夢。

あれが自分の願望であつたとしたら。

それ即ち、

「私は龍也とそう言う関係になる事を望んでいる……」

アリスは其処まで考え、そう呟くのと同時に顔を真っ赤にする。

龍也と恋人関係になる。

その事を意識するとアリスの心臓の鼓動は強くなり、思考が上手く纏まらなくなる。

このままではマズイとアリスは思い、

「落ち着け……落ち着くのよ、私」

そう呟きながら深く深呼吸をする。

そのお陰でアリスは幾分か落ち着けた。

「そもそも、私は龍也の事を……」

アリスは其処まで言いかけて言葉を詰まらせる。

其処から先の言葉が出て来なかつたからだ。

何て言えばいいか分からない、モヤモヤしたもの。

このモヤモヤが何なのかを確かめる為に、アリスは龍也の事を考える事にした。

初めて出会った時の事。

龍也が戦っている姿を見た時の事。

外の世界のロボットアニメの話をしている時の事。

修行に付き合った時の事。

他愛ない会話をした時の事。

外の世界の服の事を教えて貰った時の事。

それから.....

「はっ!!」

アリスは窓を強く叩く音で意識を取り戻す。

どうやら、何時の間にか雨が降って来ていた様だ。

更には強い風も吹いている。

どうやら、外の天気の変化に気付かない程に龍也の事を考えていた様だ。

「はぁ……」

自分の事ながらその事にアリスは呆れ、視線を机に落とすと、

「あ……」

ある事に気付く。

それは完成された人形だ。

作り掛けの人形を無意識のうちに完成させていたのだろう。

それだけならいい。

だが、アリスが今回作った人形は何時もの女の子タイプの人形ではない。

それとは真逆の男の子タイプ。

しかもその造形は、

「龍也……………よね？」

四神龍也であった。

ほぼ無意識の状態で作ったにも係わらず、完成度はかなり高い。

流石は七色の人形遣いと言ったところか。

「でも、無意識での状態で作ったのなら何時もと同じタイプの人形を……………いえ、龍也の事を考えていたから龍也そっくりの人形を作ったのかしら……………」

そう呟きながらアリスはじっくりと今作った龍也の人形を観察する。

見れば見る程にこの人形は龍也そっくりである。

一通り見終わると、アリスはこの人形をどうすべきか考えていると、この家のドアを

ノックする音が聞こえて来た。

「ひゃう!?!」

突然聞こえて来たノックの音に驚いてアリスはそんな声を上げてしまふ。

それと同時に、アリスの心臓の鼓動が強くなる。

若しかしたら龍也が尋ねて来たのではないかと言う考えが頭を過ぎったからだ。

とは言ってもさっさと来客の応対に向わなければならない。

アリスは深呼吸をし、気持ちを落ち着かせてから玄関へと向う。

そしてドアを開けると、

「よう」

アリスの予想通り、龍也が居た。

その事でアリスの心臓は更に高鳴るが、

「あら、こんな時間にどうしたの?」

そんな今の状態を感じさせない表情でアリスはそう尋ねる。

「いや、さっき雨が降ってきたからさ。出来れば雨宿りをさせて欲しいんだが……」

「成程……」

アリスは龍也の姿を見て納得したと言う表情になる。

龍也はかなり濡れた状態だ。

どうやら結構な時間、雨に打たれていた様だ。

「ちょっと待ってなさい。今、タオルを持ってきて上げるから」

アリスはそう言い残して居間へと向う。

居間に着くと、箆笥の中からタオルを出すのと同時にアリスは二体の人形を操る。

まず一体に風呂場の準備を。

もう一体には先程作った龍也の人形を隠す作業を。

この二体の人形を操りながら、

「おまたせ」

アリスはタオルを持って居間に戻る。

「上がる前にこれで拭いてね」

そう言いながらアリスはタオルを龍也に差し出す。

「ああ」

龍也がそう言いながらタオルを受け取って体を拭き始める。
体のある程度拭き終わると、

「ありがとう」

龍也はそう礼を言う。

「別に構わないわ」

アリスはそう返し、

「上がって。今、お風呂の準備をしてるから」

そう言う。

「ありがとう」

龍也が再び礼を言うと、二人は居間へ向って歩き出す。

居間に着くと、アリスは箆笥の中から男物の服を取り出し、

「はい」

龍也に差し出す。

これは以前、龍也が修行の為にアリスの家に泊まり込んだ時に作ったものだ。

龍也がアリスの家に数日以上泊まる時にはこの服を使わせて貰っている。

アリスから差し出された服を龍也が受け取ると、

「今着ている服とさっき使ったタオルは洗濯籠の中に入れて置いて後で私が洗濯して置くから」

「悪いな」

「別にいいわよ、何時もの事ですよ」

アリスはそう返しながら風呂場に向わせた人形を戻ってこさせる。

「もうお風呂の準備は終わったからゆっくり温まってきたさい。でないと風邪を引くわよ」

「分かった、そうさせて貰うよ」

そう言って、龍也は風呂場へと向う。

龍也の姿が見えなくなると、

「はあー……」

アリスは大きく息を吐いて座り込み、

「平常を装うのって大変なのね……」

そう漏らす。

今までずっと心臓が強い鼓動を発していたのだ。

よくここまで普通に話せ、他の事を冷静に対処出来たものだ。

アリスは自分で自分の事を褒めてやりたい気分であった。

それから少しの間深呼吸を繰り返し、気分を落ち着かせた後、

「さて、夕食でも作り始めようかしら」

そう言いながらアリスは立ち上がり、台所へ向う。

夕飯を作り始めて少しすると、

「あれ？」

アリスは違和感を覚える。

何時もと何かが違う。

そう思いながら視線を落とすと、

「……ああ」

答えが出る。

何時もは人形を操って料理を作っているのに今は自分の手で直接料理を作っている。

だから違和感を覚えたのだ。

「でも、何で……」

今日に限って直接自分の手で料理を作ろうとしたのか。

「いや、でも……」

そう呟き、また一つある事を思い出す。

それは、龍也が来る時は自分の手で料理を作る様になっていた事を。

「何時からそんな風に……」

アリスはそんな事を考えながら料理を作り続けた。

深夜。

二人が夕食を食べ終え、龍也が眠りに就いてから暫らく。

アリスは龍也が寝ている一室の前に来ていた。

龍也がアリスの家に泊まる際、何時も使っている部屋だ。

何故、龍也が寝ている部屋の前にいるのか。

答えは一つ。

自分の中にある気持ちの答えを見つける為。

龍也の顔を見ていればその答えが見つかると思ったからだ。

因みに何故龍也が寝静まった時間帯かと言うと、龍也に『何、俺の事をジッと見て

るんだ？』と問われたら返す答えが見つからなかったからだ。

「……よし」

アリスは小さな声で気合を入れ、ドアをそーっと開けて中に入る。

そして足音を立てない様に龍也が寝ているベットへと近付き、龍也の顔を覗き込む。

幸せそうな顔をして眠っている。

そんな状態の龍也をアリスは観察する。

それから数十分程の時間が流れた後、

「そっか……」

アリスは龍也の寝顔を見詰めたまま、

「私、何時の間にか龍也の事を好きになってたんだ」

そう呟き、理解した。

自分の作った料理を美味しそうに食べたり、自分の体の事を心配してくれたり、自分の作った人形を褒めてくれたり、自分の相談をやな顔一つせずに聞いてアドバイスをくれたり、何処か抜けてたり、偶に男らしい顔を見せたり、無駄に自信があり、優しい。

そんな彼を何時の間にか好きになっていた事を。

それと同時に、龍也が来た時は自分の手で料理を作る理由も理解し

た。

単純に、龍也に自分の手料理を食べて欲しかったからだ。

自分の中にある気持ちに答えを見つけたアリスは、そっと部屋から退出した。

翌日。

朝になり、朝食を二人が食べ終え、雑談をした後、

「それじゃ、そろそろ行くよ」

龍也はそう言っつて椅子から立ち上がる。

「あ……」

立ち上がった龍也に対し、アリスは小さな声を上げる。

「ん？　どうかしたか？」

アリスの声が聞こえたのか、龍也はそう言いながらアリスの方へ顔を向ける。

「あ……えと……その……」

龍也の問いに、アリスは上手く言葉が発する事が出来なでいた。

自分の龍也に対する想いを理解したとは言え、それを龍也に伝えるとなると相当の勇気がいる。

また今度にしようか。

アリスは一瞬そんな事を考えるが、直ぐにある事を思い出す。

龍也は幻想郷中を旅して回っていると言つ事を。

それ即ち、次は何時会えるか分からないと言つ事。

今、ここで想いを伝えなければ、この想いを抱えたまま過ごす事になる。

どんな結果になろうとも今、想いを伝えなければ必ず後悔する。

アリスはそう思い、深呼吸をして、

「……………好き」

そう言った。

が、声が小さくて聞き取れなかったのか、

「えっと…………もう一回言ってくれるか？」

龍也はそう聞き返す。

どうやら土壇場で尻込みし、上手く声が出なかった様だ。

ならばと、アリスは大きく息を吸い込み、拳を握り、

「私は！！ 龍也！！ 貴方が好きなの！！ 愛しているの！！

一人の

女として！！！！」

顔を赤くしながら大声でそう叫んだ。

アリスの叫びを聞き、龍也は一瞬何を言われた分からなかったが直ぐに理解する。

自分はアリスに告白されたと言う事を。

何で自分なのか、何故今、と言った疑問が浮かんだがアリスの表情を見れば、今自分に

伝えた想いは嘘偽り無い本当の気持ちだと言うのが分かる。

ならば、キチンと自分もその想いに対する答えを返さねばなるまい。

龍也はそう思い、自分がアリスに抱いている感情に付いて考える。

好きか嫌いかと問われれば好きと言う答えが出る。

そもそも、嫌っていたらアリスの家に来たりはしない。

ならば、愛しているかと問われると首を捻ってしまう。

別にアリスの事を愛していないと言う訳ではなく、愛情と言うのがよく解らないからだ。

龍也がこの世に生を受けてから、実の親から受けたのが愛情ではなくさつさと死ねと

言う念だけだったと言うのが一番の原因であろう。

尤も、龍也が実の両親に抱いている感情は、実の両親が自分に愛情何て持っていないと

知った幼少期の頃に無関心になり、それからただの遺伝子提供者としか思っていない

ので変にぐれる事はなかった。

それでも、荒んでいた時期もあったが。

兎も角、愛情と言ったものがどう言つものか解らないと言つても、それを理由に答えを

先延ばしにするのは勇気を振り絞つて告白したアリスに失礼だ。

ならば、自分も今抱いている想いをアリス伝えるべきだ。

龍也はそう考え、深呼吸をし、

「アリス……」

アリスの名を呟く。

「……何？」

アリスは自分の心臓が物凄い鼓動を発しているのを感じながらそう返す。

「……俺もお前の事は好きだ。だけど、お前に抱いている好きって言う感情が愛情か

どうかなのが解らない。だから……」

「だから……？」

「だから……お前に抱いている感情が愛情かどうかが解るまで……この家で暮らしてもいいか？」

その言葉を聞き、アリスは一瞬ポカンとした表情になる。

が、直ぐに表情を戻し、龍也に近付き、

「いいわ、ここで暮らしても」

そう言いながらアリスは龍也を抱きしめる。

「そして、貴方が頂いてる感情が愛情だって言う事を解らせて上げるわ」

アリスはそう言いながら龍也の顔を見詰め、

「これはその契約」

目を瞑って龍也の唇に自分の唇を押し付けた。

こうして、龍也はアリスの家で暮らす事になった。

その後、この二人の関係が変わったと言う話しが聞こえて来たそう
な。

一周年記念 その2（前書き）

これはIFストーリーです。

本編とは基本的に関係ありません。

時系列は不明です。

他の一周年記念とも関係ありません。

以上の事を踏まえ、興味のある方はそのままお進みください。

一周年記念 その2

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜は最近悩みがある。

何を悩んでいるのか。

それは紅魔館によく遊びに来る珍しい人間の一人、四神龍也の事だ。

どうも最近、彼に抱く感情が咲夜自身でもよく解らないものになっているのだ。

龍也は咲夜の能力の事を知っても態度を変えたり怯えたりしなかった人間の一人だ。

他にも霊夢や魔理沙と言った人間も居る。

その事に咲夜は少し呆れながらも内心嬉しく思っていた。

それ故に、彼等に対する対応などが咲夜自身が気付かないうちに甘くなっている。

他にも友情などを感じていたりもする。

だが、その中で龍也に抱く感情だけが変化している様なのだ。

嫌いになったのかと言われればそれは違つと咲夜は断言出来る。

嫌悪感と言つたものを感じないからだ。

幾ら悩んでもこの感情の答えがでない。

その感情の正体を探ろうとすればする程、咲夜の頭の中は龍也で一杯になる。

おまけに変に心臓が高鳴ったりする時もある。

今は頭の中の大半を龍也が支配していても業務に支障はないしミスもない。

しかし、これから先もそうだとは限らない。

他の事に気を取られてミスをする様では完璧瀟洒なメイドの名折れだ。

これは早急に何とかしなければならぬ。

そう考えた咲夜は知識人として名高い魔法使い、紅魔館の客人であり、自分の主であるレミリア・スカーレットの親友、パチュリー・ノーレッジに助言を求める事にした。

そして、パチュリーの所へ紅茶と昼食を運んだ序にその事を相談すると、

「それは恋ね」

パチュリーからそんな答えが返って来る。

「恋……ですか？」

恋と返された事に咲夜は驚くが、表情を崩さずにそう尋ね返す。

「そう、恋よ。特定の異性にのみ他の同姓とは抱く感情が異なり、それに嫌悪感が無い
と言えばそうなるわね。まあ、親愛の情と言う線も考えられたけど、
貴女の口振りから
それは無いと判断したわ」

そう言つて、パチユリーは紅茶を飲む。

「少し以外だったけど……まあ、龍也は貴女にとって一番親しい異性だから友情が愛情
に変化しても何の不思議もないか」

「そう……なのでしょうか？」

咲夜が発した疑問の声は自分が龍也に恋愛感情を持っている事なのか。

それとも友情が愛情に変化する事なのか。

どちらなのか咲夜にもパチユリーにも分からなかった。

なので、

「男女間の中で友情が愛情に変化するのによくある話よ。男女間で友情が成立しづらい
という話もあるしね。まあ、友情が愛情に変化するって言うのは少し語弊があるわね。」

正しく言うのであれば友情と愛情を両方持ち、その比率が愛情に大きく傾いていると言
うべきかしらね。ま、先程言った様に友情が愛情の変化すると言
事も勿論あるし、男
女間での友情が変化せずにそのまま友情が成立すると言つのもある
わ」

「そうなのですか？」

「そうなのよ。で、咲夜」

「何でしょうか？」

「一寸、龍也と龍也以外の異性を頭に思い浮かべてみて」

パチュリーは両方答える事にした。

「龍也と龍也以外の異性をですか？」

「ええ、やってみて」

「はあ……」

咲夜は言われるがままに龍也と龍也以外の男性を頭の中に思い浮か
べる。

最初に思い浮かべたのは龍也。

その次に思い浮かべたのは人里で買い物をした時に会う男性達を。

最後に同じ様に買い物に行く香霖堂の店主を。

「通り思い浮かべると、

「どう？ 龍也とそれ以外の男性を思い浮かべて何か違うところはあったかしら？」

「そうですね……龍也の時はこの辺が変にドキドキしますね」

咲夜はそう言いながら自信の胸に手を当てる。

「なら決まりね。それが恋よ」

「これが……恋？」

そう言って、咲夜はあまり実感がなさそうな顔をする。

「まあ、そう言われてもあまり実感が湧かないわよね。時間は有る事だし、ゆくつりとその感情と向き合いなさい」

そう言ってパチュリーは一息吐き、

「話は変わるけど、龍也に想いを告げるのなら解り易く、ストレートに伝えなければダメよ」

そう言う。

「想いを告げるって……少し話しが飛躍していませんか？」

「そうかもしれないけど、覚えて置いて損はないわよ」

「損はないですか？」

「ええ。龍也に告白する時になってどう告白していいかわからない
つてなるよりはね」

「やはり話が飛躍し過ぎている様な気もしますが……それはそうと、
解り易く

ストレートには？」

「どうも龍也つて恋愛感情に疎いみたいなのよね」

パチュリーは下唇に人差し指を当てながらそう言い、

「でも、恋愛に全く興味がない……つて訳でもないみたいなのよね。
ただ愛情と言う

ものが理解出来ない……いえ、解らないと言った方が正しいの
かしら。そんな感
じなのよね、龍也は」

自分の推論を述べる。

「よくお分かりになられてますね」

少し驚いた風に咲夜がそう尋ねると、

「魔法使いたる者、観察眼はないと困りものだからね」

パチュリーはそう返す。

「それはそうと、今日はこんな喋っても咳込まなかったし良い日ね」
そう言つてパチュリーは紅茶を飲み、

「もう一杯淹れてくれるかしら？」

咲夜に空になったカップに紅茶を淹れる様に頼む。

「畏まりました」

そう応え、咲夜は空になったカップに紅茶を注ぐ。

「そう言えば、パチュリー様は恋愛経験が御有りなのですか？」

咲夜がふと思った事を口にする、パチュリーは一瞬動きが止まっ
たが直ぐに再起動
して、

「……相変わらず良い味ね、咲夜」

紅茶を飲んでそう口にした。

咲夜がパチユリーに龍也の相談をしてから幾日かが過ぎた。

その間、パチユリーに言われた通りに龍也へ抱いている感情と向き合った。

その結果、龍也に抱いている感情が霊夢や魔理沙と言った同姓の友人に抱いている感情とは別物であると言う事を理解した。

それからと言うもの咲夜の心の中の大半が龍也の事で支配され、龍也の事をよく考える様になっていた。

「これが恋や愛と言ったものなのかしら……」

そんな事を呟きながら紅魔館の廊下を歩いていると、

「とと」

掃除すべき部屋の前を通り過ぎてしまう。

少し慌て気味に部屋の前に戻り、部屋の中に入って掃除を始める。

掃除をしながら咲夜は考える。

これが恋や愛だと言うのであれば、自分は龍也の何処に惹かれたの
だろうか。

立ち振る舞い、性格、雰囲気などが思いついたが、一番の原因は自
分の能力を知っても
態度を変えたり怖がったりしなかった点であろう。

それが原因で少しずつ龍也に惹かれていき、気付けば、

「龍也の事を好きになっていた……か」

龍也の事を好きになっていた。

その事を呟くのと同時に咲夜は自分の頬が赤く染まった事を認識し
た。

同時に心臓の鼓動が強くなる。

咲夜は何とか気分を落ち着け様と深呼吸をする。

何度か深呼吸をすると気分が落ち着いたので咲夜は一息吐き、

「そっか……これが好きと言う感情……」

そう呟いた。

自分の気持ちをちゃんと理解した後周囲を見ると、

「あ……」

掃除が全然進んでいない事に気付く。

そして、咲夜は少し急ぎ気味に部屋の掃除を始めた。

幾つもの部屋の掃除が終わった後、洗濯物を運びながら廊下を歩いていると、

「あら？」

外から少し騒がしい音が聞こえて来た。

位置的には門の辺りであろうか。

何の音だろうと思いながら咲夜は窓から門を見る。

門の方には、

「龍也……」

龍也の姿があった。

龍也の姿を認識すると咲夜の心臓が強く高鳴るが、何とか気分が高揚するのを押さえる。

また遊びに来たのだろうかと思っていると、

「あ……」

美鈴と組み手をしている様子が目に映った。

二人の組み手が終る頃にもタオルと飲み物でも持って行こうと思
い、窓から目を離し
て作業を再開した。

「お疲れ様」

龍也と美鈴の組み手が終わった頃合を見計らって咲夜はタオルと飲
み物を持って門の前
に現れる。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

二人はそう礼を言っただけで飲み物とタオルを咲夜から受け取り、汗を拭き始める。

そして龍也が汗を拭い終わったタイミングを見計らって、

「貴方はこれから図書館に行くのかしら？」

咲夜は龍也にそう尋ねる。

「ああ、その積りだけど」

「そう。図書館までの案内は必要かしら？」

「大丈夫だ、もう迷わないで行けるよ」

「でも気をつけてね。配置自体は変わってないけど、最近お嬢様の意向で空間を弄って

また広くなったから。一度迷ったら大変よ」

「また広くなったのか……」

そう言いながら龍也は少しゲンナリした表情になる。

「あ、そうそう。浴場は使う？」

「そうだな……汗も掻いたし使わせて貰おうかな」

「そう。美鈴はどうする？」

「そうですね……私は夜になったら入らせて頂きますね」

「分かったわ。龍也は何時入る？」

「そうだな……本読みたいし二、三時間位したら入れる様にしてくれるか」

「分かったわ。ならその時間帯に入れる様に準備して置くわね」

「ああ……それとご馳走さん」

そう言つて龍也はタオルと空になったコップを咲夜に差し出す。

「お粗末様」

そう言つて咲夜は龍也から差し出されたものを受け取る。

「美鈴は……まだの様ね」

そう言いながら咲夜は美鈴の方に顔を向ける。

「じゃ、俺は先に中に入れて貰うな」

「分かったわ。迷わない様にね」

「分かってるって」

そうやって龍也は紅魔館の中へと入って行く。

その後姿を見送った後、

「時間を掛けてしまった様ですみません」

美鈴はそう謝りながら咲夜にタオルと空になったコップを手渡す。

「別に構わないわ。今日はそれ程忙しいって訳でもないし」

そう言いながら咲夜は差し出されたものを受け取り

「それに、キチンと起きてたみたいだし」

そう言うと、

「あははは……」

美鈴は苦笑いを浮かべながら顔を逸らす。

「貴女まさか龍也が来るまで寝てた何て事は……」

咲夜がジト目でそう尋ねると、

「ね、寝てませ寝てません!」

美鈴は少し慌てた様子でそう否定する。

「……まあいいわ」

咲夜はそう言って息を一つ吐く。

「それじゃ、私はこれを片付けて洗濯と浴場の準備をしなければならぬから中に戻るわよ」

咲夜はそう言って美鈴に背を向けて歩き出そうとするが、

「あ、咲夜さん」

それを美鈴が呼び止める。

「何？」

そう言いながら咲夜が振り返る。

「少し聞きたい事があるのですがいいですか？」

「いいわよ」

咲夜がそう応えると、

「今日、龍也さんに告白するんですか？」

美鈴はそんな事を言い出す。

「は、はあ!？」

予想外の発言に咲夜は少々取り乱してしまふ。

「あ、貴女が何でそれを……」

知っているのかと続け様とすると、

「その事でしたら前に図書館に行ってパチュリー様と話した時に咲夜さんは龍也さんに

恋愛感情を持っているって事を教えてくれましたよ」

美鈴が先に情報の出所を教えてくれた。

この分では紅魔館中にその事が知れ渡っているかもしれない。

そう考えた瞬間、咲夜の頬は真っ赤に染まる。

そんな咲夜の様子を見ながら、

「咲夜さんが取り乱す何て珍しいですね。中々新せ……いえ、何でもないです」

からかおうとしたが、咲夜がナイフを取り出したのが見えたので美鈴は口を閉ざした。

「まったく……」

少し不満気な表情をしながら咲夜がナイフを仕舞うと、

「それで、咲夜さん今日龍也さんに告白するんですか？」

美鈴は再びそう尋ねる。

「いや、告白って……その……」

そう言いながら咲夜の声色が小さくなる。

その様子を見ながら、美鈴はそんな状態になる咲夜は初めて見るなと思うのと同時に微笑ましく思った。

そして、

「一応アドバイスですけど、龍也さんに告白するんでしたらかなり積極的やらないと気付いて貰えないと思いますよ」

そんな事を言う。

「……貴女もそんな事が分かるの？」

「龍也さんとは何度も何度も拳を交えたりしてますからね。全部解るって言うのは言い過ぎで自惚れですけど、拳を交えればそれなりの事は解りますよ」

「……ああ、武道家は拳で剣士は刃で語るって言うものね」

「龍也さんは炎の剣とかも使えますから咲夜さんもナイフで語れると思いますが……」

「私も龍也と手合わせしたりする事はあるけど、回数はそんなに多くはないのよね。」

職務中に昼寝が出来る程暇があったりしないし……」

そう言いながら咲夜が美鈴を見ると、

「あ、あははは……」

美鈴は苦笑いを浮かべながら視線を逸らす。

「話がそれだけなら私はもう行くわよ」

そう言いながら咲夜が美鈴に背を向けると、

「告白しても、龍也さんが相手ならきつと良い結果が出せますよ」

美鈴がそんな事を言う。

「はいはい」

咲夜は適当にそう返すが、その頬は真っ赤に染まっていた。

夜中。

咲夜は龍也が使っている部屋の前に来ていた。

周囲の聲に急かされた感はあるが、それでも咲夜は自分の意思でここまで来た。

龍也に自身の想いを告げる為だ。

深呼吸をし、気分を落ち着かせてドアをノックすると、

「誰だ？」

部屋の中からそんな声が返って来る。

「私よ」

「咲夜か、どうした？」

「少し話があるのだけど……いいかしら？」

「ああ、いいぞ」

龍也がそう返すと咲夜はドアを開けて部屋の中に入る。

中に入るとベッドに腰を落ち着かせている龍也の姿が目に入る。

「若しかしてもう寝るところだったのかしら？」

「いや、少し横になっていただけだ」

「そう」

そう言っただけで咲夜は龍也に近づく。

龍也に近づくにつれて自身の心臓の鼓動が強くなっていくのを咲夜は感じた。

咲夜がある程度龍也に近付くと、

「それで、話したのは？」

龍也はそう尋ねる。

「え、ええと……」

言葉を紡ごうとするが、上手く言葉が出て来ない。

だが、ここまで来た以上告白しないとこの先は有り得ない。

咲夜は龍也に伝えるべき言葉を考えながらパチュリーと美鈴が言っていた事を
思い出す。

解り易く、ストレート、積極的と言つ言葉を。

変に着飾つた言葉では龍也に伝わらない可能性がある。

咲夜がそう考えを張り巡らせていると、

「どうした？」

急に黙つた咲夜を不審に思つたのか龍也がそう尋ねる。

その声に反応して咲夜の意識は現実に戻る。

そして深呼吸をし、

「龍也……」

「何だ？」

「貴方が……好き。一人の女として貴方の事が」

自身の想いを告げる。

「……………へ？」

あまりに予想外の咲夜の発言に龍也はそんな声を漏らす。

何の冗談かと龍也は思ったが、咲夜の表情を見れば今発した言葉は嘘偽りない本当の気持ちだと言う事が分かった。

実の両親が龍也に生まれた時から愛情ではなくさつさと死ねと言っ念しか与えなかったと言っ事や幼少期に気付いたせいか、龍也は愛情と言っのがよく解っていない。

だが、それでも咲夜が自身に告げた真剣な想いに対する答えを返さねばなるまい。

そう思い、龍也が言葉を発し様とすると、

「貴方が愛情とか恋愛感情と言っもをあまり理解出来ていないのは知ってるわ」

先に咲夜がそう口にした事で龍也は言葉を詰まらせてしまっ。

「ねえ……」

咲夜はそう声を掛けながら龍也に近付き、体を少し屈めてベッドに腰を落ち着かせている龍也に視線を合わせ、龍也の体を抱きしめる。

突然の事態に龍也は驚くも、咲夜が倒れない様に咲夜の体を抱きしめ返す。

それから少しすると、

「ねえ……私にこう言う事をされるのは嫌？」

咲夜は龍也にそんな事を尋ねる。

「……嫌だったら振り払ってるよ」

咲夜の問いに、龍也はそう返す。

「そうよね、貴方はそう言うタイプよね」

そう言いながら咲夜は体を引いて、再び龍也と見詰め合う体勢になり、

「ねえ、目……瞑ってくれる？」

そう言う。

「ああ」

龍也は言われるがままに目を瞑る。

その数瞬後、龍也は自分の唇に何か柔らかい何かが接触しているのを感じるのと同時に

キスをされたんだと言う事を理解した。

それから少しすると、自分の唇に接触している咲夜の唇が離れていくのを感じて龍也は

目を開く。

目を開いた瞬間、頬を赤らめて上目遣いで自分を見る咲夜の姿が目

に入った。

龍也が口を開こうとすると、

「今のは……嫌……だっ……た？」

不安さと気恥ずかしさが混ざった声色で咲夜がそう尋ねて来る。

それに対し龍也は、

「嫌だったら振り払ってるぞ」

そう返した。

龍也がそう返したのと同時に咲夜は再び龍也に抱きつき、抱き締める。

「お……っ」と

が、少々勢いがあつたせいで龍也はベッドに倒れ込んでしまつ。

体勢としては龍也が下で咲夜が上だ。

そんな体勢の中、龍也は咲夜を抱きしめる。

そして自分は愛情とか恋愛感情は今一つ分らないが、自分が咲夜に抱いている感情の

答えをキチンと出さなければなるまいと言う事を咲夜の温もりを感じながら、今咲夜に

抱いている感情を考える。

咲夜に抱き締められたりキスをされたりしても嫌悪感を感じたりはしなかった。

ならば、今自分が咲夜に抱いている感情は愛や恋と言ったものなのかと考えるが、今

まで一度も恋愛などをした事がなかった龍也にはよく解らなかった。

とは言っても、時間を掛けても咲夜に悪い。

龍也がそう思い、咲夜に伝えるべき言葉を考えていると、

「ねえ……………」

咲夜が先に口を開いた。

「……………何だ？」

「急いで答えを出さなくてもいいわ」

「……………いいのか？」

「ええ。貴方が恋愛感情や愛情と言ったものがよく解らないと言っているのを知っていて貴方に私の想いを告げたんだもの。早く答えを言ってくれと言うのは私の我俣。ただ……………」

「ただ？」

「出来るだけ早く答えが欲しい……………ってこれも私の我俣ね」

そんな声と共に咲夜の溜息が聞こえた。

その溜息に答えるかの様に

「咲夜……これが恋愛感情かは解らないが……俺はお前の事は好きだ」

そう返した。

龍也のその言葉に反応する様にして、龍也を抱きしめる力を咲夜は強くする。

それに応えるかの様にして龍也も抱きしめる力を強くする。

余談ではあるが幾日か過ぎると、この二人の関係が変わったと言っ
話が聞こえて来た
そうな。

一周年記念 その3（前書き）

これはIFストーリーです。

本編とは基本的に関係ありません。

時系列は不明です。

他の一周年記念とも関係ありません。

以上の事を踏まえ、興味のある方はそのままお進みください。

一周年記念 その3

「うどんげ、手が止まっているわよ」

薬を作っている最中に手が止まっている鈴仙に永琳がそう言って注意をする。

「……はっ！！ すみません師匠」

注意されると鈴仙は直ぐに我に返って薬を作る作業を再開する。

「最近ボーツとしてる事が多いけど……」

「す、すみません」

「何か悩みでもあるの？」

「い、いえ、そう言う訳では……」

「何かを考えるのはいいけど、薬の調合比率を間違える様なマネだ
けはしないでね」

薬の調合比率を間違えて薬が毒になるものならシャレにならない。

永遠亭は主に薬を売って生計を立てているのだ。

その永遠亭が薬ではなく毒を売っていると言う噂が立つものならそれは致命的な事になるであろう。

「それは大丈夫です!!」

「ならいいわ」

永琳はそう言って再び薬の調合を始める。

それに続く様にして鈴仙は気合を入れ直し、薬を調合していく。

「「「「馳走様」」」」

永琳は鈴仙がボーツとする事が多くなった理由に納得した。

が、そんな二人の言葉は鈴仙の耳には入っておらず、

「ど、ど、ど、ど……どうしてそれを!？」

かなりうろたえた様子で輝夜にどうして自分の内心を知っているのか尋ねる。

「あら、忘れたの？ 私は輝夜姫よ。かつて数多の男に求婚された女よ」

「い、いえ、それは存じておりますが」

少しは落ち着いていたのか、顔の赤みが引いた状態でそう言う。

「つまり、様々な男に求婚された身だから恋愛事には鼻が効くのよ
そう言った後、輝夜は笑みを浮かべながら、

「で、龍也の何処に惚れたの？」

そんな事を尋ねる。

「え、えと、それはその……」

輝夜にそう言われ、鈴仙は再び顔を赤らめてしまう。

「ほらほら、言っでいらんなさいな。言ってくれた色々とアドバイ

スをして上げる
わよ」

輝夜にそう言われ、鈴仙は少し考えた結果、

「分かりました、話します」

話す事にした。

「えっと……龍也の芯がしっかりしてるところと言つか真っ直ぐ前
を見てるところと
言いますか、そんなところに惹かれたんだと思います」

鈴仙のその発言を聞き、

「確かに、龍也はそんなところがあるわね」

輝夜はそう呟く。

その後、

「惹かれ始めた理由は分かったわ。で、好きになった理由とかは？」

輝夜はそう尋ねる。

「えとですね……多分、前にあった花の異変の時に閻魔様に言われ
た事を相談した時
だったと思います」

そう言いながら、鈴仙はその時の事を思い出す。

閻魔に言われたのは過去の罪の償い方。

今のままのやり方ではダメと言われ、その事に付いて悩みながら永遠亭に戻ると大怪我を負って気を失っていた龍也が入院していた。

その時は誰と戦ったんだろうと思っていたが、翌日に配送された”文々。新聞”には
閻魔である映姫と戦ったと書かれていたのだから驚きだ。

更には閻魔に負けたからリベンジを決め込んでいると言う事を知ってまた驚き、そして呆れた。

が、何処かで羨ましく思い、鈴仙にある考えが浮かんだ。

閻魔様相手に強く出れるのなら、自分の悩みの答えを出してくれるのではないかと。

だが、どうやってその事を切り出そう。

そんな事を考えていると、龍也が金欠で永遠亭でアルバイトを始める事になったのだ。

それでも中々相談するタイミングは掴めずいたが、龍也と二人つきりて人里に薬を売りに行く事があった。

で、その帰り道、龍也に閻魔と戦った理由を聞いた後にその事を相

談してみた。

返って来た答えは答えではなかったが、それでも返って来た答えは鈴仙を納得させるものであったのと同時に心を軽くするものであった。

龍也に言われた事を要約すると、自分の納得できる答えは自分の中にしかないと言う事なのだ。

それまではただ漠然と罪を償うというだけであったが、龍也に言われてからはどの様に罪を償うかと言う考え方が出来る様になった。

そこまで思い出し、鈴仙は罪を償っている自分が龍也に想いを告げ、仮にそれを受け入れられ、そして幸せになるのは自分に許される事なのか。

鈴仙がそんな事を考えていると、

「いいじゃないかしら？ よく言うでしょ。幸せになる権利は誰にでもあるって」

鈴仙の考えを見透かした様にして輝夜がそう言う。

「それは兎も角、相談をした後に好きって言う感情がどんどん膨れ上がったって言う感じがしら？」

「はい……おそらく……。それに何かほっとけなくて……」

そう言いながら鈴仙は再び顔を赤くする。

まあ、龍也は何処か危なっかしい面があるのでほっとけなくなるのも無理もないだろう。

好意を抱いているのなら尚更だ。

「それはそれとして、鈴仙が龍也に告白しても上手くいく可能性は結構低いわね」

「ええ!？」

あまりに予想外の答えに、鈴仙は驚きの声を上げる。

「別に鈴仙に魅力がないって訳ではないわ。問題は龍也の方ね」

「龍也の方ですか?」

そう言いながら鈴仙は首を傾げる。

「ええ、龍也って恋愛感情……と言うよりは愛情ね。愛情に対する感覚とかそういうのが薄いのよね」

輝夜は下唇に人差し指を当てながらそう言う。

「多分……いえ、これは本人のいない所で言うべき事じゃないわね。兎も角、龍也を」

落としたいなら大胆に攻めて意識させるのが効果的かしらね」

「大胆にですか？」

「ええ。例えば胸を押し当てたりとかそう言った事ね。幸い、龍也は年頃の男の子らしく女の子の体にはそれ相応の興味を持っている様だから効果はあるわね。それに龍也は貴女の事は嫌ってはいないからうざがられる事もないでしょう」

輝夜のアトバイスを聞き、鈴仙は何かを決心した様な表情をするのと同時に、

「ッー!!」

何かの視線を感じ、視線を感じた方へ顔を向ける。

そこには嫌な笑みを浮かべたてゐが居た。

相談事に夢中になっていたせいでてゐの存在を忘れていた様だ。

鈴仙が口を開く前に、

「良い事聞いちゃった。早速お兄さんを探してこの事を教えて上げよーっと!!」

てゐはそんな事を言って居間から飛び出す。

その数瞬後、

「ちよ、てめー！ 待ちなさい！！！！！！」

鈴仙はそう言いながら居間を飛び出し、てめを追い掛ける。

居間に輝夜と永琳の二人つきりになると、

「それにしても意外ね」

永琳はそんな事を口にする。

「何がかしら？」

輝夜はそう尋ね返す。

「あの子にアドバイスをした事がよ。輝夜も龍也の事を気に入っていると思うていたから」

「そりゃ気に入ってるわよ。私に求婚して来た男達とはまったく違うタイプだしね。」

けど、気に入ってはいるけど別に龍也には恋愛感情を持ち合わせてはいないわ」

そう言いながら輝夜はお茶を啜り、

「ま、この先どうなるかは分からないけどね」

そんな事を言う。

「そうなの？」

「ええ。好いた惚れたって言う感情はそれなりの経緯があつて生まれたりする事があれば唐突に生まれる事もあつたりするからね。一目惚れから始まる恋愛が良い例よ。若し

かしたら、永琳も龍也に骨抜きにされる事があるかもしれないわよ」
そう言つて輝夜は一息吐き、

「それはさて置き、鈴仙にはあんまりモタモタやってると私が横から龍也を搔つ攫つか
もしれないって言つて上げた方が効果的かもしれないわね」

「なら、私からそれとなくそう伝えて置くわね」

「宜しくね」

輝夜はそう言つた後、卓袱台の上を見て、

「この食器、どうし様かしら？」

そんな事を言つ。

その発言に釣られる様にして永琳は卓袱台の上に目を向ける。

そして流石に永遠亭の姫である輝夜に皿洗いはさせられないと思ひ、

「私がやります」

そう言ひ。

あれから幾日かした日の夕方。

永遠亭の扉をノックする音が聞こえた。

鈴仙は誰だろうと思って、

「どなたですかー？」

その声を掛けながら扉を開ける。

そこに居たのは、

「よ」

龍也であった。

その瞬間、鈴仙の脳裏に輝夜に言われた大胆に攻めると言う言葉が浮かんだが、

「ど、どうしたのよ、その怪我!？」

龍也に風貌を見てその言葉が消える。

現在の龍也の状態はかなりボロボロである。

誰かと一戦して来た様な感じである。

「ああ、さつき萃香と一戦交えてな」

そう言いながら龍也は後頭部を掻き、

「と、言う訳で一寸診てくれ」

そんな事を言と、

「……………ん？」

鈴仙はある事に気付く。

龍也から酒の匂いをする事に。

「……………ねえ、何でお酒の匂いがするの？」

そう言われた瞬間、龍也は鈴仙から視線を逸らす。

その瞬間、

「またそんな大怪我をした状態で酒盛りしたわね……………」

鈴仙に火が着いた。

「悪かった、悪かったって……！」

龍也はそう謝るが、

「だったら同じ事を繰り返すな……！」

余計に怒られてしまう。

それから少しの間鈴仙の説教が続き、

「これに懲りたらもう大怪我した状態で酒盛りをしない事……！」

そんな言葉で締め括られる。

「はい、分かりました」

龍也は力なくそう言った。

「……はあ、少しは心配する身にもなねっての」

ボソっとした声で鈴仙はそう呟く。

「ん？ 何か言っただか？」

聞き取れなかった龍也がそう尋ねるが、

「な、何でもないわよ！！」

鈴仙は少し頬を赤らめながらそう言って龍也から顔を背け、

「ほら、治療して上げるから付いて来て。最近は師匠から手術が必要な怪我以外なら

私一人でも大丈夫だって言われたし」

「へー、頑張ってるんだな」

「そりゃね。ほら、行くわよ」

そう言って鈴仙は診療室に向けて歩き出す。

それに続く様にして龍也も歩き出した。

深夜。

鈴仙は龍也が泊まっている部屋の襖の前の部屋に来ていた。

龍也の怪我を治療した後、怪我をしているからと言う理由で龍也の腕を抱きながら移動したり、アーンでご飯を食べさせたりもしてみたりと色々してみた。

照れくさそうにはしていたが、嫌がってはいなかったなので勇気を出してみて良かったと鈴仙は思った。

だが、今一進展はしなかったとも思った。

故にいつその事、この想いを告げたらどうだと考え、龍也が泊まっている部屋の前に来

ているのだが、

「……………どうしよう」

尻込みしていた。

輝夜に言われた事、直ぐに告白して上手くいかないと言った言葉が尾を引いているのだらう。

やっぱりこのまま何もせずに帰ろうかと考えたが、以前龍也に言われた言葉を思い出す。

『自分の納得できる方法』と言った言葉を。

その言葉の通り、鈴仙は自分の納得できる方法を考える。

少しすると、

「……………私の想いを告げる。それが私の納得できる方法」

決心が着く。

同時に、龍也が泊まっている襖をノックする。

すると、

「誰だ？」

中からそんな声が返って来る。

「私だけど、入っていい？」

「ああ、いいぞ」

了承の声が聞こえたので鈴仙は襖を開けて中に入る。

部屋の中に入ると、布団の上で胡座を掻いている龍也の姿があった。

「あ、ごめん。若しかして寝るところだった？」

「いや、ただダラダラしてただけだ」

「そう」

「それで、何か用か？」

龍也がそう促すと、

「うん」

鈴仙は龍也の正面の位置に座り、

「あのね……………貴方が好きなの。一人の女として」

そう告げた。

同時に鈴仙の頬が赤く染まっていく。

龍也は一瞬何を言われたが理解出来なかったが、直ぐに自分は告白されたんだ理解した。

その告白を受け、龍也は自分が鈴仙に抱いている感情を考えると好きと言う答えが出てくる。

だが、それが恋愛感情かと言われれば分からない。

龍也が愛情と言うものがどう言うものか分からないのは、実の両親から愛情を与えられなかった事が原因であろうが。

兎も角、告白されたのだからこちらもそれ相応の答えを出さなくてはなるまい。

龍也は何と返すか考えていると、

「無理に返事を返そうとしなくてもいいわ」

鈴仙はそんな事を言う。

「だって、貴方は恋愛感情とか愛情とかをよく分かってないでしょうっ」

「あ、ああ」

「なら直ぐに答えを出そうとしなくてもいいわ。だから……」

そして

「……………だから？」

「その……………私と試しに付き合ってみない？　そしたら、龍也の中の気持ちの正体にも気付くかもしれないわよ？」

そんな事を言い出す。

一瞬、龍也はポカンとした表情になるが直ぐに表情を戻し、

「いいぞ」

そう言った。

あっさり了承の言葉を貰え、今度は鈴仙は一瞬ポカンとした表情になり、

「え？　その……………本当にいいの？」

そう尋ねる。

「ああ、俺もお前に抱いている感情は知りたいし、お前となら付き合ってもいいって思えるしな」

龍也の返答を聞くと、鈴仙は自分の心臓が強く鼓動していくのを感じた。

同時に、やっぱり自分は龍也の事が好きなんだなと思った。

そして、

「ならば……その……恋人らしい事とかしてみない？」

そんな事を言う。

「恋人らしい事？」

「うん」

「別にいいけど……」

「だったら、目を瞑ってくれる？」

恋愛事に疎い龍也でもその言葉が意味する事は分かった。

そしてそれを踏まえた上で、龍也は目を瞑る。

それから少しすると、鈴仙は目を瞑って龍也の唇に自分の唇を押し付けた。

こうして、龍也と鈴仙の二人は付き合う事になった。

それから暫らく経った後、この二人は幸せそうであると永遠亭のメンバーは語った。

放浪編 その60

「んー……大分涼しくなったな」

幻想郷の何処かを歩いている龍也は吹いて来た風を感じながらそう呟く。

少し前まではこれぞ夏と言った感じの暑さではあったが、ここ最近はその感じない。

となれば、もう少しすれば秋になるであろう。

春や秋は夏や冬と比べて暑すぎたり寒すぎたりと言った事はない。

旅をするのは中々快適な季節であろう。

秋になったら紅葉や落葉がよく見える場所を目指し、冬になる頃には防寒具を取りに自分が住んでいる無名の丘を目指す進路を取る。

そんな予定を龍也が考えていると、

「……ん？」

今踏み締めている地面が盛り上がるのを感じる。

その瞬間、龍也がその場から飛び退くとそこから何かが見れる。

現れたのは軟体生物に口と牙を付けた妖怪だ。

俗に言うワームと言われる存在であろう。

そのワームを見ながら、

「珍しいな……こいつがこんな所に現れる何て」

龍也はそんな事を呟く。

このワーム型の妖怪が現れる場所は魔法の森が多かったので、龍也がそう呟くのも無理はない。

尤も、このワーム型の妖怪は地中を移動するタイプなので巡回経路が魔法の森に集中しているだけと言う可能性もあるのだが。

それはさて置き、このワーム型の妖怪は龍也を食べる気満々の様である。

その事を龍也が感じると、

「っつ」

その妖怪は龍也を一飲みにし様と襲い掛かって来た。

それを跳躍して避けると、地面から同じタイプの妖怪が更に二匹現れる。

同時に、空中に居る龍也を噛み砕こうと現れた二体のワーム型の妖

怪が襲い掛かって来た。

「危ねっ!!」

龍也は空中に見えない足場を作り、それを蹴って二体のワーム型の妖怪の攻撃を避ける。

その後、龍也が地上に降り立つと三体のワーム型の妖怪は雄叫びを上げて龍也目掛けて突っ込んで来る。

それを見ながら龍也は思う。

直接触る様なマネはしたくないなど。

まあ、それも無理はない。

このワーム型の妖怪は体の表面がヌメヌメしているのだ。

目で見て分かる位に。

これでは進んで触りたいとは思えない。

とは言っても、撃退しなければ龍也はこの妖怪に食われてしまうであろう。

それは龍也もゴメンである。

ならばどうするか。

答えは簡単。

直接触らなければいいだけの話。

そして、龍也は迫って来るワーム型の妖怪を目に入れながら自身の力を変える。

青龍の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が黒から蒼に変わる。

瞳の色の変わると同時に龍也は両手から水の剣を生み出し、構える。

その次の瞬間、ワーム型の妖怪の一体は龍也を捕らえ、噛み砕こうとして勢い良く口を閉じる。

が、ワーム型の妖怪には龍也を噛み砕いた感触はなかった。

その事にワーム型の妖怪が疑問に思っていると、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！！」

上空から龍也が水の剣を振り被りながら降下して来た。

その事にワーム型の妖怪が気付いた瞬間、その妖怪は三枚に下ろさ

れた。

仲間がやられた事に驚くも、残り二体の妖怪は龍也が着地した瞬間、挟み込む様にして襲い掛かる。

二体の妖怪が龍也の間合いに入った瞬間、龍也は両手を広げて回転する。

襲い掛かった妖怪にそれを避ける術は無く、見事真つ二つに斬り裂かれてしまう。

襲い掛かって来た妖怪達を全て倒すと龍也は水の剣を消し、力を消す。

すると、龍也の瞳の色が蒼から黒に戻る。

そして、

「やれやれ、油断ならねえな」

そんな事を呟き、龍也は再び足を進める。

「っと、あれは……人里か」

龍也は少し先に見える人里を見てそう言う。

適当に歩いていたら何時の間にか人里の近くにまで来ていた様だ。

折角近くまで来たのだから寄って行こうと龍也は思い、人里へ足を向ける。

そして人里に着くと、

「相変わらず活気があるな」

龍也はそんな事を呟きながら足を進める。

少し小腹も空いて来たので何処かで何か食べようか。

そんな事を考えていると、

「龍也君」

その声を掛けられた。

龍也は誰だろうと思ひながら声が聞こえた方へ顔を向ける。

龍也に声を掛けて来た者は、

「慧音先生」

上白沢慧音であつた。

「少しの間、顔を見ていなかったが元気そうだね」

「はい、お陰様で。慧音先生の方は？」

「私も元気だよ」

そう軽い挨拶を交わし、龍也と慧音の二人は雑談をする。

雑談が一段落すると、

「そう言えば、慧音先生は寺子屋の帰りですか？」

龍也はふと思つた事を尋ねる。

「いや、ここ最近寺子屋は休みだよ。俗に言う夏季休業と言つやつだね」

「夏季休業……夏休みですか。こっちにもあったんですね」

龍也は少し驚いた表情をしながらそう言うと、

「その口振りから察するに、外の世界にも夏季休業と言つものがあるんだね」

慧音はそう返す。

「夏は暑さで子ども達の集中力が持たない事が多いからね。夏は寺子屋を長期的に
休みにする事になっているんだ」

「そう何ですか」

「うん。まあ最近は大分涼しくなって来たからそろそろ寺子屋を再開し様と思っているんだ」

確かに、慧音の言う通り最近は涼しくなって来たので寺子屋を再開させるには丁度良い
かもしれない。

「寺子屋を再開した後、機会があったら寺子屋の方に顔を出してくれないかい？ 君に
会いたがってる子ども達も結構居るからね」

「分かりました。秋の間にも寄らせて貰いますね」

「うん、宜しく頼むよ」

そう言つと、

「あ、そう言えば龍也君。何所かへ向う途中だった様だが何所へ行こうとしていたんだい？」

慧音が思い出した様にそう尋ねる。

「小腹が空いたんで何処かでご飯を食べ様と思っていたんです」

「あ、それなら近くに団子屋があるから一緒に行かないかい？ 奢るよ」

「え、いいんですか？」

少し申し訳なさそうな表情で龍也がそう言つと、

「何、私は君より年長者だからな。気にしなくてもいいよ」

慧音は笑顔でそう返す。

そんな慧音の発言を聞き、龍也は少し考え、

「……分かりました。それではご馳走になりますね」

慧音の誘いを受ける事にした。

そして、慧音の後に続きながら団子屋を目指す。

団子屋に着き、注文した物が来るまで慧音と雑談をしながらのんびりと過ごす。

暫らくすると、注文した物が運ばれてきたので二人は雑談を中断して団子に手を付ける。

「あ、美味しい」

団子を口にすると、龍也はそんな声を漏らす。

「この団子屋の味は人里でも評判だからね。気に入って貰えた様で良かったよ」

そう言って、慧音も団子を口に運ぶ。

その後、再び雑談を交えながら団子を食べていく。

団子屋で団子を食べた後、慧音と別れた龍也は人里を歩いていた。空を見上げると、まだ日が昇っている事が分かる。

このまま人里を出ても夜が来るまでには寝床を見つけられそうだ。

そう考え、このまま人里の出口を目指そうかと考えていると、

「龍也さん」

その声を掛けられた。

誰だろうと思いながら龍也は声を掛けられた方へ顔を向ける。

龍也に声を掛けて来た人物は、

「阿求」

稗田阿求であった。

「こんにちは、龍也さん」

そう言って阿求が頭を下げたので、

「ああ、こんにちは」

龍也もそう返して頭を下げる。

「散歩か？」

龍也がそう尋ねると、

「はい。一応、幻想郷縁起を纏め終わったので比較的暇な時間が
増えたので長い間
散歩する事が出来るんです」

阿求は笑顔でそう答えた。

「でもまあ、近々書き足したりする事があるかもしれませんが……」

「そうなのか？」

そう言つて龍也は首を傾げる。

「はい、加筆修正とかをしたりするかもしれませんが。それに人妖
含めて力を持った新

しい存在……幻想郷縁起に乗せていない存在が現れないとも限りま
せんしね。例えば、

普通の外来人の方は幻想郷の一般的な人間と比べて身体能力など基
本的な力は変わりま

せんが、龍也さんの様な強い存在が幻想入りしてこないとも限りま
せんし」

「あー……」

そう言われ、龍也は少し考え込む。

自分はこの幻想郷に来て早々に命に危機に晒されたと同時に力に覚醒した。

尤も、青龍曰くその時に龍也が自分自身と言うものを無意識のうちに理解し、龍也の中に眠っている力を龍也が無理矢理引っ張り出したから力に覚醒したらしいが。

兎も角、自分自身と言う前例があるので力を持った存在が外の世界から幻想入りして来ると言った可能性も捨て切れない。

「そう言う事で、今の様に暇な時間が沢山出来ると言う事はなくなりそうですが」

そう言って、阿求は溜息を一つ吐き、

「あ、そうだ」

何かを思い出した顔付きになる。

「龍也さん、今暇ですか？」

「ん？ 暇だけど」

龍也が暇だと言うと、

「なら、これから私の家に来ませんか？」

阿求はそんな提案をする。

「阿求の家に？」

「はい。それでお願いなのですが……」

「お願い？」

「龍也さんが幻想郷中を回って見聞きしたものを教えてくれませんか？」

そう言いながら阿求は上目遣いで龍也を見上げる。

「その程度ならお安い御用だ」

龍也がそう言つと、

「ありがとうございます!!」

阿求はそう言つて頭を下げる。

「でもそんな何でいいの？」

「はい。私は幻想郷縁起の編集で幻想郷中を少しは見たりしましたが、幻想郷の細かい

所や深い所まで見たって事はないですからね。分かり易く言つのであれば広く浅くと言

った所ですかね。その点、龍也さんなら私と違って色々な事も知ってそうですし。それ
と、龍也さんは幻想郷縁起に乗せてる方の殆どと交友関係がありませんからね。若しかし
たらその方達の知られざる一面と言った話が聞けそうなので楽しみです」

そう言っつて、阿求は楽しみみだと言う様な顔をする。

「分かった。それじゃ、早速行こうか」

「はい!!--」

そして、龍也は阿求の後ろに付いて阿求の家を目指す。

暫らく歩くと、

「着きました」

阿求の屋敷に着く。

「それにしても、相変わらずでかいな。お前の家」

阿求の屋敷を見ながら龍也はそう呟く。

「そんなに大きいですかね？」

その発言が聞こえたのか、阿求はそう言いながら首を傾げる。

紅魔館や白玉楼に比べれば小さいかもしれないが、それでも阿求の

屋敷は大きい部類に入る。

「ま、いつか。それより早く入ろうぜ」

「はい」

龍也の言葉に促される様にして阿求は門を開け、二人は中に入る。

二人が玄関に着くと、

「お帰りなさいませ」

女中が出迎えてくれた。

「ただいま。それとお茶とお茶菓子を私の部屋に持って来て下さい」

「畏まりました」

そう言つて女中がお茶とお茶菓子を取りに向かいと、龍也と阿求の二人は阿求の部屋へ向う。

阿求の部屋に入り、少しの間まったりしていると、

「お茶とお茶菓子をお持ちしました」

部屋の外からそんな声が掛けられる。

「どつぞ」

阿求がそう返すと、

「失礼します」

女中が襖を開けて中に入り、龍也と阿求の前にお茶とお茶菓子を置く。

「ありがとうございます」

「ご苦労様」

龍也と阿求がそう礼を言うと、

「いえ。では」

女中はそう返して阿求の部屋を後にする。

その後、

「それでは、色々とお話してくださいね」

阿求が笑顔でそう言うと、

「ああ、分かったよ」

龍也は幻想郷中を旅して見聞きした事などを阿求に話し始めた。

余談ではあるが、話が終わる頃には日もすっかり暮れてしまったので龍也は阿求の屋敷

に泊まる事にした。

風神録編 その1

「んー……もう夏も完全に過ぎたなあ……」

幻想郷の何所かを歩いている龍也は吹いて来た風を感じてポツリとそう呟いた。

空を見上げれば雲は殆どなく、太陽が元気に仕事をしている。

だが、太陽が元気に仕事をしていると言うのにダレる様な暑さは感じない。

これ即ち、夏がとつくに過ぎた事を意味する。

つまり、今の季節はもう秋と言う事になる。

「そう言えば、秋になったら慧音先生の所の寺子屋に顔を出すって言う約束をしたな」

そう言って、龍也は少し前に人里でそう言う約束をした事を思い出す。

慧音曰く、龍也に会いたがっている子ども達が多いとの事。

ならば出来るだけ早くに向った方が良さだろうと龍也は考える。

そして、足を人里の方へ向けようとすると、

「おい、龍也ー!!」

上空から自分の名を呼ぶ声が聞こえて来た。

誰だろうと思いつながら龍也は声が聞こえて来た上空に顔を向ける。

龍也が顔を向けた先には霊夢と箒に跨っている魔理沙の姿が在った。

二人の姿を確認すると、龍也は地を蹴って跳躍して二人と同じ高さの位置まで来る。

その後、自分の足元に灵力で出来た足場を生み出し、そこに着地して、

「よう、何か用か?」

そう尋ねる。

すると、

「私達と一緒に妖怪の山に行かないか?」

魔理沙はそう返す。

「妖怪の山? 何でまた?」

確かあそこは閉鎖的で、特に人間が妖怪の山に入ろうものなら天狗と敵対すると言った

事や直ぐに追い返されると言っただ様な事を以前に秋姉妹や椀、文に聞いた事があったと

言う事を龍也は魔理沙の発言を聞いて思い出していると、

「実はな、霊夢の所の博麗神社に営業停止命令が出されたそう何だ」
魔理沙がそんな事を言う。

「営業停止命令？」

魔理沙の発言を聞き、龍也は少し驚いた表情をしながら霊夢の方を見る。

「……………何よ？」

龍也の視線に気付いたのか、霊夢はそう言う。

「いやさ、お前の所の神社って営業してたんだなと思って少し驚いた」

龍也がそんな事を言うと、魔理沙はそれに同意するかの様にウンウンと頷く。

「あ、あんた達ねえ……………」

そんな二人を見て、霊夢は何かを言い掛けようとするが、

「俺は神社で掃き掃除位しかお前が働いてる姿を見た事をないぞ。それもそんなに頻度が多い訳じゃないしな」

龍也にそう言われ、言葉に詰まってしまふ。

「後、祭事とか神事とかそう言った事をやってるのを見た事ないし」

「いや、それは確か前にやってたぜ」

「そうなのか？」

「ああ。尤も、直ぐに飽きてやめちまった様だが」

「それなら意味ないじゃねえか」

そう言つて龍也は一息吐く。

「後、神社と言えはお守りとかお札とかも売つてたりするものだけ
ど……」

「私の記憶が確かなら霊夢がそんな物を作つた事はないな」

「あれ？ それなら営業停止命令が出される以前に博麗神社って営
業してないんじゃないか？」

「あ、龍也もそう思ったか。実は私もそう思つてたぜ」

そう言つて、龍也と魔理沙があははははと笑つてると、

「「あ……………」」

口元を引くつかせ、プルプルと震えながら懐からお札を取り出そう
としている霊夢の

姿が目に入った。

これはマズイと龍也と魔理沙の二人は思ったのか、

「お、落ち着け！！ 今度神社に行く時は賽銭を奮発するから！！」

「そ、そうだ！！ 今度美味しい茸を沢山持って行ってやるから！！」

何とか霊夢の機嫌を取ろうとする。

賽銭に釣られたのか茸に釣られたのか、はたまた両方に釣られたのかは分からないが、

霊夢の機嫌は直った様で霊夢は懐から手を取り出す。

「そ、そっいや、営業停止命令とか言われた様だけど何を言われたんだ？」

「言われた事？ えーと、確か神社を潰すか山の神に譲渡しろと言われたわね」

霊夢は人差し指を下唇に当てながらそう言う。

「要するに、神社を乗っ取らせると言われているのか」

霊夢の発言を聞き、龍也はそう呟く。

「そう言う事ね。で、そう言って来たのが私と同じ巫女でそいつが妖怪の山の頂上付近に飛んで行ったのよ」

「成程、それで魔理沙は妖怪の山に行こうと言ってたのか」

そう言つて二人が妖怪の山を目指していた理由を龍也は理解する。

同時に、

「でも、妖怪の山つて人間禁制じゃなかったっけか？」

最初に魔理沙が妖怪の山に行こうと言つた時に覚えた疑問を尋ねてみる。

「それは私も引つ掛かっていたのよねえ」

龍也の問いに靈夢はそう返す。

「何時もだったなら無視しても良かったんだけど、人間が妖怪の山に行つた言つのは普通なら考えられないからね。これを異変の前兆としたら……」

「本格的になる前に叩き潰す……って事か？」

「そう言う事。異変解決の為に妖怪の山に乗り込んで大した問題にはならないわ」

靈夢は可愛らしい顔でそう言い、

「それに異変を解決するつて言う事はあの巫女が祀っているであろう偽神か邪神を叩き潰す事も出来るしね」

そんな事も言い出す。

「偽神か邪神って……そんな事が分かるのか？」

「何言ってるのよ。人の神社の神様を追い出して乗っ取るうとするのよ。そんな事を

するのは偽神か邪神に決まっているわ!!」

霊夢の発言を聞き、先程言っていた神社の乗っ取りと言っるのはその言っ意味だったのか
と龍也は思った。

同時に、

「そう言えば、俺は博麗神社の神様を見た事がないんだけど……」

神と言っ単語で思い出した事を龍也が呟くと、

「そう言えば私も見た事がないな」

「私も……」

魔理沙処か霊夢も博麗神社の神を見た事がないと言い出した。

そして、三人の間に何とも言えない空気が流れ出す。

下手な事を言えば、先程の様に霊夢の怒りを買ってしまっ。

そう思ったのか、

「そ、それはそうと、龍也は私達と一緒に行くか？」

魔理沙は思いつ切り話題を変えた。

「そうだな……」

魔理沙にそう言われて龍也は少し考える。

秋になったら慧音の所の寺子屋に顔を出すと言ったが、具体的な日付は決めていない。

それに、これが異変ならば解決に然程時間が掛かったりはしないで
あろう。

今までだってそうであった。

龍也はそこまで考えを纏め、

「一緒に行くぜ」

一緒に行く事に決めた。

「よし、決まりだな」

龍也の答えを聞き、魔理沙は指を鳴らしながらそう答える。

そして、

「なら、さっさと行きましょ」

霊夢のその言葉を合図にして、龍也達は妖怪の山へ向って行った。

「お、見えて来たな」

移動を開始して暫らくすると、妖怪の山が見えて来た。

どこから入ったものかと一同が考えていると、

「あれは……」

「ん？ 何か見つけたのか？」

何かを見つけた様な声を上げた龍也に、魔理沙がそう尋ねる。

「ああ、看板をな」

「「看板？」」

そう言つて、霊夢と魔理沙は首を傾げる。

「一寸見てみて見ようぜ」

龍也のその言葉を合図に、一同は降下して看板の前に降り立ち、

「えーと、何々……」この先妖怪の山、人間立ち入り禁止。いいか、
入るなよ。絶対
絶対

「絶対だからな」と書かれているわね」

霊夢が看板に書かれている文字を読み取る。

それを聞いた龍也は、

「ああ……そう言えばあつたな。こんな看板」

以前にこの看板を見た時の事を思い出す。

「しかし、何時見ても進入してくれと言わんばかりの文章だな…

…」

龍也がそう言つと、

「そう？ 私は進入を頑なに拒んでいる文章に見えるけど？」

「私もそう見えるぜ。何所が進入してくれ言う文章なんだ？」

霊夢と魔理沙がそう返す。

「いや、まあ、そう何だけど……」

二人の疑問にどう答えたものかと龍也は考える。

が、どう考えても良い説明が浮かばなかった。

なので、

「それはそれとしてだ」

龍也はこの話題を何所かに置いておく事にし、

「何所から入って行く？」

妖怪の山への進入経路を相談する事にした。

「うーん……私としては妖怪の山の頂上まで一直線で行った方が手っ取り早いと思っぜ」

魔理沙がそう意見を言う。

「外側から直接行くって事か？ その方法で行ったら妖怪の山に居

る天狗に見つからないか？」

「それで天狗全員から襲撃を受けたら面倒臭い処じゃないわね。天狗は妖精と違って弱くはないだろうし」

「なら、それは却下にするか」

龍也と霊夢の二人の意見を聞き、魔理沙は今自分が言った意見を却下する事にし、

「じゃあ、逆に妖怪の山に入って下から頂上を目指すって言うのはどうだ？」

先程とはまったく逆の意見を言う。

「妖怪の山は見た感じ、木々が多いからな。中に入れば外側からと違ってそう簡単には見つからないだろ」

「妖精には見つかりそうだけど……まあ、天狗を相手にするよりは遙かにマシね」

二人とも、中に入って下から頂上に向うと言う意見に特に反対はない様だ。

「なら、「これで行こうぜ」

「そうね。それじゃ、行きましょ」

霊夢の言葉を合図にし、一同は妖怪の山へと突入する。

「へえー……ここが妖怪の山か……」

妖怪の山に入って少しすると龍也はそう呟き、

「外観通り木々が多い所だな」

キョロキョロと周囲を見渡す。

初めて妖怪の山に入ったので仕方がないと言えば仕方がない。

「妖怪の山には魔法の森にはない茸があったりするかな？」

魔理沙も龍也と同じ様にキョロキョロと周囲を見渡す。

「あんた達ねえ……」

そんな二人に少し呆れた視線を霊夢が向けると、何体かの妖精が龍也達の進行方向に現れて弾幕を放って来た。

「っつ」

霊夢は龍也達に視線を向けたまま、妖精が放って来た弾幕を避ける。

「ほら、さっさと撃退するわよ」

そう言って、霊夢は妖精達に向き直る。

そんな霊夢の様子を見ながら、

「何か今日の霊夢、結構気合入ってないか？」

龍也は小さな声で魔理沙にそう尋ねる。

「まあ、流石の霊夢も自分の所の神社が乗っ取られるかどうか何だ。そりゃ気合も入るだろ」

魔理沙も小さな声でそう返す。

「一応巫女としての自覚はあるって事なのか？」

「多分な。巫女らしい事をしてる所は殆ど見た事ないけど」

「ああ、俺もそんな所を見た事がないな」

「ま、何時もはグータラ巫女だがこう言う時にはやる気が出るって事だな」

「だな。何時もはグータラ巫女だけど」

「何か言ったかしら、あんた達」

龍也と魔理沙の話し声が聞こえたのか、霊夢が少し怒気を感じさせる声色でそう言う

「いえ、何にも！！」

龍也と魔理沙は慌てて否定する。

三人がそんなやり取りをしている間に、妖精は数を増やしていく。

「ほら、あんた達が馬鹿やっている間に妖精が増えたじゃない」

少し怒り気味の声色で霊夢がそう言う

「これ以上、霊夢に怒られる前にさっさと撃退するか」

「だな」

龍也と魔理沙はそう言って、弾幕を放つ。

それ等に一步遅れる様にして霊夢も弾幕を放つ。

三人の放った弾幕は次々と妖精に命中し、妖精を撃ち落していく。

何とか着弾を免れた妖精達が弾幕を放つがこの三人には掠る事もなく、直ぐに放たれた

追撃の弾幕を受けて撃ち落される。

周囲から妖精が居なくなると、

「決まりね。これは異変だわ」

霊夢はそう呟く。

少なからずの例外はあれど、今までの異変では妖精は現れるのと同じ時に攻撃を放つて来た。

そして、今現れた妖精も現れるのと同じ時に攻撃を放つて来た。

なので、今回のこれは異変と言っても問題ないであろう。

それを理解したのか、

「これで妖怪の山へ乗り込む為の大義名分が立ったわね」

霊夢はそんな事を言う。

そんな霊夢の発言を聞き、龍也と魔理沙は大義名分が立っても立たなくてもお前は妖怪

の山に乗り込むだろうと思ったが、口には出さない事にした。

口に出して霊夢の余計な怒りを買いたくないからだ。

「何ボーツとしてるのよ。早く行くわよ」

霊夢の声で龍也と魔理沙の二人は意識を戻し、再び進行を開始した。その道中に現れ、襲い掛かって来る妖精を難なく撃退しながら進んで行くと、

「…………紅葉？」

紅葉が風に流され飛んで来た。

「あら、本当」

龍也の声に反応したのか、霊夢は飛んで来た紅葉を一枚手に取ってそう漏らす。

「あれ？ もう紅葉が舞う時期だったか？」

霊夢と同じ様に紅葉を手に取った魔理沙がそう呟く。

魔理沙の疑問は最もだ。

今は秋になったばかりである。

そんな秋になったばかり時期に紅葉が舞い散るであろうか。

三人がそんな疑問を抱いていると、

「あら、龍也さんに……知らない人間が二人？」

何者かが現れる。

それに気付いた三人が、声が聞こえて来た方へ顔を向ける。

そこに居たのは、

「静葉……」

秋静葉であった。

静葉の姿を確認すると同時に、龍也は紅葉が飛んで来た理由を理解した。

静葉の能力は”紅葉を司る程度の能力”である。

その能力で紅葉を生み出したのであろう。

龍也がそう考えていると、

「知り合い？」

霊夢が静葉の名を言った龍也にそう尋ねる。

その問いに、

「ああ。二人居る姉妹の秋の神様で、姉の紅葉の神の秋静葉って言うんだ」

龍也は霊夢にそう説明する。

「神は一人二人ではなく一柱二柱なのですが……まあ、意味合い自体は通じているので
どうでもいいですね」

静葉そう言い、

「それはそうと、妖怪の山に何の御用で？ この山は人間の立ち入りが禁止と言う事を
知っているでしょう？」

そう尋ねる。

すると、

「異変解決よ」

霊夢がそう返す。

「異変解決……と言う事は、山の上に現れた神を何とかしてくれるのですね!？」

霊夢の発言を聞き、静葉は希望を見つけた様な顔をしながらそう言

う。

「その口振りから察するに、何か知っているんだろ？ だったら何があったのか教えてくれよ」

魔理沙が知ってる事を教えてくれる様に頼むと、

「分かりました。お教えします」

静葉がそう言っつて、妖怪の山であった事を話し始める。

「端的に言いますと、妖怪の山の頂上に神社とその神社の敷地、巫女、神が現れたのです。それも突然」

「神社に神社の敷地に巫女に神が突然現れたって……引越してもして来たのかしら？」

静葉の発言を聞いた霊夢はそんな事を呟く。

「引越しかどうかは分かりませんが……」

静葉そう言いながら少し困った様な表情する。

「兎も角、突如として妖怪の山の……しかも頂上に神社が現れたものですから当然、

妖怪の山の代表格である天狗は警戒態勢に入ります。中には力尽くで追い出そうと

する輩もいます」

「そりゃそうだな」

言うなれば、自分の敷地内に許可なしで行き成り家込みで現れて住み始めたのだ。

良くない感情を抱くのは当然である。

「ですが、天狗達は何の行動を起こしていません」

「どうしてだ？」

「その神社に居る神の存在があるからです」

「「「神の?」「」」

龍也、霊夢、魔理沙の三人は声を揃えて首を傾げる。

「はい。その神社の神は相当な力を有している様でして、天狗側は下手な手を打てない様なのです。下手に接触して変な怒りを買えば天狗に限らず妖怪の山に存在する多くの命が失われる可能性があります。仮に戦いになった場合、ほぼ確実に天魔とその直属の配下である十数人の大天狗が前線に出ます。そうなれば確実に天狗側が勝利を収めるでしょうが、戦闘の余波で妖怪の山が焼け野原になり、これまた多くの命が失われる可能性が非常に高いのです。更に言うのであれば、天魔と大天狗が居ない隙に謀反を企てる

天狗もいるでしょうね。天狗側も一枚岩ではないですから」

「組織にありがちな問題ってやつか」

静葉の話聞き、龍也はそんな事を呟く。

「でもよ、お前さんも神なんだろ？ だったら静葉が何とかすればいいんじゃないか？」

魔理沙がそんな疑問を口にするが、

「無茶を言わないでください！！ あの神社に居る神は私もチラリと見ましたが、あれは戦いの神とかそういった類の神ですよ！！ 紅葉の神である私ではどうにもなりませんよ！！」

静葉は慌てた口調でそう言う。

静葉の慌て具合から静葉の言ってる事は本当だなと三人は思った。

「つまり、そう言った事情があるから私達に何とかして欲しいって事？」

「そう言う事です。知っているとは思いますが、我々神にとって信仰は必要不可欠。

それは山の上に現れた神も同じ。自分達を信仰してくれる存在ならどんな存在からで

も信仰を得られますが、やはり人間からの信仰が一番強い。貴方達

三人は人間ですか
らね。殺されると言う自体は早々に起きないと思います。それに…
…」

「それに？」

「前に”文々。新聞”で読みましたが、龍也さんは閻魔である映姫
さん相手にガチンコ
勝負を挑まれたと書かれていました。そんな事が出来るのであれば
山の上の神が相手
でも問題ないでしょう。それにこんな所に来るって事はその御二人
も強いのですよ？」

静葉は霊夢と魔理沙を見ながらそう尋ねると、

「ああ。霊夢も魔理沙も強いぞ」

龍也はそう返す。

「なら、安心ですね」

それを聞いて静葉はそう言う。

「なら、この件は貴方達に任せてもいいのね？」

「ええ。異変解決は私の仕事だからね」

静葉の問いに、霊夢がそう返すと

「異変解決が仕事……………若し

かして、貴女が
博麗の巫女？」

静葉がそんな事を尋ねる。

「何か、霊夢が博麗の巫女だって認識するのに豪く時間が掛かったな」

「そりゃ、霊夢は基本的に神社でダラダラするだけだからな。知名度が低くても
仕方がないんじゃないか？」

「それなら仕方がないな」

「だろ」

龍也と魔理沙がそんな事を話していると、霊夢がギロリとした視線を二人に向ける。

その視線に気付いた龍也と魔理沙は慌てて視線を逸らす。

そんな三人の様子を見ながら、

「あはは、それじゃ頑張ってね」

静葉はそう言っつて、去って行った。

静葉が去った後、

「……そんなに私って知名度がないのかしら？」

霊夢はそんな事を呟く。

「そう思っただったら霊夢も私や龍也みたいに色々動き回ってみたらどうだ？」

霊夢の呟きを聞いた魔理沙がそんな事を言つと、

「嫌よ、面倒臭い」

霊夢はそう返す。

「はあ、神社でダラダラしててもお賽銭が貯まって参拝客だ沢山来る良い方法ってないのかしら？」

霊夢が溜息混じりにそう言つと、

「ある訳ねえだろ、そんな方法」

龍也は少し呆れた顔をしながらそう返す。

三人はそんな雑談を繰り返しながら再び進行を開始した。

その道中でも妖精は当然の様に現れて襲い掛かって来た。

当然、この三人の前では妖精の妨害は何の意味もなさず、次から次へと妖精は撃ち落とされていく。

そんな感じで一同が先へ進んで行くと、

「こんな所に人間が来る何て命知らずな……って龍也？」

穰子が現れた。

「こいつもお前の知り合いか？」

穰子が龍也の名前を言った事から、魔理沙は龍也にそう尋ねる。

「ああ。さっき会った静葉の妹で豊穰の神の秋穰子だ」

「あれ、姉さんに会ったの？」

二人の会話を聞いた穰子がそう尋ねる。

「ああ、静葉に妖怪の山で何が起こっているのかは聞いたぜ」

「と言う事は、山の上の神を何とかしてくれるのね」

「ああ、そうだけ」

そう言って、魔理沙は胸を張る。

「んー……龍也の口振りから察するに姉さんが事情を話して通したみたいだし、龍也

以外の二人も強そうだし大丈夫ね」

穰子はそう呟き、

「ただ、天狗には見つからない様に気を付けてね」

そう忠告する。

「天狗に？」

「そう。今の妖怪の山は山全体がピリピリした状態になってるの。

天狗連中は特にね。

そんな状態の天狗に見つかったのなら確実に一戦交える事になるわよ。話が分かる天狗

なら、適度に加減して先に進める様に促してその後のフォローをしてくれるだろうけど

そつでない天狗なら確実に貴方達の邪魔をする様な行動を起こして来る筈よ」

「分かった。気を付けるよ」

龍也がそう言い、一言二言交わした後、穰子は去って行った。

去って行く穰子を見ながら、

「流石、幻想郷中を旅して回ってるだけはあるな。色んな所に知り合いが居るじゃないか」

魔理沙がそんな事を言う。

「これなら頂上までは楽に行けそうね」

霊夢も続けてそう続けるが、

「いや、妖怪の山に居る俺の知り合いって秋姉妹以外には椀と文しかいないぞ」

龍也はそう否定する。

「文は私と霊夢も知ってるが、椀って言うのは？」

「椀は白狼天狗だな。主な任務は妖怪の山に入って来た侵入者の追
い返しや追撃、後は

哨戒なども任務に含まれてるって椀は言ってたな」

龍也は椀から聞いた事を思い出しながらそう言う。

「天狗か。会ったら面倒な事になりそうだな」

そう良いながら、魔理沙は少し思案気な表情をする。

「その椀って言う天狗に会ったら龍也に任せればいいじゃないかし
ら？ どうせその

天狗とも仲が良いんでしょ？」

「まあ、確かに仲は良いが……」

「なら、そいつと会ったら龍也に任せるか」

どうやら、霊夢と魔理沙の中では椀と会ったら龍也に任せると言う
事に決まった様だ。

これでは何を言ってもこの判決は覆せないと思ったのか、

「ああ、分かったよ。椋と出会ったら俺が相手をする」

龍也はそう呟いた。

こうして、今後の予定が決まった一同は再び妖怪の山の頂上を目指して移動を再開した。

風神録編 その2

龍也、霊夢、魔理沙の三人は順調に妖怪の山を進んで行った。

妖怪の山と言うからには妖怪が山の様の襲い掛かって来るものだと一同は思っていたが襲い掛かって来るのは妖精ばかり。

妖精以外に現れた存在と言えば、先程色々と情報をくれた秋の神様である秋静葉と秋穰子の二柱のみ。

基本的に妖精よりも妖怪の方が強いので、出て来たら余計な時間を喰う事になるので出てこない方が好都合ではあるが。

だが、妖精ばかりを相手にするのが飽きたからなのか一旦妖精の襲撃が止むと

「そう言えばさ、龍也と霊夢は山の上に現れた神はどんな存在だと思っ？」

魔理沙は龍也と霊夢にそんな事を尋ねる。

「んー……静葉は戦いの神って言ってたから、筋骨隆々な大男かな？」

龍也がそう言つと、

「そうかしら？ 私は邪悪で禍々しい存在だと思っわ」

霊夢はそんな事を口にする。

「お前、それさっき言ってた邪神のイメージをそのまま形にしたら
けだろ」

龍也がそう突っ込むと、

「あ、バレた？」

霊夢はそう答える。

その後、龍也は魔理沙に顔を向けて、

「魔理沙はどう思うんだ？」

そう尋ねると、

「私か？ 私は鎧とか武器とかを沢山付けたのを想像したぜ」

そんな答えが返って来る。

分かっていた事だが、三人が思い描く山の上の神の姿はバラバラだ。

そのバラバラに目を付けたのか、

「そうだ、勝負をしないか？」

魔理沙は龍也と霊夢に勝負を持ち掛ける。

「勝負？」

どんな勝負だと思いながら龍也と霊夢の二人が口を揃えてそう尋ねると、

「ああ、勝負だ。ルールは簡単。山の上に現れた神様がさっき言った姿形と合ってるかどうかだ。負けた奴は勝った奴の宴会の費用を肩代わりだ。全員外れたらドローゲームだ」

魔理沙はそう答える。

「俺はいいぜ」

「私も乗るわ」

龍也と霊夢から勝負に乗ると言つ言葉が聞けると、

「決まりだな」

魔理沙は指を鳴らしてそう言う。

「そう言えば、宴会って何時やるんだ？」

龍也がそんな事を尋ねると、

「そりゃ、今回のこれが終わった後にだろ」

魔理沙がそう言う。

「要するに、何時も通りか」

「また私の神社でかしら？」

「ま、それも何時も通りだな」

三人はそんな雑談をしながら先を進んで行くと、

「おっ」

今まで通って来た場所よりも木々が深い場所に出た。

おまけにこの場所は余り光が射さない場所の様だ。

一同が一旦立ち止まり、周囲の様子を伺っていると、

「どの辺まで来たかな？」

龍也がそんな事を呟く。

その呟きに反応した霊夢が

「まだまだね」

そう返し、

「妖怪の山はかなり大きいからね。まだ中腹にも来てないんじゃないかな
いかしら？」

そう言葉を続ける。

「外観通り、相当大きいって事か」

「直接歩いて登るとなれば、相当な時間が掛かるだろうな」

「ま、そんな面倒なのはごめんだけどね」

龍也、魔理沙、霊夢の三人はそんな会話を繰り返しながら再び前へ進むとすると、

「……つと」

三人の直ぐ近くを弾幕を通過する。

どうやら、妖精の一団が現れた様だ。

「ほんと、妖精って何所にでも出てくるのね」

現れた妖精を見ながら、霊夢は溜息を一つ吐きながらそう呟く。

「ま、異変解決の道中に大量の妖精に襲われるのはある種のお約束だからな」

霊夢の呟きに反応する様に魔理沙はそう言つと、

「まあ、それ以外だと妖怪に襲われる事が多いんだけどな」

妖精から放たれた弾幕を避け、弾幕を放って妖精を撃ち落しながら

龍也はそう返す。

「そう言えばさ、ここって妖怪の山なのに襲いかかって来るのは妖精だけだよな？」

全然妖怪が出て来ないのはどうして何だ？」

龍也の発言を聞き、龍也と同じ様に妖怪を撃ち落している魔理沙がそんな事を尋ねると

「それはあれじゃない？ 妖怪の山の頂上に神が現れ、その神を警戒して妖怪の山全体がピリピリしてるってさっき会った穰子が言ってたでしょ。それを感じ取って大人しくしてるんじゃない？」

霊夢が弾幕を放ちながらそう答える。

「成程。知能の欠片も無い様な妖怪でもそれを感じ取って大人しくしてるのか」

霊夢の答えを聞き、龍也は納得した表情になる。

「まあ、出て来ない方が楽だからね。そこんじよそこらの妖怪でも妖精よりはずっと

強いから倒して進むとなると余計な時間を喰う事になるし」

「だな。基本的に妖精は弾幕の一発や二発をぶつけてやれば倒せるしな。流石に妖怪はそうはいかないだろ」

霊夢、魔理沙が妖怪が出て来なくて楽でいいと言っ様な事を話していると、

「終わったみたいだな」

襲い掛かって来た妖精を一掃し終えた様だ。

適当に雑談をしながらでも、そこんじよそこらの妖精を一掃する位ならこの三人にとっては造作もない事の様だ。

妖精を一掃し終えたので、龍也達は再び妖怪の山の頂上を目指して移動を開始する。

その間にもちよろちよろと妖精が現れては弾幕を放って来たが、龍也達の足を止める事は出来ずに撃ち落されていく。

そんな感じで先へ進んで行くと、

「ん？」

龍也達の目の前の一人の女性が現れた。

頭頂部に赤いリボンを着け、緑色の髪を胸元辺りで纏め、赤と赤を暗くした色合いで構成された服を着た女性だ。

それと、何かは分からないが黒っぽい何かが彼女の周囲に漂っている。

こんな所に現れたのだから、彼女は妖怪の山の住人であろう。

龍也はそう思い、彼女に話し掛け様とするとその女性は行き成り体を回転し始めた。

同時に回転する謎の物体が次から次へと彼女の周囲に現れ、龍也達に向って弾幕を放って来た。

龍也達は放たれた弾幕を避け、

「おい！！ 行き成り……」

何するんだと龍也が言葉を続け様とすると、

「……居ない？」

その女性の姿は何所にもなかった。

まるで白昼夢を見ていた様だと龍也が思っている。

「おい、龍也！！ ポケツとしてないで手伝ってくれ！！」

魔理沙からそんな声が掛かる。

その声に反応して龍也が魔理沙の方に顔を向けると、大量の弾幕を放っている魔理沙の姿があった。

「ああ、悪い悪い」

龍也はそう謝り、大量の弾幕を放つ。

同時に、

「たく、厄介な置き土産をしてくれたわね。あの女!!」

同じ様に大量の弾幕を放っている霊夢の愚痴が聞こえて来た。

その声色には幾分かの苛立ちが感じられた。

まあ、それも無理はない。

霊夢としてはさっさと妖怪の山の頂上に居る神をぶっ飛ばしたいのだ。

なのにその山の頂上に行く為の道中でこの足止め。

苛立っても仕方がないであろう。

そして、龍也達がこの回転する謎の飛行物体と交戦し始めて少しすると、

「こいつで……ラスト!!」

魔理沙のそんな言葉と共に、最後の一体が撃墜された。

それを確認すると、

「それにしても、何だっただんださっきの奴」

魔理沙はそんな事を呟く。

「何だっついていいわ。どの道、後でぶっ飛ばすんだから」

その呟きに霊夢はそう返す。

どうやら、妖怪の山の頂上に現れた神をぶっ飛ばす序に先程の女性もぶっ飛ばす様だ。

少々の時間の様に無駄に感じられるが、後で後ろから邪魔される前に潰すと言っの
であれば理に適っている。

「でもよ、さっきの奴が何所に向ったのか分かるのか？」

龍也がそんな疑問を口にすると、

「分からないけど、あっちの方に行けば居ると私の勘が言ってるわ」

霊夢はそう口にしながらある方向を指さす。

「勘って……」

龍也はそう言って少し呆れた目を霊夢に向けるが、

「あら、忘れたの？ 私の勘は良く当たるのよ」

そんな霊夢の発言を受け、

「ああ……」

龍也は霊夢の勘が優れて居る事を思い出した。

「それじゃ、行きましょう」

霊夢の言葉を合図にし、一同は再び先へと進んで行く。

霊夢が指さした方へ。

その道中でも当然の様に妖精は現れて襲い掛かって来た。

そして、これまた当然の様に龍也達の足を止める事は出来ずに次々と撃ち落されて行く。

が、そんな風に次々と撃ち落される妖精の中で一体だけ他の妖精とは一線を画す妖精が現れた。

どの辺りが違うかと言うと、弾幕が違うのだ。

この妖精が放つ弾幕はそこら辺の妖精が放つ弾幕と文字通りケタが違うのである。

その事に龍也達は驚いた。

だが、その妖精の耐久度自体は大した事はなかったので直ぐに撃墜する事が出来たが。

そんなこんなで進んで行くと、更に光が届かない場所に龍也達は辿り着いた。

同時に、

「ん？」

「お？」

「あら？」

三人は何かを感じて立ち止まって周囲を警戒し始める。

「……感じた？」

そんな霊夢の呟きに反応する様に、

「ああ」

「急に空気が重くなったな」

龍也、魔理沙はそう言葉を発する。

必ず何かが来る。

三人はそう考えて周囲の警戒を続けていると、

「あら、先程のあれで追い返したと思ったのに」

そんな事を言いながら先程の女性が現れた。

「漸く会えたわ……」

霊夢はそう言いながらその女性に敵意を籠めた視線を向ける。

「あ、あら？ 何でそんなに敵意を籠めた目で見られてるのかしら？」

霊夢から敵意を籠めた目で見られた女性はそう言いながら少し後ろに下がる。

そんな女性に対し、

「そりゃ、あんな置き土産をされたこともなるだろ」

魔理沙はそう言う。

「置き土産って……私はただこれ以上進むなって言う警告をしただけなのに」

魔理沙の発言を受けて女性がどう返すと、

「警告にしてももつと他にやり様があっただろ」

龍也はそう突っ込む。

「と言うかあなたは誰で、何であんな事をしたんだ？」

そして龍也がそう尋ねると、

「ああ、自己紹介がまだだったわね。私の名前は鍵山雛。厄神よ」
女性……雛はそう名乗る。

「「厄神？」「」

そう言っつて龍也、霊夢、魔理沙の三人が首を傾げると、

「解り易く言うのであれば、厄っつと言うものを集めてそれを遠い所に流すと言っつ役割を
持った神ね」

雛がそう説明をしてくれる。

「あんだ……神様だったのか」

龍也が少し驚いた風にそう言っつと、

「言われて見れば確かに」

「そう言われて見れば、確かに神力を感じるわね」

魔理沙と霊夢がそう言葉を続ける。

それを聞きながら、言われて見れば同じ神であるからか静葉と穰子と似た感じを受ける
なと龍也は思った。

「あんたがどう言っつた存在なのかは分かった。それで、俺達を追い返そうとした

理由は何だ？」

「追い返そうとした理由も何も……貴方達、ここが何所か分かっているの？ 妖怪の山よ。頭の固い天狗や知能の欠片も無い様な妖怪に見つかったら生きて帰れないかもしれ
ないのよ」

雛はそう言いながら心配そうな表情を龍也達に向けると、

「生憎、私達はここ等辺の奴等に負ける程弱くはないぜ」

魔理沙が胸を張りながらそう言う。

そんな魔理沙の発言を聞き、

「まあ、空を飛べてこんな所まで来るからには弱くはないのだろうけど……」

雛はそう呟きなら龍也達三人に目を配らせる。

一通り三人の姿を見た後、

「それはそうと、貴方達は何の為にこの妖怪の山にやって来たの？」

雛は妖怪の山にやって来た目的を尋ねる。

すると、

「妖怪の山の現れた神をぶっ飛ばしに来たのよ！…」

間髪入れずに霊夢がそう言う。

「山の上に現れた神を……」

霊夢の発言を受けた雛は心底驚いたと言う表情をするが、直ぐに表情を戻し、

「なら、貴方達を何が何でもここから先に通す訳には行かないわね」

そう言っつて身構える。

「……どうしてだ？」

雛から発せられるピリピリした空気を感じながら龍也がそう尋ねると、

「山の上に現れた神がとても危険な存在だからよ」

雛は静かにそう言う。

「私は遠くから少し見ただけだけど、あれは戦神とかそう言った類の神。更に言うので

あれば、天狗達が手を出さずに警戒だけに留めている。それはつまり、天狗側が下手に

手を出せないと言う事。その様な存在の居る場所に向かい、且つ戦いを挑もうとしている

る貴方達二人を止めるのは当然でしょう」

どうやら、雛は純粹に龍也達の事を心配して居る様だ。

だが、

「心配してくれてるのはありがたいが、それでも俺達は行くぜ」

「そう言う事。それに異変解決は私の仕事だしね」

「大体、ここまで来て何もせずにノコノコ帰る何て事は在り得ないぜ」

それで引く龍也達ではなかった様だ。

龍也達の決心が固い事を理解したのか、

「なら、私を倒してから先に進みなさい」

雛はそう言う。

「少なくとも、私を倒せない様では山の上に神に勝つ事は出来ないわよ」

要するに、雛はここから先に進むだけの力があるか見せると言っているのである。

それを三人が理解すると同時に、

「なら、私がやるわ」

霊夢がそう言って前に出る。

元々、雛をぶっ飛ばすと言っていたのは霊夢なので龍也と魔理沙の二人は霊夢が戦う事に異論はない様だ。

霊夢が雛に近付いて行くのを見ながら、

「私達は どうする？」

魔理沙は龍也にそう尋ねる。

「二人の戦いを見てようぜ。雛は神で妖怪の山の頂上に現れたのも神だ。山の上に現れた神と戦う時に雛の戦い方が何かの参考になるかもしれないな」

そんな龍也の提案を

「分かったぜ」

魔理沙は受け入れた。

そして二人の邪魔にならない様に龍也と魔理沙が距離を取ると、

「ルールはどうするの？ それもルール無しでやる？」

「弹幕ごっこでいいわ」

「あら、弹幕ごっこでいいの？」

「ええ。弹幕ごっこでも貴女の動きなどを見ればどの位強いのかは

分かるし。それに、
あまり人間を傷つける様な事はしたくないしね」

霊夢と雛がそんな会話を繰り返り広げ、雛がその言葉を発したのと同時に弾幕ごっこが始まった。

最初に動いたのは雛だ。

雛は自分の周囲に赤と青の球体を生み出し、そこから赤と青のお札型の弾幕を霊夢に向けて放つ。

それを見ながら、

「使い魔タイプの弾幕か」

魔理沙はそう呟いた。

「使い魔タイプって言うと……前に俺のスペルカードのテストに付き合ってた貰った時にお前が見せたあれか？」

「ああ、そうだけ」

「しかし、ああ言うタイプの弾幕って使い易いのかね？俺は直接放つ方が使い易いと思うけどな」

「慣れれば使い易いと思うけどな。練習するって言ったら付き合っ

てやろうか？ 対価
は私の茸狩りの手伝いでいいぜ」

「機会があればな」

「分かったぜ。ああ、そうそう。使い魔タイプで思い出したんだが
霊夢もそんな感じの
を持つてるんだよな」

「そうなのか？」

「ああ、陰陽玉って言うのをだな」

「ああ……前にそんなの見た事があったな。何時だったか忘れたけ
ど。ならば、何で

霊夢はそれを使わないんだ？」

「霊夢曰く、制御が面倒臭いからだそうだ。追い詰められたりする
様な事でもない限り
使わないんじゃないか？」

そんな龍也と魔理沙の二人の会話が聞こえたのか、

「お気楽ねえ、あんた達」

霊夢は回避行動を取りながら少し呆れた声色でそう言う。

そして、

「そろそろ、私も反撃開始といきましょうか」

弾幕を放つ。

霊夢の放った弾幕は雛の弾幕を掻い潜るようにして雛に迫る。

その迫って来る弾幕を避けながら、

「思っていたよりも強いわね……」

雛はそう呟き、

「なら、もっと強くしましょっか」

放つ弾幕の量、密度を強くする。

だが、それでも霊夢に弾幕は当たらなかつた。

自分の放つ弾幕が一向に当たる気配を見せない事に雛は焦りの表情を見せる。

同時に、

「大分体が温まって来たわね」

霊夢はそう言って放つ弾幕の量、密度を強くする。

それにより、雛に迫ってくる弾幕の数が大きく増加する。

最初は余裕を持って避けていた雛であったが、段々とその余裕が無くなつて来た。

このままでは主導権を握られると思い、状況を打開する為に雛はスペルカードを取り出し、

「悪霊『ミスフォーチュンズホイール』」

スペルカードを発動する。

同時に、雛は体を回転させる。

その行為に一体何の意味があるのだと霊夢が思っていると、雛は弾幕をばら撒き始めた。

「体を回転させながら弾幕をばら撒いて弾幕のランダム性を高めているのかしら？
でもその程度……ッ!？」

霊夢は雛のスペルカードの最大の利点を推察していると、突如何かを感じて体を動かす。

すると、先程まで霊夢の居た場所に弾幕が通過する。

どうやら、何もない所から弾幕が放たれた様だ。

「これは……」

自分が居た場所を通過する弾幕を見て霊夢は理解する。

この弾幕の特性を。

ランダム性の高い方に注意を向ければ見えない場所から迫る弾幕に、逆に見えない場所から迫る弾幕に注意を向ければランダム性の高い弾幕に。

片方に注意を向けさせてもう片方の弾幕で仕留める。

これはそう言ったタイプのスペルカードなのである。

だが、それはこれはスペルカードの真骨頂ではない。

このスペルカードの真骨頂は注意の分散にある。

二つのタイプの弾幕が迫ってくれば当然、その両方に注意が向く事になる。

それ即ち、一つに弾幕に完全に注意が向かないと言う事である。

完全に注意が向かなければ注意の外から迫った弾幕を大幅な動きで回避する事になりかねない。

そうなったら、余計に弾幕が濃い場所に突っ込む可能性が出て来る。

そして、それを避ける為にまた更に弾幕が濃い場所に突っ込み……
と言う悪循環に

嵌る可能性が出て来る。

その事は霊夢も理解している。

理解はしているが、霊夢は少しずつ雛の弾幕に追い詰められていく。放たれている弾幕に注意を向けないと言つのはありえないからだ。追い詰められていく霊夢を見て、雛は自分の勝利を確信していた。勝負が決した後に彼女達をこの山から追い返すだけ。

そんな考えを廻らせていると、雛は霊夢の死角から迫る弾幕を発見した。

更にはその死角から迫るに弾幕に霊夢は気付いている様子はない。あの弾幕に当たれば霊夢は体勢を崩し、その後に大量の弾幕をその身に受ける事になるであろう。

雛がそう思っていると、

「…………え？」

霊夢は自然な動きで弾幕を避ける。

その事態に雛が啞然とした表情をしていると、

「私らしくなかったわね。一寸熱くなり過ぎてたかな？」

霊夢はそんな事を言い出す。

「こう言うタイプの弾幕は自分の勘に従って避けるのが一番ね」

「勘って……」

勘で避けると言った霊夢に雛は呆れた表情を向けるが、先程とは打って変わって弾幕が当たるとは言えない為、雛は何も言えなかった。

そして、

「これ以上時間を取られるのもあれだし、決着を着けさせて貰うわよ」

霊夢はそう言いながらスペルカードを取り出し、雛に向かって突っ込んでいく。

当然、弾幕の中を掻い潜って行く事になるが、霊夢に弾幕が当たる事はなかった。

自分に近付いて来る霊夢を見て、スペルカードの発動を止めて回避行動に移るべきか雛が考えていると、

「神霊『夢想封印』」

霊夢がスペルカードを発動した。

「しまっ!?!?」

雛がその声を発した時にはもう遅く、七色に光る弾が次々と雛に命中し爆発を起こして行く。

爆発が晴れると、

「ケホツケホ……無茶をする子ねえ」

多少服をボロボロにした雛が出て来た。

「どう、これでも文句ある？」

霊夢がそう尋ねると、

「ないわ」

雛がそう答えた。

こうして、霊夢と雛の弾幕じっこは霊夢の勝利で幕を閉じた。

風神録編 その3

「やれやれ、ここまで強いのなら私の心配は余計な心配だったかしら」

弾幕ごっこが終わった後、服に付いた埃などを払いながら雛はそんな事を言う。

それに対し、

「ま、異変解決の道中に出て来る相手にそう易々と負けて何てやれないしね」

何所かすつきりした表情で霊夢はそう返す。

どうやら、雛を倒した事で幾分か機嫌が良くなった様だ。

「こんな子と一緒に来てるって事は貴方達も同じ位は強いだろうし、大丈夫そうね」

雛は龍也と魔理沙を見てそう言い、

「くどい様だけど、天狗には気を付けてね。妖怪の山全体がピリピリしている今の状態

で天狗に会おうものならどうなるか分かったものじゃないわ」

そう続ける。

「ああ、分かった」

龍也がそう返すと、

「まあ、天狗の大半は山の頂上に現れた神社の監視と警戒を重視しているから山の頂上

へ向う道中で天狗が出て来たとしても精々一人や二人だろうけど、油断はしないでね」

雛が捕捉する様にそう言う。

「ん？ その言い分だと私達が山の頂上に現れた神と戦っている最中に天狗達が横槍を入れてくるって事もあったりするのか？」

雛の発言を聞き、魔理沙がそんな疑問を口にすると

「多分それはないわね。言ってしまうえば貴方達は妖怪の山の外に住まう住人。貴方達が

山の頂上に現れた存在と争っても妖怪の山……天狗達との全面戦争に突入するって事は起きないしね。寧ろ、貴方達と相対した時の反応でこれからの動きを決めるんじゃないかしら？」

雛はそう返す。

「」「動き？」「」

そう言って龍也と霊夢と魔理沙の三人が首を傾げると、

「ええ。敵対か共存か不干渉かのね」

雛は答える。

「つまり、俺達が出した結果しだいでは妖怪の山の今後の行く末が決まるって訳か。

結構な大事になって来たな」

龍也がそんな発言をすると、

「ま、どうせ上手い所に落ち着くでしょ」

霊夢がどうって事ないと言った表情でそう返す。

確かに、霊夢の言う通り今まで起こった異変を解決した後は全部上手い場所に落ち着いていた。

今回も同じ様に……と考えるのは些か楽観的ではあるが、変に気負うよりは遥かにマシであろう。

龍也はそう考え、少し気が張っていたな思いながら肩を回している

「一寸気付いたんだが、天狗達が手を出さないのなら態々山を登る様にして頂上を目指さなくてもいいんじゃないのか？」

ふと思いついた事を口にする。

「それはお勧めできないわね」

それを聞いた雛はそう口にする。

「天狗達が手を出さない状況下はあくまで貴方達が山の頂上に現れた戦っている時……」

もう少し言うのであれば貴方達が山の頂上に現れた神の敷地内に入った時。そんな時に

手を出せば天狗達ももう無関係ではいられないからね。それ以外で天狗達に見つかった

のなら、妖怪の山から貴方達を追い出そうとするわね。下手をしたら天狗総出でね」

「そっか、ならその方法は諦めるか」

龍也は溜息混じりにそう言う。

「兎も角、貴方達は人間だから山の上に現れた神に殺される事はないとは思っけど、気を付けてね」

雛がその声を掛けてくれた。

「異変解決は私の仕事だからね。心配されなくてもちゃんと解決すわよ」

霊夢が胸を張りながらそう言うと、

「異変解決が仕事……若しかして、貴女が博麗の巫女？」

雛は少し驚いた表情をして霊夢の方を見る。

「何よ、気付いてなかったのか？」

「いえ、今代の博麗の巫女の話なんて全然耳に入って来なかったから……」

雛がそんな事を言うと、四人の間に何とも言えない空気が流れる。

その空気を察したのか、

「と、取り合えず頑張ってね」

雛はそう言い残して何処かへ去って行った。

雛が居なくなっただ後、龍也と魔理沙は何とも言えない表情で霊夢の肩に手を置く。

「……何よ」

些か元気が無い声色で霊夢がそう言うと、

「「いや、別に」」

龍也と魔理沙が声を合わせてそう返した。

すると、

「いいわよ、別に……」

霊夢は少し落ち込んだ声色でそう呟いた。

流石に可哀想になったからか、龍也と魔理沙は霊夢を慰めながら先へと進んで行った。

先に進んでいる道中で、霊夢の機嫌はある程度直った様だ。

取り合えず、山の頂上に居る神をぶっ飛ばしてこの鬱憤を全て晴らす、
そうと言う結論に達したかららしいが。

最初っからキチンと巫女らしい事をしていればそんな思いもしなくて済んだのにと龍也
と魔理沙は思ったが、言わない事にした。

言っても変わらないだろうし、グータラやっている方が霊夢らしい
と思ったからだ。

そんなこんなで先へ進んで行くと、大量の紅葉が風に流れて飛んで
来ている光景が目に入
った。

中々に美しい光景だと思いつつ、これを肴にして酒を飲むのも良い
かもしれないと一同
が思っている。

「これは……水の流れる音か？」

何所からか水が流れる音が聞こえて来た。

「水ねえ……そっちに行ってみるか？」

魔理沙がそう提案をすると、

「そうね……こっちよりも木々が少なくて飛び易そうだし行ってみ
ようかしら」

霊夢から同意を得られた発言が帰って来る。

「なら、行ってみようぜ」

龍也のその言葉を合図にし、一同は水が流れる音が聞こえて来る場所へと向う。

すると今まで通って来た木々の生い茂る場所と変わり、日の光が良く当たる見通しが良い場所に出る。

そのせいで眩しくなった三人は手で目を覆いながら周囲を伺う。

三人の目に映った光景は何所までも続く様な綺麗な川、整理整頓された川辺であった。

「おー、開けた場所に出れたな。こりゃ飛んでの移動も楽そうだ」

周囲の様子を伺っていた魔理沙がそう口にする。

今まで、木々の多い場所を通って来たので木の枝やら何やらに気を付けながら高度を上げたり下げたり左右に移動したりと大急ぎであった為、魔理沙がそう口にするのも仕方が無い。

「そう言えば、妖怪の山には大きな滝があるって前に文が言ってたわね」

川を眺めて居た霊夢が下唇に指を当てながらそう言う。

「なら、この川が流れる先に滝があるのか？」

龍也がそんな事を口にするよ、

「多分そうね」

霊夢がそう肯定の発言する。

「だったら、この川の流れに沿う様に行けば楽に頂上まで行けそうだな」

魔理沙が嬉しそうな表情そう言つと、

「こんな見晴らしの良い場所を通つたら天狗に見つかったりしないか？」

龍也がそんな疑問を口にする。

「雛が言うには天狗には会つての精々一人か二人って話らしいし、出て来ても問題は無いでしょ」

龍也の疑問に霊夢はそう返す。

霊夢はさつさと山の頂上に現れた神をぶっ飛ばしたいので、山の頂上に行くまで相当な時間が掛かる木々が滅茶苦茶生い茂るルートよりも、多少の危険はあれど時間が掛からないルートを進みたい様だ。

それにそこ等の天狗の一人や二人なら出て来ても問題ないと思つているのだろつ。

そんな霊夢の心中を察したのか、

「今日の霊夢は行け行けモードの様だな」

「だな。気持ちは分からんでもないが」

魔理沙と龍也はそんな事を呟いた。

同時に霊夢が先へと進んで行ったのに気付いた二人は慌てて霊夢の後を追う。

先に進んでいる中、眼下を見下ろしながら進んでいると、

「玄武の沢と同じ位綺麗な川だな、ここ」

龍也がそんな事を呟く。

「確か霧の湖にも繋がっているだったか、ここの川？」

「確かそうだったわね」

龍也の呟きに反応し、魔理沙と霊夢がそう言う。

霧の湖の水も綺麗なので、その源泉とも言える妖怪の山の水が綺麗なのは自明の理である。

三人がそんな雑談を繰り広げながら先に進んで行くと、妖精の大群が龍也達の前に

現れた。

「早速現れたか」

龍也がそう呟くのと同時に妖精達が弾幕を放って来る。

その弾幕を避けながら、

「何か、妖精の出て来る量が多くないか？」

魔理沙がそんな事を言う。

「そうかしら？ さっきまでと大して変わらないと思うけど？」

そう返す霊夢に続いて

「ここは見通しが良いからそう感じるだけじゃないのか？」

龍也がそう発言する。

「ああ、成程な」

そう言つて、魔理沙は納得した表情になる。

木々が生い茂っていた場所では木を避ける様にして妖精は現れたり木に弾幕が当たらない様に放っていたが、ここではそんな風にする必要はない。

なのでこことは違い、向こうでは一度に相対する妖精の数が少なかったのだ。

だから妖精の量が多いと魔理沙は勘違いしたのだろう。

三人がそんな話をしている間にも当然の様に妖精達は弾幕を放ち続ける。

だが、そこは龍也に霊夢に魔理沙。

他の事に気を取られていても、そこ等の妖精の放つ弾幕に当たるへマはしない様だ。

そして、話も一段落付いたので三人は一斉に弾幕を放つ。

三人にの放つ弾幕の前に、妖精達は為す術もなく撃ち落されていく。中には回避行動を取った妖精もいたが、同じく回避行動を取った妖精とぶつかったり、弾幕が濃い場所に突っ込んだりと多少撃ち落される時間が遅くなっただけに過ぎなかった。

妖精の一団を一掃し終えると、

「今出て来た妖精の弾幕、やけに濃くなかったか？」

魔理沙はそんな疑問を口にする。

その疑問に、

「今までパターンからいくと、妖精が強くなったり弾幕が濃くなっ

たりって言うのは
異変の元凶に近付いている事になるな」

龍也はそう答える。

「と言う事は、このまま一直線に進めば……」

「目的地にまで一直線に行けるだろうな」

そう言つて、龍也は妖怪の山の頂上に目を向ける。

妖怪の山の頂上に何があるかまでは分からないが、先程までの木々が生い茂っていた場所と違つて目的の場所がきちんと見えているので変に迷う事もないであろう。

「まあ、さっきも言った様にこんな見通し良い所を通っていれば色んな奴等に見つかるだろうけど……」

龍也がそんな事を言つと、

「見つかるって言つても精々妖精位でしょ？ 天狗の殆どは妖怪の山の頂上に目が
いっついて、天狗は出て来ても一人か二人らしいし」

「それに出て来るのは妖精ばかりだろ？ 妖精程度なら楽に蹴散らせるだろ」

霊夢と魔理沙はそう返す。

あのままチマチマと進んでいたら山の頂上に着くまでどれだけ掛かるか分かったものではない。

ならば、多少のリスクは無視して強引に進むのもいいかもしれない。

「なら、このままこのルートで進んで行くか？」

龍也がそう提案すると、

「賛成」

「異議なし」

霊夢と魔理沙は賛成の意を示す。

そして、一同は川の流れに沿って移動を開始する。

その道中で妖精は当然の様に現れては襲い掛かって来たが三人は何の問題も無く撃退しながら先へと進んで行く。

このまま妖精だけなら頂上まで楽に行けるであろうと三人が思っていると、妖精とは違う存在が現れた。

現れたのは青を基調とした服にスカートに青い髪。

その青い髪を両端で結っており、胸元に鍵の様なアクセサリーを付

けている。

そして緑色の帽子に大きな緑色のリュックサックを背負った少女である。

少女は龍也、靈夢、魔理沙の順に見ていくと、

「げげ！？ 人間！？」

そんな声を上げて何処かへと飛んで行ってしまった。

少女が何処かへ飛んで行く後姿を見ながら、

「何だっただ、今の？」

魔理沙がそう呟く。

「さあ？」

龍也がそう返すと、

「と言うか、今のって河童じゃない？」

靈夢はそんな事を言う。

「河童ねえ……昔、香霖から河童は人間にかなり友好的だって聞いたんだが……」

「俺達の姿を見るのと同時にどっか行っちゃったな」

魔理沙の発言に龍也がそう続けると、

「人見知りだったんじゃないの？」

霊夢がそんな事を言う。

「人見知りねえ……人見知りの妖怪って言うの珍しいな」

龍也がそう呟くと、

「ま、チヨロチヨロと邪魔されるよりはいいわ」

そう言つて、霊夢は先へと向う。

それを追う様にして龍也と魔理沙も移動を開始する。

その道中でも襲い掛かって来る妖精を順調に撃退しながら三人が山の頂上を目指して
進んで行くと、

「光学『オプティカルカモフラージュ』」

何所からそんな声が聞こえて来た。

その瞬間、

「つと!?!」

「わっ!?!」

「おっと!？」

龍也達に向って弾幕が飛来して来た。

三人は突然現れた弾幕に驚くも、何とか避けて弾幕が飛んできた目を向ける。

が、

「「「……居ない?」「」」

そこには誰も居なかった。

しかし、弾幕だけは当たり前の様に放たれて来ている。

弾幕を放っている相手が分からないので、龍也達が避けに徹してから暫らくすると、

「……気付いた?」

霊夢はそんな事を呟く。

その呟きに、

「ああ」

「当然だぜ」

龍也と魔理沙はそう返した。

三人は何に気付いたのか。

それは弾幕を放っている存在が居る場所である。

何故、三人は弾幕を放っている存在が何所に居るのか分かったのか。

その答えは放たれている弾幕にある。

今、三人に目掛けて放たれている弾幕はある二つパターンで放たれているのだ。

ある部分を守る様に展開されてから向って来る弾幕と一度後方に射出してから向って来る弾幕と言う二つのパターンだ。

この展開される弾幕のパターンから霊夢、龍也、魔理沙の三人は弾幕を放っている存在が何所に居るのか分かったのである。

弾幕を放っている存在が何所に居るか分かった以上、避けに徹する必要はない。

三人は放たれる弾幕を避けながら弾幕を放っている存在が居るであろう場所に弾幕を放つ。

三人の放った弾幕は何も無い場所に着弾していく。

どうやら、見事見えない相手に弾幕が命中している様だ。

このまま見えない相手を撃ち落せると三人が思った時、

「ッ！？」

弾幕が命中している場所の空間が歪み始める。

その事に驚いた三人が思わず弾幕の射出を止めてしまう。

すると少しずつ空間の歪みが形を成していき、先程飛び去っていた少女が姿を表す。

先程去って行った少女が急に姿を現した事に龍也達が驚いた視線を少女に向けている

と、その視線に気付いた少女が自分の体を観察し始め、

「ああー！！ 私の光学迷彩装置が壊れたー！！」

そんな声を上げる。

その声に反応した龍也が、

「光学迷彩装置！？」

思わず驚いた声を上げてしまう。

まあ、光学迷彩装置何て言うある種のオーバーテクノロジーを見ればそんな声を上げても仕方が無い。

「光学迷彩装置って何だ？」

魔理沙が龍也に光学迷彩装置に付いて尋ねる。

「あー……分かり易く言えば透明人間になれる装置かな」

龍也がそう説明すると、

「ほう……透明人間になれる装置ねえ……」

魔理沙が興味を示した視線を少女に向ける。

魔理沙が考えている事を龍也が何となく察していると、

「おお！！ 光学迷彩装置の事を知ってるとは其処の人間は中々に博識だね！！」

少女が嬉しそうな表情をしながら龍也を見る。

すると、

「取り合えず、あんた誰？」

空気を変える様にして霊夢が少女そう尋ねる。

「おっと、自己紹介が遅れたね。私は河童の河城にとりって言う者
な」

尋ねられた少女……にとりは笑顔で自己紹介をする。

どうやら、霊夢の言った通りにとりは河童の様だ。

「ん？ にとり……」

龍也はにとりの名を聞いて、何所かで聞いた事があるなと龍也が少し考えていると、

「それよりも、さっさとお山から帰った方がよいよ。今のお山はピリピリしてる

からね。これ以上先に進む何て事をしちゃダメよ」

にとりはそう言って、また何処かへと飛んで行ってしまった。

にとりが飛び去って行った場所を見ながら、

「何しに来たんだ、あいつ？」

魔理沙はそんな事を呟くと、

「静葉に穰子、雛と同じ様にこれ以上進むなって言う警告に来たんでしょ」

霊夢はそう返す。

「なら、帰るか？」

龍也が少し冗談めかした声色で言うと、

「冗談でしょ」

霊夢が少し呆れた声色でそう返す。

「そうだけ。異変解決の途中で諦めて帰るなんてありえないぜ」

魔理沙も少し呆れた口調でそう言い、

「龍也だって帰る気はないだろ」

そう続ける。

「まあな。中途半端で終わらせるのは気分が悪いからな」

龍也がそう言うと、

「それにしても山の頂上に近付いて来てるからか、妖怪も出て来たわね」

霊夢は少し先が思い遣られると言った感じでそう口にする。

「今まで出て来たのは妖精を除けば基本的に人間に友好的な神様だつらからな……。」

河童は人間に友好的だとは言え、これから先はそうじゃない妖怪も出て来そうだな。

知能の欠片も無い様な妖怪とかさ」

霊夢の発言に続ける様にして少し面倒臭そうな声色で魔理沙がそう言うと、

「でも、妖怪の山って今は全体的にピリピリしてるからそう言った類の妖怪も大人しく

してるんだろ？」

龍也がそう返す。

「でも、それも永続的って訳じゃないんだろ？」

龍也の発言に魔理沙がそう言つと、

「多分……今日一日位なら大人しくしてると思うわ」

霊夢が下唇に指を当ててそう言つ。

「なら、少しペースを上げて行くか」

「そうだな。日が暮れる前には山の頂上には着きたいしな」

「そうね、ならペースを上げて行きましようか」

そして龍也、霊夢、魔理沙の三人は今までよりもペースを上げて進んで行く。

当然、妖精の大群やら回転する謎の飛行物体が現れては龍也達に向かって弾幕を放つて進行の邪魔をして来る。

だが、その程度では龍也達の進行を止めれる訳もなく、全て龍也達によって撃墜されていく。

現れた邪魔者を全て片付け、龍也達が一息吐いたタイミングで、

「あれ！？ お前達、帰ってなかったの!？」

にとりが再び現れた。

その表情は驚きに包まれている。

龍也達が妖怪の山から去らずにここまで来たのが予想外であった様だ。

「もう!! ちゃんと帰る様に言ったじゃないか!!」

にとりが怒った顔をしながらそう文句を言つと、

「何で態々あなたの言う事を聞かなきゃならないのよ」

霊夢は真顔でそう返す。

「怖いもの知らずの人間だねえ……」

少し呆れた口調でにとりがそう言い、

「そもそも、何しにこんな所に来たの?」

そう尋ねる。

その問いに、

「妖怪の山の頂上に現れた神をぶっ飛ばしに」

霊夢は間髪入れずにそう答える。

「山の頂上に現れた神……若しかして、外の世界から来た神様の事？」

霊夢の発言を聞き、にとりがそう呟くと、

「「外の世界？」」

それに反応した龍也、霊夢、魔理沙の三人がそう言っただけ、

「外の世界ねえ……龍也は何か知ってるか？」

「知ってるかと言われても……外の世界に居た時は神社とかにはあまり縁がなかったからなあ……」

「外の世界では信仰が得ずらいつて言うらしいから、本当に幻想郷に引っ越して来たのかもしれないわね。あれは冗談半分の積りも言っただけだねえ……」

そんな相談を始める。

すると、

「龍也……若しかして、お前が四神龍也？」

にとりが龍也の方の方を見ながらそう尋ねる。

「そうだが……俺の事を知っているのか？」

「うん。椛から色々聞いてるよ」

にとりが発した椛と言つ名を聞き、

「思い出した。お前、椛の友達のととりか」

にとりが椛の友達の河童である事を思い出した。

幸い言つては何だが、にとりは龍也の事を知っている。

ならば、すんなり自分達を通してくれるかもしれないと龍也が思っている、

「お前が四神龍也だつて言つんであれば、尚更これ以上先に進ませる訳にはいかないね」

にとりはそう言つて、構えを取る。

「お前から恨みを買つた覚えはないんだが……」

「あ、龍也には恨みはないよ。ただ、人間は盟友だし友達の友達があんな危険な所に行くのを見過ごす事は出来ないからね。近くに行つたら例え光学迷彩装置を使つてもバレるから遠くから見ただけけど、あそこに居る神は相当強い力を持っている様だしね」

どうやら、にとりも龍也達の身を案じてここから先に進ませない様
にしている様だ。

とは言え、龍也達も危険だからと言って足を止める気はない。

自分が戦かうかと思つて龍也が前に出ようとすると、

「私がやるぜ」

そう言つて、魔理沙が龍也よりも先に前に出る。

「むー……大人しく帰る気はないんだね」

「当然だぜ」

「なら、力尽くで追い返す事になるよ。まあ、盟友を傷付ける様な
マネはしたくない
から弾幕ごっこでだけだ」

「別に構わないぜ。ただ、私は弾幕も強いぜ」

魔理沙はそう言つて、不敵な笑みを浮かべる。

そんな二人の様子を見ながら、

「また足止めか」

霊夢は不満気な表情をしながらそう言つ。

「まあ、にとりは何か情報を持つてるみたいだからそれを聞いてか

らでもいいんじゃないか？」

「私は早く先に進みたいんだけど……」

霊夢と龍也がそんな事を言いながら後ろに下がると、

「そう言えば、自己紹介がまだだったな。私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだぜ」

魔理沙はにとりに自己紹介をする。

それを合図にしたかの様に魔理沙にとりの弾幕ごっこが始まった。

始まって早々、にとりは細かい弾幕は大量にばら撒きつつ、要所要所で大きな弾幕を放って来た。

「おっと」

魔理沙はにとりが放つ弾幕の隙間に器用に体を入れて避け、

「さて、私からもいかせて貰うぜ!」

そう言って、弾幕を放つ。

魔理沙の放った弾幕はにとりが放った弾幕の隙間を縫う様ににとりに迫る。

「わわ!」

自分に迫って来る弾幕を見て、にとりは驚きつつも何とか魔理沙の弾幕を避ける。

「うっー……まさかこうも簡単に避けられるとは……」

「言っただろ？ 弾幕ごっこも得意だって」

そう言いながら魔理沙は放つ弾幕の量を増やしていく。

自分の放つ弾幕が次々と相殺され、追い込まれた始めたにとりは危機感を覚えたのか
スペルカード取り出し、

「洪水『ウーズラツティング』」

スペルカードを発動させる。

その瞬間、魔理沙の真横から魔理沙を呑み込む程の量の弾幕が現れる。

周囲を見渡し、自分が包囲された事に魔理沙が気付いたのと同時に、

「つとお!？」

その弾幕が一斉に魔理沙に迫って来た。

最初はその弾幕の量に圧倒されたが、魔理沙は直ぐに隙を見つけてそこに体を滑り
込ませる。

そして、そこからとりに向けて弾幕を放とうとするど、

「げっ!？」

にとりが魔理沙に向けて大き目の弾幕を放射状にして放って来た。

今居る場所に留まっていたには確実に被弾してしまう為、魔理沙は弾幕を放つのを止め、回避行動に移る。

勿論、真横から迫って来る弾幕に当たらない様に気を付けながら。

暫らく魔理沙が回避に徹しているととりの弾幕は消え、再び真横から大量の弾幕が魔理沙を呑み込みまんとして迫る。

その弾幕を避けながら、自分もスペルカードを使ってこの弾幕の山を薙ぎ払おうかと魔理沙が考えるが、

「……そうか、成程な」

直ぐにこのスペルカードの特徴に気付き、その考えを実行に移すのをやめる。

にとりが発動したこのスペルカードの特徴は意識の引き付けにある。行き成り大量の弾幕が現れればどうしてもそちらに意識がいつてしまっ。

その弾幕で倒せればそれで良し。

倒せなくてもそちらに目を釘付けにする事は出来る。

その間ににとりが弾幕を放って仕留める。

そう言ったタイプのスペルカードなのだ。

一見、攻略法は無い様に見えるがキチンと攻略法は存在する。

それは最初に真横から迫って来る弾幕にある。

この弾幕はただ直線に直線的に放たれているので、途中で方向転換をしたりする事はない。

つまり、最初の弾幕さえ避けてしまえば後は真横に移動しながらにとりの弾幕を避ければいいだけなのである。

だが、この方法は言うは易し行ふは難しである。

何故ならば、一歩間違えれば大量の弾幕をその身に受けてそのまま敗北が決まってしまうからだ。

しかし、そこは魔理沙。

先程と同じ様に真横から迫って来る弾幕の隙間に体を入れて避け、

にとりから放たれる

弾幕を左右に動きながら避け、自分にとり射線が空くと魔理沙はスピード重視の弾幕

を放つと言つ危険極まりない事を被弾する事なくこなす。

魔理沙が放つた弾幕は一直線にとりに向かい、直撃する。

「この量の弾幕を見ても全く物怖じしないとは……」

にとりはそう呟きながらスペルカードの発動を止める。

このスペルカードでは魔理沙を仕留め切れないと判断したからだ。

「その程度で物怖じする様な生活はしてないぜ」

にとりの発言を聞き、魔理沙は得意気な表情をしながらそう返す。

「最近の人間ってこんなに強いのはっかりなのかな？」

そう言つて、仕切り直しをする為にとりは弾幕を放つて後退をする。

にとりが放つ弾幕を避けつつ魔理沙も弾幕を放つて応戦していると、魔理沙にとりの距離がそれなりに開く。

頃合と判断したのか、にとりはスペルカードを取り出し、

「水符『河童のポロロッカ』」

スペルカードを発動する。

すると、雨の様な弾幕が辺り一面に降り注ぐ。

上空から降り注ぐ弾幕と言つのはあまり見ない。

これならば魔理沙を撃退出来る。

にとりはそう思っていたが、

「何で全然当たらないのー!?!」

そんなにとりの思いとは裏腹に魔理沙はにとりの弾幕を避けて行く。

「上空から降り注ぐスペルカードって全然見ないから初見なら確実に仕留め切れると

思ったのに……」

「悪いな、そのタイプのスペルカードは既に経験済みだぜ」

そう言つて、魔理沙は以前龍也の新作スペルカードのテストに付き合った時の事を

思い出す。

あの時は龍也のスペルカードを見れば自分にとつても良い刺激になる程度位にしか思っ

ていなかったが、こんな所でその経験が役に立つとは魔理沙も思つてはいなかった。

人生、何が起こるか分からないものである。

そう言った事もあり、魔理沙は上空から降り注ぐ弾幕を順調に避けながらにとりに向って弾幕を放つ。

魔理沙から放たれる弾幕をにとりは避けつつ、スペルカードの発動を止める。

このままスペルカードを発動し続けても何の意味もないと判断したからだ。

「何だ、スペルカードの発動を止めるのか？ この手のスペルカードはあまり見ないから結構楽しかったんだが……」

少し不満気な表情で魔理沙がそう言うと、

「ふふん。その余裕が何時まで続くかな？」

にとりはそう言いながらスペルカードを取り出し、

「河童『お化けキューカンバー』」

スペルカードを発動させる。

その瞬間、にとりの周囲に緑色の光を発する球体が幾つも現れ、

「おおつとー!!」

それがレーザーとなって次々と魔理沙に飛来する。

レーザーだけに中々弾速が速い。

おまけに量もある。

そのせいで魔理沙も完全に弾幕を避け切れなくなる。

次第にレーザーが掠り始めた魔理沙の様子を見て、

「ふふん、どうだい？ 降参するかい？」

にとりはそう言う。

「降参？ そんなものは有り得ないぜ！！」

魔理沙はにとりにそう返しながら、大きく距離を取る様にして移動を開始する。

それと同時に掠るレーザーの量が大幅に増えるが魔理沙は気にしない。

とは言え、レーザーが大量に飛び交う中を高速で動き回っても掠るだけで済んでいる

のは流石と言うべきであろう。

にとりからある程度距離が取れると、

「折角だから教えて置いてやるぜ」

魔理沙はそう言いながら懐に手を入れる。

そして、

「弾幕はブレインでもスピードでも量もでもない……」

スperlカードと

「パワーだぜ!!!!!!」

ミニ八卦炉を取り出し、

「恋符『マスタースパーク』」

スperlカードを発動させつつミニ八卦炉を構える。

その瞬間、魔理沙から極太のレーザーが放たれる。

放たれた極太のレーザーは緑色のレーザーを呑み込みながらにとり
向って突き進んで
行く。

それを目に入れたにとりは慌てて回避行動を取る。

が、反応した時間が僅かに遅く、にとりは極太のレーザーに呑み込
まれてしまう。

極太レーザーが消えると、多少ボロボロの姿になったにとりが出て
来た。

極太レーザーが消えるの感じると、にとりは顔を動かして魔理沙の

居る場所探そうと
すると、

「これで……チェックメイトってやつだぜ」

目の前でミニ八卦炉を構えた魔理沙の姿がにとりの目に映った。

これではどうする事も出来ず、

「……まいった。私の負けだよ」

にとりは自分の敗北を認めた。

こうして、魔理沙にとりの弾幕ごっこは魔理沙の勝利で幕を閉じた。

風神録編 その4

「それにしても、最近の人間は強いねー」

服に付いた汚れなどを手で払いながらにとりがそう呟くと、

「さて、知ってる事を話して貰おうか」

魔理沙がにとりに知っている事を話す様に言う。

「知ってる事と言ってもねえ……」

にとりが頬を掻きながらそう言い、

「私知ってるのは、お山の頂上に現れた神は物凄い力を持っているって言う事とその

神達は外の世界から来たって言う事位なんだけどね」

その様に続ける。

「そう言えばさっきも外の世界から来たって言ってたけど、外の世界から来たって

言うのは本当なの？」

霊夢が妖怪の山の頂上に現れた存在が本当に外の世界からやって来たのかどうかを尋ねると、

「うん、それは正しいよ。『外の世界と違って空気が美味しい』って

言う様に外の世界と
幻想郷を比べる発言をしてたからね。 外の世界からやって来たって
言うのは正しいと思
うよ」

にとりはその事を肯定する発言をする。

「あ、そう言えばお山の頂上に現れた巫女はあんた達と同じ位の年頃だったよ」

「ああ、そう言えばそれ位だったわね」

霊夢はそう言いながら妖怪の山の頂上に現れた巫女が自分の神社にやって来た事を思い出しつつ龍也の方を見る。

それに釣られる様にして魔理沙も龍也の方を見る。

「……………どうした？」

「いや、外の世界から来て私達と同じ位の年頃なら龍也の知ってる人間かもって思ってる」

「確か、外の世界の人間は皆寺子屋に通っているんだろ？」

霊夢と魔理沙からそう尋ねられ、龍也は外の世界にいた時に通っていた学校の
クラスメイト事を思い出そうとする。

が、たった一人の顔と名前すらも思い浮かばなかった。

まあ、学校に通っていた時もクラスメイトの殆どの顔と名前を覚えてはいなかったが。

龍也が覚える気が無かった事もあるが、外の世界に居た頃は喧嘩する事が多々あった

ので龍也に積極的に話しかける存在が殆どいなかったと言うのも理由の一つであろう。

とは言え、例外は存在する。

その例外とは、龍也の席の周りに居た者位であろうか。

プリント配りや小テストの回答など少しは話す機会があったからだ。

尤も、それ以外では会話をする機会はなく、席替えをするたびにその者達の顔や名前は

記憶の彼方に飛んで行ったが。

「んー……やっぱり記憶にないな。流石に神社の巫女って言うなら記憶に残っていても

可笑しくはなかっただろうし。序に言うなら、外の世界に居た頃に俺が住んでいた所の

近辺には神社は無かった筈だ」

龍也は腕を組みながらそう答える。

「そう……」

少し残念そうな顔をしながら霊夢は妖怪の山の頂上を見据え、

「ま、山の頂上に行けば全て分かるでしょ」

そんな事を呟く。

「……やっぱりお山の頂上に行くの？」

霊夢の様子を見ながらにとりがそう尋ねると、

「当然」

霊夢は間髪入れずにそう答える。

「うーん……龍也の事は椀から聞いてるし、魔理沙も今の弾幕ごっこで強いと言う事は分かった。そんな二人に付いて来てるんだからお前も強いんだろうけど……」

にとりはそんな事を呟きながら何やら考え始める。

そして少しすると、

「……多分止めても行くだろうし負けた私には何も言える事はないから、お山の事は
お前達に任せるよ」

にとりは諦めた様な声色でそう言う。

「でも、気を付けてね。お山の頂上に現れた神は相当な力を持って

いるみたいだから」

「ああ、分かった」

龍也がそう応えると、

「それじゃ、頑張つてね」

にとりはそんな言葉を残して去って行った。

そんなにとりの姿を見送った後、

「それにしても相当な力を持った神ねえ……」

「今一イメージが湧かないな」

霊夢と魔理沙がそんな事を口にする。

静葉と穰子の二柱とは戦わなかったし、雛も絶大な力を持っていた
と言う訳では

無かったので、霊夢と魔理沙の二人には力を持った神と言うのは上
手くイメージ
が出来ていない様だ。

まあ、あの三柱は戦いが専門と言う訳ではないのでそう言ったイメ
ージが出て来なくて
も仕方が無い。

悩み始めた二人に、

「取り合えず、物凄く強い妖怪って言うイメージで良いんじゃないか？」

龍也はそんなアドバイスをする。

「物凄く強い妖怪か……うん、それならイメージが出来るぜ」

顎に手を当てながらそう言う魔理沙に続き、

「そうね、ぶっ飛ばしに行くんだからその方がイメージがし易いわね」

霊夢はそんな事を口にする。

「それじゃ、さっさと先へ進みましょう」

そして霊夢のその言葉を合図にし、一同は再び妖怪の山の頂上を目指して進み始める。

龍也達が妖怪の山の頂上を目指し始めて暫らく。

道中に出て来た妖精を倒しながら順調に進んで行くと、

「おお！！」

「お！！」

「これは……」

龍也達は巨大な滝の前に辿り着いた。

その巨大な滝に

「川の流れに沿って進めば滝があると予想はしていたけど……」

「この大きさは予想外だぜ」

「だな」

霊夢、魔理沙、龍也の三人は暫しの間、目を奪われていた。

それから少しすると、

「しっかし、妖怪の山の奴等のずるいな。こんな大きな滝を独り占めしてさ」

「そうね。これに着にお酒を飲んだらさぞ美味しいでしょうに」

「あー……そんな話を聞くと酒を飲みたくなってくるな」

三人はそんな話を始める。

「魔理沙、お酒持ってないの？ よく帽子の中にお酒を入れてるじゃない」

霊夢がそう尋ねると、

「残念ながら帽子の中には何も入っていないぜ」

魔理沙は首を振りながら返す。

「ま、この件が終わった後に宴会をするんだから楽しみは後に取っておくか」

龍也がそう呟くと、

「だな。楽しみは最後に取って置くか」

同意する発言を魔理沙がする。

「なら、さっさとこの異変を解決する事にしましょ」

そして霊夢のその言葉を合図にし、一同は滝を目印にする様にして上昇して行く。

龍也達が上昇を始めて少しすると、

「空を飛べるお前等って上昇が楽で良いよな」

霊夢と魔理沙を見ながら龍也はそんな事を言う。

「……ああ、そう言えば龍也は飛んでるんじゃないやなくて空中に靈力で出来た見えない足場を作って空中を移動しているんだっただか」

龍也の方を見ながら思い出したかの様に魔理沙はそう言う。

魔理沙の言う通り、龍也は靈力で出来た見えない足場を作って空中を移動している。

厳密に言えば龍也は空を飛んでいると言う訳ではない。

今回の事で言うのであれば、龍也は連続して跳躍を行う事で上昇をしているのである。

「でも、龍也の飛びの方が良いって何時だったか妖夢が言ってたわね」

「ああ、そう言えば前に妖夢にそんな事を言われたな」

「隣の芝生は青いってやつだな」

霊夢、龍也、魔理沙の三人がそんな会話を繰り返しながら上昇しているところ、

「うお！？」

「おっと！？」

「っと！？」

滝の中から何体もの妖精が飛び出てきた。

予想外の場所から妖精が出て来たからか、三人の反応が遅れてしま
う。

その隙を突く様にして妖精達が一斉に弾幕を放って来た。

結構な至近距離で弾幕を放たれたが、三人は慌てて距離を取ったの
で直撃だけは
避けられた。

そして、お返しと言わんばかりに三人は妖精達に向って弾幕を放つ。

三人が放った弾幕は次々と妖精達に命中していく。

妖精達を全て撃ち落とすと、

「油断したわ。まさか滝の中から妖精が出てくるとはね」

霊夢は溜息混じりにそう呟く。

「妖精は何所にでもいるって言う事は分かってたが、まさか滝の中から出てくるはな」

「滝の流れる力って結構強いにな」

魔理沙、龍也がそう口にする、

「異変の影響で妖精の力が強まったから……って言えば一応の説明は付くのかしら」

霊夢がそんな仮説を立てる。

「かもな。妖精の強さも妖怪の山の頂上に近付けば近づく程に強くなっていく感じがするしな。まあ、そうでなかったら滝の妖精って事だろ」

霊夢の発言に続ける様にして魔理沙はそう言う。

「滝の中から妖精が出て来るなら滝から少し距離を取った方がいいな」

二人の話を聞きながら龍也はそんな提案をする。

「そうね、そうした方がいいわね」

「だな。上昇している最中に突撃を受けてバランスを崩されても面倒臭いしな」

霊夢と魔理沙の二人は龍也の提案を受け入れ、滝から少し距離を取

る。

それに続く様にして、龍也も滝から少し距離を取る。

そして、龍也達は再び山の頂上を目指して高度を上げて行く。

滝の中から現れてくる妖精も警戒していれば何て事はない。

龍也達が現れる妖精達を難なく撃退しながら高度を上げ続けて暫らすると、

「それにしても、随分でつかいっと言っか長い滝だな」

龍也は少し疲れた声色でそんな事を呟く。

この巨大な滝を発見し、妖怪の山の頂上を目指す為には上昇を続けてから結構な時間が経ったと言うのに一向に終わりが見えないのだ。

龍也がそんな事を呟くのも無理はない。

「そうだな。頂上まで後どれ位あるんだ？」

龍也に続ける様にして魔理沙もそう言う。

「そうね……後、半分位かしら」

二人の話を聞き、霊夢がそんな推察を述べる。

「それは勘か？」

「ええ、勘よ」

魔理沙の問いに霊夢は間髪入れずにそう答える。

「なら、後半分頑張るか」

龍也が体を伸ばしながらそう言うのと、

「妖怪の山全体を探っていたら何所かで見えた顔が見えたと思ったら……やはり龍也さん

でしたか」

龍也達よりも少し高い位置から椀が現れた。

「椀……、探っていたって言うのは能力でか？」

「はい。今の妖怪の山は状況が状況ですからね。知っていると思いますが定期的に私の能力……”千里先まで見通す程度の能力”で妖怪の山全体を探っていたのです」

椀がそう言って一息吐く。

「それで……」

「龍也さんの顔を見れば何をしに妖怪の山まで来たのか分かります」

そんな二人の会話を聞き、

「だったら、何も言わずにここを通してくれないか？ お前と龍也
って仲が

良いんだろ？」

魔理沙が割り込む様な形でそう発言をする。

「……私も龍也さんの実力は知っていますし、そんな龍也さんと一
緒に来ている貴女達
もそれ相応の実力があるのは分かります。序に言えば、貴女達二人
の事は文さんから聞
き及んでいますしね」

「文から？」

そう言っつて霊夢が首を傾げると、

「一応、あの人は先輩後輩の間柄ですから。更に言つのであれば、私と文さんの直屬

の上司である大天狗様は同じ方ですからね。話す機会はそれなりにあるですよ。あれでもっと真面目だつたらなあ……」

椛は自分と文の関係を説明し、溜息を一つ吐く。

「何か、苦勞してるんだな……」

椛の様子を見ながら龍也がそう呟くと、

「それで、椛は私等をこのまま通してくれるのか？」

魔理沙が椛にこのまま通してくれるかどうかを尋ねる。

すると、

「龍也さんは信じるに値する人間であると思っています。ですから、私個人としては

貴方達をこのまま通して良いと思っています」

椛がそう口にし、

「ですが、今この状況下は見られています。ですので、申し訳あり

ませんが皆さんを

このまま素通りさせる訳にはいかないのです」

通常の刀よりも太い刀と紅葉のマークが付いた盾を構える。

「見られてるって……近くに視線とか殺気とかは何も感じないけど？」

霊夢は不思議だと言いた気な表情で尋ねると、

「確か……双眼鏡だったかな？ 河童達が作った作った遠くを見るための道具。私は使った事はないけど、それを使ってかなり離れた場所から私達の事を見ているの。それ

れに、監視で視線や殺気を悟らせる事はないですよ」

椀がその様に説明する。

それを聞き、

「流石に全部の視線が妖怪の山の頂上に向いているって事はなかったか」

龍也がそう呟くと、

「妖怪の山も結構広いですからね」

椀はそう返す。

「見られてるってわりには天狗からの襲撃はお前だけだな」

魔理沙がそんな疑問を口にすると、

「それは、監視のみの命令を与えられた天狗だからですね。因みに、私の任務は侵入者を発見次第追い返せと言うものです」

椛はそう答える。

「だったら、見ないふりをしてくれれば良かったのに」

椛の話聞いて霊夢がそんな事を言つと、

「さ、流石にそれは……」

椛は苦笑いを浮かべながらそう返す。

「兎も角、ただでは通さないって事か？」

「そうなります」

そう言い合いながら龍也と椛が睨み合っていると、

「はあ、また足止めか……」

霊夢は不満な想いを籠めながらそう呟く。

「……これは独り言ですが、私の実力では一人を足止めするが精一杯です。貴方達の

うち一人と相對している時に残りの二人がここを抜けて行っても仕

方がないですね」

霊夢の心中を察したからか、椛がそんな事を言う。

その発言を受け、

「ありがとな、椛」

龍也は椛に礼を言う。

「ただの独り言ですから。礼を言われる様な事ではありませんよ」

椛は素っ気無い表情でそう返す。

どうやら、椛としてもこの件はさっさと解決して欲しい様だ。

「龍也」

「ああ、分かってる。椛の相手は俺がする」

霊夢から声を掛けられた龍也はそう返しながら自身の力を変える。

朱雀の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が黒から紅に変わる。

「俺が斬り込んだら……」

「その隙を付いて私達が先へ行く」

「この場は龍也任せませ」

三人がその様に計画を立て、龍也が斬り込むタイミングを探っていると、

「これも独り言ですが、山の頂上に現れた巫女は長い緑色の髪をしており、神の方は

肩口位の長さの深い青色の髪をした女性です」

椀が妖怪の山の頂上に現れた巫女と神の情報を口にする。

それを合図にしたかの様にして龍也は距離を詰める。

椀との距離が半分程になると龍也は右手から炎の剣を生み出す。

そして椀が自分の間合いに入ると、龍也は炎の剣の振るう。

それに合わせる様にして椀も刀を振るう。

龍也の炎の剣と椀の刀が激突した瞬間、霊夢と魔理沙の二人はその隙を突いて一気に

上昇をする。

二人の姿が小さくなると、龍也と椀は弾かれる様にして距離を取る。

龍也としてはこのまま霊夢と魔理沙の後を追いたいところであるが、それは椀が許さないであろう。

仮に許してくれたとしても、今この状況は見られているのだ。

少しの間、鏢迫り合いの状態を維持していると龍也は突如後ろに下がる。

龍也が突如後ろに下がった事で、椀は体勢を崩してしまふ。

その隙を突く様にして龍也は左手の炎の剣を椀に向けて突き出す。

「くっ!!」

体勢を崩しながらも椀は盾を突き出して炎の剣を防ぎ、

「たあ!!」

振り払う様にして盾を振るつ。

「ッ!!」

そのお陰で今度は龍也が体勢を崩してしまふ。

椀はその隙を突く様にして龍也の真横を抜ける。

そして、龍也と背中合わせの様な形になると椀は勢い良く振り返り、

「はあ!!」

その勢いを利用して龍也の背中に回し膝蹴りを叩き込んだ。

「ぐっ!!」

それをまともに受けた龍也はそのまま滝に向って吹き飛ばされてし

まう。

そのまま滝を突き抜けてその裏側にあるであろう岩山の激突するすと龍也は思っていたが、

「…………あれ？」

そうはならなかった。

どうも、突き抜けた滝の先は空洞になっている様だ。

龍也は体を回転させ、着地して周囲を見渡す。

「…………この辺り一帯は開けた場所になっているのか」

龍也がそう言いながら何度か地面を踏んでいると、

「ッ！？」

椀は滝を斬り裂きながら空洞の中に進入し、龍也に向って突っ込んで来た。

そして龍也が自分の間合いに入った瞬間、椀は刀を振り下ろす。

それと同じタイミングで龍也は後ろに跳ぶ。

そのお陰で、龍也の被害は前髪数本で済んだ。

後ろに跳んだ事で椀との距離が取れた龍也はそのまま体勢を立て直

して反撃に移ろうと
するが、

「そう易々と体勢を立て直させはしません!!」

それよりも早くに椀が龍也との距離を詰めて刀を連続で振るう。

「く!!」

椀の振るう刀を龍也は炎の剣で防いだり避けたりしていく。

だが、それだけだ。

龍也は椀の攻撃を避けるのが精一杯で攻勢に移れないでいるのだ。

何故か。

理由は二つある。

一つ目は龍也が体勢を崩した状態のままであると言う事。

二つ目は龍也と椀のスピードが近いからだ。

その二つのせいで龍也は体勢を崩しているから攻勢に移れず、距離が近い為体勢を立て直す為に距離を離す事が出来ないでいるのだ。

現時点では何とか堪えているが、何時龍也の体勢が更に崩れて直撃を受けるか分かったものではない。

超速歩法で距離を取って体勢を立て直そうにも超速歩法を使う暇がない。

しかし、多少の無茶をしてでも体勢を立て直さなければジリ貧だ。

龍也はそう考え、椀の攻撃を避けながら滝が流れる方へと移動する。

そして龍也の真後ろに滝が来ると、龍也は剣先を下げる。

その瞬間、

「なっ!?!」

「痛ッ!?!」

椀が突き出した刀が龍也の肩を掠り、そこから血が噴出する。

それを見ながら椀は驚いた表情を浮かべる。

龍也なら今の一撃は防ぎ切れた筈であるし、何よりあそこで剣を下げる意味が分からなかったからだ。

椀が驚いた表情をしている間に龍也は自身の力を変える。

朱雀の力から白虎の力へと。

その瞬間、龍也の瞳の色が紅から翠へと変わり、炎の剣が消失する。

同時に、龍也は後ろに跳んで滝の中にあつた空洞から脱出する。

「ッ！！ 速い！！」

跳ね上がった龍也のスピードに驚きつつも、龍也の後を追う為に椀も滝の裏側にある空洞から飛び出す。

空洞から飛び出した椀が見たものはすでに体勢を立て直し、構えを取っている龍也の姿があつた。

しかも、両腕両脚に風を纏っている。

その姿を見ながら椀は龍也が炎の以外にも風、地、水的能力を使う事を思い出した。

椀が龍也と手合わせをする時は椀の刀と盾に合わせてか、龍也は炎の剣をメインで使っている。

なので朱雀の力を使っている時以外の龍也と相対するのは椀にとって初めてである。

しかし、椀は然程今の状態の龍也を見ても驚いた様子はない。

何故か。

それは龍也が朱雀以外の力を使っている時以外の戦い方がある程度知っているからだ。

では、何時それを知る機会があったのか。

答えは”文々。新聞”にある。

”文々。新聞”では、過去に外来人特集と言う龍也をメインで扱った記事が書かれた事があった。

その時に、龍也の戦い方などが少し書かれていたのだ。

一応、先輩後輩の間柄からか椋は”文々。新聞”を購読していたのだが、こんな所で役に立つ事になるとは椋は思ってもいなかったであろう。

ともあれ、今の状態の龍也は徒手空拳主体のスピード特化で風を自由自在に操ると言う事を椋は思い出す。

その事を頭に入れ、椋は龍也に肉迫し、

「はあ!！」

刀を振り下ろす。

振り下ろされた刀を龍也は体を逸らす事で避け、

「りゃあ!！」

反撃の蹴りを放つ。

その蹴りを椛は盾で受け止め、反撃に移ろうとするが、

「次い！！」

その前に龍也の追撃の攻撃を受けてしまう。

その攻撃も椛は盾で何とか防御出来たが、

「しまっ！？」

盾をカチ上げられて胴体がから空きにされてしまう。

椛は胴体に攻撃が来るだろうと思い、身構えるが、

「……あれ？」

衝撃は一向に来なかった。

不審に思った椛が正面に目を向けると、

「ッ！？ 居ない！！」

そこに龍也の姿はなかった。

椛が慌てて龍也の姿を探そうとした瞬間、

「かつ！？」

椛の背中に衝撃が走り、そのまま叩き落されてしまう。

叩き落されながら椛は体を回転させ、先程自分が居た場所に目を向ける。

其処には足を振り下ろした状態の龍也の姿があった。

どうやら、龍也は椛の胴体ではなく背中を攻撃した様だ。

その事を椛が理解した時、龍也は椛を追う為に降下して来た。

それを見ながら降下した状態のまま椛は体勢を立て直す。

その次の瞬間、龍也が椛に肉迫して拳を突き出す。

龍也が突き出した拳に合わせる様にして椛は刀を突き出す。

二人が突き出した拳と刀は二人の二人の頬を掠り、其処から血が噴出する。

お互い頬に走る痛みを感じつつ次の一手を繰り出そうとした時、龍也と椛の二人は水面に激突し、水の中へと沈んで行く。

それから少しすると、

「ぶはっ！！」

水の中から椛が飛び出して来た。

椛は頭を振って髪に付いている水を落とし、水面をジッと見詰めて

それに気付いた椛は盾で体当たりを防ごうとするが、

「かつ!!!」

僅かに間に合わず、体当たりの直撃を受けて吹き飛んで行ってしま
う。

吹き飛ばされた椛は直ぐに体勢を立て直し、ひらがなの”の”と言
う字を模した弾幕を

龍也に向けて大量に放つ。

迫り来る弾幕を見て、龍也は椛に近付くのをやめて回避行動に移る。

隙を突いて接近し様と龍也は考えていたが、この大量の弾幕の中を
掻い潜って椛に

近付くのは無理だと判断し、両手に水を纏わせ、それを龍の手の様
な形にする。

その後、右手を手刀に形にし、

「水刀牙!!!」

右手を振るって水で出来た斬撃を椛に向けて飛ばす。

龍也から放たれた水で出来た斬撃は弾幕を打ち消しながら椛へと迫
っていく。

弾幕を放ち続けても水で出来た斬撃を打ち消すのは不可能と判断し、
椛は弾幕を放つの

止めて精神を集中させる。

そして、一閃。

弾幕を打ち消しながら進んで来たせい、水で出来た斬撃は容易く真つ二つされる。

その事を龍也は予想していた様で、続け様に

「水爪牙!!」

左手を振るって水で出来た五本の斬撃を飛ばす。

自分に迫って来る五本の水で出来た斬撃を見ながらこれは迎撃は不可能であると椛は判断し、急上昇をする事でその攻撃を避ける。

その瞬間、龍也は椛に一気に肉迫し、

「はあああああああ!!!」

右手を突き出す。

「ッ!？」

それに気付いた椛は盾を突き出してその突きを防御する。

しかし、衝撃が強かったせいで椛は少し後ろに弾かれてしまう。

その隙を突き、龍也は連続で攻撃を加える。

「くっ!!」

その攻撃を前に、椛は反撃に移れないでいた。

今は龍也の攻撃を盾で受けてはいるが、下手な手を打てばその攻撃を盾ではなく

その身で受けてしまう事になってしまうからだ。

龍也の攻撃を盾で受け止めながら椛はどうすべきか考えていると、

「……ん？」

ある事に気付く。

龍也の攻撃は椛本人ではなく盾に向いていると言う事に。

先に防御手段である盾を破壊し様と言う考えなのであろうか。

龍也の真意は兎も角、盾のみを攻撃していると言う事は椛にとっては好都合だ。

何故ならば、この状況を覆す事が出来るからである。

椛は龍也の攻撃のタイミング注意深く探り、龍也が腕を引いたのと同じタイミングで盾を引く。

そして、龍也が再び腕を振るうよりも僅かに早いタイミングで盾を突き出す。

突き出した盾に龍也の振るった手が当たり、

「づっ!?!」

龍也は弾かれる様にして後ろに下がってしまった。

その隙を突き、

「たあ!?!」

椀は龍也の鳩尾に飛び蹴りを叩き込む。

「かつ!?!」

椀の飛び蹴りを受けた龍也は踏鞴を踏む様にして数歩後ろに下がる。

その間に椀は高度を上げ、刀を天に翳して妖力を集中させる。

そして、

「レイビーズバイト!?!?!」

刀を一気に振り下ろす。

すると、剣先から狼の顔を模した妖力の塊が龍也に向けて放たれた。

「ッ!?!」

それに気付いた龍也は自身の力を変える。

青龍の力から玄武の力へと。

それに伴い、龍也の瞳の色が蒼から茶へと変わる。

その瞬間、龍也は両手を突き出して狼の顔を模した妖力の塊を受け止める。

が、

「ぐっ!!」

受け止める事は出来たものの、勢いを消すことは出来なかった。

龍也は妖力の塊に押される様にしてどんどんと高度を下げて行く。

「ぐ……う、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお!!!!!!」

水面まで後半分と言った所で龍也は靈力を解放して自身の力を底上げする。

そのお陰で勢いのある程度消す事は出来た。

だが、完全に消す事は出来ず、龍也はどんどんと高度を落としていつて水面へと叩き落される。

その数瞬後、龍也が叩き落された水面が爆発を起こし、水柱が上がる。

これで終わった思えない椛は龍也が叩き落された地点をジッと見詰めていると、そこから龍也が飛び出して来る。

水面から飛び出した龍也は椛と同じ高度に来て、上昇を止める。

先程までと違い、今の龍也は紅い髪に紅い瞳を輝かせ、右手から炎の剣を生み出した状態である。

その姿を見ながら、

「あれが力を解放した状態……」

椛はポツリとそう呟いた。

龍也の力を解放した状態は話して聞いたり偶に”文々。新聞”で見られる程度であった為、こうして直接見るのは椛にとっては初めてである。

初めてなのは手合わせする時は手合わせなので龍也は力の解放はしなかったし、椛も本気を出す事はなかったからだ。

「百聞は一見に如かず……か」

椛はそう呟きながら構えを取り、油断無く龍也を見る。

髪の色が変わり、瞳が輝き出しただけであると言つのに龍也から感じる靈力、

！」

妖力を解放して自身の力を底上げする。

そして、そのまま椀は龍也に肉迫し、

「たあ！！」

刀を振るう。

それを受け止める様にして龍也は炎の剣を振るう。

二人が振るった刀と炎の剣が激突し、激突音と衝撃波が発生する。

その後、少しの間鏢迫り合いの状態を維持していたが直ぐに互いの得物を離して再度激突させる。

それを何度も繰り返す。

何度も何度も。

何回目かの激突の後、椀は弾かれる様にして間合いを取って妖力の解放を止め、

「妖力を解放した状態でもこれか……」

僅かに痺れた右腕を見ながらそう呟き、龍也の方に目を向ける。

見た感じ、腕を痺れさせている様子をはなげだ。

あああ！！！！」

二人は駆ける。

互いが互いの間合いに入ると、二人は躊躇無く得物を振り下ろす。

一瞬の激突の後、二人は交差する。

龍也と椛が背を向け合っていると、二人の中間地点に何か突き刺さる。

何が突き刺さったのか。

それは椛の刀だ。

どうやら、二人が激突した時に椛の刀は椛の手を離れて宙を舞い、水面に突き刺さった様だ。

その音を聞いて、龍也が振り返ろうとすると、

「龍也さん、貴方の……勝ちです」

椛はそう口にする。

その言葉を受け、

「椛……色々ありがとう」

龍也はそう礼を言う。

その言葉に、

「さて、礼を言われる意味が分かりませんね」

椀がそう返す。

「……ああ、そうだな」

龍也は椀が返した言葉を肯定するような言葉を言い、炎の大剣を消して力も消す。

龍也の髪と瞳の色が元の黒色に戻ると、龍也は霊夢と魔理沙の後を追う為に再び流れ

落ちる滝を目印にして上昇していった。

龍也の姿が見えなつた頃、椀は振り返つて自分の刀が突き刺さつた場所まで歩く。

そこに辿り着くと椀は刀を抜いて装備し直し、

「ふう………」

息を一つ吐く。

そして、

「……反省しなきゃいけないかな」

そんな事を呟いた。

本来、白狼天狗である椀の任務は侵入者などの追い返しで、進入した来た者が自分の手に余る様な存在であれば撤退して上の者に報告すると言つものである。

今回の事で言えば、龍也が力を解放した時点で椀は撤退すべきであった。

何故撤退しなかつたかと言うと、単純に龍也との戦いを楽しんでいただけからだ。

正確に言えば戦っている最中に段々と楽しくなっていたと言う感じである。

そこまで考えを廻らせた椀は、

「……文さんに似たのかな？」

そう呟いた。

若しかしたら、自分の先輩である射命丸文に色々と注意したりしているうちに何所か似て来てしまったのかもしれない。

それはそれでイヤな感じがしたが、戦いを続けてある事を知らしめる事が出来た。

知らしめたものは龍也の強さである。

龍也と椀、この二人の戦いは椀が『見られている』と言った天狗に確実に見られていたであろう。

それ即ち、二人の戦いは上の者に報告されると言う事。

そうなれば龍也はそこ等の天狗では適わないと言う事が広まり、少ないとは言え妖怪の

山の頂上ではなく全体を見回っている天狗に襲撃される可能性はグッと低くなるであろう。

それに続く様にして龍也と一緒にいた霊夢と魔理沙への襲撃される可能性もグッと減ることであろう。

その事を考えれば最後まで戦いを続けたのは悪い事ではなかったかもしれない。

序に言えば、弾幕ごっこではなく通常戦闘で戦ったのは素通りさせた二人の事を考えて弾幕ごっこでは体面的に悪いかなと椀は考えて通常戦闘を行ったのだが、こちらの方が龍也の強さをより知らしめる結果になった様なのでこちらも結果オライであろう。

ただ、問題は

「問題はこの事が報告されて広まるまでの時間と大天狗様達が動き出さないかの二つ」

この二つである。

最初の方は然程問題ないであろうが、問題は二つ目である。

この事が報告されて一部の大天狗達が動き出したら大変だ。

龍也達ならば大丈夫であろうと椀は考えるが、直ぐに自分の直属の上司である大天狗の姿が頭を過ぎる。

椛、文の直属の上司である大天狗は天魔に匹敵する実力があると
言われている。

実際に戦っている所は見た事はなかったが、そこまで言われる位な
のだからそれ相応の
実力はあるであろうと椛は思っている。

もし、龍也達がこの大天狗と相対したら……………。

椛はそこまで考え、

「……………直接大天狗様に報告した方が良いかもしれない」

ポツリとそう呟いた。

椛、文の直属の上司である大天狗は全員で十数人いる大天狗の中
でも一番の武闘派で
あるが、思慮深い性格をしている。

「上手い事説明すれば……………」

龍也達を援護する様な形になるかもしれない。

椛はその様に考えて今後の行動を決めると龍也が飛んで行った見詰
め、

「山の頂上に現れた神は強敵です。気を付けてくださいね、龍也さ
ん」

そう呟いた。

その後、周囲を見渡し、

「……………盾、何所に投げたっけ？」

そんな事を言っただけだ。

風神録編 その5

椀を倒し、霊夢と魔理沙の後を追う為に滝を目印にして再び上昇をする龍也。

その間に龍也はある事に気付く。

それは、

「…………妖精が出て来ない？」

妖精が全く出て来ない事にだ。

霊夢、魔理沙と一緒に上昇していた時には滝の中から妖精が現れては攻撃を仕掛けて来た。

なので、龍也は再び上昇をする事になった今回も滝には注意を向けていた。

だが、一向に妖精が現れる気配がない。

その事を不審に思い、龍也は少し考えてみると、

「…………霊夢と魔理沙が全て倒したのか？」

霊夢と魔理沙が全て倒したと言う可能性が出て来た。

霊夢と魔理沙は龍也が椀と戦っている間にも上昇を続けて先へと進

んで行った。

ならば、その間に道中で出て来た妖精を全て倒していても何の不思議は無い。

「霊夢と魔理沙のお陰で楽に進めるみたいだし、二人には感謝だな」
龍也はそう呟き、早く二人に追いつく為に上昇するスピードを上げる。

それから暫らくすると、

「……やっと終わった」

滝を完全に上り切る。

上り切った後、龍也は一息吐く。

その後、気になったのか振り返ってここから見える景色に目を向ける。

すると、

「じいっは……」

龍也はその景色に目を奪われた。

あまりに広大な景色に。

龍也自身、今まで幻想郷中を色々と旅して回って来た中で凄い、美

しいと言う様な景色
などは沢山見て来た。

だが、広大と言えるような景色を見た事は殆ど無い。

自分で上昇して見下ろす景色とこう言った場所に登って見下ろす景色とではこうも違う
ものなのかと龍也は内心驚いていた。

これからは高い場所を探しながら想郷中を旅して回るのも良いかもしれないと龍也は思い
ながら、ここから見える景色を目に焼き付けていく。

それから少しすると、

「……………って、いけね！！　ここまで来た目的を忘れ掛けてた！！」

龍也はそう言って慌てて振り返る。

ここに来た本来の目的は異変解決にある。

先に進んで行った霊夢と魔理沙なら大丈夫であろうが、一緒に異変解決に来たのだ。

まかせつきりにすると言うのは気が引ける。

「……………よし！！」

龍也は両頬を叩いてまだこの景色を見たいと言う想いを振り切り、
妖怪の山の頂上を

再び目指し始めた。

龍也が再び妖怪の山の頂上を目指し始めて暫らく。

龍也は少し拍子抜けした想いを抱きながら順調に進んでいた。

何故、拍子抜けしているのか。

それは妖精が全く出て来ないからである。

その事から、

「このルートは霊夢と魔理沙が通ったっばいな」

龍也は今通っているルートが霊夢と魔理沙が通ったルートであると
言う事を推察する。

先程もそうであったが二人が先行してくれたお陰で後から来た龍也
は楽に進む事が
出来ている。

その事から、二人に何か礼でもした方がいいかなと龍也が考えてい
ると、

「ん？」

「あや？」

目の前に人の影らしきものが見えた。

龍也は急ブレーキを掛けて止まり、誰が現れたのか確認する為に顔
を上げる。

そこには、

「文」

文の姿があった。

文の姿を確認した龍也は、文に声を掛け様とすると、

「霊夢と魔理沙から聞いていたから貴方が来ている事は知っていたけど……まさか、こんな所で会う何てね」

先に文が口を開き、溜息を一つ吐く。

何時もと雰囲気が少し違うなと龍也が思っていると、

「一応聞いて置くけど、貴方も妖怪の山の頂上に現れた神社を目指しているの？」

文がそんな事を尋ねて来た。

「ああ」

龍也がその事を肯定すると、文は再び溜息を吐く。

「私個人としては貴方をこのまま素通りさせても良いんだけど……今の私は個人や新聞記者として立っているのではなく、一鴉天狗として立っている。おまけにこの状況は見られているしね」

文の話を読み、龍也は文の雰囲気が何時もと違う理由を理解する。

現在の文は個人としてではなく、組織の一員として動いているのだ。

これならば何時もの文と雰囲気が違って納得がいく。

「成程、椛と同じか」

龍也がそう呟くと、

「ええ、そう言う事」

文は溜息混じりに返す。

その後、文は龍也の様子を見ながら、

「貴方の風貌を見るに、椀とは通常戦闘で戦った様ね。それも結構本気で。全く、

あの子は頭が固いんだから」

龍也と椀がどの様に戦ったのかの当たりを付ける。

「なら、文は俺を楽に通らせてくれるのか？」

「そうして上げたいのは山々何だけど霊夢を素通りさせ、魔理沙は弾幕ごっこで私と

戦って勝ち、先へと進んで行ったからね。この場で貴方を簡単に通らせると、私が手

を抜いてわざと龍也達を通らせたって他の天狗に思われかねないのよ」

「天狗社会って言うのも結構大変何だな」

文の話の聞き、龍也はそんな事を言つと、

「まあ……ね。それでも組織に属する事でのメリットもあるから……トントンかな」

文は少し考え、そう返す。

「さて、これ以上話していると本気で裏切りを疑われる可能性があるから……そろそろいくわよ」

そう言っつて、文は構えを取る。

「分かった」

それに応える様にして龍也も構えを取る。

「……限りなく通常戦闘に近い弾幕ごっこ。おそらくこれが私が取れる最大限の譲歩よ」

文はそう言っつのと同時に妖力を解放する。

「ッ!!」

文から解放された妖力を感じて龍也が一瞬動きを止めると、龍也の顔に影が掛かる。

それに気付いた龍也は直ぐに再起動して顔を上げる。

龍也が顔を上げた先には文の脚があった。

その事を龍也が認識した瞬間、

「がつー!!」

龍也の頭頂部に文の踵が叩き込まれる。

不意打ち気味に攻撃を叩き込まれたせいか、龍也は体勢を立て直す事が出来ずに叩き

落とされ、木々を押し折りながら地面に激突してまう。

同時に土煙が舞い上がり、地に伏した龍也の姿を隠してしまう。

文は舞い上がった土煙を見ながら、

「これで終わりじゃないでしょう、龍也。貴方は風見幽香やレミリア・スカーレットが

高く評価している人間。この程度で終わる筈がない。さあ、早く姿を見せなさい!!」

そう言い放つ。

すると、

「ッー!!」

土煙が一気に吹き飛ぶ。

その中心には翠色の髪をし、翠色の瞳を輝かせ、両腕両脚に風を纏わせた龍也が立っていた。

「……無傷か」

変化した龍也の姿を見て文はそう呟くと、

「……………」

「……………」

龍也と文の目が合う。

その瞬間、龍也は跳躍して文の眼前に躍り出て、

「はあ！ー！」

拳を振るう。

その拳を、

「おっと」

文は体を傾げる事で回避する。

そしてお返しと言わんばかりに

「しっ！ー！」

文は鋭い蹴りを放つ。

「っっ」

龍也は上半身を下げることによって文の蹴りを回避する。

互いが放った攻撃を避けられたからか、龍也と文の二人は同時に間合いを取る。

「やっぱり速いな、文」

「これでもスピードには自信があるからね。でも、そんな私に付いて来れる貴方も大したものよ、龍也」

龍也の軽口に文はそう返し、腰に装備している葉の様な形をした扇を手に取る。

そして、黒い羽を羽ばたかせ、

「この程度のスピードなら楽に付いて来れる様だし……スピードを上げていくけど、付いて来れるかしら？」

文は一気に龍也へと肉迫し、扇で突きを放つ。

急激に上がったスピードに龍也は驚いたものの、

「ッ!!」

龍也は文の腕を掴む事で突きを防ぎ、そのまま反撃に移ろうとするが、

「させないわよ……」

「くっ!!」

その前に文が蹴りを放って来た為、龍也は拳を振るうの止めて腕で文の蹴りを防御する事にした。

文の蹴りを受け止めた後、

「りゃあ!!」

龍也は文の顎を目掛けて蹴りを放つ。

「危な!!」

文は慌てて顎を引く事でその蹴りを回避する。

「ちっ」

攻撃を回避された事で龍也は舌打ちをするも、

「らあ!!」

文が顎を引いた事から文の視界から自分の姿が消えたと判断し、もう片方で足で蹴りを放つ。

当たると思われたが、

「読んでいたわ」

龍也が放った蹴りは文に防がれ、足を掴まれてしまう。

「このまま投げ飛ばさせて貰うわよ!!」

そう言つて、文は龍也の片足を掴んだままジャイアントスイングの要領で回転を始める。

文のスピードなら龍也を投げ飛ばした後、龍也が体勢を立て直す前に次々と追撃を仕掛ける事も可能であろう。

そうなつては、龍也はそれ相応のダメージを受けてしまう。

それを避ける為、

「投げ飛ばされて溜まるか!!」

「きゃ!?!」

龍也は掴まれている足の方に纏わせている風を炸裂させ、文から強引に間合いを取る。

龍也と文の距離がある程度離れると、

「あやややや、流石は男の子。無茶な事をするわね」

文は少し呆れた口調でそんな事を口にする。

「そこまで無茶って訳でもないと思うけどな」

龍也はそう返しながら炸裂させた脚の風を纏い直し、構えを取る。

それに応える様にして文も構えを取る。

そして、そのまま少しの間睨み合いをしていると風が吹く。

その風を合図にしたかの様に龍也と文は同時に突っ込み、激突する。

だが、それも一瞬。

二人は直ぐに交差する様にして離れ、ある程度距離が取れると反転して再び突っ込んで激突する。

激突し、交差する様に離れて反転し、また激突。

これを何度も繰り返す。

何度も何度も。

何回目かの激突の後、龍也は反転して地を滑る様に、文は反転して羽を広げて空気抵抗を大きくする様にして離れて行く。

ある程度の距離が取れると二人は止まる。

その瞬間、

「りゃあー!」

龍也は掌から竜巻を文に向けて放つ。

文は自分に迫って来る竜巻を見ながら扇を振るって目の前に竜巻を発生させて龍也が放った竜巻を防ぐ。

龍也から放たれた竜巻が消えるのと同時に文は自分が発生させた竜巻を消し、

「この無数の風の刃から逃れられるかしら？」

自分の周囲に無数の風の刃を展開させ、それらを龍也に向けて一斉に射出する。

龍也は自身に迫って来る無数の風の刃を目に入れながら両手を合わせながら突き出す。

そして風の刃が目前にまで迫ると、

「大嵐旋風！！！！」

両腕に纏っている風を合わせ、先程放った竜巻よりも威力も大きさも上の竜巻を放つ。

龍也が放った竜巻は文が放った風の刃を蹴散らしながら突き進んで行く。

それを見ながら、

「これは……避けるしかないか」

文はそう呟いて回避行動を取る。

先程と同じ様に竜巻を発生させて防ぐ事も文は考えたが、あの威力の竜巻を防ぐ竜巻を発生させるには時間が足りないと判断した為、回避行動を取ったのだ。

龍也が放った竜巻を完全に避け切った後、

「貰った!!」

「ッ!!」

何時の間にか文の眼前に迫っていた龍也が既に風を纏い直した腕で拳を振り被っていた。

文は後ろに下がる事で龍也が放った拳を何とか回避するが、

「らあ!!」

「くっ!!」

その一撃に続ける様にして放たれた二発目の龍也の拳は回避する事は出来なかった。

文は拳が当たる直前で腕を交差して防御の体勢を取ったので直撃は避けられたものの、

殴り飛ばされてしまう。

殴り飛ばされた状態にある文は顔を上げて状況の確認をし様とすると、自分に迫って

来ている龍也の姿が見て取れた。

龍也が自分に追撃を掛ける気であると思った文は体勢を立て直そうとしたが、

「間に合わないか……」

それは間に合わないと判断する。

とは言っても、このまま龍也の攻撃を受ける気は文にはない。

攻撃を避けられないのなら攻撃を放てない様にすればいいだけである。

文は自分の体が龍也の間合いに入ると、

「はあ!!」

体中から物凄い勢いの突風を放つ。

「どわあ!?!」

文がこんな方法を取ってくるとは予想外だったのか龍也は文が放った突風をまともに

受け、体を回転させながら吹き飛んで行ってしまふ。

「くそ……」

吹き飛ばされた龍也が体勢を立て直した時には、既に文も体勢を立て直していた。

仕切り直しかと龍也は思いながら、

「体中から突風を放つとか……俺は無茶な事ってさっき言ってたけど、お前のそれも無茶何じゃないのか？」

龍也は文にそんな事を尋ねると、

「そんな事はないわよ。体中から風を放出する位じゃ無茶とは言えないわね」

文はその様に返し、姿を消す。

その瞬間、龍也は上半身を前方に倒す。

すると、龍也の上半身が在った場所を文の脚が物凄い勢いで通る。

文の脚が完全に通り切ると、龍也は今の体勢のまま背後に向けて蹴りを放つ。

その蹴りを文は後ろに下がって回避する。

自分が放った蹴りが避けられた事を知ると、龍也は蹴りを放っていない方の足を軸にして後ろへと振り返り、

「はあ!！」

掌から風の塊を文に向けて射出する。

「甘い!！」

文は扇で射出された風の塊を打ち払い、扇を振るって風の刃を生み出し、それを龍也目掛けて飛ばす。

「お前も甘いぜ!！」

そう言いながら龍也は左腕に纏っている風で風の刃を受け止め、

「らあ!！」

左腕を払って風の刃を弾き飛ばす。

その瞬間、

「ッ!！」

龍也の眼前に文が拳が迫って来ていた。

どうやら、先程の風の刃に龍也の意識が向いている隙に近付き、拳を放った様だ。

龍也が驚いている間にも文の拳は迫り、龍也の顔面に文の拳が当たる直前、

「ッ!？」

龍也の姿が消える。

目標を失った事で文の拳は空を切る。

攻撃を空振った事で隙が出来ると思った文は慌てて拳を引く。

それと同時に、

「正面!？」

龍也は自分が消えた場所に現れて蹴りを放つ。

龍也が放った蹴りは文の胴体を捕らえ、

「ッ!？」

何の抵抗もないまま龍也の脚は文の胴体を突き抜ける。

文の胴体に攻撃は当たったと言うのに、龍也の脚には何の感触もない。

この事から、

「残像か!?!」

今見えている文の姿が残像であると判断する。

すると、

「正解！！」

そんな声と共に文は龍也は目掛けて飛び蹴りを放つ。

「危ね！！」

龍也は咄嗟に体を捻って文の飛び蹴りを避ける。

文の飛び蹴りを避けた後、龍也は文が飛んで行った方に顔を向けると文が自分の方に掌を向けているのが見て取れた。

それから文が何をし様としているのかを理解した龍也は文に自分の掌を向け、二人は同時に掌から竜巻を放つ。

二人が放った竜巻は二人の中間地点で激突し、それは暴風となって辺り一面を荒れ狂う。

そんな暴風が荒れ狂う中、二人はその中心に突っ込む。

そして、二人が激突する直前に龍也と文の姿が消える。

その次の瞬間、別の場所から激突音と衝撃波が発生し、そしてまた次の瞬間にはまた別の場所で衝撃音と衝撃波が発生する。

何度も何度も。

どうやら、超スピードで激突と離脱を繰り返しているようだ。

そして、

「ッー!!」

何度目かの激突の後、龍也と文は弾かれる様にして間合いを取る。

「はあ……はあ……ここまでスピードを上げても付いて来るか……」

息を整えながら文がそう呟くと、

「はあ……はあ……当然だろ……」

同じ様に息を整えている龍也が不敵な笑みを浮かべながら返す。

二人の息は少々上がっているものの、龍也も文もまだまだ余裕がある様である。

上がっていた息も落ち着き始め、再び龍也が攻撃を始め様とすると、

「ッー!!」

文が龍也に向けて大量の弾幕を放って来た。

距離を詰めて攻撃を仕掛け様としていた龍也にとっては出鼻を挫かれた形になった。

大量に迫って来る弾幕を目に入れ、龍也は文に近付く事を諦めて距

離を取りながらの
回避行動を移る。

それに対し、文は弾幕を放ちながら龍也との距離を一定に保つ様にして移動をする。

龍也は文との距離を離そうとしつつ、文の弾幕に対抗する為に自身も弾幕を放って応戦する。

龍也の放った弾幕は文の弾幕とぶつかり合い、相殺しあっていく。だが、龍也と文の距離がこれ以上離れる事も狭まる事もなかった。

このままでは埒が開かないと思った龍也は多少の危険を冒してでもこの弾幕の中を突っ切って行くべきかと考え、弾幕を放つのを止める。

その瞬間、文は懐に手を入れ、懐からスペルカードを取り出し、

「風神『風神木の葉隠れ』」

スペルカードを発動させる。

「ここでスペルカード!?!」

文がスペルカードを発動した事に龍也は驚く。

この戦闘は限りなく通常戦闘に近い弾幕ごっこなので、スペルカードを使う事は別に

不思議ではない。

何故このタイミングでと龍也は思ったが、文を覆う様に展開されている大量の弾幕を見て、

「ッ！！　　そう言う事か！！」

龍也は文の狙いを理解し、その弾幕が逃げ道を塞ぎつつ龍也本人も狙う様に射出されたのと同時に回避行動を取る。

文の狙いとは龍也の体勢を崩す事にある。

スペルカードを発動して放った技はどんな技でも発動した瞬間に放たれる為、技の発動スピードには極めて優れおり、霊力等の消費も極少量だ。

その反面、スペルカードは遊びと言う目的で作られた弾幕ごっこに付随する様にして生み出された物なので、スペルカードを発動して放った技には大した威力はない。

だが、命中した時の衝撃はそれ相応のものがある。

この事から、文は自分にこの弾幕を当てて体勢を崩したところを気に攻め立てる気である。と龍也は考えたのである。

迫り来る大量の弾幕を避け始めてから少しすると、龍也はこのまま

ではこの弾幕に
当たってしまうと感じ始める。

そうなつては状況は完全に文が有利になつてしまつ。

ならば、目には目を。

歯には歯を。

この状況を打開するには自分もスペルカードを使うべきだと龍也は
判断し、懐に手を入
れる。

その瞬間、

「なつ!?!」

大量にあつた弾幕が消える。

スペルカードを発動してられる時間にはまだ余裕がある。

と言う事は、文が自分の意思でスペルカードの発動を止めたと言つ
事になる。

何故このタイミングでと龍也が思っていると、

「さっきの話しになるけど……」

何時の間にか龍也の直ぐ近くに迫つて来ていた文がそんな事を呟く。

しかも、文の両手の間には高密度の塊がある。

それを見た龍也はマズイと思い、慌てて懐から手を抜いて文に攻撃を仕掛けて技の発動を止めさせ様とする。

が、

「私にとっての無茶は……」

それは既に遅く、

「これ位の事を言うのよ!!」

龍也が攻撃を放つ前に、風の塊が炸裂してしまう。

「うおおあああああああ!!!!」

風の炸裂を至近距離で受けた龍也はダメージを受けながら吹き飛ばされてしまう。

そして、それを追う様にして文は龍也に突っ込む。

龍也に追い付くと、文はそのまま通り抜ける様にして龍也の背後に回り、

「がっ!!」

文は龍也の背中に蹴りを叩き込む。

文の蹴りをまともに受けた龍也は今度は反対方向へと吹き飛んで行く。

「……くそ!!」

龍也は体を回転させつつ体勢を立て直しつつブレーキを掛けて止まり、顔を上げて文の姿を確認し様とするが、

「ッ!! 居ない!？」

文の姿はなかった。

慌てて文の姿を探そうとしたのと同時に龍也は背後に何かを感じ、振り向き様に裏拳を放つ。

龍也の手の甲に当たったものは、

「これは竜巻……」

竜巻であった。

この竜巻を放ったのは文であろうが、その文の姿は何所にもなかった。

龍也はその事を不審に思いつつも、裏拳を振り抜いて竜巻を消そうとした瞬間、

「がっ!？」

龍也の背中に衝撃が走り、龍也は地面目掛けて吹き飛んで行ってしまふ。

先程の竜巻がただ単に自分の注意を引きつけるものだったのだと龍也が気付いたのは

木々を押し折り、地面に激突してクレーターを作った直後であった。

クレーターが生み出されてから少しすると、

「痛い……」

龍也は立ち上る。

その時に体の節々から痛みを感じたが、無視出来る範囲だったので龍也は無視する事にした。

そして、今の攻撃の影響で四散した両腕両脚に纏っていた風を纏い直して龍也は顔を上げる。

が、激突した時の衝撃で舞い上がった砂煙のせいで上空は見えないでいた。

なので、龍也は全身から突風を放って砂煙を吹き飛ばす。

砂煙が晴れると、空に浮かびながら龍也を見下ろしている文の姿が見て取れた。

その姿は、先程風の塊を炸裂させたからか少しボロボロであった。

そんな文の様子を見ながら、

「……やっぱり強いな」

龍也はそう呟きながら口元の端から流れる血を手の甲で拭い、

「これ以上長引かせると霊夢と魔理沙に追い付けなくなりそうだな」

ポツリとそんな事を言って左手を顔面付近に持っていく。

そして、

「妖怪の山の頂上に現れた神の強さが分からないから力は温存して置きたかったが……」

出し惜しみをしてやられたら笑い話にもならねえな」

左手からどす黒い色をした霊力を溢れ出させて一気に振り下ろす。

すると龍也は白を基調とした仮面を付け、眼球を黒くした状態になる。

仮面の造形は憤怒した鬼と悪魔を足し合わせて骨にし、目元から米神に掛けて黒い線が

走っていると言ったものだ。

跳ね上がり、禍々しく、濃度が濃くなった龍也の霊力を感じながら文は龍也が勝負を

一気に決めに来たと言う事を感じつつ、

「あれが……仮面を付けた龍也か……」

ポツリとそう呟いた。

文は自分の発行している”文々。新聞”に龍也の記事を何度も載せたりしているので、

龍也の使う力や力を解放した状態、仮面を付けた状態の事は知っているし、その状態

で戦っている龍也の姿を何度も見た事がある。

因みに、龍也の記事は人里の子ども達に人気がある。

余談ではあるが仮面を付けた状態の龍也は子ども受けするかは微妙だった為、文はその

状態の龍也の事は記事にはしていない。

「遠くから見た感じでは全体的に能力が大きく上がっていたけど……ッ!？」

突如、文の視界から龍也の姿が消えた。

が、文は直ぐに龍也の移動先を捉えてそこに向けて拳を放つ。

しかし、

「ッ!! 捉え損ねた!？」

文の拳は空を切るだけに終わった。

その瞬間、

「おおおおおおおおおおおおおおおおお……!!」

「ッ!!」

何時の間にか文の背後に回っていた龍也が蹴りを放つ。

それに気付いた文は慌てて振り返って蹴りを腕で防御する。

「痛ッ!!」

防御には成功したものの、文は蹴り飛ばされてしまう。

吹き飛ばされた文は羽を広げ、空気抵抗を利用しながら減速し、止まる。

その後、龍也の蹴りを受けた腕に目をやり、

「百聞は一見に如かずね。まあ、見た事はあるから厳密には違うんだろうけど。それに

しても、まさかここまで威力が上がっているとは……」

そう言って拳を作ったり開いたりする。

龍也の蹴りを防御した腕は痛みを訴えているが、戦闘に影響を与える程の痛みではない。

その事を理解した文は顔を上げて龍也の方を見る。

龍也は文の方を見ているだけで何か行動を起こしている訳ではない。自分の事を探っているのかと文は思いつつ、このままでは仮面を付けた龍也を相手にするのは不利だと感じ、

「はああああああああああああああああああ！！！！！！」

妖力を解放する。

これで、文の不利は消えた筈である。

尤も、龍也が靈力を解放してしまえばそれも意味を為さなくなるであろうが。

それをさせない為に文は直ぐに龍也へ突っ込んで行き、突撃を仕掛ける。

自分に向かって突っ込んで来る文を龍也は体を逸らして避ける。

文は龍也に突撃を回避された事を気にせず、そのまま龍也の横を通って距離を取り、ある程度龍也との距離が離れると姿を消す。

その次の瞬間、文は龍也の正面に現れて拳を放つ。

不意を付いた一撃ではあったが、龍也は文の拳を掌で受け止める。

そしてお返しと言わんばかりに龍也も文に向けて拳を放つ。

が、その拳は文に当たる事はなく文の掌に受け止められる。

そのまま二人は力を籠めて力比べをする状態になる。

最初は互角であったが、

「く……」

少しすると文が押され始める。

文は更に力を籠めるが、均衡状態に持ち直す事は出来なかった。

このままでは完全に押し切られると文は判断し、

「はあああああああああああああああ……!!」

更に妖力を解放する。

そのお陰で再び均衡状態になる。

だが、ここで龍也が霊力を開放してしまえばその均衡状態も崩れてしまつてあつた。

なので、

「しっ……!!」

文はそれを防ぐ為に、龍也が霊力を開放する前に膝蹴りを放つ。

だが、

「ふっ!!！」

「ッ!？」

それを読んでいたのそつでないのかは分からないが龍也も文と同じ
タイミングで膝蹴り
を放つ。

その為、二人が放った膝蹴りは互いの膝に激突して激突音と衝撃波
を発生する。

二人はそのまま膝を離す事をせず、膝も使つて相手を押し切るうと
する。

すると、

「え?」

龍也が突如力を抜く。

龍也が力を抜いた為、文は龍也を押し倒す様な形で倒れ込んでしま
う。

そして文の背中が天を向くと、

「だあ!!！」

「ぐっ!!！」

龍也は両足を引き、両足を文の胴体に叩き込む。

龍也の両足による突き出しを喰らった文は打ち上げられる様にして吹っ飛んで行く。

文は何とか減速を掛けて止まろうとしていると、自身の真横を龍也が通り抜けた事に
気付き、慌てて体を回転させる。

その時、文の目にはスペルカードを手に持っている龍也の姿と、

「風拳『零距离突風』」

スペルカードを発動した様子が見て取れた。

その瞬間、文の腹部に龍也の拳が当たり、そこから放たれた突風で文は地面目掛けて
吹き飛ばされ、木々を押し折りながら地面に激突する。

そして、文が地面に激突した衝撃で砂煙が舞い上がる。

砂煙のせいで文の姿は見えないが、龍也は文が墜落した場所に目を向ける。

それから少しすると、龍也は左手を額の辺りに持っていき、振り払う様にして左手を
振るう。

すると、龍也の付けている仮面はどす黒い靈力になり、風に流され

る様にして消えて
いく。

それに伴い、龍也の眼球が元の色に戻る。

その後、

「……………ありがとな」

龍也はそう礼を言って力を消す。

髪と瞳の色が元の黒色に戻ると、龍也は再び妖怪の山の頂上に現れた神社を目指して移動を始めた。

龍也が移動を開始して少しすると、

「今の一撃……スペルカードでの一撃じゃなかったら危なかったわね」

文はそう呟きながら立ち上がり、

「仮面を付けた龍也の戦闘能力があそこまで上がっている何てね。龍也が戦っている

姿は何度も見た事があるから龍也の強さは知ってるけど……改めてその強さを知った気分だわ」

服に付いている埃を払う。

そして、

「それにしても、大天狗様も密命ではなく普通に命令してくれれば態々龍也と戦う事もなかったのに……」

そんな愚痴を零す。

文が魔理沙との弾幕ごっこで敗北した後、文は自分の直属の上司の大天狗に定時報告

と言つ名目で龍也達の事を報告した。

自分の直属上司の大天狗なら上手い事龍也達を援護する様な命令を出してくれると思っただからだ。

事実、文の直属の上司の大天狗は他の大天狗が龍也達の妨害をしない様に掛け合ってくれた。

が、先程文が言った様に大天狗は文にある密命を出したのだ。

その密命とは、龍也達を妖怪の山の頂上に現れた神にぶつけて神達の反応を探れと言う事である。

妖怪の山に侵入して来た龍也達は人間であるので、例え神と対峙しても大事には至らないと判断したのであろう。

そして、密命と言うのも妖怪の山全体がピリピリしているこの状態で普通にそんな命令を出して余計な混乱を生み出すと言う事も文は理解している。

理解しているが、そのお陰で龍也と戦う事になった事を思えば、

「……………はあ」

溜息が出てしまう。

溜息を吐いた後、

「まさか、あのタイミングで龍也とバッタリ会うとは思ってもなかったわ」

そんな事を愚痴る。

どうやら、あそこで龍也と戦う事は文にとっても予定外であった様だ。

しかし、そのお陰で龍也の強さを見せる事が出来た。

一体何人の天狗が二人の戦いを見ていたかは不明だが、戦いの事が広まれば龍也と龍也と一緒に来た霊夢と魔理沙に手を出そうと思う天狗はいなくなるであろう。

いるとすれば天魔と大天狗位であろうが、その者達は文の直属の上司である大天狗が押さえてくれる筈である。

そう考えれば龍也と戦った事はプラスに働いたであろうが、

「それでも割りに合わないわ」

文はそう言って再び溜息を吐く。

その後、文は肩を回し、

「もし、今回の件を解決出来なかったら……自棄酒位じゃ済ませないわよ、龍也」

ポツリとそぞろ咳いて妖怪の山の頂上に現れた神社へと向って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5233n/>

東方四神録

2011年11月28日07時53分発行